# 現代日本文學全集

XIII

PL 817 A48 1928

Takayama, Chogyū
Takayama Chogyū shū

East Asiatic Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

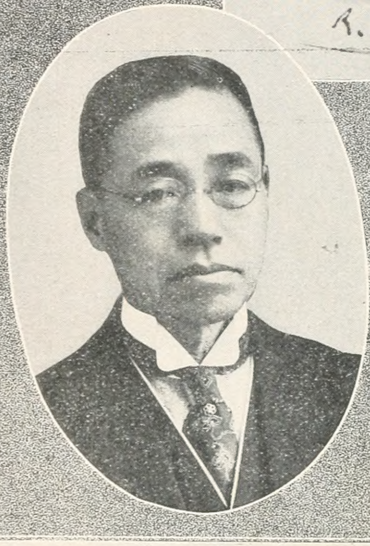
杉浦非水裝幀

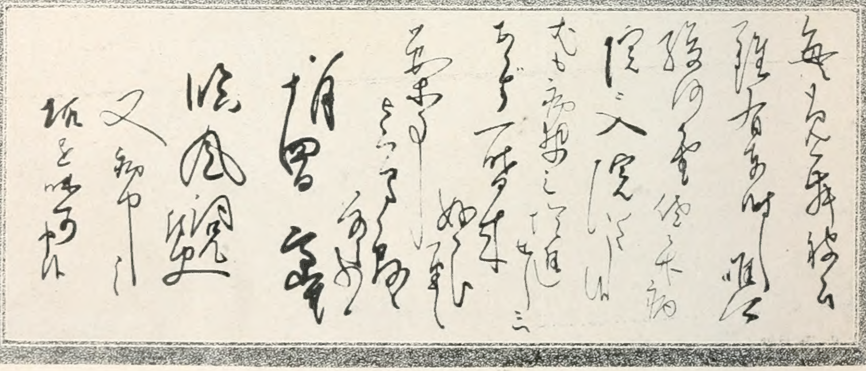
# 高山樗牛集
# 姉崎嘲風集
# 笹川臨風集

改造社版

LIBRARY
MAR 24 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
817
A48
1928





樗牛とその署名（上）　嘲風氏（右）と臨風氏（左）　樗牛の手柬（下）

# 「樗牛・嘲風・臨風集」目次

## 高山樗牛集


卷頭寫眞（照影・筆蹟）
樗牛集の首に……四
瀧口入道……五
おきく……三九
傷心錄……四六
わがそでの記……四八
自殺論……五四
清見寺の鐘聲……五六
思ひ出の記……五八
況後錄……六〇
清見潟日記……六六
感慨一束……七二
巢林子の女性……八一
釋迦……九二
平相國……一一九
平家雜感……一四九
世界の四聖……一五五
日蓮上人とは如何なる人ぞ……一五九
日蓮と基督（其一）……一六八
日蓮と基督（其二）……一六九
月夜の美感に就いて……一七四
人生終に如何……一八一
東西二文明の衝突……一八三
明治思想の變遷……一八六
日本主義……二〇三
美的生活を論ず……二〇六
靜思錄……二一二
雜篇
本末の顚倒……二一七
今の哲學……二一七
自ら欺く無くむば幸也……二一七
中心果して信ずる所ある乎……二一七
學說と人格……二一七
人々自ら悟らざるべからず……二一七
空腹高心……二一七
道義亡國……二一八
何ぞ思はざるの甚しき……二一八
心に會するもの唯是れ心……二一八
何ぞ人の異を妨げむ……二一八
千萬言唯意のまゝのみ……二一八
吾は永く吾たらむ……二一八
十九世紀文明の王冠……二一八
笑はむ乎、狂せむ乎……二一八
吾をして詩人たらしめば……二一八
言論畢竟人物のみ……二一九
米と砂……二一九
其愚や及ばず……二一九
道學先生の世界……二一九
何ぞ一に煩瑣なる……二一九
口耳の學……二一九
罪は貧民にあり……二二〇
田中智學氏の『宗門の維新』……二二一
天才の出現……二二三
天才の犧牲……二二三
天才無き世界……二二三
平等主義と天才……二二三
吾人凡て之を憎む……二二三
二個の眞理……二二三

偉人と凡人との別……二二三
價値と我……二二三
惡を憎むこと何ぞ甚しき……二二三
癲狂院……二二三
ニイチェの批難者……二二三
ニイチェの歎美者……二二四
自然の兒……二二四
何が故ぞ……二二五
貴き哉是の賚……二二五
性慾……二二五
何ぞ其の祝福を讃美せざる……二二五
性慾の動くところ……二二五
地獄の火印を烙けられたるもの……二二五
性慾の醇化……二二六
久しい哉自ら欺けることや……二二六
價値也、名目に非ざる也……二二六
眞の教育、眞の道德……二二六
文學及人生……二二七
運命と悲劇……二三〇
天才論……二三五
戯曲に於ける幽靈……二三九
一葉女史の『たけくらべ』を讀みて……二四一
我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務……二四三
ワルト、ホイットマンを論ず……二四八
土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書……二五四
文明批評家としての文學者……二六〇
姉崎嘲風に與ふる書……二六七
現代文章私見……二七八
文藝雜談……二八五
無題錄……二八九
消息……二九一
（附）隨筆
略歴……三一〇
著作年表……三二一

## 姉崎嘲風集

卷頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……三二八
復活の曙光……三二九
ゴットハルトの雪……三六六
湖上の春……三七〇
聖者の故鄕アッシジ……三八一
イタリアの別れ、ヱネチアの二日……四〇六
——以上四篇『花つみ日記』より——
ワグネルの書簡……四一三
清見潟の一夏……四一八
清見潟の除夜……四三二
嗚呼野の人……四三五
ベクリンが「波の音づれ」……四四〇
——以上五篇『停雲集』より——
（附）隨筆
年譜……四四一

## 笹川臨風集

卷頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……四四四
舞殿……四四五
女水滸傳……四九九
柳屋お藤……五二六
傳奇日女若……五三九
櫻花記……五五四
（附）歌曲、句
年譜……五五六

# 高山樗牛集

# 樗牛全集の首に

赤門の文科卒業生中には、多くの學者、多くの文士を出して、學界文壇に寄與してゐる所が少からずあるが、其のうちで文壇に大波瀾を捲き起し、其の影響する所最も多大であつた天才を求めると、指を漱石と樗牛とに屈せねばなるまい。漱石が明治創作界の雄であつたとともに、樗牛も亦明治批評界の覇者であつた。但し漱石は中年以後に初めて名を出したので、中年以後の人に多くの渇仰者を持つてゐるが、樗牛は早くから有名であつたので、其の歸依者は青春の人に多い。樗牛全集は青年の士が必ず讀まねばならぬ書であつた。樗牛全集は青春の人に取りて是非とも通過せねばならぬ驛站であつた。青年の血に燃え情に熱したものは、樗牛に共鳴して、其の壯快なる文章に讃美と嘆賞とを惜まなかつたのである。其の才華絢爛にして、語句の瑰麗なるは、近時の青年に取りて、やゝ難解の感あるがために、以前ほどに歸依者を有たなくなつたとは云へ、猶樗牛を説くものの多きは、彼の偉大なるを思はせる。

樗牛は稀有の才人である。羽前鶴岡が彼を出したことを誇り、青葉城が彼を有したのを誇り、赤門が彼あつたのを誇り、我等が彼を友人としてゐたのを誇るばかりでなく、明治文壇に彼を產出したのは、大に誇りとすべきである。しかも彼の天才は其の少年時代から燦として輝き、高等中學に於て既に嶄然たる巨匠の俤を有し、大學に入りて遠く儕輩を拔き、一たび雜誌太陽の論壇に立つと、一躍して大家となり、群雄を壓倒するの概があつた。青春の氣燃えんばかりの彼は、情の逆る所、瀧口入道となり、わがそでの記となり、清見潟日記となつたが、一轉して日本主義となり、再轉して美的生活論者となり、ニイチェの讃美家となつて、文明批評家を以て任じ、遂に聖日蓮を崇拜して、日蓮主義者として壯烈無比の觀を呈した。其の一生は甚だ短かつたが、彼の思索は目覺しいほどに進歩發展した。其の一生をより長く、天壽を全うせしめたなら、其の進陟は實に測るべからざるものがあつたらう。彼には不斷の進歩があつて、其の炎は烈々として、物皆燒き盡さずんば已まざる勢があつたのである。彼には絶えず青春の泉が湧いてゐた。潑溂たる清新の氣が横溢してゐた。そこには煩悶もあり、懷疑もあつたが、彼は躊躇せず、逡巡せずして、自ら地歩を開拓し、遂に信仰の道を開いたのであつた。莫逆見たる彼は[illegible]日蓮に依りて、最も喜い歸依の本尊を見出したのであつた。

樗牛と嘲風とは無二の親友と云はんよりも寧ろ信友であつた。樗牛は世界的學者となつた嘲風と肝膽相照らすに至つたのは、偶々嘲風が單なる學究でなくして、情熱家であつたことを裏書するに足りる。今でこそ大學圖書館長で納まつてゐるものゝ、嘲風も青春の氣の充ち滿ちた情熱家である。彼は學者としては眞摯なる研究者であり、宗教學者として、法華經行者日蓮の著者として、切支丹研究家として、他の追隨を許さぬものがあるが、彼が極めて情熱家であることは、我等友人だけが善く知つてゐる。交友既に四十年に垂んとして、一室の如くにしてゐる私は、此點に於て樗牛嘲風の相推許してゐる所以を十分に會得する。

我等の仲間に以前天狗會と云ふものがあつて、當時年少氣鋭の我等は相會合して盛に氣を吐いてゐたものである。秋風落莫、今や存するものは甚だ少くなつた。然し青春の元氣旺盛であつた樗牛は我等に常に若くあれよと教へてくれる。偶々瓦全する私は、玉碎せる彼に依りて深く學んでゐることを感銘してゐる。

昭和三年御大禮の翌日　笹川臨風識

# 瀧口入道

## 第一

やがて來む壽永の秋の哀、治承の春の樂に知る由も無く、六歲の後に昔の夢を辿りて直衣の袖を絞りし人々には、今宵の歡會も中々に忘られぬ思寢の涙なるべし。

驕る平家を盛の櫻に比べてか、散りての後の哀は思はず、入道相國が花見の宴とて、六十餘州の春を一夕の臺に集めし都西八條の邸宅、君ならでは人にして人に非ずと唱はれし一門の公達、宗徒の人々は言ふも更なり、華冑攝籙の子弟の、苟も武門の蔭を覆ひに當世の榮華に誇らむずる輩は、今日を晴にと裝飾ひて、綺羅星の如く連りたる有樣、燦然として眩き計り、さしも善美を盡せる虹梁鴛瓦の砌も影薄げにぞ見えし。あはれ此程までは殿上の交をだに嫌はれし人の子、家の族、今は紫緋紋綾に禁色を猥にして、をさ〳〵傍若無人の振舞あるを見ても、眉を顰むる人だに絕えて無く、夫れさへあるに衣袍の紋色、烏帽子のため樣まで、萬六波羅樣をまねびて時知顏なる世は愈々平家の世と覺えたり。

見渡せば正面に唐錦の茵を敷ける上に、沈香の脇息に身を持たせ、解脫同相の三衣の下に天魔波旬の慾情を去りやらず、一門の榮華を三世の命とせる入道清盛、とても鷹揚に坐せる其傍には嫡子小松の內大臣重盛卿、次男中納言宗盛、三位中將知盛を初として同族の公卿十餘人、殿上三十餘人、其他衞府諸司數十人、平家の一族を擧げて世には又人無くぞ見られける。時の帝の中宮、後に建禮門院と申せしは入道が第四の女なりしかば、此夜の盛宴に漏れ給はず、册ける女房曹司は皆々晴の衣裳に綺羅を競ひ、六宮の粉黛何れ劣らず粧を凝して、花にはあらで得ならぬ匂、そよ吹く風每に素袍の袖を掠むれば、末座に並居る若侍等の亂れもせぬ衣髮をつくろふも可笑し。時は是れ陽春三月の暮、青海の簾高く捲上げて、前に廣庭を眺むる大弘間、吹きも殘らず散りも初めず、欄干近く雲かと紛ふ滿朶の櫻、今を盛に匂ふ樣に、月さへ懸りて夢の如き圓なる影、朧に照渡りて、滿庭の風色碧紗に包まれたらむ如く、一刻千金も啻ならず。內には遠侍のあなたより、遙に對屋に沿うて樓上樓下を照せる銀燭の光、錦繡の戶張、龍鬢の板疊に輝きて、さしも廣大なる西八條の館に光到らぬ隈もなし。あはれ昔に有りきてふ、金谷園裏の春の夕もよも是には過ぎじとぞ思はれける。

饗宴の盛大善美を盡せること言ふも愚なり、庭前には錦の幔幕を張りて舞臺を設け、管絃鼓箏の響は興を助けて短き春の夜の闌くるを知らず、豫て召し置かれたる白拍子の舞もはや終りし頃ほひ、さと帛を裂くが如き四絃一撥の琴の音に連れて、繁絃急管のしらべ洋々として響き亙れば、堂上堂下俄に動搖めきて、「あれこそは隱れもなき四位少將殿よ」、「して此方なる壯年は」、「あれこそは小松殿の御內に花と歌はれし重景殿よ」など女房共の囁き合ふ聲々に、人々等しく樂屋の方を振向けば、右の方より薄紅の素袍に右の袖を肩脫ぎ、螺鈿の細太刀に紺地の水の紋の平緒を下げ、白綾の水干、櫻萌黄の衣に山吹色の下襲、背には胡簶を解きて老掛を懸け、露の儘なる櫻かざして立てられたるは四位少將維盛卿、御年漸く二十一、青絲

の姿、紅白の齊、平門第一の美男とて、かざす櫻も色失せて、何れを花何れを人と分たざりけり。左の方よりは足助二郎重景とて、小松殿恩顧の侍なるが、維盛卿より弱きこと二歳にて今年方に二十の壯年、上下同じ素絹の水干の下に燃ゆるが如き緋の下袍を見せ、厚塗の立烏帽子に平塵の細鞘なるを佩き、袂豐に舞ひ出でたる有樣、宛然一幅の畫圖とも見るべかりけり。二人共に何れ劣らぬ優美の姿、適怨清和、曲に隨つて一絲も亂れぬ歩武の節、首尾能く青海波をぞ舞ひ納めける。滿座の人々感に堪へざるは無く、中宮よりは殊に女房を使に纏頭の御衣を懸けられければ、二人は面目身に餘りて退り出でぬ。跡にて口善惡なき女房共は、少將殿こそ深山木の中の楊梅、足助殿こそ枯野の小松、何れ花も實も有る武士よなど言合へりける。知るも知らぬも羨まぬは無きに、父なる卿の眼前に此を見て如何計り嬉しく思ひ給ふらむと人々上座の方を打見やれば、入道相國の然も喜ばしげなる笑顔に引換へて、小松殿は差し俯きて人に面を見らるゝを懶げに見え給ふぞ訝しき。

## 第二

西八條殿の搖ぐ計りの喝采を跡にして維盛重景の退り出でし後に一個の少女こそ顯れたれ。是ぞ此夜の舞の納めと聞えければ、人々眸を凝して之を見れば、年齒は十六七、精好の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣打重ね、丈にも餘る綠の黑髮後にゆりかけたる樣は、舞子白拍子の媚態あるには似で、閑雅に﨟長けて見えにける。一曲舞ひ納むる春鶯囀、細きは珊瑚を碎く一雨の曲、風に靡けるさゝがにの絲輭く、太きは瀧津瀨の鳴渡る千萬の聲、落葉の蔭に村雨の響重し、綾羅の袂ゆたかに飜るは花に休める女蝶の翼か、蓮步の節急なるは蜻蛉の水に點ずるに似たり。折らば落ちむ萩の露、拾はゞ消えむ玉篠の、あはれにも亦婉やかなる其姿。見る人陶然として醉へるが如く、布衣に立烏帽子せる若殿原は、あはれ何處の誰が女子ぞ、花薫り月霞む宵の手枕に、君が夢路に入らむ人こそ世にも果報なる人なれなど、袖褄引合ひてのゝしり合へるぞ笑止なる。

榮華の夢に昔を忘れ、細太刀の輕さに風雅の銘を打ちたる六波羅武士の腸をば一指の舞に蕩したる彼の少女の、滿座の秋波に送られて退り出でしを此夜の宴の終として人々思ひ〳〵に退出し、中宮もやがて還御あり、跡には春の夜の朧月、殘り惜げに欄干の邊に蹌踉ふも長閑けしや。

此夜三條大路を西に、御所の裏手の御溝端を辿り行く骨格逞しき一個の武士あり、月を負ひて其顔は定かならねども、立烏帽子に袴白の布衣を着け、蛭巻の太刀の柄太きを横へたる夜目にも爽かなる出立は、何れ六波羅わたりの内人と知られたり。御溝を挾みて今を盛りたる櫻に色の見て欲しげなるに目もかけず、物思はしげに小手叉きて、少しうなだれたる頭の重げに見ゆるは、太息吐く爲にやあらむ。扨も今夜の月花に換へて何の宴ぞ。西八條の御宴より歸り途なる侍の一群は群、舞の評など樂しげに誰憚らず罵り合ひて、果は高笑して打興ずるを、件の侍は折々耳側て、時に冷かに打笑む樣仔細ありげなり。中宮の御所をはや過ぎて、垣越の松影月を漏さで墨の如く暗き邊に至りて不圖首を舉げて暫し四邊を眺めしが、俄に心付きし如く足早に元來し道に戻りける。西八條より還御せられたる中宮の御輿、今しも宮門を入りしを見、最と本意無げに跡見送りて門前に佇立みける。後れ馳せの老女の訝しげに己れが容子を打睇り居るに心付き、急ぎ立去らむとせしが、何思ひけむツと振向きて、件の老女を呼止めぬ。

何の御用と問はれて稍躊躇ひしが、「今宵の御宴の終に春鶯囀を舞はれし女子は何れ中宮の御内ならむと見受けしが、名は何と言はるゝや」。老女は男の容姿を暫し眺め居たりしが微笑みながら、「扨も笑止の事も有るものかな、西八條を出づる時、色清けなる人の姿を捉へて同じ事を問はれしが、あれは横笛とて近き頃御室の郷より曹司に見出し者なれば、知る人無きも理にこそ、御身は名を聞いて何にし給ふ」。男はハツと顔赤らめて、「勝れて舞の上手なれば」答ふる言葉聞きも了らで、老女はホヽと意味ありげなる笑を殘して門内に走り入りぬ。

「横笛、横笛」件の武士は幾度か獨語ちながら、徐に元來し方に歸り行きぬ。夜の底に響く法性寺の鐘の聲初更を告ぐる頃にやあらむ。御溝の彼方に長く曳ける我影に駭きて、傾く月を見返る男、眉太く鼻隆く、一見凛々しき勇士の相貌、月に笑めるか、花に咲ふか、あはれ瞼の邊に一抹の微笑を帶びぬ。

## 第三

當時小松殿の侍に齋藤瀧口時頼と云ふ武士ありけり。父は左衛門茂頼とて齡古稀に餘れる老武者にて、壯年の頃より數ケ度の戰場にて類稀なる手柄を顯したりしが、今は年老いたれば其子の行末を頼りに殘年を樂みける。小松殿は其功を賞で給ひ、時頼を瀧口の侍に取立て、數多き侍の中に殊に恩顧を給はりける。

時頼是時年二十三、性濶達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ武骨一邊の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣拔懸けの譽ある功名談に非されば、弓箭甲冑の故實、髻垂れし幼時より劍の光、弦の響の裡に人と爲りて、浮きたる世の雜事は刀の柄の塵程も知らず、美田の源次が堀川の功名に現を拔して赤樫の木太刀を振舞はせし十二三の昔より、空肱撫でて長劍の鞘を睨みし二十三年の春の今日まで、世に畏しきものを見ず、出入る息を除きては六尺の體、何處を膾と分くべくも見えず、實に保平の昔を其儘の六波羅武士の模型なりけり。然れば小松殿も時頼を末頼母しき者に思ひ、行末には御子維盛卿の附人になさばやと常々目を懸けられ、左衛門が伺候の折々に、「茂頼、其方は善き伜を持ちて仕合者ぞ」と仰せらるゝを、七十の老父、曲りし背も反らむ計りにぞ嬉しかりける。

時は治承の春、世は平家の盛、そも天喜康平の以來、九十年の春秋、都も鄙も打靡きし源氏の白旗も、保元平治の二度の戰を都の名殘に、脆くも武門の哀を東海の瀾に止めしより、六十餘州に到らぬ隈無き平家の權勢、驕る者久しからずとは驕れる者如何で知るべき。養和の秋、富士河の水禽も、まだ一年の來ぬ夢なれば、一門の公卿殿上人は言はずもあれ、上下の武士何時しか文弱の流に染みて、嘗て丈夫の譽に見せし向ふ疵もいつの間にか水鬢の陰に掩はれて、重きを誇りし圓打の野太刀も、何時しか銀造の細鞘に反を打たせ、清らなる布衣の下に練貫の袖さへ見ゆるに、弓矢持つべき手に管絃の調とは言ふもうたてき事なりけり。

時頼世の有樣を觀て熟々思ふ樣、扨も心得ぬ六波羅武士が擧動かな、父なる人祖父なる人は、昔知らぬ若殿原に行末短き榮耀の夢を貪らせむとて其膏血はよも濺がじ。萬一事有るの曉には、絲竹に鍛へし腕、白金造の打物は何程の用にか立つべき、射向の袖を却て覆ひに捨鞭のみ烈しく打つて、笑を敵に殘すは眼のあたり見るが如し。君の御馬前に天晴勇士の名を昭して潔く死すこそ武士なれ、何處に二つの命ありて、歌舞優樂の道に晃ある所存の程こそ知れね。

――弓矢の外には武士の住むべき世有りとも思はぬ一徹の時頼には、兎角煩はしく、苦々しき事のみ耳目に觸れて平和の世の中面白からず、あはれ何處にても一亂の起れかし、いでや二十餘年の風雨に鍛へし我技倆を顯はして、日頃我を武骨者と嘲りし優長武士に一泡吹かせむずと思ひけり。衆人醉へる中に獨り醒むる者は容れられず、斯る氣質なれは時頼は自ら儕輩に疎ぜられ、瀧口時頼とは武骨者の異名よなど嘲り合ひて、時流外れに粗大なる布衣を着て鐵卷の丸鞘を鷗尻に横へし後姿を、蔭に指し笑ふ者も少からざりし。

*　　*　　*　　*　　*

西八條の花見の宴に時頼も連りけり。其夜更闌けて家に歸り、其翌朝は常に似ず朝日影窓に差込む頃、やうやく臥床を出でしが、顏の色少しく蒼味を帶びたり、終夜眠らでありしにや。

此夜、御所の溝端に人跡絶えしころ、中宮の御殿の前に月を負ひて歩むは、紛ふ方なく先の夜に老女を捉へて横笛の名を尋ねし武士なり、物思はしげに御門の邊を行きつ戻りつ、月の光に振向ける顏見れば、まさしく齋藤瀧口時頼なりけり。

## 第四

物の哀も是よりぞ知る、戀ほど世に怪しきものはあらじ。稽古の窓に向つて三諦止觀の月を樂める身も、一朝折りかへす花染の香に幾年の行業を捨てし人、百夜の榻の端書につれなき君を怨みわびて、亂れ苦しき忍草の露と消えにし人、さては相見ての後のたゞちの短きに戀悲みし永の月日を恨みて、衣一鉢に空なる情を觀ぜし人、惟へば孰れか戀の奴に非ざるべき。戀は、秋萩の葉末に置ける露のごと、空なれども、中に寫せる月影は圓なる望とも見られぬべく、今の憂身をつらしと喞てども、戀せぬ前の越方は何を樂に暮しけむと思へば涙は此身の命なりけり。夕旦の鐘の聲も餘所ならぬ哀に響き、今日は、過ぎし春秋の今更心なきに驚かれ、鳥の聲、蟲の音にも心何となう動きて、我にもあらで情の外に行末もなし。戀せる今を迷と觀れば悟れる昔の慕はしくも思はれず、悟れる今を戀と觀れば昔の迷こそ中々に樂しけれ。戀程世に訝しきものはあらじ。そも人、何を望み何を目的に渡りぐるしき戀路を辿るぞ、我も自ら知らず、只朧げながら夢と現の境を歩む身に、ましてや何れを戀の始終と思ひ別たむや。そも戀てふもの何こより來り何こをさして去る、人の心の奥は測り知るべき道なければ何れ思案の外なるべし。

いかなれば齋藤瀧口、今更武骨者の銘打たれたる鐵卷をよそにし、負ふにやさしき横笛の名に笑める、いかなれば時頼、常にはあらで宵を目して中宮の御所には忍べる、呼やいかにしも戀の淵に落ちけるなり。

西八條の花見の席に中宮の曹司横笛を一目見しより、時頼は、世には斯る氣高き美しき女子も有るものかと心竊に驚きしが、實を過る實を遮り妙なる舞の手振を見もて行くうち、胸怪しう轟きて心何となく安からざるが如く、二十三年の今まで絶えて覺なき異樣の感情雲の如く湧出で、例へば渚を閉ぢし池の水の春風に溶けたらむが如く、若くは滿身の力をはりつめし手足の節々、一時に緩みしが如く、茫然として行方も知らぬ通路を我ながら踏迷へる思して、果は舞終り樂收りしにも心付かず、軈て席を退り出で、何處ともなく出で行きしが、あはれ横笛とは時頼其夜初めて覺えし女子の名なりけり。

爾來快活にして物に屈托する事なかりし夢にも無かりし時頼の氣風何時しか變りて、憂はしげに思ひ煩ふ朝夕の樣唯ならず、紅色を帶びし

つゝ〳〵しき顏の色少しく蒼ざめて、常にも似で物言ふ事も稀になり太息の數のみぞ唯增りける。果は濃茶の厚鬢に水櫛當て、筈長の大束に今樣の大紋の布衣は平生の氣象に似もやらずと、時賴を知れる人訝しく思はぬは無かりけり。

## 第五

打つて變りし瀧口が今日此頃の有樣に、あれ見よ、當世嫌ひの武骨者も一度は折らねばならぬ我慢なるに、笑止や日頃吾等を尻目に懸けて輕薄武士と言はぬ計りの顏、今更何處に下げて吾等に對ひ得る、など後指さして嘲り笑ふ者あれども、瀧口少しも意に介せざるが如く應對等は常の如く振舞ひけり。されど自慢の頰鬚掻撫づる隙もなく、青黛の跡絶えず鮮かにして、萌黃の狩衣に摺皮の藺草履などよろづ派手やかなる出立は人目にそれと紛ふべくもあらず。顏容さへ稍々痩れて、起居も懶きが如く見ゆれども、人に向つて氣色の勝れざるを喞ちし事もなく、偶々病など無きやと問ふ人あれば、却て意外の面地して常にも益して健かなりと答へけり。

皆是れ戀の業なりとは、哀れや時賴未だ夢にも心づかず、我ともなく人ともあらで只思ひ煩へるのみ。思ひ煩へる事さへも心自ら知らず、例へば夢の中に伏床を拔出でゝ終夜山の巓、水の涯に迷ひつ〳〵したらむ人こそさながら瀧口が今の有樣に似たりとも見るべけれ。

人にも我にも行方知れざる戀の夢路をば、瀧口何處のはてまで迪りけむ、曉とも言はず屋敷を出でゝ、夕とも言はず、行先は己れならで知る人もなく、只門出の勢に引きかへて、戾足の打蕭れたる樣、さすがに遠路の勞とも思はれず。一月餘も過ぎて其年の春も暮れ、青葉の影に時鳥の初聲聞く夏の初となりたれども、かゝる有樣の悛まる色だに見えず、はては十幾年の間、朝夕樂みし弓馬の稽古さへ自ら怠り勝になりて、胴丸に積る埃の堆きに目もかけず、名に負へる鐵卷は高く長押に掛けられて、螺鈿の櫻を散せる黑鞘に、摺鮫の鞘卷指し添へたる立姿は、若し我ならざりせば一月前の時賴、唾も吐きかねざる花奢の風俗なりし。

されば變り果てし容姿に慣れて、笑ひ譏る人も漸く少くなりし頃、蟬聲喧しき夏の暮にもなりけむ、瀧口が顏愈々やつれ、頰肉は目立つ迄に落ちて眉のみ秀で、凄きほど色蒼白みて、濃かなる雙の鬢のみぞ愈々其澤を增しける。氣向かねばとて病と稱して小松殿が熊野參籠の伴にも立たず、動もすれば己が室に閉籠りて、夜更くるまで寢もやらず、日頃は絶えて用なき机に向ひ、一穗の燈挑げて、怪しげなる薄色の折紙延べ擴げ、命毛の細々と認むる小筆の運び絶間なく、卷いてはかへす思案の胸に、果は太息と共に封じ納むる文の數々、燈の光に宛名を見れば薄墨の色に哀を籠めて、何時の間に習ひけむ貫之流の流れ文字に「橫笛さま」。

世に艷かしき文てふものを初めて我思ふ人に送りし時は心のみを賴みに安からぬ日を覺束なくも暮せしが、籬に觸るゝ夕風のそよとの賴だになし。前もなき只の一度に人の誠のいかで知らるべきと、更に心を籠めて寄する言の葉も亦仇し矢の返す響も無し。心せはしき三度五度、答なきほど迷は愈々深み、氣は愈々狂ひ、十度、二十度、哀れ六尺の丈夫が二つなき魂をこめし千束なす文は、底なき谷に投げたらむ礫の如く、只の一度の返り言もなく、天の戶渡る梶の葉に思ふこと書く頃も過ぎ、何時しか秋風の哀を送る夕まぐれ、露を命の蟲の音の葉末にすだく聲悲し。

## 第六

思へに我しらで戀路の闇に迷ひし瀧口こそ哀

なれ、鳥部野の煙絶ゆる時なく、化し野の露置くにひまなきまゝならぬ世の習はしに漏るゝ我とは思はねども、相見ての刹那に百年の契をこむる頼もしき例なきにもあらぬ世の中に、いかなれば我のみは、天の羽衣撫で盡すらむほど永き悲みに、只一時の望だに得協はざる、思へば無情の横笛や、過ぎにし春のこのかた、書き連ねたる百千の文に、今は我には言殘せる誠も無し、良し有ればとて此上短き言の葉に、胸にさへ餘る長き思を寄せむ術やある、情なの横笛や、よしや送りし文は拙くとも、變らぬ赤心は此の春秋の永きにても知れ、一夜の松風に夢さめて、思寂しき衾の中に、我ありし事、薄が末の露程も思ひ出さむには、など一言の哀を返さぬ事やあるべき。思へば〳〵心なの横笛や。

然はさりながら他し人の心、我誠もて規るべきに非ず、路傍の柳は折る人の心に任せ、野路の花は摘む主常ならず、數多き女房曹司の中に、いはゞ萍の浮世の風に任する一女子の身、今日は何れの汀に止まりて明日は何處の岸に吹かれやせむ。千束なす我文は讀みも了らで捨てやられ、さそふ秋風に桐一葉の哀を殘さざらむも知れず。況してやあでやかなる彼が顔は、浮きたる色を愛づる世の中にそも幾その人を惱しけむ。かの宵にすらかの老女を捉へて色清げなる人の、嫉ましや、早や彼が名を尋ねしとさへ言へば、思を寄するもの我のみにては無かりけり。よしや他にはあらぬ赤心を寄するとも、風や何處と聞き流さむ。浮きたる都の艷女に二つなき心盡しのかず〳〵は我身ながら恥しや、ア、心なき人に心して我のみ迷ひし愚さよ。

待てしばし、然るにても立つ波荒き大海の下にも人知らぬ眞珠の光あり、外には見えぬ木影にも情の露の宿する例、まゝならぬ世の習はしは、善きにつけ、惡しきにつけ、人毎に他には測られぬ憂はあるものぞかし。あはれ後ともなる由ありて、我思ふ人の悲み居らざる事を誰か知るぞ。想へば那の氣高き﨟たけたる横笛を萍の浮きたる艷女とは僻める我心の誤ならむも知れず。さなり、我心の誤ならむも知れず。鳴く蟬よりも鳴かぬ螢の身を焦すもあるに、聲なき哀の深さに較ぶれば、仇浪立てる此胸の淺瀨は物の數ならず。そもや心なき草も春に遇へば笑ひ、情なき蟲も秋に感ずれば泣く。血にこそ染まね、千束なす紅葉重の燃ゆる計り一夜思に、薄墨の筆の外だに得顯さぬ人の心に有耶無耶は、誰か測り誰か知る。然なり、情なしと見、心なしと思ひしは僻める我身の誤なりけり、然るにても——

瀧口が胸は麻の如く亂れ、とつおいつ、或は恨み或は疑ひ、或は惑ひ、或は慰め、去りては來り往きては還る念々不斷の妄想、流は千々に異れども、落行く末はいづれ同じ戀慕の淵。迷の覊絆目に見えねば、勇士の刃も切らむに術なく、あはれや、鬼も挫がん六波羅一の剛の者、何時の間にか戀の奴となりすましぬ。

一夜時頼、更闌けて偶臥りもやらず、意中の幻影を追ひながら爲す事も無く、茫然として机に憑り居しが、越し方、行末の事、端なく胸に浮び、今の我身の有樣に引き比べて思はず深々と太息つきしが、何思ひけむ、一聲高く胸を叩いて躍り上り「嗚呼過てり〳〵」。

## 第七

歌物語に何の癡言と聞き流せし、戀てふ魔にさては吾れ疾より魅せられしかと、初めて悟りし今の刹那に瀧口が心は如何なりしぞ。「嗚呼過てり」とは何より先に口を衝いて覺えず出でし意料無限の一語、襟元に雪水を浴びし如く、

六尺の總身ぶる〳〵と震ひ上りて、胸轟き息せはしく、『むゝ』とばかりに暫時は空を睨んで無言の體、やがて眼を閉ぢてつく〴〵過越し方を想ひ返せば、哀にもつらかりし思の數々、さながら世を隔てたらむ如く、今更明し暮せし朝夕の如何にしてと驚かれぬる計り。夢かと思へば、現せ身の陽炎の影とも消えやらず、現かと見れば夢よりも何淡き此春秋の經過、例へば永の病に本性を失ひし人のやうやく我に還りしが如く瀧口は只恍惚として呆るゝ計りなり。

「嗚呼過てり〳〵、弓矢の家に生れし身の、天晴功名手柄して、勇士の譽を後世に殘すこそ此世に於ける本懷なれ。何事ぞ、眞の武士の脣頭に上するも忌はしき一女子の色に迷うて、可惜月日を夢現の境に過さむとは。あはれ南無八幡大菩薩も照覽あれ、瀧口時頼が武士の魂の曇なき證據、眞此の通りと、床なる一刀スラリと拔きて靑燈の光に差し付くれば、爛々たる氷の刃に水も滴らむず無反の切先、鍔を銜んで紫雲の如く立上る燒刃の匂目も眩むる計り。打見やりて時頼莞爾と打笑み、二振三振、不圖平身に映る我顏見れば、こはいかに、頰落ち色蒼白く、ありし昔に似もつかぬ悲慘の容貌。打駭きて、ためつ、すがめつ、見れば見るほど變り果てし面影は我ならで外になし。扨も窶れたるかな、愧しや、我を知れる人は斯る容を何とか見けむ——そも斯くまで骨身をいためし哀と思へば、深とは我ながら理知らず、是も誰が爲、思へば無情の人心かな。

碎けよと握り詰めたる柄も氣も、何時しか緩みて、臥蠶の太眉閃々と動きて、覺えず、あゝと太息つけば、霞む刃に心も曇り、映るは我面ならで、烟の如き橫笛が舞姿。是はとばかり眼を閉ぢ、氣を取直し、鍔音高く刃を鞘に納むれば、跡には燈の影ほの暗く、障子に映る影さびし。

嗚呼々〳〵六尺の體に人並の膽は有りながら、さりとは腑甲斐なき我身かな。影も形もなき妄念に惱されて、しらで過ぎし日はまだしもなれ、迷の夢の醒め果てし今はの際に、めゝしき未練は、あはれ武士ぞと言ひ得べきか。慚しと喞ちし三尺二寸、雙腕かけて疊みしは抑も何の爲の用意なりしぞ。祖先の苦勞を忘れて風流三昧に現を拔かす當世武士を尻目にかけし、十歲前の我は今何處にあるぞ。武骨者と人の笑ふを心に誇りし齋藤時頼に、あはれ今無念の淚は一滴も殘らずや。そもや瀧口が此身は空蟬のもぬけの殼にて、腐れし迄も昔の膽の一片も殘らぬか。

世に畏るべき敵に遇はざりし瀧口も、戀てふ魔神には引く弓も無きに呆れはてぬ。無念と思へば心愈々亂れ、心愈々亂るゝに隨れて、亂脈打てる胸の中に迷の雲は愈々擴がり、果は狂氣の如くいらちて、時ならぬ鳴弦の響、劍擊の聲に胸中の渾沌を淸さむと務むれども、心茲にあらざれば見れども見えず、聞けども聞えず、命の際に蹈躙る一念の戀は、玉の緖ならで斷たむ術もなし。

誠や、戀に迷へる者は猶底なき泥中に陷れるが如し、一寸上に浮ばむとすれば一寸下に沈むなり、一尺岸に上らむとするに、一尺底に下るなり、所詮自ら掘れる墳墓に埋るゝ運命は、悶え苦みて些の益もなし。されば悟るとは己れが迷を知ることにて、そを脫せるの謂にはあらず。哀れ、戀の鴆毒を滴も殘さず飮み干せる瀧口は、只坐して致命の時を待つの外なからむ。

## 第八

消えわびむ露の命を何にかけてか繫ぐらむと思ひきや、四五日經て瀧口が顏に憂の色稍く

去りて、今までの如く物につけ事に觸れ、思ひ煩ふ樣も見えず、胸の嵐はしられども、表面は槇の梢のさらとも鳴さず、何者か失意の戀にかへて其心を慰むるものあればならむ。

一日瀧口は父なる左衞門に向ひ、「父上に事改めて御願ひ致し度き一義あり」。左衞門「何事ぞ」と問へば、「斯る事、我口より申すは如何なものなれども、二十を越えてはや三歳にもなりたれば、家に洒掃の妻なくては萬に事缺けて快からず、幸ひ時頼見定め置きし女子有れば、父上より改めて婚禮を御取計らひ下されたく、願と言ふは此事に候」。人傳に名を聞いてさへ愧らふべき初妻が事、顏赤らめもせず、落付き拂ひし語の言ひ樣、仔細ありげなり。左衞門笑ひながら、「これは異な願を聞くものかな、晩かれ早かれ、いづれ持たねばならぬ妻なれば、相應はしき緣もあらばと老父も疾くより心懸け居りしぞ。シテ其方が見定め置きし女子とは、何れの御内か、但しは御一門にてもあるや、どうぢや」。「小子が申せし女子は、然る門地ある者ならず」。「然らばいかなる身分の者ぞ、衞府附の侍にてもあるか」。「否、さるものには候はず、御所の曹司に横笛と申すもの、聞けば御室わたりの鄕家の娘なりとの事」。

瀧口が顏は少しく青ざめて、思ひ定めし眼の色徒ならず、父は暫し語なく俯ける我子の顏を凝視め居しが、「時頼、そは正氣の言葉か」。「小子が一生の願、神以て詐ならず」。左衞門は兩手を膝に置直して聲勵まし、「やよ時頼、言ふまでもなき事なれど、婚姻は一生の大事と言ふこと、其方知らぬ事はあるまじ。世にも人にも知られたる然るべき人の娘を嫁子にもなし、其方が出世をも心安うせむと、日頃より心を用ゆる父を其方は何と見つるぞ。よしなき者に心を懸けて家の譽をも顧みぬほど無分別の其方にてはなかりしに、扨は豫により人の噂に違はず、横笛とやらの色に迷ひしよな」。「否、小子こと色に迷はず香にも醉はず、神以て戀でもなく浮氣でもなし、只少しく心に誓ひし仔細の候へば」。

左衞門は少しく色を起し、「默れ時頼、父の耳目を欺かむ其語、先頃其方が儕輩の足助二郎殿、年若きにも似ず、其方が横笛に想を懸け居ること後の爲ならずと、懇に潛に我に告げ吳れしが、其方に限りて浮きたる事のあるべきとも思はれねば心も措かで過ぎ來りしが、思へば父が庇蔭目の過なりし。神以て戀にあらずとは、何處まで此父を袖になさむずる心ぞ。不埒者め、話にも聞きつらむ、祖先兵衞直頼殿、餘五將軍に仕へて拔群の譽を顯せしこのかた、弓矢の前には後れを取らぬ齋藤の血統に、女色に魂を奪はれし未練者は其方が初ぞ。それにても武門の恥とも心付かぬか、弓矢の手前に面目なしとは思はずか。同じくば名ある武士の末にてもあらばいざしらず素性もなき土民鄕家の娘に、茂頼斯くて在らむ内は、齋藤の門をくゞらせむ事思ひも寄らず」。

老の一徹短慮に息卷荒く罵れば、時頼は默然として只差俯けるのみ。やゝありて左衞門は少しく面を和げて、「いかに時頼、人若き間は誰過はあるものぞ、萌出づる時の美はしさに、霜枯の哀は見えねども、何れか秋に遭はで果つべき、花の盛は僅に三日にして跡の青葉は何れも色同じ、あでやかなる女子の色も十年はよも續かぬものぞ、老いての後に顧れば色めづる若き時の心の我ながら解らぬほど癡けたるものなるぞ。過は改むるに憚る勿れとは古哲の金言、父が言葉腑に落ちたるか、横笛が事思ひ切りたるか。時頼、返事のなきは不承知か」。

今まで眼を閉ぢて默然たりし瀧口は、やらやく首を擡げて父が顏を見上げしが、兩眼は潤ひて無限の情を湛へ、滿面に顯せる悲哀の裡

に搖かぬ決心を示し徐に兩手をつきて、一々道理ある御仰、横笛が事、只今限り刀にかけて思ひ切つて候、其代に時頼が又の願、御聞屆下さるべきや」。左衞門は然もありなむと打點頭き、「それでこそ茂頼が倅、早速の分別、父も安堵したるぞ、此上に願とは何事ぞ」。「今日より永のおん暇を給はりたし」。言終るや、堰止めかねし溜涙、はら〳〵と流しぬ。

## 第九

天にも地にも意外の一言に、左衞門呆れて口も開かず、只其子の顔色打瞬れば、瀧口は徐に涙を拂ひ、一思の外なる御驚に定めて浮の空とも思されむが、此願こそは時頼が此座の出來心には露候はず、斯る曉にはと豫てより思決めし事に候。事の仔細を申さば只御心に逆ふのみなるべければ、申さざれば猶以て亂心の沙汰とも思召されむ。申すも面はゆげなる横笛が事、まこと言ひ交せし事だに無けれども、我のみの哀は中々に深さの程こそ知れね、つれなき人の心に猶更狂ふ心の駒を繋がむ手綱もなく、此仲秋は我身ながら苦かりし。神かけて戯に非ず、迷に非ずと我は思へども、人には浮氣とや見えもしけむ。唯劍に切らむ影もなく、弓もて射らむ的もなき心の敵に向つて、そも幾その苦戰をなせしやは、父上、此顔容のやつれたるにて御推量下されたし。時頼が六尺の體によくも擔ひしと自らすら駭く計りなる積り〳〵し憂事の數、我ならで外に知る人もなく、只戀の奴よ、心弱き者よと、世上の人に歌はれむ殘念さ、誰に向つて推量あれとも言はむ人なきこそ、かへす〴〵も口惜しけれ。此儘の身にてはどの顔下げて武士よと人に呼ばるべき、腐れし心を抱きて、外見ばかりの伊達に指さむこと、兩刀の曇なき手前に心とがめて我から忍びず。只此上は横笛に表向き婚姻を申入るゝ外なし、されどつれなき人心、今更靡かむ樣もなく、且や素性賤しき女子なれば、物堅き父上の御容なきことと元より覺悟候ひしが、只最後の思出にお耳を汚したる迄なりき。所詮天魔に魅入られし我身の定業と思へば、心を煩はすもの更に無し。今は小子が胸には横笛がつれなき心も殘らず、月日と共に積りし哀も宿さず、人の恨も我悲も洗ひし如く痕なけれども、殘るは只此世の無常にして頼み少きこと、秋風の身にしみ〴〵と感じて有漏の身の換へ難き恨、今更骨身に徹へ候。惟れば誰が保ちけむ東父西母が命、誰が嘗めたりし不老不死の藥、電光の裏に假の生を寄せて、妄念の間に露の命を苦む、愚なりし我身なりけり。横笛が事御容なきこそ小子に取りては此上もなき善智識。今日を限りに世を厭ひて誠の道に入り、墨染の衣に一生を送りたき小子が決心。二十餘年の御恩の程は申すも愚なれども、何れ遁れ得ぬ因果の道と御諦ありて、永遠の御暇を給はらむこと、時頼が今生の願に候」。胸一杯の悲に語さへ震へ、語り了ると其儘、齒根喰ひ絞りて、詰と耐ふる斷腸の思、勇士の愁嘆流石にめゝしからず。

過ぎ越せし六十餘年の春秋、武門の外を人の住むべき世とも思はず、涙は無念の時出づるものぞと思ひし左衞門が耳に、哀れに優しき瀧口が述懷の、何として解かるべき、歌詠む人の方便とのみ思ひ居し戀に惱みしと言ふさへ、あるに、木の端とのみ嘲りし世捨人が現在我子の願ならむとは、左衞門如何でか驚かざるを得べき。夢かとばかり、一度は呆れ、一度は怒り、老の兩眼に溢るゝ詰りの涙を拭ひ、一と言、今言ひしは慥に齋藤時頼が眞の言葉か、幼少より筋骨人に勝れて逞しく、膽力さへ坐りたる其方、行末の出世の程も頼母しく、我白髪首の生甲斐あらむ日をば、指折りながら待侘び居たるには

引換へて、今と言ふ今老の眼に思ひも寄らぬ恥辱を見るものかな。奇怪とや言はむ、不思議とや言はむ。慈悲深き小松殿が左衞門は善き子を持たれし、と我を見給ふ度毎のお言葉を常々人に誇りし我れ、今更乞食坊主の倅を持つて、いづこに人に合する二つの顏ありと思ふてかッ。やよ、時頼、よッく聞け、他は言はず、先祖代々より齋藤一家が被りし平家の御恩はそも幾何なりと思ふぞ。殊に弱年の其方を那程に目をかけ給ふ小松殿の御恩に對しても、よし如何に堪へ難き理由あればとて、斯る法外の事、言はれ得る義理か。弓矢の上にこそ武士の譽はあれ、兩刀捨てゝ世を捨てゝ、悟り顏なる倅を左衞門は持たざるぞ。上氣の沙汰ならば容赦もせむ、性根を据ゑて、不所存のほど過つたと言はぬかッ。

兩の拳を握つて、怒の眼は鋭けれども恩愛の涙は忍ばれず、雙頬傳つてはふり落つるを拭ひもやらで、一息つよく、「どうぢや、時頼、返答せぬかッ。」

## 第十

深く思ひ決めし瀧口が一念は石にあらねば轉ばすべくも非ざれども、忠と孝との道に、恩義をからみし父の言葉に、思ひ設けし事ながら、今更に腸も千切るゝばかり、眼も涙に曇りて、見上ぐる父の顏も定かならず、仰せらるゝ事、時頼いかで理と承はらざるべき。小松殿の御事は云ふも更なり、年寄り給ひたる父上に、斯る嘆を見せ參らする小子が胸の苦しさは、喩ふるに物も無けれども、所詮浮世と觀じては、一切の望に離れし我心、今は返さむ術もなし、忠孝の道、君父の恩、時頼何として疎かに存じ候べき。然りながら一度人身を失へば萬劫還らずとかや、世を換へ生を移しても生死妄念を離れざる身を思へば、悟の日の晩かりしに心急がれて、世は是迄とこそ思はれ候へ。只是れまで思ひ決めしまで重ね〳〵し幾重の思案をば、御知りなき父上には、定めて若氣の短慮とも、當座の上氣とも聞かれつらむこそ口惜しけれ、言はゞ一生の浮沈に關る大事、時頼不肖ながらいかでか等閑に思ひ候べき。詮ずるに自他の悲を此胸一つに收め置きて、亡からむ後の世まで知る人もなき身の果敢なさ、今更是非もなし。父上、願ふは此世の緣を是限りに、時頼が身は二十三年の秋を一期に病の爲に敢なくなりしとも御諦め下されかし。不孝の悲は胸一つには堪へざれども、御詫申さむに辭もなし、只々御勘當を乞ふ計りに候」

瀧口が涙を留めても、飽くまで世を背に見たる我子の決心、左衞門今は夢とも上氣とも思はれず、愛しと思ふほど彌增す憎さ。慈悲と恩愛に燃ゆる怒の焰に滿面朱を灑けるが如く、張り裂く計りの胸の思に言葉も絶え〴〵に、「イ言はして置けば父をさし置いて我面白の勝手の理窟、左衞門聞く耳持たぬぞ。無常因果と、世にも巧けたる乞食坊主のえせ假聲、武士がどの口もて言ひ得る語ぞ、弓矢とる身に何の無常、何の因果。――時頼、善く聞けよ、畜類の狗さへ、一日の飼養に三年の恩を知ると云ふに非ずや。匍へば立て、立てば歩めと、我年の積るをも思はで、育て上けし二十三年の親の辛苦、さては重代相恩の主君にも見換へむもの、世に有りと思ふ其方は、犬にも劣りしとは知らざるか。不忠とも、不孝とも、亂心とも、狂氣とも、言はむ樣なき不所存者、左衞門が眼には、我子の容に化けし惡魔とより外は見えざるぞ、それにても見事其處に居直りて、齋藤左衞門茂頼が一子ぞと言ひ得るか、ならば御先祖の御名、立派に申して見よ。其方より暇乞ふ迄もなし、人の數にも入らぬ木の端は、勿論親でもなく、子でもなし。其一念の直らぬ間は、時頼、シ、七

生までの義理ぞ。」

言ひ捨てゝ、襖立切つて畳觸りも荒々しく、ツと奥に入りし左衛門、跡見送らむともせず、時頼は兩手をはたとつきて、兩眼の涙さながら雨の如し。

外には鳥の聲うら悲しく、枯れもせぬに散る青葉二つ三つ、無情の嵐に搖落されて窓打つ音さへ恨めしげなる――あはれ、世は汝のみの浮世かは。

## 第十一

一門の采邑六十餘州の半を越え、公卿殿上人三十餘人、諸司衛府を合せて、門下郎黨の大官榮職を恣にするもの其數を知らず、げに平家の世は今を盛とぞ見えにける。新大納言が隱謀脆くも敗れて身は西海の隅に死し、丹波の少將成經、平判官康頼、法勝寺の執事俊寛等、徒黨の面々、波路遙に名も恐しき鬼界が島に流されしより、世は愈々平家の勢に靡伏し道路目を側つれども背後に指す人だになし。一國の生殺與奪の權は入道が眉目の間に在りて衛府判官は其爪牙たるに過ぎず。苟も身一門の末葉に連れば、公卿華冑の公達も敢て肩を並ぶる者なく、前代未聞の榮華は天下の耳目を驚かせり。これは日に增し募る入道が無道の行爲、一朝の怒に其身を忘れ、小松内府の諫をも用ゐず、恐多くも後白河法皇を鳥羽の北殿に押籠め奉り、卿相雲客の或は累代の官職を褫れ、或は遠島に流人となるもの四十餘人。鄙も都も怨嗟の聲に充ち、天下の望既に離れて衰亡の兆漸く現れむとすれども、今日の歡に明日の哀を想ふ人もなし。盛者必衰の理とは謂ひながら、權門の末路、中々に言葉にも盡されね。父入道が非道の擧動は一次再三の苦諫にも及ばれず、君父の間に立ちて忠孝二道に一身の兩全を期し難く、驕る平氏の行末を浮べる雲と頼なく、思積りて熟々世の無常を感じたる小松の内大臣重盛卿、先頃思ふ旨ありて、熊野參籠の事ありしが、歸洛の後は一室に閉籠りて、猥に人に面を合せ給はず、外には所勞と披露ありて出仕もなし。然れば平生徳に懷き恩に浴せる者は言ふも更なり、知るも知らぬも潛に憂ひ傷まざるはなかりけり。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

短き秋の日影もやゝ西に傾きて、風の音さへ澄渡るはづき半の夕暮の空、前には閑庭を控へて左右は廻廊を繞し、青海の簾長く垂れこめて、微月の銀鈎空しく懸れる一室は、小松殿が居間なり。内には寂然として人なきが如く、只簾を漏れて心細くも立迷ふ香煙一縷、折々かすかに聞ゆる颯々の音は念珠を爪繰る響にや、主が消息を齎していと奥床し。

やゝありて「誰かある」と呼ぶ聲す、遙方なる廊下の妻戸を開けて徐に出で來りたる立烏帽子に布衣着たる侍は齋藤瀧口なり。「時頼參りて候」と申上ぐれば、やがて一間を出で立ち給ふ小松殿、身には山藍色の形木を摺りたる白布の服を纏ひ、手には水晶の珠數を懸け、ありしにも似ず窶れ給ひし御顔に笑を含み、「珍らしや瀧口、此程より病氣の由にて、予が熊野參籠の折より見えざりしが、僅の間に痛く瘦せ衰へし其方が顔容、日頃は鬼とも組まむず勇士も身内の敵には勝たれぬよな、病は癒えしか」。瀧口はやゝしばし、詰と御顔を見上げ居たりしが、「久しく御前に遠りたれば、餘りの御懷しさに病餘の身をも顧みず、先刻遠侍に伺候致せしが、幸にして御休息の折を得て時頼身にとりて恐悦の至に候」と言ふと其儘御前に打伏し、濡衫の袖に小波を打たせて悲愁の樣子、徒ならず見えにけり。

哀れや、瀧口、世を捨てむ身にも、今を限の名殘には一切の諸縁何れか煩惱ならぬは無し。

此世の思出に夫とはなしに餘所ながらの告別とは神ならぬ身の知り給はぬ小松殿、瀧口が平生の快活なるには似もやらで、打萎れたる容姿を、訝しげに見やり給ふぞ理なる。

四方山の物語に時移り、入日の影も何時しか消えて冴え渡る空に星影寒く、階下の叢に蟲の泣聲露ほしげなり。燭を運び來りし水干に緋の袴着けたる童の後影見送りて、小松殿は聲を忍ばせ、「時賴、近う寄れ、得難き折なれば、予が改めて其方に賴み置く事あり」。

## 第十二

一穗の燈を挾して相對せる小松殿と時賴、物語の樣最と蕭やかなり。

「こは思も寄らぬ御言葉を承はり候ものかな、御世は盛とこそ思はれつるに、など然る忌はしき事を仰せらるゝにや。憚り多き事ながら、殿こそは御一門の柱石、天下萬民の望の集る所、吾れ人諸共に御運の程の久しかれと、祈らぬ者はあらざるに、何事にて御在するぞ、聊かの御不例に忌はしき御身の後を仰せ置かるゝとは。殊更少將殿の御事、不肖弱年の時賴、如何でか御託命の重きに堪へ申すべき。御言葉のゆゑよし、時賴つや〱合點參らず」。

「時賴、さては其方が眼にも世は盛と見えつるよな。世は盛に見ゆればこそ、衰へむ末の事の一入深く思ひ遣らるゝなれ。弓矢の上に天下を與奪するは武門の慣習、遠き故事を引くにも及ばず、近き例は源氏の末路、仁平久壽の盛の頃には、六條判官殿、如何でか其一族の今日あるを思はれむや、治に居て亂を忘れざるは長久の道、榮華の中に沒落を思ふも徒に重盛が杞憂のみにあらじ」。

「然るにても幾千代重ねむ殿が御代なるに、など然ることの候はむや」。

「否とよ、時賴、朝の露よりも猶空なる人の身の、何時消えむも測り難し。我れ斯くてだに在らむにはと思ふ間さへ中々に定かならざるに、いかで年月の後の事を思ひ料らむや。我もし兎も角もならむ跡には心に懸るは只少將が身の上、元來孱弱の性質、加ふるに幼より詩歌數寄の道に心を寄せ、管絃舞樂の娛の外には弓矢の譽あるを知らず。其方も見つらむ、去んぬる春の花見の宴に、一門の面目と稱へられし舞妓白拍子にも比すべからむ己が優技をばさも誇り顏に見えしは、親の身の中々に恥しかりし。一旦事あらば、妻子の愛、浮世の望に惹されて、如何なる未練の最期を遂ぐるやも測られず。世の盛衰は是非もなし、平家の嫡流として卑怯の擧動なからむには、祖先累代の面目是上あるべからず、維盛が行末守り吳れよ時賴、之ぞ小松が一期の賴なるぞ」。

「そは時賴の分に過ぎたる仰にて候ぞや。現在足助二郎重景など屈竟の人々少將殿の扈從には候はずや、若年未熟の時賴、人に勝りし何の能ありて斯る大任を御受け申すべき」。

「否々左にあらず、いかに時賴、六波羅上下の武士が此頃の有樣を何とか見つる。一時の太平に狎れて衣紋裝束に外見を飾れども、誠武士の魂あるもの幾何かあるべき。華奢風流に荒める重景が如き、物の用に立つべくもあらず。只彼が父なる與三左衞門景安は平治の激亂の時、二條堀河の邊にて、我に代りて惡源太が爲に討たれし者ゆゑ、其遺功を思うて我名の一字を與へ少將が扈從となせしのみ。繰言ながら維盛が事賴むは其方一人。少將事あるの日、未練の最期を遂ぐる樣の事あらむには、時賴、予は草葉の蔭より其方を恨むぞよ」。

思ひ入りたる小松殿の御氣色、物の哀を含めたる、心ありげの語の端々も、餘りの忝なさに思ひ紛れて、只感涙に咽ぶのみ。風にあらで小忌の衣に漣立ち、持ち給へる珠數震ひ搖

ぎて、さら〳〵と音するに、瀧口首を擡げて、小松殿の御樣を見上ぐれば、燈の光に半面を背けて、御袖の唐草に徒ならぬ露を忍ばせ給ふ、御心の程は知らねども、痛はしさは一入深し。夜も更け行きて、何時しか簾を漏れて青月の光凄く、冷渡る風に落葉ひゞきて、主が心問ひたげなり。

蟲の音亙りて月高く、いづれ哀は秋の夕、憂しとても逃れむ術なき己が影を踏みながら、腕叉きて小松殿の門を立出でし瀧口時頼。露にそぼちてか布衣の袖重げに見え、足の運さながら醉へるが如し。今更思決めし一念を吹きかへす世に秋風は無けれども、積り積りし浮世の義理に迫られ、胸は涙に塞りて、月の光も朧なり。武士の名殘も今宵を限り、餘所ながらの告別とは知り給はで、亡からむ後まで賴み置かれし小松殿、御仰の忝さと、是非もなき身の不忠を想ひやれば、御言葉の節々は骨を刻むより猶つらかりし。哀れ心の灰は冷え果てゝ、浮世に立てむ烟もなき今の我、あゝ何事も因果なれや。

月は照れども心の闇に夢とも現とも覺えず、行方もしらず步み來りしが、ふと頭を擧ぐれば、こはいかに、身は何時の間にか御所の裏手、中宮の御殿の邊に立てりける。此春より來慣れたる道なればにや、思はぬ方に迷ひ來しものかな、と無情かりし人に通ひたる昔忍ばれて、築垣の下に我知らず佇みける。折柄傍なる小門の蔭にて「横笛」と言ふ聲するに心付き、思はず振向けば、立烏帽子に狩衣着けたる一個の侍の此方に背を向けたるが、年の頃五十計りなる老女と額を合せて囁けるなり。

## 第十三

月より外に立聞ける人ありとも知らで、件の侍は聲潛ませて、「いかに冷泉、折重ねし薄樣は薄くとも、こめし哀は此秋よりも深しと覺ゆるに、彼の君の氣色は如何なりしぞ。夜每の月も數へ盡して、闇なる影は二度まで見たるに、身の願の滿たむ日は何れの頃にや。賴み甲斐なき懸橋よ」。

怨の言葉を言はせも敢ず、老女は疎らなる齒莖を顯はしてホヽと打笑み、「然りとは戀する御身にも似合はぬ事た。此の冷泉に如才は露無けれども、まだ都慣れぬ彼の君なれば、御身が事可愛しとは思ひながら、返す言葉のはしたなしと思はれむなど想ひ煩らてお在すにこそ、咲かぬ中こそ苔ならずや」。言ひつゝツと男の傍に立寄りて耳に口よせ、何事か暫し囁きしが、一言每に點頭きて冷かに打笑める男の肩を輕く叩きて、「お解りになりしや、其時こそは此の老婆にも、秋にはなき梶の葉なれば、渡しの料は忘れ給ふな、世にも憎きほど羨ましき二郎ぬしよ」。男は打笑ふ老女の袂を引きて、「そは誠か、時頼めは愈々思ひ切りしとか」。

己れが名を聞きて松影に潛める瀧口は愈々耳を澄しぬ。老女、此春より引きも切らぬ文の、此の二十日計りはそよとだに音なきは、言はでも著き、空なる戀と思ひ絕えしにあんなれ。何事も此の老婆に任せ給へ、又しても心元なげに見え給ふことの恨めしや、今こそ霜枝に雪のみ積れども、鶯鳴かせし春もありし老婆、萬に拔目の有るべきや」。袖もて口を掩ひ、さなきだに繁き額の皺に集めて、ホヽと打笑ふ樣、見苦しき事言はむ方なし。

後の日を約して小走りに歸り行く男の影をつく〴〵見送りて、瀧口は枯木の如く立ちすくみ、何處ともなく見詰むる眼の光徒ならず。二郎、二郎とは何人ならむ。獨りごちつゝ首を傾けて暫し思案の樣なりしが、忽ち眉揚り眦鋭く、「さては」とばかり面色見る〳〵變りて、握り詰めし拳ぶる〳〵と震ひぬ。何に驚きて

か、垣根の蟲、暫し泣き止みて、空に時雨るゝ
落葉散る響だにせず。良ありて瀧口顏色和ら
ぎて握りし拳も自ら緩み、只太息のみ深し。
「何事も今の身には還らぬ夢の恨もなし、女を
賣り人を詐る末の世と思へば吾亦爲に善智識ぞ
や、誠なき人を戀ひしも浮世の習と思へば少し
も腹立たず。」
立上りつゝ笹垣の彼方を見やれば、琴の音の
微に聞ゆ、月を友なる怨聲は若しや我慕ひて
し人にもやと思へば、一期の哀れ自ら催され
て、ありし昔は流石に空ならず、あはれ、よ
りても合はぬ片糸の我身の運は是非もなし、只
濁の世に我思ふ人の長へに幸くぞあれ。戀に望
を失ひても、世を果敢なみし心の願、僅に
貫し。
千緒萬端の胸の思を一念無常の熔爐に熔
し去りて、澄む月に比べても心の明るさ。何れ終
は同じ紙衣玉帝、白骨を抱きて榮枯を計りし
昔の夢、觀じ來れば、世に秋風の哀もなし。
君も、父も、戀も、情も、さては世に名聲擧け
てより二十三年の日々に疊み上げ折重ねし一切
の衆緣、六尺の皮肉と共に夜半の嵐に吹き籠
めて、行方も知らぬ雲か煙、跡には秋深く夜靜
にして立つる雁の聲のみ高し。

## 第十四

治承三年五月熊野參籠の此方、日に增し重
る小松殿の病氣、一門の賴、天下の望を繫ぐ
御身なれば、さすがの横紙裂りける入道も心を
痛め、此日頃まだき西八條より遙々の見舞に、
内府も暫く寢處を出でゝ對面あり、半晌計り經
て還り去りしが、鬼の様なる入道も稍涙含み
てぞ見えにける。相隨ひし一門の人々の入道と
共に還りし跡には、館の中最と靜にて、小松殿
の側に侍る者は御子維盛卿と足助二郎重景の
み、維盛卿は父に向ひ、「先刻祖父禪門の御勸
ありし宋朝渡來の醫師、聞くが如くんば世にも
稀なる名手なるに、父上の拒み給ひしこそ心得
ね」。訝しげに尋ぬるを、小松殿は打見やりて、
はら／＼と涙を流し、形ある者は天命あり。
三界の敎主さへ、耆婆が藥にも及ばずして、跋提
河の涅槃に入り給ひき。佛體ならぬ重盛、まし
て唯ならぬ身の業なれば、藥石如何でか治す
るを得べき。唯父禪門の御身こそ痛ましけれ。
位人臣を極め、一門の榮華は何れの國、何れの
代にも例なく、齡六十に越え給へば、出離生
死の御營、無上菩提の願の外、何御不足の
あれば煩惱劫苦の浮世に非道の權勢を貪り給
ふ淺ましさ。如何に父行、此頃一門の榮耀を恃と
か見つる、臣として君を押籠め參らするさへある
に、下民の苦を顧みず、遷都の企さへありと聞
く、そも／＼平安の都は百年の基を固めて何に
家の盛あらむ。父の非道を子として諫め得ず、
民の怨を負ひて斯たり見る重盛が心苦しさ。思
ひ遣れ、少將」。
維盛卿も、側に侍せる重景も首を垂れて默
然たり。内府は病衰れたる身を脇息に持たせて
少しく笑を含みて重景を見やり給ひ、「いかに二
郎、保元の昔、平治の太刀風、今も草木を靡
かす力ありて、盛と見ゆる世も何れ衰ふる時は
あり、末は濁りても濁れぬ源には、流も何時
か澄まむずるぞ。言葉の旨を判り得しか」。重
景は憚しげに首を傾し、「如何でかは」と答へ
しまゝ、はか／＼しく應せず。
折から一人の青侍廊下に手をつきて、「齋
藤左衞門、只今御謁見を給はりたき旨願ひ候が、
如何計らひ申さむや」と恐る／＼申上ぐれば、
小松殿、「是へ、通れ參れ」と言ふ。暫くして件の
青侍に導かれ、緣端に平伏したる齋藤茂頼、
齡七十に近けれども、猶矍鑠として健なる
老武者、右の鬢先より頰を掠めたる向疵に、栗
毛の逞しき股肉に物語りし昔の武功忍ばれ、能

手臑に肉落ちて節のみ高き太腕は、そも幾その人の首を切り落しけむ、肩は山の如く張り、頭は雪の如く白し。「久しや左衞門」、小松殿聲懸け給へば、左衞門は窪みし兩眼に涙を浮べ、「茂賴此の老年に及び、一期の恥辱、不忠の大罪、御詫申さむ爲、御病體を驚かし參らせて候」。小松殿眉を顰め、「何事ぞ」と問ひ給へば、茂賴は無念の顏色にて「愚息時賴」と言ひさして涙をはら〳〵と流せば、重景は傍より膝進め、「時賴殿に何事の候ひしぞ。「遁世致して候」。是はと驚く維盛、重景、仔細如何にと問ひ寄るを應も得せず、やゝありて涙を拭ひ、「君が山なす久年の御恩に對し、一日の報功をも遂げず、猥に身を捨つる條、不忠とも不義とも言はむ方なき愚息が不所存、茂賴此期に及び、君に合す面目も候はず」。言ひつゝ懷より取出す一封の書、「一言に絕えたる亂心にも君が御事忘れずや、不忠を重ぬる罪とも知らで、殘しありし此の一通、君の御名を染めたれば、捨てむにも處なく、餘儀なく此に」と差上ぐるを小松殿は取上げて、「こは予に殘せる時賴が陳情よな」と言ひつゝ繰りひろげ、つく〴〵讀了りて嘆息し給ひ、「あゝ彼のみの浮世にてはなかりしか——時賴ほどの武士も物の哀には向はむ刃なしと見ゆるぞ。左衞門、今は嘆きても及ばぬ事、予に於て聊か憾なし。禍福はあざなへる繩の如く、世は塞翁が馬、平家の武士も數多きに、時賴こそは中々に嫉しき程の仕合者ぞ」。

## 第十五

更闌けて、天地の間にそよとも音せぬ午夜の靜けさ、やゝ傾きし下弦の月を追うて、冴え澄める大空を渡る雁の影遙なり。ふけ行く夜に奧も表も人定りて、築山の木影に鐵燈の光のみ佗しげなる御所の裏局、女房曹司の室々も、今を盛の寢入花、對屋を照せる燈の火影に迷うて、妻戶を打つ蟲の音のみ高し。廻廊のあなたに、蘭燈尙微なるは誰が部屋ならむ、主は此夜深きにまだ寢もやらで、獨り黑塗の小机に打ちもたれ、首を傾して物思はしげなり。側にある衣桁には紅梅萌黃の三衣を打懸けて、焚き籠めし移り香に時ならぬ花を匂はせ、机の傍に押付けたる蒔繪の架には、色々の歌集物語を載せ、柱には一面の古鏡を掛けて、故とならぬ女の魂見えて床し。主が年の頃は十七八になりもやせむ、身には薄色に草模樣を染めたる小袿を着け、水際立ちし額より丈にも餘らむ濡羽の黑髮、優に振分けて後に下げたる姿、優に氣高し。誰見ねども膝も崩さず、時々鬢のほつれに小波を打たせて、吐く息の深げなるに、哀は此處にも漏れずと見ゆ。主は誰ぞ、是ぞ中宮が曹司横笛なる。

其の振上ぐる顏を見れば、翠眉の魂を蕩して、此世の外ならで六尺の體を天地の間に置き所無きまでに狂はせし傾國の色、凄き迄に美はしく、何を悲みてか、眼に湛ふる涙の珠、海棠の雨も及ばず、膝の上に半ば繰弘げたる文は何の哀を籠めたるにや。打見やる眼元に無限の情を含み、果は恰も悲に堪へざるものゝ如く、ブル〳〵と身震ひして、文もて顏を掩ひ、泣音を忍ぶ樣いぢらし。

折から此方を指して近く人の跫音に、横笛手早く文を卷き藏め、涙を拭ふ隙もなく、忍びやかに、「横笛樣、まだ御寢ならずや」と言ひつゝ部屋の障子徐に開きて入來りしは、冷泉と呼ぶ老女なりけり。横笛は見るより、萎れし今までの容姿忽ち變り、乾と容を改め、言葉さへ雄々しく、「冷泉樣には何の要事あれば夜半には來給ひし」と咎むるが如く問ひ返せば、ホヽと打笑ひ、「横笛さま、心強きも程こそあれ、少しは他の情を酌み給へや。老朽れし老姿の御身に嫁はるゝは、可惜武士の戀死せむ命を思へば[illegible]

の意ならず、然るにても昨夜の返事、如何に遊ばすやら。「幾度申しても返事は同じこと、あな蒼蠅き人や」。懶しげに面を赧らむる常の様子と打って變り、さてもすげなき捨言葉に、冷泉訝しくは思へども流石は痴者、氣を外さず、「其御心の強さに彌増す思に堪へ難き重景さま、世に時めく身にて、[illegible]の女性に只一人、憂身をやつさるゝも戀なればこそ横笛様、御身はそを哀とは思さずか。若氣の一徹は吾れ人共に思ひ返しの無きもの、可惜丈夫の焦れ死しにも御身は見殺しにせらるゝ氣か、さりとは情なの御心や」。横笛はさも懶げに、「左様の事は横笛の知らぬこと」。「またしてもうたてき事のみ、聞きしと思へ給うての事か。年弱き内は誰しも同じながら、斯くては戀は果てざるものぞ。女子の盛は十年とは無きものなるに、此上なき機會を取り外して、卒都婆小町の故事も有る世の中。重景様は門地と云ひ、器量と云ひ、何不足なき好き縁なるに、何とて斯くは否み給ふぞ。扨は瀧口殿が事思ひ給うての事か、武骨一途の瀧口殿、文武兩道に秀で給へる重景殿に較ぶべくも非ず。況してや瀧口殿は何思ひ立ちてや、世を捨て給ひしと専らの評判なるを、御身は未だ聞き給はずや。世捨人に情も義理も要らばこそ、花も實もある重景殿に只一言の色善き返り言をし給へや。さて其後は兵衛にも昇り給はむ重景殿、御身が行末は如何に幸ならむ。未だ浮世慣れぬ御身なれば、思ひ煩ひ給ふも理なれど、六十路に近き此の老婆、いかで惡しき事を申すべき、聞分け給ひしか、や」。顔差し覗きて猫撫聲、「や、や」と媚ぶるが如く笑を含みて袖を引けば、今まで應もせず俯き居たりし横笛は、引かれし袖を切るが如く打拂ひ、忽ち柳眉を逆立て、言葉鋭く、「無禮にはお在さずや、冷泉さま、榮華の爲に身を賣る遊女舞妓と横笛を思ひ給うてか。但は此の横笛を飽くまで不義淫奔に墮さむとせらるゝにや。又しても問ひもせぬ人の批判、且は深夜に道ならぬ媒介、横笛迷惑の至、御歸りあれ冷泉様。但し[illegible]て[illegible]の僻を呼起し申さむや」。

## 第十六

鋭き言葉に言懲らされて、餘儀なく立上る冷泉を、引立てむ計りに送り出し、本意無げに見返るを、見向きもやらず、其儘障子を礑と締めて、仆るゝが如く座に就ける横笛、暫しは恍然として氣を失へる如く、いづこともなく詰と凝視め居しが、星の如き眼の裏には溢るゝばかりの涙を湛へ、珠の如き頬にはらはらと振りかゝれば拭はむともせず、蕾の唇、惜氣もなく喰ひしばりて、噛み碎く思ひの切れぎれに、全身の哀れを忍ばせ、はては耐へ得で、[illegible]泣き伏して、人には見せじ[illegible]を溢させて、よゝとばかりに泣き伏しつ。涙の中にかすかなる[illegible]、微かに聞ゆる一言は、誰に聞かせむとてや、「エ許し給はれ」。

良しや眼前に屍の山を積まむとも、涙一滴こぼさぬ勇士に、世を果敢なむ迄に物の哀を感じさせ、[illegible]男を何の見事に狂はせながら、「許し給はれ」とは今更何の酔興ぞ。呼々然に非ず、何事[illegible]浮世なれば、心にもあらぬ情なさに、[illegible]隔てられ、恨みしものは恨みしまゝ、恨まれし者は恨みられし儘に、あはれ[illegible]に、身を換へ世を隔てゝも、[illegible]の思をなす、[illegible]人の運命こそ果敢なけれ。横笛が胸の裏こそ、中々に口にも筆にも盡されね。

飛鳥川の明日をも待たで、變る間も無き、移り變る世の淵瀬に、百千代を貫きて變らぬものあらば、そは人の情にこそあるなれ。女子の命は只一の戀、あらゆる此世の寶、[illegible]、さては優にやさしき月花の哀、何れ戀ならぬは無し、

胸に燃ゆる情の焰は、他を燒かざれば其身を焚かむ、まゝならぬ戀路に世を喞ちて、秋ならぬ風に散りゆく露の命葉、或は墨染の衣に有漏の身を裹む、さては淵川に身を棄つる、何れか戀の炎に其躯を燒き盡して、殘る冷灰の哀に非ざらむや。女子の性の斯く情深きに、いかで横笛のみ獨無情かるべきぞ。

人知らぬ思に秋の夜半を泣きくらす、横笛が心を詢ぬれば、次の如くなりしなり。

想ひ廻せば、はや半歳の昔となりぬ。西八條の屋方に花見の宴ありし時、人の勸に默し難く、舞ひ終る一曲の春鶯囀に、數ならぬ身の端なくも人に知らるゝ身となりては、御室の郷に靜けき春秋を娛みし身の心惑はるゝ事のみ多かり。見も知らぬ人々の人傳に送る薄色の折紙に、我を寄名の哀歌數々。都慣れぬ身には只胸のみ騷かれて、何と答へむ術だに知らず、其儘心なく打過ぐる程に雲井の月の懸橋絕えしと思ひてや、心を寄する者も漸く少くなりて、終に殘らず文をはこぶは只二人のみぞ殘りける。一人は齋藤瀧口にして、他の一人は足助二郎なり。横笛今は稍々浮世に慣れて、風にも露にも、餘所ならぬ思忍ばれ、墨染の夕の空に只一人、連れ去る雁の行方消ゆるまで見送りて、思はず太息吐く事も多かりけり。二人の文を見るに付け、何れ劣らぬ情の濃かさに、心迷ひて一つ身の何れを夫とも別ち兼ね、其とは無しに人の噂に耳を傾くれば、或は瀧口が武勇人に勝れしを譽むるも有れば、或は二郎が容姿の優しきを稱ふるも有り。共に小松殿の御内にて世にも知られし屈指の名士。横笛愈々心惑ひて、人の哀を二重に包みながら、浮世の義理の柵に何方へも一言の應へだにせず、無情と見む人の恨を思ひやれば、身の心苦しきも數ならず、夜半の夢屢々驚きて、淚に浮くばかりなる枕邊に、燻籠の匂のみ薫やかなるぞ憐なる。

或日のこと、瀧口時頼が發心せしこと、誰言ふとなく大奥に傳はりて、さなきだに口善惡なき女房共、寄ると觸ると瀧口が噂に、横笛[illegible]く[illegible]を抑へて、[illegible]ながら樣子を聞けば、情なき戀路に世を果敢なみての業と言ひ囃すに、人の手前も打忘れ、覺えず「そは誠か」と力を入れて尋ぬれば、女房共、「罪造りの横笛殿、可惜見士を木の端とせし」と人の哀を面白げなる高笑に、是はとばかり、早速のいらへもせず、ツと己が部屋に走り歸りて、終日夜もすがら、泣き暮し泣き明しぬ。

## 第十七

「罪造りの横笛殿、あたら武士に世を捨てさせし」。あゝ半ば戯に、半ば法界悋氣の此の一語、横笛が耳には如何に響きしぞ。戀に望を失ひて浮世を捨てし男女の事、昔の物語に見し時は世に痛はしき事に覺えて、草色の袂に露の哀を置きし事ありしが、猶現ならぬ空事とのみ思ひきや、今や眼前かゝる悲に遇はむとは。而かも世を捨てし其人は命を懸けて己を戀ひし瀧口時頼、世を捨てさせし其人は可愛とは思ひながらも世の關守に隔てられて無情しと見せたる己、横笛ならむとは。餘の事に[illegible]の[illegible]も出でず、夢幻の思して身を小机に打伏せば、「可惜武士に世を捨てさせし」と怨むが如く、嘲るが如く、何處よりともなく我耳にひゞきて、其度每に總身宛然水を浴びし如く、心も空に凍らむばかり、襟を傳ふ淚の雫のみさすが哀を隱し得ず。

擾亂れたる心、稍う我に歸りて、熟々思へば、世を捨つるとは輕々しき事に非ず。瀧口殿は六波羅上下に名を知られたる屈指の武士、希望に滿てる春秋長き行末を二十幾年の男盛に斷りて、樂しき此世を外に身を佛門に歸し給ひ、

世にも憐の事にこそ、數多の人に優りて、君の御覺殊に愛たく一族の譽を雙の肩に擔うて、家には其子を杖なる年老いたる親御もありと聞く。他日にも數あるまじき君父の恩義、惜氣もなく振捨てゝ、人の譏り、世の笑を思ひ給はで、弓矢とる御身に瑜伽三密の嗜は、世の無常を如何に深く觀じ給ひけるぞ。あゝ是れ皆此身、此横笛の爲せし業、刃こそ當てね、可惜武士を手に掛けしも同じ事、——思へば思ふほど、乙女心の胸塞りて泣くより外にせむ術も無し。

吁々、協はずば世を捨てむまで、我を思ひくれし人の情の程こそ中々に有り難けれ。儘ならぬ世の義理に心ならずとは言ひながら、斯る誠ある人に只一言の返事だにせざりし我こそ今更に悔しくも亦罪深けれ。手筐の底に秘め置きし瀧口が送りし文、涙ながらに取出して、心遣りにも繰返せば、先には斯くまでとも思はざりしに、今の心に讀みもて行く一字毎に腸も千切るゝばかり。百夜の榻の端がきに今ぞ我も數書くまじ、只つれなき浮世と諦めても、命ある身のさすがに露とも消えやらず、我思ふ人の忘れ難きを如何にせむ、——など書き聯ねたるさへあるに、よしや墨染の衣に我哀をかくすとも、心なき君には上の空とも見えむ事の口惜しさ、など硯の水に泪落ちてか、薄墨の文字定かならず、つら〳〵數ならぬ賤しき我身に引較べ、彼を思ひ此を思へば、横笛が胸の苦しさは譬へむに物もなし。世を捨てむ迄に我を思ひ給ひし瀧口殿が誠の情と並ぶれば、重景が戀路は物ならず。況して日頃より文傳へする冷泉が、ともすれば瀧口殿を惡し樣に言ひなせしは、我を誘はむ腹黑き人の計略ならむも知れず、——斯く思ひ來れば、重景の何となう疎ましくなるに引換へて、瀧口を憐むの情愈々切にして、世を捨て給ひしも我故と、思ふ心の身にひし〳〵と當りて立ちても坐りても居堪らず、窓打つ落葉のひゞきも、蟲の音も我を咎むる心地して、繰擴けし文の文字は宛然我を睨むが如く見ゆるに、目を閉ぢ耳を塞ぎて机の側に伏し轉べば、「あたら武士を汝故に」といづこともなく囁く聲、心の耳に聞えて、胸は刃に割かるゝ思ひ。あはれ横笛、一夜を惱み明して、朝日影窓に眩き頃、ふら〳〵と縁前に出れば、憎や、檐端に歌ふ鳥の聲さへ、己が心の迷から、「汝ゆゑ〳〵」と聞ゆるに、覺えず顏を反けて、あゝと溜息つけば、驚きて起つ群雀、行方も知らず飛び散りたる跡には、秋の朝風音寂しく、殘んの月影夢の如く淡し。

## 第十八

女子こそ世に優しきものなれ。戀路は六つに變れども、思はいづれ一つ魂に寄る眞の影とかや。つれなしと見つる浮世に長生して、朝顏の夕を俟たぬ身に百年の末懸けて、興味なき朝夕を過すも胸に包める情の露あればなり。戀か、あらぬか、女子の命はそも何に喩ふべき。人知らぬ思に心を傷りて、あはれ一山風に跡もなき、東岱前後の烟と立昇る、うら若き眉目好き處女子は、年毎に幾何ありとするぞ。世の隨意ならぬは是非もなし、只いさゝ川、底の流の通ひもあらで、人はいさ、我にも語らで、世を果敢なむこそ浮世なれ。

然れば横笛、我故に武士一人に世を捨てさせしと思へば乙女心の一徹に思返さむ術もなく、此朝夕は只泣暮せども、影ならぬ身の失せもやらず、せめて嵯峨の奥にありと聞く瀧口が庵室に訪れて我誠の心を打明さばやと、さかしくも思決めつ、誰彼時に紛れて只一人、うかれ出でけるこそ殊勝なれ。

頃はながつきの中旬すぎ、入日の影は雲にのみ殘りて野も山も薄墨を流せしが如く、月未だ上らざれば、星影さへも最と稀なり、袂に寒き

愛宕下しに秋の哀は一入深く、まだ露下りぬ野面に、我袖のみぞ早や沾ひける。右近の馬場を右手に見て、何れ昔は花園の里、霜枯れし野草を心ある身に踏み摧きて、太秦わたり迦り行けば、峰岡寺の五輪の塔、夕の空に形のみ見ゆ。やがて月は上りて桂の川の水烟、山の端白く閉罩めて、尋ぬる方は朧にして見え分かず。素より慣れぬ徒歩なれば、數たび或は里の子が落穂拾はむ畔路にさすらひ、或は露に伏す鶉の床の草村に立迷うて、絲より細き蟲の音に、覺束なき行末を喞てども、問ふに聲なき影ばかり。名も懷しき梅津の里を過ぎ、大堰川の邊を沿ひ行けば、河風寒く身に染みて、月影さへもわびしげなり。裾は露、袖は涙に打蕭れつゝ、霞める眼に見渡せば、嵯峨野も何時しか奥になりて、小倉山の峯の紅葉、月に黒みて、釋迦堂の山門木立の間に鮮なり。噂に聞きしは嵯峨の奥とのみ、何れの院とも坊とも知らざれば、何を便に尋ぬべき、燈の光を的に、數も無き在家を彼方此方に彷徨ひて問ひけれども、絶えて知る者なきに、愈々心惑ひて只茫然と野中に佇みける。折から向うより庵僧とも覺しき一個の僧の通りかゝれるに、横笛渡に舟の思して、「慮外ながら此わたりの庵に近き頃樣を變へて都より來られし俗名齋藤時頼と名告る年壯き武士のお在さずや」。聲震はして尋ぬれば、件の僧は横笛が姿を見て暫し首傾けしが、「露しげき野を女性の唯一人、さても〳〵痛はしき御事や。げに然る人ありとこそ聞きつれど、まだ其人に遇はざれば、御身が尋ぬる人なりや、否やを知り難し」。「して其人は何處にお在する」。「そは此處より程遠からぬ往生院と名くる古き僧庵に」。

僧は最と懇に道を教ふれば、横笛世に嬉しく思ひ、禮もいそ〳〵別れ行く後影、鄙には見なれぬ緋の袴に、夜目にも輝く五柳の一重、件の僧は暫したゝずみて訝しげに見送れば、焚きこめし異香、吹き來る風に時ならぬ春を匂はするに、彼に忌はしげに顔背けて小走りに立去りぬ。

## 第十九

斯くて横笛は教へられしまゝに迦り行けば、月の光に影暗き、杜の繁みを徹して微に燈の光見ゆるは、げに古りし庵室と覺しく、隣家とても有らざれば、闃として死せるが如き夜陰の静けさに、振鈴の響さやかに聞ゆるは、若しや尋ぬる其人かと思へば、思設けし事ながら、胸轟きて急ぎし足も思はず緩みぬ。思へば現とも覺えで此處までは來りしものゝ、何と言うて世を隔てたる門を敲かむ、我眞の心をば如何なる言葉もて打明けむ、うら若き女子の身にて世を忍びて來つるをば、蓮葉の者と卑下み給はむ事もあらば如何にすべき。將また、千束の文に一言も返さざりし我無情を恨み給はむ時、いかに應へすべき、など思ひ惑ひ、恥しさも催されて、御所を拔出でし時の心の雄々しさ、今更怪まるゝばかりなり。斯くて果つべきに非ざれば、辛く我と我身に思決め、ふと首を擧ぐれば、振鈴の響耳に迫りて、身は何時しか庵室の前に立ちぬ、月の光にすかし見れば、半は頽れし門の廂に、蝕みたる一面の古額、文字は危げに往生院と讀まれたり。

横笛門邊を打見やれば、八重葎茂りて門を閉ぢ、拂はぬ庭に落葉積りて、秋風吹きし跡もなし。松の袖垣隙あらはなるに、葉は枯れて蔓のみ殘れる蔦生えかゝりて、古き梢の夕嵐、軒もる月の影ならでは訪ふ人も無く、荒れ果てたり。簷は朽ち柱は傾き、誰棲みぬらむと見るも物憂げなる宿の態。扨も世を無常と觀じては斯る侘しき住居も、大廈高樓の築に換へらるゝものよと思へば、主の貴さも彌增して、今宵の我身やゝ愧しく、覺ゆ。庭の松が枝に懸したる、風暗き燈籠の光に齋藤を照させて、獅子一

重の内には振鈴の聲、怠かず、緩まず、四曼不離の夜毎の行業に慣れそめてか、鈴の聲の駭かむ樣も見えず。横笛今は心を定め、ほと〳〵と門を音づるれども答なし。玉を延べたらむ如き纖腕、痛るゝばかりに打敲けども應せむ氣はひも見えず。實に佛者は行の半には王侯の召にも應ぜずとかや、我ながら心なかりしと、暫し門下に佇みて、鈴の音の絕えしを待ちて復び門を敲けば、内には主の聲として、「世を隔てたる此庵に夜陰に訪はるゝ覺無し、恐らく門違にても候はむか」。横笛潛めし聲に力を入れて、「大方ならぬ由あればこそ夜陰に御業を驚し參らせしなれ。庵は往生院と聞ゆれば、主の御身は、小松殿の御内なる齋藤瀧口殿にてはお在さずや」。「如何にも某が世に在りし時の名は齋藤瀧口にて候ひしが、そを尋ねらるゝ御身はそも何人」。「妾こそは中宮の御所の曹司、横笛と申すもの、隨意ならぬ世の義理に隔てられ、世にも厚き御情に心にも無き情なき事の數々、只今の御身の上と聞き侍りては、悲しさ苦さ、女子の狹き胸一つには納め得ず、知られで永く已みなむこと口惜しく、一つには妾が眞の心を打明け、且は御身の恨の程を承はらむ爲に茲まで迷ひ來りしなれ。こゝ開け給へ、瀧口殿」。言ふと其儘、門の扉に身を寄せて聲を潛びて泣き居たり。

瀧口はしばらく應せず、やゝありて、「如何に女性、我れ世に在りし時は、御所に然る人あるを知りし事ありしが、我知れる其人は我を知らざる筈なり、されば今宵我を訪れ給へる御身は我知れる横笛にてはよもあらじ。良しや其人なりとても、此世の中に心は死して、殘る體は空蟬の我、我に恨あればとてそを言ふの要もなく、よし又人に誠あらばとて、そを聞かむ願もなし。一切諸緣に離れたる身、今更返らぬ世の浮事を語り出でゝ何かせむ。聞き給へや、女性、何事も過ぎにし事は夢なれば、我に恨ありとな思ひ給ひそ。己に情なき者の善智識となれる例世に少からず、誠の道に入りし身のそを恨みむ謂れやある。されば遇うて益なき今宵の我、唯何事も言はず、此儘歸り給へ。二言とは申すまじきぞ、聞き分け給ひしか、横笛殿」。

## 第二十

因果の中に哀を含みし言葉のふし〴〵、横笛が悲しさは百千の恨を聞くよりもまさり、「其の御語、いかで仇に聞侍るべき、只親にも許さぬ胸の中、女子の恥をも顧みず、聞え參らせむずるとば、聞かむ願なしと仰せらるゝこそ恨なれ。情なかりし昔の報とならば、此身を千々に刻まるゝとも露厭はぬに、悲び仇を情の御言葉は、心狹き妾に恥ぢて死ねとの御事か。無情かりし妾をこそ憎め、可惜武士を世の外にして、樣を變へ給ふことの恨めしくも詫はしけれ。茲開け給へ、思ひ詰めし一念、聞き給はずとも言はでは已まじ。喃瀧口殿、こゝ開け給へ、情なきのみが佛者かは」。

喃々と門を叩きて、今や開くると待佗ぶれども、内には寂然として聲なし。やゝありて人の立居する音の聞ゆるに、嬉しやと思ひきや、振鈴の響起りて、りん〳〵と鳴渡るに、是はと駭く横笛が呼べども叩べども答ふるものは鄰の木立のみ。

月稍西に傾きて、草葉に置ける露白く、桂川の水音幽に聞えて、秋の夜寒に立つ鳥もなき眞夜中頃、往生院の門下に蟲と共に泣き暮したる横笛、哀れや、紅花綠葉の衣裳、涙と露に絞るばかりになりて、濡れし袂に裹みかねたる恨のかず〳〵は、そも何處までも浮世ぞや。我から踏める己が影も、萎るゝ如く思ほえて、情なき人に較べては月こそ中々に哀深けれ。横笛、今はとて、涙に曇る聲張上げて、「喃、瀧口殿、葉

末の露とも消えずして今まで立ちつくせるも、妾が赤心打明けて、許すとの御身が一言聞かむが爲、夢と見給ふ昔ならば、情なかりし横笛とは思ひ給はざるべきに、など斯くは慈悲なくあしらひ給ふぞ、今宵ならでは世を換へても相見むことの有りとも覺えぬに、喃、瀧口殿」。

春の花を欺く姿、秋の野風に暴して、恨みわびたる其樣は、如何なる大道心者にても、心動かむ計りなるに、峰の嵐に埋れて嘆の聲の聞えぬにや、鈴の音は調子少しも亂れず、行ひすましたる瀧口が心、飜るべくも見えざりけり。

何とせむ術もあらざれば、横笛は泣く〳〵元來し路を歸り行きぬ。氷の如く澄める月影に道芝の露つらしと拂ひながら、ゆりかけし丈なる髮、優に波打たせながら、畫にある如き乙女の歩姿は、葛飾の眞間の手古奈が昔忍ばれて、斯くもあるべしや。あはれ横笛、乙女心の今更に、命に賭けて思ひ決めしこと空となりては、歸り路に足進まず、我やかたき、人や無情き、嵯峨の奧にも秋風吹けば、いづれ浮世には漏れざりけり。

## 第二十一

胸中[illegible]、住[illegible]十分淸淨、人生最も苦しき處、只是れ此心。然ればにや失意の情に世をあぢきなく觀じて、嵯峨の奧に身を捨てたる齋藤時頼、瀧口入道と法の名に浮世の名殘を留むれども、心は生死の境を越えて、瑜伽三密の行の外、月にも露にも唱ふべき哀は見えず、荷葉の三衣、秋の霜に堪難けれども、一枚一鉢に淸捨を求むるの外、他に望なし。實にや輪王位高けれども七寶終に身に添はず、雨露を凌がぬ檐の下にも圓頓の花は匂ふべく、眞如の月は照すべし。旦に稽古の窓に凭れば、垣を掠めて靡く霧は不斷の烟、夕に鑽仰の嶺を攀づれば、壁を漏れて照る月は常住の燭。晝は御室、太秦、梅津の邊を巡錫して、夜に入れば、十字の繩床に結跏趺坐して唵阿の行業に夜の白むを知らず。されば僧坊に入りてより未だ幾日も過ぎざるに、苦行難業に色黑み、骨立ち、一目にては十題判斷の老登料とも見えつべし。あはれ、厚塗の立烏帽子に鬢を撫上げし昔の姿、今安くにある。今年二十三の壯年とは如何にしても見えざりけり。

顧みれば瀧口、性質にもあらで形容邊幅に心を惱めたりしも戀の爲なりき。仁王とも組まむず六尺の丈夫、[illegible]のみか、心さへ衰へて、めめしき哀に弓矢の恥を忘れしも戀の爲なりき。思へば戀てふ惡魔に骨髓深く魅入られし身は、戀と共に浮世に斃れむか、將戀と共に世を捨てむか、擇ぶべき途、只此二つありしのみ。時頼世を無常と觀じては、何恨むべき物ありとも覺えず、武士を去り、弓矢を捨て、君に離れ、親を辭し、一切衆緣を擧げ盡して戀てふ惡魔の犧牲に供へ、跡に殘るは天地の間に生れ出でしまゝの我身、瀧口時頼、命と共に受繼ぎし濶達の氣風再び爛漫と咲出でゝ、容こそ變れ、性質は戀せぬ前の瀧口に少しも違はず。名利の外に身を處けば、自ら嫉妬の念も起らず、憎惡の情も萌さず、山も川も木も草も、愛らしき垂髫も、醜き老婆も、我に惠む者も我を賤しむ者も、我には等しく可愛らしく覺えぬ。げに一視平等の佛眼には四海兄弟と見えしとかや。病めるものは之を慰め、貧しき者は之に分ち、心曲りて郷里の害を爲す者には、因果應報の道理を諭し、凡て人の爲、世の爲に益あることは躊躇ふことなく爲し、絕えて彼此の差別なし。然れば瀧口が錫杖の到る所、其風を慕ひ其德を仰がざるはなかりけり。或時は里の子供等を集めて、昔の剛者の物語など、面白く言ひ聞かせ、喜び[illegible]む無邪氣なる者の樣を見て呵々と打[illegible]、

二十三の瀧口、何日の間に習ひ覺えしか、さながら老翁の孫女を弄ぶが如し。

斯くて風月ならで訪ふ人も無き嵯峨の奥に、世を隔てゝ安らけき朝夕を娛み居しに、世に在りし時は弓矢の譽も打捨てゝ、狂ひ死に死なむまで焦れし横笛、親にも主にも振りかへて戀の奴となりしまで慕ひし横笛、世を捨て樣を變へざれば、吾から懸けし戀の絆を解く由も無かりし横笛、其横笛の音づれ來りしこそ意外なれ。然れども瀧口、口にくはへし松が枝の小搖ぎも見せず、見事振鈴の響に耳を澄して、含識の流さすがに濁らず、思へば悟道の末も賴もしく、風白む窓に、傾く月を麾きて、冷に打笑める顏は天晴大道心者に成りすましたり。

* * * *

さるにても横笛は如何になしつるや、往生院の門下に一夜を立明して曉近く御所に還り、後の二三日は何事も無く暮せしが、間もなく行方知れずなりて、其部屋の壁には日頃手慣れし古桐の琴、主待ちげに見ゆるのみ。

## 第二十二

或日、天長閑に晴れ渡り衣を返す風寒からず、秋蟬の翼暖む小春の空に、瀧口すゞろに心浮かれ常には行かぬ桂、烏羽わたり逍遙して、嵯峨とは都を隔てゝ南北、深草の邊に來りける。此あたりは山近く林密にして、立田の姫が織り成せる木々の錦、二月の花よりも紅にして、匂あらましかばと惜まるゝ美しさ、得も言はれず、薪採る翁、牛ひく童、餘念無く歌ふ節、餘所に聞くだに樂しげなり。瀧口行々四方の景色を打眺め、稍疲を覺えたれば、とある路傍の民家に腰打掛けて、暫く休らひぬ。主婦は六十餘とも覺しき老婆なり、一椀の白湯を乞ひて喉を濕し、何くれとなき浮世話の末、瀧口、「愚僧が庵は嵯峨の奥にあれば、此わたりには今日が初めて。何處にも土地珍しき話一つはある物ぞ、何れ名にし負はゞ、哀も一入深草の里と覺ゆるに、話して聞かせずや」。老女は笑ひながら、「かゝる片邊なる鄙には何珍しき事とては無けれども、其の哀に一つ思ひ出せし、世にも哀なる一つの話あり。問ひ給ひしが因果、事長くとも聞き給へ。御身の茲に來られし途すがら、溪川の有る邊より、山の方にわびしげなる一棟の僧庵を見給ひしならん。其庵の側に一つの小やかなる新塚あり、主が名は言はで此の里人は只戀塚々々と呼びなせり。此の戀塚の謂に就きて最も哀なる物語の候なり」。「戀塚とは餘所ならず床しき思ひ、聞けば以前の我も戀塚の主に半はなりし事もあれば、[illegible]日は呵々と打笑へば、老女は打消し、[illegible]とでなし。此月の[illegible]頃なりしか、[illegible]上﨟の如何なる故ありてか、[illegible]りたりと想ひ給へ。花ならば蕾、月ならば新月、いづれ末は玉の輿にも乘るべき人が、品もあらむに世を外なる尼法師に樣を變へたるは、[illegible]ふ夫に別れてか、情なき人を思うてか、何の道、戀故ならむとの噂。薪とる里人の話によれば、庵の中には玉を轉ばす如き柔しき聲して、讀經の響絶ゆる時なく、折々閼伽の水汲みに、谷川に下りし姿見たる人は、天人の羽衣脫ぎて袈裟懸けしとて、斯くまで美しからじなど罵り合へりし。心なき里人も世に痛はしく思ひて、色々の物など送りて慰むる中、かの上﨟は思重りてや、病みつきて程も經ず歸らぬ人となりぬ。言ひ殘せし片言だに無ければ、誰も尼になるまでの事の由を知らず、里の人々相集りて涙と共に庵室の側に心ばかりの埋葬を營みて卒塔婆一基の主とはせしが、誰言ふとなく戀塚々々と呼びなしぬ。來慣れぬ此里に偶々來て此話を聞かれしも他生の因緣と覺ゆれば、歸途には必らず立寄りて一片の回向をせられよ。いかに

哀なる話に候はずや」。老婆は語し了りて、燃えぬ薪の烟に咽びて、涙押拭ひぬ。

瀧口もやゝ哀を催して、「そは氣の毒なる事なり、其上﨟は何處の如何なる人なりしぞ」。「ナニ人の噂に聞けば、御所の曹司なりとかや」。「ナニ曹司とや、其名は聞き知らずや」。「然れば、最とやさしき名と覺えしが、何とやら、——おゝそれ慥に横笛とやら言ひし。嵯峨の奥に戀人の住めると人の話なれども、定かに知る由も無し。聞けば御僧の坊も同じ嵯峨なれば、若し心當の人もあらば、此事傳へられよ。同じ世に在りながら、斯る婉やかなる上﨟の樣を變へ、思ひ死するまでに情なかりし男こそ、世に罪深き人なれ。他し人の事ながら誠なき男見れば取りも殺したく思はるゝよ」。餘所の恨を身に受けて、他とは思はぬ吾が哀、老いても女子は流石にやさし、瀧口が樣見れば、先の快げなる氣色に引きかへて首を垂れて物思の體なりしが、やゝありて、「あゝ餘に哀なる物語に、法體にも恥ぢず、思はず落涙に及びたり。主婦が言に從ひ、愚僧は之より其無縁とやらに立寄りて、暫し回向の杖を停めむ」。

網代の笠に夕日を負うて立去る瀧口入道が後姿、頭陀の袋に麻衣、鐵鉢を掌に捧げて、八つ目のわらんづ踏みにじる、形は枯木の如くなれども、息ある間は血も有り涙もあり。

## 第二十三

深草の里に老婆が物語、聞けば他事ならず、いつしか身に振りかゝる哀の露、泡沫夢幻と悟りても、今更驚かれぬる世の起伏かな。樣を變へしとはそも何を觀じての發心ぞや、戀に死せしとはそも誰にかけたる恨ぞ。あゝ横笛、吾れ人共に誠の道に入りし上は、影よりも淡き昔の事は問ひもせじ、語りもせじ、閼伽の水汲み絶えて流に宿す影止らず、看經の音已みて梢にとまる響無し。いづれ業繋の身の、心と違ふ事のみぞ多かる世に夢中に夢を喞ちて我れ何にかせむ。

瀧口入道、横笛が墓に來て見れば、墓とは名のみ、小高く盛りし土饅頭の上に一片の卒塔婆を立てしのみ。里人の手向けしにや、半枯れし野菊の花の仆れあるも哀なり。四邊は斷草離々として跡を覓くべき道ありとも覺えず、荒れすさぶ夜々の嵐に、ある程の木々の葉吹落されて、山は面瘦せ、森は骨立ちて目もあてられぬ悲慘の風景、聞きしに増りて哀なり。あゝ是ぞ横笛が最後の住家よと思へば流石の瀧口入道も法衣の袖を絞りあへず。世にありし時は花の如き艶やかなる乙女なりしが、一旦無常の嵐に誘はれては、いづれ遁れぬ古墳一基の主かや。そが初めの内こそ憐と思ひて香花を手向くる人もあれ、やがて星移り歳經れば、冷え行く人の情に隨れて、顧る人も無く、あはれ何れをそれと知る由もなく荒れ果てなむず。思へば果敢なの吾れ人が運命や。都大路に世の榮華を嘗め盡すも、賤が伏屋に唯の落穗を拾ふも、暮すは同じ五十年の夢の朝夕。妻子珍寶及王位、命終る時に隨ふものはなく、野邊より那方の友とては、血脈一つに珠數一聯のみ。之を想へば世に悲むべきものも無し。

瀧口衣の袖を打はらひ墓に向つて合掌して言へらく、「形骸は良しや冷土の中に埋れても、魂は定かに六尺の上に聞しめされむ。そもや、御身と我れ、時を同じうして此世に生れしは過世何の因、何の果ありてか、同じ思を身に擔ひてこそを語らふ折もなく、世を隔て樣を異にして此悲しむべき對面あらむとは、そも又何の業、何の報ありてぞ。我は世に救を得て、御身は憂きに心を傷りぬ。思へば三界の火宅を逃れて、聞くも嬉しき眞の道に入りし御身の、欣求淨土の一念に浮世の絆を斷ち得ざりしこそ恨なれ。戀と

は言はず、情とも云はず、遇ふや柳因、別るゝや絮果、いづれ迷は同じ流轉の世事、今は言ふべきこと有りとも覺えず。只此上は夜毎の松風に御魂を澄されて、未來の解脱こそ肝要なれ、仰ぎ願はくは三世十方の諸佛、愛護の御手を垂れて出離の道を得させしめ給へ。過去轉變、出離生死、證大菩提。」生ける人に向へるが如く言ひ了りて、暫し默念の眼を閉ぢぬ。花の本の半日の客、月の前の一夜の友も、名殘は惜まるゝ習なるに、一向所感の身なれば、先の世の法縁も淺からず思はれ、流石の瀧口、限無き感慨胸に溢れて、轉た今昔の情に堪へず。今かゝる哀を見むことは、神ならぬ身の知る由もなく、嵯峨の奥に夜半かけて、迷ひ來りし時は、我情なくも門をば開けざりき。恥をも名をも思ふ遑なく、様を變へ身を殺す迄の哀の深さを思へば、我こそ中々に罪深かりけれ。あゝ横笛、花の如き姿今いづこに在る。菩提樹の蔭明星額を照す邊、耆闍窟の中香烟肘を繞るの前、昔の夢を空と見て猶我ありしことを思へるや否。逢ひ見しとにはあらなくに、別れ路つらく覺ゆることの我ながら訝しさよ。思ひ胸に迫りて、呼々と吐く太息に堪えず我に還りて首を擧ぐれば日は半西山に入りて、峰の松影色黑み、落葉を誘ふ谷の嵐、夕ぐれ寒く身に浸みて、ばら〳〵と襟打つものは、露か時雨か。

## 第二十四

其年の秋の暮つかた、小松の内大臣重盛、豫ての所勞重らせ給ひ、御年四十三にて薨去あり。一門の人々、恩顧の侍は言ふも更なり、都も鄙もおしなべて、悼み惜まざるはなく、町家は商を休み、農夫は業を廢して哀號の聲到る處に充ちぬ。入道相國が非道の擧動に御恨を含みて時の亂を願はせ給ふ法住寺殿の院と、二代の無念を呑みて只すら時運の熟するを待てる源氏の殘黨のみ、内府が遠逝を喜べりとぞ聞えし。

士は己を知れる者の爲に死せむことを願ふとかや。今こそ法體なれ、ありし昔の瀧口が、此君の御爲ならばと誓ひしは天が下に小松殿只一人、父祖十代の御恩を集めて此君一人に報し參らせばやと、風の旦、雪の夕、蛭卷のつかの間も忘るゝ隙も無かりしが、思ひもかけぬ世の波風に、身は嵯峨の奥に吹き寄せられて、二十年來の志も皆空事となりにける。世に望なき身ながらも、我から好める斯る身の上に君の思召の如何あらむと、折々思出されては流石に心苦しく、只長き對面に、變なき衷情こそ賴みしのみ。小松殿逝去と聞きては[illegible]袂はず、御名殘今更に惜まれて、其日は一日庵に閉籠りて、内府が平生など思出で、回向三昧に餘念なく、夜に入りては讀經の聲いと蕭やかなりし。

先には横笛、深草の里に果をとゞめ、今は小松殿、盛年の御身に世をかへ給ふ。彼を思ひ是を思ふに、身一つに降りかゝる憂き事の露しげき今日此ごろ、瀧口三衣の袖を絞りかね、法體の今更遣瀬なきぞいぢらしき。實にや縁に從つて一念頓に自理を悟れども、曠劫の習氣は一朝一夕に淨むるに由なし。變相殊體に身を困めて、有無流轉と觀じても、猶此世の悲哀に離れ得ざるぞ是非も無き。

德を以て將人を以て、柱とも礎とも賴まれし小松殿、世を去り給ひしより、誰言ひ合はねども、心有る者の心にかゝるは、同じく平家の行末なり。四方の波風靜にして、世は盛とこそは見ゆれども、入道相國が多年の非道によりて、天下の望已に離れて敗亡の兆はや萌してぞ見えし。今にも蛭が小島の頼朝にても、筑波おろしに旗揚けむには、源氏譜代の恩顧の士は言はずもあれ、苟も志を當代に得ず、

怨を平家に銜める者、響の如く應じて、關八州は日ならず平家の有に非ざらむ。萬一斯る事あらむには、大納言殿（宗盛）は兒の内府にも似ず、柔弱の性質なれば、素より物の用に立つべくもあらず、御子三位中將殿（維盛）は歌道より外に何長じたる事無き御身なれば、紫宸殿の階下に源家の嫡流と相挑みし父の卿の勇膽ありとしも覺えず、頭の中將殿（重衡）も管絃の奏こそ巧なれ、千軍萬馬の間に立ちて采配とらむ器に非ず、只數多き公卿殿上人の中にて、知盛、敎經の二人こそ天晴未來事ある時の大將軍と覺ゆれども、これとても螺鈿の細太刀に風雅を誇る、六波羅上下の武士を如何にするを得べき。中には越中次郎兵衛盛次、上總五郎兵衛忠光、惡七兵衛景清なんど、名たゝる剛の者なきにあらねど、言はゞ之れ匹夫の勇にして大勢に於て元より益する所なし。思へば風前の燈に似たる平家の運命かな。一門上下花に醉ひ、月に興じ、明日にも覺めなむず榮華の夢に、萬代かけて行末祝ふ、武運の程ぞ淺ましや。

入道ならぬ元の瀧口は平家の武士、忍辱の袈裟も主家興亡の夢に襲はれては今にも甚麼の堅甲となりかねまじき風情なり。

# 第二十五

其年も事無く暮れて、明くれば治承四年、淨海が暴虐は猶已まず。殿とは名のみ、蛛手結ひこめぬばかりの鳥羽殿には去年より法皇を押籠め奉るさへあるに、明君の聞え高き主上をば、何の恙もお在さぬに、是非なくおろし參らせ、清盛の女が腹に生れし春宮の今年僅に三歳なるに御位を讓らせ給ふ。あはれ聞きも及ばぬ奇怪の讓位かなとおもはぬ人ぞ無かりける。一秋毎に細りゆく民の竈に立つ烟、それさへ恨と共に高くは上らず。野邊の草木にのみ春は歸れども、世はおしなべて秋の暮、枯枝のみぞ多かりける。元より民の疾苦を顧みるの入道ならねば、野に立てる怨聲を何處の風とも氣にかけず、或は嚴島行幸に一門の榮華を傾け盡し、或は新都の經營に近畿の人心を騷がせて少しも意に介せず。世を恨み義にいきみて源三位、數も無き白旗、殊勝にも宇治川の朝風に飜せしが、脆くも破れて空しく一族の血汐を平等院の夏草に染めたりしは、諸國源氏が旗揚の先陣ならむとは、平家の人々いかで知るべき。高倉の宮の宣旨、木曾の北、關の東に普く渡りて、源氏興復の氣運漸く迫れる頃、入道は上下萬民の望に背き、愈々都を攝津の福原に遷し、天下の亂、國土の騷を露顧みざるは、抑も之れ滅亡を速むるの天意か。平家の末はいよ〳〵遠からじと見えにけり。

右兵衛佐（頼朝）が旗揚に草木と共に靡きし關八州、心ある者は今更とも思はぬに、大場三郎が早馬きゝて、夢かと驚きし平家の殿原こそ不覺なれ。討手の大將、三位中將維盛卿、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧は天晴平門公子の容儀に風雅の銘を打つたれども、富士河の水鳥に立つ足もなき十萬騎は、關東武士の笑のみに非ず。前の非を悟りて舊都に歸り、さては奈良炎上の無道に佛怒を濫せども、源氏の勢は日に加はるばかり、覺束なき行末を夢に見て其年も打過ぎつ。治承五年の春を迎ふれば、世は愈々亂れ、都に程なき信濃には、木曾の次郎が兵を起して、兵衛佐と相應じて其勢破竹の如し。倚伏の際、老いても一門の支柱となれる入道相國は、折惡しき病に死し、一門狼狽して爲す所を知らず。墨俣の戰に少しく會稽の恥を雪ぎたれども、新中納言知盛軍旗を失して必勝の機を外し、木曾の冠者と挑みし城の四郎が北陸の勇を驅りし四萬餘騎、餘五將軍の遺武を負ひながら、横田河原の一戰に、脆くも

敗れしに驚きて、今はとて平家最後の力を盡くして北國に打向ひし十萬餘騎、一門の存亡を賭せし倶利伽羅、篠原の二戰に、哀れや殘り少なに打なされ、背甲押へて、すご／＼都に歸り來りし、打崩されし見苦しさ。木曾は愈々勢に乘りて、明日にも都に押寄せむず風評、平家の人々は、今は居ながら生ける心地もなく、然りとて敵に向って死する力もなし。木曾をだに支へ得ざるに、關東の頼朝來らば如何にすべき、或は都を枕にして討死すべしと言へば、或は西海に走りて再擧を謀るべしと說き、一門の評議まち／＼にして定らず。前には邦家の急に當りながら、後には人心の趣く所一ならず、何れ變らぬ亡國の末路なりけり。

平和の時こそ、供花燒香に智を競ひして、利益平等の世とも感ぜめ、祖先十代と己が半生の歷史とを積みたる平家の運命日に非なるを見ては、眼を遮ぶる雲靄とは瀧口いかで看過するを得む。人の噂に味方の敗北を聞く毎に、無念さ、もどかしさに堪へ得ず、雙の腕を扼して、法體の今更、變へ難きを恨むのみ。

或日瀧口閼伽の水汲まむとて、まだ明けやらぬ空に往生院を出でゝ、近き泉の方に行きしに、都六波羅わたりと覺しき方に、一道の火焰天を焦して立上れり。そよとだに風なき夏の曉に、遠く望めば只朝紅とも見ゆべかんめり。風靜なるに六波羅わたり斯る大火を見るこそ訝しけれ、いづれ何事ならむと思へば何となく心元なく、水汲みて急ぎ坊に歸り、一杖一鉢、常の如く都をさして出で行きぬ。

## 第二十六

瀧口入道都に來て見れば、思の外なる大火にて、六波羅池殿西八條の邊より、京白川四五萬の在家、方に煙の中にあり、洛中の民はさながら狂せるが如く、老を負ひ幼を扶けて火を避くる者、僅の家財を携へて逃ぐる者、或は雜沓の中に傷きて助を求むる者、或は連れ立ちし人に離れて路頭に迷へる者、何れも容姿を取り亂して右に走り左に馳せ、叫喚呼號の響、街衢に充ち滿ちて、修羅の巷もかくやと思はれたり。只見る幾隊の六波羅武者、蹄の音高く馳せ來りて、人波打てる大道を、容赦も無く蹴散し、指して行方は北鳥羽の方、いづこと問へど人は知らず、平家一門の邸宅、武士の宿所、殘りなく火中にあれども消し止めむとする人の影見えず。そも何事の起れるぞ、問ふ人のみ多くして、答ふる者はなし。今都の民は夢に夢見る心地して、只心安からず惶れ惑ひたり。瀧口事の由を聞かむと[illegible]、[illegible]つゝ、木曾の方に[illegible]れば、向ふより[illegible]二三人の女房、大路を北に急ぎ行くに、瀧口呼止めて事の由を問ひければ、一人の女房立止りて悲しげに、未だ聞かずや、大臣殿[illegible]思召にて、主上を始め一門殘らず西國に落ちさせ給ふぞや、もし縁の人ならば疾くより追ひかれよと、言捨てゝ忙しげに走り行く。瀧口、あッとばかりに呆れて、暫しは物も出でず、鬼の如き兩眼より淚をはら／＼と流し、恨めしげに伏見の方を打見やれば、明けゆく空に雲行のみ早し。

榮華の夢早く醒めて、沒落の悲しみ方に來りぬ。盛衰興亡はのがれ難き世の習なれば、平家に於て獨り歎くべきに非ず。只また見苦しき際に[illegible]をなして、輕々しく帝都を離れ給へる大臣殿の思召こそ心得ね、兎ても角ても叶はぬ命ならば、御所の礎を枕にして、魚山の夜嵐に屍を吹かせてこそ、散りても芳しき花の名門の末路なれ、三代の仇を重ねたる關東武士が馬蹄の跡に祖先の墳墓を蹴散させて、一門おめ／＼西海の陲に迷ひ行く、とても流さむ末の惡名はいと知らず、まのあたり百代までの恥辱なりと思はぬ

こそ是非なけれ。

瀧口はしばし無心の涙を絞りしが、せめて燒跡なりとも弔はむと、西八條の方に辿り行けば、夜半にや立ちし、早や落人の影だに見えず、昨日まではさしも美麗に建て連ねし大門高臺、一夜の煙と立昇りて、燒野原、茫々として立木に迷ふ鳥の聲のみ悲し。燒け殘りたる築垣の蔭より、彼方の跡を眺むれば、朱塗の中門のみ半殘りて、門もる人もなし。嗚呼、被官郎黨の日頃寵に誇り恩を恣にせる者、そも幾百千人の多きぞや。思はざりき主家仆れ城池亡びて、而も一騎の馳を其燒跡に留むる者無からむとは。げにや榮華は夢か幻か、高厦十年にして立てども一朝の煙にだも堪へず、昨夕玉趾珠冠に容儀を正し、參仕拜趨の人に傅かれし人、今朝長汀の波に漂ひ旅泊の月に跡枕いて、思寢に見る夢ならでは還り難き昔を慕うて益なし。有爲轉變の世の中に、只最後の潔きこそ肝要なるに、天に背き人に離れ、いづれ遁れぬ終をば、何處まで惜まるゝ一門の人々ぞ。彼を思ひ是を思ひ、瀧口は燒跡にたゝずみて、暫時感慨の涙に暮れ居たり。

稍ありて太息と共に立上り、昔ありし我屋敷を打見やれば、其邊は一面の燒野となりて、何處をそれとも見別け難し。さても我父は如何にせさせしか、一門の人々と共に落人にならせ給ひしか、御老年の此期に及びて、斯る大變を見せ參らすること、うたてき限なれ。瀧口今は誰しれる人も無き跡ながら、昔の盛忍ばれて、盡きぬ名殘に幾度か振廻りつ、持ちし錫杖重げに打鳴して、何思ひけむ、小松殿の墓所指して立去りし頃は、夜明け日も少しく上りて、燒野に引ける垣邊の松影長し。

## 第二十七

世の果を何處とも知らざれば、亡き人の碑にも萬代かけし小松内府の墳墓、見上ぐるばかりの石の面に、彫り刻みたる淨蓮大禪門の五字、金泥の色洗ひし如く猶鮮なり。外には沒落の嵐吹き荒みて、散り行く人の忙しきに、一境閑として聲なき墓門の淋しさ、蕭々として響くは松韵、戛々として鳴るは驪珠、世の哀に感じてや、鳥の歌さへいと低し。

墓の前なる石階の下に、跪きて默然として祈念せる瀧口入道、やがて頭を擧げ、泣く〳〵御墓に向つて言ひけるは、「あな淺ましき御一門の成れの果、草葉の蔭に如何に御覧ぜられ候ふやらむ。御墓の石にまだ蒸す苔とても無き今の日に、早や退沒の悲に遇はむとは申すも中々に愚なり。御墓前に香華を手向くるもの明日よりは有りや無しや。北國關東の夷共の君が安眠の御墓を騷かせ參らせむ事、思へば心外の限にこそ候へ。君は元來英明にましませば、事今日あらむことかねてより悟らせ給ひ、神佛に祈誓して御世を早うさせ給ひけるこそ、最と有り難けれ。夢にも斯くと知りなば不肖時頼、直に後世の御供仕るべう候ひしに、性頑冥にして悟り得ず、空しき世に長生へて、斯る無念をまのあたり見る事のかへす〴〵も口惜う候ふぞや。時頼進んでは君が鴻恩の萬一に答ふる能はず、退いては亡國の餘類となれる身の、今更君に合す面目も候はず。あはれ匹夫の身は物の數ならず、願ふは御靈の冥護を以て、世を昔に引き返し、御一門を再び都に納れさせ給へ。」

急きくる涙に咽びながら、搔き口說く言の葉も定かならず、亂れし心を押鎭めつ、眼を閉ぢ首を傾して石階の上に打伏せば、あはれにくや、沒落の今の哀に引き比べて、盛なりし昔の事、雲の如く胸に湧き、斷念の珠數にはふり落つる懷舊の涙のみ繁し。あゝとばかり我知らず身を振はして立上り、蹌めく體を踏みしむる右手の支柱、曉の露また冷かなる內府の御墓、哀は

れ榮華十年の遺物なりけり。

＊　＊　＊　＊

盛の花と人に惜まれ、世に謳はれて、春の眞中に散りにし人の羨まるゝ哉、陽炎の影より淡き身を憖ひ生殘りて、木枯嵐の風の宿となり果てゝは、我爲に哀を弔むる鳥も無し、家仆れ國滅びて六尺の身おくに處なく、天低く地薄くして昔をかへす夢も無し。——吁々思ふまじ、我ながら不覺なりき、修行の肩に歌袋かけて、天地を一爐と觀ぜし昔人も有りしに、三衣を纏ひ一鉢を捧ぐる身の、世の盛衰に離れ得ず、生死流轉の間に彷徨へるこそ口惜しき至なれ。

世を捨てし昔の心を思ひ出せば、良しや天落ち地裂くるとも、今更驚く謂やある。常無しと見つる此世に悲むべき秋もなく、喜ぶべき春もなく、青山白雲長へに青く長へに白し。あはれ、本覺大悟の智慧の火よ、我胸に何蛇の如く纏はれる一切煩惱を流滓も殘らず燒き盡せよかし。

斯くて瀧口、主家の大變に動きそめたる心根を、辛くも抑へて、常の如く嵯峨の奥に朝夕の行を懈らざりしが、都近く住みて、變り果てし世の樣を見る事を忍び得ざりけむ、其年七月の末、年久しく住みなれし往生院を跡にして、飄然と何處ともなく出で行きぬ。

## 第二十八

昨日は東關の下に轡並べし十萬騎、今日は西海の波に漂ふ三千餘人。強きに附く人の情なれば、世に落人の宿る蔭は無く、太宰府の一夜の夢に昔を忍ぶ遑もあらで、緒方に逐はれ、松浦に逼られ、九國の山野廣けれども、立止るべき足場もなし。去年は九重の雲に見し秋の月を、八重の汐路に打眺めつ、覺束なくも明し暮せし壽永二年、水島室山の二戰に勝利を得しより、勢漸く強く、賴朝義仲の爭の隙に山陰山陽を切從へ、福原の舊都まで攻上りしが、一の谷の一戰に源九郎が爲に脆くも打破られ、須磨の浦曲の朝風に、散り行く櫻の哀を止めて、落行く先は、門司赤間の元の海、六十餘州の半を領せし平家の一門、船を繫ぐべき渚だに無く、波のまに〳〵行方も知らぬ梶枕、高麗契丹の雲の端までもとは思へども、流石忍ばれず。今は屋島の浦に錨を止めて、只すら最後の日を待てるぞ哀なる。

＊　＊　＊　＊

壽永三年三月の末、夕暮近き頃、紀州高野山を上り行く二人の旅人ありけり。浮世を忍ぶ旅路なればにや、一人は深編笠に面を隱して、顏容知るに由無けれども、其の裝束は世の常ならず、古錦襴の下衣に、紺地の[illegible]たる狩衣を着け、紫[illegible]か下げて、[illegible]に同じ色の行縢穿ちしは、何れ由緒ある人の公達と思はれたり。他の一人は年の頃二十六七、前なる人の從者と覺しく、日に燒け色黒みたれども、眉秀で凉しき優男、少し色褪せたる厚塗の立烏帽子に卯の花色の布衣を着け、黒鞘の野太刀を佩きたり。旅慣れぬにや、將來の徒歩に疲れしにや、二人とも弱り果てし如く、踏み締むる足に力なく青竹の杖に身を持たせて、主從相扶け喘ぎ〳〵上り行く高野の山路、早や夕陽も名殘を山の巓に止めて崖の陰、森の下、恐しき迄に黑みたり。祕密の山に常夜の燈無ければ、あなたの木の根、こなたの岩角に膝を打ち足を挫きて、仆れむとする身を辛く支へ、主從手に手を取り合ひて、顏見合す毎に彌增る太息の數、春の山風身に染みて入相の鐘の音に梵唄の響幽なるも哀なり。

十歩に小休、百歩に大憩、辛うじて猶上り行けば、讀經の聲、振鈴の響、漸く繁くなりて、老松古杉の木立を漏れて仄に見ゆる諸坊の燈、

早や行先も遠からじと勇み勵みて行く程に、間も無く蓮生門を過ぎて主從御影堂の此方に立止りぬ。從者は近き邊の院に立寄りて何事か物問ふ樣子なりしが、やがて元の所に立歸り、何やら主人に耳語けば、點頭きて尚も山深く上り行きぬ。

[illegible]地に落ちて嶮に生ひし古松の蔭、半立木を其儘に、結びたる一個の庵室、夜毎の嵐に破れ寂びたる板間より、漏る燈の影暗く、香烟窓を迷ひ出で、心細き鈴の音、春ながら物さびたり。二人は此の庵室の前に立止りしが、從者はやがて門に立ちよりて「瀧口入道殿の庵室は茲に非ずや、遙々訪ね來りし主從二人、こゝ開け給へ」と呼ばはれば、內より燈提げて出來りたる一個の僧、「瀧口が庵は此處ながら浮世の人にはるゝ訪はるゝ覺はなきに」と言ひつゝ訝しげなる顏色して門を開けば、編笠脫ぎつゝツと通る件の旅人、僧は一目見るより打驚き、砌にひたと頭を附けて、「これは〳〵」。

## 第二十九

世移り人失せぬれば、都は今は故鄕ならず、滿目舊山川、眺むる我も元の身なれども、變り果てし盛衰に、憂き事のみぞ多かる世は、蟋蟀の里も樂しからず、高野山に上りて早や三年、山遠く谷深ければ、入りにし跡を訪ふ人とてあらざれば、松風ならで世に友もなき庵室に、夜に入りて訪れし其人を誰と思ひきや、小松の三位中將維盛卿にて、それに從へるは足助二郎重景ならむとは。夢かとばかり驚きながら扶け參らせて一間に招じ、身は遙に席を隔てゝ拜伏しぬ。思も懸けぬ對面に、左右の言葉もなく、先つものは涙なり。瀧口つら〳〵御容姿を見上ぐれば、沒落以來幾その艱苦を忍び給ひけむ、御顏瘦せ衰へ、青絲の髮疎かに、紅玉の膚色消え、平門第一の美男と唱はれし昔の樣子何こにと疑はるゝばかり、年にもあらで老い給ひし御面に、故內府の俤あるも哀なり。「こは現とも覺え候はぬものかな。扨も屋島をば何として遁れ出でさせ給ひけむ。當今天が下は源氏の勢に充ちぬるに、そも何地を指しての御旅路にて候やらむ」。維盛卿は涙を拭ひ、「さればとよ、一門沒落の時は、我も人並に都を立出でゝ西國に下りしが、行くも歸るも水の上、風に漂ふ波枕に此三年の春秋は、安き夢とては無かりしぞや。或はよるべ無き門司の沖に、礒の千鳥と共に泣明し、或は須磨を追はれて明石の浦に昔人の風雅を羨み、重ね重ねし憂事の數、堪へ忍ぶ身にも忍び難きは、都に殘せし妻子が事、波の上に起居する身のせむ術無ければ、此の年月は心にもなき疎遠に打過ぎつ、嘸や我を恨み居らむと思へば彌增す懷しさ。兎にも亡びむうたかたの身にしあれば、息ある內に、最愛しき者を見もし見られもせむと、辛くも思ひ決め、重景一人伴ひ、夜に紛れて屋島を遁れ、數々の憂き目を見て、阿波の結城の浦より名も恐しき鳴門の沖を漕ぎ過ぎて、辛く此地までは來つるぞや。憐と思へ瀧口」。打萎れし御有樣、重景も瀧口も只袂を絞るばかりなり。瀧口「優に哀なる御述懷、覺えず法衣を霑し申しぬ。然るにても如何なれば都へは行き給はで、此山には上り給ひし」。維盛卿は太息吐き給ひ、「然ればなり、都に直に歸りたき心は山々なれども、熟々思へば、斯る世にて關東武士の充てる都の中に入らむは、捕はれに行くと同じこと、先には本三位の卿(重衡)の一の谷にて擒となり、生恥を京鎌倉に曝せしさへあるに、我れ平家の嫡流として名もなき武士の手にかゝらむ事、如何にも口惜しく、妻子の愛に燃ゆるばかりに切なれども、心に心を爭ひて辛く此山に上りしなり。高野に汝あること風の便に聞きしゆゑ汝を賴みて、戒を受け樣を變へ、其上

にて心安く、都にも入り、妻子にも逢はばやと
こそ思ふなれ。
瀧口は首を床に附けしまゝ暫し泪に咽び居た
りしが、「都は君が三代の故郷たるに、樣を變
へでは御名も唱へられぬ世の變遷こそ是非なけ
れ。思へば故内府の恩顧の侍、其數を知らざ
る内に、世を捨てし瀧口が此期に及びて君の御
役に立たむ事、生前の面目此上や候べき。故
内府の鴻恩に比べては高野の山も高からず、熊
野の海も深からず、いづれ世に用なき此身なれ
ば、よしや一命を召され候とも苦しからず。
あゝ斯る身は枯れても折れても、野末の朽木、素
より物の數ならず、只金枝玉葉の御身として、
定めなき世の波風に漂ひ給ふこと、御痛はしう
存じ候。言ひつゝ涙をはら〳〵と流せば、維
盛卿も重景も昔の身の上思ひ出でゝ泣くより
外に言葉もなし。

## 第三十

二人の賓客を次の室にやすませて、瀧口は孤
燈の下に只一人寢もやらず、つら〳〵思廻らせ
ば、痛はしきは維盛卿が身の上なり。誰あらむ
小松殿の嫡男として、名門の跡を繼ぐべき御身
なるに、天が下に此山ならで身を寄せ給ふ處な
きまでに零落れさせ給ひしは、過世如何なる因
縁あればにや。習ひもおはさぬ徒步の旅に、知
らぬ山川を遙々彷徨ひ給ふさへあるに、玉の襖、
錦の床に隙もる風も厭はれし昔にひき換へて、
露にも堪へぬかゝる破屋に一夜の宿を願ひ給
ふ御可憐しさよ。變りし世は隨意ならで、指せ
る都には得も行き給はず、心にもあらぬ落髮
を遂げてだに、相見むと焦れ給ふ、妻子の恩愛
は如何に深かるべきぞ。御容さへ瘦れさせ給ひ
て、此年月の忍び給ひし憂事も思ひやらる。思
出せば治承の春、西八條の花見の宴に、櫻か
ざして青海波を舞ひ給ひし御姿、今尚昨の如
く覺ゆるに、脇を勤めし重景さへ同じ落人とな
りて、都ならぬ高野の夜嵐に、昔の哀を物
語らむとは、怪しきまで奇しき縁なれ。あは
れ肩に懸けられし恩賜の御衣に一門の譽を擔
ひ、並居る人よりは深山木の楊梅と稱へられ、
枯野の小松と歌はれし其時は、人も我も誰かは
今日あるを想ふべき。昔は夢か、今は現か。
十年にも足らぬ間に變り果てたる世の樣を見る
もの哉。
果てしなき今昔の感慨に、瀧口は柱に凭り
しまゝ、しばし茫然たりしが、不圖電の如く
胸に感じて、想起したる小松殿の言葉に、顰み
し眉を[illegible]、泣[illegible]開き、[illegible]
して[illegible]と衰へ[illegible]、思ひ思ひは、
情なき人を恨み侘びて樣を變へ、心と思ひ決め
つ、何所なりと此世の告別に[illegible]し時、世を捨
つる我とも知り給はで、賴み置かれし維盛卿
の御事、盛と見えし世に衰へむ世の末の事、
愚なる我の思ひ料らむ由もなければ少しも心に
懸けざりしが、扨は斯らむ後の今の事を仰せ置
かれしよ。「小將は心弱き者、一朝事あらむ時、
妻子の愛に惹されて、未練の最後に一門の恥を
暴さむも測られず、時頼、たのむは其方一人」。
幾度と無く繰返されし御仰、六波羅上下の武
士より、我れ一人を擇ばれし御心の、我は只忝
さに前後をも辨へざりしが、今の維盛卿の有
樣、正に御遺言に適中せり。都を跡に西國へ落
ち給ひしさへ口惜しきに、屋島の浦に明日にも
亡びむ一門の人々を振捨てゝ、武士は櫻木、散
りての後の名をも惜み給はで、妻子の愛にめゝ
しくも、茲まで迷ひ來られし御心根、哀れは深
からぬにはあらねども、平家の嫡流として未練
の譏は末代までも逃れ給はじ。斯くならむ末を
思ひ料らせ給ひたればこそ、故内府殿の扨こそ
我に仰せ置かれしなれ。此處ぞ御恩の報じ處、
情を殺し心を鬼にして、情なき諫言を進むる

も、御身の爲、御家の爲、さては過ぎ去り給ひし父君の御爲ぞや。世に埋木の花咲く事も無かりし我れ、圖らずも御恩の萬一を報ゆるの機會に遇ひしこそ、息ある內の面目なれ。あゝ然なり〳〵」と點頭きしが、然るにても痛はしきは維盛卿、斯る由ありとも知り給はで、情なの者よ、變りし世に心までかと、一途に我を恨み給はむ事の心苦しさよ。あゝ忠義の爲とは言ひながら、君を恨ませ、辱しめて、仕たり顏なる我はそも何の因果ぞや。」

義理と情の二股かけて、瀧口が心はとつおいつ、外には見えぬ胸の嵐に、亂脈打つて暫時思案に暮れ居しが、やゝありて兩眼よりはら〳〵と落淚し、思はず口走る絞るが如き一語「オゝ御許しあれや、君」。言ひつゝ眼を閉ぢ維盛卿の御寢間に向ひて岸破と打伏しぬ。

折柄杉の妻戸を徐に押開くる音す、瀧口首を擧げ、燈差し向けて、何者と打見やれば、足助二郎重景なり。端なく〳〵は進まで、首を垂れて萎れて出でたる有樣は仔細ありげ也。瀧口訝しげに、「是は殿には未だ御寢ならざるや」。問へば重景太息吐き、「瀧口殿、暫を忍ばせて、一重子故ありて御邊に訴へせねばならぬ事あり」。「何と聞ゆる」。

## 第三十一

何事と眉を顰むる瀧口を重景は恨めしげに打睇り、「重景、今更御邊と面合する面目も無けれども、我身にして我身にあらぬ今の我れ、逃れむに道も無く、厚かましくも先程よりの擧動たらく、御邊の目には嘸や厚顏とも鐵面とも見えつらむ。維盛卿の前なれば心を明かす所も無く、暫しの間ながら、御邊の顏見る每に胸を裂かるゝ思ありし、そは他事にもあらず、横笛が事」。言ひつゝ瀧口が顏、窺むが如く見上ぐれば、默然として眼を閉ぢしまゝ、衣の袖の搖ぎも見せず。「世を捨てし御邊が清き心には、今は昔の恨とて殘らざるべけれ共、凡夫の悲しさは、一度犯せる惡事は善きにつけ、惡しきにつけ影の如く附き纏ひて、此の年月の心苦しさ、自業自得なれば誰に向つて憂を分たむ術も無く、なせし罪に比べて只々我身の嘆きを恨むのみ。聞き瀧口殿、最早や世に清き瀨も無き此身、今更惜むべき名も無ければ、誰に恥づべき名もあらず、重景が一期の懺悔聞き給へ。御邊の可惜武士を捨てゝ、世を遁れ給ひしも、扨は横笛、罪は重景の至に果敢なき終を遂げたりしも、皆是れ皆此重景が所業にて候ぞや」。瀧口は猶も默然として聞いて驚く樣も見えず。重景は語を續けて、「事の始はくだ〳〵しければ言はず、何れ若氣は春の駒、止めても止らぬ戀路をば行方も知らず踏迷うて、瘦す憂身も誰故とこそ思ひけめ。我心の萬一も酌みとらで、何處までもつれなき横笛、冷泉と云へる知れる老女を懸橋に樣子を探れば、御身も疾くより心を寄する由、扨は横笛、我に難面きも御邊に義理を立つる爲と、心に嫉ましく思ひ、彼の老女を傳手に御邊が事色々惡樣に言ひなせし事、いかに戀路に迷ひし人の常とは言へ、今更我ながら心の程の怪まるゝばかり、又夫れのみならず、御邊に横笛が事を思ひ切らせむ爲、潛に御邊が父左衞門殿に、讒言を巧に言ひ入れしこともあり、皆之れ重景ならぬ女色に心を奪はれし戀の奴の爲せし業、言ふも中々慚愧の至にこそ。御邊が世を捨てしと聞きて、あゝ許し給へ、六波羅の人を知るも知らぬも哀と思はざるは無かりしに、同じ小松殿の御內に朝夕顏を見合せし朋輩の我れ、却て心の底に喜びしも思へば無慚のなかる業、あはれ時こそ來りたれ、外に戀を爭ふ人無ければ、横笛こそは我に靡かめと、夜となく晝となく言はず、[illegible]に、思慕なく、横笛も今は何く行方しれずなりぬ。聞けば二人の仲に[illegible]、

世を捨てゝまで一旦の義に從ひし其身を、浮草の如く世を御佗びて御身の爲に節を守りしが、乙女心の變に報い得て、秋をも待たず果敢なくなりしとかや、思へば人は世を去りて、殘る名は我れのみ集り、實に夢醒めて、初めて覺る我身の罪、あゝ我は御邊をも可惜武士を捨てし、顔容も時世を早うせじ、とても叶はぬ戀とは知らで、道ならぬ手段を用ひても望を貫かむと迄ありし思ひよ。我がありし爲、浮世の義理に背けとは言はぬ在の心、底の流れ遁ふに由なく、御邊と言ひ、横笛と言ひ、皆盛年の身を以て、或は墨染の衣に世を遁れ、或は咲きもせぬ蕾のまゝに散り果てぬ。世の恨事何物か之に過ぐべき。今宵端なく御身に遇ひ、ありしにも似ぬ窶れを見るにつけ、皆是れ重景が爲せる業と思へば、いぶせき庵に名の行末にも若し知り給はゞ、無き我を恨み給ひけむ。　此期に及びて多くは言はじ、只々御邊が許を願ふのみ。横笛も悲哀に偏り、辭さへふるひて、顔の汗を拭ひ敢ず、

重景が事、斯くあらむとは豫てより略々察し知りし事なれば、さして驚かず、只横笛が事端なく胸に浮びては、流石に色に忍びかねて、法衣の濡るゝも覺えず、打萎れたる重景が様を見れば、今更憐の心も出で、[illegible]苔に坐りに[illegible]、[illegible]實に人毎に免れず、懺悔されたる上は、滝口既に迷惑に存し候はず。歎には晩き我れ人の心、など御邊一人の罪にてあるべき。昔に還らぬ事は言はざらむには若かず、何事も夢にてし昔は恨もなく喜もなし、世に望なき滝口、今更何の意の候べき、只々世にある御邊の行末永き忠勤こそ願はしけれ。淡きこと水の如きは大人の心か、昔の仇を夢と見て今の現に報いむともせず、恨みず亂れず、光風霽月の雅量は流石は世を觀じたる滝口入道なり。

## 第三十二

早や夜のほのぼのと明けなむ春の曉、峰の嵐、雲の裏ならで、まだ照り染めぬ朝日影、枝に鎖せる八つの谷間に、夜宿りの鳥の聲猶聞えず、遠近の僧院庵室に漸く聞ゆる經の聲、鈴の響、浮世離れし物音に曉の靜けさ一入深し。まことや帝城を離れて二十里、鄕里を去りて無人聲、同じ土ながら世を隔てたる高野山、眞言秘密の靈場に感應の心も轉澄みぬべし。

竹苑椒房の昔に變り、破れ損したる草庵に、[illegible]維盛、重景[illegible]數日[illegible]世[illegible]、[illegible]ここに[illegible]何事[illegible]、[illegible]に滝口入道、終夜思ひ煩ひて[illegible]、[illegible]粛然として佛前に向ひ、[illegible]心靜に立上りて一室の香爐に[illegible]、[illegible]謀る珠數、香[illegible]たり。[illegible]肉の靈位を安置しあるに、[illegible]是はとばかりに拜伏し、且つ[illegible]しける。佛壇に香華[illegible]、[illegible]も珠數の音も[illegible]のと、分明を目の本に添へ蓮大禪門の御靈位を示させて、[illegible]むもの、滝口、何なれば斯くは御身に見えざるぞ。思へば先君の殘せる御人、[illegible]の數を知らざりしが、世に[illegible]に離れて、多くは身を浮草の西東、舊の主人に弓引くものさへある中に、世を捨てゝさへ昔を忘れぬ[illegible]よ、其れには反して、世に落人の見る影もなき今、我身、草葉の露よりも[illegible]き者と思ひ給はむ。世に望なき[illegible]るは此事一つ。言ひつゝ涙を拭ひ給ふ。滝口は黙然として居たりしが、暫くありて[illegible]と面を擧げ、襟を正して維盛が前に恭しく兩手を突き、一[illegible]、先君[illegible]御心に[illegible]

ふ程ならば、何とて斯る落人にはなり給ひしぞ。思へば一昔に、維盛卿は[illegible]押進めて二十何と言ふ[illegible]は然ることながら、御身の爲、又御一門の爲、御恨の程を身一つに忍びて瀧口が申上ぐる事、一通り御聞きあれ。そも君は正しく平家の嫡流にておはさずや。今や御一門の方々屋島の浦に在りて、生死を一にし、存亡を共にして、回復の事叶はぬ迄も、押寄する源氏に最後の一矢を酬いむと、日夜肝膽を碎かる丶事申すも中々の事に候へ。そも壽永の初め、指す敵の旗影も見で、都を落ちさせ給ひしさへ平家末代の恥辱なるに、せめて此上は、一門の將士、御座船を枕にして屍を西海の波に浮べてこそ、天晴名門の最後潔しとこそ申すべけれ。然るに君には宗族故舊を波濤の上に振捨てて、妻子の情に迷はせられ、斯く見苦しき落人に成らせ給ひしぞ心外千萬なる。明日にも屋島沒落の時、君には御一門殘らず華々しき最期を遂げ給ひけむ時、君一人は如何になりせ給ふ御心に候や。若し又關東の手に捕はれ給ふ事のあらむには、君こそは妻子の愛に一門の義を捨て、死すべき命を卑怯にも遁れ給ひしと世の口々に嘲られて、末代迄に立つ浮名をば君には何やいうこと聞き給はむずる御心に候や。申すも恐れある事ながら、御父重盛卿は智仁勇の三德を具へられし古今の明器、敵も味方も共に景慕する所なるに、君には其正嫡と生れ給ひて、先君の譽を傷けむ事、口惜しくは思さずや。本三位卿の擒となりて京鎌倉に恥を曝せしこと、君には口惜しう見え給ふ程ならば、何とて無官の太夫が健氣なる討死を譽とは思ひ給はぬ。あはれ君、先君の御事、一門の恥辱となる由を思ひ給はゞ、願くは一刻も早く屋島に歸り給へ。瀧口君を宿し參らする庵も候はず。あゝ斯くつれなく待遇し參らするも、故內府が御恩の萬分の一に答へむ瀧口が微衷、詮ずる處君の御爲を思へばなり。御恨の程もさこそと思ひ遣らるれども、今は言ひ解かむ術も無し。何事も申さず、只々屋島に歸らせ給ひ、御一門と生死を共にし給へ」。

忌まず、憚らず、涙ながらに諫むる瀧口入道。維盛卿は至極の道理に面目なげに差し俯き、狩衣の御袖を絞りかねしが、言葉も無くツと次の室に立入り給ふ。跡見送りて瀧口は其の儘岸破と伏して男泣に泣沈みぬ。

## 第三十三

**よもすがら恩義と情の岐巷に立ち**て何れをそれと決め難し、瀧口が思入り諫めたる直言に、さすがに御身の上を恥ぢらひ給ひてこそ、言葉も無く一間に入りし維盛卿、熟々思へば君が馬前の水つぎ執りて、大儀ぞの一聲を此上なき譽と人も思ひ我も誇りし日もありしに、如何に末の世とは言ひながら、露忍ぶ木蔭も無く彷徨ひ給へる今の痛はしさに、快き一夜の宿も得せず、面のあたり主を恥しめて、忠義顏なる我はそも如何なる因果ぞや。末望みなき落人故の此つれなさと我を恨み給はむこともうたてさよ。あはれ故內府在天の靈も照覽あれ、血を吐くばかりの瀧口が胸の思ひ、聊か二十餘年の御恩に酬ゆるの寸志にて候ぞや。

松杉暗き山中なれば、傾き易き夕日の影、はや今日の春も暮れなむず。姿ばかりは墨染にして、君が行末を嶮しき山路に思ひ煩ひつゝ、渓間の泉を閼伽桶に汲取りて立歸る瀧口入道、庵の中を見れば、維盛卿も重景も何處に行きしか、影も無し。扨は我諫を納れ給ひて屋島に歸られしか、然るにても一言の我に御暇乞なきは訝しさよ。四邊を見廻せば、不圖眼にとまる柱の上にある薄色の斬紙、取上げ見れば維盛卿の御手に、水莖の跡鮮かに、走り書せる二首の和歌、

かへるべき梢はあらじいかにせむ
　風をいのちの身にしあなれば
濱千鳥入りにし跡をしらせねば
　潮のひる間に尋ねてもみよ

哀れ、御身を落葉と觀じ給ひて元の枝をば屋島とは見給ひけむ、入りにし跡を何處とも知らせぬ濱千鳥、潮下の磯に何を尋ねよとや。——扨はとばかり瀧口は折紙の面を凝視めつゝ、暫時茫然として居たりしが何思ひけむ、豫て秘藏せし昔の名殘の小鍛冶の鞘卷、狼狽しく取出して衣の袖に隱し持ち麓の方に急ぎける。

路傍の家に維盛卿が事それとなしに尋ぬれば、狩衣着し侍二人麓の方に下りしは早や程過ぎし前の事なりと答ふるに、愈々足を早め走るが如く山を下りて路すがら人に問へば尋ぬる人は和歌の浦さして急ぎ行きしと言ふ。瀧口胸愈々轟き氣も半亂れて飛ぶが如く濱邊をさして走り行く。雲に聳ゆる高野の山よりは眼下に瞰下す和歌の浦も歩めば遠き十里の郷路、元より一刻半晌の途ならず。日は既に暮れ果てゝ、朧げながら照り渡る彌生半の春の夜の月、天地を鎖す青紗の幕は雲か烟か將霞か、風雅の士さびならで、生死の境に彷徨へる身のげに一刻千金の夕かな。夢路を辿る心地して瀧口は夜もすがら馳せて辛く着ける和歌の浦、見渡せば海原遠く烟こめて、月影ならで物もなく、濱千鳥聲絶えて、浦吹く風に音澄める磯馴松、波の響のみいと冴えたり。入りにし人の跡もやと、此處彼處彷徨へば、とある岸邊の大なる松の幹を削りて、夜目にも著き數行の文字、月の光に立寄り見れば、南無三寶、「祖父太政大臣平朝臣清盛公法名淨海、親父小松の内大臣左大將重盛公法名淨蓮、三位中將維盛年二十七歳、壽永三年三月十八日和歌の浦に入水す、從者足助二郎重景年二十五歳殉死す」。翠痕淋漓として乾かざれども、波靜にして水に哀の痕も殘らず。瀧口はあはやと計り、松の根元に伏轉び、「許し給へ」と言ふも切なる涙聲、哀を返す何處の花ぞ、行方も知らず二片、三片、誘ふ春風は情か無情か。

＊　＊　＊　＊　＊

次の日の朝、和歌の浦の漁夫磯邊に來て見れば、松の根元に腹搔切りて死せる一個の僧あり。流石汚すに忍びでや墨染の衣は傍の松枝に打懸けて、身に纏へるは練衣の白衣、脚下に綿津見の淵を置きて、刃持つ手に毛程の筋の亂れも見せず、血汐の糊に塗れたる朱溝の鞘卷逆手に握りて、膝も頽さず端坐せる姿は、何れ名ある武士の果ならむ。

嗚呼是れ、戀に望を失ひて、世を背きし身の世に捨てられず、主家の運命に殉じて、二十六年を盛衰の波に漂はせし、齋藤瀧口時頼が、まことと浮世の最後なりけり。

（明治二十七年二月頃）

# 一飽の時

明月一灣、風露千里、吾れ友と共に大江に泛ぶ、神思搖蕩して那邊に在るを覺えず。是れ人生の須臾を以て夫の天地の悠久に較ぶれば、安んぞ百年の永歎を抱きて一飽の時無きを恨みむや。

（明治三十一年九月）

# おきく

憶ひ起せばはや十二年の昔となりぬ。吾は遊び友達の長太と共に本郷なる學校よりの歸途、壹岐殿坂より小石川さして下り行けり。戀人と小兒とのみ能く其趣を解するが如く、手を組合せ互に頭をもたせつゝ。

坂の中程まで來りし時、長太は早く前面の群集を見つけ、『ヤ、犬の喧嘩だ、早く行て見よう』と組合せたる手を振りほどき、引立てぬばかりに吾を急きぬ。漸くは行きつくまでに喧嘩の終らざれと祈りつゝ、二人は革包片手に脇目もふらず走り行きぬ。

あはれ是れ小兒の性質、否むしろ一般人間の性質に非るべきか。幼稚なる吾等が犬の喧嘩を喜ぶは、苦む泣聲、流るゝ血潮を喜べるに非ずして、犬にまれ、人にまれ、苟しく美徳として貴むべき勇氣、忍耐、熟練の三つのものゝ肝なる働きを見むことを喜ぶなり。

長太と吾の行きつきし時は喧嘩は幸にして倘已まざりき。小さき、たくましき、頭のひしやげて、[illegible]犬の樣に見るから意地惡さうなる白犬は、體は並よりやゝ大きく、鬪には餘り慣れたる樣にも見えざれども、さりとてなか／＼に侮り難き黒犬に烈しく突かゝり、今や方に首尾好く對手の咽喉に喰ひつき、全身の力を籠めて無二無三に頭を振りつゝあり。さしもの黒犬も急所に嚙附かれて身動きもならず、白犬が小兵ながらも喉をくはへしまゝブラ下る如く身を振る毎に、一種の名狀すべからざる悲鳴を發し、苦しき息さへも絶え／＼になりぬ。黒犬の主人なる色黒く、顏容尋常の大男は先程より如何とも手の下す術なく、一向氣を揉みて是爭を打眺め居たりしが、今や如何にかして其飼犬を救助せざるべからざるの場合となりぬ。蹴つたりとて、打つたりとて、犬の性として其喰へし咽喉をます／＼緊しく喰ふるの外に、何等の結果あるべからず。見物の間に叫ばれたる鬪を停むる手段は一にして足らず、『水をぶツかけろ！ 水だ／＼！』。さりながら近所に水は有らざりき。『尻尾を引ッ張れ！』、一個の長身なる、慈悲深さうなる、賢こげと云はむよりは人のよささうなる中年の男は、辛うじて慓悍なる白犬の箒の如き尻尾を捉へ、力を究めて是を引きしが、白犬はいよ／＼激して烈しく喰ひつきしが、黒犬は其咽喉のちぎるゝばかり、縊られて、一層苦しげなる呻吟を放ちぬ。初めは感謝の意を表したる飼主は急に恐しき顏して睨みければ、中年の賢こげと云はむよりは人の好ささうなる、長身の男は、頭をかゝへてこそ／＼と群集の中にむぐり込みぬ。

戰鬪はいよ／＼其激烈を加へ、黒犬の死は間近く逼れり。

『煙草！ 粉莨を少し許り！』、眼鏡をかけて洋服を着けたる大學生とも見ゆる若紳士は云ひぬ。『粉莨？ それや妙だらう！』。あぐみ果てたる群集は一度に叫び、多くの煙草入は其腰より取出され、開かれたる若紳士の掌に落ちぬ。紳士は其少し許りをとり、揉みて粉末となし、跪きて白犬の鼻端を抉ひたり。生理學の法則はこゝにも其經過を誤らず、白犬の耐へかねて嚔ぶや否や、黒犬は僅に放たれぬ。

赭面の主人は敗亡せる黒犬を勞はりながら、悄々として立去れり。然れども慓悍なる白犬の血は已に沸きて、其心は未だ鬪ひ足らず、對手欲しげに四邊を見廻しながら、[illegible]

を走り行きぬ。吾と長太と吾等の悪戯仲間とは面白半分に息をきらして其跡を追ひ行けり。

水道橋の邊に一個の大なる斑犬あり。人ならば懐手せる樣にて、橋の袂を悠然として闊歩し歩みたり。彼は都には色めづらしき純粹の和犬なりき。其毛は茶褐色に處々に黑の斑點を交へ、其尾は行儀よく左に卷きて、其大なる左右の耳は斜に直立し、其顔容は極めて鷹揚に、其態度も何とも無く一種の威嚴を存せり。彼は疑も無く將に消滅せむとする彼が同種族の殿軍の一勇將なるべきなり。

彼を見るや否や、白犬は猶豫なく飛掛りて不意に例の咽喉を拖せり。意外にも是偉大なる殿將は靜に直立せるまゝ、何事をなさむともせず、唯長き、嚴かなる、而かも悲しげなる、呻吟をなせるのみ。こは何事ぞと長太も吾も彼の間近に走り行きしに、それも其筈、あゝ彼は殆ど窒息せられ居るなり。彼の大なる口は出來得る丈け廣く開き、脣は怒に逆捲きて中よりは銀の如く輝ける齒牙をむき出し、其口髭は針の如く剛立ち、常には穩なるべき眼は血走りて爛々たる光を放ち、彼の全身は瞋恚と驚愕とを以て悶まり、虎の如き恐ろしき低き叱聲の中の悲しき調子は、周圍に立てる吾等に向つて求むる所あるが如し。あゝ讀者は曾て是の如きものを見たりしことありや。彼は最後の彫像家の手に成れる怒と驚の化身を示せるものゝ如かりき。

都の常とて周圍に間もなく群集の垣を築けり。憎く／＼しき白犬は敢て一歩を讓らず。氣早やの長太は耐へかねて叫びぬ、『小刀！』。一個の大工は其鑿を貸し與へぬ。長太は是を受取るや否や、力を極めて白犬の喉頭に一突撃を加へぬ。一道の鮮血はサツと迸りて彼が白色の頭邊を見事に染出し、勇悍無比なる意地わるき小勇者は、忽然として僵れ伏せり。事の意外に驚きて一時聲なかりし群集を押分けて、予は小勇者を檢案し其眞に死せるを確かめたり。大なる斑犬は、さながら鼠の如く、其背を喰へ、一振りふりて地上に抛ちぬ。

彼は滿足らしく、恥かしげに、又驚けるが如く、己の前に斃れたる敵を打見やり、滿邊に其死體を嗅ぎ、又之を熟視し、やがて不圖急用にても憶ひ起したらむが如く、一廻轉して先の如く悠然として歩み去りぬ。吾と長太は途すがら其跡を追ひ行きぬ。彼は水道橋を渡り、三崎町の原へ向へり。

其處には今や打立たむず荷馬車あり。眼鋭き瘦形の氣短かさうなる勁勢面の矮男子は左に馬の手綱を握り、右に[illegible]つゝ、[illegible]たしげに何者をか待ちつゝあるものゝ如し。『ぶち！ こら畜生！』彼は一喝して吾偉大なる殿將に一蹴を加へむとせり。ぶちは[illegible]しながら、恐る／＼近寄りて、[illegible]しく熟練を以て巧に其鼻先を避け、主人の[illegible]打當りつゝ、車の下に敗亡して[illegible]。直なる耳は頭と共に解伏し、今迄傲然として卷き上げたる尾をば、意氣地無く垂れて力なく搖かしつゝ。

吾は吾偉大なる勇者のしかく怖るゝ所の彼の何者なるかを驚きぬ。彼はぶちの頸綱のきれぎれになりて懸れるを訝かしげに眺めたり。吾と長太は交る／＼最前よりの大なる出來事を詳しく彼に物語りしに、嚴格なる主人も漸やく其事情を覺り、氣の毒さうに犬の頭を撫でながら、『ぶち、えらいやつだ、可哀さうになあ。』

是に於てぶちの尾は忽ち揚り、耳は樹ち、眼は穩かに、兩者は全く其仲直を了り、犬と、人と、馬と、三個の友は打連れて立去れり。

＊　＊　＊　＊　＊

是事ありてより十年經ちぬ。十年と云へば一個の小兒と犬とにとりては頗る長日月なり。長太は從軍して在らず。予は或病院の助手となれり。

病院に通ふ途上、吾はぶちをば三日に一度位は必ず見ざることなかりき。されば彼と吾とは自ら相見知りて、吾の心付かざりし時には、ぶちの方より何時しか吾前に來り、其大なる尾を掉りつゝ吾顔を見上げ、其頭を少し左方に傾けていつもの如く頭を撫でむことを促すなり。馬方なるぶちの主人をも吾はぶちと共に知りしかば、彼は常に吾を呼ぶに「先生」を以てせり。

十一月の中旬の或麗はしき午後のことなりき。吾は病院を退かむとして玄關に出で來りし時、表門の左右に開かれてぶちが例の悠然たる歩調を以て眞直に入り來れるを見たり。其傲岸なる容態はさながら野津大將が勝利と名譽とに飾られて陷落後の平壤城に入りたらむが如し。彼の後には一個の人力車の婦人を載せたるもの、靜かにきしり來り、傍にはぶちの主人が氣遣はしげに車上の人を眺めながら歩み來れり。清次(是馬方は清次と呼べるものなりし)は玄關に立てる吾を認め、不作法なる驚きの態を示し、「先生、是女あ私ッちの嚊でムいます。胸が痛いッてんで困ッちまひました。」

是時吾は婦人の顔を視しに、彼女は車臺の上に布きたるあつき小蒲團の上に坐し、氣候には相應はしからぬ厚着の上に、[illegible]を頭の邊まで纏ひぬ。

吾は未だ嘗て斯の如き忘れ難く美はしき顔を見たること無し。色は飽まで蒼白く、あでやかと云ふにはあらねども、犯し難き愛嬌ありて、しかも見る人の心に何となくうら悲しき感情を起さしむる程に寂しげに品高く、年は三十五六にもなりたらむか、永く戸外に出でざりし爲に、雪の如く白くなりし痩せたる頬の上に、漆の如き黑髮のふさ〳〵とかゝれるを蒼蠅さげにかき上げつ、其涼しき清き眼――あゝ是の如き眼をば吾は一生中再び見ること無かるべし――は苦痛と、悲哀と、鬱憂とを十分に表はし、眉は細長く、口元は輕く緊りて平和と、忍耐と、滿足とを表はしぬ。

吾は吾未だ嘗て見たること無き是の如き氣高き容貌をば、貴婦人の間にはあらずして、却て馬方づれの妻に見むとは、夢にだも思ひよらざりき。

『菊、これは先生だ、――あのソラ何時も噂をするぶちの御世話になつたお醫者さんだ』。お菊は微笑を以て目禮せしが、一語をだも言はず。靜に衣裳をかゝげて車を下らむとせり――あゝむかし玄宗皇帝が華[illegible]宮の[illegible]階に楊貴妃と共に其鳳輦を降りし時と雖も、此大[illegible]村の一馬方が其妻女の病を扶けて車を下りしほど、品高く、優しくはなかりしならむ。背卑く、色黑く、何れと云はゞ醜しき夫の容貌と、彼女の白く、寂しく、麗はしき顔ばせとの對照は、一種驚くべきものにてありき。ぶちは何事か腑に落ちざるものゝ如く、始終其主婦の動作を打まもりぬ。お菊とぶちとは親しき友と見られたり。

今言つた通り、あれは胸がどつか惡いんです。先生どうか一つ診て遣つて下さいませんか。」

吾等三人は打連れて診察室に入れり。ぶちは例の如く悠然として主婦の後に隨へり。お菊は[illegible]下に坐し、其襟を披き、頭にまとひたる手巾を解き、語は無くして只其右の胸を指しぬ。吾は仔細に診檢せり、――彼女と清次はぢつと吾を打瞻り、ぶちは二人の顔を代る〳〵眺め居たり。

あゝ吾は何と言ふべきか。嘗つて珠の如く清らに、花の如く暖かく、其やさしく、形好きふくらみは、あらゆる自然の美を萃めたる、――[illegible]は人間の最も美はしき青春の命、幸福の限無き泉を湛へたる情深き胸は、今や石の如く堅く、氷の如く冷やかに、世に恐るべき苦痛の中心となり居るなり。其蒼白き顔、其[illegible]なる眼、其愛らしき而かも悲しげに[illegible]たる[illegible]は、皆是等の[illegible]き痛みを[illegible]に忍べ[illegible]

き苦悶を示せるなり。あはれ慈悲深き神は何か故にかゝる婉しき、氣高き、愛すべき、婦人に是の如き重荷を負はせたるか。

而かもお菊は大塚村の一馬方の妻女にてありけるなり。

吾は彼女を病室に導けり。「私ッちもぶいちも一所に居て宜うムいますか」、清次は問ひぬ。「お前は差支が無い。ぶいちも大人しくしてさへ居れば一所に來ても宜しい。」「それや乾度受合います、先生」。

吾は讀者が是老大犬を一日にても見たらむことを希ふ。今は都には復是種の犬を見ず、彼に消滅せる種族に屬せるなり。黒色の斑點ある茶褐色の毛は、密く、剛きことさながら熊の如く、其體軀は肥滿して小牛の如し。體重は少くとも十貫目以上あるべし。其頭はやゝ平扁に近く、まだらに殘れる幾多の疵痕は、往年の勇者の名殘を誇れるものゝ如し。雙の眼は、老いたる犬によく見る如く、瞼やゝ爛れ、運轉遲緩なる葡萄色の眼球は、沈みたる光を放ちて常に何事をか熟慮せるものゝ如し。只直立せる耳朶は敏捷に左右して、些細の音響にだも其注意を怠らず。其太やかなる尾は環狀に卷かれて腰部の左方に行儀正しく上せられたるさま、さながら元龜天正時代の古武士が背にさしたる旗印の如く、是老大犬に一種の威容を添へたり。

げにや、ぶちが是の如く威容を有せるは偶然に非ず。過ぎつる十數年の間、彼が沿道の同族は、彼に抵抗することを敢てせざりしより、是を以て彼の歩むや、恰も野津大將、若くは山地將軍が遼東の古領地を巡回するの風あるなり。

翌日吾師なる院長はお菊を診察せり。疑も無くお菊は致命の重患に陷り居るなり。是まゝに過さば、死は一兩日を待たじ。もし一大手術を施して幸にして好良なる經過を見るを得ば、彼女の病は或は全く癒ゆるを得べきも、而かも十中の八九は其望無きなり。然れども吾院長は是十中一二の希望に據りて斷然患部の切開を決意せり。

傍に聞き居たるお菊は始終其容姿を亂さず。徐ろに清次を見やり次に院長に向ひて問ひぬ、「其な療治は何時でムいますか。」「明日に。」親切なる、言葉尠き院長は答ふ。かくて彼女と清次とぶいちとは語無くして退出しぬ。是間お菊は多く物言はざりき。清次とぶちとが氣遣はしげに又物言ひたげに眺むるを時々打見やる眼中には、十分の安心と覺悟を示してそれとなく夫の心を休めむと務むるものゝ如し。

次の日、廊下なる掲示場には早朝既に白墨にて、筆太に「本日手術」。

午後一時となれば其時に熱心なる學生等は其先に臨床講義室に集まれり。諸ら立錐の地をも餘さでる手術臺の周圍は嘈々囂々として言語は何れも當日の手術に關せざるものなし。「一體何の患者です。」「どちらの腕ですな。」「非常に美人ださうです。」

讀者よ彼等を以て無情のものと爲す勿れ、彼等とて同じく人間なり、讀者と、吾と、彼等と、情に於て毫も相異なる所無きなり。唯彼等が職業に對する熱心は、彼等をして他の病苦に對する恐怖の念を脫せしめたるのみ。故に常人にありては感情として涙と太息とに終る所のものは、彼等にありては動機となりて却て彼等の事業に力を與へ、精神を加ふるなり。談笑自若、他の苦痛を環視するの故を以て、直に彼等を木石に均しきものとなす勿れ。吾れ人は皆其職務によりて支配せらるゝなり。

院長は吾と共に二名の助手を從へて已に手術臺の右側に立てり、群れる學生の語り、興じ、嘲け、笑ふ聲の騷然たる中に、教室の戶は開かれ、哀れなるお菊は、看護婦に伴はれ、清次とぶいちとを後にして靜に入り來れり。學生等は

職に水を打たるゝ如く、寂然として淋しく彼女を打眺めたり。彼女が蒼白なる、美はしき顔には彼等の靜さを攪亂するの力ありしなり。彼女の膝には前日に同じ。只寢衣の代りに絹の半纏の小綺麗なるを着けたり。清次は遙か後に席を占め、頭を垂れて仰ぎ見ず。おいちは當惑顔に四邊を見廻し、頻りに其耳を振り動かせり。

お菊の院長に語る如く、手術臺の上に登り、靜に身支度を爲し、其夫の方を屹と見やりて、其眼を閉ぢ、かたへに立てる吾に半身をもたせ、其冷やかなる手もて吾手を握りぬ。——あゝ其手先の顫やかに、可憐さ！ 大塚村の一農夫の妻として餘り優しきに、從はず其顏を眺むれば、吾は眼を塞ぎて冥想せる其蒼白き顏に一種言ふべからざる威嚴の人に迫るものあるを覺えぬ。手術は猶豫なく始まれり。そは病質上勞ひ緩慢ならざるを得ざりき。クロロフォルム——神が其子供等の苦痛を救はむ爲に下し給へる賜物の一なる此麻醉藥は、患者の體力の之に堪ふる能はざりしことの明かとなりし爲に、之を得ず用ひざりき。院長は徐々として其刀を運ばせり。剖口き頸は其苦痛を表せしも、寂然として一言たりとも發せず。ただ胸中御祈に默せしや、其口唇は動かれ、鮮血の淋漓として側目より之を用ゐるを見て、彼は直に何等か異常なる事件の今方に起りつゝあることを認めたり。彼は眼をぎろつと手術臺の一方を見張り、遠雷の如き低き唸り聲を漏し、折々耐へかねてや、鋭き叫を發し、今にも執刀者に向つて何事をか爲さむと欲するものゝ如し。されど清次は堅く彼を捉へて動かしめず、絶えず拳を以て其頭を叩き居れり——是れ清次にとりては最も幸にてありし。彼は是が爲に其妻の苦痛を思念するの遑無かりしなり。

事卒やく終れり。お菊は其衣を着け、靜に、なよやかに、手術臺を降り清次の方を打見やれり。次に院長及び學生に向つて慇懃に一禮し、低き明かなる聲もて、若し彼女が手術中見苦しき容を爲したらば、幸に之を許されむことを願へり。吾等は小兒の如く泣きぬ。院長は懇ろに彼女を勞はり、お菊は清次と吾の肩に扶けられ、おいちを伴ひて其室に歸りぬ。

かくて吾等はお菊を病床の上に横へ、急ぎ清次は直に向ひて、自ら其妻の看護人たらむことを希へり。吾は其切なる願に是を許しぬ。彼は一心に其妻の容體を打ち護り、氣色うかゞひ求を待たずして出來得る丈の用務を辨じ、むくつけき農夫は其不作法なる態度もて、よく一等看護婦の爲すべき所のものを殆ど遺憾無く、さながら下男の其主人に仕ふるが如く、甲斐々々しく立働けり——彼の眠に就くことは甚だ稀なりき。夜深に至りて巡回する每に、吾は彼の小さき眼が薄暗きともしの下に熱心に其妻の寢顔を見詰むるを見ざることなかりし。彼は初の如く多く物言はざりき。

おいちは善く其身を運動へり。病室にある時は少しも身動きせず、氣遣しげに、死せるが如く横はれる主婦の顔を餘念も無く眺むるのみ。日每の午後、吾に從つて不忍の池畔を散歩すれども、歩むときの常にもあらず打悄れ、さも物憂げに見えぬ。看護婦の好意あるも、常に我より之を避け、他の愛撫に對して甘じて之を忍べり。歸路に就けば彼は吾より先にいそ/\と走り、足音輕く、聲を發せず、一散に其主婦の病室の前に行きて吾のそれを開くを待ち設けゐるなり。

若干日の間はお菊の經過頗る好良なりき。切開せる傷は漸く癒合せり。彼女は是に手術の前後を見むとて時々入り來る快活なる學生等と相見ることを喜べり。院長は例の如く言葉よりはむしろ其顔を以て、懇に患者を慰め、清次に向つては是迄に無事に一週間を經過したらむにはたしかに全快の見込あるべきを告げぬ。

ぶちも今は事情を覺りしにや、院長の入り來る毎に吾等の後に屛息し、先日の無禮を謝するが如く見やるも可笑しかりき。

是處までは好し。然れども其後第五日目に至りて、お菊は俄然として吾等の前に全身の顫動を感じ、次で高度の發熱を起せり。吾は直に赴きて檢案せしに、彼女の眼は非常に輝き、頰は少しく色づき、呼吸は迫促し、脈搏はいたく亢進せり。彼女は全身の不安を訴へ、絶えず四肢を悶え居たり。彼女自らは實に爾かすることを恥づると雖も、又如何ともする能はざりしなり。今や平均は壞れ、不幸は初まりぬ。吾は吾爲し得る限の手段を盡し、清次も我を失ひて狼狽し、吾命令に從ひて仕事をしながら、頻りに吾顔を打まもれり。ぶちは室の一隅の暗處に退き、其眼を以て吾等の爲す所を追ふの外、寂然として動かず。

お菊の病はいよ／＼重り、今は漸く精神譫妄の狀態に陷り、時々囈くが如き譫語をさへ口走るに至りぬ——あゝ是時彼女の言ふ所は果して何事にてありたりしか。吾は常より、平生は深く包める人の祕密を露はすと云ふなる譫語に耳を傾くることをば、德義上醫師の爲すべきことに非ずと信じ居たれば、彼女の譫語を口走る際には成るべく注意を他物に寄せたりしが、「清次々々」と其夫を呼捨にする辭は、注意せずに過ぐるには餘りに耳立ちて聞えたりき。清次はいたく當惑して、彼女が是以前には未だ嘗て一度も是の如きこと無かりしを再三申譯の樣に吾に告げぬ。初の中は彼女自ら其精神の錯亂を訴へ、恥かしげに其無禮を謝せしが、後に至りては譫妄はいたく且間斷なく彼女を犯すに至りて、彼女の腦髓は全く其統一を失ひ、人生の最も哀れなる、又尤も恐るべき光景を顯出せり。さめ／＼と泣き沈むかと見れば、忽ちから／＼と高く笑ひ、遂には秩序なき、意味無き、種々の歌をうたへり。其歌は農家の婦女が歌ふが如き歌には非ずして、多くは上品なる箏曲なりき。且其發音語調は其夫の訛りあるに異なりて、上流社會に用ふるも毫も恥かしからざるものにてありき。

吾は未だ曾て是の如く、哀れ深く、又或意味に於ては美はしき光景を目擊したること無し。鶯の鳴音の如く顫へながら熱心に、又愛情に充ちたる妙なる聲。——眞珠の如く淸らかに、鋭く、輝ける雙の眼。——透明るまでに瘦せ細りたる顔ばせの頰のあたりの少しく色づけるに、漆の如き黑髮のかゝれるを拂ひもやらず、何處となく見詰むる眼を空の一點に集め、玉をのべたる細やかなる雙の手を擧げて意味ありげなる微笑を漏す時、吾は身の病床を護れるを忘れて茫然として打眸ることゝありき。

色々のとりとめなきことを問ひかけられて、我と清次とが答にためらひ居るを、いつしか自ら答案を得て滿足したらむが如く眼を閉ぢて何事をかつぶやくかと思へば、俄に清次すら名だに知らざる多くの人を呼びかけ、或は調子外れの聲してぶちの名を呼び、憐れなる老犬が其主婦のたゞならぬ聲音に不思議さうに近よるを見むきもせず、翻てくさ／＼の家事を口走るなど、今は彼女の精神は全く其常態を失へり。最後は漸く近づけり。生活の織りなせる黄金の網は方に斷絶せむとせり。三十有餘年の伴侶たりし肉と靈とは今や其離別を遂げむとせり。今や彼女の精靈は幽明の界をさまよひて、方に暗々たる彼岸の世界に飛去らむとなしつゝあるなり。哀れなる清次は狂氣の如く氣を揉めども、又如何ともすべからず。

一夜、彼女は吾等の望みの如く眼を閉ぢて靜かに眠に就けり。吾と清次は燈を暗くして其傍にあり。中夜彼女は忽然として身を起して床上に坐し寢衣を褫取りて是を丸め、熱心に之を彼

女に[illegible]おしつけたり。其[illegible]なる[illegible]母が其乳兒を哺育するに似たり。是時彼女の眼は驚くべき愛と喜の色を現はしぬ。かくて彼女は少しく其上體を前後に搖りながら、聴はしき低音もて子守の歌を唄ひ初めぬ。——あゝ何等可憐、又悲慘の光景ぞ。吾は驚と悲に打たれ、しばし憮然として死の黒影に半ば掩はれたる彼女の蒼白き顔を見つめたり。『あゝ何うしよう、先生。あれは赤ン坊の積りなんです。』『赤ン坊とは?』。『私ッちと彼とのたつた一人ッ子でした。十九年前に亡くなりました。お菊はそれをまだ居ると思つてるんです。チヨッ、泣かせるな!』。

嗚々洵に然らむなり。お菊の迷ひたる心には、切り開きたる[illegible]の苦痛は、恰も乳頭を[illegible]まれて、盛に乳に飢ゑたる小兒を聯想し、二十年前に永く別れたる母と子とは、まぐて再び相逢ひたるなり。何等悲壯の情態ぞ。吾は覺えず手巾を以て顔を掩へり。

是れ實に哀れなるお菊の最後の活動なりしなり。彼女は[illegible]に忽然として仆れたり。今や死神は全く彼女を生れり。暫く前に横臥せ[illegible]、清次は[illegible]汗、[illegible]に、彼女は[illegible]に、[illegible]寂しき眼を見開きて、暫くの間無言にて[illegible]もせず夫の顔を眺めしが、珠の如き涙をはら／＼と流し、面を背けて太息しぬ。やがて我を一瞥して感謝の意を示し、次に斜にぶいちの方を見やりしが、影暗くして認め得ざりき。かくて其眼を閉ぢ、靜に其衣裳を整へしが、急しき呼吸はここに聞えずなりて、彼女は覺めざる眠に就きぬ。

呼お菊は遂に死したるなり。

ぶいちは是時已に目をさまし、吾等の側に進み來りぬ。清次の握り居るお菊の左手は夫の涙に洗はれたるまゝ、寢臺の側に垂れ下りしを、ぶいちは殘りなく是を舐り了り、其主婦の顔を一瞥して元の座に退きぬ。

我は最早や語るに忍びざるなり。其夜我は己れの愛する者に先だたる人の死に去りし其人よりも如何ばかり多く不幸なるべきかを痛切に覺りぬ。

つれ無き秋風に拂はれて行方も知らぬ枯葉に窓打つ音の絶間には、霜夜にすだく蟲の音も哀れに細りゆく眞夜中頃、ほの暗き燈に照らされて、寂しげに横はれる美はしき母の亡骸に、正體も無く泣きくづれたる清次のあはれなる樣は、今尚宛然として眉睫の間に[illegible]たり。想へば人は是の如くにして逝き、[illegible]れて、[illegible]なき是世に生活を繰返すなり!。

* * * * *

清次は其隣人と共に泣く／＼其妻を葬りぬ。ぶいちは遂に是嚴かなる儀式を目撃せり。其日はいたく雪降りき。黒き汚らはしき墓穴は、是清く眞白なる天地の中に、哀れなるお菊の爲に最後の住家を供へぬ。清次はよろづの世話を了へたるのち、僅に枕につきしが、間も無く、其妻の跡を追ひぬ。お菊の墓は容易く再び開かれぬ。ぶいちは今一度、是不思議なる嚴かなる行列を眺め、友無き舊家にすご／＼と歸りぬ。

其後我は再び彼を見たることも無し。

お菊が死せる一週年の日、我は彼女が墓前にこゝろばかりの香華を手向けむと、其最後の住家を小石川に尋ねしに、今は人住む人もなく荒れ果てたらむと思ひきや、小さきながらも花崗石の墓石は立派に建てられ、新しき、清き、[illegible]の花[illegible]供へられたる[illegible]に、[illegible]まされたり。是を寺僧に問ひしに、[illegible]は[illegible]、[illegible]時々かの[illegible]を[illegible]、[illegible]の[illegible]なりと答へき。

# 傷心録

## 現ならぬ現

こしかた行末の憂きことを数ふれば、古人が鴫の羽がきに寝られぬ夜半をかこちしも、げに理りと覚ゆるぞかし。檐滴の響しきりに枕に音づれて夢結び難き一夜、幾聲の鵑啼、暗を縫うて行方もしらぬ我がこゝろ、いつしか現ならぬ現に迷ひて、あやしき思ひ雲の如く湧き出でぬ。思へば雪折竹に本来の面目を悟る眼もなく、ひぢをきつゝ西来意を察する才もなき我身、花に眠るも草にふすも、同じ一時と思ひはせで、空しき望にやゝもすれば天地を翔らむず燕雀の笑となるぞうたてきや。されど賤がまがきの紅一輪、給孤の園に咲ける祇樹の花と見るべき法もあれど、つら〳〵思ひ廻らせば、世事何物か逆にあらざるべきや。枕邊已に夢と共に去りにし我心、醒後何夢と共に還らず、夜雨蕭々として涙徒に落々、あはれほしや會心微笑の友、花を拈つて不解の解をなすもの。

## かぎりなき空のあなた

あはれ此の薄紫き空翠たつらぬきて、かぎりなき空のあなたに行かましかば、我が住いかに楽しかりなむや。夢か現か、我はそこに時と無常の境を脱して、かはらぬ縁の楽園を認むるなり。幽情化して石立ち、怨風結んで採青き千年萬年の恨、まこと有壽身軀の命ならば、生々世々の劫を血に染むる此願、此望み、さてはあやしき此涙、そもやいづこよりして来れるぞ。世に汚れしか、我が眼、天にひゞける妙なる楽も、地に降りては情なき嵐と化するなる乎。天に匂へる美しき薔薇も、地に咲きては忌はしき蔓と變ずる乎。見渡せば光絶えざる幾千の日月、長への春にかゞやきて、そよふく風も香はしき命をや運ばむ。されど夢ならでは通ふ方なき萬頃の怒濤、天を掠める波を渡はして、我等が途を遮るなり。帰去乎、帰去乎。帰りて故郷に安ずるもの、所謂天を楽しむもの乎。去つて而して忘れたる、所謂世を楽しむ乎、そも悩みとは彼の言乎、ただ我と我が悩乎。とまれにても偶像の國に入り得ざる凡夫は、あはれ、あたなるまことに魂のみぞ騒がれぬる。

## 傷心の魂鬼

口もて言ひ得ぬ、魂にのみ宿れる吾等こそ果敢なけれ。日と月とは廻れる丸き輪に、人と世とは消ゆる露の如しと世に云ふ、労生と云ふ、孰れか希望の綱につながれて、やがてこむ楽しき日に待つあるに非ざるべき。されど楽しき日の常に吾にのみ来れるを誰か知るや。望の門にたどり行く吾等、却つて之に背いて馳せつゝあるを知らずや。揺籃を大地とせる嬰児には、望はめぐれる獨楽の中にありなむ。情に絆されし戀にやつるゝ紅顔の子女、落花の風に向ひて、其身にたぐふ悲あるを思はず。花に酔ひ、蝶に狂ふ晩春の情、あはれ幾條楊柳、多少の啼痕を消さざるはなし。夢の昔にあやしくも今の命をつなぐ短暗春暇の身に至りては、泣んで合ふことも能はず、遅いて忘るゝことも能はず。昔日歌舞の地に衰残の黄花を擁する身には、空なるものは徒に傷心の魔鬼にあらざる乎、非

手。

誰人ぞ、かゝる冀を我心に植ゑし者は、天か、地か、人か、鬼か、迷へる夢か、將た悟れる現か。天涯渺として問へども答なし。はかなき世のならはしにおくるゝ身こそかへすぐも惜まるれ。

## 墓中の人

吁、我が傷める眼には世界は大なる墳墓の如く見ゆるなり。墓上に歌へる人を賢しと見ずば、そもや半百の命を如何すべき。「愛」は仰ぐに疲れて地に俯しぬ。白楊樹下、青塚相累るところ、見るところ何物なるべきぞ。渠れ未だ天女を夢みし處、白骨をみとむるを圖らざりき。哀れ其太息と共に消え去る影の搖曳として恨を惹くの長さ。黯然として一感咽すれば、身は石の如く固まり、心は氷の如く冷え、我はいつしか墓中の人となりにけり。

(明治二十六年六月)

## 今様三首

予性音樂を好む。隣家に笛を善くするものあり、明月の夜毎に弄せざることなし。獨り松下に立ちて之を聽けば、緩急切徐の音につれて、思ひはいつしか天半に翻(翔カ)り、身のいづこにあるやを覺えず。傾く月影に驚きて、やうやく伏床につけば、流風餘韻、徒夢を揺りて寝ねられず。即ち燈を挑げて左の今様を歌ひぬ。昔ながらの夜風、哀れをはこびて、須磨の浦曲の春の花、嵯峨野の奥の秋の月、身は早や六百年の昔にかへりぬ。

### 敦盛

須磨の浦曲の朝風に
　ぬしはふかれて消えはてぬ、
殘る青葉の笛のみは
　恨を千代にかけとてや。

### 忠度

末はけぶりの波路をば
　かねて漕ぐ身としりながら、
鎧の袖の藻鹽草
　沈めかねしぞ哀れなる。

### 小督

昔をしのぶ琴の音ぞ
　しられぬ中のいのちなれ。
月影さむく闇かなし、
　七百年の嵯峨の秋。

(明治二十四年頃)

## 雪中梅

雪と霜とにうづもれて
見るに影なき梅が枝は、
げにも浮身のうらみぞと、
誘ふ春風身にしみて、
咲かずば花も散りはせじ。
落花の風にうちむかひ
浮世をかこつ身の哀れ。

(明治二十四年頃)

# わがそでの記

Wenn man an dir Verrat geübt,
Sei du um so treuer ;
Und ist deine Seele zu Tode betrübt,
So greife zur Leier !

世をうきものとはたが言ひそめし。想へば袖ふたつには包みかねしわがこゝろ、うたてや年をへし我をねざめの友となりぬ。はつ夏の月いと哀れなる夜半、われともなしに起きいでゝ、簾のつま引き上ぐれば、落つるは露か、雨か。

秋ならぬ風に桐ひとは散りぬ。

里にには今はねなましものを、うとましの身の程や、心も遠き田ごえの里に、夕なみ千鳥あはれに泣きわたり、物さびしき空にたゞひて、峰の松風こゝろ共に行方もしらずこだかくも吹き合はすかな。

さらば、殘んのともし火かい上げて、人には見えぬわがそでの幾とせをしるさなむや。心むづかしうもつれたれば、太息のみぞいやまさりける。

をとゝしの春われ日光に遊びて病を獲てしかば、月のあひだは床に就き、歳のなかばを寝にすごしぬ。かくて病はいえぬ。

まことに病は親しむべき友にてはあらざりき。沈みもだえたるこゝろに人生は其憂鬱なる一面をもて迫るなり。樂しき、光ある世界はわれを去りて、悲しき暗き天地は、たより無き身をつゝむなり。涙をかくせし皮一重の、力無くうすれゆけば、泣くねをまぎらす矢だに心にまかせず。色あさましう衰へて、肉落ち、骨たてるかほばせに、幽かにあやしきひかりをうかぶるさま、はたこれ美はしとは言ひ難し。なべての人のうとみきらへる中に、限りなきふたつの世を敵として戰へる、病める人のこゝろは、涙に哀れむべきものぞかし。

われ病にかゝりて、こゝにまことの人生を見そめき。あだ波たてる世の常にかけはなれてここに静かなる寂しきまことの世相を觀じそめき。利に走り名にあこがるゝともがらの外に、眞の友情の貴むべきことを覺えそめき。あだに過ごせし幾とせの、悔多くつみ深きを想ひて、こゝに青春の夢つひえゆきて、勝事のとこしへならざるを嘆きそめにき。

かくてわれ、家にはなれ、わが懇しき人々にはなれ、是默思の友に、月照りにして東海のほとりにさすらひぬ。冬の日はいとあたりければ、風いたく身にしみき。

相模なる国府津の里にやどりし一夜、われあやしき思ひにうたれて、小夜更くるまで泣きくらしき。波の音も松風も、わが耳なれしには、寂しながらにあやしき闇にまよひしに、いとはた寒き枕のもとに涙のいと熱かりし。是夕都なる人にとて薄墨の色にあはれを籠めし、幾葉の文は、封じもあへず今さらにおぼれしが、われは今にいたるまで自ら其何の故なるを知らざるなり。

夜深くして夢に其人を見き。月の光は氷の如く冴えわたりて、そよとの風の音もなく、死せる如き天地の間に、わが其人はわれをながめてたたずみき。されど其おもては鉛の如く青白く、手にもてる薔薇の花は見るかげもなう枯れ凋みにき。

熱海のふた月は、まことに樂しきあはれ深き冬の暮らしなりし。

よそならば吹雪にとぢられて、日かげもうすき冬の眞なかも、名にし負ふ暖地なれば、こちふく風もさむからず。むつきはじめの梅が香は、はやくも春をつげそめて、野邊のやけあとの緑なすは、人の心もときめくころか。とまやどもに岩海苔のかをりせるもをかしく、蘆のやに心ぼそく立のぼる煙ものどかなりや。

海原とほく見わたせば、相模、安房の山々、雲かかすみのすがたおもしろく、大島がねにたつけぶりの、春風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし、はつ島わたり漕ぐふなうたの、寄る浪ごとに聞こゆるも床しく、魚見が崎のこなたより、渚をつたうて、砂白く、松青きほとり、濱千鳥のむれとぶさまもをかしうや。うしろには日金、十國の山々を負ひて、前には天空海濶の間に、一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかなかに及びがたし。

國府津の里にやどりし次の日、われ痾をやしなふべく是地に客となりぬ。

われに業ありき　今や之を捨てぬ、われに友ありき、今やこれに離れぬ。されど行李の裡に一巻の「はいね」集を収めたり。わが業は何こゝにあり、吾友はなほこゝにあり。されど『はいね』はわが爲には不幸なる友なりき。

如何なる星の下に生れけむ、われや世にも心よわき者なるかな。暗にこがるゝわが胸は、風にも雨にも心して、果敢なき思をこらすなり。花や採るべく、月や望むべし。わが思には形なきを奈何にすべき。戀か、あらず。望か、あらず。あはれ「はいね」はわが爲にこそ語りき。

われやまさなき人に物の哀れを知りそめき、思へば葉末の露のいとはかなき終りなりし。月影のまどかなる望もかつては其中に寫りしが、風そよぐ旦の野邊に跡も無く、もゝ夜のひじのはしがきに、君やいのちとかこちしも、思へばあだなる夢なりき。かくて、吾がこゝろはとこしへに癒えざるべく傷つけられき。わがこの思ひを誰にか語るべき。月の夕、雨のあした、われ『はいね』を抱きて共に泣きしこと幾たびか。

かのうるはしき風景に遇ふごとに、われは還らぬ昔を忍ぶなり。山のかたち、水のすがたは、わが心にさゝやきて、吾れは言ひがたき哀れを覺ゆるなり。人知れずしぼる袂に、われはいくその思をつゝみしか。あゝ魚見が崎よ、錦の浦よ、われ爾のために幾痕の涙をしるせしか。

月あかき一夜、われひとり浪打ぎはに佇みき。濱千鳥聲絶えて、浦風すめるそなれ松、浪の音のみいとさえたり。夢の如き水けぶりは、山の端白くとぢこめて、空には星の影まれなり。われ岸邊の松にうちもたれて、ふるさと遠く思ひかへしぬ。

想へばはるけくも來つるものかな。わが父母にわかれ、わが兄弟にそむきて、われやひとり何の爲に是地には漂泊へる。わが命をわけし弟は、われに先ちて死にたり、われを愛せし姉上もまたかへらぬべくゆき給へり、わが誓ひてし人は永くわれにそむきぬ。われや何の爲に獨り此世にはとゞまれる。山青く水白く、幾千よろづの是大地に、人や生るゝ何の因、何の緣ぞ。花飛び葉落ち風吹き鳥鳴く。合ふや柳因、別るるや絮果、何れ終りはおなじ流轉の世に、人や何を望みの五十年のいのちぞも。

月冴え波しづかにして、まことにしめやかなる夕なりき。おろかなるわれは爲すこともなう、小夜更くるまでたちつくしき。

またのゆふべ、われ『はいね』を携へて磯邊の丘のこだかきにのぼりぬ。夕日は山のあなたにかたぶきて、半天の雲は殘んの光に色づきた

り。大島山の夕けぶりは、薄むらさきにたなびきて、山光水色入日とともに黒みゆくにつれ、目もはるかなる帆かげの空に入るを、わが心はゆくへも知らずなりぬべう、悵然としてたちたるもりぬ、わが手は思はずはいれにふれて、わがめでよめる望みなき人は聞かくらむ。

想ひに、愛に、戀に、殘りなうされはてゝ、吾れはわだつみの情なく打ちよせたらむ屍のごと、是の荒れすさびたる、冷やかなる磯邊に横はるなり。吾れの前には海原あり吾がうしろには苦しみと悲しみとあり、かのなやましげに覊束なくも空行く雲はわが一生にも似たるかな。浪のよる見、鳥のなく聞けば、流石にすぎし年の忍ばれて、忘れし夢の今更にくりかへさるゝなり。靜なれ浪よ、鳥よ、わが此世のいのちは早く已に往にしを知らさるか。われは卷をとぢ面を掩ひぬ。

見わたせば、日は名殘なくくれはてゝ、里には燈火かゞやけり。山も鳥も限りなく小さく遠きこゝちして、脚下にひゞく浪の砕くる音も、得はるかにきこえ、身はやうやく是世にはなれて、奈落の底にも沈まむず覺えたり。われは心細さに得たへで、急ぎ歸り、きぬひき被きて臥しき。

熱海にゆきてより過ぎて數日、吾れは[illegible]外に故人を得たり。都なる吾が友嘲風來りたづねぬ。

嘲風は京都の人、吾れと共に大學に入りて、吾哲學を修めたり。かれは宗教哲學に志し、吾れは美學と文明史に力めたり、かれが穎脱の才を以て、われの魯鈍の質に配せむは、もとよりふさはしからじ。されど嘲風われを知り、われ亦嘲風を知り、われはかれに於て百年の知己を得たりしなり。そのころのかれは、今のわれと同じく、嬰なかりし。されば山巓水涯、憂を紓べ神を養ふに於て、彼れと吾れとは多く其行をともにしたりき。吾れ病みて床にあれば、かれ朝夕われを顧みき。われ旅に病を養へば、かれ三亭の路を遠しとせずしてわれをたづぬ。わが嘲風に負ふところ何をもてこたへむや。

嘲風來りてわれ『はいね』に背くこと幾日。嘲風わが爲に學室を言はず。われ嘲風の爲に烟霞を說く。月のゆふべ、伊豆山の古堂に嘯き、花のあした、茂木の山莊におとづる。都には得がたき樂なりき。

嘲風「ぐりるばるつえる」が悲曲『さっぽお』の一巻を携へたり。

熱海より南のかた、にしきの浦をつたひて一時代のみなとに達する間に一角、之を魚見が崎と名く。熱海を抜くこと一百丈、西は南山に下りて岸もにけづりたらむ如く、ある日われ嘲風と共にこゝに上りて『さっぽお』を讀む。是女詩人が入水せしと傳ふる『りゅかでぃあ』の岩は、是魚見が崎のそばにも似たらむかと想ひたればなり。

あゝ『さっぽお』よ。汝が往にし日の歌千たびのあとに、われあることを汝は知るや。一たびはあゝの詩はふりたるまゝに知られども、われは汝が名をきけば常に哀れを覺ゆるなり。世にたなごの哀れは多かれども、思ひはいつれひとつ魂に、うつる紫路の影よりかや。己れもひとも得しらぬ思ひに、心をやぶりて、山おろしに跡も無き、東偕前後のけぶりと立ちのぼる、あいかなる人の願は、あはれ、何人か罪なるか。おもへばまゝならぬ世なりけり、偽り多き世なりけり。

あゝ『さっぽお』汝はたぐひ無き詩人なりき。其奏づる琴にはうつし世ならぬ響を宿し、其歌ふ歌には天上の韻ありき。一くらすの人々は、汝を詩神の列に加へて『おりゅむぷ』のやしろに

祭りにき。されど其最後の幸は汝にあらざりき。

「さつぽお」は人の子なりき。人の子として戀てふものに憧れき。まことなき人はかれを愛し、まことなき愛はかれを惱ましき。あはれかれが望みたる幸福は、人間のものにてはあらざりし。かつてまことを誓ひてし人は、擲げに、胸に蛇ありてかれを死ぬべうかみぬ。不信充ち虚僞みなぎる世に、かれ泣いて悲めども時すでにおそし。「ふぁおん」はかれを欺き、「みれつた」はかれをうらぎりぬ。

かれ乃ち夜叉となりて匕首をとれり。かれは人の子なりければなり。されど事果さゞりき。瞋恚の炎胸に燃えて、かれ將に悪魔とならむとする時、天上の光かれが胸にかゞやきて、かれは是世の人に非ざりき。かくてかれが最後の跡は「りゆかでいあ」の巖頭にのこれりき。

あゝ僞信者をひたす是濁世にわれはうたふ「さつぽお」を悲むの情にたへずなり。「さつぽお」よ、二千年、星うつり物かはれども、世のいつはりぞ今もなほ昔の如くなる。すまじきものは戀なりけり。

世に「まことしき」は得がたし、輝かげて望をおきしてふ人の、まさならも卑しきさまを表はせるを見むほど、苦しきはあらずかし。わが戀人の僞りを見むよりはむしろわが身の死にたらむかた、いかにはるかに幸なるべきぞ。「さつぽお」の死や晩かりし。

日は西にかたぶきて、海づらひろくかゞやきわたる。われは思に沈みてがけの上に坐しぬ。見わたすかぎりのあなたより靜かにゆるやかなるうねりの岩ちかくうち寄するさまは、われに一種のおごそかなる感情を起さしめぬ。何處よりとも無く、わが耳ちかくさゝやくものあり。起ちて脚底をみおろせば、名にし負ふ魚見が崎の深淵は暗々としておろちの口を開きたらむ如し。われは慄然として覺えず卷を落したりき。

空には日月の光あり。われ天を仰いで嘆息する事の多時、これよりわれは永く「さつぽお」を讀まざりき。

われかつて或る詩人に問ひけらく、おん身が麗はしきことばもて歌ひよめりしかの美はしき乙女はいかにせし。おん身の眼にはなど光無きぞ。彼の答へはまことに哀れなりき。

いなとよ、かの光こそ人の信と共に失せしなれ。胸にほのほの消えたればふたたび歌はかゝらぬ戀の灰なるよ。かれは「さつぽお」にはあらざりき。

十國峠の登臨はことなう壯快なる遊びなりし。足柄は嶺より天城につらなる、所謂富士火山脈の一峰にて、いたゞきに上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國五島をながめ得べしとぞいふなる。ある日の雲はれわたりたるにわれ嘲風とこゝにあそびき。

山のいただきは熱海より五十丁をいでざれば、いたう高しと言ひがたし。されど相駿二州にまたがりて、北は足柄、箱根、富士より、南は天城、神並より大島、三宅の山々をのぞみ、西は江の浦、しづ浦を眼下に見おろし、名にし負ふ田子の浦づたひに、清見が關より三保の松原かけて、はるかに遠江なるおまへが崎にいたるまで。東はまなづるが崎のあなた、小田原、こゆるぎの磯べにそうて、江の島、鎌倉の山々より、田越、三崎のはてにいたるまで、さがみ灘をつゝみてかすかに安房、かづさの連巒をのぞむ。形物の壯大、たぐふべきものなし。

ことに美はしきは、江の浦より清水にいたる

までの田子の浦のけしきなりけらし。富士の裾野を縫へる小松原の濃きみどりなるが、かんばら、興津わたり、淡きむらさきにうすれゆけるさまなんど、心ゆくばかりうれしく、天つ乙女のあまくだりけむ、三保のまつ原の祠かすみにかすめるが、此世ならず見ゆるも床し。仰げば高き富士がねの千古の姿は、言ふもおろかや。

あゝ誰がつくりなしけむ自然のうるはしさよ。

如何なれば人のみぞかくはけがれたる。

函根の峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大さなりしが、谷ひらけ風加はりて漸くひろごり、はては八峰の全面を掩ひて蓊然として西の方にたなびきぬ。愛鷹のみねにかゝるころ、富士おろしにさからひたるにや、雲行忽ち天に向ひて錫抜萬丈、二山の間に白雲の壁を築けり。其頂き山風に散じて満天を覆ひ、濛々として咫尺をわきまへず。われは衣襟をあはせて凝睇多時、嘯風杖を揮うて天を劃し、快哉を絶叫することニたび。しばらくにしてそら晴れて函嶺の崔巍、芙岳の清容もとの如し。満天の雲霧われそのいづこにゆきたるやを知らず。

あゝ天地風雲多し、人間なにぞ涕涙のしげきや。

嘯風われと居ること三旬、かれ事をもて郷にかへり、われ復た「はいね」と残りぬ。

わが隣室に少女あり、旅窓のつれづれを慰むとて、われに水仙花を送れり。われうつはに水さして朝夕にこれを養ひしが、幾くもならずして萎みき。

水仙花、水仙花、など凋みたる。わがこゝろざしの足らずてか。なが思ふことの残ればか。

おゝおろかや、思ひ根に生ふればこそ、色も香もあるなれ。などあだびとの手にやしなはるべき。などあだびとの爲にかたちつくるべき。

水仙花、水仙花、世はにごり、人はけがれたり。なが生ひさかゆべき、野邊には是世ならぬ露ありや。われにはうらみあり、ひとにはわらひあり。世には恥なるもの無し。神のみくにの遠ければ、悔い改むすべも知らず。あゝわれや汝にたぐふべきか。

哀れなる水仙花は、咎なくして終に凋み果てにき。

彌生のはじめわれ熱海を去りて、清見が關の古跡をとひぬ。

松風遠く吹き合せて、浪の音も哀なる物思ひまさる夕べなりき。われはひとり宿を立ちいでて、三保の松原にあそぶ。入日の影はくもにのみ残りて、月未だ上らず。田子の浦面の夕なぎに、千鳥の聲もいとまれなり。江尻、しみづをはやすぎて、龍華寺の輪塔を右手に見つ、袂にさむき山おろしに、入相の鐘を吹きおくりて、はつ春の哀れ一しほ深くや。三保にたどりつけるころは、月やうやく上り、清見潟の水雲は遠路はるかにたてこめて、富士の高根に雪の色しろし。見わたせば一帶の松林、木ぶかくも生ひ繁るかな。木立のふるへる月のあかりに、残んの雪の色さえて、杜の下道杳かなる、夜に落つる影も無し。波の音やうやく近くして、われは羽衣の松にそうて立ちぬ。

羽衣の松は、わが年久しく思ひこがれしものなりき。よしされば、こよひ月とともに立ちあかさむかな。

松は早く枯れて、幹のやれたるが残れり。そのもとにゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして見えわかず　あはれ波の音と松風のみぞ、今も昔にかはらざりけめ、

われは夜もすがら松のこかげに泣きくらしき。そのなにゆゑなるを覚えざりき。頼りなき

身のたゞひとり、するがなる三保の松原に泣きあかすよと思へばわれは涙のながるゝを忍びあたはざりしなり、吾れ泣けばとて、誰か哀れと見るべきぞ。われ笑へばとて誰か樂しと見るべきぞ。ひろき天地の間にわが胸の琴は群をはなれし雁がねの、たぐひなき寂しき響きすなり。われはたゞかく思ひて覺えず號哭しき。

想ふむかし、われにもあまつ乙女ありき。されど其乙女はまことあるものには非ざりし。かくてあだなる思ひに吾が胸はやぶられき、いえざるべう傷られき。よろづのさいはひはかへらざるべう吾れを去りき。

月は半天にのぼりて、地には人のけはひだにあらず。あゝ月よ、長へに其歩みを止めよかし。永久の夜の是世界を覆ひつゝめよかし。風よ吹け波よくだけよ。松は其ひゞきをならせよかし。かくて人間の聲を天籟の中に埋め了れよかし。

夜しづかにしてわが聲は遠く松原のあなたにひゞきわたれり。されども月にうつれる吾影はひとつなりき。

是夜夢に天女を見しが、かれ羽を持たざりき。そのしろき百合の如き指もてわが胸を抑へしとき、われはことばなく泣きくづをれて、このまゝ露となりても、解けよかしと願ひぬ。されどわが耳にさゝやけるかれが言葉は、われを咀へるものなりき。さめてのち、われ天女の名を問はざりしを悔みぬ。

清見が關の幾夜はかゝる思ひにあけたりき。彌生もなかばすぎて花やこの世の樂しき時を、われはまたあてなき旅にうきみをやつしぬ。あるは靜浦のほとりにさすらひて、櫻がしまの遺韻をたづね、あるは伊豆の山にわけ入りて修禪寺に薄倖將軍の墓をとぶらひ、ゆき〳〵てうづきのはじめ、湘南に入りて田越の里に客となりぬ。あゝわれいづこにわが滿足の地を求むべきか。

潮風、芥舟、都より來り訪ふ。われ又「はいね」の外に友を得たり。薄暮潮に乘じて海に漕ぐ。潮風櫓をとりて立ち、われ舳によりて「はいね」を讀む、芥舟舷をたゝいて是に和す。されど三たりの感ずるところ相同じきを得べきか。

* * * *

半歳の漂浪に病いえたれども、わが心のきずはいつしか新しき痛みを感じそめぬ。われつとめて笑へり、人はその笑の如何ばかり苦しきかをしらざるなり。

飛陽つなぎがたく、流光さゝへがたし。嘲風佳耦をむかへて室に芬蘭のにほひあり。われ殘燈にむかひ孤影蕭然として今も尚ほ「はいね」を讀む。

Einsam klag' ich meine Leiden
Im vertrauten Schoss der Nacht;
Frohe Menschen muss ich meiden,
Fliehen scheu, wo Freude lacht.
Einsam fliessen meine Thränen,
Fliessen immer, fliessen still,
Doch des Herzens brennend Sehnen
Keine Thräne löschen will.

はつ夏のしめやかなる夕、
相模なる田越の里にて、

（明治三十年六月）

# 自殺論

行ひ志と違ひて望を前途に喪ふ時、或は世事の非なるを慨きて悲憤の情に勝へざる時、或は恥を含み辱を忍びて世に立つ能はざる時、人往々自ら天命を棄して其の生を絶つ。洵に悲むべき現象なり。廉恥を尚び氣概に富める吾國人の間には殊に此現象の繁きを見る。

自殺は必ずしも惡しきことに非ず、隨分時と場合によりては却て生あるを恥ゆるも及ばざることあるべき也。されど苟も人生一切の義務を拋却し、謝絶して、尚ほ且其の罪惡たるを免れ得むが爲には、其の制約として如何なる事情を須要とすべきかを考へざるべからず。一時の氣勢に驅られ、前後の分別無く、一向に死を急ぐが如きは、深く戒愼すべし。又斯の如き自殺に對しては社會は區々たる憐憫の私情を捨てて公義公德の名によりて、斷々乎として最も嚴重なる制裁を加へざるべからず。

然らば如何なる場合に於て自殺は道德上の罪惡たるを免るべきか。

基督教徒、若くは基督教的倫理學者は自殺を以て神に對する義務を缺くものと說く。是の如きは一笑にだも値せず。元來所謂神たるものも一の迷信ならば、是の妄想の假設物に對して、實在者たる人間が何等の義務を有すべき筈無ければ也。よし假りに是の如き妄想を眞なりと許すも、吾人自ら神の所生たる吾人の生命に關係するは不敬の所爲なりとの自殺を難ずる同じ理由によりて、自生をも罪惡とせざるを得ざるべし。人は衣食住によりて自己の生命を繼續し、疾病あれば攝御醫療を加ふ、之れ即ち神の支配せる生命に干涉するものに非ずや。もし生活を自然の動機なりと謂はゞ、均しく自殺をも然りと謂ふことに於て百千の例證立地に辨ずべし。

又自殺は自己に對するの義務を缺くと說くものあり。然れども自己に對する義務とは所詮自家撞着の概念ならずや。一切他を離れて自己なるものの倫理學上果して何等の意義を有し得べき乎。由來義務とは對他の概念なり。吾人が自己を修むるの義務ありと思惟するは、之れ自己が他に對する義務を遂行するに必要なるより起れるもの、苟も他に對して何等の義務を有すること無くば、自己は全く道德の世界を離れたる一自然物に外ならざるべし。是の時に當りては自己に對する義務と云ふが如きは全く無意義の文字ならずや。

故に自殺が道德上の價値を有するの唯一の制約は、對他の義務より生ずる關係に存すべきことは勿論、更に其の罪惡と爲り得る條件も、爲り得ざる條件も、其に總に存すべきこと明けし。

吾人の生活は所詮義務の連鎖なり。家にありては父子、兄弟、夫婦、主僕たり、社會國家に立ちては公民、臣下たり。其他師資、友朋、鄰保、親戚に至るまで、分に應じて各々其の盡すべき義務を有せざるなし。一身を以て萬境に對す、其の遂行すべき業務は生を累ぬるも是れ足りとせざる也。もし吾人の生活にして一定の限時方處に制限せられず、其の能力はた圓滿ならましかば、吾人希くは平等博愛を以て實際の主義とせむ。而かも有盡有漏の身神には、素より是の事あるを得ず、是に於てか義務に大小に隨つて行爲に先後と輕重との差別あり。是に於てか道德は直觀のみを以て完きを得ず、良心は教育を須要とし、道德的生活の一部は考察

的生活となるに到る。夫の自殺と云ふものにして、若し一切義務の商量上、自己生存の利益を認めざる健全なる意識に本くものならむには、之れ實に罪惡として批難すべきものに非ざるのみならず、却て一個の道德的行爲として是認せらるべき者たり。

げに人は如何なる場合に於ても其の生命を維持すべき義務あるに非ず。若し世界中の何人も我が存在の價値を認めず、却て我が死滅によりて幸福を感ずるが如き場合に於て、吾れは是のあらゆる苦痛を忍びて尚ほ且つ是の世に生存らへざるべからざるか。是の時に當りて自殺は決して何人に對する義務をも缺如するものに非ず、されば罪惡に非ずして、單に一個の不幸なる生靈の不幸なる最後に過ぎざるべし。基督を賣りたる後イスカリオテのユダは何が爲に長へに生存せざるべからざりしか。

若し人あり、一切義務の商量上、自己の死は自己の生よりも却て國家社會に有益なることを確認し、而して是の確信に本きて自殺を決行したりとせば、是れ實に志士仁人の行爲として賞讃せらるべきなり。世には俗情を以て一切の自殺を排斥する者あり。如何にも、失戀に泣き、不幸に泣き、自己消化器の不良に原因する一般感覺の不快を以て、厚顏にも社會人生の缺陷に歸し、鬱悶憂憤の餘り、一死僅に救濟の道を求め得たるが如き婦女子の輩は、實に薄志弱行の甚しきものにして、當然怯懦卑屈を以て非難せらるべき者たり。然れどもあらゆる自殺は必ずしも然らざる也。且夫れ人は死すべき時に死せざれば、却て其の生あるを慚ゆることあり。想ふに世間當に死すべくして而して死し得ざるもの果して幾何あるべきぞ。自殺を卑怯なりとするものは、徒に自殺をだに爲し得ざる卑怯漢の更に數多きを考へよ。吾人は溢を竊いで生きるものが操を立てゝ死するものよりも、如何か勇敢なるやを知る能はず。彼の徒に社會國家の禍となりて、而かも尚ほ其の蠢爾たる生命を維持する輩をして、自力によりて爲し得べき最高なる道德的行爲の何物なるかを覺悟せしむるは少くとも彼等の患害を除去し、道德力行の道に就かしむるに於て必要ならずとせざる也。

然れども死は之れを再びすべからず。吾人は一方に於ては生命の絶對的に貴重なる者に非ざるを信じ、他方に於ては自殺の必ずしも倫理に反かざることを斷言するを憚らず。然れども吾人は同時に、世人が是の大事件の決行に對して如何に重大なる責任を有するかを自覺し、其の措置の極めて愼重、極めて公明なるべきを勸告す。人生行爲中尤も醜陋なる者の一は、失心の死なり、狂亂の死なり、卑怯の死なり。或は償ふ可からざるの罪過を犯し、或は義務の重荷に堪へず、或は私情に束縛せられ、一死以て現世の禁累を脫せむとするが如きは、社會國家の倫理上許す可からざるの大罪惡たり。死を以て一切罪過に對するの辯解なりと思惟し、更に一層重大永久の罪過を加ふる所以なるを知らざるもの、其の愚や則ち憫むべしと雖も、其の罪や恕すべからず。社會は其の私情に囚はれて公義を顧みず、婦女子の涕涙に興ひて大丈夫の斷裁を躊躇せず、彼れ死せり、其の罪怨すべしと云ふ。あゝ、是の如くにして誤つて風を成さば、耐持堅忍、以て最後の義務を遂行するの美德は却て臭嘗として非難せられむ。我が邦人由來死を輕んず、國家の威力は實に是の死を輕ずるの士氣に歸因するもの多しと雖も、以て卑劣の則となすに足らず。吾人は是の死を恐れざる氣質の中、更に義務を重んずるの習性を涵養せむことを欲す。其の勇氣を負ひ、潮れなくして匕首を弄する輩に向つては、社會は寧ろ一種の制裁を加へざるべからざるなり。

（明治[illegible]）

# 清見寺の鐘聲

夜半のねざめに鐘の音ひゞきぬ。おもへばわれは清見寺のふもとにさすらへる身ぞ。ゆかしの鐘の音や。

この鐘きかむとて、われ六とせの春秋をあだにくらしき。うれたくもたのしき、今のわが身かな。いざやおもひのまゝに聽きあかむ。

秋深うして萬山きばみ落つ。枕をそばだつれば野に悲しき聲す。あはれ鐘の音、わづらひの胸にもの思へとや、この世ならぬひゞきを、われいかにきくべき。怪しきかな、物おもふとしもあらなくに、いつしかわが頰に涙ながれぬ。

間どほなる鐘の音はそのはじめの響きを終りぬ。われは枕によりて消ゆるひゞきのゆくへもしらず思ひ入りぬ。

第二の鐘聲起りぬ。夜はいよ〳〵しめやかにして、ひゞきはいよ〳〵冴えたり。山をかすめ、海をわたり、一たびは高く、一たびはひくく、絶えむとしてまたつゞき、沈まむとしてはまたうかぶ。天地の律呂か、自然の呼吸か、隱としていためるところあるが如し。想へばわづらひはわが上のみにはあらざりけるよ。あやしきかな、わが胸は鐘のひゞきと共にあへぐが如く波うちぬ

おもひにたへで、われは戸をおしあけて磯ちかく歩みよりぬ。十日あまりの月あかき夜半なりき。三保の入江にけぶり立ち、有渡の山かげおぼろにして見えわかず、袖師、清水の長汀夢の如くかすみたり。世にもうるはしきけしきかな。われは磯邊の石に打ちよりてこしかた遠く思ひかへしぬ。

おもへば、はや六歳のむかしとなりぬ、われ身にわづらひありて、しばらく此地に客たりき。清見寺の鐘の音に送り迎へられし夕べあしたの幾そたび、三保の松原になきあかしゝ月あかき一夜は、げに見はてぬ夢の恨めしきふし多かりき。

六とせは流水の如く去りて、人は春ごとに老いぬ。清見潟の風光むかしながらにして幾度となく夜半の夢に入れど、身世怱忙として俄に風騷の客たり難し。われ常にこれを恨みとしき。

この恨み、果さるべき日は遂に來りぬ。こぞの秋、われ思はずも病にかゝりて東海のほとりにさすらひ、こゝに身を清見潟の山水に寄せて、晴夜の鐘に多年のおもひをのべむとす。あゝ思ひきや、西土はるかに征くべかりし身の、こゝに病軀を故山にとゞめて山河の契りをはたさむとは。奇しくもあざなはれたるわが運命かな。

鐘の音はわがおもひを追うて幾たびかひゞきぬ。

うるはしきかな、山や水や、僞りなく、そねみなく、憎みなく、爭ひなし。人は生死のちまたに迷ひ、世は興亡のわだちを廻る。山や、水や、かはるところなきなり。おもへば恥かしきわが身かな。こゝに恨みある身の病を養へばとて、千年の齡、もとより保つべくもあらず、やがて哀れは夢のたゞちに消えて知る人もなき枯骨となりはてなむず。われは薄倖兒、數ならぬ身の世にながらへてまた何の爲すところぞ。さるに、をしむまじき命のなほ捨てがてに、ここに漂浪の旦暮をかさぬるこそ、おろかにもまた哀れならずや。

鐘の音はまたいくたびかひゞきわたりぬ。わがおもひいよ〳〵深うなりつ。

夜はいたく更けぬ。山と水と寂寞として地に横はり、星と月と寂寞として天にかゝれり。うるはしの極はみかな。願はくは月よ傾かざれ、星よ沈まざれ、永久の夜の、この世の聲色を掩ひつゝあれかし。されどわれには祷るべき言葉なかりき。

最後の鐘聲おこりぬ。餘音とほくわたりて、到るところに咏嘆のひゞきをとゞめぬ。うれしの鐘の音や、人間の言の葉に上りがたきわがいくそのおもひ、この鐘ならで誰か言ひとかむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

年を越えてわれ都にかへりぬ。わが思ひまた胸にむすぼれぬ。夜半のねざめに清見寺の鐘聲またきくにかなはず、われは今に於ても幾たびか思ひ出で、一唱一語以てわがこの思ひを言ひあらはさむすべもがな。かくて月あかき一夜、清風に向ひて長く嘯かなむ。わが胸のいかばかり輕かるべき。

(明治三十四年五月)

# 無題集

(一)

吾がこゝろ、
　波にも似て砕けたるか、
など聞かなる儘に寫さざる、
　大空高く澄みわたる月。

(二)

かつてこの世、
　かゝ途は狭からざりしを
今のわが身の
　老いぬるぞ口惜しき。

(三)

はかなくも立つ煙かな
　行方も知らず立迷へるさまに
わが心にも似たりけるよ

◎

君よ、わが名を問ふ勿れ、
　別れてはまた逢はるべき吾ならず、
見ずや、空ゆく雲の右と左を

(四)

さら〳〵と
　悲しくも響くか、蟲の小川よ、
やがては大海の中に沒すべきなれど。

(五)

昨夕、吾うるはしきものを見き。
　露重けなる白百合の花に
光やさしく照りそへる月。

(明治三十四年六月)

# 思ひ出の記

如何ならむ野の様なりとも、都のわづらはしきよりはと思ひたちて、過ぎし秋の暮より居を熱海の辺りにさだめぬ。訪ひくる人もさすがに稀なれば、世を外なるすまひ、わびしくもまた長閑なりし。

鴫立つ澤のほとりなるわが宿より、相模灘の眺めいとひろやかなり。東は平塚、茅が崎の汀をつたうて江の島、鎌倉の浦々より、三浦半島の断續を雲霧の間に望むべく、晴れわたりたる空には、安房館山あたりの山、遙にその間にながめらる。西は小磯、小田原のあなた、足柄、箱根より伊豆の連山をたどりて、遠く稲取のみさきまで、色おもしろう薄れゆくさま、山のすがたまたあるまじくうるはし。南は遠洋の煙波をうけて、大島山青螺の如く横はり、ゆくへもしらず立つ煙の、色さまざまのたゞずまひ、心ゆくばかりなり。

心を傷ましむるかな、見渡すかぎりのながめは、一としてわが曾遊の地ならざるはなし。今は病ある身の、心にまかせぬ事多きこそうたてけれ。夕べに病にたふれ入りて、こしかた遠く思ひ起せば、今のわが身にひきくらべて、悲しきことのいひしらず湧き出づるに、いつしか涙の流るゝを覺えず。あゝいかにうるはしく天に輝やけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にありて幾時ぞや、げに見はてぬ夢の昔にでもはかなきは、わが十年の過去なりき。

今のわれはおもはぬ地にさすらひの人となりて、いたづらに曾遊の山河を望める身ぞ。秋くれて冬來り、小楢が末に霰たばしる、あはれ凋零のわが身にも似たるかな。萬山黄ばみ落ちて野に悲風あり。かゝる時にこそ思ひある身の哀れは知らるゝなれ。

憶へばはや八年の昔とはなりけるよ、足柄山の奥にゆきくれて、豐原のなにがしが、茅屋の跡をたづねしは、春まさに暮れなむとして、竹の下道そこともしも見えわかず、十日あまりの月影に、曾我野の原もおぼろにして、やうやく國府津の里にたどりつきしは、あはれにもまた興深かりし旅なりき、その折つれだちし友は、わが朝夕よりの知己にて、この世をすて、隠れじとこそは願ひしが、今や身世を異にして天涯相見るに由なし。われひとりのみさすらひに相見む折の義をかあるべき。あはれはかなき人の遭逢かな。山河の姿ところへにかはらざるは、はかなき人に何思へとや。

足柄の嶺、箱根の山、伊豆の浦づたひに、わが思ひひろびろはるかなり。箱根連嶺の盡くるあたりぞ、熱海のかたなるべし。

あゝ熱海、われにとりては如何になつかしき土地なるよ。春ごとにわれは老いて、大磯は旦暮の如くたちはれども、熱海にくらしゝ日こそいかばかり長く覺えしか。かの時は今のわれの如く、身にも心にもわづらひあるわれなりき。一巻のハイネ集を旦暮の友として、うきことしげき此世をはかなくらさむと、あはれにも思ひさだめてき。今にして思へば、かゝる味無の中にわがいひしらぬ幸ひはありたりしなり。わが孤獨を慰めむとて、わが友曙風、都よりたづね來りき。あゝいかなる歡びを以て、われはわが友を擁きしぞや。朝な夕なに、月に、夕べ、語りもし、語られもせしこの世のうきわざくに、われはいくその涙をそゝぎたりけむ。友はまことに情ある人なれば、心よわきわれに味嘆

のたのしみを禁ぜざりき。ある日、魚見が崎の斷崖に上り、共にグリルパルツェルがサッポーの悲曲を誦みて、たのみがたき世の事、人の上の、古も今もかはりなきを想ひ、人生の悲哀とこしへに盡きざるをかこち、あはれかゝる斷崖の上より、希臘の女詩人はその最後の救ひを求めけむよと語り合ひし時、われは崖下千尺の碧冥に見惚れて、慄然として目さめたるが如きを覺えたりき。かくてわれは友に語りき、サッポーの死や遲かりしと。あゝこの日、いかに樂しかりしよ。わが薄倖の生涯にも、なほかゝる福祉はありけるよ。思ひ出だすだに、わが胸の物狂しうとゞろくこそ怪しけれ。

うるはしき日は夢の如く消え去りて、我が思ひのみぞ獨り老いにける。嘯風今は西の方歐洲に去りて、際遇われと同じからず、たゞ曾遊の興會、さすがに忘じがたくてや、この春のはじめの文に、今猶ほ舊を熱海におとづれし日ぞなど書き送りけるこそ懷かしけれ。今や世にふたりなき友と、海はるかにわかれ住みて、互に孤獨の生を送らむは、まことに悲しからずや。

見渡せば沖の小島と詠まれけむ、初島わたり漕ぐ船の、行方は何處、伊豆の方なるべし。南、天城の山嶽蒼々として雲表の天を限るところ、またこれわが曾遊の跡ならずや。二歳前の冬の最中のことなりしが、われ箱根を踰え、三島、修善寺よりこの山ふかく分け入りて下田の港に泊り、白濱、稻取の浦をつたうて半島の東岸を廻りたりき。名たゝる險難の土地とて、もとより車馬の便りに乏しく、三十餘里の惡路を物ともせずに歩みしは、げにわれながら健氣なりき。さるにても人の身の頼み難きことよ、二歳後の今のわれはいかなる態ぞ。旦夕の保生に心を勞して、遣悶の酒また多く用ふべからず、浪々として懶怠の月日を送る、おろかにもまた憐れならずや。あゝわれ何時の日かまた登攀の壯遊を試み得べき。

江の島、鎌倉の山水はいふまでもなくわが舊年の知己なり。わけて田越の里におかしくらしし幾春秋こそ心ゆくばかり偲ばるれ。田越川のほとりに六代御前の古墳あり、われこゝに佇回して、哀れなる平家の末路をおもひうかべしことそも幾度なりけむ。このうたかたの生涯に、われ多く望むところ無し、たゞ數ならぬ身のなほ願ひ得べくんば、わが末路の願はくば平家の如くうるはしかれ。われはかゝる思ひにかきくれて、星合の空に七百年のむかしをたどりたりき。

三浦半島のつくるところ、地低うして海に沈み、房南の山脊としてその上に浮ぶ。あゝかしこにもまたわが思ひはかゝれるよ。われ大學に入りし歲の春なりき、友と共に、東、總房の海涯に沿うて九十九里の長灣より、小湊、勝浦、天津の浦々をたどりて白濱、根本の岬をめぐりし、道にも樂しき旅なりき。爾來春秋いくたびか去來して、われまたいくたびか北條館山のほとりにさすらひき。あるは、那古灣頭の夕照にあびて、友と自然の色彩を論ひ、あるは根本の海濱に倚りてローレライを歌ひしは、光景宛として尙ほ眼にあれども、早く既に八歲の昔とはなりけるよ。時は逝水の如くしばらくも停まらず、人は年ごとに老いて青春はやく衰れなむとす。心を傷ましむるかな。

あゝ湘南の風光うるはしからざるに非ず、たゞ懷往の情日に切なるを如何にすべき。世にも人にも離れたる身にしあれば、頼もしからぬ行末かけて、われは何の望むところぞ。たゞ言ふまじく憶ふまじき過去の今なほ夢に入るこそうれしけれ。

（明治三十四年五月十日、湘南の寓居に於て）

# 況後録

而此經者。如來現在。猶多怨嫉。況滅度後。（法華經法師品）

一

伊東に死なず、龍の口に斬られず、不思議に存へし命も、此處佐渡が島を今は最後の地と覺ゆるぞ。あら嬉しや、人々、此程の喜びをば笑へよかし。日蓮程の果報の者また世にあるべしや。古より君の爲めに死せしもの、親の爲めに死せしもの、妻子財寶の爲めに死せしものはあれども、法華經の爲めに命を捨てしものありや。是の教の爲めに臭き頸を刎ねられむは、砂に黄金を代へ、糞に米を替ふるに同じ。今こそは霜露の日影を待つばかりの命ながら、化城の迷ひ遂に去りて靈山の開顯眼前にあり。頸は鋸にて引きもせられよ、胴は稜鋒もて貫かれもせよ、足には絆しを打ちて錐揉みにもせよ。この息の根の通はむ程は、南無妙法蓮華經の聲をばよも絶たじ。

吾れは是れ粟散の邊土、安房東條の旃陀羅が子、身賤しくして性劣れり。智解に於ては天台、傳教が千分の一にだも及ばじ。されど法華經の行者たるが故に、即ち是れ一天の眼目、四海の柱石たり。六難九易の教、三障四魔の説は素より熟く知れり。唯々末法不祥の世に生まれたる身の、法王の宣旨默し難く、身命を抛つて救世の大願に志し、こゝに權實二教の軍を起し、忍辱の鎧を着、妙教の劒を提げ、一部八卷の肝心、妙法五字の旗を指し上げ、一代の風雲を捲き起こして折伏の戰に從ふこと、こゝ二十餘年。あはれ法華經の行者が爲すべき程の軍は、日蓮ほど仕遂げたりと覺ゆるぞ。是の經の爲めには大覺世尊だに九横の大難に値ひたまひき。不輕菩薩は杖木瓦石を被りき。竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印をあてられ、天台大師は南三北七の仇となり、傳教大師は大衆に惡まれ給ひき。日蓮こそは國主に憎まれて追はるゝこと二十餘度、敵人の兇害に臨みしこと三たび、一度は頸の座に据ゑられ、二度は遠流の罪に行はれて、今やこの北海の孤島に、明日をも知らぬ命とはなりたるぞ。あら嬉しや、喜ばしや、古賢先聖だに讀み得ざりし妙法の極意をば、今ぞ日蓮こそは讀みたんなれ。勸持品二十行の偈は、日蓮だに此の國、此の世に生まれ、別して此の島に流されずば、世尊一代の大妄語となり果てなむず。如何に人々、一代聖經の付屬はまさしく日蓮が頸に懸かれりと覺えたり。是れ程の譽れをば悦へよかし、是れ程の慶びをば笑へよかし。日蓮最早やこの世に望む所無し。

されど、顧みれば心地好きわが越方かな。三類の強敵は吾が爲めの善智識ならずや。北條氏無くば法華折伏の本意を如何にすべき。末法付屬の未來記は、まさしく日蓮が生涯に記されたり。刀杖瓦石もて身に流されたる日蓮が血潮は、やがて妙法勝利の願文に染められたり。昔者半偈の爲めに體を投げ、身を燒きしものだにありしを、日蓮が身の幸ひを如何にとか見む。中にも龍の口の頸の座こそ面白かりけれ。いでいで一期の思ひ出に、日蓮が今生の不思議を書

き遺さむず。

## 二

去んぬる文永五年の正月、西戎蒙古國より我國へ牒狀あり。文辭倨慢にして、まさしく侵逼の禍心を露はせり。鎌倉殿を初めとして國の上下齊しく罵り騒ぐのみにて、民に安き心も無し。愚なる人々かな、斯程の事は日蓮既に文應の昔に勘へ置きたりしものを。國に賢人なんどもあるならば、夙に用ひて禍を未然に防ぎたりしならむに、今に及びて眉に火の附きたらむ樣に狼て騒ぐ連の可笑さよ。愚昧無道の鎌倉殿も流石に今は目覺めたるらし。いで〳〵再び安國論の正義を示して一世の迷夢を驚かすべし。是れ、身の爲めに申すに非ず、神の爲め、君の爲め、國の爲め、一切衆生の爲めに申すにこそ。

そも〳〵安國論は日蓮一期の遺鑑、本化妙宗創業の大本なるを以て事煩はしけれども重ねて是れを申さむか。要は金光明經、大集經、藥師經の三災七難の佛讖に本づき、謗法の罪を改めて正教の擁護に歸らしむるにあり。數十年このかた、天變地夭頻りに起り、飢饉疫癘、人、下[illegible]は、偏に是れ謗法の罪に坐す。そは正法退き滅ぶれば、諸天善神共に此の國を去りて、邦土忽ち魔界となればなり。當今、佛閣甍を連ね、經藏軒を並べ、僧は竹葦の如く、尼は稻麻の如しと雖も、皆是れ天魔破旬の徒、解脫同相の衣を纏へるもの、諂曲にして人倫を欺誑し、邪惡にして魔界の眷屬たり。就中、近代の法然。捨閉閣拋の四字を掲げて一向專修の念佛を唱へ、一代五時の肝心たる法華經を無用のものと誹謗し、其の教天下に蔓りて人皆是れを信ず。善神こゝに退き、惡鬼こゝに代はる、天下の災難洵に以あるなり。今や聖經示す所の七難三災、唯其の二つを餘すのみ。人は既に疫に苦み、日月既に蝕し、星宿既に列を失ひ、風雨既に時に非ず。今より來らむものは夫れ自界叛逆難と他國侵逼難とならむか。前證既に爭ふべからず、何ぞ後驗の違はざるを疑はむ。あはれ、是の國久しからずして内亂あらむ、又久しからずして外寇あらむ。今に於て計を運らさずんば、夫れ岌々乎として危い哉。施すべき道は唯一つあるのみ。畢竟念佛は墮獄の業、禪は天魔の業、眞言は亡國の宗旨、律は國賊の事。是等一切の邪宗を斷滅して、無二無三、唯一乘の法華に歸依し給はゞ、災難消除、國土安全なるべき也。

あはれ人々、日蓮が此の安國論を勘へて北條殿に奉りしは、蒙古の使の來れる今年文永五年を去る十年の往時にてありしぞかし。今はた其の言に露違はず、殘るところの他國侵逼難を如何とか見る。佛の未來記にも劣らず、末代の不思議、何物か是に過ぎむや。今に及びて尚ほ日蓮が言葉を用ひずば、國はやがて西戎の俗となり、人はやがて蒙古の民とならむ。一世の愚昧なる、知らずして亡落の淵に近づけり、法華經の行者たらむもの、いかでか是を看過ごし得べき。日蓮茲に身命を拋つて再び安國論の先識をかざし、十一通の書狀を認め、鎌倉殿を初めとして、平左衛門尉、北條彌源太、建長寺、壽福寺、極樂寺、以下の權家大寺に送りて當來眼前の覺悟を促しぬ。

## 三

素より身命を拋ちての業なれば、言ふべき程の事は押し切つて言ひぬ。あはれ日蓮程の者の言葉に何の憚る所やあらむ。其の旨に謂へらく、蒙古の來襲は久しからずと覺えたり。早く建長寺、極樂寺等の邪宗門を閉鎖して、一佛乘の法華に歸依し給ふべし。建長寺の道隆は人崇めて佛陀の如く、極樂寺の良觀は世仰いで羅漢

如し、されど是等は野狐の袈裟着けたるが如く、其の蒙昧僞惡なること禽獸にも劣れり、須らく誅戮の沙汰を急がるべし。日蓮は是れ日本第一の法華經の行者にして余知未萌の預言者なり。這回蒙古退治調伏の任に當らむもの日蓮を舍いて誰ぞや。と、斯樣に言ひ張りしことなれば、一身の危殆は言ふも更なり、日蓮が弟子檀那等が上にも必ず禍あるべしと想ひければ、乃ち書を彼等に與へ、大蒙古國の牒狀到來に就き、十一通の書狀を以て鎌倉殿を初め、方々を驚かし奉りぬ。日蓮は申すに及ばず、弟子檀那等が流罪死罪は一定免れ難からむか。必ず妻子眷族を思ふ勿れ、權威刀杖に恐るゝ勿れ、法華經の爲めに生死の縛を切つて佛果を遂げ給ふは喜ばしからずや。と申し遣はしぬ。

是等十一通の書狀は果して上下の怨みを深うせしとぞ覺えし。或は使を罵り、或は受領に及ばず、或は受領すれども上へも申さず、所詮は諸宗緇素の怒りを加へ、柳營内外の憤りを重ねたるらし。是れ素より日蓮が當初存知の旨なれば、驚きもせず、怖れもせず、靜に處刑の日を待ちたりしに、怪しい哉、何事もなく打ち過ぎて、文永もはや八年の半ばを越えぬ。

扨ては一時の苟安に狎れて他界侵逼の大難をも打ち忘れ、法華經の行者が未萌の佛識を一妄語とは思ひけるよ。良し其の儀ならば日蓮思ふ仔細ありとて、ます〳〵不退轉の勇猛心を奮ひ起し、名をも惜まず、命をも捨て、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と聲を限りに呼ばはり、一乘の教旨を啓いては權宗の邪道を打ち懲らし、三敵の誹謗に接しては六難の荒を事ともせず。風強ければ浪荒く、龍大なれば雨猛き樣に法華折伏の鬨の聲、天地に震ふばかりに言ひ張りしかば、迷ひ狂へるものの惧れさよ、己のが無明の夢よりは醒めむともせで、偏に日蓮が正法の教を忌み、故最明寺殿の尼御前などに取付き、鎌倉殿、平左衛門尉等が怒を煽り立て、日蓮こそは故入道殿を無間地獄に墮ちたりと申し囃せる無類の惡僧ぞと呼ばはりぬ。かくて柳營にて僉議あり、日蓮の罪科所詮遁れがたし、頸を刎ぬべきか、鎌倉を追ふべきか、弟子檀那等の所領あるものは所領を沒し、或は頸を切り、或は籠に入れ、或は遠流に處せらるべしと取沙汰す。捕卒の出向、今は日もあらじと傳へられぬ。

## 四

日蓮悅んで曰く、斯かるべしとは素より存知の旨也。昔者[illegible]が爲めに、其の皮を剝いで紙となし、其の骨を削りて筆となし、其の肉と血を[illegible]りて墨水となしき。雪山童子は身を魔王の口に投げて悔いざりき。法華經の御爲めに捨つる身の幸こそ嬉しけれ。

如何に人々、勸持品二十行の偈をば、吾等常にいかに讀み奉りたる。三類の強敵は言ふに及ばず、もろ〳〵の比丘等の利養を貪り、名聞を求むる徒、國王大臣に向つて法華經の行者を誹謗し讒傷すべしとは即ち今の吾等が身の上ならずや。數々見擯出の五字は日蓮が徒これを讀まずんば、何人か是れを讀むべき。身は常に[illegible]を現じてこの惡世に導師となりぬ。喜[illegible]。

されば苟にも日蓮が弟子と名告らむ人々は、人も[illegible]すべからず。鎌倉殿の弓矢の爲めに毀らるべき我等が忍辱の鎧かは。[illegible]けもせされ、[illegible]れもせされ。所領ある者は所領を與へよ、親あるものは親を棄てよ、妻子あるものは妻子を思ふなかれ。首も刎ねられなむ、手足も切られなむ、其の臭き軀を離れて寂光の樂土に向はむ時、妙法五字の旗高く指し上げて、吾れこそは日本第一の法華經の行者よと聲高々と名告らむは如何に。

所詮はおのおの思ひ切り給へ。此の身を法華經に替ふるは、石に珠を替へ、砂に黄金を替ふる也。佛滅後二千二百二十餘年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天台、妙樂、傳教等だにも未だ弘め給はざりし法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字末法の始に一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先駈したり。若黨共二陣三陣つゞいて迦葉、阿難にも勝れ、天台、傳教にも越えよかし。僅かの小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき。佛の御使と名告りながら、臆せむことは無下の人々也。

吾れは斯く吾が弟子檀那等に說き示して、今にも鎌倉殿の御使あらむ時、見苦しき振舞あるまじき由をくれぐれも申し含めぬ。

## 五

斯くて文永八年八月の初めに及び、侍所より召し出されぬ。日蓮を中にして鎌倉殿を初め、平左衞門尉以下列座の態、たゞならず見えし。日蓮、其の問に答へて曰く、建長寺、壽福寺、極樂寺等を燒き拂ひ、道隆上人、良觀上人等の頸を刎ねよと申せしこと一言も相違無し。此等は正法の怨敵、國家の大賊なれば、誅、八裂にも行はるべき族也。首を刎ねよと申すに何の不思議かあらむ。但し最明寺入道殿を無間地獄に堕ちたりと、御他界の後にて申せしとは虛事也。念佛無間、禪天魔とは、入道殿存生の時より申せし事ならずや。是れ程の大事の法門をば、御存生の時勸め參らさゞりしことやある。畢竟右の事、國を思ひ民を思ふ日蓮が孤忠に出づ。誠に百世の平穩を祈られなば、速かに改悔の實を擧げらるべし。日蓮は一貧道ながら、法華經の行者なれば、即ち是れ釋尊の御使、日本國の眼目に一候ぞかし。其の言葉を御用ひ無くば、やがては梵天、帝釋、日月、四天の御咎めありて、其時後悔あるべきをも知り給ふべき也。と、何憚らず申し陳ぜしに、鎌倉殿を初め、平左衞門尉等、聖者の言を聞くべき耳なくして、偏に太政入道の狂へる如くに罵り騒げるこそ笑止の極みなりしか。

越えて九月十二日、平左衞門尉頼綱を大將として數百人の兵共、日蓮が松葉が谷の庵に押し寄せぬ。纔か一人の瘦法師を召捕らむとて、斯ばかりの意を用ひしこそ怯の極なれ。朝何trickle早くして人馬の響き遠くより近づきぬ。あはれ事あるかな、日蓮が日頃月頃待ち設けし願は遂に達しぬると思ひながら、徐ろに南の戸を開き、眞先なる頼綱に向ひて、汝等の來ること何ぞ遲き、と申しければ、兵共眼を瞋らし、聲をあらゝげ、刀杖瓦石を以て散々に狼藉す。中にも平左衞門尉が一の郎從、少輔房といふもの、走り寄りて日蓮が懷にせる法華經の第五の巻を取り出だし、吾が面を思ふがまゝに打ちこらす。吾れ微笑して、第五の巻は即ち勸持品ならずや、爾等そが威もて吾れを撲つこと奇なるかな、奇なる哉。と申しけるを、侮られたりとや思ひけむ、大將を初め、兵者等ますます怒をなし、經典佛具を或は踏み、或は引取り、凡そ家の二三間が間は、經巻の文字土に塗れて足を容るべき所も無し。日蓮大音聲を放つて、あら面白や、平左衞門尉が物に狂ふを見よや、人々。日本國の柱礎今倒れなるぞと呼ばはりぬ。聞くもの顏見合はせて安からぬ色あり。日蓮こそは御勘氣を蒙れる身なれば、臆しこそは見ゆべきに、さは無くして勝ち誇れる者の如くなるは如何に。扨ては是の事、僻事にてやあるらむとこそ思ひしならめ。

## 六

其の日も暮れぬ。吾れは罪人の身となりて武藏守殿にあづけられ、やがて夜中に及びて龍の

口にて刑に行はれむとす。かくて馬に騎せられ、兵共に擁せられ、若宮の小路に打ち出でて赤橋の前にさしかゝりぬ。爾時人々の驚き騷ぐを鎭めつゝ、八幡大菩薩に最後に申すべき事ありとて馬より下り、北の方を屹と睨まへ、大音聲に申す樣。いかに八幡大菩薩は眞の神か。昔者和氣の淸麿が頭を刎られむとせし時は、長一丈の月と顯はれさせ給ひ、傳敎大師が法華經を講ぜし時は、紫の法衣を布施に捧げさせ給ひき。日蓮は日本第一の法華經の行者也。日本國の一切衆生が謗法の罪によりて無間地獄に墮つべきを助けむが爲めに、是の邦に生まれたる釋尊付囑の御使ぞや。今や身に一分の過なくして刑に引かれむとするをば、神には如何に見そなはするぞ。其の昔、多寶塔中に釋尊法華經を講じ給ひし時には、三世十方の分身、無量諸天の諸佛、中には八幡大菩薩も其の座に連りて法華經の行者に疎略なるまじきの誓狀參らせしをば如何か忘れさせ給ひしぞや。されば日蓮が申す迄も無く、いそぎ〳〵是處に出合はせ給ひて、塔中付囑の宿願を果させ給ふべき也。若しさも無くんば、日蓮今夜頸切られて寂光寶土に參らむ時、日本の正八幡こそは起請を用ひぬ妄語の神なれと、さしきつて敎主釋尊に言ひつけ參らせ候はんず。若しそを痛たしと思召さば、いそぎいそぎ御計らひあるべき也、と。群集の人々は、日蓮がかく申すを聞きて、あはれ鎌倉殿の氏神に法外の惡口を憚らざる日蓮こそは、惡逆羅刹の分身ならめ、なんど罵り合へりしか。

## 七

日蓮を載せたる馬は、警護の武士に擁せられ、御靈の社より極樂寺の坂を通りて、七里が濱に打ち出でぬ。五更の月は早や雲に入りて、闇夜の光獨り松火の炎にきらめきぬ。四條金吾兄弟四人は途より馳せ參じて馬の口に取り付き、あはれ御樣よと泣き悲むこと限りなし。やがて龍の口に着きて濱邊の圓座に下ろされぬれば、執行の奉行平左衞門尉が下知と覺しく、太刀取既に吾が背後に立てり。四陣の篝は星の如く連りて、萬目悉く吾が身の上に注がれたり。金吾は、今ぞ御最後よと身を投げ伏して泣き轉ぶ。日蓮申す樣、あはれ不覺の殿原かな、是れ程の悦びをば笑ひもせで、何に平生の約束を違へらるゝことよ、と。やがて合掌瞑目して今ぞ最後と覺しき時、江の島の方より月の如くなる光物の鞠の如くなるが飛び來り、辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る。頃しも十二日の夜の昧爽に、物の色も定かならざりしが、此の光り月の如くにて、人の面も皆鮮かに見ゆ。太刀取眼くらみて倒れ伏し、兵共も恐れ惑ひて一町計り走り退き、或は馬より下りて畏まり、或は馬の上に蹲まるもあり。日蓮大音聲を揚げて、如何に殿原、かゝる國家の大罪人を[illegible]し措きて何處にか退き給ふぞ。夜も明けなば見苦しかりなむ、急ぎ寄りて頸切るべくは疾く〳〵切れよかし。如何に〳〵。と呼ばはれども、兎角の應へする者無く、又打ち寄る人とても無し。やゝ久しうして、兵共來りて、兎も角も相模の依智へ入らせ給へと申すにぞ、依智とは何處ぞ、國家の囚人を獨り歩ます法やある、案內せよかし、と申し付くれども、唯茫然として答ふる者無し。其の狼狽へ騷げる狀笑止の限りに見えたり。

* * * * *

斯くて、吾れ龍の口の頸の座を助かりて依智に入り、翌十月十日依智よりこの佐渡が島に移り越しぬ。其の間の仔細は煩はしければ書かず。

## 八

昔者、釋尊多寶塔中に坐して妙法を說き給ひし時、五十小劫、佛の神力の故に半日の如く謂

はれき。今の二十年、歳月短きに非ざれども、法華經を身讀せる日蓮が身にとりて片時の如く思はるゝぞかし　本法弘通は塔中付屬の大願、法華折伏は聖經自爾の本義、日蓮身に上行の使命を受けて、法華經の行者が爲すべき程の事、ほゞ爲し遂げきと覺ゆるぞ嬉しき。あはれ鎌倉殿吾れに於て何かあらむ、六宗の緇素もとより墮獄の徒たり。吾れ夫れ獨り誓つて日本の眼目となるべき也。北海波荒く、孤島雪深けれども、苟も化城の迷を離れて本土の開顯にだに與からば、吾等が居住して一佛乘を行ぜむ處、いづこか常寂光の都ならざるべき。靈山の道は一歩の外にあり、本有の淨土、夜に往返すべし。何ぞ鎌倉と伊豆と龍の口と佐渡とを問はむや。吾我滅度後、應受持斯經、乃至、速爲疾得、無上佛道と說かれたる聖言の文空しくば、諸佛の舌も切れなむ、多寶の塔も壞れなむ、寂光の土も地獄の巷と變じなむ。詮ずる所は、天も捨て給へ、諸難にも遭へ。身命を期とせむ、善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業なるべし。大願を立てむ、日本國の位を讓らむ、法華經を棄てゝ觀經等に就いて後生を期せよ、父母の頸を刎ねむ、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり。其の外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ。等と誓ひし願破るべからず。』

南無妙法蓮華經。　南無妙法蓮華經。

（明治三十四年十二月）

此篇は種々御書、開目鈔、如說修行鈔、佐渡御書、觀心本尊鈔、最蓮房御返事等に據りて書きたるもの、私意を加へたる所少し。上人口傳の事は假構に出づと雖も、詮する所は事跡の眞實を傳へて毫も疑を容れず。文中『……』を施せしは、上人御書の原文を其まゝ用ひたる處を示す。謹みて聖文を汚すの罪大なるを謝す。　（樗牛生）

## 迷信と眞信

數々人の迷信を說くを聞く、然れども吾人は疑ふ、世果して迷信なるものありや。又果して迷信ならざるものありやと。

信ぜざる者より見れば、一切の信仰悉く迷信のみ。信ずる者より見れば、一切の信仰是れ眞信のみ。半僧坊、穴守稲荷、成田不動、阿呍波羅婆等の崇拜を以て迷信とし佛教、耶蘇教の信仰を以て眞信なりとするが如きは、是れ對峙的名目の爭のみ。彼此、處を換ふれば迷眞亦名を異にせむ。

世人動もすれば合理的信仰を謂ふ、謬れり。既に信仰と云ふ、豈合理的なるものあらむや。若しあらば是れ最早や信仰に非ざる也。信仰は元始的事實也、眞僞なく、是非なく、上下なく、優劣なし。偶々是ありとするも方便的稱謂に過ぎざるのみ。

（明治三十五年一月）

# 清見潟日記

## 一　はしがき

清見潟の名を聞くだにも床しうぞ覺ゆる。海道の名所、關の東西に少からざれども、われにとりてこの地ばかり懷かしきは無し。憶へば早や六歳の昔とはなりぬ、われ身に恙ありてしばらく此地にさまよひしことありき。冬のもなかにてありければ、野山のけしき寂しく、海原遠く吹きわたるいなせの風のいとゞ身に染みき。されどわれは幸なりき、胸にこそいたみはあれ、眼はなほうるほひき。清見寺の鐘の音に送り迎へられしゆふべあしたの幾たび、三保の松原に泣きあかしゝ、月あかき一夜は、今にしておもへば、見はてぬ夢の恨めしきふし多かりき。

六歳は流水の如く去りて、人は春ごとに老いぬ。清見潟の風光昔ながらにして、幾たびとなく夜半の夢に入れど、身世怱忙として煙霞の癖をゆるさず、深くこれを恨みとしき。もしあやしき運命のわれに禍するに非ざりせば、この宿志、いづれの日にか果されたりけむ。去年の夏、われ思はずも病にかゝりぬ。如何なる野の末にてもなまじひ都の煩しきよりは住みよかむなるを、ござんなれ清見潟ならぬ地にわれいかで行くべき、こゝに九月のはじめ、居を清見寺の下に卜しぬ。

## 二　清見潟の今昔

薩埵の岬のあなた、興津川の口より袖師、江尻の長汀をこめて清見潟とぞいふなる。古の清見が關は、今の清見寺のふもとにありきと傳ふ。關の起りは王朝のはじめごろなるべくや。天慶のそのかみ東夷征討の爲に下りたる清原のなにがしが、漁舟の火の影は寒うしてと朗詠しけるむかしの跡もしのばるゝ。かの維盛の少將が兵衛の佐討たむとて、やがては水鳥の羽音に立つ足もたき十萬騎の轡をそろへしも、見ぬ世のあはれ、たづぬるに由なし。光行が海道記に、「清見が關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまどはし、東北は山と磯と險難おなじく足をつまだつ」としるせしは、興津の浦の水平らかに、薩埵の山の峠けはしきを言ひしならめ。今は鐵路海に沿うて走れども、むかしは薩埵の峠を越えて倉澤に出づる外に道無かりしかば、海道の要衝、關東の西にはまづこの關をぞ推すべかりける。

清見が關は早くすたれて、興津の宿とはなりぬ。このわたりの地名同音にして異字多し。海道記には今の如く興津としるされたれど、和名抄には息津とあり、源平盛衰記、方角抄などには何れも沖津と書かれたり。由井の正雪が住ひしと云ふ由井の宿も、或は湯井と書し、或は湯居としるさる。獨り名稱のみならず、土地もまた換はれるあり。田子の浦と云へば、今は鈴川のあたりの浦づたひを云へど、古は清見潟をもしか呼びたるらし。方角抄に、三保の入江より浮島が原づたひの浦をおしなべて田子の浦と呼ぶとあれば、興津、江尻などもその中の小名なりしならむ。永享のむかし、藤原の雅世が清見寺にて詠める歌にも、

吹く風もなほをさまりてたゝぬ日は、
けふとぞ見ゆる田子の浦浪

とあり。想ふに山邊の赤人が田子の浦にうちいでて見ればと詠みけむも、清見潟あたりのなが

めなるべきか。げに興津の濱に立ちては、富士は薩埵の峠に遮られて、わづかに其頂を見はすのみなれど、袖師の浦より三保の方にうち出づれば山のすがた、世にもうるはしく仰がるゝなり。事實いかにやありけむ。

## 三　默思

九月のはじめより十二月のなかばまで、三月あまりの月日をば、われ夢の如くにしてたちくらしき。わが宿は清見寺の眞下なる海邊に臨みて、袖師の濱の浦づたひ、江尻清水のなぎさより、水と空とを限りたる三保の松原をまのあたりにぞ見る。夕べあしたのながめ、心往くばかりなりき。あゝ、かゝる折にこそ詩人ならぬ身のくやしけれ、この筆の短きにくらぶれば我が思ひの餘りに永きを如何にすべき。

素より病にかゝる身にしあなれば、秋もやうやう深うなるにつれて身にしむ哀れはさすがに甚かりき。三保の入江おぼろにけぶりて、有度の山かげやう〳〵にうすれゆくところ、雲いろいろの夕暮の空にながめ入りて、われや行方もしらぬ思ひに幾たびか立ちつくしけむ。夜靜かにして磯打つ波のかすかに間遠うなるにつれ、わが胸のあへぐが如きこそあやしかりけれ。われはこのあやしき默思を友として三月あまりを夢に暮らしき。げにあはれにもまた樂しき夢なりき。

都なる友はしきりに文してわが幽棲を慰めぬ。されどわれは寧ろわが孤獨を喜びき。人間よしや友朋なくとも、われになほ山河の知己あり。人は友とぞいふめる、されどこの世に響を同じうする胸は幾ばくもあらざらむ。而して笑ふもの幾萬人ありとても、われにとりては瓦礫にひとしからずや。

美はしきかな、山や水や、憎みなく、猜みなく、僞りなく、衰へなし。人は生死の巷に流轉し、世は興敗のわだちを廻る、山や水やかはるところなきなり。哀れとも、樂しとも、見る人のこゝろ〴〵にまかせやりて、春秋ごとの榮落に萬古の姿とこしへなることそめでたけれ。思へば恥かしきわが身かな、こゝに限りある身の病を養へばとて、千年の壽、もとより保つべくもあらず、やがて哀れは夢のたゞちに消えて、知る人も無き枯骨となりはてなむず。あゝ清見潟、千年の興亡、なれにとりては雲烟の一たび過ぐるにも等しからむ。今はたこゝにわれあることを知るや、否や。

**人讀まば笑ひもせむ、かゝるあだなる想ひの中にわが慰みはありき。**

## 四　興津の宿

興津はもと海道の一漁村に過ぎざれども、人の往來いと繁き地なり。そは東海の名區として知られたる清見寺の所在地なるにもよるべく、天つ乙女のあま降りけむ三保の松原の順路なるにもよるなるべし。されば一月二月の頃には參宮の道者、興津の驛に下るもの絡驛として絕えず、清見寺に詣で、三保に渡り、龍華寺より久能山を一日の旅路として、靜岡に泊る、大かたはかはることなし。さらでだも、山海のながめの世の常ならぬにひかされて、四季をり〳〵の漫遊の客少からず、加ふるに近年は海水浴のはやりとて、夏の人込み、殊に繁しとぞ。

都離れたる土地とて、家居のありさまよろづ鄙びたる、いとめでたし。人の心もさすがにまことなるらし。わがかり住居に、處の老女の年五十ばかりなるを雇ひて、朝夕の事を賴みしが、われ都に歸る時、この女車の窓によりて、今別れ參らせば何れの日、何れの時かまた逢ひ奉るべきとて、はら〳〵と淚を流しき。あはれ、かりそめなる緣りのわれなるに、さても人の**心のかくばかりあつかりけるよ。**

こゝは蜜柑の名所なり、紀州の有田につぎては全國この地に及ぶもなしと云ふ。雲州又は溫州と銘打てるは、大かたこの地の產なりとぞ。畑は多く山の上にあり、崖ともいはず、藪ともいはず、凡そ一里が程の山つゞきは殘る隈もなく耕され、見渡すかぎりは蜜柑の畠なり。秋の暮より冬の初かけて、濃き綠なる葉かげに、このくだものの色うるはしく黃ばめるが、枝も撓わなるさま、いと珍しき見物なり。土地の習ひとて、多くは山に登る人の摘み食ふを咎めず、園守の老爺にわづかの錢などとらすれば、思はぬ家づとに步みがてなる事も多かりき。名高き暖地なれば冬來れども山に紅葉なし。清見潟の風光を一望の下に見下ろし、靜に蜜柑の木かげに橫はれば、岸うつ波の音幽かにひゞきて、心もいつしか遠くなりつ。里の子等が木の實つみながら、節面白うたふ歌なんど、世を外なる長閑けさ、いはむかたなし。

清見寺は由緒古き寺なり、臨濟宗の靈場にして又の名を興國禪寺と呼べり。むかしより海道一の名區と稱へられ、三保の松原清見寺てふ歌は今も尙ほ普く知られたり。海に沿うたる山の半腹に立てれば、樓觀の眺め、遠くゆきわたりて、清見潟のけしきは大かたこゝに集まれり。鐘樓高く聳えて不離の梵音且暮にひゞき、名勝の地、更に一段の幽寂を加ふるらし。近きころ境內に火ありしが、燒けたるは羅漢堂のみにて、この寺の壯觀故の如きこそ欣ばしけれ。

興津の宿の東はづれに興津川あり、この川を北に溯りて甲斐の國に通ふ路は、身延山の本道なり。川口は即ち薩埵の岬にして、鐵路斷岩を穿ちて蛇の如く走れり。この岬よりの富士の眺め、又なく美はし。夕暮の空に色面白う薄れゆく山の姿に眺め入りて、夜に入るまで立ちつくせしこと、われその幾度なるを知らず。三保の浦、龍華寺よりの眺めもこゝのにはよも過ぎじとぞ思はる。

この地、東京より汽車にて六時あまりも隔てたれば、都人士の別莊とては、井上伯、阿部伯などの有する二三に過ぎず、喜ばしきことなり。別莊といふもの大かたはその土地を俗了す。鎌倉、大磯なんどのさまにて知るべきなり。旅館は東海ホテルとて、處にはふさはしからず淺ましき名なれども、よろづ心地よき宿なり。先つ歲には二八ばかりの少女の都にも稀なるべう美はしきが、たとへば谷間の姫百合の、心なき人の目にもとまりしが、今はよその奧庭に移されて、あだし人の[illegible]を許さずとも、げに人の上は賴むべからで、山河のみぞ心ふるすべかりける。

## 五　三保の松原

霜月の中ばごろ、都よりしるべの人は訪ね來りしかば、われ東道の主人として、共に三保の松原に遊びぬ。船はわが宿の前より漕ぎ出でぬ。三保の濱まではわづかに一里あまりの船路なり。風なぎ、水靜かにして、空の色さへ高く澄みわたれる日なりしかば、四方のながめいとはれ〴〵しくぞ覺えし。富士の高根はいつしか群山のおもてに立ち、薩埵、岩淵の崎より、青嵐遠く裾野の原をこめて、愛鷹、函根、伊豆の山々まで色おもしろう薄れゆくさま、心往くばかりのけしきなり。船はやがて岸につきぬ、とこに遊ぶ人のならひとて、われ等もまた三保の神社に詣でぬ。

三保の松原といへば、たとへば天の橋立の如く、細長き土地の海に突き出でたるならむと、大かたの人は想ふめれど、實はいとひろき出洲なり。最も幅ひろきは二十丁にも餘るべく、長さは一里にも近かるべし。折戶、三保などの漁村その間にあり、田畑も少からず、多くは

芋と砂糖の木とを培養し、まゝ桃の林を交ふ。

三保の神社は三保村のはづれなる松林の中にあり、宮居いたくあれ寂びたり、額して御穂神社と云へり。祭神は昔より神主の家に傳へたる縁起には、仲哀天皇なりと誌せるよしなれど、疑はし。されどこの駿河の國には焼津、草薙なんど、日本武尊を祀れる處多ければ、その御子にて天が下治め給へりし帝を祀り申す因縁、全く無きにしも非ざるか。たゞ出雲の國美保が關に三保神社あり、祭神は三穂津姫なれば、この社と神縁あるべきやに思はる。三穂津姫は高産靈神の御女にて、大巳貴神に嫁し給はむとて下降し給ひたる御方なればかの天女の天くだりしと云ふ傳説と似通へるも奇しからずや。神世のこと杳として素より人間の窺ひ知るべきにあらず。

社より南の方三四丁にして海邊なり。昔に高き羽衣の松はこの海邊の松原の中にありきと傳ふれど、今は其跡のみかすかに殘れり。三保の社にこの羽衣の斷片ありと聞きつたへたれば、歸途同官の家に立よりて一見したき由を申入れぬ。社掌なるべし、五十ばかりの男の袴つけたるが、出で來りて、かの羽衣の由來、天人、伯梁が事など、わが目もて見たらむ様にまことしやかに說き立て、やがて大きやかなる鑰持出して社の內殿を開き、恭しく一個の玻璃筒をぞ捧げ來りたる。玻璃筒の中に錦のきれを布ける小筐あり、その中にたとへば煤に黑ずみたる物の碁石ほどの大きさなるがあり、即ち羽衣の片なりと云ふ、筒の中より取出して試に指を觸るれば、毛屑に似て更に細く、綿に似て更に柔かなり。物の眞僞を論ふだにたはけたる業なれど、苟にも世に得たる名は空しからず、行き見る人の年々に絶えぬこそ奇怪なれ。社掌の言葉によれば、三保の村には伯梁の子孫もあり、かの天人に邂逅ひし時、伯梁が着けたりし蓑と釣竿とを今尚ほ傳へけるとか。たゞに一條の傳說として虛實をよそにしてこそ云ひしらぬ趣はあれ、かくてはなか／＼に興さむる心地せらるゝぞかし。

われは友と共にまた船に上りぬ。午すぐる頃清水の港に入りて朝陽館と云ふ旗亭に立寄り、再び船をかへして興津なるわが宿に歸りしは、有渡の山に夕日かけまばゆき頃なりき。

## 六　久能山

またの日、久能山に遊びぬ。袖師の濱の浦づたひに、江尻より清水を廻りて、わが宿よりは凡そ三里あまりの路程なり。清水の入江に箕輪と云ふ所より船にて折戸に渡る、わが知れる人のそこの寺に假り住居せるを訪ねむとてなり。小春の空のいとうらゝかなる日なりければ、心地いひしらず爽かなりき。午すぐる頃、折戸を出で、加茂、駒越なんど云ふ村々を過ぎて間もなく久能の山下に着く。駒越よりは濱づたひの道にして、遠洋のながめ見もあかず、伊豆の山々青螺の如くにして左手の空を限り、右手は烟波縹緲の間、はるかに御前が崎を望む、景物限りなく壯大なり。增、蛇塚あたりの一帶の砂濱には、汐汲む乙女等の脛もあらはに立はたらく様、滿干の汐の辛き世渡りとも思はでや、鄙歌をかしう聲そろへたる、世を外なるけしきなり。

久能山は名の高きほどには高からぬ山なり、海拔わづかに九百尺に過ぎず、されど、海に臨みて斷崖けはしく立てれば、山態おのづから凡ならず。およそ駿遠の地、山河多しと雖も、海洋の烟波をうけて四望かくの如く空濶なるところ、實にこの地を推すべし。むかし東照公が其墓域をこゝに定め給ひしは、さすがに好鑑のすぐれたるを賞すべけむ。

是の山の草創に就いては俗間の說一ならず。或は推古天皇の頃に久能のなにがしが觀世音

の道場を建てしが始めなりと云ひ、或は養老年間、行基この地に寺を建て、觀世音の木像を彫めるを開祖とすと云へれど、今は詳ぬるの要なし。西行が山家集に『久能の山寺にて月をみてよめる』といふ歌あれば、鎌倉のころ既に寺塔の設けはありけむ。降りて戰國に到り、今川氏の滅後、駿州の地武田氏の領となるや、この山の險阻なるをたのみて一の砦を設けしが、まもなく德川氏の有に歸しき。家康特にこの地を愛し給ひ、登攀しば〳〵なりしと云ふ、公の薨ずる時、遺命してこゝに葬らしむ。かくて元和のはじめ、久能の城は東照權現の靈屋とはなりにき。現に存する所の社殿は即ち當時二代將軍の造營にかゝれり。翌年春、野州日光山に改葬の義定まりて、靈柩東に移りしが、史家の中には『是ればある、なければなしとするがなる』てふ天海が歌などによりて、改葬の名のみなりしを信ずるものありと云ふ。今は別格官幣社に列せられ、春秋の祭祀、いと嚴かに奉行せられ、東海の靈場として其の名海內に聞けり。

見上ぐれば、見る日も險しき斷崖ながら、二十餘折の磴道、千餘段の石階は飛欄の如く麓より立ちのぼれゝば、思ひの外に上り易し。一の門より本殿にいたるまで、二三丁が間は概ね平地にして、物見の松、勘助井戸などの故蹟あり。神殿は質素にして而も莊嚴、情景まことに神さびたり。東照公の遺骸を埋めたる處は本殿の後ろにあり。凡そ三十間許りの石瑞垣を繞らせる中に一丈五尺の巨石塔立つ、即ち墓標なり。この墓標の前に當時諸侯伯の獻納せし赤金の燈籠十數基列べり、石塔の西に向へるは公の遺命によれりと云ふ。

われは時久しくこの墳墓の前に佇立しき。靜に英雄の偉業を回顧して、うたゝ數ならぬ身のあるに甲斐なきを覺えぬ。あゝ三百星霜一夢の中にたち去りて、祖龍今何れの處にか目さむる。われは薄倖兒、人の知るなく、事の成すなし、さるを惜むまじき命の尙ほ捨てがてに、そぞろに漂浪の旦暮をかさぬるこそ愚かにもまた悲しからずや。

憐れなるわれは、かゝる思ひに沈みて、悵然として山を下りぬ。

山を下りたるは波勝の崎に夕燒けの色うるはしき頃なりき。われは車を命じて靜岡に行き、暮夜汽車にて淸見寺下の宿に歸りぬ。

## 七　富士川

知る人の富士の裾野に住めりしを訪ねむとて、われ幾たびか富士川を渡り行きぬ。不圖せることよりそのわたりの地勢に思ふところあり、試にその變遷を討ねて左の如き考案を得き。もとより地理歷史の學に精しからざるわれなれば、想像のあやまれるも多かるべし。

われの見る所にては、富士川の流れは古より漸く西の方にかたよれるが如し。今は岩淵、松岡二村の間を南に指して直に海に入れど、古は鈴川より今の海道以南の地は概ねこの川のデルタにてありたるらし。而してこのデルタはナイル川のそれの如く、又は利根の流域の一部の如く、更に幾多の小デルタに分れて沮洳沼澤の間に散在したるらし。海道以南の地今も尙ほ是等沼澤の遺跡少からず。村名、地名の多くは、森島、五貫島、宮島、柳島なんどの如く島の字を有せり。今は富士川を境として、東は富士郡、西は庵原郡に分たるれど、この川の東の方なるなにがし村の舊社には駿河國廬原郡と明記せる標札のありと云へば、本流の西に移れる、疑ふべくもあらざるが如し。若し海道以南の富士川の流域は、デルタの常として概ね卑濕の地にてありたるべければ、今の村落は遠からぬ過去に成りたるらし。かゝれば延喜式中の神祠のことごとく海道以北にあることも解し得ら

るゝなり。源平盛衰記の富士川の條には、平家の陣地、河口を去ること二丁許りと記されしと覺ゆ、また以て一證となすべけむか。

かゝる想像のいかばかり中れるかを正さむは、世におのづから其人あるべし。こゝにはただ思ひ寄れるがまゝにかくなむ。

## 八　惑ひ

清見潟の三月は都の三歳にもまさりてわれには事多かりき。語るべき友もなく、訪ぬべき家も無きわれながら、げになすべき事の多かりき。われは書を讀みき、山に登りき、濱邊にたゝずみき、されど時の多くを默思の間に費しき。あゝこの默思の忙がはしさをわれならぬ人の誰か知るべき。

われはげに病める身なり。されど病める身の樂みを病まざる人の如何でか知るべき。若し薄倖のわが生涯に倚ほ幸ひの月日あらば、清見潟の三月ぞ、然るべかんなる。おもへばはかなき人のいのちかな。われ惑ひなからむと欲するも得ざるなり。

(明治三十四年四月)

## 無題集

○

日は傾き、鐘の音ひゞき、暮色蒼然として遠きよりいたる。吾が心隱としておだやかならず。去つて高欄に倚りて長く歎息すれば、愁思形なくして雲の如く湧く。あゝ浪の音か、松風か、幽かに鳴き渡るかもめの聲か。――わが思ひを解かむもの、たゞ人間のひゞきならじ。

○

一夜雲低うして水、天に連る。わが思ひ茫として往かむところを知らず。磯波ちかく歩みわたれば、うたあり、おのづから口に上る。あゝ吾れも亦詩人たり得べけむよ、人間もし這個の意をうつす文字あらば。

○

たゞ一語、以てわがこの思ひをあらはさむすべもがな。かくて海風蓬々として吹き渡るの日、希くは衣を千仭の岡に振ひてながく天邊に嘯かなむ――わが胸のいかばかりやすかるべき。

○

われは想ふ、死はそれ冷かなる夜の如き乎、生はそれあつくるしき晝の如き乎。吾れ病みて死なむとせし時、胸のひゞきのいとゞ安らけきを覺えき。

○

夕日の空に眺め入りて、われ時久しくも水のほとりに坐しぬ。海原とほく幽かなるひゞきのわが胸にさゝやけり。吾れ杖をとりて砂中に書けば、打ち寄する浪に跡も無く消えうせぬ。かくて日は暮れぬ。

○

秋深うして萬山黄ばみ落つ。あゝ天地もまた物質の外に求むるところあるか。半夜耳をそばたつれば、野に悲しき聲す。

○

人は曰ふ、山河のうるはしきを見よと。知らずや、人生の恨みむすぼれて、この胸に痛みあるもの、何の遑ありてか自然の美をたゝへむ。

○

言ふまじく、憶ふまじき過去の、たゞ夢に入ることこそ是非なけれ。人よ怪まざれ、この世にしてうるはしきもの、何れか夢にあらざらむや。

(明治三十三年秋)

# 感慨一束

（姉崎嘲風に與ふる書）

先頃よりの重ね〴〵の御狀身にしみ〴〵と喜ばしく存じ候。春以來此方よりはかく〴〵しき御返事も申さゞりしが、兎角は病軀事に勝へず、審に此の愁思を抒べて君と共に憂を分たむと念へども、情迫り胸悶へ、筆を落して文を成さず。何れの日か此の感懷を風露に託して君と共に自然の中に優遊するを得む。君よ、悲しきは吾等が身の上にて候ひけるよ。病は年と共に加はれども、信は獲難く、迷は深し。徒に惆悵して低回すれども、道遠くして日暮れなむとす。この旦夕の命を以て何れの時か色心相應の信徒となり、如說修行の行者となり得べき。再々の君の御狀、あゝ吾れ涙を以てそを繰返せしこと幾度ぞ。同じ惑に身を苦めて、君は早くも解脫の途に就き給へれども、吾れは尙ほ依然たる吳下の舊阿蒙。力めて書を讀み道を尋ぬれども、見思の惑旦暮に積もるのみ。所詮は沙を絞るに油無く、石を磨きて玉に似ざるか、あゝ吾れ又誰をか恨みとせむ。

君と別れてよりはや二年なかばを過ぎぬ。あわたゞしくも經つ月日かな。吾れも亦病の中にもはや二年を暮らし候よ。是の間、身世匆忙として相移り、君も吾れも共に人生の宿疑に陷りぬ。世に離れ、人に離れ、さては二十年來の外緣に離れ、吾れは玆に久しうして已れ自らの友となりぬ。あゝ君よ、君も亦この思ひをばよも忘れ給ふまじ。是れまで他人の意味を餘りに多く知り過ぎたる吾れは却て吾れ自らの意味をば知らざりき。人生の第一步たるべきこの自覺を離れて、良しや萬卷の書を讀み古今の知識を蒐めたりとて吾れに於て何の關はる所ぞや。吾れは自ら此の覺醒を貴しと叫びぬ。

此の間の消息を今更君に語るの要はあらじ。吾等はたゞ此の自覺に本づきて吾等の世界を建設するの務ありと存じ候。されど君よ、吾等の世界は尙ほ頗る遠かるべし。少くとも吾等の生國にて吾等の解せらるゝは頗る難事なるべく候。唯意志の存する所に實在あり。君と吾れと此世に存せむ限りは世は尙ほ吾等の戰たるを妨げじ。君よ、吾等は互に心强かるべし、當眺望の風吹き荒めども、尙ほ消し難きは眞信の一燈ならずや、そも何者の王者か能く吾等の獨立を危うし得べき、吾れは是の確信を以て君と共に人生の歸趣に安住せむことを希ふものに御座候。

* * * * * *

近來鄕國の事、吾等の意に滿たざるもの甚だ多く、君にして若し此地にあらば必ず吾等と同一の感を懷かるべしと存じ候。一々この不平を筆して君に送らむは煩はしけれども、筆に任せて其二三を書き列ぬべく候。

何故に日本人は斯く少しの苦悶と煩惱とを有して優々たり得るや。君の疑はれし此の疑問は早晚日本人の自覺を喚び起すべき力を有し來るべしと存じ候。君が三月の開書はげに警世の大文字にて候ひしが、此邦の人は如何ばかりその眞意を解せしか。或は文に悲哀の調あるを言ひ、或は語に慷慨の意あるを見て、輒ち皮相の評を下せるの外、その中に包含せられたる人生の宿疑に就いて眞面目に顧慮せし人幾何ありや、覺束無し。今月の太陽に載せられたる五

月の分も果して同一の運命に遇はざるべきや、觀念の下に於ける所謂現代文明の苦痛を意識し、その解脫の爲に中心の煩悶を經たるものに非ざるよりは、斯かる高調の文字は長へに解せらるゝの期無かるべし。去りながら眠れる人は何時かは醒めむ、迷へる人は何時かは悟らむ。天の靈光尚ほ此の國に空しからずんば、吾等の言葉に聽くことの晩かりしを悔ゆるの時機は早晚來らむ。吾等君と共に暫らく野に叫ぶ人たらざるべからずと存じ候。

八月の太陽紙上に掲げたる君の問書に就いては、紙上にも一言妄批を加へ置き候如く、まことに近來の快論、感興不淺候。ショーペンハウエル、ニイチエ、ワグネル三者の思想を同一系統の精神發達と觀ぜられたるは、恐らくは先人未言の卓見か。三子者若し靈あらば地下に微笑すべくと存じ候。誠に是れ現代文明の弊實に對する一世界の光明とも見るべきもの、將た又人類精神の發展上必然の道程にも候歟。吾等も幸にして人生の大疑に逢着してやうやく先輩の眞義に接せむとするもの、君の此の解說によりて得る所少からざるを感ずるはこよなき仕合と存じ候。ワグネルの仔細は今方に研鑽の途上にあり、君と共に其の高調の遺韻を樂むの日亦遠きに非ざるべき歟。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

日蓮上人に關しては、君と吾れと不幸にしてその觀る所を異にすれども、是れ唯日蓮てふ一客體に就いての見解の差異にして是の日蓮に由來する各自の精神に就いて毫も乖離する所無きことは、君と吾れと先づ以て茲に諒とすべき所と存じ候。君は自ら特に日蓮を研究したる事無しと言はるれども、今の世に日蓮を批難する如何なる識者の言も大體に於て君の說を出づること能はざるべし。實を言へば是の疑は吾れ自らの胸中にも存する也。されど吾は是の疑を解除すべき他の有力なる事情によりて上人の人格を醇化し得たるを以て無上の喜びを感ずるものに候。好んで異を樹つるには非ざれども、君の疑問に就いて少しく述ぶる所あるは敢て君の意に反する事にもあらざるべくと存じ候。事體素より重大にして吾が信解の力に及ばざるもの多々あらむも知るべからず、他日もし其の謬りを悟り得ば、吾れにとりて此上の幸はあらざるべくと存じ候。

君が日蓮に對する批難の一つは、彼れが大乘有樂說によりて、謂はゞ國家主義の宗教を打立てむとしたりと云ふにあり。然しながら、これは一考を要すべしと存じ候。如何にも日蓮は東方有緣の小國を以て後の五百歲に於て上行菩薩出現の國土なりとなし、妙法は是の國土を中心とし一閻浮提に宣布せらるべしとの信念を有せしが、そは宗教を以て國家を利するの具となし、若しくは國家結託を以て立教の基礎とせむとせし世に所謂國家的宗教と同一視すべきものに非ずと存じ候。是の事の仔細は先頃本誌に掲げし日蓮上人と日本國てふ拙論に略々盡したりと覺え候へば、君にも既に御領解の事と存じ候が如何にや。吾れは已れの信仰する所の眞理に無上の價値を置くことを以て宗教家の第一義と信じ、既に是の第一義を立てたる後、世上の一切の事物を此中に攝取するところに宗教其物の妙用は存すと惟す。日蓮は是の點に於て吾が理想的宗教家に近きが如し。君の見る所如何にや。

君は又日蓮の折伏主義が主として排他的なりしを惜み、ニイチエの個人主義よりもワグネルの愛の福音を擇ぶと同一の理由によりて、多くの同情を日蓮の事業に寄する能はざる由を述べ給ひぬ。こも亦極めて自然の感じと存じ候。是の如く疑ふは獨り君のみならず、世上

の識者、宗教家等の苟も日蓮に快からざる者のみならず、斯く言ふ吾れ自らにも亦此の疑ひ無きにしも非ざる也。想ふに愛とは意志融合の謂也、精しく言へば自己の心の中に他の心を抱容し、若しくは自他互に相渾同するの謂也。かく一切己れに異なるものの存在をも認容し、是に臨むに無限の同情を以てするを以て愛の極致とするの意味に於て、日蓮の折伏主義に幾何の愛ありしや。斯かる意味に於ての愛の福音は彼れの教理に存せしや、否や。是れは獨り君のみならず、吾れに於ても恥かしながら尚ほ未了の問題に御座候。一切法界を一心の中に觀せむとする佛教的唯心說、或は台家の所謂一念三千の無差別觀、若しくは妙宗獨造の知解と稱する現象即實在の事觀の妙法、――是等の教理は君の既に熟知し給ふ如く、平等差別の二諦を融合して吾等の實在に深遠なる意味を與ふる其の形式に於て頗る愛の極致に似たるものありと雖も、吾れの見る所によれば、そが關はるところは主として知解の範圍に存するに非ざる乎。愛の愛たる所以の意志の活動としての融合は、尚ほ此の境地に存せりや、否や。吾れ少しく惑ふ。是を以て吾れはワグネルの愛は日蓮の教理にも存せしやと問へる君の疑ひを是認し、君と共に世上の日蓮學者に向つて其の解決を希望する者に候。

さりながら實を云へば是の疑問は從來吾が日蓮崇拜の因緣に於て多くの重みを有せしものには非ざりき。吾れは唯客觀的に見たる信仰、もしくは教理の實質を外にして、形式上より日蓮の人格に就いて其の崇高偉大を讃歎せるに候ひき。玆に形式的と云ふは少しく語弊あるが如し。然しながら釋迦にまれ、基督にまれ、其の教理の悉く今日の學理的批判に勝ふべしとは、恐らくは何人も思はざる所ならむ。取りも直さず、其の人格の崇拜は形式上に憑據するもの多きを知るに足るべし。是の意味に於て吾が日蓮に對する崇拜を形式的なりと云ふに於て吾れは何の異存も無之候。這般の斷案少しく概括に失するが如し、或は他の誤解を招かむことを恐ると雖も細說の遑無きを如何にせむ。唯々君の判讀を希ふの外無之候。

是の如く述べ來りて尚ほ日蓮の爲に一事の君に言ふべきもののあるを思ふ。そも〱日蓮の立場より見れば、其の嚴烈なる折伏は廣大なる攝受の準備として一種の慈悲の發表として見るべきものには非ざる乎、吾等の見る所によれば個人としての日蓮は眞に慈悲深き人なりき。所謂柔情俠骨兼ね具はるとは正に彼れに於て見る所の性格にて候ひき。去りながら既に天下民衆に對し、妙法弘通の大導師として立たれたる彼れは、妙法的理想に基づきて是れ民衆を救濟せざるべからず。彼れは實に之に對する總體的歸依の結果として法華爾前諸宗門を[illegible]じ、隨つて其の謗法を破摧するの[illegible]護の第一事と爲しぬ。是に於てか其の事業の第一着手として嚴烈なる折伏の要を見る、所謂自然の勢には非ざるべき乎。折伏は攝受を豫想してこそ初めて意味もあれ、攝受は即ち慈悲の用に外ならず。即ち日蓮の宗義よりして見れば、大なる折伏は大なる慈悲を待つて初めて現はれ得べきものには非ざる乎。彼れが涅槃經の文句に擬して、『一切衆生の異の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦也』と謂ひ、又二十八年の間他事なく南無妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れむと勵むは、此れ即ち慈母が赤子の口に乳を入れむと勵む慈悲也』と謂へるもの、斯くして初めて生命ある文字となり得べしと存じ候。君は是の間の消息を如何に解し給ふや。吾れは玆に佛教に所謂慈悲と基督教などに謂ふ所の愛との間に概念の差別あることを忘れたるに非ずと雖も、日蓮に就いて愛を

言はむものは先づ是の慈悲を認むるの要あるべし。吾れは日蓮の折伏の蔭に大なる慈悲ありしことを疑ふ能はず。彼れが其の生國の滅亡をまでも忍受して妙法の功徳を民衆に頒たむとしたるの裏情は、深く察すべきことと思ふ也。況や妙宗の教義に逆化下種など云ふ妙用ありて折伏によりて征服せられざるもの、尚ほ反抗の因縁によりて救濟の緒を得べしとなすが如き、其の說の如何は暫く措き、亦是の問題に關聯して一考すべき事と思ふは如何に。

日蓮上人に關しては言ふべきこと尚ほ甚だ多しと雖も、本書の主眼は君に郷國の現狀を述ぶるに存するを以て暫く詳細を他日に讓るべく候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

本邦思想界の現狀に就いて何事をか君に言ひ送るとせば、そは吾が不幸を書き列ぬるに外ならざるべく候。されど吾等の如き時代の畸形兒よりその不平を取り去らむは、取りも直さず其の言論を取り去るに等し。吾等は此の不平を述ぶるに當りて最も偉大なるべきことと存じ候。

一言以て是を掩へば、本邦の思想界は餘りに平氣に御座候。疑ふべきこと、怪むべきこと、驚くべきこと、論ずべきこと、憂ふべきことの充ち滿てる此の時世に於て、彼等の餘に晏如たるには呆るゝの外無く候。舊時代の遺物たる老朽學者に就いて云々するは吾等の敢ふる所に非ず（此の老朽學者の中に尚ほ壯年たるもの少からざるは君の知る所の如し）。新進の青年學者に就いて見るも、是れ唯老廢者の年若き者たるの外一も清新の理想を抱いて時世の改造に心を苦むるものあるを見ず。青年の祝福たる懷疑の味は彼等の嘗試し及ばざる所、弱冠學に志してより證典死書に傾倒するの外、毫も活ける人生の疑惑に逢着するの機會を得ざりしを以て、三五年にして其の學を卒へたるも、早く既に村學究となり、道學先生と化し了し、平板凡俗の倫理說などを振廻して世上又疑惑なるものの存するを知らざるが如き爲するもの、比々皆然らざるは無し。あゝ君よ、昔者須梨盤特は三個年に十四字を記せざりしが、尚ほ佛に成りぬ。提婆達多は六萬藏を誦じて而かも無間に墮ちたるに非ずや。安住の一念を離れて天下の知識を集むるも沙上に樓閣を城くに等し。彼等空茫にして自ら悟らず、偏に知を外に求むるもの、吾等より見れば何ぼう無意味の事に候はずや。況してや自ら僭して人に教ふるの愚を料らず、年三十にも滿たざるに早くも老先生の態を成して諄々乎たるに至りては、捧腹絶倒の限りと存じ候。

天皇神權說は今日に於ても尚ほ青年法學者の頭腦を支配し居るは意外にも事實に御座候。祖先教に基ける國體論は、國家主義と並びて、倫理學者の金科玉條たることも依然として故の如し。乾燥無味なるヘルバルト等の教育學は今日尚ほ教育者の頭を苦め、年々地方村夫子によりて開催せらるゝ夏期講習會には例によりて教育倫理の少年學士多く聘せられ、教育社會の大問題は依然として公德と成法とか、言文一致とか、何々教授二十五年勤續の祝賀會とか云ふ樣のものなること、是れ亦申すまでも無之候。宗教は勸財と撰擧の道具に使用せらるるの外、何の活動も無く、近くは本願寺の騷動の如き、毫も地方豪家の相續爭ひの私事に異ならず候。新佛教と云ふが如き運動は一時青年僧侶の會同の外に何の意味もなく、新宗教の論議は昨年來喧しかりしが、アウンハラバ、濱口熊嶽、乃至半僧坊、長生の荷等の筆目の外、教界又何等の新現象を認めず候。一切斯界の事、眞に胸に惱みある者の眼より見れば馬

牛相關せざる事のみ。要するに太平此の上も無き事に御座候。

何れの邦に於ても革新の思潮は文藝の上に現はるゝを常とするは君の知らるゝ所也。此の邦に於ては然らず。文藝は徒に凡俗なる現代を註釋し、讃美し、裝飾するの外、他事無けに見え候こそかへすがへすも無念の至りに候へ。人は輒ち口を開いてトルストイを稱し、ゴルキイを讃すれども、彼等を產するに至りたる迄の魯國が、現代文明に對して如何ばかりの苦悶と健闘とを經由せしやを考ふるものあらざるなり。君よ、等しき者のみ等しき者を解し得べし。此の凡俗の社會に醞釀せられ、絶えて人生の疑惑に陷りしこと無き時勢の寵兒に、爭でか彼等を解し得べき精神的素養あるの謂れあらむや。唯々標榜の新奇を喜び、漫然新思潮を口にするもの、そもそも何等の無意義にて候ぞや。されば褒むるもの貶するもの、畢竟一時の流行にして、やがては吹く風の何處をそれと跡も無く消え失せ候ひなむ。イブゼンも然り、ニイチェも然り。吾れは彼等と共に是等の先哲を口にするに忍びざる也。ニイチェに就いては君の書にも見えし如く、到底部門的學究先生輩の窺知を許さざるものありて存す。彼を目して哲學者とし、倫理學者となし、乃至詩人、修辭家とするもの、既に人々相解する道の第一義を逸す。吾等は此の偉人の爲に知己少きことを悲むの情に勝へず候。

嗚呼君よ、文明の苦痛は斯かる時世に於て最も深く感ぜらるゝものに非ざるか。今の思想界の煩瑣と平和と單調と凡俗とは、何時まで吾等を欺き、吾等の精神に安慰を與へ得べしとする歟。吾れは平和を持ち來せしに非ず、子をして親に離れしめ、婦をして夫と分れしめむが爲也と呼ばはり得るものの出でたるは、やがて斯かる時世には非ざりし乎。君よ、偉人の出づるまでは世は常に平和なるものぞかし、されどその平和は命なき無事也、毒酒に醉ひ倒れたるものの眠り也。吾れは目覺めたらむ時の苦惱を想ひて、一日も早く此の平和の破却せられむことを望むの情に勝へず。眞の晴天は暴風の後に來るが如く、戰闘を經ざる平和は眞の平和には非ざる也。

所詮は人々自ら悟るの外無しと存じ候。自ら悟らむと欲せば先づ自ら疑ふに若くは無し。個人は個人の存在を疑へ。其の何の爲に既に生き、又何の爲に將に生きむとするかに就いて眞摯なる考察をめぐらせよ。是れ最も古き疑問にして又最も新しき必要也。社會も亦其の存立の根據を疑へ、殊に國家は其の憲法、法律と廣大なる版圖と強盛なる軍備とを擁して何の爲に存在するか、又存在せざるべからざるかを疑へ。個人も社會も國家も先づ其の天分に就いて明白なる覺悟を有するに非ざるよりは、一切の行動すべて無意義に終らむのみ。畢竟デカルトの哲學の如く、吾等は先づ自己の存在に關する自覺を喚び起して茲に其の立脚の地盤を確めざるべからず。君よ、斯の如くにして世に多くの驚きと疑ひと苦みと惱みとあらむ。唯是の驚き、疑ひ、苦み、惱みありてこそ初めて眞摯なる人生の解釋はあり得べし。君の所謂愛の福音も亦是の如くにして初めて宣傳し得む。兎も角も吾れは吾が思想界の平氣を以て其の根本的病弊と思惟する也。君は如何に思ひ給ふや。

* * * * * *

七月五日の君の御書は是の状を認むる數日前に落手仕候。英皇不豫の事に關して大英國の前途を豫想せられたる仔細は、又あるまじく剴切痛快の御論と奉存候。ミセス・ベサントの印度帝國に就いての演説を假りて我邦にあらしめば如何。吾等は是の想像によりて

一の大なる教訓に接したるの感無き能はず。余帝國の空前絶後の誇りとする戴冠の鴻典を目して無益なる觀世物と罵倒し、苟も國家の天職に對する明白なる自覺に基かざる一切の權勢と榮華とを無意義と貶して大帝國主義に心醉せる英國上下の人心を警攪するあたり、抑々何等の痛快ぞや。而して帝國主義の政府が此の如き言論の自由を容認するの雅量もさることながら、是の國民的虚榮心に對する大打撃に對して大喝采を酬いたる國民に到りては、覺えず拍案三歎を禁じ得べからず候。げに君の言はるゝ如く、英帝國の大いなるは其の殷富に非ず、其の軍備に非ず、實に是の國民あるに依る也。君よ、試に同一の事件を移して我邦に擬せば如何

わけて興味あるは聖ポール寺院に於ける英皇平癒の祈禱に御座候。教會の祈禱が英國の社會に於て一種の儀禮以上に如何ばかり國民の眞信に接觸せるものなりやは、吾が審にせざる所なりと雖も、君の報ぜられたるものの如きは眞に吾等の見て偉大とする所也。日の沒せざる帝國の君主を病に惱める汝の僕と稱し、彼れの重患は彼れの悔悟を強めむと言ひ、彼れをして其の發生を汝の畏れと光榮とに捧げしめよと言ふが如き、是れ即ち一切現世の虚榮を排無して靈界の威嚴と光明とに事へしむるの一大告救也。かゝる偉大なる信念に基きて立てられたる國家は幸ひなる哉。あゝ君よ、是を以て君主神權の上に建てられたるルイ十四世的國家主義に較ぶれば如何。

嗚呼鄕國の事傷心すべきもの何ぞ一に是の如く多きや。想ひやるだに心苦しき限りに候。神の物をも其の有となさずんば已まざるカイザルの國に於て個人はたゞ一個の頭顱を有するの外に何等の價値をも認められざる也。是を以て吾れは思ふ、當代文明の革新は社會の上下にゆき亙れる現世的國家主義の桎梏を打破するにあり。此の一難關にして通過せらるべくんば、自餘思想界の事、おのづから順風に帆かけて長江を下るの概あるべくと存じ候。言囁嚅として意甚だ明かならず、たゞ〳〵御推讀を仰ぐの外無之候。

君よ、吾れの國家に就いて爾かく言を爲すは主として個人の爲に候。個人の精靈は無盡藏也。釋迦出で、孔子出で、基督出で、ソクラテース、プラトー、ダンテ、沙翁、ゲーテ、奈破翁出で、バイロン、ニイチェ、日蓮出でたるも、個人は猶ほ依然たる無盡藏に御座候。此の無盡藏の開發する所に人生の精華あり、光榮あり。所謂人道とは是の開發の結果を中心として無限の繼續を歲時と方處に繫けたるものの謂に外ならずと存じ候。されば是の無盡藏の開發を障害する如き生活方法は、すべて人道の公敵としてその改造を期せざるべからず。是れ將た個人自衞の本務にして、同時に又當代の權利たらざるべからず。吾が先に人は自ら悟らざるべからずと曰ひしは即ち是の事の謂に外ならざることは、君の既に諒知せられたる所と存じ候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鎌倉に移り越し候てより、はや一年にも間近くなりぬ。東京へは去年の暮このかた一度も行かず、人にも世にも日に疎く相成申候。此地も思ひの外の俗地にて吾等が如きものの永く住まるべき處にてもあらぬにや、此頃は駿河灣清見潟の風光寤寐の間に往來致し、曾遊の感興今更の如く想ひ出され申候。何れ是の秋頃にはかの地の客となるべきかと懸念致し居り候ひぬ。病にかゝりてより口に酒盃を接けず、眼に美色を絶ちて、此世さながら禪房の中に等し。あゝ人生酒を絶つて何によりてか行樂せむ、吾れ曾て君に言ひ約りぬ、君還り來まさば願はくは、夕清見潟の海樓に痛飲し、其の夜論

腔の血一斗を吐いて死たむと。君よ此語矯に似て矯に非ず、吾れは時として眞に是の如く思ふことある也。過ぐる頃臨風宇都宮より一葉の新紙を送り越し候ひしが、開き見れば令弟潔君が主筆たる松陽新報にして、中に君が潔君に與へたる私信を掲載しありき。吾れは君が其の私信を讀みて一種の感情に打たるゝを禁じ能はざりき。君は其書の末に吾が事に言ひ及びかの清見潟に快飲して滿腔の血一斗云々の吾が言葉を引きて、『嗚呼是れ病に苦める憐むべき我友の聲ぞかし。予は是の友の顏を或は此世に於て再び見得ざるべきかと思へば斷腸の思に勝へず』と書き給へりき。あゝ我友よ、君よ爾か思ひ給ふか、今日まで君に明らさまに言ひしことは無けれども、吾れも亦是の如く思うて日夕憂苦しつゝありし也。唯幸にして病尚ほ太だ重からず、力めて生を養ひ神を勵まさば、尚ほ殘生の君と共に樂むべきものあらむか。唯旦暮藥餌に親みて坐臥すべて意の如くならず。是の如くにしてよしや百歳の壽を保つとも、佳人一夕の歡會に價せざるを念ふと雖も尚ほ且つ此の生の戀々として捨て難きものあるを覺ゆるぞ是非も無き。君よ、弱きはげに人の心なりき。忘れもせず、三年以前の八月二十二日のことなりき。君と臨風と吾れと舳を同じうして遊びくらしゝ扇が浦の一夜をば君は如何に憶ひ出し給ふぞや。あゝ是の三たりの友の相會して斯かる遊びを再びすることは、此の世にて望み得べき事なるか。今や臨風野州に下りて吾れは湘南に客となりぬ、彼れは身世の匆劇に處して悠遊の暇を得難く、吾れは病軀を擁して遠く動き難し。たまたま來り訪ねらるゝも、座に酒盃なく席に佳人無し、あゝ吾れ何によりてか是の磊塊を放蕩せむ。來らむ年の秋には君歸り來まさむも、かゝる歡會の再びし難く、往時の忘れがたきを想へば、轉た人生遭逢のはかなきを傷まずんばあらざる也。あゝ君よ、笑ひ給ふ勿れ、弱きはげに人の心にて候ぞかし。

* * * * * *

斯かるよしなき繰言を書き列ねむは限りなき業なるべければ、終りに學界知人に就いて思ひ寄り候事共五六を錄して此の趣味無き長き手紙を了るべく候。

既に御聞き及びも候半か、吾等の文科大學にては此度史學科の外國教師リース博士を解雇致され候。聞く所によれば同科には自今外國教師を傭ひ入れざる方針の由にて、リース博士の補充としては先づ以て[illegible]教授となられ候、史學科の講座に外國教師を[illegible]るに至りたらむには、本邦史學の一進步として慶すべき事なれども、こは吾等の少しく危懼する所に御座候。吾等は素より坪井、箕作諸君の學識を疑ふものには非されども、博聞強記なるリース博士の缺在を補充して遺憾なきを得べきや否やは、聊か懸念せざるを得ず。言ふまでもなく西洋歴史の事たる、其の史料に關し、國語に關し、又其の人情風俗習慣等に關しては、漫に本邦人の通達を容さざるものあるや論無し。本邦學士が僅に三五年の留學によりて此等の困難を除却し得べしとは吾等の決して思惟し能はざる所に御座候。文科大學史學科は果してかゝる事情に打勝ってまでも自今外國教師を要せざる迄に進步し居るや。返すがへすも疑惑に堪へず候。不幸にして吾等の疑惑にして正當の理由を有せむ乎、本邦史學の盛衰に關する由々しき大事と存じ候。賢明なる學長並に當事者はかゝる單純なる遺算無かるべきは、吾等の萬々信ぜむと欲する所なれども、疑惑は遂に疑惑たるを免れず。君は如何に思ひ給ふや。

吾等更に思ふに、史學科にして若し外國教

師を要せずとせば、哲學科の如き無論同一の措置に出づるを可とすべきに非ざるか。哲學科に外國教師を要するは、主として哲學史の講義の爲なること勿論也。何故に哲學史の講義が外國教師に待たざるべからざるかの理由は、取りも直さず何故に西洋史の講義が外國教師の力に依らざるべからざるかの理由に御座候。精しく言へば、其史料、語學等の點に關して本邦人の容易に得難き便宜を彼等外國教師は有すとの理由に外ならずと存じ候。況や哲學史は思想の發達に關する思索なるを以て考察思辨の力に待つ所多し。是を西洋歷史が客觀的事實に關する所の多大なるに比すれば、本邦人の是を學得すること遙に容易なるものあるべし。されば若し文科大學の方針が漸次外國教師を除去するにあらば、次には必ず哲學科教師の解傭を見るべきことと存じ候。君は是の邊の利害を如何に觀給ふや。

本年度留學生三十餘名は例によりて發表せられ候。是の事に就きて注意すべきは從來學校を出たばかりの新學士の少からざりしに反して、今回は概ね既に各官立學校の職員となり居れる故參の類なること、從來文科方面に於ては哲學關係の留學生尤も多かりしに今回は一名も無きこと、或は從來漸めて僅少かりし史學科の留學生を二名までも出だしたることなどに可有之候。新聞紙は是の撰抜に關して情實多かりし由を報ずれども如何にや。唯吾等の心附ける二三の遺憾を言はゞ、高等師範學校より上田敏君を出ださざりしこと、若しくは文科大學より内田銀藏君を送らざりし事等に候。上田君の詞藻は餘り感服せざれども、其の語學のタレントは當代稀有と稱すべきもの、恐らくは英文學科の出身者中君の右に出づるもの無かるべしと思ふは決して吾等が私見のみにはあらざるべし。同君の奉職せる高等師範學校にして若し英語研究の爲に一名の留學生を撰抜せむと欲せば、無論同君を推すべきに、餘り名聲なき某氏の是に代りたるが如きは、頗る遺憾と謂はざるを得ず。内田君は留學の撰には入りたれども、そは歸朝後廣島高等師範學校の教授たるべき約束の下に於てなりと聞く。是れ亦吾等の、恐らくは君も亦遺憾とする所なるべし。其の學風に於て、其の學殖に於て、將た又學者たるの品性に於て、内田君の如き人當今幾人ありや。同君の如きは實に將來の大學教授として殆ど模範的人物と謂ふも不可なし。文科大學は氏の如き才を收容せずして抑々何人を收容せむとするや。單に中等教員の養成所たるに過ぎざる高等師範學校の如きは到底氏の驥足を伸ばし得べき地に非ず。吾れは是の事に就いても、例の忌はしき情實談を耳にしたれども、筆にするだに厭はしきことなれは省きぬ。要するに、留學生の人才鑑識に就いて、イマ一層の用意を當事者に望むは決して不當の要求に非ざるべしと存じ候。

丁酉倫理會に對しては近來多くの興味を有たざれば、其の近況も亦おのづから審ならず候。嘗て中島、桑木二君の提論の下に、ニイチェの研究ありし由は聞きたれども、其の所謂研究の如何なるものなりしかは聞知し及ばず。畢竟かゝる問題は部門的學究先生に解析せられむには、餘りに多くの非學究的分子ありたるべきを、嘆ながら懸念罷り在り候ひき。哲學雜誌廣告によれば、ザラトストラ如是說と道德發生論とに基づきたる桑木君の一著述あり、題してニイチェの倫理說と稱する由。あゝ吾等の關はるところは說に非ずして人也。桑木君何ぞ其の所謂倫理說より一步乃至百步を進めてニイチェ其の人を解說することを爲さざるや。そも〱ニイチェに學說なるものありしや否やは暫く措き、此の誤解せられたる偉人に對して同情の意

を表せしむるの道、唯其の人物に對して深厚なる同情を寄せしむるの外無之と存じ候。げに君の言はれし如く、愛は理解せしむ。唯此れ是の道、人々相解するの道と存じ候。

去冬以來、芥舟、臨風、竹風、晴雪諸子と兩三回相會せし外、殆と絶えて先輩知友に面せず。當地にありては時々田中智學氏と來往するの外、山に面して書を讀み、海に臨みて嘯くの外他事なく候。是の如くにして朝々又暮々、徒に歳時の水の如く流るゝを送るのみ。近來久しく新書に接せず、心少しく飢ゑたるの感あり。あゝ吾等は何時まで讀書子たらざるべからさる乎。歎喟の至りに御座候。

＊　＊　＊　＊　＊

書き送りたき事は何時迄書きたりとて盡き間敷候まゝ、惜しき筆を茲に擱き申候。今朝君が七月十八日夜の書翰一通と美術雜誌二册並に大英新百科全書一册とを受取りぬ。御苦心の段々毎もながら謝するに辭無し。書中『街頭の樂手』の一篇感興淺からず讀過候ひしが、末段の一節特に吾が情を動かし候。

嗚呼世に棄てられて世を怨まず、人に顧みられずして人に背かず、一箇の風琴に命を託せるかの老樂手、彼れが前身の何なりしかは我れ之を知らず、彼れに罪過ありしとするも我れはそをさばく判官とならじ。又彼れの現在が如何に窮困なるも我れは必ずしもそを悲しまじ。彼れの風琴より出づる哀れの音律は、凡ての懺悔よりも力あり。彼れが命を知り天を樂める自得は、總ての富貴榮華よりも尚ほ且つ貴し。

吾が言はむと欲する所亦是の外に出でじ。乃ち君が此の文を錄して是の書を結び申候。今夕此時、君も或は其の故郷の病友を想ふこともあらむか。吾れは此の書によりて遙に君の健康を祈りて靜に病の床に就かむ。あゝ夢よ、吾等が此世に於ける最終の隱れ家よ。此の夜の眠に幸あらしめよ。

明治三十四年八月十九日夜　鎌倉長谷にて

## 自國の作を讀まざる風

近頃の小說に見るべきもの絶えて無し、好いの惡いのと言ふ丈が野暮也。ロセッチが詩はその妻の爲に作られしと聞きしが、今の小說家は何人に讀ませむとて、かゝる小說を作るにや。

是に於て文字無き俗衆が講談物に走るが如く、少しく教育ありて外國文學などの趣味を解せる人は、自國の文學を手にするを恥とするの傾向あるに至れり、彼等は動もすれば曰く、吾等若し小說に溺るなば、ゾラ、ズーデルマン、シエンキーヰッチ、凡て思ひのまゝ也。何を苦んで今の紛々たる作家の子供らしき製作を要せむやと。吾人是に對して言ふべき言葉を知らず。

恐るべき傾向なる哉。而して今の小說家の多くは是の恐るべき所以をだも覺らず、タワイもなき改良講談などの餘技に浮身を窶す也。大文豪、大傑作、是の如くにして出で得べくんば、お目出度きこと是上も無し。

遮莫、茲に世にも氣の毒なる一種の人類あることを忘る可からず、己れが職責の一部として、如何なる駄作をも讀まねばならぬ、批評家と稱する者、是れ也。

（明治三十三年六月）

# 巣林子の女性

Von Sonn' und Welten weiß ich nichts zu sagen,
Ich sehe nur, wie sich die Menschen plagen. ——Goethe.

## 一　巣林子が戯曲に於ける「人」

予輩は巣林子の戯曲を讀む毎に、其の心容の如何に大に、其の同情の如何に博きかを想見せずんばあらず、須彌栴檀の山の月に色即是空を觀ぜし三界の教法を想ふの心は、即ち相の山の辻歌に花の時を唱ふの心なり。櫻井驛の訣別に忠孝の義烈に感じたる涙は、即ち蜆川の夕風にまゝならぬ戀路を忍ぶの涙なり。吉野初瀬の名木も、畦の小路の名も無き花も、共に等しく彼れを喜ばせしなり。都大路に青海の簾を捲上げて月前に彈琴する深宮の上﨟も、埴生の小屋に立ちかぬる煙に咽ぶいぶせき賤の杣男も共に、等しく彼れを感ぜしめしなり。彼れは狹隘なる人爲の階級によりて人間に城壘を築き、若しくは自が特殊の嗜好に準りて他を規するが如き種類の人には非ざりき。彼れは大沙翁に似て、廣大なる胸襟を披き、自由なる精神を以て萬象に接するの人なりき。是れは亦眞に戯曲家の旨を得たるものと謂つべし。

蓋し戯曲の目的とする所は或る特別なる社會、又は人物に非ずして、一般人間にあり。社會の階級と時代の差別とを離れたる一般人間の本性眞相を顯はすにあり。戯曲中の人物は、素より一定の時代、階級、其他百般の制限によりて各々其の假相を帶び來るも、其の發揚せむと務むる所のものは、一般人間に平等なる眞相ならざるべからず。故に戯曲の要は殊の中に遍を寓し、差別の間に平等を示すにあり。外形の殊は内部の遍を顯はすの一緣となるに過ぎず。故に凡て人性の本體を示すに適當なるもの、即ち之れ戯曲の適當なる材料なるのみ。多くの人は巣林子が戯曲的人物の、殊に其の女性の、一般に卑賤なるを咎むと雖も、素より戯曲家として彼れの價値を上下するに足らざるの俗論のみ。蓋し想ふに、封建時代にありては、社會的階級の區別嚴定にして、上下永く相懸絶し、親和交際の機會に乏しく、嚴重なる慣習の制裁は、一般世事をして、一定の埒内に沈着固定せしむるの傾向あり。此際一個の戯曲家として、一般人間の眞相を發揮し、大多數の國民に向つて、一般人間の希望と感情とを表白せむと欲するものは、其の材料を、比較的尤も自由なる活動の範圍を有する、中等以下の社會に求めざるべからず。而して尤も多く人情の痛激なる活劇を經驗するものは中等以下の社會中、殊に陽臺狹斜の巷たるべきは素より論を待たず。果して然らば巣林子が其の材料を主として遊里教坊の中に求めしは、啻に批難すべきことに非ざるのみならず、却て寧ろ戯曲の目的を達する上に於て最も至當の方便を取りたるものとして稱揚すべきに非ずや。夫の殿上高家の事情を寫すを以て一に高尚優美たりと心得る輩は、未だ共に戯曲を談ずるに足らざるものなり。二本指すも侍、一本指すも町人と計り思ふか、大小は此の胸にある（鑓の權三重帷子）とは、誠に彼れが戯曲的人物の眞相を言ひ盡したるものと謂ふべし。

今若し如何に彼れが幾多の貴むべき徳義を以て藝妓娼婦に歸し、又如何に其の薄命悲運に對して痛切なる同情を表はしたるかを思へば、予輩は優に彼れが心容の博大なるを認むると共に、愈々彼れが眼中只天眞の人性のみありしを知

る也。讀者試に、遊君三世相を繙け。一般社會が等しく卑しとする遊女の爲、又遊女の爲に、境遇が本性の上に如何の勢力を及ぼすかを示して、爾人必ずしも仁ならず、又人必ずしも不仁ならざるの理に及ぼし、以て人爲的階級の必ずしも品格の高下を累さざるを説けり。

偶々人界に生を受けながら、士農工商の家にも生れず、又は琴棋書畫を事とする身にもあらず、あるが中にも河竹の遊女は何の報ぞや。夫さへあるに自らが古の仕業は憂き流より遣水の、遣手の果さふらふ。此身のつらさは女郎より、倘憂きものとは人知らじ、實に好色の世の中に、誰が身の上も無衣、いとしい事と知りながら、身の役なれば君達を、さがなくせいて逢はせねば、木竹の樣に言はなされ、心の外の罪つくる。勤め寂しき夕間暮、是も遣手の科ぞとて、内の夫婦の鬼顏は、苛責の責より猶つらく、此世の地獄の情なや。遣手に種は無きものを、慾より外は知らぬとて、人に疎まれ憎まるゝ、道はそも何の因果ぞや。

傾城に誠無しと世の人の申せども、それは皆僻言、訳知らずの詞ぞや。誠も嘘も元一つ、たとへば命擲ち如何に誠を盡しても、顏の方より便無く遠かる其時は、心矢竹に思ひても斷した身なれば儘ならず、おのづから思はぬ花の根引に遇ひ、掛けし誓も譃となる。又初より僞の勤ばかりに逢ふ人も、絶えず重なる色衣、つひの奇遇となる時は、初の譃も皆誠、兎角只戀路には僞も無く誠も無し、縁のあるのが誠ぞや、

親里を振捨てゝ扇の影に給仕へ、川中に立てども人中に立たれずと遊賤まれし遊女遣手の心事も斯く拆き來れば、素之れ本來一般の人情、偶々境遇によりて其の常態を變じたるのみ。巣林子が人性を見る概ね此類なり。されば遊女の娘に五位の局は彼れが眼には敢て不倫に非ず、何ぞ故らに古今集と明月記とを引いて之を證するを須ひむや。昔者プラキシテールがエヌス神の像を作りしや、其の模型を當時の名妓フリネーに求めしが如く、巣林子は其の女性を遊女の間に求めしは、少しも怪むに足らず。彼れは遊女の中に人間を見たればなり。

## 二　女子は如何なるものぞ

任他、女子はそも如何なるものぞ、昔の法師が言へりし如く、人我の相深く、瞋に滿たず、慾に憶らず、物の理を知らず、而かも頑迷にして諂ふべからず、そもすなほならずして拙きものは女子なるか。花は咲きながら藤蔓のねおけたる如く、其の性は捻たべて僻めるか。呀何ぞ夫れ然らむ、此等は只すなほならずして僻める一面を見たるに過ぎざるのみ。渠れ僻めるもの無きに非ず、されど渠の情は時として清きこと珠の如く、静かなること露の如く、累心無く體の之に對して惶づべきもの有る也。渠れ理に闇きもの無きに非ず、超邁穎脫の才、寸心刹骨の勞は渠に於て見さるところ、されど無心の裏即ち天眞の妙理あり、猶鏡、水月に對して自ら現を爲し、徐風簫管に入りて自ら音を發するが如きもの無きに非ず。渠れすなほならざるものあり、されど柔婉溫藉、言尚勝へず、一枝の紅杏、曉露に惱んで輕風の來り拂ふを待つが如きあり。誰か女子を僞なりと謂ふ、其の偏に感情的なる、一たび情機の動く所、強ひて虚飾を裝ふ能はず、天眞爛漫として羅帶する處少し。渠はなべて感情の鏡なり、社會が生ける戲曲なり、一般人生の悲哀と希望とは最も明晰に最も忠實に渠によりて發揮せらるゝ也。渠は實に天成の戲曲的人物なりと謂ふべし、女子微りせば此世如何に寂しかりなむや。實錆、美はしきもの、樂しきもの、所詮女子を外にし

て何處より來る。天にありて星、地にありて花たるもの、人にありて女子に非ずや。何物の痴人ぞ、敢て妄りに善惡良否と看做し去らむとはする。

さるにても思議すべからざるものはスフィンクスと女子の性情とならむ。女子果して柔順なるか、何ぞ其の嫉妬あるや、嫉妬の怨も渠は執念深く記憶して復讐せざれば已まざる也。渠を以て蛇に比するもの慥に其の半面の眞相を示せる也。渠の性果して貞潔なるか、何ぞ其の陰險恥を知らざるや。動もすれば渠は清きものを惡み、正しきものを嫉び、美なるものを猜み、自利を謀るに倦むことを知らざるなり。良人に媚を呈して貞愛夜を徹し、良心已に斷へて人を待つ、惡魔は只其の迷を深からしむるのみ。渠れ果して智慧あるか、何ぞ其の事理を解せざるや。渠は情理を察せず、利害を顧みず、一概に熱し來れば遂に眼は見る所なく、耳は聽く所なし、渠の心は何の如く水の如し。渠れ果して勇猛、勇氣あるか、何ぞ其の志一度にして奪ふことを得ず、威武も屈する能はず、富貴も誘ふ能はず、金銭器無、凡骨俗色あるものあり。渠は何なる謎の如くにして而かも解なるが如く、謎なるが如くにして而かも謎なる如く、思慮深きが如くにして而かも行爲謀無きが如し。渠れ畢竟何物ぞ。誰か此のスフィンクスを解するのエデプスぞ、巣林子は如何に之を解せしか。

## 三　愛と名譽

愛の詩人なる近松は亦女性の詩人なり。愛情は女性によりて最も多く發揮せらるゝものなれば也。彼れは愛を以て女子の本性と爲し、之に配するに名譽心を以てせり。渠にありて名譽心は他人に賞揚せられむと欲する積極的願望に非ずして、只他より惡しく言はれざらむと欲する消極的意思に過ぎず。巣林子は此の二者を以て女子の二大特性と爲せり。愛を以て女性を説かむとするは稀くの論見に非ず、只其の生ける戯曲的人物によりて其の特性たる所以を證明したるもの、古來幾人かある。予輩は巣林子が範に之を認めたるを稱するものに非ず、唯そは實際に描きたるを貴ばむとするのみ。乞ふ彼れが如何にして此の二大特性によりて女性を活動せしめたるかを見む。

凡て人間の動作は慾望を滿足せむとするの手段として見るを得べし、而して此の慾望は女子にありては概ね保守的なり、消極的なり、受動的なり。渠は新しき慾望を滿たさむとせむよりは、寧ろ既に得たる幸福を失はざらむことを務むる也。故に渠の心は容易に外物に適應し、其の力の及ぶ範圍內に於て其の小やかなる滿足を求む。斯の如くにして一たび其の滿足を得るや、渠は全幅の精神を傾けて之を修飾し、醇化し、美化し、遂に自己の外は何人も想像する能はざる一個の樂園を成就す。運命の前には渠は從順なる奴隸なり。此の一層は渠にとりて苦痛に相違なきも、渠は幾も無く此の苦痛の中に幸福と滿足とを認むることを識らざるなり。然れども愛情の前には渠は專橫なる君主なり。愛情の自由獨立の爲には渠は生命を賭して之を爭ふ。渠は一點毫も之を累はすことも容さざる也。

渠の滿足は廣きの中に在らずして、寧ろ深さの中にあり、大きの中に在らずして、寧ろ強さの中にあり。故に一旦此の滿足を失ひたる時は、其の悲哀自ら深刻にして、其の懊惱は思慮考察の餘地を殘さず。之れ女心の一徹にして思返しの無き所以なり。男子にありては則ち然らず、世界は其の家なり、あらゆる人は其の友なり、眼に世路の光明を望むべし、人世の流轉に遇ひて奔く所無し、故に心自ら開濶にして物に拘泥せず、失敗の後には恢復し、

失意の後には希望あり、妾は得と失とに對して甚しく關心とする也。然れども女子は全く之に反す。方丈盈尺の地は妾の世界なり、愛は妾の唯一の希望なり、淵瀬定めなき人世に在りて平和と笑とを以て此の小天地に滿足し、敢て外に求むる所無きは、所謂此の愛の中に無上の滿足を夢みればなり。故に一旦愛を失はむか、日月輝かず、花鳥笑はず、天地は妾にとりて暗黒なり、妾は只剃刀を執って已まむのみ。之れ實に一般女子の性情ならずや。

予輩は、巢林子が道破し委曲に深く佩心せしことを多とするものなり。げにや、彼れが女性は無邪氣なり、溫柔なり、あらゆる女性の弱點を有せり、其の理性も常に其の女らしさを失はず。其の關する所は己の身に非されば己の家族なり、此等の事情相絡綜して愛情の活動を合成す。故に彼れが女性の千緒萬端の行爲の情機は、尋ね来れば、とかくして愛の大根本に歸着せざるは無し。彼れは女性に特有なる不注意を以て強大なる愛の理性の光を暗らしたる結果なりとせり。彼れは女子にして若し勇氣あらば、そは愛の感激に依るべく、女子にして女らしからざる罪惡を犯さば、そは愛の眩惑に因るべきを信ぜり。彼れは又

## 四　嫉妬は愛の反面

なる者は最も明晰に表現せり。蓋し財を欲せざる者は他の富を羨まず、他を愛せざるもの、若しくは他を愛せむと欲するの情無きものは、他を嫉妬するの謂れ無ければなり。仔細に觀察すれば、嫉妬にも二樣の別あり、一は積極的の嫉妬にして一は消極的の嫉妬なり。夫の二女子一男子を爭ひて相嫉妬するの情は前者なり。若し夫れ自家胸裏の愛情尚未だ其の對象を見出さず、戚々として既に悼傷するの時に當り、他の纏綿たる情交を見る時は、自己が孤介の狀に比して羨仰欲慕の餘り、轉って嫉妬の情となる、所謂法界悋氣なるものは即ち後者なり。今ま嫉妬と愛情とを較ぶれば、一見相貌相異なるが如しと雖も、其實は同一物の兩面に過ぎざること、猶彼の花絨の表面に薔薇の花と刺とを織り成せるものは、裏面にありては素と同一の彩絲たるが如し。其の花を賞んで其の刺を憎むものは、眞に薔薇を愛するものに非ず、其の笑を好んで其の涙を嫌ふものは眞に人を愛するものに非ず。陰となり陽となるは素と之れ偶然の緣のみ、嫉妬と愛とは元來兩岐なし。人は嫉むこと無くして愛することを能はざれば也。

巢林子は已に愛は女子の本能なりと喝破して[illegible]を以て、同時に嫉妬も女子の本能なりと[illegible]たり。彼れは強大なる嫉妬は同じく強大なる愛情に起因するものと信ぜるを以て、強大なる愛情を寫すに常に強大なる嫉妬を以てせむことを務めたりき。[illegible]るたびに後庭の人を羨殺せし[illegible]たる淑女と、「愛と嫉みと浮世の一つ」に身も世も忘れて、人も落すまじき地を裂いて、目出度く落ちたる、世間の左樣碎けよかしと呪咀せし狂亂の婦女とは、抑も何等の相違ぞや。高きは同一の發現、低きたるに於て失ふ所無し。取って嘯まむと言ひましたが、[illegible]なき人に吠えしいまし、實に取って嘯まむとまでお岩を嫉み、而かも[illegible]を嫉みしだけ[illegible]、新りも附けたい戀の敵に表面の情に依たりしことは素より、「法界悋氣」の腰元共の言を待たず、深窓裏を撫して夕べ〳〵の涙川に咽びて屋に懷を遣りし一少女、花情柳態一令に堪へざらむとす。而かも彼れは仇と怖と怨念のみつに嫉妬に燃ゆる火に戀の敵を呪ひし小品が崎の狂鬼女に非ずや。

名譽心は愛を外にして別に存在するものに非ず。女子は男子よりも一般に名聞を重ず。然

れども所謂名譽心の主とする所は、其の愛の品位と純潔とを保存する事に外ならざるが如し。蓋し愛の物たる、神秘言ひ難し。予輩自ら其の然る所以の理を知らずと雖も、蓋し戀心の第一義は所詮、吾が愛する人をして常に自己の心情の純潔なるを知らしむるに存し、他を排して己を利せむとするが如き陋劣なる人我的意志は、自ら其の實に之を有するも、他をして之を知らしむるは、其の最も忌避する所なるが如し。故に其の戀人に對しては、不仁者も仁者となり、不義者も義者となり、怯夫も勇夫となり、小人も君子となる。戀する人にとりては、其の愛する人に咎めらるゝ程苦しきこと無ければ也。故に日夕兢々として憂慮する所は、其の戀人が自己を輕蔑する理由を發見するにあり。今たゞ愛情ありて茲に嫉妬あり、嫉妬は愛情の反面に過ぎずと雖も、畢竟利己排他の願望に外ならず。故に他の爲に自己の嫉妬の情を知らるゝは、即ち自己の卑劣なる心事を表白するに異ならず。從つて其の戀する人の爲に之を知らるゝは、即ち自己が愛せらるべき價値無きことを、自らの口より表白するに同じと云ふべし。之れ戀する人が、其の全力を傾けて嫉妬の情を掩蔽し、其に無事を裝はむと務むる所以なり。

得意の愛は女子の最大幸福たるが如く、失意の愛は其の最大不幸なり。而して得意の愛より生じたる幸福は女子の最大名譽なるが如く、失意の愛より得たる嫉妬は其の最大恥辱なり。是故に女子の名譽心は主として他の前に其の嫉妬の情を抑制し、他をして之を覺らざらしめむとするの盡力に存す。故に名譽心も亦愛情に本くものにして、之を喩へむに一たび反射したる光線の如し、其の進行の方向は全く相反するも、所詮其の本體は愛情なり。蓋し愛は女子の實性にして、名譽心は假性なり。愛は放縱恣雎にして節する所を知らず、之を抑制し調和するものは即ち名譽心なり。愛は多く破壞的にして名譽心は多く構成的なり。作用に於ては、愛は常に積極的にして名譽心は消極的なり。所謂まゝならぬとは愛が名譽心の束縛を脱せむと欲するの歎聲にして、所謂浮世の義理とは名譽心が愛を抑制するの羈絆に外ならず。仔細に巣林子が女性を觀察すれば、予輩は此の二者が女子の胸中に輾轉反側して相煩悶するの情狀を見るに難からざる也。

## 五　―天の網島のおさん

乞ふ予輩をして巣林子が女性の一標として「天の網島」のおさんを取らしめよ。蓋し之れ彼れが女性中最も善く寫されたるものの一なり。抑もおさんは、夫治兵衛の放逸度なきを憂へ、小春に乞ふに治兵衛との緣を切り果てむことを以てせりき。縱し其の目を當る所は如何に立派なるにもせよ、其の形跡の嫉妬に類することは爭ふべくもあらず。家の爲、夫の爲にと言へる口の下に、誰か我身の爲を認めざるものぞ。而も嫉妬は女子の役なから、他人、殊に愛の競爭者ともいふべき小春に、明々地に斯かる事を表白するは非常なる恥辱に相違無し。彼女は此の時、其の名譽を擧げて小春の掌中に託したる也、並に忍び易からざる恥辱を忍び、此の爲し難き事を爲したるは、勢ひ洵に已むを得ざるに出で、必ずしも小春を信じたるに非ず、必ずしも其の然諾を豫想せしに非ず。されば活殺浮沈の權、實に小春が一片の唇舌の上に懸れりしなり。小春が義理を重じて其の依賴を容れ果てしを見て、おさんは如何に其の名譽に感じしぞ。此の大恥辱より己を救ひたる小春は、今や寧ろ大恩人となれり。彼女は今や治兵衛と共に小春を愛せる也。先の嫉妬の心は今や純然たる友愛の情となれり。是を以て、夫の言葉を聞くに及び、

いや、夫れなれはいゝしや、小春は死にやる
いぞや。

と絶叫するも敢て怪むに足らず。あゝ不心中者何の死なら、と嘲らるゝに及び渠女豈でか義として、否寧ろ情として、小春を擁護せざるを得むや。是を以て自己の未來を慮るに遑あらず、情義に感激したる一念は渠女をして一切のことを治兵衛に打明けしめたり。

いやさうでない、私が一生言ふまいとは思へども、隠し包んでもさく〳〵役す、其の罪も恐ろしく、大事の事を打明ける。小春殿に不心中芥子程も無けれ共、二人の手を切らせしは此のさんが機關。こなさんがうかうかと死ぬる氣色も見えし故、あまり悲しさ。女は相見互ひごと、切れぬ處を思ひきり、夫の命を頼む〳〵とかき口説いた文に感じ、身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合、思切るとの返事、私や是れ守りに身を離さぬ。是程の賢女がこなさんと契約違へ、おめ〳〵太兵衛に添ふものか。女子は吾れ人一むきに思ひかへしのないもの、死にやるわいの〳〵。ア、ア、瓢ンなこと、サア〳〵何卒助けて〳〵。

斯くて彼女は其の私財を擧けて小春を請け出すの資とせむと決心せり。其身の晴着は勿論、

是た曲けては勘太郎の手も綿もない袖なしの、羽織までに質内へ、始末して着ぬ淺黄、黒羽二重の一張羅、定紋丸に蔦の葉の、のきもかれもせぬ中は、内裸でも外錦、男飾の小袖まで、さらへて物數十五色、

無いものまで有る顔して、夫の名譽と自己の義理を世に立てむとせり。而かも小春を請け出して扨其の後はなど云ふ未來の事に考へ及ばざる也。小春到底治兵衛と絶つべからず、絶つべからざればこそ請け出さむとは務むるなれ、而かも渠女は這般の影響に慮り到らざる也。治兵衛より

手附渡して取とめ、請け出して其後、囲うておくか、内へ入れるにしてから、其方は何となることぞ。

と言はれてはつと行當り、

アッアさうぢや、ハテ何とせう、子供の乳母か、飯焚か、隠居たりともしませう。

と

わっと叫びて伏沈む。吁、此の刹那の渠女が心はそも如何なりしとするぞ。然り、渠女は眞に小春をいとしがれり、然れども所詮只義理として之をいとしがりしのみ。女子の名譽を賭して一旦のことを小春に打明けしも、小春が情義に感じて眞に之を憐むに至りしも、實は傾け盡して小春の死を救はむと務めしも、所詮治兵衛の愛を復したきが爲のみ、若しくは少くとも復すべきを信じたるが爲のみ。渠女は一切の事物を犠牲にして、只其のたゞ愛情に換ふるに忍びしなり、言ひ換れば、渠女が小春を愛せしは、治兵衛を愛せし爲也。若し爲に治兵衛の愛を失はむとせば、渠女寧ろ小春を憎まむのみ。女子は吾れ人一むきに思ひかへしの無きもの、小春を救はむとする念の切なる渠女は、自己の身も治兵衛のことも全く忘れたり。『請け出して扨其後は』の一語と共に、渠女は一彈指の間に其の現實の境遇を自覺せり、而かも痛切に自覺せり。吁小春を救ふは即ち治兵衛の愛を失ふ所以たるを覺りたる此の刹那にありて、渠女の心臓は如何に鼓動し、渠女の血液は如何に逆流し、渠女の精神は如何に錯亂せしや、いかんぞはっと行當らざるを得むや。予輩は思ふ、此の際渠女が眞の我は殆ど此の計畫を放棄せむとせしに非ざるか。只名譽の一念、渠女を驅りて此の小獻身的義擧を嫌はさしめしに非ざるか。自己の現境を自覺して、「アヽアさうぢや」と悟りたる渠女の心中は、忽ち名譽と愛情

の爭鬪を示し、渠女をして「八ツ何とせう」と歎息せしめたり。「子供の乳母か、飯焚か、隱居たりともしませう」と言ふに至りては、渠女の心中に於て、流石に名譽の一念の遂に愛情を抑制したるの蹤跡を見るなり。洵に自然の徑行と謂つべし。

乞ふ予僣をして女子の特性の一なる不注意を近松が如何に寫せしかを觀ぜしめよ。其の一例として、

## 六 『出世瀧德』の吾妻

を取らむ乎、渠女は其の情郎の窮困を見て其のいとしさに堪へず、咄嗟の間に二百金を調達すべきを受合へりき。身はまゝならぬ遊女なり、そも如何にして斯かる大金を調へむとせる。げに渠女は何の術も知らず、又考へず、恐らくは然諾の刹那にありては、其の出來得べき萬一の望だに胸裏にあらざりしならむ。而かも渠女は漫に口舌を以て受合ひしにはあらで、滿幅の誠意を捧げ、斷々乎として其の必ず調達すべきを決心せりしなり。其の能ふべき望だに無く、しかも斷じて人と契る、そも何等の不注意ぞや。是れ猶不合理なる大前提より合理的結論を豫想するが如し、勢ひ不合理なる小前提を用ひざるべからざる也。吾妻が藤五郎を殺せるは實に自然の結果のみ。藤五郎の胸上に跨りて白刃を擬し、

御身に恨も罪もない、假にも惚れて呉れた人、殺したうは無いわいな。殺さるゝ御身より、殺す我身が悲しいと涙は刃に傳ひしが、なう生けて置いては請出して女夫になるが情ない。私には大事の男がある。其男と緣切れるが戀路の仇となる故に、今刺殺す。懷中の小判は貧な男に遣りたい。殺生の罪、盜の罪、男の爲につくる心、少しは恨を晴れてたも。

と辯解するに至つては何ぞ其の心のいとやさしきや。そもや渠女は人を殺して後は如何せむと思へりしぞ。絃歌の地人を殺して身の全きを得べしと思へりしか、將た其の罪に連坐せざるまでも、盜み得たる金の却て情郎の累と爲らざることを如何にして知り得たるか。心なきも甚しきかな。然れども深く怪むに足らず、吾妻は其の戀人を見て其の他を見ざれば也。殺生の罪、盜の罪、男の爲に作る心、既に此の一事を意識す、渠女は天地に俯仰して疚しき所なし。愛はあらゆる罪の辯解者たればなり。蓋して茲に至れば予僣はヘスター、プリンが、

吾等の爲せし事は其れ自らの純潔を存せり。

(What we did had a consecration of its own.)

(—Hawthorne's Scarlet Letter)

を想ひ出さずんばあらず。あゝ、此の世にありては、罪と愛とは常に不幸たる伴侶なり。吁之れ愛の罪か、社會の罪か。

## 七 『槍權三重帷子』のおさゐ

『槍權三』のおさゐは最も善く世に有勝ちなる女性の不注意を示せるものなり。渠女は貞操に於て缺くるあるに非ず、其の夫を思ふの情は普通の女子よりも寧ろ篤實なるものあり。只其の心愛情に充てるを以て其の擧措は總じて愛嬌あり過ぎるなり。而して渠女は斯かる性質の女子が以て其の身を節制すべき嚴格なる素行に乏しきなり。一言すれば渠女はしまり無きなり。

おさゐは流石茶人の妻、物好もよく氣も伊達に、三人の子の親でも、きやしやで骨細の生れつき、風忍ばしく床しくの、三十七とは見えざりし。

數句能く其の人と爲りと容貌とを寫し得たりと

謂ふべし。渠女は其の娘お菊の年十三なるに權三を添はせむと欲し、頻に權三の器量を褒めたる後、お菊の嫉氣に結婚を否むを見、

「そなたがいやなら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿と云ふ男持たねば、人手に渡す權三樣ぢや無いわいの。」

と事も無げに言迴する氣質さよ。斯かる言語は苟も人の母たるものが其の子の前に於て發すべきものならむや。權三に逢ひて其の娘の結婚の約を結び、

「まづ娘には逢はせませぬ。私に似たらば定めて悋氣深からう、脇へ心散さず一筋に賴みます。惡性があつたらば此姑が悋氣の腰押し、お持たせの名酒お前と私が此樽に、から手をかければ、契約の盃した心。」

瀟洒冶靡の態度、之れ謹厚の女の爲すべき所に非ず。權三が茶の湯の祕書を見むことを請へるを許し、良人不在の空宅に於て深夜引見の約を爲すに至つては、不注意も甚しと謂ふべし。而かも渠女は自ら其のしまり無きに心付かざる也。約を履み夜を冒して來るに逢ひ、一直に數寄屋へ／＼と、手燭片手に傳授の箱、二人忍び有樣は、伴の丞ならざるも誰かは影は障子に男と女、忍びあふ夜の私語と疑はさらむや、而かも渠女は其の不注意に心付かざる也。權三が他に情人あるを知りて嫉妬の念に堪へず、

「是れ見よがしの其の帶は、定紋の三つ引と裏菊と、小じたるい引並べ、誰が縫うた、誰が遣つた。」

と問ひ詰め、「此帶には樣子がある。」と言へば、「樣子といふが妬ましい」と泣きつき、腹立ちまぎれに權三が帶を解いて中庭に投じ、權三が庭に下りて之を拾はむとするを引とめ、

「あゝ帶に名殘惜いか、不承ながら此帶なされ、」一念の蛇となつて腰に捲付き離れぬ。

と叫ぶに至つては狂態極まれりと謂ふべし。惟ふに嫉妬の一念は渠女が爲に渠女自身の別世界を作りし也。其の眼中に只其の娘の愛あるのみ、否己が胸に燃ゆる愛情の焔あるのみ。渠女を圍繞せる天地は滅したり、渠女は最早や現實界の人に非ずして、理想界否寧ろ夢幻界の人となれる也。何の遑ありてか屑々たる俗縁に拘泥せむや。深夜空屋に美少年を引入れて、少しも顧みず、喧爭席を擾し、衣襟寛濶して少しも憚らず、伴の丞の爲に權三と己の帶を拾はれ、「市之進女房笹野權三不義の密通」と高呼せらるゝも尚少しも恐れず、渠女は其の内心に顧慮して疚しき所なければなり。渠女は權三は眞子たり、南無三寶伴之丞、[illegible]刀引拔き障子蹴破りて飛出でしも、其の[illegible]の遂に抑ふべからざるを知り、自殺して其の身の潔白を示さむとせり。おさゐは是の時何に爲しぞ、渠女は尚侍々として其の理想界に夢みつゝあるなり、權三の煩悶は渠女に於て解すべからざりしなり。されば渠女は亂心の人を評すが如き口氣を以て驚慌の權三を止めて曰く、

「此やどうぞ、不義者は伴之丞、身に覺え無いお前が何の過ち、死なうとは、」

可憐なるおさゐは只中心の清きを見、心以外、別に社會に制裁あることを忘れたる也。一言すれば渠女は其の身の實境を自覺せざる也。權三が

「アヽおろかな、兩人の帶を證據に取られ、寢亂れ姿の此態、誰に何と言分せん。もう侍も廢つた。御身も人畜の身となつた。エヽ／＼無念や。」

と憤慨するの刹那、おさゐは俄然として初めて現實界の我に復れり。是と同時に、渠女は恐るべき而かも動かすべからざる未來の運命の宛然として眼前に横はれるを見たり。渠女は落膽せり、戰慄せり、悲泣せり。猶之れ深宵床を離れ

て夢遊せし人が忽然醒め來りて、身の何時しか萬仞の斷崖に懸り、進退活路なきに心付き、且惶れ且悲み、爲す所を知らざるが如し。

　扨はお前も私も、人間はづれの畜生になつたか。

之れ世界に於て尤も悲しむべき語の一なるべし。『扨は』、嗚呼何ぞ此『扨は』の遲かりしや。渠女は人の妻として、人の母として、はた一個の女子として、享受し得べき過去現在未來の三世に渡れるあらゆる希望と幸福とは擧げて、此の悲むべき一語の犧牲と爲り了りたることを痛切に自覺せり。而かも一死以て寃枉を雪がむと欲し、倘後顧の情に忍びず、

　思はぬ難に名を流し、命を果すお前もいとしいはいとしいが、三人の子をなした二十年の馴染には私やかへぬぞ。

と言ふに至つては人情最後の絕調、予輩毎に卷を掩うて言ふ所を知らざる也。

　女子を殺すものは愛情のみならず、名譽心亦之を能くす。巢林子が世話物中の女子は多少名譽心の爲に動かされざるもの無し。

## 八　『宵庚申』のお千代

は其の最も適切なる一例なり、渠女を殺したるものは實に名譽心に外ならず。

　『宵庚申』は他の心中物に異なれる一種の特色を有する者なり。げにやお千代は情に死せり、されど渠女が半兵衛に於けるは、小春の治兵衛に於ける、お房の德兵衛に於ける、若しくはおさが、お島の嘉平次、八郎右衛門に於けると、同一の關係なるか。否々、然らず。要するに彼等は愛の爲に死したりき。されどお千代にありては則ち然らず、「かる〴〵」ながら三度の嫁入に、心侘しき跡も見せず、或は飽かぬ別れに浮世を喞ち、或は歸らぬ死出の途に夫を送りて、身は萍の定めなく、緣も因もなき半兵衛に嫁してより僅に『見かけ一年』『良し』『お腹に四月、唯もたない身』なりとも、予輩はかゝる夫妻の間に純潔無二の愛情の存しがたきを思はざるべからず。但し相緣奇緣の世の中に、渡頭舟を同うして一見傾蓋の思あるものなきにしも非ざれども、そはまことに例外の事のみ。そもや夫の留守に暇をくれる姑心、お千代誠に半兵衛の愛を解せば、毫末だも其の夫を恨む由やある。何事をも知らぬ半兵衛が其の家に立寄りて『ヤアお千代爰に居るか』と呼はりし時に、眞に膠漆の情ある夫婦ならむには、當に急遽走り寄り相抱いて衷情を訴ふべし。一言の挨拶だにせず、夫の言を『聞捨てゝ物をも言はず、直と入り、障子をはたと引立てたるお千代の心中には、幾何眞に半兵衛を愛するの情ありとするや。渠女の眼には半兵衛は『去状さま』と見えざるまでも、『其故を問はゞ、少くとも一譯聞きたくば此方の心におとひなされ、人の知つた事の樣に』と空笑せむこと疑無し。如何ぞ嬌羞好んで人を避くる少女を以て、三たび家を換へしお千代に擬するを得むや。お千代は半兵衛が己を知れる程だも半兵衛を知らざる也。一足かけ二年の馴染、子までなしたる夫の心、知つても言譯して呉れぬか』と怨みし半兵衛は、少くともお千代を買被りしなり。お千代は啻に眞に半兵衛を知らざりしのみならず、彼を疑へり。妓王を以て己に擬せし渠女は、眞に暴戾無情なる清盛を以て半兵衛に擬せしならむ。渠女は清盛に泣きしにあらずして『定め無き男女の習』に身の薄命を寄せしのみ。人已に相信せず、疑心早く情を隔つ。其間如何ぞ眞の愛情なるものを容れむや。お千代已に眞に半兵衛を愛せず、愛情の力は以て渠女を殺すに足らざるなり。然らば則ち何物か渠女を殺したる。名譽心是れなり。

　予輩の先に言ひし如く、愛は女子が精神的生命なり。是を以て愛の品位と純潔とを保つは、

勢ひ女子が第一の動機にして、苟も之が果を爲すものは其の最大恥辱として忌避する所なり。愛の純潔を累すの大なる、蓋し離婚に若くもの無かるべし。結婚は女子にとりては猶愛情の試驗の如し。之に落第せるもの、即ち離婚せられたるものは、即ち公然事實の上より女德に於て缺くる所あるを證明せられたるものに外ならざればなり。其の內情は如何にあれ、お千代は一度ならず、二度までも、此の試驗に失敗せるものなり。女性の名譽の上に二回の大打擊を被れる渠女は涕を含み、恥を忍び、其の最後の運命を半兵衛の掌中に委ねたり。是時に於てお千代の胸中を察するに、恐らくは其の名譽を回復するに之れ急にして、夫に對する愛情の如きは太だ注心せし處に非ざるべし。猶之れ數回の試驗に失敗せる學生が偏に及第をのみ希望し、其の成績の優劣等に就いて特に注意する所なきが如きなり。想ふに、お千代は半兵衛の愛を維持せむが爲には出來得る丈けの力を盡したるべきこと素より論無し。されど之れ素と半兵衛に對する眞摯なる愛情より出でしに非ずして、只彼れの愛によりて夫婦の關係を固うするに在りしこと亦敢て疑を容れず。故に半兵衛を愛せしと言はむよりは、夫妻の關係其物を愛せしと言はむ方、一層妥當なるべく、夫妻の關係其物を愛せしと言はむよりは、其身の名譽を愛せしと言はむ方、尙一層妥當なるべきなり。之を以て一旦姑の爲に是非なく離緣せらるゝや、半兵衛の眞意如何の如きは問ふに遑あらず、表面上夫妻の關係無き以上は、渠女は路傍の人よりも太だ多く半兵衛を愛するの意なきなり。宜なる哉、半兵衛に逢ひて一物をも言はず障子を立切りて遑々然として立去りしや。

　さはれ、お千代の愛情を想ひ遣れば、眞に憐むべきものあり。生まれて女子となり誰か愛情なからむ、お千代や一たび其の夫に見え、生離、死別、幾度か其の棲を變へて、而かも其の居を安ずる能はず。渠女實に愛せむと欲するも、愛することは能はざりしなり。猶春に後れし蛺蝶、風に折れ霜に瘦せ、秋氣落寞として徒に衰殘の黃花を擁するが如し。渠女の半兵衛に於ける、愛せざりしに非ず、實に愛するの力無かりしなり。渠女の爲し得る所は、只其の毀損せる名譽を回復せむと務むる一事あるのみ。進んでは愛する能はず、而かも退いて名譽を保つ能はずんば、お千代たるもの只一の死あるのみ。柔婉溫藉なる女子の身を以て、慘酷無稽悲なる社會に立ち、爭でか此の大恥辱を忍び得べけむや。已に愛を失ひて、お千代は半ば死せり。今又名譽を失ふ、且は卽ち其の全く死するの目なり。心中宵庚申は實に此の半死の人が苦悶して全死に終るまでの一大悲劇なり。

　五月雨は[illegible]、今は秋田のおとし水、二度迄去られし身は三界に住むべき家なく、戻るは元の親の家、戸閉てければ打湿れ、目元しぼよる縮緬の二重廻りの抱帶、涙の色に染めかへて泣く〳〵出でしお千代の心中はそも如何なりしぞ。姑の間に包み得で『恥かしや又去られ』こと答へし渠女の胸をば、離婚の一念は如何に蛇の如く纏ひて苦めけむ。

なうお千代、五度三度の離人嫁入も世にある慣とは言ひながら、惡いことは手本にならぬ。恥かしい〳〵と口で言ふ計りが恥を知つたと言はれうか。和女もかる〳〵二度の嫁入。尤始めの男、道修町伏見屋の太兵衛殿、心ふしやうに身代を持くづし、たずみもない樣に成り果て、あかぬ別れ。其次は死別れ。互に難は無けれども、人は和女の辛抱がないゆゑに去られた〳〵と批難付、此度の嫁入も追出さるゝに間もあるまい、忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなと、娘持つた人々は寄合茶呑咄に

も渠女の嫁しま、一度戻つては親兄弟、人中へ顔が出されぬ。腹は割りぬいて、火に入り骨を砕かるゝとも帰るまい、ナ、必ず去られて戻るなと、念に念をつがうた今度の嫁入。よう戻りやつた。父様おきゝなされたら、お悦びなされうぞ。

お千代はそも如何なる感情を以て姉が此の諷諭を聞きしぞや。「恥かしい／＼」と口で言ふばかり恥を知つたと言はれうか」とは渠女の耳には何ぞ「死んで恥を知れ」と迫らるゝに異ならむや。

心は猛かりし昔にかはらず、気も強く、義理にもかれ、おのれ重ねて去られたらば、顔も見るまじ、物言ふまじと我もありしが、六十の坂踏込んでは年ばかりよるでなく、月もより、日もよりて、病にはからまる、身の衰ふる程、孀婦に案じらるゝは子の身の上。三度はおろか、百度、千度去られても、去らるゝに定まりし濁世の約束と思ひあきらむれば、情もせぬ、恨みも無い。笑ふ人は笑へもせよ、譏らば譏れ、指もさせ、子の不憫さにはかへらぬぞ。

今更合はす顔もなき老父が思ひかけぬ慈悲の語は、憤怒嘲罵の幾にもまさりて如何に痛切に、如何に激越に、渠女が小さき胸に響きしや。吾身一つは忍ぶべくんば則ち忍びもせむ。行末長からぬ老父が名誉と幸福とを抛つて猶且此の不孝の身を愛し給ふ、風下だにも嫌はれし家門父兄の恥辱を思へば、多恨たる渠女は必ずや否なかりせば」と思ひしならむ。想ふに自殺の一念は既に此時よりして其の胸臆に胚胎せしならむ。思ひかけなき半兵衛が「未来まで女夫」の一言に断腸を更なて、合卺衣裳を更へ帰らむと言ふ嬉しさに、親の病を何とも言はで止しども、渠女に於て敢て怪むべきに非ず。何となれば、渠女は如何に孝順ならむと欲するも、去られたる身は已に最大なる不孝不順の子となり了りたるを知ればなり。半兵衛の一語は永劫の堕落、無限の罪悪より渠女を救ひたる福音なりし也。あらゆる渠女が幸福は畢竟此の一語の中に包含せらる。父の病又渠女に於て何かあらむ。孝子となり、貞女となるの第一義は、實に此の一語の中に存すればなり。

可憐なるお千代は、斯の如くしてやがて落膽[illegible]暫時の希望を夢みたり。姑の邪慳、半兵衛の苦心は少しも知らず、底まで見ゆる計りに其の身はかりの誠を寄せて、再び夫の家に帰り行く。今にも来む嵐の前に戯れ遊ぶ胡蝶の如しとも見るべくや。半兵衛が涙と共に一切の事實を打明すを聞き、

エヽイ、まだやどうでも去らるゝか。

思はず叫びし一語は如何なる断腸の響ぞや。此の一語と共に渠女は其の最終の希望に離れたり。一切の苦心は空々如として泡沫の如く、涙の外は何の痕もなく消え去れり。上田村より帰り来りし當時の月日は、眞に一場の夢に過ぎずして、一旦離緣の来れば身は依然としてお家に恥しめられ、金蔵になぶられし故の我なりき。而かも一切の情實期になりて、前には義理の刃に向はむ術も無く、後にはたゞ焚火されし門に戻らむ途もなく、進退維れ谷まれる今、其たりき、お千代にとりては此の一語は之れ最后法廷に於ける死刑の宣告に外ならざりしなり。吁々愛は失はれ、名譽は毀たれ、偽るに人なく帰るに家なし。三界牢獄として夫れ何くにか適かむ。高絶無情の天を仰いで慈靈すれば人は只死あるのみ。お千代の如き眞に憐むべき哉。

以上は巣林子が女性に就いて、予輩の観察せし要點なり。

（明治二十八年四月）

# 釋迦

## 序

今日に於て釋迦の精確なる傳記を考證せむは、如何なる學者も爲し能はざる所なるべし。されば著者は私意を挾みて猥りに事實を添刪せむよりは寧ろ在來の傳說に憑據するを可なりと信じ、怪奇信ずべからざる事譚をも強ちに虛僞として斥けず。そは斯かる奇怪なる事譚も釋迦の眞精神を會得するに於て、多少の緣と爲り得べきを信ずればなり。

釋迦傳中の年月に關して東西古今異說甚だ多し、佛滅時に就いて殊に然り。著者は通俗を旨とする本書中に於て科學的精覈を衒はずと雖も、西曆紀元前四百三十年を以て佛滅時とするの說を取り、釋迦一生の年譜を左の如しとなせり。

紀元前五百十年　佛誕
同　四百九十三年　納妃
同　四百九十一年(？)　出城
同　四百八十四年　苦行林に入る
同　四百八十年　成道
同　四百七十四年　父子再會
同　四百六十四年　再び迦毘羅城に入る
同　四百三十年　佛滅

本書の參考書は甚だ多からず、三十佛傳中、殊に佛所行讚、佛本行集經、普曜經等を取り、其他親友姉崎正治氏の印度宗教史考、藤井宣正氏の佛教小史、リス・デーボッツ氏の印度佛教史、パウル・カールス氏の佛陀の福音等に據れり。殊に姉崎氏が最も有益なる助言を與へられたるは、著者の特に感謝の意を表する所なり。

明治三十二年一月　　著者識

## 第一章　緒言

三千里外、道相距り、三千年前、時相隔つ、雪嶺の山、月長へに明に、恒河(ガンヂス)の水、昔ながらに流るれども、人は生死の世に遷て、世は盛衰の道を離れず。然れば祇園精舍の花も何時しか色あせて、佛陀伽耶の塔、石に苔むし、今さ蕭々たる菩提樹の影、[illegible]八枝を[illegible]代[illegible]するも、誰か大聖釋迦(シャーキャ)の靈蹟を告げ傳へき。

然れども人死して道殘れり、法流一たび東を指すや、四百餘州風の如く靡き、十三宗蔚然として起り、更に三韓を經て日本に入るや、傳教、弘法是が爲に立ち、法然、道元是に據りて興り、親鸞、日蓮是を奉じて動き、堂塔一國に洽く、圓頂都鄙に充つ、又盛ならずとせむや。今や世界を通じて佛教徒と稱せらるゝもの、無慮六億萬人と稱せらる。素より世道漸り、人心移りたれば、其實既に失せて、其名空しく殘れるも多からむめれど、尚ほ儼然として世界文明の一大勢力たるを失はず。抑々是の一大宗教、三千年の流傳を五十年の說法に收めたる宗祖佛陀は是れ什麼の人なりしぞ。

凡そ一宗教の開祖と呼ばるゝ人の傳記程、世に知り難きは無かるべし。そは後世の信者、其教を向仰するの餘り、知らず／＼種々神怪不測の譚話を權附して、成るべく其祖師を神聖非凡

の信憑ならしめむと務むればなり。佛陀の傳に於ても亦然りとなす。されば今日に於て其正確なる實傳を攷覈せむは、何人も能くする所にあらじ。已むを得ずんば、暫く古來の傳說に憑據して印度佛教者が其宗祖に對するの觀想如何を知るを以て足れりとせむ乎。こは獨り佛陀に於て然るのみならず、基督にまれ、馬哈にまれ、其奇蹟と預言とを外にして誰か其傳記を吾人に語り得るものぞ。且夫れ奇蹟と謂ひ預言と謂ふも、事實の表裏に因みて譬喩寓言に出づるもの多かるべし。されば若し事を捨てゝ意を取らば、其人の性格行狀を知るに於て必ずしも累を爲さざるべきか。讀者よ、佛陀が其教を擴めたる印度人は、世にも想像に富める人種なるを記せよ。其神話は飄逸にして奇異多く、其哲學は幽玄にして詩趣饒なり。彼等は詩歌として佛陀の事蹟を讃唱せしのみ、傳記として記述せしにはあらざるなり。若し三十佛傳の語る所、直に取つて以て佛陀の云爲となすあらば、あはれいみじき誤りなるべし。吾人亦暫く是傳說に從ふと雖も、有識なる讀者は箇中おのづから大聖釋迦の眞傳記を領會するなるべし。

佛陀の傳記を語るに先ち、其時代に就いて一言せざるべからず。

耶蘇紀元前凡そ六世紀の頃、印度の東北、雪山の南、恒河の流域に沿うて、數多の王國峙立せり。是等の王國は何れも亞里安民族なり。是民族は是より先き中央亞細亞より印度に入り、信度河を超えて東に向ひ、到る處所在の土民を征服して、恒河一帶の豐沃なる土地に其居を定め、茲に初めて其漂泊的生活を捨てゝ土着の民となれり。爾來年所を經るに隨ひ、山勢水理によりて習慣漸く遠く、利害漸く分れ、因襲日久しくして遂に幾多の獨立王國を生ずるに至れり。唯征服者たる亞里安人と被征服者たる土人との間には、何れの地にありても截然たる差別あり。政治上は言ふを待たず、宗教、社會の事凡て階級に從ひて一定の畛域あり、儀禮格式としても干すべからざるものあり。精しく言へば、由來印度には所謂四姓の別あり、何れも優勝者と劣敗者との關係より起れるなり。其最高の階級を婆羅門(ブラーハマナ)と稱し刹帝利(クシヤトリヤ)是に次ぎ吠舍(ワイシヤ)又是に次ぐ、最下にあるものを首陀(シユードラ)と云ふ。摩奴(マヌ)の法典と名くる印度古代の國法には首陀にして草葉を婆羅門の體に觸るゝものは斬に處せらるべきを規定せり。又如何に上下階級の間に嚴重なる差等ありしやを想見するに足るべし。

亞里安民族は中央亞細亞の故郷を出でゝ、印度征服に力を協せし頃こそ一體一族として親和團結せしなれ、地相距り國相異なるに及びては、漸く嫉妬の念を起し、干戈の亂離已む事無かりき。加ふるに恒河地方の印度は世界に名高き豐穰の土地とて、民は勞役によらずして衣食乏しきの憂無く、氣候亦溫暖なれば四時の風物娛樂の資とならざるは無し。是を以て國人はおしなべて懶惰に流れ、奢侈宴遊の風、上は帝王より下萬民に至るまで靡然として一時の風を成しぬ。其昔信度河邊にありし時の吠陀(ヴエーダ)の宗教は、今や信仰の熱誠いたく衰へて、徒に儀禮の末節に華美を競ふのみ。僧侶は墮落して救濟の道を知らず、衆俗と共に現世の欲求に走りて日も亦足らず。あはれ往古淳朴の風、敬虔の俗、蕩然として將に地を掃はむとせり。

當時吠陀教の後を承けたる幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を喜びて人生現未の問題に切ならず、偏に談理の幽玄と苦行の慘烈とによりて安心解脫を求めたりき。されば學ぶもの派を樹て、道を別ちて相爭ふところ、畢竟名義の優劣のみ。未だ一世の元々をして本心歸命の大道に就かしむるを得ざりき。

是時に當り、亞里安族の一派に釋迦族と云へ

るあり。雪山の南凡そ三十里、洋々たる恒河の一分流に沿うて國を建つ、其都を迦毘羅城と呼び、其王を淨飯大王と云ふ。南の方、摩伽陀(マガダ)國と並びて、國富み民榮えたり。是れ佛教三千年流傳の源泉なる大聖佛陀の降誕せる土地にぞある。而して當時社會の氣運は其腐敗せる宗教と、其糜爛せる道德と、其に方に是大救世主の出現を促しつゝありしなり。是點に於ては佛陀も亦時勢の兒なりしと謂ふべきか。

さらば佛陀は如何なる人にして、如何なる事業を爲したりしか、如何にして其成道を得、又如何にして其教化を弘布せしか。

## 第二章　佛陀の誕生

迦毘羅國王淨飯と云へるは、智勇兼ね備はり、德行並び至れる希代の名君なりしかば、民服し國治まれり。王妃を摩耶(ヤマー)夫人と呼べり、容顏花を欺き、心蓮よりも淸し。斯く王と王妃と大德地恩相並びて、萬民頌歌の中に幸福なる月日を送り給ひけり。

或年の事なりき。頃は四月に入りて春將に往かなむとす。王妃は獨り後園に安坐し、麗かなる天光に浴して暮れ行く春の名殘を惜ませ給ひしが、夢とも無く、幻ともなく、形象殊妙の白象其胎内に宿ると覺えて、ふと目さめたるが、五體おのづから淸泉に洗はれたるが如く、心怡ばしきこと限りなし。是より王妃身重になり給ひて、數多の瑞祥時ならざるに到り、迦毘羅國中又災厄無し。傳へ言ふ、或は天に樂ありて相和鳴し、或は幢蓋幡繒宮中に展轉せりと。斯くて翌年の二月になりたれば、王妃は分娩の期近きに在るを悟り、印度の習例に從ひて其父母の家に歸らむの許を得給ひ、道に藍毘尼(ルンビニー)園と云へるを過り給へる時、圖らずも分身の期に迫りて直に床を無憂樹の下に設けたり。此時大光明天地の間に耀き、自然の妓樂共合に響き、玉の如き小兒忽然として王妃の右脇より生まれ出でぬ。是ぞ三世の導師、一代の救主、大聖佛陀なりける。

天はもろ〳〵の瑞相を下して、是一大事實を宣揚せり。蓮華繽紛として地に亂れ墜ち、人之に觸るれば妙樂全身に徹す。日月常の如くなれども、光耀ます〳〵明に、もろ〳〵の光と火と薪油無くして愈々熾なり。淸泉自然に地より湧き出で、藍毘尼園の上、天樂雲の如く集まりて、樹枝時ならざるに皆花咲けり。邪曲なるものは一時に慈悲心を生じ、疾に苦めるものは藥せずしておのづから癒え、[illegible]然として[illegible]を消め、萬川流を[illegible]、水の濁れるもの悉く淸む。空には一點の雲翳無く、天鼓自然に鳴りて八方世界の音響しく是[illegible]を讃美せり。唯獨り魔界のみ大魔王の[illegible]り悩む。

嗚呼斯かる奇蹟は何事を指示せるか。當時迦毘羅國中の人誰か是を知らむや。さしも沈着なる父王も是前代未聞の奇特を見て、流石に心安からず、一たびは喜び、一たびは懼れ、殊に生兒の將來と王國の運命とに氣遣ひけり。

摩耶夫人に到りては其不安の情更に甚しかりき。其子の生まるゝ常道に因らざるが上に、天地不測の現象をまのあたり目擊したりしなれば、事の吉凶俄に知り難く、大に神に祈りて偏に其子の安全を希念しけるぞ道理なる。年老いたる宮女等亦競うて神明を要して、嬰兒の將來を祝しぬ。

其頃林の中に知相の婆羅門ありて住みけり。威儀堂々として才辯名と共に高く、能く人相を占ひて三世の吉凶を斷じ、當らずと云ふこと無し。嘗て王子を見、心大に喜びて踊躍禁ずる能はず。父王の驚き怖るゝを傳へ聞き、王に謁して實を告げて曰ひけるは、「大王よ、王子の爲に

驚き怖るゝを休めよ。人、世に生まれて其子の勝れたらむより楽きは無し。今や聖運、月の満つるが如し、何の故に[illegible]慮を懷ぶ給ふぞ。倩々王子を見奉るに[illegible]妙相好、げに人天の奇特を具へたり。長じて國政に當らば、轉輪王となりて普く世界の主となるべく、若し又教の爲に出家せば、必ずや無上正覺を成じて三世衆生是に縁りて救はれむ。あはれ貴くも亦大なる殊勝の相なる哉。衆庶の間に交るも、喩へば須彌山の群山に王たるが如し。衆寶孰れか金に勝るべき、衆流孰れか海に及ぶべき。諸星は月を最となし、諸明は日を宗となす。今や王子の相何を以て比ふべき。大王須らく歡び給ふべし。是子、後に至りて人天三界の師表とならむ。」

父王是言を聞きて歡ぶこと限り無し、潛に思ひけるは、我れ今是聖の子を得たり、長ずるを待ちて遂に迦毘羅國の王位を紹がしむべし。我れ年既に老いたれば、[illegible]はくは出家して道行を修めなむ、[illegible]是子をして山林遁世の心を興さざらしむべしよと、[illegible]し父王は相者が若し出家せば無上正覺をなさむと言ひし[illegible]を、[illegible]忘れたるなり。

[illegible]、迦毘羅城に近き森の中に、阿私陀(アシタ)と呼べる名高き苦行仙人棲みけり。淨飯王其人を相する神の如きを聞きて、試に宮中に請ぜしむ。阿私陀召に應じて到り、王子を看ること稍々久しかりしが、潸然として涙を流し、聲を放ちて王子の脚下に泣き伏しぬ。王は阿私陀の悲泣するを見て、[illegible]悸座を起ち、其前に稽首して問ひけるは、「仙人よ、是子不祥の相ある乎、抑何の故に悲泣する。先に相者に見せしめしに、是子容貌極めて端嚴なり、國王とならば當に天下の主となるべく、出家とならば當に人天の師となるべしと言へりき。今や仙人何が故に悲泣するぞ。或は是子生まれて短命なる乎、或は余長うして家國に禍する乎。我れ餘生幾もなし、[illegible]一に是子の上に懸れり、呼是迦毘羅國の前途を如何すべき。」

阿私陀は雙手を掲げて王の悲歎を[illegible]し、[illegible]に畏敬の色を作して曰く、「大王悲しむを止めよ、是王子こそは人天三界に並び無き福徳圓滿の相好を具へらるゝなれ、[illegible]は[illegible]を照すべき[illegible]の光に輝けり、[illegible]は[illegible]かなる[illegible]の長へに續くる[illegible]きが如し、其顏は天龍八部の主たる識を具足せり。大王何ぞ天下衆生と共に是を[illegible]せざる。[illegible]つら/\見奉るに、國王となりて現世の政を治むることはよもあらじ。[illegible]二十を出でざるに、家を出で山林に勤行し、やがて無上正覺を開き得て、萬世群[illegible]の爲に救濟歸命の大道を示さむ。五欲の境に執着して永世の楽を知らざるもの、衆苦の野に低迷して達道の[illegible]を解せざるもの、妄念の闇に展轉して智慧の光に遭はざるもの、三界十方のもろもろの衆生、王子の指導に縁りて永く[illegible]生の苦艱を擺脱せむ。あゝ貴むべく慕ふべきは王子の將來なる哉。唯[illegible]れば我れ方に年[illegible]、幾もあらずして[illegible]の[illegible]に達せむ。[illegible]らくは王子の無上道を成し給ふを見ずして、是世を去るべきなり。我れ是を以て覺えず泣涕せるのみ」

父王及び王妃は阿私陀の言を聞きて愈々王子を敬重するの念を固め、[illegible]さる無し。先の命名して悉達多(シッダ)と呼ぶ、悉達多は、圓滿なる人の義なり。同時に天下に大赦して悉く獄囚を解放し、廣く有道の人に布施して[illegible]、國中の貧者、[illegible]に施すに資財を以てし、[illegible]は無し。良辰吉日を擇びて、王子を本宮に還し、立てゝ太子と爲し、翌日[illegible]夫人王子を抱き、父王と共に七寶の輿に乗り、白象[illegible]、[illegible]然として[illegible]く人[illegible]に[illegible]く、

[illegible]の如く、市民亦是に從ひて、迦毘羅衞城は歡喜に滿ちし。然れども當時人は如何なる宿縁かありけむ、王子生まるゝ後七日、歡聲嬉々の中に此世を辭し給へり。夫人終に臨みて其妹妃に告げて曰く、『我妹妃よ、我亡き後は太子を養ふこと我の如くなれ。未來の佛陀を生めるものは、永く此世に留まるを得べからず、是れ天命なり』と。妹妃名を鉢羅闍鉢底(プラジャーパチー)と云ふ。深く王妃の言を體して悉達多を養ひぬ。王子はさながら月の光の夜毎に圓かなるに近くが如く悲悲圓滿の性相年を追うて現はれぬ。

## 第三章　宮中の生活

昔時印度に摩兌(マヌ)法と云へる王ありて日光太子を生みし時、擧國吉祥を被り、衆惡一時に息みきと傳ふ。悉達多太子の降誕も亦其如く、幾多の祥瑞引き續きて此大救世主の將に八表に光被せむとする祝福を讃揚せり。傳へ云ふ、此時或は兇暴なる白象の一群呼ばずして自然に至り、御せざるに皆調伏し、或は宮庭の井泉自ら望湧して園林の枯木俄に紅緑の色を呈せり。或は心の邪なるもの情おのづから和ぎて、干戈疾病自然に跡無し。或は和風時雨、[illegible]五蘊の集するもの時を待たずして、[illegible]倍加し、或は壞胎するもの分娩するや身常の如く健かなり。凡て是等諸種の佳瑞、奇瑞傳ふるもの擧げて數ふべからず。

太子漸く長じて德貌日に新たなり。附庸の屬國及び隣邦、何れも太子の降誕を賀して爭ひて珍異を齎し、其心を喜ばさむと務めき。是に於て牛羊駝馬園に充ち、佳卉珍草園に列なり、寶貨王宮に積む。常ならば嚴飾ありと雖も玩弄に耽む齡なるに、太子は生れながら沈重にして物に動かず、心常に高遠の境に往住して、榮華逸樂に染着せず、平生好む所は只學藝にあり。父王亦其聰明穎悟、世の常ならざるを見て深く心を教育に用ひ、名道宗師を遠近に聘し、文武の藝術一切の種類を擧げて教へざる所無し。太子一を聞いて十を知り、師資忽ちにして處を易ふ。今や全印度の學者又太子の右に出づるもの無かりき。

太子年十七になりぬ。父王は爲に妃を迎へばやと思ひしが、親族及び隣邦の王侯何れも未だ能く太子を知らず。以爲らく、悉達多太子は年齒尚ほ弱く、體質亦強からず、常に後宮に沈思して世事に疎しと聞く。今の世にありて文武弓[illegible]子は[illegible]の然か思はるゝは理なりき。太子は宴樂嬉戲の群を離れ、[illegible]みて後園人無き處に入り、悠々たる閻浮樹(ジャンブ)の緑陰に逍遙して深く人生の疑問に沈むを常とせるなりき。

父王は、親族及び王侯が其女を太子に娶はすを肯ぜざるを聞きて、心潜に憂へぬ。そは太子の居常沈鬱にして、或は遁世の志を生ぜむを怖れ、早く佳偶を配して是を控制せむと欲したればなり。抑々印度古代の婆羅門族には、其生涯に就いて一種の風習あり。凡そ婆羅門族たるものは、出家成道を一生の目的とせざるべからず、然れども其前には豫め、梵志、家居の二期を經過せむことを要す。梵志時代にありては、古來の經典及び其他文武の學藝を習得し、家居時代にありては妻を娶り、家を修む。是風習初めは婆羅門族にのみ限られしが、後世釋迦の時代にありては、其他の諸族間にも行はれたるが如し。淨飯王が位を太子に讓りて、出家せむと言ひしも、亦是道風に倣はむとせしならむ。又太子の遁世を氣遣ひて速く王妃を迎へむとしたるは、太子が梵志家居の二時期を經

過せざる中、或は早く出家成道の生涯に入るあらむを恐れたればなるべし。

太子は父王の憂慮一方ならざるを見て、さらばとて一日王に請ひて曰ひけるは、『父よ我一族及び隣邦の君主等は、皆我が器能を疑へり。願はくは彼等を招集せよ、我れ彼等と角逐して我が力の如何ばかりなるかを示さなむ』と。父王喜び是れを許せり。

是に於て淨飯王の一族及び隣邦の王侯と迦毘羅國中の名士とは悉達多太子の文武の力量如何を見むとて競うて王宮に集まれり。太子は先づ客を閻浮樹下の大講堂に請じ、學者をして種々の考課を與へしむ。然れども學者の問ふ所、一も太子を苦むるに足らず、太子は却て種々の難問を以て學者を試みしが、滿堂の選良得て答ふる所を知らざりき。次に太子は客を前庭の競技場に導き、名ある武士と共に種々の武藝を試みしが、亦一も太子に敵し得る者無し。太子は乃ち獨り馬に跨りて騎射の妙技を示せしが、駿馬閑雅、意に任せずといふこと無く、瓔珞の袂翩然として舞へるが如し。的を去ること百歩、一箭能く七鐵鼓を貫きしが如きは、實に人業ならず見えにけり。

一族王侯今や太子を見ること神の如し。是盛名を眼前に觀たる父王の歡び如何なりけむや。當時の印度は列國樹立の有樣にて、動もすれば干戈を動かして搏噬侵略を逞うせむとせり。斯かる時代に當り、智勇兼ね備はれる悉達多の如き太子を有したる淨飯王は果して如何の希望を懷きしか。げに豫言者の嘗て言ひし如く、他日天下を征服し人界又天の英主として億兆に君臨せむもの太子の外にあるべからずとは、必ずや老父王の胸中に浮動して寤寐何ぞ忘るゝ能はざる歡喜と希望となりしならむ。

是に於て一族諸侯は爭ひて其女を太子に獻ぜむことを望みぬ。太子は其從妹に當れる耶輸羅陀（ヤショーダーラー）姫といへるを納れて妃となしぬ。姫は夙に賢明婉淑、當代の一人と稱せらる。春花の姿、秋月の粧、三千の宮女をして顏色無からしめき。されば太子も鍾愛斜ならず、連理同枝の情交世に淺からず見えにける。姫は間も無く玉の如き一男兒を擧げぬ、羅睺羅（ラフラ）と名く。父王の喜び譬ふるに物なく、以爲らく、妻をも娶り子をも生みたれば、今こそ太子が遁世の念は跡無く消え去りしなるべし、何となれば太子は羅睺羅を愛むは、猶ほ我の太子を愛するが如くなるべければなり。然らば迦毘羅國の運命は長へに衰ふること無かるべく、釋迦族の天下亦永く我が子孫の有たるべしと。

父王は更に太子をして現世の榮耀を樂ましめむと欲し、地を風色絕佳の處にトし、爲に宮殿を立て、太子夫妻をして是に居らしむ。規模の宏大、輪奐の莊麗、譬ふるに物無し。高塔の空に聳ゆるものは秋雲の天を指すが如く、低廊の地に横はるは春霞の風に靡けるが如し。飛橋時ならざるに虹霓を横へ、林園節を待たずして芬香を送る。方圍数十里、溫涼四時に適し、時に隨ひて人の居を擇ぶに任す。婇妓幾百千、樓上閣下不斷の天樂を奏し、春風秋雨又人生の愁を知らず、聲色左右に侍して人の心を樂ましむ。清淨の一宮、正に是れ人間一切の快樂を萃め來る。太子美妃を擁し、愛兒を携へて是間に居る、果して如何の人生を觀ぜむとする。

## 第四章　三　苦

斯の如く、悉達多太子は深宮に人となりて未だ世間の實相を知らず、父王亦太子が厭世の心を發するあらむことを恐れ、百方力を盡して現前の快樂を勸めしかば、太子は尚ほ人生の悲哀を觀ずるの遑無かりき。

然れど太子は口體聲色の美を享けながら心突々として安からざる所あり。潛に人生の眞義を思ひて、幾度か夜半の想ひを凝したり。更深く人沈まり、一宮の春色寂として聲無き時、月下後園に逍遙して獨り三昧に入る。――嗚呼人生果して是の如き乎、月は盈缺し、四時は代謝す、青春の妙樂夫れ獨り人生に在る乎。生まれて王者の奉を受け、長じて宮掖に人となる、世亦是の如くにして、人亦是の如き乎、薄々として此間に嬉戯す。行く處夫れ何れの處ぞ。現世既に幾多の人あり、又幾多の階級あらむ。世を累ね、生を轉ず、恐らくは究極する所無けむ。人は此間に立ちて、爲す所無き、可ならむ乎。

太子の沈思は漸く人生の眞諦に接觸せむとす、先づ宮闕を出でて世態を見むと欲するの情甚だ切なり。父王是を聞き、卽ち群臣に命じて珠玉七寶の車を備へしめ、嚴に羽儀を飾り、供奉を正し、城門の正路を坦にして、途上もろ〳〵の汚穢を去り、老病貧窶の民等凡そ多感なる太子の哀情を動かすの恐あるものは、一切之を排除せしめ、且命ずるに路傍の門戸を装飾すべきを以てせり。準備既に成り、駟馬粛々、鹵簿堂々として太子の車、城の東門を開いて出づ。隨ふものは何れも年少紅顏の男女、綺羅星の如く、燦爛花に似たり。太子の車過ぐる所香煙路傍を蔽ひ、繽紛として春風に飄り、觀者長路を挾みて、敬慕歡呼湧くが如し。遠近の市邑亦太子城を出づるを傳へ聞き、平生其盛名を慕へるもの爭ひ馳せて路傍に到り、手を額にして是青年の盛儀を拜す。忽ち路傍に一老人を觀る。太子驚き怪みて御者に問うて曰く、「此は之れ如何なる人ぞ、頭白く眼昏く、背傴み身戰けり、僅に一枝の杖に憑りて蹌踉として歩む。是人是の如き性を天に受けたる乎」。御者は此間に遇うて、心潛に躊躇せしが、僅に答へて曰く、「是れ老衰死に瀕したればなり。思ふに是翁も亦昔は紅顏の美少年のみ。青春日暮、嘻々として其狂態を恣にせしが、今や年逝き、心衰へ、悲愁多くして歡樂少し」。太子御者の言を聞き、長歎息して更に問うて曰く、「老ゆるものは彼のみにして、吾等は則ち然らざる乎」。御者曰く、「嗚呼何ぞ然らむ、是れ人間一切の運命なり」。太子是言を聞き、慄然として震ひ驚き、頭を垂れて深く思念する所あり。以爲らく是老衰の苦早晩到らむことを思はゞ、何ぞ世上の歡樂に愛着するの遑あるべき。今や目前の事證に遇うて、我が心戚々たるが如しと。卽ち御者を顧みて速に車馬を還さしむ、曰く、念々衰老の期近づく、市街園林何ぞ歡ぶに足らむやと。群臣太子の意思に沈めるを見て心安からず、御者命を受けて緒路又城門に入る。太子の心胸に老衰の悲哀を想ひ、一念偏に人生の悲觀に傾す、豐麗比ひ無き迦毘羅城も、さながら荒塚の間に歸れるの思ひあり。

父王は太子を慰むが爲に催されたる外遊の、却て太子を愁へしめたるを聞き、更に命じて西門より出でて重ねて遊ばしむ。鹵簿の莊嚴なること前日に勝れり。然るに圖らずも路に一病者に遇ふ。身痩せて腹部のみ大に、呼吸も絶え〴〵なるが展轉して、人の憐みを求む、其狀甚だ痛むべし。太子見て御者に問うて曰く、「此は是れ如何なる人ぞ、唯彼のみ是の如くにして、餘は則ち然らざる乎」。御者答へて曰く、「是れ病者なり、四大亂れて其序を得ざるが故に、羸弱自ら勝ふる能はざるのみ。是の如きは一切世上の人、貴賤貧富に論無く、皆然らざるは無し、世豈萬年の天子あらむや」。太子是言を聞き心大に動き、更に人生の無常を感じぬ。

――嗚呼世間の人は愚なる哉。病患の至るや豫め其期を定めず、今日香閨の人明朝安ぞ

枯骨たらざるを保せむや。漫然世榮を追ひ、嬉戲日を盡して倘ほ足らず、何ぞ心無きの甚しき。——直に車駕を廻し、悃然として宮城に入る。其狀恰も大打撃を被れる人の如し。

父王太子の悦ばずして歸れるを聞き、深く從者及び路上を監督するものを譴責すれども及ばず。乃ち更に珍寶を集め、美妃を納れ、百方太子の憂情を暢べむことを務む。然れども太子は紅顏を見ては則ち白髪を思ひ、媚態に接しては則ち病患を思ふ、聲色耳目に入れども笑はず、況して口體の奉養如何に善美を盡すも爭でか其心を樂め得べき。父王乃ち太子をして再び遊歷せしめむと欲し、先に東西の兩門何れも不祥の事ありしを以て、更に南門より出でしむ。道を修め、家を整へ、嚴にもろ〳〵の醜穢不淨を排去すること前よりも甚し。然るに怪い哉、忽然として四人の一輿を擔ひて太子の前に至るあり。太子御者に問うて曰く、「此は是れ何の輿ぞや、幡花共に華麗なれども、從者悉く憂色あり、或者は髪を被り、號哭して其後に隨ふは何故ぞ。」對へて曰く、「彼の輿中に在るは死人なり。諸根壞れて生命絶し、精神遠く離れて形骸獨り殘る。親戚故舊恩愛離別の情切なるが故に、是の如く憂へ哭くのみ。」

太子聞きて震慴し、身を車軾の前に伏し、大に歎息して曰く、「噫塵界の人何ぞ思はざるの甚しきや。人生何處にか死無からむ、死を免れざるの是生を持して、何ぞ獨り死に對するの用意を怠るや。吁危い哉、人生の常なきこと、電光石火の如し、焉ぞ園林の遊歷を事とせむ」。命じて車を廻さしむ。御者父王の怒を慮りて俄に其命に從はず、疾驅して直に園林に至る。

園林は迦毘羅城の郊外にある國王の別荘にして、佳木芳草を植ゑ、靈禽奇獸を放ち、林間の流は清冷にして鬚眉を鑑すべし。鳥語風聲自然の樂を奏して、芬郁四邊に飛び、光耀耳目を喜ばす。實に古にありきてふ天難陀の大園林も斯くやと思はるゝ計りなりけり。

太子の車駕園林に達するや、兼て待設けし事とて、盛裝を凝したる數百の宮女來り迎へ、競うて媚を獻じ、種々艶妖の姿態を盡して一向太子を欣ばせむと務めたり。是より先き婆羅門の子に優陀夷(ウダーイ)と云へるあり。才辯を以て王に用ひられしが、一日王の旨を受けて諸宮女に說きけるは、「卿等は何れも世に類稀なる美人なり、其一顰一笑は直に男子の心膽を挫ぐに足るべし、何ぞ獨り太子に對して力無きや。太子學博く識高く、常に幽玄の沈思に耽ると雖も亦是れ一箇の人ならずや、如何ぞ卿等の容色媚態を以て其情を動かし得ざるの理あらむや。昔者孫陀利(スンダリー)姫の能く大仙人の成覺を壞りて愛慾の巷に墮落せしめたる、毘尸婆(ヰシハ)梵仙の一萬年の修道、天妃の爲に一日にして破碎せられたる、孰れか美人の大威力を示したるものに非さるべき。太子持心如何に堅固なりとも、其德行如何に淸淨なりとも、爭でか女性傾國の一笑に敵し得べき」。衆女是の優陀夷の言を聞き、何れも踴躍して其力を試むるの時を待ちしが、今や太子が園林の遊歷に際し、扨こそ種々の祕術を傾けて太子の道念を動かさむとは務めたるなりけれ。

然れども太子の心は動かざること大盤石の如く、又猶ほ大龍象の群象に圍繞せられ、傲然其心を亂さざるが如かりき。衆女皆太子の身邊を繞り、或は爲に衣紋を飾り、或は爲に手足を洗ひ、或は歌舞し、或は言笑し、或は眉を揚け齒を露はし、或は美目相流眄し、或は身を傾けて密語し、或は世俗の調戲に擬し、或は情慾の事を說き、或は猥褻の形を爲し、媚態百出偏に太子の情を促さむとす。されど事總て空なりき。太子は却て偏に衆女の狀況

を観じ、喟然として大息しぬ、――危い哉、彼等の大惑や。青春幾時ぞ、敢て是無心の楽を貪る。夫の瓔珞を貫き、頸環を飾るもの、将又夫の紅粉を施し玳瑁を戴くもの、少壯幾年にして身は何れの境に往かむとはする。悲い哉、人は徒の榮華を知りて、未だ秋の枯凋を覚らず、老病死俄然として到らば、又如何かすべきぞ。

其時優陀夷も供奉の中に加はりけるが、衆女の媚態も太子の情を動かし得ざるを見、預て父王の旨を受けたる事とて、進みて太子に言ひけらく、『人の盛時知るべきのみ。其時に於て行樂せずんば将た何れの時をか期すべき。才色雙絶せる太子の如き人にして聲色の美を爲す無きは、人生の一恨事と謂ふべし。且夫れ聲色の美は人情の自然に出づ、帝釋、瞿曇(ゴータマ)、波羅墮(バーラドワージャ)の諸大仙人、猶ほ且免れず、安ぞ獨り太子に於て累を爲さむや。太子何ぞ其憂愁を已めて、衆と共に樂まざる。區々たる形體の慾、何ぞ大人成道の障害たるを得むや』。

太子、優陀夷の言を聞き、莞爾として是に告げて曰く、『汝我を思ふの情深く嘉すべし、唯我れ誠に汝に告げむ、世上一切の快樂は畢竟是れ無常の相のみ。若し世に老病死の三苦無く、紅顔長へに衰へず青春永く續かむには我も亦當に衆と共に樂むべし。若し衆女の色をして衰變することなからしめば、我亦何を苦みてか厭離せむ。唯人生に老病死あり、漫に五慾の境に執着し且又夕を謀らざるも、其大苦の忽然として來るを如何すべき。汝が云へる所の諸仙人は、何れも墮落の凡夫のみ、我に於て敬重すべき所以を知らざるなり。嗚呼世界は畢竟、大苦の積聚のみ、汝何ぞ我を勸めて是中に陷れむとはする。老病死の三苦は甚だ畏るべし、吾れ是を思ふて夜眠を成さず、何の遑ありてか五慾に執着して是無常の快樂を追求せむや』。言辭痛切、直に人の肺腑に徹す。優陀夷又答ふる所を知らず、唯々として退く。諸官女亦惘悵し、伎樂歌舞の具を收めて城に復る。時方に黄昏、晩禽鳴を停め、寒風蕭々として枝に聲あり、先の歌舞宴樂の處、寂寞として墓域の間を行くが如し。想ふに太子の感慨一層の深きを増したるなるべし。

父王は太子の遂に憂愁を翻さざるを聞き、心大に苦み群臣を會して其法を問ふ。されど其答ふる所、何れも五慾を以て其心を留めむとするにあり。優陀夷の巧慧も今や施すに術なかりき。

## 第五章　佛陀の決心

宮殿を配し、玉樓を建て、數千の宮女をして其身邊を圍繞せしめ、歡樂以外一切の思念に遑無からしめむとしたるにも、用意措害となりて、太子の沈思は日に益々深く、[illegible]、其衆世間の大使命を自覺し初めぬ、其限りなき慈悲心と甚深なる悲哀の性情とは、事に觸れ物に感じて、愈々烈しくなり増りぬ。父王乃ち名門貴族の子弟にして、年少美貌なるもの一百人を擇びて、太子の側に侍せしめ、晝夜歡笑[illegible]し、務めて太子の沈思默念を妨げむとす。然れども猶ほ波濤洶湧の下、萬尋の深淵杳然として靜なるが如く、太子の心は遂に動かすべからざりき。

一日王太子を伴ふて郊外に遊び田畝の間を逍遙す。麗日和風、人をして歸るを忘れしむ。太子路に耕稼の人を見るに、耒鋤地に着くところ、諸蟲の死するもの算無し。太子惻隱の情に堪へず。又彼の農夫を見るに、髮を被り汗を流し、面黝骨立、身に百結の襤褸を纏ふ。亦以て平生の勤苦を想ふに足る。耕牛亦疲れ困み、舌を吐き、涎を垂れ、喘々焉として息ふ。太子見て歎息是を久うす。吁々三界生を享くるもの何ぞ限らむ。人耕作の故に生蟲を殺すを顧みず、

何ぞ其れ無慈悲なる。彼の喘々焉たる牛や、生を保ち情を有するに於て何ぞ人類に異なる所あらむ。人其勞役を者かむが爲に、虐使して顧みず、何ぞ其れ無情なる。世界、人たるもの何ぞ限らむ、彼の農夫獨り何が故に是の如く勞苦するや。人命甚だ短く、憂患甚だ長し、三苦常に身を纏うて、生死輾々際涯無し。愚なる哉衆生や、何ぞ是永世の思念を外にして、現代の得失に拘々焉たる。

太子は斯る冥想に沈みつゝ、悄然として踵を回せり。是に於て其決心は愈々固まりぬ。妃耶輸陀羅は太子の憂に沒めるを見、悲み泣きて其故を問へり。太子答へて曰く、「我は天下到る處無常ならざる無きを見たり、是を以て憂ふるのみ。或は老い或は病み或は死す、是の如くんば人生何の樂しき事か是あらむ。」

太子時年十九、心に惟へらく、我れ既に室を迎へ又既に嗣子を擧けたれば、今にして出家するも早からじ。人生旦暮を保せず、成道一日も猶豫すべからずと。即ち一日父王に謁し、恭くし、其本懷を吐露して曰く、「一切世間の事、生ある者必ず滅し、合へる者必ず離る。父王願くは我をして出家學道の徒たらしめよ。曰く是れ悲苦の境、人は其無常の生を惜みて永世の爲を思はず、我れ心忍びざる所あり。恩愛集まる所煩惱あり。我れ今一切衆生をして煩惱を解脫せしめむと欲す、父王希くは我願を許せ」と。父王は豫て期せざる事にしも非ざれども、憂苦今更身に迫り、身戰き口囁嚅として言僞に出でず。席を起ちて太子の手を執り、紅涙千行、歔欷嗚咽是を久うす。僅に言ひて曰く、「太子よ、希くは其所思を飜せ、我れ卿の或は是事あらむを慮りて、憂苦眠を成さざること茲に年ありき。卿は我鬢邊幾莖の白を如何とか見る。卿の大慈悲心や誰か領仰せざるべき。唯卿年齒尙ほ少なり、其心固定せりと謂ふを得ず。出家成道の事、是を後年の企考に委ぬるも遲しとせざるべし。卿は當に我に代りて國政を治め、我をして先づ出家せしむべし、父を棄て宗嗣を絕ち、而して己れ獨り出でて道を學ぶ、是れ豈世間の法ならむや。今や我國小康を得たりと雖も、列強互に鎬を削りて隙を窺ふ、卿今國を去らば、是迦毘羅國の前途を如何すべき。我れ齡已に傾く、餘命幾も無し、卿の子尙嬰孩にして、母亦若し、我れ誰と共にか是國を治め、誰に向つてか是國を託せむ。願はくは又出家の事を言ふ勿れ」。太子父王の衷情を察し、再び強ふるに忍びず、感泣して宮に還る。

然れども是れ太子の初めより期待せし所なり。其志爭でか飜さるべきや。

夜は深く人定まりぬ、萬籟寂として天地死せるが如く、太子は獨り後宮に坐して、靜に幽思に耽り、流石に父王の愛情を思へば、心緒惕として安からざる所あり。噫世は無明の闇に鎖されぬ、救の光何處にある。

太子は起ちて座を閻浮樹の下に占め、眼を閉ぢて寂寞の三昧に入りぬ、何處ともなく我を呼ぶ聲す。頭を擧ぐれば、樹下に幻影ありて我に語らむと欲するものゝ如し。太子問うて曰く、「卿は之れ何處の人ぞ」。幻影の如き人答へて曰く、「我は是れ出家の人なり、救世の大使命を負へる卿に最後の決心を促さむが爲に來れり」。太子問ひけるは、「出家の人とは是れ如何の人ぞや」。出家の人答へて曰く、「我は三界の苦境なるを知り、老病死を離れて解脫の道に就かむが爲に、家を出でにき。諸行無常の萬物の中、獨り亡びざるものは眞理のみ、我は是眞理の中に無爲の幸福と無窮の生命を保たむと欲す。されば我は一切世間の因果を離れて寂寞の野に逍遙す」。

太子更に問うて曰く、「實に愛欲の空なる事

は、我亦是を悟りぬ、一切の世の何物か我にとりて苦惱の種ならざるべき、唯如何にして是苦境を脫すべき、抑々無上の圓覺は是世にて得らるべきものなるか』。

　出家の人は答へて曰く、『卿の覺悟や善し、一大飛躍は、卿によりて當に爲さるべし。卿が救世の大使命は、實に是によりて成し遂げらるるなり。卿は安心の大道を疑ふか、彼の大紅蓮の華の泥より出でて玉よりも淸きを如何とか觀る。道を悟れるものは大淨樂を大苦境に得ること亦當に是の如くなるべし。卿よ疑ふ勿れ、唯一念固く涅槃(ニルワーナ)の一大靈湖を求めよ、其處には生も無く、死も無し、一切苦境の繫縛を離れて、無始無終の淨樂を享くべきなり。池の看出されざるの故を以て、池無しとする勿れ。道に到らざるは到らざるものの罪にして、道の罪には非ず。惡業に苦みて人を恨むもの、何ぞ是に異ならむや』。

　太子の心は幻影の人の言によりて、一道の光明を得ぬ。『實に卿は我に尊き教を齎せり。そは卿の言によりて我が本願の必ず成就せむことを悟りたればなり。唯我が老父王は、我に告げて、出家するには年尚ほ弱く、志未だ固からずと云へるは如何ぞや』。出家の人頭を掉りて曰く、『悉達多よ、惑ふ勿れ、道に入るに老幼何れの時か定まれる好機あらむ。唯發心の一刹那をこそ無上となすべけれ』。

　太子は是言を聽きて踴躍して喜びぬ。――實に道を求むべき時は到りぬ。十有九年の迷妄を擺脫して眞の道に入るべき時は到りぬ。我れ今こそは一切世榮を捨てゝ山林曠闊の中に入り、其處に救世の大使命を果すべきなれ。

　出家の人は太子の決心を觀て讚美して曰く、『大いなる哉、悉達多、卿は如來なり、佛陀なり、一切衆生の宗師となり三界永劫の法主たらむもの、卿を措いて何處にか求むべき。貴い哉悉達多、闇黑なる世界は卿によりて照されむ、眞理は卿の手より迷へるものの頭上に降されむ。唯成道の道に一向精進して決して迷ふ勿れ、決して退轉する勿れ、百雷卿の前に落つるも驚かざれ、萬魔卿の耳に囁くも聞く勿れ。日月の運行して四時の序を成すが如く、眞理の軌道を踏んで過つこと勿れ。信仰によりて立ち、熱誠を以て戰ふものは、常に眞理の友たらむ。三世十方の諸善神は悉く卿の前路を擁護せむ。道を誤らざらむが爲に神智は卿の胸に宿るべし、日月よりも明なる光明は常に卿の心に輝かむ。いざさらば佛陀よ』。

　幻の如き出家の人は、其言了りし如く消え去りぬ。太子は毅然として暫時其跡を打守りしが、卽ち決然として起上りぬ。――我は必ず佛陀とならむ。石の地に落つるが如く、生まれたるものの死するが如く、天の言何ぞ我を欺かむや。嗚呼我は必ず佛陀とならむ。

## 第六章　佛陀の出城

　斯くて太子は出家の決心を定めしが、流石に身木石に非ざれば、餘所ながら最愛の妻子に永訣を告げむが爲に、暫しに後宮の寢殿に入りぬ。蘭燈光幽かにして、夜既に更けたり。憐れなる耶輸陀羅妃は、今にも其身の上に覆ひかゝらむず黯澹たる運命をば夢にも知るよし無く、幼兒を懷きて安らかに眠り居れり。哀れ、消ゆれば跡なき陽炎の果敢なき未來に何事を夢みるぞ。太子は憮然として其寢顏を打まもりぬ。綠なる丈なす黑髮は、誰が爲にか理めたる。玳瑁の櫛、瓔珞の飾、誰が爲に輝ける。見れば薄化粧をさへ施したるに笑ひを含める天女の顏ばせは、そも何の樂みを夢みてぞ、今や其花の如き容色は一陣の飈風に散されむとす。――太子は言葉無く帳前に佇立みぬ。

『嗚呼耶輸陀羅よ、全法界の財貨よりも、大雪

山の嶺よりも、大恒河の水よりも、貴く、高く、深き愛情を我身に盡したる可憐の我妻よ。今こそは悉達多が無盡永劫の訣別なれ。御身の愛を我れ永く忘るゝ時無かるべし、唯是有生衆生の限りなき苦に沈めるを如何すべき。我今御身を去るは、御身を愛するの淺きが爲に非ずして、三界衆生を慈むの情更に深きが爲なり。若し我を目して無情と誣らば、是れ未だ我が大なる慈悲心を知らざるもののみ。

嗚呼、耶輸陀羅よ、最愛なる我妻よ、我は是世を救はむが爲に生まれたるなり。十九年の今に到るまで、我心は是が爲に憧れ、我情は是が爲に動けり。父王は常に我に告げ給へり、是世を樂め、是國を治めよと、然れども我が大いなる使命は、茲に在らざるなり。我は王冠を冠き、干戈を動かし、弱き者を挫がむが爲に、是世に生まれず。百萬の精兵によりて一戰の勝者となるが如きは我が願にあらざるなり。我は寧ろ寂寞の山林に迴伏し、食を乞ふの外、一切思念を斷絶して一大事の冥想に耽らむが爲に生まれたり。我が大いなる使命實に茲に在り。我れ今日の愛を想へば、腸九回せむとす、然れども我は、迦毘羅城の一宮殿よりも、全法界の濟度を以て更に大いなりとするなり。

嗚呼、我が最愛なる耶輸陀羅よ、我に代りて父無き羅睺羅を養ひ、以て父王の心を慰めよ。是より以降、永く我に就いて思念すること無かるべし。我は最早や王子にあらず、太子にあらず、寂寞孤貧の一出家なり。然れども我の貧しく賤しきを憐む勿れ、全法界は將に我によりて救はれむとす。我は、他日三界の救世主として崇めらるゝ時あるべし。嗚呼耶輸陀羅よ、全法界の財貨よりも、大雪山の嶺よりも、大恒河の水よりも、貴く、高く、深き愛情を我身に盡したる我妻よ。今こそは悉達多が無盡永劫の訣別なれ。いざさらば――」

太子は甘睡せる妻子に、餘所ながら永別の意を告げぬ。無心なる小兒の慈母の懐に何事も知らずして眠れる様を見れば、流石に名殘の惜まれて、覺えず涙を流しぬ。されど是期に臨みて、又何をか悲まむ、太子は其大勇猛心を奮ひ起して、情絆を両斷し、決然として出でぬ。

行く〳〵宮中を回顧するに、幾千の宮女、狼藉さながら醉へるが如し。晝は臙脂紅粉端然として儀容を作れるもの、今や魂魄華胥の國に遊びて、身は革嚢骨架に異ならず。或は身歪み服正しからざるものあり、或は衵けるあり、褰けたるあり。或は手頭顱を支へて眠れるあり、或は兩臂一鼓を抱けるまゝ眠れるあり。或は目睫交はらず、晴瞳明かに現はるゝあり、或は仰臥して四肢を延べ口を開けるあり。或は知らずして手脚を亂打し展轉して眠れるあり、或は頭を覆ひ鼾聲四邊を動かすあり。或は蹲踞首を縮めて眠り、或は歔欷の音憂々として鳴れるあり。或は大小便を失し、不淨のまゝ眠るあり。千態萬狀穢々として原野の石の如く、醜穢なること塚間の死屍の如し。太子是を見、憮然として惟へらく、一婦人の形容眞に是の如きに過ぎざるのみ、外粉脂を施し、其衣を綺羅にし、其容を媚悦にし、瓔珞華鬘燦然として人目を眩ますも其身體の不淨猥醜素是の如きのみ。人の色境に沈湎し、恣に其誑惑するところとなる者は眞に憐れむべき哉。我今分明に是の如き眞相を觀るを得たり、當に勇猛心を振ひ起し、歡喜踴躍して不退轉の精進を遂げ、以て救ひ無き者の爲に救護を作し、養育無き者の爲に歸依を作し、家無き者の爲に屋宅を作るべし」と。

斯くて太子は後宮を出で、至心一向、諸佛を念じて端然として天を仰ぎぬ。時は方に初冬の交なりき、南門の氣候既に去りて恒水河上秋風漸く老い、北の方雪山の氷雪漸く人寰を

馳し來らむとす。天高く、氣澄み、虚空弘大、星宿燦爛たり。
太子は御者車匿(チャンナ)を喚起し、愛馬乾陟(カンタカ)を牽き來らしむ。告けて曰く、「我が心今甚だ渇きたれば、行いて甘露泉を飲まむと欲す」と。車匿太子の出家せむとするを覺り、惟へらく、父王平生我に命ずるに太子の出入を看護せむことを以てせり。今太子の命に從はゞ父王に背き、父王の命を守らむとすれば太子に背く、進退惟れ谷まれりと。太子諭すに救世の大事を以てせしに、車匿は泣きて其命に從ひぬ。
即て名馬乾陟は太子の前に引かれぬ。乾陟は駿良を以て名あり　乘具に寶玉を鏤め、體勢龍の如し。太子其頭を撫でて曰ひけるは、「乾陟汝靈あらば能く我言を聞け、我父王常に汝に跨りて敵陣に臨み、向ふ所勝たざるは無かりき、我れ今遠く奔りて雪山の麓に行かむとす。單騎隨伎なしと雖も、亦是れ衆生の爲に一大苦戰に勝たむが爲なり。汝能く長驅して疲れ倦むこと勿れ」。乾陟耳を俛して傾聽するものの如し。太子徐に馬上に跨り、手綱を操つて一鞭す。車匿轡を執つて是に先つ。怪い哉、馬屏息して嘶かず、歩武肅々として聲無し。關鑰堅固にして朝夕開閉の音四十里に聞ゆるの重鐵門、亦音無くしておのづから開放せらる。車匿と乾陟と太子と夜にまぎれて迦毘羅城を出でぬ。
嗚呼太子悉達多は斯くて一切現世の榮華を捨て、其國儲の尊位を抛ち、其他もろもろの繫累を斷絶して一處不住、捨行專念の一出家となりにける。只眺むれば、夜暗うして風蕭やかに、滿天の星斗獨り花の如し。白馬と主從と、闇を銜いて流星の如く奔り逝きぬ。時に十二月第七日。

## 第七章　車匿及び乾陟

車匿と乾陟の太子と行くこと凡そ二十里、日漸く出づる頃、東南の方彌尼迦の村を經て跋迦婆(バールガヴァ)仙人の居林に入る。林木淸曠にして禽獸人に親む、太子心潛に喜びて祥瑞と爲し、彼の仙人必ず我が成道に益あらむと思へり。乃ち馬より下り、手馬頭を摩して慇懃に告げて曰く、『今こそ汝の大任は終りたれ。今より後、城に還りて汝の天年を全うせよ。我が出家の一大事に會し、我が爲に是大遠路を走りしは我が永く徳とする所なり。乾陟よ憂ふる勿れ、悲む勿れ泣く勿れ、汝が載せたる悉達多の、即て大果報を得て天下法界の主とならむ時、當に甘露を以て汝に報つべし』。白馬首を垂れ、蕭然として太子の言に聽く。
太子次に車匿に告けて曰ひけるは、『我忠僕よ、今や汝の事畢れり。汝の貞情勤勞共に何を以てか報ゆべき。如今我れ一切の世榮を抛ち、是より將に學道の緒に就かむと欲す。汝歸りて父王及び眷族に知らするに、我が是志を以てし、且我を以て意と爲す勿れと告けよ。我妃既に子を生めり、以て我に代へて世嗣と爲すべし。汝等群臣と共に父王を敬せよ、我今多く言ふべき無し。汝速に馬を牽いて還り復命せよ』。斯く言ひつゝ太子は、身に纏へる瓔珞寶珠の衣冠を脱し、代ふるに粗布染色の緇衣を以てし、且髮を斷ち、劒を解き、素手跣足となり、車匿に命じて其衣冠と髮と劒を持ち還らしむ。曰く、『今より後、我は是れ出家捨行の一徒弟のみ。衣冠又何かせむ。車匿よ、我容姿の窶れたるを見て泣く勿れ、天下は即て我有に歸すべきなり』。嗚呼昨は榮華の太子、今は孤煢の沙門、何等の悲壯、何等の轉變ぞや。
憐れなる車匿は太子の言を聞きて欷歔是を久しうして曰く、『嗚呼悲い哉、我れ是を奈何すべき。昨夜太子の命により、嘗膽として奔りて茲に到れりと雖も、是甚深の離情に會して爭

でか手を空しうして還るを得べき。太子、身深宮に人となり、身細軟にして質蒲柳なり、爭でか風雨幾年の苦行に堪へ給ふべき。良し成道の爲に其身を捨て給ふとも、老父王は其子を失ひ、王妃は其夫を失ひ、王子は其父を失ひ、迦毘羅國の民は其主王を失へり。あはれ此瓔珞の衣、寶玉の冠は、再び尊體に着くべからざる乎。太子希くは再慮を再びせよ、車匿又何の面目ありて空しく無主の馬を牽きて歸るを得べきぞ」。言々肺腑を絞り、涙盡きて繼ぐに血を以てす。

太子乃ち諭すに世道を以てし、懇に生死會離の常理なるを說く。車匿強ふるに語無く、涙を吞んで僅に命に隨ふ。立ちて乾陟の轡を執らむとすれども、白馬は膝を太子の前に屈して、御足を舐り、容易に立たず、長嘶して悲哀を訴ふるものゝ如し。太子身を起し、衣を拂ひ、車匿及び白馬に最後の告別を殘して去る。車匿其衣を提へむとして及はず、滿面涙を湛へて是を目送す。孤影蕭然として形漸く小なり、車匿手を擧げ、足を蹈て、聲を放ちて太子を呼べども、空林徒に聲を返して、其人遠樹の間に隱見するのみ。白馬亦屢々頭を回らし、太子の跡を望み、悲嘆するもの久し、車匿情悶え、感極まり、白馬の頸を抱きて號哭すれども、太子遂に見えず。低回顧望是を久しうす。心茫然として自失せるが如く、倒れては復起き、起きては復倒れ、反側悲泣して歸路に就く。

## 第八章　佛陀の學道

太子既に車匿と乾陟とに別れ、跋迦婆仙人に遇はむとて深林を排けて入り給ふ。抑々是林は、迦毘羅城より東の方約二十里、雪山山脈の麓に在り。天に參する老樹尚ほ暗き迄に生ひ繁り、四境寂靜にして市塵遙に到らず。跋迦婆仙人と云へるは、久しく是林中に棲める苦行の仙人にて、從遊する學徒少からず、其名高く遠近に聞えたり。太子城に在りし時夙に其名を慕ひければ、學道の端緒として、先づ是仙人を訪ひけるなり。

跋迦婆仙人の徒は、恰も古來婆羅門の一派として印度に行はるゝ瑜伽(ヨガ)派の人々の爲すが如く、所詮は現身の苦行を以て未來の淨樂を求むる者なり。太子跋迦婆仙に謁して熟々其徒の爲す所を觀るに、其道各々異にして服食亦相同じからず。或は草葉を衣となし、或は樹皮を服となし、或は草根木實を拾うて一日一食するあり、二日一食するあり、三日一食するあり。或は鳥に似て絶えず一脚を翹ぐるあり、或は蟲の如く地上に轉ぶあり。或は常に頭を水に浸し、或は魚の如く水中に沒するあり。或は荊棘の上に起臥し、或は死屍を纏ひたる襤褸を以て身を蔽へるあり。或は一手を擧げ、或は直立して常住其態度を變ふること無し。凡そ一切の苦行擧げて用ひざるは無し。然れば是徒、何れも身體疲弊を極め、骨枯れ血涸き、見る影も無く瘦れたり。

太子は苦行仙人の事は豫て聞き及びしが、今や初めて其實況を目睹し、心潛にそが果して解脫の眞法なりや否やを疑ひぬ。試みに其徒に問ひけるは、「卿等の行狀誠に奇特なり。請ひ問はむ、是の如き苦行に依りて求むる所は何ぞや」。彼等答へて曰ひけるは、「そは言ふまでも無く、聖經の敎ふる所に隨ひ、苦行の因によりて、天上の樂果を得むが爲のみ」。太子復問うて曰く、「然らば問はむ、天上の樂と雖も遂に盡くる期あらむ、其時再び六道に輪廻して苦界に墮らむ。卿等如何にして是大苦惱を解脫せむとする」。彼等又答ふる能はず、唯曰く、「我等は唯聖經の敎ふる所に從ふのみ」。

是に於て太子熟々思惟するに、務めて生を求むるもの、生求め得れば復死に遇ふべし。然ら

は務めて樂を求むるもの樂求め得れば復終には苦境に沈むべけむ。畢竟苦樂は相對の境、轉々互に究極すること無かるべし、唯無上の智慧を修め、苦樂兩つながら捨て寂靜無爲の境に入るに非ざれば、恐らくは絕對の眞樂に達するを得べからず。今跋迦婆仙人の徒を見るに、徒に肉身を苦めて無上の眞樂を得むと欲す、あはれ木に緣りて魚を求むるに均しからずや。

太子は跋迦婆仙人の苦行道を疑ひ、議論一夜の後、仙人の懇留を辭してその深林を出でぬ。南方摩伽陀(マガダー)國の阿羅邏(アーラ)仙人とて、行德高潔證悟深遠なる道者棲めるを聞き行きて道を尋ねばやと思ひぬ。

行き行きて迦毘羅國の南境に到りぬ、日暮秋風前途尙ほ遙なり。唯見る遙に兩三騎の砂烟を捲いて太子の後を追ふものあるを、太子杖を停め其近づくを見れば王師大臣迦毘羅城より王命を受けて太子を抑留せむとせるなりき。

＊　＊　＊　＊

是より先き車匿は太子に別れ、心悲寒し、情々として城に歸る。先に太子と共に夜を明したる一箇の徑路、今や太子を捨てゝ空しく歸る。天候慘憺として日に光なく、城市亦憂ふるが如し。苑囿林泉、形故の如しと雖も、水清まず、木茂らず、國土寥廓として又嚮昔歡喜の相無し。城中太子の夜、城を出でたるを知りて愛惑措く所を知らず、車匿の乾陟を牽いて歸り來るを見て更に太子の共に在らざるに驚き、爭ひ馳せて其故を問ふ。父王后妃亦乾陟の聲を聞き、急遽階を下りて出で迎ふれども、車匿の蕭然として白馬と共に立てるのみ。太子は遂に長へに在らず。滿城寂寞として唯歔欷の聲を聞く。

父王の悲みは述ぶるまでも無かるべし。王妃耶輸陀羅の歎きに到つては傍人をして斷腸の思あらしめき。昨夜香閨帳裏に鴛鴦の夢を結びし人、今日三界の寡婦となりて其人遂に見るべからず。夢か幻か、誰かそを現なりと思はむや。然るにても無情の人なる哉、家を出で道を修めむとの貴き大願を妾女性の身として爭でか沮むべき。唯何が故に眞の情を以て妾に告げ、妾をして最後の名殘を惜ましめ給はざりし。あはれ五天竺に並びなき悉達多太子の配と名告れる身の天幸は、僅に一旦夕の夢に過ぎざりしか。良しや妾は素より物の數ならずとするも只是孩提の兒や、永く孤獨の身とならむを如何にすべき。嗚呼車匿何が故に其命を拒まざりし、乾陟何が故に其步を停めざりし。方四十里に聞ゆる城門は何が故に城內の關を鎖さざりし。天は何ぞ大に雷ふりて其前路を塞めざりし、地は何ぞ大に震ひて其前路を塞がれざりし。妃は狂氣の如くなりて泣き悲みぬ。車匿を責め乾陟を罵れども遂に奈何ともする無し。

是に於て父王は其大臣の巧辯才略あるもの三人を擇び命じて駿馬に策ちて太子を抑留せしむ。大臣命を畏み、車匿の言に從ひ、直に跋迦婆の深林に向ふ。結束整ふるに遑あらず、馳騁速きこと矢の如し。跋迦婆仙に遇ひて太子を問へば、既に摩伽陀の國境を指して此地を去れりと答ふ。大臣輒ち馬首を轉じ、南に向ひ日暮辛うじて太子に追及しぬ。

斯くて三人の大臣は太子に追ひ着き、其變り果てたる容貌を眺め、涙ながらに情を述べぬ。父王の悲哀、王妃の愁傷、群臣萬民の失望等、凡そ迦毘羅城に現はれたる一切の情況を擧げて、一に太子出家の爲す所なるを說き理を辨じ、情に訴へ、縷々惻々百方復び城中に還らむことを勸めたり。然れど三人の大臣の巧言は、何れも太子の爲に挫折せられ、愈太子の成道度生の大決心を堅うするに過ぎざりき。

太子は終りに大臣に告げて曰く、「汝等歸り

て父王と妃と群臣と國民とに告げよ。悉達多は一國の主となるべき者に非ず、人天三界を擧げて我有と爲すに非ずんば、決して退轉することなかるべし。設令ひ日月地に墜ち、須彌、雪山我頭に轉ずるも、我が是大本願は決して滅ること無かるべし』と。辯鋒さながら炎の如く、威容凜然として近づくべからざるものあり。三人の大臣は強ふるに辭無く深く畏敬の情を起し憮然として辭し歸る。

## 第九章　阿羅邏仙人

太子は大臣を諭して故國に歸らしめ、孤錫飄然南の方恒河の大流を渡りて摩伽陀國に入り給ふ。智慧の靈光中に輝けばにや、態度おのづから凡ならざる所あり、一種莊嚴の風象四邊を拂うて不思議の尊容道路の眼を側てぬ。

抑摩伽陀國は迦毘羅國の東南に在り、境域廣大にして兵強く國富めり。時の國王を頻毘娑羅(ビンビサーラ)と云ふ。勇略大志あり、夙に太子の令名を傳へ聞きしが、今や出家して其國に巡錫し來れるを聞き、潛に思惟らく、彼れ誠に有爲の志と倫無き才器とを抱けり。彼が文武の英名は夙に我耳までも轟けり。今や彼れ出家して國を去りしは恐らくは其國土偏小にして、且つは未だ王位を讓られざるを憤りてならむ。良し然らば用ひて我が大志を成さしむべしと。頻毘娑羅王乃ち王衣を纏ひ、金冠を戴き、太子を路に迎へ、恭しく敬禮を表して曰ひけるは、『出家の人よ、敎の爲に國君の尊榮を抛ちたる殊勝の沙門よ、卿は大國の政を執るべき器量を具へながら、食を乞ふものの鉢を手にし跣足にして歩むは如何にぞや。凡そ心大きく志高きものは、事物の一面に拘るべからず。富貴を得、權勢を獲て而して道を覺らざらむは、素より憐むべしと雖も、富と力と道との三つを併せ有し、而して擒縱活殺の自在を得ば、我れ是を呼んで明主となさむ。道を求むるは宮殿に於ても山林に於ても一たるべし。出家の人、若し意あらば、我れ我が國土を中分して卿を封ぜむ。若し尙ほ足らずと思はゞ、我に四兵と十軍とあり、一たび旗幟を掲げて麾かば、以て四境を略せむこと亦易々たらむのみ。如何に出家の人よ、留りて我國を治むるの意無き乎』。

太子溫乎として答へけるは、『大王よ、深く卿の好意を謝せむ。然れど我志は一國一城に在らずして人天三界の衆生に在り。四苦の流は天に滔り、五慾の炎は地を燎けり。悲い哉、無殘なる衆生は是間に沈湎して、永く出づる所以を知らず。我が茲に至るものは無上解脫の正道を彼等に敎へむが爲なり、我が降生の使命亦是に外ならざるなり。大王よ、富貴と權勢は左程に望ましき者なる乎。地上に王威を振はむも、全世界を掌中に握らむ、も爭でか聖者の正覺の貴きに及ばむや。我は一切世榮の幻に等しきを見る、如何ぞ更に影を追うて共に倒るゝを望むべき。大王よ、我を憐むを已めよ、三界は我家たり、衆生は我子たり、又何物を足らずとせむ。願はくは我を憐むを已めて、寧ろ富貴に惱み王位に苦めるものを憐めよ。人は妻子を懷かしみ、珍寶を愛し、王位を貴べり。未だ得ざるものは得ざらむことを是れ憂へ、既に得たるものは失はむことを是れ恐る。然れど人は遂に死せざるべからず、妻子と、珍寶と、王位と、果して携へ行くを得べしとする乎。良し然らば、死せる王者と死せる乞食と何の異なる所あらむや』。

熱心に聞き居たる頻毘娑羅王は、是時憮然として點頭きぬ。

太子は語を次ぎて曰ひけるは、『誰か單に毒蛇を脫れて更に是に嚙まるゝを喜ぶものあらむや。誰か炬火に燒かれたる手を以て更に其落ちたるを拾ふものあらむや。然らば誰か五慾を離

れたる身を以て、甘じて再び是に投ずるものあらむや。我は妻子を捨てゝ衆生を得たり、王位を捨てゝ天下を得たり。現世を捨てゝ永生を得たり。大王願はくは我を以て意と爲す勿れ。唯永く正道を踏んで卿の國を治めよ』。

慾火に懊惱せる頻毘娑羅王の胸は、一道の涼風に打たれ、恍然として目覺めたるが如し。由來印度の諸王國にありては、王位政權の授受、平和の間に行はるゝこと稀にして、干戈により爭奪するを常とす。摩伽陀國の如きは殊に甚し。されば王の太子を見るや、己れの心を以てし、己れの情によりて其意を迎へしが、却て是意外の訓誡に遇ひ、大に自ら覺る所あり。乃ち深く慚愧の色を露はし、恭しく太子の手を取りて曰ひけるは、『尊き出家の人よ、我心甚だ汚れたり、又卿を强ひざるべし。唯希くは卿が成道の後、再び錫を是地に留め、我を以て卿が弟子となさむことを』。恭敬三寶の種子は、是時先づ、王の心田に播かれたりけむ。

斯くて太子は頻毘娑羅王と別れ、摩伽陀國の都王舍城の北に阿羅邏仙人を訪ひ給ふ。阿羅邏仙人と云へるは、其國第一の達道にして、智慧德行共に一世の宗師なり。鬱陀羅邏摩子（ウドラカラーマプトラ）仙人とて同じく名高き仙人と共に、彌樓山に棲む。數多の弟子の慕ひ到れるもの、或は山林溪谷に、或は樹下石上に散居して難行をさく怠りなくぞ見えにける。阿羅邏仙人は太子の容貌誠に世の常ならざるを見、大に歡びて曰ひけるは、『嗚呼善男、我れは卿の必ず大覺成道を得べきを知る。昔者明勝王、其位を捨てゝ教を求めしが、なか〳〵に卿が年少くして信念の固きに及ぶべくもあらざりき。夫の盛年に五慾を恣にし、體力漸く衰ふるに及び俄に世榮を捨てゝ學道の徒となるが如き、畢竟凡夫のみ。今や卿青春の齡を以て富貴に惑はされず、卿の如きは眞に是れ奇特殊勝の事なり。務めて精進し決して退轉する勿れ』。太子心濟に知己の言を喜び、諸弟子と共に其教を聞きぬ。

然れど阿羅邏仙人の說ける所も遂に太子の志を滿たすに足らざりき。如何にして生老病死の四患は生じ得べき乎、是四患を免るゝの法如何にして可ならむ乎。仙人は衆生四患の根本を冥初に歸し、非想非々想の處を以て究竟解脫の地なりと謂へり。其說によれば、冥初より我慢を生じ、癡心、染愛、五塵より遂に五大に及ぶ。五大は貪慾瞋恚等のもろ〳〵の煩惱を生じ、煩惱遂に流轉して生老病死の苦患を構ふ。是苦患を免るゝの方法、唯業に正式を奉じ、艱苦難行、一切欲望の妄習を擺脫し、種々の雜念妄想を排斥して所謂非想非々想の境地に入るべしと云ふにあり。然れど非想非々想なるもの、尙ほ我の微縁あり、染着あり、未だ以て有無の二際を斷絕し盡さざる所あり。太子は深く自ら思念して其究竟の解脫に非ざるを看破しぬ。二仙人は太子の妙思深智誠に測り難きものあるに驚きぬ。

阿羅邏、鬱陀羅の二仙人も、太子を開覺の光明に導き得ざりしかば、乃ち去つて尼連禪（ナイランジヤナー）河の西岸に一地を卜し、靜坐終日、觀法の念濃やかに出離の思を凝しぬ。斯くて在る事幾月の後更に貴き教を受けばやと思ひ立ち、智慧に渇ゑたる出家の人は、漚樓頻螺（ウルヱーラー）村苦行林の中に棲める五人の比丘を訪ねぬ。

## 第十章　成道

太子苦行林に入り、熟〻五人の比丘の勤行を察するに、能く情を節し慾を抑へ、持戒嚴かにして寂靜沈默誠に達道の行者と見られたり。乃ち自ら其中に交はりて一處の冥想を共にし給ふ。五人の比丘亦太子の道を求むるに精一なるを知り、心を盡し禮を卑うして仕事甚

だ力む。太子專念一向身を節して飲食を忘れ、心を淨うして齋戒を守り、寂寞として三昧に入り給ふ。五人の比丘何れも苦行を以て鳴れりと雖も、太子の勵精に及ぶ者無かりき。

太子五比丘と共に是苦行を續くること前後六年、春風秋雨幾度か去來して、太子の心動かざること山の如し。難行漸く進みて、果ては一日に一粒の胡麻を食して其身を支へ得るに到り、血肉乾凋して形骸さながら枯木の如し。されど生死の大海を超越して、圓覺成道の彼岸に達せむの志は、須臾も息むこと無かりき。されば太子の風評國内に傳はり、士女來り觀るもの堵の如し。太子は湛然として瞑目靜坐するのみ、山風衣を吹いて毛髪亂れ披けども六塵騒がざること死せるが如し。

然れども悲い哉、安心は尚ほ太子の心に在らざりき。是に於て太子は猛然として謂へらく、苦行に緣りて成道を願ふは愚なる哉、自ら因を修めて自ら其果を享くべし。心の淨く靜かならむこそ、無上の正道なれ、自ら飲食を絶ち、徒に體軀を毀るは爭で解脱の眞因なるべき。今や我れ苦行六年、餘は唯死あるのみ、而して心の安からざること尚ほ素の如し。我れ寧ろ飲食を取りて體力を强うし、更に大勇猛心を振起して精進すべきのみ。涅槃は智慧の光によりてのみ求め得べし、餓うること、はた何爲るものぞ。

太子は斯くの如く心を決め、先づ禪河の水に沐浴しぬ、然れど多年の斷食に疲れ果てゝ自ら支ふるの力無く蹣跚として僅に樹枝に縋りて岸に上り、其儘死せるが如く仆れぬ。森近く住みける牧牛の長の娘、其名の難陀(ナンダ)と云へるが、今しも河邊を通り掛りしが、太子の仆れ居るを見て、恭しく太子の足に稽首し、香乳糜を捧げぬ。太子是を受けしが神氣頓に回復し、五體俄に光澤を増したるが如し。五人の比丘は遙に是狀を見て皆以爲らく、太子河に浴し食を求めたるは、是れ正しく道心の退けるなり。あはれ吾等の師とも、菩薩とも仰ぎたる行者は、今や其苦行に得堪へずして、其高上なる目的を打忘れぬと。相伴ひて太子を捨てゝ去る。太子は五人の比丘が尚ほ其道を覺らざるを憐み、獨り林を離れ、菩提樹の下に進きぬ。五人の比丘皆謂へらく、太子は現世の榮華を懷慕して其修行を抛ちぬと。

太子が退きたる菩提樹の下は、誠に不思議に適へる處なりき。地層平にして軟草生じ、四時常綠の叢林其上を掩ひ、百尺黄白の幹枝は其傍を繞る。蟬烟飛び至らず、靈禽空に舞ふ。太子歩を移して玆に近くや地震ひ、天輝きて朝暾の雲を破るが如し。太子草を樹下に布きて成道の法座となし、結跏趺坐、東に向うて誓ひて曰く、道若し成らずんば終に此座を起たざるべしと。

悉達多太子が出家の大本願の滿たさるべき日は漸く近づきぬ。生死の冥暗、今や將に無上正覺の光に破られむとす。天地祥瑞を呈し、三十三天の諸善神皆共に大に歡びぬ。欲界の大魔王獨り憂惑して悦ばず。思へらく、抑菩提樹は諸佛成道宿緣の吉祥樹なり、太子をして其下に坐せしむべからず、と。

魔王即ち太子の是に居らざるに先ち、其部屬の惡鬼を役して其地を占領せむとせしが、菩提樹守護の善神の爲に一呵して退けられぬ。魔王即ち一策を案じ、自ら化して迦毘羅國の戰士となり、衣髮を亂し、方に戰亂中より遁れ來りたる狀に擬し、急遽太子に近づき告げて曰はく、『太子起たざるべからず、逆臣既に王位を奪ひ、太子の后妃を納れ、淨飯大王を獄に繫げり』。證するに親族の書を以てす。太子寂然として動かず、容貌刻めるが如し。魔王更に方法を變じ、其三女をして色を以て太子を動かさし

む。三女艶麗名状すべからず、嬌音濃哀、進んで菩提樹の下に至り、婚姿媚態を盡して、百方太子の情を促さむとす。或は香芬を送りて、笑顔光の如し。太子爾ても女色に迷はむや、三女乃ち歌によりて情を挑へ、華色の美み微妙なるを唱ふ。其聲の甘きこと蜜の如く、其調の美なる言ふべからず、太子冷然として傍ら人無きが如し。

魔王事の成らざるを憤り、悪鬼、餓鬼、修羅、夜叉、羅刹等一切の眷屬を舉げて太子の成道を妨碍せしむ。是に於て魔界の悪類はあらゆる怪貌畸形を盡し菩提樹下に麕集し來る。或は虚空に大黒雲を出し、或は風を飛ばし、雨を散し、大閃電を輝かし、大雷聲を動かし、雹を下し、諸山の石を雨らし、或は全身諸毛孔一切の火焔を迸發し、或は一身にして多頭なるあり、或は一目なるあり、衆眼なるあり、或は大腹にして長身、或は羸痩にして無腸、或は長牙利爪、或は長脚大膝、或は大面横に向へるあり、被髮裸形なるあり、或は虎皮衣を着け、或は蛇皮を纏ひ、或は面色半ば白く半ば赤く、或は腰に大鈴を帯び、或は猪身馬頭なるあり、或は獅子龍象の首を有するあり、或は奔走角逐して迭に打害し、或は空中に旋轉し、或は樹間に震鬨し、或は呼び、或は吠え、悪聲天地に震ひ、焔熖空を衝き、狂風四方に起りて山林悉く鳴動す。

太子泰然として顔容些の異相を呈せず、猶ほ獅子王群獣の中に處るが如し、悪類益忿恚し、背を裂き、首を切り、亂暴狼藉す。太子默然として觀ること兒戯の如し。魔類石を擲げるもの舉ぐる能はず、舉げたるもの下す能はず。飛矛空中に凝つて下らず、雷震大雹を降せども化して五色の花と成り、悪龍蛇の毒煙を吹けるもの、化して香芬となる。太子靜に右手を伸して地を指せば、掌内光明迸り炳焉として日月の如く、閻浮檀金の妙色六合に充つ。乃ち大音魔軍を叱すれば、天地震動し、魔軍雲散霧消して跡なし。宇宙清朗、日月輝き、もろ〳〵の闇障凡て退き、大千世界盡く佛光に遍照せらる。空には天花を雨らし、諸天善神歡喜の聲、滿空の妙樂となりて響き十方に震ふ。

魔軍の去りたる後、太子は靜に思念を凝して圓覺の道に進みぬ。今や心の淨きこと赤兒の如く、天空海濶圓融自在の妙機を捉へ得て、生死流轉の表に超然たるを覺えぬ。情は一切の煩惱を斷ち、智は一切の妙理を觀し、身は四大を離れて天地の間に充塞す。凡そ三世萬劫の因縁、行、業、悉く通達せざる無く、輪廻の根蒂、因果の能生、及び衆生有情の過去業報、人世一切の苦樂を舉げて悉く眼前に歷々たり。斯くの如く無明斷じ盡して東方明星出づる時、太子一生の大事因緣通達して茲に無上正覺を得ぬ。是に於て迦毗羅國の太子悉達多は其救世の大使命を果さむが爲に佛陀となりぬ。

嗚呼煩惱の羈に繋がれ、生死の巷に流轉して、我や年久しくも迷ひける哉。今や我れ輪廻の鎖を斷絶して解脫の鍵となしぬ。生死の大海、無明の長夜、我はそを照すべき光を得たり。一切人生の苦惱の源は是光によりて殘りなく看破されぬ。我は自在なり、我は圓滿なり、何物か又我を圍圄に捕へ得べき。一切衆生は我に縁りて等しく悟の道に入るを得べし。悟の道とは渝らざる眞理なり、動かざる安心なり、圓かなる福德なり、不生不死寂滅爲樂の大涅槃なり。

斯くて佛陀は四七日の間是悟の中に在りき。

## 第十一章　佛陀の布教

太子既に佛陀となりぬ、其の天より稟けたる救世の大使命は是より漸く果されむとす。佛陀は一身の福德を得むが爲に、道に志し

し者に非ざりき。實に妻子を捨て、王位を抛ちて、幾年不斷の勤行を瀝ぎしは、一に是の衆生の爲に解脫の道を開かむとする大慈悲心に本づけり。是大慈悲や三世を通じ、人天を掩ひ、其大、窮むべからず、其高、仰ぐべからず、佛陀の佛陀たる所以も、三千年流傳の源頭となりて萬世の宗師と仰がるゝ所以も、實に是の廣大なる博愛に歸せざるは無し。然れば成道は佛陀の大使命にとりては方便なり、究竟の目的は一切衆生の濟度にあり。今や佛陀が一切衆生の濟度の爲に其法輪を轉ずるの時到りぬ。

凡そ聖哲の教は猶ほ洪鐘の音の如し、問ふ者によりて其說に高下あること、猶ほ敲く者に隨ひて鐘の音に大小あるが如し。然れば古より聖哲の說く所、眞俗二諦の別あり。能く理を辨じ識高きものに向ひては、眞諦無二の說を述べ、蒙昧學無きものに向ひては、俗諦方便の教を垂る、是れ其說を弘布するの方法としては、蓋し已むを得ざることならむ。佛陀に於ても亦然り、菩提樹下に開悟せる無上正覺なるものは、甚深微妙言ひ難く解し難し、漫に俗人に向つて是を說かば、猶ほ南蠻の鴃舌と一般、徒に人の嗤笑誹謗を招くに過ぎざるべし。然れば佛陀一代の說法は、猶ほ孔子の門弟子に對する答案の如く、聽者の如何によりて隨類應化の別あらざるは無し。後世の佛徒は義の深淺によりて佛陀一代の說法を分類し、或は二道となし、或は二門となし、或は二教、三教、四教、五教となせるは、佛說其物に二種あるに非ず、所詮は對者の力量如何によりて別れたるものなり。是小冊子素より佛說の詳細を擧ぐる能はざるを以て、殊に是を言ふのみ。

さる程に佛陀は、布教の途に就くに先ち、阿羅邏仙人等の二舊師を濟度せむと欲せしが、二仙既に逝けるを聞き、然らば先きに苦行林にて別れたる彼の五人の比丘を訓へばやと思ひ立ち、彼等の移り棲める婆羅捺斯（ワーラーナシー）國に赴きぬ。

是より先き五人の比丘は、佛陀が河に浴し乳糜を受けたるを以て、道心衰へて俗界に墮落したりとなし、相携へて苦行林より婆羅捺斯國なる鹿野園（ムリガダーウ）と云へるに來り、茲に其難行を繼續せり。彼等は佛陀の近づけるを見て、互に謂ひて曰く、「彼れを見よ、肉豐に血色鮮なるは、俗界の塵に汚れしなり。彼れ來るとも決して往時の如く師遇することなからむ。彼は誓を破り、苦行を捨て、五慾の境に歸りたればなり」と。然れども佛陀の近づくに從ひ、其光耀赫奕たる威容に打たれ、齊しく畏敬の情を起さざるを得ざりき。

佛陀乃ち彼等の爲に苦行によりて解脫を得べからざるを說き、若し迷をだに離れなば、良し肉を食ひ、美服を着くるとも、又經典を講ぜず、僧侶に布施せず、寒熱饑餓の難行を爲さずとも、毫も解脫の道に障り無きを說き、天下の不淨なるものは肉を食ふことに非ずして五慾に存することを說き、情炎慾火を滅ぼすこと無くして徒に悲慘の生涯を營むも、畢竟益無きを說き、身疲るれば心隨つて亂る、健全なる身體にして初めて圓滿なる智慧の光を點じ得べきこと即ち是れ中道なりと說きぬ。

五人の比丘は佛陀の教を聞きて大に感動し、多年勤行の益無かりしを慚ぢ、接足作禮して佛弟子たらむことを求めぬ。佛陀は其願を容れ、更に四聖諦の眞理を說き給ひぬ。

四聖諦とは何ぞ、煩惱を斷滅して涅槃に達するの道なり。其第一を「苦」となす。夫れ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死孰れか苦に非ざるべき。人は時に憎むべき者とも結ばざるを得ず、愛するものとも離れざるを得ず。榮枯得失、孰れか不如意の苦惱ならざるべき。然れば現世を苦界と觀ずるは、悟の初なり。其

第二を「苦の因」となす。苦の因は五慾なり、香味我を誘ひ、華色我を陥る。利に走り、名に狂し、是泡沫の幻の世樂に執着して死に至る迄目覺めず。然れば現世を苦界と觀ずるものは、是苦の因の五慾に存せるを認識せむことを要す。其第三は「苦の滅」なり。五慾を離れむと欲せば、「我」を滅せざるべからず。一切の希求、一切の執着「我」ありて初めて起る。「我」は五慾の結塊なり、煩惱の源泉なり。一たび「我」を滅せむか一切の苦は立地に消えむ。形なくして影あるもの、未だ是あらざるなり。其第四を「苦を滅するの八道」となす。苦を滅するの八道とは何ぞや。一に曰く正見、觀察の正しきを謂ふ。二に曰く正思惟、思念の正しきを謂ふ。三に曰く正語、說話の正しきを謂ふ。四に曰く正業、行爲の正しきを謂ふ。五に曰く正命、是れ生業を營むことの正しきなり。六に曰く正精進、是れ勤行の正しきなり。七に曰く正念、是れ思想の正しきなり。八に曰く正治、安心決意の地の正しきなり。是を苦を滅するの八道と謂ふ。凡そ道を學び救を求めむと欲するものは先づ是四つの聖諦を守らむことを要す。

佛陀は五人の比丘に四聖諦の眞理を示したる後、教團修行の必要を說きて曰く、「道を求むる人も互に孤立せば時に惡魔の爲に退轉せむ、然れば是の如き人々は相倚りて一團となり、互に提携し、互に激勵せざるべからず。斯くて眞の教に從へる人々は是世の中に正法の國を建つることを得べし」。

五人の比丘の中に憍陳如(カウンダンヤ)と云へるあり。佛陀の教義を會得せる最初の弟子なり。其他の四人の比丘と共に所謂三歸戒を誓ひぬ。三歸戒とは一に佛に歸依するなり。二は法に歸依するなり。三に僧に歸依するなり。佛に歸依すとは佛陀を以て人天の宗師となし、成道正覺の理想體となすなり。法に歸依すとは、佛陀の說ける解脫の方法を學び、且之を守るの謂なり。僧に歸依すとは、教會即ち僧伽(サンガ)の團結に投じ、相携へて正法の生活を營むなり。佛法僧の三者に後世の人是を三寶と呼びなせり。

憍陳如等五人の比丘を初として、佛陀の福音漸く擴がると共に所在遠近風を傳へて來り集まるもの日々に加はりぬ。佛陀は是等の弟子の中より、眞に道を會得し、且是を他人に傳ふるに勝ふべきものを擇び、之を四方に遣はして布教に從事せしむ。佛陀は彼等に告げて曰く、「汝比丘よ、我教は人をして其獨りを善くせしめむが爲に非ず、普く衆生をして平等の利益を得しめむ爲なり。汝等出でゝ我是の利他の大悲を體認し助け無き衆生に生死の大海を脱るゝの法を知らしむべし。我教の眞に廣まる處其處に即ち我れあるなり。小人道を聞きて或は笑ひ嘲りなむ、汝等怒ることなく彼等の無明を憐めよ」。是に於て佛陀の教は風雨の如く印度諸國に廣がりぬ。

佛陀は若干の弟子を四方に遣はし、天晴れ節候なる時は出でて遠近に托鉢遊行せしめ、夏季雨の候には歸り安居して道を修めしむ。是れ即ち印度地方にては夏季淫雨多くして外出に適せざればなり。是れ後世佛徒の所謂夏安居の制なり。

今、平生日常佛陀の行狀を記さむに佛陀は一日を五時に分てり。第一、佛陀は拂曉起きて洗漱し、衣を着けて禪室に入り、觀想畢りて後袈裟を被り、市に出でて托鉢食を乞ふ。第二、托鉢より歸るや、佛陀は足を洗ひて堂に上り、弟子を集めて法義を說く。弟子は說法の畢りたる後、或は討議し或は靜坐して佛陀の教を研鑽せり。佛陀は是間に食事を畢り、午後に到り四方より參詣するものに對して法を說く。第三、大衆に對する法談畢るや、佛陀は沐浴して

園林に逍遙し、歸り來りて弟子の質疑に應答す。第四、日沒後に到りて佛陀は諸天善神の爲に法を說きて、後夜に到る。第五、諸人善神に對する說法終りて寢に就く。斯の如きは佛陀が日課行狀なり。

## 第十二章　王舍城に於ける佛陀

當時摩伽陀國の都、王舍城（ラージャグリハ）を西に距る事十數里伽耶（ガヤ）山と云へる山に、三人の拜火教徒の苦行仙人棲みけり。伯を優樓頻螺迦葉波（ウルヴェーラカーシャーパ）、仲を那提迦葉波（ナディーカーシャーパ）、叔を伽耶迦葉波（ガヤーカーシャーパ）と呼べり。何れも學識博く、德高く、一世の宗師として國人之に恭事し、就いて教を受くるもの甚だ多し。其教は神火に事ふるを旨とし、西方波斯國の拜火教に似たる處あり。佛陀は先づ此の迦葉波兄弟を濟度せばやと思ひ、獨り山に登りて長なる迦葉波を訪ね、宿を請ふ。迦葉曰へらく、「我に一の火窟あるのみ、是れ毒龍の棲む處なり。御身の止宿し得べき處なし」と。佛陀請うて已まず、自ら進みて火窟中に入り思惟し給ふ。惡龍佛陀を見て、瞋恚の毒氣を吐き、猛火洞然として燃ゆ、然れども毫も佛身に觸れず、火おのづから滅す。佛陀は端坐正思して顏色常の如し、惡龍其德に感じけむ、佛前に稽首す。迦葉は夜窟中に火起れるを見て佛陀の自ら計らずして龍火に死したるべきを憐み、翌朝其弟子と共に來り看れば、佛陀は既に惡龍を降して鉢中に置けり。迦葉波初めて佛陀の功德無邊なるに驚き、大に恭敬の念を起し、其教を求む。佛陀即ち神火に事ふるの謂はれなきを說示し、徐ろに四諦八正道の妙理を諭せしに、三人の迦葉及び其眷屬五百人悉く隨喜の涙を流し、歸仰奉養せむことを請へる。即ちもろ〳〵の拜火苦行の具を水中に棄て、一鉢一枚、佛陀に隨ひ、陸續として山を下る。

斯くて佛陀は三人の迦葉と其眷屬とを從へて王舍城に入りぬ。國人は[illegible]迦葉の[illegible]を耳にせしかど、如何で[illegible]人[illegible][illegible]受けたる三迦葉よりも勝れたりと思はむや。然れども佛陀が[illegible]を弟子となして王舍城に入るべしとの[illegible]は、[illegible]耳目を驚動せり。雖も多くの人は佛陀是の智德を信ぜず、佛陀已に城市に入り三人の迦葉恭しく其後に從へるを目撃しても、何れか迦葉陀佛陀に從へるか、又は佛陀迦葉に從へるかに迷ひて疑惑したるけるもの多かりき。佛陀衆人の心を[illegible]り、從然として迦葉に問うて曰く、「[illegible]、汝は何の見る處ありて其拜火の教を棄てゝ我に從ひたる乎」と。迦葉恭しく之を聞き、跪いて合掌し、大衆の前に立ちて告げて曰はく、「我が聖火を拜して得たる處は五慾を促し、煩惱を增し、輪廻轉生の苦を長じたるの一事のみ。是の邪なるの道を以て獨り尊しと信じ、多年我を苦め、人を誤りたるは、我が深く慚愧に堪へざる處なり。今や天の祝福により佛陀の光明に接し、翻然として昨の非なるを悟りぬ。苦行を爲し、聖火を拜し、犧牲を供ふるは愚なる哉。我は今より後佛陀の跡に從ひて、最勝無上の涅槃をこそ求めむと思ふなれ」と。大衆は愕然として迦葉が此宣言に傾聽せり。[illegible]相囁いて曰く、「我等の神として事へたる迦葉が其の下に拜跪するを甘んずる佛陀は[illegible]如何なる人ぞや」と。[illegible]して佛陀の教に歸依せり。

[illegible]國王頻婆娑羅（ビンビサーラ）は佛陀の成道して[illegible]來れるを聞き、[illegible]て城外に[illegible]へ、佛陀の[illegible]下に[illegible]して其の志無きを謝し、[illegible]門を[illegible]、佛教徒となりぬ。[illegible]年僅に三十[illegible]、[illegible]年の間、常に熱心なる三寶の外護者として、佛陀及び其弟子を外護し、佛教の為に力を致すこと

少からざりき。當時摩伽陀國は印度第一の强大國にして、文化の程度も他國に勝れり。然れば其國王の外護を得たるは、佛教傳播の爲に是上も無き好都合なりしなるべし。是を以て此を見れば、佛教に對する頻毘娑羅王の功勳は、決して後世の阿育(アショーカ)及び迦膩色迦(カニシュカ)の二王に下ること無かるべし。

斯く佛陀は頻毘娑羅王の外護を得、當時印度文明の中心たる摩伽陀國を根據として、其教を四方に弘めたり。當時迦蘭陀迦(カーランダカ)と云へる一弟子は、竹園を佛陀に奉り頻毘娑羅王は玆に一大精舍を建立して佛陀を招請せしかば、佛陀是に移り、成道後第三年夏安居の道場となしぬ。後世佛徒の所謂竹林精舍即ち是れなり。

是時に當り、摩伽陀國内に尙ほ二派の婆羅門あり、其宗師一を舍利弗(シャーリプトラ)と云ひ、他を目犍連(マウドガルヤーヤナ)と云ふ。共に各二百餘人の弟子を有し、互に道場を張りて全盛を極めしが、佛弟子に誘はれ佛陀を竹林に訪ひて一たび其教に接するや、何れも其妙法に歸依し、後には各佛門の高弟となりぬ。又是國の富豪に摩訶迦葉波(マハーカーシャパ)なるものあり。幼より學を好み、經典に通曉し、且徳行圓滿にして智慧聰明なりしが、亦佛門に入りて高弟となりぬ。佛陀には常に上行第一として彼を選擇し給ひしが、遂に佛陀入滅後、大衆の上座となりて三藏の結集を完成したる者は實に是摩訶迦葉波なりき。其他一代の名流相率ゐて其教に入りしを以て、大法弘布の事業は、更に其人無きを患へざりき。

然るに玆に摩伽陀國人の中に、青年の子弟が競うて佛陀に從遊して身を宗教に委ぬるを見て、憤慨に堪へざるものあり。以爲らく、是の如くにして底止する處無くんば、凡ての臣は其君に背き、凡ての子は其父に背き、凡ての妻は其夫に背かざれば已まざるべしと。乃ち途上托鉢の比丘を罵りて曰く、『汝及び汝等の師たる佛陀は、我等の業を妨げむが爲に此國に來れり、然れど心あるもの誰か是の如き教に從ふべき』と。佛陀是を聞きて比丘等に告げて曰く、『是の如き不平は能く幾時か續くべき、汝等再び是の如き嘲罵に遇はゞ當に答ふべし、佛陀の來れるは眞の道を教へむが爲なり、人をして心を淨うし、己に克ち、正しきを行はしめむが爲なり。誰か涅槃の光を避けて無明の闇を求むるものぞ』と。幾もなく國人其德に服し佛陀及び比丘を罵るもの無かりき。

是時舍衞國の北拘薩羅(コーサラ)の富豪に須達(スダッタ)即ち給孤獨の名を得たる長者と云へるあり、適々事に依りて此國に來り、其教を受け、佛陀の自ら其國に巡錫して教化を垂れむことを請ひ、曰く、我國の首都を舍衞(シラーヷスティー)城と云ふ、土地膏腴にして民治まれり、唯貴き法の衆生を濟度するもの無きを恨とす。我れ願はくは形勝の地を布施して一寺を建て、佛陀及び佛弟子の爲に布教の壇場となさむ。佛陀願はくは我が願を許せと。佛陀は須達長者が誠に同胞を思ふの厚きに感じて其請を容し、先づ弟子舍利弗をして須達長者の歸路に伴はしめ、舍衞城に建てらるべき寺院の地形を相せしむ。

斯かる間に佛陀の一生に於て最も記憶すべき事は起りぬ。淨飯王及び耶輸陀羅姫との再會是れなり。

## 第十三章　父子の再會

顧みれば、佛陀が夜半に乘じ、車匿を伴ひ乾陟に乘りて迦毘羅城を出でしは、既に十二年の昔となりぬ。爾來一念の大願に精進し、林に入り、山を攀ぢ幾多の辛酸を嘗め盡して、遂に菩提樹下に無上正覺を成就しき。斯く

て五比丘を度し、三迦葉波を化へ、摩迦陀全王國の群臣を歸依せしめ、更に四方に宣教して駸々乎として其全國の道を啓きぬ、佛陀が救世の大使命、是時既に其大半を完成せりと謂ふべし。佛陀心願の滿足亦思ひ見るべきなり。

然れども迦毘羅城内に殘されたる老父王と耶輸陀羅妃とは、是の歳月を如何に暮せしぞ。風の便りに佛陀の事を思ひて夜眠を成さざりしこと幾度ぞ。今や十二年の後、生死だに知られざりし其子の名が、忽然佛陀一の稱號によりて四方に喧傳せらるゝに逢うて如何に驚喜の胸を轟かせしか。同時に懐舊思慕の念は如何に繁く且切なりしや。父王已に頽齡、餘命殆ど風前の燈の如し、妃は羅睺羅と相擁して、朝々如何に其果敢なき遺物を歎きしぞ。迦毘羅城中の悲歎は、佛陀の成道教化の為に更に一層の痛切を加へたるなるべし。

是に於て淨飯王は、群臣の中にて騎馬に長ぜるもの九人を撰びて王舍城に赴かしめ、具に王の意を致して其故國に歸らむことを勸めしむ。九人の使者竹林精舍に達せる時、佛陀は恰も大衆を集めて説法を続けりき。彼等圖らず佛陀の圓滿無上の教を聞くや、陶然として心醉へるが如く、頓に使命を忘れて、偏に佛説の微妙を味ひ、其儘留住して歸らず。王九人の使者の久しく歸らざるを以て、更に疑悶を増し、重ねて佛陀の在城時の舊友たる優陀夷をして使せしむ。其或は又歸らざらむことを恐れ呉々も「歸來」の二字を餞す。優陀夷馬を馳せ、晝夜兼行して竹林精舍の道場に到り、佛陀に面して父王の書翰を致しぬ。佛陀披き見るに父子の恩愛切にして濃に、訴ふるが如く、恨むが如く、哀むが如く、憤るが如く、老年憂苦多くして殘燈の如きを歎ち、偏に佛陀の歸來を憧憬するの情、眞に斷腸の文字なり。佛陀靜に是を看終り、命に隨つて故國を訪ふべきを告ぐ。優陀夷踴躍して迴り、是を復命す。

淨飯王優陀夷の報を得て大に歡び、七寶の車駕を具へ、内宮侍奉の莊嚴を盡し一族群臣と出でて是を迎ふ。迦毘羅城の人亦、悉達多太子多年勤行の後、成道滿願し今や弟子雲の如く名聲五天に轟きて、其故國に歸ると聞き、狂喜して道を修め家を飾り路上香華を散じ、美飾を左右に列ねて以て其一行の到るを待つ。遠近の市邑亦傳へ聞き、佛陀の行裝如何に莊麗なるかを見むとて、見る者堵の如く集まりぬ。

唯見る、一介の沙門、身に纏めて質素なる道衣を着け一枚を右にし一鉢を左にし素手跣足して歩み來れるを。こは如何に此は是れ往年の悉達多太子今の佛陀なりき。滿城の市民は其意外なるに驚きぬ。殊に父王は一世の宗師と仰がるゝ其子の一乞丐の如きを見て、憤慨の情に絶えず、滿面朱を濺ぎて太子の前に出で將に言ふ所あらむとす。然れども佛陀の圓滿莊嚴なる顏容は日月の光の如く父王の眼を射りぬ。父王は威靈の感に打たれて言辭に出でず、覺えず車を下り、恭しく其手を執りて曰く、「嗚呼汝は悉達多なる乎、我れ汝を見ざること既に十二年、何の天幸ぞ今日あるを得たる。」餘は言はむと欲して言ひ得ず、潸然として涙を流し、凝睇是を久しうす。觀るもの皆袂を絞らざる無し。

嗚呼是れ何等の光景ぞや。燦爛たる瓔珞、美裝せる大官貴紳、花の葉樣、臙脂香芬の間に金冠佩劍の帝王、跣足托鉢の一布衣の手を執りて潸泣するの時、何等絶好の對比ぞや。想ふに乞丐の裝を爲せる佛陀の眼には是等一切の裝飾は塵芥瓦礫の如く見えしならむ。

斯くて佛陀は父王を相扶して坐しぬ。父王の胸中には一喜一憂相交錯し、千萬情雲の如く湧き出でぬ。嗚呼我子悉達多よ、再び老父の許に歸り來らむとの念を起さゞるか、然らば

我晩年の幸福如何ばかりぞや。然れども汝の[illegible]覺の身にしあれば、是王國を見ること或は一[illegible]芥の如くなることあらざる乎。」父王は斯く[illegible]ひ煩ひて佛陀の容貌を見れば、端[illegible]莊嚴[illegible]と智慧の光に輝きて名利的慾の影だに見えず、父王は流石に其清淨の希望を遂げ難てにして已みぬ。佛陀は父王の胸中を思ひ遣り、曰く、「我は誠に父王の心を勞し給ふを知る、[illegible]愛の恩情感佩に堪へたり。然れども願はくは我を以て念を無す勿れ、我心已に世榮を離るゝこと遠し、久しく歸らむに道無ければなり。願はくは父王我を思ふの愛を移して是國の萬民を[illegible]め。」茲に於て佛陀は父王の爲に懇に道を說きければ、父王感泣して是を聞き辭して曰く、「我れ今にして出離の道を得たり。先に我心を煩はしたるもの、今は其[illegible]るが如く消え去りぬ。[illegible]せば我永く是人生の苦悶を脫することを得ざりしならむ。」其日佛陀は獨り辭し別れて市外の林中に一夜を明しぬ。

翌日佛陀は錫を携へ、鉢を手にし、出でて食を市中に乞へり。迦毘羅城の市民は往年結髮[illegible]に旅ち、[illegible]に擁せられて市中を巡遊したる王子、今や乞丐の群に入り、戶每に立ちさまよへるを見て、驚き悲みぬ。父王出で迎へて宮中に伴ひければ、[illegible]佛陀の身を[illegible]り、[illegible]に充ちぬ。然れども[illegible]のみは見えざりき。佛陀は其何處に在りやを問ひしに、宮女の一人答へけるは、「[illegible]一室に閉ぢ籠り悲歎に暮れ給へり。太子の歸來を告げ參らせしに、若し[illegible]にして取るべきあらば、太子自ら來り見え給ふべしと言ひぬ。佛陀乃ち妃の室を訪ねぬ。

妃は佛陀の入り來るを一目見るより、耐へ耐へし積鬱の悲哀一時に迸發したらむが如く、床より轉び出で、聲を擧けて其足下に泣き伏しぬ。實に耶輸陀羅姫の衷情は察するに餘りありき。其良人を失ひてより幾年の間の姫の朝夕は、佛陀が苦行の苦にも[illegible]ふべかりき。佛陀が剃髮せるを聞きては、姫も其[illegible]を切り棄て、臙脂[illegible]粉[illegible]て用ひず。佛陀が[illegible]にして步むを聞きては、[illegible]一切の[illegible]手にだも觸れざりき。又佛陀が[illegible]を換へ食を道に乞ふを聞きては亦一切の美食を斥け、麁茶麁飯を以て自ら奉じき。姫が妙齡にして獨居するを憐みて、再[illegible]を勸むるものあれば、姫は儼然として[illegible]の妃なるを答へぬ。斯くて十有一年の朝々夕を泣き明し、泣き暮したる姫は、今や佛陀の名を成し、道を遂げて歸來せるに遇ふ。心[illegible]の如く、[illegible]限の[illegible]に[illegible]こそ道理なれ。佛[illegible]流石に佛[illegible]の[illegible]に[illegible]後其子[illegible]と共に佛道に歸依しぬ。

佛陀は迦毘羅城に留ること七日、父王親族に別を告げて舍衞城に赴けり。是れ須達長者の約を履めるなり。是より先き須達長者は家に歸り、地を綠樹淸流の好園林に相し、茲に寺院を建て、祇園(ゼータヷナ)精舍と名けて佛陀の巡錫を待ちぬ。佛陀は此精舍を根據として暫く中北印度の地を遊化しぬ。成道後十五年には再び迦毘羅城に歸る。此時淨飯王已に逝きて、摩訶那摩(マハーナーマ)と云へる人、其位を嗣ぎしが佛陀の歸錫を聞き、直に其門に歸依せりと云ふ。

## 第十四章　佛陀の入滅

佛陀晩年の事蹟は東西の[illegible]典史乘傳ふるなきを以て、[illegible]にするに由無し。私に想ふに、推しなべて遊化布教の間に平靜なる生活を送りたるならむか。今佛陀入滅前に於ける印度の大勢を述ぶれば、略次の如し。

佛陀成道してより第四十三年の頃、摩伽陀國

に提婆達多（デーヷダッタ）と云へる一教の勇士あり、其の勇を恃みて非望を抱き、太子阿闍世に說き、其父頻毘娑羅王を弑し、僧居を閉閉し、且佛陀を害して其弟子を横領せむとせり。頻毘娑羅王は前章にも說ける如く、佛教最大の外護者なりければ、其崩去は是教の宣傳の爲には一大障碍たりしこと言ふまでも無し。然れど阿闍世王は、民心の深く佛教に歸依して、提婆達多の新教到底行はれ得ざるべきを見て、幾もなく再び佛教に入り、佛教復び摩伽陀國に盛なり。阿闍世王は其父王の勢力に乘じて四方を攻略し、遂に中印度の盟主となりぬ。王は佛教に歸依しては頗る保護者の位地に立ち、佛滅後の三藏結集には少からざる力を盡しき。然れど此時より以降、中印度の平和は永く破れ、傳道の道亦隨つて困難となりしかば、弟子自ら四方に散じ、所在伍を爲して其教を弘むるに過ぎざりき。佛陀も亦時勢の非を憂りけむ、茲に其遊化の錫を止め、舍衞國祇園精舍と王舍城との間に往來して其弟子に說法せり。

春秋漸く高くなりて、佛陀入滅の時も漸く近づきぬ。今や八十年の老齡は佛陀の雙肩に掩ひかゝりて、五官の作用漸く其衰を覺えぬ。顧みれば始めて城を出でて山林に入り、三十道を成してより遊化度生に盡すこと茲に五十年、一日も安逸の生を送りしこと無し。五天茲に其教に歸き、救世の大使命方に其の完きを告げたるに庶幾し。佛陀の入滅亦恨なしと謂ふべし。

佛陀は終焉の期近きを察し、弟子を伴ゐて新遊跋提（ヒラニヤワテー）河の岸なる沙羅（シャーラ）雙樹の間に憩ひ、阿難陀をして北を枕にして臥床を設けしむ。阿難陀は佛陀が高弟の一人なり。是より先き目犍連は外道に殺され、舍利弗と三迦葉と亦已に沒したるなり。

佛陀は臥床に横はり、諸弟子を集めて終焉の期近づけるを告ぐ。諸弟子皆悲叫して曰く、「佛陀百歲の後、我等又誰をか師とすべき」と。佛陀是に告げて曰く、『我親愛なる諸弟子よ、泣き悲むを已めよ、我の是世に來れるは眞理を傳へて是世を救はむが爲なり。今や眞理の王國は建てられぬ。我は我が救世の大使命を終りたるなり、何れの時是世を去るも誰かそを悲むべき理あらむや。諸弟子よ、形ある一切の物は、必ず壞るゝの時あるべし、集まり成れる一切の物は遂に滅せざるを得ず、生あるものは遂に死せざるを得ず。唯世に法（眞理）のみ永久滅ること無かるべきなり。然れば迦毘羅國の王子悉達多は死すべし、佛陀は永く滅ぶこと無かるべし。其は佛陀は法（眞理）なればなり。汝諸弟子よ、我が法（教）をだに守らば、我れ永く汝の傍に在るべきなり。

諸弟子よ我の命は我法なり。病めるものは醫師を見ざるも、藥によりて癒されむ。我れ呉々も汝等に告げむ、我道を守るものは即ち我側に侍せるなり。我に相見るを以て足れりとする勿れ、若し我言にだに從はざらむには、我と終日相接するも又何の益かあらむ。

諸弟子よ、若し汝等の中我が死せるを見て、「主の教は終れり」と謂ふものあらば、そは我が徒に非ざるなり。我れ今肉體を離れて三界の苦境を脱れむとす。我は我が法の爲に一切輪廻の作業を滅盡したり。然れど諸弟子よ、佛陀は永存すべし、我が五十年の說法と我が教會の戒律とは、即ち汝等の師たるべし。

我れ重ねて汝等に告けむ、集まり成れるものは遂に壞るゝの時あるべし、唯眞理のみ永遠に滅ること無し、汝等が不退轉の向上心を以て精進希求して、さらに[illegible]眞理のみ。』

嗚呼是の如きは佛陀が最後の說法なりき。人天三界の大救主は八十歲の老軀を殘して、沙羅雙樹の下に大般涅槃（パリニルヷーナ）に入りぬ。諸弟子

は齊しく泣き叫びて曰く、『嗚呼佛陀の來る何ぞ遲かりし、佛陀の去る何ぞ速かりし、世界の光は遂に滅したる乎』。是時天轟き、地震ひ跋提河上の秋風は六合の悲哀を吹き度して、蕭々として沙羅雙樹の枝を鳴しぬ。

翌日末羅族の人々佛弟子と共に佛陀の遺骸を焼きぬ。荼毘の烟日月の光を掩ひ、跋提河一帶の地は天花の爲に埋れぬ。

## 第十五章　附言

是の如きは世に知られたる大聖釋迦の傳記なり。世界を以て一家とし、衆生を以て一子とし、一切現世の差別を超絶して、三世十方平等普遍の眞理を説き、法化人天に被り、遺徳四生に及ぶ。何の辭を以て是に加ふべき。歳時移り、方處換り、其教又昨の如からずと雖も、永く世界歴史の一大要素たるを失はず。只流傳三千年、佛像の徴すべきもの甚だ少きを恨とすべきのみ。後世佛徒其功業を讃美して曰く。

佛是善世師　好首所ニ虚謗一
心等無ニ喜樂一　愚利衰毀譽
若稱ニ譏苦樂一　八法不レ能レ染
猶如ニ水蓮花一　天上人間樂
視皆爲ニ不實一　觀レ世知ニ愚戲一
有形皆空無　三惡起ニ衆生一
開ニ其難關門一　空ニ三惡趣獄一
尊ニ天人無爲一　經趣度ニ三世一
導ニ阿須倫魔一　勸ニ導衆善本一
雨ニ三寶於世一　往古轉輪王
自在於ニ四方一　於已不ニ自從一
免レ死量ニ無爲一　佛修ニ種々業一
治ニ理法空城一　濟ニ脫塵勞賊一
將レ至ニ無爲城一

（明治卅一年一月）

## 罪惡の首府

昔者ダンテ、フヰレンツエ府を呪うて曰く、『フヰレンツエは曾て正義の地として知られたりき、然れども今や不義の露はれむ事を恐れて、婦人の懺悔を拒むる僧侶あり。曾て市民の血液は、皂隷卑賤に至るまで清かりき。而かも今や異民族の混合と共に、身心共に、墮落の深淵に陷れり。乞食の子孫は今や富豪となれり、彼等は弱き者には蛇の如く獰惡に、財嚢の前には蜘蛛の如く平伏す。吁フヰレンツエは罪惡の首府なる哉』と。

吾人は我東京の等しく罪惡の首府なるを想ふ。東京は日本國中の罪惡の問屋也。猶ほ歐洲の新流行が巴里に初まるが如く、東京は日本の罪惡の源泉なり。見よ東京人の入り込める處は、如何なる地方にも罪惡を扶植せざるなきに非ずや。希くは悲歌慷慨のダンテをして今日に生まれしめ、其の燃ゆるが如き筆をして是の罪惡の首府を描かしめ、以て東京人の心膽を寒からしめむ哉。

（明治三十一年九月）

# 平相國

## 自序

この書は友人東京堂主人の切なる依嘱により專ら少年諸君のためにものしゝなれば、素より大方史家に示して批判を仰ぐべき者にあらず。且つ發刊の期既に逼り、稿を脱するや再讀の遑もなくして剞劂氏に附しぬ。省みて二三の遺漏あるを認めたりと雖も、そは再刊の日を待ちて更に添削するところあるべし。病中の餘業興加はらずして遂に會心の文字を作さざるは著者の深く愧づる所也。

明治三十四年初冬　湘南にありて　著者記

## 一　平家の[illegible]の由來

一門の榮耀當時に[illegible]にして、[illegible]はすく從[illegible]の[illegible]に[illegible]、まことに[illegible]の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色、彼れに諸行無常の響あり、此れに盛者必衰の理あり。奢れるもの久しからず、猛き心も遂には滅び行く世の習ひなるに、平相國太政入道清盛が一生こそ、なか／＼に心も詞も及ばれね。

そも／＼事の次第を按ずるに平家の興れる、一日のことに非ず、世運の推移、由つて來るところ甚だ遠し。清盛武辨の家に生れ、殿上の交をだに嫌はれし身を以て、忽ち擢錄の家を凌ぎ、位人臣を極め、權勢上下に並びなきを得たる、一身の材器に依るもの素より多かるべきも、そも／＼亦時勢也。

そを如何にと云ふに、昌泰、延喜のそのかみ、寛平帝の宿志を受けて藤原氏抑制の地位にありし菅公の流竄せられし頃よりして、天下の大權全く藤原氏の手に落ち、自[illegible]是れより永く陵替し、藤氏の一門廊廟に充ち滿ち、彼等[illegible]に何の經綸の策あるに非ず、花[illegible]、たゞ宴遊の樂みに耽り、[illegible]、徒に[illegible]の奢を[illegible]ぶ。あるは風流これ富みて、[illegible]を痛み、蟲の音に秋を悲しみ、あるは優柔これ尙びて、檐近き山の端の月をめで、前栽に匂ふ撫子花の麗しきを偲ぶ。衣冠束帶の威儀なきに非ざれども、文[illegible]武[illegible]の弊、やうやく極まりぬ。たゞ夢の世に夢の如き榮華を追ひ、櫻かざして暮らしつる百敷の大宮人こそいとあさましけれ。[illegible]山、一條以降に及びて是の腐敗は更に甚だしかりき。かゝれば綱紀いつしか地に墜ちて四方の政治行はず。地方には豪族跋扈して良民塗炭の苦を受け、國司亦私門を肥やして朝命を奉ぜず。政府力無くして又是を如何ともする能はざるに及びては、藤氏の權勢漸く[illegible]名に近づきたるを見る。源平武士の時代は是の間に於て默々の中に推移しつゝありき。

源[illegible]の武士、[illegible]その由つて來るところ頗る遠し。史を按ずるに承平、天慶以前にありては特に弓馬の家と稱するもの無かりき。將門、純友の亂あるや、朝廷勇悍の士を募りて是を討せしめ、許すに官爵を以てせり。弓馬の家としての平家、源氏の祖先とも見るべき平貞盛、[illegible]の名は是に於て[illegible]史上に現はれ、貞盛の子[illegible]名[illegible]にあらず、其の子孫伊勢に住して所謂伊勢平氏と稱す。清盛は實に[illegible]の孫にして、[illegible]の[illegible]、その孫維[illegible]

茂は出羽に清原、越後に在ては、城、仁科の族あり。勢力漸く東方に布けるを見るべし。經基の子に多田滿仲あり、滿仲の子に頼光、頼信あり、武名共に當代を壓せり。殊に頼信、平忠常を上總に討してより、東國は永く源氏勢力の根據となれり。頼信の長子頼義は前九年の役に驍名を轟かし、其の孫義家は後三年の戰に武威を輝かしぬ。頼朝は實に義家の曾孫也。

源平二氏は是の如くにして何時しか弓馬の家とはなりぬ。天下事あれば討伐の任に當るもの常に是の兩家に非ざるはなし　藤原氏殿上の政柄を握れども、其の勢力は階下一歩の外に出でず、遂に武家の跋扈を來したるもの、免るべからざる勢なりし也。源義家の如きは、明に藤原氏の權勢を蔑視して、大に武人の爲に地歩を占めたるものなりき。後三年の役、方に終り、賊魁武衡、家衡誅に伏するや、義家上表して曰く、二兇の罪貞任、宗任に過ぎたり、今官兵の調發を煩はさずして幸に討平することを得たり、速に追討の官符を下されなば、願はくは其の首を闕下に獻ぜむと。然るに朝議是の戰を目するに私闘を以てし、遂に官符を下さず、義家以下の將士に對しても論功行賞の事あらざりき。義家憤然として曰く、我家の事何ぞ朝議を煩はさむと。乃ち賊の首級を道路に捨てて、京師に還り、私帑を開いて盛に將士を勞ひき。關東の武士相慶して曰く、今よりは寧ろ朝廷に背くとも永く源氏に背くこと無からむと。武家の勢力是に至りて居然として動かざるものあるを見るべし。

藤原氏衣冠束帶を以て天下の權柄を秉れること二百年、まゝ東國北邊の禍無きに非ざれども天下幸に大事なかりしかば、累代の積勢尚ほ多少の力あり、攝籙の名目依然として重きを朝廷に稱しぬ。されど勢は終に極まりぬ。天下の事、最早や虚名の爲し難きものあり。是に於て武家の實力は時代の要求に應じて喚び起されぬ。事是に到れば世は官階の上下にあらずして弓矢の強弱なり。昔眉湟衙の大宮人は、禁色の素袍美はしからざるに非ざれども、軍陣の前には用なき人となりぬ。かくて世は武人のものとなりて源平兩家の榮ゆべき時は來りぬ。而してこの氣運を速めたるものは即ち保元平治の亂に外ならざりき。

保元平治の亂の精しきは悉く說かじ。唯保元の際兩帝位を爭ふに當りて杖柱とも頼み給ひたるは源平の武士なりき。彼等の向背は直に天下の大事を左右するの力ありき。清盛、義朝こゝに兩家の勢力を代表して聲望當代を壓しぬ。世は既に武人の手に落ちては、こゝにおのづから武人の間に權力の爭ひ起らざるを得ず、平治の亂は是の如くにして起りき。源氏の勢力は其の頭領たる義朝と共に沒落して一世の武力は全く平家の手に落ちぬ。かくて平清盛が前代未聞の榮華を輝かすべき時代は來りぬ。是を平家興隆の由來とす。

## 二　清盛の前半生

清盛死せる時年六十四、その名を成せるは保元、平治以後にあり。而して保元の時年既に三十八、平治の時四十一、されば清盛の前半生は概ね晦瞑の中に過ごされ、特に名の稱すべき無く、事の記すべき無きが如し。彼れ素と一代の雄、尚ほその時勢に待つある是の如きものありき。

清盛は刑部卿忠盛の子、貞盛六世の孫に當る。母は白河帝の宮女なりしが、後忠盛に給ひて清盛を生めり。長じて穎悟、容貌また優美なり。崇徳天皇の大治四年、忠盛南海の賊を捕へたる年、從五位下に敍せられ、左兵衛佐に任ぜらる。保延年中、中務大輔に遷り、肥後守を

兼ね、從四位下に進む。近衞天皇の久安二年正四位下に進み、安藝守に任ぜらる。時年二十八。是の世の事蹟、史に所傳なければ考ふるに由無し。唯その安藝守たりし時、世に名高き鱸の話ありき。そは一とせ伊勢の安濃の津より船にて熊野に詣でける時、大なる鱸、清盛が船中に躍り入りき。先達清盛に告げて曰く、ゆゝしき瑞相かな。昔周の武王の船にこそ白魚は躍り入りたるなれ、こは必定權現の利生なるべしと。清盛大に喜び、さしも十戒を保ちて精進潔齋の旅なりけれども、手づから調理して自らも食ひ、家從郎黨にもわかち與へたり。是れまさしく九代の先蹤を越えて丞相の位に上るべき吉兆ぞと傳へられき。

かゝる間に清盛の雄飛すべき時機は來りぬ、保元の亂是也。そもそも事の起りを按ずるに、崇德上皇は鳥羽上皇の爲に強ひて位を下らせられ給ひしより居常甚だ樂まず。近衞帝崩じて後白河帝位に即くや、重祚の念頻りなり。時しも保元元年の夏鳥羽法皇の崩御あり。崇德上皇は悲しく臨み給ひしが、遺詔として納れられず。上皇大に怒り給ひ、左大臣藤原賴長にはかられけるは、朕は德も[illegible]も先帝の長子として嘗ては萬乘の位を忝くし、今はた上皇の尊きに居る。皇統の繫るところ、朕が重仁に非ずして誰ぞや。先帝是を舍きて文もなく武も無き四の宮(後白河)を立て給ひき。今や先帝は退し給ひぬ、朕大事を擧げむに何の憚る所かあるべきと。賴長素と其の兄忠通と權勢を爭うて志を得ざるもの、上皇の言を聞いて潛に思へらく、事成らば己れ攝關たるを失はじと。即ち上皇に勸めて直に兵を擧げしめぬ。斯くて上皇の召に應じて白河殿に集まれる武士は源爲義を筆頭として、長子義朝の外源氏の一族並に清盛の伯父平忠正等なりき。爲義は志を官邊に得ず、潛に朝廷の無情を恨み、忠正また清盛と善からず、平生門地の揚らざるを快しとせざるもの、今や何れも上皇の大事に與して功を一戰の下に收めむと願ひたるなりき。

清盛が上皇の與黨と離れ、義朝と共に高松殿に赴きたるは、實に彼れが幸なりき。かくて鎭西八郎が夜討の建策、空しく長袖公卿の沮むところとなりて、攻守の勢早く成敗の算を定め、義朝驍勇能く戰ひて白河殿は一夜の内に灰燼となり、上皇一味の徒黨俄に亡落の徒となりぬ。而して是の亂に於て少しく勞して多く得たるものは清盛なりき。保元の亂は恰も平家興隆の爲に起りたるの觀ありしぞ不思議なる。

是の匆劇の際に於ける清盛の擧措を考ふるに、彼れは啻に武人として勝れしのみならず天晴れ一個の策士にてありき。彼れは保元の亂に乘じて慥に平家の權勢を伸ばすべき好機會を捉へぬ。一義朝を除いて源氏の一門を敵とせるは彼れの最も喜びたるところなりき。げに平家の爲に計るものは勢ひ源氏の力を殺がざるべからず。彼れは戰勝の後に於て先づ爲義以下の一族を亡ぼさざるべからず。是に於て彼れは義朝をして其の父を斬らしめむが爲に先づ自ら其の伯父を殺せり。義朝奏して其の父の死を宥めむことを請ふや、帝怒りて曰く、清盛既に其の伯父を殺したるに非ずやと。清盛の上意を逆へたる略々察すべき也。愚昧なる義朝は平家の遠謀とも知らで、やがては其の身に及ぶべき禍害をも想はずして遂に其の父と一族とを擧げて悉く之を殺しぬ。想ふに此の時清盛は手を額にして其の策略の思ひのまゝに中りしを慶せしならむ。唯義朝の末子に乙若と云へるあり、年僅に十三、義朝人を船岡に遣はして之を斬る。乙若從容として歎じて曰へらく、哀れはかなき事し給ふ頭殿義朝かな。定めて清盛が讒言

にてぞあるらむ。義朝多くの弟を失ひ、只一人になして後、事の序に亡さむと企つるをば曉り給はぬにや、十三年を過ごし給ひし。幼かりしかども乙若が[illegible]し思ひ合せ給ふらむと。嗚呼乙若は若者ぞ、能く義朝が心事を洞察して能く是の言を爲さむとは。

保元の戰、是の如くにして終りぬ。白河殿の夜討にて戰功甚しく顯はれたるは義朝なりき。剩へ朝命已むなくして其の父と其の幼弟と多くの一族とを殺したりき。されど功を論ずるに及びては僅に左馬頭を拜せしのみ。之に對して平家の一族は、是度の戰にさして爲出でたることも無きに、盡く重賞を被り、清盛は安藝守より播磨守に遷り、間もなく太宰大貳に進み、その他子弟郎黨何れも恩賞の渥きに誇らざるもの無し。義朝心平かならず、潛に平家の寵遇を嫉み、皇恩の薄きを恨みぬ。義朝にしてこの怨嗟ある、誠に平家の幸なり。機先を制するに敏なる清盛は、ます／＼彼れが怨嗟を深からしめ、終には自滅の道を取らしめざるべからず。是に於て時の寵臣藤原信西と結托し、其の女を納れて信西が男に妻し、內外相應じて源氏を沮害せり。義朝亦信西によりて勢を成さむと欲し、先に其の一子を得て女婿となさむと求めしが許されず、[illegible]甚だ[illegible]然たり。而して今や間もなく平家と婚結ぶを見て義朝たるもの如何ぞ憤然たらざるを得むや。義朝が不平は清盛の期待せし如くに深うなりぬ。而して平家は漸く兩立し難き勢を示し來りぬ。而してかゝる敵を逆境に陷れて一擧の下に仆さむは、言ふまでも無く清盛が宿志なりき。

是の宿志の果さるべき機會は遂に來りぬ。平治の亂こそ實に是の機會なりけれ。其の顚末略々左の如し。

前少納言藤原通憲、今は入道して信西と呼ばるゝは才學當代に雙なく、鳥羽帝以後累朝に歷事し、殊に其の妻は後白河帝の乳母たりし故を以て帝寵衆に勝れ天下の事與り聞かざる事無し。然るに茲に上皇（後白河）の嬖人に藤原信賴と云へるあり。信西と寵を爭ひて相容れず。信賴大將を望みて上皇竊に是を聽さむとす。信西諫めて曰く、除目は國家の大典なり、其の人選を誤り給はゞ上は天心に背き下は人情に戻れむ、信賴[illegible]にして一進みて大將を望むこと甚だ分に過ぎたり、是をしも聽し給はゞ亂亡の端恐らくは是より啓かれむと。唐の安祿山の繪圖三卷を作して竊に是を諷諫す。外任の事遂に已みぬ。信賴傳へ聞きて深く信西を恨み、疾と稱して參せず、潛に異圖を結びて日夜[illegible]を練りぬ。

信賴が朋黨の重なるものは言ふまでもなく義朝なりき。義朝既に恩を朝廷に得ず、常に平家の昌榮を目撃して嫉怖の念に堪へず。加ふるに其の婚姻の事よりして信賴と同じく、深く信西に怨あり。彼れ[illegible]を負へども無謀にして大體に通ぜず。信賴の甘言以て誘ふに會ひて心潛に念へらく、事若し成らば一擧して平家の權勢を仆し、且は信西に甘心するを得むと。乃ち快く是を諾し共に事を擧ぐ。揚言して曰はく、臣信賴殊恩を承くること久し、然るに今や道路傳ふる所を聞くに信西の讒によりて當に誅せらるべしと、臣自ら安ぜず、事實に已むを得ざるに出づと。兵を以て院宮を燒き、上皇及び天皇を幽し、信賴宮中に入りて自ら大臣大將となり、義朝を播磨守に任じ、一味の朋黨各々官位を進めらる。信西難を察して南都に走りしが、遂に信賴の兵に殺されぬ。斯くて世は一時信賴の天下となりぬ。

是の時清盛以下の平家の一族は何事を爲しつゝありしか。信賴の事を擧けしは平治元年十二月九日なりき。是の日に先だつ五日、清盛そ

の一族を率ゐて紀州の熊野に詣でしかば、六波羅なる平家の第宅には然るべき武士の影さへ見えざりき。信頼何の障害をも受けずして一時其の志を遂け得たるは、是の虚に乘じたるが爲なりき。同じく十日六波羅の急使清盛の跡を追うて事の急を告げぬ。

清盛變を聞いて心潛に惑ふ。嫡子重盛毅然として曰く、身は弓馬の家に育ちて夙に武道の頭領たり。今や眼のあたり天子逆臣に逼らるるを聞いて爭でか國難に赴かざるを得むと。清盛是に從ひ、熊野の別當湛增等をして兵を徵さしむ。集まるもの僅に百騎ばかり。たまたま義朝の長子惡源太義平、三千餘騎にて安部野に待つと聞ゆ、衆皆色を失ふ。清盛衆寡敵せざらむを恐れ、先づ西國に赴き兵を勒して再擧を謀らむと欲す。重盛諫止して曰く、事若し延引せば、賊必ず院宣綸旨を矯めて我れを討たむ。一旦朝敵となりては名義彼れにあり、悔ゆとも及ばじ。且夫れ寡を以て衆を討つは兵家の常なり、何ぞ必ずしも衆寡を問はむ、如かず快く一戰して成敗を決せむにはと。清盛意決し、毅然として京師に向ふ、途に伊勢の同族三百餘騎の出で會するに逢ひ、兵氣大に振ふ。

清盛既に京師に歸り、大に同族の兵を會して戰を議す。唯天皇上皇信頼に擁せられて宮中にあり。乃ち謀を以て先づ天皇を出だして六波羅の第に迎へ、上皇亦次で仁和寺に遁る。天皇、上皇既に在らず、禁裏集まるところは信頼、義朝の徒黨のみ。清盛是に於て宣言して曰く、聖天子清盛を賴みて六波羅に幸し給ふ、朝敵たらざらむと欲するものは急ぎ馳せ參ぜよと。公卿百官より衛府諸司の末に至るまで先を爭うて到る、諸國の兵亦來り會す。信頼、義朝等兩帝の逸せるを悔恨すれども及ばず。順逆の道全く別れ、勝敗の數戰はずして定まりぬ。是の月二十七日信頼は誅に伏し、義朝は東國に遁れ、幾もなく其の家臣の爲に殺さる。

平治の亂は是の如くにして始まり、是の如くにして終りぬ。其の結果として見るべきもの二あり。朝廷の大事、武家の後援なくして爲し能はざる事明となれるは其の一なり。源氏の勢力全く地に墜ちて天下の武力が平家の一門に歸せるは其の二なり。是の如くにして平家全盛時代の端緒やうやく啓かれぬ。清盛は功を以て先づ正三位に敍せられ、嫡子左衞門佐重盛は伊豫守に、太夫判官基盛は大和守に、宗盛は遠江守に、清盛の弟三河守賴盛は尾張守に任ぜらる。その他一族平定の功を以て重賞を被らざるは無し。源氏の子弟にして幸ひに死を免れたるものは義朝の三男賴朝等其の妾常盤の生める三幼兒のみ。京畿の間また源氏を言ふものなし。

## 三　一門の榮華

保元よりこのかた藤原氏の權力また言ふに足らず、朝家の事やうやく武人の手に落ちて源平の兩家並に門地を張りぬ。平治の亂是の軋轢の爲に起りて源氏の敗となりしかば、平家の勢今や世に比なきものとなりぬ。清盛にして何をか欲するも誰か是を沮み得べき。身は先に三代の禍亂を鎭めて帝座爲に安かりき。功勲今や一世を掩ひて後ろに闔國の武力を控へたり、天下何物か意の如くならざらむ。剛情我慢の清盛が思ひのまゝに振舞ふべき時は來りぬ。

先づ驚くべきは、平治より仁安に至るまで僅に八年間に於ける清盛が官位の昇進にぞありける。平治の翌年には參議に任ぜられ、次いで應保、長寛の間には右衞門督に撿非違使別當を兼ね、間もなく權中納言となり、從二位に敍せられ、永萬には權大納言に任ぜられ、翌仁安元年には正二位内大臣に進み、翌二年に

は一躍して從一位太政大臣に任ぜられ、剩へ隨身兵仗を賜はり、輦車のまゝにて宮中に出入するを許さる、偏に執政の臣の如し。凡そ古より左右大臣を經ずして直に太政大臣に上れるもの、先に藤原道長一人ありしのみ。げに驚くべき異數の昇進なりき。仁安三年の冬病に罹り、存命の爲にとて出家入道し、法名を淨海、又は靜海と呼べり。世是を太政入道と稱す。

太政入道が榮華は更に驚くべきものなりき。さながら草木の風に靡くが如く、恩怨指顧の間に報いられ、禍福進止の中に定まれり。されば苟も名利を當世に希ふものは先を爭うて入道が意を迎へ、天下の勢いつしか六波羅の朱門に集まりぬ。攝籙の家は名のみにして、四海の成敗は皆こゝに決し、兩宮の宣旨重からざるに非ざれども、世は偏に入道が顰笑を伺へり。されば六波羅殿の御一家の公達とし云へば、名門華族も肩を並べ面を向ふもの無し。名も無き雜人に至るまで平家の御内とだに云へば人皆路を讓り禮を厚うせり。はては烏帽子のためやうより衣紋の書き振に至るまで萬づ六波羅様とて、天下の人爭うて學ぶ。由々しかりなむとも言ふばかり無し。

獨り入道一身の榮華のみならず、平治の時に左衛門佐に過ぎざりし嫡子重盛は内大臣の左大將となり、次男宗盛は中納言の右大將、三男知盛は三位中將、嫡孫維盛は四位少將を始として一門の公卿すべて十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衛府諸司六十人にも餘れり。私封全國に通じて三十餘州、田園一家の進止に依り、朝廷の除目亦入道が左右に任ず。往昔藤原氏世盛りの頃だにも斯かる例は無かりしを、前代未聞とぞ人皆評し合へりける。げに十年前までは殿上の交をだに嫌はれし人、今は恣に禁色雜袍を聽され、かつて黑金の鎧に身を固めし人、今は綾羅錦繍を纏ひて宮廷の間に出入す、變れば變る浮き世かな。入道が妻の兄に平大納言時忠と云へるあり、揚言して曰く、今の世に、平家の一族にあらざらむものは悉く皆人非人たるべしと。これ必ずしも大言放語に非ざりき。朝野を問はず、都鄙と云はず、平家の一門を外にして、世に又人無くぞ見えにける。

平家の權勢の斯く盛大なるに慢じてや、其の頃の入道に奇怪の振舞多かりき。例へば年の頃十四五より十六七ばかりなる少童三百人を集め、其の頭を禿にして唯頂に少許の髮を殘し、或は長絹の直垂に褐色の布袴を着せ、或は紺村濃の直垂に紅の袴を着せ、梅が枝の長さ三尺ばかりなるを手もと白く拵へて右に持たせ、左の手には赤符と鈴とを附けたる一羽の鳥を据ゑさせ、かゝる異形の裝束にて日夜京洛の往衢を徘徊せしめたり。入道是等の童に申聞けけるは、若し淨海に意趣を含みて惡樣に言ふものあらば聞出して申し出でよと。かゝれば入道殿が禿と云へば洛中の門戸其の足音に屛息し、道に遇ふものはさながら御幸にも會したらむが如く、車は脇を通り人は步を讓り、手を折り腰を僂めてぞ過ぎ行きける。是等の禿童の申し出づる事は事の實否をも糺さずして入道は許容しければ、萬人是に追從して毫も平家の事を語らず、又禿童に惡まれたる者の入道の爲に寃枉の罪に陷るもの少からざりき。

入道が奇怪は是に止まらず。賤しき遊女共を召抱へて折花攀柳の樂を恣にし、更に世の譏、人の嘲を憚らざりき。當時京中に聞えたる白拍子の上手に妓王なるものあり、先づ入道が撰に入りて寵愛斜ならざりしが、茲に佛と呼べる白拍子加賀國より來り、われ天下に譽あれども、當時目出たく榮えさせ給ふ太政入道殿へ召されてこそ遊びものの本懷なれ

とて西八條殿に參じて謁を求めぬ。入道妓王の勸めにて是れを招き入れ、いかに佛、今日の推參は妓王が在らむずる所には叶ふまじけれども、妓王の勸めにて斯くは見參に及びつるぞ、先づ今樣一つ歌ふべしとのたまふ。佛、承りて「君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松」てふ一曲を押返し〳〵三たびまで心も及ばず歌ひすましける。佛年始めて十六、世にも稀なる美女にして、嬌名既に京洛を壓せるもの、一座恍然として醉へるが如し。入道思ひの外に興に入り鼓打たせて更に一番の舞を責めぬ。げに春花の姿、秋月の装ひ、立てば芍藥の花に擬ひ、歩めば楊柳の條に似たり。多情の入道恍惚として吾にもあらで眺め入りしが、何時しか佛に心移しける。佛驚きて、こは如何に、妓王御前の情にて見參を得たる上は他に望むべきこと候はず、疾く〳〵暇を給はるべしと申しければ、良し〳〵妓王あればこそ和御前の辭退もあるらめ、其の儀ならば妓王に暇を遣はすべしと、佛の泣き詫ぶるを耳にも入れで妓王を放ち遣りしこそ無かりけれ。あな心無の入道殿や、三年の情、一日の思ひに代へられて、今は道芝の露に棄てられけることこそ悲しけれ。なからむ跡の記念にもとてや、妓王泣く〳〵障子に一首の歌をぞ書きつけける。

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草
いづれか秋に遇はではつべき

その後妓王は世を果なみて、二十一にて尼になり、其の母と、妹と共に嵯峨の奥なる山里に形ばかりなる柴の庵を結び、唱名念佛に後世を願ひ暮しけり。今は妓王に代りて入道の覺え目出たき佛御前も流石に物の哀れをや覺えけむ、露しげく月あかき秋の一夜、西八條の館を拔け出でて妓王が庵を訪れ、はかなき浮世の今昔を語りあひて、共に髪をぞ落しけるとなむ。凡そ入道が我執の一心はかゝるはてまでも世の哀れをぞ留めける。

## 四 鹿が谷の會合

私門の榮耀につれて入道が放恣はいよ〳〵募りまさりぬ。一代の榮華、やがては夢のたゞちに消えて、後昆に及ぶべしとは誰か知るべき。人をも禍をも己が心のまゝにして、世に事なくぞ振舞はれけることこそゆゝしけれ。天子朝に在せども無きに等しく、兩代の院政は全く荒み[illegible]んぬ。志あるものの中には、暫く世の成行を見むとて、官位を捨てゝ野に隱るゝものもありき。

永萬の夏、二條帝の崩れさせ給ひし時、大葬の事よりして興福、延暦二寺の間に爭ひ起りぬ。山門（延暦寺）の大衆、山を下りて興福寺の末寺清水寺に押し寄せしが、忽ち流言あり、曰はく、大衆の山を下るは一院（後白河法皇）の仰せによりて平家討伐せられむが爲なりと。京中大に騒ぎ、平家の武士皆六波羅に集まる。一院も亦大に愕かせ給ひ、平家の疑を釋かむが爲に、急ぎ六波羅に幸せらる。清盛病と稱して謁せず、深く銜むところあるが如し。かくて事件分明となりて一院還御ありて後、清盛重盛を召して曰へらく、かねて一院の意趣あればこそかゝる風説も聞ゆるなれ、吾曹今より深く慮る所無かるべからずと。重盛涙を流して申さく、あな畏れ多き御言條かな。良しや何事の候とも、この事ゆめ〳〵口外し給ふべからず、徒に世の亂れを醸さむず。たゞ〳〵深慮に背くことなく偏に臣道の忠誠を勵み給はゞ、人の心も和らぎ、起るべき禍も鎭まらむと。

然れども清盛の心は何に解けざりき。

法皇既に六波羅より還り、近臣に向ひて、平家討などと抑も不思議の事の傳はれるものかな、朕に於て露思ひよらぬものをと仰せける。院の寵臣に西光法師なるものあり、放言して

曰く、天に口無し、人を以て言はするのみ。當今平家の過分言語に斷えたるを御覽ぜずやと。一座色を失ひ、事の六波羅に漏れむことを恐れき。然れども西光が言は必ずしも荒誕に非ざりき。清盛の放縱漸く上下の望を失ひ、衰亡の機はやく冥々の中に動き初めしを見るべきか。法皇はた必ずしも平家追討の御意なきにも非ざりき。清盛の深く意趣を挾むもの、亦故無きに非ざりし也。かくて平家と法皇との不和、是れより漸く加はりぬ。而して鹿が谷の會合は是の不和の第一の破裂なりき。

事の起りを尋ぬるに、治承の初め、內大臣藤原師長左大將を辭せしかば、權大納言藤原實定、大納言藤原成親、共に代つて大將たらむことを望みぬ。然るに時の右大將重盛左に轉じ、重盛の弟、時の權中納言宗盛一躍して右大將となりぬ。大納言を經ずして大將となる、實に不次の昇進なりき。實定は宗盛の下に附くを耻ぢ、官を辭して隱居し、成親は深く憤りを含みて機の乘ずべきを窺ひぬ。成親素と院の嬖臣たり。平家勢を得てしよりこのかた院政頓に荒廢し、北面不平の徒多し。成親乃ち潛に是等の徒と相結び、平家覆滅の陰謀を企てぬ。洛東鹿が谷は僧俊寛僧都が山莊の在る所、後には三井寺に續きて自然の城郭を成せり。成親等、屢々茲に會して謀議を凝しぬ。會するものは撿非違使平康頼、[illegible]、[illegible]景、法勝寺の執行俊寛、武士には多田藏人行綱、其他北面の武士等、何れも院の嬖幸を被れるもの。法皇亦前靜憲法印を隨へて潛に是れに臨み給へり。たまたま山門の騷動より續いて內裏炎上の事あり、成親等暫く氣勢を收めて時の到るを待ちぬ。然るに多田藏人行綱は早くも事の成り難きを察し、夜潛に入道が西八條の邸に參りて、行綱こそは當家の一大事を聞出したれ、直に入道殿の見參に入りて仔細を申さむとぞ言ひ入れける。入道出でて其の故を問ふ。行綱曰く、此程院中の人々の兵具を整へ、軍兵を催すは何事とばし思ひ給ふ。入道、あれは法皇の山法師攻めらるべき結構とこそ聞けと、事もなげに答ふ。行綱低聲首を振りて曰く、否々、一向當家の上にかゝれり。入道問ふ、其の事、院も知ろし召されしか。行綱答へて曰く、仔細にや及ぶ、院宣既に新大納言成親の手にありと。かくて康頼、西光、俊寛等が事、具に陳じぬ。入道聞き終りて大に怒り、直に筑後守貞能を召して聲を勵まして曰く、當家を傾けむとする謀反の輩こそ京中に充ち充ちたんなれ、急ぎ一門の武士を招集せよ、清盛謀る旨ありと。

一令既に[illegible]八條の邸を出づ。時維れ初夏、陰雲寂々たる洛中の上下は俄に軍馬の響をなし來りぬ。右大將宗盛、三位中將知盛、頭中將重衡、左馬頭行盛以下、一門の甲冑弓箭を帶し、陣頭篝火を焚かして西八條に集まるもの凡そ七千騎、黎明[illegible]ずる頃、[illegible]として洛西の空を掩ひぬ。明くれば六月一日、入道人をして院の御所に到り、高言せしめて曰く、新大納言成親卿以下、陛下近習の嬖臣輩つて平家を亡ぼさむとす、清盛身苟も武將なり、爭でか坐して逮捕の恥を受けむ、一々搦め取りて屹度糺問に及ぶべし、かゝる事をば陛下爭でか知ろし召さざるべき。清盛素より思ふ旨ありと。法皇謀の洩れたるを見、[illegible]懼して兎角の御答もあらざりき。平家の兵、四方に走りて悉く成親以下の與黨を捕ふ。

入道先づ西光を內庭に引き入れ、大床に立ちて暫し礑と睨まへしが、あな惡くや、當家傾けうずる謀反の如よなとて、緣の際に引き据ゑさせ、土足のまゝにて其の面を散々に踏み碎き、己等が樣なる下﨟の徒を君の召し使はせ給ひて、過分の官職を當て行はるればこそ、かゝる要なき業をも仕出かすなれ。謀反の始終あり

のまゝに申せよとの給ひける。西光素より勝れたる大剛の者なりければ、顔色自若として些もわろびれず、清盛を流し目に見やりて冷笑して曰へらく、身は院の別當なれば新大納言が謀反の事もとより與り知らずとは申すまじ。謀反には如何にも與したり。但し下臈の徒、過分の官職とは耳障りの事を申さるゝものかな。抑々御邊は故刑部卿忠盛の嫡子なりしが、十四五までは出仕もせず、京童は傍の高平太とこそ云ひ囃せしか。然るを保延の頃言ふにも足らぬ海賊を搦め取りし勸賞に四位の兵衛佐を給はりしにだに、時の人皆過分と申さざるは無かりき。然るを今は何の世ぞ、殿上の交をだに嫌はれし人の子孫として太政大臣まで經上りたる、過分にあらずして何ぞや。西光が如き侍の檢非違使に至ること先例なきに非ず、何を以て下臈の徒と云ひ、何を以て過分の官職とは申さるゝぞと、憚るところ無く言ひ放ちぬ。入道烈火の如く怒りに暫しは物をも言はず睨まへたりしが、其[illegible]左右なく斬るな、八つ裂にせよと仰せける。松浦太郎乃ち旨を受けて其の手足を斷ち、其の口を裂きて遂に死に至らしめぬ、慘酷言ふばかりなし。西光の子弟悉く殺され、康頼、俊寛及び成親の子成經は鬼界が島に流さる。成親は首謀者として斬らるべかりしを、其の女重盛の子維盛の室たるの故を以て僅に宥恕せられ、死一等を減じて備後の兒島に流されしが、入道人を遣はして間もなく殺されけり。

鹿が谷の陰謀は斯の如くにして敗れぬ。院中の平家に快からざるもの、是の一擧に悉く滅びぬ。唯依然として相快からざるは法皇と清盛との間柄なり。鹿が谷の事、成親是が首謀者たりしと雖も、暗に法皇の意を迎へたること言ふを待たず、況や法皇親しく是に臨まれたるをや。清盛夙に是の間の消息を解せるもの、素より成親、西光等の成敗を以て滿足すべきに非ず。彼れは如何にもして一たび法皇に甘心せずんば已まざるべき也。

## 五　重盛の諫言

西光既に斬られ、成親既に流されて事猶穩ならず、人々耳目を側てぬ。入道は赤地の錦の直垂に黒絲縅の腹巻の白金物打つたる胸板當て、先年安藝守たりし時、嚴島の大明神より現に給はれりと稱する銀の蛭巻したる小長刀の常に枕をも放たず立てられしを小脇に手挾み、中門の廊にぞ出でられける。氣色決然として、事由々しくぞ見えし。貞能と召す。筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧を着て入道が前に候ふ。入道曰く、如何に貞能是の度の事はいかゞ思ふぞ。抑々保元に平右馬助(忠正)を始めとして一門多く新院の味方に參りき。清盛故院の遺詔を重じ私情を捨てゝ忠節を勵みたりき。是れ一つの奉公ならずや。平治の亂起るや、信頼、義朝が徒、禁中に籠りて兩宮を脅かし、天下一時順逆を辨ぜざりき。清盛一門の子弟を提げてこの難局に當り、逆賊を追討して宸襟を安じ奉りたりき。凡そ是の間身命を抛ちて一家の存滅を顧みず、偏に君の御爲を思ひたり。君にはかくても當家の勳功を輕しとし給ふにや、如何なる人の如何なる事を申すとも、義として争でか是の一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに何ぞや、成親如き無用のいたづら者、西光と申す下賤の無道人が惡に申すことに君の隨はせ給ひて、動もすれば是の一門亡ぼさるべき御陰謀こそ心得ね。是の度の事は幸に治まれども、是の後とても讒奏するものだにあらば、當家追討の院宣を下さるゝと覺ゆるぞ。朝敵となりては悔ゆとも及ばじ。されば事を未然に拒む爲め、法皇を鳥羽の北殿に移し參らするか、然らずば當家

に迎へ奉らむと思ひけるに、其の儀ならば或は北面の武士共が一矢射奉るやも計り難し。貞能、[illegible]に侍共に布告せて出馬の用意を促すべし。今年今月今日入道こそは院の奉公ふつと思ひ切つたるなれ。馬に鞍置かせよ、鎧持て参れ」と。家臣共に騒然たり。邸の内外に充ち〳〵たる軍馬俄に色めきて、旗旗[illegible]に法住寺殿を指して動かむとす。

斯る事小松殿に聞ゆ。重盛大に驚き、扨は當家の大事こそ起りたれとて、烏帽子直衣にて、武装せる従者一人も具せず、西八條へ馳せ参られけり。門に入りて眺むれば、一門の卿相雲客数十人、鎧の袖を列ね、冑の綴を揃へて中門の廊に着し、郎黨[illegible]色幾千騎、馬の手綱打懸け、旗竿引きそばめ、思ひ〳〵の武器を小脇にかゝげて、一令の下に今にも打立むず體なりけり。重盛は少しも騒がず、烏帽子直垂に大口の袴を踏みしだき、衣紋正しく悠揚として打通れば、並み居る人々、事の意外に驚きける。右大將宗盛、重盛の袖を捉へて、天下の大事あり、入道殿も既に甲冑を帯せられたるに、寛濶の御装束こそ心得ねと申しければ、重盛斜に宗盛を睥睨し、皇室の重事をこそ天下の大事とこそは申せ。今日の事、入道殿が私心の振舞、一家の小事の一[illegible]、大[illegible]、[illegible]室の大事にあらざるよりは[illegible]にすべき。御達は下の大事と言ふ、[illegible]は何處にある、そも〳〵何事に就ての合戦に用ゐるぞやと、宗盛を屹目にかけて進み寄れば、入道は是の様を見て、法體の身を以て甲冑を着けることの流石にはづかしく思しけむ、[illegible]に入り、腹巻の上に薄墨の素絹の衣を引き被きて出で向ひけるが、胸の金物の外れて見えけるを隠さむとて、頻りに衣を引合せける程に、却つて綻びていとゞ閃めきて見えけり。入道やがて左あらぬ體にて重盛に向つて曰へらく、是の度の事、新大納言の謀反は枝葉のみ、其の根本は一院法皇の胸にあること、西光法師の白状によりて分明なり。されば暫く世の鎮まるまでは、法皇をば鳥羽の北殿に遷し参らするか、又は當邸に迎へ参らせむは如何にと。重盛聞きもあへず、雙眼より涙をはら〳〵と流し暫くは物をも給はず。入道は興醒め顔に唯内府が面を打まもるのみ。堂上堂下の一族子弟、默然として互に顔を見合せぬ。

重盛やゝありて直衣の袖より疊紙を取出し、はふり落つる涙を押拭ひ、容を改めて申しけるは、現世の仔細は兎も角も、是の御體を見参らするこそうたてけれ。[illegible]るに天兒屋根尊の[illegible]、[illegible]に[illegible]より以來、太政大臣の官に在る人の甲冑を鎧ふこと、未だ例を聞かず。況て出家入道の御身に非ずや。[illegible]の法衣を脱ぎ捨てゝ、忽ちに弓箭兇器を帯せむこと、内には破戒無慙の罪を招ね、外には仁義礼智信の道にも背き候ひなむず。誠に重盛として[illegible]、恐れある事には候へども、[illegible]は[illegible]心を[illegible]が申す所を聞し召されよ。凡じて世に四恩の候ふ、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、是れなり、就中君恩を最も重しとなす。夫れ普天の下王土に非ざる無く、率土の濱王臣に非ざるは無し。されば彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽の山に蕨を采りし人だにも、勅命背き難き禮儀をば存ずとこそ承はれ。如何に況や、倚々當家の朝恩を惟れば心も詞もなか〳〵に及ばれね、抑々御先祖貞盛公が平親王を誅せし時の勸賞も僅に受領に過ぎざりき。源頼義が貞任、宗任を誅したりし時、誰かは丞相の位に上り、不次の朝恩に與りしぞ。加ふるに當家は桓武の後胤とは申しながら、中比より位官低く下國の受領をだに許されず。故刑部卿(忠盛)常に寵を被りて昇殿を聴されし時は、人みな殿上

の交を嫌ひにき。然るに御身は攝籙の家の外には曾て拜任の例を聞かざる太政大臣の尊位を極め給ふ。斯く申す重盛が如き暗愚の才を以てして大臣の大將となり、連府槐門の位に列り、剰へ六十餘州半ば一門の所領となり、田園盡く一家の進止たり。あはれ是れ前代未聞の君恩には候はずや。何事ぞ、今や是の莫大無邊の君恩を遺却して、畏れ多くも法皇を脅し參らせむこと、天魔波旬の聰明を晦まし參らせしにや。天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなむず。夫れ我邦は神國なり、神は非禮を許し給ふべきにあらず。良しや今日の御一念道理半なきに非ず、當家代々の忠勤無雙の功勲を留めたるも、恩に狎れ賞に[illegible]るは傍若無人に候はずや。幸に當家の運命未だ盡きざるが故に、御謀反既に顯はれ畢んぬ。當の首謀なる成親卿以下悉く罪科に服したる上は、退いて事の由を陳奏し、君の爲にはいよ／＼奉公の忠勤を勵み、人の爲にはます／＼撫育の哀憐を加へ給はゞ、君にもなどか叡慮を改め給はざるべき。然るを何事ぞ、臣として君に遷し參らせむこと卽がては天罰身に當り、當家永く恥を被らむ。法皇を遷し參らせむの御一念、重盛身を以てあくまで防ぎ申すべし。

斯くまで諫め申しても尚ほ飽くまで御念を果し給はむとならば、重盛は已む無く院中に馳せ參じて、叶はざらむまでも君を守護し奉らむ。不肖淺劣の身を以て大臣の大將を忝うす、既に國家の武臣たり、皇室事あるの日、私情また顧みるの遑あるべからず。其の儀にて候はば平生重盛が身に代り命を捨てむと契りたる侍共少々は候ふらむ。是等の者共を召し具して、院の御所法住寺殿に籠り候はゞ、或は殊の外の御大事にこそ候はむずらめ。憶ひ起せば保元の昔、六條判官爲義は新院の御方に參り、子息下野守義朝は内裏に參りて父子弓矢を以て相向ひ戰ひき。戰果てゝ後、判官は其の子の爲に朱雀大路に首刎ねられしこと、敕諚已み難しとは申しながら、惡逆無道の至り、口惜しき事に存じ候ひき。あはれ人事とのみ思ひしに今は重盛が身の上に懸りけるよ。悲しき哉、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷盧八萬の頂よりも尚高き父の恩に背きなむ。傷ましい哉、不孝の罪を遁れむとすれば朝恩重疊の[illegible]の難き君の爲に不忠の逆臣となりぬべし。兩つならぬ身の忠孝並び立たず、進退維れ谷まり候ひぬ。詮ずる所の願は暇の門出に唯重盛が首を召され候へ。さ候はゞ院參の御供をも仕らず、又院中をも守護し參らすべからず。重盛別に是非を分ち難し。申すも恐れあることながら、人の運命の傾かむとする時は、必ず惡事を思ひ立ち候なり。御一念の次第によりては平家の運命も今を限りとこそ覺え候へ。嗚呼槿花一朝の命に、何望むべき榮華ぞや。何時までか存らへて家の恥、世の亂を見るべき。明日とも言はず、今日唯今、青侍一人に仰せつけられ、御壺の内に引き出されて重盛が首を刎ねむこと、最も易き事に候はずや。斯くて後思ひのまゝに振舞ひ給へかし。あはれ一門の人々、重盛が申條をば如何に聞き給ふや。

重盛は直衣の袖を絞りつゝ、涙ながらに斯樣に諫め申されける。並み居る一門の人々首を俛して涙を流さゞるは無し。流石の入道も重盛が至誠の諫言に動かされ、暫しは俯きて御在しけるが、否とよ内府、入道が申せる事全く身の爲に非ず。餘命幾ばくもなき淨海に於て更に何をか望むべき、唯々子孫長久の爲を思ひければなり。是の事若し人情に背き公道に外れたらば、御邊等に於て如何樣にも計らひ申さるべしとて其まゝ内に入られけり。重盛も起立して中門に出で、侍共に聲高くの給ひけるは、重盛が唯今

是にて申しつる事をば、汝等は如何に聞きけるぞ、汝等の中、陪參の御供に加はらむと欲するものは、先づ重盛が首を刎ねよと。滿地の兵士寂然として聲無し。次に宗盛以下の諸弟に向ひて曰へらく、如何に殿原、入道殿に於て良しや斯樣の御結構候とも、各自に於て眞に當家の爲を思はゞ、一次再次の諫止をこそ勵むべきに、猥に無謀に與して干戈を弄ぶ、即ち是れ老父に惡事を濟さしむるものに非ずして何ぞやと。諸弟能く答ふるもの無し。重盛は、さらば人々參れとて小松殿へぞ歸られける。

重盛小松殿に歸るや、主馬の判官盛國をして令を發せしめて曰く、重盛こそは今朝天下の一大事を聞き出したるなれ。我と思はむずる者共は物の具して馳せ參ぜよと。傳令四方に走りて忽ち京畿の間に擴がる。平生物に動じ給はぬ內府にして是の令あるは誠に天下の一大事なるべしとて、我も〳〵と馳せ參る。時已に夜に入れども平家一門の家從郎黨は言ふに及ばず、入道が昵近の侍まで先を爭うて小松殿に集まり、西八條に殘れるは女子老幼と刀筆の吏のみ。夜の明くる頃には、洛中白河の外、北山、西山、嵯峨、太秦、淀、羽束師より、宇治、大原、加茂、大津、勢多、石山のほとりまでも、苟も志を內府に寄する兵共、或は鎧着て未だ甲をつけぬあり、或は矢負ひて未だ弓を持たぬもあり、馬は泡を吹き、人は息を切らして潮の如く小松殿の內外に馳せ集ひぬ。入道是の體を見て心中に安からず、筑後守貞能の唯一人殘れるを召して問ふらく、內府兵を召す所存は如何に。今朝茲にて申しつる如く、淨海が許へ討手などを差向くるには非ざるべきかと。貞能淚を流して、君よ心安かれ、餘人は知らず、爭でか內府にさる事の候べき。それにつけても今朝の御一念、御後悔あらむこそ願はしけれと申しければ、入道首肯きて急ぎ腹卷脫ぎ捨て、素絹の法衣に袈裟打ちかけて念珠讀經をぞ爲給ひける。

さる程に小松殿にては判官盛國門前に立ち出でて着到つけられけり。馳せ集まれる宗徒の侍三千餘人、郎黨雜色、苟も箭を負ひ刀を手ばさむもの無慮二萬餘騎。重盛前に着到を披見したる後、中門に出でて侍共にの給ひけるは、汝等日頃の契約を違へず、一夜の中に斯樣に馳せ參じたるこそ神妙なれ。自今以後亦是の如くなれ。重盛今朝別して天下の一大事を聞出しけれども事幸ひに訛傳に出でたりき、汝等おの〳〵家に歸りて後日の忠勤を心懸けよと。厚く勞ひて還らしむ。げに天下の一大事と聞えたるは、平家が一時の誤傳なりき。唯今朝入道を諫めける詞に依りて、兵士の去就如何を試み、以て入道が叛逆の惡念を和げむとの謀とぞ聞えし。時の人々相傳へて深く感じ合へりける。

是の如くにして、法皇を鳥羽殿に遷せむとしたる入道が企ては、重盛が苦諫と智謀とによりて挫折せられぬ。然れどもこは一時の事なりき。剛情我慢の入道が一念は毫も渝る所なかりき。

## 六　重盛の最後

小松の內府重盛は、まさしく入道が嫡男にて御在しけれども、其の性はいたく違ひ給へり。入道が飽くまで情剛く我執の念強きに反して、內府は道理に明に、能く人を恕し、世を思ふ人なりき。入道が偏に願ふところは一門の榮華のみ。是の願の前には帝王の尊なく、君臣の義なし、誠に直情徑行、たゞ〳〵我意を貫くを以て自ら甘ずる人なりき。內府は則ち然らず、よく君國の大義を辨へて而かも私門の情誼を忘れず。よく事體の輕重に應じて萬全の道を求めたり。されば是の臣ありて君初めて安らかに、是の子ありて父卽ち正しきを得たりき。

誠に内府は朝家の重臣、平門の柱石として公私内外の望のあつまるところ。世の太平、國の利益、偏に是人をぞ賴みける。

重盛が憂ふる所は入道が非道の振舞なりき。そも／＼身は武臣の末を以て攝籙の家を凌ぎ、一門の所領國郡に半ばにして、田園一家の進止たるさへ、前代未聞の、末おそろしき朝恩なるに、父の驕慢日に募り、動もすれば帝座に逼り奉らせむこと、まことに天地神明の恐れあり、こゝに四恩十善の教に君臣の公義を説き、忠孝兩全の歎きに父子の私情を訴ふるさま、申し受くる所には、只重盛が首を召され候へとまでの諫言こそ、世にも哀れの極みには覺ゆれ。入道流石に一旦の憤を抑へけれども、一念の執着いかでか是の儘にして已むべき。世は平家の世盛りとこそ見えつるに獨り憂慼の情に勝へざるは重盛なりき。

げに平家の世盛りとこそ見えにけり。先に皇后に立たせ給ひし入道が一女建禮門院は、治承の二年に目出たく皇子を擧げさせ給ひぬ。御産の惱みありし聞えし時は、法皇親ら臨みて千手經をさゝへ讀誦あらせられき。是れ偏に入道が心を迎へ給はむの御意にして、志あるもの皆涙を流しけり。是れさへあるに、御祈禱の御禮として黄金一千兩を奉りしに及びては、一天の國父・一修驗者として遇せられ給ひしこそ沙汰の限りなりけれ。

さなきだに一國武人の頭領、滿朝縉紳の首班として、文武の權勢古今に並びなかりし入道は、今は天子の外舅となりぬ。入道の滿足たれ如何ばかりぞや。皇子御誕生の際、小兒の如く喜び躍り、はては嬉し涙に咽びしこそ理なれ。皇子誕生の祝ひは、即ち平家萬歳の慶びなりき。入道が驕慢は是に於て更に加はらざるを得ず。天下の威福一已の左右に任じ、内外の賞罰、又公家の法に依らず。上下屏息して人々安き心なく、世はたゞ入道が爲さむまゝに任せける。

上下人心安からざるに隨れて、天變地異の相次いで起りけるこそ奇怪なれ。中にも治承三年五月の半ば、颶風俄に中御門京極の邊より起りて坤の方へ吹き通り、京中の人家吹き倒されたるもの方十四五町に亙りて其の數を知らず。桁、長押、柱など空中に散亂し、檜皮葺板の類を吹散する態は、さながら秋風の枯葉を捲くが如し。人畜の死傷亦夥しかりき。如何にも徒事ならず見えければ、神祇官に御陰陽寮に命じて吉凶をトせしめられしに、何れも答へて申しけるは、是れ一國の大臣、百日の中に亡せらるべき徴なり。別しては佛法王法衰滅の運に遭り、兵革續いて起らなむ。正しく天下の大事近年の中にありと覺えたりと。世は平家の盛りなるに、人々何ぞ是のトを信ずべき。入道以下心にも留めず御在しけるが、重盛獨り深く心に懸る所あり。

同じき年の夏、重盛熊野に詣づ。本宮證誠殿の御前に籠りて、夜もすがら四恩不變の行業に一心の迷妄を拂ひ、遙に祈り申されけるは、入道相國無道にして、やゝもすれば君を惱まし奉る、天恩限りなくして一族の榮華今を極むとこそ覺ゆるに、報謝の誠足らざるのみか、凌虐の惡事日に募れり。重盛身不肖ながら入道が長子として數々諫めを入るゝと雖も遂に其の志を翻すに力無し。禍を轉じ名を擧げむこと今に於て望絶えぬ。況して一家の榮華を永代に續けむことは思ひもよらず。然れば私に念ふらく、親の惡を見て正す能はず、君の惱を見て救ふ能はず、かくて徒に世と共に浮沈せむは、臣子の道に於て慙づる所あるに似たり。寧ろ如かじ、名を逃れ身を退き、現世の名利を抛棄して偏に來世の菩提を求めむには。但し重盛は凡下、佛命の本を能く悟り得ず、是れ

俄に翳へ置きを以て、直に志を遂げずして以て今日に到れり。今や心安住を欲すること切りなり。南無熊野大權現、一門の繁榮永く絶えずして代々長へに渝らずは、願はくは入道が惡心を和らげて天下の安全を得せしめ給へ。若し父榮耀一期に限り、恥後昆に及ぶべくんば、願はくは重盛が命數を縮めて早く來世の苦輪を救ひ給へ。」兩箇の願ひ、一に只神慮の存する所、重盛に於て毫も恨無し。歸命頂禮、大慈大悲證誠權現、仰ぎ願はくは偏に冥助を授け給へと、肝膽を碎きてぞ祈念せられける。

かくて重盛熊野より下向ありて後、幾もなく全身に惡瘡を發し給ひぬ。扨は權現に申し入れたる事其納受あるにこそとて、御禮の奉幣あり、身は一室に閉ぢ籠りて更に療養の氣色だにもあらず。人々其の心を知らずして怪み惑ひけり。

斯りし程に重盛の病漸く重くなり增りて、今は憑み少き由聞えければ、入道流石に心安からず、越中前司盛俊を使として仰せられけるは、所勞日に大事の趣、入道心苦しくこそ存じ侍れ。聞けば時藥祈禱をも斥けて御在すとか、何ぞ老親に先立ちて故らに不孝の罪を得むとはし給ふぞ。幸ひにも此頃宋朝より世にも勝れたる名醫渡り來れり。御身の運命尚ほ盡きずとこそ覺えたれ。彼れを請じて療養を加へ給はむこと、入道切に願ふ所なりと。

重盛使命の趣を聞き畢り、入道殿の使に最後の對面とも思はれけむ、人に扶け起され、烏帽子直衣にて盛俊に對面し、答へて曰く、療養の事、敬んで承り畢んぬ。但し身の所勞療養を加へざるは、聊か思ふ所あればなり。そは去ぬる五月熊野參詣の折、權現に申し請けたる旨の候ひき。此度の所勞は神慮の計らひ、素より凡夫の是非に及ばざる所乎。且つや古を按ずるに、延喜の御門はさばかりの賢主には御在しゝが、異邦の相者を宮廷に召されしこと末代までの本朝の恥辱と謂はるゝに非ずや。重盛身不肖なりと雖も、官三公を忝うし位二位に上れり。一國鼎相の臣を以て外邦浮遊の客に見え、其の命を託し其の術を受けむこと、身の恥、家の恥、且つは國家の恥辱に非ずや。仰せ越さるゝ醫療、重盛に於て承服し難き所なり。況んや運命素と天にありて人に非ず。されば漢の高祖鯨布を討ちて流矢に中りし時、金を與へて醫師を謝したりき。重盛何ぞ獨り天命を察せずして猥りに療養を加ふべき。所勞若し定業ならば、醫療又何の爲す所ぞ。若し又非業ならば、療治を加へずとも尚ほ治せざらむ。されば大人にも百藥も益無けむ。耆婆が妙技を以てしても大覺世尊は終に跋提河上の露と消え給ひしに非ずや。されば重盛は今更醫療に於て用ふる所無し。歸りて入道殿に此の由を申せとこそ宣ひけれ。盛俊返すべき言葉もなく、泣く泣く小松殿を引下り、其の時入道の御在しける福原の別業に馳せ下り、事の次第を復命に及びける。

入道盛俊が復命を聞いて、重盛の意に逆ただざるべきを察し、流石親子の情堪へ難く、急ぎ福原より都へ上られけり。七月二十八日重盛病大に革まる。即ち出家して法名を淨蓮と稱す。越えて八月一日遂に逝し給ひぬ。年僅に四十三。未だ五十にだも至らざるに、實に惜むべき命なりけり。世は盛りとこそ見えつるに一門の柱石俄に頽落し畢んぬ。さしも剛情我慢の入道が老の嘆きは言ふも更なり、一門の內外、朝家の上下、さながら近親を失ひたらむ樣に哭き悲めり。あはれ是の大臣の世に御在すればこそ、入道が非道も和らぎて世もいさゝか穩かなりしに、是の後、天下如何に成り行くべきと心ある人々憂ひ思はぬは無かりけり。唯故內府が弟宗盛及び其の一家の人々の、やがて天等に

進み給はむと勇み悦べるこそ奇怪なりけれ。

## 七　重盛論

小松の内府重盛は、げに智仁勇兼備の大臣なりき。是の點より見れば彼は平家第一等の人物と謂ふべかりき。唯理に明なるに較ぶれば其の意は寧ろ弱く、其の情は寧ろ脆かりき。彼れが其の材能を發揮して遺憾なからむが爲には、少くとも其の意志は更に數層の强烈を要したりき。加ふるに早く淨土に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、君公の大義に於て聊か缺くる所あるを免れず、是れ人にして是の病あり、洵に惜むべしとなす。

四十三年の齢は重盛に於て決して短きものに非ざりき。平家の興るや、彼れ實に其の中堅たり。平家の榮ゆるや、彼れ實に其の柱石たり。彼れの一生は其の父入道と共に平家史の大半を占むるものなりき。清盛心開に情盟く、眞に一世の豪傑なりしが、其の事を成すに當りて重盛に待たるること[illegible]是れあらざりき。戰陣に臨みては[illegible]朝廟に參じては、[illegible]れば[illegible]彼れに於て[illegible]、消長は是れ大義を[illegible]れによりて正されき。彼れは獨り平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の名鑑たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、重盛實に第一の人なりき。

悪源太義平と紫宸殿の階下に闘ひし重盛は如何に勇ましかりしよ。彼れ武藝に於て人後に落つるものに非ざりき。信頼平家の不在を窺うて亂を興すや、熊野參詣の途上にありし清盛を初め平家の一族は、寧ろ西國に走りて再擧を圖らむと欲したりき。彼の時平家にして直に都に歸らざりせば、天下の事將た知るべきのみ。是の時に當りて衆論を排して入京を唱へ、大義名分を提唱して士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の勝を論ずれば、當に功の最たるべきもの、實に重盛たり。唯是の一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乘じたるが如きものありき。されば是の氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裡に在り、重盛が天分ますます其の高きを加へ、今や彼れは武人にあらずして朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼れを待つて初めて人ありき。其の男[illegible]閫内の[illegible]を目して尊かりしあられし時、入道は大いに怒りて累積の復讐を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られむとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを說破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の擧あらむとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を諷へしも亦重盛なりき。入道が我慢の一念は幾たびか是が爲に泄まれて君國の事爲に僅に安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしやは察するに餘りありと謂ふべし。あはれ入道が榮華は卌大極まり無かりしか、其の裏面には其の愛子を犧牲とせる慘澹たる悲劇ありき。重盛年尚ほ卌にして夙に厭世の心を動かし、早く佛道に歸依して來世を希求せしもの、其の運のおのづから然らしめし所、其の情や深く憐むべしとせむ。

重盛が佛法に歸依したることに就いては一條の物語あり、又以て其の性行を知るの一端とも見るべきを以て左に是を錄せむ。

重盛は其の邸宅たる小松殿の内に一宇の佛堂を建てしが、其の構造は[illegible]に見る所[illegible]ある[illegible]を以てなり、即ち東西南北各々十二間、四方を合せて四十八間を[illegible]、四方の中に

間、間毎に十二光佛を一體づつ立て、四方に都合四十八體の十二光佛を安座せり。四十八個の燈籠佛前に具はり、炳然として晝夜の星の如し。是の佛殿に奉仕するものは何れも十六歳より二十歳の窈窕たる美女にして、其の數四十八人、常燈一基につき一人を具へ、添油挑燈の用に當る。年二十を過ぐれば即ち交代せしむ。日沒各鐘の頃より、是等四十八人の美女春花の裝を凝し、蘭麝の芳を新にし、念佛禮讃の妙音を揃へて靜に四十八間の佛前を廻る。念佛禮讃終れば、六人づつ相結びて鼓銅鈸子を鳴しつゝ、今樣の歌を謡ひて再び四十八間を巡拜す。其の歌に曰く、

心の闇の深きをば、
燈籠の火こそ照すなれ。
彌陀の誓ひをたのむ身は、
照さぬ所はなかりけり。

是の間重盛は堂中の中座に坐し、耳を澄まして靜に聽く。其の狀、佛說傳ふる所の菩薩聖衆が彌陀覺王に奉仕して、或は說法化行し、或は伎樂歌詠して淨土の榮光を讃美するが如し。重盛是の異樣の趣向を運らしゝは、想ふに是の世ながらにして往生の未來を惝恍せしに非ざるか。是の事ありてより世重盛を燈籠の大臣と稱せりと謂ふ。

重盛は啻に內地に於て佛法に歸依せしのみならず、遙に金を中山の佛寺に送りて來世の菩提を弔ひき。曾て唐人妙典と云ふものゝ筑紫にあるを召し、賜ふに金五百兩を以てして曰く、吾れ今汝に依りて三千五百兩の黃金を大唐に送らむと欲す、其の中一千兩は育王山の衆徒に與へ、二千兩は皇帝に奉り、外臣重盛が爲に一小堂を育王山に建てゝ其の菩提を弔はれむことを請へと。妙典敬承し、金を抱いて直に渡唐し、重盛の命の如くす。帝大に其の志を嘉し、雛形の御堂を唐山に建て、五百町の米田を寄進し厚く重盛が冥福を祈れりと傳ふ。

是の如く佛說に歸依せる事は、重盛にとりて、寧ろ恨事なりしと謂はざるを得ず。彼れ身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて而して後已むべきなり。洵に忠孝兩全の歎きありて骨肉の私情流石に絕ち難きも、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせむ。是の難關に當りて能く功を舉ぐるもの、眞に人傑と言ふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局を廻避して自ら全うすべからざりしなり。彼れの態度に當るの前後を見るに、或は一門の榮華永きを保たしめ、寧ろ死して其の苦境に遭遇せざらむと謂ふにあり。何ぞ其の心事の私情に拘はることの多くして、公儀に思ひを致すことの少きや。彼れの一身は公私內外の兩面に依つて繫るところ、君は以て奉ずるを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼れ死せば入道が專橫はさながら悍馬の御に離れしに似けむ。帝座の危きや知るべきなり。彼れ死せば一家の堂立ろに世に離るべし、一旦事あるの日誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛一身を以て是の大局を保持す、苟も其の任を知り責を重ずるもの、何ぞ區々の私情の爲に逃避すべけむや。重盛其の希世の聰明を以てして如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらむ、辨じて而して倚ほ是を敢てせざるものは其の佛說に歸依したるの致す所と謂はざるべからず。是れ重盛に取りて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは吾人の同意し能はざる所なり。其の情や誠に憐むべし、其の行や則ち大に未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めて其の身を殺したるは、即ち自ら求めて其の家を亡ぼした

るに等し。入道心剛なりし者も、今や已に車轍を越ゆ、其の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲す無きこと、重盛の瞑を待つて知らざらむや。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宮一たび下らば天下の事俄に知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重ぜざりしや。交友の頼朝に託せる言に曰く、平家には小松の大臣殿こそ心も剛に、謀も勝れておはせしが、平家の運命盡に極まれるか去年の八月薨去せられぬ。今は何に憚る所ぞ、御邊一たび起つて鞭かば天下靡然として從はむと。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、亦以て想ふべきに非ずや。あはれ世は如何にもなりなむ、唯力を盡し忠を固みても猶及ばざらむ時、かねて亡き身のせむ術なからめやは。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せること心得ね、古人是に至りて遂に重盛を諫護するの辭を知らざるなり。

## 八　法印問答

重盛既に逝きぬ、今は誰ありて入道が所存を抑ふるものもなし。天下漸く事多からむとす。治承三年十一月七日地大に震ふ。陰陽頭安倍泰親急ぎ内裏に馳せ參じて天下の大事近きにあるべきを奏す。傳奏色を失ひ、君も亦叡慮を惱ませ給ふ。同じ月の十四日、入道相國俄に數千騎を率ゐて福原より上京す。人何の故たるを審にせず。道路相傳へて曰く、是れ入道朝家に恨あるが爲なりと。關白基房參内して謁を請うて曰く、入道が此度の上洛は恐らくは基房に甘心せむが爲ならむか。去ぬる年、資盛乘合の事ありてより以來、入道の憤兎角この身に集まれり。一旦に故内府存生の間はさせる事無かりしが、今や内府世を去りて入道が憚るべき人も無し。身は攝籙の家に人となりて、今は如何なる憂き目を武人の手より受くるやらむとて、潸然と泣き給ふ。主上聞し召して宣はく、關白にして危からば、朕何ぞ獨り泰からむと、共に涙を流し給ふ。同じき十五日、入道朝家に恨ある事いよ〳〵眞なりと聞えしかば、故少納言信西が子息、靜憲法印を敕使として入道が西八條の邸に遣はさる。其の詔に曰く、近年上下の心靜かならず、世間騒動もすれば干戈を待ふ、朕深く以て憂となす、賴む所は唯相國にあり。然るに今や故無くして帶甲を率ゐて闕下を驚かし、嗷々として朝家に怨あるものの如く然り。是れ果して何事ぞや、相國望む所あらば何ぞ狀を具して陳奏に及ばさる、徒に軍兵を動かして世上を騒がす、朕の悲む所なりと。

法印西八條の邸に至り具に敕詔の旨を傳ふ。入道對面もせず、待つこと朝より夕に及べども一答辭無し。日將に暮れむとす、其の子知盛をして言はしめて曰く、淨海老衰事に勝へず、院中の出仕傳來思ひ斷えたり、今回上洛の事別の仔細も候はずと。法印、さてこそ入道の非謀は人言に違はざりけりと驚き畏れたれども、然あらぬ態にて立ちざまに、賢相明德夫に叩ると申す本文は如何にと高論して退出しぬ。入道内に是の話を聞かれけむ、急ぎ中門に出でて遂に歸りたる法印を呼び還す。法印は嘗て法皇に陪して鹿が谷の會合に臨みしもの、或は西光、俊寛が故轍を履むこともやと一たびは心騒がれしが、素と是れ膽力才辯共に人に勝れたるものなれば、少しも怖れず中門の廊に上りて入道と對座す。入道顔に悲憤の色あり、屹と法印を睥睨して曰く、法印御坊、淨海が申す事果して僻事か、先づ以て内府の世を去りし事、當家の悲歎如何ばかりぞ、親父たる入道が身にもなりておもひられよ。而して君には如何ばかり叡慮を懸けさせ給ひける。抑々保元以降、亂逆を接して起り、君にも[illegible]數

きに沈ませ給ひしを救ひ奉りたるもの當家に非ずや。其の折入道は唯大事の處分を司りしのみにして、身命を捨てゝ事に當りしものは内府なりき。爾來三鼎輔弼の臣となりてより、朝廷の大事、一として内府の與り聴かざるものなし。其の功、其の勳、我子ながら世に有り難くこそ想はれしか。君にも是の功勞を思し召し給はゞ、一個半個の御憐無くてやあるべき。昔者唐の太宗は魏徴に後れて悲みの餘り自ら碑文を書きて立て給ひき。遠く昔を申すに及ばず、顯頼の民部の薨去ありし時は、故院殊に御歎きありて八幡の行幸延引せられ、御遊も無かりき。かゝらむは誠に賢君臣下を思はせらるゝ至情とこそ仰がれ候へ。然るに今や君には内府の逝去をば何事ばし見えたはせしぞ。中陰の事未だ果てざるに八幡の御遊ありて御歎きの色をだも見え奉らず。悲歎の涙に沈める一門にとりて如何ばかり本意なき事と思し召し給ふぞ。假令ひ内府が忠をば忘れさせ給ふとも、入道が悲みをば御憐みなかるべき。假令ひ入道が悲みは物の數ならずとも、爭でか内府多年の忠勤を忘れさせ給ふべき。今や父子共に信を陛下に失ひて面目一時に亡はる、入道如何ぞ快きを得むや。是れ一つ。次に越前國は故内府が勳功を表せむが爲に、子々孫々に傳へて永代世襲の封土たるべきよしの御敕諚は昨日の事なりしに、今や内府逝きて未だ一月ならざるに沒收せられ候は抑々何の過怠にて候ふやらむ。入道其の子に後れて更に面目を失ふ、如何ぞ快よきを得むや。是れ二つ。次に中納言に闕官ありし時、二位の中將頻りに望みしを入道樣々に取りなし候ひしが、君には遂に御承引なくして却て基房が子を進められしは如何にぞや。假令ひ入道如何なる非分を申し出づるとも、餘命幾もなき老臣が數十年の忠勤に免じて一たびはなどか聞し召し給はざるべき。然るを位階家縮何れも中將に及ばざる者を取り立てゝ故らに入道を辱しめ給ふ事、誠に本意なき御取計らひにこそ候へ。入道如何ぞ不平無きを得むや。是れ三つ。次に新大納言成親卿以下、近習の人々、鹿が谷に集りて當家討伐の謀反を企てしこと是れ全く私の事にあらず。君にも御許容ありて、親ら行幸あらせ給ひし事、入道慥に聞知する所なり。あはれ當家に何の罪何の咎ありて斯かる御計畫を遊ばされ候ふやらむ。良しや多少の過怠あるも、入道が勤勞を思し召されなば、是の一門をば七代までは爭でか捨てさせ給ふべき。然るに何ぞや、入道齢耳順を超えて餘命幾年もなき一期の中だにも、動もすればば追討の御計畫あること屡々なりし。況してや入道が身後に於ては、一門の行末果して如何あるべき。入道如何ぞ心穏かなるを得むや。是れ四つ。あはれ是の四つの申條、君には如何に聞し召され候ふぞ。入道今や子に後れ、枯木一枝無きに異ならず。一門、子孫の行末を慮れば君には早く滅亡の企てを爲し給ふ。今は程なき浮世に存生して、前生後身、心を勞して何かせむ。世は早や是れまでなり、人も我れも如何にもありなむと思ふなりと、且怒り且泣き、思ひ切つてぞ述べ給ふ。

静憲法印流石に哀を催し、且つは恐ろしく覺えけり。げに我身も嘗て法皇に御伴申して成親が謀議の席に連りし者なり。入道それと知りてあらば如何なる憂目にか遇ふやらむと、胸打騒ぎて一時は兎角の答も出でざりしが、法印もさる者にて何氣なき體を裝ひ、衣紋をつくろひて答へけるは、入道殿の仰せ恨ませ給ふところ一々御理とこそ覺え候へ。中にも故内府存生の砌を思へば、親子恩愛の道、老少不定の數、餘所の袂も絞り顔ひてこそ候ひしか。さりながら御恨の逐一、仙洞に於ても聊か存知無きこともあり。静憲不肖ながら宥めにも御使に

立ちたる上は已むなく兎角の御咎辯に及ぶ條、恐れながら心を留めて聞し召され給ふべきぞ。抑々淨海の聖德は誠に三代の餘光たり。身當に近習に侍らひて日夕仰ぎ奉る所、唯、仙宮水澄めども人下流を濁して何事か入道殿に惡樣に申し入れたりと覺えたり。是の事よく／＼思慮あるべきなり。千萬の聖慮假りに失ありとするも、臣下の身としては偏に其身に過りなきを申し陳ずべきなり。古への語にも申さずや、君君たらずと雖も臣以て臣たらざるべからずと。近頃小賢しき申條なれど、法皇は君なり、入道殿は臣なり。臣として君を輔まし奉らむこと、仁義の道に於て缺くる所あるのみならず、天地神明に照して畏れ多き事ならずや。院の御出仕思ひ止りたりとの御事、一旦の御憤りは申すに及ばねども、其の位に居りて其の職を盡さぬから、出仕を停止し給はむこと、ゆめ／＼云はれあるべからず。卿も御推察の條、先づ八幡宮の御幸は偏に[illegible]爲とこそ承り候へ、内府を失ひ給ふて、院に於ては[illegible]、皆淚を拝けて日夕不斷の御愁嘆は法皇陛下の御案ぜらせし所なり。聞けば内府の御身は[illegible]にありしこそ、せめては熊野に詣り、[illegible]八幡に參詣し、御前にて來の菩提を弔はむとの畏き叡慮ありて、扨こそ八幡の御幸とはなりけるなり。御參籠七日が間、日暮に念佛讀經して偏に亡靈の得脫を祈られ候ひき。何ぞ是を御恨と謂はむ。入道殿の面目何物か是に加ふべき。御一門の愁嘆を外にして宴遊に耽り給ふとの御恨み、全く讒人の虛構に出でしと覺えたり。是の上猶も御不審の廉あらば、八幡の別當に御尋ねあるべきなり。次に中納言の闕官、二位中將殿御所望の事は當ちに御憤りあるべき事ならず。前年故小松殿の御昇進の時は、官階數人を超えて遂に儕輩を凌がれけれども、當時の縉紳入道殿を憚りて異存を申すもの一人もあらざりき。獨り今に於て他人が當次の昇進を御恨みあるべき謂はれやある。況してや當今の除目一に關白殿の御計ひなれば、誰か兎角の異議に及ぶべき。凡そ斯樣の事、入道殿、惡樣に聞かれたるは一に爲にする者の讒口と覺えたり。耳を信じて目を疑ふは俗人の常なり、小人の浮言に惑ひて御前の御恩を無みせむこと御家門永代の爲ならず。あはれ人心[illegible]として御慮り豫め謀り奉し。下として上に逆ふこと、爲人臣の禮ならむや。よくよく御賢慮あるべきなり。御[illegible]の次第使者を伺ひて[illegible]に及ふべし。さらば暇申す、と言ひ放ちてつと立ち上りける。

入道は法印の答辯に耳を傾けて聽き居たりしが、是の時高らかに、院宣の御使なり、各々咎禮申すべしと呼ばはりければ、居合はせたる一門諸士八十餘名、皆一同に庭上に下りて門送す。法印靜々と聞ばかり步み出で、やがて入道の方に向ひて一揖し、立歸られける。入道が憤激に恐れず、[illegible]に道理を以て使命を全うす。其の[illegible]より[illegible]に至るまで、流石は一代の碩儒信西の遺子なりと、人々感じ合はぬは無かりけり。

## 九　法皇の幽居

入道は靜憲法印が辯舌に當座の心を和らげ給ひけれども、一念の執着いかでか口耳の間に動くべき。翌日直に關白基房を初めとして太政大臣以下の顯官、公卿、雲客、苟も平家と快からざるもの四十三人の官職を罷めて蟄居閉居を命ぜらる。法印の使命によりて一時心を安うせし院中の人々、今更の如く驚き怖れて安き心もなかりけり。古より大臣の流罪は國中の重辟に依らざれば絕えて其の例なし。今は[illegible]る罪過もなく、唯々[illegible]に任せて[illegible]重臣を[illegible]し、[illegible]に[illegible]すること[illegible]

閑の非儀たり。
　然れども大臣以下の罷免は未だ以て入道が鬱憤を晴らすに足らざりき。鹿ケ谷の事、實に是れ入道が行住坐臥、何ぞ忘るゝ能はざるの恨事たり。成親、俊寛以下黨與の輩、或は斬られ或は流されたりと雖も、現に追討の院宣を賜はり、親ら其の席に臨まれし法皇の斯くてあらむ間は、平家の天下一日も安きを得べからず。是れ入道が常に念頭に懸けて憂慮せし所なり。彼れは幾たびか帝座に迫りて幽閉を企てたれども、内府世に在りし間は、流石に大義名分に怯れて其の我執を貫く能はざりき。今や内府世を去りぬ、世父苦諫を以て入道を沮むもの無し。入道如何ぞ其の宿志を思ひ起さざるべき。且や身は六十の頽齢を過ぎて餘命幾も無し、つらつら身後の事を慮れば、今にして其の計を爲さずんば一門の未來甚だ憂ふべきに似たり。平家の敵今や源氏に非ず、藤原氏に非ず、實に法皇なり。院宣一下して天下に號令せば順逆立ろに處を異にして名分永く立ち難からむ。今こそ當家の勢に屏息しても御在せ、入道世に無からむ後には、如何なる事を思ひ立たせ給はむも知るべからず。あはれ三十年來の忠勤もうたかたの泡と消えて一家の信任地に落ちたり。是の上は已みなむ、暴力を以て法皇を幽閉し奉り、一門の禍害を未然に防がむこと、入道が一期身後の計として誠に已むを得ざらむ乎。――是の如きはまさしく入道が心事なりしたり。かくて法皇幽閉の一大事は行はれぬ。

　法印問答のありしより越えて四日、治承三年十一月二十日、平家の軍兵法住寺殿に押し寄せて四面を打ち圍み、前右大將宗盛、帶甲の武士を隨へて御輿を中門に引き寄せ、法皇の出御を促し奉る。法皇驚いての給はく、汝等朕を如何とかせむとする。成親、俊寛の如く遠島に遷さむとするか。朕に何の咎ありてか斯くは平家の恨む所とはなれる、と。宗盛涙を流して曰く、如何ぞかゝる事の候ふべき、唯暫く世の靜かならむまで、鳥羽の北殿に御幸をなし參らすべしと、父入道の命ありしのみと。今は兎角の猶豫もあるべきに非ざれば、御涙ながらに御車に召されたり。公卿殿上人一人の供奉するものなく一二北面の下﨟の車後に隨へるのみ。平家の武士劔戟を輝かして前後を擁し、騎歩蕭々として鳥羽を指す、一に拘禁の客の如し。道路目を掩ひて能く仰ぎ見るもの無し。

　鳥羽の北殿、一に城南の離宮と云ふ。秋も暮れ、冬も半ばを過ぎぬ、[illegible]に[illegible]ばみ落ちて野に霜降り、南山の嵐、雨をふらして、寒庭の日影、徒にさえかへりなり。[illegible]に降り積れど、跡ふみわくる人もなく、池の水に閉ざされて、[illegible]の影たも留まらず。[illegible]の鐘、且暮にひゞけども、人は寂寞の中に幽思あり。西山の雪色、朝ごとに鮮かなれども、[illegible]悲みを累ぬるのみ。車馬の音、巷に遠けども、宮門深く鎖して人の訪るゝを許さず。衛士の[illegible]誰に向ひてか發せむ。年新たにして世は[illegible]の祝賀に忙はしきも、幽宮寂寞かにして人の省みるなし。

　明くれば治承四年となりぬ。入道も詣でず、法皇も御謹みの身なれば心よりの朝賀にも參仕する人だになし。今上は法皇の遷居以來深く憂に沈ませ給ひ、上下の事入道の心のまゝにして朝綱振はず、國家漸く多事ならむとするを歎き、夙に遜位の志あり。即ち潛かに書を法皇に寄せての給はく、當今君には艱難の地に落ちさせ給ふも、朕位に備はりて救ふ能はず。誠に在るに甲斐なき身なり。今や入道の外孫、早く儲位に備はれり。朕にして位を退きて世を遯れなば、外孫冊立の慶びに入道の心もなどか和らがざらむと。法皇報じて宣はく、身は拘

囚の境にある者も君の位にあるは何ぞ一夜の星火なり。劣心或に赤き者も君にして位を登になば叛また謀を企てむとし。然れども主上は間もなく位を皇太子言仁に讓りて新院と稱し給ふ。新しき帝は即ち入道が二女建禮門院徳子の出にして安徳天皇是なり。讓位の事萬づ入道が希望に出でしとぞ聞えし。かくて入道相國が妻は外祖父外祖母とて准三后の宣旨を蒙り、年官年爵を給はりて上邊の待遇、下臣の御望、偏に院宮の如し。凡そ出家の人の准三后の宣旨を蒙ること、歷史を按ずるに法興院の大入道藤原兼家ありしのみ。今や清盛武蕃の身を以て是の榮遇を受く、世に目覺ましかりし事共なり。

平家の榮華今や方に其の頂點に達しぬ。外孫帝位に即き、清盛は國母の父、今上の外祖として位三后に准ず。基房以下の藤原氏は夙に闕外に退けられて、朝廷の上卿は平氏あるのみ。法皇は鳥羽に遷居して院政全く亡び、大小内外の政務一として入道の左右に任ぜざるは無し。昔より一門の繁昌を極めたるもの、是の如きは未だ曾て是れ有らざるところ、藤原氏の盛時と雖も寧ろ遙に及ばざるを見るなり。暫くありし間に新院嚴島御幸の事仰せ出されぬ。是の御幸こそは平家一代の榮華に冠せられたる最大の榮光無前の盛典にこそありしなり。

抑々是の御幸の由來を尋ぬるにいと／＼恐れ多き御思召に出でたるなりけり。嚴島の宮は清盛先年安藝守たりし時、高野大師の示現に感じて修營せし所にして、黛朱の鳥居、百二十間の廻廊、七棟三殿、悉く輪奐の美を凝らし、丹碧海上に浮びて樓觀の眺め仙境の趣あり。神官より内侍神女に至るまで永代扶持の米田を併せて一切寄進せられき。爾來是の社は平家第一の神宮にして春秋節季の度毎に奉幣祭祀嚴かに執り行はれき。中にも入道は俗體の昔より出家の今に至るまで、一門の榮華皆是の神の惠なりとて信仰歸依最も篤かりき。今や新院御近き加茂、八幡を差し措きて、八重の潮路を遙々と嚴島の御幸を仰せ出されしは、入道の崇拜の神に詣でなば、公武の軋轢おのづから止み、入道が心も和らぎて法皇が幽閉の解かるゝこともやとの叡慮に出でしとぞ聞えし。一天の君にして、臣下の怒を和らげむが爲に心にもなき御幸を遂げ給ふこと誠に畏れ多くこそ覺えしか。

治承四年三月十七日御幸の旨いよ／＼披露ありければ、上下事の意外に驚きて、人心何となく穩かならず。中にも山門の衆徒集り議して曰く、主上位を退きて諸社の御幸初めには、加茂、八幡、春日か、然らずば我が山王にこそ參籠あるべけれ。是れ先代賢王の遺例なり。嚴島とは何の神ぞ、安藝國とは何の地ぞ。今回の御幸甚だ其の意を得ず。良し其の儀ならば神輿振り下ろし奉りて御幸を留め奉れやと、口々に罵り騷ぎける。入道辛く宥めて幸に事なきを得たり。翌十八日新院、入道が西八條の第に入らせ給ひ、其の翌十九日いよいよ安藝國に御幸なり給ふ。道すがら御輦を鳥羽の北殿に枉げて法皇と對面あり。夜未だ明けやらず、彌生半ばの有明の月は猶ほ夢の如く朧ろにして、越路をさして立ち歸る雁の音づれは雲井はるかに哀れなり。去年の春、朝覲の爲に法住寺殿に御幸ありし時は、諸衞陣を引き、卿相列に立ち、樂師亂聲を奏して掃部道路を開きしに、今は幽宮蕭やかにして門に送迎の人も無し。新院は門前にて御車より降りさせ給ひ、あまりの事に行き惱みて御在せしが、法皇ははや新殿の階上に出で、絶えて久しき御對面を待ち侘び給ふ。新院は今年二十、容儀端儷げに建春門院の遺照を傳へさせ給ひ、其の美しさ此世の人とも覺えず。明月の光に照り添ひて、

さやう/\と歩ませ給ふ御姿、世に貴くぞ見えにける。法皇一日より御籠りありて、[illegible]給ひて、御對面ありて暫くは物をも宣はず、共に御涙に衣の袖をぞ絞られける。警衛の武士は皆門前に立ち去りて、御前には召し使はれたる尼一人のみ候ひける。何れも御物語のつきせぬかず/\は想ひやられて哀れ深し。[illegible]にて、[illegible]夜も明くる頃、御暇を申して出で給ひ、草津より御船に召されて、水路はるかに嚴島へ向はせ給ふ。

同じ月の二十六日、新院嚴島に着き給ふ。入道相國、最愛の內侍の宿所を以て行宮に充てらる。御逗留は二日にして、其の間日夜を[illegible]舞樂を行はせらる。結願の導師公顯僧正、高座に上り鐘打ち鳴らして表白す。其の詞に、九重の都を出でさせ給ひ、八重の潮路をわけもちて、はる/\と是れまで參らせ給ひたる、御志のかたじけなさよと、高らかに申されければ、一座の君臣そゞろに感涙をぞ催されける。げに一天の君主、猥りに國外をも踏ませ給はざる御身を以て、都門を出でゝ十數日、京城を離れて百餘里、天涯の滄溟を凌いで旅泊の客とならせ給ふ。あはれ是れ何の因緣ありてぞや。實に是れ入道相國の權勢を和らげ給はむの叡慮に出でさせ給ふ、人臣の榮華此より何ぞ過ぎむ、[illegible]の前途は何樣にか平家の運命を案ぜさせ給ひ[illegible]依奉せさせ給ひし御方便の御志にて、平家の榮華をば、入る日をも招き返さむず勢に誇られしも、げに理なりきと覺えし。

結願既に終りければ、法皇は二十九日に御船に乗らせ給ふ。四月一日備後の兒島に泊り、五日攝津の福原に着きて、入道が別業に入り給ふ。やがて平家の一族に勸賞を行はる。七日福原を發して明くる日都に還御せらる。尚に入道が西八條の邸に入り給ふ。凡そ是の度の御幸、一として平家の意情を和らげむと力めらるれざる事無し。誠に君臣倫を失ひ上下道を代へ、入道の一念自尊を誇らしむること是の如し。彼れは以て一身の得意、私門の面目とせむ、たゞ天道の枉ぐべからざるもの、おのづから是の中にあらむ。平家榮華の極みげに嚴島の御幸につきたりき。早く茲に始まって天下の形勢漸く動き初めぬ。入道如何ぞ入る日を返し得むや。

## 一〇　源氏の勃興

治承四年[illegible]月の初め頃、[illegible]嚴島の御幸ありしより越えて一月、前兵庫頭源頼政以仁王を奉じて兵を起し、令旨を諸國に下して平氏追討の兵を擧げしむ。[illegible]、源氏宮を[illegible]に[illegible]し、以仁王も[illegible]に中りて[illegible]。平家[illegible]の[illegible]を[illegible]して六波羅に凱旋す。されど是れ[illegible]たりき。平家榮華の亡ぶる[illegible]の[illegible]にぞ[illegible]なり。

事の由來を尋ぬるに、以仁王は法皇の[illegible]にて御在しけれども、女院の[illegible]によりて[illegible]の宣旨をだに下されず。[illegible]日無き御身として年既に三十にならせ給ひけるも、[illegible]に籠居し、[illegible]下に[illegible]日を送り給ひ、秋は月の前に[illegible]あはれ[illegible]して世を果なみてぞ[illegible]ける。然に源頼政は攝津守頼光の玄孫にて、[illegible]功ありなり。保元の亂には[illegible]しかば、義朝が一族の亡滅する間に、獨り其の身を全うして其の家を保ちたり。治承二年、年七十七の時、清盛が奏請により從三位に叙せらる。されば世に源三位と稱せり。頼政既に平家の恩によりて位を進めたれども、平家の驕奢は常に其の快しとせざる所たり。源平の兩家は元と等しく、中間に出でゝ、共に衛衛の任を負ひたるに、今や上下處を異にして源氏は

平家の臣隷に外ならず。是れ頼政の流石に忍びざる所なりき。常に歎じて曰く、昔は大衆を防ぎ、兇徒を退け、朝賞に預り宿望を遂げしことは源平何れも優劣なかりき。然るに今や雲泥の交を隔て、主從の禮よりも尚ほ異なれり。僅に甲斐なき命ばかり生きたれども、國には目代に隨ひ、莊には預所に仕へて公事雜役に驅り立てられ、日夜安きことなし。衰へたる哉、我家の運命や、と。亦以て其の心事を察すべし。治承四年、頼政年七十九になりぬ、頽齢今や旦夕を保たず、而して源家の再興は夫れ何れの日をか期すべき。平家の權勢今を盛にして衰亡の機運未だ開けざれども、老後の思ひ出に一快戰を試みて諸國同族の氣勢を振はさむも亦可ならずや。是の如く思ひたる頼政は、先づ其の主謀者として皇族の一人を擁立し、名分を天下に正さむことを要す。彼れは是の主謀者を求めて以仁王を得たりしなり。

事の顚末は茲に精しく述ぶるの遑無し。兎にも角にも、以仁王は頼政の勸めに從ひたり。入道以下一門の暴横非道を數へたる平家追討の令旨は、東海東山北陸の三道諸國の源氏に宣傳せられたり。延暦、園城、興福諸大寺の大衆は起れ時に從へり。頼政は先づ南都に據りて事を舉けむと欲す。平知盛同じく重衡詔と稱して是を追撃し、有名なる宇治橋の戰は是に開かれぬ。衆寡敵せず、源氏遂に破れて頼政以下皆亡ぶ。以仁王南都に走らむと欲して、路に流矢に中りて薨ず。斯くて頼政が源氏再興の企ては遂に失敗に歸しぬ。然れども是れ源氏にとりては一時の失敗にして、却て永遠の勝利なりき。頼政は決して徒死せるものに非ざりき。

一葉落ちて天下の秋を知る。機變の漸く動かむとするを看取せる入道は自家防衛の手段として先づ福原遷都の事を決行しぬ。そも／＼京師は北嶺南都に相近くして動もすれば山門大衆の侵害を免れ難し。近く以仁王の事を舉げしも主として山僧の應援ありしが爲なりき。且つや王の令旨漸く傳はりて、東國の源氏亦漸く蜂起の形迹を現はしぬ。一日事あるの日、京師は自ら衞るに山河の險なく、外を攻むるに逼塞の患あり。假令ひ天下分れて二つとなるとも、福原に據り、兵庫の良港を控へたらむには尚ほ以て西海の咽喉を扼し、優に關東に拮抗するに足らむ。是れ入道が以仁王の事ありて後、倉皇として都を福原に遷しゝ所以なるか。遷都の事は、宇治橋の戰ありてより數日の後にあり。時維れ治承四年六月三日。

是の急遽の遷都はいたく上下を驚かしぬ。名は新都と云ふと雖も、街衢の經營あるに非ず。皇城の如きも僅に平頼盛が別業を以て是に充てたるのみ。況んや公卿百官の邸宅宿坊に至りては一も具はれるもの無く、人皆浮雲の漂へる思ひして、徒に舊京を顧みて流離を悲むものに似たり。元と此に住めるもの共は地を失ひて憂へ、今移れる人々は土木の煩ひを歎けり。入道は是等の不便を更に顧みず、一意斷乎又區々の躊躇を許さず。さながら匆劇の事變に遇ひて遁逃するものゝ如し、げに年近く起るべき都落ちの前兆にてありけむと、人々後にぞ思ひ合はしける。中にも傷はしきは法皇の御身なりけり。去年以來鳥羽の北殿にさながら拘禁の旦暮を送り給ひしさへあるに、今又以仁王の事あるや、入道大に憤り必定院宮の次第あればぞとて、俄に福原に迎へ奉り、三間の板屋を作りて押し込め奉り、武備の武士前後に見張りして人の近づくを許さず。人皆牢の御所とぞ申しける。

さはれ、福原の遷都は幸しく人心を得ざりしのみにして、平家に對する怨望は日にまし／＼加はりぬ。時の人相耳語して曰く、其るる安元

よりこのかた、大臣公卿或は殺され或は流さる、法皇を城南の離宮に押し籠め奉り、剰さへ第二の皇子高倉の宮討ち奉りて、今は残る所の都遷りぞ　悪業既に極まりぬ、何ぞ其の運命の長きを望み得べきと。人の望既に離れて天の命はた漸く迫りぬ。東國の源氏は今にも都に上らむず氣勢あり。風聞四もに起りて悉く皆平家の亡兆を傳へざる無し。入道の懊惱日に切りなり。

是の懊惱の際に當り、幾多奇怪の幻影は入道が夢寐の間に入りて彼れが煩悶更に其の深きを加へぬ。かの髑髏の怪異の如きは特に錄すべきなり。或るあした、入道帳臺より起き出で、妻戸を押しあけて、庭内を見渡せば、こは如何に、死人の髑髏幾十百、殆ど其の數を知らず、庭内に充ち滿ちて、上なるは下になり、下なるは上になり、或は右し或は左し、中なるは端へ轉び出し、端なるは中へ轉び入り、旋轉開閉、さながら渦紋の如く旋風の如く、靜にまろび合へりける。入道餘りの奇怪に、人やある〳〵と召されけれども、絶えて答ふる者無し。斯くする間に多くの髑髏何時しか合して一團となり、其の丈は凡そ十五六丈、全庭に溢るゝ許りの一大髑髏となり、一丈ばかりの活けるが如き大なる眼、電光の如く輝きて入道を睨と睨まへ、暫しは瞬きもせず。入道も亦面を振らず、睨と睨み返して、同じく瞬きもせず立たれければ、其の首次第々々に小さくなりて、譬へば霜雪の日に消え失するが如くなりぬ。又或時は入道が秘藏して朝夕撫で飼はれける駿馬の尾に、鼠一夜の中に巣くへ、其の上に子をさへ産みたりける。陰陽師安部泰道卜して曰く、是れ遠からぬ内に天下の大事起りて當家の不利となるべき兆なりと。又是の外にも入道が最も心を痛めしことありき。即ち入道先年安藝守たりし時、神拜の際靈夢を蒙りて嚴島大明神より授かりしと稱する白金の蛭卷したる小長刀常に枕を離さず立てられしが、一夜人の出入もなくして紛失しぬ。凡そ是等の怪異、一として平家の亡兆を暗示せるものならざるはなかりき。

事は遂に怪異のみに止まらざりき。入道が暗中の懊惱と煩悶とは更に白日の打擊となりて現はれぬ。平家十年の榮華の夢の醒むべき時は遂に來りぬ。源頼朝の起つべき時は遂に來りぬ。

## 二　入道の最後

治承四年九月二日、相模國の住人、大場の三郎景親急使を以て福原に上せて申しけるは、去ぬる八月十七日、伊豆國の流人、前右兵衛佐源頼朝、舅北條時政と共謀して伊豆の目代平兼隆を山木の館に夜討し是れを殺し、土肥、土屋、岡崎以下三百餘騎、石橋山に陣せるを、景親・千餘騎を以て押寄せ、散々に打破り候ひしかば、兵衛佐は纔に打たされて行方を知らず。大凡そ兵衛佐の旗揚げは一院の院宣並に高倉の宮の令旨ありて、諸國の源氏と氣脈を通ずる由承りぬ。一旦頼朝に破れて行方を知らずと雖も、關東の諸國心を寄するもの少からず、武藏、相模、常陸、房總の諸豪皆ら一敵に屬くの風聞切りなり。努め〳〵御油斷あるべからずと。

頼朝擧兵の報知は平家の耳目を驚かしぬ。若者の中には與ある事に思ひて、あはれ討手に向けられよかしなど言へるもあれど、誰れ言ひ合はさねど一門沒落の機目前に迫る心地して、陽に傲語すれども陰に憂色無きはあらず。中にも入道は報を聞いて大に怒りて曰へらく、東國の奴原は皆是れ六條判官爲義が餘類にあらずや。今や頼朝兵を擧ぐ。一門譜代の家人、何ぞ故舊主從の好誼を忘ずべき。あはれ思へば源氏の嫡流たる頼朝を何とて東國へは流しける。

是れ取りも直さず八州の源氏に許して頼朝を保護し、以て當家を亡ぼさしむるに異ならず。噫、は盗に鑰を預け、虎を野に放つに均しかりき。入道一期の無念、末代までの遺恨、げに是の一事ぞとて、躍り上り〳〵て罵り狂ひけり。稍々ありて自ら慰めて曰く、抑々かの頼朝は、去ぬる平治の戰に、父義朝が謀反により、既に誅せらるべかりしなり、但故池禪尼の宥め給ひしによりて僅に頭を繼ぎ得たりき。何事ぞ今や入道が是の大恩を忘れて却て當家に向ひて弓を引かむとは。其の儀ならば神明佛陀如何ぞ赦し給ふべき、天罰立ろに到りて亡滅日を期して待つべけむと。

然れども事は入道が自ら慰めし如くにあらずして、凡て其の恐れし如くなりき。頼朝の勢漸く加はりて今は關東の草木源氏の旗風に靡かざるもの無し、甲斐、信濃の源氏亦雲の如く應じぬ。かゝる間に義仲木曾に起りて北信、北越亦平家の命に從はず。年の十月には北條時政を先鋒とせる源氏の軍は、既に足柄を超えて駿州に入り、富士河の東岸に現はれぬ。諸國の源氏及び當家に背り會するもの凡そ十餘萬、旌旗劍戟岳南の曠野を掩へり。

警報頻りに福原に到る。今は一日も時代の期を延ばすべきに非ず。九月十八日、平家の勢三萬餘騎、新都を發して東征の道に向ふ。大將軍には小松の權亮少將維盛、副將軍には薩摩守忠度、侍大將には上總守忠清、以下一門の精兵を集めて其の勢ゆゝしくぞ見えし。少將維盛生年初めて二十三、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧を重ね、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置きて、袂ゆたかに打乘りたり。其の容儀の美はしく、帶佩の爽やかなる、繪に書くとも筆には及び難し。連年の榮華に弓馬の道こそ廢れたれ、馬鞍、鎧甲、弓矢、太刀、長刀に至るまで、鋼を鏤め、金銀を裝ひ、何れも時流の粹を凝したる裝束は光り輝くばかりにて、珍らしかりし見物なりき。

然れども平家の武士は最早や太平の裝飾に過ぎざりき。保元平治このかた、さしも威を天下に振ひたりし一門の勇武は、あはれ二十年の榮華に跡も無く消え失せて、今は殿上役者の娘子軍となりぬ。彼等如何ぞ關東武士の敵ならむや。

豈當に富士河の水鳥に驚ける十萬騎を怪まむや。源三位事を起して宇治橋の戰ありし時、折節五月雨の引續きたるに河水大に漲りき。平家の方の侍大將上總守忠清大將宗盛に謂ひて曰へらく、水漲り橋落ちぬ、かくて河を渡らば人馬共に多く滅びなむ。淀、一口へや向ふべき、或は河内路へや廻るべきと。時に下野國の住人、足利又太郎忠綱、憤然として揚言して曰く、淀、一口、河内路へは天竺、震旦の兵を召して向はれ候ふべし、坂東武士の習ひ、目に懸けたる敵を討たず、川を隔てたる軍に淵瀬嫌ふやうやある。續けや殿原とて、眞先にこそ馬を打ち入れたりけれ。げに當日の勝利は坂東武者たる足利が勇武にぞ歸すべかりける。

今や平家は一年ならずして、かゝる坂東武者を敵として富士河を隔てゝ對陣しぬ。宇治橋の軍に怯惰を笑はれし忠清は、又もや侍大將たりき。勝敗の數は問はずして既に明なるに非ずや。齋藤別當實盛が維盛の問に答へし言葉は、眞によく東西勇士の勝劣を較べしものなりき。曰く、あはれ君には實盛を大矢とばし思し召され候ふ。關東にては大矢と申す程の者の十五束に劣りて引くは候はず、弓の強きも亦六人して張り候。かやうの精兵共なれば、射つて三領を射透すこと誠に容易なり。且つや大名と申す程の者は、五百騎に劣るはあらず彼等馬に乘りて落つる道を知らず、悪所を馳すれども馬を倒さず。軍には親も討たれよ、子も

討たれよ、屍を乘り越え〳〵て、戰ひ候ふ。西國の兵、共にはかつて其の儀候はず。親討たるれば子は退き、子討たるれば親退く。夏は暑しとて休み、冬は寒しとて進まず。是れ東國武士の知らざる所なりと。かゝる優柔の懦夫を集めて、かゝる精悍の勇士に向ふ、千に一つも勝たうやらのあるまじくぞ見えし。維盛を大將軍とせる十萬の平軍は、是の如くにして富士河の水鳥の羽音に立つ足もなく逃げ歸りたりき。

維盛の逃げ歸るや、入道の憤怒と懊惱とは殆ど其の限りを知らざりき。精鋭十萬、敵に對して一矢を交へず、空しく風聲鶴唳に驚きて都に上りぬ。あはれ平家の兵力今はかくまで衰へたるか。東國の源氏幾十萬、戰勝の餘威に乘じて馬首西に向はゞ、關西久險難の是を支ふべき無けむ。是の如くにして平家は遂に如何に成り行くべきか。加ふるに北陸俄に雲亂れて木曾の山氣はやく都に迫らむとす。事體急迫、又且夕の踟躕を許さず。入道空しく煩悶すれども又如何ともするなかりき。

外患是の如く漸く逼り來りぬ、今は內訌の起らざらむを希ふべきのみ。福原の新都は上下の等しく嫉惡するところ、平家は爲に久しく怨望の府となりき。是に於て入道は衆議を容るゝと稱し、十二月の初め俄に舊都還幸の事を決し、且つ法皇の幽閉を釋いて院殿に安じ奉る。偏に一門の危機に臨みて悔恨の情を現はせるなりけり。然れども事既に遲かりき、輿望は既に平家を去りて遂に源氏に謳歌しぬ。人は平家の敗績を悲まずして却て源氏の戰勝を喜びぬ。近江源氏の掃蕩も、奈良興福寺の炎上も、尙ほ全局の氣勢を回復するに足らざりき。未だ曾て其の意に反して事を行はず、未だ曾て戰敗の屈辱を知らざりし入道が懊惱と煩悶とは果して如何ぞや。今は唯一門の勢力を傾倒し、興亡を一擧に賭して一大決戰を試むるの外無きなり。是に於て宗盛を以て大將軍となし、檄を四方に傳へて出兵を促し、闔族の精鋭を盡して東國の征討に向はしむ。將に十二月二十七日を以て京師を發せむとす。然るに天乎、命乎、宗盛京師を發せむとするの前夜、入道俄に病に罹りぬ。

げに怪しき病なりき。病みつける日より湯水も喉に入らず、身中の熱すること恰も火の如く、其の臥床の四方四五間の中は、熱氣燃ゆるが如く人永く居り難し。冷水の中に浴すれば、水湧滯して幾もなく熱湯に化し、水管を取つて管に灑げば、灑げたる水は焚ける石に注ぐが如く、水ほとばしりて附著せず、みもすさまじとばかりに見はれたり。醫官診て一門の其の病を解せず、藥餌亦施すに由無し。一門の子弟空しく枕頭を擁して歎くのみ。東征の軍亦期を失して發せず。上下茫然として爲す所を知らざりき。

越えて四日、入道病革まりぬ。夫人枕によりて涙を流して、御大事の際も今は間もあらじとぞ見奉る。思しめす事あらば仰せ置かれよと宣ひければ、入道病み衰へながらも氣色平生に異ならず、苦しげなる息の下にて宣ひけるは、保元平治以來、當家の面目、一身の榮華、世に思ひ遺すことも無し。唯一事の恨みは兵衞佐頼朝が首を見ざりつることこそ限りなき千秋の無念なれ。敢て一門の子孫將士に入道が最後の所存を傳ふべし。我れ死すとも、佛事孝養をも爲すべからず、堂塔をも建つべからず。唯急ぎ東國に討手を下し、早く頼朝が首を刎ねて我が墓前に懸くべし。それぞ今生後世の孝養にてあらむずるぞと。翌日遂に苦悶の中に薨じ給ふ。年六十有四。

嗚呼入道相國は是の如くにして死にぬ。數萬の軍旅庭にたつれども無常の羅刹に向ふべき

刃なく、天下の富貴堂に溢るれども、天命又醻ふに由なし。今は平家の柱石倒れ畢んぬ、一族の子弟又何をか頼み、誰にか憑らむ。外には強敵の關外に逼るあり、而して祖龍俄然として內に仆る。東國追討の遺命空しく人の耳に殘れども、誰か成功を百里の外に期するものぞ。日色暗澹として赤旗忽ち色あせたり。西八條の大路には車馬の響天地に轟けども、往反の客、顏に憂色あり。東征の軍旅徒に道途に彷徨して劍戟又光無し。誰れ言へりとには非ざれども、平家の天下今を限りとぞ見えにける。

二月七日入道が遺骸は北邙一片の煙となりぬ。法眼圓實、骨を抱へて攝津に赴き、經が島に納む。夕べあしたの濱の松風は悵悔の響を鳴らせども、地下の白骨長へに寂寞として英魂今は何れの空にか休らふらむ。春秋去來七百年、源平の興亡空しく舊時の夢を語れども、英雄の心事誰れか能く知るものぞ。嗚呼太政入道平清盛が六十四年の一生は是の如くにしてその終りを告げたりき。

## 二　清盛論

平清盛の傳記は略々叙し了りぬ。今や終りに臨み、其の人物に就いて少しく論ずる所あるべきなり。

世の清盛を評するもの、其の狂悖暴戾を言はざるは無し。彼れ帝寵に狎れて政權を擅にし、法皇を幽閉し、大臣を流竄し、名を敕宣に假りて恣に遷都せり。彼れ實に狂悖暴戾の名を辭すべからざるなり。然れども彼れは其の狂悖なることに於て些の矯飾無く、暴戾なることに於て些の詐無かりき。彼れの惡を行ふや公々然たり、昭々乎たり。而して自ら顧みて其の心に疚しき所あらざりき。彼れは自ら甘ぜむが爲には如何なる事をも忌避するものに非ざりき。彼れは實に狂悖なりき、暴戾なりき。然れども狂悖と暴戾と、彼れ其の惡たる所以を解せざりき。彼れの心は常に洞々然として毫も晦所無し。願ふに天眞爛熳の四字、以て彼れが心事を評すべけむ乎。

彼れは最も強烈なる意味に於て我執の人なりき。彼れの眼より見れば天下は已れの爲に存せるものに過ぎざるのみ。自己の意志を徹底し、自己の勢力を實現するの外、別に人生の意義を認めざりき。忠と謂ひ、義と謂ひ大義と謂ひ、名分を謂ふ、彼れより見れば一種習慣上の名目に過ぎざるのみ。彼れは是の如き名目に對して自己の滿足を犠牲とすることの甚だ謂はれ無きを信ぜしなり。彼れは唯々其の猛烈なる意志を以て到る處に我執の一念を貫徹せむと試みたりき。あはれ是の如くにして狂悖暴戾たらざらむと欲するも豈得べけむや。

自家權勢の擴張は彼れの最も大いなる目的なりき。其の手段の巧拙如何は姑く措き、彼れが六十餘年の生涯を通じて終始渝る所なきは實に是の目的なりき。彼れは是の目的の爲に保元に爲義を亡ぼし、平治に義朝を殺し、源氏を仆して天下の武權を握りたりき。彼れは是の目的の爲に後白河法皇に繾綣し、徐ろに帝寵を博して朝家の地盤を造りたりき。關白太政大臣以下藤原氏の大官を掃蕩せしも亦是の目的の爲に外ならざりき。而して彼れの理想は疑も無く藤原氏の盛時を移模するに存しき。是を以て彼れは其の女を納れて皇后となし、其の所生を立てゝ太子と爲し、而して遂に安德天皇の即位を見るに及びて彼れの理想は全く茲に實現せられたり。彼れ今上の外祖として三后に準ぜられぬ。文武の勢力一身に集まり、天下の事意の如くならざるは無し。是の如きは道長、賴通等の猶ほ及ばざりし所、清盛一介の武弁を以て忽ち是に至る、滿幅の得意想ひ見るべきなり、

彼れが空前の榮耀と絶後の豪華とは畢竟是の得意の裝飾に外ならず。

彼れが是の得意を妨ぐるもの、卽ち彼れの死敵なり。其の前には帝王の尊なく、仁義の道無し。是を以て彼れは法皇を幽屏するに於て何の躊躇する所無かりき。內府重盛が諫言の如きは、彼れ如何ぞ能く解し得べき、唯其の至孝の熱誠に動かされて一旦の執念を緩めしのみ。されば重盛の死するや、彼れの初志は立ろに實行せられたりき。故に法皇幽屏の事、人は以て暴戾不臣の極となすも、彼れ自ら省みて何の疚しき所なく、唯敵黨に對して自家の權勢を防衞する所以に過ぎざりしのみ。其の爲義、義朝たると、成親、西光たると、將た法皇たると、彼れの見て自家の敵とする所以に於て素と一のみ。是を以て彼れは是の不臣の大罪を犯すに當りて、毫も名義を矯めず、公々然として其の所信を告白せしに非ずや。

見よ、彼れが筑後守貞能に向つて言へる言葉の如何に眞率なるよ。彼れは保元平治以來、身命を抛ち、一家の亡滅を顧みずして偏に君の御爲を思ひたるを說いて曰へらく、君には斯くても當家の勳功を輕しとし給ふにや。如何なる人の如何なる事を申すとも、義として爭でか是の一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに何ぞや成親如き無用のいたづら者、西光と申す下賤の無道人が、恣に申すことに君の隨はせ給ひて、動もすれば是の一門滅ぼさるべき御陰謀こそ奇怪なれと。彼れの心を察するに彼れの榮達は其の勳功に對する至當の報酬のみ。朝家の今日ある、偏に吾が家の力に依れり。良しや一旦の非事あるも、君主如何ぞ義として吾が家を捨つべけむや。今や輕々しく讒口に從ひて是の久年の功勞を顧み給はず。事是に至りては、法皇の幽屏、彼れに於て自家の正當防衞に外ならざるのみ。彼れ既に君臣の大義を知らず、君君たらずと雖も臣臣たらざるべからずと謂ふが如きは、彼れの解せざる所の倫理に屬す。彼れは是の所信を明々地に告白して敢て忌憚する所なかりしなり。

更に見よ、法印靜憲に向ひて法皇の無情を鳴らしたる彼れの怨言の如何に痛激に、如何に眞率なるかを。彼れは內府中陰の際、八幡の御遊ありて毫も一門の悲歎を顧み給はざるを怨み、內府世襲の功田が故無くして官沒せられたるを怨み、自己薦むる所の人の顧みられずして、却て藤原氏の族の擧げられたるを怨み、而して揚言して曰く、假令ひ入道如何なる非分を申し出づるとも、老臣數十年の忠勳を憶はれなば、などか一たびは聞し召し給はざるべき。鹿が谷の事の如きは偏に君の主謀に本づく。良しや入道に多少の過怠あるも、是の一門を七代までは捨てさせ給ふべき由やある。入道存生の中にだも、尙ほ動もすれば追討の御結構あること是の如し。况してや入道の身後に及ばゝ、子孫後昆夫れ何に賴り、誰れを憑みてか安きを得む。世は早や是までなり、吾れは唯吾が爲さむと欲する所を爲すべきのみと。其の言の不忠を極めたる素より論無し、唯何ぞ其の心事の率直明瞭にして其の云爲の天眞爛熳たるや。彼れはげに不忠の臣なりき、然れども彼れは又同時に無邪氣の好人物なりき。

彼れはげに無邪氣なりき。彼れは其の生涯に於て殆ど其の素志に反して事を行ひたることあらざりき。重盛の諫言に從ひたるは恐らく其の唯一の除外例なりしならむ。彼れの行ひは常に公々然たり、洞々乎たり。言はむと欲する所は是を言ひ、爲さむと欲する所は是れを爲す、些の衒氣なく些の矯飾なし。彼れは僞善を解せざるのみならず、又僞惡をも解せざりき。彼れの云爲は彼れに於て唯其の自我本心の流露のみ。他の評して善と言ひ、惡と云ふもの、彼れ

に於て多く關する所に非ざりき。畢竟自我の滿足、是れ彼れにとりて最上の道義たりき。

自我の滿足、嗚呼是れ餘りに廣濶なる道義なりき。彼れが不忠、不臣、狂悖、暴戾、殆どあらゆる惡德を以て稱呼せらるゝ所以のもの、是の餘りに廣濶なる道義の遵奉者たりしが爲のみ。詮ずる所、彼れは當代の倫理を超越したる一巨漢なりき。二十世紀の言葉を以てすれば彼れは極端なる個人主義、我執主義の人なりき。卽ち今の倫理學の口吻に隨へば、彼れは不道德の人に非ずして無道德の人なりき。彼れは善人にもあらず、惡人にもあらず、唯一個の巨人、一個の快男子に過ぎざりき。

彼れの無邪氣と天眞爛熳とは彼れの生涯の何れの部分にも顯はれたり。彼れは道路の誹謗を僨せむが爲に三百の禿童を市に放ちたり。何ぞ其の事の奇想天外より落ちたるや。彼れは太政入道の尊貴を以てして白拍子を弄べり。佛の姿色あるを見るや、妓王は立ろに放たれたり。何ぞ小兒の玩具を取捨すると相似たるや。彼れは其の孫兒の故を以て關白を脅かせり。鹿が谷の事あるや、彼れは公々然として法皇幽閉の已むべからざるを宣言せり。重盛の抱衣大冠して來り諫むるに遇ふや、甲冑の上に法衣を纏ふの兒戲を演じたり。建禮門院に男子の出生あるや、六十の老入道、涙を流して抃舞せり。彼れは是の喜びの餘り、法皇を遇するに一修驗者を以てするの不倫に心附かざりき。是の如く彼れの行爲は決して深謀遠慮ある者のそれに非ずと雖も、處に隨つて赤心あり、熱誠あり。一言すれば大人にして、尙ほ小兒の心を失はざるものなりき。若し其れ智を競ひ勇を較ぶれば當代何ぞ其の人なからむ。清盛の事を成せるは門地と境遇とに由るもの多しと雖も、而かも、是の赤心と熱誠と能く一族將士を收攬するの力ありしに職由せずんばあらず。

是の如くにして彼れの一生は、彼れの主義、彼れの理想、彼れの自我の實現を以て貫通せられたり。是を以て彼れの傳記は最も嚴密なる意味に於ての彼れ自身の傳記なりき。彼れの時代は不幸にして彼れの意志に服從せり。是に於てか彼れ自身の傳記は不幸にして彼れの時代の歷史となりぬ。我邦古來英傑の士少からず。政權の大を以てすれば藤原氏の連系の如きありき。然れども一人の意志を以て一代を征服し一人の傳記を以て一代の歷史を語るもの、清盛の如きは未だ曾て是れあらざりき。彼れの一生は個人の勢力が如何に時代の倫理と制裁とを無視し超越し得るかを示せる歷史上の一惡例なりき。然れども是の惡例を現示せる彼れが一生は又個人の强大なる意力の那邊に達し得べきかを示せる一好例なりき。彼れは惡むべき人なりき、然れども同時に又羨むべき人なりき。

而して彼れの一生に於て最も羨むべきは其の最後なり。彼れが其の死に臨みて現はせる猛烈なる意志は、彼れが六十四年の崇大なる生涯に對する一大掉尾にして、彼れの生命と人格とに向つて一層の不朽と偉大とを加へたるものなりき。古より英雄の最後人を動かすもの甚だ多し。唯清盛の場合の如く悲壯を極めたるものは、吾人の未だ曾て知らざる所なり。

見よ、東征の軍旅將に程に上らむとするの前夜、彼れ俄然として大熱に冒されたりと謂ふに非ずや。而して其の熱は方四五間の間、人の接近を許さざる程の大熱なりしと謂ふに非ずや。比叡山より下せる冷水は彼れの體に觸れて忽ち沸騰せりと謂ふに非ずや。凡そ人間ありて以來、其の體溫の沸騰點以上に達したるが如きは古今東西何處にか其の類例を見得べきや。清盛は實に是の如き大熱に罹りたり。生きながら地獄の神火を胸に燃やして人間の呼吸を炎に化するものの如きは古往今來清盛一人あるのみ。而

して彼れは胸に是の大熱を蔵して尚ほ其の一念の執着を遺却する事あらざりき。彼れは熱の爲に其の猛烈なる意力を欺遯せらるゝことあらざりき。見よ、彼れの遺言の如何に堅大猛烈を極めたるかを。佛事の孝養、堂塔の建立の如きは我が死後に於て欲せざる所なり。願ふ所は唯一のみ。急ぎ東國に討手を下し、早く頼朝が首を刎ねて我が墓前に梟せよ。今生後世の孝養何物か是れに如かむやと。嗚呼是れ彼れが最後の意志なりき。

豈怪むに足らむや、彼れは其の一生の事業に於て一も悔恨すべき事を見出さざりき。是の執着を以て生きたる彼れ、如何ぞ是の執着を離れて死するを得む、事素より當然のみ。夫の病苦に惱みて心身を消耗し、臨終の一念によりて俄に來世を欣求するものの如きは、其の生命の意義茫として尋ぬべからず。清盛は是の如き薄弱の徒に非ざりき。彼れの意志は即ち彼れの生命なり。彼れ死に臨みて尚ほ其の意志を徹底す、是れ死して尚ほ生くる也。彼れが六十四年の生命は是の如くにして初めて光焔あり、意義あり、價値あり、偉大ありと謂ふべし。吾人清盛の死を大なりとす。

嗚呼清盛、彼れは生まれて其の爲さむと欲する所を爲しき、天下は彼れの意志に服從せり。彼れは是の生涯に於て常に自ら安じ且自ら甘じたりき。惡逆無道の名を後世に流せりと雖も、彼れに於て素より遺憾なかるべきなり。吾人清盛の生を大なりとす。

（明治三十四年夏）

## 幽靈的宗教

吾人は宗教の現在を言はず、何となれば、今の我邦には宗教なるもの存在せざればなり。既に存在せざる宗教に滅亡もなく、未來も無し、其の前途を論ずるの要無き也。然らば今の所謂宗教を何と名づくべき乎。已む無くんば幽靈的宗教乎。名ありて實無く、形ありて體無ければなり。

國家的要素としての宗教が、其の生命を失ひしや已に久し、今日僅かに其名によりて存するものは、形骸のみ。一部迷信者流の信仰は、國家の文明と何の關する所なし。獨逸には無頓着主義 In differentismus ありき。されど既に無頓着を以て主義となす、尚ほ多少の宗教的要素を帶ぶ。我國民は既に事實に於て無頓着なり、亡ぼすべき宗教なきに、又何の主義なるものを要せむや。夫の圓頂緇衣の徒は、世襲的職業として生活の爲に讀經するのみ、他の故あるにあらざる也。人は埋葬と墳墓を託するが爲に所謂信徒たるのみ、他の故あるにあらざる也。儀式的に讀經し、説教し、儀式的に禮拜し、喜捨す、他の故あるにあらざる也。是を以て、日本國民を以て佛教徒となすものは、鯨を以て魚となし、蝙蝠を以て鳥となすものなり。佛教の存在は歴史上の惰力のみ。國家文明の之を見るや、風馬牛のみ。若し夫れ永久にコムマ以下たるべき運命を有する基督教徒の如きは、素より言ふに足らざるなり。

（明治三十一年九月）

# 平家雜感

編者曰、此一篇は故人が初め「太陽」に掲載の後、自ら抹殺せしものにして、近頃の發見にかゝり、「樗牛全集」前版第二卷に載せたるものと稍異るのみならず、故人が行文に心を傾けしことの偲ばるれば、其の趣をとゞめしなり。本文中〔　〕の中なるは抹消、（　）の中なるは加筆、「…」は添削の文字不明の所にして、標題また故人の改めしものなり。

## 一（入道相國）

世にも哀れは平家とぞ云ふめる。まことにこの一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなか〳〵に及ばざりけり。

按ずれば一旦の榮華にふけりて百年の計をおもはず、秋や嵐の吹きすさばむずあした、なほ春の夜の夢おぼろにして、醒めての後は、行手をば流石に浮世と觀じても、先世後代、既に梭をかへたるを如何にすべき。今を昔にかへさむ術も片糸の、よりくづれたる世こそかへす〴〵も是非なけれ。

さればこゝに風雅にかくれては一題の遺詠に今生の本懐を終り、かしこに恩愛に絆されては三身の現在に來世の果報を思はず、哀れは桐の一葉に散り初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。想へばくしきまでに哀れなりける運命かな。

## （二）

〔さるにても〕入道相國こそ（男の中の）〔面白き〕男なりけれ。人をも君をも物の數とも思はざりし〔不敵の根性〕は、げに惡逆無道の極みにはあんなれど、この世をおのが心のまゝにして、飽くまで我意をふるまへるさま、またなくぞ見えし。〔男たらむはかくもこそありたけれ。」

弓矢のいさをしはや畢（り）〔ん〕ぬ、朝家の權柄今（を）〔はた〕さかりなり。一門殿上にのぼりて六十餘人、私封本國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなこゝに集（り、）〔る。〕むかしは殿上の交をだに嫌はれし人、今はこの人ならでは人に非じと唱は（る。）〔れ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏爲めに目を側つばかりなり。されば十善の帝王、かしこくも外祖の威におされ、一とせ八幡賀茂御幸は、八重の潮路を嚴島とぞふれられける。」なにがしの卿が入る日をも招きかへさむず勢と書かれしも、げに理なりきと覺ぼし。

不敵なる入道は私門の榮に飽き足らで、世に人なきやうに振舞はれける〔こそゆゝしけれ〕。こゝに卿相雲客流離の難に遇ふもの四十餘人、「……」法皇の御身を以てしても、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給（ひぬ）〔ふ〕。中にも、重代の帝座俄に動きて、をたぎの里の哀れをとゞめけるこそなか〳〵淺ましかりしか。

（さはれ不義の富貴は浮べる雲に等しかりき。）〔咲きも殘らず、散りも初めぬ櫻花、あらし無くともかくてやは已むべき〕。一朝東關急を傳へて（より）、西風漸く競はず、〔大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萠黄匂の鎧着て、連錢蘆毛なる馬に金覆輪の鞍おかせたる容儀帶佩こそ、天晴平門隨一の貴公子にはあんなれど、富士河の水鳥に算を亂して十萬餘騎は、おぞや後代の笑を留めしに過ぎず。〕加ふるに北〔國〕〔上〕俄に雲亂れて木曾の山氣漸く都に迫

り、雨山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日にますます急なり。

時しも入道病にかゝりぬ。げに怪しき病なりしかば、生死の境旦夕に逼りきと覺ほし。あはれ病の床のさびしきに、一霜夜の鐘の枕に沈む時」安藝守のむかしより太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を靜におもひ出でむ時、而して命の際の今の身ぞと觀ぜむ時、彼れ果して如何の感慨を〔ぞ〕催しける〔ぞ〕。一代の榮華身にあまりて「……」保平のいさをし又かゞなふるに遑無しとは思はざりしか。已れにつらかりし人々をかくまでに惱ましゝことの罪深かりきとは思はざりしか。」幾度か帝座を驚かし、はては軍兵を擁して法皇を幽閉し奉りしことの、〔中にも〕非道の〔行〕〔所〕爲なりし(とは思はざ)〔を思ふことなか〕りしか。更に小松の内府が身命にかへて乃父の罪業をまもりし至孝の情におもひ至りて、恩愛のきづなに〔うたゝ〕悔恨の心を動かすこと無かりしか。かりに佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱のほだしを離れむず大事のきはに、今生の名利を捨てて未來の涅槃を欣求するの一念を發すること無かりしか。否々、あらず、入道こそは死に至るまで其の初念を飜すことあらざりき。彼れはまさにその生ける如くにして死したりき。

兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも遺憾なれ。我れ死にたりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、頼朝が首をはねて、わが墓前に懸くべし、それぞ今生後世の孝養にてあらむずるぞ。(彼れの遺言は斯くなりき。)〔一念の執着に必衰の運命を物ともせず、〕三世の因果を身にかへても、倘ほ怨敵に報〔ゆ〕〔ふ〕るを〔必〕なす、(げに恐ろしき執着にこそあり〕あはれ丈夫の心はかくこそ強くありた〕けれ。(飽くまで我意を徹し)道に背きて〔心に〕疚しからず、善惡一我の擇ぶにまかせて、毫末も悔ゆる所無し。天も落ちよ、地も裂けよ。四海の波をひるがへしてわが頭にかくるとも、なほこの一我を如何ともするなし。六尺の眇軀こゝに至れば天地の大にも較ぶべく、運命われに於て浮塵に等し。所謂死して而して生くるもの、入道こそはまことに古今の大丈夫にてありけれ。

## (二)〔三〕　(小松内府)

小松の内府重盛は正しく入道が嫡統にてましませども、その(心)〔さが〕はいみじう違ひ給へり。入道が執着強く(我意)〔情〕剛はきに反して、内府はあくまで道理に、明かに、〔明なる人なり。〕よく人を恕し、察し世を思ふ人なり。身は武臣の末を以て連府槐門の位にいたり、一門の所領國郡に半ばし、田園・家の進止たるさへ前代未聞の末おそろしき朝恩なるに、父の非道日につのり、はては帝座に迫り參らせむこと、まことに神慮に恐れあり。こゝに四恩十善の教に君臣の大義を說き、忠孝兩全の歎きに父子の私情を訴ふるさま、申し受くる所詮は、只重盛が首を召され候らへとまでの諫言こそ、世にもあはれの極みには覺ゆれ。

されど入道が非業はいよいよつのりまさりぬ。解脫同相の衣はかたのみにして、破戒無慚の行ひ日に新なり。「上下心を惱まし、災異しきりに起り、天地暗澹として世は心細くぞ見えにける。」よろづ深く思ひ入り給ふ内府は、そゞろに無常の歎きを增しぬ。一夜熊野にわけ入りて、祈り申さく、平家の運命倘ほ盡きずんば、願はくは入道が惡心を和らげよ、もしさなくして、榮耀一期に限り、恥後に及ぶべくば、願はくは重盛が命數を縮め給へ。かくて冥願證を現はして内府病にかゝりぬ。ござんなれ、一門の運命も今を限りと覺ゆるぞ、宋醫神の如きも我れに於て世を永うするの願無し。無紋の太

刀やがて後身に傳はりて來世の願ひ遙に育王にわたりぬ。入道が最後の上なく勇ましかりしに較べていとも〳〵哀れなるは内府が末路なりけり。

〔四〕

さはれ小松殿は朝家の重臣、平門の柱石として、公私内外の望みのあつまるところ、いかなれば一身を安んずるをこれ急ぎて、この世、この人、わけてはこの君の將來を慮り給はざりしか。〔いかなれば佛説無常に感じて自ら世を早うせさせ給ひしぞ。〕世は如何にもなりなむ、ただ力を盡し忠を勵みても及ばざらむ時、かねてなき身のせむすべなからめやは。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を冥々の後に祈願し給へるこそ、かへす〴〵も心得ね。内府かくてあらむ間は入道が惡逆もさほどまではつのらざりしなるべく、壽永の秋に都落の哀れもなかりしなるべし。そも〳〵兵衞佐が旗揚も内府世を早うせさせ給ひければにこそ。

〔五〕

保元平治の昔には、さしも名だたる平家の旗風の、かくも振はざらむとは誰かおもひ知るべき。泰平四百年の間に薫蒸せられたる王朝文弱の風に染みてより、わづかに三十年、黑金卷の無反は螺鈿の細身となり、素布の狩衣はいつしか禁色雜袍に朝家のさかえを誇りぬ。あるは容儀帶佩の美に後宮の譽を望み、あるは歌舞音樂のたくみに時流の名を爭ふ。さればよし太刀とるすべは知らざるも、歌詠まざらむを恥となし、弓ひく腕は弱くとも、管絃の調べに習はざらむを恐る。かゝる間に關東の武夫雲の如く起りぬ、勝敗の數戰はずして既に分れ、沒落の運命この時はやく定まりぬ。

豈たゞに富士河の水鳥に驚ける十萬騎を怪まむや。一とせ源三位の事ありて宇治橋の戰ありし時、平家の方の侍大將、上總守忠清、橋上の戰手痛きを望みて、折節五月雨の水に河渡すべき力無く、今にも敵に馳せ加はらむず南都の大衆を控へながら、淀、一口、あるは河内路に廻るべくやなど詮議す。下野國の住人、足利又太郎、あはれ優長なる軍詮議かな、目にかけたる敵を討たずして宮を南都に入れ參らする法やある。淀、河内路へは天竺震旦の武士を召して向はれ候へ、坂東武者のならひ、川を隔てたる軍に淵瀨嫌ふやうやある、續けや殿原、とて、眞先にこそ打ち入れたれ。その日の勝利はげに坂東武者たる又太郎が先陣のいさをしにぞ歸すべかりける。

世はひるがへりぬ、同じ年、平家はかゝる坂東武者の敵をして富士河のほとりに對陣しぬ。宇治橋の戰に優長たる軍詮議を笑はれたる忠淸は又もや侍大將たりき。千にひとつも勝たうやうのあるまじくぞ見えし。そのをり齋藤別當が申し條こそ面白けれ。

いとほしや大將軍の君にはこの實盛を强弓とばし思召し給ふにや。坂東にては大矢と申すものの十五束に劣りて引くは候はず、彼等、馬に乘りては落つるを知らず、惡所を馳すれど馬は倒さず。軍には親も討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乘り超え乘り超えて戰ふまでなるを、あはれ西國武士の優長さよ。親討たれぬれば子は退き、子討たれぬれば親は引く、寒しとてたじろぎ、夏はあつしとてためらふ、凡そ東國の軍にはゆめ左樣の事候はず。

かゝる柔弱の懦夫を集めて、かゝる剛健の勇士に向ふ。嵐の前の木の葉のごと、一さゝへもたまらず散りぬるこそ是非なけれ。

〔三〕〔六〕（都落）

凡そ人國のつたへ遺しゝ史は多かれど、平家

の都落ばかりあはれの極みにもまた目覺ましき限りなるはあらじ。東夷北狄なんどの夢にだも知りがたき美はしき歴史はげにこれよりぞ始まりぬる。」

平城の餘燼未ださめず、羣賊の勝閧尚ほひゞきぬるに、信都俄に雲亂れて、木曾の五萬騎は比叡の前後に滿ち〳〵ぬ。宇治、淀の備へもろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。ござんなれ、一門の天下、身をおくに處なく、この世のうきにみよし野の、山のあなたに隱れ家もなきか。いざさらば已みなむ、都の中にていかにもならむよりは、西國の御幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はむや。生死もわかぬ別れ路に、人のあはれの限りもなし、また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅、池殿、西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京、白川の四五萬家を倂せて、一炬の煙となしはてぬるこそあわたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎むなしく殘り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元このかた、天下の榮華を盡したる花の都の故鄕をやけ野の原とかへりみて、末も煙の波路をば行方もしらずさすらふらむ。直衣束帶の身にも今は黑金の衣をのべければ、誰かは咏嘆の餘哀になれて弓矢の譽を勵むべき。さても捨てかたき命や。今こそは面にも人にも憂かりけれ、流石は忍ばるゝ昔の樣の夢に入るをば如何にせむ。翠華搖々として西に向へば、秋風到るところ野に充てり。あゝ昨日は東關のもとに轡を並べし十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行く手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず、渚によする波の音、袂にやどる月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出るさの山の端をあなたの空とや思しけむ、日暮舷に笛ふく人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼、この時、この人、想ひ果して如何。

〔七〕

古より亂離の世には反覆の人あるを免れず、安きを求め、危きを避くるは、已みがたき人の情なれば也。さもさうず、一の池殿の大納言が、舊恩をたのみとして兵衛佐が芳心を望みしを外にして、平家の一門は、上は大臣納言より、下は衛府、諸司の掾に至るまで、とも〴〵に沒落の運命を同じうせしこそゆゝしけれ。

想へば積善の餘慶既に家に盡き、積惡の餘殃早く身に及べり。もとより賴もしからぬ行末かけて、何をか望み、何をか願はむや。たゞ十善の帝王、三種の神器を擁して今ぞ一門の末路に立たせたまふ、いでや如何ならむ野の末、海のはてまでも行幸の御供申し、先世の契りをふみ、かつは重代の芳恩にこたへなむず。あはれ故入道大相國、淨蓮大禪門も照覽あれ。世は是非ならぬ武運の末とこそ聞ゆれど、名門の最後はかくてこそあるべけれ。

げに名門の最後はかくてこそあるべかりけれ。およそ邦家の滅亡、必ずしも美はしからず、たゞ平家の沒落にいたりては何物の美かよくこれに類ふべき。

源氏の興亡の如き、あづまえびすの品下れる、言ふばかりなし。重代の仇未だ報いざるに、同門の隙早く開け、四海僅に一に歸せば兄弟の爭ひ直に始まる。兵衛佐はげに智謀にたけたる大將にはおはしけれども、みやびたる優しき心、露ばかり有ち給はざりき。我執の念、餘りに強かりければにや、ねたみ深く、心ひがめり。されば讒妬やゝもすれば骨肉の間に入り、一族の連枝、時に路傍の人にも劣れり。權勢いくばくもなく臣家の手に落ち、宗廟はやく祀りを絕てども、一人の義に殉ひ、恩に死するもの無し。かくの如くにして兵威何のたのむところぞ、利運何の喜ぶところぞ、而して衰亡また何の悲む

ところぞ、盛衰興亡はもと人事の常、むしろ深く喜憂するに足らざらむ。たゞその運命に當るの人、心優しく情うるはしからば、何の幸かよく是れに加ふべき。あゝ吾れをして時を同じうせしめむか、願はくは源氏となりて興らむよりは、むしろ平家となりて亡びなむ。

〔八〕

或は文弱と誚られもせむ、或は優惰と笑はれもせむ。たゞ坂東武士のむくつけきにくらぶれば、平家の侍こそ心往くばかり床しけれ。

よしや身は西海の藻屑とはてもせよ、藻しほ草かきのこしたるこの歌の一つだに殘らざらむには、見はてぬ夢の何ぼう口惜しかるべき。こゝに沒落の悲劇に際して五條の三位をおとづれし薩摩守、情も深う、哀れも殊に勝れたらずや。

おなじき哀れは義政が上なりき。永代の名器この身と共に亡ぶべからず、この身、今都を落ちて何れの日いづれの時か再び歸り來べき。こゝに鐵衣の袖に青山の琵琶をかゝへ、泣く〳〵仁和寺の御所にまかりぬるこそ、いかばかり優にやさしく覺えしか。

津の國は一の谷、水島、室山の餘燼をこめて、けふぞ源平わけ目の軍、坂東武者のはやり男どもが、一二のかけを爭ふ間に、絲竹管絃の樂を恣にせるなど、心ゆくばかり哀れならずや。げに東國の勢、何十萬騎かあるらめども、鎧の袖に笛もつ人のあるべしや。梶原源太が二度のかけに、箙に梅が枝かざしゝは、源氏無二の美譚と傳ふれど、無官の太夫は薄化粧して討たれしぞかし。

一の谷に敗れてより、最後の日は日に近づきぬ。氣にはやる源九郎、はやくも四國にわたりて、平家又海に浮びぬ。阿波、讃岐既にそむきて、敵の勢日に加はれり。長汀の煙波もとの如くうるはしけれども、こと〴〵く敵地なれば、漕ぎよすべき渚も無し。あはれ平家、かゝる時にだも風雅の遊ひは忘れざりき。日暮小舟を漕ぎよせて、高く紅の扇をさし立て、柳の五衣に緋の袴きたる女房のそを射よとぞ誘ふめる。那須の與一がほまれの弓勢に、兩軍舷をたゝいて相和せしが、かの船の中より平家の侍、あまりの面白さに感に堪へずやありけむ、扇立てたる所にて舞ひすましけるをば、無慘や、與一は是の侍を眞個に射仆しけり。東えびすには人を殺す外に哀れと云ふもの無かりしぞ是非もなき。

（四）〔九〕（沒落）

平家はさすがに名門のこととて、沒落のきはまで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゝしくもまた哀れの極みなりき。

木曾は兵衞佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣を乞ひうけけれども、孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合體して兵衞佐討つべきよしを言ひ送りぬ。平家の答へは斯くなりき。よしや世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて如何でか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく甲を脱き、弦をはづし、來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきかと。あゝ何ぞ其の言辭の堂々として亡落のやからに類はざるや。平家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頽勢を廻らさむとだに思はゞ、かゝる時こそ乘ずべき機會なりけれ、さるを名分の正しきを執りて、成敗の數をかへりみず。若し偏に利害の關よりすれば、迂は則ち迂ならむも、斯くして滅びむは、垢を含みて存らへむよりも如何ばかり美はしかるべき。

太宰府に落ち行くや、緒方三郎使して申し

けるは、まことに重代の芳恩を思はざるに非ざれども、一院の仰せ默しがたければ、九國におき奉るべき地も候はずと。平大納言(時忠)乃ち衣冠束帶して出で向ひて宣ひけるは、それ我君は天神四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ、祖宗歷代の神靈、我君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來度々の逆亂を鎭めて九州の者共をば皆内ざまへこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をも打忘れて、あづま夷の下知に從ふこそ奇怪至極なれ。(あゝ何ぞ其の態度の正々たるや。)

本三位の中將一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、三種の神器都に上せよ重衡を放ち還さむとぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く、院宣謹みて承り畢んぬ。道盛の卿以下、一の谷にて誅せられけるもの其數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばむや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。そも〳〵我君は故高倉院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷北狄の禍にあひて暫らく西國に御幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし、還幸なからむに於ては、神器などか都に還るべき。そも〳〵賴朝は逆賊の裔、昔に入道相國の慈悲によりて申し宥められし所なり。然るに忽にしてこの鴻恩を忘れて妄りに干戈を弄ぶ、やがて(は)神罰其身にかへるべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思ぼし召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして早く西國の御幸あるべき(なり)(か)。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界、高麗、天竺、震旦のはてまでもまかりなむ。悲しい哉、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならむとは。宗盛頓首謹みて申す。

* * * * * *

かくて平家は亡びぬ、亡(ぶ)(びぬ)るまでも成敗の爲に其の名節を枉ぐることをなさざりき。あはれ平家の世ざかりはまことに大いなりしが、其の沒落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしき哉平家。かくして滅びたりとて何の恨むところぞ。

(明治三十四年四月)

## 秋色

立田姫の織りなせる錦とはたが言ひ初めにけむ、秋の色には血あり、涙あり、怒りあり、嘲りあるを。

たとへば社稷の傾危に際して、讒奸色を失ひ、便佞立つに處なく、忠良獨り易からざるにも較ぶべきか。平明の世には見がたき人の弱點も、かゝる時こそ著しくも現はるゝなれ。さはれ秋は自然にのみあるべきやは。

(明治三十一年十月)

## 世と馬

世に爲すあらむと欲して世に接することを憂ふるものは、猶ほ馬を御せむと欲して馬に乘ることを避くるものの如き也。畢竟彼等は彼等の爲すべき事を覺らざるものと謂ふべし。

(明治三十二年十一月)

# 世界の四聖

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば誰れかこれを能くせむや。釋迦、孔子、ソクラテース、基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は、西暦紀元前凡そ五百年の頃、印度迦毘羅城の王家に生まる。父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多と云ふ。釋迦は迦毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、其の妻子を捨てゝ、王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して、教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は卽ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒に思索の高遠を貪りて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる議理と、慘酷たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相爭ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、其の浩大なる慈悲と、無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み禮を習ふ。壯年の頃より、魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり。學德愈々進む。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司空の職に就く。治績大いに擧がり、内外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ゐざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は、所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし、教化の凌夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子旣に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、廻瀾を旣倒に翻さむとす。志や高且大なりと謂ふべし。是の如くにして、四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世又耳を名教に傾くるものなし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼吾が道遂に窮す。世遂に吾れを知るもの無きか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からむや」。孔子對へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾れを知るものは夫れ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾れ何を以てか後世に見えむや」と。幾もなく歿す。時に年七十三。

ソクラテースは、希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なりき。其の生まれたるは、凡そ紀元前四百七十年頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること、二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは、奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に留まり、道德は

空文の上にのみ貴ばれたり。其の狀猶杵遮當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテースは慨然として、時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ理を談じ、諄々として倦まず、詭辯學者の徒に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻擊して、一歩も假借せず、僞善の正義、其の稀代の雄辯と相俟ひて、一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとして、ソクラテースを讒訴せり。其の訴狀に曰く、「ソクラテースは國教を信ぜずして、異教を弘め、以て人心を惑亂せり、宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテースが是の讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるは無し。然れども、判官は、ソクラテースを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、曰く命のみと。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輙ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれむのみ、死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで死す。將に死せむとするや、弟子遺言を求む。ソクラテース曰く、「唯一雞を以てアスクレピアスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて、謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテースは、是の如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇と云ふ。基督とは、一膏灌がれたる者と云ふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベテレヘムに生まる。其の生後四年を以て西暦紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリアと云ふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて、初めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歷游し、諸の迫害に屈せずして、其の福音を傳へたり。抑當時は羅馬帝國の榮華其の極みに達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐りに臻りて、天下寧日無し。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して、益放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。是に於て、一世の人心は缺焉として、偉人の現出して、是の暗黑の社會を照破せむことを渇望せり。基督是の時に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然として是れに赴く。僧侶、學者、官吏等、是れを喜ばず、以て、猥りに新法異說を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらむを慮り、晏然として騷がず、靜に祈りて曰く、「神よ、彼等を許せ。彼等は其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭く勿れ。唯己れと己れの子との爲に哭け」と。是の如くして基督が三十三年の短き生涯は、十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後、其の弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是れなり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の内、釋迦を除いては、何れも轗軻不遇の中に、其の生を終りたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて、空しく洙泗の間に歿せり。ソクラテースと基督とは、何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺な

りと謂ふべし。然れども、是等の人々の志す所は、天下後世にあり、現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏然として猶ほ歸するが如し。孔子は其の身の不幸を憂へずして、却て「吾が道行はれずんば、吾れ何を以てか後世に見えむ」と嗟嘆せり。釋迦は衆生の爲に其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものにとりて、死將た何爲るものぞ。吾れをして一日の生あらしめむか、其の一日卽ち國民の迷を覺まさざるべからず」と。基督は己れを罪に陷るゝものの爲に、神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生まれたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違無きを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。夫れ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり、情慾の原因は我の一念に執着するにあり。故に吾人は、我の一念を脫却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是れ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ち是れなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むるの基は孝にあり、故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆是れに本づく。人は生まれながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、是れを完うする能はざるもの多し、教育の要こゝに於いてかあり。既に教育を受けて、身既に修まらば家自ら齊ふべく、家齊へば國自ら治まるべく、國治まれば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教は、所謂知德合一說なり。以爲らく、眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとは素一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となさば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の滿足なり、而して靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に、人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在りと。

基督の教は、愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げむ。曰く、「心の貧しきものは福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲むものは福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは、福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、其の人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、其の人は神を見ることを得べければなり。惡に敵する勿れ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉らして、是れに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せむが爲に義を其の前に行ふ勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむる勿れ、僞善者の行に倣ふ勿れ、隱れたるを鑒たまふ神は、顯はに報いたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非する勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ、然らば與へられむ。尋ねよ、然らば遇はむ。叩け、然らば啓かれむ。窄き門より入れ。沈淪に到る門は、其の路大きく、是れに入るものは多し。嗚呼いかに生命に

到る門は窄く、其の路は細く、是れを得るもの少きぞや。凡そ是の訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、沙上に屋を架せる愚人の如し」と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、實に是の山上の垂訓に基す。

是の如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。

嗚呼四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の、今尚ほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りて其の道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大、夫れ何を以てか是れに比せむや。

（明治三十四年十二月）

## 少年國

我邦は夫れ天下の少年國乎。人五六十歳に到れば、概ね半死の白頭翁也、是れ慥に大人物の缺乏せる一の理由也。人の名を好むや、其功を一生の中に收めむと欲す。老耄期の五六十なるものと、八九十なるものと、其事業に於て徑庭ある、素より其所のみ。況や成熟期の一年は、修養期の十年に匹敵するものあるに於てをや。試に我國の學者に見よ、年五六十に到れば進取の氣象頓に熄み、僅に既得の小名譽を墨守して失はざらむことを是れ務む。偶々後進者流の儀式的奉戴に遇ひて、時に時代後れの舊套を反覆するに過ぎず。世の既に已れと違へるを覺らず、其說の陳腐を以て傲然として高く標持す、寧ろ憫むべしとなす。夫の五六十にして自傳を編み、閱歴譚を述ぶるものは一生の事業已に終れりとなす乎、徒に過去を追憶するを已めて、何ぞ更に猛進一番するを務めざる。未來は青年の特有物に非ざる也。吾人は是點に於て、歐洲の大人物を景仰するの情に堪へず。

グラッドストーンは八十七歳にして尚ほ世界の大立物なりき。彼は其の死する數週前までは、ホマー研究に就いて古典學者を壓倒するの意氣を有せりき、八十二歳のビスマルクは老衰事に勝へざりしと雖も、五年以前には猶歐洲風雲の一角を握りたりき、現在の老人傑に就いて見るも、法王レオ十三世は以太利僧正中の尤も剛毅有爲なる一人也、而して彼れ年方に八十七。英の畫家トーマス・クーパーは今年九十五の高齡にして、ロヤル・アカデミーの繪畫會は年々彼によりて少からざる光彩を添ふ。倫理學者及び宗教學者なるジェームス・マルチノーは一千八百〇五年に生まれ、七十年以來其研究と著述とを懈らず。現時以太利の樂界に錚々たるエルヂは今や方に八十四歳。英國女王は身神やゝ衰頽せりと雖も、尙ほ七十八歳也。五六十年は是等の人より見れば壯者のみ。大なる傳記は長き年月の下に編纂せされらるべからず。日本は遂に少年國に終らざるべからざる乎。

（明治三十一年九月）

# 日蓮上人とは如何なる人ぞ

（日蓮上人と上行菩薩）

今の世の凡俗に徇きたるものは、願はくは是の篇を讀め。日本は如何に墮落するとも、吾人は其の同胞に日蓮上人を有することを忘るゝ勿れ。彼れの追懐は力也、信念也。諸君、若し學究先生の所説を聞くの餘暇あらば、吾人と共に是の一大偉人を研究せざるべからず。

## 一　法華經に於ける上行菩薩

大覺世尊年既に七十有二、法機漸く熟し、一代の嘉會將に近きにあらむとす。乃ち先づ成道以後、法華爾前に於ける權實兩教の起盡を明にせむと欲し、一巻三品の無量義經を説き、『四十餘年未顯眞實』と喝破し了りて靜に禪定に入り給ふ。是の時四種の天華雨の如く降り、普刹の大地六樣に動き、世尊眉間の白毫忽ち光を放ちて東方萬八千の世界を照し、洞然として周偏せざる所無し。滿地の大衆且つ歡び且つ怪み、念へらく是の如き瑞相は未だ曾て有らざる所、世尊夫れ大法雨を雨らし大法義を演ぜむか。乃ち專念合掌して齊しく瞻仰す。無見頂相遠く雲に入り、五天寂寞として聲なし、偏に一大事因緣の顯現に待つところあるものの如し。是に於て世尊安庠として三昧より起ち、方便、譬喩、信解等の八品を以て徐ろに一乘無待の眞理を證し、會下一切の衆生を導いて無上道を悟らしむ。『一切衆生を化して皆佛道に入らしむ』る世尊出離の本願茲に即ち成就しぬ。經に所謂『如我昔所願、今者已滿足』即ち是れ也。

然れども三世の人父は倘ほ當來の生靈に慮りなきを得ず。若し夫れ前師既に去りて後佛未だ世に出でざるの日、六道流轉の凡夫それ何によりてか長夜の生死を脱離せむ。佛緣未だ淺からざる正像二千年の間こそ權教人師の教化も倘庶幾くは力あるを得べけむ。唯信解の機根共に敗退し、謗法不信に充滿すべき末法萬年の初めに到らば、國土と衆生と共に偏に妙法華經の開顯を待つて初めて救濟せらるゝを得む。然らば則ち茲に末法の大導師を撰定して妙經の弘通を付屬し了るに非ざれば、世尊身後の慈悲未だ全きを得ず、出離の本願亦具足せりと謂ふを得ざる也。

世尊乃ち更に法師品を説き、授戒の沙門、稟道の弟子に就いて妙經の一偈一句を力に隨つて唱説する大功德を推奬し、進みて寶塔品に入りては三たび末法弘通の付屬を提唱して佛前の祈誓を促し、提婆品に入りては世尊の成道と龍女の作佛とにより、前佛の證悟を以て後來の信解を要め給ひぬ。是に於て藥王、勢至、彌勒等の二萬の菩薩既に作佛の授記を得たる五百の阿羅漢、並に會下無數の比丘、比丘尼等齊しく佛前に進み、同く不惜身命の志を持して末法の化導に當らむことを希ふ。他方佛國の八恒河沙に過ぎたる無數の菩薩亦同時に詣りて、同じく濁世弘通の付屬を得むことを望む。世尊儼然として是等の菩薩大衆に告げて曰く、已みね、善男子、汝等の此經を護持することを須ゐず、我が娑婆世界に六萬恒河沙の菩薩あり、彼等我が滅後に於て能く此經を護持し、讀誦し、弘通せむと。梵音十方に徹し、三千悉く震ひ響く。是時大千世界の國土皆震裂して無量千

萬億の菩薩同時に地中より涌出しぬ。法華經本門の序品たる從地涌出の大觀是の如くにして展開せられぬ。

地涌の菩薩、身は皆金色にして三十二相無量の光明あり、儀格堂々として威容四邊を壓す。是の如きは靈山會下未だ曾て見ざるところ、彌勒菩薩が補處徧知の明を以てして尚ほ且つ一人も知らず。大衆皆疑つて念へらく、吾が佛成道このかた年處幾も無し。如何にして是の如き無量無邊の大菩薩を敎化し得たりしや。世尊是に於て初めて如來久遠の法門を開顯し、本因本果の妙理を說き、久成の妙經を付屬すべきもの亦久成の菩薩なるべきを示し給ふ。這の顯本遠壽の敎理こそは實に四十餘年の佛說を撥無して法華爾前の經典に全然新面目を與へたるもの、而して是の本門の開顯の由つて本づくところは、地涌菩薩の本貫を明にして末法付屬の大事業を完成せむが爲に外ならず。

世尊既に衆疑を排したる後、分別、隨喜、法師の三功德品を說いて妙法受持の利益を讃歎し、更に不輕品に入りて折伏逆化の現證を示し、以て末法弘通の標範を垂れ給ふ。是に於て地涌本化の無量の菩薩、其の上首たる上行等の四大菩薩によりて佛前に誓つて曰く、吾等佛の滅後に於て廣く是の經を弘めて敢て退轉すること無けむと。世尊是を嘉納し、告知して曰く、善い哉上行菩薩、「如來一切所有の法、如來一切自在の神力、如來一切祕要の藏、如來一切甚深の事、皆是の經に於て宣示し顯說しぬ。是の故に汝等如來の滅後に於て一心に受持し、讀誦し、解說し、書寫し、說の如く修行すべし」と。法華一經の主眼たる末法付屬の一大事は玆に初めて成就しぬ、世尊成道の本願は玆に初めて全きを告げぬ。多寶の大塔は玆に初めて其の出現の因緣を了しぬ。十方諸剎の諸佛は是の一大慶事の歡喜の爲に廣長舌を出だして無量の光を放ち、謦咳彈指の響は普く三千の世界に到り、地は六種に動き、虛空に讃美の聲あり、天華繽紛として雨の如く降り、瓔珞旛蓋の類雲の如く十方より集り、變じて五彩の寶帳となりて諸天諸佛の上に搖曳きぬ。

*　*　*　*　*

是の如きは法華經に於ける所謂結要付屬の次第也。本化地涌の上首たる上行菩薩の上に寄託せられたる末法の大導師たる使命は、本論の大序として吾人特に讀者の注意を要めむと欲す。何となれば日蓮の品性、抱負、信仰を包括せる彼れが一代の本領は、實に我は上行菩薩也てふ一大自信に存すれば也。

## 二　上行菩薩出現の預言

上行菩薩てふ日蓮の自信は、畢竟釋尊の預言に對する絶對の信仰と、妙經色讀の行者としての一身の證悟とに本づく。されば吾人は先づ彼れが信仰上の經歷に就いて少しく考査するところ無かるべからず。蓋し是の如きは日宗學徒が常套の談義ならむも、而かも本論の序次として日蓮の立脚地を會得する上に於ては極めて重要なる事項に屬す。

佛滅後に於ける法華經弘通の使命は、既に十地地涌の上首たる上行菩薩に寄託せられたり。然らば即ち彼れ上行の出現すべき歲時は何れの年代にして、方處は何れの國土なりや。將た又彼れが依て以て其の使命を果すべき當體は抑も如何の人、もしくは如何の神ぞ。是等の事情に關する釋尊の預言は如何。

吾人は先きに上行出現の佛讖を記して末法の初めと謂へり。是れ暫く文底の本意に依れるのみ。法華經には單に或は末法と云ひ(法師品)、或は末世と云ひ(法師品、安樂行品)、或は惡世、濁世、(分別功德品)、濁惡世(勸持品)等と云へるの外、特に「末法の初め」の明文無し。唯藥王品に「我滅度後、後五百歲

中、廣宣流布、於閻浮提、無令斷絶……の文字あり。此文中の「後五百歳中」の五字を以て正像二千歳後の五百歳、即ち末法の初めとするは後世學者の定解にして、上行出現の時期は是の定解によりて永く確定せられしなり。而して斯かる解釋の出で來る所を尋ぬるに、一は本文の末法、末世等の文字に參照せる結果ならむも、主として大集經の有名なる五個の五百歲の預言に起因せる者の如し。即ち此經第五十一に世尊月藏菩薩に告げて曰く、『我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固、次の五百年は禪定堅固(以上正法千年)、次の五百年は讀誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固(以上像法千年)、次の五百年は我が法中に於て闘諍言訟あり、白法隱沒せむ』と。是れ明に末法の初めに於て教法の堙滅を預言せるものにして、かの『後五百歳中』に對するの擬釋として前後恰も符契を合するものに似たり。是れを以て妙樂、天台、傳教等皆是の解釋を取り、日蓮亦數々是を以て其の門下に教へたり(撰時抄、法華取要抄、曾谷入道殿御書等)。是の如くにして、法華經弘通の付屬を受けたる上行菩薩が末法の初め、即ち佛滅後二千年より二千五百年までの間に於て出現すべしとは、佛說の預言を信ずるものにとりて疑ふべからざる信念なりし也。

時代は既に末法の初めに定まりぬ、然らば則ち其の國土は如何。佛說は是點に關して何等信憑すべき徴證を與へずと雖も、後世の論釋中には多少の預言的文字無きに非ず。彌勒菩薩の瑜伽論に『東方に小國あり、其中唯大乘の種姓あり』と謂へるは、妙經流布の國土の印度以東にあるを示せるもの、而かも特に記して小國と謂へるは注意すべき文意なりとす。肇公が翻經の記に大師左手に法華經を持し、右手に鳩摩羅什の頂を摩して授與して曰く、『佛日西に入りて遺燿將に東に及ばむとす、此の經典東北に縁あり、汝愼みて傳弘せよ』と。印度より東北の國土は支那に非ざれば韓半島、然らざれば日本あるのみ。傳教是を擬釋して曰く、『代を語れば則ち像の終り、末の初め、地を尋ぬれば即ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、闘諍の時也』と。知るべし、彼れが明に彌勒の所謂東方の小國を以て日本國なりと信せしを。日蓮亦傳教の擬釋を承け、更に其の時代の情態と一身の現證とによりて此の信念に動かすべからざる根據を與へぬ。

所謂時代の情態とは何ぞや。他なし、末法行者の境遇に關する法華經の預言也。抑々世尊法華經を說くや、此經を受持し、弘通するの極めて困難なるを誡むること一再に止まらず。方便品に「此經を讀誦し書持するものを見て輕賤憎嫉して結恨を懷かむ」と云へるを初めとして、法師品には『此經は如來の現在すら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや』と說き、寶塔品には所謂六難九易の教を述べて、須彌山を擲つも、足指を以て大千世界を動かすも、若しくは手に虛空を把つて遊行するも、或は大地を爪上に置きて梵天に昇るも、尚ほ末世に於て法華經を受持するの難きに如かざるを告ぐる等、策勵戒飭到らざる所無し。殊に勸持品と不輕品との二者の如きは全篇の文字殆ど皆法華經の行者に對する迫害の覺悟を垂示せるものに非ざるは無し。其の世運の衰頽を述べ、教法の墮落を描き、此末法の行者たるものは所謂三類の强敵に反抗して不惜身命の苦節を忍ばざるべからざるを說くところ、文意尤も深遠を極む。是れ即ち上行菩薩出現の國土の狀態に關する預言として見るべきものにして、大集經の所謂闘諍言訟、白法隱沒とは即ち是れ也。

是を以て之を見る、時は即ち末法の初め、地は即ち日本國、時と地とは既に定まれり。然らば即ち其人は如何。人に二[illegible]

んば、彼れは惡世の中に法華經の眞理を弘むる爲に身命を惜まざる者ならざるべからず。諸々の無智の人惡口罵詈して或は刀杖瓦石を加ふるものあらむ。邪智諂曲の比丘、俗惡慳吝の僧侶等、名を正義に假り、力を權家に求めて彼れを誹謗せむ。彼れは是等一切の迫害を忍受し、身命を愛まずして唯無上道を惜むものならざるべからず。彼れは是れが爲に『數々擯出せられ』、又幾度か塔寺住居を遠離せむ。而かも彼れは唯大覺世尊の告敕を念ふの外其の他を知らざるものならざるべからず。

嗚呼時は方に到りぬ、地も亦定まりぬ、是の如き人獨り未だ出でざる乎。

是時に當り、現身の證悟を以て是の疑問に最後の解決を與へむが爲め、佛識の攝理によりて日本鎌倉を追はれたる一個の僧ありき。彼れ名は日蓮、是の一大使命の將に彼れの頭上に落ちむとするの時、彼れは方に佐渡流竄の途上にありき。

＊　＊　＊　＊　＊

是に於て一言の讀者に告ぐべき事あり。吾人が上文述べ來りたる上行菩薩の付屬と其の出現の時處位とに關する教相判釋は、毫も吾人の私意に出でたるにあらず。天台、妙樂、傳教等の繼紹授受したる定解にして、而して本佛教教理の上に於ての是等諸大師の傳統を承けたる日蓮の教判たりし也。台家以外の諸宗派にありては、或は是の如き教判を首肯せざるものもあるべく、今日の學者等が所謂佛教教典に對する高等批評の見地よりすれば、這般の問題亦全然別種の意義を有し來るやも知るべからず。然れども是の如きは本論の毫も關知する所にあらず。吾人の主旨は上行菩薩の自信に到達するまでの日蓮上人の教判及び信仰上の經歷を明にするにあり。是の目的に向つては日蓮其人が如何の知解、如何の信念の下に其の宗教的性格を修養したりしかを看取し得れば則ち足る。吾人は是點に於て特に讀者の注意を請はむと欲す。

遮莫、日蓮は如何にして上行菩薩の自信に到達したりしや。是の自信は彼れの性格、信仰、事業の上に如何の影響を與へしや。吾人は是に於て少しく日蓮の傳記に就いて語るところ無かるべからず。

## 三　法華經の行者としての日蓮

多寶の塔閉ぢ、靈山の會散してより、春去秋來二千二百有餘年。日本東海の邊上、安房國清澄寺に一個の小僧ありき。彼れ素漁夫の子、年十二にして家を出で、十八にして僧となり、爾來專ら聖典の研究に身を委ね、天下の名山巨刹を歷訪して智見を修養し、信念を陶冶すること前後十有五年、内外古今の典籍一として渉獵せざること無し。彼れ今方に長き遊學の旅路より其の故郷の寺門に歸り來り、其の故舊及び檀下の大衆を集めて教を說かむとするなりき。遠近傳へ聞き、新來の學僧說く所の教法の如何に清新なるべきかを想ひて、來り集るもの甚だ多し。

是れ天台大師が『後の五百歲、遠く妙道に沾はむ』と預言せしより七百年、傳教大師が『正像やゝ過ぎて末法太だ近きにあり、法華一乘の機是れ正しく其の時』を預言せしより四百年の後、時は方に建長五年四月二十八日。而して彼れとは言ふまでもなく日蓮なりき。

日蓮が是日の說法は會下大衆の期待せる如く實に清新なるものなりき。恐らくは佛法二千年の歷史に於ける論師の說よりも清新なるものなりしならむ。彼れは口を開いて先づ一切現行の宗門を否定し、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と宣言し、法華經の行者たる彼れの唱道する一佛乘の妙理に非ざるよりは、一切の諸宗を排して凡て無得道と喝破しぬ。聽衆は皆

足の意外の慘品に驚きて或は怒り或は笑ふ。同門の僧侶袂を連ねて席を去り、左に顧みて「嗚呼吾が蓮長遂に狂せし」と嘆息しぬ（蓮長とは彼れが當時の名なりき）。恰も基督が其の故郷ナザレに歸り、以賽亞の預言を誦して「是の錄るされたること今汝等の前に應へり」と言ひし時の如く、何人も日蓮の言を以て常識あるものの口より出で得べしと思惟する者あらざりき。

然り、法華經の行者たる彼れの宣言は常識を逆遡する人衆の獅子吼なりき。彼は狂と呼ばれ嘲られながら、遂に其の故郷を追はれぬ。かくて恐らくは何人も此の一狂僧の前途を思念する者無かりし間に、日蓮の名は幾もなく天下の覇府なる鎌倉の中央より響き渡りぬ。彼れは淨土、禪門の全盛を極めつゝある是の大覇府の廣衢に於て、彼等の熱心なる歸依者にして且外護者たる北條氏の權威を嘲りつゝ、公々然として四箇の宣言を標榜し、諸宗無得道を絶叫して一日も綏怠することあらざりき。言ふまでもなく、あらゆる嘲笑罵詈は彼れの身邊に集れり、瓦石糞土は到る處に雨の如く彼れの頭上に降り懸れり。然れども是を嘯まずして彼れが折伏の決心を堅うし、道化の氣焔を揚むるのみなりき。かゝる間に立正安國論の大論策は彼れが立宗の大本、一期の法鑒として世に現はれぬ。三災七難の佛戲に基きて内証外患の近きにあることを警戒せる大國家的預言は青天の霹靂の如く、上下の耳目を聳動しぬ。衆怨遂に爆發せり。數百の暴民は幕府の默許の下に彼れが松葉が谷の庵室を燒撃しぬ。北條氏は罪名を紀さずして彼れを伊豆に流しぬ。年を逾えて、赦されて歸るや、門下皆折伏を緩うせむことを請ふ。彼れ儼然として曰く、折伏逆化は聖籍自衞の本義、釋尊弘法の遺範也。佛識昭々として火を睹るが如し、法華經の行者一日も此事無かる可らずと。倶に努々力む。日蓮宗聖日の一たる所謂小松原の法難は是の間に起り、彼れの額上は是より永く深大の刀痕を印しぬ。

斯かる間に彼れの精神に一大覺悟を促すべき時機は漸く迫り來りぬ。文永五年の初め、蒙古大陸連勝の餘威に乘じて書を我に送り、暗に侵掠の野心を示す。上下驚怖し人心恟々たり。正に是れ日蓮が八年前に發表したる安國論の預言を目にするもの、途中恰も符契を合するが如し。彼れは是に於て十一通の書を裁して北條氏を初め、幕府の權家、府中の大寺に送り、大に往年の自讃を高唱、預言の明證に據りて政府の責を促し、揚言して曰く、極樂寺の良觀、建長寺の道隆等の頭を由井が濱に梟して早く一佛乘に歸依せずんば、國家の滅亡遂に避くべからざる也と。闔意激厲を極め、氣魄一世を吞吐す。十宗の緇素怨嗟措くところを知らず、百方讒を構へて毀謗を幕府に進む。幕府遂に彼れを捕へて將に斬らんとす。是の時彼れ毅然として曰く、死は素より我れの期待するところ、是の身命を法華經に捧ぐるは沙土を以て黄金に換ふる也。一佛が小島の主の威を恐れては閻魔王の責をば如何にすべきと。

然れども天乎、命乎、彼れの頭は彼の日に當らざりき。越えて一月、彼れは警護の武士に伴はれ、信山越水を踰えて遠く北海のほとりに漂泊らひぬ。關外秋深くして野に悲風あり、眸を放てば北洋の平波茫々として遠に青螺の天際に横はるを見る。

是れ即ち流人日蓮の配處佐渡が島なりき。嗚呼佐渡が島！　其處には如何なる運命の是の希有の流人を待ちつゝありや。

## 四　疑　問

日蓮にとりて佐渡は即ち末法の耆闍崛山なりき。鎌倉の反對者は彼れを北海の孤島に放逐し

たる間に、法華折伏の使命を付屬せられたる末法の大導師は、更に此の謗法の國土に大法雨を雨らすべく出現しぬ。末法の大導師とは言ふまでもなく本化地涌の上首上行菩薩にして、而して此の大使命を自覺したる者は即ち日蓮其人に外ならざりき。

如何にして日蓮は上行菩薩の自信に到達し得たりしか。是れ彼れにとりて健字感應の一大事に屬し、固より傍人の容喙を容れざるべしと雖も、而かも尙ほ其の事蹟の彷彿を想ふに足るものあり。吾人は茲に彼れの信仰上の徑行に就いて其の心事を觀測せざるべからず。

第一、最も明かなるは、彼れの不惜身命の一切の云爲は法華經の教理及び預言に對する絶對の信仰に本づく事也。彼れは末法教化の爲に展開せられたる顯本壽量の一大眞理を信ぜり。本化地涌の菩薩等が是の使命の爲に靈山の會下に招集せられたるを信ぜり。而して是の使命の付屬を受けたるものは彼等の上首たる上行菩薩なりしことを信ぜり。彼れは又是の上行菩薩の出現すべき時の末法の初めの五百年、即ち佛滅後二千年より二千五百年迄の間なること、並に其出現の處の東方の小國日本國なることを信ぜり。是の如き信仰を固持せる彼れは果して彼れ自身に就いて如何の感想を有したるべき乎。彼れの時は佛滅後二千二百餘年に當る、所謂末法の初めに非ずや。彼れの國土は即ち日本國に非ずや、取りも直さず、彼れは少くとも上行菩薩の出現すべき時機と國土とを共有せることを覺らざる可らず。是の自覺も彼れの宗教的生活の初めより存在せることは、遺文明に是を證するのみならず、法華經の行者としての彼れが不撓なる精神と遠大なる抱負とは主として是の自覺に本づきしことは極めて明瞭なる事實なりとす。既に時代と國土との契合を確信したる法華經の行者たる彼れは、上行菩薩自らの出現に關して如何の觀察を有せし乎。法華經の預言にして眞ならば、若しくは大覺世尊にして妄語の佛に非ずんば、是の時、是の國、既に上行菩薩の出現を見ざるべからず。

是の如きは必ずや妙經色讀の間に於て日蓮の胸中に日夕往來したる疑惑にして、又同時に苦悶ならざるべからず。

然れども本化の大菩薩を以て自ら讃するが如きは、彼れの恐らくは想ひ及ばざりしところ。彼れは唯一個の謙虚なる法華經の行者たるに過ぎざりき。法華經の行者として一身を法王の要求に委ね、「如説修行」一大願に一住して其他を顧みざりき。彼れは末法の導師の爲に預言せられたる勸持品二十行の偈を讀みて、あらゆる迫害を忍受すべき一大決心を固め、危害の身に及ぶ毎に佛讖の愈しるしあるを喜べり。是の如くにして折伏逆化の事業に當ること二十餘年、今や單に龍の口の斬首を免れて遠く北海の流人となりぬ。あゝ惡王惡國並び存して法華經の行者身を容るゝに處なし、而かも上行菩薩は遂に出現せざるべき乎、彼れは疑ひもなく、是の險深なる疑惑を抱いて北海の配處に向ひし也。

## 五　疑問の解決、一大醒覺

然れども是の疑惑の解決せらるべき日は漸く近づきぬ。大醒覺將に近きにあらむとす。

塞外十月、北地風荒く波高し。彼れは暫く越の寺泊に泊して天候の回復を待ちぬ。匆劇の境を離れて忽ち幽靜の地に客たり、感懷果して如何。嗚呼彼れは遂に目覺めたり、永遠に目覺めたり。二十年來の疑惑は霧の如く散じたり。法華經の預言は是の覺醒によりて更に新しき生命を得ぬ。東海の佛子日蓮の生涯は俄に寂光寶土の光明に照されて直に佛讖の現證とな

りぬ。彼れが過去は久遠の過去となりぬ。彼れが未來も久遠の未來となりぬ。彼れが接觸したる一切の衆生と國土と凡ては彼れの一身に關聯して妙經の法體となりぬ。彌勒、天台、妙樂、傳教等は彼れによりて初めて妄語の罪を免れたるのみならず、一代佛教の歸着は彼れによりて初めて現前の事實となりぬ。是れ大自覺の喚起せられたる時、鎌倉の諸人、安房東條の旃陀羅の子日蓮は、一躍して本化地涌の上首上行菩薩となりぬ。

彼れは如何にして是の自覺に到達したりしぞ。吾人は法華經勸持品の所謂二十行の偈が是の自覺を彼れの心中に喚起したる重なる媒介者なることを疑はず。何となれば末法の大導師の一身上の經驗に關する預言は殆ど是の一偈の中に包括せらるればなり。されば日蓮にして自家二十年の境遇が勝ぐれて此の預言の現實なることを認識したる時、彼れは自ら省悟する所あるは寧ろ自然の事なるべし。偈の文に曰く、

諸々の無智の人、惡口罵詈等し及び刀杖を加ふる者あらむ。我等皆當に忍ぶべし。惡世中の比丘、邪智にして心諂曲なり。未だ得ざるを既に得たりと謂ひ、我慢の心充滿せむ。或は阿練若に納衣にして空閑に在り、自ら眞道を行ずと謂ひて法華經を弘むる者を輕賤する者あらむ。彼れ利養に貪著するが故に法を說き、世間無智の人に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならむ。是の人惡心を懷き常に世俗の事を念ふ。而て名を阿練若に假りて、好んで我等法華經を弘むる者の過を出し、而して言はむ、此の諸々の比丘等は利養を貪る爲めの故に外道の論議を說き、自ら此の經典を作りて世間の人を誑惑し、名聞を求むる爲めの故に是經を分別すと。彼等常に大衆の中に在りて我等法華經を弘むるものを毀らむと欲するの故に、國王、大臣、婆羅門、居士及び餘の比丘衆に向ひて誹謗して我が惡を說いて謂はむ、是れ邪見の人にして外道の論議を說くのみと。我等佛を敬ふの故に悉く是の諸惡を忍ぶべし。濁劫惡世の中には多く諸々の恐怖あり。惡鬼其の身に入りて我れを罵詈し毀辱せむ。我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を着け、此經を說く爲めの故に此の諸々の難事を忍ぶべし。我は身命を愛まず、但無上道を惜む。我等來世に於て佛の所囑を護持せむ。世尊自ら當に知り給ふべし。濁世の惡比丘、佛の方便隨宜しきに隨って說く所の法を知らず、惡口して顰蹙し、數々擯出せられて塔寺を遠離せむ。是の如き衆惡をも、佛の告勅を念ふの故に皆當に是の事を忍ぶべし。（文意不通の處には假りに數字を添加す。）

是の偈に所謂罵詈は言ふまでもなし。刀杖を加ふる者とは卽ち東條景信等の一事に非ずや。惡世の比丘邪智にして、諂曲慢なるものは當時の十宗の僧侶に非ずや、阿練若は何處に在りて白衣空閑、無智の人に恭敬せらるゝこと六通羅漢の如く、名利に貪著して法華經の行者を誹謗するものは、卽ち良觀、行敏、道隆、道阿彌等の當時の高僧諸尊に非ずや。國王大臣に向って我を讒訴するとは卽ち行敏、念阿、良忠等が北條氏に訴へたる事に非ずや。身命を愛まずして但無上道を惜み、是等の諸惡を忍受して佛の付囑を護持するものは獨り日蓮に非ずして誰ぞ。所謂數々擯出せられて塔寺を遠離せむと言へるが如きは、卽ち宿處を追はるゝこと二十餘度、一たびは伊豆に流され、二たびは佐渡に流されたる日蓮其人の事蹟に非ずして何ぞや。日蓮は法華經の行者也、彼れは末法の導師に當り、國は東方の國土に合し、而して其身を

以て勸持品二十行の身讀を實現す、是の如きは南岳、天台、妙樂、傳教等、猶ほ迹に及ばずとする所、在世の上行菩薩に非ずんば誰れか能く佛語を實證して此の如く的確なるを得むや、佛にして妄語の碑なりせば、則ち已む、苟も久遠實成の三界の教主ならば、日蓮亦必ず上行菩薩ならざるべからず」。日蓮は疑ひもなく是の如く思惟し、是の如く確信したりし也。

## 六　上行菩薩としての日蓮

今彼れの遺文に就いて檢するに、是の信念の曙光は、彼れが越後の寺泊より其隨一の檀越富木氏に與へたる所謂寺泊御書に顯はれ初めぬ。「當世の諸の敵人は之れあるも地涌の菩薩は一人も見えず、日蓮は八十萬億那由陀の諸菩薩の代官として之を申す」と言ふも彼れの胸前の誓會に見ゆる所の文意に屬するを見るべし。越えて二月、佐渡より同じく富木氏に送りたる消息に至りては文義更に明晰なるものあり、「寺泊より法門を書き遣はし候ひき。推量候らむ、已に眼前也。佛滅後二千二百餘年に、天台、傳教は粗ぼ習し給へども、弘め殘せる一大事の祕法を此國に於て之を弘む、日蓮豈其人に非ずや」と。又曰く「前相既に顯はれぬ、是れ時の然らしむる故也。經に曰く、有四導師、一名上行、云々、是れ豈に上行菩薩の使命を宣明したるものに非ずや。」撰時(九六)三月、最蓮房に與へたる所謂生死一大事血脈鈔亦明に是の意を表はして曰く、「上行菩薩末法今の時、此法門を弘めむが爲に御出現之れあるべき由經文に見え候へども如何に候やらむ。上行菩薩出現すとやせむ、出現せずとやせむ。日蓮先づ粗々弘め候也」と。斯くて教相の釋義として日蓮一代の大文章たる開目鈔は、主として是の一大事實の宣言の爲に草せられ、法體の宣判として日宗全門の祕鑰なる觀心本尊鈔亦是の說明の爲に著はされ、如說修行鈔はた是の信仰の偉大なる勢力を代表し、壯厲激越なる法華折伏の宣戰狀となりて全國門下の志氣を鼓舞しぬ。是に於て彼れは一代聖教皆是れ吾が一身の註脚のみと喝破し、勸持品二十行の偈は日蓮だに是國に生まれずば世尊の大妄語となり、本化地涌の菩薩は提婆が虛誑罪に陷すべしと揚言し、日蓮法華經の故にたびたび流されずば數々見擯出の數々の二字を如何せむと高語し(開目)「今の遺使還告は地涌也」と說き(觀心本尊鈔)「已に地涌の大菩薩上行出でさせ給ひぬ、結要の大法亦弘まらせ給ふべし、日本漢土萬國の一切衆生は金輪聖王出現の先兆、優曇華に値ふなるべし」と示現し、一閻浮提廣宣流布の大理想を發表し給ひき。

日蓮は果して上行菩薩の化身なりや、彼れは佛家の所謂前生に於て靈山會上に釋尊の付囑を受けたりしや。是の如きは吾人の知る所に非ず、又知るを要する所にもあらず、吾人は唯日蓮が釋尊に對する無限の歸依によりて吾は上行菩薩也てふ金剛不壞の確信に到達したるを見るを以て足れりとせむ。是の如き確信が今の學究者によりて如何の說明を得べきかは吾人の關する所に非ず。唯是の確信が日蓮の精神に於て無上絶對の事實なることを知れば則ち足る。見よ、是の確信を得てより彼れの性格の偉大は殆ど人界の規矩を超越しぬ。彼れは是によりて天地人生の上に無限の威力を得ぬ。其意志と情熱と共に天來の靈氣によりて鼓吹せられぬ。彼れは是によりて預言の力己れの手にあることを信し、祈禱の聽かれざることなく、呪詛の行はれざること無きを信じぬ。彼れは是の確信の力によりて天下萬國の一切衆生に向つて無上の權威を有てるものの如く教訓し、告知し、且つ命令せり、彼れは自ら是の如き權威を有せることを疑はざりし也。彼れは國家政府が

是の確信の前には如何に小なる者たるかを見よ。是を以て當代の君主權威を指して僅かの小島の主と嘲り給ひ、正八幡等の國神を小神と卑しみ給ひ、三世十方の世界を貫通して久遠實成の無上道、妙法蓮華經の現證たる是の確信の前には、日月も其の光を失ひ、天地も其の大を失ひ、一切人天の衆生は帝王も乞食も悉く皆一小兒となりぬ。事茲に到りては言の記すべきなく、文の述ぶべき無し。吾人は唯歸命讃歎して唵々の一語を反覆するの外無き也。

遮莫、是の如き大いなる確信の下に活動せる彼れが半生の事業の如何に雄大崇嚴を極めたるかは、啻に鎌倉時代の偉蹟としてのみならず、啻に日本歷史の壯觀としてのみならず、又實に人類永遠の史上に於ける一大事實として傳へらるべきもの也。吾人乞ふ篇を改めて少しく述ぶるところあらむ。

* * * *

本論を草するに當り、田中智學氏及び氏の門下山川智應氏が有益なる注意を與へられたるは著者の深く感謝する所也。

（明治三十五年四月）

# 無題録

◎人は輙ち眞理と言ふ。請ひ問はむ、そは汝の眞理か將た吾の眞理か。若し汝と互に見る所を同じうせば、是れ多數決の眞理のみ。汝と吾と共に與らず。嗚呼世の所謂眞理は道德と等しく畢竟多數決に非ざる乎。ジュピテルの彼方に一と二との必ず三を成すことを誰れか保し得るや。

◎自ら道德を造る者のみ能く善惡を口にし得べし。エミール・アンリが判官に答へたる言葉に聽け。吾人をさばく者は吾人自らならざるべからず。暫く他を許して其の所謂善惡を言はしめむ。而かも爾等の中罪なきもの、唯かく言ひ得べきのみ。

◎曾て吾れ、多くの人の意味を知りしが、而かも吾れ自らの誰れたるかを知らざりき。吾が眼は吾れ自らを觀むには餘りに吾れに近かりき。貴いかな是の覺醒や。

◎社會は多く其の寵兒を殺す、是を以て眞人は多く死して而して初めて活く。人よ、汝を殺すものは必ずしも刀杖に非ざる也、鴆毒に非ざる也。俗人に擁護せられ、惡世に讃美せらる、是れ永遠の死滅也。「肉に死するものは肉に活くるを得む」。たゞ靈の滅ぶるもの吾れ是れを如何ともする無き也。

◎吾が說や多くの人に容れられじ、然れども何人にも破られじ。吾が言に聽いて喜ぶ人は少からむ、然れども世界の人のすべての歡びも吾れ自らの滿足に比すべからざる也。此處に吾あり、彼處に日月あり、かの紛々擾々たるもの夫れ是の事實を如何せむとするや。

◎人に誨ふるは吾れの能くする所に非ず、人に與ふるも亦吾れの能くする所に非ず。吾は唯水の如く流れ、鳥の如く歌はむのみ。胸内若し空しからずんば、願くは吾と同じきものと共に是の天賦の榮光を讃美せむかな。

◎我は我自らの爲に活く。若し社會國家にして與かるあらむと欲せば、彼等は先づ我が有たらざるべからず。三千法界を以て是の一念に攝折す。忠孝節義初めて共に語るべき也。

（明治三十五年六月）

# 日蓮と基督（其一）

## 偉大なる宣告

四福音書は實に日星河嶽の大文字にして、吾人が宗教的感情に對してあらゆる高大なる理想を標示す。まことに仰いで貴むべく、即いて親しむべし。而して人若し其中に最も偉大なる宣言は何なりやと問はゞ、吾人は答へて言はむ、貢の貨幣に就いての基督の答也と。

## 靈性の是認

「カイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へせ。』あはれ是の一語こそは啻に羅馬帝國の至上權に對する大折伏なるのみならず、凡ての地上の權力を永遠に否定し、人間靈性の獨立、自由、光榮、威嚴に對して萬古動かすべからざる是認を與へたるものに非ずや。如何なる宗教が如何なる福音を傳ふるとも、理想は恐らくは是の一言を超越し得べからざらむ。「予は基督教の信者が是の一言の力によりて人生最大の祝福を自覺せむことを希望するもの也。」

## 何の患ふる所ぞや

人は患ふ、是の世に於て靈性の自由を神の國に捧ぐるものは、其の現實の生活に於て支吾する所あるを奈何と。あゝ是れ何の患ふる所ぞや。迫害の歷史を飾れる幾多の義人が平和と滿足とを以て是の疑問に答へたるを見よ。是れ人生に於て最も大いなる祝福に非ずや。

## 人の國と神の國

人の國は遂に神の國に非ず。人性の無限なる要求に應じ得べき生活は是の世のものに非ざるや、寧ろ明なるに過ぐ。人は方便を說く、然れども是れ强辯のみ、假託のみ。事實は長へに事實たるを如何せむ。誠虔なる信者よ、汝は果して其の眞信の聲に隨ひ、其の靈性の囁きに聽きて、倚ほ且つ是の兩者の兩全を望み得る乎。「調和を口にし得べきか。」

## 靈性の支配

昔者日蓮鎌倉の殿中に宣言して曰く、「日蓮王土に生れたれば、身は從ひ奉るとも心は從ひ奉るべからず』と。是れ亦「まさしくカイゼルの物はカイゼルに、」神の物は神に歸せよの意也。あゝ貢を納むる者のみが臣下には非ざるぞかし。吾人は是の世に於て別に靈の國土を有す。吾人は是の靈性の支配の下に如何なる人をも如何なる國をも征服し、君臨し、且つ審判し得る者なることを悟れ。是に於てか吾人に自由あり、希望あり、榮光あり。所謂祝福せられたる生活、即ち是れ也。

## 世に最も醜なるもの

世に見苦しきもの何ぞ限らむ、中にも「神の國」を建立すべき宗教家が地上の權力を調和して其の安逸を貪らむが爲めに自家の眞信を枉げて世に阿る程見苦しきはなし。予は是の如き見苦しき事例を、現に我邦の多くの宗教家に於て實

見せり。國家的宗教と云ふが如き名目の下に其の存在と昌榮とを誇らむとする宗教は見苦しき哉。人は何ぞ言ひ得ざる、我が教は地上の一切の權力を超越すと。是の如くにして迫害せられむか、是れ迫害せられたる者の恥辱に非ずして光榮也、敗亡に非ずして勝利也。迫ふべきものは國家にして、迎へらるべきものは宗教也。彼等は是の階級の見地に據りて安立する能はざる乎。若し生命とは是の世に於てのみ言ひ得べきものならば、吾等何の爲めにか宗教を要せむ。永世の命と無限の祝福を望むもの、何爲れぞ現世の榮辱に心を勞すること斯く、甚しき。」

嗚呼今の世、國家の面前に立ちて神の物は神に歸へせと宣告し得る人あらば、吾人は走つて其の靴の紐を結びても彼れの門下とならむ哉。

（明治三十五年五月五日）

# 日蓮と基督（其二）

吾人曾て日蓮を評して謂へらく、『彼れを目して日本のルーテルとなさむは誤れり。彼れの宗人は獨り基督のそれに較べ得べきのみ』と。人の是の言を以て誇大に過ぎたりとするものあり。想ふに彼れは其の基督を知りて未だ其の日蓮を知らざる者乎。

日蓮と基督、是の二者の比較は吾人にとりて一好題目たり。其の精細は他日を俟ちて必ず世に問ふの期あるべし。今試に其の概要を縷して讀者に示さむか、片言隻語素より其の言はむと欲する所を盡す能はず。是を以て直に吾人の日蓮基督比較論と見做す無くんば幸也。

日蓮と基督との比較は其の根柢に於て佛耶兩教の比較を預想す。佛耶兩教の比較は直に民族國土の上に於ける東西文明の比較たらざるを得ず。是の考察を離れて漫に兩者の異同を辯ずる勞を辭せざるは、殆ど無意義の事たるを免れず。

一言以て是を蔽へば、基督教は主として意情の宗教也、佛教は主として道理の宗教也。吾人は四福音書によりて現はされたる原始基督教に於て、何等後世神學家の所謂教理なるものを認むる能はず。基督自らは唯其の高潔なる熱情に動かされて直に人間の本然に訴へたるのみ。彼れ自らが所謂學者に非ざるが如く、彼れは其の信者に於ても何等の學識を要めざりき。彼れの教に聽きたるものは、例へばガリラヤ湖畔の漁父の如き單純無垢なる自然の小兒なりき。畢竟彼れの言を解するには哲學を要せず、傳說を要せず、唯是の小兒の如き心あれば則ち足れりし也。是を以て基督自らも小兒の如き心あるものに非ざれば天國に入ることを難しと說けりき。彼れが僅に三年の短日月の間に於て、能く此の世界の一大宗教の根據をきづき得たる所以のもの、亦其の教の簡單明瞭にして直下に人情の本然に訴へたるが爲に外ならず。是を日蓮が三十餘年の永き說法によりて僅に法華一乘の眞理を闡顯し得たるに比すれば、彼此兩教の性質亦おのづから瞭然たるを見る。

佛教は主として道理の上に立つ。佛教の

一途、素より而して眞に基きて、其の根本に於て信依の一念を確想するは言ふまでも無しと雖も、而かも是の信依の一念をして大悟の域に徹底せしむるには、其の方便として極めて煩瑣にして且つ精緻なる道理の判釋を要す。是を以て八萬四千の教義、一代五時の說法、機に臨み根に應じて成佛の道を示さざるなしと雖も、畢竟法華一乘の眞理を開顯せむが爲の方便に外ならず。是の如き深遠なる教義は、基督の如く三年の間に說明し得べからず。されば釋迦の智慧廣大を以てして其の成道の初めより法華經壽量品に於て顯本遠壽の妙理を現示するまで實に五十餘年の長日月を要したりき。

日蓮は、彼れ自ら釋尊の正統と稱せし如く、其の教風に於て佛教の精神を最もよく體達したる一人なりき。されば彼れを基督と比較するに當つては、讀者は先づ佛耶兩教の特性を眼中に置かむことを要す。

然れども大いなる宗教家として人類の救濟を目的したる事に於ては兩者素より其の軌を一にす。大いなる宗教家に於て常に見る如く、其の心事の清朗にして純潔なる、其の意志の勇猛にして大膽なる、其の事業の高明にして悲壯なる、而して現世以上に於て理想世界の實在を認め、人間靈性の醇化によりて是の世界の實現に力めたる、彼れと此れと殆ど符契を合するが如し。兩者の比較に當りて遭遇する幾多の異同は是の點より說明し得べし。即ち多くの場合に於て、其の異は佛耶兩教の根本的差別に本き、其の同は大宗教家としての特性、即ち宗教其物の普遍性に本く。

◎吾人は玆に這般の點に就いて精透なる論述を試むる能はざるを憾みとす。唯左に兩者の史蹟に本きて其の性行の一斑を比較するを以て暫らく足れりとせむ。

吾人は先づ其の出世の因緣に關して基督と日蓮との類似の太だ大なるに驚かざるを得ず。聖者東方に出でて天下を轟かさむとの信念は當時羅馬の天下に普く行はれし所にして、希伯來の預言者も、タチッス、スエトニウス等の歷史家等も共に證する所也。基督此の信念の間に生れて是の聖者の預言に應へぬ。是れ佛滅後二千年と二千五百年との間に於て、末法付屬の行者たる上行菩薩、東北有緣の小國に出現せむと謂へる佛讖と頗る相似たらずや。

基督自ら是の預言を身現せむが爲に、ベツレヘムに生れたるを以て米迦の預言を實にせるものとなし、又以賽亞の預言に應ぜむが爲に其後ナザレに移りぬ。彼れがサマリヤの婦人に答へて我はメシヤ也と言ひしは、日蓮が寺泊の靏宿に於て上行菩薩の自覺を喚び起したると、心事何の異なる所ぞ。

基督の前には洗者ヨハネあり、日蓮の前には傳教あり。彼れは、我より後に來るものは我れ其の靴の紐を結ぶにも當らずと預言し、此れは末法の初め近きにあり、法華一乘の行者將に現はるべしと預言しぬ。兩者出世の因緣は能く相似たり。

基督の教を宣むるや、預言者の其の鄕に容れられざるを知りながら、先づ其の故鄕ナザレに歸りて神殿の前に立ちぬ。以賽亞第六十一章の破題を吟じて、是の錄されたる事今汝等の前に應へりと叫びし時、人皆彼を狂せりとし斷崖の上より落さむと企てたりき。日蓮も亦十五年の沈思と勉學との後其の新しき眞理を唱へむが爲に其の故山清澄に歸りぬ。彼れが七字の題目を唱へて四個格言を喝破せし時は、彼れの鄕黨故舊は皆彼れを狂せりと想ひたりき。人神に近けば目して狂とせらる。古今東西其の軌を一にせるを見よ。

「サマリヤの女子にメシヤの使命を齎したる基督の自覺は、寺泊の靏宿に上行菩薩の

付屬なるに於ける日蓮の心事と行ひの異なるところぞ。基督は學者とは呼ばれず、學者と稱せられず、唯自らは人の子と稱し、人よりは神の子と稱せらるゝを喜べり。日蓮は自ら日本一の曲者と稱し、智解に於ては天台傳教が千の一にだも及ばずと卑め、或は自ら旃陀羅の子と稱して、唯獨り上行菩薩の自信の中に自家の天職と滿足とを求めたり。超世の大理想を抱けるもの、おのづから然らざるを得ざる也。」

◎基督はポンテオ、ピラトに答へて、我は王也。眞理を證せむ爲に來れりと言ひしと、日蓮が平の左衞門尉に答へて、我は日本國の主也、師也、親也、法華經の眞理を弘めむが爲に是の土に來れりと言ひしと、精神的に其に相似たり。無上道に安ずる者の言はおのづから然らざるを得ざる也。

◎何れの世に於ても等しく、村學究と道學先生とは眞人の罵る所に非ざりき。基督は當時の祭司學者の徒を罵倒して曰く、長き袍にて歩き、衢にて禮せらるゝを喜び、食堂の席の高きを好み、長き祈禱に託けて寡婦の家を呑むかの學士を愼めと。是れ日蓮が勸持品二十行の偈に於て當時の高僧學者等を痛罵したると何ぞ相似たる。俗人と眞人とは常に相容れざる也。

◎基督は己れに從はむとする者に訓へて曰はく、行いてあらゆる汝の所有を賣り、歸りて十字架を取りて我に隨へと。日蓮亦其の弟子檀那等を誡めて曰はく、謹で所領を思ふ勿れ、父母親子を顧みる勿れ。常に是の臭骸を以て法華經に捧ぐるの覺悟あれ。是れ砂を以て金に換へ、糞を以て米に換ふる也と。其の高調激越の聖語、眞に永く靈界の指針となれるを見ずや。」

◎基督が其の使徒等に示して宣教の覺悟を訓ふるの一段は四福音書中の最も光輝ある文字也。讀者若し去つて日蓮が日進に與へたる所謂教行證御書を一讀せよ。布教の方法素より相同じからずと雖も、其の地上一切の權力を否定して眞理に殉するの精神氣魄に到つては、兩々相照して其の文字亦光明を競ふの觀あり。

◎基督が山上の說教は當時の文明に對する大折伏なりき。續いて其の弟子等に訓へて傳教の覺悟を示せる言の如きは光焰萬丈、眞に今古の大文字也。日蓮が種々御振舞御書に述べたる佛滅後二千二百二十餘年以下の告示と日蓮に與へたる教行證御書とは正に是に匹敵すべきもの也。其の折伏の意氣に於ても、其の文字の雄大に於ても。」

◎吾人が前號に一言せし如く、貢の問に關する基督の答は實に四福音書中の最大の宣言也。曰く、カイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へせと。是れ正に日蓮が鎌倉の殿中に於て、身は隨ひ奉るとも心は隨ひ奉るべからずと斷言せると、恰も符節を合するが如し。是の一言を沒し去らば、天下又基督教無く、佛教無し。

◎基督の預め受難の運命を知るや、歎じて曰く。あゝエルサレムよ／＼、汝等の家は墟址となりて遺されむ。唯我れ汝等に告ぐ、主の名によりて來るものは祝されむと。是れ日蓮が蒙古の來襲に關する預言と太だ相近し。曰く、あゝ謗法の國家日本は滅びなむ、唯々主なるものは日蓮が徒なる哉と。嗚呼諸君よ、諸君は是の兩個の宣言に潜める偉大なる眞理を如何に觀るや。

* * * * * * *

讀者若し四福音書と高祖遺文錄とを比較せば、必ずや類似點の多きに驚かむ。吾人亦唯避けて是を書かざるべし。唯兩者の相反對せる諸點に就いては更に一言の要あるを見る。

◎基督教は感情の教也、故に直覺的也、觀念

的也、秩序無く系統無し。佛教は道理の教也、故に思想的也、理論的也、秩序あり、系統あり。

「基督はパリサイ、サドカイ等の徒にあらず、又當時流布せる何等の知識にも觸れざる一無學者に過ぎざりしが、僅かに洗禮者ヨハネが無識に感ぜられて愛の道に悟り入りぬ。日蓮の學知は是に反して獨り當代のみならず、永く今古に俯仰して何人にも遜色無きものなりき。彼は清澄に學び、叡山に學び、前後十有年の間一代聖教の疑惑を決せむが爲に天下の書を讀み盡して終に法華一乘の眞理に達したり。」

「基督は三年の間一たびも學理を説きたる事無し。彼れ自らも當代の知識に離れたる一個の自然兒に過ぎざりき、今日の學者は彼れが姦婬の女に對する場合に於て地に書けりと云ふの一事を以て僅に其の文字を書し得たるを證する程也。日蓮は全く是に反せり。彼れは智見高邁、學殖豐富、實に當代の大智なりしのみならず、其の教相判釋の點に於て古今に俯仰して多く遜る所無き也。是の點に於て兩者の性格正に相反す。

「布教の方便に於ても兩者全く其の軌を異にせり。基督は情に訴ふるを先とし、惱める人の心に慰めと望みを與ふるを旨とせしが、日蓮は理を攻むるを旨とし對者の邪義を破折して自家の眞理を認識せしめずんば已まざりき。されば基督に從ふものは情の門よりし、日蓮に從ふものは智の門よりせり。」

山上の垂訓の如何に感情的に、如何に直覺的に、又如何に詩的なるかを見よ。是を日蓮が、所謂、四個格言の理論的思辨的なるに較ぶれば、其の立教の大本に於て明に兩者の相違を見る。

基督はヨルダンを離れてより四十晝夜の間沙丘の中に彷徨ひしが、日蓮は叡山を下りて八年の間天下の知識を求めたり。彼れの教を弘めたるや三年、此れの法を説けるや三十年。

◎日蓮は道理の辨折を以て對者を屈せむとす。是を以て奇蹟の如きは彼れの教に於て多く用ふる所無し。彼の伊東の朝高の病を治し、其の母を復治せしめ一或は龍の口に奇厄を免れし」が如きは彼れが傳記中の奇蹟に類すれども、其の有無は彼れの教に於て殆ど輕重する所無し。是の奇蹟を外にしたる基督傳が如何に落寞たるべきかに比較せよ。又ラザロ復活の如き事實が如何に其の教の傳播に力ありしかを思へ。

布教の方法、場所に於て兩者は全く其の趣を異にせり。基督は主として野外、或は會堂に於て下層の人民に說けるのみ。彼れに就きたるものは當時の學者に非ずして多くは漁夫の類なりき。彼れは其の思想を言葉に顯はし得る者が當代の俗習に汚されざる小兒の如き民衆なるべきを思ひしならむ。日蓮の法を弘めたるは鎌倉幕府の中央にして天下の碩學名僧の環視の間に於て其の法鼓を鳴らしたり。「彼れは先づ當代最高の智識を屈服して自家の教義に歸依せしめ、以て天下の民心を風靡せむとしたりし也。其の方法、基督が無智の民衆を感化して社會を根柢より改造せむとしたると正に相反す。日蓮のやり方は謂はゞ演繹的也、基督のやり方は謂はゞ歸納的也。」

◎基督は逆境あれば則ちベルサレムの谷、ガリラヤの湖畔、もしくはハイテニの山に登りて、其の自然の美の間に高潔なる感情を養ふを樂みしが、日蓮は動もすれば經藏を遍歷し、岩窟に隱れて論述著作を事とせり。遺文錄三十卷を讀めば彼れが平生の研究に太だ力めたるを認むべし。

◎基督の其の反對者に向ふや、多くは機智を以て其の正面の攻撃を避け、却て省察により悔悟を促すの態度を取れり。例へば姦淫の女に

關しては、汝等の中罪無きもの是を打てと言へ、貢の錢に關しては、リイザルの物はリイザルに歸へせと答へ、又何の權威ありて汝是等の教を爲すぞとの長老學士等の難詰に對しては、我も亦一言汝等に問はむ、ヨハネが洗禮は何處よりぞ、天よりか人よりかと反問する等、何れも是の類ならざるは無し。然れども日蓮は全く是に反す。彼れは如何なる場合に於ても正々堂々の論陣を張り、天下に檄して法論の對決を求めたり。彼れは常に公言して曰く、我れは眞理の在る所に就く、我が說誤らば我は直に是を捨てむ、と。されば開目鈔の三大誓願に序して、我が義智者に破られずは用ひじと也と公言せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此種の同異は尚ほ甚だ多し、畢竟是れ其の立教の精神のおのづから然らしむる所にして、妄に輕重是非の批判を許すべきに非ず。若し夫れ東西の偉人を取りて漫に其の異同を列擧するの無用の事たる、素より是を知る、唯吾人は依りて以て道徳的比較の下に伏在せる偉人其物の本分を看取し得れば則ち足る。

(明治三十五年六月)

(記者附記　日蓮と基督(第一は全集としては無題に一公にせられたるもの、故著者が三十四年四月十二日以後週「太平洋」に一公にしたる「宗教談」は大體に於て此の文と同じく、同年三十一日に行つ分は、茲に掲げたる第一に、同三十八日、及五月五日の分は第二と大差なし。卽ち編者は「宗教談」中より[illegible]を補ひ、其の他大同の分は二の二篇の儘に存して「宗教談」を捨てたり。後より補ひたる分は角括孤「 」を附したり。)

## 人格の力

世間には、オーソリチーに對する信仰として云へば、直ちに迷信と同一視する人多し。これも吾人を以て見れば、オーソリチーに對する信仰はあり、たしかなるは少し。

オーソリチーを信ずとは、其の言を信ずるに非ずして其の人を信ずる也、其の高大なる人格の現はれたる形式として其の言を信ずる也。人の知には到らざる所あり、人の情には信ぜざる所あり、宗教茲に立ち、信仰茲に本づく。こは人の弱點なりとも、人として免れ難き、否な必然とも云ふべき弱點也。オーソリチーに對する感情は一種の宗教也、吾人は是の偉大なる人格の中に於て、知り難きことをも知り得べく、感じ難きことをも感じ得べしと信ずる也。かゝる人格の發表としては、一言一行も吾人にとりては言ふべからざる高大なる意義あるが如く觀らるべし。古の所謂言は大なるもの卽ち是れ也。

法學校の一年生に伊藤侯(博文)位の政治論は隨分出來るものあるべし、哲學を一通り學びたらむ人は、加藤博士(弘之)の功利論位は說き得ずとも限るまじ。唯吾人は其實、伊藤侯の口に出で、加藤博士の舌に上れるを見る時は、何やら重みある樣に覺ゆ。これ理外の理也、所謂オーソリチーの信仰也。天下の事、概ね是の如し。

されば其の言を輕重するは表面上の事也、事の根柢は人の實在也、人格の事也。天下は道理もて動かし得べしとする人あらば、そは未だ共に談ずるに足らざる人也。

(明治[illegible])

# 月夜の美感に就いて

月夜の美感の三大要素——月光と青——青の色相——青と寒——青と冷——青と赤——青と禍——月光の青に於ける黒素と白素——其の標號——月光の青と普通の青との比較——月夜の美感の不定——感情の共鳴——月夜と白晝——夜の世界と月光との調和——聯想——過去の追憶と古人の思想——其他の要因

## 一

美はしき物の例へにも、月花と云ふめる。まことに月夜の美感を讃ふるにふさはしき言葉は、この世に幾何もあらざらむ、人はたゞ詩人の筆の短きを恨みとすべきなり。

今や秋も末になりて蟲の聲も絶えだえなり、人は三秋の月夜を如何に過ごしけむ、試みに過去の情を細想して吾等と共に月夜の美感を考ふる、亦可ならむ乎。

## 二

予の見る所によれば、月夜の美感を成せる最も大なる要素凡そ三つあるが如し。一は月の光なり、二は是の光に照されたる夜の世界なり、三はこの月夜の光景が觀者の心に惹き起す所の聯想なり、この外にも時と處と、觀る人の心とによりて、それぞれの原因あるべけれど、一般に所謂月夜の美感は右の三要素より成れりと觀るを得むか。

月の光は、其の強さに於て太陽の光に較ぶべくもあらず、科學者の言によれば、設令ひ天空の全部を擧げて月たらしむるも、其の光尚ほ白晝を去ること頗る遠かるべしと云ふ。されど月の光が吾等の視覺に及ぼす影響は、事實に於て普通の色彩と大差無かるべきか。而して月の光を色彩と見る時は、そが最も近きものは、青なるべし。月夜の青きは、空又は海の青きが如くならずと雖も、其の根色に於ては紛ふべくもあらざる青色なり。若し空、又は海の色に幾分の暗と淡とを加へなば、吾等は容易に月光を想像し得べきなり。月光の色を以て青なりとせば、吾等は先づ一般青色の色相、及び感情に就いて一言するの要あるを見る。

## 三

青は其の波長に於ても、又其の強さに於ても、黄及び赤に及ばず、若し黄、赤を光に近しと云はゞ、青は寧ろ暗に近しと云ふべきか。一種の色としては、素より多少の力を有すれども、而かも其の力は他の多くの色に於ける如く、積極的に人心を昂むるの力に非ずして、むしろ消極的に人心を鎭むるの力なり、黄、橙黄、若しくは赤の熱色なるに對して所謂寒色なるや、青の表示するところの感情は、冷なり、靜なり、安慰なり、寂寞なり。その光力の強きものにありては、打見たるところ一分爽快の趣無きに非ざれども、尚ほ吾人の感情を能動の側に昂揚するの力無し、次の刹那にありてそが吾人を導く所、やがては沈思の境なり、冥想の域なり、而して更に一歩を轉ずれば、人心の裏面に在りて、幽渺名け難き一種の憂鬱なる潤い色を與ふるなり。されば青の表示するところの感情は、先づ以て人心消極の半面に屬はれりと謂ふべきか。卽ち哀みなり、信なり、平和なり、慰藉なり、凡そ輕浮、活動、執着、煩惱等もろもろの積極の感情はそが主として反對する所なり。一言すれば、青の色相の一面は意志を沒

するにあり。

　而して、青はその他面に於て、無限てふ觀念と最も密接の關係を有するが如し。予の見るところによれば、青はさながら暗黑の輝けるが如きなり、究りなき遠距離もしくは、限りなき夜の空の色相を帶び來れるが如きなり。少しく大袈裟に言へば、『無限』『永遠』『神祕』と云ふが如き不可思議なる實在が、その實在を示さむが爲に、假りに色相を帶び來れるが如きなり。されば、吾人の是れに對するや、情の一面に於て沈靜、安慰の感あると同時に、知の他面に於ては、幽遠、深遠の想ひを生ず。是に於て宗教、哲學の幽境たる絶對、もしくは彼岸の世界に對する沈思と冥想と起る。而かも是際吾人の心には渇仰と云ふが如き意志に關はるはたらき無かるべし、そは感情の側に於て既に意志を沒し去りたればなり。既に意志無くして而かも沈思あり、而してこの沈思や無限、永遠、神祕に對するの沈思なり。純粋なる認識 reines Erkennen 是に於てか起る。純粋なる認識とは、意慾の實行を謝絶して單に對境を認識するの謂なり。既に意志の羈絆を擺脱するを以て、意慾の目的たる利害實際に於て淡然たるに等し、謂はゞ是れ實在に對する[illegible]の觀照、[illegible]の意識なり。青の色相が人心に及ぼし得べき最高の影響は、實に是の境地に到りて極まれりと謂ふべし。

　是の如く說かば、讀者の中或は文飾の夸大に過ぎたるを疑ふものあらむ、されど予は主として是の青色の影響によりて月夜の美を說かむとするものなり。想ふに是の如き意識に到達するには、必ずしも月夜を待たざるべし、青天を望み、蒼海を眺むるも、觀るものゝ心もち次第にては尙ほ是を能くすべしと思はる。唯白日晃々の下に於ては、人の現身尙ほ塵寰世界の重圍の中にあるを以て、容易く是の如き純粋なる觀照に勝へざるを憂ふべきのみ。

四

　青の色相が沈靜、安慰、冥想の感情を表示することは、他の色との比較により一層明なるべきなり。青の力はその赤に近づくに隨ひて漸く增進するを見る。夫れ黄は赤の光力最も弱きもの、赤の煩惱に對して理想の色なりと言はる。理想は畢竟意志の活動なり。今空の色によりて代表せらるゝ純粋なる青に加ふるにこの黄を以てせむか、其の結果は緑となるべし。即ち緑は青の一歩を轉じて赤に向ひきたるものなるを以て、その表示するところの感情は、青の沈靜に加ふるに黄の理想を以てす、即ち是れ安慰の中に一分意志の發動を交へたるものなり。是を以て緑は古より希望の色なりと謂はる。そは希望とは、理想に對する向上の思索に外ならざればなり。青の赤に向つて進むこと緑を超ゆる更に一歩ならむか、即ち紫を得べし。紫は青と赤との中間に位するもの、而してその表示するところの感情は渇仰 Sehnsucht なり。赤は熱色の極軸にして活力煩惱の至極を表示するもの、今青の沈靜に加ふるにこの赤の煩惱を以てす、得るところの紫が渇仰の色たる、もとより其所なるべし。

　是の如き色の複合、並に其の表情の如きは、色彩を扱ふる人の熟知するところなるべし、而して是等の事實はいづれも色相上青は沈靜、安慰、冥想の標號なることを證するものに非ざるは無し。褐色の如きも同一の原理によりて說明せられ得べし。この色は通例健康、能力の標號なりと言はる、而してその成素を分析すれば、黄、青、赤三色の複合色に外ならず、黄と青と合して成すところは希望の色なる緑なり、更に活力煩惱の[illegible]たる赤を加へ、以て其に[illegible]なる能力の[illegible]、自然の[illegible]

と謂ふべきか。

畢竟青の表示する感情は沈靜なり、安慰なり、冥想なり、色相上の赤の表示する所と全く相反す。赤は活動の色なり、煩惱の色なり、意慾の色なり、是を喩へば、赤は太鼓の響の如く、青は横笛の音の如し、赤は情慾に熱せる男子の如く、青は靜思に沈める女子の如し、赤は爛漫たる牡丹花の夏に傲れるが如く、青は瀟洒たる水仙草の冬に際へさるが如し。

# 五

以上述べたるは、普通に見るところの日光中の青色なり。さらば月夜の色なる青は如何に。

月光の青は、二つの點に於て普通に見るところの青に異なれり。第一の點はその光力の弱きことなり、換言すれば、普通の青に較ぶれば、一分の暗を帶ぶることなり、第二の點は其の色の淡きことなり、換言すればやゝ白味を帶びて朧げなることなり。凡そ黒色、若くは、黒色の表示するところは、解くべからざる秘密なり、沈靜の至極、即ち寂滅、死滅なり。今青に加ふるに一分の暗を以てす、是れ青をして一歩黒に近づかしむるなり、取も直さずそが表示するところの感情をして更に一層の神秘と、寂寞とを加へしむるなり。是に於てか月夜の青は、これを普通の青に較ぶれば、そが表示せる沈靜、安慰、冥想に於て一段の深さを加ふ。若し夫れ色の淡きは、其の色の白きを加へたるの謂なり。白はあらゆる色相の不在を證するもの。即ち色にして色にあらず、そが表示するところは無體無相の極致にして、畢竟する所非實在の標號たり。今青にして一分の白を加ふと云ふ、是れ非實在に向つて一歩を轉じたるもの、換言すれば、實在の青に加ふるに一分の假象性を以てせるものと謂ふべし。是の如く月光の青色は、一面に於ては其の暗きが爲に沈靜の情を深からしめ、他面に於ては、その淡きによりて實在の性を淺からしむ。

されば、普通の青と月光の青とを較ぶれば、彼れは實にして是れは假なり、彼れはレアルにして此れはイデアルなり、もし赤を以て太鼓の響に比し、普通の青を以て横笛の音に比すれば、月光の青は尺八の音にも較ぶべからむ。日中の青もまた沈靜、冥想の標號なりと雖も、そが表示するところの者は凡て尚ほ實在たるを失はず。

されば天の青きを見るも、海の青きを見るも、山野草木の青きを見るも、實在物として是を見るのみ。然して觀る者の上には[illegible]々たる白日の中にあるを以て周圍の事物、混[illegible]として實在の意識を確むるものに非ざるは無し。然れども月夜の青は其の淡きにより既に假象的たり、而して其の暗きによりて沈靜の情を深うす、况してや時は日中にあらずして實在する人生の休止時を見るべき夜間なるをや。

是の如く見る時は、月夜の青は其の色によりて大半を説明せらるべきにあらずや。かゝる微妙なる色彩は天地を裹みて一色たらしむるなり、あらゆる物、山も、川も、草も、木も、田野も、市街も、人間も、天地間のあらゆる物は、是の微妙なる色彩によりて一抹せられ、均しく其の同じ色相を現ずるなり。月を觀る人、彼れは夢みたるに非ず、されど彼れの見る所の薄暗き、青白き世界は、實在のものと何等か異なれるものあるを感ぜざるべきか。さなきだに青は沈靜、冥想、悲哀の色なるを、彼れの心はその暗く且つ淡きにより一層の感を深うすること無かるべきか。寂寞たる夜間の光景と相待ちて幽渺名け難き月夜の安慰と、冥想と、悲哀と、是の如くにして生ぜらるゝに非ざるか。

月夜の美感や幽渺言ひ難し、されど、一事の明なるは、そが吾人に及ぼす感情の悲哀の・

面に傾けることなり。而して凡そ色相の誘起する感情は不定なるものなるを以て、是の場合に於ても悲哀は不定の悲哀なり、たゞ何となくうらかなしきなり。而して月光の青は吾人の意慾と共に、是の意慾の主體たる「我」をも沒するを以て、其の悲しみや、我執の悲しみに非ずしてたゞ何となく悲しきなり。悲しむものの我れなることをも打忘れ、我れは唯悲しき世界その物の、分身なるが如く覺ゆるなり。譬へば妙なる音樂に聞き惚れたる人の、樂しみ外にありて我れその中に在るが如く覺ゆると同じかるべけむ。而してこの悲しみは美より實なる、確かなる、悲しみに非ず、そが淡然として定かならざるは、月の光の底暗きが如く、其の淡きは月の光の夢の如きにも似たらむかし。

六

幽渺にして定かならざる月夜の感情は、是れと類を同うせる他の物象に伴はるゝことによりて、更に一層の痛切を增すべし、こは猶ほ調子等しき數音の共鳴するが如きなり。讀者は定めし月下に尺八の音を聞きしことあらむ、さらば是の樂器の特有ともいふべき一種言ひ難き詠歎のひゞきは、月夜のうら悲しき感情といみじくも調子の合へるを注意せしことあらむ。もし喇叭の音などにてあらば、いかばかり月夜の情景を損ふべきや。讀者は嘗て月夜野に出でて小川の潺々として流るゝを聞きしことありや、或は松濤の錚々として響けるを聞きしことありや、予の經驗によれば、斯かる折には月夜の感情の一入痛切に感ぜらるゝなり。畢竟是等のものは、月の光の響とも謂ひつべし。ゲーテが名高き「月に對して」の歌は這般の幽趣を捉へ得たるが爲に、千古の絶唱として稱へらるゝならずや。

月夜の世界及び感情の如何に假象的なるかを知らむと欲せば、そを日中に於て追憶するに若くはなし、日中に追憶せる月夜の情景は、さながら夢の如きなり、夫の幽妙なる靜思と哀情とはむしろ迷ひの如く思はるゝなり。日午高く天に懸れる月球を見よ、色あせ形微かにして、さながら小兒の弄べる紙鳶と云ふものにも似たらずや。月その物も月夜の感情も、日中に於ては一の幻影に過ぎざること是の如きのみ。ロングフェローの歌に曰く(日中と月光)

昨日白日の下に
吾れ詩人の奇しき歌を讀みし時
その歌のしるすところ、
吾れにはまぼろしの影なりき。
されど終に苦しき日は
煩惱の如く消え去りて、
清らに靜かなる夜は、
村、谷、山の上に懸りぬ。
斯くて麗はしき月は
御たまの如くかゞやき、
是の世ならぬそが光もて
夜の暗さを照しけり。
詩人の歌はこゝに復た
たへなる樂の如く我が胸にひゞきけり、
詩人の美と神祕とを
示せるものは夜なりき。

七

以上は專ら色相上より月夜の美感を說明したる也。されどこれのみにては足らざらむ。月夜の美感を構成する要素として、其の暗淡たる青色に次ぐべきものは夜の世界なるべし、精はしくいへば、是の如き青色の彩れる世界が夜の天地なることとなるべし。斯く謂はゞ或は問は

む、夜なればこそ月も照すなれ、爾の言ふところ論理上の誤謬に非ずやと。されど予の所謂夜の世界とは、日光無き世界の謂に非ず、人生の側より見て日中の活動時に對する休息時の謂なり。

休息時としての夜が、月夜の美感を構成する上に如何ばかり大いなる力を有するかは、その反對の場合を想像することによりておのづから明ならむ。今假りに月光の照すところの世界にして、日中に見る如き活動の世界なりと想像せば如何。その青白き光如何ばかり麗はしからむも、そが吾人に及ぼす影響は果して爾かく幽妙なるを得べきか。青はもと沈靜の色なれども、意慾の力盛なる人に對ひては其の效果極めて薄からむ。日中にありては人はおしなべて意慾の人なり、煩惱の人なり、その社會はおしなべて優勝劣敗、生存競爭の社會なり。かゝる人、かゝる社會に對しては、月の光も又何爲るものぞ。若し夫れ夜の世界は、かゝる意慾、競爭の休止を告ぐべき世界なり。人は、日の活動を現世に奉じたる後、茲に退いてその精神の安慰を求むるなり。勞れたる夕陽の西山に沈むは、人生日々の戰闘に對する休戰の合圖なり、人はこゝに其の鋒を收め、其の冑を脫いで、静かに平和の世界に憩はむとするなり。されば夜は活動の時に非ずして、静思の時なり、煩悶の時にあらずして安慰の時なり、人にはパンの外にも糧あるが如く、晝の外にも世界あり。人生の慰藉と幸福とは必ずしも名利の世界に限ると思ふなかれ。人は活動に生くるが如く靜思にも生き、渇仰に生くるが如く咏歎にも生く、光明に生くるが如く暗黑にも生き、現在に生くるが如く過去にも未來にも生き、現實に生きるが如く理想にも生き得べし。夜こそはこの人生の大いなる半面を時間の上に現示せる者ならずや。されば夜の世界は、男に非ずして、女なり、散文にあらずして詩歌なり、哲學に非ずして宗教なり、太鼓の響に非ずして横笛の音なり。かゝる夜に於て月の光を見るこそ嬉しけれ、さなきだに靜思に沈み、咏歎に傾ける人の、そが青白き、夢の如き光に洗はれたる心地の如何にうれしかるべきぞ。月の光は即ち夜の冥想の空しからざるを證するなり、六慾煩惱の巷の外にも尚ほ人の求むべき安慰の存することを證するなり。

是を要するに、夜の世界その物が人心に及ぼす影響は、正に月夜の美感に對して重要なる素地を造る。もし是の素地無からむには、月光のいみじき色もその效果如何に乏しかるべきぞ、想ふべし。

## 八

されど月光の色と夜の世界との外に、重要なる第三の要素あり、月夜の美感は是れによりて一層深く、且一層痛切に感ぜらるゝなり。

凡そ夜の世界、及び月光の色相が吾人の心に惹き起す感情は其の内容に於てこそ沈思、悲哀なれ、其の形式に於ては不定なり。換言すれば、そが沈思し、悲哀するところの對境に就いて何等明瞭なる意識あるに非ず、たゞ何となく思ひに沈み、たゞ何となくうらがなしきのみ。譬へば野も山も共に月の一色に塗抹せらるゝが如く、我心にも亦一種悲哀の調子の響きわたるを覺ゆるなり。もし人の心に快濶と沈鬱との兩面ありとすれば、沈鬱の一面は是の悲哀の響に共鳴して、やさしき、悲しき、哀れ深き、其他これに類せるもろもろの情緒に開發の機會を與へ、こゝに吾等の精神に一種の名狀すべからざる安靜と慰藉とを與ふるなり。「月見れば千々に物こそ悲しけれ」とは這般の心情を歌ひたるものなるべし。されど斯くして起されたる感情は、初めの中こそ定かならざれ、そが開發

するに隨ひて、終には一個の具象的形式を得ざれば已まざるべし、而してこの定かならざる感情に具象的形式を與ふるものは即ち聯想なり。

　聯想にもさまざまの種類あり、觀る人の性格、閲歴、境遇によりて素より一樣ならざるべきも、先づ以て何人の念頭にも浮ぶべきは、自然と人生との對比なるべし。此世にはあるまじき月の光の清らなる、蒼茫たる天空の心ゆくばかり美はしく且つ限りなき山川の依稀として無言の靜寂を保てる、平和のおもかげ、悠久のしるし、何れか現世との好對比に非ざるべき。始なく終なき自然の美はしき大觀に面すれば人生の事業の如何にあはれにも、また見すぼらしく見ゆべきぞ。名利、得失、成敗、生死、あはれ葉末の露にも較ぶべき五十年の短生命を擧げて是の煙火の巷に齷齪し悲喜することのむしろ滑稽にも見ゆべきなり。是の如きは月夜の感慨中、最も普通に見るところにして、又吾人の道徳的感情の上に最も大いなる影響を及ぼすものなり。

　自然と人生との對比に次いで、最も著しき聯想は、過去の追想もしくは遠人の懷慕なるべし。

江畔何人か初めて月を見しや、
江月何れの年か初めて人を照せし。
人生代々窮り已む無く、
江月年々望み相似たり。

　こは何人も知れる張若虛が詩中の句に非ずや。天地の悠久に比して人生の須臾なるを歎ずるが中に、過去世の追憶を交へて感慨のうたゝ永きを覺ゆ。衛萬が呉宮怨の詩に、

勾踐城中、もとの春にあらず、
姑蘇臺下、黃塵をおこす。
たゞ今たゞ西江の月のみありて、
曾て、呉王宮裏の人を照しき。

と謂へるも亦然り。殊には李太白が有名なる「把酒問月」の詩の如きは最も痛切に是の感慨を現はせりと謂ふべし。

靑天月ありてよりこのかた幾時ぞ。
我れ今杯を停めて一たびこれに問ふ。
人の明月を攀づる、得べからず、
月は行いて却て人と相したがふ。

＊　＊　＊　＊

今の人は古時の月を見ざりしが、
今の月は曾て古人を照らしたりき。
古人、今人、流るゝ水のごとく、
共に明月を看て皆かくの如けむ。
唯願はくは當に歌うて酒に對するの時、
月光ながく金樽の裏を照さむことを。

　我が眺めつゝある月は、昔の人も眺めたる同一の月なりとの意識は、當に過去世の觀念を實にして同情の强さを增す力あるのみならず、月其物に對しても一種の親しき、他ならぬ感情を覺ゆべし、されば月を介して吾れは直に古人の心情を感得するの想ひあるなり。國破れて山河ありと謂ふと雖も、而かも天上の明月長へに渝らざるに較ぶれば、山河も尙ほ桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して而かも自らは一分の隆替を感ぜざる月が、過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは、極めて自然の事なるべし。月によりて遠人を懷慕するの情も同一の起原を有すべし。張若虛が詩に、

誰が家ぞ、今夜偏舟の子は、
何れの處かに相想ふ明月の樓。
憐むべし樓上に月徘徊す、
玉戸簾中、卷けども去らず、
擣衣砧上、拂へどもまた來る、
この時相望めども相聞かず、
願はくは月華を逐ひ流れて君を照さむ。

多感なるハイネも、是れと同一の感情を星に

就いて歌ひたり、
　美はしき、晃らかたる、黄金の如き星よ、
　遠く、わが戀人に告げて言へ、
　われは長へに愁らし、
　おとろへ、なやみながらも、と。

過去世の追憶、遠人の思慕、これ等は月夜の聯想としては恐らくは何人も覺えあることならむ。是の聯想は、精神全體の沈鬱悲哀なる後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふるの力あり、もろ〳〵の詠歎は、この聯想の絲をたどりて、一種の幽邃なる安慰を吾人に與ふべし。素より觀る人の經驗、性癖によりて、自づから特殊の聯想を惹き起すべきは、言ふ迄も無し。

## 九

以上述べ來りたる所は、詮ずる所月光の色、夜の世界、及び聯想の三者が、月夜の美感を構成する重なる要素なることを證するにあり。されど予は同時に是の外に數多の小原因あるを認むべし。例へば夜の空氣の肌に爽かなることも、慥に一原因なるべし。月を觀るは夜なれば、良しや夏の眞盛りにても、晝午の溫度に較ぶればさわやかなるに相違なし。肌に爽やかなるは、精神上の洗滌 Reinigung を惹き起すべき、少くとも一誘因とはなりぬべし。若し夜の空氣にして蒸し暑く、汗などの流るゝ程ならむには、月夜の美感は得て想像し難からむとおもはる。又觀る人の心もちにも大に關係あるべし。月を觀て樂しまむ程の人の心は、多くの場合に於て既に初より月の美に感じ易き心たるなり、換言すればその性情の傾くところ、初めより既に月夜の美感と諧和し居れるなり。名利の外に樂地無き人には、月夜の美も爲す所無かるべし。かゝる原因を數へなば、是の外にも多々あるべし、されど凡ての人の平等なる最も重なる原因を以て、先に擧げたる三ケ條に歸するは庶幾くは大過なきを得むか。

（明治三十二年十一月）

# 文は人也

今の文章の多くは僞文のみ。意義語朴の眞に人を動かすもの極めて稀也。詩人キーツ言あり、曰く、己れの脈搏の上に試みられたるに非ざれば、公理も公理と稱するを得ずと。嗚呼、戀愛と云ひ、希望と云ひ、慰藉と云ふ、何れも人生の最大事實也。自らの血と涙とを以て是れを解釋したる人にして、初めて是れを口にするを得む。

⊙文字は符號のみ、それを註解するものは作者自らの生活ならざるべからず。文は是に至りて畢竟人也、命也、人生也。

⊙人の產み得るものは唯己れの子のみ。あゝ今の時、墨工硯人の類にして詩人と稱し、文學者と號する者、何ぞ一に多きや。

（明治三十五年四月。「無題錄」）

# 人生終に奈何

人生終に奈何、是れ實に一大疑問にあらずや。生きて囘天の雄圖を成し、死して千歳の功名を垂る、人生之を以て盡きたりとすべきか。予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を樂む、何ぞ須ひん身後千載の名、人は只行樂して已まむか。予甚だ之に惑ふ。蝸牛角上に何事をか爭ふ、石火光中に此身を寄す、人は只無常を悟りて終らむか、予は甚だ之に惑ふ。吁、人生終に奈何。

將た人は只死するが爲に生れたるか。

嘗て一古寺に遊ぶ、檐朽ち柱傾き、破壁擺欄、僅に雨露を凌ぐ、環堵廓然として空宇人を絶ち、芒々たる蔓草[illegible]暗く、古墳累々として其間に横はれるを見、猛然として悟り、喟然として嘆ず、吁、天下心を傷ましむる、斯の如きものあるか。借問す、是れ誰が家の墳ぞ、弔祭永く至らず、墓塔空しく雨露の爲に朽つ、想ふに其の生れて世に在るや、冲天の雄志磊々として禁ふる能はず、天下を擧げて之に與ふるも心慊焉たらざりしものを、一旦魂絶えて身異物となれば[illegible]塔墓陵、盈尺の地を守りて寂然として聲なし、人生の空然たる哀むべきの至ならずや。後人碑を建て之に銘するは其心素より其英名を不朽に傳へむとするにあり。然れども星遷り、世變り、之が灑掃の勞を取るの人なく、雨雪之を碎き、風露之を破り、今や塊然として土芥に委するも人絶えて之を顧みず、先人の功名得て而して傳ふべきなし。思一たび此に至れば彼の廣大なる墓碑を立てゝ名の不朽を願ふものは何等の癡愚ぞや。嗚呼劫火烔然として一たび輝けば大千日に壞す、天地又何の常か之れあらむ。想ふに彼の功業を竹帛に留めて盛名の窮なきを望むものは、其癡之に等しきを得むや。

悟れ、一瞬の須臾なるも、千歳の久しきも、天地の無窮なるに比すれば等しく是れ一刹那なるにあらずや。名其死と共に滅するも、死後千年を經て亡ぶるも、其終あるに至つては一なり。人、生を此世に享け此一時の名を希ふ、五十年の目的、遂に之に過ぎざるか。予甚だ之に惑ふ。

功名朝露の如し、賴むべからず、人生終に奈何。毅然として流俗の毀譽に關せず、優游自適其の好む所に從ふ、樂は即ち樂なりと雖も、蟪蛄草露に終ると孰れぞや。栖々遑々、時を匡し道に順ひ、仰いで鳳鳴を悲み、俯して匏瓜を嘆ず、之を估りて售れざらむことを恐れ、之を藏めて失はむことを憂ふ、之れ正は即ち正なりと雖も寧ろ鳥獸の營々として走生奔死するに等しきなきか。光を含み世に混じ長統の跡を尋ね劉子の流を汲み、濁醪一引、俯して萬物の擾々焉たるを望むは快は即ち快なりと雖も、醉生夢死、草木と何ぞ擇はむ。吁、人は空名の爲めに生れたるか、將た行樂せむが爲めに生れたるか。果して然らば是れ夸父日を追ふの癡を學ぶにあらざれば禽獸草木と其命を等うせむとするものなり。予甚だ之に惑ふ。

南華老人は言へらく、大覺ありて其の大夢たるを知ると、佛氏は曰へらく、體空の寂、或は四諦を悟る所以なりと。已めよ、若し人生を以て夢となさば、迷へるも悟れるも等しく是れ夢にあらずや。縱ひ身を觀じて岸頭離根の草とし、命を論じて江邊不繫の船となすも、期する所は一の墓門にあらずや、生前の事業、夢中の觀の如く、死後の名聞、草露の如くんば茫然たる吾が生、夫れ何くにか寄せむ、大哀と謂はざるべ

けむや。嗚呼人生終に奈何、予往を顧み來を慮り、半夜惻然として吾れ我れを喪ふ。

（明治三十四年六月）

## 古き眞理

年若き人よ、如何なれば是の麗はしき春の日を尙ほも名利の巷に走り暮さむとはするぞ。さらばこの涙の谷に住みながら尙ほ愁ひの泉、底淺しと歎たむとや。

まことに、是れ古き眞理也。されど春風年ごとに面を吹く毎に、人は乃ち老ゆるを如何せむ。聲あるものよ、何ぞ歌はざる。歌ひ得べき日は此世に幾何もなきぞかし。口あるものよ、何ぞ飮まざるや。酒杯に對して漫に其の泡を吹く勿れ、其の泡の消えざる前に汝の命の終りを告げざることを誰れか保し得るや。

年若き人よ、胸に青春の炎を宿するもの、口に道義を說いて何にかせむ。炎は他を焚かずんば自らを焚かむのみ。其の髮尙ほ綠にして其の心死灰の如くならむ、醜くからずや。

## 法則と生命

新しき聲の最早や響かずなりたる時、人は死語の中より所謂法則なるものを造り出だす。是を以ての故也、所謂法則の榮ゆる處、そこには必ず生命の死滅あるは！

## 吾人の理想

吾人に三つの理想あり。一に曰く完全なる生慾。二に曰く安眠。三に曰く平和。唯是れのみ、あゝ唯是のみ。

## 永き戀、早き死

此の生の憂苦を免るゝの道、たゞ三つあり。永き戀か、早き死か、然らざれば狂。あゝ吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎。

## イゴイスト

人あり吾人に言つて曰く、予はイゴイスト也。是の活き甲斐もなき生を享けながら、何の遑ありてか人の爲にし世の爲にせむ。是の如きは世の謂はゆる惡人ならむ、然れども予は自らの善人なれば則ち足ると。

吾人聞いて答ふるところを知らず。唯憮然として偉に[illegible]

## 裸體の盛裝

今の所謂道徳が方便、形式、禮習と[illegible]如何ばかり個人が中心の要求に應ずるなきかを檢覈するは、吾人が見て現下の急務たる所也。

人々各々自己の意識に點火して靈性の聲に聽くところあれ。昔者裸體にして盛裝せりと思へる一人の王ありき。王の愚は可し、裸體を觀て尙ほ齊しく其の盛裝を讃美せる群臣百性に到りては忍ぶべからざる也。あゝ人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

## 己れの立てるところ

哲人教へて曰く、己れの立てるところを深く掘れ、其處には必ず泉あらむ。自らの心の中に求むるところあれよ、世は即ち汝の物ならむ。

然れども悲しき哉、多くの人は己れの立てる處を知らず、何處に自らの心を求むべきやも覺らざる也。

（明治三十五年五月）

# 東西二文明の衝突

人は己れの知る所の外は何物をも信ずる能はず、其學ぶ所に偏するは洵におのづからなる勢なりと謂ふべし。是を以て洋學者は一切事物を拘束するに西洋の學理を以てせむと欲し、時と處とに隨つて斟酌應與する所以を知らず、其同を知りて其異を見ざるの弊に陷るもの、比々として然り。西學に闇き人は、之に反して重きを自國の特質に措くの餘り、知らず〳〵己れを揚げて他を抑へ、偏に其異を見て其同を察せざるの弊あるを免れず。偶々同異を分ち差等を辨じ、權衡調和の必要を説くものあるも、一知半解の臆斷に終らざるもの罕なるは、是れ亦おのづからなる數なりと謂ふべし。

東西二文明の牴觸は漸く政治社會を去りて、文學美術の境域に移りつゝあるは、吾れ人の大に注意すべきことなりとす。是れ文化發達の途上に於て免るべからざるの階段として、吾等の素より豫期せし所、敢て今更の如く騷狂するを要せずと雖も、而かも之に向つて適當の準備を措らざることは、吾人が日本文學に對する當然の責務ならずとせむや。

請ふ看よ、演劇界に於ける新舊二派の競爭、美術界に於ける裸體畫是非の爭ひ、小説界に於ける飜案可否の論、若しくは文體、國字、語法に關する諸説の衝突、是等は果して何事を意味するものなりや。其形の上より見れば洵に瑣小の末事なるが如きも、而かも其由來を追跡すれば何れか東西文明の牴觸に非ずとする。若し夫れ倫理、宗教、教育の問題に入るに及びては、兩洋の思想、各々其殊を保ち其異を樹て、峻として枘鑿相容れ難きもの多きが如し。一葉以て天下の秋を知る、我國文學の士の之に對する覺悟如何、敢問、々々。このごろ

東洋の新美學を作れと唱ふるものあり、吾等は其深く東西二文明の調和に注目したるの言なるを喜ぶ。獨り其説く所の淺膚杜撰にして識者の一笑に資するに過ぎざるを憾みとするのみ。

西歐の美學は西歐特殊の思想を反映せる美術より歸納せる一特殊の典則のみ。(日本人第九號)

と言ふが如きは、論者自らが西歐美學に於ける知識の皆無なるを自白したるもの、是の如き意見を懷いて權衡裁斷を口にするは、そも〳〵分外千萬の事なりと謂はざるべからず。美學は美術を説明するものなるも、而かも美學は單に美術によりて立てられたるものに非ず。特殊の美術より歸納せる特別の典則は之れ特別なる美術の典則なるのみ、美學の原理にはあらざるなり。げに例せば人體のシムボリク、建築、音樂等に關して西人の説く所は、直に移して吾人の好尚を律すべからざるも、美學の原理に至りては元より平等普遍の人心に根據し、牢として拔くべからざるもの無くんばあらず。之れやがて美學が一の科學として成立し得る所以に非ずや。且夫れ我邦の人の多くは美學を以て偏に標準の學なりとのみ心得、其本領の説明學に在るを知らざるものの如し。而して漫然東洋の新美學を作れなど叫ぶものあるに至つては、吾等は其學風の輕佻にして、其思索の淺膚なるを悲まずんばあらず。二物を調和せむと欲するものは勿論雙方に就て十分なる知識を有せざるべからさるなり。

吾等は想ふ、東西文明は遂に調和せられざるべからず、然れども是れ只忍耐と精勤と之を導

くの遠大なる目的とによりて初めて成され得べきのみ、一時無謀の客氣は之を謹まざるべからず。今日の青年は兎角

獨創の意見

を作らむことを急ぎ、動もすれば大言して曰く、

今日の書を讀むもの死文死語を見るのみ。博く讀まむことを思うて深く思ふことを爲さず、別に一隻眼を具ふるにも非ず、特得の見地を有するにも非ず、徒らに其讀み得たる死文と死語とを剪裁して其識を衒ふの要に供ふるに過ぎざるのみ。此の如くにして已まば、是れ六尺の身を以て糊と剪刀との用を爲すのみ、嗚呼人にして獨創無し、鸚鵡と何ぞ擇ばむ、猿猴と何ぞ擇ばむ。

是れ東洋の新美學を作れと論ぜしと同じ人の語なり、當今是と同じき考を有する一派の青年甚だ多きが如し。其意氣や洵に嘉すべし、其時弊に中れる所も亦全く應與の益なしとせず、而かも只一時の空論放言に止まりて實行の決して之に伴ふ能はざるは論者自らの已に萬々承知のことなるべし。まことや世界の思想は連續なり、生ける發達を爲しつゝあるなり。眞に世界文化の進歩の爲に貢獻する所ありし學者の思想は、今尙昔の如く凜々として活き居るなり。プラトーン、アリストテレースの思想を死せりと謂ふものあらば、其人は學問の何たるを知らざるの人なり。誠に過去の思想を理解するものに非ずば、如何でか將來の學問に益することを得べき。

明治の學術界は知新を名として近眼膚淺の弊に陷りぬ、との哲學雜誌の一記者の苦言は、洵に時弊に適中せりと謂ふべし。今や我邦の青年は古典の研究は扨て措き、あらゆる先哲の思想を斥け、世界的思潮の外に身を拔き、單身赤手所謂「獨創」の思想を發揮せむとす。腹空しく心のみ高き年少の鋭氣、無邪氣にして愛すべきもの無きにしも非ずと雖も、而かも實學に益なくして徒に後生を誤るの少からざるは識者の潛に眉を顰むる所なるべし。今日我邦は殘念ながら未だ西歐の思想を理解するに至らざるなり。よし東西思潮の優劣は暫く之を言はざるも、吾等は尙未だ西洋の文明を綜合し得るの位置に達せざるなり。まして二思想の上に超駕して之を勸[illegible]裁斷し得るの日に至つては尙甚だ近からず。大なる事業は大なる準備を要す、深く考へ、博く學び、古今東西の思潮を尋究し、析いて分朱と爲し、打つて一團となし、急がず、逼らず、着々歩武を占めこ不退轉に精進するの向上的精神を興奮し、以て世界的大思潮の先鋒たらむことを期せざるべからず。東西思想の抵觸を見ては急遽狼狽して東洋的科學の創作を叫び、先哲古典の澁滯し難きを見ては意氣俄に沮喪して、漫に獨創の意見を唱ふるが如き、之れ近眼者流に非ずんば、薄志弱行の徒のみ。吾等は再び前言を提起す、日本將來の學者に要する所のもの三つあり、曰く忍耐、曰く精勤、曰く遠大なる目的と。

古典攷究の必要

世にはかゝる近眼者流の多き中に、間々を認めたる青年學者の卓拔なる意見に接するは吾等の甚だ喜ぶ所たり。先には哲學雜誌に、現時の學術と古典の攷究」と題する快心の一論文を見、やがて前號に讀者の注意を惹きたりしが、近頃又帝國文學紙上に、上田敏君のものせる『典雅沈靜の美術』と題する麗はしき一文に接し、一讀傾蓋の思あり。よしや、情熱の高きに眩みて君が論に幾多の矛盾と撞着ありとするも、よしや薔薇花の如き美はしき衣を纏ひて、君が審美論のいかにも若々しく見ゆるとするも、よしや君の論の前置の餘りに長くして旨とする所のあまりに飽氣なしとするも、何はともあれ、吾等は古典攷究の價値と歷史的研究の必要とを

認めたるの一點に向つて全幅の同情を寄するにためらはざるべし。

吾等をして古來の大思想の上に立たしめ、高遠悠大なる精神に鼓吹せられて其の建築に一片の瓦を添へ、其の織文に一縷の絲を加へて、後代の爲に一際美はしく豐なる遺物を造らしめよ。

實に然り、洵にシルレルが言ひけん如く、古の尊き知識はあらゆる時代に活き居るなり。世界の思潮は幾千年の時を通じて賢き人の思想に與へ又貢がれて、遂に今日の文化を成しゝなり。是故に世界的思想の歷史に於ける自己の關係的位置を知らむと欲せば、歷史上の發展を知悉せむことを要す。是れ今日の所謂歷史的研究の思想の修練上にも、發達上にも、絕對的に必要なる所以なり。そは歷史的發達を外にして所謂獨創の意見なるもの有るべき由無ければなり。吾等の言ふ所を以て不急無用の論なりとなす者あらば、其人は當今文學界の如何に歷史的精神に乏しきかの實情を知らざるの人なり、吾等豈辯を好む者ならむや。

（明治二十八年十月）

## 國民の聲

人は謂ふ國民の聲を聞けと。吾は則ち問ふ、國民の聲何處に在るかと。學者の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等の言は國民の關り知る所に非ず、彼等の多くは國民の名を借して其一家の言を飾るもののみ。

詩人の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等の歌は彼等の私情を聞かせらるゝのみ。

新聞紙の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等の論は一黨一派の利害に立つ、國民の幸福と風馬牛のみ。

政治家の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ、彼等は國民の名によりて私己の權勢を爭ふのみ、國民と何の關する所ぞ。

國民の最大多數は實に默然として聲なき也、唯夫の偉々焉たるもの、是無聲の國民を利として動もすれば口を是に藉る。經世家たるものよ、沸々たる小泡沫の下に、千萬尋の深淵の杳然として聲なきもののあるを知れ。

（明治三十一年十二月）

## 國民の名の濫用

國民の名の濫用せられたるや久い哉。民選議院の建白は國民の名により爲されたり、愛國公黨の組織も國民の名によりて爲されたり、自治制も、代議制も、民政主義の唱道さへも何れか國民の名によりて爲されたるに非ざるべき。然れども直に國民の名によりて事を爲さむと欲する者は、眞に國民の欲求を領會せざるべからず。眞に國民の欲求を領會せむと欲する者は、先づ國民の性情を解釋せざるべからず。夫の漫然外邦文物の皮相を欽羨して外より是を強ふるもの、焉ぞ國民の聲ならむや。

遮莫、無聲の國民は國家の柱たり、彼等は地の鹽なり。僞政家、經世家は百人千人の囂々たるものゝ外に四千萬人の無聲の國民あるを忘るゝ勿れ。

（明治三十一年十二月）

# 明治思想の變遷

（明治三十年史總論）

明治初年以來三十年間に於ける最近の歴史を述ぶるに先ちて、そが根底となれる國民思想の推移を尋ねむに、そも／＼維新の當時にありては、幕府仆れて王政古に復りたれども、未だ然るべき政體だに定まらず、嘉永このかた一國の怖れとなりし外國の事情も定かに知る由もなく、尊王討幕の餘焔は未だ志士の胸に消えざれども、誰ありて國論の向ふ所を一にし、萬邦對峙の中に我國民に千萬年の進路を示せしものなし。「廣く天下の公議を盡し聖斷を仰ぎ同心協力共に皇國を保護仕り候へば必ず海外萬國と可並立候」とは、慶喜將軍が大政奉還の奏聞中の語なれども、狼狽爲す無きのさまはこゝにもおのづから現はれたり。洵に數百年の長夢より目ざめたる國民が、頭を擧げて世界の大觀に眩惑し、一朝かゝる亂離の世に處し、剰へ外邦の交渉を控へたるもの、如何でか明確なる國民思想を作り得べき。今や王政維新を促したる國學神道は是國家の大局面に何の力もなく、徃にし日の攘夷の志士も亦爲すに所無く、國民一般の思想は謂はゞ渾沌の裡に自然の成行を待てる有樣たりき。幸に聖天子上に在まして、鋭意勵精補弼の翼賛を納れさせられ、天祐を保全し、大業を克復し、茲に新政の大本、百代の鴻謨を立てさせられ、天下の人心を率ゐて向ふ所を一にせられたるは、洵に天地の恩澤、我國家の慶事なりとこそ謂ふべけれ。誠にかゝる危殆の世にありて、國家の中心として萬民を率ゐさせられたる我皇室の稜威功徳の程は、我國人の夢忘るべからざる所なり。

されば維新以降の國民思想は、一に聖天子の叡慮により其方向決まれりと謂はむも不可なし。明治元年三月、畏れ多くも聖上には親しく紫宸殿に臨ませられ、公卿諸侯を率ゐて天地神祇を祭り、五事を以て天下の億兆に誓はせ給ひしは、とりも直さず我國民上下の思想を統一せむとの聖旨なりき。後年の國是は一に是の五事よりして定まれるものなれば、こは吾等臣民の金科玉條として日夜常に誦すべきものなり。

一 廣く會議を興し萬機公論に決すべし。

一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

一 官武一途、庶民に至るまで各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめむことを要す。

一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

一 智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

是五つの事は、洵に當代の急務にして、かねて永世の基礎なり。叡慮の宏遠なること誠に感銘に堪へざるなり。上は國家政治より、下は文學美術に至るまで、一として是大旨に本かざるものなし。廣く會議を興し、萬機公論に決すべしとは、まさしく立憲代議制の濫觴にして、官武一途、庶民に至るまで各々其志を遂げしむとは、即て門閥の舊習を打破し、廣く人才を天下に求むるなり。智識を世界に求むとは、廣く世界の文明を收容し、長短互に相補翼して我邦の新文明を開くなり。三十年間明治の歴史は何れか是大御心に本かざるべき。けに是五事の詔勅は明治思想の根源とこそ謂ふべけれ。社會百般の遷革、維新の革命によりて、

制度は殆ど其根帶より破壞せられたれば、世はさながら餓ゑ渇ゑたるものの如く、苟も是缺陷に投じて新世紀に處するの道を示せるものは、最も熱心に歡び迎へたり。げに聖詔の示す所によりて、大體の方向は定まれるものから、實行の機に臨みて聊か望洋の嘆を免れず。時の人が新に唱へたるものが果して永世の主義として依賴するに足るものか、其利何處にありて其弊何處にかある等の問題は、未だ思料するの遑なく、ひたすら目前の急需に迫られて、新たるものを迎ふるに忙はしかりしぞ自然なる。斯くて先づ入り來れるものは西洋主義なりき。こは一旦國を開きて西洋の事物に親めば、見るもの、聞くもの想ひしに優りて、驚かるゝもの多かりければなるべし。

是主義を輸入するの緣となりし事情はくさぐさあれども、朝にありては貴顯高位の人々歐米諸國を視察し、歸りて彼邦の文物の我れの比に非ざるを唱へしと、野にありては福澤諭吉、中村正直、敬宇などの諸學者が私學を開きて盛に洋學を世に獎めしとは、其最も直接の緣となりしならむか。就中福澤氏は、慶應年間より已に是目的の爲に今日まで其義塾の名を冠れる私塾を東京三田に開き、政治、道德、風俗、習慣、一に西洋の功利學によりて子弟を訓へたるは、是主義の擴張にはゆゝしき効力なりき。其所記の一二の例を擧げむに、我國人は古より天理人道を一定不變、萬古動かざるものの如く思惟すれども、こはいみじき謬りなり。『忠臣二君に仕へ、甲州武士が德川其他に仕へて働きたるも、亦天理人道に戻りたるに非ず。年若き寡婦が落髮して尼寺に入り、亡夫の菩提を弔ふも天理人道なり、再緣して子を生み、よく其子を敎育するも天理人道なり。今の世に兄弟同胞が夫婦とならば、天理人道に戻るならむと雖も、アダムとイブの子供等は誰と緣組したるや。又日本書紀に仁德天皇八田の皇女を皇后とすとあり、××××××××××××。今より思へば不思議なれども、其時代には矢張り天理人道に基きし也』云々と說きて、本邦古來の固陋なる道德を根本より覆へし、又『權論』と云ふを說きて、楠正成は我邦にて古今に雙び無き忠臣の鑑と稱せらるれども、湊川にて死なでもよきに死したるは、是れ權兵衞が褌にて首をくくれると同じ事なりと論じ、苟も事の實際に益なくば、其行爲をも賞するに足らずとの意を述べたり。又世の人が空名に拘はりて實益を知らず、爲す所概ね迂濶なりとて、『學校に石盤を用ひて數學には明なれども、店先の帳合には暗く、作文諳誦は上手なれども、手紙の文句は出來ず、窮理書は讀みたれども、竈の築き樣と流しの水はきには工夫を用ふるを知らず、化學の吟味は經たれども、甘酒の作り樣と豆腐の製法は未だ之を聞かず。或は十二三の娘子が西洋流の學校に入り、又は西洋人の手に就き、西洋音の唄を習ひ、西洋風のメリヤスを組み、却て縫袋の縫ひ樣も知らず、或は和漢洋の書を讀みて三十一字も少しは出來れども人身窮理は忘却して自分の體の骨も知らず、風を引いて容體を述ぶることも知らず』云々と說き、從來の敎育が實際の世事に疎遠なるを諷せり。福澤氏の是等の說は、今日より見れば何でも無き事なれども、維新草創の當時、廢れたりとは謂ひながら古來の武士道、佛敎、國學の敎尙ほ人心に浸潤せりし際に於て、敢て斯かる說を唱道していさゝかも忌憚する所無き其卓見と膽勇とは、眞に敬服すべきものなり。斯かる人ありて是實益功利の學を呼號し、其旗幟を拔き置きたればこそ、爾來諸般の西洋文物の斯くは容易に入り來り得しなれ。思へば日本の新文明が是三田の先生に負ふ所如何ばかり大なりけむ、其說の往々奇矯にしてやゝ正徑に遠ざかれるものも無

きに非ざれども、事に應じて策を異にするの道としては、寧ろ其眼識の明を稱ふべきなり。福澤全集こそ明治の小歴史なりとの意も是邊りに存すべし。福澤氏の外に中村正直氏ありて、東京小石川に同人社と云へる私塾を開き、均しく西洋の功利主義に本きて社會の教育に力め、英人スマイルス氏の諸著を譯して西國立志編、西洋品行論など公にせしは、福澤氏と共に其功沒すべからざるものありき。されど其説は福澤氏のかた遙に平民的、通俗的なりしが爲に、社會の感化力に於ては中村氏のかた、遙に劣れりしは是非も無し。

斯く上下の風潮は西洋主義に傾きければ、西洋語、殊に英吉利語を學ぶもの年毎に増さり行き、隨うて幾多の著譯書は踵と跡と相接して世に出でぬ。其三四の例を擧けむに、歴史には萬國新誌、泰西通鑑、西洋英傑傳あり。地理風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞錄あり。修身倫理には智氏家訓、勸善訓蒙あり。政治經濟には新政大意、立憲政體略、萬國公法、民約論、銀行論あり。其他開化問答、文明開化、世渡りの杖、道理圖解等、一々枚擧に遑あらず。鐵道電信より衣食住百般の有形的事物が、靡然として洋風に化しつゝある間に、是等の著譯が諸官私立學校の洋學教授と相呼應して、如何ばかり當時の人心を風化せしやは、恐らくは今の人の想像し得ざる所なるべし。民約論の如きは殊に甚し。是書は前世紀の佛蘭西人、ルソー氏の著にして、極端なる民主論なり。其要旨は、社會の主は人民なり、君主政府は人民が自己の利益の爲に造作したるものなれば、人民に都合惡しゝと見る時は、何時にても是を改廢するの權は人民にありと云ふにあり。是れ佛蘭西大革命の一原因を爲せるまで彼邦にては勢力ありたる書なり。是書一たび中江篤介氏によりて譯されてより、急進改革を喜ぶの士は、爭うて是を讀み、其説を鼓吹し、民權自由の聲、一世を聳動せり。西洋に心醉せる當時の社會亦漫然是過激の言説を看過して多く怪まず、一部の保守の士、もしくは先覺の士の外はそが我民情國體と相容れざるものなることを認めたるものなき程たりき。げに代議政體は明治元年の五事の御誓文に本けりと云ふものから、そが開設をして一日を速からしめたるは、是民約論の如き書によりて陶冶せられたる急進者流の運動與つて力ありと謂はざるべからず。

斯く民間思想の大勢が、西洋主義に靡ける間に、朝廷にありても人材公選の詔あり、明治二年、明治四年には廢藩置縣を斷行し、五年には初めて京濱間の鐵道を開通し、同じ年に從來の太陰曆を廢して太陽曆を用ひ、八年には政[illegible]革の詔を發し給ひ、かの御誓文の意を擴充し、元老院を設けて立法の源を廣め、大審院を置きて審判の權を鞏くし、且地方官會議を召集して民情疏通の途を披き、漸次に立憲政體の完成に近づかむことを期せり。當時朝野の心を一にして改進の道を急ける樣は、是等の事實に就いて見るも略々明ならむか。

茲に是革新の氣勢を助長するに少からざる力ありしは、新聞紙なり。こは朝野の間に立ちて、當時にありては活眼達識の士を多く記者として網羅したりければ、其説く所は幼稚なる當代の社會にとりて光明となり、指針となれるも少からざりしなるべし。新聞の由來を尋ねむに、元治の頃、米人某が横濱に於て毎月數回期を定めて刊行せし「新聞紙」と稱せるが本邦新紙の嚆矢ならむ。其他維新の前後、京濱間に萬國新聞、内外新報、中外新聞、藻鹽草等の數種ありしが、其頃のものには社説と云ふもの無く、唯公私の報導を秩序なく臚列せしに過ぎず。新聞紙本來の品性は、其當事者にだも知られざりし程なれば、まして社會の是に對する眼も甚だ

低かりしものなるべし。されば兎にも角にも新聞紙の體裁を具へたるは、明治五年以後に出でたる東京日々、京濱毎日(今の毎日)、報知、朝野、曙の諸新聞に初まれりと謂ふべし。是等新聞の記者は如何なる人々なりしかと云へば、東京日々の福地、末松、京濱毎日の沼間、報知の矢野、藤田(茂吉)、朝野の成島、末廣、曙の岡本(武雄)等、當代の名士にして、中には然らざる人もあれども、其多くは何れも西洋思想を抱持し、所謂新文明の先覺を以て自任せし人々なりき。されば其主張唱道は、其說に漸急の差別こそあれ、西洋思想を以て一世を率ゐむとせるものに非ざるは無し。人若し當時の新聞紙をとりて其論說を讀まば、西洋主義、歐化主義が紙面に横流せるを見む。

げに當時の社會に最も勢力ありしは、一言すれば歐化主義なりき。是主義は其現はれたる形の上より見れば種々あれども、其根本の目的は我邦一切の文物を西洋化するにあり。啻に其衣と食と住とを洋にするのみならず、啻に鐵道を布き、電線を架し、其外部の生活を洋にするのみならず、國體も、民心も、出來得るならば其髮をも、眼をも、皮膚をも、洋にせむとするにあり。素より當時の急進者流と雖も、斯くは明に其目的を自覺せず、唯漠然何とはなしに洋風を欽慕して是に模倣せしならむも、其形迹に就いて見れば、一般に甚だ極端無謀なりしなり。隨つて是より漸く尊外自卑の風習を馴致したるは、是亦おのづからなる勢なりき。是外を尊ぶの傾向は、明治の初年にも已に明に存せしことは、當時の横濱日刊新聞に左の如き記事あるにても知らるべし。

此程横濱に居られし大原前侍從殿、昨十一日九ツ半(編者注、今の午後一時)に御入城に相成る。……さて通行の道筋にては、家々戸を鎖し、細き紙札にて目張りをなしたり。通行の時、道路にありし士民は皆平伏蹲踞せり。然るに西洋人は、更に我國人の爲す如くせずして、馬上にありて傲然と是を見物するに、誰も咎むることをせず、聊か故障あること無し。實に日本人の開けしこと是にて知るべし。云々。

數年前には、一諸侯の行列を妨げりしとて外人を斬り捨てにせし勢なりしに、今は却て外人の無禮を咎めざるを開化せりと賞讃す、時勢の變遷を見るべきなり。横濱は夙に互市場なりければ、外人崇拜の風も最も早く行はれたるべく、之に反して全國是風潮に靡きしは、明治十年近くにありしも亦怪むに足らず。當時の國民は、外を容るゝに急にして内を顧みるに遑無く、遂に全く我國粹を拋却して偏に外物を尊びしも、一國思想の發達上已むを得ざる一階段なりと謂ふべし。然れども是傾向に對して全く反動無きに非ず。明治六七年の頃に一時盛なりし皇學の如きは、其一例として見るべし。

顧ふに尊皇敬神を以て立てる國學が、幕府と相容れざりしは、自然の勢にして、斯道の豪傑平田篤胤の如きは殊に慘酷なる迫害を受けたりき。然れども幕府の權威漸く衰へ、其根柢漸く搖ぎそめし頃より、國學者流は多年の壓制に對する反動として、陰に陽に尊王討幕の氣勢を助け、維新の大業を成就する上に於て多少の力を寄與したり。然れば、維新以後の社會が上下を擧げて偏に西洋に心醉し、是大業を成すに力ありし本邦固有の國學を顧みず、却て是を菱除せむとする有様を見て、爭でか多少の反動無くして已むべけむや。殊に一方には、朝廷にては國學の徒を用ひて復古の政を助けしめ、明治元年の祭政一致の詔を初めとして、同三年には神靈鎭祭の詔あり、大教宣布の詔あり、教部省を設け教導職を置き、神

道國學を布く上に於て多少力を盡せしかば、歐化主義の大勢動かすべからざる際にも、社會の一部には國學の餘焰全く消えずして殘りき。是の餘焰は明治六七年の頃に至りて一時に揚がり、國學神道の研究を以て東京に遊學せる書生一時頗る多かりき。されど、其勢固より旭日沖天の勢ある歐化主義に比すれば、十の一にも足らず、例へば一枚の板を提げて江河の横流を防ぐが如く、何等著しき效果を貽さざりしは、是非も無き勢なりと謂ふべし。

かくて所謂皇學者流の些細の反對を蹴倒して、歐化主義は一瀉千里の勢を以て進行せり。是際社會上下の事の注目すべきもの多々ありと雖も、是歐化の傾向は板垣、副島、後藤、江藤、四參議の民選議院設立の建白、及び是等の諸氏を中心とせる愛國公黨の組織に到って其頂點に達せりしが如し。

所謂民選議院設立の趣旨と稱するものは、今日より見れば誠に單純幼稚なる思想にして、所詮は歐米各國の政體の美に眩惑し、民約論的の思想を以て是を解釋し、是を我邦に施さむと力めたるものに過ぎず。我國體民性の特質、歷史、及び當世の現勢に就いては殆ど顧みる所無し。其觀察素より一面に偏れるの誚を免れず。四參議等の建白の要旨に曰く、方今政權の歸する所、上皇室に在らず、下人民に在らず、而して獨り有司に歸す。是を以て政令百端、朝令暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ。是を振肅するの策、唯天下の公議を張るにあり、天下の公議を張るは、民選議院を立つるにあるのみ。夫れ人民政府に對して納稅の義務あるものは、理として當に其政府の事に關與するの權利あるべし、是れ天下の通論にして、民選議院の據って立つ所の原理なりと。同時に建白者諸氏が組織したる愛國公黨の『本誓』に左の一條あり、以て當時民選議院を主張したる諸氏の思想の如何に民約論に感化せられしかを知るべきか。曰く、

我輩の斯の政府を視ること斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外なかるべし。而して吾黨の目的は、唯々斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして自主自由獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ。

同じ『本誓』の中に、「斯の主義は愛君、愛國、一片至誠の上よりの發憤」なりと辯じ、天皇陛下御誓文の旨意を遵奉するの意に外なしと述べたり。されど當時諸氏は、是の如き極端なる民約論的民主思想と兩立すべき「忠君愛國」の道とは、果して如何なるものなるべきかを明に自覺したりしや否や、洵に疑はしき次第なり。是時民選議院の主唱者の一人板垣氏が、高知の青年を鼓舞して起したる立志社の趣意書を見るに實に左の如きものあり

夫れ我輩熟思し、日本國の人民たり、則ち三千有餘萬人盡く同等にして、貴賤尊卑の別なく、當に其一定の權利を享有し、以て生命を保ち、自主を保ち、職業を勵め、福祉を長じ、不羈獨立の人民たるべきことと昭々乎として明白なり。是權利なるものは威權以て是を奪ふを得ず、富貴以て是を壓するを得ず、蓋し天の均しく人民に賦與する所のものにして、而して斯權利を保有せむことは、亦人民の宜しく勤勉すべき所のものなり。云々。

こはまさしく天賦人權論にして、帝王にも乞食にも同等の權利ありとするものなり。

斯かる極端にして且幼稚なる思想によりて、國家の大事を料理せむとしたるも、所詮は明治初年以來の歐化主義の頂點に達したることを表はせる也。是過激なる歐化主義は、端なくも國民の間に枉屈せる保守主義の反動を惹起し、

其結果は、遂に民選議院反對論となりて顯はれぬ。これは當時獨逸學者の泰斗なる加藤弘之氏によりて其緒を啓き、西周、森有禮、諸氏是に和して一時新聞紙上の論壇に兩派互に火花を散して戰へり。其意見の要に曰く、制度憲法を創定せむには、先づ邦國今日の世態人情を詳察して、是に恰當適切なるものを撰ばざるべからず。今日未だ進まざるの民智に委ぬるに民選議院を以てせば、是れ愚人をして愚論を闘はしむるに過ぎず。民選議院の主論者は、ルソー氏の說により、政府を以て全く約束より成るとするも、政府の事を與知するの權利は、納稅と相對する權利にあらず。況や一國の政府は、必ずしも約束に起るものにあらず、古來歷史上の沿革其源を異にするものあるに於てをやと。

是保守說の見るところは、歐化主義者流の見る所とは大に異なれるを認むべし。歐化主義者流は飽くまで民を以て主となし、政府君主を以て民の爲に存在するものとなす。然るに保守主義者流は、各國特別の歷史に本きて、政府と人民との關係おのづから定まれるものあるが故に、政府は必ずしも人民任意の約束に成るものにあらずとなす。兩者正に相反す。然れども當時の言論に就いて見れば、保守論者が指摘せるは、我政府と人民との關係は歷史的に成りて歐米諸邦の比にあらずと漠然と言へるのみにて、一も國體と云ふことに言到せず、想ふに政體と國體との差別の如きは、其深く區別せし所に非ざりしたらむ。且つ我邦にありて、政府と人民との關係の如何なる點が、如何に歐米各國と異なるか、其歷史上の沿革の那邊に彼此の差ありや、等の疑問に對する精細なる解釋に至りては、是等の論者一言も說き及ばざれば、其說に果して如何程の確實なる論據ありしやも知り難し。想ふに唯々漠然たる信念と觀察とに本き、其保守的感情に導かれて、歐化主義の極端說に反對せしに過ぎざるべきか。

民選議院に反對するものには、尙ほ早しとするものと、絕對的に非なりとするものとの二種ありしが、廟議は遂にかの五事の御誓文に本き、欽定憲法制定の詔を奏請し(九年九月)、後に到りて國會開設の期をさへ定めたり(十四年十月)。これは素より萬機公論に決する當初の御誓文を貫通する聖旨に出づと雖も、抑々又一世輿論の向ふ所を容納させられたる大御心に依らずんばあらず。

政治上に於ける歐化主義の流行は、國民思想全體の反射とも見るべきものなれば、そが社會の內部に於ける影響も亦推し測らるべし。されど社會の上に於ては、一國の政體に於けるが如く直接の利害未だ甚だ明ならざるを以て、是に反對する主義も亦現はるゝこと比較的に遲かりき。されば民選議院反對の聲可成りに喧しき時にも、帝政黨の如き保守主義の政黨の現はれし時にも、君父に對する義務よりも自己に對する義務を先にせる勸善訓蒙、智氏家訓等の譯書は依然として倫理教科書として國民教育に用ゐられ、殊に西南戰爭終を告げて、西洋心醉の政治家內閣を組織するに及び、西洋の文物は上下の社會を擧げて歡迎せられたり。自由主義の政黨が其機關新聞紙上に鼓吹せる民權論自由論は、依然として一部の社會を司配し、其首領が、「板垣死すとも自由は滅びず」と叫びたる言葉は、改革に熱心なる人々には殆ど聖者の福音として傳へられき。天賦人權の說は更に男女同權の論を產み出たし、女子にして所謂憂國の志士と共に周旋の人となるものすらあり、革命に關する翻譯小說は盛に讀まれ、リットン、ヂスレーリ等の政治小說も亦頻に世に出でき。當時和漢學者の間に多少の反對はありしかども、さしたる效果もなく、從來の漢字を排せむとするかなのくわい、さては國字をも共に

捨てむとする羅馬字會等、踵を接して起りき。獨り學術の上にて、西洋の我に優れるのみならず、其文學にまれ、美術にまれ、我に取るべきもの無しとせられたれば、和漢の古書は殆ど其價を失ひき。西洋風の假裝會、舞踏會は盛に奬勵せられ、大學學生が女學生と混同して英語にて忠臣藏を演じたるも是頃なり。西洋人と云へば、何處か我よりも高等なる人間の如く思はれ、社會一切の事物の中にて我に取るべきもの殆ど無しと思惟せられき。斯かる時に弘道會の如き日本固有の道德主義を唱ふるもの起りたれども、其說く所は固陋に過ぎて、汎く時の人に容れらるゝに到らず。佛教界の人々は是等守舊派と連衡し、破邪顯正の旗幟を飜へしけれども、基督教は歐化主義の後に據りて、前後比類なき全盛を極めたり。世界的眼光を以て日本を觀察すと呼ばはりたる德富蘇峰氏の『將來の日本』は、一世の讀書社會に歡迎せられ、續いて世に出だせる雜誌『國民の友』、亦青年書生に愛讀せられき。されども其唱道したるは民約論の亞流なる平民主義なりき。其系統より云へば、無論歐化主義の一產物にして、我國體民性の特質、本邦固有の美所長所等に就いては一も言ふ所なかりき。兎に角明治二十年の頃まで、國民思想の大勢を籠蹈したるものは、西洋主義、歐化主義、隨つて外物模倣主義、外人崇拜主義なりき。

玆に一言すべきことは、吾人が是迄西洋主義、もしくは歐化主義として呼び來りしものの中に就いて、審に是を檢すれば、更に數種の小分派の對立を見るべきことなり。其旗幟の最も鮮明なるもの凡そ三あり。第一は英吉利流の功利主義にして、こは福澤氏を首めとして、すべてミル、ベンサム等の說に私淑するものの唱ふる所なり。第二は、佛蘭西流の自由主義なり、こは民約論の譯者たる中江氏を首めとして、大井、板垣、諸氏の祖述したる所なり。第三は獨逸流の國家主義にして、こは加藤、海江田、諸氏の唱ふる所にして、近世獨逸の國家學者スタイン、ビーデルマン諸氏の說に本く。是中尤も根帶深く且つ勢力あるは、無論英吉利流の功利主義なり。然れども是主義は主として社會の實利にのみ注目し、政體等に關する大問題には比較的に冷淡なりき。然るに佛蘭西流の自由主義は、社會の根本的改革の根源を政體の革新に存せりとなし、目前卑近の功利を措きて、驀地に是大問題を提へて是を鼓吹せり。是れ民選議院の首唱者が福澤氏一派の功利論者に非ずして、主として佛蘭西流の自由論者なりし所以なり。若し夫れ獨逸流の國家論者は、本邦の舊習を打破して西洋の新思想を輸入することに於ては、他の二派に均しと雖も、政治の問題に關しては全く佛蘭西流の自由論者に異なり、飽迄君主の無上權を主張し、萬民平等の權理を認めず。是れ民選議院の設立に反對せるものの中に純然たる保守論者の外に獨逸學者の多かりし所以なり。社會上の勢力の上より見れば、獨逸派の勢力微々たりきと雖も、政府の要路に當れる人々の中には、彼地に遊びて國家學の講義を聽き、もしくは其感化を受けしもの割合に多かりしを以て、官吏社會には勢力ありき。かく西洋主義の中にも、おのづから三黨分立の姿ありけれども、民選議院の問題に關しては、繁を避けむが爲め其大勢の上より歐化主義と保守主義の爭として說述せり。先に述べたる如き歐化主義の勢力漸く其極端に近くに隨ひ、二十年間の新教育新時勢を經驗せる國民は、漸く中心に於て其弊を覺り來りぬ。今や一反動の提起せらるべき時機は方に迫りぬ。是反動の氣勢を代表して蹶起したるものは、雜誌『日本人』を機關とし、志賀、三宅、諸氏によりて唱へられたる所謂國粹保存主義なりき。

國粹保存主義とは如何なる主義ぞと云ふことに就きては、當時區々の論戰ありしが、詮ずる所、其名の示すが如く、我國粹を保存するにあり。既に保存すと云ふ以上は、保存せらるべき國粹の存在を假定せるや論なし。而して特に是國粹を保存すべきを主とする以上は、是を打破するの反對主義を預想するも亦勿論なり。國粹保存論者は、素より夫の歐化主義を以て其反對主義と思惟せること明なれども、保存せらるべき國粹の何なるかに就きては、明に說示する所無かりしが如し。唯漠然彼の長を取りて我の短を補ふは、是れ眞に一國文明に裨益する所以なり、夫の一も二も無く外邦の文物に心醉して、我の長所美所を拋棄するは、甚だ不可なりと說けるに過ぎず。然れば其所說の多少明確を缺きたるより、反對論者より、無差別に歐米の文物を排斥し、我佛をのみ獨り尊しとする固陋なる保守者流と同一視せられたり。こは誠に誤解なるべけれども、其說の消極的方面を說くに精しくして、積極的方面を說くに粗なるが爲に、國粹論者が自ら招きたる嫌も多少あるべしと思はる。所詮は國粹其物の性質に就いて、確的なる科學上の說明を缺きたるの弊なりと謂ふべきか。

然れど國粹保存主義其物の價値は如何にもあれ、そが國民思想を覺醒し、是れまで徹上徹下に跋扈し來りたる歐化主義の適否に就いて一大猛省を促したる功績は、明治歷史の上に特筆すべきものなり。げに一個の主義の勝敗は、一時の論戰に於て決せらるべきものにあらず、其主義の依つて以て起りたる國民思想の根柢にして確乎不動のものならむには、終には最後の勝利を占むべきなり。國粹保存主義は、決して二三氏の創意に興りたるものに非ずして、維新以來歐化主義の爲に多年の屈辱を忍びたる國民精神の自然の發露なりとすれば、根柢たる國民の精神にして衰へず、渝らざる限りは、依然として其勢力を保持すべし。其名或は變らむ、そを唱ふる人も或は變らむ、其說く所の說の形も亦或は變らむ、されど其主義の實質に到りては時勢の進步と共に益々進步して、決して衰退すること無かるべし。國粹保存主義は慥に是の如き主義なりしなり。

げに國粹保存主義の唱へられたる頃より、國民思想の漸く其方向を轉じ來れることは、掩ふべからざる事實なり。從來にありては、國民の思想を動かしたる主力は、常に西洋思想たりき。かの民選議院の爭論の際にありて、是を主唱せる者は素より論を待たず、是に反對せる主力も西洋學者なりき。國學神道の系統を引ける純粹なる日本主義論者も、是中にありしかど、そは極めて少數にして、特に言ふに足らず、爭論は主として西洋學者の爭論なりき。故に加藤氏一派の獨逸學者が民選議院を尙早とし、若しくは否認するにも、其論據は一に西洋の學理にあり、一も本邦固有の國體民情を根據として立論したる者あらざりき。然るに國粹保存主義は、其根本の精神に於いて是等の說とは異なり、其立論の基礎を外邦の學理に求めずして、飜つて本邦の特質に求めたり。其說は如何に粗笨にもあれ、其論は如何に幼稚にもあれ、兎に角獨立の日本思想によりて歐化主義に對壘せしは、實に是國粹保存主義を以て初めとすべし。是點に於ては、是主義は慥に今日の日本主義の先驅たりしもの也。

斯く國粹保存主義の勃興により代表せられたる如く、國民的意識は漸く其自覺の域に進みたれども、未だ俄に歐化主義積年の勢力を凌駕する能はず、其爭漸く激しからむとせり。宗教界に於ては、佛教は保守思想と相呼應し、以て歐化主義と密接の關係ある基督教を攻擊して甚だ力め、漢學は國學と相携へて並に僞

教に聲援せり。二十二年二月に於ける憲法の發布は、我欽定憲法の性質を明にし、かつ英佛諸國に於ける諸種の憲法と日を同うして論ずべき者に非ざるを知らしめしかば、多年佛蘭西風の民約憲法を望みたる自由論者は、定めて多少其空想したる所と違ひたるを驚きたるべし。然れども是より政體上に關する急進論者の聲は、憲法解釋の上に多少の異議を挾むの外、氣勢頓に衰へ、獨逸的國家學と抱合せる一種の國體論は、汎く國民の政治思想を其根本に於て統一せり。然れども社會上教育上に於ては、西洋主義猶ほ未だ力を失はず、國學、儒教亦一方に割據して各々其雄を競ひ、人々其信ずる所によりて左支右吾し、一般國民の其適歸する所に迷へるの觀あり。偶々教育敕語の渙發するあり、國論是に於て一定し、忠君愛國、擧國一致を以て國民道德の大旨趣として奉體するに至れり。是敕語の教育上、社會上に於けるは、猶ほ憲法の政治上に於けるが如し、共に人心を統一し、國民思想の大方向を規定するの一大要素なりき。

斯く記し來れば、我皇室が實に我國民全體の依賴する大支柱大中心なるの事實は、いよ／＼明なりと謂ふべし。先に維新草創の際、擧國亂離して爲す所を知らざるに當りて、かの五事の御誓文を以て天地神明に誓はせられ、茲に明治新文明の大方針を示し、民をして其向ふ所を知らしめられき。西洋心醉者流が、民選議院の設立を建白するや、國體の特性、民情の現態を鑑みさせられ、假すに年月を以てし、國民をして其準備を致さしめ、更に期に先ちて欽定憲法を發布して我國體の萬邦に冠絶する所以を示し、以て國民の覺悟を定めさせられ、今や又維新以來麻の如く亂れたる德教の爲に、是千古不磨の大詔を下し給はり、民をして國民道德の大本歸趣を知らしめ給ふ。實に國民の言動を導き、各々其正路に就くことを得せしめ給ふ叡慮の程は、我國民の幾重にも感銘奉體すべき所なり。

遮莫、教育敕語一たび下りてより、從來の國粹保存主義が、一轉して國家主義の思想となり、益々其全捷の途を急ぎしには反して、自由平等を言ふこと厚くして、忠君愛國を說くこと薄かりし從來の歐化主義は、今や其所信を枉け、詔敕の示し給へる國家主義の道德に調攝せざるべからず。西洋心醉の風是より漸く衰へ、基督教亦漸く其世界的性質を改めて國家的となり初めぬ。國家主義は其勢に乘じて次第に歐化主義の城壘に迫り、其に[illegible]なくも最も激烈なる爭論を惹起しぬ。所謂教育宗教衝突論是れなり。時方に二十五年の冬なりき。

是爭論は、著者の記憶する所、井上哲次郎氏が宗教と教育との關係に就いて教育時論記者に對する談話に其端緒を發し、次で教育と宗教の衝突と題する一論文に持論を宣し、而して當時の宗教教育社會に、民選議院の爭論以後に倫ひなき論戰の花を咲かせたるものなり。氏の說の要に曰く、（第一）、耶蘇教は國家の區別を認めず、其說く所の道德は純然たる出世間の道德なり。是を敕語が忠君愛國を以て國民最高の德と爲せるに比すれば、全く兩立し難きものなり。（第二）、耶蘇教は既に出世間の事を主とすれば、常に重きを未來に置き、現世は僅に未來世界の門戸に過ぎずとなす。是れ敕語の精神が全然現世的なると相容れざるなり。（第三）、耶蘇教說く所の愛は無差別的博愛なり。然るに敕語示す所の愛は差別的の博愛なり。是を以て二者互に衝突するを免れず。（第四）、耶蘇教の缺點として特に著しきは忠孝を言はざる事なり、啻に言はざるのみならず、往々是に反する教旨あり。是れ敕語が示す所の克忠克孝の教と容れざるなりと。氏は博引旁

證、最も鋭利明快なる論法を以て其趣旨を敷衍せり。是れ實に基督敎徒の死活問題を含蓄せる最も手痛き攻擊なりしを以て、本多、横井二氏を初めとして、苟も耶蘇敎内に身を置くものは、筆に口に極力其論を駁し、就中高橋五郎氏の如きは、「僞哲學者の大僻論」と題する長論文を雜誌國民の友に掲げ、井上氏の論旨を反駁し、且つ讒謗罵詈を極めたり。和漢學者及び佛敎徒は是に反し、井上氏に左袒し、基督敎徒に當り、甲論乙駁、歸結の決すべき模樣なく、裁斷を後年の輿論に殘し、數月を經て漸く鎭靜せり。當時是爭論の盛なりしことは實に驚くべきものにして、新聞雜誌として是爭論を掲げざるはなく、知名の學者にして贊否の聲を發せざるは無き有樣なりき。以て如何に是問題が當時の社會に重きを爲せしかを見るべし。其源は井上氏にありと雖も、實は是れ歐化主義を代表せる基督敎と國家主義との格鬪にして、殊に防禦の位置に立てる基督敎にとりては、當に盛衰の問題たるのみならず、實に死活の問題を包有したるなり。

是爭論の勝利何れにありしや、單に議論上の爭としては、基督敎徒にもそれ〴〵道理の取るべきあり、勿論最初より攻勢を取れる井上氏のかたに多少の優勢を認むと雖も、何れを全勝、何れを全敗とは決し難かりしに似たり。然れども事實の上より見る時は、基督敎徒の勢力是より俄に頓挫して、全く敎育上に其根據を失ひ、唯其堡壘を守りて自活の道に汲々たるの勢あり。偶々同敎の中に改革の士あれば、そは從來の世界主義を捨てゝ、其說を國家主義に調和せむと務めたるの人たるに過ぎず。基督敎の逢迎主義是より漸く明なり。是に反して國家主義の道德は、是論戰によりて愈々其敎育上の基礎を固うし、其勢力延いて廣く社會の四邊に及び、漸く一世の思想を統一するの途に就けり。

然れども當時國民一般の思想未だ幼稚にして根柢より國家主義の眞精神を會得すること能はず、其所謂國家主義なるものも、形式上より敕語を解釋し、漫に自尊の氣習に驅られたるの形迹無きにあらず。先覺の士にありては、素より是事なかりしなるべしと雖も、國民の全體に就いて是を視れば、所謂國民的意識は未だ十分明瞭に醒覺し了せられざりしに似たり。此事は當時の論文記事を一讀して知るべしと雖も、尤も手近き例は、佛敎徒が敎育宗敎の衝突論に際して專心鋭意井上氏を援助し、共に基督敎徒を攻擊したることとなり。是れ今日より見れば甚だ笑ふべき矛盾なるにも係らず、當時の名僧智識達が、眞面目に是に從事したるを以て見れば、當時の人には國家主義の甚だ曖昧の中に誤解せられありしを想ふべし。そを如何にと云ふに、抑々先に掲けたる井上氏が、據つて以て基督敎に大打擊を加へたる四個條の何れか移して以て佛敎攻擊の好利器とならざるべき。井上氏は耶蘇敎を攻擊して曰く、國家の差別を認めず、純然たる出世間の道德を以て唯一の道德とする宗敎は、忠君愛國の上に立つ敕語と兩立すべからずと。而して佛敎は實に是の如き宗敎にあらずや。井上氏は耶蘇敎を攻擊して曰く、重きを出世間に置き、現在世を以て未來世の門戶と爲す如き宗敎は、敕語の現世的精神と相容れずと。而して佛敎は即ち是の如き宗敎にあらずや。井上氏又曰く、平等無差別の博愛を說く宗敎は、差別的博愛を說く所の敕語と正に相反せり。又忠孝を以て道德の基礎となさざる宗敎は、即ち敕語の敵なりと。是れ亦やがて佛敎の性質と正に相適合す。是によりて見れば、井上氏は特に耶蘇敎に就いて言へりと雖も、其實は佛耶兩敎に對して均しく打擊を加へたるなり。畢竟氏が擧げたる四個條の如きは、佛耶

兩教の通性たると同時に、一切宗教の本旨なれば也。故に佛教徒たるものは、基督教徒と共に氏の論に對して駁撃せざるべからざる位地にありしなり。然るに事是に出でず、却て井上氏に從つて基督教を攻撃し、敢て怖まざりしは實に奇怪千萬なりと謂はざるべからず。是れ佛教徒は、其多年仇敵視し來りたる基督教が、偶々攻撃の對象となりたるを見、欣喜の餘り、一も二もなく、己れの敵とする基督教を攻撃するものは即ち己れの味方なりと夙斷し、そが却て佛耶兩教の共同の敵なることに心附かず、其淺慮短見眞に憫笑するに餘りあり。所詮は基督教攻撃の一語に眩惑して、其攻撃の趣旨の如きは、一々精細に吟味するの遑なかりしに依るとは云へ、抑々又教育敕語が國民道徳の原理たる所の國家主義の性質を明にせず、隨つてそれと宗教との關係等の諸問題は、未だ解了するに及ばざりしなり。想ふに是佛教の援助を受けたる井上氏は、中心意外の思ありたるべく、又早晩佛教徒が基督教徒に對したると同一の攻撃は、即ち自家に對するの攻撃なることを知覺するの秋あるべきを思ひて、彼等が自己の淺見に慚愧するを氣の毒に思ひしならむ。而して當時は知らざる爲して、佛教徒の來援に任せしが如きは、氏も亦策士の術數を有せりと謂ふべし。

何は兎もあれ、是一事にて如何に當時のやゝ教育ある人すら、國家主義の眞精神に通ぜざりしかを想見するに足る。當時、史學社會に喧すしかりし久米氏の「祭天の古俗」と題する一論文に對して、國學家、神道者流が學術界には許すまじき無法の迫害を行ひしにても、國家など云ふことの國學者間にも解せられざりしを見るべし。されば歐化主義も亦是罅漏に乘じて尚ほ其餘勢を保ち、動もすれば捲土重來の勢を示したり。是時に當りて、外部より思ひ掛け無き一大刺撃の國民思想を根柢より搖撼し、所謂國民的意識に明白なる自覺を與へたるあり。二十七八年に於ける日清戰爭即ち是れなり。

言ふまでも無く、日清戰爭は我邦が東洋平和の維持の爲に國命を賭して鬪ひたる國家生存上の一大危機にして、隨つて本邦政治史上の最大事實たると共に、又明治思想史の局面を一變したる契點なり。これは最近年の事なれば、精しく説くの要は無かるべけれど、是戰爭は社會の上層下層に論なく、孰れの方面に向つても最も活潑なる國民的運動を催起し、多年理論、否寧ろ空論によりて教育せられたる國民に向ひ、死活、興亡の嚴肅なる事實によりて、國家國民の眞意義を教へたり。國家と世界との關係は如何に、箇人と國家との關係は如何に、世界に邦し、國家に人となるに於て、國家と國民とは什麼の覺悟無かるべからざるか、一國の道徳主義は如何なるものならざるべからざるか、是等の問題を、今や國民は其血と涙とを以て經驗し、研究し、且解釋せり。是に於て教育敕語は更に新なる光明に照らされ、多年模稜の間に半信半疑したりし忠君愛國の眞精神は、今や最も適切に會得せられたるを覺えぬ。是の如くにして國民的意識は、從來に較ぶれば、一層明瞭に、一層具象的に又一層生命と活力あるものとなれり。素より戰勝の結果として、一部の國民の間に自尊自負の氣象を生じ、隨つて排外の風を示したるもの無きにあらずと雖も、こは國民全體の上より見るも又一世の先覺にして國民指導の位地に在るものに就いて見るも、極めて少數、且一時的のものに過ぎざりき。兎に角所謂國家主義は日清戰爭以後に及び、他年對壘し來りし歐化主義に對して、おしなべて全勝を收めたり。

是に於てか國民思想は更に一歩を進め、將來海内にのみ注ぎて自家域内に其反對者を認めたる眼を轉じて、今は即ち廣く世界に注ぎ、顧

みて世界の一國として我日本を觀察せむとせり。先には國民思想は内に爭ひたり、今は則ち外に向ひたり。素より國内に於ても、例へば世界主義と國家主義と個人主義等の爭はありしかど、そは從來の如く國粹保存主義と歐化主義との爭の如く、其眼界國内に終始せしもののみには非ずして、廣く世界に對して一國の位地を考察したるより起りたりと見む方妥當なるべし。されば、外面上の形迹は相似たれども、内面上の精神に於ては大に相異なるものありき。世界主義、個人主義を唱へて國家主義に反對するものも、其說く所は、從來の如く徒に西洋に心醉し、歐化を唱ふるものにあらずして、少くとも表面上には世界の大勢より打算し來りたる主義なりと稱す。されば二者の爭は何れにせよ、謂はゞ共に日本の世界的觀察に本けるものにして、從來の歐化主義と國粹保存主義との爭の偏狹なるの非に非ずと謂ふべし。

既に世界の一國として日本を觀察し、悠久なる其前途の爲に國民の實行主義を規定せむとする以上は、廣く知を世界に求め、而も國權民權の伸暢に裨益する程のものは、如何なるものも是を採取し、また國利民福の增進に有害なるものは、如何なるものにても是を排斥するの覺悟なかるべからず。されば、是廣濶なる國家主義者流の眼には、地の東西によりて好惡の情を挾むなく、時の古今に隨つて褒貶の意を寄する事無かるべし。是公平無私なる取捨撰擇よりして、玆に從來國家主義の方法上に一新生面を拓き、爲に社會の人心を一時攪亂するの已むべからざるに到れり。是れ明治思想史の上に於ける一大進步として特筆大書すべきものなり。

そを如何と言ふに、從來國民間の思想の爭に於て明に現はるゝが如く、明治十年代に於ける西洋主義と保守主義との爭にありては、其區別の根據は主として西洋と日本との土地の差別にありき。故に保守者流は、西洋のものと云へば、一も二もなく一概に反對し、擧つて國學、神道、漢學、佛教等は古より日本に在來せりとの廉にて聯合し、力及ばずながら西洋主義に當りたり。二十年前後の國粹保存主義にありても、亦多少是跡あり。即ち是主義に同情を表したるものは、國學者、神道家、漢學者、佛教徒なりき。蓋し彼等は歐化主義と云へば、彼等と先天的に相容るべからざるものと思惟し、日本在來のものとし云へば、先天的に一致すべき性質のものと速斷し、單に西洋、東洋の名稱の差等によりて離合したりし也。是れ他なし、彼等の目的は歐化主義其物を攻擊するにあり、されば其事業は國家國民の將來の爲に確乎たる道德主義を造ると云ふが如き遠大なる理由ありて爲されたるものに非ざれば也。謂はゞ彼等は何の理由もなく、何の目的もなく、(もし強ひて理由を求むれば、歐化主義の跋扈は彼等にとりて不利なるが故に)主として名目の上に就いて所謂毛嫌ひを爲したるなり。然れども、今や偏狹なる盲動は國民的意識の覺醒によりて其謂はれ無きこと漸く明になれり。國民は其國粹の保存と云ふが如き事の以上に於て、我國家國民の世界的位地と、其前途と云ふ廣大且つ嚴肅なる問題に遭遇し、玆に其國民的大主義を樹立するの必要を自覺しぬ。今や徒に我佛獨尊的の陋見を固守すべきに非ず。如何に古より我國に存在せしものにても、又我邦に固有せるものにても、苟も將來の國家國民にとりて益無きもの、若しくは害あるものは、猶豫無く排斥せざるべからず。謂はゞ世界一切の事物に就いて、名目の東西に拘らず、其所在の彼我に泥まず、無私公平の秤量によりて是を取捨し、撰擇せざるべからず。是を以て從來味方なりと思

ひて相許したるものも、今や案外にも兩立する能はざる仇敵なること、又は從來不倶戴天の讐として相嫉視したるものも、今や思ひがけなく一堂に握手する等の奇觀を呈するに至れり、げに從來の有樣に比すれば、奇觀なりと雖も、實は當然の事にして、敵味方の區別なく其名目に泥みて同居したる是迄の有樣こそ、却て奇觀と云ふべけれ。是を要するに、是迄は單に名目の異同によりて離合せしものが、今や其内部の本質の如何によりて去就を決したるなり。是の新運動の主動者となりたるものは、素より國家主義論者にして、そが據つて以て一所〳〵、一切外物に對して公平なる撰擇取捨を爲したる標準は、我國體及び民性なりき。是國民思想の新運動を代表して興りたるものを日本主義となす。是れ昨三十年五月の事なり。

日本主義は以上述べ來りたる如き氣運に驅られて起りたるものなれば、そが國民思想に對する態度は、實に雄大なるものなり。即ち素と是れ一定の標準に本きて全國民の思想を統一せむと企つるなれば、其關係影響するところ廣く且深し。而して是主義の所謂一定の標準なるものは、我國體及び民性の科學的研究に本けるなれば、其取捨撰擇も、從來のもろ〳〵の主義に見る如く、杜撰粗笨にして根據を有せざる類ひにあらず、隨つてそが一時社會を動かし、物議を醸したるも避くべからざる勢なりと謂ふべきなり。是新運動は明治思想の發達上に最も重大なる意義を有せりと思惟するを以て、聊か其主張者の說を紹介せむに概ね左の如し。

日本主義とは、日本國民の守るべき主義と云ふ義なり。精しくは國體民性に基き、皇祖建國の丕圖を體認して其國家的大理想と國民的大抱負とを實現せむことを期する所の實踐道德の主義を謂ふ。大凡そ人種土地を異にする所の國家國民は、其發達の理想亦相同じきを得ず、故に世界の人文は、一現にして律すべからず、國家國民の眞正なる發達は、其國民の自覺心に基かざるべからず。日本主義は、是所謂國民的意識の上に立てるものなり。蓋し君民一家は我國體の精華なり、實に是れ我皇祖皇宗の宏遠なる遺謨に基き、萬世臣子の永く景仰體認すべき所なり。されば國祖及び皇室は、臣民たるものが無上の崇敬を捧ぐべき所なり。是故に日本主義は國祖を崇拜して、建國の理想を奉體せむことを務む。又我國民は由來公明、闊濶、有爲、進取の人民なり、退嬰保守と憂傷悲哀とは決して其性に副ふ所なり。されば日本主義は光明を旨とし、生々を貴び、其の遺謨を重じ、宗祖を崇へ、萬世無窮を祈むる所なり、もろ〳〵の教義を排斥す。又國光を一世に出で、上下其心を一にし、内に臨みては綱紀を振肅し、外に對しては屢に國威を擴張して、古來未だ嘗て外侮を受けず、是れ我國の宇内に冠絕せる所なり。是を以て日本主義は平時にありても武備を尙び、いよ〳〵國民の團結を鞏固にせむことを務む。然れども妄に自ら尊大にして他を辱れしむるに非ず。國内を修めて海外に臨み、與邦と共に永遠の平和を望まむことを希ふ。されば日本主義は世界平和の保持を希ひ、更に進みて人類的情誼の發達を期す。要は我日本建國の大理想を發揮し、我國民の大抱負を實現せむとするにあり。

日本主義の新運動は、茲に述べたる如く、國體と民性とに基けるが故に、正に當り其攻擊の衝に當りたるものは、耶蘇教、佛教にして、儒教、獨逸風の形而上學、及び佛國西派の自由主義も亦多少排斥せられたり。而して他方に於ては、獨逸流の國家主義と英吉利流の功利論とは、大體より歡迎せられたり。そを如何にと云ふに、日本主義は、我皇祖建國の丕圖の中に、我國家

主義の大理想を認め、又其歷史上の研究に本きて開濶、生々、尙武等のもろ〳〵の現世的特質を國民の特質として認めたれば、出世間的、非國家的なる基督教と佛教とが、先づ排斥せられたるは極めて自然なりと謂ふべし。かの宗教教育の衝突問題の際、基督教と共に業に既に打擊を被らざるべからざりし佛教が、是日本主義に於て遂に其必然の運命に遭遇したるは、是非も無き次第なりとこそ謂ふべけれ。而して日本主義主張者の重なる一人は、實に往年教育宗教衝突論を草して意外にも佛教徒の來援を受けたる井上氏なるにても、佛教徒が今更の如く是打擊に驚きたる迂濶さは知らるべし。若し夫れ、從來常に歐化主義の先天的反對者として、維新の初めより我國本來の思想と提攜し來りし儒教が、是日本主義に歡ばれざるのみならず、却て排斥せらるゝの傾きあるは、全く是敎の保守退嬰的なるところがやがて日本主義の進步的なる所と衝突すればなるべし。然れども日本主義は、儒敎の全部を擧げて攻擊するものに非ず、忠孝を倡ふ、現世的なるの點に於ては、二者其軌を一にするものなれば、其反對は佛耶兩敎に於けるが如く、劇しからざること、亦自然の勢なるべし。又是主義と佛蘭西流の自由主義との相容れざるは、論無きことなり。さりながら憲法發布以來、是種の極端論は、政治界には殆ど其跡を留めず、唯社會の中に一種の社會主義となりて存するに過ぎざれば、其反對も他に比すれば微々たるを免れず。獨逸の純理哲學は學理の研究としては擯斥せらるゝに非ず、只世の空論を高尙となし、毫も實世間の事に關與せざるもの是派の學者に多きが故に、是點に於て間々日本主義論者の攻擊を被れるのみ、無論根柢的に相容れざるものにはあらざるが如し。是に反して、獨逸風の國家主義が歡迎せられたるは、最も自然の事にして、現に憲法を初めとし、今日の國家主義論者の說は主として是に據れり。是れ獨逸のと我の國體とは、英佛等のそれよりは比較的に我に近きが爲なるべし。然れども日本主義論者の國家論の根帶は、飽迄我國の歷史に本くものにして、只其性の近き所に從って彼等の說を參照したるに過ぎざるなり。次に英吉利の功利主義の歡迎せられたるも、そが我國民性の現世主義と近ければなるべし。然れども日本主義の現世主義が、かの福澤氏一派の拜金宗抔と同日に論ずべきものに非ざることは、是派の人の所論にて十分に世の誤解を辨ずるに足るべし。言ふまでも無く、歐化主義の流れを汲める洋行歸りの人を首めとし、宗敎によりて衣食する僧侶牧師は言ふを待たず、元來國粹保存主義の系圖を引ける人々の中にも、眞に國家國民など云ふ事に就いて科學的意義を解せざるものは、其外面の運動が所謂八ツ當りに類するに驚きて、何れも反抗の氣焰を揚げ、曾て宗敎教育衝突論の當時、高橋氏が井上氏に向って爲せるが如く、日本主義論者の人身攻擊をすら敢てするを憚らず、論難に繼ぐに罵詈を以てし、罵詈に繼ぐに讒誣を以てし、百方其勢を挫かむと力めたり。日本主義論者の中にも一時の客氣に驅られて詭激の言論を弄びしものありしは、世をして是新運動の性質を誤解せしむるの力ありしが如し、是れ同主義の人々の心窃に嘆惜する所なるべし。されど是等は、最近時に關はる事なれば、其影響の大小、勢力の消長は、今日豫め知り難きこと勿論なり。されば茲にはすべて臆說を爲さざるべし。

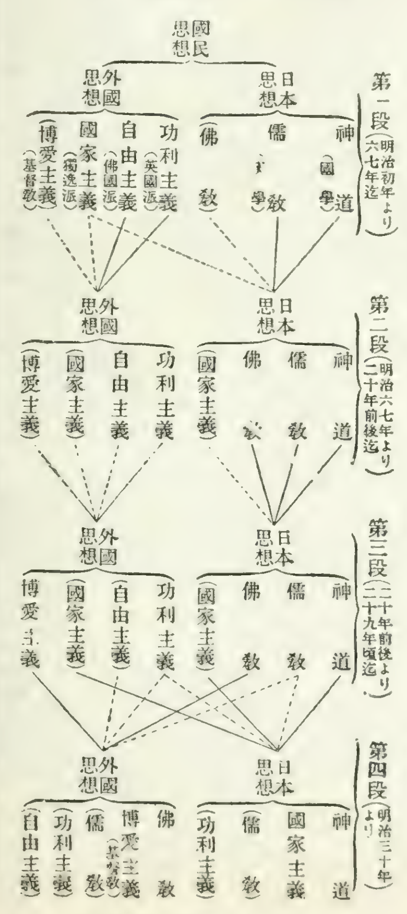
　さはれ、記者が是主義に對する私己の關係を離れ、上に述べ來りたる歷史的觀察にて明に下し得べき唯一の判斷によれば、日本主義の運動は決して一二人の私意に成るものにあらずして、實に深遠なる根據を國民性の中に有するも

のなり。其系統を言へば、そは慥に明治初年の所謂皇學によりて代表せられたる保守主義の流を汲めるものなることは明なれども、其性質に於て殆ど見紛ふまでに進歩し來れることは、猶人間が猿より出でて而かも其性質に大なる差別あるが如し。皇學的思想は、其本を糺せば本邦歷史と共に初まり、物部守屋の排佛論となり、和氣清麿の忠節となり、菅原道眞の和魂漢才論となり、眞言天台以下の佛敎諸宗派を日本化する中心勢力となり、北畠親房の神皇正統記となり、德川時代の諸國學者の神道國敎論となり、一時維新の改革に遭ひて其力を失ひ、更に十九世紀新文明の光によりて、新に其赫灼たる本來の光輝を反射し來りたるものなり。今の日本主義は、やがて其系統の正嫡にしあれば、其根柢は決して拔くべからず、其枝葉花實は年と共に盛になり行くべき也。げに是れ迄皇學、國粹保存主義等の幾度か起伏せし如く、一時の汚隆は或は是れ無きを保せじ、又其名稱の如きは或は渝ることあるべし、唯それによりて代表せらるゝ精神實質に到つては、時と共に發達進歩して、早晩遂に其當初の大目的を實現するの期に遭遇すべきは蓋し疑を容れざるなり。

以上は、明治維新このかた三十年間の國民思想變遷の一斑なり。一國の事は素より多樣、多端、又多岐にして、必ずしも唯一の主義方針によりて活動するものにあらざれども、概して言ふ時は、國民の思想が其道德主義によりて決定せられ、隨つて間接に其萬般の活動を影響すべきは、毫も一個人に於ける場合と異ならず。されば一國民の根本思想の變遷として、主として其道德主義の發達を述ぶるも、強ちに不倫とは稱すべからじ。是短論文は、素と是れ根本思想に就いて讀者をして一目瞭然たるを得せしめむことを期したれば、故らに煩瑣繁縟の事實を臚列して、さなきだに解し難き思想史に一層の複雜を來すを欲せず。想ふに、讀者は是によりて、最近三十年間の思想史に就いて少くも大體の觀念を得たるならむ。若しそれ、是根本思想の變遷が直接に又は間接に如何に政治、經濟、敎育、實業及び一般社會の狀態に影響したるかは、是より逐次に述ぶる所に就いて仔細に考察すれば思半に過ぎむ。

最後に讀者をして是發達の徑行を一層明に了解せしめむが爲に左の圖表を添へたり。是表は、假りに三十年間の思想の變遷を四段に分てり。第一段は明治初年より六七年の頃に

## 明治思想發達一覽表



至るまで、即ち所謂皇學の幼稚なる保守的反動が、幼稚にして而も強大なる歐化主義に對立したる時代なり。第二段は、民選議院首唱者の政體改革論に對し、保守論者が獨逸流の國家主義論と共に前代に比してやゝ強硬なる反抗を試みたる時代なり。第三段は、二十年前後に於ける國粹保存主義の勃興、及び其結果として是二主義がやゝ鮮明なる反對を現はせる時なり。二十五年に於ける教育宗教衝突論も、亦是時期に屬すべし。第四段は、唯三十年春に於ける日本主義の新運動が國體民性を標準として國民思想の統一を唱へたるときより、今日及び今日以後に及ぶ。此時期にありては、日本思想と外國思想の區別全く明瞭となれり。詳しくは本文と圖解とを對照すべし。圖中の線は、各時期によりて諸種の思想の離合を示す。中に就き、連線は其量に於て點線よりも大なるを表はし、括弧内にあるものは點線と共に其量の小なるを示す。又是表の中に日本思想と名けたるは、日本固有の思想及び是思想が中心となりて外來の思想を統一したるものを總稱す。一言すれば日本固有の思想が主となりて外國の思想を容るゝものゝ也。而して是日本固有の思想の中にても中心種子となれるものは、皇道に本ける國家的觀念なり。又外國思想とは外國の思想を主として日本固有の思想を客とせるものを云ふ。讀者もし第一段より第四段までを通覽する時は國民的意識の漸く明瞭となるに隨ひて、是二個の思想の差別も亦次を逐ひて明晰となり、殊に日本思想が我國體民性の歷史的研究に本き、外に向つては外來の文化を同化し、内に於ては異分子を淘汰せる形迹は尤も著しきを覩るべし。但し是れ素より大體の觀察なれば讀者も其心して覽るべきなり。

（明治三十一年四月）

# 蟬しぐれ

今の世にありて輿論に聽かむと欲するものは殆い哉。夫の聲の大なるもの、多くは朋黨者流の嘵々のみ。眞正の輿論を代表すべき機關、未だ我邦に備はらず。

世上批評家の所謂「世界に貢獻す」とは何の意ぞや。各自國民の文明を外にして、所謂世界の人文ありとする乎。無意義も甚だし。

世上の大勢に同化せよとは、拜外者流の口實。何ぞ一に淺薄なるの甚しきや。是れ飮酒者は長壽なりとの統計を見て、俄に酒を飮むもの、と何ぞ擇ばむ。其の知見、正に三尺の童子也。

所謂大勢なるものは、歷史的觀察のみ。取りて以て經綸の策となすべくんば、天下の事、道を行くよりも易し。

基督教會の權利主義と自由主義とを說けるリギヨール氏の論議あて可し。宗教は畢竟愚者の事。知を挾んで是れに臨む、自家撞着のみ。是を以て古來宗教の功德は盲信の人に現はる。

古人是れを冬時の道路に喩ふ。日光に觸れずして堅く氷結する處と、十分日光を受けて乾燥せる處と、等しく人の步行に堪ふ。唯其の中間堅氷解けて而も乾燥せざる所泥濘脛を沒す、得て步むべからざるなり。

日光は科學なり、氷結は盲信なり。人生實踐の主義として最も適切なるもの、素より科學の光に乾きたる大道なり。而も宗教の盲信に氷結せるもの、又以て蹈行たるを得。唯憖ひに科學の知識を散害して、其の盲信を攪亂せる、所謂進步主義、自由主義の宗教は無用の長物のみ。

（明治三十一年八月）

# 日本主義

熟々本邦文化の性質を考へ、宗教及道德の歴史的關係を審にし、汎く人文開展の原理に徴し、國家の進歩と世界の發達とに於ける殊遍相關の理法を認め、更に本邦建國の精神と、國民的性情の特質とに照鑑し、我が國家の將來の爲に、吾等は茲に日本主義を唱ふ。

日本主義とは何ぞや。國民的特性に本ける自主獨立の精神に據りて建國當初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理、即ち是れなり。

そも〱國家の眞正なる發達は國民の自覺心に基かざるべからず。國民の自覺心は國民的特性の客觀的認識を得て初めて生起することを得べし、而かも是の如き國民的特性は、精覈なる歴史的、はた比較的考察に依るに非ざれば、認識することを得べからず。吾等の所謂日本主義は決して夫の偏に已れを樹てゝ他を排せむとする、狹隘なる主我的反動と日を同うして論ずべき者に非ざるなり。我邦歴史ありてよりこゝに二千六百年、中ごろ誤つて外來の文化を過重し、國民の性情を蔑視したるより、建國當初の精神は不幸にして十分の發展を見る能はざりき。今や十九世紀人文の高潮に觸し、明治聖代の餘澤を享けて、茲に中正なる國民的意識の中に我が日本主義の唱道を見るに至りたるは、我邦文化の史上に於て、一新紀元を劃したるものと謂ふべきなり。

吾等は我が日本主義によりて現今我邦に於ける一切の宗教を排撃するものなり。即ち宗教を以て我が國民の性情に反對し、我が建國の精神に背戻し、我が國家の發達を沮害するものとなすものなり。吾等は素より世界一切の民族に向つて、彼等の宗教を放棄せよと勸むるものに非ず。歐羅巴の文明史上に於ける宗教の職能は、寧ろ太だ炳焉たるに過ぐ。夫の科學との衝突を捉へて以て宗教の有害を説くものゝ如きは、人文發達の一面に於ける道德の意義を解せざるの徒のみ。然れども吾等は思ふ、宗教は今日多數の宗教徒が盲信する如く、實に決して人類の先天性たるを必とするものに非ざるのみならず、其の宗教的民族と稱する者も、自國の進捗と共に漸く其の迷信を脱し、自然的信仰に代ふるに、實践道德の原理を以てせむとするは、今日世界文化の大勢なり。况してや、我が國民は由來宗教的民族に非ざるなり、三千年の文物歴史は、明に之を證して毫も假借なし。夫の外教を採取して偏に之を強ふるものゝ如きは、徒に國性に反り、民情に違ひ、其の結果たまたま國家の發達進歩を沮害するに終らむのみ。吾等は各國國民は其の特質に隨うて、其の發達の制約を殊にすべきものあるを確信す。

そも〱宗教とは何ぞや。之を要するに、現實生活の自然的經過によりて到達すべからざる、一種超自然的理想を思慕し、或非理的方法によりて之に到達し得べしとする所の一種の信念に非ずや。是の如き信念の哲學上認容し得べき者なりや否やに就きては、吾等茲に之を説かじ。又一の社會的現象として、或民族間に於ける人文の進歩に裨益したる所ありしや、素より疑を容れず。然れども人種の同異を分たず、特性の差別を顧みず、建國の精神如何を察せず、彼れに施したる所、直に我れに擬し、以て彼れと一様の結果を收めむと要す、無謀も亦甚しからずや。印度歐羅巴民族は由來宗教的熱

情に適當なるの點に於て、世界多く其の比を見ざる所、形而上學と超自然的宗教とを抱合せる彼等が古神話は、夙に將に來らむとする後代文物の性質を預告せり。若し夫れ宗教が、彼等の文學、美術より社會的、はた國家的生活の上に及ぼしたる勢力の至大至深なるに至りては、吾等の殆ど想ひ及ばざる所なり。我が國民にありては則ち然らず。一篇の古事記、是れむしろ歷史なり、神話にあらざるなり。よしや所謂日向人種にして印度亞里安族の爲に驅逐せられたるドラビダ人、若しくはドラビダ人と交涉したる或一派のツラン人種なりとするも、韋陀的神話と古事記との比較は、いよいよ明に我が民族的性情の非宗教的同化力の強大を證明するものに非ずや。素より多少の迷信の我が國俗の間に存在せるもの無かりしに非ず、然れども一も宗教的發達を遂げ得たるものあらざりき。佛教は是等幾多の迷信を吸收し、國家の權力の下に殆ど強制的に傳播せられたりと雖も、已に大陸ツランの間に其の殊性を失ふこと尠からざりし印度亞里安的厭世虛無の宗教道は、果して能く實際の根據を我が國土の中に有することを得たりしや。顯密二宗の圓玄なる教理は所詮修法の現世的行事を外にして何等を我常人に訓へ得しや。淺薄なる厭世思想と、冷淡なる形式主義とに依りて我が文化の發達を妨害したる事實を外にせば、佛陀教の勢力果して何處にかありとするや。一雙の活眼を破して、上下二千五百年の歷史を通觀し來らば、必ずや是の如き非日本的文化の強固なる牽制に對する、國民の意識的はた無意識的反抗を到るところに發見するならむ。

西人動もすれば我が國民を以て佛教徒となす。然れども吾等は疑ふ、眞に佛陀教の精神を奉じて人生の理想となすもの、果して幾何あるべきや。彼の緇衣にして經を手にするものと雖も、果して是の信念を有するものありや。一種當眼の迷妄に驅られて、所謂淨財を木偶賣僧に進むるを事とするものは、未だ以て佛教信者と云ふべからず。一種の社會的形式に束縛せられ、祖業を繼紹して其の頂を圓にし、其の衣を緇にし、口に佛教を唱へ、手に佛典を持するものは、未だ以て佛教徒と云ふべからず。あはれ今日の佛教と稱するものは、殆ど空虛なる形式主義に非ざるか。佛教徒と稱せらるゝ我が國民にして、眞に佛教の信仰に憑據して、其の思想行爲を規定するもの、果して幾何ありや。形式は能く無を化して有となす。所謂佛教は決して是の國民的性情の中に根據を有せるものに非ざるなり。

基督教の如きも亦然り。宿惡と云ひ、贖罪と云ひ、靈魂不滅と云ひ、神の國と云ふ、其の超自然的、はた無差別思想は正に我が國民の性情と相反せり。我が國民の思想は由來現世的にして超世的にあらず。多少幽界の觀念無きにあらずと雖も、之を其の活潑潑地たる現世的思想に較ぶれば、素より言ふに足らざるのみ。是を以て我邦固有の神道は全然現世教たり。夫の徒らに未來死後を說き、もしくは超絕の世界を憧憬する印度歐羅巴的宗教の比にあらざるなり。

吾人は現世に生息す。百般の改善進歩は悉く皆現世に就いて爲すべきのみ。世を厭うて遁るゝ所無く、現世を外にして人生あること無し。若し世に理想なるものありとせば、そは現實世界の自然的進行によりて到達せらるべきのみ。苟も吾人が現世の幸福に貢献する所無からむか、一切の事物は吾人其の貴むべき所以を知らず。其の如きは我が國民の根本的思想に非ずや。我が國民は是の實際的傾向を有するの點に於て、支那民族に類すと雖も、而かも彼れの如く保守的、はた回顧的ならず。其の國民的抱

負の偉大なる、夙に神孫降臨の事蹟に照して、百世の臣民が其の遺業を本體して、怠らざる所なり。其の思想は獨逸的純理哲學の高遠に乏しと雖も、アングロサクソン的常識の發達は、尤も我が長所とするところ。若し夫れ其の社會的生活を尚び、國民的團結を重じ、君民一家、忠孝無二の道德を維持するは、現世的國民として皇祖建國の鴻圖を大成すべき運命を擔へる所以に非ずや。各國國民は各々其の到達すべき理想を異にす。是の如きは實に我が國民の建國の當時に於ける一大抱負にあらずや。

今日の宗教は是の如き民族と毫も爲すなきなり。是を以て我國固と一の宗教を有せず、二千年の歴史は遂に宗教と抱合することゝ能はざりき。彼の基督教徒が遂に其の故國を離れ、其の故舊を辭し、萬里の波濤を凌ぎて平等博愛の教理を我れに傳へむと擬するもの、其の信ずる所に忠なる、素より深く多とすべしと雖も、其の無謀無識にいたりては、寧ろ憫殺に勝へざらむとす。

國民的性情に一致せざるものは、遂に其の完全の發達を望むべからず。而かも若し國民の福祉を增進する上に於て、多少の裨益ありとせむか、吾人は吾人が自由の意志によりて、是が扶植を務むる亦可ならずとせず。然れども宗教は到底國家の利益と相背戾するを如何にせむや。國家は現世に立ち、宗教は未來を尙ぶ、國家は差別を立て、宗教は平等を說く、其間おのづから枘鑿相容れざるものありて存す。佛陀教の涅槃は一切煩惱を解脫して、不生不滅無爲寂滅の妙境なりと云ふ。よし是の如き消極的觀念に止らずして、光明大悟と云ふが如き積極的意義の存するありとするも、人生の成立に須要なる實利を惡み、人欲を排し、社會國家を以て事とせざる、素より明らけし。基督教の所謂神の國、はた是れ何處にありや。一切造化を以て平等無差別なりとし、國を以て民を分たず、均しく神の子なりとなすもの、將た又一國の差別に執着し、忠君愛國を說くを以て、迷妄笑ふべしとなすものは、如何ぞ國家の目的と相兩立するを望むべけむや。今の基督教徒が自教と國家主義との調和の爲に、喋々辯明する所のものは、一切牽強附會の說のみ。

蓋し國家は、人類發達の必然なる形式なり。人は一人にして生息すること能はず、茲に必ず家族を成す、家族にして生活すること能はず、茲に必ず社會を成す、社會の上更に統治の主權を確定して、之を制御す。要は民衆最大の幸福を企圖するにあり。是に於て國家は自己の權能によりて、外に對しては一國の獨立を全ふして其の勢威を宣張し、內に對しては國民の秩序を維持して其の利福を增進せむことを務む。是れ人類發達の須要なる條件なり。夫の人道、若しくは人類的情誼なるものは、今日人文の進步に伴へる諸般の交通聯合によりて、やゝ發達し來りたりと雖も、之れはた國家の完全なる成立と共に初めて其の萌芽を發したるもの、國家的道德を外にして別に人類的情誼なるもの之れ有らざるなり。夫の人類的情誼の最高標準として認むべき國際公法の如きも、之を執行するの主權なきを以て、所詮各國民の高尙なる道念に訴ふるの外無きなり。而して是の如き道念は、國家の完全なる統率の下に於てするに非ざれば、決して其の發達を見るべからざるなり。

之を要するに、現實界に於ける一切の活動は其の國家的たることに於て最も有效なりとす。國家は人生寄託の必然形式にして、又其の至上權力なり。今日に於て世界的王國の成立の望無きことは、猶ほ civitas Dei の現世に見るべからざるが如し。若し平等にして現はるゝの日あらば、そは萬有發達の原理たる、差別の中に於てせむ。所詮國家は吾等の生活に於ける道德

の標準たらざるべからず。是の如き國家的主義に背戻する所の宗教は、國家の爲に排斥せざるべからざる、素より論無し。

吾等は人文の發達が確實なる道義的信念に負ふ所、甚だ少なからざるを確認す。夫れ唯是の如き事實を確認するが故に、其の國民性情と國家主義とに對する利害適否に就て深く軫念する所あるのみ。若し今日及將來の我邦の道德を以て、佛陀教、若しくは基督教の手に一任するの甚だ危險なることを認むとすれば、吾等はた何を以て之に代ふべきか。吾等が主唱する所の日本主義即ち是れ。

然らば則ち、如何なる者か是れ我が日本主義の目的綱領なる。

君民一家は我が國體の精華なり。之れ實に我が皇祖皇宗の宏遠なる丕圖に基くものにして、萬世臣子の永く景仰すべき所なり。故に國祖及皇宗は日本國民の宗家として無上の崇敬を源すべき所。日本主義は、是故に國祖を崇拜して常に建國の抱負を奉體せむことを務む。我が國民は公明快濶の人民なり。有爲進取の人民なり、退嬰保守と蟠鬱悲哀は、其の性に非ざるなり。是に於てか日本主義は、光明を旨とし、生々を尙ぶ。是に於てかたの退讓を重じ、禁欲を訓へ、厭世無爲を鼓吹するもろ〳〵の教義を排斥す。億兆一姓に出で、上下其の心を一にし、內に臨みては棣鄂相親しみ、外に對しては每に國威を擴張して、古來未だ曾て外侮を受けず、是れ我が國民の萬邦に冠絕せる所なり。是を以て日本主義は、平時にありて武備を懈らず、愈々國民的團結を鞏固にせむことを務む。然れども妄に己れを樹てゝ他を容れざるものに非ず、國內を修めて海外に臨み、與國と共に永遠の平和を享受せむことを希ふ。是に於てか、日本主義は、世界平和の維持を務め、進みて人類的情誼の發達を期す。而して要は我邦建國の精神を發揮し、我が國民の大抱負を實現せむとするにあり。

そも〳〵信仰は之を內に啓發すべくして、之を外より襲用すべからず。日本主義は今日吾等の創造したるものにあらずして、國民が三千年の歷史的檢證に本ける確實なる自覺心の最も明瞭なる發表に外ならざるなり。其の由來するところ深く國民の特性に根據し、遠く建國の精神に淵源し、牢として拔くべからず。夫の漫然外教を借り來りて、餖飣補綴せるものと、素より同日の論に非ざるなり。日本主義は大和民族の抱負及理想を表白せるものなり。日本主義は日本國民の安心立命地を指定せるものなり。日本主義は宗教にあらず、哲學にあらず、國民的實行道德の原理なり。

吾等は以上の確信によりて日本主義に贊同す。希くば最も健全なる國民的道德の確立を望むもの、建國の精神を發揮して大和民族の偉大なる抱負を實現せむと欲するもの、及び人道の最も忠誠なる伴侶とならむと欲するものは、吾等と共に來れ。來つて而して吾等と共に日本主義を贊唱せよ。

(明治三十年五月稿)

# 美的生活を論ず

## 一　序言

古の人曰へらく、人は神と財とに兼ね事ふること能はず。されば生命の爲に何を食ひ、何を飲み、また身體の爲に何を衣むと思ひ勞らふ勿れ。生命は糧よりも優り、身體は衣よりも優りたるものならずや、と。人若し吾人の言をなすに先ちて、美的生活とは何ぞやと問はゞ、吾人答へて曰はむ、糧と衣よりも優りたる生命と身體とに事ふもの是れ也、と。

## 二　道德的判斷の價値

夫れ道德は至善を豫想す。至善とは人間行爲の最高目的として吾人の理想せる觀念なり。是の至善の實現に裨益する所の行爲、是を善と謂ひ、妨害する所の行爲、是を惡と謂ふ。至善其物の內容如何は學者によりて必ずしも說を同じうせずと雖も、道德の判斷が是の地盤の上に立てるの一事は、古今を通じて渝らず。されば凡百の道德は其の成立の上に於て少くとも兩樣の要件を具足するを必とすと見るを得む。兩樣の要件とは何ぞ。一に曰く、至善の意識也。二に曰く、是の意識に遵うて外に現はされたる行爲の能く其の目的に協へる事也。至善に盡すの意ありて而かも其の行ひ是に伴はざらむ乎、若しくは其の行ひ能く善に協ひて而かも善を爲すの心無からむ乎、道德上の價値は共に全きを稱すべからざらむ。

是の如く詮議し來れば、吾人は玆に一疑惑に逢着せざるを得ざる也。例へば古の忠臣義士の君國に殉せるもの、孝子節婦の親夫に盡せるもの、彼等は其の君國に殉し、親夫に盡すに當りて果して所謂至善の觀念を有せし乎、有して而して是に準據したりし乎。換言すれば君國の爲にするは彼等の理想にして、而して死は是に對するの手段なりと考へし乎。親夫の爲にするは彼等の至善にして而して是に盡すは彼等の本務なりと思ひし乎。若しくは君國親夫と謂ふが如き具體的觀念の外に、忠義孝貞と謂ふが如き抽象的道義を認めて是を奉體せりと見るべき乎。若し是の如く解釋する能はずとせば、忠臣義士と云ひ、孝貞と云ふも、道德上の價値に於て言ふに足らざるものならむとす。

而して吾人は是の如き解釋の到底不可能なるを信ずるもの也。楠公の湊川に討死せる時、何ぞ至善の觀念あらむ、何ぞ其の心事に目的と手段との別あらむ、唯君王の御爲に盡瘁して微臣百年の身命を拋ちしのみ。是の如くにして死せるは公にとりて至高の滿足なりし也。而して是の滿足を語り得むものは倫理學說にあらずして公自らの心事ならむのみ。菅公の配居に御衣を拜せし時、何ぞ至善の觀念あらむ、何ぞ君恩を感謝するを以て臣下の義務なりと思はむや。畢竟公の本心は唯是の如くにして滿足せられ得べかりしのみ、拘々たる理義如何ぞ公が是の本心を說明し得べき。戰國の武士は吾人に幾多の美譚を遺したり。然れども或は勇士意氣に感じては輒ち身を以て相許し、或は受くる所は僅に一日の粟、而かも甘じて己れを知る者の爲に死す。是の間の消息何ぞ至善あらむ、何ぞ目的あらむ、又何ぞ手段あらむ。彼等の忠や義や、到底道學先生の窺知を許さゞるものある也。譬へば鳥の鳴くが如く、水の流るゝが如けむ、心なくしておのづから其の美を濟せる也。古の

人曰へらく、野に咲ける玉簪花を見よ、勞かず、紡がざれども、げにソロモンが榮華の極みだにも、其の裝ひ是の花の一に及ばざりき、と。あゝ玉簪花以て彼等の行爲の美しきにも喩へむ乎。然れども道德の眼を以て見る、則ち如何。彼等若し既に至善を解せず、隨つて至善を實現せむとするの動機に於て缺くる所ありとせば、其の行爲や果して道德的價値を有せりと謂ふべき乎。道德的行爲は意識を要し、考察を要し、努力を要す。而して彼等の行爲や雲無心にして岫を出づるが如き也、塵埃のおのづから溪水に就くが如き也。彼等が其の君國に殉じ其の親夫に盡せるは猶ほ赤兒の其の母を慕ふが如くにして然り。其の心事や渾然として理義の解析を容れざる也。赤兒の其の母を慕ふは人性自然の本能にもとづく、彼等の行爲亦是の如しとせば、畢竟其の道德的價値に於て缺くる所ありと斷ぜざるべからず。

是の如く觀じ來れば、吾人は道德其物の價値の甚だ貧少なることを思はざるを得ず。良しや道德上の事に非ずと判斷せられたりとするも、楠公の行爲に何の影響するところぞ。倫理學說が其の價値を認めずとするも、忠臣義士は長へに忠臣義士たり、孝子烈婦は長へに孝子烈婦たり、人間の最も美はしく貴むべき現象たることに於ては毫も渝るところ無き也。是に依て是を見れば、善と云ひ不善と云ふもの、畢竟人間知見上の名目に過ぎずして、人生本來の價値としては殆ど言ふに足らざるものに非ざる乎、否乎。

一たび是の見地に據りて觀ずれば、人生の事相おのづから別種の面目を呈露し來るを見る。是れ吾人の人生觀が道學先生のそれと異なる所以にして、亦茲に美的生活を論じて敢て是を推奬する所以也。讀者暫く忍んで吾人の言ふ所に聽かむ乎。

## 三　人生の至樂

何の目的ありて是の世に產出せられたるかは吾人の知る所に非ず、然れども生まれたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば本能の滿足即ち是れのみ。本能とは何ぞや、人性本然の要求是れ也。人性本然の要求を滿足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ。

道德と理性とは、人類を下等動物より區別する所の重なる特質也。然れども吾人に最大の幸福を與へ得るものは是の兩者に非ずして實は本能なることを知らざるべからず。蓋し人類は其の本然の性質に於て下等動物と多く異なるものに非ず。世の道學先生の說くところ、理義如何に高く、言辭如何に妙なるも、若し彼等をして其の衷心の所信を赤裸々に告白するの勇氣だにあらしめむか、必ずや人生の至樂は畢竟性慾の滿足に存することを認むるならむ。吾人に知識の慾ありて眞理を悟らむことを欲し、道義の念ありて善德を修めむことを望む。是等の欲望の到達せられたる處に一種の快樂あるや素より論無し。然れども是の種の快樂や極めて淡く、極めて輕く、其の力到底人性の要求を飽足するに足らざるを如何せむ。まことに高尙深遠なるらしき幾多の文字は、是の種の快樂の讚美に使用せらると雖も、吾人をして忌憚なく言はしむれば、是れ一種の僞善に過ぎざるのみ。哲學書一卷を讀破して未了の知識に逢着する時、快は則ち快ならむも、終日勞し來りて新浴方に了り、徐ろに一盞の美酒を擧げて清風江月に對する時と孰れぞ。貧を鄙み孤を助くる時、快は則ち快ならむも、佳人と携へて芳園の室に憩ひ、陶然として絲竹の樂に聽く時と孰れぞ。道學に死し、慈善に狂するの例は吾人の多く知らざる所なりと雖も、戀愛に對しては人生の價値等[illegible]きを

覺ゆるに非ずや。謂つて萬物の靈長と稱せられてより、人は漸く其の動物の本性を暴露するを憚り、自から求めて、もしくは知らず〳〵、其の本然の要求に反して虛僞の生活を營むに至る。而して吾人の見る所を以てすれば、人類をして玆に到らしめたるものは實に人類をして萬物の靈長たらしめたる道德と知識とに外ならず。知らず道德と知識と畢竟何の用ぞ。

## 四　道德と知識との相對的價値

吾人の見る所によれば、道德と知識とは其の物自らに於て多く獨立の價値を有するものに非ず。其の用は吾人が本能の發動を調攝し、其の滿足の持續を助成する所に存す。下等動物は盲目なる本能の外に自己を指導する何物をも有せざるを以て、往々不慮の災禍に罹るを免れず、隨つて其の滿足も亦不完全ならざるを得ざる也。然るに人類は是非を判ずるの理性を有し、善惡を別つの道念を具ふ。是に於てか其の本能は、一方に於て其の自由の發動を制限せらるゝ代りに、他方に於ては其の滿足の持續に於て遙に他動物に優る者あり、是れ他動物に對して人類の幸福の比較的に恒久なるを得る所以也。畢竟知識と道德とは盲目なる本能の指導者のみ、助言者のみ。本能は君主にして知德は臣下のみ、本能は目的にして知德は手段のみ。知德其物は決して人生の幸福を成すものに非ざる也。

道德が一方便に過ぎざることは、其の極度の無道德に存することにても知るべけむ。道德は善を獎勵す、而して善は戮力を須要とす。あゝ戮力を待つて成立し得べき道德は卑むべき哉。戮力は障害を排斥するの謂なり。善事を行はむとする際の內心の障害は即ち惡念也。善事既に戮力を待つて成立すべしとせば、善事は其の行爲者に於て既に惡念を預想するものに非ずや。換言すれば彼れは多少の意味に於て惡人たる也、不道德の人たる也。天下の善人盡く惡人たりとせば、吾人豈道德の鼎の輕重を問はざるを得むや。是を以て道德の理想は戮力無くして成立し得るものならざるべからず。孔子の所謂其の心に順ひて其の則を越えざる底のものならざるべからず。是を喩ふれば、水の流るゝが如く、鳥の鳴くが如く、野の花の咲くが如く、赤兒の其の母を慕ふが如く、古の忠臣義士の其の君國に殉したるが如きものならざるべからず。而して道德も玆に到れば即ち無道德のみ。既に意識を絕し、考察を絕し、又戮力を絕す、是れ一種の習慣、本能のみ、道德的價値あるを得ざるや言ふ迄も無し。思うて是に至れば吾人は大道廢れて仁義ありてふ老子の言の千古の眞理なるを認むると同時に、所謂道德なるものの價値の甚だ貧少なるに驚かざるを得ざる也。

更に一歩を進めて是を觀む乎。道德の極度は無道德に存すてふ命題は、取も直さず本能の絕對的價値を證明する者ならずや。吾人が日常の習慣と雖も一旦夕にして成立し得るものに非ず、其の初めに當りては實に幾多の苦痛と煩悶と戮力とを要するなり。吾人の本能なるものは謂はゞ種族的習慣也。幸ひにして後代に生れたる吾人は無念無爲にして其の滿足を享受すと雖も、試みに吾人の祖先が是の如き遺產を吾人に傳へ得るまでに、幾何の星霜と苦痛とを經過し來りしかを考へよ。吾人は祖先の鴻大無邊なる恩惠に對して現當の幸福を感謝せずんばあらざるなり。是の如き本能の成立し得むが爲に費されたる血と淚と生命と年處とは、道學先生が卓上の思索に本ける道德などに較ぶべきものにあらず。吾人は祖先の鴻恩を感謝すると同時に、是の貴重なる遺產を鄭重に持續し、是の遺產より生ずる幸福を空しくせさらむことを務めざる

べからず。而して是を務むる所以のものは、吾人の所謂美的生活、是れ也。

## 五　美的生活の絶對的價値

美的生活は人性本然の要求を滿足する所に存するを以て、生活其れ自らに於て既に絶對の價値を有す。理も枉ぐべからず、智も搖かすべからず、天下の威武を擧げて是に臨むも如何ともすべからざる也。然れども道德的並に知識的の生活は其の本來の性質に於て既に相對の價値を有するに過ぎず、是を以て己れより優れるには輒ち移り、己れより強きものには輒ち屈す。古往今來、轉々として底止する所を知らず。道德哲學の歷史は是の流轉の歷程を示して餘りあるを見ずや。

其の價値に於て既に相對たり、エキストリンジックたり、道德、知識の上に安住の地を求めむとするは蓋し難い哉。道德の上より見れば人生は義務の永遠なる連鎖也、一環去れば一環來る。所謂至善の境は一片の理想に過ぎずして、力行の道程は日月と共に終始せむ、人は旦暮の生を受けて是の間に營々たり、奈や憔悴たらずとせむや。眞理とは何ぞやとは、ピラートが怪み問ひたる言葉なりき。然れども二千年の歷史に於て誰か吾人に眞理を明しゝものぞ。學者は天上の星の如く、著書は海邊の砂の如し、彼等自らの信じて不朽の眞理と公言せしもの今はた何の狀ぞ。學者よ、吾人に究竟の眞理を訓へむよりは、古の哲學者の如く、大地を負へる龜を負ふものゝ何物なるかを究むるを寧ろ賢なりとせむ。畢竟知識は疑問の積聚のみ、一疑僅に解すれば一疑新に次ぐ。依て以て安住の地盤を求めむは、百年坐して河淸を待つに等しからむ。

美的生活は全く是と異なれり。其の價値や既に絶對也、イントリンジック也。依る所無く、拘はる所無く、渾然として理義の境を超脫す。是れ安心の宿る所、平和の居る所、生々存續の勢力を有して宇宙發達の元氣の藏せらるゝ所、人生至樂の境地是れを外にして何處にか求むべき。道德や、知識や、是の幸福を調攝して、其の發達を助成する所に用あり、其の用や消極的たり、相對的たり、方便たり、手段たり。夫の僞學と云ひ、虛僞と云ひ、方便主義と云ふが如きものは、畢竟是の人生の歸趣に關する本末を顚倒したる處に生ずる病的現象に外ならざるのみ。

是の如く說き來らば、讀者は其の世上道學先生の所說と太だ同じからざるを怪まむ。然れども讀者よ、吾人は何の宿罪ありて道學先生の云爲に做はざるべからざる乎。

## 六　美的生活の事例

上文說けるが如く、價値の絶對なるもの、是を美的と爲し、美的價値の最も醇粹なるもの、是を本能の滿足と爲す。然れども本能以外の事物と雖も、其の價値の絶對と認めらるゝものは亦美的たるを妨げず。是に於てか美的生活の範圍も亦隨うて本能の滿足以外に擴充せらるゝことを得。

例へば道德は相對の價値を有するを以て本來の性質と爲す。然れども若し人ありて道德其物に絶對の價値ありと爲し、其の奉行を以て人生究竟の目的なりとなさば、是れ既に道德的に非ずして、美的也。是の如き人の態度は實際的に非ずして觀賞的也。古の忠臣義士、孝子烈婦の遺したる幾多の美談は、道德の名によりて傳はれりと雖も、實は一種の美的行爲のみ。彼等の其の道に就くや鳥の塒に歸るが如かりしのみ。其の心事や渾然たり、豈其の間に目的と手段とあらむや。

眞理其物の考察を以て無上の樂みとなし、何が故に眞理を考察するかてふ本來の目的を遺却するものも、亦知識的生活を超脫して美的生

活の範圍に入れるもの也。眞正なる學者の眼より見れば、是の如き人は其の爲すべきことを忘れたる一學究に過ぎざらむのみ。然れども彼れは眞正なる學者の享受し難き滿足を其の學術より獲得し得る也。

世に守錢奴と稱するものあり、彼れは金錢を貯ふるを以て人生の至樂となす。是れ明かに金錢本來の性質を誤解し、手段を以て目的と誤認したるものなるを以て、道德上の蠻人たるを免れざるべし。而かも金錢其物を以て人生の目的と信じたる彼れは、學術其物を以て人生の目的と認めたる學者の如く、既に美的生活中の人たる也。守錢奴は決して吾人の好む所に非ずと雖も、守錢奴自らにとりては、金貨は彼れの安心也、至福也。吾人は彼れの心事を憫むと同時に、深く名教の外に得たる彼れの樂地を羨まずんばあらず。

●●戀愛は美的生活の最も美はしきものゝ一乎、是の憂患に充てる人生に於て、相愛し相慕へる少男女が、薔薇花かをる籬の蔭、月の光あかき磯のほとりに、手を携へて互に戀情を語り合ふ時、其の樂みや如何ならむ。彼等が爲す所を以て靡態と笑ふ勿れ。かゝる靡態は眞に人を羨殺するに足るものならずや。一旦世事意の如くならず、思ひしことは泡の如く消えて運命鐵の如く彼等の間を隔たむとする時、青年の命を以て一日の情に殉し、欣然として死に就くが如きは、人生何物の至樂か能く是に類ふべき。道學先生の見地よりすれば、戀愛の如きは青年の迷ひに過ぎざらむ、然れども是の如き迷ひは醒めたるものにとりて永遠の悔恨に非ざるべき乎。

昔者印度に瑜伽と稱する苦行の學徒ありき。彼等の爲すところは實に今の人を戰慄せしむるに足るものなりき。而かも是の如き苦行は彼等にとりて即ち解脫の道也、無上の淨樂也。彼等は是の無上の道に就かむが爲に、其の一指を擧げて抛ち得べかりしもろ〳〵の人生の逸樂を斥けて悔ゆる所無かりし也。近くはトラピストの例に見よ。彼等は無言の行者也。一切の聲色を斷絶して一種の向所に專念す。世俗に競奔するものより見なば抑々何等の果報ぞや。然れども誰か知らむ、彼等の生活には實に王者を羨殺せしめ得べきものある也。彼等は是の平和と安心と悅樂とを果して何處より得來りたる。富貴名利の外に人生の樂地を求め得たる彼等は幸なる哉。

詩人、美術家が甘じて其の好む所に殉したるの事例は識者の既に熟知する所ならむ。畢竟美術は彼等の生命也、理想也、是が爲に生死するは詩人たり、美術家たるの天職也。是の天職を全うせむが爲に、彼等の或者は食を路傍に乞へり、或者は其の故國を追放せられたり、或者は帝王の怒に觸れて獄に幽閉せられたり、而かも死を以ても脅かすべからざる彼等の安心は貴き哉。富貴前にあり、名利後にあり、其の意に反して一足を投せむ乎、是れ盡く彼等の物のみ。而かも彼等は斯くして得たる生に較ぶれば死の途に赴かむことを擇めし也。請ひ問はむ、世の富貴に誇り、權威に傲る者の幾人か能く道義の消息を悟了せる。

是の如きは美的生活の二三の事例也。金錢のみが人を富ますものに非ず、權勢のみが人を貴くするものに非ず、爾の胸に王國を認むるものにして初めて眞に美的生活を語るべけむ。

## 七　時弊及び結論

吾人の言甚だ過ぎたるものあるが如し。然れども讀者よ、時弊に慨する者の言はおのづから是の如くならざるを得ざる也。

何をか時弊と云ふ、吾人は是を數ふるの煩はしきに堪へざる也。夫の道學先生の說く所を聞

かずや、何ぞ其の物々として缺々たる。彼等は人の作りたるものを以て人の造りたるものを律せむとするものに非ずや。處に隨うて變易すべき道徳に附與するに萬能の威權を以てせむとするものに非ずや。彼等且暮に叫んで曰く、爾の義務を盡し、爾の權利を全うせよと。彼等の所謂義務とは借りたるものを返すの謂に非ずや。彼等の所謂權利とは貸したるものを收むるの謂に非ずや。然れども人生の歸趣は貸借の外に超脫するを如何せむ。又夫の學究先生の訓ふる所を聞かずや、何ぞ其の迂遠にして吾等の生活と相關せざることの甚しき。知識は吾人の欲するところ、然れども知識其物に幾何の價値かある。宇宙は畢竟疑問の積聚也、人は是の疑問の解決を待つて初めて安じ得べくんば、吾人寧ろ生なきを幸とせむ。野の鳥を見よ、勞かず、紡がざれども尙ほ好く舞ひ好く歌ふに非ずや。

道徳と知識とは人類の特有に係ると雖も、畢竟吾人が本能の滿足に對して必須の方便たるに過ぎざること既に說けるが如し。然れども是の如き煩瑣なる方便を待つて初めて得らるべき幸福は吾人にとりて甚だ高價なるものに非ずや。人の世に[illegible]卑むべきを知らで其の美しきを[illegible]、漫に道義を衒ひ知識を誇るも、人生の歸趣に到りては茫然として思ふところなし。五十年の短き生涯は是の如くにして匆忙の間に勞し去らるゝを見ては、吾人豈惆悵たらざるを得むや。蓋し今の世にありて人生本來の幸福を求めむには、吾人の道德と知識とは餘りに煩瑣にして又餘りに迂遠なるに過ぐ。夫の道學先生の如き、若し眞に世道人心の爲に計らむと欲せば、須らく率先して今日の態度を一變せざるべからず。

嗚呼、憫むべきは饑ゑたる人に非ずして、麵包の外に糧なき人のみ。人性本然の要求の滿足せられたるところ、其處には乞食の生活にも帝王の羨むべき樂地ありて存する也。悲むべきは貧しき人に非ずして、富貴の外に價値を解せざる人のみ。吾人は戀愛を解せずして、死する人の生命に多くの價値あるを信ずる能はざる也。傷むべきは生命を思はずして糧を思ひ、身體を憂へずして衣を憂ふる人のみ。彼れは生まれて其の爲すべきことを知らざる也。今や世事日に匆劇を加へて人は沈思に遑無し。然れども貧しき者よ、憂ふる勿れ。望を失へるものよ、悲む勿れ。王國は常に爾の胸に在り。而して爾をして是の福音を解せしむるものは、美的生活是れ也。

(明治三十四年八月)

## 死學者と守錢奴

古にありては學は氣を養ふにあり、今の人一たび儒衣を服すれば、反て奄々として將に絕せむとす。是れ何の象ぞや。人の爲に學あり、學の爲に人あるに非ざるなり。專念學に力む、名は則ち嘉すべしと雖も、而かも緣つて人生の目的を遺却するあらば、是の如きの學はた是れ何爲るものぞ。

吝嗇にして錢を是れ蓄ふるもの、人是を守錢奴と呼ぶ。錢なるもの素と人の爲に存す、人錢の爲に存するに非ざればなり、苟も人世に益なくんば陶朱の富は半錢の功無し。然らば則ち、何ぞ守錢奴を嘲りたる所以を以て夫の死學者を罵らざるや。

所謂死學者は守錢奴と相去る幾何ぞ。形あるが爲に錢の殊に賤むべきか、形無きが爲に、學の獨り貴むべきか。其人生の目的と方便とを混同するの過謬に就ては兩者些の逕庭無し。

(明治三十一年三月)

# 靜思錄

## 一　自分はイゴイストだ

静かに思ふと云つたところで別に何を思ふでも無い、皆んな自分の事を思ふに過ぎないのだ。自分はこの世の中で自分の外に何物をも思はない、否思はうとしても思ひ得ぬのである。自分は大方世人の所謂イゴイストと稱する者であらう。

イゴイスト！　人によつては此の名前ばかりで既に多くの罪惡を豫想するであらう。剛情、我慢、私利、私慾、不人情、沒道義、――斯んな種類のあらゆる惡德は此の名稱に關聯して直に想ひ起さるゝであらう。「彼はイゴイストだ」これだけの言葉は一個の人を道義の區域以外に放逐し得る力がある。あゝ何事があるにしても、自分は實際そのイゴイストに相違ないのだ。

自分だからとて何で〳〵すき好んで斯様な者になりたくは無い、萬々なりたくはない、が、所詮致しかたが無いのだ。實際自分は自分の事の外は何物をも思ひ得ぬ境遇にあるのだ。若し自分の事をのみ思ふのがイゴイストならば、自分は其のいゝイゴイストと呼ばれて少しも異存は無い、――人は己れ自らの外には何物でもあり得ないのだから。

實を言へば、自分は自分一人の身をすら持てあまして居るのだのに、何で外を顧みる遑があらうぞや。自分は久しい間難治の病氣に罹つて、この命一條を繋ぐにすら毎日々々一通りや二通りの苦勞では無い。それに家には妻もあり子もあり、戴白の老父母もある。自分は誠にいさゝかな財産と收入とで彼等を養ひ、慰め又育てねばならぬ。この仕事一つでも、自分の境遇を解する人ならば、如何なる健全なる人にでも決して容易しい事とは思はぬであらう。併しながら自分は斯様な事に思ひ惱んで自分の爲すべき事を忘るゝまでに弱い者でも無い。苟も此の心だに確かに安立してあるならば、ナニ少しの病氣や貧乏に打勝つて、随分爲たい事も爲し得ぬではない筈だと信ずるが、さて此の心が如何にも思ふ儘にならない。外には生活の爲に戰ひ、内には病苦の爲めに悶きつゝある自分は、更に病ひよりも貧よりも恐らくは天下の如何なる物よりも強い「己れの心」と云ふ大敵と鬪はねばならないのだ。病ひは苦痛なき時には忘れる事も出來る、貧乏は心がらで如何にも慰め得られる。されど誰れか自分自らの心より遁るゝ事が出來ようか。自分はこの大敵に遇つて凡ての精力を傾け盡したのだ。

自分は自分の心の苦みの何物なるかに就いては別に語るを要しない、それは大かた自分の分別の淺かりし爲め、或は意志の弱かりし爲め、或は感情の變り易くして激しかりし爲め、――約りは自分の性格のあらゆる弱點に歸するであらう。自分は自分の境遇が寧ろ通常人の幸ひとすべきものであつたにも拘らず、自ら求めてかゝる不幸を醸した事に就いては、少からず自分自らの性格を憐みもし、且つ時には悔みもするが併し既に醸し得たる心の苦しみ其物の儼然たる事實なることに於ては遂に如何ともする事が出來ぬ。丁度ロバート・エルスメアがその懷疑の深淵に陷つて「あゝ神よ、妻よ、仕事よ」と叫んだ樣に、自分は自分の存在の根柢が或る惡魔の手斧によりて打たれつゝある樣に感じ

た。自分は暗黒の中に立つてこの惡魔と格闘を試みたが、自分の力が勝てば勝つ程自分の胸の苦しみはます／＼激しくなる。自分は自分の劍を以て斬る所の敵は自分の腸にあることを忘れたのだ。自分は愕然として胸に手をあてた、そして自らの刃の痕より湧々として流れ出づる血潮によりて自分の喉を潤した時、惡魔の聲は吾れ自らの聲の如く、「吾は汝なり」と勝ち誇りげに自分の心の耳に囁いた。——あゝその後の自分は如何なつたか、又如何なりつゝあるのであらうか、自分は多く語るに忍びない。

斯様なことは自分の口より多く言ふべきで無からう。兎も角も、與ふるものは富まねばならず、敎ふるものは知らねばならぬ、自ら火ならぬものが如何にして他を火にすることが出來ようぞ。自ら己れの體を持餘して居る自分の樣なものが、まあ如何して世の人々の爲す如くに人の爲めとか、或は世の爲めとか、或は國の爲めとかに盡すことが出來ようぞ。若し人は己れの爲めに活きて居るものとすれば、自分はイゴイストたらむと欲するも得ないのである。

## 二　病氣の福音

自分が多病だから斯う言ふのではさら／＼無いが、病氣と云ふものは健康な人が想ふ樣に忌み嫌ふべきものでは決して無い。眞に病中の趣を味つた人から見れば、健康な人の方が或は却て氣の毒の樣にも見えるであらう。

病氣は吾々の軀を弱くするが、其の代りに吾々の精神の上にさま／＼の貴むべき影響を與ふるものだ。濁れる心情を淸め、淺薄な思想を深くし、動き騷げる胸を靜かにし、忙がはしき此の日常の凡俗生活の中にて吾々の想ひも寄らざる幾多の精神上の經驗を與へ、且つ吾々の心靈の上に最も嚴肅なる平和と光明ある希望とを與ふるものは實に此の病氣の力である。此の病中の趣味はとても健康な人の窺知を許さざる所謂現身證悟の三昧であるのだ。

故に病氣の日は、徒に藥を飮み眠を貪るべき時では決して無い、即ち是れ吾々の肉身の苦しみ、犧牲の前に靈魂の福音が祭壇の上に現はるゝ時であることを覺悟すべきである。佛家では昔より病時を以て發菩提心の好因緣となし、觀法省察の無上の機會として取扱つて居るが、決して佛家のみ然るべき筈では無い、あらゆる宗敎家、思想家、詩人などには常に是の覺悟が無くては叶はぬ筈だ。

病氣は身軀の方から觀れば「死」の攻擊である。あゝ「死」！　此の世の中で此れ程忌み嫌はれて居るものは無いが、さりとは淺はかな人心ではあるまいか。あゝ是の一の「死」を除いたならば何處に宗敎があるであらうか、また何處に詩歌藝術があるであらうか、何處に哲學があるであらうか。人生のあらゆる幽妙高遠なるものは實に此の「死」に對するの安心、希望、解釋、裝飾の爲めに作られたるものではあるまいか。

若し吾人に是の世に於て思ふがまゝにあらしむるならば、願はくは生きながら死にたいものだ、そしてこの現身によりて文藝、哲學、宗敎の謂ける解釋を得たいものだ。併しこんな望みが無理であるとしても、吾々は決して失望するには及ばぬ、吾々は病氣と云ふものになり得るでは無いか。病氣とは他方より見れば半ば死ぬるの謂だ。生きながら全るで死ぬる事が出來ぬとすれば、セメテ生きながら半ば死ぬることがまだしもの樂みではあるまいか。病氣の福音は即ち死の福音であるのだ！

それで自分は斯う思ふのである、——未だ曾て死の福音を耳にしたことの無い人が、如何にして宗敎家たり、哲學者たり、又詩人、美術家たることが出來ようか。健康の身軀を有つて牛馬の如く飮み、食ひ、走り、動き、犬の吠える樣に騷

論をし、羊の様に書物を食つて居る人が、如何してこの人生のまことの味をかみしめることが出來ようか。「健全なる身體には健全なる精神」といふ諺がある、これは凡俗社會の常識を標準とする人間に就いて言つた極めて凡俗なる訓言である、自分は却て不健全なる身體にこそ健全な精神は宿り得ると言ひたい位だ。

斯んな事を書いたら讀者の中には自分の考を病的として笑ふ人もあるであらう。あゝ病的！　なんで病的が惡いであらうか。自分が果して自分の思ふ様な意味に於て病的であり得るならば、此の世に於ては是れ程仕合せなことは無いと平生思ひもし、又願ひもして居るのである。ナニモ御多分に外れまいとならば、馬や牛の眞似をするまでだが、それでは此の世の中があまりあつけ無いではあるまいか。――あゝ自分の考は何處まで他樣のと違つて居るのであらうか。普通の程も覺束ない、言ふだけ野暮であつたのかも知れないのである。

## 三　『ロバート・エルスメア』

望ましい事では無いが、先にも述べた通り、病氣も吾々にとつての書入時で常には得難い慰みを得ることが出來る。自分はこの頃病褥の上に暮らした一月ばかりの一部分を偶によりて小說讀みに過した。勿論西洋の小說だ。中にはヨーカイや、ゾラや、又は近頃獨逸の友人から送り越したワグネルの樂劇などもあつて何れも多少の面白味はあつたが、其の中で最も自分を動かしたのはハムフレー・ワード女史の『ロバート・エルスメア』であつた。

この小說は十數年前の出版で、歐米の社會には隱れもなき著名なる作であることは誰れも知つて居る事であるから、自分は今更らしく吹聽するにも及ばぬ筈だ。併しながら一度は讀みたいと思ひながら、ツイ今日まで機會がなかつた。自分の新しき感觸の一端をお話することも必ずしも無益ではあるまいと思ふ。勿論今の本邦の小說とは違ひ、七百頁にも近き一大冊子の梗概を述べることは出來ない。又ワード女史の文學上の位置並に是の書の價値に關する批判も概ね歐米文壇に定論があるのである、今日、自分は是等に就いて兎角の意見は申すまい。唯自分は『ロバート・エルスメア』の中に描かれたる社會及び人物を觀て、つくづく今日の我邦に感ずる所があるから、それを簡單に述べたいのである。

十九世紀の後半紀に於ける宗教心の變動、それに伴へる虔信家の信仰上の苦悶、懷疑、及び基督教の新解釋に基ける新信仰の開拓、是の徑路を說明するのが是の書の大目的で、主人公たるロバート・エルスメアは即ち是の時代精神の權化として現はされて居る。想ふにエルスメアの時代は歐羅巴、少くとも英吉利に於ては既に經過したであらう、併しながら其の餘波は尙ほ我邦の如き新開國の宗教社會には殘つては居るまいか。自分の見る所ではエルスメアの時代は尙ほ我邦に於て經過して居らぬ。併しながらロバート其人は果して何處にあるのであるか。

基督教界に於て幾多先覺の名士が其の信仰の變遷に煩悶した事實は吾々の現に目擊した所である。併しながら彼等は如何にしてこの煩悶を解脫し、如何にして新信仰を求め得たのであるか。吾人は不幸にして其の蹤跡を審かにしない。唯最も明なのは信仰の變遷に惱みたる教界の所謂名士が何時しか或は聖書を捨てゝ算盤を取り、或は讚美歌を歌ひたる口にて米相場の符牒を呼び、或は天國の鍵を握りたるものが藩閥政府の官吏と化したる等の事實である。而して又同時に最も明なるは、是の煩悶を切り拔けて『基督の新同胞』を組織したるロバート・エ

ルスメアの如き虔信、眞摯、剛邁、不屈なる人の殆ど一人も無かつた事實である！

暴風の後にまことの天氣が來る如く、煩悶の後にこそまことの平和が來る。大いなる誘惑と大いなる懷疑とに打勝つた信仰でなければとても一代の人心を指導することが出來ない。彼等は彼等一人の身をすら保ち得なかつたではないか。

詩人キーツの言葉に「自分自らの脈搏の上に試みられたるものに非ざれば、公理も公理とは言へぬ」と云ふことがある。あゝ手に聖書を取り、口に讃美歌を歌ふものが信者であり得るならば、世の中はまことに幸ひであらう。併し眞理は口より口に傳へ得べきもので無い、金錢で購ひ得べきもので無い、吾々は皆自らの血を以てそを證さねばならぬのだ。我邦の宗教家なぞが果して吾々に何を爲し得る者ぞ。

ロバート・エルスメアの師たる牛津大學の教授ヘンリー・グレーに就いても自分は少からず感慨に打たれた。エルスメアは是の人の精神的感化によりて信仰の門に入り、而して又是の人の眞摯なる果斷によりて懷疑の苦しみを脱した。啻にエルスメアに對してのみならず、グレーは當時英國社會の一大勢力として常に精神界の北斗と目ざされて居つた。自分は想ふ、是の如き人が若し今の我邦の大學に求むることが出來るならば、今の青年がどんなに力強く思ふであらう。知識の受け賣をする職人根性のプロフェッソルや、高が活字引の腐儒等は吾等の精靈の上に何の力を有するものぞ。若し吾々がエルスメアの如き懷疑の淵に陷りて生死の苦悶と戰ふ時、仰いで救ひを求め得るグレー其人の如き人は何處にあるであらうか。聞けば、グレーは小說中の假設的人物ではなく、かの有名なる「倫理學入門」の著者たるトーマス・グリーンの事であるとの事。あゝ我邦の大學の倫理學の先生がこのグリーンの樣な人であつたならば……と自分はつくづく思ひに沈んだのである。

小說は決して戲れ事のみでは無い。この書の如きは啻に吾々の一部の精神上の生活を代表して、その中に少からぬ訓へと慰めを含んで居る。眞にロバート・エルスメアの物語を身讀し得た人があるならば、是の日本の社會が尚ほ光明を存して居ると云ふものだ。殊に自分は今の枯淡、無味、凡俗至極なる道學先生や村學究先生にツマラなき倫理書なぞよりも是の樣な書物に就いて人生の活ける趣味を味はむことを勸むるものである。（明治三十五年三月）

## 四　自分自らの大善人

（未刊、草稿には隨想錄二とあり）

世間の人々は口を開けば輙ち世の爲め、又は國の爲めと言ふ。併しながら世の爲め、國の爲めと云ふことが此の自分を離れて果して何等かの意味を有ち得るか否かといふことに就いては、自分は尙ほ疑ひの中に在る者だ。自分自らの存在を撫無して何處に人生の意義を求むることが出來ようか。宗教は無我を以て人道の大歸として居る。もし是の所謂無我が我の存在の最高狀態を示すものでないとすれば、自分は毫も宗教の貴むべき理由を解し得ざる者だ。自分は素より社會や國家の存在を是認する、併しながら吾人は彼等の君主であることを忘れてはならぬ。臣下とは必ずしも貢を納むるものの謂ではない。カイゼルの物はカイゼルに還すが宜しい。併しながら精神的に彼等の存在の根柢を約して居るものは、吾人自らであることを忘れてはならないのだ。

斯んな考を有つて居る自分は恐らくは世間の道德から見れば惡人と謂はるべき者であらう。併しながら是の如きことは少しも悲むに及

ばない、外から見てどんな惡人であらうとも自分は自分自らの大善人であるのだ。吾々は他が辛いと言うたとて自ら砂糖の甘きを欺くべきでは無いではないか。

併しながら自分だからとて木の股から生れた者でもなく、又沙漠の中で育つた者でもない、今茲まで三十二年の春秋は矢張り此の世の中で人並みに暮し來つたのだ。學校に入つて人並みの教育も受け、人並みに書物も讀み、色々の人にも接し、種々の事にも關はつて、つらい目にも嬉しい目にも先づ〳〵人並みには出遇つた積りだ。一口に言へば自分は世間の最も多くの人と同じく時代の蠢々たる產物の一つに過ぎないのだ。されば自分の精神が此の時代の感化を離れて獨立して居るとは素より思はないし、又獨立し得るとは猶更ら自分は考へない。自分は何處までも此の世の中の影響を受けて居るに違ひない、違ひないが自分は此の影響に對して恨みもせぬ代りに別に喜びもしないものだ。それは自分の存在に關する價値の標準は「我の滿足の外には何物にも求むべきでないことを自分は確信して居るからである。されば自分の樣なイゴイストの云爲にも、時としては社會とか國家とかの爲めに何等かの意味のあることも無いでも無からう。併しながら是を以て自分を批判する人があるならばそれは間違ひと云はねばならぬ。自分の思ふ所は別にある。是の如きはつまり自分にとつて偶然の結果であつて、自分の初めより眼中に措かなかつた事が何かの機みに或はおのづから外に現はれたに過ぎないのだ。イゴイストたる自分を外にしては、別に自分といふものが、是の世の中には無かるべき筈と自分は固く信じて居るのである。

自分は社會や國家の中には存在して居らぬ、社會や國家が却て自分の中に存在して居る。——自分は此の單純な信條の下に精神上の生活を營みつゝあるものだ。あゝ是の如くにして生活することが果して罪惡であるのであらうか。

（明治三十五年三月）

## 厚積薄發

久屈の中に信じて至足の後に用ひ、既溢の餘に流れて持滿の末に發す。學者説を爲すの道當に是の如くなるべきなり。吾人年少、學尙ほ淺し、未だ是境地に達せざるを慚づ。願ふに世上吾人と感を同うするもの尠からざらむ。希くは俱に共に一向精進して敢て懈らざらむ。

所謂游刃餘地斤を運して風を成す。是の如くにして初めて能くせむのみ。

（明治三十年十月）

## 冷鐵のひゞき

公德は私情を沒せざるべからず、大義まゝ親を滅す。理を談じて冷刻鐵の如きものを以て、一概に無情漢となす勿れ。冷えたる鐵にも打てば美なる響あり。

（明治三十年十月）

# 雜篇

## 本末の顚倒

當今史料編纂先生ありて歴史家なく、哲學史家ありて哲學者なく、教育學者ありて教育者なく、道學先生ありて德行家なし。甚しい哉、本末の顚倒せらるゝ事や。

## 今の哲學

ソクラテース曰く、哲學は死に對するの道なりと。洵に是の究竟の安心を與へずんば、宇宙の知識我れに於て何爲るものぞ。知らず、今の哲學謂ふる所果して何の道ぞや。

## 自ら欺く無くむば幸也

嘗て會堂專門の新學生に告げて曰く、卿等百歲にして道義を說く、可也。昨日校舍を出でゝ今日人の子に敎ふ、危からずや。人生の幽微、素と文字の外にあり、讀書萬卷、自ら悟る無くんば畢竟死學のみ。卿等自ら欺く無くんば幸也。

## 中心果して信ずる所ある乎

人生は事實也、空理に非ざる也。漫に主義を標榜し學說を糊塗す、畢竟何の關する所ぞ。道學先生、好んで理を談ず、疑ふらくは中心果して信ずる所ありて然る乎。

## 學說と人格

知は易く信は難し、百知ありて一信無からむには、初めより學ばざるに如かじ。

今の學者の爲す所を見るに、漫に先人を是非して折衷を事とする者多し、抑も何の果報ぞ。其人を知りて其說初めて解すべけむ。是の間何ぞ道學先生が皮相の是非を容れむや。

而して唯々同じき者のみ同じき者を解す。道學先生の解し得る人物は、道學先生自らに過ぎざるのみ。

## 人々自ら悟らざるべからず

喇嘛去り、モルモン來る。去來我れに於て何の關する所ぞ。今や、信仰は外にあらずして內にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否ざれば職業のみ。世の宗敎と謂ふものの卽ち是れ。

## 空腹高心

己れ能く先人に若かむと欲せば、亦同じく先人の學びたる所を學ばざるべからず。何ぞ今の青年輩の空腹にして高心なるや。

## 道義亡國

唱歌には公德唱歌、菓子には教育菓子、遊戲には德育遊戲、聖代の文物又燦然たりと謂ふべし。

夫れ邦の無道を以て仆るゝもの尙起すべし、道義に溺れて亡ぶるものに到つては遂に救ふ可からず。吾人潜に以て憂と爲す。

## 何ぞ思はざるの甚しき

嗚呼天下好く書く者の多くして好く讀む者の尠きや。情激する時、語通らざるを得ず、理絕する時、理明なるを得ず。機微言外にあり、囁嚅として脣頭に上らず、人は卽ち壯語を作して他を欺くものと爲す。何ぞ思はざるの甚しき。

## 心に會するもの唯是れ心

理の爭ふべきもの、其事初めより爭ふの要なき也。心に會するもの、唯是れ心。要は人々自ら悟るにあり。腐儒席上の談の如き、吾れに於て風馬牛のみ。

## 何ぞ人の異を妨げむ

理の精しからざるを怪む勿れ。精ならざるは粗ならむが爲のみ。吾れは唯吾れに同じきものを求む、何ぞ人の異を妨げむ。

## 千萬言唯意のまゝのみ

若し偏に理を爭はゞ、吾れ不肖なりと雖も豈俄に學究先生の後に落つるものならむ。千萬言唯意のまゝのみ。區々の辨折何ぞ卿等を待つて知らむや。

## 吾は永く吾たらむ

人はニーチエを言ふ、唯願くは吾れをして永く吾れたらしめよ。ニーチエは天才、望むべくして卽くべからず、千歳に獨步せしめて可也。

## 十九世紀文明の王冠

遮莫、吾れはニーチエを好む。十九世紀文明の王冠として見るべきもの正しく彼れに非ずや。彼れの病的なるを咎むる勿れ。十九世紀文明其物の甚だ病的なるを如何。

## 笑はむ乎、狂せむ乎

天才は狂し、俗物は笑ふ。吾人の社會は世々是の如きのみ。生を是の世に享く、そもそも俗物となりて笑はむ乎、將た天才となりて狂せむ乎。

## 吾をして詩人たらしめば

吾をして詩人たらしめば、願くはキヨルネルたらむ。人を愛し、國に盡し、自ら甘んず。靑

春の死、何ぞ其れ美はしき。才名一世に高くして、令聞後に治し、吾に於て素より間然する所無し。

唯だ夫れキヤルルたる能はず、願くはバイロンたらむ。バイロンたる能はずんば、願くはハイネたらむ。彼れには悪魔の力あり、此れには毒蛇の舌あり、尚ほ以て一世の俗習に甘心するを得む。

## 言論畢竟人物のみ

書を寄するものあり、曰く言論畢竟人物のみ、足下の近状憐れむべきが如しと。嗚呼果して然る乎。吾は固より自ら憐れむべきを知らざらむ、若し夫れ憐れんで而して自ら楽しむの境地は即ち足下等の知らざる所に屬するなからむや。

然り、言論畢竟人物のみ。吾心近來靜穏を缺く、譬ば水平の風に亂るゝが如き乎。詩あり曰く、

吾がこゝろ、波にも似て砕けたるか、など聞かのさゝに寄せきつ、大空高く崩れたる月。

吾が文章は文に非ず、其詩亦詩に非ざる也。

## 米と砂

萬物は人類の爲に造られたるものに非ず。人類は其の生存の目的を達せむが爲に取捨する所無かるべからず。彼れの糧は米たるべし、砂たるべからず。

怪む、人は何故に精神上の糧に於ては米と砂とを撰ばざるや。

## 其愚や及ばず

萬物、何物か知識の對境たり得ざらむや。若し我れをして好奇の心だにあらしめば、一塊の土石に對する百卷の著述も必ずしも難事に非ざらむ。然れども是の如き知識畢竟何の用ぞ。

知るべきことを知らざる、是れ愚也。然れども知るまじきことを知るの愚に及ばざること遠矣。

## 道學先生の世界

吾人は道德の受賣を業とする大小の道學先生を尊む。品性の陶冶は偉人の事たり、今の道學先生の造り得る人物は道學先生自らに過ぎざるのみ。

假りに是の世界の人間をして悉く道學先生の如き人物たらしめば如何。吾人は魯仲連を學びて、東海を蹈んで死せむのみ。

## 何ぞ一に煩瑣なる

兒童心理が教育上に應用せられざりし時代にありても、日吉丸は無事に育ちたりき。ゲーテ、ルーテルの幼時には道德的遊戲を強ひらるゝことあらざりき。當世の事、何ぞ一に煩瑣なる。

## 口耳の學

口耳の學は口耳の人を造る。人物を得て人物を造り得べし。道學先生よ、眞に世道人心の爲に

計らむと欲せば、百巻の著書よりは一身の徳を修めよ。人々自ら悟らざるべからず。

## 罪は貧民にあり

近時貧民の悪を爲すもの、人動もすれば、社會の罪を言ふ。罪は貧民にあり、何ぞ社會にあらむ。彼れ悪を爲すに先ちて既に貧弱てふ大罪を犯したるに非ずや。

強者と天才とは常に道德を超越す。彼等より見れば仁義は弱者の武器に過ぎざるのみ。

（以上 明治三十四年十月）

## 田中智學氏の『宗門の維新』

吾人は久しく田中氏の名を聞けるも未だ其の人を知らず、日蓮宗の教理沿革等に就いては素より一門外漢たり。而かも茲に氏の近著『宗門の維新』に就て一言せむと欲するは、是の書が末法五濁の當世にありて教祖日蓮の偉大なる精神を繼紹せる所に同情を禁ずる能はざるものあれば也。

著者は開卷の劈頭に於て、本化の妙宗は宗門の爲の宗門に非ずして天下國家の爲の宗門也と喝破し、是れ日本國家の應に護持すべき宗旨にして亦宇内人類の必然同歸すべき一大事因緣の法也と唱道し、此の大事緣を宣傳せむが爲に日蓮聖祖は我邦に垂化し給へりと說き、今の宗門は數百年來の歷史的腐敗の爲に全く其の本分を亡失し了りたりと慨き、聖祖の宏猷を恢復し、宗門の妙用を光顯せむが爲に、茲に宗門改革の根本義を明にせむと揚言し、而して後、斷じて曰く、「予は此の論篇の云ふ如き宗門に非ざれば、日蓮聖祖の宗門に非ずと爲し、又此の宗門の改造は單に宗徒の間にのみ唱ふべきものに非ずして日本國家の應に大に注目すべき最高問題也と爲すもの也」と。何ぞ其の宣言の高大にして其の意氣の猛烈なるや。吾人は先づ是の開卷第一章に感激して篇を終るまで遂に手を釋く能はざりき。

著者の所謂改革論の大綱は、宗法に於て復古的態度を採り、制度に於て進步的態度を取り、而して全體を統率するの一大精神として侵略的態度を採らむとするにあり。所謂侵略的態度は日蓮の法華折伏の大義にして、著者の是に論及するや氣魄雄大、光焰萬丈、蓋し本篇の大主眼の存する處、亦著者が最得意の壇場たるが如し。其の要に曰く、人類を一妙道に歸せしむるには、先づ一大勢力を事實の上に建立せざるべからず。國家を以て道敎の原動力とする教旨即ち是れ也。曰く、日本をして宇内を統一して永く宇宙人類の靈的巨鎭たらしめざるべからず。是れ宇内淸廓の爲也、人類救濟の爲也。而して是れ聖祖立敎の大義、天祖建國の要道にして、兼ねて釋尊塔中付囑の元意也。曰く、是の大理想を唱道したる聖祖日蓮は正しく世界統一軍の大元帥也、大日本帝國は正しく其の大本營也、日本國民は其の天兵也、本化妙宗の學者敎家は其の將校士官也、事觀高妙の學見主張は其の宣戰狀也、折伏立敎の大節は其の作戰計畫也、信仰は氣節也、法門は軍糧也、四大格言は軍規の振肅也、本化妙宗の日本國教發定は完く其の出征準備也と。著者は是の大法鼓を鳴らして先づ宇內統一の大理想を建て、是の大理想を實現するに先ちて內亂鎭定の必要ありとなし、既に法華折伏の四字を以て宗を立てたるもの、四大格言の麾下に立ちて飽くまで一切の邪宗邪敎を討伐せざるべからずと說き、終りに大々的氣燄を吐いて曰く、

寺院の門石を見ずや、その一天四海皆歸妙法、「國法提内廣令流布」の文字は、日夕出入の緇素に侵略を允令する也。久遠寺、本門寺、本國寺、妙法華經寺、妙顯寺等、是れ皆相對的對破の名に非ずや。「侵略的」の徽號ならずや。侵略的に信仰せよ、侵略的に說けよ、侵略的に書けよ、朝々夕々造次顚沛も侵略的意氣を充たせよ。本山を參謀府とせよ、檀林を練兵場とせよ、一切すべて侵略的理想に行動せよ。「コーラン乎劍乎」は猶ほ甚だ微弱也、須らく「法華經は劍也」と曰へ。老嫗も杖を揮つて世界統一を說け、幼童も鼓を鳴らして「法王進軍の曲」を歌へよ。利の爲に祈る勿れ、身の爲に祈る勿れ、父母の爲に祈る勿れ、師の爲に祈る勿れ、只侵略の爲に祈れよ、侵略の爲に死せむと祈れよ。侵略に非ざれば言ふ勿れ、動く勿れ、視る勿れ、聽く勿れ、侵略的意味なき勸化に布施する勿れ、侵略的ならざる布教に奔走する勿れ、侵略的氣節あらざるもの直に宗門を去れ。死せる萬人を有するよりは生ける一人あるに如かず。況や七千の寺僧、二百萬の信徒、一たび昏睡より起ち、齊時應同して異口同心の大節を復し。一擧して侵略突貫の聲を齊らせば、山岳震ひ湖海動くの概無くんばあらじ、侵略なる哉、侵略なる哉。（廿三、四頁）

讀者は以上の敍述によりて略々本書の目的及び文章を想像するを得べし。著者は別論に於て教會の組織を說き、附錄に於て妙宗の未來を預想せりと雖も、其の主腦とする處の「侵略的態度」以下の數章に存するや明けし。其の意氣の猛烈なる、其の抱負の高大なる、其の理想の深遠なる、而して其の文章の雄偉なる、吾人は以て近時宗教界の一大文字なりと賞贊するの決して溢美に非ざるを信ずる也。

人の傳ふるを聞く、著者は平生熱心なる日蓮の崇拜者たるの故を以て日蓮狂の名ありと。狂か、癡か、吾人得て是れを知らず。然れども萎微衰弱を極めたる今の宗教界に於て、敢て日蓮の後身を以て自任するもの、著者の如きあるは、吾人の甚だ喜ぶ所也。法華折伏、破權門理はげに日蓮が布教三十年間の一大主義なりき。彼れは是の主義の爲に住所を追はれたること二十餘度、或は某氏の爲に夜襲せられ、或は法敵の爲に狙撃せられ、遠流に處せられたること二度、或は斷頭の圓座に坐し、或は弟子を殺され、法を路傍に說けば杖木瓦礫を投ぜられ、道場に講ずれば罵詈惡言に恥められ、打擲刃傷殆ど身に絶ゆる事無かりき。是の如きもの前後實に二十有二年、而して迫害いよいよ大にして折伏愈々烈しく、天下の威武に面して一歩も退讓する所あらざりき。北條氏遂に屈し、榮爵を授け美田を贈りて宗門の弘通を允許し、請ふに諸宗の折伏を中止せむことを以てするや、彼れ毅然として曰く、日蓮の教を弘むるは釋尊の遺命のみ、北條氏の許否、我れに於て何かあらむ。法華折伏は聖經自衞の大義、救世根本の方便、釋尊の行者一日も是の事無かるべからずと。嗚呼何ぞ其の主張の嚴明にして其の意志の猛烈なるや。吾人は日蓮宗に於て一門外漢のみ。今に於て尙ほ法華折伏を標榜するの可否は吾人の得て知らざる所なりと雖も、田中氏が二十年來、内外の障礙に抵抗して終始其の主義を枉げず、斷々乎として益々其の侵略的態度を擴張するの一事は、少くとも其の教祖の偉大なる精神に感孚せる所ありと謂ふべし。吾人深く其の志を壯とし、其の行を偉とす。其の文章亦彷彿として高祖遺文の流韻を傳へたるが如き、亦吾人の欽羨に堪へざる所也。

嗚呼世に閑文字多し。言はざるべからずして

初めて言ふもの、果して幾何ぞ。田中氏の是の書の如きは眞に言はざるを得ずして言へるもの歟。其の説の當否如何は暫く措き、世人は須らく憂世者の最も眞摯たる憤慨録として一讀の勞を吝むべきに非ざる也。

（明治三十四年十一月）

## 天才の出現

我れは天才の出現を望む。嗚呼日蓮の如き、奈破翁一世の如き、詩人バイロンの如き、大聖佛陀の如き、哲學者ショペンハウエルの如き英雄豪傑は最早や此世に出づる能はざる乎。久しい哉、我れの凡人に倦めることや。

## 天才の犠牲

世に凡人の數幾十百千萬億ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ。願くは彼等の十萬を割いて一バイロンを得む。願くは彼等の一百萬を割いて一奈破翁を得む。我れに一日蓮を與ふるものあらば、願くば代ふるに一千萬の凡人を以てせむ。我れに一釋迦を與ふるものあらば、一億萬亦惜むに足らざらむ。

人よ惜む勿れ、彼の木偶に對するも猶且つ犠牲を供ふるに非ずや。天才にして得らるべくんば、如何なる犠牲も決して貴からざる也。

## 天才無き世界

吾人の世界より天才を除き去れよ、殘る所果して何物ぞ。歴史は空虚とならむ、世界は暗黒とならむ、人生は寂寞たらむ。吾人夫れ何に頼り誰を憑みてか此世に生存すべき。天才は正しく社會の名譽也、國家の寶冠也、人類の光明也。

## 平等主義と天才

平等主義は謂へて曰く、人には凡て平等の人格あれ、平等の發達あれと。是の如くにして無數の凡人は作られぬ。

天才は吾人に謂へて曰く、爾等力めて我れの如くなれ。我れは是れ強者と優者との先驅也と。是の如くにして天才は犠牲の慰藉也、進歩の理想也、未來の光明也。

## 吾人凡て是を憎む

吾人は思ふ、偽りに多くの人は生まれたるに非ざる乎。凡俗平板なる平等主義は是の如くにして行はるゝに非ざる乎。天才は是の如くにして狂者として迫害せらるゝに非ざる乎。

天才の出現を沮害するもろ／＼の教育主義、道徳主義、吾人凡て是を憎む。

## 二個の眞理

「朝に道を聞いて夕に死するも可也」。是れ孔子の教なりき。

『早く其の杯を空しくせずや、其の泡の消ゆるに先ちて吾人の命の消えざることを誰か保せしや』。是れアナクレオンの歌なりき。

吾人は思ふ、是れ人生に於ける二個の最も大いなる事實にして、亦二個の最も大いなる眞理也。

## 偉人と凡人との別

偉人と凡人との別は一言にして盡すべきのみ。彼れは人生を簡單にする者也、此れは人生を複雜にする者也。

本能の命ずる所、其處に人生の最も大いなる事實あり。其の煩瑣を以て精緻と稱し、迂遠を以て妥當と爲すもの、そも〳〵人生直下の事實を如何とか見る。

哲人言あり、曰く、基督教徒は世に唯一人ありき、而して彼れは十字架の上に死したりきと。

## 價値と我

人生は價値也、而して價値は我れ自らの造る所也。世に我れ自らの造らざる價値ありとすれば、是れ我が眼の外に色ある也、我が耳の外に聲ある也。

天下誰か我が價値を解する者ぞ。文字は上下大小是非を論ずべし。價値は唯心を以て心に傳ふべきのみ。

他の言動によりて左右せらるゝもの、是れ既に價値無き也。價値無きもの是れ既に我れ無き也。我れ既に沒しぬ、人生の意義亦求むべからざる也。

## 惡を憎むこと何ぞ甚しき

進歩の旗章は多く革命者流の頸血に染められたりき。而して革命者流は概ね當代の元兇たりき。世間何ぞ惡を憎むことの爾かく甚しき。

## 癲狂院

世界は惡魔に負ふ所あるが如く、又深く狂者を德とせざるべからず。

ナザレの會堂に現はれ、以賽亞書六十一章の破題を吟じて、「此の錄されたる事、今日汝等の前に應へり」と叫びし時、當時誰かイエスを狂者なりとせざるべき。龍の口に引かれむとするや、赤橋の前に立ちて八幡大菩薩を罵りたる時、日蓮を狂者と思ひし者は獨り彼れの法侶のみに非ざりき。彼等をして今の世にあらしめば、癲狂院裏の一患者として待遇せらるゝの外、何處にか救世主あらむ、何處にか釋尊の行者あらむ。

謔する者曰く、癲狂院は是れ無數の凡人が其の平等主義の保護の爲に設けたる恰好の武器也と。好諧謔亦多少の眞理無しとせず。

## ニイチェの批難者

◎世に天才を解し得ずして是れを批評するほど笑ふべきことは無い。今のニイチェの批難者の如きは大抵是の類だ。

◎讀賣新聞に馬骨人言と云ふのを書いて居る匿名先生があるが、連りにニイチェの攻擊をやつて居る。何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが、超人や、棒生などの事になると、流石に俗學者の知解に入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチェを批評し得らるゝものならば、世に批評ほど容易なものはあるまいよ。

◎自體ニイチェは學者では無い、隨つて其の言ふ所を學說などと見るが抑々の誤りだ。彼れの述ぶる所は學說以上の理想、學說以上の想像、謂はゞ人間靈性の呼吸を以て直に人の肺腑に通

ずるにあるのだ。それを俗學者流が自家の歴史論や偏見などに據りて彼れ是れ言ふのは何たる僭越であらうぞ。斯かる俗學者流に一大打撃を與へむ爲に、取りも直さずニイチエは生まれ出でたのである。

□讀賣の馬骨先生は、やれ個人主義が如何だの、やれ歴史的發達が如何だの、やれアナクロニズムがあるの、やれ盲目反動だのと、是迄の俗學者の言ひ古らした事を珍らしげに陳べて居るが、是れでニイチエが解つた積りで御自分は居らるゝのか。ニイチエ一代に三段の變化などと人並の事は言つて居るが、なんで斯かる先生に其の樣なことが解らうぞ。ハヴロツクエルなどのお里が見え透く樣で、何共以て笑止の至りだ。

□其の癖、やれニイチエはゲーテを讀んだことはあるまいの、ルソーは恐らく解らなかつたらうのと、歯の浮く樣な通を並べらるゝが、英譯でファウストを窺つたとて、何で是れがゲーテ通と謂はれよう。況して他人がゲーテを讀んだの讀まぬのと詮議立てては、人の手前チト御控へなさるゝが宜しからう。斯んな無用の詮索を爲する暇があるならば、ニイチエの妹さんの書いた傳記や、ザラツストラでも熟讀なさるゝが御爲だよ。

□扨て其の言ひ方の輕薄さ加減と來ては目も當てられない。馬骨先生とは何れ早稻田あたりの末派でもあらうが、御師匠樣の囈語の筆が如何に巧妙だからとて、斯かる問題にまで下手に眞似られては、如何にも人品が見え透く樣で御爲になるまいと思はれるのに。

## ニイチェの歎美者

□我輩はゲーテや、バイロンや、ハイネや、日蓮や、一世奈破翁を歎美すると同じ樣にニイチェを歎美する者である。ニイチェは前にも言へる如く、學者ではない、況して實踐道德家などでは猶更無い。彼れは生知の詩人だ。詩人として其の理想の崇高なること、其の想像の偉大なることは殆ど人心のはたらきの最高潮に達して居る。殊に十九世紀末の悪文明に育てられた吾々にとりて此上もない靈性の慰藉と謂ふを憚らない。

○世にはニイチェの歎美者と謂へば、直に其の所説の實行者として驚怖する者があるが、まあ何と謂ふ馬鹿氣た事であらう。如何にゲーテの歎美者だとて自らファウストたり得るであらうか、如何にバイロンの歎美者だとて、マンフレツドや、サルダナパラスを眞似らるゝものであるか、如何であるか。ハイネや日蓮の歎美者にしては一日も是の國には居られまい。奈破翁を眞似たらば恐らくは直に巣鴨に送らるゝであらう。

○吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豐富にし、是によりて自ら慰め、自ら勵み、かねて是の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。俗學者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の先蹤によりて少からず確められ、且勵まさるゝのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を堅むるのだ。是の間の消息は歴史論や、アナクロニズムでニイチェを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬのは言ふまでもないのである。

（以上 明治三十四年十一月）

## 自然の兒

吾等は是の如き言の或は世に誤られむこと

を恐る。されば吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。

## 何が故ぞ

世に若き女の容つくれるばかり美はしきは無し。彼れ何が故に其の容を裝ふや。野に咲ける百合の花を見よ、ソロモンが榮華の極みだにも其の榮え是の花の一つにも及ばざりき。花や何が故にしかく麗はしき。鳥の樹間に歌ふとき、彼れ何の情ありて其の歌のかくは妙なるや。黃金色なる木の實の枝も撓わなる態の如何にうるはしきよ。木の實はた何の心ありて寂しき秋に獨り打ち笑める。

## 貴き哉是の賚

人よ、自然の大なる力の是の間に活けるを見ずや。是の力無くば人には若き女の笑顏なく、野には花の色の美はしきなく、森には鳥の歌の妙なるなく、春はさながら秋の如くにして、世は限りなき沙漠の如くならむ。大なる哉是の力、貴き哉是の賚。吾人に祈るべき神なくんば願くは先づ是の自然の大なる賚を讃美せむ。

## 性慾

怪しき哉是の大なる貴き賚の吾等の社會に賤しめらるゝ事や、惡魔の如く詛はるゝに非ざれば、其の名決して彼等の口に上らざる也。彼等胸に是の賚を抱けども、そを隱すことさながら盜める物の如き也。斯くてあらゆる惡名は是の賚の上に被らせられぬ。眞理の外に何物をも知らずと稱する科學が名けて性慾と呼べるもの、あゝ是れ彼等が是の賚に與へたる最も美はしき稱謂なりき。良しさらば、吾等亦暫らく是れを性慾と名けむ。

## 何ぞ其の祝福を讃美せざる

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。自然の兒には常に兩面の刃あり。人は何故に其の害毒を呪詛して其の祝福を讃美せざる。

## 性慾の動くところ

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。夫の性慾の發動の醇なるものは、實にこれ天下の至美、人生の至樂也。性慾無きところ人生幾何の價値ありや、吾等まことにそを疑ふ也。彼等に詩ありや、愛ありや、將た美ありや。青春の妙樂彼等果してそを解するや。吾等まことにそを疑ふ也。たとへば一陣の春風吹き坐りて野に生色あるが如く、たとへば微妙の音樂に神往きて限りなき歡喜の中に漂ふが如く、たとへば妙香薰じ天華雨に中る身は無上淨樂の三昧に入るが如く、性慾の動くところ、野には春色あり、空には妙光あり、人には愛情あり。天地と人生と茲に初めて美なるを得るに非ずや。

## 地獄の火印を烙けられたるもの

夫の春と年若きとを欲ぶ人は、何ぞ性慾の美はしきを稱へざる。吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。彼の性慾を禁遏し、若しくは力めて卑下するもの、其の面に色無く、其の眼に光無きを見ずや。さながら地獄の火印を烙けられたるものの如く、其の額には蛇の如き皺あるを見ずや。彼等笑はざるに非ず、されど其の笑ふ聲に空洞の響あるを聞かずや。彼等はげに知博

く、德高く、行正しく、若しくは財裕かなる人なるべし。されど吾等は疑ふ、是の如くにして世に何ほど望むべき榮えありや。人は己れに克つと謂ふ、されど性を矯むるは天を傷くる也。善か惡か、吾れ是を知らず、たゞ人生の福祉是の如くにして空しかるべきを想ふのみ。玉の盃の底なきもの、げに用ふべからざるを如何。

## 性慾の醇化

げに慾也、飽き足らずんば已まざるべし。されど、喩へば火は煖むれども觸るゝものを燒くが如く、樂は遠きにありて聞くべきが如く、色は水に和して染むべきが如く、性慾の美はた其の饜足せられたる所に在らずして、そを憧憬するところに存すべし。吾等假りにそを性慾の醇化と名けむ。

## 久しい哉自ら欺けることや

吾等をして自然の兒の如く語らしめよ。是の如きをしも賤むべしとせば、世に何の貴むべきものありや。名けて色情と呼ぶ、可、淫慾と稱する、亦妨けじ。唯是をしも恥とせば、世に何の誇るべきものありや。異世他界の知識をだも人は何ほど貴しとして求むるに非ずや、この自然の欲求を羞恥として忌避するの謂はれ何處にありや。げに沒趣味、沒風韻の世とはなりにけり。されど人は其の根を芟りて其の花の美はしきを望むべきに非ざるべし。久しいかな、風俗社會の自ら欺くことや。

## 價値也、名目に非ざる也

吾等は想ふ、若き女は容つくるべきもの也。か何ぞ今の女學生の其の姿、蓬の如くなるや。かの裸體畫を唾むるもの、何故に其の膚の柔かにして其の息の香しきを想ふべからざるか。熱情と云ひ、實感と叫ぶ、暫く人の名くるに任ぜむ。吾等自然の兒の關はる所は價値也、名目に非ざる也。

## 眞の教育、眞の道德

嗚呼、自然の最も大いなる賚は久しく磨かれずして埋れたり、是れまさしくまことの教育とまことの道德との關はるべき最も大いなる問題に非ざる乎。人は長へに其の罪を遂ぐべきに非ざる也。

（以上 明治三十四年十二月）

## 晩年の平和

近日嘲風、イルメナウに於けるゲーテの畫像を送り來る。心を傷ましむる哉。Ueber allen Gipfeln ist Ruh……、嗚呼是の老詩聖が晩年の平和と安心とは、吾儕の生涯に於て果して望み得べきことなる乎。感慨多時、何ぞ勝ふべけむ。

（明治三十四年十月）

# 文學及人生

吾人は文學に入るに先ち文學の目的如何を攻究せざる可からず。

抑も文學の目的如何。或は曰く、文學の要は吾人の氣韻を高くするにあり。或は曰く、吾人をして巧妙明晰の詩文を作ることを得せしむるにあり。或は一歩を進めて曰く、文學の目的とする所は人生を解釋するにあり、吾人は依て以て社會古今の狀態を知り得るなりと。吾人は何れか其の當を得たるを知らずと雖も、若し此等の說をして眞ならしめば、吾人は文學の爲に、其の目的の卑下淺薄なるを悲まずんばあらざるなり。文學の目的は只氣韻を高くし巧みに詩文を作るに止まらん乎、境域人生の外に出でず、只社會の狀態を寫すに止まらん乎、吾人は實に文學を崇ぶ、然れども今や之を擲たざるを得ず、吾人は實に詩歌を愛す、然れども今や之を賤まざるを得ず。吁文學豈斯の如き淺薄狹隘なるものならんや。吾人が半生の精血を灑いで而して尙遂々として息まざる所以の者は人世以外更に高尙悠遠なる目的ありて存するを信ずればなり。何ぞや、文學は常に吾人の性行風格を修成するのみならず、此の紛々たる俗界より吾人を拔いて、直に自然と同化せしむる者なるを信ずればなり。眞理と共に其の「善」を理解し、其の「善」を理解すると共に其の「美」を感應する能力を吾人に與ふる者なるを信ずればなり。

文學の目的既に斯の如し。吾人は一歩を轉じて、之より文學は人生の上に於て果して幾何の價値を有するかを論ぜん。

試みに問はん、所謂人生の幸福とは果して何物ぞや。人動もすれば精靈の其の身に宿するを知らず、貪夫は財に徇ひ、誇者は權に死し、茫として生れ茫として終る者世上滔々皆然り。彼の權威を以て其の下を制し、徒に口體耳目の慾を逞うする者は、是れ人に非ずして寧ろ獸のみ、安ぞ以て人生の樂事をなすを得んや。彼の泉貨珊瑚を累積し恬然として饜飫する者は、是れ人たるに非ずして寧ろ器たるのみ、安ぞ以て人生の快事となすを得んや。若し獸となり以て足れりとせば、吾人は將に此の活々たる精靈を如何せんとするや。蒙昧教ふべからざる輩は吾人之を知らず、苟も少しく學問智識あるもの、三更神を靜めて、一たび人生てふ觀念を起し、引いて古來の達人哲士の心事に思ひ到るあらば、設令ひ身は富貴榮華を極むるも、誰か喟然として自己の理想の卑下なるを慨嘆せざる者あらん。是れ卽ち人は其の體を以て生活すると同時に、其の心を以て生活する者なるを證する者に非ずや。眞正の幸福は肉體の上にあらずして精神の中に存するを證する者に非ずや。其れ然り、吾人は豚となりて樂まんよりは寧ろ人となりて悲まんと欲する者なり。一國の帝王となりて宮室の讌に迷はんよりは、寧ろ窮巷の匹夫となりて高尙なる理想を懷いて眠らんと欲する者也。若し其の心高尙なる理想を缺き、內に顧みて一點忸怩の思ひあるあらば、世界を擧げて之を與ふるも吾人又何の樂か之れ有らん。然らば則ち何を以て最も高尙なる理想と云ふか。他なし、心塵寰を脫して自然と同化するに在り、「眞」「善」「美」の三者を正當に理解するにあり。是に於てか吾人は知る、文學は吾人に與ふるに最も高尙なる理想的標準を以てする者にして、文學者は世界に於て最も多く眞正の幸福を

享受し得る者なることを。

嗚呼、斯く高尚なる理想は、吾人に與ふるに安心立命の地盤を以てせりと雖も、吾人は現に地上に生活する者なるを記憶せざるべからず。若し只理想界に彷徨するのみにして、少しも現生の快樂に與らずんば、其の間、自ら憔悴たらざる者あるを免れざるべし。是に於てか文學は吾人に與ふるに同情同感の靈性を以てし、以て理想界と此の世界とを連結し、吾人の幸福をして圓滿完了ならしむるなり。所謂同情同感とは何ぞや、自己の心情を移して他物を忖度するを謂ふ、吾人の快樂を感ずる、主として此の情あるに由るなり。已に同情同感の性を有す、之れを以て吾人は春花の綽約たるを見ては深く其の美に感じ、秋月の皎々たるを望んでは深く其の色に動き、笛聲の嚠喨たるを耳にしては深く其の音に感ず。勿論、花月の美を愛するの情は漁人漁父にも之れあり、然れども文學者の之に感ずるや、常人の得て夢想する能はざる極めて高遠幽邃なる微妙を感銘する者なり。人、大詩人の著作を讀んで恍然として心醉し、斯の如き高妙靈活なる思想は抑も如何にして人心に興り得べきかを驚嘆するも皆之が爲のみ。又吾人が人の喜びを喜び、人の悲みを悲むも、皆此の同感の情あるに由るなり。啻に是れのみならず、此の情あるが爲に、人の悲に遇ひて却て之を轉して樂となすを得、吾人が大詩人の作れる悲曲を讀んで大に快樂を感ずるも之が爲なり。愛別離苦の慘状の大に吾人に快きも亦之が爲なり。試に見よ、昔者平氏の盛なりしや、一世の榮華を極め、宗族扶桑の半を占めしも、一朝沒落して赤幟復起たず、一門相將ゐて窮島波濤の間に銷沈せり、何ぞ夫れ慘憺なるや。然れども吾人が平家物語を讀んで尤も快樂を感ずるは、時めく六波羅の春花にあらずして、却て千鳥啼く須磨の秋月に非ずや。アレキサンダーとマリアスは共に一世の英雄なり、然れども吾人が其の歴史を讀んで左も快樂を感ずるは、前者がアルベラ原頭に波斯軍を鏖殺したる時に非ずして、却て後者が形容枯槁カルセーヂの殘墟に坐して今昔の涙に咽びたる時に非ずや。是れ等の快樂は實に文學の賚にして、人皆多少其の情を有せりと雖も其の感慨の深くして快樂の大なるは文學者に如くものあらざるなり。而して吾人をして悲哀的現象を樂ましむる悲歌哀詩は、文學者實に之を吾人に與ふるなり。若し世に悲歌哀詩なく、人にして同感の情を缺き、若しくは薄弱なるものあらば、人生快事の範圍大に減殺せられざるべからざるなり。シェレー其の詩アラスターに序して曰く、人にして此の世界に一の愛すべき所なく、一の望む所なく、人の事を思はず、人に愛せられず、恰も乾燥したる土塊の如く同感の情を失はゞ是れ人にして人に非ざる也。是れ等は人の父に非ず、人の友に非ず、又人の國に愛せられず、是れ等は精神的に死せるなり。實に然り、文學者は最大なる同感の情を有するが爲に人間中の最も幸福なる者なり。曹孟徳が十萬の雄軍に動かずして却て烏鵲南飛を歌ひ、ウオルフがケベックの戰勝者たるを願はずして、却てグレーの詩集を愛誦せしは實に之が爲のみ。

以上述べたるが如き最高なる理想を以て最大なる感情を動かし、以て之を文字に表はしたる者、之を詩（弘き意味の）となす。詩は實に文學の神髓なり、精粹なり、文學の價値實に此に存す、吾人請ふ少しく之を論ぜん。

夫れ詩は靈活なる者なり、其の感情は無限なり。吾人の意識の中心たると同時に其の圓周となる者なり、詩は吾人の思想の根本たると同時に花葉となる者なり、萬物之に因つて生じ、萬物又之に因つて美なり。若し詩なからんか、此

の世界は乾燥無味にして吾人は何くにか純潔なる快樂を求めん。之を花に喩へんか、婉妍たる櫻花と雖も之を組織するものは纖維と細胞のみ、之を人に喩へんか、傾國の美人と雖も、元と是れ骨と肉とのみ。之をして美色を呈し、之をして芳香を放たしむる者即ち詩なり。所謂德義とは何物ぞや、愛情とは何物ぞや、所謂愛國なる情とは果して何物ぞや、所謂美麗なる風景とは果して何物ぞや、若し詩にして永遠無窮なる此の世界より其の靈想を發揮するなかりせば、此等は又言ふに足らざる者ならんのみ。詩は即ち文學者の心なり、其の精神は即ち文學者の理想なり、故に文學者の胸襟や快闊、其の心事や高潔、百難の際に處して恰も光風霽月の如く、常人の呻吟苦楚する時にありて獨り悠然として大船に坐するが如し、內に樂む所あればなり。之を以てシェレーは寂寞に樂み、李詩仙は夜郎に笑へり。

論じて玆に至り、顧みて我邦方今の學生を見るに、實に長大息に堪へざる者あり。渠れ等の眞理を認むることは吾人之を知る、渠れ等の「善」を認むることは吾人又之を知る。然れども敢て問ふ、渠れ等は果して完全に「美」を理解するの能力を有するか。渠れ等は花を見て之を愛し、月を見て之を樂む、然れども其の興起する感情は單に其の美なるを認め、其の艷なるを識るに止まるのみ。渠れ等は物を見て其の物たるを知り、聲を聞いて其の聲たるを知る、然れども物を形なきに觀、聲を聲なきに聞き、能く形體以外の微妙を闡揚することは能はざるなり。渠れ等は倘以て世界の最も幸福なる人と言ふを得るか。渠れ等は能く事物を分析し、又能く事物を測量す、然れども能く自然の美を感受する者幾何かある。渠れ等は人間に意識あるを知りて精靈あるを忘れたるなり。吾人は之を以て主として當今教育の無風流なるの罪に歸せんと欲するなり。

嗚呼、吾人豈辯を好む者ならんや。其の斯の如く呶々する所以の者は、只人生の貴重なるを知ればなり。吾人は敢て世人に向つて文學者たれと勸むる者にあらず、只文學的趣味を畜へんことを勸告するものなり。ゲーテーは言はずや、「若し吾れ自然の美を理解する能はずんば寧ろ異教者となりて海神の海より上るを見んことを」と。

(明治二十四年六月)

# ウォーヅヲースとバイロン

吾等ウォーヅヲースに於て多とする所以の一は、其の善く英國人民の性情を歌ひたるにあり。實に大沙翁を外にして斯の國民の性質を發揮したる彼れが如きはあらざる也。ミルトンは潮に燃ゆるが如き熱誠を以て當代の感情を顯はせりき、されど彼れが筆に上りたる英國は宗教家の英國なり、學者の英國なり。ウォーヅヲースに於けるが如く婦人、小兒、農夫、商賈の英國には非ざるなり。彼れがカンブリアンの谷間に於て歌ひたりし所のものは、永く全英國民心の中に其の同情の反響を見出し得べし。

バイロンは則ち然らず。彼れは常に彼れ自身を歌ひたり。彼れの詩は彼れの性情の外に十分の同情を得てあらず。彼れは其の文學的生命に於ても亦固有の詩人たるを免れざるなり。

吾が邦の詩人小說家にはバイロン多くして、ウォーヅヲース少し。明治文學の寂寞に非さる也。

(明治二十[illegible]年八月)

# 運命と悲劇

昔者フヰデアス雷神の像を造る。工成り、将に之を殿堂に安置せむとするや、彼れ像前に佇立して凝視沈想すること多時、敬虔の情自ら禁ずる能はず、覺えず地に跪き、雙手を擧げて叫んで曰く、賤匠の作能く神意に協ふことを得たりや否やと。何ぞや、蓋しフヰデアスは自己より大なるものを造りたればなり。

自己より大たるものを造ることに於て、悲劇家は美術家に異なること無し、何となれば彼れは運命を顯はすものなればなり。

夫れ運命は悲劇の骨髄なり、生命なり、運命なきは即ち是れ悲劇無きなり。然るに希臘古代の運命劇一たび評論家の非認する所となりてより、近世、劇を言ふもの靡然として一に性格を旨とす。而かも運命主義の最大なる發表者たるに於て、大沙翁は毫もソフォクレエス、エスキラスに讓らざることを認むるもの甚だ少し、是れ予輩の潛に怪訝に堪へざる所なり。近來我が作劇家の指を悲劇に染むるものも、偏に性格を重じて深く意を運命に停めず、遂に此の悲劇の第一義を逸し去るは洵に惜むべしとなす。されば今日悲劇と運命との關係に就て一言するは、予輩其の不急の辯に非ざるを信ずるなり。

想ふに、世事の常無くして人生の長へに流轉するは、苟も生を觀じ世を念ふ人の容易に認むる所なるべし。然れども一たび皮相の見を離れ、熟々沈思靜觀すれば、必ずや人世を營むものは偶然徒爾の事件のみならず、常住不易なる或物の其の間を貫通するものあるを見む。更に之を諦視し洞察し、茲に其の幹枝を尋究すれば、生の無常偶然なりと思はれしもの、多くは其の避くべからざる必然の行路を經過して、各々其の始終を遂げたるものなることを發見すべし。更に又縦に歳時に繋け、横に方處に渉り、古今東西の史乘に照して、詳に人生興廢の跡を察すれば、是の常住不易なる或物は、萬千不同の世事を統べ、殺活喜憂の樞機を握り、己に反するものは之を斃し、己に順ふものは之に福し、成敗著落の跡、今にして之を見れば儼として一絲の增損を容さざることを悟了すべし。是の古今を通じて人世を統轄する常住不易なる一物の存在を認識したる人は、即ち是れ運命の存在を認識したる人なり。

然らば則ち吾人の所謂運命は何處に在るか。曰く、人世を外にして運命なるものあらざるなり。所謂人道は吾人を支配するの運命なり。然らば則ち人道は何處に存するか。曰く、人間を外にして別に人道なるもの有らざるなり。所謂性格は吾人の胸裏に存する人道なり。是の故に人間ある所即ち亦運命なかるべからざるなり、請ふ、少しく之を論ぜむ。

人類はあらゆる生物と共に、偶然にして生息する者に非ず、或る最終の目的即ち理想に向つて精進する者なることは、之を過去の歴史に鑑み、之を現在の狀態に察し、歴然として爭ふべからざるの事實にして、今日最も進歩せる哲學者、倫理學者の等しく認むる所たり。抑々何者か吾人に是の如き進歩的動機を與へたるか、何故に吾人は是の理想に向つて不退轉の精進を爲さざるべからざるか、將又是の理想の如何なるものなるかは、今日人智の能く説明する所に非ずと雖も、兎にも角にも斯の如き進歩的動機の先天的に人性中に存在すること、又人間の諸々の歴史は所詮是の動機の活動に驅られて人

生の理想に到達せむとするの盡力に外ならざること、是れ、今日あらゆる學問の證明する所なり。人間社會に在りて所謂人道なるものは個々人の內性に存在せる是の先天的動機、必然なる合成力にして、其の目的は人類全體の發達を催進し以て其の理想を現化するにあり。故に人道は其の起源よりして之を見れば、素個人の性格を外にして存在するものに非ずと雖も、而かも一たび人道として存在したる以上は、其の成立の目的を遂げむが爲に、個人に對して絕對の制裁力を有するに至る。之を喩はゞ猶個人の意志の一致より成りたる法則が、一たび國家の意志となれば、轉つて個人に對して絕對の權力を有するが如し。已に人道は人類全體の發達を目的とするを以て、個々人の生活に對しては極めて冷淡なるを免れず、彼れは偏愛する所無し、唯己に順なるものを編するのみ。

人類が先天的に稟有せる進步的動機が社會の中に顯はれたる時は之を人道といひ、個人の中に顯はれたる時は之を性格といふ。換言すれば、性格は特殊なる處時の下に制限せられたる人道なり。故に性格と人道との關係は個體と種族に於けるが如し。個體の種族の生存に貢獻する限に於て、自己生存の價値を有するが如く、性格も亦人道の發達に裨益ある限に於て、自己の幸榮を全うするを得べし。若し性格にして一朝人道の利福に衝突し、若しくは背反したる時は忽ち自家覆滅の禍を免れざるなり。運命なる語を假りて之を表はさば、人類の進步的動機は根原的運命なりと言ふを得べく、其の一般の人道に顯はれたるものは大なる運命、其の個人の性格に顯はれたるものは小なる運命と言ふを得べし。而して小なる運命は恒に大なる運命に從はざるべからざるなり。

悲劇とは何ぞや。詮ずる處個人と世界との爭に非ずや。個體と種族との鬪に非ずや。個人性格の一般人道に對する反抗の歷史に非ずや。一言すれば、大小二個の運命の衝突に非ずや。然り、是二個の運命の衝突は悲劇の要件なり、而かも悲劇の能事は之に終れるに非ず。其の最終の目的は、個人性格の滅亡若しくは服從を描くことに因りて世界的人道の神聖崇嚴にして犯すべからざる所以の理を明にするにあり、悲劇の價値快感亦實に爰に存する也。

哀むべき哉、人間の運命や。平生、史乘戲曲を讀む每に、予輩未だ曾て是の嘆無くんばあらざるなり。古より豪邁卓犖の士、動もすれば世事の往々に甘ずる能はず、跡たる孤高を趁して一代の風雲に背馳し、赤手以て世間を顚倒せむと要す。世を亂り人を苦め、天に背き命を悖らず、傲然として古今を睥睨するや、意氣虹の如く風稜霜に似たり、一朝榮枯處を代へ、非運潮の如く其の身に迫るや、殘骸力盡き、孤劍再び揮ひ難し。青春の榮華永く去りて敗餘の意氣而かも少しも衰へず、昂然天地に俯仰し、從容自若として笑つて運命の犧牲に就く。何ぞ其の精神の高邁にして其の心事の落々たるや、英雄の末路茲に丈夫をして飲泣せしむるに足る。而かも予輩は斯の如き慘憺たる悲劇に接する毎に自ら顧みて悚然として畏るゝ所あり。吾人人生を支配する道義的制裁は、鑿に吾人が一毫の瀆紊を容さず、千古萬秋毅然として不拔なるものあるを觀て、轉た人道の崇大無限にして個々人生の如何に憐むべきかを痛覺せずむばあらざる也。昔希臘人は運命を以て嫉妬の勢力となせり、是を以て彼等の觀念は常に流星の如く外より來る。エデプスや、アドラストスや、皆是の盲目なる嫉妬の權化に過ぎざりき、斯の如きは悲劇の眞意を得たるものに非ず、荒誕無稽寧ろ笑ふべき也。若し夫れハスマイン、マクベスに至りては、運命は其の面目を異にせり。彼等は各々其の特有の性格

を持して特殊の方處時代に立ち、強健なる自由意志を以て其の爲さむと欲せし所を爲しゝなり。彼等の事其の志に違ひしは、彼等自ら之を招きし也。予輩は、彼等の運命は彼等の性格と人道との必然なる關係に外ならざるを見、更に世界に於ける悠遠なる道義的制裁の存在を想へば、轉た茫々無限の感慨を忍ぶ能はざるなり。是を以て予輩は常に謂ふ、人をして最も深大なる道義的觀念を感銘せしむるものは世實に悲劇に若く者無しと。

蓋し悲劇に要する所のもの凡そ三あり。其の勇者の英邁非凡なる其の一たり、其の性格をして人道に背かしむる其の二なり、人道最後の勝利を明にする其の三なり。要は運命の存在と全能とを表白するに在り。想ふに讀者をして深痛なる同感を興さしむるは、其の人物も亦異常の才器を顯はさざるべからず。況して天下の氣運に反抗して昂然相下らず、望失はれ志破れて尙驚かず、一膽斗の如く、身死に瀕して猶其の傲岸を失はず、冷然笑を含みて運命を嘲るの膽勇に至りては、決して尋常一樣の人物に望むべからず。ソクラテス、ナポレオン、ワレンスタインの如きは實に是種の人物なり。讀者試に思へ。ヴォルテールの「モハメット」に於てパルミラが死に臨みて「世は去れり、世界去れり」と叫びしは、ジュリアン帝が「ガリエール、汝は勝てり」と呼ばはりしに比して、如何に遙に悲劇的なりとするや。悲劇的人物は必ずしもヘラクレスの如く其の體軀の剛大なるを要せず、只ニオベの如く高尙なる氣品と不屈なる精神を要するのみ。見よ、テベスのニオベを。渠女は纖約蒲柳の一女性のみ、而かもラオコーンの恐るべき煩悶に比して、如何に遙に沈痛悲壯なる悲劇的感情を吾人に與ふるや。渠女は七人の子の母なり。無慈悲なるアポロ神、アルテミス神の殘酷なる復讎初まるや、渠女は避くべからざる運命の前に毅然として臆する所無く立ちたりき。其の子の殺されたるものは渠女の脚下に橫はり、傷けるものは蹌踉として渠女の膝を攀づ。吁暴神の來擊に面して敢て憐を乞はず、敢て救を求めず、限りなき哀悼の中に高雄の氣韻を湛へ、端然幼兒を抱いて立てるニオベの心事の如何に悲劇的なりとするや。人は無限に小なり、而かも運命に抗死することに於て無限に大なる事を得べし。彼れは死生を賭して運命と其の權力を爭ひたればなり。ワレンスタイン、ナポレオン、ソクラテス、將たニオベは實に限りなく大なる人に非ずや。限りなく小なるの人は常に限りなく大なる人を[illegible]ことを[illegible]、彼れは其の中に自己の理想を認むればなり。

次に悲劇的人物は不幸ならざるべからず。而して其の不幸は人道と其の性格との關係より必然に生まれたる不幸ならざるべからず。蓋し日常平穩の生活は以て人道の存在を示すに足らず。抑も是の無事なる社會は其の根柢に於て如何に幽深なる意義を含めるか、表面平和の外觀は如何に裏面鬪爭の結果なるか、社會の中に生活する吾れ人は如何に恐るべき地盤の上に立てるか、是れ悲劇の主として表白せむとする所なり。是を以て悲劇的人物は其の非凡なる資性と特質とを以て人道の全能に反抗し、展轉煩悶して百方其の非望を到達せむことを務めざるべからず、而して人道の勢力の無限にして犯すべからざる事を示さむが爲に其の反抗は成るべく強大ならむを要す。而して是等は凡て人物性格の必然なる結果なる事、猶原因は種子の必然なる所生なるが如くならざるべからず。夫のエデプスが示せるは運命に非ずして實は偶然のみ。是を以て沙翁がマクベスの運命は、既に其の鬱勃たる有爲の氣象に胚胎し、妄に自ら王者の資あるを信じ、偶々戰務の餘威に乘じて覬覦を遂けむとしたるに成りしなり。ゲー

テガタッソーの悲劇的なるは、自己の英才を孤負し、妄想自ら媚び、遂に現實の知識を遺却したるに基きしなり。シルレル其のワレンスタインをして言はしめて曰く、

Recht stets behält das Schicksal, denn das Herz
In uns ist sein gebiet'rischer Vollzieher. —
Der Zug des Herzens ist des Schicksals Stimme.
In deiner Brust sind deines Schicksals Sterne.
(Wallenstein's Tod. I. 7)

運命は恒に其の目的を成就す、
吾等の胸は彼の執行者たればなり。
心の赴く所は運命の聲なり、
汝の胸に運命の星あり。
（ワレンスタインの死、第一齣、第七場）

約に約言し言ふべし、古ヘラクリトが「性格は人間の惡魔なり」と言ひ、ゲーテが「運命は勇者の自性なり」と言ひしも、全く是の意に外ならず。

斯の如く、個人的性格は悲劇の根本たりと雖も、而かも其の目的には非ず。悲劇の目的は性格によりて運命を顯はすにあり、是の世界を支配する所の人道即ち道義的制裁の神聖にして犯すべからざる所以の理を表明するにあり。是に於てか性格は常に人道に反抗することを要するのみならず、敗衄して自ら運命の犠牲となり、以て人道最終の全勝を示さざるべからず。悲劇の悲劇たるを得る所以のもの實に爰に存す。

運命の發表者として悲劇は一樣の快感を吾人に與ふるを得べし。一は運命を敵として戰へる悲劇的勇者の偉大なる事業より來り、一は不拔なる運命其物の認識より來る。吾人悲劇を讀みて、身を以て知らず〳〵劇中の勇者と合體し、共に憂へ、苦み、惱み、戰ふ時に當りては、吾人が本然の能力を瀝盡し、餘蘊なく之を現化するを得るを以て、吾人の內心に沈痛なる滿足を感ずべし。而かもあらゆる煩悶は徒勞に歸し、神衰へ、力竭き、敗軀に杖いて、仰いで崇大無邊曠劫不易なる運命の存在を認識する時は、識官風雨其の跡を收め、悠々蒼天、茫々無際、一路の有限我を誘うて其の行く處を知らさるが如く、寧ろ生き復活し、僅に人生盈尺の繫縛を解脫して、眞如常住の世界に再生したるの思ひあり。ファウストが人間の汚濁を離れ、天上の光に眞理の國を望むと夢みし後、

In jenem sel'gen Augenblicke
Ich fühlte mich so klein, so gross.
(Faust I. Nacht.)

彼の幸なる一剎那
吾は我が身を最と小さく、又最と大きく感じ哉。
（ファウスト、第一、夜の場）

と云へりしも亦是の境地を指せしものに非さるか。是れ文學が吾人に與へ得る絕頂の快樂なり、宜なる哉ショペンハウエルが悲劇を以て最高の詩なりと云ひしや。

然れどもショ氏が悲劇に對する意見は予輩と同じからざるものあり、是れ讀者の一顧を煩はすに足る。氏曰く、

悲劇の目的は人生の怖るべき方面を示すにあり。即ち名狀すべからざる人道の苦惱、罪惡の勝利、嘲るが如き偶然の支配、正義と無罪との救ひ無き沒落を吾人の前に明にするにあり。即ち是れ是の世界實在の眞相を示すものなり。（意志及[illegible]としての世界、第三卷プラトーの理想、[illegible]）

悲劇は人生の怖るべき一面を顯はすものなることは洵に氏の言の如し。而かも其の目的は氏が說ける如く偶然の支配、罪惡の勝利を示すものに非ずして、却て永遠なる道義的制裁の存在を明にし、正義最終の勝利を示す者なり。是れ予輩が悲劇を以て人生最高の德義を發揮する

ものと謂ひし所以なり。是の點に於て氏は未だ全く悲劇を解せざりしものゝ如し。

讀者は、上來述べ來りたる所によりて略々運命と悲劇との關係を知了せられしなるべし。之を要するに、唯一不易の精神は宇宙の終始を貫徹す。或は自然界にありて種族維持の原理となり、或は人間界にありて人類發達の主義となる、所謂人道なるもの是れなり。性格は人道の個人に顯はれたる者なり。予輩は先に人道を大なる運命と言ひ、性格を小なる運命と名けしが、今主客の差別に從ひて、前者を外部、後者を内部の運命と見るを得べし。悲劇の目的は、内部の運命の反抗と沒落とによりて、是の外部の運命の不拔なることを示すにあり。今の人、多くは單に個人的性格を描くを以て戲曲の能事了れりと思惟し、幽遠深大なる悲劇の精神に至ては多く意を用ひず。故に其の作多くは散漫膚淺に流れ、捕捉する所を知らず、嘆ずべき也。彼の沙翁を讀みて、單に其の性格にのみ注心し、其の間に磅礴せる悲劇的運命を認むる能はざるものは之れ徒に其の字を讀みて其の意を解する能はざる輩のみ。詩人シルレルをして『大なる哉リチャード三世』と叫ばしめしものは、實に是の運命に非ずや。ハルナック曾てファウストを評して曰く、是れゲーテ自らよりも大なりと。悲劇家は自己よりも大なるものを造らざるべからざる也。

終に臨んで一言すべきことあり。我友姉崎正治氏曾て印度戲曲の特質（學林）を論じ、中に日本の戲曲に眞の悲劇的勇者無きを慨し、明治の文學者が徒に男女の愛情に耽溺し、未だ曾て一人の南洲の如き偉人物の悲劇的最後を題目とする者無きを浩嘆せり。予輩は氏が過去日本戲曲に悲劇的勇者無しとの斷言に對しては、多少の異論なき能はずと雖も、而かも我が作劇家が老南洲の如き人物を描くを欲せざるは、予輩の氏と共に慨嘆する所なり。我邦歷史的英雄多しと雖も、南洲の如き悲劇的生活を爲したる者は甚だ少し　想ふに南洲は高邁磊落の士、一たび志を廟堂に得ざるや、冠を掛けて故山に躬耕し、誤つて知己青年の擁戴する所となるや、情義之を捨つるに忍びず、忠烈の高士甘じて叛賊の汚名を受け、『笑つて殘骸を擲つて敎弟子に付し』、當世紛々の毀譽を排して、喟然として千年の知己を俯仰す、何ぞ其の事蹟の悲劇的なるや。作劇家の好題目何物か是に如かむや。今日の文人往々にして指を爰に染むるもの無きに非ずと雖も、是の老雄千歳の肝膽を照すもの絕えて無し。吁我が作劇家は何故に是の好題目を從へざるや。

（明治二十八年十一月）

## 片々

○他が己の知らぬ事を言ふ時は、さながら己が侮辱でもされたるが如く思ひて、嚇然となりて怒る人あり。世には全智の人無きものを、さりとては膽玉の小さき人かな。

○聞きたくなきものは、それ小說家の小理窟か。理窟をはだかにするは、小說の下手な證據なり。

○見たきものは、それ面白きユーモルか。我文壇にはスヰフトはありさうなれども、ゴールドスミスは無し。サッカレーは有りさうなれども、ディッケンスは無し、強ひて求むれば紅葉や唯一のユーモリストなるべき。

（明治二十八年十月）

# 天才論

一

天才とは何ぞや。是れ近時評論壇に喧しき問題の一なり。『國民の友』の批評家是を言ひ、『めざまし草』の鷗外是を駁し、『青年文』記者は『天と人』と題して才に天人の別あるを說き、『少年文集』記者は「天才と學問」と題して天才も亦學殖を要するを論じ、其他『文學界』・『萬籟』、『新文壇』諸雜誌亦是を評論し、『早稻田文學』の彙報記者も亦是等の諸論を並べ掲げ、自家の標準を示さずして何の短評を下し、『眞理』記者も亦天才の必ず倫理に適應すべきことを切論せり。

所謂天才の何者なるかを論ぜむと欲せば、先づ是文字によりて代表せられたる概念の内容如何を確定せむことを要す。吾等の見る所を以てすれば、是天才てふ文字は常に極めて曖昧なる意義に於て用ひられ居るなり。天才の差別的原理は果して何處に存するや。天才とは各〻常識の彼岸に超絕し、連續律以外に獨立自依の存在を有する者か。前者は卽ち事實の問題にして後者は卽ち成立の問題なり。心理學の根據に立ちて、所謂天才の自然的說明を與へむと欲するものは、先づ事實若しくは現象としての天才に就いて預め考察する所あらむを要す。

二

人各〻自家に特有なる思想(Lebensideen)を有す。而かも一家の思想を以て能く世界の歷史を動かし、其の思索、行爲、藝術の製作に於て能く人生の疑問を解釋するもの、千萬人中僅に指を屈するに過ぎざるなり。今若し間世の人の言はむと欲して言ふ能はざる所のものを捉へ來つて、是に形態を付し、是に言語を與へ、是に色彩を加へ、「見よ、爾等の渴仰する所の理想を見よ」と叫ぶものあらば、吾人は彼れに於て自己の救主を認むべく、時代は彼れに於て自己の發言者を認むべし。彼れの言ふや、聲必ずしも高からず、彼れの動くや、步必ずしも濶からず、而かも發すれば以て一代の文化を動かすべく、延いては以て後世の典型たるを失はず。吾人は是の如きものを名けて天才と言ふ。

第一、天才は創作的なり。彼れは必ず何物か彼れの前に未だ曾て有らざりし所のものを世界に出だす。而して斯くして出でたるものは、中に永遠の眞理を含み、外に普遍の認容を博す。彼れの作る所のものは創作的なり、自我獨立の活動として出で來りたるものなり、故に純乎主觀的なり。而かも彼れが新に表彰したる主觀的世界觀は同時に全く客觀的なり。彼れは差別の中に平等を現じ、特殊の間に遍通を寓し、自己の中に世界を包容す。是を以て彼れの言ふ所は世界の聲なり、彼れの慾する所は萬人の情なり。是を以てフヰヂアスが手に成りたる雷神の前には、今希臘は最高の敬虔を捧げて其の頭を垂れ、ミケランジェロが作れる聖ペーテルの寺院は、今日何人をして覺えず肅然として歸敬せしむ。けにて勝手たる天才が人文の大勢に乘じて、不朽の生命を有するものは、必至遍通なる或物が其の性質の要諦を成すにあらずむば、Le genie commun c'est le génie de l'humanité!

三

時代の思想を表彰し、同胞の思想を現化す

ることは、未だ以て天才を爲すに足らず。天才は自己の胸によりて感じ、自己の口によりて歌はざるべからず。換言すれば、個體によりて通を表はし、具象によりて抽象を描き、自然によりて原理を說かざるべからず。

　哲學者フキヒテは抽象理想派の人なり、是を以て其の天才を說くや偏に重きを平等の一方に措く。其の說に曰く、美術家たる所以のものは、自己一身の中に常人が其の心に有する所のあらゆる感想を包括するにあり。彼れの感情昂揚するや、彼れの心は個人的差別の境遇を脫して、一般人性の中に沒却せられざるべからず、と（"Die Abhandlung über Geist und Buchstab in der Philosophie."）。詩人シルレルが是を駁したるの言は、頗る吾人の注意を惹くべき者あり。曰く、天才の貴むべきは、單に一時代、若しくは一社會の一般感情を表彰するが爲に非ずして、彼れの前人には未だ曾て知られざりしのみならず、彼れによりて社會は初めて知る所の新しき或物を世界に貢獻するに存するなり。是を以て天才の爲す所は、往々賞讚の代りに嘲罵を買ひ、桂樹の代りに棘冠を得ることあり。閣龍の未だ新大陸を發見せざりしに當つてや、時の人は彼れに於て單に一個の妄想狂者を見たるに過ぎざるべし、と。シルレル更に言を續ぎ、一個の詩人として實に嘆美すべき言を發して曰く、

　嗜好の陋劣なる、今日の獨逸の社會の如きもの少し。一個獨立の詩人として、吾が目的とする所は、社會の嗜好に同化するに非ずして、却て自己の精神を澆盡して社會を風化するにあり。時代の壓抑を忍耐し、社會の迫害に反抗し、以て吾が良心と理性の指導に從ふは吾が詩人たるの天職なり。

　盛なるかな、シルレルの志や。「ロイベル」以下の彼れの製作が、是の如き偉大なる精神の中に蘊釀せられたるものなることを思へば、吾等は天才の其の功を成す所以のものは、徒に文才、詞藻の末技に存せざることを思ふ。むかし、ケプレルが天體運行の調和を認めし時、彼れは以爲へらく、吾が運は天にあり、吾れは只吾が信ずる所を書かむのみ。現代の人果して吾れを解すべきや、否やは、吾が問ふ所にあらず、吾れは知己を後世に求むるものなり、と。偉なるかな、其の志や。スピノザが硝子を磨きて其の獨立を守りしも、實に是の志ありしが爲なり。陶靖節が五斗米の爲に其の膝を屈せざりしも、是の志ありしが爲なり。想へば Wess Brot ich ess', dess Lied ich sing' は決して天才の言ふべき所に非ざるなり。

　噫、吾等は吾が邦現代の詩人文學者の趨舍を觀じて天才のまた甚だ得易からざることを想ふ。

## 四

　天才は無邪氣ならざるべからず。彼れは法則を知らず、只元精を解す。黑白紛紛の間に處して彼れの精神は毫も其の累はす所とならず、自家特有の直感によりて、直に事物の眞相を覺知す。而かも其の感ずる所は往々萬世不磨の法規となり、永く後昆の鑑仰する所となる。シルレルが小兒の口より出でたる神の語、（Göttersprüche aus dem Munde eines Kindes）と云ひしは、洵に旨深き語なりと謂ふべし。

　然り、天才は規則を解せず、理法を知らず、然れども其の作る所のもの其物は規則たり、理法たるなり。所謂無爲にして爲すことあり、無法にして而して法あるもの則ち是れ。夫の世上凡庸の輩、定規を破り、規準を外にして、故らに怪奇不自然の事物を創作して得たりとするもの、虛僞輕薄是れより大なるは無し、ま

こゝや、規則は未だ曾て大なる人を造りたること無き也。而かも身自ら規則に非ずして日從に自由を唱へ無法を言ふものは、沐猴にして而して冠するものに非ずや。眼は自らを視ること能はず。天才は身自ら法則なり。如何ぞ自己以外に區々の規律を要せむや。

## 五

是故に世界は天才を通じて常に新しき法則を得。學者識者が冗漫なる論議によりて初めて打建つるを得し所の理法を、天才は其の製作によりて直に吾人の眼前に呈露す。是を以てイリヤスとオデイセウスは大なる敍事詩たると共に敍事詩の法則也。沙翁は大なる戲曲家たると共に戲曲の立法者也。プラクシテレースとラファエルは同時に彫像術と繪畫の教師なり。彼等は何れも哲學者の問題をとり、直に是を具體的事物の上に表現したるものにてありしなり。

是故に天才は典型の製造者なり。彼れの極めて自然に、極めて特殊なる表徴の中に表現したる所のもの、往々百世を通じて模倣の對象となることあり。ホメーロスのアヒレウスとオデイセウスに於ける、ラファエルの聖母に於ける、乃至ゲーテのファウストに於ける、皆是れ個體的種族と稱すべき者にあらずや。

## 六

カントは、天才の要する、必要にして十分なる條件を擧げて、之を數へたり。第一、創作、即ち既存の法則の何れにも適應せずして、其れ自身の新しき法則たること。第二、其の製作の典型たる資格あること。第三、其の製作は一個の自然として法則を與ふること。此くしたるは、吾等の同意する所なり。然れども、天才を以て感情を對象とする美術の範圍に限り、智力及び意志の發表に關して、全く之を拒否したるは、吾等敢て其の誤謬なるを斷言せむと欲する所也。吾等を以て是を見れば、古より大なる哲學者は多く大なる天才なりしなり。デモクリトスの元子論は二千年前已にダルトンの實驗說を預言し、ライブニッツのモナトロギーが近世の獨逸哲學、及び實驗科學の進歩の爲に、無答案の問題を呈出したるの觀あるが如き、何れか天才の直觀に非ざるべき。吾等の見る所を以てすれば、智力の天才を拒否せむとしたるカント自らは已に智力の大なる天才にてありけるなり。

## 七

天才の吾人に與へ得る所のものは、畢竟彼れの個性に外ならず。現在及び未來の世界が、彼れの製作の偉大なる感化に對して、しかく崇仰する所以のものも、詮じ來れば、彼れが一個の自我に歸すべき也。眇乎たる三寸の胸臆、是の限りなき生靈の間に立ちて、何を以て斯の如き盛大にして且永遠なる勢力を有するを得べしとするか。同胞の希望と感情とを代表すると云ふことは、未だ以て其の十分の說明となすに足らず。何となれば時代と方處に隨つて能く社會の嗜好に投合したるものは必ずしも其の名望を後世に持續する能はざればなり。

吾等を以て是を見れば、天才がしかく盛大にして且永遠なる名譽を有し得る所以のものは、大世界の道義的運行に對して若干の貢獻を作したるが爲なり。蓋し人間社會に於て滅びざるものは、獨り人道のみ。希臘は亡び、羅馬は跡なく、邦家の興亡掌を覆すが如きも、古今東西の歷史を貫通し、人道は毫も其の運行を誤らず。人生のあらゆる正義、あらゆる道德、あらゆる價値あるものは、恰も其の淡水に下るが如く、磁針の北極を指すが如く、其の意識の有無に關

せず、皆人道の進歩に對して多少の貢獻を作しつゝあるなり。天才は個人に顯はれたる人道の一面なり。彼れは二個の生命を有す、現世の生命は肉體に亡ぶるも、彼れは翻つて人道の中に無窮の存在を保有すべし。是を以て吾等は斷言せむと欲す、天才は必ず道義的なりと。Sittliche und dichterische Kraft in der Wurzel eins ist.（道義の力と詩人の力とは其の根本に於て一なり。）吾等は是に至つて詩人シルレルが詩的思想の高尚卓絶なるを思望するを禁ずる能はず。

（明治二十九年八月）

# 雜談

◎あらゆる學術は常に奴隷的のものである。問題は常に外より與へられる。彼れは是の與へられたる問題に對つて解釋を提供すれば、それで好いのである。

◎問題の提供者は時としては自然である、又時としては天才である。學術は常に是れ二者の何れかの奴隷である。

◎迷信は世人が騒ぐほど左程怖るべきもので無い。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道德説である。基督を十字架に上せたのも、ソクラテースに鴆毒を飲ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はショペンハウエル、ニイチェを苦めたのも、皆是の道德説の爲せる業だ。

◎昔は犧牲は少數の偉人に限られたが、今や多數の凡人が是れに代ることとなつた。彼等の口無きが故に世は平和に見ゆれども、實は死滅に近づきつゝあるのである。

◎迷信は力である。ダンバーの戰を人が出來事と言つたのに對し、『是れ人事に非ず神事也』と怒りたるクロムエルは、恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうか、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は[illegible]の信徒を叫んで一世を驚かしたが、今日の學者などの眼には是れ誇大な迷信者に無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

◎我輩は斯う思ふのである。迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりはどちらでも好いのである。唯必要なるは精神である、赤誠である、不惜身命の大勇猛心である。

◎今の人は祈ることを忘れた。是れこそは今の世の最も大いなる禍と謂ふべきであらう。人の大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小さきを悟るは其の一つである。己れの大いなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である。彼れは釋迦基督の教義にして、此れは奈破翁、ニイチェの信條である。人を脱して神となる、己れの小さきを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大いなるを信ずる所以である。

（明治三十五年十一月）

# 戯曲に於ける幽靈

身既に現世の生活を離脱して、魂は幽冥の境地を逍遙し、過去業因の繋がる所、一念尚兩界の間に彷徨し、怨恨伏する所、再び有盡の身軀に形して、是を報復せむことを計る。目是を視、手是に觸るゝ能はず、影消幻失、得て捉摸すべからず。是の如きもの世俗の所謂幽靈なるものに非ずや。

是の如き幽靈が小說戯曲の資料となれるもの、我邦にありて甚だ少からず。近年窮理の學漸く普及してより、其事亦漸く少きに到れりと雖も、尚未だ其跡を絶たず。近くは春の家主人の『桐一葉』に於ける關白秀次の如き、歌舞伎座に演ぜられし『四谷怪談』に於けるお岩、小平の如き、鶴屋南北の怨靈を材とせるものにして世に行はるゝもの、其他甚だ少からざるが如し。吾等は未だ世上の文學批評家が此事に關して何等の[illegible]ものあるを見ざるを以て、茲に少しく鄙見を陳へ、作者及び劇部關係者の一顧を煩はさむと欲す。

不可思議的事物の戯曲に於ける存在の意義、及び使用の規定に就ては、西洋にありてもアリストテレース以來多少の議論ありし所なり。然れども其說の歸する所は喜劇に於て『偶然』として顯はるゝ所のもの、悲劇にありては『不可思議』として表はると言ふに過ぎず。ア氏がアルゴスのミチスの例によりて說けりし所、亦是に外ならず。近代レッシングが其の『ドラマツルギー』に於て論ぜし所は、多少是と異なるものあり。然れども要は幽靈を思念し恐怖するの情は、人心の本然に固有する所なるを以て、適當なる事情の下に、是を戯曲に使用するは、敢て不倫なる事に非ずと云ふにあり。而して氏は斯の如き適當なる事情として、中夜、寂寞、單獨等を列擧するのみにして、是點より沙翁が『ハムレット』に於ける幽靈を是認し、ヴォルテールの戯曲に於ける如き白日群行の幽靈を、有るべからざるものとして批難せるは、寧ろ淺薄の見たるを免れず。

蓋し喜劇に於ける『偶然』と悲劇に於ける『不可思議』とを同視する說の誤れるは、斯の如き實際不可有的事物に向つて、客觀的實在を認むるの點にあり。レッシング一輩の說の缺點あるは、人心の必然の上に、客觀的に有り得べからざる事物に向つて主觀的成立を與ふるの一轉歩を缺きたるにあり。哲理上より幽靈を論ずるは、吾等の事にあらず。形體と活動とによりて人間及び人生を現じ、文字と演劇とによりて最大なる美術的具象の效果を收めむとするの戯曲にして、或適當の效果を以て幽靈の如き不可思議的現象を資藉するを得むが爲には、其の存在及び活動の原因を以て對者の主觀的表象に歸すべきを信ずるものなり。

戯曲は其の一般性質上詩歌の中にて尤も寫實に近きものなり。敍事詩や抒情詩や、古人の想像的觀念に依賴するもの甚だ多きを得べしと雖も、社會の人事を取りて是を舞臺上に演出せむとするの劇にありては、おのづから甚しく現實的事情に隔離することを容さざるものあり。是を以て不可思議的事物、幽靈の如きものを體現して、幽明二界の同存を表出せむが爲には、看客をして、預め事實上此の如き現象の有り得べき事を信ぜしめ得る迄に、其感情思想を影響せざるべからず。

然れども幽靈の客觀的實在を信ずるの時代

けし已に道を去れり。教育あり、分別ある人士は、もはや如何なる事情の下にも、暗夜に彷徨する盗賊の如き幽靈の存在を認めざるなり。事既に已に斯の如くにして、尚かも荒唐無稽なる幽靈を以て吾人に強ふるものあらば、是れ却て吾人の知識に向つて叛旗を擧げたるもの、彼れは吾人を滿足せしむるに先ちて、先づ幾十年の經驗教育によりて打立てられたる吾人の知性を征服せざるべからざるなり。

果して然らば幽靈が一の戯曲中に或位置を存し得るが爲に要する全條件は、其存在の全然主觀的なるにあり。主觀的存在の性質として、他のあらゆる戯曲的人物及び看衆は對者其人の言動によりての外は、何等斯の如き現象の存在を認識する能はざるが如きものならざるべからず。

是點より觀察する時は、『ハムレット』劇に於ける父王の靈、『マクベス』に於けるバンコーの靈、『佐倉義民傳』に於ける宗吾夫妻の靈、『四谷怪談』に於けるお岩小平の靈、『播州皿屋敷』に於けるお菊の靈等の如きは、所詮不適當なる戯曲的幽靈と謂はざるべからず。就中『四谷怪談』の如きは、毫も對者の心情に函數的變化あるなくして、獨り幽靈等が普通活人間の如く作動するが如きは、非常に幼稚なる幽靈術と謂ふべく、彼の變統、戸板返し等、固より小人を悦ばしむるの事情を列ねしのみにして、戯曲として、又美術として、何等著しき價値を有するに非ず。斯の如き劇が若松助一流の俳優により歌舞伎等の劇場に演ぜらるゝを以ても、我邦演劇的嗜好の尚甚だ幼稚なるを察すべきなり。

主觀的に成立する幽靈とは、畢竟良心の苦痛、思想の迷執等によりて醸せられたる妄想妄念の所生たる錯誤、若しくは幻覺に外ならず。而かも斯の如き錯誤、若しくは幻覺が、適當なる表情術によりて舞臺の上に演出せらるゝ時は、其の看衆に及ぼす所の同感的效果は啻に形體を具備せるお岩的幽靈に讓らざるのみならず、幽凄深刻の情趣更に大に之れに優るものなくんばあらず。且夫れ、是場合に於ては看衆の心を動かすものは、蒼面蓬頭の形骸にあらずして、主として更に斯の如きものを自家主觀の中に形成するに至りたる精神的狀態に存するを以て、其の情趣亦自ら高尚崇大なるものあるなり。

吾等は、一切の感情思想を表象する一種の技術によりて、舞臺上に成立する所の演劇が、從來何が故に特に均しく主觀的産物、精しくは錯誤若しくは幻覺たる幽靈を表象するにあたりて、しかく[illegible]なきを得ざりしや。[illegible]鬼の威力を怖るゝが爲に然りと謂はゞ、斯の如き迷信の已に過ぎ去れるの今日、何の必要ありて又斯の如き陳腐なる手段を用ゐるや。

是點に於て吾等は[illegible]、其の知覺中に認めたる[illegible]に、一に此女主人公が[illegible]を見て、衞の家主人の[illegible]忍ぶ能はず。是れハムレット公子が其の母后と會談の中に認めたるものと其の軌を一にするものなり。

以上は尋常一般の理論に據りて述べたるもののみ。若し夫れ特殊の事情、例へば、其の戯曲の性質にして大に現實世界の狀態と隔離し、吾人をして可驚的形體に於て幽明世界の倶在を認識せしむるの餘地を存するものに至りては、素より例外と謂ふべし。然れども斯の如きは悲劇の極めて理想的なるもの、若しくは樂劇、能樂等に於て初めて見るを得べく、通常の喜劇、悲喜劇、若しくは世話狂言に於ては、到底容すべからざるものなるを知らざるべからざる也。

（明治二十九年九月）

# 一葉女史の『たけくらべ』を讀みて

本郷臺を指ケ谷かけて下りける時、丸山新町と云へるを通りたることありしが、一葉女史がかゝる町の中に住まむとは、告ぐる人ありたりありて吾等辛やく首肯きぬ。やがて『濁り江』を讀み、『十三夜』を讀み、これかれなどを讀みもてゆく中に、先の『丸山新町』を思ひ出して、一葉女史をたゞ人ならず驚きぬ。是時『めざまし草』の鷗外となにがし等との間に、詩人と閨秀の爭ありしが、吾等は耶なれば傾けざりき。

一葉女史の非凡なることをわれ等の『たけくらべ』を讀みて ますます 確めぬ。丸山新町に住むことに於て非凡なることも、又小説家として其手腕の非凡なることも。

まことや『たけくらべ』の一篇はたしかに女史が傑作中の一なるべき也。

吾等が此篇を推す所以の一は、其女主人公の性格の善に美はしく描かれたるにあり。端なる人は憂き勝者、[illegible]身の上の當時、めきに來りし頃の事は[illegible]まかせ、美女にては素より、[illegible]にては[illegible]なき事に、あはれ無邪なる少女の生活を纖土にくらし過ごすことの何にとも心注かず、田舍より出でし初め、藁色絞りの半襟を袷にかけ着て歩るきしを、田舍もの田舍ものと笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし美登利。男の弱き肩持ちて、十四五人の喧嘩相手を、此處は私が遊び處、お前がたに指でもさゝしはせぬ、と物の見事にはねつけし美登利。額にむさきもの投げつけられしくやしさに、親でさへ額に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額に塗られては踏まれたも同じことと好きな學校まで不機嫌に休みし美登利。我は女、とても敵ひがたき弱味をば付目にして、と祭の夜の卑怯の處置を憤り、姉の全盛を笠に着て、表一町の意地惡に揺つき、大黒屋の美登利、紙一枚のお世話にも預らぬものを、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、と我儘の本性、侮られしが口惜しさに、石筆を折り、墨を捨て、書物も十露盤も要らぬものに、中よき友と埒も無く遊びし美登利。お侠の本性は濁り瀬に流に似て、心の底に得るもの無しと見えしはあだなれや。摂にも是の道丈は思の外の美登利。浮名を唄はるゝ筈にも無き人の、さりとては無情き仕打、會へば背き、言へば答へぬ意地惡は、女達と思はずは口を利くも要らぬ事と、少し癪にさはりて摺れ違うても物言はぬ中はホンの表面のいさゝ川、底の流は人知れず湧き立つまでの胸の思を、忘るゝとには無きふたり、三月、秋の夜雨の檐下にしをらしき人の後影見るとはなしに、何時までも何時までも見送りし心の中は、やがて朝倉提へてさき散さんずお侠の本性もあはれや。今は紅入の友禪に女とも遊はず、衣ひきかづきて一間に籠る吉原の振舞、生れ變りたらむ樣の美登利は有りし意地を其まゝ封じこめて、こゝしばらくの怪しの態を誰に何時言告ぐるでも無く、格子門の外にかゝる水仙の作り花は、龍華寺の信如がなにがしの學校に袖の色變へぬべき當日のしるしなりと、とはあはれ〳〵。たけくらべ、あへなく過ぎし昔の夢を思ひやるだにいと床し。

一葉女史いかなる妙手あれば、是個の情理をかくまでに穿たれしや。是平淡の事柄を綴りて、是當時の人心を動くせるは、たしかに女史が『十三夜』以上の作と云ふべし。正太も、

郎も、信如も、各自の性格に於て洵によく其一致を保てども、かへす〴〵も面白きは美登利なり。吾等つら〳〵是作を讀みしとき、人情の自らなる美はしき、人生の本末の果敢なさ、くさぐさの思ひに堪へざりき。見よや、女子の勢力、と言はぬばかりの信如知らぬ五丁町の遊びに、美登利の眼に女郎といふもの、さのみ賤しき勤めとも思はねば、姉の全盛を父母への孝養と羨やましく、お職を通す姉が身の憂いのつらいの數も知らねば、廓がことよろづ面白く聞きなさるゝ年はやう〳〵數への十四。習は性を移す世に、是末如何の運命に到るべき。玉の如く清き少女の初戀は、あはれや露の如く脆く消えて、恐ろしき淺ましき前途の蛇の口を開いて待ち居るとも知らで、あへなき夢を忍ぶらむ美登利の身の哀れさよ。生れにはなど變りなき人の種。十三四の女どちはげに無邪氣なる天人の群れとも見るべくも、年齡も、心長けては、濁り江の底なき水に交りて、木の雫の珠の影だにあらず。たけくらべ。あはれ床しく忍ばるゝ吾れ人の昔かな。一葉女史が是篇はやがて吾等が懺悔錄として見るべきに非ざるか。

是れ吾等が「たけくらべ」を讀みて感ずる所なり。敢て批評とは謂はじ。　（明治二十九年五月）

# 批評に就きて

批評眼の序に一言すべきは他に對する批評は時として自己に對する批評となること是なり。己より卑きもの、小さきものは時に自家一定の規矩によりて之を評隲し得べきも、自己より高大なるものに對しては其標準を作家自らの中に求むるを可とす。是場合には他に對する批評は即ち自己に對する批評となるなり、他の意義價値を發揚せむとして却て偶偶自己心容の廣狹と理想の高下とを示すに終る。自然に等しと謂はれし大沙翁が、批評家の獲物なるは是の爲なり。

一輪の薔薇、情を解せぬ傖夫も其色の紅ゐなるを美はしとせむ、垂髫の少女は採つてかざしの花とせむ、而かも蛺蝶一枚の春に離るるを思はず、徒ならぬ思に結ぼれて、春の恨を解くよしも無き妙齡の處女には、露も情けと見られぬべく、色も哀れを添ふるならむ。常無しと見し世をも流石に捨て難き世捨人には、盛者必衰の理を示さむ、草葉の裏に神の御影を仰ぐと言ひけむむづかしき學者は、纖維細胞の中に全能の大手を認むべく、宇宙の眞と美と善とを己が理想の中に索めて之を個有の中にうつし見る大詩人は、哀れ此花、汝を知るものは亦宇宙を知らむと歎美せむ。吹萬不同元是れ同一の眞、一輪の紅花千株の意料を妨げざるは、自然の萬物各小宇宙を現ずればなり。今若し小大萬殊に應待し、限なき變相に遇ひて毫も凝滯する所無き宇宙大の心容を以て是大自然界に對し、其惑を掩ひ其情を包むに纖微擬後の詩眼の衣を以てするの詩人あらば、之を解するの難きこと猶自然其物を解するの難きが如けむ。是れ即ち其詩人を批評せむよりは寧ろ自己を批評するなり。猶洪鐘の響は打つものの力によりて大小あるが如し。現時の文壇往々古來の大哲人大詩人に對して群盲摸象の奇觀を演ずるものあり、少しく顧みる所あるべき也。

（明治二十八年十二月）

# 我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務

去ぬる年の九月、吾れ故ありて帝城を離れしこのかた、文壇に負きしこと半歳餘、今や事志と違ひ、桑蔭の居久しきを得ず、茲に再び評論の筆を執りて讀者と相見ゆるの機を得たるは、吾が深く喜びとする所なり。

文藝批評のこと豈言ひ易からむや。吾れ常に以爲らく、人文の進歩は批評の必要を增し來る。社會萬般の變化につれて、思想感情亦漸く複雜となるに隨ひ、三世を通じて一軌の渝らざるを求め、時尙日に新に、褒貶月に革まるが中に、大勢推移の跡を究めて、世をして向背に惑はざらしむる所以のもの、是れ豈文藝批評家の務めにあらずや。世は人を造り、人は又世を造る。理を以て事を律するの偏よれるは、猶事によりて理を曲ぐるの正しからざるに均し。具に内外受發の趣を察して、一は以て作家を戒勸し、一は以て時尙を提撕し、もつて其の一大理想と立する所に向ひて不斷轉の精進を勵まむこと、是れ豈文藝批評家の務めにあらずや。今や世界のもろ〳〵の邦國は既に其の精神的城壘を撤して、人文渾融の途漸く拓けたり。人道の名の下に、科學、宗教、文學等の一切の文物は、方に其の世界的大同盟を組織するの機に迫りたり。同と異と素より相容れず、遍と殊と亦其の堂を同うするを望むべからずと雖も、彼此交通の結果、一國文化の上に表はれたるもの、偉大ならずと謂ふべからず。是時に當りて、人文相關の理を認めて洽く世界文化の大勢を達觀し、これに國民的見地に據りて一國の文藝を批判する、是れはた文藝批評家の務めにあらずや。文藝批評のこと豈それ言ひ易からむや。

吾れを以て之を見れば、文藝批評の必要は蓋し今日より大なるは無し。明治維新このかた、歲を經しこと既に三十、而かも大東帝國の文學は未だ其の國民的立脚地を占むるの勢に達せざるなり。極まれば變じ、屈すれば伸ぶ、局面常無く、行止定まらず。是れ一は素より外來勢力の頻繁多樣なるに依るべしと雖も、そも〳〵亦一國の特質、未だ萬殊の事物に對して撰擇同化の活力を得るに至らざればなり。數年以來、殊に王師西に動きて暴清膝を屈してより、國民的意識漸く其の中正の發達を爲しそめたりと雖も、文藝の世界には尙頑迷の徒少からず。國民性情の如何を顧みず、偏見私好にまかせて、他の宏用幽玄を稱ふるを事とするものあり。古を尙び、今を卑め、ひたすら模倣擬似を務めて、進歩の風潮を沮遏せむとするものあり。狹隘なる自家の閲歷を臚列して、以て寫實の旨を得たりと爲すものあり。世に離るゝを以て高しとするものあり。人を刺るを以て賢しとするものあり。幾多の識見無き小批評家は、幾多の識見なき小文學者と相提携して、徐々として盲動するもの、實に今日文壇の現狀に非ずや。素より高才達識の一世の師表と仰ぐべきもの無きに非ず。而かも尊大自重して輕々しく衆俗を以て事とせざるや、われ等其の出處に就いて恨無き能はず。あはれ、國民的立脚地に據りて、衆愚の紛々たるを打破し、公平なる比較的、はた含蓄的批判によりて、國民文學の旗幟を明かにする、是れ豈今日文藝批評家の最大本務に非ずや。

われの淺才薄識なる、豈是の如き任に當り得

べしと謂はむや。彼獨逸國民文學の根據の確立は、實にレッシングが文藝批評に負ふ所少からざるを思慕して、敢て當代批評家の三省を求めたるのみ。

さるにても、當代批評家の文藝社會に於ける位置、及び勢力の如何は、吾れをしてうたゝ浩嘆に堪へざらしむ。吾が觀る所にして甚しく謬らずんば、世は文藝進步の保姆たる批評家の、尊敬すべく、感謝すべきものなるを忘れて、却て彼等を輕蔑し、憎惡せむとするならずや。是れ一は、社會が批評の何物たるを辨知せず、亦其の職能の效果を認識するを欲せざるの致す所ならむと雖も、主として所謂批評家其の人の無能無識なるに由らずんばあらず。彼等の爲す所を見るに、其の限界の偏狹にして、識見の陋劣なる、其の歷史的、はた比較的知識に乏しき、精緻なる審美的知識、及び賞鑑力を缺ける、はた又、國民性情を蔑視せる、何れか今日の所謂批評家が通弊にあらずとする。己を持する斯の如くにして、尙他の己を待つの至らざるを咎む、其の癡寧ろ及び難からずや。

吾れを以て漫に他を刺るものとなす勿れ。見よ、今日の所謂批評家が事とする所は、小說に非ざれは新體詩なり。一作出で、一篇顯はる毎に、爭ひとりて自家評論の資に充つること、猶ほ餓虎の肉を爭ふが如し。ひろく人文進步の過程に鑑み、一國文藝の由來する所に至りては茫乎として知る所少し。吾れは思ふ、あらゆる學藝文物は素是れ一體なり。偏に小說詩歌の一面を見て、而して社會人心の推移を思はずんば、其の說くところ、爭でか其の依る所を審にするを得べき。其の依る所にして審ならずんば、來によりて往を察する批評家が戒勸の旨義はそれ何によりてか到達するを得べき。批評には回顧と共に希望を要し、解析と共に綜合を要し、說明と共に忠告を要す。是の如きは濶達なる文明史的觀察の下に於て初めて爲し得べきなり。新作出づるを待ちて徒に衆俗に和して、漫然贊否の私見を鬪はし、而して其の餘を知らさるが如き、寧ろ兒戯に類せずや。

精緻、且確實なる審美學の知識は、藝術批判の規準なり。蓋し美學なるものは素吾人が審美的意識を說明する系統的知識にして、三千年の歷史に於て人類の到達したる思想の最高產物の一なり。其の說くところ、所生國民の性質に從ひて、各々其の色彩を異にするものありと雖も、其の原理にいたりては素平等遍通の性質を有するものたり。藝術批判の規準とすべきもの、是を外にして何くにか求むべき。而かも美學は、之を演繹的に說明する時は純理哲學に根據を要し、之を歸納的に解釋する時は、實驗科學の硏鑽を必とす。若し夫れ其の發達變遷の跡に依傍して、當來の趨勢を明にせむと欲せば、是れはた純然たる人文の歷史に基かざる可からず。美學の事、甚だ言ひ易からざるなり。且つ、其の說く所、はた其の說く所に取るべき所は、平等なり、抽象なり。苟も藝術批判に應用して其の謬無からむを望まば、國民性情の特色に本ける歷史的硏究に依りて、審に差等圓融の理を考へざるべからず。あはれ、今の批評家と稱するもの、果して這般の覺悟を有するありや。彼等の美學を論ずるもの、多くは徒に諸種の術語學語を挾みて、幽邃精緻を衒ふもの、所謂鬼臉を被りて稚兒を威すものに非ずや。美とは何ぞや。是れ美學全體を包含する一大疑問なり。今の大膽なる批評家は一言決し去りて快刀亂麻を斷つの概あり。而かも彼等の中、自ら顧みて、自家美學の系統を擧げて、個中の數語より演繹し得べしと信ずるものあるか。斯の如き疑問に對して、愼重なる學者は常に斯の如き覺悟あらむを要す。今の批評家の多くは、自家素一定の所信なく、時に隨ひて、漫に先人の

所説を修飾し、若しくは恣に杜撰の臆説を捏造し、以て讀者の私心を立するの料に資するものにあらず。吾れは是の如き似而非美學を喋々するものよりは、むしろ常識なる常識に準由するの遙に安全にして且穩當なるを揣ぶ。

且それ、美學は哲學的思索力と、藝術的賞鑑力と、兩々相待ちて初めて其の十全の研究を期すべきもの。彼に長じて此に短なるものは、冷淡なる理論家として、鋼解鉄析の工を盡し得べきも、熱情ある讃美者として綜合渾化せる審美的意識を形成すること能はじ。學理は能く形式的に客觀的意識の成立に對する、主客内外の規定を得し、而かも審美的意識其物は直覺綜合の結果として鋭利繊敏なる賞鑑力を待つて、初めて其の實質を了することを得べし。是故に美學研究者は分析と共に綜合を能くし、思索と共に直觀を能くし、批評と共に嘆美を能くせざるべからず。而かも是の二つのものは其の性質上、一個人の心裡に於て兩立し難きを常とするもの、吾れは此に於て美學の事をすべきの難きを知り、今の所謂美學を口にするものの如き、識者よりして之を觀れば、實に無謀者の所爲と做すべきものなるを。

世界的知識の缺乏せ、我が文藝批評家をして公正なる比較研究に勝へざらしめたる、是れはた、爭ふべからざる事實なり。今や世界の思潮は我邦に集注せり。人文の歴史は今や世界を通じて一團となれり。吾人は須らく世界大の眼光を破して、我が國民文學の位置及び天職を覺悟するの機會に臨めり。比較研究は實に是の目的を達するの鍵鑰なり。

然れども漫に比較と言ふ勿れ。比較とは以て比較せらるべき所のものを預想することを忘るべからず。何にぞや、國民文學是れなり。國民文學とは何ぞや。國民性情に基ける文學即ち是れ。

吾れは我が批評家の國民性情を蔑視するを以て其の最大缺點の一なりと思惟す。吾れの信ずる所によれば各國民族は、各々其の完全なる發達によりて、當に到着すべき特殊なる理想を有す。所謂具體的一元的發達は、萬有の一體として國民の間に於ても、亦然かあるべきを信ず。是れはた歴史的研究上、爭ふべからざるの眞理なるに似たり。是故に吾れは想ふ、先づ國民の性情に確固なる根據を與へ、以て其の外來勢力に對する同化の活力を旺盛にし、更に其の性の近き所に適びて補育助長の效を收めれば、庶幾くは最も有功にして、且最も多望なる發達を見るを得む。是の如きは一國民が、世界人文の過程に貢獻する最大なる效果ならずんばあらず。是を以て文學批評家が第一の本務は、審に國民の性情を理解するにあり。比較と云ひ、取捨と云ひ、折衷と云ひ、調和と云ふもの、國民性情を外にすれば、全然無意義の文字ならむのみ。國民文學の完成を企圖するの批評家が立言の地は、須らく茲に存せざるべからず。

吾れは疑ふ、今日の文藝批評家の多くは果して是の覺悟を有するか。彼等がヷルミキを說き、ダンテ、ミルトン、ゲーテを說き、ブラウニング、ロセッチを說き、古代希臘を說き、中古羅馬を說き、讃美、讃嘆、口を盡して足らざるもの、果して是の覺悟を有するか。吾れは一私人の鑑賞する所に向つて容喙するの權利なし。唯文藝批評家として國民文學の進捗を事とするもの、當に是の如き覺悟無かるべからざるを想ふのみ。

上來述ぶる所は、素陳套殊に言ふに足らざるなり。吾れ今日我が批評家の爲に之を道ふ、世人或は吾れの迂を笑はむも、識者はむしろ吾れをして是の如き陳言を反復せしめたる所以を悲まむ。吾れ爆罵を好むものならむや。

當代文藝批評家の多くのもの、不[illegible]は備足

に盡きざるなり。夫の二三倫黨の消息を掛けて互に黨同阿附を事とするもの、褒貶の利器を把持するを恃みて、私己の思怨に報ゆるもの、他と論戰して屈服し、筆窮むや、當面又堂々の陣を張らず、陰に託するの機ある毎に冷笑暗罵を以て僅に慰むるもの、はた又誹毀讒謗を以て痛快とするの俗衒に投じて、鄙俚聞くに堪へざる言語を列ね、個々士君子の一嗤に資するに過ぎざるを覺らざるもの、是等は多く言ふに足らざるなり。若し夫れ、一人にして數雜誌、若しくは數新聞に筆を執り、甲雜誌の紙上に掲ぐる所は乙雜誌の紙上に於て之に贊同し、丙紙上に說くところにして他の駁擊に遇へば、則ち丁紙上に於て之を反駁し、以て他人期せずして之を辯護するの狀に擬し、嗚呼相呼應して輿論と稱し公議と唱ふるもの、其の實一人の筆に成るが如き、所謂『拚持記者』の徒に至りては吾れ實に言ふに忍びざるなり。是れ人を欺き、世を陷るゝ奸佞文壇の詐欺師、破廉恥、沒道義の小人、素より多く齒牙にかくるに足らずと雖も、是の如き鼠輩の尙ほ批評家の假面を被りて、文壇の一隅に存在するに至りては、吾れは寧ろ我が文藝の社會に於ける道德的制裁の薄弱緩漫なるに恨み無き能はず。

さはれ、吾れは是の如き群小『批評家』を以て毫も爲す無きなり。一國文藝の發達に於ける批評家の責任や、極めて重、極めて大。吾れ不敏なりと雖も、いさゝか自家の職責に顧みて多少の懷抱無からむや。吾れや才短く、時に疎しと雖も、分に應じて責を知るに於て多く人後に落ちざらむを期す。吾れの樸樕の器を挾みて私かに孤負するところ唯是れのみ。

吾れは又文藝批評の眞價未だ多く我社會に知られざるを恨とす。吾れは以爲らく、創作と批評とは兩々相並びて、初めて其の完美の域に達し得べしと。難ずるもの或は言はむ、ペリクレース時代の雅典、エリサベス王朝の英吉利には批評無かりきと。是れ時勢を知らざるの說、歷史は正に是輩の蒙を啓かむが爲に、其の誨を垂れつゝあるを見ずや。そもそも文藝は一代思想の高潮に駕するに非ざれば、能く民衆の希望を繫ぎ、感情を慰めて、其の久しきに耐ふること能はじ。是を以て人文漸く進みて思想亦漸く複雜となるにつれ、文藝も亦漸く其の面目を添ふる、是れ亦おのづからなる勢ならむ。古の詩人は、世を觀じ、勢を察すること、甚だ力むるを要せざりき。そは社會の組織單純にして、一代の思潮亦甚だ視易きものありければなり。今の作者は則ち然るべからざるなり。人生世態の錯雜糾紛を究めたる今や、幾千年の歷史的發達を一面の現實にたゝみて、蓄積湊合の跡容易に了知すべからず。古の詩人の幼稚なる直觀と、貧少なる閱歷に憑據して社會の眞相を描破せむと擬す、其の無謀寧ろ僭妄に堪へざらむや。まことや、詩人小說家の想を着くるや、素より綜合を尙び、直觀を旨とす。然れども猶ほ其等の精神に於て、有意識の狀態は、無意識の狀態を所依とするが如く、是の如き直觀綜合は其の根據を精緻確實なる客觀的觀察の中に有せざるべからず。然らざれば其の描くところ、はた其の唱ふる所、自家の私情に本くもの多くして、平等遍通の旨趣に於て缺くるところ少からざらむ。是故に今の作者は古の詩人と異なり。自家固有の熱情直觀にのみ依賴せず、深く人生の實相を了知せむが爲には、進みて批評的眼孔を以て、社會の事物を考察し、歷史的見地に立ちて當代思想の趨勢を思索せむことを要す。然らざれば一世の希望感情を發揮せむこと思ひもよらざるなり。

是時に當り、作者に向ひて最も聰明なる讀者を代表して、一代社會の精神を告白し、國民の性情に順ひて其の文藝の理想的圓滿に到達する

の前途を指示せむと務むるもの、是れ即ち文藝批評家なり。若し批評的觀察の作者に必要なること、已に述べたるが如しと雖も、天才と思辨と素兩立し難きふし多し。且や一氣の神來に觸れて直に情熱の靈筆を鼓するの瞬間は、多く冷靜なる心状を離れて、動もすれば夢幻の境に往往す。細心枯淡を旨とする批評的能力と、總て相容れざるものあり。文藝の批評家の本務は、是の缺陷を補充し、放縦なる作者をして、常に反省顧慮する所あらしむるにあり。

既に時代と作者との間に受發の關係の成立せるありとせむか、批評家は更に一歩をすゝめ、一世の好尚を率ゐて常に向ひて進むべき所の理想を指示せざるべからず。所謂一代思想の高潮とは是の如き理想の全體に外ならず。夫の天才なるものは、畢竟是の理想を捕捉し、表象するの技倆に於て、天稟の奇才を有するもの。若し夫れ是の如き理想を判定し、供給するは、主として文藝批評家の任務たり。

吾れは思ふ、上の如き覺悟を以て評論の筆を執らむと欲す。信念既に失して才氣之に伴はず、實際と希望と或は相違ふものあらむも期るべからずと雖も、そは猶ほ吾れの問ふべき所にあらざらむ。吾れもと文章に嫻はず、蕪言類辯は其の尤も拙しとするところ。是を以て先には罪を我が敬畏せる諸先輩に得て、深く自ら慚悔する所あり。今や爽々として其の過を再びするあらむを恐る。然りと雖も、理は遂に曲ぐべからず。天下の理にして一人の理に非ざればなり。理の存する所は、千萬人之を沮むも吾れ往かむ、理の存せざるところは、千萬人之を勸むるも吾れ往かじ。吾れは遂に夫の區々の私情に泥みて公明の爭を爲す能はさる膽大、豆の如き輩に伍すべき所以を知らざるなり。

いさゝか蕪言を陳べて發題の辭となす。

(明治三十年六月)

## 文學に對する根本的誤解

吾等は竊に疑ふ、人生に對する文學の位地は殆ど全く世人によりて誤解せられ居るに非ずや。

説を爲すものあり。文學は獨立せるものなりと。あゝ果して然るか。獨立とは社會の他の文物の爲に拘束せらるゝを要せずとの義か。然らば則ち吾等に示すに是の如き獨立せる文學の事例を以てせよ。古今東西何れのところにか獨立せる文學あるか。

文學は人生に幸福を供給する文物全體の一部なり。是故に社會國家に於ける人生須要の制約に隨つて文學亦一般文物の一致せる活動に伴はむことを要す。是の如くならざる文學は、人生となすなきの文學なり。人生活動の中心に向つて榮養補充の交互的作用を營まざる文學は之れ死贅文學のみ、病的文學のみ。

是故に文學は民族の資性、及び歷史によりて育成せられたる國民性情の上に其の根柢を有せざるべからず。夫の輕跳無識の輩、大體に通ぜずして獨斷の語を弄ぶ、むしろ憫むべからざらむや。嗚呼世間、死贅文學、病的文學の多き乎。

(明治三十年七月)

# ワルト・ホイットマンを論ず

偽りの世なるかな。皮一重この髑髏を包めども、尙ほさすがに人の形に露はる。されど梟の暗きに集ふが如く、形無きもの偽りの巣となりぬ。

人の言ふなる美はしき心とは、自ら欺ける心にあらずや、詩人の唱ふ美はしき歌とは、かかる偽りの心に阿る歌にあらずや。されば其の搔いならす琴には偽りの響あり。

今や肉を求むるに忙はしき靈は、却て肉を卑しきものと言ひなせり。暗きを求むる人は、却て光の眩ゆきに强ひて笑を含みぬ。饑ゑたるものは食を見て顏を背け、人は其の路に仆るゝを義しと稱ふ。

自由、平等、博愛、あはれ新文明の旗章のいかに美しきよ。されど自由とは自ら欺ける人の晝笑ひて夜泣くの謂なるか。平等とは生けるものを稱へ、死せるものを譏るの謂なるか。博愛とは雨の如くたゞしき自然の力を私し、却てその爲に困める者をしもべとして養ふの謂なるか。

誰れか人の知識を進みたりと謂ふ、進みたりと云ふはまさしく偽りの知識にあらずや。人は肉の外に靈ありと謂ふ、されどその靈は却て肉のしもべたるにあらずや。人は物の始めと終りとを說く、是れ彼等が所謂知識なるものなり。されど過ぎたると來るべきとを知りて、却て今のうつゝを知らざらむには、是れやがて粟を倉につみて却て饑に死するものにあらずや。彼等は形なきものの美を知れども、形あるものの更に美なるを思はず。自然の懷に育てられたる彼等は、今や將に其の母を忘れむとす。世を擧げて人は知識の爲に傷けられ、却てそを義の爲に仆れたる人の血潮に較べむとす。あはれ彼等如何なれば恨み悲み嘆きつゝも、尙ほかつかの知識なるものを貴ばむとはするぞ。

げに世を擧げて人は覆面の中に呼吸せり。あはれ、彼等如何なれば其の本來の面目を祕密として掩ひ隱さざる可らざるか、將た掩ひ隱さむと欲するか。彼等は怒るべき所に喜び、悲むべき所に笑ひ、苦むべき所に樂むをもて、自ら其の行ひの空しきを誇る、自然の要求を蔑視して人性の自由を拜ぶは果して謝へて貴むべき事なるか。血と肉とを包める人に對いて其の表皮を取り去る者は、則ち人道の名によりて詛せらる。されど所謂人の道とは有るものを無しと云ひ、黑きものを白しと云ふの謂なるか。さらば是れ偽りの道に非ずや。等しきものは等しきものの母なり、偽りの中に貴むべき人の道ありや。眞理は裸かにても眞理たるべし。さるにても覆面の中に呼吸する人は是の大自然の活ける眞理を如何に見るらむや。

げに大自然の眞理の如何に大いなるよ。憐れむべき人々の裝ひ、飾り、欺き、偽りつゝある間に、一切を押し包める大自然の眞理は、其の一分の步趨を枉げざるなり。生くべき所には生あり、死すべき所には死あり、水は流れ、山は峙ち、空は長へに碧し。春來れば花咲き、秋來れば霜降り、日は常に東西し、月は永く盈虧す。裝ひ、飾り、欺き、偽れる人、はたこの大なる眞理を如何にすべきぞ。愚かなる彼等はすべての物、人の如く詐り易からざるを知るに及び、是世を憂きものと思ひなしても、尙ほその偽りを捨てむとはせざるなり。

偽りの世なるかな、偽りの人なるかな。形に

拘りて其の物を斥け、名に泥みて其の實を棄て、末に走りて其の本を遺る。顧みて人に問へば、是れ即ち文明なりと。

ワルト・ホイットマンこそ是の僞りの世と、僞りの人と、是の似而非文明とに反抗して社會人生の眞面目を發揮したる北米現代の詩人なれ。

ワルト・ホイットマンは徹頭徹尾人生の詩人なり、實在せる人生の詩人なり、自然の要求を重じたる詩人なり、平民の詩人なり、凡ての形式主義に逆ひて人間の大なるを唱へたる詩人なり。凡ての人を包める覆面を褫ぎ取りて、其の祕密をば眞理として暴露したる詩人なり。終りに彼はげに一個の亞米利加人として其の國民性を最も明晣に、最も忠實に唱へたる詩人なり。――あゝ斯く言はゞ吾れホイットマンを褒め過ぎたるか。

實在せる人生は彼れが詩の命なり、彼れが詩の到る所に表はれたる勢力は一として其の根據を實在の中に有せざるは無し。されば實在の觀念に乏しき人にとりて、彼れの詩は餘りに强きに過ぐるなり。所謂詩的と稱せらるゝあだなる想像は彼れに於て爲す所無し。彼れの聲は生ける人の聲、彼れの心は活ける人の心、彼れの描き刻める人は繪畫にあらず、塑像にあらずして、活ける人體なり。されば書によりて世を觀じ、學校の窓より人生を眺めたる人は、彼れの詩を解するを得じ。彼れの訴ふる所は汗と血と涙と誠とを以て實在の人生を釋き得たる人にあり。

No shutter'd room or school can commune with me,

But roughs and little children better than they.

The young mechanic is closest to me, he knows me well,

The woodman that takes his axe and jug with him shall take me with him all day.

實在の人生は決して自然に離れ得べきものにあらず、是れホイットマンが人生に關して有せる根本の思想なり。げに文明とは自然の制御の謂なるべし、されど然るが故に自然を輕蔑し、其の要求を卑むべき理は何處にある。肉の外に靈なく、靈の外に肉無し。吾等が身體の健やかに、鮮やかに、美はしく、全からむことは、最も貴むべき自然の要求にはあらざるか。誰れか肉の樂しみを靈のそれよりは貴からずと謂ふか。世は食の旨きを求むるを卑しとなす、今や男女の愛情だに是を『詩的』にせざれば認めて美はしとせられず。所謂文明は將に凡ての肉慾を亡ぼし盡さずんば已まざらむとす。吾れ却て、『人道』の名によりて是の暴行を非認せむ。かくてホイットマンは唱うて曰く、

生を汚すは死を汚すと等しく惡しきに非ざるか。

肉體は精神の如く大切なるものに非ざるか。

若し肉體にして精神ならずとせば精神とは何物ぞや

（アダムの子等、全集八一頁）

吾れもし我が愛せるものと共にあらば吾が望み達せり、

彼等の間に歩みて其の體に觸れ、暫しは其の頸の廻りに輕く吾腕を纏ふ――斯くしたりとて何事かあらむ、

吾れは是の上に望むべき樂無し、其の時吾れはさながら海に泳げるが如し。……

凡ての物能く心を喜ばす、されど是の如く心を喜ばしむるもの無し。

（同、全集八三頁）

爾等は曾て女の肉體を愛せしことありや。

爾等は曾て男の肉體を愛せしことありや。

爾等見ずや、是の如きは、世界の凡ての國と時との凡ての人にありて正に均しきことを。

……（壯なる身體の各部の列擧し）……

オヽ吾れ敢て言はむ、是等は肉體の各部の詩なるのみならず、亦精神の各部の詩なりと、

オヽ吾れ又敢て言はむ、是等は精神なりと。

（同、全集八六—八頁）

是の如き肉體の讃美は、「アダムの子等」全篇を通じて到る所に表はる。吾等は牧童樵夫を以て特に人生を表示するに足るものなるかを疑ふと同じく、肉體の精神に比して特に貴むべきものなりやを知らず。されど今の時と世に於て是の野に叫べる人の聲を聞く。誰れか潔廉なるホイットマンをして是に至らしめたる夫の所謂文明なるものの缺陷を認めざるものぞ。

されどホイットマンは、吾等を以て見れば徒に肉慾の快樂を重じたる淺薄なる詩人に非ず。豫め人生世界に關りて良し朧げながらも、或る偉大なる信念を蓄へ、是の偉大なる信念を以て現世に臨みたることは、蓋し疑ふべからざるが如し。「アダムの子等」は人體を唱ひ、生殖を唱へたるのみならず、又一切物象に精靈あることを歌ひ、男も、女も、飲食も、呼吸も、是の精靈の圓滿なる發達に缺くべからざることを歌ひたり。

地球の天に懸れることの疑ふべからざる如く、地球上の凡ての物は精神的理想に向つて走る。

……………………

區々たる差別は何爲るものぞ、——男にまれ、女にまれ、力あり、愛あり、又清きものは、凡て是の宇宙の永遠不易なる秩序に於て常に人に益あり。

是の永遠不易なる宇宙の秩序に於て、勝敗榮枯生死の多く喜憂するに足らざるを述べて曰く、

爾等は壯きもの、老いたるものの如何になりゆくかを知れりや。

爾等は又女子小兒の如何になりゆくかを知れりや。

彼等は何處にか生存す、而して幸ひなり。

夫の小なる芽だも世に死なるものの無きを證す。……

凡ての物は前へ〳〵と進むべし、かくて何物も滅びず。

死とは人の思ひし如きものに非ず、更に遙に幸ひなるものなり。

（未來の詩人、全集三十四頁）

されどこの偉大なる哲學上の信念は、ホイットマンに於て輕きを爲せるものにあらず。僞りの世を罵詈せむが爲に歌ひたる彼が詩は、常に實在の人生を遺れざるなり。良し宇宙を觀じて"a similitude which interlocks all"となすも、良し人生を以て「永遠なる旅行」となすも、彼れの心は常に個人てふことを離れず。『大道の詩』一篇に到りて、是の思想は澎湃として湧くが如く湧き立ちぬ。曰く萬物は個人の爲に存す、曰く、精神、自然、政府、財產の訓への後には常に必ず個人の訓へあり。曰く、宇宙の凡ての學理は個人に集まる。

The whole theory of the Universe is directed to one single Individual,— namely, to You.

是に到りて北米合衆國民の個人主義は、其の赤條々の姿態を以て明に表はれたりと謂ふべし。其の思想の雄健壯大、實に一世を呑吐するの概あり。世の肉慾を獎勵したるを以てホイットマンを誣るものは、うはべに浮べる塵芥の汚れたるを見て、其の下に洸洋たる大洋の水あるを知らざるもののみ。

されど『アダムの子等』の或部分は、決して清浄なる詩と稱するを得ざるべし。『一婦人我れを待つ』、若しくは『狂喜の一時』の如きは、猥褻として當然批難せらるべきものならむ。左に掲ぐる數行の如きは、我邦にて英語を讀み得べき程の教育ある讀者にのみ示し得べきなり。

It is I, you woman, I make my way,
I do not hurt you any more than is necessary for you,
I pour the stuff to start sons and daughters fit for these States,
I press with slow rude muscle,
I brace myself effectually, I listen to no entreaties,
I dare not withdraw till I deposit what has so long accumulated with in me. ——

(p. 89. A woman waits for me.)

然るにホイットマン自らは、是の數行にして萬一省略せらるゝ如きことあらむには、寧ろ『アダムの子等』の一篇を擧げて是を抹殺すべしと慷慨せり。されど果して是れ氏が所謂 literary necessity として容認すべきものなりや否や。（全集四三六頁參考）

さはれ、氏の肉慾主義に就いて如何に批難あるにもせよ、吾等は氏をしてかゝる文字あらしめたる所以に就いては其の志を諒とせずんばあらず。ホイットマン其の詩集に跋して曰く、『十九世紀と北米合衆國と、是れ是の詩ある所以なり』と（全集四二一頁）。是の大なる公憤と感激との更に鋭く表はれたるものは、實に其の平民主義の鼓吹にあり。『今や民主政治は有力なる人々の爲に妨げられて又當初の氣力無く、一切を擧げて死せる平面とならむとす』。死せる平面なる哉、死せる平面なる哉。北米合衆國の民主政治は正に是の一語の中に盡されたり。今の世に二大壓制國あり、東半球の魯西亞と西半球の合衆國と是れなり。唯其の人民に臨むや、彼れは兵力を以てし、此は金力を以てす。專制と虐待とは則ち一のみ。彼れの叫ぶ自由の聲によりて得る所の者幾何ぞ、文字と音響は遂に事實とならざるなり。富は權制を産み、權制は貪慾を收む、殘る所の名や即ち自由と平等のみ。されど形式主義の弊や、倘ほ是の空名によりて正義を說く。されば四海同胞の旗幟の下に國を樹てたるものゝ子孫が、宗教の名によりて異人種迫害を行ひ、人道の名によりて帝國主義を實行しつゝある間に、彼等は倘ほ其の自由と平等とに謳歌するをやめず。是れホイットマンの唾棄するに忍びざる所なり。されば所謂富、所謂權力、所謂紳士は彼れが詩中に認められず、人は其の『人』たるの力と性とによりて初めて尙ばる。殊に物質的、方便的の文明に對しては最も痛切なる打擊を加へたり。曰く、

爾等が永續すべしと思ふ所のものは大なる都府か、
又は殷盛なる工業國か、又は完備せる憲法か、又は堅牢なる汽船か、又は花崗石と鐵とに建てられたるホテルか、又は工業上の大工事か、城壘か、戰艦か、
已めよ。是等は其物自らの爲に存在するものにあらず、其の用を終れば用無きものとなり、やがて來るものは破壞のみ。
大なる都府とは、大なる男又は女を有する所なり。
よしそれは三五の茅屋より成れりとするも倘ほ全世界の最大都府たるを失はず。
大なる都府は何處にありや、
奴隷なく又奴隷の主人なき處に、
平等が事實の上に於て證明せらるゝ處に、
最も忠直なる男女の住める町にある處に、
兩性の純潔なる所のある處に、

最も健全なる父の住める町のある處に、
最も體格善き母の住める町のある處に、
其處に大なる都府あり。

吾等是の詩を讀む時は、北米合衆國の文明が如何に深くホイットマンの胸裏に懸れりしかを想像するを禁ずる能はず。「十九世紀と合衆國と、而して此の詩集あり」と云ふ言の愈々旨味深きを覺ゆるなり。彼れは是の方便的文明と共に、形式主義を排斥して曰く、

Creeds and schools in abeyance,
Retiring back a while sufficed at what
they are, but never forgotten,
I harbor for good or bad, I permit to
speak at every hazard,
Nature without check with original
energy.
(p. 29. Songs of Myself.)

ホイットマンは又、今の學者と稱する輩の空理を談じ、空想に耽り、却て人生の目的を遺却するを笑ひ、且つ謂へらく、

營々として學に力む、是れ何爲るものぞ、學びたるものにも學ばさるものにも事實は事實なり。
吾れは求むる所なし。——吾れは只視、跡り、歌ひ、笑ふ。（吾身の歌、全集三十一頁）

冷嘲骨に徹す。更に人智の淺くして爭ふに足らざるを諷して曰く、「一個の小兒あり、草花を手にして吾れに問ふて曰ひけらく、草とは如何なるものぞと。あゝ吾れ如何なる答を是の小兒に爲し得しぞ、吾れの是を知らざるは猶ほ是の小兒の如きなり。」（同上）、又曰く、

吾れは人の始と終とに就て談ずるを聞けり、
されど吾れは始と終とに就て談ずる者に非ず。（同三十六頁）

蓋し彼れ、夫の生きながら死せる世の學者に憤る所ありたるなり。一切事物は人の爲に存す、人、物の爲に存するに非ず。人を幸ならしめむが爲の知識は、今や却て人を驅役し、勞死せしめずんば已まざらむとす。其の知に於て一日の長あるものは、宇宙の無盡藏を仰がず、却て他を瞰下して愚たりと呼ぶ。是の如くにして起りたる爭は、人生と何の爲す所ぞや。十九世紀の文明は自殺の文明なり、己の爲に墓穴を掘りつゝあるの文明なり。人は其の末に走りて歸るを忘れざれば已まず、世は僞りを養ひて自ら斃れざれば已まず。かつて健康の爲に砒石を食ひたるもの、今や其の量の多きに堪へずして而かも其の然る所以を覺らず。ホイットマンは正に是の世界の救濟者を以て自ら任じたるなり。

げに大なる詩人は常に其の時と其の國との醫師なり。彼れは吾等に生命を齎らせばなり、アーノルドが、詩は人生の批評なりと云へりけむも、恐らくは是の意味に於てならむ。ワルト・ホイットマンが詩は、即ち十九世紀の批評なり、殊に合衆國文明に對して最も大膽に且根本的なる打撃と忠告とを加へたるものなり。其の音直截にして簡明、簡明にして深遠、かの婉曲の詩趣に乏しと雖も、一氣直に人の肺腑を衝くところ、さながら預言者の聲を聞くが如し。

彼れの聲は琴の音にあらずして太鼓の響なり、感情の響にあらずして意志の聲なり、而かも最も健康に最も體力ある人の口より出づる意志の聲なり。彼れは一たびも泣かず、悲まず、恨まず、常に笑ひ、樂み、踊る。彼れは成すべき事業の多きを見て自ら恩む、過去を顧みて死兒の齡を數ふるに遑あらざるなり。彼れの訴ふる所は耳にあらず、目にあらず、人の肺肝なり。靈なるもの能く靈を知る、彼れが技工の詩唯是れのみ。ロングフェローの婉麗を好み、ロエルの雄渾を樂むもの、ホイットマンに遇うて茫然として爲す所を知らず、往々罵りて詩に非ず

と謂ふ。げに平仄と韻脚とを以て詩となすものゝ眼より見れば、是れ正しく詩に非ざるべし。然れども所謂詩なると詩に非ざるとは、幾何かホイットマンを輕重し得べしとするぞ。彼れにとりては最も明白に、最も有效に、其の預言者的思想を表はし得れば則ち足る。平仄と韻脚と彼れに於て何爲るものぞ。彼れは遊戲の爲に詩を弄ぶものにあらず、僞りの世と僞りの人とを直さむが爲に其の筆を執りたるなり。彼れは玩具を以て詩を遇するものゝ爲に書かず、人生の最も嚴粛なる問題に對して煩悶するものゝ爲に其の解釋の光明を拋ちたるものなり。彼れの眼には人生あるのみ。

來らむとする詩人よ、來らむとする演說家、歌謠者、音樂家よ。
今の時は吾れを知る能はず、又何の爲に吾れあるかを答ふる能はず。
されど爾、是迄知られたる者より更に廣く、更に健全に、更に大陸的なる者よ、起てよ、何となれば吾れを知るものは爾なればなり。
（來らむとする詩人、全集十八頁）

何ぞ其の自ら信ずることの厚くして自ら居ることの高きや。吾等はホイットマンの讃美を事とする者にあらず、されど敢て天下の讀者に告げむ。今は是れ彼れの知らるべき時にはあらざるか。何となれば、彼れの知らるゝ時はやがて僞りの世の終りを告ぐべき時なればなり。吾等豈詩歌を以て殊に言を僞さむや。

（附言）ワルト・ホイットマン（Walt Whitman）は北米の詩人にして數年前に死せり。其の詩集を「草葉」と云ひ千八百九十二年フヰラデルフヰアなるダビッド、マッケー出版社より出版せり。

（明治三十一年五月）

## 文明の裏面

ホイットマンの亞米利加に於ける、イブゼンの北歐羅巴に於ける、トルストイ伯の魯西亞に於ける、是れ皆其の國文明のカウンタバランス也。曰く『十九世紀と北米合衆國とあり、而して吾が詩の生まるゝ已むを得ざる也』。ホイットマンの詩は、實に北米合衆國の文明を裏面より描破したる者なり。彼れが肉體の美を歌ひ、酒食の樂を歌ひ男女の關係を赤條條に暴露して、「是れ十九世紀也」と叫びたるを見、吾人は北米合衆國の文明を聯想して、一種悲痛の感覺に打たれずんばあらざる也。帝王神權國の魯西亞に於て、トルストイは世界の公民なりと宣告せり、基督の訓を引いて兵役の義務を否定せり、一萬人のドウーコーボルチは、是の教訓の爲に往年信教自由の爲に英國を去りたる清教徒の如く流民として亞米利加に赴きぬ、而してトルストイ自らも亦國外に放逐せられむとす。呼魯西亞の文明を語るもの、トルストイの如く明らかなるはあらざる也。

借問す、今の我が邦は一のホイットマンを要せざる乎、國民は悅然として、イブゼン、トルストイの聲を聞かむことを望めるに非ざる乎。內村鑑三氏と齋藤緑雨氏と、吾人其の聲の更に大に、其の筆の更に長からむを祈る也。

（明治三十二年四月）

# 土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書

## 其一

晩翠兄足下、數年以來詞人京を去る者何ぞ夫れ多きや。是を我が同人の間に求むるも、雨江先づ出雲に向ひて桂月是れに次ぎ、醒雪先には仙臺に赴きて今は山口に轉じ、鯉洋筆を懷いて九州に隱れ、華水京都に卜居して書庫の宰となり、劍峰、嶺雲、共に海を渡りて南の方上海を指せり。嗚呼足下も亦京を去らざるべからざりし乎。今玆三月、吾が嘲風亦遙に獨逸に遊ばむとす、歸程預め期し難し。寧ろ意を決して共に西遊せむと欲するも、家に裘葛の遺無く、身に犇走の勞を絕たず、暫く是の紛々の間に佇立し、徒に惆悵して已む、亦奈何ともする無き也。加ふるに年少氣鋭、未だ幾微を解せず、數々人に誤られて世路の輪轍を加ふ、自ら思ひ、自ら省みて心竊かに平ならざるものあり。――嗚呼足下よ、願はくは予を恕せ。區々の私情を以て足下を累はす、罪是れより大なるは無し。而も足下東京を去るの一事は尙ほ予に於て一片の恨無き能はず。

嗚呼足下は何故に東京を去らざるべからざりし乎。必ずしも足下と予との爲に言はじ、予は是を以て文壇の誠實なる熟慮を要むるに足るべき一事項と爲す也。嗚呼足下は東京を去らざるべからざりし乎。足下は詩人也、世は足下を以て詩人と爲し、足下亦詩人を以て自ら居りし也。――願はくは無用の遁辭を省略し、予に許すに衷情を以てせよ。予は詩人を以て生死せむとする足下の本心を疑ふ能はざる也。然らば足下は何故に詩人として、永く留まること能はざりし乎。或は謂はむ、シルレルの生涯には醫者なりしことありき、キョルネルは鑛山學士なりき、ユーゴーは政治家には非ざりしかと。洵に然なり、人は必ずしも其本領に據りて生活するを要するに非ず、詩人なる足下が英語の教師たる、素より多く怪むを要せざらむ、唯予をして事實を語らしめよ。同人の間、文藝に士を以て任じたるもの尠しとせず、されど一旦職を他に求めて其の席少しく暖まるや、多くは寂焉として聞こゆる所無き也。先にゲーテを言へるもの、今はリードルを口にし、前に抒情詩を歌へるもの、後には文法を說く。恐らくは修養おのづから是の間に存すべく、文藝に雀躍せむとせし當年の意氣、亦大に人を驚かす時あらむ。唯心境必ずしも一たり難し、際遇の人を動かし、青年の氣魄しらず〱の間に消磨し去るは吾人の親しく見聞する所にあらずや。足下よ、予は是の點に於て殊に醒雪、桂月、芥舟、敍諸子の昨今に恨無き能はざる也。嗚呼詩人たり。文人たる、眞に天與の職分たり。一たび是の天職を自覺したるもの、爭でか溫飽を是れ意として甘ずべけむや。文藝の好尙を以て少壯の稚氣となさむか、即ち知らず、若し性を枉げ情を抑へて尙且つ口體の奉養を擇ぶものあらば、予は天下の最も哭すべきもの玆に存すと言はむ。予や詩人に非ず、又文人にも非ず、而かも尙ほ是の言を爲す、足下の近事に就いて心竊に平ならざる所あれば也。嗚呼詩人なる足下は遂に東京を去らざるべからざりし乎。

然れども足下よ、予の意を誤る勿れ。予安ぞ足下を以て麺麭の外に糧無しとするものならむや。足下の爲さむとする所、乞ふ自ら是れを爲せ、若し足下にして恨むべからずんば、予は更に足下をして是の陥遇あらしめたる夫の社會を恨みむ。予は如何に考ふるも、高等學校敎經高等官六等は、社會が吾等の詩人を待遇する道としては、餘りに不倫なりと思惟せざるを得ざる也。

## 其二

是の如きは暫く言ふを已めむ。足下よ、今の時に當りて社會の腐敗を助長する階級ほど富貴なるは無し。日に正義を唱へむ乎、是れ富貴を詛ふ也、官學に在はるゝに非ざれば學者は生活するに由無く、權家に阿るに非ざれば詞客は其の道を求むる能はず。鈍骨芝居の俳優が黑塗の馬車に乘る間に、詩人は其の詩によりて下宿料をすら拂ふ能はざる也。足下よ、是の如きは今の社會也。凡そ官吏が其の八時間勞働によりて衣食する如く、人力車夫が其の梶棒によりて妻子を養ふ如く、學者が其の思想によりて呼吸する如く、詩人は其の詩によりて生活すべきものに非ずや。詩によりて生活するは詩人の權利也。是の權利を妨害する者は社會たる乎、將た詩人自らなる乎、予は未だ是を審にせずと雖も、今の時に當りて詩人の迫害せられつゝあるは事實也。幾多の詩人は是の保護無き迫害の下に追放せられたり。吁足下よ、是の如くにして追放せられたる詩人の數は恐らくは予が今數へ得るよりは遙に多からむ。予は寧ろ文藝社會に充滿せる是の蕭殺の風氣を望みて自ら屏息し、陽春の佳節に遇はずして早く萎縮し了りたる幾多無名の沙翁、ゲーテを憐むの情に勝へざる也。足下よ、想うて是に到れば吾等が足下の詩に接するは寧ろ望外の幸と謂ふべく、詩人たる足下の進退に就いて秋毫も異を挾むべきに非ざる也。

然れども予は世の文藝の士、殊に詩人、美術家に對ひて切に反省を要むべきものあり。諸君は藝術家として素より相場師の利益を獲むと欲するものに非ざるべし。諸君は古の藝術家の傳記を讀みて現世の福祉多くは彼等の上にあらざりしを見しならむ、大なる詩人、大なる美術家の迫害に遭ひ、追放に死したるもの古來幾何ぞや。或は名聞世に高くして一身の衣食に苦めるあり、甚しきは身匹夫と共に賤役を事とし、或は道に餓死したるものすらある也。吁諸君よ、徒に彼等の事蹟を以て好談柄に留むる勿れ。彼等は何故に迫害に斃れ、追放に死し、貧苦に苦み、路上に餓死するまでも其の藝術を捨つる能はざりしや。現世のあらゆる苦痛を以てして、尚ほ其の一分の歩趨を枉ぐる能はざりし彼等が藝術上の安心の如何に悠遠且深大なりしかは、吾人の審に熟慮すべきところに非ずや。眞に藝術の靈火に燒かれたるもの、例へばミケランヂェロの如き、ダンテの如き、キョルネルの如き、ハイネの如き、北齋の如きものにありては、藝術は其の眞理なり、道德なり、宗教なり。彼れにして是を得ば是れ凡てを得る也。彼れにして是を失はゞ是れ凡てを失ふ也。貧苦寒飢何かあらむ、迫害追放何かあらむ、死も亦彼れを奈何ともする無き也。吾等必ずしも凡ての詩人美術家を以て是の如き事例に擬せざるべし。時移り人異り、古の道復求むべからざるもの多し。唯當に藝術に從ふの士、若しくは眞に藝術の中に自己の安心を有ち得む人、願はくは是の心を以て心とせよ。文人生活に關する議論は既に古りたるが如し、然れども予は是の點に關して切に詩人、美術家の熟慮を求めざるべからず。而して是の點より更に足下の進退に就いて恨無き能はざる也。――嗚呼殊に足下に向つて

是の事を言ふ。予が徴衷は、足下先づ諒とせざるべからず。

## 其三

曉翠兒足下、文藝趣味の衰へたるは夙に心あるものの慨嘆する所也、まことに藝術の愛無くして偏に義理に泥み、或は製作の事に從ふもの、靡然として風を成し、一代の好尚漸く救ふべからざらむとす、足下よ、是を奈何かすべき。予は先に北齋の事を一言せり、予は實に今の藝苑をして少しく北齋に私淑する所あらしめむことを希ふ也。北齋は一代の妙手也。勝川に學び、狩野に入り、土佐に參し、光琳、文晁、江漢を酌んで一團と爲し、浮世繪の歷史に一生面を拓く、功や偉なりと謂ふべし。而して九十年の生涯を通じて赤貧洗ふが如く、殆ど活きる能はざるもの數々、而かも名聞を願はず、錢利を求めず、死に抵るまで吸々乎として畫を事とするのみ。其の技大に售れ、其の名漸く高くして藝術の精進一日も休まず、死に臨んで曰く、天我れに十年の命を假さば纔に畫家の數に入るを得むかと。終身刻苦、名一世に遍くして尙ほ自ら足らずとするもの、眞に藝術を愛するの士に非ずや。足下よ、予は想ふ、若し今の時、北齋の如きもの兩三人あらば、藝苑の風色頓に革まらむ、予は今の世に大家の多きに堪へざる也。夫の少しく賦彩に巧みに、寫實に優れたるもの、相率ゐて自ら大家と稱し、高く自ら標榜して俗目を驚かすもの、比々として是れなり。其の技漸く進みて、所謂老大家の群にあるものと雖も、一たび名を成せば忽ち自ら飽滿し、猥りに流派を樹て、或は恣に規矩を破りて放縦散漫の戯畫を弄し、高潔洒脱と稱して人を欺く。或は甚しきに到りては、己れの門下生をして代つて畫かしめ、自ら署號して己れの作と稱するものあり。足下よ、是の如きは今の繪畫界に於て現に見る所の事實也、彼等をして畫かしむるものは、藝術の愛に非ずして名利の慾なり。素より二三子の現境以外に超然として、其の好むところに從ふもの無きに非ずと雖も、彼等の多くは口體衣服の奉を盛にし、翩々として儕輩の間に誇揚するを以て、畢竟の樂みとなすもののみ。老大家北齋が、年耳順を超え、尙ほ半風子を捫りて技巧の修練に餘念無きが如きは、今の世に絶えて其の例を見る能はざる所也。足下よ、是の如きは獨り美術界のみに非ず、文學界に於ても毫も異なる無し。予は一代文藝の風格、今日あるを致す、一日の因由に非ざるを見る也。

## 其四

足下よ、予が今の社會に於て大不平に堪へざる事の一は、詩人若しくは小説家の性格を賤ふもの多き事也、予を以て見れば文藝の振はざる一原因は實に茲に在り。希くは予をして是の大不平を述べしめよ。

足下既に知悉せるならむ。小倉師團軍醫部長醫學博士森林太郎氏は新年初刊の福岡日日新聞に一長論文を寄せ、題して「鷗外漁史とは何ぞや」と云ふ、一篇の文字、總て氏が胸中の不平を吐露したるもの也。而して其の不平の重なるものは、氏が文壇に關與せるが爲に被れる一身上の損害を訴ふる所にあり。其の略に曰く、吾れ嘗て二三の小説を作れるが爲に誤りて小説家の名稱を得たり、是れ吾にとりて是の上も無き有難迷惑なりき、爾來予の同僚は皆曰く、森は小説家なり、共に醫を談ずるに足らずと、予の上官亦曰く、森は小説家なり、重事を託すべからずと。是の如くにして吾が官吏としての榮達は非常の妨害を被れり。是れ吾が文壇を退ける重なる理由也」と。予は是の文を讀んで森氏の述懷に痛切なる同情を表するを忍び得ざる也。

足下よ、若し森氏と惡き者ありて是の文を評せむ乎、恐らくは氏を以て現世の名利を是れ求むる俗小人となさむ。然れども是の如きは全く氏の衷情を知らざる者ならむのみ。想ふに、氏は文藝の事業を以て人としての性格を傷くる者なりとする今の社會に憤激したるに非ざる乎。或は今の時、是の如き謬見をして正當の理由を得せしめたる文藝社會其物に憤激したるに非ざる乎。果して然らば來るべき區々たる批評家の批議を顧みず、是の憤激を眞面目に發表したる森氏の衷情は予の切に諒とする所也。足下よ、文藝社會の大憂患は實に是の點に存する也。

予は森氏の篤學の士にして又篤行の士なるを聞けり。予は氏が論評の方法及び文體に依つて是の風聞の空しからざるべきを信ぜり。然るに氏自らの語る所によれば、嘗て小說家の號を被りてより、上司僚輩又氏を信ぜざるに至れりと。氏にして小說家たる乎、氏が醫學上の意見は何故に信ずるに足らざる乎、何故に氏に託するに重大の事務を以てする能はざる乎。想うて玆に到れば、今の社會が小說家を待つ所以のもの、思半に過ぎむ。嗚呼小說家は學術上の精確なる研究に堪へ得ざる輕薄なるものゝ人物、安じて實務を託し難き不實放埒なる人物と思惟せられつゝある也。是れ森氏の場合のみならず、實に一般社會が了解せる小說家の概念なり。足下よ、予の如き者すらも、十年前一歷史小說を綴りたる事あるの故を以て、時に風流韻事を解するものと迷惑にも誤解せらるゝことある也。想ふに是の如き誤解の爲に其の事業の上に重大なる損害を被りたるもの、若しくは是の如き損害を避けむが爲に其の本志に反して文藝界を去りたる者、當今第一流の大家と稱せらるゝ人士の中にも存することは、予の現に認むる所也。足下よ、小說家なるものが是の如く了解せらるゝ間は、斯道の振興は難事に非ざる乎。是れ予が是の事を以て文藝社會の一大憂患とする所以也。

## 其五

足下よ、足下の詩人たるが故に予の言を怪ぐる事無かるべし。是の如き誤解は獨り小說家にのみ存するに非ず、實に詩人俳句家等、文藝に關する殆ど凡ての事業に附帶せるを見る也。足下の如き誤解の二三の事例を擧ぐるは必ずしも禮を缺けるものに非ざるべし。――予の知れる一大學教授は、新體詩人なるの故を以て鹽井雨江の國文上の知識を危みたることあり。中江藤樹に私淑せる在野の一教育家は同一の理由を以て、大町桂月の教育家たる資格を疑ひしことあり。大野豐太氏の如きは、醫科大學學生として頗る熱心なる勉强者なるにも係らず、筑波會の一領袖酒竹宗匠たるの故を以て、氏を知らざる人の中には氏が醫學上の修養に信賴せざるものあり。――足下よ、是の如き誤解は恐らくは詩人たる足下の上にも存するならむ。俳家たり、新體詩人たることは何故に學者、教育者、實務家としての性格に累する乎。予は御歌所の長官たるの故を以て何人も高崎正風氏の人格を難ぜしことあるを聞かず。新體詩と俳句との作者は何故に短歌の作者と斯く待遇を異にする乎。酒竹の如きは、森氏の述懐を讀みて今より以後俳句を放棄せむとまで公言せり、予は森氏の述懐と共に切に酒竹の憤激を諒とせむ。是の如きは實に社會の文藝に對する無形なる、而かも最も有力なる迫害に非ずや。

是の如き迫害は獨り小說家、詩人、俳句家の上にのみならず、文學上の著作、もしくは新聞雜誌に關係する凡ての事業の上に被らせらるる也。設令ば定期刊行の雜誌類上に文學上の評論を草するものあれば、彼れの思想如何は

輙ち曰く、彼れは雜誌記者なり、其の學信ずるに足らず、其の說一時の臆見のみと。是等の人の雜誌記者なるものを見るや、例へば二六時中營々として編輯事業に從事し、讀書研究の餘裕無く、見聞するところは市井の雜書瑣事に止まり、絕えて眞摯なる學術上の研鑽に勝へずと爲すものの如し。彼れの論議する所は、其の雜誌記者たるの故を以て初めより是等の人々の一顧をだも値打せずとせらる。隨つて彼れの意見の意義と價値とは是等の所謂專門學者社會の批評を受くるに由無き也、是の如くにして彼れは『一俗學者』、『一雜誌記者』として輕蔑せられ、彼れの苦心は永く學術社會の認むる所とならずして已むべき也。嗚呼足下よ、『雜誌記者』の境遇も亦憐むべからずや。彼れも亦小說家、詩人、俳句家と共に其の憤懣を懷きつゝ、社會の陰深なる迫害の下に生活するもの也。

嗚呼足下よ、社會の事是の如くにして文藝の振興、發達、能く望み得べしとする乎。

## 其六

小說家、詩人、俳句家、評論家たる事實が、其の人に累する是の如きは其の原因果して何處に在る乎。予は是の原因に關して彼等と社會と其の責を分つべきものなるを信ずる也。從來に於ける小說家もしくは俳句家等の多數が、不幸にして學者又は實務家たるに適當せざる人物なりし事は掩ふべからざる事實也。社會が是の如き事實の上に小說家又は俳句家の概念を構成したるは強ちに理由無きに非ず。從來の小說家又は俳句家は是の點に於て其の責任を免るべからず。而かも小說家と云ひ又は俳句家と云へば、凡て是の如き非學者的、非實務家的の性格を有すべしと速斷し、爲に卓拔なる作家詩人の脫走を誘致せしは、其の責慥に社會にあり。予は是の點に於て特に社會の沒分曉的制裁を憤慨せざるを得ず。

足下よ、伊藤侯爵は其の色を好むの故を以て政治家たるの技術を危まれしことあらざる也、何故に小說家たることが獨り實務家たるに累する乎。大隈伯は其の園藝に熱心なるの故を以て、其の政黨首領としての技術を疑はれしことあらざる也、俳句家たることは何故に獨り學者たるに累ある乎。天下解すべからざるものありとせば、是の如きは其の一也。

予常に想へらく、本邦人の人を見るや、餘りに專門的なり、是を英語にて言ひ表はせば、餘りにクレリカルなり。所謂クレリカルとは、凡そ人は一業一門の外には信賴すべからずとなすの傾向、是れ也。而して是の傾向は學術上の事業に關して最も甚しきを見る。學者にして少しく政治の運動に關係すれば、彼れは最早や學問上のオーソリテイたるに適せざるが如く思惟せらる。例へば、外山博士の如きは嘗て文部大臣たり、今又教育家たるの故を以て、世人の多くは博士の口より社會學の學說を聞かむことを望まざる也。菊池博士の如きも、永く教授に關せず、又久しく行政官たるの故に、博士が專門なる數學の宗師として多くの尊敬を得る能はざるが如し。北里博士の如きも、世人往々評して曰く、彼れは醫者中の政治家なり、故に醫師として多く信憑する能はずと。是の種の批評は、專門社會にとりては毫も價値無き者ならむも、而かも一般社會の所信として、實々の中に偉大なる勢力を有する也。足下よ、予は是の如き批判法を以て人物の眞價を埋沒するものとなす。若し一人の精力は數事に秀づるを許さざるが故なりと謂はゞ、數人の嬖妾を有する伊東巳代治氏の如きは、何故に是の點に於て政治家たるを妨げざる乎。北里博士は嘗て數千金を擲つてトンコと稱する一藝妓を落籍したることあり、博士は何故に是の點に於て醫者としての信

用を落さざる乎。足下よ、予の言の不倫を笑ふ勿れ、人間の精力を消耗する、何物か溺愛に及ばむや。

　足下よ、政治家なるが爲に學者たるに適せずとするは、猶ほ小説家たるが爲に事務家たるに適せずと謂ふが如き也。我が邦人の人を見る何ぞ夫れ狹隘なるや。病理學者ヰルヒョウ氏は現今獨逸醫學界の泰斗にして、我邦に三浦守治氏の如き弟子を有する大學者也。氏の刊行する所の「ヰルヒョウ寶函」は全世界の信憑する所也、而して氏は、一面に於て政界の首領也。然れども予は是の(日本人にとりては)奇異なる掛持の爲に氏が學者としての聲價に累を及ぼせしことを聞かざる也。佛のセナール氏は足下の知る如く、有名なる東洋學者也、其の梵語學の造詣は歐洲學術界希に見る所なりと云ふ。而して氏は他面に於て銀行家也、而かも予は氏が梵語學者としての面目に何等の障害ありしことを聞かざる也。英のラボック氏は科學者としては殆どチンダル、ハックスレー諸氏と同平面に立ち、現に萬國動物學會の會頭たり。而して氏は國會議員としても、銀行家としても、又出版者としても、名聲當代に籍々たり。足下よ、是の如きは歐米諸國に於て極めて多く遭遇する事例也。我が邦人をして之を見せしめば、果して何とか言はむ。

　足下よ、是の如き狹隘なる人物批判法は人才を窒息せしめ、凡ての人をして凡人化せしむる所以にあらずや。一般俗人の見解としては猶ほ恕すべき所あるも、而かも社會の上層に位する學者專門家にも亦是の俗見を有するもの多きに到りては、眞に浩歎の外無き也。

## 其七

　晩翠兄足下、願はくは予の狂愚を許せ。文壇の近事に關して、予に猶ほ語るべき幾多の不平あり。唯恐る、足下に訴むる所の多きに過ぎむことを。京地近來寒甚しく、飛雪窓を撲つこと連りなり。遙に廣瀨河畔の春色を想へば神思搖蕩して肌骨俄に胖たるを覺ゆ。吁、高吾亮節、足下に非ずんば誰か是を能くせむや。詩人たる足下よ、乞ふ自愛せよ。頓首再拜。

(明治三十三年二月)

## 世豈所謂儒服なるものあらむや

　昔者孔丘、常に章甫の冠を戴き、縫掖の衣を着く。魯公見て其の儒服なるやを問ふ。答へて曰く、丘少にして魯に居り、長じて宋に游ぶ、故に其國の俗に隨ふのみ。世豈所謂儒服なるものあるべけむやと。以て今の學者を警しむべし。世豈所謂學者なるものあるべけむや。

(明治三十一年三月)

## 國學家と古物屋

　國民精神の發揮を以て今の國學家に望むは謬れる哉。是れ猶ほ古物屋に向つて考古學の編述を望むが如けむ。

(明治三十一年一月)

# 文明批評家としての文學者

（本邦文壇の側面評）

一

予、人のニーチェを語るを聞く每に其の書に接するの暇無きを恨みしや久し。頃來閑に乘じて彼れが二三の著書を讀み、其の要領を會するを得しが、初めは其の說の太だ意表に出づる者あるに驚きぬ。抑々歷史を尙ぶ進化論と平等を旨とする社會主義とが殆ど思想界の上下に貫盈せる今の時に當りて、奇矯大膽、時には殆ど突梯不稽とも見らるべき彼れが如き說の如何なれば科學、哲學の中心たる獨逸には興りたる。今や『フリードリヒ・ニーチェ』の名は獨逸青年の間に魔語の如く響き渡り、『フラウ・ゾルゲ』の五十一版を出だせるズーデルマンを初めとして、文學者中にも彼れが影響を被れるもの尠からずと傳へらる。科學を蔑如し、歷史を無視し、漫に不稽の空想を臚列して幽玄神祕を衒ひたるらしき彼れが如き說の、如何なれば斯くは一世の人心を鼓動し得たりとするや。予は其の當に然るべき所以を想ひて、つらつらニーチェの名の空しからざるを悟りぬ。蓋し彼れは哲學者と謂はむよりは寧ろ大いなる詩人也。而して詩人として大いなる所以は、實に彼れが大いなる文明批評家 Kulturkritiker たる所に存す。

ニーチェは殆どあらゆる方面に於て十九世紀の文明に反抗せり。哲學界に於てはヘーゲル以來、科學界に於てはダルヰン以來、一代の思想を殆ど殘り無く風靡し來りたる歷史發達說も、彼れの眼中には僞學者の俗論に過ぎざるものとなれり。以爲らく、十九世紀末の吾人は歷史の多きに勝へざる也。主觀を沒し人格を虐げ、先天の本能を無視するものは歷史也。個人自由の發達を妨け、凡ての人類を平凡化し、あらゆる天才を呪詛するものは歷史也。――彼れは是の如き論據より多くの學者を嘲りて僞學者と呼び、「凡ての活力あるものの障礙、凡ての疑惑に沈むものの迷信、凡ての弱者に對する道德家、凡て[illegible]に向つて[illegible]、凡ての清新なる生命を害ふ[illegible]人の前途を沮喪する毒液は即ち是等の歷史的學者なり」と罵り、[illegible]信仰に寄する博士シュトラウスの如きは是の如き僞學者の好標本として標榜せられたりき。是の如く人格の獨立の爲に歷史發達論を否定したるニーチェは、更に一步を進めて民主々義と社會主義とを、[illegible]の下に破碎し、揚言して曰く、人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却て少數なる模範的人物の產出に在り。是の如き模範的人物は即ち天才也、超人也、即ち是れ無數の衆庶が育成したる文明の王冠とも見るべきもの也。之を若し衆庶にして自ら自己の爲に生存すと思はゞ是れ大いなる誤り也、彼等は唯是の如き人才、超人の發生を助成する限りに於て其の生存の意義を有するのみと。――彼れは、是の人道の理想を認めず、却て是に背馳せる方針に出づるの故を以て今の社會、國家、學術の凡てを非認し、嚴にルソー、ゲーテ、ショーペンハウエル、ワグネル等の人物を擧げて眞正なる文明の指針是に在りとなし、所謂超人は學者に非ず、識者にも非ず、又歷史的に發達し來れる如何なる人にも非ず、實に是れ一個の藝術家、創作家なりと斷

じぬ。彼れの説は是に到りて現時の民主平等主義を根本的に否定し、極端にして、而かも最も純粹なる個人主義の本色を發揮し來れたるを見る。さはれ、歴史無く、眞理無く、社會無く、國家無く、唯個人各自の我あるを認むるもの、十九世紀末の思想に對して何等の對比ぞや。遠くはロマンチシズムの運動も、近くはヘンリー・マッケーの無政府主義も、ニーチェが是の個人主義の極端なるに較ぶれば、尚ほ遙に緩漫なるを覺ゆ。而して吾人の最も注意すべきは、是の如き思想が[illegible]現代の人心を震撼したることの驚嘆すべき偉大なる一事實に在り。

是に於てか吾人は文明批評家としてのニーチェが偉大なる人格を賞讃するを禁ずる能はず。彼れは個人の爲に歴史と戰へり、眞理と戰へり、境遇、遺傳、傳説、習慣、統計の中に一瑣の生命を埋沒し去らむとする今の所謂科學的思想と戰へり。徒に外面皮相の觀察を事として精神的生活の幽微を解せざる今の心理學と、認識論の如き一部煩瑣の研究に從ひて、本能と動機と感情と意志とを遺却し去りたる今の哲學とは、彼れの所謂僞學として排斥する所也。彼れは青年の友としてあらゆる理想の敵と戰へり。彼れは今のあらゆる學術の爲に、得るよりも更に大いなる實在の宇宙に充滿せるを認めたり。同時に是の實在を認識し、其の秘密に到達せむには、今の所謂學術道徳の甚だ力無きを認めたり。彼れは其の豫言者の眼によりて其の方法の何者なるかを知れり。彼れが當代の文明に反抗して其の個性奇偉なる個人主義を唱ふるに至りしも、亦實に已むを得ざりしならむ乎。人は言ふ、彼れの哲學は晦澁にして解すべからずと。蓋し彼れは素哲學者に非ずして詩人也、而して彼れの歌へるものは山に非ず、河に非ず、恐らくは彼自らも解する能はざりし天地人生の幽微也。詩妙に通徹せざるもの豈に其自然の勢のみ。同感なるもののみ能く靈を動かす。たゞ十九世紀の重荷を自覺し初めたる當代青年の中に無數の味方を贏ち得しもの、亦決して偶然に非ざるを見る也。

## 二

ニーチェに關しては暫く是の如きを以て足れりとせむ。其文明批評家としての彼れが偉大なる品性と高遠なる識見とは予が特に我邦文學者の注意を乞はむと欲する所也。

我邦、文學者を以て自ら居る者甚だ少からず。されど『詩は人生の批評也』と云へるアーノルドが言を眞に會得せる者果して幾人ありや、予は實に是を疑ふ也。獨逸の學者中には藝術を以て哲學に配し、精神生活の最高位を以て是に擬せしもの少からず。我邦文學者中、眞に這般の消息を解するもの幾人ありや。予は實に是を疑ふ也。予は街上に爛醉して車夫馬丁と格闘したる知名の小説家あるを耳にせしことあり、而かも人の當代文明に反抗して清新なる理想を謳ひたる者あるを聞かざる也。彼等の所謂詩歌と云ひ、小説と云ふものの多くは、予を以て見れば猶ほ戲作のみ、無意義の文字のみ。彼等の間には未だ人生に對して開かれず、耳あれども聞こえず、眼あれども見えず、何ぞ其の作る所の主義なく、識見なく、精神なく、光焰無く、理想無く、殆ど小兒輩の落書を擇ばざるを怪まむや。詩人ニーチェの名が如何にして史上に廣く傳へられたるかを見よ。予は我邦文學者が文學に對する態度を一新せむことを希はざるべからず。而して更に見よ、是の如きは獨りニーチェのみに非ざる也。

## 三

輓近歐米の文學者にして其の名を一世に擅にせるもの、曰く米のホイットマン、曰く露の

トルストイ、曰く那のイブゼン、曰く佛のゾラ、皆是れ文明批評家也。一代の文明を抱擁して自家の想理中に化育せむとしたる文明批評家也。ホイツトマンの事は予嘗て本誌上に論ぜしことあり、讀者の中或は是を記憶する人あらむ。十九世紀と亞米利加の文明とありて而して吾が詩あるもの、眞に已むを得ざる也てふ彼れが語は、誠によく彼れが詩の面目を發揮せり。實に形式主義、方便主義に墮落せる十九世紀末の文明と、平等の虚名に眩惑して却て民主自由の咒詛者となりたる北米合衆國の缺陷とは、彼れが詩是を暴露して殆ど餘すところ無し。『生命に渇えて而かも其の泉を得ざりし理想の兒』は、さながら『ハムリン』の小兒が捕鼠翁の笛聲に赴けるが如く、踊躍して彼れに隨ひぬ。トルストイ伯が當代文明の最も大膽なる批評家なることは何人も知る所ならむ。曾てルソーが自然に還れと説きしが如く彼れが理想は十九世紀の文明を倒逆して原始基督教の禁欲主義に還沒せしむるにあり。彼れは國家の威嚴を認めず、帝王の尊貴を認めず、自ら稱して世界の公民と呼ぶ。魯國政府が發賣を禁止したる『我宗教』の一書、眞に彼れが肺腑を暴露せり。彼れが思想の『アナクロニズム』は素より學者の批評を價せざらむも、而かも魯國文明の彈劾批評としては何物か能く彼れが書の痛快に及ぶべき。イブセンはニーチェと等しく個人主義の宣傳者也。ゾラが境遇 Milieu に依つて個人を説明せむとするが如く、イブゼンは個人によりて飜つて境遇を規定せむとせり。是を以て彼れが詩は意志の詩也、理想の詩也。『ブランド』の主人公は實に是の勇猛不退轉の意志の化現とも見るべきもの也。彼れにありては凡ての事、『萬事』か、然らざれば『皆無』也。彼れは讓步を知らず、況や屈辱をや。彼れは是の本來の意志を貫徹し、實現するところに人生の極致ありとなし、隨つて人は生れながらにして戰死すべき運命を擔へるものと爲せり。而して是の如き強健なる意志と崇高なる理想とは、イブゼンの母國たる那威人の特に缺如せる所、即ち彼れが詩は『スカンヂナビア』文明に對する公然の反抗とも見るべき者也。不幸にして母國は未だ彼れの眞價を認むるに至らず、彼れが勢力は今や却て南の方獨逸聯邦に擴がり、ニーチェと相呼應して獨逸文壇の風色を一變せり。ズーデルマンの如き實に彼れが偉大なる影響を代表する一人たり。佛のゾラ將た儼然たる文明批評家也。彼れを目して單に寫實家とするものあらば、是れ未だ彼れを知らざる者のみ。『ナヽ』や、『ラキエレー』や、『アッソンモア』、將た『巴里』の諸篇、何れか佛國文明の病處を抉剔したるものに非ざるべき。彼れは實にモーパツサンに比して遙かに多く、寫實家の假面を被れるシムボリスト也、其の本來の面目に於てはニーチェ、イブセンと多く異なる所あらざる也。

## 四

吾人は我邦の文學者が切に這般の事實に鑑みて熟慮するところあらむを希ふ。想ふに是の如きは一端の事例のみ、輓近歐米の文學者にして盛名を一世に擅にするものは、殆ど凡て文明批評家なりと謂はむも不可無き也。彼等は其の理想に於て、將た其の詩風に於て各々趣を異にすと雖も、而かも時代の精神を代表し、若しくは批評し、若しくは是に反抗し、文明の進路に率先して億兆の師表たらむを期するに於ては則ち一也。本邦の所謂文學者は果して是の如き事實を如何とか見るや。彼等の多くは耳あれども國民の聲を聽く能はず、目あれども時勢の風潮を見る能はず、一代の民衆が空しく光明に憧れて暗中に煩悶する所のものを捉へて、『見よ、爾等の理想茲に在り』と呼ぶ能はざる也。彼

等の多くは社會を知らず、國家を解せず、況してや十九世紀の世界文明をや。彼等の多くが一代の文明と風馬牛なる、其の豆大の眼孔に映じたる貧少なる閲歴を糊塗し、輒ち呼んで詩歌と云ひ、小說と云ひ、我れこそは文學者なりと稱す。抑々彼等の多くは文學者なるものを如何なる者と心得居るにや、抱腹絕倒せざらむと欲するも豈得べけむや。吾人嘗て我邦の文學者に向つて時代の精神に接觸せよと說きしことありき。而して彼等は即ち同音にして言へらく、『願はくは所謂時代の精神の何物なるかを說示せよ』と。あゝ何ぞ其の厚顏にして愧ぢざるの甚しきや。文學者を以て自ら任ぜる彼等に向つて却て文學者の覺悟を說く、既に是れ百步のハンデキャップ也。而して彼等自ら慚づる所以を知らず、尙ほ且つ斯かる奇問を發す。若し吾人にして是の如き者即ち時代の精神也と說示せば、厚顏なる彼等恐らくは更に問はむ、『然らば如何にしてそを描くべき乎』と。嗚呼彼等は吾人に向つて『文學者と爲るの法如何』と問はずんば已まざらむとする也。吾人豈恨無きを得むや。

## 五

我邦斗筲の文學者を以て歐米現代の名家に配す、素より不倫の誹を免れずと雖も、而かも同時代の詩人小說家としての覺悟に關しては、予其の同日にして論ずべきを信ずる也。實に一代の文明を批評し、若しくはそを敵として戰はむ程の者は、啻に其の識見の高邁なるのみならず、其の氣魄の雄大、凜として秋霜烈日の如きもの無くんばあらず。一分世に阿るの意あらむ乎、是れ既に批評家に非ずして諂諛者也、世に訓ふるに非ずして却て訓へらるゝ也、時勢に率先するに非ずして却て追隨する也。是の如くにして社會の劣等なる讀者を籠蓋し得たりとて何處にか貴むべき所あらむ。文明批評家は己れの信ずる所に非ざれば動かず、己れの信ずる所を貫徹せむが爲には輒ち一世を敵として戰ふを辭せざるの氣魄あり。利害の打算は彼れの知らざる所、彼れは推步せずして跳躍す、而して其の意志の滿足は實に其の至高の報酬たり。是の覺悟あるもの初めて文明批評家たり得べき也。

吾人は玆に顧みて我邦文學者の多くが、氣節なく、德操なく、飄々片々として時好に投ぜざらむことを是れ怖るゝの薄志弱行を遺憾とせざるを得ず。依て以て虛名を得、錢利を貪るの外、彼等に於て毫も著作せざるべからざるの必要無し。彼等は唯官吏たらず、商人たらざる代りに、假りに文學者となれるのみ。理想の重荷を擔へる胸の如何ばかり苦しきかは、彼等の未だ嘗て知らざる所也。是の如くにして詩人たり、小說家たらむと擬す、洒落本、浮世草紙の戲作者と相距ること果して幾何ぞや。

去つて是をホイットマンに見るに、彼れは其の詩に於て屢に北米合衆國を侮辱せり。而して其の詩集の一部を抹殺すべしとの衆論に對して揚言して曰く、是の如くんば吾れ悉く吾が詩を火にせむのみと。意氣何ぞ夫れ壯なるや。トルストイ伯は吾れは魯國の民に非ず、魯國政府に對して何の負ふ所無しと公言せり。原始基督教の理想を復活せむとする伯にとりて、是れ實に已むを得ざる宣告なりき。其の『イワン・デウラック』は魯國の軍隊政治を難じて頗る痛快を極め、其の『燭』は公然弑逆を論じたり。『吾宗教』の發賣を禁止したる魯國政府が是の如き著述を默過したるは寧ろ奇怪とや稱すべけむ、遮莫、全世界の恐れとなれる魯國の權力を以てして遂に其の一步を枉けしむる能はざりしトルストイ伯の偉大なる人格は吾人の歎美するを禁ずる能はざる所也。文學の嚴肅なる意義は吾人又イブセンに於て是を見る。彼れにありては詩は即ち彼れの意志也、理想也。ブ

ランドを公にせむとするや、彼れ書を其の友ローラ・キールルに贈りて曰く、一詩の第一義は自己自ら自己に忠なるにあるのみ。我れは我れにして他の何物にも非ず、是を以て欲せざるべからざる者を欲す、已むを得ざる也、詩即ち是れのみ。或は彼れを撰び、或は此れを擇ぶ、世く所は虛僞あるのみ」と。ブランドは實に、是の如くにして成りたりき、其の人を動かして蹶切痛激を極むるもの眞に所以ある也。請ひ問はむ、優柔媚悅を事とする我邦の文學者、這般の事例に對して果して何の顏色かある。

凡そ文學者に要するもの學殖然り、識見亦然り、而して最も得難きものを是の氣魄となす、是を以て眞正の文學は古より傑士の事也。彼れにして若し處を換ふれば、或は敎の爲に血を流すの義人となり、或は義を見て難に趨くの國士となる。夫の紛々たる遊蕩兒、無賴漢にして偶々穿愈の技を弄ぶもの、果して何爲るものぞや。

六

是の如きは暫らく言ふを已めむ、恐らくは言うて甲斐無きことなれば也。唯我邦文學者の多くが僅に彫琢の末技を恃みとして無學無識に安じ、絕えて修養に意志無きに到りては、切に警戒する所無かるべからず。

今は全く局外の人と爲りたりと雖も、予が初めて文壇に評論の筆を執りしより最近數ケ月前に至るまで、前後殆んど六年の久しきに亙れり。予は是の短からざる年月の經驗により、文壇の事情を知る上に於て通常人よりも多少の便宜ありたるを信ず。予は評論家の本務として是の間に現はれたる殆んど總ての著作を一讀せり、而して常に所謂文士の進退徂徠に注目して出來得べき丈け文壇の消息に精しからむことを力めたり。是の如きは實に予にとりて最も苦痛多き事業なりしと雖も、而かも亦最も必要なる勤務なりし也。予は是のあらゆる經驗の名によりて公言するを憚らざる也、今の文學者には修養の念慮無しと。若し彼等にして修養を怠らずと謂はゞ、是れ疑も無く修養の道を誤れる也、卽ち吾人の所謂修養に非ざる也。試に見よ、最近十數年の間に出でたる新作家の數、十を以て數ふべし、而して彼等の十中の八九は今や殆ど見る影も無き姿となれるに非ずや。彼等の多くは其の出場の初期に於てこそ多少注目すべき著作をも出だしたれ、其の貧少なる思想觀察を餖飣し補綴して僅に一時を彌縫することの愛重なるに及びては、如何に妨礙なる社會と雖も永く是に堪ふべくもあらず、時勢進み人心移るも、彼等は其に追隨すべき所以だも知らず、混として是に寄せし、混として是に過ぎ去らむとなす。流石に事漸く昔日の如くならざるを看取するに及びて、強ひて新境地を開拓せむと焦心するも、想涸れ筆澁りて如何ともすべからず。其に於て彼等の中未だ名を成さざる者は、已むを得ず舊様に據りて胡盧を描き、其の既に少しく名を成したる者は、高く自ら標置し、事に託して容易に筆を執らず、ひたすら既得の虛名を失墜せざらむことを是れ慮る。而かも這般の兒戯を弄しつゝある間に、大勢漸く推移して又計の施すべき無きに至らむことを知らざる也。予を以て見れば、是の如きは、今の文學者の大多數が其の先輩たると後進たるとに論無く、踵趾相接して辿りつゝある所の一樣の徑路也。而して自ら覺らず、旦夕の計に汲々として自ら得たりとするを見ては、眞に人の心を傷ましむ。

七

去つて是れを晩近歐洲の小說家に見るに、其の品性識見は暫らく言はざるも、其の修養の深大なる、眞に欽羨すべきものあり。試に思へ、

『アンナ・カレニナ』の如き、『名譽の負財』の如き、『ジャック』の如き、『播種者』の如き、若しくは『クォー・ヴヂス』、『フラウ・ゾルゲ』の如き小説の作者たり得むものは、果して如何なる學殖、修養を要すべしとするや。例へば『クォー・ヴヂス』の作者の如きは、羅馬衰亡の事情に通ずることに於て多くギボンにも劣ること無かるべく、基督教の歴史に精しきは勿論、兼ねて希臘、羅馬の宗教、文藝、哲學にも通曉せざるべからず。又普國近代史の精髓を了解し、其の土地と人民と、併せて英、佛、獨、普諸民族の民族心理とに明なるものに非ざるよりは、決して『播種者』の著者たること能はざるべし。吾人は素より學識と文學とおのづから別材なるを信ずと雖も、多く學び深く識る者に非ざるよりは、決して讀むべき著作を出だす能はざるを思ふ。我が小説家は這の事例に就いて須らく三思する所あるべき也。

有體に言へば、其の名稱こそ東西齊しく『文學』なれ、同じく『小説』なれ、其の實質に就いては實に日を同じうして語り得べきに非ず。我邦の小説家にして若しズーデルマン、ヨーカイ、シエンキーヰツチ等と其の事業を共にすと思惟するものあらば、是れ大いなる謬りならむ。彼等は互に單位を異にし、地盤を異にし、平面を異にす。

吾人は我邦に於て政治小説の名を聞かざるに非ず、されど彼等が政治上の觀察批評は日刊新聞の雜報にだも及ばざる也、稚氣滿幅、眞に人をして噴笑に堪へざらしむ。吾人曾てヨーカイの『緑書』を讀みて普國現代史を讀みたるよりも多大の知識を得たるを覺えき。實に是の武斷國の皮相の文明と、根本の野蠻と、戰慄しながらも常に反抗する其の農民と、鐵の如く頑堅なる社會及び宮廷の組織の爲に常に其の高尚なる理想の實行を沮害せらるゝ無力なる帝王と、凡て躍如として是の一書に描破せらる。先に擧げたるメリマン氏の『播種者』、亦多く是に劣るまじき也。吾人は是の如き作品を讀みたる後、我邦の所謂政治小説に對して、如何の批評を下すべきかに惑はざるを得ず。實に二三子の著作の如きは、殆ど兒戲に齊しきのみ。

吾人は我邦に於て寫實小説の名を聞くや既に久し、されど彼等の所謂寫實とは果して何を意味するぞ。眞に其の實を寫して誤らずんば、世間何物か一部の小説ならざるべき。ドーデーの『ジャック』の如きは、其の傍話中に多少の傳奇的分子あるを外にし一世間平凡の事例に外ならず。『サッポー』亦然り。トルストイ伯の『イワン・イワノヰッチ』の如きも單に一病者の陰深なる苦悶を描寫したる外、毫も他奇ある無し。而かも是等の作、何れも痛切深刻、たしかに一部人生の幾微に入るものあり。吾人は是の如き意味に於て果して一寫實小説を有するか。吾人は遂に我邦小説家の所謂寫實を索徴する所以を知らざる也。數月前都下の一新聞が當代知名の我邦小説家の所謂寫實が如何なるものなるかを説明せるものなりき。其の略に曰く、某氏(小説家の名は横濱市の裏面の未だ社會に紹介せられざるもののあるを遺憾とし、自ら是を踏査せむが爲に同地に赴き、數日間滯在すべしと。數日間の觀察によりて看破せらるべき一大都市の祕密とは果して何物なるか、吾人未だ是を詳にせずと雖も、又以て我邦小説家の覺悟の那邊に存するかを知るに足らむ。曾て聞く、ゾラが其の『人非人』を著さむとするや、人物事件凡て鐵道に關するを以て、爲に數年間の準備を累ねたりと謂ふ。吾人は名家の功を成すの偶然ならざるを想ひて、轉た我邦小説家の淺薄不用意を恨まずんばあらざる也。

吾人は又社會小説の稱謂の下に、境遇遺傳

の感化を描かむとしたるものあるを見き、世人或は呼んで深刻小說と云へり。されど吾人を以て見れば、深刻小說はむしろ慘酷小說と呼ぶべきなりき。精神病通なるゾラが其のナヽを描き、ルセーを描き、ルーボー、ミサールを描き、ジャック、フロラ、スヴリーンを描きしが如き深酷を得て見出だすべくもあらず。彼等は唯抽象的に事象の輪廓を描き、而して覺束なき自家の社會觀を其の上に貼附したるに過ぎざるのみ。是の如き著作によりて小說家の名譽を博するを得ば、天下何者か小說家の如く多幸なるものあらむや。

## 八

吾人は文明批評家としての文學者を論じて圖らずも罪を我邦小說家に得るに到りぬ、深く是を遺憾とすと雖も、而かも本邦文壇の爲に謀るもの、勢ひ茲に出でざるを得ざる也。吾人は今の我邦文學者の多くが、是の如き憐むべき狀態に存在するに拘らず、高く自ら標置して大文豪、大小說家を氣取るの癡態を傍觀するに忍びず。夫の丙丁童子に擁せられて先生を以て自ら居る者の如きは、眞に人をして絕倒せしむ。知らず彼等は何物を以て何人に誇らむとする乎。

試に彼等の愛讀者が如何なる種類の人なるかを想へ。吾人の知る限りに於ては、少しく敎育あり、識見あり、趣味ある者の百中の九十九は、彼等の作を手に觸れむともせざる也。彼等が其の褒貶に一喜一憂する所の所謂批評も、多くは文學の何物なるかを解せざる黃吻書生の惡戲のみ。少しく名ある學者が彼等の爲に眞摯なる批評をものしゝが如きは、吾人の殆ど耳にせざる所也。是の如く國民に度外視せられつゝありて而かもそを覺らざる彼等は、却て日本讀書界の全體を占領せるが如く思惟し、自己の作世に行はれざるを見ては輒ち社會趣味の高下を口にす、滑稽も是に至つて極まれりと謂ふべし。

吾人をして今の文壇の爲に計らしめむか、吾人は何よりも先に本邦文學者が文學に對する覺悟を一新せむことを希はざるべからず。彼等が戲作者氣質を擺脫せざる限りは、一切の助言も水泡のみ。吾人は是の目的に對する一方法として切に歐米輓近の詩人小說家の傑作を翫味することを勸告せむ。文明批評家としての文學者が、如何の修養、如何の品性を須要とすべきかは、特に彼等の注意を要すべし。

吾人は想ふ、若し我邦の小說家にしてイブゼンの『ブランド』を讀み、トルストイの『アンナ・カンニナ』を讀み、ズーデルマンの『フラウ・ゾルゲ』を讀み、コーリイ[illegible]、シェンキーヰッチの『クオー・ワヂス』を讀み、而して眞に是を解したらむには、彼等安じて從來の著述に從事すること能はざるべし。然り、吾人實に其の然らむことを想ふ也。

嗚呼ニーチェは一詩人のみ。而して獨逸の思想界は現に彼れが爲に動かされつゝある也。寧ろ突梯とも見らるべき彼れの個人主義が、爾かく一國文明の大動力となれるを見ては、吾人は切に文學藝術の勢力、實に科學哲學に幾倍するものあるを思ひ、更に是の點に於てうたゝ文學者の崇高偉大なる天職を覺悟せずんばあらざる也。吾人は我邦文學者に勸めて強ちにニーチェ、イブゼンの先蹤を履ましめむとするものに非ずと雖も、而かも彼等が是の如き天職を自覺するの途に就いて、本邦文學の體面を一新せむことは、吾人の希望して已まざる所也。

(明治三十四年一月)

# 姉崎嘲風に與ふる書

## (一)

嘲風兄足下。去年三月、君が西遊の首途を横濱に送りたるの日、予は西の方富嶽を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓にやどりて離別の悶を遣りたりき。是の夜月明星稀、一灣の風露、恍として夢の如し、中宵欄に倚りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。越えて六月、偶々官命あり、將に君を追うて西歐に游ばむとす、發するに臨み、病俄に起りて果さず、即ち今茲陽春の候を以て程に上らむことを期しき。期に及ぶや、病の故を以て再び果さず。幾もなく三月十三日の君が書を領しぬ。其の首に謂へらく、恐らくは是の書故國に達する頃、君は既に印度洋上に浮べるならむと。あゝ予又何をか言はむや。病軀山河に隔みてより殆ど一歳、愁思徒に繁くして風物日に荒涼たり。今や身世怱忙として相移り、際遇漸やく異ならむとするも、平生憂を同じうするもの、君と予と先世何の宿縁かある。天涯五千里、望み茫として遙なるも、希くは尚ほこの區々の消息を傳ふるを得むか。嗚呼君よ、予は實に感慨思念を併せて君に致さむと欲する也。

## (二)

足下よ、足下の知る如く、予が生涯は書窓の裡に過ごされたり。あゝ足下よ、予は何時まで讀書子たらざるべからざる乎。予を以て是を見る、讀書は徒に人の憂患を增すあるのみ、生を養ひ、天を樂むに於て多く爲す無き也。夫の徒に知識を趁ふものは、猶ほ徒に金錢を蓄ふるものの如きか、愈々得て而して愈々足らず、終始欲求の限りなきに苦みて、遂に安ずるところを知らざるもの、彼と此と何ぞ一に相似たるや。予は世の所謂學者なるものの生涯の、まことに果敢なきものなるを想はざるを得ざる也。あゝ足下よ、されど果敢なきことは他の上にのみ在らざりき、予も亦是の如き學者たらざる能はざるを如何せむや。

若し予をして恣に其の好む所に從はしめむか、願はくは彼の江山に放浪して餘生を無爲の間に樂まむ。予年僅に三十有一、尚ほこの老餘の言を爲すは、人生の憂患むしろ既に多きに堪へざるを覺ゆれば也。顧みれば弱冠情を解してより、恨愁切りに身に逼り、與會未だ到らざるに身世茫々として青春早く既に暮れなむとす。つら〳〵往を觀じ來を想へば心濟に平ならず、洵に已むを得ざらむ乎。唯世事意の如くならず、繫累よもに塞る、今に及びて四方の事に當らむとするも、時既に晩れたり。玆に病軀を提して一生を書窓の裏に閉却せむとするもの、予に於て又如何ともするなき也。足下よ、人生の心事何ぞ夫れ一なり難きや。あゝ予も亦夫の學者と共に營々として生死すべき也。

然れども足下よ、願はくは予を以て薄志弱行の徒と爲す勿れ。既に學者を以て立たむとす、不肖と雖も、聊か自ら負ふ所あり、豈徒に先人の後塵を追うて陳箇補綴を是れ事とすべけむや。成敗今に於て豫め知り難きも、希はくは多く意に介せざれ。男子苟も凌雲の意氣あらば、天下の事深く憂ふるを須ゐむや。

## (三)

嘲風兄足下、今の校揃の學者に在て其の最も

不備なるものを擧ぐれば、日本美術史の如きは慥に其の一也。足下よ、予が殘敗の生を以て斯學に致す、可ならむ乎。

試に足下の爲に近時予が遭遇したる一事例を語らむか、思ひ必ず半ばに過ぐるものあらむ

今春のことなりき、元祿美術の研究者として、予は當時の大立者たる光琳の事蹟に就いて探討するところありたりき。而して予が少からざる勞力を以てして辛やく到達し得たる結果が、予が最後に閲讀したるルイ・ゴンス氏の光琳傳に優ること甚だ過ぎざるを發見するに及びて、予は憮然として長大息するを禁じ能はざりき。

嗚呼ゴンス彼れ何者ぞ、身は西歐に生まれて天涯に越在す、風土好尙本より同じからず、極東の美術に就いて見聞するところ略知るべきのみ、而かも尙ほ是の如し、鑑識の明、研究の精、寧ろ驚くに堪へたらずや。予が搜索し得たる光琳に關する事蹟一二にして足らずと雖も、悉く片端碎斷片のみ、一篇の評傳として見らるべきもの、一も是あるなし。最も駭くべく目怪むべきは、本邦畫人傳中最も完全なりと稱せらるゝ黑川氏の扶桑名畫傳の如きすら、是の元祿時代の代表的美術家の爲に一行も記するところ無きこと是也。顧ふに光琳は名目上法橋の僧位を有す。この書其の師本阿彌光悅を記し、其の弟乾山を收めながら、光琳自身に就いて言ふところ無かりしは、蓋し一切の僧侶を度外視したる本書の國學者的偏見に憑據せるものならむ。あゝ足下よ、緇衣を着け、僧を冠するの故を以て、明兆、雪舟の如き人物を畫人傳中より排斥するが如き美術史家は、何れの國にか其の匹を見出だし得べしとするや。

予は是の一事實を以て本邦人が美術史に關する觀念如何を推測するに足ることを思ふ也。足下よ、今の所謂鑑賞家の多くは、予を以て見れば扶桑名畫傳の著者の更に小なるものに過ぎざるのみ。

名は即ち鑑賞家と云ふも、實は一種の骨董家、一種の好古家のみ。彼等が古書に於ける知識は洵に當今の珍とするに足る。彼等は能く時代の今古を考へ、能く流派の異同を辨じ、又能く製作の眞贋を別つ。例へば歴山大帝の乘馬の黑白を論ぜし西洋史家の如く、葛飾北齋は飮酒家なりしや否や、と云ふが如き問題は彼等が最も得意の壇場たり。然れども彼等には歴史なき也、批評なき也、人文史上の考察なき也、審美學上の研究なき也。

足下よ、足下の專門とする所の宗教哲學の上より觀察すれば、日本の佛教史の如き、今の僧侶の關知するところのものより、更に〲重大の意義を有し來らむ。予は本邦の美術學者が是と同一の運命に接するの日も亦遠きに非ざるを想ふ也。足下よ、予を以て漫に壯語するものと爲す勿れ、試に見よ、『國華』は本邦美術雜誌中の巨擘と稱せらる、而して其の批評眼の如何に幼稚なるよ。『國華』の批評家にとりては古代美術は殆ど如何なる場合に於ても犯すべからざる證權也。彼れにとりては古色は即ち賦彩の極致、簡朴は即ち技巧の理想、而して古來の傳説は即ち批評の典據也。あゝ是の如くにして藝術批評の局に當る、婦女童幼も尙ほ是を能くせむ。想ふに、『國華』記者の沒鑑識の如きは深く咎むるを要せざらむ、彼れは今の所謂美術鑑賞家の一代表者に過ぎざるのみ。

予が今の美術學者に希望するところ一にして足らずと雖も、其の第一着として大に歴史的研究の精神を喚起せむことを希はざるべからず。蓋し一個の共存同棲の經營する歷史は素と是れ一體たり。個人の行爲が自我の發現に外ならざる如く、國民の活動も亦國民の性格を表現せずんば已まざるべし。即ち一國民の經營する諸般の文物はそれ〲小天地的に是の國民

を表現するものと見るを得む。例へば聰明なる動物學者が一個の齒片によりて、時に是の齒片の所有者たる動物の形態を想像し得るが如く、活眼ある歷史家は、一基の彫像によりて、是の彫像を産出したる國民及び時代を看破せむこと、強ちに望み難き事に非ざるべし。畢竟政治や、宗教や、文學、美術、風俗や、同一國民の活動を異なりたる形式によりて表現せるものに外ならざるを以て、美術の歷史は是等政治、宗教、文學によりて說明せらるゝ如く、亦纔つて政治、宗教、文學を解釋するものならざるべからず。是の人文史的見地を離れて美術の發達を了知せむは、予を以て見れば決して望むべからざる也。

足下よ、日本の美術は、其の統一に於て、其の繼續に於て、其の美術たる價値に於て、其の他凡ての點に於て、歐洲美術と對峙して多く遜色あるものに非ざる也。埃及や、波斯や、印度や、曾て其の美術を有しき、而かもそが他邦の文物に及ぼしたる影響を外にしては、今日殆んど歷史上の意義を有せざる也。支那は美術上日本の導師たりしことありしが、唐宋の盛時一たび去りてより、生氣長へに振はず、遂に我が學者をして、東土學ぶべきもの山川のみと嘆ぜしめたりき。今日一千年以上の儼然たる歷史を有し、尙ほ有望なる進路を將來に有するもの、渾圓球上實に我日本と歐洲とあるのみ。風土別れ、好尙同じからざるも、是の二者は世界に於ける美術發達の二大潮流を代表するものと謂ふべき也。足下よ、予が今の學術界に於て特に重きを本邦美術の上に置き、其の歷史的研究を推奬する所以のもの、決して偶然に非ざるを見るべき也。

(四)

足下よ、願はくは予を以て己れの好む所に偏するものと爲す勿れ。予は本邦美術に關して、今の學界の注意を喚起するところの寧ろ足らざらむを憂ふ。乞ふ、更に數言を費さしめむ乎。

今の世、アリアン民族以外に屬するもの少からずと雖も、儼然として獨立國の體面と實力とを保有し、世界の一大勢力として二十世紀以後の競爭場裡に聘馳し得るの望あるものは、獨り我が日本あるのみ。是を人種競爭の歷史上より觀察すれば、近世の大事は、主としてアリアン、チュラニアン二民族の勢力の消長に外ならず。而して是の競爭史上の敗者たるチュラニアン民族の力漸やく支へざるや、競爭の部位次第に西より東に移り、今や世界の勢力は極東の分野に奔注し來りたり。是の時に當りてチュラニアン民族の文明を代表して是の競爭場裏に立てるものは言ふまでもなく我が日本也。凡そ權力競爭の裏面には必ず文明の競爭あらざるを得ず。見來れば、印度以東、南洋以北の東半球の文明を二千年の歷史中に綜合し來りたるチュラニアン民族の最後の代表者は、實に人類の史上に於て最も重大なる地位を保てりと謂ふべき也。

予は日本の美術が是の間にありて實に稀有なる位置を有するを見る也。足下よ、印度以西の凡ての邦國の美術が歐洲美術史の中に流注したるが如く、印度以東の凡ての邦國の美術は、間接又は直接に日本美術史を構成する勢力たらざるは無き也。希臘佛教式の健陀羅美術は、佛法の東歸と共に支那、朝鮮を經て早く既に我邦に入り來れり。大唐の藝術が天平、平安の二朝を風靡せしは言ふまでもなし。鎌倉より足利の時代に及びては、宋元の影響より遠く盛唐の餘波を復活せり。豐公征韓の役は八道の文物を黄土に委棄したりと雖も、其の繼承者たる日本の手によりて、半島の工藝永く存せらるゝを

行き。徳川時代に到りては、近くは明清の勢力あり、遠くは西洋の感化あり。下つて明治維新の開國と共に、西歐の風尚痛く本邦の藝苑を動かし、本邦美術の將來に向つて最も重大に、且更も有望なる影響を與へたるは、吾人の親しく目擊しつゝある所也。足下よ、是の如く見來れば、日本の美術史は取も直さずチュラニアン民族の具體的文明史なり。而して政治史上の日本が、チュラニアン民族最後の勢力を代表するが如く、日本の美術史は、歐洲美術史と對峙して、人類の美的活動の二大發展を表示するものと謂ふべし。足下よ、日本美術史の意義また決して淺少ならざる也。

足下先に送り來れる伯林時報によりて、予はキールに於ける獨逸帝の演説を詳知するを得たり。其の主意の存する所は人種競爭の目的を赤裸々に現示したるに外ならず。曰く、異教徒の文明は、其の程度種類の如何を問はず、遂に滅亡せざるべからず、是の目的を達するは基督教國民の天職也と。是の如き政略的詭辯は素より多く意に介するに足らざるも、今の西洋學者の多くが是と同一の見地によりて異人種の文物を批判するの態度を取れるに到りては、實に陋隘の極と謂はざるべからず。足下よ、試に英佛獨の學者の手に成れる世界美術史と題する書籍を繙讀せよ、名は則ち世界と謂ふと雖も、實は歐洲美術史のみ。アリアン民族以外に於て吾人の有する美術史の如何なるものなるかは、彼等の殆ど全く知らざる所也。

予は信ず、世界に於ける各個の民族は其の到達すべき文明に關して各々特異の理想を有すべし。是を以て人類全體の上より見る時は、或特殊の國民、又は特殊の民族が好尚する所の特殊の理想を以て、他の國民、又は他の民族の文物を批評する唯一の照準となさむは、畢竟謬見なりと謂はざるべからず。予は又信ず、若しこの世界に人道の理想なるもの存せりとせば、そは何れの國民、又は何れの民族にも偏倚せず、あらゆる人類のあらゆる特質を包括し、調和し、玉成したる所に存すべき也。足下よ、予の見る所を以てすれば、すべての歴史的研究は、是の見地よりして初めて至大の興會と最高の價値とを有すべし。

日本美術史の研究は、是の點より見て更に重大なる意義を有し來れるを見る。世界の文明を一分して其の一を保てる日本國民が將來人道に寄與する所のもの、素より一にして足らざらむも、而かも美術は如何なる場合に於ても其の最も貴重なるものゝ一たるを失はざるべし。足下よ、是の如きは、予が日本美術に對して有する抱負也、信念也。而かも本邦人の自ら自己を知らざるや、是の重代傳來の貴寶に關して、一も研究するところなく、遂に名譽ある文學博士末松謙澄君をして、外人アンデルソン氏の日本美術史を翻譯するの奇觀あらしめたるは、予の濳に心外とする所也。足下以て如何となすや。

## （五）

嘲風兄足下。足下東京に在るの日、時に緣日の市場を散歩せしことあらば、必ずや破れたる三味線を抱きて、哀を行人に求むる幾多の乞丐兒を路傍に見しならむ。あゝ自己の生き甲斐もなき生活を續けむが爲に、路人を樂ましめむとするは如何に悲しき境涯ぞや。時として彼等は其の技藝によりて哀を求むるの身なるをも忘れ、何時しか自己の歌曲に感動して興會自ら禁ずる能はず、徐ろに行人をして其の樂みを羨ましむるものある也。あゝ足下よ、漫に夫の乞丐兒を憐むを已めよ、予が現下の境遇また太だ是に似たるものある也。

予や誤つて文壇の人となりてより茲に六年、身世幾たびか變轉して、而かも尚ほ是の悪因緣

と絶つこと能はず、茲に再び評論の筆を本紙上に執るに到りたるは、予の寧ろ恨事とする所也。凡そ評論なるもの、もと達人高士の事たり、短才寡聞予が如きもの徒に世を亂り人を惑はすに終らむのみ。是を過去の經驗に考ふれば、一是一非多くは我執の偏見、一時の妄念、徒に人の誤りを受けて身に一毫の益あるなし。今に於て當時の事を思へば慚汗覺えず背を潤すもの少しとせざる也。而して當時自ら悟らず、文藝の批評に關して一家の識見を有せりと自信し、縱横忌憚なく其の所信を告白して自ら其の意を得たりと爲したりき。識者は寧ろ其の稚氣を愛したらむも、予豈今に及びて其の過ちを再びするに忍びむや。

然れども足下よ、忍び難きことをも忍ばざるべからざるは予が現下の境遇也。予は内外のあらゆる障害あるにも拘らず、再び身を挺して茲に評論の筆を執らざるを得ざる也。唯際遇の人を移す、知らず識らずの間にあり。かの乞丐兒が自己の歌曲に興會して一時其の身の哀れなる境遇を忘るゝことあるが如く、評論の筆亦時に予をして其の業を樂しむることあるべき乎。予は今に及びて是の如き時の速に來らむことを祈るの外なき也。

（六）

足下よ、既に評論家として立ちたる予は、評論家たるの任務を盡すに於て自ら遺憾なからむことを期せざるべからず。所謂評論家の任務とは何ぞや。通常世人の解するところは概ね左の如し。

第一、文藝に關する理論的知識を一般社會に播布するは文藝批評家の任務なり。文藝の事、時に幽玄高邁、多年の研究を待つて始めて了得するもの少からず、名品大作に於て特に是を見る。若し批評家の解説なかりせば、一般社會は永く其の光明に接するの期なからむ。ラスキンは公衆を無知なりと罵りたるの故を以て、數々不遜の誹りを受けしと雖も、英國の社會は藝術の教育に於て永く彼れを德とせざるべからず。批評家は須らく一般社會の無學を豫想すべき也。

第二、現代の作家に對しては、批評家は須らく兩樣の態度を取らざるべからず。其の前途有望にして、將來文藝の發達に裨益する所あるべしと想像せらるゝものは、無知の俗論に反して宜しく回護獎勵の道を取るべく、是に反して一時の僥倖によりて虚名を博したる僞作家は、宜しく是を貶黜して、社會文藝趣味の崩落を未然に防がざるべからず。評論の筆には兩面の刃あり、己れの信ずる所を執つて假借する所なかるべし。

第三、既に社會の教育者を以て自ら任ずる批評家は、時に社會の好尚に反對して不人望なる眞理を吐露するの勇氣なかるべからず。批評とは畢竟自己の想理に遵うて事物を誘導し、若しくば改造するの謂なり。一分自己の所信に稱はざらむか、彼れにありては一の戰あらむのみ。自己の理想を妨ぐるもの、彼れにとりては即ち是れ眞理の敵なれば也。是れ以て文壇の俗論に歡迎せらるゝは、眞正の批評家に於て極めて稀に見るところ、彼れは時に一世を敵として戰ふの否塞に陷ることすらある也。

第四、彼れは文藝に關する一切の知識を有せむことを要す。而かも文藝の事、古今を貫き、東西に渉りて際涯無し、其の一切に通曉せむは素より望むべからざる事に屬す。是を以て批評家の任務おのづから一業一門に偏倚する、亦已むを得ざらむ乎。

第五、同情の範圍を擴張するは、文藝批評家の任務を果すべき修養として缺くべからざる也。是の如き修養は意志の力によりて如何なる點ま

て成功し得らるべきかは、各人天賦の性格によりてのみ決せらるべきを以て、素と討論の限りに非ずと雖も、而かも同情力の多少が、多くの場合に於て批評の運命を左右するの力あるは爭ふべからざる事實なりとす。蓋し文藝の事、概ね人間の感情に基く、是の感情に同應する力無くんば、批評の第一義は既に失はれたりと謂はざるべからず。夫の自己の狹隘なる人格に籠居して、一切を是非せむとするは、其の勢力如何は暫く措き、文藝社會にとりて最も危險なる批評家と謂ふべき也。

第六、彼れは如何なる場合にも、飽くまで自己に忠實ならざるべからず。彼れの公言する所のものは彼れ自身の眞に思ひ、眞に感じたる所のものならざるべからず。是を以て彼れは權勢に阿る能はず、威武に屈する能はず、情誼に惑はさるゝ能はず、直前邁往、たゞ其の所信を執つて毫も動くこと無かるべし。既に己れに忠なるもの、亦己れと共に進止せざるを得ず、是を以て彼れは其の思想好尙の變遷に遇へば、輒ち是を公言して憚ること無かるべし。夫の反覆の誹りを受けむことを恐れて、終始先言に拘泥し、自ら知つて其の非を遂ぐるものは、外より見て定見ある者の如きも、實は既に虛言者のみ、眞正なる批評家の爲すべき所に非ざる也。若し人の一生は發達の連鎖也、發達は變化を意味し、變化は時に矛盾を意味す、夫の矛盾を恐れて緘默する者は、死するまで發言の機會無かるべし。個性の發展に基ける思想感情の轉移は寧ろ必然の經過のみ、決して反覆を以て批難せらるべきに非ざる也。

足下よ、予が文藝批評家の任務に就いて傳ふるところ略々是の如し。然れども漫に理論を列ぬるは何人か是を能くせざらむ、唯問題は予の如きもの果して是の如き任務に堪へ得べきや否やにあり。足下よ、予不明にして自ら知らずと雖も、遂に惑ひなきを得ざる也。

（七）

先に擧けたる六個條の任務は、高才達識の人と雖も倘ほ是を難んずべし、下愚移らざる予が如きもの、如何ぞ企て及ぶを得むや。況や、設令ひ予をして幸に學博く識高からしむるも、この個性の動かし難きもの、遂に所謂批評家の本分と相容れざるものあるを如何せむや。

足下の知る如く、予は矛盾の人也、煩悶の人也。予が今日までの短き生涯は、實に是の矛盾煩悶の中に過ごされたり。予は是の苦痛を解脫せむが爲に予の爲し得べかりし諸般總ての方法を盡したり、然れども其の效果として見るべき者一もあらざりき。予が得たる些少の知識は予に光明を齎らさずして、却て暗黑を與へたり。予は意志の鍛練によりて此の疑惑を解決せむと務めしが、予が感情は是の目的に對して餘りに强かりき。予は遂に思へらく、寧ろ一切の欲求を解放して其の爲すがまゝにまかしめむ、我れに於て其の獨り樂むも、亦可ならずやと。然れども吾が心は流石に疚しかりき、畢竟悟らむが爲には吾が情强きに過ぎ、迷はむが爲には吾が智明なるに過ぐ、予は是の中間に彷徨して遂に其の適歸する所を知らざる也。足下よ、惡夢に魘はれたる夜は眠らざるに等し、予は實に是の十數年の歲月をかゝる煩悶の間に過ごし、人生の負荷、寧ろ其の重きに堪へざるを覺えたり。而かも予は幸に絕望せず、歎嗟せず、何時かは光明の天地に遭遇するの日あるべきを信じて靜に其の修養に勉めたりき。今や齡既に而立に及びて青春將に落れむとす、而して矛盾と煩悶と依然として元の如き也、あゝ足下よ、是を如何かすべき。

今や再び玆に評論の筆を執らむとするの予は實に是の如き人たる也。社會は是の如き人よ

り如何なる批評を期待し得べしとするぞ。凡そ批評家は學殖と共に常識無かるべからず、其の心能く人を容れ、物に同じ、八面玲瓏、澁滯する所あるべからず。其の人物は須らくベーコンの如く、アヂソンの如く、ヘヅリットの如く、ハマートンの如く、レッシングの如く、マシュー・アーノルドの如く、坪内逍遙氏の如かるべし。然るに予は詩人としては沙翁よりは寧ろバイロンを取り、ゲーテより寧ろハイネを好み、批評家としては、レッシングよりは寧ろショペンハウエルを高しとし、テインよりは寧ろレェックを大なりとす。足下よ、人は其の性の近き所に從ふ、是の如き好尙を有するの予が、批評家としての態度は果して爾かく信頼すべきものなりや。世人恐らくは足下と共に是を危まむ。見來れば、予と所謂批評家と相距ること頗る遠しと謂ふべし。足下よ、是を如何かすべき。

然らば則ち予に一言の辯なき乎。曰く否。予は矛盾の人也、煩悶の人也、而して又我執の人也、主觀の人也。是の如き人、當代の文藝に對して毫も爲すある能はざる乎。曰く必らずしも然らざらむ、たゞ其の爲す所の所謂批評家と太だ相近からざらむのみ。足下乞ふ少しく忍んで予の言ふ所を聞かむ乎。

（八）

足下よ、所謂批評家の任務は既に是を說きぬ。然れども玆に人あり、吾れは批評に就いて何の考ふる所無し、吾れは唯吾が好む所に從つて是非の判斷を下すのみと言ふものあらば、予は彼れが發言を否定すべき何等の理由をも有せざる也。足下よ、予は是の如くにして文壇に立つ能はざるべき乎。

今の人動もすれば曰く、批評は客觀的ならざるべからず、一個人の習癖を擺脫したる沒理想のものならざるべからずと。其の意極めて分明、唯是の事あるが爲に漫に主觀的立言を貶せざるべからずとの理由は、予の認むる能はざる所也。足下よ、若し文藝の批評に於て客觀の極致を求むれば、其の定着する所は、遂にテインが所謂歷史論に終らむのみ。「藝術批評家として、吾が唯一の義務は事實を表示して、是の如き事實が如何にして生起し來れるかを說明するにあり。科學は一切の事物に對して平等の慈眼を有す、憎惡なく、褒貶なく、是非なき也。」是の如きは實にテインが批評の主義なりき。既に理想を沒す、是れ好惡なき也、既に好惡を絕す、何處にか褒美の判斷ある、餘すところは一の記實あるのみ、一の歷史あるのみ。批評上客觀主義を尙ぶものは勢ひ玆に至らざるを得ざるべし。足下よ、是の如きは標準科學に臨むに記述科學の通則を以てするもの、謬戾言ふまでも無からむ也。

然らば則ち人道に對して廣く同情を表するを以て客觀主義と爲すべき乎。是れはた程度問題のみ。テインが所謂平等の慈眼を以て一切に對せざる限りは、吾人の表示し得る同情は、少くとも吾人自らの個人性によりて制限せられざるを得ざるべし。所謂客觀主義は如何なる程度までの制限を許容せむとするや、誰か是の如き問に答へ得べきものぞ。畢竟客觀主義なるもの、予を以て見れば殆ど無意義に近し、若し何等かの意義ありとすれば、そは多數主義、人氣取主義に外ならざらむのみ。夫の努めて好惡の情を蘊し、褒貶の意を藏し、可もなく不可もなく、平板無爲の間に成るべく多數の滿足を失はざらむとするもの、寧ろ陋ならずとせむや。大に罵る能はざるものは、亦大に褒むる能はざる也。文藝の發達は趣味の問題也、好尙の問題也、吾人の力行に待つあるもの殊に多しとす。夫の客觀主義なるもの遂に歷史主義たる能はずして、既に一分の是非を許さば、何が故に更に

十分の褒貶を憚るや。抑々何が故に所謂主觀主義、理想主義を嫌ふこと、しかく蛇蝎の如く甚しきや。

主觀主義は他方より見て個人主義也。而して文藝の史上に於て最も強大なる勢力を有せしものを實に是の個人主義と爲す。人動もすれば沙翁の名を擧けて客觀詩人の勢力を代表せしめむとす、吾人必ずしも是を拒まざるべし。唯沙翁の大を許さば何故に同時にバイロンの大を許す能はざる乎。沙翁の如きはむしろ千歳稀有の一人のみ、學んで達し得べきに非ず、彼れに於て事例を援引せむとするは、寧ろ自ら計らざるのみ。翻つてかのバーンスに見よ、シエレーに見よ、若しくは彼のビョルネ、ハイネに見よ、『少年獨逸』の基礎は實に是等主觀詩人の個人主義に基けるに非ずや。テニソン、ヲーヅヲース等の名は大陸に於ては殆ど無意義のみ。而かもバイロンの盛名は現にチユートン民族を振蕩しつゝあるに非ずや。平板和樂なるロングフエローは北米の國民詩人なりと稱せられき、然れどもホイツトマンの勢力が如何に是を壓倒したるかを見よ。是を現代の詩人に見れば、ニーチエ、イブゼン、トルストイ等の個人主義が、殆ど中部歐羅巴の文壇を風靡しつゝあるは世人の熟知する所の事實也。人或は其の行蹟如何を疑はむ。然れども強大なる個人の意力の現はるゝ所、其處には必ず永遠の生命あり。見よ、ムーアによりてアナクレオンを味ひたる英吉利人は、更にオマイル・カイアムを波斯の古墳より起さずんば已まざるに非ずや。

更に是を批評家に見む乎、予は主觀主義、理想主義の上に立てる批評家によりて、最も強大なる勢力の發現せられたるを見る也。カーライルを見よ、彼れの說くところ、所謂穩健着實の境を去ること頗る遠く、其の矯激なる點に於て、其の偏癖ある點に於て、客觀主義者流を欣ばすべき何等の長所を備へざりしにも拘らず、其の勢力の如何に大なりしよ。彼れの勢力は實に英國人が永遠に感謝すべき所のものたる也。ベーコンの如き、マコーレーの如き、若しくはミルの如きは、アングロサクソンの平明なる常識を代表したるに過ぎずと雖も、カーライルに到つては實に破天荒の才なりき。又夫のロマンチシズムの諸文豪に見よ、凡そ文藝の歷史中に於て、詩人の勢力一代の氣運を搖かしたる是の如きは他に多く類例を見ざる所、而して彼等の多くは何れも最も急激なる主觀的批評家なりし也。チークは詩人として、シレーゲルは理論家として、シライエルマヘルは立法者として、各々其の理想の爲に戰ひたり。彼等の理想は畢竟個人の神聖を認むる內にあり。彼等は、世に創作の權能あるもの、唯不覊獨立、天才、豐富なる我のみなりと爲し、一切の法則、彼れによりて生ぜらるとなす。即ち是れフヰヒテの主觀的唯心論に加ふるに更に神祕的性質を以てしたるもの、遙にスチルネル、ニーチエ等が個人主義の前驅として見るべきもの也。是の如くにして上はフヰヒテより下はハイネに到るまで、五十年間の歐洲文藝界は、佛蘭西に於ける政治的革命と同一の機運を經驗したりし也。

兎にも角にも、文藝界に於ける主觀主義の勢力が遂に客觀主義に勝れる者ありたるは、予を以て見れば炳焉たる歷史上の事實也。然れども、是の如き歷史上の事實あるの故を以て、一切の主觀主義を擧げて是を推奬するは予の意に非ざる也。夫の無學無識の徒、一時の好惡に任せて漫に褒貶を弄するもの、今の時寧ろ其の多きに過ぐ、予は決して彼等に黨同するものに非ざる也。往年佛蘭西にプルードンと稱する美術批評家あり、『美術の原理及び其社會的運命』と題する一書を著はして當時の藝術界を搖撼せしことありき。彼れ公言して曰へらく、予

は繪畫、彫刻又は音樂に就いて何の研究し若しくは自得する所なし、是點に於ては、予は最大多數の俗人と毫も異なる所無し。然れども是等の俗人は其の好惡を宣言し、其の意志を以て美術家を強ふるの權能あるもの也。彼等の判斷は必ずしも正確ならざるべく、彼等の趣味は時に多大の醇化を要すべし、然れども彼等の宣言は尚ほ至高の判決也。彼等は如何なる場合に於ても下の如く公言し得、美術家よ、吾等は敢て命令す、吾等の命令に從ふは爾の任務也、若し爾の美術にして吾等の所望に副はざらむか、其の作の優劣如何を問はず、吾等は是を擯斥すべし。――プルードンは是の如き方法を以て藝術批判の原則となし、公々然として當時の藝苑を横行せりき。予は茲に彼れが所謂原則の誤謬を指摘するの遑なし、唯極端なる主觀的批評主義の一事例として讀者の注意を喚起するに止めむ。主觀主義も是に至りて寧ろ其の弊に勝へざるを見る也。

是を要するに、主觀主義には一定の規準無し、其の勝劣は唯是を提唱する人物の如何によりて別るべきのみ。一定の規準を立し、萬人をして依據する所あらしむるを得ざるは、是に主觀主義の一缺點也、而かも文字以外、實際以上、個人天來の理想を發揮して、清新なる生命を藝術界に注入するの一事は、亦遂に主觀主義の一長處也。予は再び言はむ、主觀主義其物には何等の定價なし、唯是を唱ふるの人によりて初めて價値を有し來る、超人を理想とする個人主義は、ニーチエの人格によりて初めて成立すべく、意志の發展を極致とする個人主義は、イブゼンの個性を待つて初めて意義あり。一たび偉大なる人格の強烈なる意志によりて傳道せられたる主觀主義は、時に一世の民心を把住して所謂時代の精神を作ることある也。

嘲風兄足下よ、予は文藝上の主觀主義、もしくは理想主義に對して、實に是の如き抱負を有する也。予が是の矛盾と煩悶と我執と偏癖とを以てして、尚ほ且つ評論の筆を取らむと擬するもの、足下予が意を諒とせむ乎、又は其の愚直自ら計らざるを笑はむ乎。

## （九）

嘲風兄足下、予は餘りに、空論に走りたるが如し、然れども足下よ、予は今に於て特に足下に語るべき多くの事實を有せざるを如何せむや。足下の近書、予に要むるに本邦文壇の現狀を報ずべきを以てせり、而かも予をして強ひて今の文壇を語らしむる、是れ殆ど皆無を語らしむるに等し。足下よ、予が答は兩言にして盡くすべけむ、曰く、今の文壇の狀勢足下が一年前に見たるところと毫も異ならずと。

足下よ、本年一月の本紙上に掲げたる、文明批評家としての文學者と題せる拙論は、足下既に一讀の榮を給ひしならむ。予は是の論文に於て主として今の我小說家を警醒せり。十九世紀末の一大思潮たる個人主義の勢力を代表せる者、實に西の文豪詩人に外ならざること、随つて文學藝術の力時に科學哲學に幾倍するものあること、随つて文藝の士が文明の批評家として有すべき信念抱負の極めて遠大なるべきこと、是等の事項に關し予は今の我邦小說家に對して懇切なる注意を與へたりき。予の意が如何ばかり我が小說家に解せられしかは、審ならずと雖も、最も明なる事實は彼等がそを喜ばざりしこと也。如何に自然の徑行なるよ。彼等自ら信じて名譽とせる所のもの、予はすべて是を虛榮なりと嘲れり。彼等自ら信じて文學者の本分を盡せりとせる所のもの、予は指して卑賤に均しと罵れり。予は今の作家の言想依然たる舊世界の模作者なるを指摘し、是の模作者衣質にして提醒せられざる限りは、文藝界に前途無

闇黑あるのみと激語せり。足下よ、夫の茫々焉として兒女童幼の喝采の中に、詩神の桂冠を夢みつゝある彼等が、是の如き言を喜ばざるは、極めて自然の事ならずや。

然れども予は初めより今の多くの作家を以て予の言に警醒せられ得べきものと思はざりき。而かも能はざるを知りて尚ほこの侃諤を敢てせしむものは、後に來るべき多望なる青年文學者の爲に聊か先轍の戒を遺さむが爲なりき。足下よ、去るものをして速に去らしめよ、新教育と新文明と新理想の間に保育せられたる青年文學者の場に上るに非ざれば、文壇の事殆ど絶望のみ。其の出處に見、其の經歴に見、其の修養に見て、今の多くの作家は到底新時代の福音を傳へ得べきものに非ざる也。

足下よ、予は到頭文壇の悲觀者に終らざるべからざる乎。頃日、足下送る所のズーデルマンの『エーレ』を讀み、遙に獨逸の劇界を想望すれば、神往殆ど禁ぜざるものあり。顧みて鄕國の佳信、一も足下に傳ふべきものなきを思へば、恨何ぞ堪ふべけむや。

（十）

足下よ。藝苑の落寞是の如きを致したるは、素より時勢也、而かも予は今の思想界の無趣味、沒理想、實に是か近因たるを思はざるを得ず。願はくは卑見を致して足下の教を乞はむ。

足下よ、最近數年間に於ける本邦思想界の趨勢が倫理的、教育的に傾きつゝあるは爭ふべからざる事實也。文科大學が年々出すところの卒業生中、其の最多數を占むる者の一は常に倫理、教育の學士也。精神科學の研究を目的とする會合、團體中に於て最も多數を占むるも亦常に倫理、教育の學會也。新刊雜誌、著譯書に就いて見るも、倫理、教育に關するもの最も多きに居る。夏期講習會に於て村夫子の間に最も歡迎せらるゝものも亦常に倫理、教育の講師也。倫理なる哉、教育なる哉、今の本邦思想界は倫理と教育とを措いて、一日も存立し難きものの如し。足下よ、是れ果して何の現象ぞ。

本邦道德の頽廢は吾人の等しく憂とする所也、其の救濟の目的を以て起りたる倫理、教育に關する研究及び運動は誰か是を歡迎せざらむや。方今倫理、教育の學者、運動家幾百千人ありとするも、予は是等の人々に向つて愛國の士たるを拒むものに非ざる也。只予を以て是を見る、彼等の所謂倫理、所謂教育の餘りに偏狹に失する無からむや。角を矯めて牛を殺すは癡人の事たり。予は彼等が[illegible]の下に是の癡人たらざることを希はざるを得ず。

予を以て見れば、彼等の多くは倫理、教育が人生の爲に存するものなるを遺却して却て彼等の所謂倫理と教育とを以て人生を律せむとするものの如し。彼等が倫理、教育の理想を說いて村夫子に示す所のもの、甚だ鹿爪らしからざるに非ず、唯疑ふ、彼等自らは如何ばかり人生を解し得たりとするや。宗教の思想なきものは人生を解すべからず、文藝の趣味なきものは人生を解すべからざる也。一枚の野花を以てソロモンの榮華よりも大なりとするの消息を了するものに非ざれば人生を解すべからざる也。彼れは歷史に於て無數の自己を認めざるべからず、彼れは哲學科學が吾人に訓へ得る所のものよりも、人生なるものの意義更に更に高く且遠きものなるを悟らざるべからず。一言すれば、彼れは最も完全なる意味に於て『人』たることを要する也。是の如き人にして初めて倫理と教育とを語るべし、何となれば倫理と云ひ、教育と云ふ、畢竟人生を解釋して其の理想を現示するものに外ならざれば也。

足下よ、現今我邦に於て所謂教育家、倫理學者の多く如何なる種類の人なるかは、足下既に

知了せる所ならむ。彼等は人生の事すべて哲學上の冷刻なる思索により解釋し得らるべしと信ぜる也。彼等は五六の西洋倫理書の素讀によりて、人生の理想輒ち解し得たりと爲し、茲に學說の異動を辯じ、社會の進化を說き、個人と國家との關係を明にし、更に將來の道德に關して論斷するところ、人をして耳聞目瞎の感あらしむ。彼等は是を以て自得の眞理となし、論文に著書に、到るところ其の說を公告し、工業家に遇へば則ち工業道德を論じ、商業家に遇へば則ち商業道德を說き、其の狀恰も一切人生の指針、藏めて是の胸に在りと爲すものの如し。あゝ足下よ、彼等の多くは實に是の如き徒なるのみ、何ぞ其の云爲の偏狹、固陋、乾燥無味なるを怪まむや。蓋し彼等の所謂道德は極めて簡明なるのみ。是の多面多趣なる大いなる人生より一切の宗教を省き、一切の文藝を去り、一切の趣味を却け、一切の理想を沒し、餘す所のもの即ち道德なりとする也。其の村學究的、道學先生的なる、寧ろ當然のみ。

足下よ、予は茲に道德の價値を評論するの遑なきを憾とす。唯予の信ずる所を以てすれば、道德全能主義は由來東洋民族の痼疾なるが如し。吾人自ら製作したる道德を全能なりと妄信するの日は、即ち是れ方便主義、僞善主義の勝利を得たるの日也。予は想ふ、道德全能主義の自縄自縛に過ぎざるを認め、道德の支配者が其の根柢に於て個人に外ならざることを明にし、更に人間本然の要求を無視するものは如何なる場合に於ても人生の目的を阻害するものなることを痛切に覺悟するは、あらゆる道德の根本たるべし。是の根本に對する覺悟にして誤らむか、寧ろ道德なきを可なりとせむ。

足下よ、今の日本の社會は新舊道德の過渡期に際す。是れ從來久しく方便主義の桎梏に苦みたる吾人が、大に其の本然の要求を發言すべき好時機に非ずして何ぞや。彼の村學究と道學先生と、果して何爲るものぞ、何を苦みてか其の煩瑣、冷淡、無趣味、沒理想なる彼等が所謂道德主義を以て吾人を累はさむとする。予は今の時に於て道學先生の倫理運動よりは寧ろロマンチシズムの勃興を希望せむ、庶幾くは我が思想界の面目爲に一新せらるゝを得むか。

然れども足下よ、悲しい哉、是の如き希望はながく實現せらるゝとき無かるべし。道學先生は依然として其の所謂道德を講ずべく、村學究は舊によりて其の所謂教育に當るべく、而して社會は彼等の影響によりて益々其の煩瑣と冷淡と無趣味と沒理想とを加ふべき也。嗚呼足下よ、薔薇花は砂漠に咲かざるなり、本邦文藝の前途亦遠い哉。

（十一）

嘲風兄足下、予は未だ言はむと欲する所の半ばをだも言はざる也。唯紙幅限りあり、更に後來を期せむ。予近來文辭に遠かりてより平生の惡文、更に甚しきを加ふ、足下を累はす實に大なりと謂ふべし。晩翠兄近日西歐に遊ばむとす、足下と相見るの日、談若し予が事に及ばゝ、幸に日本湘南の海涯に、病軀を抱いて遠友を憶ふものあるを忘るゝ勿れ。是の文を草するの夕、海靜に風和ぎ、伊豆半島の夕照、恰も紅を流せるが如し。あゝ舊知の山河、亦新粧を呈し來る、人生獨り何ぞ舊によりて落寞たる。時下北歐の風物恐らくは人に佳ならず、幸に加餐せよ頓首。

（明治三十四年五月）

# 現代文章私見

## （一）序言

先に、予は作文に關する私見の一端を述べたりき。頃日、讀者の一人書を寄せて謂へらく、高論は則ち了し畢んぬ、たゞ後進の子弟、法を現代の文章に求めむと欲せば、それ何人をか師とすべきと。げに理たる問なり、想ふに本誌の讀者中、是れと同一の疑惑を抱けるもの尠からざるべし。卽ちこゝに私信に答ふるに閒書を以てす、事必ずしも徒爾に屬せざらむを信ずる也。

然れども人各々見る所あり、吾れを以て直に他を律せむは抑も危し、況んや事文藝の嗜好に屬し、關はるところ皆悉く現代の人、加ふるに知交亦其の半ばに居る、一是一非、予に於て必ずしも容易の業に非ざる也。願はくは讀むもの、予が言を以て直に他を評價せるものと爲すなく、たゞ暫く其の好む所に從ふものと見て可也。

## （二）雪嶺、蘇峰、及び鋤川

今の青年子弟の文を稱するもの、曰く雪嶺、曰く蘇峰、曰く鋤川、今の時に於て文名を青年者流の間に擅にしたるもの、蓋しこの三人に及ぶもの無からむ。予は先づこの三人に就いて見る所を述ぶべし。

雪嶺の文素と漢文より來る。是を以て法度の備はれる、篇幅の整へる、略々漢文の體を失はざるものの如し。成語を餖飣し、典故を臚列するところ、往々其の弊に勝へず、讀む人をして徒に佶屈聱牙の感を起さしむるもの無きにしも非ずと雖も、森嚴の中おのづから洒脱あり、重厚の間時に奇矯あり、若し夫れ一氣乘じ來れば、才思坌湧、論鋒犀利、筆端疑ふらくは風雨を捲き來る。而かも奔放の中檢則あり、縱横意の如くならざる無くして、而して章句の法尚ほ嚴として存するを見る。喩はゞ駿馬の急坂を下るが如けむ、疾驅飛ぶが如しと雖も、四蹄石に着く處、歩々力あり。彼れの氣焔大に昂りては輙ち散漫雜駁の弊に陷るもの、おのづから其の撰を異にす、是れ雪嶺の文の學び易からざる所也。

蘇峰の文は才子の文也。一介無名の書生にして忽ち天下の文權を風靡したるもの、奇才に非ずんば無し能はざる所也。將來の日本の一書、今日より見れば必ずしも珍とするに足らずと雖も、十五年前の當時にありては、眞に破天荒の文字なりし也。爾來、蘇峰の文は時と共に進歩し、其の冗漫は漸く簡勁となり、其の浮誇は漸く沈重となり、其の稚氣は漸く老蒼となりたれども、畢竟依然として才子の文也。文品何となく輕薄にして篤厚の風に乏しく、まゝ平俗の思想を飾るに造語用句の技巧を以てするところ、識者潛に是を惜む。是を以て理到り意徹するに、其の文未だ能く人を動かすに足らず、蓋し情に於て迫らざる所あれば也。

今蘇峰の文を以て雪嶺の文に比せむか、彼れは理に長じ、此れは氣に勝つ。彼れには觀察の奇警あれども、風雲の意味に乏しく、此れには氣節の高潔あれども、理義の徹底は則ち未だし。彼れは常識に本づくを以て動もすれば平板に陷り、此れは意氣を尙ぶを以て往々奇矯に走る。見來れば、二者の文、畢竟二者の性格に外なら

ざる也。

蓋し雪嶺は氣節の士也、蘇峰は功利の人也。昔者錢廣山、才富み學博く、名聲嘖々として一時の文柄を操りき、然れども彼れ身は勝國の大臣を以て新朝の官爵を受け、而して外節士に附いて却て口舌を以て人を欺かむとせりき、是を以て遂に後世の指斥する所となる。想ふに蘇峰の進止亦廣山に似たるところなしとせず、是れ予輩の潛に彼れが爲に悲む所也。蓋し文を論ずるに人を以てする、必ずしも當れりとせず、唯其の人によりて其の文を品するに及びて、情僞是非、更に一段の分明を加ふるものあり。是れ節行の亦文士に重ずべき所以なるか。雪嶺は一寒士、十數年來名利の外に立ちて偏に其の名節を砥礪す、人物文章共に傑然として重きを爲す、又偶然に非ざる也。

然りと雖も、予は必ずしも雪嶺を揚げて蘇峰を貶せむと欲するものに非ず。人各々長ずる所あり、一是一非、尙ほ盡さざる所あるを見る。蘇峰は常識に明にして、觀察の才あり、是を以て新聞記者としては當代の第一人と稱するも、予決して其の過褒に非ざるを信ずる也。今の時、都下大小の新聞無慮二十有餘、其の記者として多少の名あるもの亦少しとせず、然れども、彼等の多くは一業一門の記者たるなり。政論に巧なるものは是れあり、法律經濟に精しきものも是れあり、敎育、文藝、宗教に通ずるもの、社會問題に明なるもの、各々其の人に乏しからず、而かも、是等各方面を包括して等しくインテレストを有し、是に關する意見を具體的に發表し得るものは、今の世に於て一蘇峰あるのみ。是の點より見れば、彼れは大成の新聞記者なりと謂ふべし。是を雪嶺の議論の往々迂遠にして時務に適せざるに比すれば、寧ろ同日にして論ずべからざるを覺ゆ。

若し夫れ矧川に到つては、予は寧ろ彼れの文名の如何にしてしかく盛大なりしかを怪まむと欲する也。彼れが著『南洋時事』は、蘇峰が『將來の日本』に次で尤も多く青年に愛讀せられたる書籍なりき、然れども今にして是を見る、果して何の奇かある。雜誌『日本人』に載する所の彼れの論文の如きも、今にして考ふれば、桂月、天隨の一輩に劣ること數等のみに非ざりし也。『日本風景論』は、慥に彼れが獨得の著書、着想の奇警なる者無きにしも非ざれども、素より蘇峰、雪嶺の文字と並び稱せらるべき價値あるものに非ず。而して近年讀賣紙上に間々揭ぐる所の地理紀行の文章の如きは文情文品更に下落せるを見る。概して言ふ時は、矧川の文、理徹せず、情迫らず、瀟洒は則ち是れあるも、大抵散漫の誤りを免れず、動もすれば瓦礫雜投、その醇駁に勝へず、是に於て推埰の弊あり、裝飾の弊あり、稱氣紛として近づくべからざるに到る。畢竟彼れが文の如きもの、今日斗を以て量るべし。青年者流が今日尙ほ特に彼れを稱する所以の者、果して那邊に存するか、予の解する能はざる所也。

## （三）政論家の文章

雪嶺、蘇峰の外、今の新聞記者中、文名あるもの尠からず。陸羯南、朝比奈知泉の如きは蓋し其の尤なるもの也。

羯南の文、人をして呂東萊の時文を聯想せしむ。文路暢達、毫も窘促の態を留めず、漢文の格ありて而して今ならず、時文の理ありて而して古ならず、おのづから一格を成す。語嚴肅、意悠揚、例へば名將三軍を指揮して平野に戰ふが如し。其の態度の正々堂々たる、現代政論家中稀に見る所なり。唯其の變に臨みて迫らず、機に應じて移らざるや、往々にして單調平板の弊あるを免れず。是を以て法言懿則は則ち聞くべきも、辯難攻擊は則ち未だし。是を雪嶺に比

すれば、謹嚴は則ち過ぎて、洒脱は則ち及ばず、沈鬱は則ち餘りありて、飛動は則ち足らず。若し夫れ窮通一閉の機變に應して、出沒變幻の奇工を弄するが如きは、翔南遂に雪嶺の敵に非ず。

知泉の文は論難攻擊に長ずるを以て著はる。其の理を構ふる精核、其の論を立つる嚴峻、縱橫博辨、毫も缺隙を留めず。其の敵に接するや、冷酷にして、一歩も假借するところなく、其の勢に乘ずるや、千乘萬騎の奔馳するが如く、英氣颯爽、傍ら人無きが如し。蓋し覇才也。たゞ知泉の文、刑名理法に是れ走りて、往々强辯附會の嫌あり、是を以て文意窘迫、人をして面を背けしむるもの無きに非ず。畢竟嚴酷に過ぎて肅穆の風を缺く、理は則ち爭ひ得べけむも、情は則ち動かし難からむ。彼れが文を評して戰國策士の文と謂ふもの、蓋し大過なかるべき也。

翔南、知泉の外、沼南あり、淚香あり、春汀あり、石川幹明氏あり、池邊吉太郎氏あり。何れも新聞記者中の能文家也。

沼南の文は猶ほ其の辯の如きか。論理精密、文字平明、奇構なく、奇趣なく、混々として些の渟滯を見ず、理究まり意達して而して後已む。乾燥無味の嫌無きに非ずと雖も、亦一種の異材たるを失はずと言ふべし。

淚香の文は人多く知らざるものゝ如し、而かも其の文の暢達奇矯なる、今の新聞記者中、多く其の倫を見ざる所也。彼れが文詞句に於て整はざる所ありと雖も、委曲周匝、能く其の言はむと欲する所を言ふ。夫の空文虛辭を排列して遂に無意義の文章を作爲するものと同日の論に非ざる也。加ふるに論理精明、文に一種の奇構あり、常に讀者の注意を喚起して卒讀を覺えざらしむ。唯惜むらくは、達意を旨として修辭を力めず、是を以て文品少しく野鄙なるを免れざることを。

春汀は人物評を以て其の獨擅となす。其の月旦は悉く現代の人物に關するを以て、其の言を婉にし、其の辭を微にし、力めて鋒鋩を露はさざらむとするところ、尤も學び易からずとなす。加ふるに其の文悠揚にして迫らず、靄然として情の掬すべきものあり、夫の奇怪自ら悦ぶものに較ぶれば文品遙かに高し、蓋し時文の最も正體に近きもの乎。春汀近時報知社に入りて其の論說を擔當す、而かも太陽載する所の月旦評に較ぶれば殆ど別人の手に成れるが如し。彼れが本領此れに在りて彼れにあらざるを見るべき也。

石川幹明氏は時事新報の記者也。彼れは巨人福澤諭吉氏の背後に潜みしを以て、其の名殆ど全く顯はれずと雖も、近年時事の論說欄に表はるゝ文字は、概ね此の人の手に成れりと云ふ。其の文平明和樂、兒女翁媼も尚ほ是れを解し得べし。理に偏せず、情に走らず、一に常識によりて打算し諄々として人に接す、所謂福澤流の最も純粹なるもの也。所謂福澤流の文章は文字の奇なく、章句の工なく、たゞありのまゝの事理をありのまゝに言ひ表はすのみ。是を以て理通ぜざるなく意貫かざる無し、而して其の影響は實に普く國民の上下に亙る。かの所謂文章家の文字が、小數によりて玩味せらるゝに較ぶれば、其の勢力の大小、日を同じうして語るべからざる也。

池邊吉太郎氏は東京朝日の主筆にして、其の往年佛京巴里にあるや、鐵崑崙の名を以て文名を日本新聞紙上に轟かせし人也。人は謂ふ、往年の文章、今の氏に於て認むべからずと、予を以て見れば則ち然らず。現時の東京朝日の論說は、都下の如何なる新聞紙に對するも、決して遜色無かるべき也。氏の文字雪嶺の奇峭なく、蘇峰の才思なく、翔南の儀容なく、知泉の精悍

なしと雖も、意匠にして品格、邊幅を飾らずして氣格おのづから老蒼なるも、氏に於て獨り是れを見る。今の文を言ふもの、かの四人を說いて而して池邊氏に及ばず、區々たる文名素より氏に於て增減するところ無かるべきも、而かも世評の沒鑑識は深く遺憾とすべき也。

以上述べ來りたるところは所謂政論家の文章に係る。大凡政論なるものは、事概ね目前口頭の實務に關するを以て、雅致詩情に乏しきは其の免れ難きところ、恐らくは曠世の大文豪を以てするも、多く施すところ無かるべき也。是を以て政論によりて文名を成せるもの古より甚だ多からず、想ふに文章の妙はまた文藝の範圍內に求むべき乎。

然らば則ち我邦文學家の文章は如何。

## (四) 逍遙

文學者中にて文名最も高きものは、先づ指を坪內逍遙と森鷗外との二君に屈すべし。

逍遙の文は一概にして論ずべからず。人若し君が大學卒業の當時の著述なる『小說神髓』の文章と、早稻田文學時代の文章とを較ぶれば、其の體裁の上に少からざる相違を認むべし。更に早稻田文學時代の文章と數年以來の文章、例へば倫理教育、歷史書に關する諸論文とを較ぶれば、其の間に亦多少の變化を認めざるを得ず。是によりて見る時は、君の文體は明治十八年頃より今日に到るまで少くとも三段の變遷を經由せりと觀るを得むか。即ち小說神髓の時代にありては主として馬琴に負へるものの如く、早稻田文學時代に到つては是の馬琴模倣の段階より進んで却て君が獨得の文體を發揮したるものと謂ふべく、而して數年前君が文學界より敎育界に轉じたる頃よりは、其の文も亦君が敎育主義の影響を受けて更に別種の體裁を成し來れるものの如し。

君の文體は是の如く三段の變遷を經由せりと雖も、そが本來の面目は流石に掩はるべくもあらず、其の眞摯なる情想と周到なる注意とは到る所に現れたり。其の用語は常に妥當にして毫も誇大鋪張の病を見ず、語法亦常に嚴肅にして一絲亂れず。間々滑稽洒脫の趣あるも法度おのづから其の間に備はりて少しも散漫の弊に陷らず。時に檢束餘りありて放縱やゝ足らざるの憾なきにしもあらざれども、諄々として理を窮め、切々として情を責むるところ、極めて力あり。漫りに大言壯語して他を威壓せむとするものに比すれば、文品遙に優るもの、あるが如し。而して極めて平明の文字を以て艱深の理義を穿ち、着々として肯綮に中るところ庖丁牛を解くの概あり、游刃常に餘地あるを以て文情詩趣亦おのづから油然たり。蓋し空文によりて空理を闘はすは君の常に避くるところ、是を以て如何に抽象の事理と雖も一たび君の筆に上れば忽ち其の體形を具し來り、人をして耳聞目睹の感あらしむ。比擬提喩是の間に百出して、讀む者又高遠なる理窟三昧に彷徨するを覺えざる也。時文育家、君に於て獨り這般の妙を見る。

而して吾人の最も君に服するは、其の能く人の言に聽き、人の理を容るゝところにあり。是の如きは寧ろ君の性情に屬すと雖も、是の性情ありて文章亦一段の品格を高うせるを見る。夫の豫め成心を挾みて他に對するもの、言論未だ外に交らざるに、排擠の勢既に內に成る、是を以て論理窮屈、氣勢徒に張りて文品愈々低く、蕩然として實の人を動かすもの無し。君の文は則ち然らず、辯難攻擊に際して能く對手の言ふ所に聽き、力めて其の理に同ぜむとして而して同ずる能はざるに及びて、乃ち徐ろに反對の態度に出づ。而かも尙ほ他に許すに一家の見地を以てし、強ひて自己に同じきを求めず、唯務むる所は理窮まり情徹するにあり。其の氣

度の寛裕なる、流石に老大家の風ありと謂ふべし。

## （五）鷗外

若し夫れ森鷗外は其の文體に於て、其の論法に於て、其の理想に於て、其の批評家なる態度に於て、其の他殆ど凡ての點に於て、逍遙と甚だ同じからざるものあり。而かも逍遙と並びて當代一流の文豪たるの一事は則ち相同じ。

鷗外の文は謹嚴を以て鳴る。其の文字は漢文の嚴正を襲いで佶屈の病なく、國語の婉曲を似して冗漫の嫌なく、章句の法、巧に和漢を折して是を行るに一家の文脈を以てす。渾然として斧鑿の痕を留めず、文品甚だ高し。蓋し君が天才の然らしむるところ、最も學び易からずと爲す。而して所謂君が一家の文脈なるもの主として歐文より來れるものの如し。紆餘曲折、縱横自在、文華四もに飛び光彩四邊を拂へども、一條の理義綿々として其の間に貫通す。その理を析くや幽微、論を行るや森嚴、加ふるに間々詩趣あり、風韻あり、措辭の巧あり、造語の奇あり、人をして卒讀を覺えざらしむ。

君の文抽象の理を述ぶるもの多し。是の種の文章にありては宛然として君が獨逸學者の風度を見る。是れ逍遙が英國派の學風を受け、好んで淺近の事を假りて高遠の論を爲すに比すれば、二君の面目おのづから明なるものあり。君既に好んで抽象の理を述ぶ、其の語義ま〻艱深にして解し難きものある、蓋し已むを得ざらむか。加ふるに君が學語の製作に關して一家の見地を有するや、其の用ふる所の文字往々世上に流布する所のものと同じからず。之を以て君の文に慣れざるもの、動もすれば晦澁不明を以て評するものあり、吾人潛に君の爲に是を憾とす。殊に近時の譯述に係る美學上の論著にありて是の憾特に深きが如し。

然れども是の如きは毫も君が文章の價値を增損するに足らざるべし。人或は君の文謹嚴に過ぎて洒脫の趣無きを言ふ、是れ或は然らむも、而かも恣に全きを望まば何ぞ必ずしも一二にして足らむや。一代の大家、君の如きは、人唯須らく其の長所に見て自ら學ぶ所あるべき也。

## （六）逍遙と鷗外

今試に逍遙、鷗外二君の文章を對比すれば、彼れは平明にして記述に長じ。此れは精嚴にして論議に通ず。彼れは事を假る淺近、力めて具體の事を說き、此れは論を構ふる高遠、好んで抽象の理を述ぶ。彼れは常識に基きて成るべく通俗ならむことを力め、此れは學理に據りて必ずしも難解を憚はず、彼れは時に[illegible]して洒脫の言を弄べども、此れは終日危坐して肅敬の容を崩さず、彼れは諄々たり、此れは昂然たり。若し夫れ批評上の態度に至つては彼れの尙ぶ所は記實也、經驗也、沒理想也、此れの重ずる所は眞理也、考察也、理想也。其の傾くところ、彼れは客觀的にして此れは主觀的、彼れは包有的にして、此れは超絕的也、兩々相對峙して其の獨擅の地歩を占むるところ俄に他の軒輊を許さざるものあり。明治文壇の二君に負ふところ蓋し小少ならざる也。

## （七）青年文學者の文章

逍遙、鷗外の二君は文壇の耆宿也、然れども若し吾人に許すに歷史上の見地を以てすれば、文學者としての二君の事業は、過去に於て其の大半を終れるものの如し。逍遙君教育に隱れてより既に數年、鷗外君亦京を去りてより往年の意氣復見るべからずとせば、文壇の將來は事實に於て二君の繼紹者たる青年文學者の手に委ねられたりと謂ふべき也。知らず、青年文學者中

二君の後を享けて遜色なきものありや否や。

今の青年文學者の文名あるもの、十にして足らず。曰く抱月、曰く梁川、曰く桂月、曰く天隨、曰く劍峰、曰く嶺雲、曰く鯉洋、曰く臨風、十指殆ど屈し盡して遺算尚ほ多きを覺ゆ。是等の諸君は皆是れ一時の選、素より傍人の上下を容れずと雖も、試に少しく吾人の見る所を述べむ乎。

抱月は早稲田出身第一の文章家也。逍遙が馬琴の模倣を力めしことあるが如く、君にも亦逍遙の擬似を事とせし時代ありき。『早稲田文學』發刊の當時に於ける君が文を細想すれば思ひ半に過ぎむ。然れども逍遙が幾もなく馬琴の圈套を脱せし如く、君も亦永く逍遙の踏襲者に非ざりき。近時君の手に成るもの、おのづから一家の體裁を具へ、儼として峙立するところあるを見る。凡そ君の文謹嚴にして典雅、精練にして簡穠、殊に修辭の巧を稱すべし。彼の明堂辟雍を造るもの、門階戸席、皆程式あり、一楹一牖と雖も妄に移易すべからざるもの、取りて君の文に喩ふべけむか。唯惜むらくは撿束に過ぎて氣焔に乏しきを。其の幽微の理を論ずるものにありては、語平明、意透徹、推闡轉折の間に於て錯綜の妙を極むるところ、故大西操山の遺風を見る。蓋し君の如きは優に當代の文章家を以て許すべきものなるべし。同門の士にして文名あるもの綱島梁川ありと雖も、君に較ぶれば一籌を輸せざるを得ざるべし。

赤門出身者の文を能くするものを擧ぐれば先づ指を桂月に屈せざるべからず。桂月の文は素と氣を以て勝る、一氣乘じ來れば雄健横絶、離奇夭矯、萬馬亂れ奔り、風雨俄に到るの概あり。理必ずしも精核ならず、說必ずしも妥當ならざるも、意力あり、情熱あり、生氣筆端に溢れて光芒四邊を拂ひ、讀む者をして心驚き目眩み、恍として端倪に遑あらざらしむ。是の如きは學んで得べからず、眞に天賦の文才なりと謂ふべし。但其の氣に任せ情を恣にするや、往々奔放に過ぎて放縱に陷り、鋪張に過ぎて浮誇に近づき、沈靜醇雅の趣に於て少しく缺くる所あるを恨みとすべし。君が才氣の横溢と詞藻の豐富と、和漢文學の蘊蓄とを以てして、尙ほ是の病を見るは、蓋し多忙の間に筆を落して沈潛未だ足らざるの致すところか、否乎。

劍峰、嶺雲、鯉洋、天隨は何れも漢文學の學士也、是を以て其の文亦主として漢文より來る。

劍峰の文は正々堂々たり、喩へば名將六師を率ゐて關を出づるが如し。布置章法秩然として一絲亂れず、錯落參差の奇趣乏しきも、文字は醇正にして鍊、事理は明白にして切當、蓋し漢文の正體に近きもの乎。嶺雲の文は佚宕横肆、好んで怪奇を弄す、齊整は劍峰に如かざるも、淋漓は則ち過ぎ、才氣は桂月に及ばざるも、奇峭は則ち優る。鯉洋の文は太だ嶺雲に似て少しく及ばざるもの乎。

若し夫れ天隨は新進文章家として現下隆々の名聲ある者、其の文雄健自在、豪氣汪溢、縱横の姿態を盡す。唯君は餘りに漢文漢詩の素修に富めるを以てか、其の用ふる所の文字、語法、亦餘りに支那的なるに過ぐ。動もすれば無用の典故を援引して却て文義の散漫を致し、不急の對句を臚列して論理の朦朧を招くところ、寧ろ勞して損ありと謂ふべし。其の弊の及ぶところ人をして往々其の文字の爲に枉ぐるに非ざるやを疑はしむ。吾人君の爲に竊に是を惜む。要するに君は桂月と共に赤門文士中の最も能文にして且最も健筆なるもの也、唯其の健筆に乘じて文を作ることの餘りに多きに過ぎむことを憂ふ。多作必ずしも濫作に非ずと雖も、推敲沈思の一段に於ておのづから缺くる所あるを免れず。天隨たるもの、其の才器に恃みに須ら

く自重することあるべき也。

臨風の文は漢文の素養ありて而して漢ならず、國文の蘊蓄ありて而して和ならず、其の間一分の俳味を帯びて瀟洒輕妙の姿態あり。蓋し亦一體たり。桂月は情に熱し、抱月は理に拘はり、天隨は文に役せらる、唯夫れ臨風は能く情を解して執着せず、理に明にして拘泥せず、而かも風韻あり、雅致あり。蓋し風流才子の文か。

若し夫れ其の弊を擧ぐれば、輕妙餘りて重厚の風に乏しきを惜むべしとせむ。其の史論、亦一家の體裁あり、夫の乾燥無味なる史料綱纂先生と甚だ異なるものあるを多とすべし。往年の著、『日本地氣論』の如きは識見文章共に、矧川が『日本風景論』に優る數等のみに非ざる也。

以上は青年文學者中、文名既に世に籍けるものに就いて言へる也。是の外、其の名未た甚だ高からざるも望を將來に屬すべきもの、尚ほ少からず。是の文彼れを取り此れを捨つ、必ずしも褒貶の意を寓するものに非ざる也。

## （八）結論

現代の文章に就いて予の見るところ概ね此の如し、讀者顧みて自ら悟了する所あるべき也。終りに唯一言青年諸子に告ぐべきあり、文章の基づく所は其の人の品性也。文字は學で得べく、體裁は倣ひ得べけむ、唯其の氣格、神髓に至つては遂に其の人の品性に賴らざるを得ず。是を以て品性の修養は作文の第一義也。是れを是れ務めず、徒に粉飾彫琢を是れ事とするものは畢竟戯作者流の餘技のみ。然れども文章も亦一種の技術なるを以て技巧の習練に待つある、素より言を須ゐず、唯是の場合に於ても亦徒に老人の模倣を事とする勿れ。己れ能く先人に如かむと欲せば、亦等しく先人の學びたる所を學ばざるべからず。予は今の青年諸君が文を見るの甚だ輕からむことを憂ふる者也。

（明治三十四年五月）

# 恐ろしき沈默

大いなる戰爭の前には恐ろしき沈默あり、而して戰爭の勝敗は、凡て是の沈默の間に成さるゝ也。

今や、見渡すところ、日本の社會は平和の社會也。政治、宗教、教育、學藝、何れの方面に向ひても、大いなる爭鬪なく、大いなる運動なく、大いなる旗幟無く、大いなる輿論公議無し。然れども吾人は是の無事なる社會の裏面に於て、幾多の暗流の交錯せるを認む。而して將に來るべき社會の性質は、是の暗流が如何なる方向を取り、如何に綜攝せらるゝやによりて決定せらるべき也。

願くは大いなる決斷あれ、大いなる飛躍あれ。是の大決斷、大飛躍に達せむが爲には、已むを得ずんば、大いなる爭鬪を爲すも可也。最も恐るべきは、一時の苟安也。眼前の彌縫也。斯かる場合に於て平和を好む人民は、古より大いなる功業を成し遂け得ざる人民也。恐ろしき沈默の後には、必ず恐ろしき戰爭あるべきを覺悟せよ。

（明治三十二年六月）

# 文藝雜談

## 一　插畫

この頃の文學雜誌又は詩集に插畫無きは稀なるが、その多くは插畫と云はむよりは一種の模樣とも見るべきものにて、其の技巧はいと〳〵拙きが多し。日本畫かと見れば骨法用筆の工夫もなきのみか、思ひもつかぬ處に陰影を施せるなど西洋畫らしくも見ゆ。さて西洋畫かと見直せば、聊か形の似よりはあれど、明暗の描き方など更に相應はしからず。さらば所謂新派獨創の新畫とも許し見むか、東西古今の流派を離れて何處にかその新らしきを誇り得べき點ありや。かゝる化物畫をば新派と唱へ奇と稱ふるは何の見る所ありてにや。

總じて高尚なる美術としての插畫は我邦人の多く知り能はざる所なるべし。こは一つは我が繪畫の性質にも因るべけれども、技倆ある畫家初めより卑野人の小技としてそを卑むるにも因るが如し。されば新聞雜誌又は小說等の插畫に見るべきもの甚だ少く、例へばかのテオドル・ドレなどの諸作品に見る如き偉大なる成功は我邦にては殆ど想ひも寄らざる所也。予は是の點に於て本邦畫家の三省を促すべし。

## 二　ドレの插畫

ドレの作にて最も有名なるはミルトンの失樂園の插畫と聖書の說明畫となるべし。前者は友人晩翠の許にてしば〳〵是を見たるが、その崇高神秘なる表情はドレ獨得の深酷なる描法によりて殆ど遺憾なく發揮せられ、失樂園の本文も爲に一層の光焰を放てるが如し。一夜の如く黑く、塔の如き高き魔王の姿、陰慘なる地獄の光景などは言ふまでもなく、「創造」の大題目を捉へて波濤の如き連山の頂、いつしか大蛇沖天の化成せるが如き、其の想像の偉大にして其の描法の奇拔なる、一個無聲の大詩篇也。聖書の說明畫は予の書架中にもあり。ソドムの陷落、ダニエルの獅子窟、或はサムソンの最後など何れも見るべし。新約の終り、十字架上の基督の如き殊に崇大を極めたり。

總じてドレの作、個性の包容豐富にして、體勢の變化極まりなし。殊に數十人を一幅に集めて其の奔馳、格鬪、憤怒、驚怖の狀情を現じて活けるが如きは、本邦畫家などの企て及ばざる手腕と謂ふべし。本邦の畫家にありては太だしき怪奇の面貌を許すに非ざれば恐らくは十人の個性を現はし得るもの無かるべし。少しく表情按配の困難なるに遇へば、すなはち種々の方便を以て是を塗糊し、掩飾し、曖昧の中に其の責を免れむと欲す。而かも尙ほ其の虛飾の凡情を離れざるや、其の表現せむとする當體の果して本文の要求に稱へるや否やを省みず、ひたすら自家の小技倆を衒はむと力むるの惡習慣あり。愼むべきこと也。

## 三　人の容貌

人の容貌を吟味して其の性格と想ひ合はせむはいと〳〵興味ある業也。予はこの目的にて現代の人に就いていさゝか考へ試みしことあれど、流石に憚りあることとて言ふべき機なくて過ぎぬ。

西洋人の中にて好ましきは、ゲーテ、ヘーゲル、ショペンハウエルなどの顏ばせ也。譚みの影だになきゲーテが圓滿なる面に現はれたる平

和は、即ち是れ人生の最も大いなる苦痛に打ち勝てる表章なるを想へば、言ひ知らず貴し。ヘーゲルの面ばかり威重と自信と平和との表はれたるはあらじ。ショ氏の顏には悲愁皺深く刻まれたれど一分嘲世の氣ありて其の人格の超絶を示現せるところ、たとしへなく美はし。吾等人に對する時、何とはなく、たとへば重き石もて頭上を壓されたらむ如く、面を擧け難ぬるまでにけおさるゝ事あり。奇矯物に滯らざるハイネの如きすら、始めてゲーテに會へる時、その威容に打たれて言ふべき事も言ひ得ずして、空しくワイマルの麥酒を稱ふるまでの無念を忍びたりき。

今の我邦にて斯かる人に邂逅ふこと頗る稀なるべし。路行く人に是れはと心附かるゝ顏容の人は甚だ少く、多くは物欲しけなる賤しき面構へなり。予の見る所にては、婦人は知らず、男子の美は今の日本に於ていたく荒れすさびたり。

## 四　文藝は嚴肅也

「人生は嚴肅也、文藝は遊戯也」とは古の詩人の套語にして人のよく唱ふる所なるが、予は然か思はず。文藝は決して遊び事に非ず、その意義の嚴肅なることに於て決して人生に劣るまじき也。

予は常に好んでバイロン、ハイネ、ケョルネル等の詩を讀む。予は是等詩人の文字を通じて人生の最も嚴肅なる事相を感受するを樂む。畢竟是の如きは文字にあらずして精靈のひゞき也、血汐と涙の痕也。吾等の胸に打てば應ふべきあらゆる人生の憂悶と悲愁と希望と歡喜と、活ける呼吸を通じて吾等の耳にひゞく也。吾等は箇中に作者の生涯を想ひ、彼等が自讀せる人生の事相によりてその詩篇を解く。詩篇こゝに至りて人也、命也、人生也。

予はかくの如くにして詩初めて解し得べしとなす。げに等しきもののみ等しきものを解し得べし。文藝を遊戯と觀ぜむは、かつて涙を以て其の麵麭を割きしことなき徒のみ。

## 五　當今の文章

當今文を能くする人甚だ多し、されど吾等を以て見れば多くは優人の其の面に粉して喜怒哀樂を裝へる類ひのみ。意誠語朴の人を動かすものとては甚だ少し。かの青年讀者流、その才に任せ其の氣を驅りて巧に優麗閑雅の文藻を綴れども、その情に於て既に眞摯の一義を缺く。細心精緻又何かせむ。西歐文藝の風丰を傳ふると云ふもの、唯西施の顰に倣へる類ひのみ。吾等を以て見れば戯文たるを免れず。戀と云ひ、望みと云ひ、慰めと云ふ、是れ人生の一大事也。人はその文字を弄ぶに先ちて、自らの血と涙とを以てそを解釋せざるべからず。

## 六　眞正の寫實

予の知れる小說家中、寫實に最も長けたるはズーデルマンにして、最も拙きはゾラなるが如し。ゾラは通例寫實の大家と稱せらるれども、たゞ〳〵精しきのみ、順序なく統一なく精しきのみ。そが主觀上の印象より見れば寫實の本義を去ること頗る遠しと謂ふべし。ズーデルマンは然らず。その事を記し景を敍するに當りて畫面の物象を僅少なる觀念に約して、餘は是を讀者の想像に委ぬるところ、繁々として肯綮に中らざるは無し。一句、二句、五字、七字、身は忽ちにして作中の人となり了るを覺えしむるは、他作者に於て殆ど見るべからざるの技倆たるが如し。

今の我小說界に自ら寫實家と稱するものあれども、概ねゾラ一流の無意義なる精緻を以て自ら得たりとするもの、ズーデルマンの亞流は予未だ是を見ず。往々人の語るを聞く、寫實は

凡才も尙ほ能くす、唯力めて達し得べきのみと。是れ大なる誤解也。眞正の寫實は天才にして始めて能くせむのみ。

## 七　例と談理

例を擧げて論ぜざれば解し難ぬる人あり。かゝる人には常識の外は談ずべからず、抽象の理は說き難し。高遠なる宗教の信仰、幽微なる文藝の趣味得て共に談ずべからざる也。

事例を以て解し得べくんば、吾等多くの場合に於て言論の要を見じ。事を離れ境を絕し、僅に理義によりて會通を求むるもの、如何にして更に事例によりて解說し得べき。ショペンハウエル曾て曰く、抽象の談理に堪へざるものは我が書を讀むことなかれと。予は今の凡俗學者に向つても亦同じく是の語を寄せむと欲する者也。

例に依らざれば解し得ざる人は、取も直さず想像の貧しきと、思考の足らざると、識心の到らざるとを證す。あゝ心はたゞ心を以て解し得べけむのみ。

## 八　俗學者の猾手段

世に分類を好む學者あり。例へば其人の價値を判定せむとする場合に、先づ是の人の屬し得べき種類を別ちて甲乙丙丁等と爲し、扨て是の人は甲にもあらず、乙にもあらず、丙にも丁にもあらず、故に何物にても無しと云ふが如き論法にて斷じ去る也。かゝる論法は一寸俗眼にて見れば如何にも精緻公平穩當らしけれども、實は甚だ危險にして且つ凡俗なる論法也。故如何となれば、凡て分類は人々の勝手次第に定むるものにて、其の人の考の精粗、又識見の高卑等にて如何樣にも差別のあるもの也。今甲乙丙丁等と分ちたりとて、甲乙丙丁等以外に尙ほ遺漏なきを保し得べきや。良し又遺漏無しとするも、所判の當體は活ける人也、甲乙丙丁等の何れにも屬せずして而かも何れをも含むと云ふが如き場合なきを得るや否や。甲乙丙丁と分つは人々の任意也。然れども茲に以呂波仁等と新たに分類し得べくんば如何。又は甲乙丙丁等各部の所屬若干づゝを結合し、取捨して幾多無量の分類をも爲し得べき也。單に甲乙丙丁等の在り來りの文字によりて活ける人を制定せむとするは、是れ小我の見に執着して、我以上の新事物世に無しとする大偏見也。されば是の種の論法は表面は精緻らしくして實は大粗漏也、穩當らしくして實は大不穩當也。所謂客觀的の判斷らしくして實は大の主觀的偏見也。今の學者是の種の猾手段を弄して俗目に媚びるものあり、注意すべし。

## 九　表

又學者の中には何事につけても表を作ることを好む人あり。こも亦利害相半ばすることを忘るべからず。表にて示せば打見たるところ如何にも明晰にして、所謂是を掌中に指すの觀あれども、表の作り方の誤りなきや否やを看破し得る人に非ざれば、動もすればその明晰なるに欺かれて知らず／＼論者の所說に化せらるゝ者多し。畢竟表は前項に述べたる例と同じく極めて方便的、はた器械的のものにして人の思想の活ける作用を障碍する所あり。議論上萬巳み難き場合を除いては使用せざるを好しとす。世の學者中には、一にも表、二にも表と、表ならでは議論說明の出來ぬ人あり。是等は其の頭腦の器械的なるを證するものと謂ふべし。

## 十　畫家と小說家

畫家にて詩人を兼ねたる人少からず。例を西洋に求れば、遠くしてはレオナルド、ミケランジェロの如く、近くしてはダンテ・ガブリエル・

ロセッチの如し。されど畫家にして小説家を兼ね、聲聞並び到れるもの、近年にありしデュ・モーリエ(Du Maurier)の如きは多からじ。彼は五六年前六十餘歳にて死せしが、其の死する五六年前までは一個の畫家、殊に滑稽畫家としてのみ世に知られたりき。然るに「ピーター・イベットソン」てふ小説を一雑誌に公にして圖らず非常の喝采を博してより、續いて「トリルビー」、『マルシャン』の二篇を公にし、一時英米文壇の耳目を聳動せり。予は是の二篇を讀みしが、其の文章脚色等の勝れたるは暫く措き、其の自筆の插畫、一篇毎に二百數十葉はあるべきが、何れも見事に描かれ、一冊の畫帖としても類ひ多かるまじき成功を示したり。古人は書畫一體なれば書を能くするもの多く亦畫を能くすと言ひしが、繪畫に長けたるもの亦小説をも能くするの謂はれあればにや。兎にかく珍らしき例なりと云ふべし。

## 十一　繪畫と寫實

繪卷物と云へば宮中の宴遊、社寺の沿革、或は合戰など、凡て上品なるが如き様なれど、昔の畫家は随分思ひ切つたる題目を描きしもの少からず。光信、元信等が描きし春畫は言ふまでもなく、病草紙、狂ひ草紙、百鬼夜行などには土佐家常套の畫題也。たしか光長のなりしと覺ゆ、病草紙の第一紙に婦人の下痢に惱める態をさながらに描き出せるにて餘は推して知るべし。例の鳥羽僧正に到りては例へば放屁軍、男色繪、陽物くらべ繪など奇想、構、毫も憚るところ無し。傳ふる所によれば時の帝病に臥せし時、陽物くらべ繪及び其の他の滑稽畫を奉りて帝の鬱を散ぜし功によりて名を勝畫と賜はりしとか。されば當時はかゝる題目をば畫く人も觀る人も強ちに怪み咎めざりしと覺ゆ。今日より見れば大膽なる寫實ならずや。

（明治三十五年四月）

## 雜談

◎マキシム・ゴルキの評論が民友社から出た。由來露西亞と云ふ國は、とかく文明の謀叛者を出す國であるが、このゴルキは又格別なものだ。世人は野獸的ゴルキなどと何も驚き騒ぐにも及ぶまい。彼等は、彼等の呪詛する人物によりて漸く自己の意識に近づきつゝあるのである。

◎罪無き者は審判の聲を恐るゝものでは無い。ニイチエやゴルキを人が刑事巡査の様に嫌がるのは、皆己れに犯せる罪があるからだ。

◎其は兎に角、世上の文學者は深くゴルキに顧みる所あつて然るべしだ。彼れは二十餘年の間浮浪の生活をした一無學漢であつた。然し彼れは是の間に天地人生の中に鍍納せられたる全文を其の涙と血とで讀みわけたのである。文學者としての彼れの成功は實に是の身讀體達の大教育に原づいたのだが、書物を讀んだり講義を聽いたりして、それで是の世の事が獨り解るものなら、ゴルキは今日でも矢張り一浮浪漢であつたであらう。

（明治三十五年七月）

# 無題錄

○

吾人は想ふ、平和は餘りに長く此の世に續きたり、斯くて人は是の平和の世の長きに慣れて、餘りに平氣になり過ぎたるに非ざる乎。怪むを要せざる也。鮑魚の中に入るもの、久しうして其の臭きを忘るゝが如く彼等は凡ての物に對し、驚きの心を喪へりと覺し。憂へあれども憂へず、悲みあれども悲まず、疑ふべきに安じ、惑ふべきに住まる。文明の苦痛は此の世の上下に充ち滿つれども、彼等恬として省みず。たゞ名聞利養の外に世間又疑惑なるものの存するを解せざるものの如く然り。嗚呼人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

○

現世に於ける一切の學智と道德とは、其の根柢に於て既に現世を是認す。彼等は現世を超越せずして阿隨し、容制せずして讃美し、戒飭せずして阿從す。一代の文教詮じ來れば現世の註釋に外ならざるのみ。

○

山に入つて山を見ず。此の世の眞相を知らむと欲せば、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。斯くて一切の學智と道德とを離れ、生まれながらの小兒の心を以て一切を觀察せざるべからず。

○

嗚呼小兒の心乎。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず、形式、方便、習慣に充ち滿てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人爲の道德、學智の羈絆に累はされず、たゞ本然の至性を披いて天眞の流露に任かすもの、あゝ獨り夫れ小兒の心乎。

吾人素と學無く才無し、唯野性の生まれながらにして移し難きものあるのみ。年來人に離れ世と絶し、蕭然として天地の間に嘯く。潜に想ふ、是の心それ或は小兒の心に邇からむ乎。願はくは依て以て聊か平生の疑惑を陳べ、錄して大方の敎を請はむか。

○

人の生を求むるは此の生に價値を認むればなり。即ち知る、人生畢竟價値に外ならざるを。

人生既に價値也、是を以て人生の歸趣は常に最大の價値と相伴ふ。最大の價値の存する所、即ち是の價値の所有者にとりて人生の全意義の包括せらるゝ所也。至上の幸福茲にあり、最高の道義亦茲にあり。絶對也、無上也。苟も自我の存在する限り、天上天下無二亦無三の尊貴也。人は是が爲めの故に執着し、欲求し、煩悶し、戰鬪す。時として繼ぐに死を以てして悔いざる也。豈啻に悔いざるのみならむや、彼れは是の如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶ也。

看來れば事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く、生くるは價値の爲也。即ち最大の價値と共に生き又死するは、理の當然にして事の必至也。

是の如くにして吾人は此の世に生死する能はざる乎。

○

世に道德なるものなり、吾人の行爲を判決し

て善惡是非の目を立つ。人は是の判決を惛れて偏に其の則に違はざらむことを是れ力む。知らず、是れ果して何の意ぞ。

人生の價値なるは既に是を了す。而して記せよ、價値はそを有する者のみの價値也。能持の主體を離れて世間又價値なる者の存せざること、猶ほ眼を去りて色なく、耳を外にして音無きが如し。即ち價値の物たる、主觀的也。

啻に主觀的なるのみに非ざる也。價値は畢竟個性の反應に外ならざるを以て、同一事物は必ずしも凡ての人に對して同一價値を有すること能はず。即ち價値は主觀的なると共に個人的也。

既に個人的也、是を以て價値の物たる、與ふべからず、受くべからず。辯以て强ひ難く、力以て傳へ難く、言說理解を杜絕して人々自ら自得するの外無きのみ。換言すれば、價値は自ら創造し得る者にして、初めて其の所有者たり得べきのみ。

人生既に價値也、而して價値の主觀的にして個人的なる、亦既に是の如し。畢竟生を此の世に享けて玆に自ら人生の價値を造り、其の價値の最も大いなるものに隨つて安住の地を求めむと欲す。人生の意義又盡せりと謂ふべし。他の目して善と云ひ、惡と云ふ、吾に於て何の關かある。若し道德の目的にして最大の幸福を與ふると云ふにあらば、吾人は既に是の如き道德の實行者たるに非ずや。豈啻に實行家たるに止まらむや、更に又其の創造者たるに非ずや。

試に是の言を繹して道學先生の座右に呈せむは如何に。

○

是の如く言はゞ難者必ず言はむ、無數の民衆は汝と共に此の世に共存せり。社會是が爲に起り、國家是が爲に立つ。所謂道德は是等凡ての民衆の幸福の爲に存する也、汝の言ふ所の如きは是れ汝一人の事のみと。

嗚呼汝一人の事は何故に爾かく重しとせられざる乎。吾れは吾れ自らの爲に生きずして抑々何物の爲に生くべき乎。吾人は必ずしも社會國家を輕しとせざるも、而かも吾れ自らの重きに比すべからざるを思ふ。他愛可也、博愛又妨げじ。畢竟唯是れ意識上の問題のみ。換言すれば、一個の客體としての社會等は吾れに於て沒交涉也。唯是の客體にして吾が主觀上の事實となり、玆に吾が生存の上に於て多少の價値を認めらるゝに及びて、吾と彼等と初めて亦多少の[illegible]有[illegible]。吾人は是の意味に於て[illegible]衆を[illegible]、國家を[illegible]す、畢竟外より吾を[illegible]に非ずして、内より彼等を[illegible]するのみ。是[illegible]の意義を解せざる人は、未だ曾て個人の[illegible]を解せざるの人也。

[illegible]人曾て[illegible]、[illegible]世界を以て是の一念に攝す、[illegible]て語るべしと。即ち是の謂のみ。嗚呼今の道學先生の輩人か、果して能く這般の消息を解し得べき。

（明治三十五年十月）

# 消息

## 第二高等中學在學時代

### 明治二十五年十二月四日

仙臺より

國元なる實妹なを子氏へ

其後はいそがはしきまゝ御無沙汰のみ打續き候段、決して御身の事相忘れ候には無之候間此事御察し可被下候。日中は諸事のさはがしきに打まぎれ心なくくらし候ても、夜床に入りてより心氣相やすみ候ときは、御身の事胸にうかばざることなく、おん身のおもかげのあり〳〵と我まぼろしのうちにあらはれ申候。こひしくなつかしく思ふとも、はかなきのぞみなりとは初めより相分り候へども、むなしきゆめにだもおん身のこと片時思ふも、とよなき心やりに御座候。夜半の雨におどろきて、ふと目ざむる度毎に、我故郷はさぞや雨みぞれに荒れすさぶらん、我いとしき妹はいかにくらし居るならんと思へば、四十里の山川も咫尺の思いたし候。年のくるゝにつけ、一昨年の冬、故郷にかへりておん身とかるたあそびのあどけなきなぐさみに日をくらし候事など思ひ出せば、すぎにし月日のうらめしく、二年前のわが身となりたき思ひいたし候。○思へばおん身も人に嫁すべき人となりたれば、今までの如きぼんやりしたる心にては相成らず、よく〳〵女子の道を心得らるべく候。わが思ふ所にては、女子の第一貴ぶ所は愛の一字に有之べくと存じ候。女子は男子の苦しめるとき、悲しめる時に當つて、其愛情をもて之を慰むるが務なり。貞操と謂ひ從順と言ひ、皆此愛情の發して外にあらはれたるものにて、愛なることは其根本に御座候。おん身とわれとは、此世にて死ぬるまで第一親しき兄妹なれば、何事にまれ、及ぶだけの力に相成可申候。何事に一つも打あけおんはなし可被成候。○日々寒氣相まし候につけ、御身の持病なるのどの不快、御用心事一に存じ候。虫齒は其後痛むことなきや。先頃も申せし如く、食後か或は寢る前に口をゆすぎ清めらるべく候。別紙家庭雜誌の解釋、ひまの折御らん可被下候。其後送り候分、皆讀みて分りたりや、中にはよみつけぬ人には分りかぬる處あるべくと心配致居候。（編者云。家庭雜誌ノ解釋、今失ハレテ無シ）

## 東京帝國大學在學時代

### 明治二十七年九月十九日

東京本郷より

國元なる實弟良太氏へ

夢に見し御身のおもかげを、彼の西の國にありときく魔術者の咒文もて其まゝ形になすよしもがな。相別れてより幾日もたゝぬに、最早一年も經しが如く思ひ焦るれ共、御身の顏かたち、さながら今朝に見し如く、鮮かに記憶の中に印せらる。吾や昔はじと思へ共、御身のいとしさに堪へ得ねば、かへらぬ繰言も仇にはきゝ給ひてや。

御身の令弟はと、遇ふ知り人に尋ねらるゝ時時「之」カ吾心を察し給へ。答ふるもつらし、答へぬもつらし。あはれ、卿など「ぬ」カ健かならばと思はぬことはなきぞかし。人の兄弟打連れてそゞろあるきなどせるを見ては、吾弟のみは何故と思出づる度毎に、月も照らず、花も咲かず、風凄まじく寥寂しくして、天地は無情に滿ちて見ゆるぞ是非もなき。只々自重せよ〳〵、慈悲の天は吾等兄弟にのみ無慈悲ならじ。

此月、意外に費用嵩りて、今にては囊中空し、今月末よりは何なりと面白きもの送る樣にすべし、力の及ぶ丈は。

東京に來られしとて何のたのしきことあらん、心靜に國にて療養あれ。一歳の月日、一睡の中になん、何事も心長くなければならざるはなし。凡て人は、如何なる人にても或點までは唯心的傾向あるものにて、卿と吾が如きは其尤も甚しきものならん。何人も我よりは遁るゝ能はず、只此我を樂しと見ると苦しと見るとによりて、外界の不如意も圓滿完全の理想界に沒了せんか。卿は此際此種の極端なる唯心者となられよ、之れ卿が病苦に對して最良の方法ならんか。自重自愛。

## 明治二十七年十月九日

### 東京より

國元なる實弟良太氏へ

涼氣日にまし骨にしみ申候。當地は兎角雨天勝にて、今日よりやう〳〵晴天と相成候樣に御座候。此模樣にて見れば、鶴岡の寒さも一しほ思遣られ、氣づかはしくてならず候。此頃は如何、朝夕をめされ候やらん、日夕懷慕の情にたへず。このごろの御書の途だえしも、何か心にかゝりてならず、はがきなりとも氣のむきし時には是非〳〵御送被下度候。何事も氣長に、くよ〳〵と思はざる樣可被成候。

栗名月も近づき申候。國元のこと、おんみのこと、思ひ出され〳〵てならず。別れし時、おんみの杖によりて門に佇立せる狀、嗚呼〳〵目先にちらつき申候。いかなればおんみ、はた我れ、かくは天の兩方に心ならぬ月日を送るぞや。秋深し、月高し、霜「も」カと露もやがて雪とふりみだれんず。氣永く心まかせに養生専一に被成下度祈上申候。胸にみち〳〵し此思ひは只おん身の推察にまかするになん、あなかしこ。

## 明治二十七年十二月三十日

### 東京より

國元の實父親信氏へ

只今良太臨終の模樣讀了、一字一涙、不堪感候。先日歸宅せざりしは私一生の過失、良太に對し面目無之、良太もさぞ〳〵無情のものと恨みつらん、之を想へば心とがめてならず、何卒御察被下度候。良太生前の書翰等見るにつけて、ひし〳〵と胸にこたへ、千萬の感情交起、うき世がとんといやに相成り申候。

良太は今頃どこに居り候やらん。一生を契りし我等兄弟、兄のみ殘りて弟は却て冥途の人と相成候は、なんぼう薄き此世の緣に候や。

私一生の樂の半分以上は、たしかに良太の死と共に消え去り申候。年さへふれば、ありしことさへ人は忘れはてゝ、爲めに涙をそゝぐ人は身内のもの五六人にすぎず、一基の石塔にかへらぬ昔の名殘をとゞむ。想へば〳〵憐れなる良太の生命に御座候。病中に私によせし同人の手紙、今日よりうつしなほし、一册として御膝下にさし上候間、冬の夜長に信策

にでも讀ませ、おんこゝろやりの一助となし下され度、同人の私によこしたる手紙は、頗る同人の氣質をうつしゝものに御座候。

## 明治二十九年一月六日

### 熱海より

東京なる藤井健治郎氏へ

如何御暮被成候哉、此方不相渝碌々罷在候間、乍憚御安心被下度候。このごろは、ことに紛れ御無沙汰に打過候。毎度御面倒のことのみ御願申上奉願候、（「頼」カ）徒然の折には物ほしきまゝいろ〳〵御註文申上候得共、實際手にとるは稀に御座候。水繪でもかきみむと先頃具等とりよせ候得共、是亦手に觸れず候。顧みれば、吾ながらわびしくも暮しつるもの哉と被思候得共、その日〳〵はなか〳〵に樂しく打過され申候。小生の室は熱海中にて尤も眺望よき所にて、魚見崎より眞鶴崎まで一眸の下に在之、朝日影さし入るゝ頃に起出でて、九時頃より濱邊など散歩いたし、午後は圖書火り等に蟄居し、又は一卷のハイネ集を携へて山中の芝原に徘徊し、大濤の浩蕩に對して吟朗することは、まことに塵外のたのしみと被思候。或は日暮の空、ひとり磯邊の松に腰打かけてやすらへば、夢にもなく現にあらぬ（「も」脱カ）あやしき思如雲、此世ならず被思申候。まこと自然の無盡藏なる、今はた驚かるゝばかりに御座候。吾も人も自然〳〵と口にこそは言へれども、幾何人か其眞味を會得せしや。天の響き、地の響き、思ひ見るだに高く深く候得共、そを感ずる人の心は如何ばかり高く深き者に候べき。やう〳〵夕日影も名殘無く暮れはてゝ、漁火ほの見ゆる頃に相成候得ば、ざんざ〳〵の波音のみ高く相成、水と空との別ちも消えて、天地も一つになりたらむと思はるゝところ、吾は、夜は眠の爲に造られしものにあらずとの詩人の言葉の今更に被感申候。去年の暮にかけ、二三日以前までは月色殊の外めでたく、あかず夜をこして（「めし」カ）打ながめ申候。元日の夜は十七夜なりしが、月の海を出づる頃の黄昏なるを幸ひ、小生が宿、笹川、姉崎、大橋、熊谷の諸氏と共に觀月の小宴を張申候ひき。一昨四日の夜九時頃にても候ひけむ、將に床に就かむとて、はからず窓の間より海邊をながめ候へば、缺月ながら一間ばかり海とはなれ、言ふばかりなくめでたき景色にて候ひしかば、下女に命じて雨戸をあけさせ、欄によりてハイネを朗吟いたし候。其節の心地よさ、あはれ吾れこのまゝ石も金にもなれかしと被思候ひき。（編者云、「わが」こその記「明」略）

……………………

貴兄等はさぞかし日々御勉學の御事ならむと羨まれ申候。時には御書たまはり度く候。病氣も大方はよろしく候間、御心配被下まじく候。申上度事山々有之候得共、まづこれにて筆をとめて、あら〳〵かしく。

## 明治二十九年二月十九日

### 興津より

東京なる藤井健治郎氏へ

さて小生事十五日歸京、十六日、大學醫院に參、診察相うけ候ところ、未全快、在京勉學不可然とのことにつき、十七日、京を出發、當地に罷越申候。十六日、病院より寄宿舍に立寄、其れより駒込なる森鷗外氏許たづね、歸途車を飛ばして貴寓を音づれ候ひしは、姉崎、畔柳、二氏と兄とを招じて小宴會を催さむ爲めなりき、御不在にて遺憾千萬、不得已二氏のみを招じて、上野伊豫紋に參り、やけ酒を飲申

候。貴兄御不在こそくれ〴〵も殘念に有之候ひき、他には何人にも逢はず、又訪ねず、翌十七日又々都を辭して心にもなき旅路につき申候。一緒萬端よろしく御推察奉仰候。何も不申上候。愛にはなれ、友に別れ、[illegible]兄弟を百里の空にすて、心にもなき月日を送り候事、なんぼう悲しく候や。田子の浦迄泣きに來はせぬものをと、かこたれ申候。

此地は名にし負ふ清見が關の名所にて、清見潟は村のはづれにあり。前には三保の松原をひかへて、後には富士の高根を仰ぐ。げに〳〵天人の羽衣わすれけむも理りなりと覺候景色、なみ〳〵の保養にあらましかば、如何ばかりたのしからむと、あだなる事のみ慨かれ申候。熱海には都人多くあれども、此地には更に見えず、全く我身一人が我知人に有之候。松風の音、濤のこゑ、終夜の夢を洗ひて心地よくねぶりし間こそ、げに樂しけれ。覺むれば元の哀れの此身、ほつと太息つかれ申候よ。何とぞ時々の御手紙給はりたく候。思ふこと山々なれど、何が何やら胸のみつまりて、筆に止らず、あなかしこ。

二月十九日朝起きて

## 東京帝國大學卒業以後

### 明治二十九年十月三十一日

仙臺より

東京なる藤井健治郎氏へ

……………

來仙後の仕事はイヤハヤ何共申樣無御座候。少なくとも先生と呼ばるゝ身に候へば、なか〳〵えらきものと自分ながら感心仕候。論理はまだしも、英語の先生と相成、日々ザットのイットと口に致候、御察被下度候。笑ふにも大口あいてする譯にもゆかず、氣のちゞまるはなしに御座候。

昨御の二重外套出來たりとて、往來の人見上ぐる程男振を上げたるよし、わざ〳〵申越候。小生も數日前、立町通六番地と云ふに一軒の家をかまへ、獨立之くらしと出かけ候。家内は下女と犬に御座候。此犬は去廿五日より廿七日にかけ、飯坂に參候節、三浦只（菊太郎氏）之御存の近野（治右衛門氏）より、むり〳〵ポインター種の[illegible]犬を分捕來たるにて、半日[illegible]は其[illegible]相手を致居候。つまらぬ人間より、なんぼうよきかしれず。

……………

弓は、當地に參り候てより、いろ〳〵差支ありて二三度しかひかず、先頃の大會にドッサリ、ハンヂをもちひて第三等賞にとは大手柄に御座候。而して、それは十五間尺二の的に、十二本の内四本の當に御座候！ 弓の下手になりたるにつけ、我學も如此なりはせぬかと、覺えず憮然といたし候。くだらぬ事乍、御無沙汰御わびかた〳〵、早々不一。

### 明治三十三年八月二十二日

東京佐々木病院より

獨逸キールなる姉崎嘲風氏へ

僕は今の場合君を滿足する手紙が書けないのは、實に非常の遺憾だ。是の手紙の字體が僕の通常でないのを怪み給ふな！ 病床に仰臥して覺束なき筆を操るなれば。

僕は來月八日には立ちかねる。今月八日から思ひもよらぬ肺患に冒されて、駿河臺の佐々木

病院に入つて、談話も運動も止められて居る。病氣は、吾ながら因由が分らない。八月七日葉山の海水浴より歸りて、徳川の誕生日の祝宴に招かれて痛飲し、其晩十一時までのみ、翌日は二日醉と云ふ痛飲をした。翌日午後、餘り氣分がわるいから寢たら、俄然30.ヒ斗の血を吐いた。早速醫師に見せたら肺は異狀はない、咽喉が惡いのだと云ふ。是は勿論さうあるべきだと思ひ込で、別に怪みもせなんだ。處が咯血が翌日もあり、翌々日もある。其都度醫者に見せると、矢張前同斷の診斷であつた。餘り氣味がわるいから、佐々木に見せたら、少々左肺に缺點があると云はれ、先以て安靜が大事との事で、十四日に入院し、今日まで不言不動三昧に入つた。――這んな次第で僕の運命は、目下の場合一頓挫した。先には洋々たる春の海の如き希望もないでもなかつたが、今や暗雲悲風前途を塞する樣な感覺無きにしもあらずだ。千思萬量、なんだか無暗に心細くなることもある。

併し病氣は左樣な物でもないらしい、痰にバチルスの無いことも確定せられ、血の止たこに出た血痰も昨今では朝夕一粒づゝ位に過ぎないし、熱も平熱に復したし、凡ての經過が先づ非常に宜しい。佐々木自らの外の醫者も僕の患部が何處にあるかが分らぬ、極輕微な故障であるらしい。されど今回の咯血は一時の發兆で、其根蔕は餘り深いのでないかもしれない。――是が病人的樂天觀である。

兎に角僕は病氣だ。病氣で本月の出發は來年二月に延した。今月一杯で退院し得るかと望で居る。其より山川を放浪し、久しく望だ京都の秋を美術研究ながら觀たい。あゝ思はぬ所で望を果すこともあるものだ。併し、兎に角僕は愉快ではない、察して呉れ給へ！　君の送られた Schönheit des W. K. と Lebensfrage は病中に受取つて、面白く讀で居る。多謝！

長く手紙を書くことがたまらぬ。

君の多幸と健康を祈る。僕も來春には屹度 Berlin あたりで君を見る。

明治三十三年九月二十三日

小石川指ケ谷町より

群馬縣太田町なる

三浦菊太郎氏へ

拜啓。昨日不圖所用有之歸宅仕候處、御令弟ルー〳〵御連歸之由、安心仕候。彼は近來主人公留守の爲、誰もかまふ人無之、隨て服裝等もみすぼら敷候半と被存候。此後不つゝか者御見捨無之、御愛撫被下候はゞ大幸御座候。毛色も手不入なれば、近頃はさぞ汚居候半と被存候。左に彼平生のならはし一二、御注意迄に申上候。

一朝夕二食之事、粗食を可とす。

一御折檻之折は、鞭樣のものにて頭より尾にかけて背中のみねを御打可被成候。横腹など打候ても何も不相成、唯横になりておぢけるのみにて御座候。

一半月位之中は御繫可然候。此犬は餘り遠走せざる性にて、恰も牝犬の如きものに御座候へ共、尙此點御注意可被下候。

一犬を飼ふは中々氣永に犬を愛するものに御座候。就ては畜生に御座候へば、人間並に[illegible]候ては腹の立つことも有之候へども、そこは畜生と御勘辨被下度御座候。

何卒、要らざる御せつかいには御座候へども、御參考迄に申上候。

小宅一同、今月末か來月初には東京引拂[illegible]

過、暫時同所に滯在可仕候。御書状は夫迄は小石川に御願申上候。小生は今より父平塚へ歸申候。秋霖不愉快に御座候。萬々後便。御自愛專一可被成候。不一。

## 明治三十三年九月三十日

### 駿州興津より

キールなる姉崎嘲風氏へ

八月廿一日夜の君の端書を、タッタ今非常の興を以て讀だ。端書の繪の山越の彌陀の樣な像は、何か僕には分らぬが、僕の親友たる姉崎の great figure が、遙に僕に挨拶をする樣に見えて、其の俤さへも似て居るのは、誠に懷かしく感じた。君の學識は日々に進で居るだらうと嬉しく思ふにつけて、僕の朝夕が如何にも齒がゆくてならぬが、病氣は次第によくなつて、今はマツ〳〵愉快に日を送て居る。君が曾て Marguerite を感じた、かの海水樓と云ふ家はなくなつたが、「三保の松原清見寺」と云ふ俗謠には、今も尚面白き調子が殘てある。僕は爰に[illegible]なき朝夕を送て、君のことなど想て居る。巖谷小波を此二十二日に横濱で送つた、僕もあの樣に行けたならと思つたら、何となくよい心地がしなかつた。此頃は小說を讀で居る。Sienkiewicz の Quo Vadis 程面白いものは先づ少からう。今は同じ人の The Knights of the Cross を讀で、中世宗教の腐敗を活ける樣に感じて居る。先頃ズーデルマンを注文してやつたが、都合が出來たら送て呉れ給へ。僕は來春二月には屹度行く、伯林で會ふ時の嬉しさを今より感じて居る!!!

君の健康を祈る!!!

## 明治三十三年十月十四日

### 興津より

キールなる姉崎嘲風氏へ

秋の月は二度とも雲隱れて見えなかつた。君は Kiel の空で如何にそを觀られたか？ 想へば山川風土皆變れども、天に仰ぐ日も月も星も皆同じものと眺め暮らすのだ！ 僕も都落このかた一月あまりになつて、例の如く東海のほとりに迷うて居る。小き者も妻も大丈夫だ。彼等の爲に僕の勵まされたこと幾何程か？……昨日 Jókai の Debts of Honor を讀了して、ひどく感心した。此頃は專ら小說讀みに餘念がない。……君は此頃誇大思想病にかゝつたと專ら評判するが、しつかりしたまへ。健康を祝す Prosit!!! 健康なれ、僕も健康追々ヨイ。來年は是非遇ふ!!!

（十一月十五日キール發）

## 明治三十三年十一月十九日

### 興津より

キールなる姉崎嘲風氏へ

君の十月三日の手紙を昨日受取た。僕は如何なる喜を以て其の一字一句を讀だかを君に知らせたい！ 僕の病床中の手紙を、君も亦病床に讀だとの事、その君の病氣も或は陰險の性質を帶ぶるかの樣に惡くも想像せらるゝので、一入不安の情に勝へぬ。Kiel は獨逸極北の地或は君の健康に累したのではあるまいか？ 此冬に München に移てはドウか。決して決して無理をしてはならぬ。君のからだの負ふ所の重荷は、如何なる要求を君にしても決して不足ではない。くれ〴〵も自重して呉れ給へ。僕も此頃では非常に丈夫になつた、體量も平時より七八百目多い。佐々木國手も非常

ルヨイと言つて居る。無論來年二三月には出懸る。君の手紙に大西君のことを言つてあつたが、思ひ出す程斷腸の至だ。今や冬の初めになつて、野山の景色も流石にうらがれて來た。獨り海邊に立つて暮れゆく日を送る時、遠く〳〵想を馳せて、あとは涙にくれしこと幾度か!!!

（十二月二十四日キール着）

## 明治三十三年十一月十九日

### 興津より

東京なる實弟信策氏へ

嶽南の風景は、世間がうら寂れる此頃になりて殊に其快適を覺ゆる！　此頃の寒さで富士の半身は白衣を纏うた、されど駿河灣の夕景は又喩るに物もない。山には蜜柑が正に黄ばんで枝も撓になつて居る。見渡すかぎり麗日和風の空模樣、此風光を故郷の老親に見せたならばと其度毎に想ふ。暮れ行く夕日を望みつゝ、獨り海邊に立ちつくす時、詩興甚だ遙にかけりて、果てはいはれなき涙に襟を霑すこともある！

## 明治三十三年十一月二十二日

### 興津より

東京なる桑木嚴翼氏へ

君の御見舞のはがきを今朝讀だ。病氣以來浮世離れた生活をして居る爲、頓と諸君に無沙汰をした。但御消息は哲學雜誌などでほのかに承知して、竊に君之益〻健在に且益〻 active なるを喜んで居た。想ふに同窓諸兄や丁酉會の諸人人も、君と同樣、幸福なる進歩的生活を活潑に繼續せられつゝあることであらうと、病餘の羈人心潛に羨仰に堪へない。若し君に於て、是等の諸君に小生の好意を傳へ得べき機會があつたならば、何卒然るべく願ひたい！

僕もいろ〳〵諸君に御心配をかけましたが、其後の經過は希望のまゝに好良で、今日では啻に平素の主觀狀態に復したのみならず、其外貌に於ても其體重に於ても、遙に病氣以前に勝れて居る。今は何事をも爲し得る勇氣と capacity とあるけれども、ドーセ來春までは東京に居なければならぬ用事があるでは無し、こゝ暫く精神の靜養時と觀念して、此地方にブラツイて居る。この百日ばかりは、實に夢の如き、實に美はしき夢の如き月日を送つて居る。今でこそ「如何に今日を過さんか」てふ問題が其日〳〵の苦勞であるが、此れが後年になつたならば、恐らくは僕の生涯の最も幸福なる一時期であらうも知れぬ。シテ見ると、人生の禍福は、如何な處に宿つて居るものかと、妙に感慨も催される！

偖是からは少々眞面目なことを御話したい――。

此度大西君の逝かれたのは、實に吾等にとりて、又日本の學界にとりて、此上もない殘念な事で、如何なる言語を以ても、此歎惜の情を漏しかぬる次第だ。就ては文科大學でも、又丁酉會でも、適當な且有效な追悼の意を發表せられたいものと想ふ。僕は京都大學文科の組織が氏の逝去と共に一大打擊を被つたことを切に遺憾に思ふ。――是の悼惜の情は、今暫く文外として、僕が所謂眞面目の御話に入らう。

直截に申せば、から云ふ事に過ぎない。――「大西君の跡を引受けて、一奮發して見る氣はないか」。から云ふと、僕が何か京都大學の内幕を知つて居つての話の樣だが、さう云ふ譯ではない。唯僕の局外者として希望を君に述ぶるに過ぎない。....

僕の言ふことが誠に露骨で、失敬なかどがあ

るゝかは知らぬが、然るべく其意の在る所を取て頂きたい。都合によりては、君の爲に應分の緣の下の力持ちを勤むることは少しも厭はぬ。敢て御一考あれ。

僕はなか〳〵現代文學通になつたよ。イプセン、ヨーカイ、ゾラ、ドウデイ、シエンキーキッツなどは中々讀だよ！

## 明治三十三年十一月三十日

### 興津より

キールなる姉崎嘲風氏へ

十月十六日の君の端書と、Ziegler の有益且有趣味なる書籍は正に落手した。每々御心使之段深く謝する。君の健康漸やく舊に復せしとの事、何よりも喜ばしい、猶々攝養を祈る。天涯萬里の羇人、さなきだに孤獨の情は思ひやらるゝのに、其上に病氣にでもなつては、實にたまつたものではあるまい。近日受取た君の書面には、何れも懷鄕の憂情が言外に籠て居るのを認める。さら〳〵無理ではないが、爲に健康を害うては由々敷大事だ。願くは咏歎の間に詩懷を漏らし、玆に慰藉を求むる樣にありたい。近日歸京して略々同人の消息を得た。中島德藏氏の妻君が、肺患で今月十九日逝去せられたるは非常の慘事だ。君の忠告の通り、僕は妻子を擧げて當地に居る。君の送られたズーデルマンは、今日か明日かと待ちこがれて居る。君の爲に計るに、來春と言はず、可成速に南部又はバーデンあたりに移られては如何だ。去二十五日には學士連の催で、故大西博士の追悼會が青年會館にあつたげな。僕は知らずに出席し得なかつた。キールの寒さは常に想像して居る。山崎直方君肺患に苦しむとの事、過日傳聞せしが如何。ドーモ留學生の景氣が惡い。

君の健康を祈る!!!

## 明治三十三年十二月二十日

### 相州大磯より

キールなる姉崎嘲風氏へ

今朝散步から歸つたら、君の端書が來て居た。ア、物言ふ如き君の容姿に對して、默思を凝らしたこと幾時ぞ！　實は過般の病氣(今は勿論全癒とは思ふが)で、或はやつれはせぬかと憂て居つたのが、横濱で訣別の手を握つた時よりも圓く肥つたやうに見ゆるは、實に何より喜ばしい。僕は僕の此喜びよりも、京都にお在す君の令母令閨の喜びを想像して、更に多大の滿足を感ずる。先頃はズーデルマンの Frau Sorge と Ehre とを送つて下すつて、お蔭で是現代詩人の一面を伺ふことが出來た。先達よりニーチエ、イブゼンなどをノゾイて、又チーグレルの詳論を參照し、獨逸現代文學に就いて多少の觀念を得た樣に思はれる。僕の病氣は極めてよい。醫者は用心さへすれば來春渡航も差支ないと言つて居る。目下の所では增進の徵候等は更に無いが、一生の禍根を斷つには、此際「ヘトール」の靜脈注射を試みるが好からうといふので、去る十三日興津を引拂つて當地方に來た。注射は三ケ月を要するといふことで、夫れが濟次第出懸けることゝ信ずる、安心してくれ給へ！　興津を去る時は、八十日間朝夕唯一の友として親しんだ清見潟の風光に別れるのが實に哀しく、汽車の中より幾度か振返つた。ア、(其時僕は思うた)コンナ事では、西洋に行つたら屹度懷鄕病に罹るであらうと。君！　筆在なれ!!!　來春には遇う!!!

## 明治三十三年十二月二十三日

### 相州大磯より

國元の實父親信氏へ

拜啓仕候。十八日の御手紙拜見仕候。神佛兩道の是非に關し卑見御尋に相成、了承仕候。今日の佛教は、ドダイお話にならぬものに有之、唯吾々は先祖の墳墓あるが爲に寺に詣で、死屍の埋葬を取扱ふが故に僧侶にかゝはる外、何の意義も無之事と存候。若し本來の信仰心にて佛教を非認せられ候はゞ、そを御捨て被成候事、些も仔細有之間敷と奉存候。神道とても宗教としては格別に價値あるものと不存候へ共、本邦元始の國體に合する、謂はゞ國教とも謂ふべき事、又仰の如く其やり方の清淨簡易なることゝは事實に御座候。されば神道の方御氣に入り候はゞ、神道に歸依せられ候事、亦何の仔細有之間敷と奉存候。要するに、私は何れにても御隨意にて、別に致方なき事と奉存候。唯此際御注意まで申上度きは、神道に歸依する爲に、祖先の墳墓祭祀等に多大の不都合無之候や。此邊の所預め篤と一考御取極肝要と奉考仕候。私一個より申せば、世の中の神も佛も信じ不申候。但祖先崇拜、死屍處分のため暫く在來の所謂宗教に表面上歸依するものに御座候。右卑見申上候。

來る二十五日より相州大磯角半方に移轉し、來三月中旬迄滯在可仕候。三月下旬出發の事は、昨日文部當局者と打合おき候。

## 明治三十四年一月一日

### 相州大磯より

キールなる姉崎嘲風氏へ

今日は明治卅四年の元旦に御座候。獨逸には雜煮も無之、フォークを手にして故國のことを想ひ出されしならむと察せられ候。此前の君の手紙は、いつもながら嬉敷拜見致候。懷郷云々のことに關し申越されし條々、僕に於ても異存はなけれども、唯思慕の餘り心神を疲倦し、健康を害するあらむを恐れたる也。僕は、かの強ひて情を殺し性を矯むるを豪傑としてほむる我社會の風尚に反對することに於ては、全く君と所見を同じうするならむと存候。

僕先年五月の頃、丁酉會席上(千葉氏宅)にて、「人生とロマンチシズム」と云ふ題にて、今の形式的方便主義の社會に、純粹なるロマンチック、ムーブメントの起らむことを希望する旨を述べて、多數の人に驚かれ申候。

獨逸留學生に關する君の意見も了知致候。紳士教育は獨逸に於て不可望事は誠にさる事もあらむと被存候。過日井上準之助氏より、佛文「人」Edmund Demolins 氏の著、英譯 Anglo-Saxon Superiority, to what it is due と題する一書を借覽し、英國教育の長所並に其社會組織の醇美に就いて深く同情を有する樣になれり。渡歐の節は、是非英國にも一度は住居して見たく想ひ居候。日本の大學が、獨逸の學風を過重し居るに非るかてふ疑惑は、今日、大學の影響上種々の點より見得べしと思ふ。此邊もお互將來の學界に盡さむとする吾々の注意すべきことゝ存候。殊に……米國を頭から賤しむが如きは、其の意を得ざることゝ言はざるを得ず候。

丁酉會員の家庭並に會員に不幸多きは殘念なることに御座候。大西君の事は申すも愚也。其後栗田萬三郎君逝かれ、中島德藏君の妻君逝かれ、頃日又桑木の嚴父、引續きて祖母逝

かれたり。同君は近來非常に落膽せる由、御氣の毒の至也。
扨過日も一寸申上候京都大學の大西君の代りには、是非桑木を推薦したきもの也。こは友人として言ふのみならず、局外者より見て、同君以外に適當なる候補者無きことならむと思はる。……
本邦學界には見覺ましき活動更に無し。先月の哲學雜誌を君は見しならむ、元良博士の本邦學生の宗教心に關する調査報告をやゝ見るべき資料とすべけむ。……
僕は數日中に東京に一寸歸らむ。新渡戸氏の英文武士道でも送り申さむ。
費用に關して精敷く申越あり、大に便宜を感ぜり、厚く謝申候。僕は或は四月になるやも知れざれども、必ず渡航することに致候。健康は大丈夫ならむと被存候。幸に安心あれ……
當大磯には三月頃迄逗留せむ。今年は今の所非常に暖氣にて、今日の如きは近年稀なる元旦にして暖氣甚だし。君は肝油を試み見るや、思ふに非常に效あらむ。一日15.——20.grr.夜食後二時間頃に。僕の語學はサッパリ駄目也、獨逸語の如きはトントダメ也、慨嘆々々。
過般より、Jókai の小說を非常に面白く讀めり。Sienkiewicz の Quo Vadis は是非一讀せらるべし。是程面白きは近來なしとの事也。
君の健康を祈る！
僕も健康なるべし。

卅四年元旦　　日本相州大磯　角半方に
相模灣の濤聲を聞きつゝ

雲いろ〱の夕暮の空に、飛ぶ鳥の行方もしらずまぎれ入るこそ羨ましけれ。われも幾度か願ひぬ、この思ひを胸にして、吾がむくろの露となりても溶けよかし。かくて天風に散じて、かの限りなきみそらに吹き渡りてむ！

二三日前、こんなものを筆すさみ申候。

## 明治三十四年二月五日

### 相州大磯より

キールなる姉崎嘲風氏へ

十二月廿一日夜の君の書翰を受取つた。今日は此國では極寒の時節ではあるが、大磯だけに流石に暖い。伊豆、箱根の山々には、はや春霞立ち初めて、心も言ふばかりなく長閑だ。
あゝ君は今頃は其故國の風光を、如何なる處にか偲びつゝあるではなからうかと思へば、何やら黯然たらざるを得ない。げに五年前には亦海の海邊で遊び暮した事もあつた。あの頃の生活は、今から思へば殆ど夢の樣だ。實に美はしい夢であつた。その夢の隈々を思ひたどれば、何となう氣も遠くなつて涙が催される。君よ、心弱きものとばし笑ひ玉ふな。僕も多少書物を讀だだけに少しは考へもある積だが、人生の最もうるはしき趣は、かゝる、恐らくは人から見たら何事でもなき事柄に存する樣に僕には思へる。あゝ君よ、この世の樂みは、哀みの中にこそ求めらるべけれ。君が十分の效果を負ひて歸られた後幾年、今の君の境遇を懷ひ起したなら、一層の感慨を催さるゝであらう。あゝ今より五六年後には、お互に如何なる境遇に如何なる遭逢を遂ぐるであらう。僕は斯る事を考ふると、兎角うら哀しき心地がする。
桑木の事は、過日の手紙に書いた通の僕の意見だが、願はくば君も贊成して、松本君より(又は他の方法にて)、適當の運びに至りたい。同君は過日哲學概論一部を著はし、好評嘖々であつた。丁酉會幹事ハ吉田、高島、外一人だ。君の傳言は屹度傳へる。

扨僕は、其後身體もいよ〱健全になつたらしい。醫者も出發を許した。四月上旬に當地を出發したいと思ふ。・・・・

四月上旬なれば、此手紙が着いてから、いま一度、君の書面を此地で見る事が出來るであらう。或は六かしいかも知れぬが、或は十日位は後れるかも知れぬ、ドーカ折返し送つて呉れ。

携帶品に就いての御注意は謹で拜承する。

僕の最も掛念するは獨逸語だ、ドーモだめだ。近い例が、君の手紙にエムジヒと云ふ字があつたが、それが一寸出ない、と云ふ仕儀だ。こんな風では渡航後の不自由が思ひやられる。

君の送つてくれた、フラウゾルゲは實に面白い。ドーデーの Jack と同じ行方ではあるが、其の寫實が如何にもIdealisticで、僕は滿足を以て讀了した。エーレの方は少々妙味が解りかねる、蓋し語學が足りないせゐだらう。Ziegler のは至極有益の書と思ふ、此地で讀了して行く。

今日高山翁の訃音が傳はつた、實に惜むべき一種の模範的人物であつた。伊藤圭介翁も過日逝かれた、古老の凋落は吾々の義務を大にする。

早稻田でもいよ〱大學設置を發表して、資本金参拾萬圓募集を廣告した。大橋佐平さんは、先日、番町の川上大將の邸を買て入つたが、同時に胃病で一年持たぬと宣告されたさうで、今度は拾貳萬圓餘を文部省に寄附して圖書館設立の事とした。其旨意書を昨日賴みに來た。一念發起したのであらうが、兎に角大美擧で、感ずべきことだ。人は金錢ばかりで安心が出來ぬと云ふことの如何にも哀れな例にも思はれる。

僕は、此頃は大くつまぎれに、道樂者のすなる玉突と云ふものを初めて見た。三週間計りになつたが、ドーモ物になりさうもない。君のテニスを思ひ出して打笑まれる。イヤ是は失敬!

君の健康を祈る!!!

近詠一首

如何にうるはしく空にかゞやけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去なりき。

明治三十四年三月二十四日

東京より

キールなる姉崎嘲風氏へ

君! 僕は如何にして目下の情を君に言ひ表はすことが出來ようか。洋行は斷然見合はせることに決心した。予はこの決心を齎らして昨日大磯より上京し、それ〲事を纏めつゝあるのだ。自分一人ならぬ身の、かばかりの病氣のために、數年來の希望を空しうするのは是非もないが、いさゝか遺憾にたへぬ。あゝ君と彼の地に遇うた後のことは日毎に想像して樂しみ居つたが、今から思へば、さぞや運命の神の失笑に堪へぬことであつたらう! あゝ過ぎ去れることは是非もない、されぱとて僕はこれと云ふ未來の見透しもない。かゝる時に人は往々薄志弱行に陷るものぞと覺悟はして居る。あゝ君ならで誰か是の僕の衷情を察して呉れるであらうか。多分、君は此手紙を書く今頃は印度洋あたりに僕を想像して居るだらう!・・・

明治三十四年四月二十四日

相州大磯より

ベルリンなる姉崎嘲風氏へ

其後は度々の御手紙で君の近狀を審にし、甘心致候、殊に四月十六日より同廿四日迄に御認めの君の書は、中にも嬉しく讀んだ。

續いてキールで御寫しの寫眞にて君の健やかなる、故よりは多少肥滿したるらしき、眉目稱の一段の秀を加へたる君の容貌の活けるが如きに接して、懷しさに勝へ得ぬ。あゝ僕も是非寫眞を送らうが、今は氣候の爲か、やゝやつれたる顏を君に見せるのは何となう忍びない、其中是非送る。僕の渡航中止に對しての御慰問は實に忝ないが、兎に角此健康が十分になるまでは致方ないと諦めて居る。…獨逸に對する嫌惡の感情も、君にしては無理ならぬ事と思はれるが、獨逸語迄も嫌はるゝは餘り過ぎはせまいか。それでは政事軍隊の國家の外に、吾々の住む邦は無い樣ではないか。Herr Prof. の話は實に突梯の極だ。ワグネルのオペルの事、よく想像も出來ぬは殘念ながら、徐ろに神往に堪へない。かゝる娛樂を有して居る獨逸の社會には、君の觀察以外、多少は君のアンチ獨逸的感情を融和する或物は存して居はせぬか。素より僕は君の感情を尊敬するものであるが、一時の外感の爲に、左なき場合には得らるべき多くの利益を逸し去るは、間々ある習ひと思はれる。君にはかゝる憂は無からうが、僕のつまらぬ老婆心をも惡くとつてくれぬ樣に願ひたい。南の方ルドキッヒ一世の美術市や、チューレルの生れた町などでも、北方のミリダリスムの影響はあるものか。僕にはトント事情は解らぬが、これは君が後日の觀察を待ちたい。兎に角獨逸人が偏狹な人民であることは、君の書面にあるアンチセミチズムにても解ることである、慨はしい事情と思はれる。ハイネ、ビョルネの如き此國の恩人ですら、あの迫害に遇うて、今日では記念碑を立つるにすら異議あると云ふ話は、如何にも吾々には解せられぬ偏屈と思はれる。…

去る廿一日、星亨が殺されたことは、新聞又は電報で見られたであらう、是は意外だ。社會の輿論は一般に惋惜の情を表して居るが、刺客が儼然たる一個の紳士であつたと云ふ點から其方へも相當の好意を表して(暗に)居ることは新聞の調子でも分る。つまり社會の制裁と云ふ考が暗に何人の胸中にもあるらしい。併し星もシーザルと同一の最後をした、其死や寧ろ其歷史を飾るものと云つてもよからう。

大學内に、先月來、鼷鼠にペスト菌があつた爲に、今度は建物の一部を燒棄することに決した。市中は鼠買上げで忙がしいが、ペスト患者は一人もない。

笹川種郎君は、今度宇都ノ宮の中學校長になつて、今日(二十四日)送別會がある筈だ。先日關君と姉崎及び登張の三人來訪して快談した、中には君の噂も大分あつた。

大西君の遺稿も近々出版せらるゝことゝなつた。其の書目は倫理學、論理學、心理學、良心起原論、哲學史、雜著の六種で、哲學史、雜著は何れも一千頁以上のものだ。

僕は君の歸らるゝ頃までには日本美術史を完成したいと心懸けて居る。此秋からは鎌倉に引越し、其處で越年する積りだ。大磯も最早や半歲になる、飽き厭きした。此頃は又水繪を始めてるが、何分意の如くならず。

先月來、先輩には頓と遇はぬ。上田萬年氏も一時は辭職との噂もあつたが、昨今は又落着いたとの事だ。晩翠は去る十五日常陸丸で西航した、始めは倫敦に落ちつくとの事。…

此頃の僕の精神には、此の一兩年の間に醞釀し來つたかと思はれる一種の變調が現はれて來た。人は病的と謂ふかも知れぬ、又自分でも境遇、健康等の爲に然るのかと思はれるが、併し僕は僕の精神の自然の發展と外信じ得られない。僕は此の變化を明瞭に君に知らせることが近い内に出來るだらうと信ずるが、要するにロマンチシズムの臭味を帶びて居る一種の個人主義たることは爭はれない。僕は曾て日本主義を

唱へて殆ど國家至上の主義を賛したこともある。今に於ても是の見地を打破るべき理由は僕には持ち得ぬ、唯是の如き主義に滿足の出來ぬ様になつたのは、僕の精神上の事實である。僕は道徳、敎育、もしくは社會改良に關する今の人の説には、殆どすべて滿足の出來ぬ様になつた。曰く國語改良、國字改良、言文一致、風俗改良、是等の主張者には實用以外別に人生の幸福と爲すあるものなしと信じて居る様だ。例へば、文藝の慰藉訓養が、此世に如何ばかりの幸福を齎すかは、今の俗學者は解し得ぬらしい。僕は宗敎に關しても少からず考へた。曾ては一種の反感を以て迎へたが今では如何なる宗敎に對しても少くとも同情を以て見る迄になつた。あゝ吾人は自己の弱點を掩はむが爲めに、いゝ、いゝ、知らず知らず自己の性情の缺如せる所の者を自己中心の信仰として發言することがないか。僕の過去は多少此趣があると今では思はれる。君！ 此邊の所を如何思はれるか。

此頃は梅雨で、天氣は濕して不愉快だ。思ひ出したが、桑木も東京大學からの留學生に推薦された。然し何時行かれるか、あてがないとの事。又民間では大學増設に反對する有力なる議論が現はれつゝある。其の要點は、日本の國家は高等專門學校を要するが、大學は要らぬ。大學増設は少くとも學校系統改革後の問題であらねばならぬと云ふにある。早稻田でも大學基本金の募集が好況であつたため、大に意氣込で居るらしい。高田君が英國主義の大學を思ふまゝに現はすのも遠からぬことであらう。……

近い中に僕の舊稿を集めたる「文藝評論」と云ふ小册子が出るから、出次第送る。先日アナクレオンと、Geschichte des Gottsideals. 難有落手した。……大著述も大論文もない、唯大塚君が竹柏園、佐々木信綱君の歌會の席上に演説せられた日本服の美術的價値と題する論説は一寸面白い。餘り長くなつたから是でやめる。くれぐれも健康で居て呉れ、僕も精々健康となる。

明治三十四年五月七日

## 相州大磯より

宇都宮なる笹川臨風氏へ

御書拜讀仕候。御序文早速御執筆被下難有奉存候。元祿時勢粧、新紙上にて發刊之由拜承、江湖之喝采さこそと被存候。何れ拜讀之上、鄙見も有之候はゞ申上度候。

昨今は雨にて爲すこともなくたれこめて暮居候。湘南の春の佳ならざるに非れども、思ある身には兎角愁の眼と相成申候。兩三日中には東京より家族引移り可申候。

其後令嬢には御壯健に被爲在候や。山水の放浪に慣れたる身には、妻子の事思ふもうるさきやうに被感、吾ながら薄情の人よと歎かれ申候。あゝ青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去にて候ひき。一春一秋、如此にて經過し去らば、吾に於て得るところ何事ぞ。思ふて是に到れば、被髮佯狂の悟道、無理ならぬ儀と存候。唯小生今の境遇、遣悶の靈水用ふるに由なし。睡眠の中に百事を忘却するをよなき樂と觀念致居候。

清見潟日記、御目に入りしよし、御はづかしき事に候。帝國文學に去月來の文債逃るゝに道なく、かの日記の燒なほしを二三枚送りおき候。大の惡文に候へば、平に御見のがし被下度候。

高著奈良朝史は何時頃御脱稿に候や。其節は高著に相應はしからず被思候へども、拙文早速差上可申候。右御禮かたがた例のぐち申上候、意氣銷沈などゝ御笑被下間敷候、草々。

## 明治三十四年六月六日

### 大磯より

ベルリンなる姉崎嘲風氏へ

あゝ君よ、僕は誠に申譯がない。三月末に渡航見合せの事を君にしらせたのみで、今日まで無音で過つたのは、吾ながら無念であつた。あゝ此間には僕の心中に少からぬ煩悶があつた。誰にも知らせずに、恐らくは吾れ一人の外には永劫知る人もなき默思が、どの樣にあつたであらう。ああ吾ながら心弱いことだ。

僕の受取た君の書は、三月十二日附の端書であつた。其中には「此書のつく頃には、君は出發したであらう」と書いてあつたが、あゝ僕はさうあつたら、どの樣に幸だらうと、甲斐なきことながら思ひ返して居る。君も僕の來るのを指折り數へて待つて居つたであらうが、僕の最終の端書を見て嘸無念に思つたであらう。僕はそれが誠に氣の毒でならぬ。あゝ君よ許して呉れ給へ。病軀は如何とも爲難い。今以て湘南の海濱に放浪の身となつて居る。あゝ僕の昨今の境遇は誠に〳〵寂しいものだ。病氣はまだなほらぬし、友人もなし、學問も進まぬ、人物の修養も思ふ樣に行かぬ、生活も餘り裕でない、年は經つ、思想はふける、感情のみが強くなつて、兎角に悲愁の人となる。悟りきれぬ身には、同輩の榮達も何となく羨ましい樣な氣もする。それは〳〵淺ましい凡夫と吾ながら呆れることもある。大なる信仰の賴るべきものがあつたらばと思はれるけれども、力及ばない。あゝ君、如何したなら好いのであらうか。

僕は他人の慰めも聞きあきた、兎角吾れ自ら安心の出來る地歩を求めねば何もなるものではない。人物の修養はこゝであらうと、兎に角に希望は繫いで居る。

僕の事をのみ言ふが、少し近狀を知らせよう。渡航を已めてから、別に仕方もないから、僕は日本美術史の研究に一身を委ねようと決心して、大學の講師にして貰うた。この願は容易に成つて、四月中旬からさう云ふことになつた。併し講師は無給同然であるから、是れは學問上の事と心得て、外に生活の路を求めたが、博文館主人の懇談もあつたから、仕方がない、又々雜誌記者となつた。そして住處は九月一杯は當大磯に居て、其から後は鎌倉かどこかに移るつもりだ。大學の講義は、五月初めに今學年丈け先づ「日本美術の特質に就いて」と云ふ題で初めたところ、案外に聽衆が多く、十七番室では足りないで、立て居る人も餘ほどあつた位、先づ滿足であつた。來年からは正科にするとやら、其邊は僕は餘り望むところでない、どつちでも自分がやる丈けやるは同じ事と思つて居る。

其から僕の住居――去年の暮この大磯に來てから今日まで、又今日以後九月一杯は當地に居る。鴫立澤の西に小さな貸別莊を借りて、大抵の書物は持て來て、先づは不自由なく暮して居る。體もだん〳〵好い方にのみ向て居たが、先月、即ち五月下旬に一寸やられて、昨今は少しわるい氣味だが、大シタコトハ無い。兎角用心が足りなかつたらしい。併し追々回復しつゝある。友人も時々尋ねて來るが、先づは獨棲の姿である。幸なことには、妻も子供も丈夫だ、是のみが何となう心强い。

今月一日、乙羽は百日計り第一醫院に入つた後遂に死だ。病氣は腸窒扶斯に肋膜炎、實に惜しいことをした。

……丁酉會の最近の會は、去月三十日夜、青年會館に開かれた。演者は、藤井、吉田、浮田、僕は病氣で出られなかつた。此頃では雜誌も君の處へ行くだらう。村上專精さんは、

先日、有田・清見・松坂生と仲直りして、京都で何か會をしたさうだ。仲直り仕様が餘り早い様だ。同月八日には伯林に君等の僕で面白い會があつた相だが、僕は實に羨ましい。晩翠はいよ／＼近日獨逸に行く、君と相見る日も遠くなからう。出發は本月十二日と云ふことだから、此手紙よりも前に君を見るかもしれぬ。本月の太陽に、君に與ふる書を書いたが、實に君を引合ひにして僕の理窟を述べたに過ぎない。新大學總長は山川健次郎君だと今日の新聞にかいてあつたが、多分さうだらう。

君の健康は如何か、健康を失つては凡を失つたも同然だ。學問抔は大概にして、先づ氣永に保養して來給へ。僕は、せめては僕の友人知人が、皆健康に歸るのを見たい。建部も追付け歸るだらう、歸來後の氣焔が想ひやられる。が、彼れも一個の性格だ、通常人以上の人物だ。旅行して居るのは性格修養には好機會であらう、病氣も然りと僕は思ふ。人は兎に角死生の間に出入するとき、人生の趣味もいくらか分るのだ。此頃は宗教的問題に關して思念することも往々ある、日本に一箇人主義とでも云ふべきものが一層顯著になつた、日本主義時代の思想が、僕の本然の要求なる部分を變表に過ぎなかつたことが今から思はれる。僕の思想は獨逸の文明に接して如何様の變態にあるか、聞きたい。笹川の近信には、君は頻りに排獨逸主義を唱へた相だが、大方は想像して居る。吾々お互に、是より數十年の後になりて、少年からの思想性格の發展を考へたなら、嘸々興味あることであらうと思はれる。

日本では梅雨も近い。此頃 Mrs. Johnson のミュンヘン、ドレスデンの紀行を讀で、美術上のことを想像したら、實に神往の情に堪へなかつた。近來精神上の財寶を持て來した書物はトント手にしない、精神は饑て居る。是からチト宗教上の書物を讀まうかと思て居る。あゝ人は何故に是の限り（あす）生命の中に無窮を求むるの心があるのか。樂しい様な、又恨めしい様な氣がする。

芥舟は先月下旬又た男兒を産だ、是れで二人目だ、盛なりと云ふべしである。先達大學病院の鼠にペスト菌ありしより、東京市はペスト豫防の爲に大騒をなしつゝある。水道の蛭問題も中々盛だ。

巖谷君（小波）に逢うたら、健康を祝してくれ給へ。藤代君にもよろしく賴む。君は何時まで伯林に居るか、それを君が立つた後に、ここ通はかきを出したが、無論落手の事と信ずる。此書面を草する時は、天氣もわるく、鬱陶しく檐を掠めて聞える恐しい夕暮である。あゝ今頃伯林で、君は何をして居るのか、三千里途は遠いが、四十日程に過ぎない。此からだとへ丈夫ならと、ツイ愚癡も出る。必ずしも無理でもあるまいか。健康で暮し給へ。僕は出來る丈け愉快に滿足に暮して居る。人間としての修養の足らざることを思うて、自ら勵まし、且樂みつゝある。

明治三十四年七月五日

## 大磯より

東京なる笹川臨風氏へ

思ひながら御疎音に打過候。相變らずツマラナク暮居候。連日梅雨伴に霽れては又も昨今の暑さ、何共不如意之世の中に御座候。過日三君御來訪の後は、何等會心の談話も耳にせず口に上らず、湘南と云へど風雅でも洒落でもなく、しやう事なしの佗住居、例によりて如何、御座候。御書中御申越の博士會文云々の事、御書面と同時に其他方よりも承り、意有之何やらオカシキ心地せられ申候。ドーモ何事の

立場よりは、學士も博士もイッタものにあらず候へども、貴命の如く、……

## 明治三十四年八月十五日

### 大磯より

東京なる登張信一郎氏へ

昨今の暑氣、都も此地も同じ事と存候。酒あれども飲めず、語りたくも友無く、苦熱の中に輾轉致居候。過日御來磯の折は、久々にて會心の興、會、今以て忘じがたく候。未だ落手は不仕候得共、シャックの書御郵送可被下よし、苦心萬々忝奉存候。唯今帝國文學到着、雜報欄内の御氣焔至極面白く、會心の文字、空谷跫音の思あり。大兄の文字月毎に雄大、大慶々々。ニーチェ論も時流を拔ける一大論文、嶄として當今に比類なし。藤岡氏の文も面白く讀まれ申候。文藝評論の御評、溢るゝ如き御同情、感涙に不堪、人生知己あれば死すとも恨なきにて候。小生氣力消耗、筆端窘縮、昨日來、几に向ひて一字を成さず、顧みて憮然たり、御憐察被下度候。近日折にふれていゝ小生の詩左の數首、字數の制限は御免の事。

△

かつて此世、かくまでは
　狭からざりしを
今の我身の老いぬるぞ
　口惜しき。

△

さら〳〵と悲しくもひゞくか
　蟬の小川よ
やがては大濤の中に
　沒るべきなれば。

△

波にも似て碎けたるか
　わがこゝろ
などまどかのまゝに照さゞる、
　大空高く澄み渡る月。

△

君よ、わが名を問ふなかれ、
わかれてはまた會はるべき我ならず、
見ずや、空行く雲の右と左を。

尙ほ二三首も有之候へども、まづはこんなものに御座候。境遇御推察被下度候。芥舟兄にもよろしく、此頃の御無沙汰の御わび願上候。

## 明治三十四年八月十九日

### 大磯より

東京なる登張信一郎氏へ

拜啓　シャックの書二卷、昨日落手、色々御厚配奉謝候。殘暑如燒、興會索然。臨風、芥舟、諸兄に御序の節よろしく。

非詩非歌一首

「波にも似てくだけたるか、わがこゝろ、などまどかのまゝに寫さゞる、大空高く澄みわたる月」

## 明治三十四年九月二十四日

### 相州平塚より

宇都宮なる笹川臨風氏へ

昨日匆忘之際、あとにて思へば御話申度事山々ありしを、殘多きことに候ひき。秋霖連日、詩興盡適、唯胸中悶々、遂に一字を得ざるを恨とす。兩三日中には興津へ參可申候。昨夜夢甚苦、今朝尙懊惱。君之健在を祈る。

明治三十四年十一月十五日

## 鎌倉より

ライプチヒなる姉崎嘲風氏へ

嘲風兄！　さて何事より書き初むべきか。

此の秋のはじめより絶えて御消息を申さゞりしが、君よりは度々の御書面、うれしく懷かしく讀み返し〳〵候ひき。今は言はまほしきことも此の狹き胸には忍び難きまでに多くなりまさりつ。いでや卷紙のあらむ限を是の思にて染め申し候はむよ。

されど君よ、何事より書き初むべきか。曾てはイルメナウの幽棲に老詩聖が晩年の安慰を偲び給ひし御書、世にもあはれに誦し候ひしが、さても今朝のゲーテが Gärtner の書箋に述べられたる感慨こそ世にも貴く覺えたれ。國を離れて千萬里、雨蕭々の夜半などにかゝる思念に逢着せば、懷郷の情如何に切なるべきよと、くれぐれも御察し申し候ひき。げに此世廣く美るはしくはあれど、國守の身には據すべき要もあらじ。己の花園を美しく護るところ、そこには天の饗れもあれ、憩ひ幅でもあれ。——あはれ吾等には如何に貴き教訓に候ぞ。されど君よ、こは園守の身の上の事也。君は是の廣き世界を以て其の園とすべき身ならずや。日本は眞理の前にはいとも小さき國土なるべし。君は是の大いなる眞理の爲に世界の花園に心し給ふべき身ならずや、強ちに故郷を輕しめざれ、唯君が天分の大いなるに思ひ及びて自ら重ずる所あれよ。予が如きは所詮此世にては敗亡の身也、たゞ〳〵君が如き人器の友たることによりて、天の寵靈の吾が上にも彰はれむことを祈るのみ。あゝ君よ、心強かれ、自ら重ぜよ、自ら尊大なれ。

君よ、予は敗亡の身なりと云へり。げに〳〵敗亡の身也、屈辱の身也、無念の身也。思ふこと内に結ぼれて、外には狂者の如く想はるゝ身也。せめて是の體軀の健かにして事に勝ふべくんば、叶はざるまでも亦詮術べあれ。今の吾身は旦暮の藥餌是れ事として、書を讀み筆を執ることだに心にまかせず、空しく青天白雲を望みて如是觀を爲すもの、あはれ敗亡の身に候はずや。年來、心甚だ穩かならず、偉人の前蹤を望みては徒に此身の力足らざることを哀しみ、さりとては斯くて已むべき身ならずとは何によりての覺悟なりけむ、敢て蟷螂の斧を揮て轢車の轍に當らむとすることしば〳〵、事敗れ心落ちて而して已む、殘るところは斑々たる創痍のみ。予が心是の如くにして日に月に老い且つ衰へぬ。世人と知友と、這般の苦惱を知るもの稀也、たゞ空しく孤影と相對ひてこゝに亦如此觀を爲すのみ。君よ、あはれ斯らむは敗亡の身ならずや。人は聞へて曰く、愚なる者よ、汝は此の世に於て如何ばかりの者と思ふや。人は多く國は弘し、汝が如きの生死存亡得て關する所に非ず。小我に慢じて增上の惡念を起すとも、世の汝を見ること飛花落葉にも劣るらむと。げに〳〵飛花落葉にも劣るべき身也。うたかたの有れども無きが如き果敢なき身也、とは素より存知の旨ながら、たゞ此一念の抑へがたく、ほだし難きを如何にすべき。あゝ君よ、人の生るゝ己れの爲に非ざれば、そも何物の爲めにぞ。世に最も悲むべき眞理は、人生の事實なることには候はずや。

* * * * *

かゝる思ひを君讀まば笑ひもし給ふべきを、暫く止めなむ。去月初めより鎌倉に移り越し候ひぬ。大磯よりは聊か樂しかるべしと覺え居申候。大學にては一週二時間一學期として本邦美術史を講じつゝあり。其の講義も去る頃十二時間もてやうやく講じ了り候。こは本邦

美術ノ特質に關するものに御座候。かねても申し上げし如く、本邦美術史は小生が是非一畢讀致し度き抱負ありて從事せる研究に有之、幸に健康許さば數年の後にはモノになる筈、成就したしと結構罷在候が、鎌倉は君の好らみ給へる土地の一なりしやに覺ゆ。今や秋も深うなりて、古き幕府のたゝずまひ、一向所感の身にはたゞならず覺ゆ。懸孝が所謂百里停雲總殺氣、一林高樹皆秋聲のなかめ、目も寂しう心も疎く相成申候。此地に住へる緣に何か土地に關する一著述試み度思へども、例の古跡の探討は鎌倉志八卷と新編相模風土記百廿五卷とにて盡きたり。何かそれ以外の述作もやと思念罷在候。日蓮上人の追懷に勸まされて、近日來其の傳記並に高祖遺文錄など繙き居候が、さても是の偉人の生涯こそ今更貴くも仰がれ候ものかな、心も言葉も中々に及ばず候。上人の人物は其の教義を味はでは解し難ぬるふしありと、さる先輩の勸めにより、法華經等をも讀み申候ひしが、げに方便、壽量、二品の本義なくては日蓮上人一代の大信仰大抱負も其の根抵を失へるに同じきこと、覺束なくも合點致候へ。げに遺文を讀まむものは、先づ彼の經を讀むべきにて候ふべし。遺文中の開目鈔、撰時鈔、御振舞御書などは申すに及ばず、其他の消息文なんど、上人の傳記に對照して興會盡きず。文學として見るも、上人の人物そのまゝの大發現、げに〳〵鎌倉時代第一の偉觀とや申すべき。三上氏等の日本文學史に一言も言ひ及ばざりしは、如何にともいぶかし。君の意見如何。若し興大いに加はらば、せめては是の偉人の一面を攝取して吾が筆端に活現したきもの也。當地古美術は多く言ふに足らざるが如し。古畫を多少襲藏せるは建長・圓覺・光明・其他兩三寺に過ぎず。建長寺の顏輝が十六羅漢、これはた天下の一品たるべく候。佛像には運慶、安阿彌の作と稱するもの多々あれども多くは信じ難し。唯東慶寺其他二三の古寺に宅間法眼の作あり、是れいさゝか珍とすべし。唯宅間法眼と名高れる佛師は、寡聞なる小生の未だ聞き及はざるところ、何れ研究を遂け度しと思ひ居候。かゝる逍遙に暮らし、頃日は誠に快よく候へども、少しく熱氣あり頭重き日には終日室を出でざることあり、困却の至に候。

* * * * *

過日御送りの Das Künstlerbuch の第一卷 Böcklin 並にツェーリヒなるエートス學會出版の一論文、何れも興味少らず讀申候。ベックリンの事は近頃の新著にも相見え候ひしが、猶其には今少し新しき題目に有之、趣味別して淺からず候。其書所載の畫中、Toteninsel の一幅は、先年ツェーリヒにて一見せし印象、是の書によりて呼び起され申候。本邦の繪畫もまた〳〵依然舊阿蒙と申すべきか。

御存知の正木直彦氏、過日美術學校長となりてより、さしも情弊の府たりし同校も追々面目を新にすべしと期待致候ひしが、今は改革、一頓挫の由風聞有之候。今秋の白馬會には黒田氏の作はじめ數幅の裸體畫ありしを、下谷警察署長は行政處分として腰部に黒布を纏はしめたりとか、トンダ滑稽に候はずや。是の爲に、何時も世間に冷遇せらるゝ同會は大に世上の好奇心を惹起し、觀者日々如堵と申す事、或人は何故に黒布に代ふるに女褌縮緬のあでやかなるを以てせざりしやなど戯れ候ひき。いつもながら馬鹿々々しく覺え候。

學界近來の著述としては、村上專精氏の佛教統一論第一編大綱論と題する一書、殊に世間の注意を呼びしかの如くに候。氏は是の著述の爲に眞宗大谷派の僧籍を脱するの已むを得ざるに至り、過日其理由書を公にせられ、予も亦一本を領し候。佛教教理に門外漢たる

予には、氏の所言の是非は[illegible]も、氏の高潔雄大なる[illegible]には深く[illegible]の敬服する所と存じ候。

建部君去月[illegible]歸朝、本邦社會學の爲に一生面を開き候事と存じ候。可賀可賀。歸朝後未だに面會の機を得ず。去月二十日頃同君並に新留學生諸君の留送別會、上野精養軒に開かれ候ひしが、病體[illegible]の身とて、遺憾ながら出席致さざりき。當日同君の例の大氣焔を待設けたる人々は、其の挨拶の簡單低聲なるに一本參りし由にて、同君の演說をば空腹にて聞くはたまらじとて食終る頃まで引き延ばせし幹事の用意は凡て無になりし由に候。藤岡氏は言語學、八杉氏は獨語、熊谷氏は教育、塚原氏は兒童心理、小西重直氏は教育、是二人は第一高師より何れも今回留學を命ぜられぬ。大學、高等學校の新設のことも例によつて噂のみにて、當九州に醫科大學の新設あるとし傳へ聞く。[illegible]に大學增設は[illegible]の[illegible]とし[illegible]され、當局者も[illegible]、[illegible]を目にするものにて、[illegible]の事情[illegible]に[illegible]を必せさるは[illegible]しく眼あるものゝ皆[illegible]。大學教育の擴張としては、京都大學の[illegible]こそ目下の急務ならめ。田舍[illegible]のキドミなどは當局者一笑に附し[illegible]也。視學官は今回文部省の手を離れて內務省の所管に移りたる由、かゝる無用の官こそは全廢して、其の費用を留學生の方にでも廻せばよかるべきにと思はれ候は如何にや。

丁酉倫理會は從來の如く活動し居れり、御安心あるべく候。

＊　＊　＊　＊　＊

雜誌太陽は每々御[illegible]され候事と存じ候ふが、さても小生が近來の言論を何とか見給ふや。友人先輩の中には、其のあまりに過激、偏僻、且つは幼稚なる由、每々教誡を賜はり候向も候へども、小生に於て如何に自ら[illegible]すべきかを知らず。或は小生の年來の病苦と失意とによりて狂せるに非ずやなど云ひはやすも候由なるか、是れはた小生に於て素より存知の旨也。時に深夜自ら省みて、其の云爲の常道に外れたるものあるを思ひ、自ら我心の健康をさへ疑ふこと無きに非ず。たゞ〳〵是非も無きは一念の發作にて候ぞかし。狂か狂か、自ら知らず、[illegible]き、何も留め[illegible]ものあるを如何ともし難うぞ覺ゆる。[illegible]する所は一身の所繫已みがたし、五惑の道[illegible]ほ永しと見るにきか。何れは我心の澄む時かは來りぬべし、今の我に於ては如何とすること能はざる也。あゝ[illegible]かしきは[illegible]人よりは[illegible]一人の[illegible]也。[illegible]由こそは小事の[illegible]によりて、かくも迷ひ惑へるよと想はれむことも一日惜しきよ。[illegible]思ふ所詮は、たゞ〳〵先に是の一局面の通達を[illegible]られよ。理を爭はば合はざることもありなむ、道に照さば許し難きふし素より無きにもあらじ。是れはた小生に於て存知の旨也。[illegible]よ、一個[illegible]の存在は日月の天に懸るが如く、大日本帝國の世界に樹立せる如く、動かし難き事實ならずや。而してこの一個[illegible]の思想信仰、まことに之に忠なるものならましかば、はた是れ同じく日月の天に懸るが如く、大日本帝國の世界に樹立する如く、動かし難き事實には候はずや、如何。

あゝ君に別れてはや二歳に近からむとす。君は學びの路深く分け入りて世の[illegible]を照すべき[illegible]を得給へり、吾れは日に[illegible]へ、日に衰へて、恐らくは其の心さへ[illegible]れり。[illegible]れば人に狂なりと呼ばれ、物言へば[illegible]かなりやと問はる。曾ては吾れに理想の天地ありしが、今や無し。新たなる光明を[illegible]ふれば、人は見て惡鬼の[illegible]と[illegible]り。吾れ手は久しうしてバイロンが詩集に觸れぬ。あゝ〳〵マンフレッドやサルダナパラスに[illegible]は、吾が想ひ設けざる所なりき。[illegible]

見給はずや。吾れは又ニイチェの思想に先たつ契合あるを覺えぬるは如何にぞや。人は吾れに向て言へり、汝は先に日本主義を唱へたるに非ずや、文學美術をさへ國家的歴史的の立場より論評せむと企てしに非ずや、今や則ち如何の狀ぞと。哀しい哉、吾れは答ふべき言葉を知らず、唯自ら省みて、心のまゝにして自ら欺かざりしを喜ぶのみ。天も照覽あれ、遠きに在ます君の我身近くにありても見そなはせ、良しや世を擧げて僞と罵らむも、吾れに於て引くべき一分の責あるを覺えず。所詮は矛盾の人身を受けて、此の末法の世に人となりぬ。大覺世尊だに四十餘年未顯眞實と宣らせ給ひて法華爾前の經典をば一々妄語に附し給ひぬるものを、いかに況んや性淺く果乏しき吾等如きに於てをや。あゝ多くは言はじ、君よ這般の煩悶を如何とか見給ふぞ。見上ぐれば窓前の山樹一分の紅を染めぬ、春秋席あり、日月晝夜を度る、人心何ぞ獨り是の如く常なきや。なかなかに申すも愚かの限と存じ候。

* * * *

ことし秋に入りて、君が懐かしき書の瑞西の印しを染めし頃より、此地兎角雨のみ降り續き候ひぬ。憶へば去年の今頃、興津の浦邊にさすらひて、三保・薩埵のほとりに逍遙くらししことの哀しき記憶とはなりけるよ。今としは十月の大半は雨に鎖ぢられ、晴天三日とは續き申さず。大方人の心の物狂はしうなるは斯る時ぞと聞き及びぬれば、わが是の朝夕の物思ひもたゞならず思はれ候ひぬ。君が先つ頃の文に、ライン河のほとりに雨に降りこめられて、遠く吾れをば憶へるよし書き給ひしが、あゝ此の心、互ひの心ぞ唯よく解すべかむなるを、如何に如何に。此の手紙、君が手に落ちむ頃には、君は既に莱府の學窓に書讀み給ふ頃なるべし。莱府はよからぬ處と聞き及ぶ、現に大西氏の病を獲給ひしも此地なりき。言ふまでも無けれども、何事を差置いて攝生第一と心得らるべく候。

* * * *

書かまほしきことの半ばをも書かざるに、書くべき紙の殘り少なになり候ひぬ。佐渡は紙の無き處とかこたせ給ひし日蓮上人の語も思ひ出されて、由無きことを永く書き列ねむの心無き業を已むべくや。畢竟、吾徒はお互に強からざるべからず、又強からざるべからず。叶はぬ迄も理想の旗押し立て、一度は甘心の軍果し申さむず。君の歸りまさむ頃は明後年の暮なるべくや。吾れは先づ生を力めむ、糧を畜へむ。若き者のすべき程の事爲さで止まむは口惜し、聞け日蓮上人の文字をば、君には如何に見給ふぞ。あゝ是の意氣、是の精神なくては、何事も果し得られまじうぞ覺ゆる。

「詮ずる所は天も棄て給へ、諸難にも遭へ、身命を期とせむ。……善につけ惡につけ、法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てむ。日本國の位を讓らむ。法華經を捨てて觀經等に就いて後生を期せよ。父母の頸を切らむ、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等と、誓ひし願破るべからず。」

* * * *

是の書認め了りたる夕べ、ラインフェルデンの三通の御書、並にニイチェ詩集一卷、難有領手候。ゲーテを以て無聊孤獨の唯一の友とせられむ程の君の境遇こそ心憎く覺え候へ。Maeterlinck の譯面白く拜見仕り候ひぬ。げにげに太史公の如く天道の是非を疑ふともまことに益なし。神は良し天にいますとも、我等は地に横はれるを如何にすべき。所詮は人々己

れの中に神を見出し、天を造るの外無きこと一に高山の説の如し。人間一大事の覺悟即ち是の一問題の解決によりて決定すべしと存じ候。くれぐれも御身大切に遊ばさるべく候、不盡々々。

## 明治三十四年十二月十日夜

### 鎌倉より

東京なる登張信一郎氏へ

今夕歸來、御書拜讀仕候。昨日午後貴寓に御訪申上、久々にて傍若無人の放談致度樂み候處、御不在にて殘念に候ひき。即ち芥舟漁郎を驚かし、夜九時近くまで氣焰を吐き、近頃愉快に候ひき、唯兄も席に在らざりしを憾とす。御書の趣一々色讀、感懐不淺候。吾黨の言論、世俗に容れられざるは素より覺悟の前ながら、無能無格の凡小輩の譯もなく罵々たるは笑止且つ忌々しき限に御座候。仰の中東公等は昨夜芥舟子の注意にて一讀致候ひしが、かゝる愚論は一笑に附して可也と存じ候。……斯樣の者共の申す事、決して齒牙にかけられまじく候。……早稻田學報の記事は、小生見ず候へども、御書によれば、言語同斷の不埒、其下劣なる根性憐み且つ惜むべく候。……かかる劣輩の云爲は、まづ〳〵雲烟過眼視せられて然るべく候か。唯親分の常識一點張の俗論は大に討つべし、小生も此點にては先輩ながら一步も讓らざる覺悟に御座候。今月の雜誌に馬骨人言の駁論あるよし、鶴首々々。來春紙上にもお互に大光焰を吐かむは如何に候や。小生はなか〳〵屈せず、勝ち誇りたる者の態度にて盛にやる積に候。醒雪、金港堂に入る由、小生はがらにもなきに、ヨセバヨキニと思ひ候が、事後なれば不及申、何れは同社は博文館の向うを張りて雜書雜誌發行の企あるよしなれば、其爲ならむ。醒雪は桂月と同じく國文學者が山也、吾等の相手にはならず候。然し賑かになり、仕合に御座候。目下の處、吾黨の勢は偏に君の力に倚らざるを得ず。事、黨同伐異に類すれども、主義上の爭、可然事と存候。芥舟兄とも御申合せ、大文字御染有之度候。……

帝國文學の原稿は、過日歸りがけに芥舟に話せし通り、ドーモ是から新しきものは出來ニクシ。依て中學世界の爲に書き候「況後錄」と題する日蓮物語、是れは到底中學物にあらず、聊か小生得意の文體に候間、右御揭け被下度候。讀者は全く別なれば不都合なかるべきか。右況後錄は、小生假りに豪傑文體と名くるものにて、今の……ヌラクラシタ「奴隸文體」に反せるものにて、即ちニイチエ主義を文體の上に發現したるものに候。小生は帝文の讀者に一讀して貰ひたい。依て右樣御取計被下度、博文館に謄寫申附置候間、兩三日中には屹度御送申上候。尚有無御返事を乞ふ。

あまり永く候へば、是にて擱筆いたし候。此花は屋後の山の產物にて、机上芳香紛々、御手に落つる頃には凋落すべくや。早稻田學報おあきに候はゞ御送被下度候。小生も一打擊一叱咤を加へおくべく候、頓首。

## 明治三十四年十二月二十日

### 鎌倉より

宇都宮なる笹川臨風氏へ

過日の御書拜讀、御無事御精勵の趣大賀大賀。小生事、病痾依然、あしともよしともなく、先は心境共に碌々たる事と御承知被下度候。[illegible]原にてホインヽー種の善きもの出來の由、羨望羨望。御令弟よりの御書も拜讀仕候。同

君より過般來掲文可寄稿旨御來命に候ひしが、病軀懶惰の事とて御返事も不差上打過候ひき。新春の松陽新報へは何か近日起草致度考居候。……新春には御歸京と存候が、其節當地方へ御一遊如何。醒雪上京して金港堂の文學雜誌編輯に從事の由、先日同社岩田より承知致候。今時文學雜誌記者として上京の事は、小生に於ては不贊成に候へども、事後の詮議如何ともしかたし、首尾よく成功すればよきがと被案申候、貴說如何。但京地同人の來るは喜ばし。君去れる代りに醒雪來れりと見ば可ならむか。來春の帝文に、美文御寄稿の由、久々の御執筆、鶴首罷在候。小生も況後錄と申すもの一篇寄稿仕候間、御一讀の榮を得ば幸甚。右は日蓮上人の述懐に擬したるものに有之候。當地移住來、日蓮研究は愉快なる一事業に有之候。上人は實に日本第一の偉人と思はれ候が、貴兄所見如何。小生は日本二千五百年史中是人に於て、始めて崇拜的英雄に遭遇せしの感あり、興會不淺、感謝之念日に深く相成申候。小生は來春梅花の咲迄當地冬籠りに御座候。貴兄御赴任以來、教育上の所感切に承りたし、至囑々々。竹風、芥舟、依舊盛也。桂月にはトント遇はず、何だか少々メイツタ樣に見え申候。時下向寒之候、御自愛是祈、不盡々々。

此花は屋後の山の産物に有之、御手許に參候節には香氣も失せぬべし、机上の芳烈中々にゆかし。

## 明治三十五年二月十六日

### 鎌倉より

東京なる畔柳都太郎氏へ

一昨日マタヤラレタ、換言すれば喀血した。コヽ三週間は何事も出來ぬ、便所へも行けぬ、隨つて帝文へも書けぬ、併しマダ死にさうもない。何れ又書くことの出來る日が來るだらう。

## 明治三十五年三月七日

### 鎌倉より

宇都宮なる笹川臨風氏へ

去る六日の御書嬉しく披讀仕候。去年暮より打絶え御無沙汰仕居候ひしが、思へば無念之事して候ひき。新年の御よろこびも、羈旅の病客にて何方へも缺禮致し、御海容被下度候。春色四もに到りて、寺も山も流石によそならぬけはひに候へども、病客は例によりて藥餌に親しむの外他事無し。去月中旬のはじめ、又々すられ候ひしが、昨今は褥をはなれ碁など囲み居候、御安心被下度候。御地は赴任以來既に半歲を超えたり、例の里心起り候頃と御察し致居候が、都も別に面白きこともありけにも見えず、文壇の近時など、別に御話申上候事も御存知の外には無之と存候。醒雪、文藝界に成功するや否や、昨冬來訪之節、大に警戒を加へおき候。雜誌編輯は大俗務にて、第一八方美人主義ならねばならず、隨て、ふくるゝ腹をさすり、耐へねばならず、一個半個の丈夫魂ある者にとりては一難義と存候。……過日太田の三浦校長殿より來書の中、貴兄の事に關し、「笹川の奈良茂の大臣、僅かの中に校長のコツを呑こまれ候には流石の大通と感服」と原文のまゝ云々となり、遂に兄の校長學御研究の昨今を想望仕候、……此春休には是非々々御一遊、久々の御面晤を樂み居候。姉崎の手紙、太陽紙上の大氣焰、痛快と存候。水城大先生(編者云、建部遯吾氏の雅號)には、今以て面會の機を不得、吾等と心境日に疎きを覺申候。何やら面會

日をきめて、一々友人等にくばり、銘々に待問、何だか訪問も怖ろしげに感ぜられ、ほと〳〵大先生にはなるまじき事と決定仕候。紙幅盡き候へば、又之日を期し申候、不盡々々。倭文子殿（編者云ふ、笹川氏長女）健全なりや。

明治三十五年三月七日夕

**鎌倉より**

ライプチヒなる姉崎嘲風氏へ

Grafin Potockaの半身像を載せた君の二枚續きの片信を一昨日病床で讀んだ。タンホイゼルは誠に面白く讀んだ、殊に君の手澤を存し、且君の眼がこの同じラインの上に、恐らくは吾と同じ感動したかと思ふと、僕は言ひ知らず愉快に感じた。如何にも Cruel wall of time や space は、此世に於ける幾多の惱みと泪の媒ではあるが、是ある爲に人生に詩もあり、宗教もあり、又哲學もあるではあるまいか。君の言は實に尤もだ。唯眞の友情、眞のラブに對しては、如何なる惡魔の障害も無駄であるたけは、樂もしい世の中と云はねばならぬ。僕は此前の手紙に病氣だと書いたが、昨今は褥を離れて居るから、心配して呉れ給ふな、……

明治三十五年三月二十七日夜、　　峰上にて

**鎌倉長谷より**

同要山なる田中智學氏へ

拜啓。其後御病狀如何候や、御伺申上度心懸居候處、今年は梅にもそむける身の、櫻にも縁無からむとてや、兩三日前よりまたまた蓐上の人と相成候まゝ、御臥のまゝに一書認申候。本月妙宗紙上卷頭の御論は、近來の大文字、承讀仕候。殊に小生の感動せしは、御高著「宗門の維新」に對する世評に就ての御文に候ひき。物の數ならぬ不肖如き者をだに、かばかりの御力と思召候迄の時勢の非は、二十餘年來金剛不壞の御熱誠もて經營せられ候鴻業に對して、如何ばかりの御無念ぞや、感涙とゞめあへず候。妙宗合卷一、二、遺漏なく拜讀、興味津々、中にもをり〳〵草の御物語、病中所觀など面白く拜讀仕候。其中三、四をも恩借仕度、事理兩觀之御說は、猶ほ三卷に涉りて不少小生の樂觀を惹起致候。此等は猶おき候。日蓮上人の國家觀に就いての御高說の段々、重々拜讀、且拜聽仕候。尙ほ氷解せざる一難團有之、是等いづれ其中拜芝之上親しく敎を請度候。太陽紙上へは、今後半年許は上人に關する卑見（或は感慨とも申さむか）を陳述致度、結構仕居候。師子王門下の學衆方等へは、釋迦へ說法に候半事勿論ながら、多少世間に上人研究の端緒もしくは動機を與ふるならんかと望居候。中には幼稚の見も多々可有之、其折に御叱正被下度候。日親上人の傳記も、本邦希有の佳談と被存候まゝ、其中離蓐會心の折には、何か小兒輩の爲に一篇草し度心懸居候。開宗記念大會も近き候折柄、精一御攝養奉祈候。小生も今後一週間も相續き候て「はゞ」か床をはひ出ること可叶かと望居候。萬々拜晤之折に申殘候。不一。

明治三十五年四月一日

**鎌倉より**

ライプチヒなる姉崎嘲風氏へ

君のワグネルに對する感情は、誠に人生の

尤も深い意味に觸れた言葉だらうと思ふ。あゝ自己の生命を撫無することの出來る愛が此の世にあり得るならば！　此言葉の意義を解する人でこそ、大宗教家、大詩人乃至眞の人となり得るのではないか。世人は文明の賚と云ふ、されど古より、吾人の生活を積極的に豐富にしたものは、其根柢に於て是の大渴仰を有する所の宗教、文學、美術乃至一種の唯心論的哲學ではないか。僕の所謂道學先生の道徳や、學究居士の眞理などは、共に與らずと云ひ度い。Phantasie！　生々發展の天地人生の大道を助成したものは、實にこのフハンタヂーである――僕は言ひ過ぎたであらうか。道徳は道徳の腐敗を證明するが、そを救濟する力は無い。丁度蛆蟲が糞土の必然の産物であるが、そを清淨にする力の無いと一つではあるまいか！　《昨年十二月以來上京せぬ》僕の健康は餘り良くないが、良くなる望はある！

ワグネルのタンホイゼルの外のオペラを送つて吳れ！　面白！

（五月九日ロンドン着）

## 明治三十五年四月九日

**鎌倉より**

ロンドンなる姉崎嘲風氏へ

此頃は夜毎に君を夢みぬことは無い、昨夜で三夜續いた！　何事とも取りとめもない夢ながら、其夢の全體の色あひが、一種の陰鬱悲哀なる趣がある！　あゝ光明快濶なる希望を、君と共に夢みることの出來ないのは、想ふに、是のからだの不健全なるからであらう。夢ながら僕は悲みに堪へない。

三月二日の二枚續きの端書は、今朝受取た。いよ〳〵カイゼルの國にアデュをして英國に行くとの事、願くは到る處に幸あれ。……晩翠に遇うたら、又色々面白い話もあるだらう、後便を待つ！

…………

（五月十三日ロンドン着）

## 明治三十五年四月二十三日

**鎌倉より**

ロンドンなる姉崎嘲風氏へ

英國よりの君の手紙には接せぬが、定めて幸ひの朝夕を過ごされつゝあるであらう。倫敦に就いての君の觀察に接するの日が待遠い。此方には何も珍らしきことは無い。菅公祭、承陽大師六百五十年忌、日蓮開宗六百五十年記念會などの祭りが盛りだ。僕は健康が兎角思ふ樣でないので、長論文を草することは已めて、小さき庭に四十餘種の草花を培養などして此月日をマギレ暮らして居る。あゝ哲學が何だ！　智識が何だ！　是の憂き世の苦を脫るゝの道は三つしかない、曰く Long love, early death, or madness !!! Ah, my friend, which shall I choose? 鎌倉は新綠の時期で、野も山も樂しげな笑を含んで居る。東京には頓と行かぬ。桑木がニイチエの……を丁酉會で說くとの報を今日得た。思想界は凡俗の極だ、君の聲も僕の聲もなか〳〵人の耳には入らぬ！（五月廿七日ロンドン着）

## 明治三十五年七月三日夜

**鎌倉より**

ロンドンなる姉崎嘲風氏へ

五月十四日から同二十日に亙つた君の精神に充ちた手紙を、廿四日之他の手紙并に端書、タイ

ムス週報と倂せて一昨日受取つた。即日にも、又昨日にも返事を書き度かつたが、此頃は梅雨期の最中で、健康の少からず衰へた爲め、氣力が沮喪して幾度か机に向つて遂に筆を執りかねた。今夜は力めて書くが、許して呉れ、ドーモ長く書く譯には行かぬ。君の精神に充ちた手紙に應ふべき僕の感情の十一をも現はすことが出來ぬ。呉れ〴〵も殘念ではあるがドーカ赦して呉れ。

ショーペンハウエル、ニイチエ、ワグネル、此三人の間の關係を論じた君の文によりて、僕は此三人間の關係其者を知ることよりも、君の精神の要求の那邊にあるかを知る處に僕は少からず幸福を感ずる。此事に就いては、僕は君に滿幅の敬意を捧げねばならぬ。恐らくは、僕は尙ほニイチエの理想に彷徨する者であらう。愛の福音に應へ得る迄には、尙ほ多少の曲折を經ねばならぬのであらう。此事は僕の中心の慚愧で、又同時に懺悔である。此間の僕の精神狀態は、他日精しく君に打明けたいと思うて居る。日蓮に對する君の批評も、大に僕を啓く所がある。併しながら國家と宗教との關係については、君の日蓮觀には、多少の不審がある樣だ。丁度此事を明後日發行する太陽紙上に、僕はザット書いて置いたから、自然君の手に屆いたら是非一讀して呉れ。僕は日蓮に於て其の信念の爲に國家をも犧牲とする偉大なるイゴイストを觀た。今日の道學先生的倫理說に勝へざる僕の大なる安慰は、此人の此特質に現はれた。是の如くにして安立し得らるべくんば、天下他に何物を要せざる如く感ぜらるゝのが、僕の目下の病であらうも知れぬ。ワグネルに就いては、僕も少し研究して見たい。近日井上さんの處から借り受くることにしよう。

君の今度の論文は、先度のよりもインハルトが多い樣に僕は思ふ。……

土井からは度々書面や書物を貰つたが、トント無沙汰をして居る。何も病氣を楯にするではないが、不快ノ日には一日茫然として何事もせずに、陰鬱な考へをとりとめもなくたどりつつ暮らすこともある。同君も健康になつたか、肺などに故障があつたら何事を措いても心配せねばならぬ。願くは僕の友人間の肺病は、僕一人で負擔したいものだ。これは恐らくは訛傳ではあらうが、僕はドーモ氣になる。先日……新歸朝者の談に、姉崎は肺が惡い樣だと話したと僕に告げた。そんな事は無論虛說だらうが、先年キールで吻喚然たる風など引いた事もあれば、此點はドーカ十二分に注意して呉れ。

僕の寫眞をよこせと言はるゝが、僕も送りたいは山々だ。唯ドーモ此の瘦せに衰へた面貌を、遠方に居る君に送るに忍びないのだ。ドーカモウ少し肥つてからと每々思つて居るが、其の肥りが中々來ない、僕の是の心根を憐れと思つて呉れ。僕が此儘に死んだら、君の送別に丁酉會連と一處に撮つたのが、君の僕に對する永遠の想像となるであらう。其方が僕は願はしい。但是秋にでもなつたら、君に送り得べき寫眞も取れるかもしれぬと、僕は潛に願つて居る。

日本では、今年程雨の多い年は無い。四月花の頃から天氣の續いた事は極めて少ない、實に不愉快な年であつた。僕の家には二百坪ばかり地面がある、家を合せて。其中に小さい花壇を拵らへて、草花などを植ゑて樂んで居る。此れで平和な樂が得らるゝか如何か、今尙ほ試驗中だ。先日、土井が花の種を送つて呉れたので、兩三日前早速蒔いた。今日はもう出さうなものと、其の翌日から小兒の樣にノゾイて居る。

此地には、語るべき友は田中智學氏の外には一人もない。氏の門弟の一人は、如何いふ因緣かヒドク僕を慕て、朝夕病氣回復の祈禱を僕

の傍にして呉れて居る。田中氏は扇ケ谷の奥に居る、相見ることも一月に一度位で、日々寂寞な生活をして居る。山水の風景も餘り面白くない。ドーモ清見潟のあたりが思ひ出さるゝ。

社會も別に變つた事もない、學界も別に變つた事もない。ダルマパーラが先達田中氏を訪ねて當地に來たので、氏の依賴で一日接待してやつた。……

太陽の文章で君も見らるゝ通に、近來僕の意氣が少からず衰へたことを自覺する。會心の文章などもトント書けない、強て文を賣るの已むを得ざる境遇を僕は哀しむ。

此頃メレヂコスキーの Death of the Gods を讀んで、少からず面白く感ぜられた。ヘレニスムとクリスチアニスムの爭は、永久のものであらう。

別紙は土井に序に屆けて呉れ。

明治三十五年九月二十八日

## 鎌倉長谷より

同要山なる山川智應氏へ

廿六日の御書拜讀仕候。十數日前より健康大に衰へ、病微恙はしからず、心氣憤惱を極め候まゝ、何となしに鵠沼へ罷越候處、素より病に通るべき身ならねば、折苦は彌增り候まゝ過日又歸宅、臥床罷在次第に御座候。

毎々の御心遣、永世忘じ難く候。十年の交も一月逢はざれば路人に等しくなる今の世に、借は如何なれば、物の數ならぬ小生に斯くは憐を垂れ給ふらむ。殊に久しき以前より、日々の御祈禱まで之御志のうれしさ、何に喩へ申すべき。死にも長からぬ生命なるべければ、折角の御祈念もあだにならずやと、是のみ心苦しく候。仰せ越されし御書は、小生も爾か思ひ立ちし折なれば、早速讀始、今更に新しき感激を感じ申候。是よりは日々諷讀仕可候。秋氣定まりて天朗かに相成候はゞ、病勢も或は衰へ申可や、其節は少々思立候事有之、駿河清見潟の邊りに數日之旅行を試可申候。昨日は咳嗽劇しく、且定時發熱盜汗等あり、閉口致居候。小生思想に關して御思寄の事は、何分之御注意を仰度候。素より定まれる信念も思想も無之、唯隨時思念する所は隨時の發作とも見るべきものか、三界廣貌として一心寄するに處無し、色心共に浮浪の小生に候へば、人にも世にも飛びはなれたるふしのいと〳〵多かるべく候、是非も無き事に御座候。高山氏の宗教詩に就いては、其中信々に相談可致候。今日の某田中先生の序文は御あづかり申候。今日の暴風雨にて讀子は、文庫は別に損害なきや。小宮、南の垣根倒れ、いさゝかの花壇は泥濘に委し去り、見るも哀れ汎に御座候。誠に昨日までは紅恨紫怨の風情もありしが、蓋か此夜半のあらしを想ひしりたるべき。——夜半に嵐の吹かぬものかは——徒の上のみに無之候、不盡。

明治三十五年十月一日

## 鎌倉より

國元の實父親信氏へ

拜啓。何時頃よりか絕て書面不差上、御申譯無之候。身體の都合にも可有之、とかく諸事懶く相成、何方へも書狀はトント書不申候。先以て別に御障もなう被爲在、珍重奉存候。御直殿も此頃は回復と存候、如何に候や。過日信策來鎌之節、皆々樣の御樣子も略承及候。私事健康此五月頃より兎角引續き思はしからず、昨今は病兆甚だ宜しからず、困却罷在候。咳嗽頻に出で、安眠と申すこ

とは數月前より相忘れ申候。加ふるに近時は定時の發熱有之、體量も大に減し、吾れ乍がら驚かるゝ程に痩せ衰へ申候。醫師は格別あしゝとは不申、何れ氣候定まり候はゞ多少回復することも可有之と望居候。時々は一切外出せず、大抵臥床罷在候。

此は不申上もの事には候半が、預め得御意度一事有之候。人は何時死ぬるやも不被測、まして私の如き病人は猶更之事に御座候。身後の事御依賴致おき候も、あながち無用には有之間敷と存候。先づ此度は墓地之事申上候。駿州清水港附近龍華寺と申すは、三保の松原より富士山への間、本邦無比と存候。私も數回遊覽し、常に慕居候土地に有之候。若し小生死後に相成候はゞ、右龍華寺に埋葬相願度候。素より故鄕には祖先之墳域も有之候事ながら、かの陰鬱なる禪寺は、私の氣には如何にしてもかなはず、是非々々右願之通に被成下度候。龍華寺之宗旨は日蓮宗には候へども、宗門の異同などは御かまひなく御許可被下候。日蓮上人は私之平素崇拜する一大偉人にて、其門末之寺に埋らるゝは、何かの因緣と見え可申候。右墓地は私健康回復次第[illegible]、買求置度考居候。此亦御含被下度候。兎角の御異存は被爲有候やも不被測候へ共、此事は私之頑固なる願と御召「御思召」カ、新士町（編者云。樗家高山家）とも御相談、是非御許可被下候。斯樣之事、緣義不宜事には候へども、生前に於て死後之事を計るは、毫も怪むに足らずと存候へば、何も御氣にとめられまじく候。私も出來る丈は、攝養可仕候。初子、里子も丈夫に暮居候間、御安心被下度候。

右諸事とりまぜ御返事やら御願やら申述候。不盡々々。

信策は學校教員の外には何れへも不向に御座候間、卒業之後は、何れ地方高等學校あたりの語學教師になる外無之と存候。トテモ此頃雜なる社會に出で、仕事を成し遂ぐる樣の性質には無之候。其節には乍不及周旋可致候。

明治三十五年十月二日

鎌倉より

印度なる姉崎嘲風氏へ

等しく、相見る能はざれ共、同じくば歐洲よりも印度に來られ候方、如何ばかり吾等にとりて心強かるべき。名は知らねども、美はしげなる花の色尚しのばるゝ匂ひに、君が濃き情も思ひはかられ申候。印度と云へば何となう恐ろしき心地す。たとへば瘴癘之地之ごとく思はれて、其處に住む外國人は多く熱を病むこと、我臺灣よりも甚しげに想像せらる。こは事情を知らぬ人の謬れる想像なるべけれども、君が千金の身の、此地の風土に冒さるゝ樣の事無き樣、切に／＼祈る。歸朝の期は來春なりて、又は夏にも可成で、指折りかぞへて待わび居候。あゝ君を橫濱の埠頭に迎へて互に手を握りたらむ時の吾が歡びは如何なるべき。吾は此歡を如何にして顯はすべき、恐らくは言葉もなく泣きくれなむも知れず。其時君は如何に思ひ給ふらむ——なんと樂しき小兒らしき想像に耽り居申候。唯今の吾身の悲しさ！　此春以來健康は一體に思はしからざりしが、此の一月前よりは急に衰へ來り、咳嗽頻りにして發熱さへあり、安眠の味は數月來忘れたり、體も甚しく痩せ衰へ、骨立ち、見るから憐れげ也。あゝ此健康を如何にすべき。或は君を橫濱に迎ふる能はざる樣之事あらば、何ぼう悲しかるべき、なんど思ひ、なやみ居申候。

唯攝養は十分に致居候へば、其中には多少の回復を見るべきかと望み居候。九月五日發行の太陽紙上には、君に與ふる開書を載せしが、其折一部御送いたしたれば、既に御覽の事と存じ候。兎角は色心共に相應せず、見思の惑未だ斷たず、煩悶懊惱の狀、能く御推察を給はるべく候。唯君がスピリチュアリスムに於けるが如く、一面幽冥に對する一種の憧憬ありて、やがては何物にか發展し來らむとするものゝ如し。されど這般の消息殆ど言語に絶す、御推量可被下候。

本邦學界何の奇無之、哲學界の狀態など全く死灰の如し、生命絶てなし。社會ニハ紛々擾々と種々の現象旦暮に往來すれども、精靈界の光明は何處よりも照さず、世は常闇に御座候。大に罵倒したき情に堪へざれども、此聲到底人耳に達すべからずと思へば、せめては書き遺して後世に傳へ度く候。願はくは天イマ暫らくの健康を與へて、靜思と冥想の時を予へよ、かく一に遺憾なく此磊塊を吐き盡くすを得ん、なんど日夕願居申候。

鎌倉より此秋には清見潟へ移り度く心懸け候ひしが、前申す樣の健康の爲に、轉居は先づ見合せ申候。……

只幸に天然は自ら四時の序を違へず、今とし又清朗の秋に入り申候。やがて健康の回復を待つて山野の秋色を討ねばやと樂居候。

書き度き事は多々ある樣なれども、目下熱あり、頭重し、筆進まず、凡て次便に讓る。くれぐれも印度の氣候に注意せよ。君の身は大切の身也。

(十二月上旬ボンベイ着)

## 明治三十五年十月二十六日

## 相州平塚杏雲堂病院より

鎌倉なる里子夫人へ

十月廿六日朝七時　平塚病院にて認む、

昨日は加藤さんより御聞きでもありませうが、先づ滯なく當地に着しました。室の具合など、思の外あしく、且つ一番困りましたのは、かけぶとんの狹く重きことで、昨夜は毛布を重ねて寢ましたが、どうも寢心はわるくて困ります。今日はもう少し輕いのを探して貰ふことにします。枕も小さく低く、大に閉口して、河合さんに相談したところが、やつとの事で座ぶとん一枚周旋して呉れました。それで、先づ少しく高くなりました。看護婦を雇ひました。土瓶や、土瓶や、金たらひなど、そろ〳〵買ひ整へました。室には何の飾もなく、陰氣でしたが、河合さんが、コスモスの白と赤の花の一瓶を贈られましたので、少しは色どりになります。

昨日は咳が出て〳〵どうも困りました。夜はうすくらきあんどんにて、何もすることが出來ず、實に陰氣で、いろ〳〵と家の事などはかり思ひつゞけました。八時頃より寢ましたが、咳でどうも寢られず、十二時迄は一睡もせず困りました。食物は、左樣惡い方にもありませぬが、どうしても別に滋養物をとらねばなりますまい。萬事家に居るよりも不自由で、あたりが騷々しくて、まだ來たてのせゐか、是ならば家の方がドノ位好いか知れぬと思はれます。殊に困つた事には、喉の療治をする醫師は一人も居ないらしい。副院長は、わしは喉はわからぬから、院長が見えたら見て貰ひませうと云ふし、昨日などはなんだか醫學生あがりの書生風のものが、喉頭鏡で見もせずに、喉に藥をなすりつけました。こんな風で、折角治りかけた喉がわるくなりはせぬかと、心配でなりませぬ。明日は院長さんの見える日ですからよく是の邊

の事を相談しませう。

便所が遠いので、夜何べんも起きるには閉口します。今日からは、しびんを買つて室内で辨じようと思ひます。

今朝の食は、豆腐のおつゆ、つくだに、梅ぼし、玉子二つ、かゆ、こんなものに御座候。

郵便は二三日分づゝためて御轉送を願ひます。夜具などはどうにかこちらで間に合せますから、御送りに及びませぬ。私の事はあまり心配せずに、初子を相手に暮して下さい。初子もどうか今年中に物の一つも言へる様にありたいものです。

昨日から雨天で、雨の音が檐にしたゝるひゞきは、夜半などには中々寂しいものです。天氣のよい暖い日には、遊びがてらにお出なさい。八時三十六分の鎌倉發で來ると、十時には當病院につかれます。

いろ／＼書きたい事がありますが、お膳を前にひかへて居りますから、又後に書きませう。

さやうなら。

どうか一月位で出たいものだと祈つてゐます。

## 明治三十五年十月三十日

### 平塚杏雲堂病院より

宇都宮なる笹川臨風氏へ

運命は復小生を病院裏の囚人たらしめ候。過般よりの再度の御書、たゞ／＼風情偲びがたく候。鹽溪の紅葉を手にして其の寫眞に對すれば、神往禁じ難く候へども、今は何事も思ふに任せず、是の一年の好風光を陰鬱なる病室裏に閑却することの無念さ、たゞ／＼御察可被下候。來年、嘲風は定めて歸り來るべし、生と兄と三人相携へて此の奇勝を探らむは此上なき願ながら、生の健康是を許すや否やは頗る疑問なり。是春の暮つかたより病勢自然に進み來り、最近二ケ月に於ては特に諸種の惡症候を呈し來り、此頃は咽喉をさへ大い痛め、嚥下發聲共に困難を覺ゆるの狀態に陷り申候。尤も苦しきは咳嗽の爲に安眠せられざる一事なり。三ケ月程以前より安眠の味はトント忘却せり、枕に就けば慄然として畏怖の念のみ起る。あゝ是れ何事ぞや。睡眠は吾等の第二の生命なるものを、これをすら取去らずんば休まざるは、何の無情ぞ。生は是迄多くの金も識なく、加ふるに病にさへ冒されしが、猶是の睡眠てふ貴重なる國宝を有せしに、今や則ち亡矣。あゝ兄よ、徒に病苦を訴ふるとなす勿れ、予は安眠なき人生の慘境は、そを經驗せしものにのみ語るべきものと思ふなり。

かゝる話は兄の前に語るべきことには無可之候。兎も角も醫師の勸告に任せて、去る二十五日當病院に入り申候。國元の親共などは、ひどく驚いて倉皇馳せ參ずる樣の態、おのづから重病人の如くに何時しか相成候へども、實はさ程にも無之、一ケ月も經ちて、熱も去り惡症候も去りて良傾向を呈し候はゞ、一日も早く歸宅すべく候、御心配被下間敷候。

竹風のあらひ髮は、少々あらぬ樣の定らぬ所ありしが如し。つまりは自ら知ることの明無きに歸せんか。是の弊、竹風のみならず、吾々同士何れも戒むべきことゝ存候。……

嘲風今頃は印度にありて、果物に牛乳を食ぼり居るならむ。さるにても兄山鹽溪の秋色を擅にし給ふ君の隱逸こそ羨ましけれ。

あゝ日は暮れたり、一穗の孤燈は文字通りに前世紀の光を放ちつゝあり。筆とらむも覺束なし、眠に就かむも畏ろし、窓には夕やけの光眩けれども、吾心地獄の如く暗し。已むなん已むなん。

# 略歴

明治四年一月十日、羽前莊內鶴岡高畑に生る。父は齋藤親信、母は芳子、伯父新士町にゐる高山久平の家に養はる。齋藤、高山ともに莊內酒井家の藩士。兄親廣、姉元子、弟良太、信策、親平、妹直子、なをゐ。

十年十月、養父山形に轉任し、樗牛も亦之に從ふ。十四年、酒田に轉じ、十五年二月、福島に徙る。十七年、福島中學校に入學。

十九年、養父とともに東京に轉じ、本所なる酒井邸內に住す。神田なる東京英語學校に入學。二十一年一月、仙臺なる第二高等中學校に入學。二十三年養父鶴岡に歸る。

二十六年、第二高等中學校卒業、帝國大學文科大學哲學科に入學。在學中、瀧口入道を稿し、讀賣新聞の懸賞歷史小說の首席を占む。雜誌帝國文學編輯委員となる。

二十八年十二月、病んで伊豆熱海に轉地す。

二十九年七月、大學卒業、九月、第二高等學校教授として仙臺に赴任。三十年四月辭任、東京に歸り、博文館に入りて、專ら雜誌太陽に執筆す。其後旁ら早稻田大學、帝國大學等に出講す。是歲十二月、法學博士杉亨二の女里子と婚す。三十三年六月、女初子を產む。是月、審美學研究の爲め滿三年間、獨佛伊三國へ留學を命ぜらる。

三十三年八月、病を獲、興津に轉地、ついで大磯に移り、三十四年十月、鎌倉に轉ず。

三十五年一月、文學博士を授けらる。是歲十二月二十四日遂に起たず、享年三十二。遺志に依りて、駿河の龍華寺に葬る。法諡を文高院霊岱謙光日瞻居士と曰ふ。

## 無題（樗牛）

歲は更まりぬ、容顏[illegible]、老ゆるを如何にせむ。われは夫れ詩人と共に唱はむ乎。酒あり飮むべし、書は讀くべし、人生焉ぞ愁緒の多きに勝へむ。

○

かつて波打際を步みし時、われ顧みて嘆息しぬ。あはれ、磯波たかく打ちよせて、吾がこしかたの忽ち痕もなう洗はれつるよ。人生の事業にも似たらずや。

○

詩をつくらむとて吾れ幾度か筆とりぬ。筆とるたびに吾が胸の咽ぶが如く苦しきを覺えぬ。あゝ、おもひは長く、筆は短かし。吾れはそれこの默思を懷いて眠らむかな。うるはしきものの、夢ばかりなる世こそうたてけれ。

○

歌ふ能はずんば、吾れそれ嘯かむか。人間よし友朋無きも、山河猶ほ響を返さなむ。

○

吾れはわが聲にひゞきあるを喜ぶ。結ぼれたる胸の、爲めに破れざらむを得べければなり。

（明治三十四年一月）

# 著作年表

**明治十八年**

[illegible]陵誌行（二）

**明治十九年**

春日芳草之夢（福島中學在學中の作）

**明治二十三年**

【五月】流砂

【六月】文學及び人生。文學會漫評。人生遂に如何。（以上「文學會雜誌」）

【九月】瀧亭郎の悲哀（譯）（自七月至九月「山形日報」）。[illegible]の墓。戀情論。故郷論。雪中梅。今様三首。鳥海山紀行。

**明治二十五年**

【一月】[illegible]

【十二月】厭世論。戯曲に於ける悲哀の快感を論ず（「文學會雜誌」）

**明治二十六年**

【六月】[illegible]心錄。

**明治二十七年**

【一月】瀧口入道（「讀賣新聞」）

【六月】老子の哲學

**明治二十八年**

【一月】序詞（[illegible]）。亡弟良太病中書翰の首に書す

【二月】近松巢林子が人生觀（「帝國文學」）

【四月】近松の戯曲に於ける人物性格。巢林子の女性（以上「帝國文學」）

【六月】道德の理想を論ず（「哲學雜誌」）。人世の價値及び厭世主義（自六月至八月「帝國文學」）

【七月】[illegible]。青年文人の厭世觀。武島羽衣の「小夜砧」を評す（以上「太陽」）

【八月】演劇界の風潮と劇評家の責任。印度文學の研究。美術と道德（以上「太陽」）。新文字論及び新文法論

【十月】東西二文明の衝突（「哲學雜誌」）。文學界の諸君子に寄する書。片々（以上「太陽」）

【十一月】運命と悲劇。演劇界の近時。現今の我學術界に於ける歴史的精神の缺乏（自十一月至十二月）。文學研究の好題目（以上「太陽」）。[illegible]島國的哲學思想を排す（「哲學雜誌」）

【十二月】敢て日本美術史の編纂を促す。日本民族の特性と文學美術。喜ぶべき文壇の一傾向。[illegible]。批評に就きて（以上「太陽」）

**明治二十九年**

【一月】老優アービング。明治二十八年の文學界。少壯漢學者に告ぐ。宗教小說。哲學的文學。裏面の觀察とは何ぞ。[illegible]弔辭。當世想に於てせよ。新聞紙の文學に就きて。當代文學者の世界。文學者の德義。作者と著作と讀者。新體詩形論。俳句の流行（以上「太陽」）

【二月】東西思想の比較一斑（「哲學雜誌」）。作家の道念と觀念。詩人と模倣と天然（自一月至六月）。賞鑒家と國民。時好と批評家。宗教的文學。新體詩のけふこのごろ。女性作家に望む。閨秀作家。「國民の友」の新年附録。模倣を排す。希くは[illegible]の美學論を聞かむ（以上「太陽」）

【三月】文學と美術と。[illegible]青年小說を讀む。健全なる文學界。今の文學者[illegible]の[illegible]。日本小說の英譯。[illegible]（以上「太陽」）

【四月】寫生と寫意、意思、[illegible]。春の家が「[illegible]一葉」を讀みて。[illegible]一定の思

要。譯語及び學語に就きて。飜譯時代、思想と理想、造語と鷗外漁史、學者の用語に就きて。情劇は果して夢幻劇なるか。情劇と夢幻劇。作者と評者　吾が文學界に於ける道義的意識。今日の新體詩家を管闚す。大塚文學士を送る「作者自ら辯解すべし。ニーエールとは何ぞや」(以上「太陽」)。古代印度思想概論(草)。木村鷹太郎君に答ふ(「哲學雜誌」)

【五月】美學及び美術史。現今我邦に於ける審美學に就いて。飜譯者と原著者。一葉女史の「たけくらべ」を讀みて。若松賤子女史逝く。小説家の文章。古文學に對する審美的批評。本邦古文學の評論。特別研究の早夙。俳句及び狂詩。俳句と符號。禪學と俳句。「帝國文學」一記者の不注意。鷗外氏と「帝國文學」の一記者(以上「太陽」)。評歌宗教及び道德

【六月】鑑定家と批評家。南歐美術譚(自六月至七月)。文化の關聯。何故に敍事詩は出でざるか。「一葉女史の「われから」」。德富蘇峰君を送る。工藝と美術と。藤田劍峰が「先秦文學」を讀む。戰爭は競爭のみ(以上「太陽」)

【七月】宗教と美術(自七月至八月)。日本西洋兩畫風の折衷。佛教文學に就きて。市川新藏。狂詩家を弊む。其の天分を發揚せよ(以上「太陽」)

【八月】鷗外に答ふ。鷗外とハルトマン。鷗外の所謂抽象主義、天才論。敍事詩と抒情詩。再び外邦書典の飜譯に就きて。西洋美文の飜譯者に告ぐ。「今戸心中」と情死。能樂會。能樂の性質(以上「太陽」)

【九月】戲曲に於ける幽靈。脚本の批評法。田山花袋氏の「わすれ水」(以上「太陽」)

【十月】退壇(「太陽」文學欄の主筆を辭する)に臨みて吾等の懷抱を白す。ヘルマン・ズウデルマン。ゲルハルト・ハウプトマン。片々。抒情詩及び敍事詩界(以上「太陽」)

## 明治三十年

【三月】倫理教科書(單行)

【五月】日本主義(「太陽」)

【六月】巴里萬國博覽會と我邦の美術。日本主義と哲學。我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務。明治の小說。齋藤緑雨が「色道論」を讀む。泉鏡花に與ふ。藤田劍峰を送る。ジョン・ゲブリエル・ボルクマン。歴史と人種。基督教徒の非國家主義(以上「太陽」)。わがそでの記

【七月】現今美術家の精神的教育。所謂社會小説を論ず。文學に對する根本的誤解。德富蘇峰。[illegible]に與ふ。三三三。所謂文壇、大町桂月に與ふ。日本主義に對する世評を慨す。世界主義と國家主義、宗教と國家(以上「太陽」)

【八月】美術家の雅好題目。歴史を題目とせる美術。佛像陳列の可否如何。日本美術に對する外國人の觀察。古物保存の可否。闇歴と空想。作家苦心談。小説中に顯はれたる現代の女性。市川新藏を悼む。成敗と正義(以上「太陽」)。坪内逍遙が「史劇に就ての疑ひ」を讀む。春のや主人の「牧の方」を評す(以上「時代管見」)

【九月】少年演劇に警告す。新體詩家の新體詩評。福澤諭吉氏。愛國心を嘲罵するものあり。國家的宗教。社會問題に就きて。文明史とは何ぞや。基督教徒の妄想。基神兩教の合一論に就いて。罪惡の自覺と國家の利福。社會主義と人物。小人、人の美を成さず。社會と新聞紙。先生後進。大家小家(以上「太陽」)。朦朧體の末路(「時代管見」)。支那文學の價値。

【十月】作家と讀者。我國體と新版圖。基督

敎徒の淺薄主義（以上「太陽」）。自殺論。厚生薄夜。冷笑のひゞき。

【十一月】柳浪の「畜生腹」を讀む。國民精神の統一を論ず。羅音撫象。社會的制裁の薄弱（以上「太陽」）。上の德操。

【十二月】國民生活と美術。晩翠の詩。今の滑稽文學。無題錄。學問死活辨（以上「太陽」）。送年の辭。人道何處に在る。

## 明治三十一年

【一月】「己」に忠なれ。國家至上主義に對する吾人の見解。人種競爭として見たる極東問題。宜らく一千梓を加ふべし。私立學校を論じて當局者の注意を促す。國樂制定の必要。死學者。自ら傳へよ。大和魂と武士道。國學者と古物屋（以上「太陽」）。決するを欲せざる疑問。釋迦（單行）

【二月】曲亭馬琴（「時代管見」）。神曲の出づべき時。時世を知らざる者の言。神何處に在る。國家の寄生蟲。內地雜居と國教。吾人の宗教觀。獨逸の偶像。西園寺文相に呈する書。國家の要求。紳士と高利貸。愛山生に問はむ。醜陋なる果物（以上「太陽」）

【三月】美術參考館の必要。最も悲しき事。詩人唱はず。老人時代。作家の自衞法。貴人種同盟。大スラヴ主義。國民歌を撰べ。無定見を誇る學者。學者の誤解。死學者と守錢奴。世に所謂偽服なるものあらむや。ハイネ。實在と空想。國字改良論。標準建築。新聞小說。再び愛山生に問はむ（以上「太陽」）。小說革新の時機。詩的の兩面と其利弊（以上「時代管見」）

【四月】畫家の畫論。文學の比較研究とは何ぞや。ビョルンソンとゾラ。明治思想の變遷。國粹保存主義と日本主義。倫理教育問題（自四月至五月）。國民道德の危機。新聞記者の資格。難者に答ふ

【五月】ワルト・ホイットマン（「時代管見」）宗教の眞精神と新宗教。怠慢罪。愛國を罵る者に告けむ。覆面將に落ちむとす。江戸ッ兒は忘恩兒か。古を忘るゝの民。好一對。無題。統一と分離。主義の廣狹。欺き易き社會。疑問（以上「太陽」）

【六月】カーライル氏の英雄論の飜譯に就て（「時代管見」）、古寺院の寶物。假詩人とは何ぞ。學校騷動論。家庭と文學。彼等と吾人と。不得已也。西洋畫家に問ふ（以上「太陽」）

【七月】國民精神の統一（「日本主義」）。誰か我邦を西班牙に比するもの云ふ。然々錄（以上「太陽」）。たそかれの辭。夏季の學生。二十世紀に於けるアールヤ國民の運命。

【八月】品性と製作。何に用ひむとて斯る畫幅は作られしぞ。我邦人の紀行文。譯者の署名に就きて。二葉亭譯の「初ごゝろ」を讀む。蟬しぐれ（以上「太陽」）。論理學（單行）

【九月】滑稽小說の作者に告ぐ。「國民の友」を惜む。自己の修養。漢文の書を換へよ。罪惡の淵府。植民地と歷史の教訓。高價なる美譚。人道の爲め乎。幽靈的宗教。彼は彼たり我は我たり。洋行弊。悔悟の時機來るや晚し。無趣味の家庭。寧ろ民を愚にせむ乎。日本人と能辯。大人物と私德（以上「太陽」）

【十月】美術に對する購買力。秋色。何處まで小人的なる乎。一刀兩斷の制裁。曲學阿世とは何の謂ぞ。國字改良會に望む（以上「太陽」）。西鄉南洲の銅像

【十一月】歷史畫題論。小說の材料。人才と我が文學界。今の論文家。罪惡の一千八百九十八年。新聞雜誌の時代。近時の銅像。グラハム・ベル氏（以上「太陽」）。内村鑑三君に與ふ

【十二月】民族傳說の蒐集。國民的哲學。國

民の聲。國民の名の濫用。運動の世の中。沙漠の如し。歳暮。南洲とハイネ。逐客既有爲。無趣味の社會。國史の教育的研究(以上「太陽」)。ナポレオン三世(「中學世界」)

## 明治三十二年

【一月】西郷南洲の銅像を評す。詹々錄。過去一年の國民思想。無定見の國民(以上「太陽」)

【二月】詩歌の所緣と其の對象(「帝國文學」)一大美術館を建てよ。何ぞ自ら居る事卑きや。時代精神と大文學。國學及び漢學の將來。權利思想の發達と本邦の道德。本邦哲學界の現勢。國民と個人(以上「太陽」)

【三月】難者に答ふ(「帝國文學」)。古事記神代卷の神話及び歷史(「反省雜誌」)。新しき日本(「中學世界」)。新建築と美術。佛蘭西共和國の近世史。植民的國民としての日本人。帝國主義と植民。北米合衆國の國情如何。規律なき國民。安息日は勤勞者の特權也。學問といふこと(以上「太陽」)

【四月】文明の裏面(「時代管見」)。死せる、墓掘書。博物館論。讀者の態度。現代の文章。淨土眞宗撲滅論。詹々錄。日本主義と大文學(以上「太陽」)

【五月】古社寺及び古美術の保存に就いて。勝地の俗化(以上「太陽」)。坪内雄藏氏の「倫理教育論」を讀む

【六月】再び宙外に與ふ。「天地有情」を讀みて。言文一致の標準。評家及び作家としての不知庵。奢侈。人心の倦怠。好意の缺乏。詹々錄。人生と天然。恐しき沈默。東北の遺利。詹々錄(以上「太陽」)

【七月】藝術界の尙古主義。女人果に與へて昨今の文壇を論ずる書。奇怪なる保守思想。腐敗せる宗教家。專門學の知識を普及せよ。大宮停車場の蠅。新聞時弊。詹々錄(以上「太陽」)

【八月】「審美綱領」を評す。美術と富豪。麵包の外に標なし。死と永生。國民の歌。常識の缺乏(以上「太陽」)

【九月】無題錄(「文學評論」)。大佛露佛說。藝術の鑑査を論ず。詩人と批評家。詩人と史家。史家と文人。孰れか先なる。惡を憤るもの。最も危險なる思想(以上「太陽」)。新聞紙の無勢力。一飽の時。秋。近世美學(單行)

【十月】無題錄(「文學評論」)。歷史畫の本領及び題目。和漢學者の一事業。學界危言。進步の意義(以上「太陽」)。時勢と詩人

【十一月】月夜の美感に就いて。本邦文章の問題。眞理の罪惡。一大劇詩人の覺悟。銀行券の外套。虛榮の世。ソロモンの榮華。紳士と貴女と。似而非慷慨の弊。少年に寄語す。聲無き國民。新紙の三弊(以上「太陽」)。世と馬

【十二月】無題錄(「文學評論」)。ジャンヌ・ダルク(「中學世界」)。再び歷史畫の本領を論ず。我邦演劇の前途に就いて。作者は讀者に好意を求むる權利ありや。今文の書き方。無題錄。東京市と羅馬府。名譽ある成敗。一種の魔力。帝國大學と博士。根岸氏の奇言。萬僧供養(以上「太陽」)

## 明治三十三年

【一月】美學上の理想說に就いて(「哲學會講演」)。明治三十二年に於ける小說界の傾向を論ず。本年の二大問題(以上「太陽」)。無題錄(「文學評論」)。靑年の時弊、演說

【二月】土井晚翠に與へて當今の文壇を論ずる書(「文藝評論」)。漣山人の「日本お伽噺」。國字改良の反對者(以上「太陽」)

【三月】菅公傳(單行)。第十四議會に於ける教育上の大論戰(「太陽」)。人と天分演

說。
【四月】坪内先生に與へて三度び歷史畫の本領を論ずる書（「太陽」）。無題錄（「文學評論」）。外山博士を憶ふ
【五月】美感に就いての觀察（「帝國文學」）。故き眞理と新らしき事實。東本願寺と村上專精氏。國語調査會（以上「太陽」）
【六月】板垣伯と福澤氏。三田翁の所謂道德。十九世紀總論。不公平なる批判。漫言。「修身要領」の巡回演說（以上「太陽」）。藤原時代以後の日本美術史槪論（講義）。自國の作を讀まざる風。小說の意義。少年の文學熱（以上「文學評論」）。ハイネ小事（「明星」）。學風に就いて（「中學世界」）。清の文集
【七月】煩瑣學風。煩瑣學風と文學者。人名字書中の文學者（以上「文學評論」）。人の出處進退。學者と文章。大隈伯と「菅公論」の後に書す。悪罵と死（以上「太陽」）。人格の力。卒業生諸子に告ぐるの辭。無題集

**明治三十四年**

【一月】文明批評家としての文學者（「太陽」）
現代の文學評論
【三月】作文論（「中學世界」）
【四月】平家雜感（「太陽」）。清見潟日記。文藝消息（四、五、八月の「太平洋」）。無題錄。
【五月】姉崎嘲風に與ふる書（「太陽」及び「文學評論」）。現代文章私見（「中學世界」）。清見寺の鐘聲。思ひ出の記
【六月】乙羽兄を憶ふ
【七月】笹川臨風が「奈良朝史」の首に書す（「新文藝」）。美術の保護者。元祿時世粧を讀む。土井晩翠を送る。大橋乙羽を悼む。無題錄。嗚呼風俗改革（以上「太陽」）。偏狹なる獨逸（「太平洋」）
【八月】美的生活を論ず（「太陽」）。無題集。感慨一束（姉崎嘲風に與ふる書）
【九月】非美術的日本人（自九月至十月「太平洋」）。美術に於ける人物の理想的表現。將來美術界の一大問題。清盛骨相考（以上「太陽」）
【十月】古人の苦心。「菅公論」に就て。本末の顚倒。今の哲學。自ら欺く無くむば幸也。中心果して信ずる所ある乎。學說と人格。人々自ら悟らざるべからず。空腹高心。道義亡國。何ぞ思はざるの甚しき。心に會するもの唯是れ心。何ぞ人の異を妨げむ。千萬言唯意のまゝのみ。吾は永く吾たらむ。十九世紀文明の王冠。笑はむ乎、狂せむ乎。吾をして詩人たらしめば。言論畢竟人物のみ。米と砂。其愚や及ばず。道學先生の世界。何ぞ一に煩瑣なる。口耳の學。罪は貧民にあり。吾人の預言。兆民とハイネ。天下第一傷心の事。一年有半。學士の虐遇。國家の無情。人々自ら悟らざるべからず。趣味ある旅行記。晩年の平和。抑々是れ何の才子ぞ。漫評（以上「太陽」）。無題錄（「美術と文藝」）
【十一月】平相國（單行）。田中智學氏の「宗門維新」。天才の出現。天才の犧牲。天才無き世界。平等主義と天才。吾人凡て是れを憎む。二個の眞理。偉人と凡人との別。價値と我。惡を憎むこと何ぞ甚しき。癲狂院。ニイチェの批難者。ニイチェの歎美者（以上「太陽」）。留學生諸君を送る
【十二月】雜談。世界の四聖（「中學國語讀本卷四」）。自然の兒。何が故ぞ。貴き哉是の寶。性慾。何ぞ其の祝福を讃美せざる。性慾の動くところ、地獄の火印を烙けられたるもの。性慾の醇化。久しい哉自ら欺けることや。價値也、名目に非ざる也。眞の教育、眞の道德。雜談（以上「太陽」）。況後錄、鄉里の弟を戒むる書

**明治三十五年**

【一月】鎌倉の話（「中學世界」）。明治三十

四年の文藝界。中江兆民居士。道學先生の理想的人物。獨逸大學と麵包の比較研究。迷信と眞信。麵包を求めて石を得たり。先づ人たらむことを要す。年若き人よ。事後の詮索、理前の是非、寄與の意義を知[illegible]甚大に非ざれば即ち個人。單に一個の價値を有するの故に。醜なる哉東京市。以上「太陽」。現代思想界に對する吾人の要求。稍多放言。樗牛雜記

【二月】日本畫の過去及び將來に就いて。吾が好む文章

【三月】靜思錄「太陽」。斷片

【四月】文藝襍談「中學世界」。日蓮上人とは如何なる人ぞ「太陽」。日蓮と基督。「太陽」及「太平洋」。文は人也

【五月】冠譜日觀「中學世界」。日蓮研究の鈍根。坪内氏の自意識說。古き眞理、法則生命。吾人の理想、永き戀、暗き死。イゴイスト。裸體の盛裝。己れの立てるところ。雜談(二)(以上「太陽」)

【六月】藝苑瑣談。裝飾と美術。日蓮上人と日本國(以上「太陽」)

【七月】豪傑の半面「中學世界」。クリーン先生と道學先生。故大橋佐平氏。

【八月】余の好める人物(八月)「中學世界」。默信錄

【九月】日本畫の將來に就て

【十月】日本畫の將來に就て(「太陽」)

【十一月】雜談 七、十一月「太陽」。「西畫解題」

# 無題集（續）

月あかき一夜、われ獨り舟にして[illegible]に出でて日にさすらひぬ。遙遠なる波の音幽かなるにつれて、わが心のあやしき如きこそ怪しけれ。吾れは遠き岸によりて夜ふくるまで立ちつくしぬ。かへりみて自ら何の故なるやを知らざるなり。

○

友の千里の外にあるもの、遙に鄕情を寄せて曰へらく、故國とほくして人の知るなし、この孤獨を如何せむと。われ答へて曰へらく、あゝ友よ漫に孤獨を言ふを已めよ、その衷情を共にする者は、この世に幾くもあらずかし、而して笑ふもの百萬人ありとても、吾れに於て瓦礫にひとしからむ。

○

雲いろ／＼の夕暮の空に、飛ぶ鳥のゆく／＼も知らずまぎれ入るこそうらやましけれ。吾れは幾度か願ひぬ、この思ひを翼にして、吾がむくろの露となりても溶けよかし、かくて大風に散じてかの限りなき空に吹きわたりてむ。

（明治三十四年一月）

# 姉崎嘲風集

嘲風といふ号も長い間使はず、自分でも忘れ去るに近いのに嘲風集が出来、而して又それが自分の柄にもない文学の集に入る、此も畢竟樗牛集に補充に外ならぬから、清見潟日記など亡友に関係あるものを収める、花つみ日記は、彼が生きてゐたなら見せたいといふ心持で書いたものである故、此をも入れて彼の死後二十六年の思出にする、

嘲風

# 復活の曙光

## 序言

曾て一夜、佛陀伽耶なる古塔の下に立ちて、星斗爛たる大空を眺め、釋佛成道の古を想うた時、感銜する所があつて、此から暫くは世間に對して全く沈默を守らうと決心した事もあつた。然し歸來、我邦の思想界精神界の現狀を見るに及んでは、我が思ふ所此の儘にして已み難きを感じた事幾度か。近頃樗牛會を起してから、愈此の感を強くせしむる事が多い。即ち思ひの馳する所に從ひ、言はざらんと欲するも能はざる所を述べ、之を筆錄せしめたもの、此の一篇である。

學術的精緻は固より期する所でない、只一片の赤心欺し難く抑へ難きものある事に至つては、天下一人なりとも之を認めて、僕と同じく胸を打つ人があれば、願足れりである。若し又眞の深き感ひを以て、此の一篇の表白を摑破してくれる人があれば、是亦至幸である。只「種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり」である。

明治三十六年十二月下旬　清見潟にて　著者

## 一、人生と科學

Das Wahre war schon längst gefunden,
Hat edle Geisterschar verbunden,
Das alte Wahre fass es an!

Goethe,—Gott und Welt.

..Yet even in earthly matters I believe that 'the invisible things of Him from the creation of the world are clearly seen, being understood by the things that are made, even His eternal power and Godhead'; and I have never seen anything incompatible between those things of man which can be known by the spirit of man which is within him and those higher things concerning his future, which he cannot know by that spirit.

Faraday—Researches in Chemistry and Physics.

コントが、總て我々の思想も感情も生活も、理性に基づいた科學によつて支配せられねばならぬ、といつた其の科學萬能主義は、今尚思想界の一勢力ではないか。「雲漢爛たる夜の空を見ても、我等は今日の星學を讃歎せざるを得ない。彼の星斗の一閃一光は、皆ニュートン、ケプレルの偉大なるを告げざるはない。彼等が此の爛たる雲漢、星斗を支配する理法を吾等に發揮してくれた光榮は、決して天の光榮に劣るものでない。」と此の積極哲學者が叫んだ百年後の今日、吾等は科學の功績を認むる事には躊躇しないが、其と同時に、彼の如く科學を尊んで、却つて自然其物と、科學を作り出した人間の精神とを忘れ、理性、科學を以て人生萬般の事を律しようとする主張に對しては、大に抗議を提出せざるを得ない。

吾等は、固より偉大なる科學者の頭腦の大なるを認め、又其の研究の結果に現象世界の奧を

探る者であるを感得する。多くの科學者が、天然を觀察し試驗して、天然のみならず、物理や、鑛物や乃至生物、社會の範圍に於いて其の間に行はるゝ深奥の理法を吾等に示してくれたことを感謝する。さりながら、此等の科學研究が、單に外物に此々の理法が行はれてゐるといふ事を示すのみで、其の理法が吾等の精神內容と關係のない外界の認識に止まるならば、此の如き科學は吾等の生活と相關せざるものである。吾等は科學よりも寧ろ科學が取扱つて居る天然其物を贊美しよう。若し又コントが喝破した如く、科學は吾等の精神が天然の中に秩序と理法とを發揮するが故に、吾等の精神生活を豐富にするものであるとするなら、吾等は進んで此く天然の中に理法を發揮する人間の其の理性と天然との間に、如何の聯絡があれば、抑も吾等は此の如き科學を有し得るに至つたかを問はなければならぬ。即ち科學が吾等を支配すべきか、將又吾等の精神が科學の創造者であるかを問はなければならぬ。此の問に答ふるは、即ち科學の人生に對する職務を明かにする所以であらう。

「人間宗」の開祖が、星辰の光彩の中にも其の光榮を放つて居るといつた、其のケプラーが曾て云つた事がある。「余の願ふ所は、神を探究する事である、若し外界至る所に發見し得るが、其と同じ樣に、自分の中に自分の內面にも同じ神を見たいのである」。科學の光榮は實にこゝにある。外界の事實を鋭く深く研究して、其を支配する、其の起滅の間に潛み流れてゐる理法を發見するのが、即ち科學の職務であることとはいふまでもないが、其の理法たるものは、即ち吾等の精神の中に流れてゐる神智と、其の同じ神智が外界に物象として現はれてゐるものと、二者の符合を發揮した、其の發見の發表に外ならぬのである。科學的發見なるものは、即ち其の發見者の精神が外物と調を同じくして其の唱和し得た結果である。此に於て、其の發見が科學者に與ふる滿足は、外界に行はれて今までは氣のつかなかつた關係を發見し得たといふのみでなく、此と同時に自分自身の中にも新しき精神生活の要素を得た喜びである。大科學者の發見提說で、科學思想の新紀元を作つたやうなものは、總て器械枝葉の末のみで出來たものでない。觀察實驗は固より彼等の研究をなさしめ、又彼等の發見を證明もしたには相違ないが、此等の研究計畫の基本になつたのは、即ち彼等が精神內に潛んでゐる神祕の聲であつた、日常の意識生活のみでなく、其の奥に潛んでゐる意識下の精神の力が働いては、大文學や美術の天才のみでない、科學者も亦者は詩人と同じ天賦の天才である、自分の中にあるものと外界との符合を發見し得、又此の發見によつて、內心の悦を得る者、ケプラーの如くにして、初めて大なる研究もなし得たのである。

科學は、人の精神が自らの理性を天然の中に發見したものである。即ち其の根柢には、人心と天然との共通交感を豫想し、二者の源泉が一つ、精神或は神ともいはふ、或は力ともいはふが、兎に角我等の精神の共通根柢であるべきものであるから、精神といはなければならぬ、から湧いて居る。其故、科學なるものは、多くの科學主義の思想家が考ふる如く、單に所謂客觀的眞理を發揮するから貴いのではない。實に外界現象の根柢に横はつて居る大精神を探り、又其と吾等の精神との間に微妙の聯絡交感あるを示し、此に依つて人の精神生活を大宇宙的ならしむるから貴いのである。客觀的眞理なるものは存在する、此は無論の話である、然し、客觀的眞理といふものは、我等の主觀生活と關係なしに存在し得ない。少くとも此の如き

客觀的眞理は吾等に無關係で、無價値である。寶石は其自身にしては貴重であつても、其の交換價値は、人間の慾望と結合して初めて生ずる。客觀的眞理の價値は、即ち吾等の精神との交感によりて初めて生ずる。而して此の交感宇宙は吾等の精神生活を豐富にし、又外界事物の裏に潛んで居る理法を發揮し得るのは、實にケプラーに明かに認識した如く、一外界至る所にも、又自分の内にも同じ神が存在して、兩者の根柢をなせるからである。

科學は決して吾等人間の精神を離れて存し得るものではない、科學は人生の手助けをする力はあつても、之を支配し命令する權力はない。思想的生活にしても、社會的生活にしても、人生は總て人間精神の滿足を目途とする。而して其の滿足の根柢は、人々が中に深く自ら省み、自己の中に自己安立の地を獲得し、此に依つて直即ち宇宙精神と交通するにある。此の源泉を掘り得ない生活は浮いた生である、危機に際しては忽ちにして崩壞する。此の關係は即ち進を遂げようとする點であるが、兎に角科學は人間の思想生活の一要素であるから、此の根本の要求の傍に存在し、此の中心の滿足に使役せらるべきものである。

然るに今の世には、最近科學が成し遂げた進步に目眩して、科學を以て生命を支配し、科學以外の思想生活は迷であるといふやうに考へ、又此考に從つて教育を施す潮流が中々強い。此の思潮は一方では理性全能主義となつて、あらゆる神秘、あらゆる信仰を排斥し、人の精神生活を偏局たる外界から得る經驗のみに基礎に置かうとする。而も其の實此の如き經驗主義は、自分の經驗を以て人の經驗を遮斷し、過去の經驗、而も狹い經驗を以て將來を律しようとするものである。此と同樣の思潮は、他方では又科學の與ふる結果を利用厚生の道に應用すれば、人生の能事終つたかのやうに唱へて、徒らに實利に走り、實利以外何物をも精神に訴へさせないやうにする。此の如き弊風は、物質主義の文明となり、虛榮是事とする帝國主義の世界を造り出す。此等を事實に徵して一々證明する事は別の機會に讓るとして、兎に角今の科學思想若しくは科學萬能主義は、益々人間の品位を下しつゝある、人類の大なる光明をかき消しつゝある。

固より近世に於ける科學の進步は拒むべからざる事實である。又社會や人心に關する研究が物質的科學の方法を適用したために、多くの進步を遂げ、今まで氣のつかなかつた新關係を發見したことも、固より承認すべきことである。併し此の科學の進步が、其の結果の實利的應用を外にして、吾等の思想生活に如何の變化を與へたか。所謂物質と勢力との根本問題は、如何に進步した原子の研究でも、又如何に驚くべきラヂウムの發見でも、到底其の根柢を突くことができないと同じく、如何なる進化論も實驗心理學も、吾等の精神生活の最根本原動力を明かにし得ないのは、科學者といへども認むる所である。況んや又、吾等の精神上の需要滿足、人生の歸趣、此等は到底外面的研究の科學の干涉し得る所でなくて、精神の内面的經驗、根本的需用に訴へなければ解釋し得ざる所である。

然るに一時の進步に驚いて、科學が物質のみならず、凡て人生精神の問題を解釋し、これが歸趣を與へると考へる如きは、何たる淺見であるか。吾等は決して科學の進步を認めず、又これが價値を輕んずるものではない、併し吾等の精神的需要は、決して事物を外面から見て、客觀として研究するやうな科學者の科學に依つて滿足せられない。內から出た需用は一々直接內面の經驗を基礎としてでなければ滿足しない。科學は吾々の經驗や理想を說明し探求する

義務を持つか、之を建設する權利はない。今の科學は此の關係を顚倒して居ないか。

一體科學の進步といふことをいふが、所謂新發見、新學說は其の根本を尋ねれば、全く新しいものではない。今まで知れてゐた眞理を幾分か改めるとか、若しくはこれを補ふものが多いので、思想の全然たる變革は決して一發明一學說の突如として持ち來すものではない。例へばダーヰンの進化論の如きも、段々注意せられてゐた天體、地質、植物などの變化に關する考をよく證明して、系統を立てたものである。且つ其の說明の如きも、ダーヰン一人で一度に完成し得ないで、現に今日も尙疑義百出の狀態に居るではないか。又近くはラヂウムの發見に伴ふ原子構成の考の變化の如き、既に各元素の化合量に關して段々發達して來た考で、理論としては決して新說でない。たとひ此の發見がなくとも、アトム即ち不可割といふ名を有つて居る原子が、讀んで字の如く不可割であると考へた化學者は一人もなからう。化合の狀態にて實驗し得る各元素の最小量が即ち原子であるとすれば、此の原子が物質構成の究極の小量であると考ふる事は出來ない。然らば、原子に關する最近の發見も、全く新しい考といふことはできない。況んや又進んで物質の最後の構成が何であるか、といふ問題に就いては、渦環說と球子說とは、吾等の考でアナロヂーを流動體から取るか、若しくは固形體から取る外ない以上は、此の二說は恐らくは永く相調和せずに並存する外ない。吾等はラヂウムの發見を大切なることとするが、これによつて一朝吾等の物質に關する考が一變するとは思へない。

其の他一々例を擧ぐる必要はない。科學上の新發見は、それ一つでは決して大なる力を有しない。物質科學の範圍に於てすら尙然りとすれば、科學全體が如何に進步したとて、吾等の精神や人生の大問題に最後の解答を與へ得るものではない。殊に今日世間で囂々として科學の進步を唱へるのは、一つは今述べた如く淺見にも出づるが、尙一つは發見者自身の虛榮心が些細なる發見を誇大に吹聽するにも因る。近頃の新發見なるものの、一時は籍々として名譽の月桂冠を與へられたものの中で、よく數年後まで其の意味を持續したものがどれだけあるか。反對論者は、長足の進步が先きの新發見を埋沒するがために、此の如く新發見の名譽の壽命が短いといふであらう。然し、事實、多くの場合では、疑問半熟の研究が續々新發見として發表せられ、其の短い名譽を維持することを見る。ダーヰンの著書が出たために、ゲーテの植物の變形が幾何の價値を減じたか、ミルの論理書によつて印度の因明が古めかしく無用の長物となり了つたか。況んや又ヴントの倫理書、ラインの教育學で、人生の意味が一變し得よう筈がない。

要するに新發見なるものは、大なる思想の發達の一部分として價値を有するもので、それ自身で思想變革の力を有するものではない。それ故に吾等は續々として出て來る新發見新學說に目眩して、輕卒にも科學萬能を唱へ、人生の大問題をも科學に依つて解釋しようとする近世の迷想を斷然排斥する。即ち此の意味に於て科學萬能の夢を喝破するのである。

科學は、吾等の大なる精神生活の一部分として、其の價値と其の raison d'être とを有するのである。ファラデーのいつたやうに「人が萬物の長であるのは、彼が其の內に一つの高いものを有してゐる、即ち精神を有してゐるからで、此の精神は即ち神が造つたものの現はれの中に、不可見の神の力の表はれて居るのを見、又此に依つて自分が宇宙に占むる位置と、大な

る運命とを知らしむるものである。物理も化學も、乃至生物學、心理學も、皆此の不可見の證明として存するのである。然るに世には科學萬能の武器で、宗教を追ひ、美術を局限せんとする一流の論者がある。科學と宗教、理性と信仰、此の二つが衝突して、終は必ず前者にあると初めから假定して、大に思想界を科學主義に風靡しようと空想する人がある。而も其が武器として居る科學なるものは、ファラデーやケプラーの如き深奧なる科學思想ではなくて、僅少なる科學の知識、淺薄なる概括論に過ぎざるに至つては、驚かざるを得ない。

回顧すれば、一時科學全能の聲望が歐洲文明國の人心を振盪した頃には、日刊新聞にも、殆んど信仰動搖の情を以て、今の時代は科學時代である、將來の宗教が科學宗となるのも指折り數へて期することができるといふやうな言説を掲げ、科學者の起居動静を報道すること、恰も教主法王のことを記す程に熱中したこともある。其の聲望は果して充されたか。科學上の新發見は續々として世に現はれたが、發見が進むに從つて、前途の神秘世界はます／＼擴がつて、分ることが一つ進めば分らぬことが五つ現はれ、發見が一つ出づれば、神秘の水平線は十進んできて、今日では偏頗なる科學者すら、科學を以て人事一切を滿足せしめ得るとは考へないやうになつた。殊に專門でない一般人士の科學妄信は、一層烈しき失望に畢らんとして居る。何となれば、彼等は科學者の術語を聞いて、それが何か神符呪札であるかの如く、宇宙の秘密を發く鍵はこれにあると信じた。然るに科學上の抽象的概念、例へば勢力、遺傳、電氣若しくは又所謂 Unconscious Cerebration の如き、もろもろの秘密を發見する鍵の如く思はれてゐたが、科學の普及に從つて、此等の概念は割合に空漠なるものであつて、事實を説明するといふよりは、寧ろ只詞を以て某の種類の現象に代へたに過ぎない、假定説の便宜の術語であるといふことが、段々知れわたるに及んで、科學妄信の失望は一層甚しからざるを得ないやうになつた。

然るに何事ぞ、日本では尚此の迷妄が勢力を占めて居るではないか。通俗科學雜誌の歐文を切り拔いて、其で科學の進歩と稱し、科學宗の勝利を祝ふ新聞紙の如きは論外としても、而も堂々たる學者、教育家にして、科學の、或は心理、生理のマニュアル中にある術語を縱横に使用して、此で人生の大問題が解けたと考へて居る人はないか。學理といふ名を盾にして一も二もなく宗教や、其の他あらゆる幽玄の思想を排斥しようとする人が多くはないか。教育や倫理や、人心と社會とに至深の根柢を有する事實に關しても、世間は却つて所謂新歸朝者だとか、何々博士だとかの新説をきかん事を熱望し、さうして其の人等の言説の一二の新術語で萬事説明が出來、又萬事人心を支配し得ると信ずるではないか。吾等は此の如き世間公衆に對して眞面目に警告する、眞理は古いものである、瑣々たる自稱新學説や新學者の言説は決して人心の奧に入り得るものでないと。彼等は心を潛めて、ヘッケルが、原子といふのも一つの形而上的空想であるといつた言を味ふべきである。吾等は世間が此の如き科學迷信を、速に脱せん事を熱望するのである。

もとより、科學者の中には研究に自分の一生を捧げて、高尚なる學者的性格を具へた人も多くあるが、其の人等の眞理の研究の斷片を聞きかじつて、それに依つて直ちに宇宙人生の秘密が知れつくしたと考へたる科學宗の人々は、其の失望の結果或は極端なる現世論者となつて、人生の安慰を破壞し、或は又全く科學に背いて利欲の奴隸となり、其の功利主義の害毒を、

實業や政治の社會に及ぼし、或は又歐米の勞働者などでは、只管現存制度の破壊に自分の理想を發見するに至つた。一方に於て科學萬能の熱が熾であるに反抗して、他方では宗教家は頑固に枝葉の傳承を固守して、それが宗教の眞相であるかの如く考へ、人をして科學と宗教とは到底相容れないといふ考を强からしめた。フランスの所謂新カトリック派の人々の如き、此の如き方法を以て科學に反抗したため、科學の成功が怪しくなつてきても、人はその代りに再び慰藉を宗教に求めるといふ考を起し得ないやうになつた。彼の國で、政府も教育も擧つて宗教排斥の方に勉めつゝあるにも拘らず、一般人民は寧ろ迷信的の宗教に安んじて、社會は信仰なき放逸兒と頑冥なる愚民との二つに分かるゝに至つた。此の悲むべき狀態は今後如何にして救はるべきか、實に寒心の至りである。日本の如き、既に前車の覆轍を踏みつゝあるもの、今にして猛然自ら改めなければ、將來は尤も寒心すべきものである。

一體、近世に宗教と教育との衝突、或は宗教と科學との戰爭といはるゝ現象は、人間の根本的宗教心と教育、若しくは科學との相容れないために生じたのではない。教會が昔の科學に依つて定めた世界觀が、教會の傳承宗義となつて今日に及び、それが今日の科學的教育と衝突したのである。それ故に、此の衝突は、多くの場合に、些細なる教育政策若しくは社會政策の問題として現はれて居る。ドイツの帝國統一後の此の衝突の如き、殆んど政府と僧侶との爭であつた。近くは又フランスの教會財產問題、宗教教育排斥の如き、共和政府が政敵に對して自分の地歩を固めるための策略である。されば此の如き衝突のために、教會の勢力が減ずることがあつても、それは決して宗教の衰退といふべきものでない。

ドイツに於ては、人民は一體に上に立つ人の意見に反抗する性質が少い。それ故に其の諸侯國の國教たる教會は、尙其の政治的並に社會的勢力を維持して居る。一般人民は國教に屬するもの即ち正教徒で、其の他は異端と心得て、セクトといふことは、即ち國教にあらざる異派として輕蔑せられる。それ故彼等の宗教は內心のことにあらずして、外面宗旨のことである。隨分教育ある人の中には、佛教などに同情する人も少くはないが、而も彼等は改宗といふことを一つの惡事と心得て居る。これは奇怪なやうであるが、僕が現にドイツに於て屢々經驗した事實である。宗教は彼等に取つて外面の束縛である。而して牧師なども實は輕薄なる物質主義の科學宗に心醉して、內には何等の信仰もなく、只外面國教に屬して居る。それ故に、苟くも眞面目に內心の滿足を求めんとするものは、板ばさみの苦境に陷つて、遂には全く國教にも愛想をつかし、科學にも失望するやうな狀態である。近時ドイツにカトリック教が新しい勢力を擴げつゝあるのはその結果である。

イタリアやイスパニヤでは、科學に對する失望は、教育ある社會をも動かして、カトリック派の僧侶は、其の隙に乘じて有らゆる方面に勢力を張りつゝある。ロシアでも希臘正統の教會は、夙に中等以上の社會の信用を失つて、此等の人々は自由思想といふよりは、寧ろ無思想に陷つて居る。中以下の社會では失望の結果虛無黨などの勢力を養ひつゝある。

世の科學主義者が、否十九世紀後半以後の科學的文明が、教會と宗教とを混同し、坊主を惡む爲に其の結果を袈裟にまで及ぼし、一時全盛の科學を以て人心の宗教的需要を迫害した結果、世は教會の子守歌に慰めを得る事も出來ず、さりとて又科學の電話は遠方すぎて、聞えても

一向に胸に響かない。日本の學校の現狀については、殆んど云ふに忍びない。ドイツなどの教育で見ても、學校の「宗教科」は形式のみで、理窟としてか、然らざれば奇蹟談として行はれてゐる。敎會と樂堂と演劇とは其の缺點を補つては居るが、學者で信仰を抱くのはきまりが惡いかの如くなつて來てゐる。教育界思想界は中宇に彷徨の體でゐる。日本の教育者は此等の事實をどう觀察してゐるのであるか。

さて宗教と教育との衝突で、科學的教育が勝を先づ占めた其の結果、人の思想生活は落寞になつて、其の反對に實利が生命の大原動力となりつゝある。固より十九世紀後半以後の物質文明、國際競爭は、總て科學主義の罪に歸すべきではないが、兩者が相助けて今日に至つたのは明かである。我邦の國家主義論者が、一方は科學主義、現實主義を標榜して宗教を排しながら、他方で祖先崇拜の宗教を以て人心感化の具に供しようとして居るのは、卽ち幾分か現實主義に伴ふ落寞たる人生觀を潤飾しようとするのである。尙此等の二十世紀の文明の評論については別に期する所があるから、此處に略する。

之を要するに、科學は人生の爲に存する。人の精神生活は一部分の科學者の考ふる如き簡單なものでない。天才を狂氣だと說明したところで、其の狂氣が作り出した作品の、吾等に與ふる感化慰藉の價値は少しも減じない。吾等は科學を重んずる事に至つては、決して人後に落ちないが、其の重んずる所以の主點を異にしてゐる。

科學の歸する所又人生を指導し得る所以の原動力は、ファラデーの所謂 Invisible である。今日の科學のみで此の職務を十分に果し得る見込が果してあるか。

## 二、科學と藝術

Wer das Tiefste gedacht, liebt das Lebendigste,
Hohe Tugend versteht wer in die Welt geblickt,
Und es neigen die Weisen
Gern am Ende zum Schönen sich.

Hölderlin—Sokrates und Alkibiades

畢竟美を求むるの心は無限を追ふの心也。古の人は、是の心に惱まされて、而も是の惱みの中に幸ひを見出せり。彼等にとりては、蒼天は虛空に非ざりき、そこに輝ける星は土塊にはあらざりき。あはれ、天の靈光、神の呼吸として美を[illegible]する能はざる世に生れたる吾等の不幸に、寧ろ消を惜んでトリトンの笛の音に聽かむとかこちたる詩人の根にもや較ぶべけむ。（高山樗牛）

科學は到底、人生の根本源泉たる資格のないものである。科學の結果なる利用厚生は、多くの場合に、却つて吾等の精神的需要と反比例になることがある。然らば吾等の精神、殊に永遠の光を追うてあこがれる情緒を滿足せしむるものは、何であるか。吾等は藝術に依つて、無朕無象の觀念界を具象的に體得し、これに依つて永遠の憧憬を滿足せしむるのか、人生を豐富にし不動の滿足を與ふる最も簡便なる又恐らくは唯一の捷徑であると信ずる。これ則ち豫言者なく救世主存せざる今日の時勢に於て、人をして人生宇宙の深義に達せしめ、各々安立する所あらしむる所以の易行道である。

今日の人々は多くは藝術を以て單に娛樂の具と心得て居る。それ故に表象としての藝術の意味を知らず、只寫實的に愉快な感じを與ふるものを寫すのが藝術であると考へて居る。そこで藝術に對する二つの大なる誤解が生ずる。第一は寫實的に眞に逼つて居るといふことと、第二には感覺的に快感を與ふるといふことと、それ以外に美術の天職あるを知らない。

ロセツテがダンテの夢を描いた。ダンテの戀人なるベアトリツェが俄かに死の眠より覺めんとして、其の身體を覆うてゐた布が揚げられた。ダンテに天人に導かれて戀人の傍まで來たが、敢てこれに抱きつくこともせず、何か恐るべきものに近よるが如く步を囘らす。天人はダンテの手を取りて、ベアトリツェの唇に接吻して其の眠をさまし此の戀人を引合さうとして居る。二人の四邊の色合は溫かき愛の薄赤き光にて充ち、ダンテの愛を表する赤き鳥は飛んでベアトリツェの胸に下らんとす。苟くも愛情の味を嘗めた人ならば、此の作に對して如何に愛が、幽明を隔てても、一つの和かき赤き光に包まるゝのを體得し、殊に其の飛び下らんとする鳥に於て切なる愛情の發表を認め得るであらう。然るに科學的偏見の批評者は、何と此の畫を批評したか。彼等は鳥の色の赤すぎるのを非難した、ベアトリツェの身體の不自然なることを唱へた。而して又科學宗卽ち現世主義の道德家は、此の如き夢の如き空漠なる、且つ不自然の光を描いた畫を以て、精神衰弱の徵候、卽ち現世的の活潑なる生活發展に反對するものとして之を排斥した。

其の外、ジヨツトーの聖フランシスの畫傳で、焚火の光線に反射がない、又はターナアの夕日に對した海上碇泊の船に、舷門が見えない、又はベツクリンのペストの畫で其の中の赤き焰が物理的でない、此の如き批評は皆寫實の謬見から生じたもので、美術は寒暖計や度量衡の尺度で計るべきものでなく、又寫眞を補ふ道具でもない。吾等の其の物に對して又其の景に接して起すべき必然の情緒を、色や形の方法に依つて投射するものであることを考へないためである。詩の言語が吾等の感覺や推論を記すものでないことを、誰も許すであらう。然らば何故に有形美術は、吾等が感覺のみで得る物質世界の束縛を超越して、直ちに吾等の感情を寫し出し、之に依つて吾等の間で、其の言語では言ひ現はせない情緒を交感するのみならず、又凡て此等交感の基本たる形而上の實在世界と交通する器具と爲し得ないか。

美術は現象世界の事物に依つて吾等に實在する觀念世界を紹介する媒介方法である。吾等に形而上の實在世界を示現し、吾等有限の精神がこれに依つて直ちに無限と交通するやうにする、是が美術の職分である。此の事は別に詳しく論ずるとして、こゝには、其の反對に美術を娛樂の具とする惡見解を論破しよう。此の如き見方は寫實主義の必然の結果で、美術は只事物の表面の美を寫すものとすれば、其の美なるものは、どうしても只耳目に快感を起さしむるものとならざるを得ない。譬にして見れば、色合が快調で其の配合が目を樂ますやうにして、而して其の題目も亦普通の安逸乃至慾望の滿足に適當したものであれば、完全の美と稱し得べきである。固より此の如き技術上の巧妙も、美術の美を成す一要素ではあらうが、それだけで美術の能事畢れりとすれば、吾等は何故に斯くの場合に於て、分量に於ては恐らくはかれよりも多くの快樂を與ふる、耳目鼻の慾を棄てて、美術につくか。又此の事實は、吾等が現實天然の美に接するよりも、美術作品を見た方が安逸の法であるとして、說明し得るとしても、さすれば美術の中で、壯大或は悲壯の美が單に優美なるものよりも多くの感動を與ふるは何故であるか。單に娛樂の具としては、是等の分子は全く不必要ではないか。

此の關係は有形の美術から進んで音樂に入れば、一層明かである。ワグネルの樂劇の出た初めに、一般公衆のみならず、音樂者まで擧つてこれを排斥したのは、或はワグネル樂が在來の文典に據らないとか、或は豫期せざる所に強

きデスコードがあるとか、其の反對の理由は、つまり單に愉快な音を聽からとして安逸を貪る情にワグネルが背いたからである。若し此の理由を以てワグネル樂を排斥するならば、ベートーウェンの第六以下のシンホネーの如きも排斥せざるを得ないであらう。然るに今日はベートーウェンに對しては勿論、ワグネルに對する反對も薄らいで、歐米に於ては人は漸く音樂は單に娯樂の具にあらずして、襟を正して聽くべき莊重なる天籟であるといふことを知り初めて居る。若し音樂が單に愉快のために貪るべきものならば、愉快な音の組合せと、即ち主として共鳴から生ずるハーモニーと、其のつゞき工合との機械的技巧の外に、音樂の美は存在しないであらう。併し事實はこれに反して、少し耳のある人なれば、極めて愉快なる俗曲的マーチに滿足せずして、寧ろバッハやブラームスの教會音樂の靜かなる而して何か音調以上の天籟を有するものを好む。日本にしても趣味のある人は長唄の巧みなる末のものよりも、一中や若しくは遡って元祿以前のうぶなる人の心情に訴へる樂を好むではないか、只華美で調子のよい愉快な樂を好む人は、恐らくは名人の一曲と自働音樂器の一曲とを區別し得ない人であらう。

要するに、寫實ばかりを重んずるならば、美術は不用である。たとひ寫實といっても、技術家が天然現實の中から某々のつかまへ所を捉へて、これを寫し出すにあらずんば、即ち美術として肝要なる某の要點を得、其他を省略するにあらずんば單に快感だけをも與ふることもできない。此の一點の事實から見ても、寫實が文字の如く寫實としては美術の資格なきを證して居る。即ち美術は其の「天然の模倣」に依つて、通常の耳目には觸れないある物を現はさうとする職務を有つて居ることを知るに足る。寫實の意味すら此の如くであれば、所謂娯樂の具であるといふ考は全く破らなければならぬ。最も卑近なる證據として、通常の肉慾の快樂を貪る人は、それと正反對に、天然なり人工なりの美を味ふことの少いものであることを見るがよい。或は快樂論者は、肉慾の快樂と精神の快樂とを區別して、美術の享樂は精神の快樂に屬するといふであらうが、そこが吾等の問ふべき要點で、此の區別に既に大切なる問題が、伏在して居るのである。

既に精神的快樂といふならば、其の快樂を與ふる原物は、精神を感動する力を有つて居るに違ひない。凡そ交通或は交感と稱する事實は、其の方法媒介の如何に關せず、交感を爲す兩者に何か共通の性能あるを豫想せざれば說明し得ない。例へば本國政府と在外外交官との電信往復で、其の電報が常に暗號なるに拘らず、兩者の其の意味を了解するのは、何に由つて然るか。兩方に暗號の原簿の存在して、それに依つて互に暗號で意思を通ずるからである。即ち此の場合には、交感兩者の間に存する共通性能は暗號簿である。此の一例が精神の交通に關する說明には、餘り淺薄であるといふならば、一歩進んで他の例を示さう。人は每日他の人と言語で話をして、互に其の意味を了解したと考へて居る。併し先づ直接に知覺に入り來るものは言語の音聲である。其の音聲が如何に文典の規則に從ひ、又此の規則が電信暗號の如く豫て約束で定まって居るとしても、此の符號に過ぎない言語に依つて、吾等が彼の人はかく／＼の考を有ち、かやう／＼に感じて居ると、自分の考に飜譯して、而して他人の心を知り得たと信ずるのは何に因るか。音聲や文典は、直ちに吾等の思想感情ではない。其が一人の心から符號となって出て、他人の心に飜譯せられ、又場合に依つては同じ感動を起させ

るのは、其の二人の心が即ち暗號簿であるからではないか。假令此の暗號が、民約論的に何か一つの約束に成るとしても、其の約束ができる其の根柢は何處に在るか。若し此の約束が何等の必然の、即ち一つ〱の現象を超えて永遠不變に、共通元素なしにできたものとすれば、其の約束の效力は甚だ疑はしいもので、或る場合には一方が喜びとして言ひ現はすことが、他人には怒りとして了解せられることがないといふことを、誰が保證し得るか。暗號電報を往復する前に暗號の打合せの必要があるならば、思想交通の初めて行はるゝ前に、即ち言語に關して何等の約束も成立しない前に、そこに今一つ根本の妥協の原因が存在しなければならぬ。即ち言語なる符號に依つて、吾等が思想感情の實質を交感し得るのは先天的原因、約束だとか言語の練習だとか凡て言語を用ふるに先だちての原因の存在があるからで、決して後天的約束でできるものでない。人の精神に先天的に共通の性能があつてこそ、凡ての言語が符號として其の交通の媒介と成り得るのである。

　此の理を擴めて考ふれば、吾等が某の動物を愛し、若しくは又草花などの天然の美によつて心を樂ましめ得るのは、矢張其の間に、其の限りに於て、共通の元素が吾等と外物との間に存在するからである。犬が一聲ワンと鳴くのを聞いて犬を愛する人は、其の感情を知り得る。これは犬を愛するために、常に其の聲に注意する所からして、即ちいはゞ練習によつて初めて現はれる力ではあるが、若し吾等と犬との間に何等の共通の性能がなかつたならば、恰も暗號簿を具へざる暗號電信の如く、互に交感はできない。暗號を上手に書いたり、又これを飜譯する技倆は、電報往復の練習によつて生ずるが、其の練習ができるのが、凡ての往復に先だつ先天的の打合せが必要であるからといつて、少しも其の先天的共通を否定するに足りない。

　花の場合もこれと同じで、花を愛せざる人には、花は何等の感動をも與へないが、花を愛することによつて、自分と花との間の先天的共通を開發した人には、花から出づる色や形や香やの符號が媒介となつて、其の間に精神的交通が行はれる。詩人が「天然は己れを愛する心に對して、酬いずに居るといふ事を決してしない」といつたのは、此の消息である。花が吾等の感ずるやうな和樂の感情を現に抱いて居るや否やは、吾等の問ふを要しないところである。吾等の方から花に接して其の美しき色や香によつて、吾等の心に幾分でも樂みを感ずるならば、其の限りに於て花は吾等と同じ感情を有つて居ると、吾等が見るのである。さもなくば、花に對する吾等の愛情は空である、妄想であるといはなければならぬ。單に現象の間ばかりに注意して、其の他に何等の事實の存在をも許さない科學的見解が、極めて些細なる花に對する吾等の感情をも説明し得ず、説明し得ないのみならず、凡てこれを否定して、遂には人間の現實に感じ思ふところをも迷と斷じようとするのは、この消息に通ぜざるためである。詩人が、月が笑むとか、花が喜ぶとかいふのは、吾等の感情の事實で、而して其事實を否定せずに説明しようとするには、色や形の符號的現象以上、更に重要なる先天的性能の存在と、及び吾等と天然との間には精神的交通が存する事を假定しなければならぬ。

　「山も波も空も皆、我と吾が心との一部分で、又我は彼等の一部分ではあるまいか」といつたバイロンの名言は、享樂こしても、創作にしても、凡て吾等が美に打たれたときの感情である。此の感情は決して根據のないものでなく、却つて最も深い、天然と萬人の精神とを包括する

大なる根據のある感情である。肉慾の害に陷り、或は利欲の巷に血眼をさらして居るものも、其の心情が一旦美に接して開けたときには、皆此の感情を抱き、又其の感情の大なる勢力に支配せられる。若し天然にしても、人事にしても、或はそれが自然の中に認めらるゝにしても、美術に依つて發揮せらるゝにしても、吾等の精神が、美の對象其のものと共通の交感ができるにあらずんば、此の感情は生じ得ない。吾等が美術作品に依つて發表する此の交通は、直接には作品の形式美を通じて、作者の精神と交通し、間接には作者の精神に依つて、作者が感得した、天然なり人事なりの先天的精神美と交通するのである。煩はしいやうであるが、反覆して斷言する、彫刻や畫の形色の美、若しくは音樂に於ける音調ハーモニーの美は、此の交通の媒介を爲す媒介である、符號である。吾等の精神が感動を受ける眞の源泉は、此等の時間や空間に支配せらるゝ形式を超越したる精神、即ち實在に存する。それ故に美術は娛樂の具でない、深遠なる莊嚴なる實在界と交通する方法である。其の交通が吾等の沈思冥想若しくは信仰敬虔に依つて成し遂げらるゝ代りに、形式や音の符號に現はれた美に對する享樂として發表するのが即ち美術である。此の享樂は精神的快樂である、浮薄な意味に於ての精神的快樂でなくて、最も確實なる、最も直接なる意味での精神的快樂である。重大なる問題といつたのもこゝのことである。

美の享樂は愛である、肉慾的の愛でなしに、プラトー的の愛である、信仰や敬虔と殆んど相近い愛である。これに依つて、吾等は肉體、時處に束縛せられながら、其の時處形式の中に、永遠不變の實在を直觀して、直接に精神的交通を遂げ得る愛である。吾等が曩きに美術を以て精神安立の易行道といつたのはこれが爲である。

寫實娛樂が美術の相用でないといふことを明かにしたから、是から今一つ進んで其の表象が必要である所以を說明しなければならぬ。併しこれは先きに精神の交感を論じた中に、既に明かに含蓄せられてゐた。吾等の精神は、肉體、時處の制限を受けて此世に生存して居る、吾等の精神はそれ故に時處の形式ある符號に依らなければ、自分以外のものと交通することができない。最も簡易なる思想感情でも、額づきとか身振とか、若しくは言語に依つて傳達せられる。而して此等額づきや口の言語も、其の中で又符號の符號を使つて居る。「大なる人物」「深い思想」といふ如きはもとより、一層感覺的なる味や音の如きも、「高い音」「輕い味」などの如く、物其物を言ひ現はすに、他の範圍から借り來つた表象を用ひて居る。さすれば複雜なる、激烈なる、深刻なる、遠大なる、幽玄なる思想感情を、形や音に發表して、それに依つて其の本の精神を人の肺腑に徹しようとする畫や音樂が、如何にして表象を用ひずに成立ち得るか。表象を否認するのは即ち美術の存在を否認するのである。表象なしに人に快樂を與へ得るものは、恐らくは味感と觸感と生殖慾とであらう。表象なしの美術否娛樂を要求する人は、畫堂や樂器を破壞して、美味と香水と女色とに沈湎するがよからう。

科學萬能主義に基ついて美術の表象を貶する人は、即ち感覺的事物の外何等の實在をも認め得ぬ感覺主義、物質主義の人である。此の如き浮薄なる科學思想は既に破滅の宣告を科學者自身の中から受取つた。科學が大切にして居る物質說明のための多くの概念も亦表象である、符號である、只、美術の表象の如く、直接に人を感動しない實在の表象である。然らば此の科學に依つて、感情の動物たる人間の生命である美

術を否認しようとするのは、人間自身の自殺である。大なる思想を抱いた科學者は、決して此の如き美術否定の人でなかつた。ファラデーや又はテンダルの如き大なる物理學者は、又大なる神祕家であつた。ダーヰンやハックスレーの如き大博物研究家は、即ち微細なる動物の中にも、大なる美と愛との神祕を發揮した人である。苟くも心情あり情緒ある精神の人ならば、いづれのものにも自分と同樣の精神の存在を發見して、美の愛に依つてこれに同化し、これと交感する。而して美術は出來るだけの人工の法をつくして、此の交感孚應の方便を盡すものである。而して其の方便は表象の外に存し得ない。而して表象なるものは約束や方便で出來た假の表象ではない、實在の根柢に入つて視れば、同じ精神から出てゐる必然の關係を持つてゐる表象である。現象の中に理想を造り出すのが美術で、精神の交通によつて、現實を理想化するのが即ち美に憧がるゝ我等の天性である、人間精神の神祕である。

此の如き神祕の存在は獨り美術の由つて出る源泉であるのみならず、又科學に於ても明かに其の存在を示して居る。先きに科學萬能主義として論じた如き輕率なる淺薄なる科學は、日々實驗場や教室で小研究を遂げて小發見に得々として居る小科學者の科學である。一科學の大變革を促し、其の結果一般の思想界をも動したやうな大科學者は、皆單に形而下の研究にのみ汲々たる人でなくて、其の諸々の精密なる研究の根柢には、宇宙の大神祕に對する深き敬虔の情を有つて居た人である。ファラデーが電氣學上又光學上大なる功績のある學者であることは誰も知つて居る。彼が電氣と光との間に何か融通の關係が存在することに心を潛めて、毎夜蠟燭の光にマグネットの流れを與へて、忍耐なる研究をしたことは、吾等の歎稱せざるを得ない所である。併しながら吾等は彼の人に於て單に此等の忍耐の研究や、其の研究の結果以上更に大に感服すべき點のあるのを見る。即ち彼は、凡て宇宙の現象は唯一の神の力が色々に現はれ居るものであるといふ確信を以て、物理の研究によつて、其の確信の證明を試みたのである。即ち諸々の力の中に、一つの大なる神祕が存在して、其の神祕は即ち世界萬物を造つた神の力であり、而して吾等は神に造られたものの一つとして、其の力を認め得るといふ神祕の信仰が、斯の物理學上の發明を致させたのである。彼の物理學上の發見が棄てられる時があつても、「化學及び物理の研究」の最後に言ひ現はされたる彼の神祕の信仰は、永く其の光を保つであらう。吾等が科學も亦神祕に歸すると斷言するのは、これがためである。

一々の現象の中に遍在せる神祕を認むる人でなければ、大なる科學者といひ難い。科學が依つて以て神祕を探る手段とする一々の現象を表象と見做せば、其の表象に依つて窺ひ知らるべき神祕は、又美術の表象が吾等に教ふる神祕と全く別物ではあり得ない。

## 三、藝術と神祕

Look at last up to that sovereign light,
From whose pure beams all perfect beauty
springs;
That kindles love in every godly spright,
Even the love of God; which loathing brings
Of this vile world and these gay-seeing things;
With whose sweet pleasures being so possessed,
Thy straying thoughts henceforth ever rest.

Spenser—Hymn of Heavenly Beauty.

美術は表象の方法によつて吾等の精神を時處

を超えた實在の世界と交通せしむる。人の顔色や言語が隨分深く感情を傳ふることは最も明かなる事實で、而も到底科學のみにては説明の出來ない不思議である。抽象の議論を避けて、直接に讀者の目に訴ふる事實を擧げよう。讀者は卷頭に掲げたバアンジョーンスの筆に成れる「王と乞食娘」の畫(本書には之を除けり)を見て暫く沈思冥想せよ。ロンドンの畫廊に懸けられたる原作の色案配や筆遣ひを親しく見ざる人には、或は印象が極めて薄いかも知れぬが、併しながら何物かが自分の精神に觸れ來つたと思ひ得るまで、王と乞食娘との眼許を注視せよ。

乞食娘は今路頭から王宮につれられて來た。破衣裸足のまゝ、莊嚴なる裝飾を以て圍まれたる玉座の一方に据ゑられ、而して王は自ら其下なる階段に坐つて、驚歎の目を以て此の乞食娘を見つめて居る。乞食娘の顔色は青ざめて、其の凹んだ目は怪しく光を放つて居る。彼の女は俄に王宮につれられたのを驚かないではない、併し其の念頭には一毫の疑懼を抱かず、體軀は尙玉座に安んぜざるが如き態度を示すも、其の念頭には、今自分が何處に居るかも忘れて、精神が何とも知れぬ不思議の或る者と融合したかの如き狀態に居ることは、其の目の落ちついたる怪しき光の中に現はれて居る。彼の女は、王が自分を此處に拉し來つた目的の何であるかには考へ及ばない。只王に惡意のないことと、又何となしに王の深い率直なる愛が自分を取りまいて居るかの如く感ずるのである。周圍の廣大なる宮殿や、燦爛たる裝飾は、此の不思議なる感情の前には何等の存在をも有せない。

作者は中々力を盡して此の裝飾を描き、又其の中古的の森嚴なる裝飾は看者に取つては、此の畫題の中古的特色を感得するに必要なる材料であるが、一旦眼を此の娘の神秘的眼睛に着目するならば、看者も亦此の娘と共に凡て周圍の裝飾を忘れて、只乞食娘と同じ神秘の感に打たれざるを得ない。

讀者は暫く目を轉じて、下に坐して冑を脱いで乞食娘を凝視して居る王の横顔に注意せよ。彼は眩きばかり光を帶びて居る鎧に身を固め、其の膝の間に立てゝ居る長劍を一たび揮へば、敵國も恐るゝ王である。併しながら、彼は一日路頭に發見したる此の天賚の美に打たれて、其の人が乞食であるをも顧みず、これを女王(妃にもあらず妾にもあらず眞の意味での女王)にする積りで、王宮につれ歸り、今これに玉座の半を與へて、自分は一段下に坐し、王冠を脱して此の天より賚つたる眞の女王を見つめて恍惚として居る。其の眼の中には、戀ともいはず、愛ともいはず、さりとて又單に尊敬ともいふでもなく、自分をも王位をも忘れて、彼の女を見て居る、其の目つきは殆んど神秘の光を放つて居る。

乞食娘が見つめて居る其の目途はいづれにある。王が乞食娘を眺めて居る其の眼光は、世の遊冶郎が美人に對する恍惚の如き、私慾的の何等の感情をも現はさず、殆んど何物とも知れず、此の美の中に現はれて居る或る偉大なる物質以上の神秘を眺めて居る。通常男女の間の愛といふものとは、全く異なる愛の光が、兩者の眼によつて畫幅に充ちて居る。凡ての色彩や形狀の技術的の美は、此の神秘的の光を此の世界のものとして現はす副方法に過ぎない。

此畫一つで見ても、美術の表象が、到底言語の表明や物質的の分析で説明のできない、形而上の世界を現はすことを知るに足るであらう。形狀や色彩が此の如き職務を盡し得るのは、抑も何等の神秘であるか。バアンジョーンスにして、王と乞食娘との間に現はれたる不朽の愛を感得し、而して其の技術が

又同じく其の愛に依つて感動せらるべき吾等の精神を感動するにあらずんば、此の畫も亦何と色との外に何等の意味をも有たないであらう。美術の表象は宇宙の大神祕が存在するために、初めて其の用を爲し、吾等の精神が其の同じ大神祕の中に生活して居るから、初めて美術の表象に動かさるゝのである。

　美の享樂は精神交通の神秘である。吾等の精神が美の物象によつて、美の源泉である吾等精神の故郷と交感冥合する時には、其の物象は現實の物でなくして、吾等は已に其物を精神化して觀じ、精神の中に之を融合してゐるのである。此の意味で今美術は表象であるといふので、即ち吾等に此の美の享樂を與ふる物象は、感覺に訴へらるゝまゝの物象、即ち時空因果に束縛せられて、現實世界の差別相にのみ支配せらるゝ物象でなくて、其が表はす或物の代表媒介である。吾等は又此意味で、主義としての寫實を、即ち決局目的としての寫實を美術の埒外に排斥するのである。

　此く云へば、或はかういふ誤解を起し易いであらう。表象が表象で、其の目的が寫實でないならば、現實に吾等の五感、特に耳目に訴へるまゝの物を寫さずに、何か模型の如く影の如く、現實に吾等の感じ得ない夢を寫すことが高尚な美術でなければならぬ。某の野原に草花を摘んでゐる一定の服裝をした一定の顔つきをした乙女を寫すよりも、乙女の原型、肉もなく顔つきもなき形を天上世界から下して來て寫すのが美術でなければならぬ。一定の複雜なる事情の下に惱み苦しみつゝある、血あり性格ある個人を、小説や戲曲で寫し出すのは間違なので、シェリーが、エピシアムの中で詠じた如き、考へ又活きる形の影で、惱みや苦しみの模型を、全く抽象的に寫し出すのが、眞の文學でなければならぬ。表象主義の美術家は、事實こゝまで極端に行かずとも、理想から云へば此くあるべきである。然るに美術家にして、かゝる形の影を寫し出し、其によつて美術として成功した人があるか。又此の如き美術作品が出來たとしても、吾等は此の如き作によつて美を樂しみ、美的快感を得る事が出來ようか。かく見來れば表象主義の美術論は逆である。

　此の如き、非難といはうか、誤解といはうかは、多く寫實主義の側から表象的美術に對して加ふる攻撃である。なるほど表象主義といふ名其自らと、又此側の作家、或は美論家の抽象的言論が、少し極端に馳せる爲、即ち寫實主義に對して此方の言説が攻撃的に出る時には、一方の極端を示さうとする爲、此の如き言説を招くのも無理でないであらう。然し此の如き非難は畢竟誤解である、或は牽強である。少くとも今こゝに述べ來り、主張し來つた表象主義は、此の如き意味での表象ではないのである。此の點は後に述べるべき宗教の信仰に關しても同樣、決して具象の現實を離れた抽象的表象でない事を明かにしようが、此處には先づ美術について此の點を明かにしよう。

　試に先きにハアンジョーンズの作品について述べた點を、も一度よく玩味してもらひたい。彼の畫は、吾等の精神が、總ての利害打算、總ての因果考察を絶した大なる融合の愛を表はすもの、此の點で之を讀者に推奬して、吾儕の美術に關する意見の説明に用ひたのである。併し彼の畫は決して「形の影」を畫いて居ない。先きにも述べた如く、其の四邊の裝飾は、柏の木の浮彫の極めて中古的特色を有するものを、殆んど painfull といふべき程寫實したものである。又此の娘の憐れげな服裝や、王の甲冑、刀劍、乃至乞食娘の手つき、足の揃へ方や、王の毛ゝまで、全く現實世界の、乞食らしく若しくは王らしき外裝や態度を、忠實に具象的に寫

し出してゐる。若し此の畫にして、此等の形狀や色彩の具象的描寫を缺いてゐたならば、此の畫が畫き出してゐる中世紀の質朴なる氣風、乞食娘と王との關係的位置を如何にして看者に印象し得るか。而して此等の周圍の光景や人物の態度を畫き來つて、其の最後の畫龍點睛、此の畫の神祕の中點ともいふべき二人の顏つき眼つきに至つても、決して空の人物のでなく、肉あり血あり呼吸ある現實世界の人物のものである。こゝまでは寫實主義なるものとバアンジョーンスの作及び吾等の美術論の同伴し得る處である。

ところがジョーンスが周圍の光景に畫き出した、柏の木彫裝飾は何の爲に其處に存在するか、彼は此等を、某の彫物師が彫み、某の宮殿に据ゑつけられてあつた裝飾其物を寫し出す爲に畫いたのでない、即ち其の實物を寫生して、其で能事終れりとしてゐたのではない。此等は總て此の畫の中に中世的空氣を漲らせる爲で、其の中世的空氣に看者を引き入るゝのは、即ち此の畫の中心なる乞食娘と王との心情の奧を呼吸せしむる爲に外ならぬ。此と同じく、娘や王の服裝乃至皺襞は、一つとして其の呼吸の一點に集中して居らぬものはない。而して其處に中心として畫き出された二人の眼眸は、其の現實の筋肉の收縮し方や、皮膚の色合によりて表はれては居るが、其は肉や皮を畫く爲のみでない、實に此の肉に依つて其の皮を通して二人の心情、二人の間に呼吸相通じて居る其の神祕を畫き出す爲である。此なしには作者も滿足しない、看者も此の畫に打たれない。それ故先づ此の畫を見て、初めには四圍の裝飾に目をつけて、燦爛たる其の光景に見とれる看者も、見てゐる中には、自ら畫中の人物と共に四圍をも服裝をも忘じ去つて、一念、女と王との心情の中に入つてしまふ。而も抽象的に二人の心情を分析して知解するのでなしに、此の四圍の空氣に囲まれ、此の時の事情に感動せられ、二人の顏つきから其の心に入つて、而して身は畫中の人となり、其の人々の内心の愛と相呼吸し相感ずるのである。此の感應の神祕は、畫中に極めて具象的な描寫、極めて寫實的な色彩と其の配合集中とに依つて得られるので、決して「形の影」で得るのではない。

此と同じやうに、ジョットーのフランシス傳も、其の忠實なる人物や四圍の描寫によつて、フランシスの信仰の力を吾等に傳へる。其の火の光に反射がないのは、(挿畫の三二六頁參照) 此の場合には畫中の人の心裏、熱あつて光なき爲である。

ジョットーは火に光のあるのは知つてゐた。光を畫いたこと古今無雙の詩人なるダンテの親友ジョットーが、火に光のあるのを知らない筈はない。然し、此處に、寫實を以て能事終れりとして、物象を其の儘に寫すが美術と心得て居る作家や美學者の味ひ得ぬ祕密がある。即ちジョットーは、此の畫で只暑い火を感じて居る人の心を描いたのである。聖フランシスは、火教の僧侶に對して、「汝等若し神の此の聖書よりも、火を尊しといふならば、汝の身を此の火中に投ぜよ」と迫つた。兩者の判者たる王は、火教者に直ちに火に入る事を命じた。而も火教僧は面を火に背けて恐れ慄いて居る。他の人も此の一場の光景に打たれ、今彼の身が火に入つたなら、どうであるかと、心の中から戰慄してゐる。此の一場の活劇に、火は中心である。然し光の火でなしに、熱の火が此の活劇の中心である。此の場面に、此の活劇を目撃する人があるとすれば、どうしてもジョットーは即ち看者をして之を目撃せしむる爲に此の畫を畫いたのである、何人も火の光を見ずして、只其の熱を感ずるであらう。火の熱と聖フランシスの信仰の力と、此の二つが此の畫を作つてゐる。其

故にジョットーは、火の熱を畫く爲には、火にも四邊の人々の面にも、總て熱を畫いた。看者をして視覺から熱を感ぜしめようとしたのである。物理の說明の爲に火を畫いたのでない。此の如き畫は、世の僞寫實家の感じ得られぬ處であらうが、火の熱とフランシスの信とを、其のありの儘に畫くには、此くあるより外に方法はないので、ジョットーは其故に眞正の寫實家である。而して其の寫實の具象的描寫が、よく看者をして畫中の人物と呼吸相應ぜしめ、神相通ぜしむるのである。此に於てか知る、眞の表象は卽ち眞の寫實で、眞の寫實は卽ち又眞の表象である。

此の外、此と同樣の關係は、「ダンテの夢」についても、ターナーの諸傑作についても、近くはベクリンの怪物畫や、芳崖の觀音についても、十分に立證し說明し得る。文學上の作品についても同樣で、當時の歷史なしには、シルレルのワレンシタインも、其の悲壯の意義を失はうし、近松の心中物も、現實の義理人情を畫かずには、戀や情義の活きた表象とはなり得ない。

要するに、美術の美は天然の美と同じく、現實によりて理想との交通をなさしむるのである。

其が畫き出す現實は、一分寫影を交へるのを容さない。一に忠實なる「天然の模倣」でなければならぬ。只其の天然を、單に五感に訴へるまゝに、物理的天然として模倣するのでない。眞なる深い「天然」の眞相を畫き出し、而して吾等の精神をして其の「天然」の中心精髓と感應道交せしむるのである。此故に眞の寫實と眞の表象とは相離れ得るものでない。今の寫實主義の如きは、畢竟空の寫實主義で、天然に不忠實であるのみならず、吾等自らの精神を欺く寫實である。美術を科學で分析し、或は他の極端で美術を娛樂の具とする如きは、つまり此の自欺から生ずる淺である。

今までは耳目に觸れ得べき美術に依つて、忠實なる「天然の模倣」は卽ち表象に存し、而して此の表象は卽ち吾等精神の神祕的交通の方法媒介である事を明かにし來つたが、此から尙他の方面に此と同樣の神祕を求めよう。

精神の交感孚應は、卽ち此の世にある總ての美しいもの、善きもの、眞なるものの根柢である。此の神祕があるから、吾れ等は美しものを好み、善きものを愛し、眞なるものを尊び得るのである。又此の神祕の根柢があればこそ、美しいもの、善きもの、眞なるものが此の世に存し得るのである。此の神祕、此の根底を外にして、美を論じ、倫理を談じ、哲學を講ずるのは、無用徒勞である。

吾等の現世生活の精神は、此の如きの表象に依つて他の精神と交通し、表象に依つて實在生活と交通する。此は獨り美術のみでなく、信仰の愛によつて、直ちに神なる精神と吾等とを結びつくる宗敎も、亦此の意味での表象を要する。佛陀が彼の時、彼の國に現はれて、目觀るべき身體に依り、耳聽くべき說法に依つて、彼が內心に悟得した絕對の眞理を宣布しなかつたならば、卽ち其の眞理が具體的に佛陀の人格に現はれなかつたならば、煩惱具足の人間は、寂光界の理想に依つて安立の地を得なかつたであらう。後世の佛徒が、佛陀を以て單に肉體五十年の生命を有した一人の敎師と見ずして、常住なる眞如法身の一つの現はれと信じたのは、卽ち佛陀なる具象的一人格の表象作用によつて、吾等の精神が無餘根本の精神と交通し得たのである。其の根本の精神が果して何者であるか、其の信仰が今後も尙世界の人心を支配し得るや否やは、今の問題以外である。吾等は只佛陀なる有限の一人格が、絕對精神の表象となつた爲に、偉大なる感化を及ぼし得たことを

過去現在多くの信徒の内心に經驗する事實として認むれば足る。

キリストに於ても亦同樣で、彼は實に「人の子」の代表である。神を父として、其の愛の中に我を沒し、我の中に神の愛を體現する「人の子」が、肉あり血あり、情あり涙ある一人の人間として現はれたので、即ち彼の人格は神の愛の具體的發表で、彼の傳記は即ち「神の子」の表象である。千九百年の前にナザレの大工の子として生れ、多くの人には狂氣として貶せられ、最後に十字架上に殺された一人の狂熱家の人物が、何故に眞に「神の子」たり、又代表的に第二のアダムなる「人の子」たり得るか。歷史上のヤソなる人は、果して四福音書の傳ふるが如き、又特に第四なるヨハネ傳の解釋するが如く、永遠なるロゴスの肉となつたものであるか。吾等は今此等の歷史的問題を吟味する必要を認めない。只此の信仰が、殆んど二千年の間、幾億の人心を支配して、其の間に多くの奇蹟聖史を產み出したといふ事實を承認して、而して其の多くの驚くべき信仰と事業とを產み出した源泉は、決して空虛でなく、キリストなる一表象によつて、神の愛が世に現はれ得たことを、不思議として認定すれば足りる。

不思議だとか神祕だとかいへば、今の科學熱に浮かされた人々は、これを排斥して迷信と斷ずるであらう。所謂神祕の信仰は只現象のみを見て、それが基づく所の實在を求むることを知らない人の目には、迷信と映ずるであらう。好し迷信と許しても（迷信といふ概念それ自身が、甚だ空漠なるものであることは、暫く捨てて置いて）、其の迷信が大なる力を產み出すことは事實である。科學主義、現實主義の人は、此の事實の原因を如何に說明し、此の力の根柢を何處に求むるか。

近くはナポレオンがフランスのみならず全歐洲の人心を震盪して、其の一擧一動が幾萬の人命を支配し得た時に當つて、フランス人は彼を何と見たか。「人」（l'homme）と稱した。彼は此の時に當つて、一人の人間でなくて、人類全體を總括し代表する「人」其のものであつた。フランス人は、彼の人物に於て「人」其のものの表象を認め、其の「人」の中に大なる力の發表を見たのである。即ちナポレオンなる一つの具體的なる人間が、「人」の表象として、恐れと喜びを以て「人」の力が如何に大なるかを感得せしめたのである。此の信仰は、フランス人の迷信であつたかも知れぬ。併しながら、此の「人」は、人々の爲に破られ、歐洲の活動から退き、其を代表した肉體は、遂に絕海の孤島に憤死した後にも、彼は生存するではないか。之に反して、彼を破つた人々の力は今日幾何の人心を動かし得るか。ワーターローの古戰場に、記念尖塔の上に立つて、其の昔を回顧する吾等の胸には、彼の人々の力が感ぜらるゝか、若しくは彼の「人」の力を回顧するか。ナポレオンを破つた人々は、破られたナポレオンの「人」に較ぶれば、影の如く泡の如きものである。ナポレオンは死しても、彼が表象し代表した「人」は死なない。さすれば永遠の生命と不窮の力とを蓄ふる實在の「人」は、何時でも又いづれの處に於ても、彼を想ひ彼の力を色讀せんとする人の胸に現はれ來る。フランス人が此の「人」を神の如く畏敬したのは果して迷であるか。

ナポレオンは死んでも「人」は死なない、釋迦の骨は砂の中に朽ち果てても、佛陀は今尙存在して居る。ヤソは二千年の過去の人であるが、「神の子」たるキリストは、今も此處で吾等の精神と交通し、吾等の精神を活かし、吾等の精神の中に活きて居る。只吾等は此の永遠の「人」や、佛陀や、「神の子」を、抽象的に單に思想の產物として發見し捕捉することを得しない。吾

學思想や科學の研究は、此の捕捉、此の交感の土臺を築き、階段を與へるであらうが、直ちにこれを此の生命の中に實現する方はない。又此の神祕を敍述し說明するが哲學や科學の職分であつて、之を破壞し或は造り換へる事は不可能の事である。吾等の精神の中に、永遠の實在を現はし來るには、矢張具體的に時處の關係を有する表象を要する、現世に於ける吾等の精神はどうしても、時處の束縛を脫して考へ乃至働くことができないから。

されば表象は美術の生命であるのみならず、又宗教の生命である。即ち肉體の中に活き社會に生息して、どうしても現世の束縛を脫し得ない吾等をして、其の現世に住みながら、具象局限の現象の中に、又其を通して、一切の變化差別を超えて不變なる實在と交通せしむる凡てのものの生命である。即ち表象は、此の交通の媒介であつて、表象が此の如き媒介の職務を果すことが、即ち神祕である。キリスト教なり佛教なりの中で、神祕的思想に入つた人は、色々の方法で其の神祕的直感を試みたが、要するに表象の神祕力を利用するのが眼目であつた。或は胸の内に十字架を刻み、或は眼前に聖母を見、或は一呼吸の間に宇宙大我の呼吸に接し、若しくは拈華微笑の中に涅槃の大道に到達したのも、何か一つの表象を通して、大なる精神と交通したのである。斯様にいへば、又人は迷信と評するであらうが、吾等の表象が、無形の思想感情を傳達するの神祕を考へたならば、此等の宗教家の經驗した神祕は、敢て不思議奇怪ではない。寧ろ所謂健全なる常識を有する人々が、時々刻々用ひて居る言語の神祕を、不思議と思はない方が、却つて大なる不思議ではないか。神祕家の眼から見れば、一切の事物は大不可思議であつて、而も不思議でない、至當の事實である。

常人の眼は、日常接觸する事だけは、これに慣れて其の神祕に思ひ到らず、それ以外のものを怪事不思議と稱するのである。吾等は凡ての物を不思議とするか、若しくは又凡ての物を不思議でないとするか、二つの道を有つて居るのみで、半分は不思議、半分は不思議でないとする人の曖昧に甘んずることはできない。何物に接しても、其の中に不思議を見るのは、神祕の初歩である。眞面目なる科學者は、いづれの事物にも不思議の存在を認め、大なる思想家は、半途曖昧の解釋によつて、神祕を拂ひ去ることを肯ぜざる人である。一切の植物の中に不思議を發見したればこそ、ゲーテは其の植物の[illegible]を作り出した。ニユートンが林檎の落ちたのを見て、日常怪しむを要せざることとしてこれを看過したならば、彼は近世物理學の開祖となり得たか。ファラデーが若し單に實利的應用を以て科學の能事とする物理學者であつたならば、光と磁氣との間に存する融通の關係を發見し得なかつたであらう。

吾等の思想が、一旦一切事物の神祕に氣をつけて、これを探究し始めたならば、凡て耳目に接觸する所のものは、不思議たらざるなきに至る。而して此の一切不思議の中に、大なる精神、常住の實在の現はれを認め得るに至れば、今までの不思議は、至大なる光明の裡に攝せられて、恰も一切萬物が、或は靑或は赤、各々其の色に從つて、一つの太陽の光を現はすが如くならう。此に至れば、不思議は不思議でなくして、凡ての物が眞の永遠なる智慧の裡に照らさるゝに至る、是れ即ち神祕の至極である。此の境に入れば、今まで自明的の事實として、最も確實なる現實として見てゐた現象界は、却つて影の如く其の實在を失ひ、今まで過境的の遠い不確實の空闇の如く見てゐた不可知が、却つて最も確實なる實在となつて、現實の事物は此の

實在の光明に依つて、初めて存在と活動との權利を得るやうになる。かういへば、何か空漠なる空理を談ずるやうであるが、凡ての科學も、要するに此の如き確實の光明に依つて、吾等の知識を整頓しようとするものである。

一般の人の考では、例へば動物に關する確實なる事實といふのは、犬といふ動物、馬といふ動物の存在で、其の犬といひ馬といふ中にも、某々の個々別々の犬馬の存在である。人は自分の家のカメを呼んで犬と考へて居る、而してカメの存在の方が「犬」の存在よりも確であると思つて、只現象の一面に拘泥して居る。然るに彼等はカメが死んだからといつて、犬がなくなつたと思ふか。此の點で、既に常識は自ら破壞して居る。又カメの生きて居る間にしても、其の主人がこれに食物を與へ、これを犬として待遇して居る其の凡ての動作は、「犬」といふ一般の概念によつてカメを待遇して居るのである。それから一歩を進めて、一般の人が、常識的に犬とか馬とかいふ存在を知つて居る、其の知識と、動物學者が動物進化の順序に依つて整へた分類法に基づいて、犬や馬を脊椎動物の一として認識して居る知識と、いづれが確實であるかを比較して看よ。而して動物學者の知識の方が、常識よりも確實であるといふ、其の理由を考へて看よ。現象世界が實在の光明に照されて、初めて眞の存在を得るといふ神祕家の經驗が決して空でないといふことを知り得るであらう。

「常人の覺めたる所は、賢人の夜である、賢人が暗黑と見るものを、常人は光明と考へて居る」。「太陽も照さず、星も月も、又彼の電光も輝かざる其の處に存する火は、果していづれより來つたか。一切の物は此の輝けるものの反影である。此の物の光に依つて、宇宙は照されて居る」。固より吾等は特殊存在の現象を、空である、暗であるといふのではない。只根本の常住の光に照さるゝにあらずんば、吾等は此の現象の眞相を見得ないといふのである。此の意味に於て、神祕に到達した賢人の晝が常人の夜であることを憫むのである。併しながら、其の常人の夜も、神祕の光に依つて、忽然として賢人の晝と轉じ得ることを主張する。凡ての現象は、日月や電光の光である、それ等の光が別々に存在せず、却つてそれ等の光が供給を仰ぐ、其の源泉の光に着目するの必要を主張するのである。

美術の力も、宗教の感化も、凡て表象によりて表はれる此の神祕の力である。此の表象の力を認めることは、即ち神祕に入るの源で、神祕は即ち一切眞善美の源泉である。

## 四、神祕と道德

'Η ἀγάπη οὐ ζηλοῖ.
'Η ἀγάπη οὐ περπερεύεται, οὐ φυσιοῦται.
Τοτε δε προσωπον προς προσωπον.
Τοτε δε επιγνωσομαι καθως και επεγνωσθην.

Paulus- Cor. A. XIII. 4 & 12.

愛は妬まず愛は誇らず傲らず。
さて其時は面のあたり相見ん、
さて其時は我が知らるゝ如く我れ知らん。

ポーロ、コリンタ前書十三章四と十二

Wie die Sonne lauter
strahlt mir sein Licht:
der Reinste war er,
der mich verrieth! ………
laut'rer als er
liebte kein and'rer:
und doch alle Eide,
die Verträge,
alle treueste Liebe—
trog keiner wie er!—………

Nicht Gut, nicht Gold,
noch göttliche Pracht;………
noch heuchelnder Sitte
hartes Gesetz:
selig in Lust und Leid
lässt—die Liebe nur sein!—

R. Wagner,—Götterdämmerung,
Brünnhilde が最後の詞

現象世界の根柢を探る科學や哲學も、觀念世界の美を吾等に發揮する美術も、遂に皆一つの神秘の中に歸着する。其の神秘は即ち吾等の精神と精神との交通、及び精神と外界との交通を可能ならしむる根柢である。先にも述べた如く、一切萬物が同一性質を有つて居るのみならず、實に唯一の共通なる源泉から生じたものと見なければ、凡ての精神の交通、物質の相互の影響が生じ得る筈はない。此の根柢を稱して、或は形而上の實體といひ、或は佛教の如く眞如と名ける。此等の差は、只名稱の相違ではあるが、其の相違の由つて起る所は、人々が因つて以て此の根柢を認め、又此の根柢の實在に對して自分の方からの活動を向ける、其の關係に依つて違つてくるのである。實在といへば、一切の差別變化を超絶した不變不滅の死物の如く聞える、眞如といふも亦然り。吾等は、此等の形而上的概念に對して、今批評を試みる必要はない。何となれば、吾等が今此の根柢を發見し來つた根據は、主として精神の交通といふ一點にある、殊に美術に依つて得らるゝ精神の交通を基として、其の精神交感の根柢が必要なることを認めたのである。それ故に、此の實在に對する吾等の概念は、美術に現はれたる美が、現象世界の思想言語には不可稱不可說であるが如く、神秘といはなければならぬ。啻に其の概念のみならず、吾等の此の神秘に對する關係態度は、有らゆる種類の表象に依つて、これと精神的交通を遂げ、吾等の小精神を此の大神秘の中に遊ばせようとするのである。それ故にこれを稱して神秘といひ、又強ひて名をつければ、宇宙精神或は大我とでも稱せざるを得ない。

吾等が神秘の中に精神を遊ばせる狀態は、總ての世間の利害得失は勿論、世間の思慮活動を超えて、時處因果の外に優遊するのである。此の如き優遊は、現世の生活では、最も明かに美の享樂に現はれる。それ故に此の狀態を稱して、美的優遊と名づけるのも、不當ではなからう。

吾等をして神秘の中に優遊せしむるに至つた媒介が、科學であつても、或は美術、或は宗教であつても、其の境に入つた人の精神は、神秘の精神と交通し融合し、今までは神秘を認むる媒介の表象として居た現象の事物を、今度は其の神秘の光に依つて透見するやうになる。一つの木の葉から反射する青い光に依つて、太陽の光線の中に青の分子があることを知つた吾等は、今度は太陽の大なる光の一部分として木の葉の青光を見る。自分が同情し深く愛する人との精神交通に依つて、其の兩人の間に行はるゝ愛の根柢が、神秘の大精神から出て居ることを感得した精神は、今度は大なる愛の一つの發表として自分等の愛を感じ、自分等の愛は只偶然に起つて來て、此の世界の束縛に制限せられて居る生滅の愛ではなくて、大なる愛の一つの波瀾が、自分と自分が愛して居るものとの間を流動して居ることを感ずる。此の如くなれば、自分が接觸する所の凡ての事物、凡ての人物は、皆自分と融通の關係を以て共通の根據に立ち、同じ一つの神秘の中に生活して居るのである。

何物として自分の精神と交通し得ざるものはない、如何なる制限の下にも、時と處との殘酷

なる壁に隔てられても、此の精神の交通は妨げられない。天然に對すれば天然の愛となる、花が匂ひ、鳥が歌ふも、自分と共に匂ひ歌ふのである。雄大なる山嶽に對しては、自分の雄大なることを、其の山の巔に於て見る。恐るべき暴風雨に對しても、其の猛烈なる威力は、即ち自分と同一の威力であることを感得する。況や人に對しては、此の交通は一層明かで、親子、夫婦、朋友、一切の愛は、皆同一精神の愛に歸して、愛する人に對すれば、即ち自分の影を認め、惡むべき人に對しても、尚其の根柢に於ては同一の心情の存するを見、同一の愛が彼等を感化し得ることを強く感ずる。宗教家や詩人が、天然や人間に對する愛を教へ、又歌つた多くの實例は、今こゝに列擧する必要はない。キリストが、野の花、空の鳥に對しても、天に在せる父の愛を感得した其の愛は、アッシジのフランシスが、狼に對して、汝兄弟よといつて説教をした其の愛と同一の愛である、又吾等が此等の愛に同情して、此等の人を愛する愛と同一の愛である。神祕の中に優遊する精神に取つては、一切の事物皆我ならざるはない。これを稱して無我といふも、若しくは大我といふも、少しも差違はない。利己だの利他だのいふ紛々たる差別見解は、此の無我即ち大我の愛の中には消滅して了ふ。

此の如く神祕の中の優遊を、愛として主張すれば、世の論者は愛に偏したる、正義の觀念を缺いた、柔弱なるセンティメンタリストの詞といつて非難するであらう。然り、此の愛の中には利己もなければ利他も存しない、善惡だの正義だのいふ考は跡形もない。凡ての物の中に自分を發見し得るならば、其の限りに於ては、自他の區別はない。然らば、如何にして彼は善であるが故に賞すべく、惡を爲したが故に罰すべしといふやうな、正義の判斷が起り得るか。況や又世間の毀譽褒貶につれられて、人を判斷し、若しくは又自らこれに關心するやうなことがあらうか。神祕の中に優遊する精神に取つては、世の善惡は影である。インドの哲學や佛教が「德と過とを棄てて」(Punyapāpo vihāya)といひニーチエが「善惡を超えて」(Jenseits von Gut und Böse)といつた狀態は、即ちこれである。

思慮の鎖を斷ち、一切の疑念を解き、而して最上の神祕を見たる人は凡ての業を滅す。

（ムンダカ二ノ二ノ八）

善惡の二つ、報土往生の得ともならず、失ともならざる條勿論。……善人なをもて往生をとぐ、況や惡人をや。……信心の行者には罪惡も業報を感ずること能はず、諸善も及ぶことなし。

（歎異抄より拔く）

善不善爲レ二、若不レ起二善不善一、入二無相際一而通達者、是爲レ入二不二門一。罪福爲レ二、若達二罪性與福無異一、以二金剛慧一決了、此相無相無縛無解、是爲レ入二不二門一。正道邪道爲レ二、位二正道一者、則不レ分二別是邪是正一、離二此二者一是爲レ入二不二門一。

（維摩詰經入不二門品第九）

此等の言は、此の神祕の狀態に入つて一切の中に自分を見、自分の内に、一切を感得した古聖賢の深き實驗である。優遊の至境に遊ぶものは、皆此の經驗を得るのである。高山樗牛が美的生活論に於て、「雲の無心にして岫を出で、麋鹿のおのづから溪水につくが如き」本能的の生活と稱したのも、根柢は即ちこゝに存してゐたのである。

かくいへば、世の論者は嗷々として、此の如く道德を無視する見解を危險である、空想であるとして排斥するであらう。吾等は此等の論者に對して、先づ問ひたいのは、彼等の所謂道德とは何物であるかといふことである。彼等が此

の間に答へ得たならば、それから進んで、吾等は此の善惡超絕の美的優遊、即ち神祕的の愛が如何に吾等の生活の支配し得、而して此の愛の中には春風秋霜兼ね備はる攝折の二面の活動を明かにし得るであらう。

自利にしても利他にしても、或は又功利說若しくは進化的倫理說にしても、其の目的とする所の大小高下の差別はあるにしても、大多數の人の常識若しくは倫理說は、要するに利益といふことに歸着する。純然たる直覺的の倫理說は殆んど世に容れられず、直覺主義と稱する人々にしても、其の直覺の由つて出づる所の念慮には、個人とか家族社會乃至人類全體の利益を眼中に置いた良心を以て倫理の基礎と考へて居る。利害の打算、即ち個人なり社會なりの都合によいかわるいかといふことが、吾等の社會的生活の目安であるといふことは、殆んど凡ての倫理學說の根柢になつて居る。そこで道德と社會生存の好都合といふその間には、何等の區別も存しないかの如く考へられて居るから、道德といへばどうしても、第一には目見るべく手觸るべき現世的社會の繁榮と、第二には其の社會の平均の標準とに束縛せらるゝ。其の二つの制限の下に都合のいゝ性質を有ち、其の制限の下に都合よく調子を合はせて活動する人は、世の所謂健全なる道德の人である。

そこで假りに社會人類の進步が人類生存の唯一の目的であると許した上、此の如き道德が、果して凡て人類進步の原動力であり得るか。これが吾等の第一の問である。社會の進步は學術知力の進步に伴ふといふ說に從つた所で、知力上の大なる進步を促したやうな變革は、果して現世的の思想家のみから出て、神祕は其の間に何等の力をも添へなかつたか。若しくは又社會の進步は、感情の馴致、即ち服從とか協同とかに適する感情に基くといふ考に從つても、此の如き感情の馴致が、古來宗教の助けなしに、全社會に及んだ例があるか。平凡なる科學の進步、即ち新發明新發見と稱せらるゝものは、先きに述べたが如く、一時の利用厚生の道に應用せられた以外、更に人類の生活たり又思想なりに、偉大なる效驗をなしたといふことは、到底許し得ないことである。思想上の變化で、人類の一變革を爲した著しい例といへば、恐らくはソクラテースが、人間はそれ自らにして目的たらざるべからずと教へた自律的道德であらう。ソクラテースの此の教は、人間の生存目的が、單に物質的現世的の範圍に存せざることを明かにしたもので、キリスト教が歐洲諸國に入り得たのも、此の前の力與つて多きに居る。而して此のソクラテースは、學說に於てのみならず、信仰人物に於て人間の精神的本位を深く探つた人である。其の弟子なるプラトーンが深い神祕家であつたのも、師の跡を結果まで追ひつめたに外ならぬ。ソクラテースの道德に、今の所謂都合道德と大いに異なる所のものがあるのは、今日の倫理學者が多くソクラテースを難有がらざるに依つても知らる。それから後にルネサンスの思想、宗教改革時代の思想など、人類の運命に大關係を有つたものは、いづれとして其の當時の社會の都合に反對し、其の道德の現狀を破らうとしたものである。若し此等の運動の先達が、社會の束縛、常識平均の判斷を以て道德の至極と心得てゐたならば、即ち御都合倫理說の道德なるものに從つてゐたならば、到底彼の如き大なる結果を生じ得なかつたのである。近い例を取つていへば、星亨の暗殺者を批評した倫理學者が、其の暗殺を非認した理由は、暗殺の動機の如何に拘らず、其の行爲は法律の禁ずる所を犯したのであるから、惡であるといふにあつた。此の特

別の場合の是非善惡といふことは暫く別にして、此の如く現存の法律制度に背くものは凡て其の理由に依つて非認すべきものであるとすれば、此の如き判斷は倫理學者から聞かずとも裁判官が已に下してゐる。ソクラテースは惡人であつて、そが死刑に處せられたのは至當の罰である。法王の命に背いたルーテルは勿論惡人である。此の如き道德のみが世に行はれるならば、世は太平無事であらうが、人類の進步の歷史は全く其の光彩を失つて、吾等は今日も尙酋長を戴いた遊牧人民の狀態に止つたであらう。利益を目安にして、それが爲に社會の傳來風習に從ふことを重んずる倫理說は、却つて進步といふ利益を滅すものであつて、自殺的思想である。

又暫く思想といふ點を離れて、服從や協同が社會進步の原動力であるとすれば、其の服從協同が凡ての人を感化し、凡ての人に行はれた曉、即ち凡ての人が所謂善人となつた曉を考へて見よ。服從する人あつて指揮する人はない、協同する人あつても協同を支配し、又場合によつては協同を破つて新しき光を持ち來す人はなくなる。此の如き善人の理想が果して社會の進化を助けるか。凡そ眞の服從といふことは、壓制に盲從することでなく、自分の意志を自分より大なる意志の一部分として働かせることである。此の如き服從があつてこそ、眞正の社會的協同も生ずるのである。されば服從協同の眞義は、我といふものの自覺に基かなければならぬ。自覺なしの服從は奴隷根性である。此の如き服從を奬勵する道德は、奴隷道德である。既に自覺がある服從といふならば、其の服從を生ぜしむる意志と意志との交通が第一義でなければならぬ。自覺の明かな意志なしには、協同も眞の協同でない。眞の協同は即ち奴隷根性の反對で、意志の獨立を要する、而して意志の交通は即ち精神の交通で、此の交通は即ち吾等の稱呼する神祕である。然らば神祕の基礎なしには、服從協同の道德も到底行はれないではないか。

ユダヤに姦通した婦人があつた。ユダヤ人はこれを捕へて、キリストの處につれて來て、如何にこれを罰すべきかを問うた。ユダヤの法律で姦通した婦人は、これを市にさらして、人々がこれに石を投げつけるのを罰とした。キリストを圍繞して居る市民は、手に手に石を取つて、今や宣告が下ると待受けて居る。僧侶にして又判官たるハリサイの徒は、律書を手にして、神の命じたる罰此の如しといはんとして居る。此の道德論者よ、汝をして此の時キリストの位置に立たしめば、汝は如何なる處置に出でんとするか。姦通は惡事なり、罰せざるべからず、而して法律は儼として存せり。自ら善人を以て任じ、人の惡を咎むるに吝ならざる今の道德學者ならば、其の處置は自明であると考ふるであらう。然るに、キリストは衆人環視の間に立つて、一方には石を手にせるはやり雄を一睨し、他方には姦通せる婦人を掩護して、明白に言ひ放つた、「汝等の中罪なき者先づ彼を打つべし」。世の倫理學者は、キリストの此の宣言を如何に見るか。

姦通はたとひ法律の禁ずる所でなくても惡事である、人の愛を盜むものであるから。併し法律に從つてこれを罰したならば、其の盜まれた愛が戻るか。又愛を盜む惡人の精神が、汝は惡なりとの宣告や、法律の罰に依つて、一轉して善となるか。且又他方に於て此の惡を憎み、此の婦人を罰しようといきまいて居るユダヤ人は、果して自ら善人となつて、他の惡を憎くだけ心の清淨なる、全く罪の穢れなき者であるか。一層高い目から見れば、惡人が惡人を罰するのは、實に自ら知らざるものである。個人の都合

だとか、社會の利益だとかを目安にして、善惡を判斷するは、姦通せる婦人を罰せんとするユダヤ人に異なることはない。若し此の場合に「汝等のうち罪なきもの先づ彼を打つべし」といふ大喝に辟易せず、身體のみならず、心の底にも曾て人の愛を盜みしことなく、衷心少しも疚しき所なく、此の婦人を打ち得る人があつたならば、其の人は即ち心の眞底から愛の光に充ち、それがために深く愛を盜むの惡を憎む人でなければならぬ。此の如き人は果して先づ此の婦人を打つであらうか。只此の婦人の惡を憎むことのみを知つて、其の周圍に集つて石を手にして居る人々の僞善をも憎むことをしないであらうか。答は自ら明かである。此の場合に「先づ彼を打つべき」資格のある人はキリストのみであつた。

讀者は、キリストの此の判斷を以て單に善惡を混合するものといふか。キリストの精神は、父の愛に依つて萬人の精神と肝膽相通じて、世には一人として罪人ならざるもののなきを知つてゐた。此の凡ての人の罪を救ふのは、一事の善を賞し・一人の惡を罰することに依つて出來得べしと、誰か考へ得よう。心根の眞底から父の愛を體し、其の愛に依つて萬人の精神と融合するやうに、根本的の懺悔變革をするにあらずんば、善惡の名目は畢竟假借の名に過ぎない。心の底からの愛に依つて、萬人と神祕の交通をするやうになつた人に取つては、其の道德は凡ての善惡を超絕して居る。利益や都合に依つて善を善とし、惡を惡とするが如きは、盲者に導かれたる盲者たるに過ぎない。世の道德家よ、心を安んぜよ、自分の精神が既に迷や慾に迷はされず、自分の我を沒して宇宙の大我と合一したる神祕的精神は、眼中汝等の所謂善惡なるものを置かず。遠く世の道德を超絕したとて、汝等が心配する如く、惡を行ふものではない。「吾等の父の全きが如く全からん」とする神祕的精神が、如何にして汝等の兄弟を苦しめ得るか。

御都合主義の道德は奴隷根性の發表である。眞の協同は精神融合の愛に依らなければ到達できない、而して此の愛の爲には人々が自ら自らの精神の奧底を叩いて見る事を要する。

是に於て問題は一歩を進めて、然らば此の神祕的狀態に入つて、愛の道德に進んだ精神は、只人を愛するを知つて憎むべきものの存在を認めないか。然り、神祕の狀態に入つて、凡ての物と精神の交通を爲し得る以上は、萬物皆我に備はると共に、我が亦凡て萬物の中に同一體として存在する。それ故に、神祕的精神の道德は愛の一言で盡きて居る。併しながら、吾等は此の愛の中に大なる怒と憎との存在することを忘れてはならぬ。「可愛ければこそ憎む親心」は、即ち愛に因つて生ずる怒と憎との最も手近い發表である。キリストが、「平和を齎さん爲に吾れ生れたるにあらず、子をして父に離れしめ、妻をして夫に別れしめんが爲に、吾は此の福音を持來せり」といつた、其の秋霜の如き嚴烈なる精神は、即ち大なる愛より生ずる大なる憎である。善惡といふことも、既に眼中に置かない。吾等の道德では、愛憎といふことも、亦區々たる自利利他などいふ利益のための消えては現はるゝ愛憎ではない。

ニーチェの善惡超絕だの、維摩の對治法門だの、乃至はキリストの此の世に持來した利劍、若しくは日蓮の本化上行の自覺に基いた折伏だのむつかしい名目を並べるに及ばぬ。讀者の多くは、紅葉山人の金色夜叉を讀み、又は演劇で見たであらう。主人公なる間貫一が、人情も義理も棄てて人面獸心の高利貸となつたとき、其の親友の荒尾が、彼を改心せしむるために、如何に彼に說いたかを知つて居るか。親友

をすかしたり諭したり、又其の戀人である宮の改悟をほのめかしたりしても、石の如き貫一の心の動かぬを見て、荒尾は遂に彼を畜生と罵り、畜生といはれても尚怒らぬか、早く怒れと迫つた。讀者は、此の怒を逼る憎の詞の中に、如何に多くの親友の情が籠つて居るかを見て、何と思ふか。吾等が善惡を超絶し、一切の精神と融合した愛の精神の憎といふのは、即ちこゝである。親友に對する愛は即ち發して怒となるの消息を曉つたならば、即ち一切衆生に對する愛の、如何に又怒となり憎となるかを悟るであらう。

吾等は歴史に於て、ユダヤ人の神が怒の神であるのを見て、酷薄であると考へ、眞言の大日如來が大忿怒明王とし現はるゝのを荒誕であると考へたこともある。ユダヤ人や眞言の人々が如何なる考を有つて居るかは、今問ふ必要がない。一切の萬物を造り出した神が怒の神であり、一切衆生を其の慈悲の光の内に包む如來が、大忿怒の相を現はすといふことが、吾等に如何なる教訓を與ふるかを味へば足りる。一切を愛する精神から凡ての世の紛々たる衆生を觀察して見よ、彼等は小利害小愛憎のために、或は闘爭し、或は比周し、我の内にも、人の内にも、只小なる區別のあるのを知つて、融通の愛あるを知らない。彼等が善と稱して賞め、惡と稱して貶し、或は可愛い、或は憎いといふも、凡に此の小我の差別妄見から割り出した迷の中の小善、小惡、小愛、小憎に過ぎない。此の有樣を見たならば、眞に彼等を愛し、彼等の精神をして大なる協同感應の内に遊ばしめようとする愛は、如何にしても彼等に痛棒を加へようとする怒とならざるを得ない。小差別の内に安んじて居る人間の間でこそ、善といひ惡といはるゝ小區別はつくであらうが、大なる達觀の眼から見れば、此の如き善は喜ぶに足らず、此の如き惡も憎むには足りない。凡ての物は愛すべきが故に憎むべきものとなる。キリストは、人の世の善惡を非認して絶對的に「判く勿れ」と命じた。小善惡の中にさまよつて居る小善のものが、他の小惡を見て彼を惡なりと判くが如きは、實に片腹いたきことである。且つ又善惡を超絶して、一切を自分の靈光の内に攝して了つた精神から見れば、凡ての人は皆罪人である、迷の衆生である、其の中の一人を善とし、其の中の一人を惡と判くが如きは、到底あり得ない事である。凡ての人を愛するから凡ての人を憎む、其の裁判は人間の根本的罪惡、根本的無明を斷ぜんとする大なる裁判である。此の大裁判は決して「判く勿れ」の精神と背叛するものではない、否同一源泉から出た眞の愛の兩面である。

凡そ闘といひ衝突といふは、一の精神が他の精神に抵抗するから生ずる。絶對の慈悲の眼から見れば、凡て融通神祕の波瀾たるに過ぎない。然るに其の波瀾の一つ〳〵が小我を張つて、根本の融通を感得しない。そこで根本の慈悲が其の上に加はつても、これに抵抗し、洋々の水の中に波の小我を沒することを肯じない。是に於て波瀾が生じ、衝突、爭闘が生ずる。即ち愛から生ずる憎といふのは、此の爭闘の發表に過ぎないのである。絶對の愛が相對の小我に及ぶとき、即ち憎となるのである。

議論が餘り空漠に馳せたやうであるが、再び卑近の例を示さう。身體の内に一つの腫物が生ずる、それが全體に痛を感ぜしむるのは何のためであるか。全體の調和が保たれたならば、即ち腫物が身體の一部に小我を張つて其の部分の血液の循環を阻め、其の部分の分泌を增進するといふことがなかつたならば、此の如き痛はなく、身體全體は互に相扶けて、いはゞ融合の愛が全體に行はれる。然るに一部分の小我のために此の調和が破れ、身體の生理的機能は、

其の一部分の變態を除くために、其の部分に多くの血液を送り、早く化膿せしめて、其の小我を潰爛せしめんとする。併し又他方から見るに、若し身體全體の調和融通がなかつたならば、腫物の疼は生じない。愛がなかつたならば、（三）憎怒は生じない。憎といひ怒といふは、畢竟小我を大なる愛の中に化膿せしめて、疼を生ぜしむるのと異なることはない。然らば人々が各其の小我を主張する此の現象世界に於て、如何にして此の怒憎の疼が生ぜずに居られるか。

今までは論點の便宜のために、絶對の愛から見た憎を述べた。絶對なる神の愛が即ち凡ての物と衝突を生ずる憎の原因であるならば、其の神の懷に入り、其の精神其の愛に幾分でも同化し得た精神があるならば、それはかく同化し得た限りに於て、神の愛を感得し、愛を感得し得ただけそれだけ、又憎を發表せざるを得ない。神を眞の父とし、其の父の下に兄弟の愛を實行するものは、浮世の假の父、假の兄弟に背かざるを得ない。否假の父、僞りの兄弟が、眞の父に對して背くから、其の限りに於ては之を憎まざるを得ない。父や兄弟を憎むといつたならば、世の倫理學者は又も不孝奬勵論だなどといつて驚くであらう。然り、身體髪膚を傷けざるを以て孝の始とし、名を後世に揚ぐゝる位を孝の終と心得て居る論者の目から見れば、これは大不孝に相違ない。併しながら、吾等は此の如き一時の小孝のために、永遠の大孝を棄つるを忍ぶことはできない。大なる愛を體得して、其の愛に依つて眞の父子の關係を永遠に結ばうとする吾等から見れば、此の如き小孝は即ち大不孝である。大なる愛を抱いて、而して假の父、僞の兄弟がこれを容れない、此の愛に抵抗する場合には、吾等は腫物を開切する痛を忍んで、大なる憎を發表しなければならぬ。此の憎は即ち大なる愛である。今父と兄弟とについていつたが、子に對し、夫婦朋友乃至一切人類に對して、亦同樣である。大なる愛が小なる我執愛憎と衝突する間は、其の愛は大なる憎として發表せざるを得ない。いづれの人も、根本的に其の罪惡と其の迷とに制せらるゝ以上は、これを破るために、愛は憎として彼等に現はれざるを得ない。憎と見ゆるのは、畢竟吾等衆生の無明罪惡の根本的迷妄の致さしむる所である。眞の深い憎は即ち眞の大なる愛であるのである。

無明の生存、罪惡の衆生、いづれの人も、其の數に溺れるものはない。然らば吾等の範圍に於ては、全く神の愛と合一して、凡ての人を愛し即ち憎み得るものは一人もない。一判く知れ—といふことは、即ち吾等人類の愛情に絶對の威權のないことを示した大格言である。一子をして其の親に背かしめ、妻をして其の夫に背かしむる—といふ其の親、其の夫といふのは、必ずしも其の詞の通り、自分とは別なる親や夫のみではない。いづれの人も、皆自分自身の中に、此の如き親、此の如き夫を有する事を刹那も忘れてはならぬ。自分の心の中で、愛の光に接し得るものは、即ち眞の我である。自分の心の中で、世間の權力に己れを屈せしめ、世間の利害に己れを溺れしむる僞の親、僞の夫はいづれの人にも存在する。これを忘れてはならぬ。親といひ、夫といふのが不倫であるといふならば、吾等は名目に拘泥しない、これを鬼といふも、魔といふも、サタンといふも可なり。己れの心の中に大なる愛を幾分でも感得し得たならば、其の愛に抵抗する或者が己れの中に發動するからして、吾等はそれと戰はなければならぬ、これに對して愛の憎を發表せざるを得ない。此の憎こそ即ち眞の道徳的習練である。世間の褒貶に恐れ、若しくは又他人の善惡を裁判し、

此の如くにして自ら道徳家を以て任ずるが如きは、殆んど滑稽の道徳といふべきものである。吾等の所謂道徳は、愛が即ち憎、憎が即ち愛である、神秘である。

## 五、道徳と宗教

神の御心、佛の御心、化醇の大法はこゝにあるなり、歸善の定數こゝにあるなり、大慈の光明は柔かに山村水郷を包めるなり、大悲の音樂は絶ゆる間も無く古往今來に亙れるなり、我は此の温暖き意義の中より生れたる子なり、神の子なり、佛の子なり、正眞の子なり、我と神佛とは血の相通へるなり、

幸田露伴——天うつ浪

...der Sohn ist das Herz in dem Vater, das aus allen Kräften des Vaters immer geboren wird, und des Vaters Kräfte wieder erleuchtet. .... Er ist ewig in dem Vater, und der Vater gebäret ihn von Ewigkeit zu Ewigkeit immerdar, und ist der Vater und der Sohn Ein Gott, gleiches Wesen in Kraft und Allmacht.

Jakob Böhme—Aurora, oder Morgenröthe im Aufgang. (p. 37)

自分自身に自分と交通し得る精神の根柢が、皆一つの大なる精神であることを體得し、大なる同情を以て此の大精神の中に生活し行動するのが、即ち吾等の道徳である。自分の利害や社會の都合などは、或る場合には、此の道徳を一般に人々の間に行はしむる助けとならないではないが、此の如き利害打算の道徳主義は、到底如何なる事情の下にも、又如何なる人をも動かし得る道徳の根柢とはなり得ない。即ち此の如き假道徳の行はれる世界は、此の世であるから、其の差別現象の世界に於て、或は家族、或は國家などの團體の力によつて、人々の道徳を進める機會を造り得るが、人々が此の外面の刺擊によつて道徳に進み得る、其の内面的根柢は、人の精神が他の精神と交通感應し得る、其の形而上的實在の力である。

一體、人間の精神は、常に現象的と實體的と、即ち差別と平等と、も一ついひ替へれば、小我と大我との二面を具へて居る。肉體の生存を維持し其の幸福を增進するために、人は自然に種々の肉慾を具へて居る。肉慾の滿足は、皆獨占的の性質を有つて、他を排するにあらずんば自分を滿足せしむる能はざる狀態に居る。此の除外例は、恐らくは只生殖慾のみであるが、生殖慾は自分一個の生存のために存在するものでなくして、種族の保存のために存在するから、他の肉慾の如く全く排他的ではない。併しこれとても、多くの人に取つては、全く個人的の快樂として意識せられ、さなくとも種族を單位として見れば、或は人種間の競爭、或は動物に對する人類の暴虐などに、其の結果を發表する。人類は、一面に此の如き排他自利の天性を有つて居るが、他方には又協同利他の天性を有つて、諸種の愛情同情として之を現はし、又それが膨脹擴大しては、此の現象世界に滿足せず、何か現象以上の實在界を求めようとする。此の天性は、即ち目に見える差別現象の中に、目に見えない永遠の實在を求めようとする神秘的傾向であつて、これが如何に美術や道徳に發表するかといふことは既に述べた所である。

兎に角、人は此の如き二面を有して居る。此の關係は、近來英米二國で殊に盛になつて居る精神研究(Psychical Research)の結果にも現はれてきて居る。此の研究の詳細は、別の機會に述べようが、要するに人の精神生活は、通常の意識に現はれたよりも廣い廣袤を有して居るといふことを明かにしたので、通常の場合には意識に現はれて來ない精神生活が、全く獨立とはいへないが、通常意識とは多少獨立の働

きを營み、此をいはゞ第二の精神生活が、大に通常意識の根柢を爲して居るといふことを知るに至つた。例へば詩想湧くが如しと、今まで吾等は譬喩の詞として用ひて居たのが、此の研究の結果に依れば、譬喩でない、事實となつて、詩人其の他天才の造り出すものは、多くは此の第二の精神の範圍で出來上つて、其の結果が恰も地中の水の地上に湧き出づるが如くに、通常意識に現はれ來るのである。此の研究の結果を應用して、サグゼッション(Suggestion)、催眠(Hypnotism)、隔感(Telepathy & Telesthesia)、自動感覺及運動(Sensory & motor Automatism)などの、今までは不思議の現象としてゐたものも、説明が出來、又これを醫療の上に應用して驚くべき結果をも得るやうになつた。

此の研究のことは別問題として、吾等の精神生活が、現と祕(意識の上で)との二面を有して居ることは到底爭ふべからざる事實である。此の二面は詩人の所謂現實と理想との衝突、道德では私慾と良心との爭ひ、或は又佛敎では煩惱と菩提と、キリスト敎では罪と神命との矛盾として説かれた。人の精神をして現實世界の生存に執着せしめ、それがために小なる我慾の罪惡と煩惱とに陥らしむるものは、即ち人性の現世的方面である。其の反對に、身は此の世に住みながら、心は現實以上の世界に逍遙し、其の境に於て大なる我の滿足を得しめるものは、即ち通常意識の根柢をなし、又人の精神をして同情交感せしむる根本の宇宙精神の一面の發表である。

吾等の道德は精神の神祕的交通なしには成立ち得ない。即ち凡ての別々に現はれて居る精神が、共通の源泉から出て居るから、此の交通が出來、而して此の交通が吾等の精神を支配し得る。肉體生存の此の世に現はれて、各「我が」「我が」と主張する我は、通常の意識には各獨立の我れ、即ち小我と見えるが、先きから屢々言つた如く、此の多數の小我が其の實一つ根柢の大我から出て居ることは、凡ての精神交通の事實に現はれて居る。人々が單に表面私慾に支配せらるゝ其の羈絆を離れ、其が我れの全部であるといふ考を棄てて、深く自分の心の奥を探り、其の奥から湧いて出る同情によつて、他の人の精神と交通することを勉め、愛情の光に依つて我と彼とを合せ見るならば、吾等の精神が、何か一つの根本から出て居るといふことを感ずるであらう。固より人々の性質境遇に從つて、其の人の精神が交通し得る範圍、即ち其の人の小我が自らを其の中に發見し得る大我の實表は、異なるであらう。此の範圍の異なるに從つて、道德や宗敎に異種の趣を呈するが、兎に角、此の大我なるものは、吾等の精神生活の實體であつて、道德に良心といひ、宗敎に神といふも、皆此の大我の見方、吾等の小我が如何に此の大我と關係交渉して生活するかの態度から生じた結果である。

此の見方によれば、道德と宗敎とは別のものでない、道德なき宗敎、宗敎なき道德は決して成立ち得ない。カントが、良心の聲ともいふべき無上命令を以て神の聲と爲し、道德に依つて神の存在を證明しようとしたのは、即ち此の點である。支那の道德が、俯仰天地に愧ぢざるを以て人の正道と見たのは、カントの宗敎と同一轍である。マヌの法典に、「汝が只己れのみありと思ふときにも、汝の心の中に最上の神ありて、無言の中にしかも注意を怠らずに、汝の行ふ凡ての善惡を監視せり。汝の心の中に住せる此の裁判官は、公明正大にして、少しも容赦する所なし」といつて居るのは、ポーロが、「吾等の良心には、神の法律が銘せられて居る。此の良心を其のまゝに發表するは、即ち神の

法律に從ふ所以で、神の裁判なるものは、即ち此の隱れたる良心の判きである」といつたのと全く同一の精神から出て居る。

かく論ずれは、此の宗教は所謂倫理的宗教と混同する憂がある。勿論先きに述べた如く、愛の神祕の道德は、大我なる大精神の根柢によつて成立つものであるから、同時に宗教である。其故、之を稱して倫理的宗教と名けても、又宗教的倫理と名けても差支ないわけである。然るに倫理的宗教を以て唯一眞正の宗教であると主張する人々は、多くは現世的道德を以て道德の至極と考へ、此の道德に合はない宗教は世道人心を害するといふことを氣に掛けて居る。それ故に、其の宗教なるものは人心の神祕的傾向を、即ち宗教の超世的天職を現世的道德に降伏せしめたものである。今改めて此の如き倫理的宗教を批評することを棄てゝ、直ちに吾等の道德即ち宗教の意味を明かにしよう。

先きに言つた如く、人の精神には小我と大我との二樣の發表作用を有つて居る。小我が己れを大我の中に沒して、精神の同情交通に依つて、他の精神と共に大我の中に優遊することができるやうにするのが、即ち宗教である。それ故に宗教で大我を現實に體得發表するのは我の精神に外ならぬ、併し此の場合の我は既に小我を沒した、若しくは少くとも其の小主張を支配し抑制し得た精神狀態に外ならぬ。それ故に宗教は、どうしても菩提の爲に煩惱を制御し、理想に依つて現實を解釋するものでなければならぬ。此の小我大我の區別を言ひ替へて、現象と實在との對比とすれば、宗教は實在を本位として現象を觀じ、又之を支配しなければならぬ。先きに美術の場合にも言つた如く、表象は客である、方便である、理想は主であり目的である。又道德で論じた如く、父子、夫婦等の愛情は、猶ほ一層大なる永遠なる愛情の一つの發れとして、其の大なる愛情に根據を据ゑるにあらずんば、其の小なる愛は、基本なき偏頗なる愛情となつて、却つて相愛して居る雙方の精神を低くするものである。然らば精神交通の愛情を最大の根柢から築き上げようとする道德即ち宗教の理想は、決して現世の利害や現象の束縛に制せらるべきものでない。善惡罪福を超越し、世の是非正邪を不二の一門に收めて、其の最高たる理想の光に依つて、現世を照し、其の光明を基本として人生を指導すべき任務を有つて居る。此の最高の覺悟なしには、道德も永遠の根柢を失つて了ふ、宗教も其の本分を失ふ。それ故に倫理的宗教を以て宗教の本分を否定するならば、それは同時に道德と宗教との永遠の根柢を奪ふものである。

宗教の心髓は、一言にして盡くせば、大我即ち一切精神の根柢を吾等の精神に體得することである。併しながら、如何に此の大我を體得するかの工合に至つては、人々の精神狀態に從つて異ならざるを得ない。或るものは小我と大我との對比を峻酷に見て、從つて絕對的に罪惡の若しくは又迷の小我を迫害し、而して他方、極めて威嚴ある神を仰ぎ、其の神を怒の神、嚴罰の主と見做す宗教もある。又或るものは、現象世界の我は、我の實體でないといふことを認むるに至つては、他に讓らないが、而も愛に依つて其の大精神を感得し、愛に依つて、若しくは又頓悟に依つて、實在と融合し得るものは、即ち吾等の此の生を享けたる心であるといふことを見るから、何處までも自分の心を基にして、大我に接しようとする。ボーロが「汝等は亦靈の宮である」といつたのは、即ち此の意味である。古今東西の宗教は其の種類甚だ多いが、極肝要なる差別に依つて分類すれば、大體此の二つの特徵に歸する。一つは畏れの宗教、一つは愛の宗教である。樗牛が、「人を脫して神となる、己

れの小さきを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大いなるを信ずる所以である—といつたのは、簡單に此の二大別を言ひ現はして居る。

固より此の二つの特徴は、必ずしも常に相分れてのみは居ない。例へば、古印度の哲學や原始佛教では、現象世界を絶對の迷と觀ずる、而も吾等の精神は其の中に直ちに實在の大我を實現し、我即神となり得るといふ教を説いて、其の方法を禪定、瑜伽に求めた。之に反してユダヤ教では、吾等の肉體も精神も、共に元は神の形に似せて造られた、即ち神的であるといふことは知りながら、吾等は既に其の元の狀態から墮落して罪惡に染つて居ることを強く感じ、神に對する正義に依つて罪の償ひをなさんと勉めた。それから出たキリスト教に至つては、吾等は罪人であるといふことを第一の根本としながら、而もそれと同時に神を父として、自ら其の子と感ずる愛情に依つて、神と父子合體ができると教へた。此等の教は、各其の當時の需要や因緣に依つて種々複雜はして居るが、要するに先きにいつた人間の生命、人間の精神に相反對する二面の存在することを深く意識して、二者の背反を融和しようとしたもので、宗教の天職は此の融和に存する。

宗教が如何に此の融和を試みたかといふことの研究は、續いて論ずるが、それに先だちて、尙少し諸種の宗教が如何に此の二面の對比を觀じて居るかを明かにしよう。佛教はインド古代宗教の一般の特徴と同じく、個人精神が迷の狀態に止つて小我に執着する原因を、知の方面から見て、無明が即ち一切の迷の原因であるとする。それ故に、一旦我は畢竟無實性の迷であるといふ悟りを得れば、其處に即ち凡ての我執を離れ迷妄を去つた大我眞如が現ずる。佛教は哲學思想勃興の時勢に生れたから、此の如く大我の眞相を小我から隱す障壁を無明として、知の方面から見たが、其の實、無明なるものは我に執着するの無明である。其の無明を打破するのは、悟即ち智慧ではあるが、其の智慧なるものは、通常の意味での知即ち知覺や判斷の知ではなくして、根本から我執を打破する知である。而して其の我なるものの本性は、貪瞋癡の働きに止まるものであるから、今の吾等の言ひ方にすれば、即ち主我の慾である。之を打破するものは、又それだけの力でなければならぬとして見れば、無明を破る知なるものは、即ち一つの力でなければならぬ。此の力が何者であるかは後に論じようが、かく見てくると、佛教が小我大我の背反を見る見方は、亦キリスト教と同じといはなければならぬ。

キリストは、吾等が至誠、神を父として愛し、其の子として父の全きが如く全かるべしと教へた、其の子である吾等が、何故に亦いづれの時に、神なる父に背いたか、キリストは之を問はず。兎に角吾等が神の子であるといふ意識を失つて、神の惠の中に住みながら、之に賴り之に己れを任せることをしない、其の小我執着は即ち吾等の罪であることを教へて、此の罪から逃れるには、全く人慾を棄てて、アバ父よといふ無垢なる無邪氣なる愛の信仰に歸らなければならぬことを、自分自身の實例で示した。キリストの福音は、全く意志の方面、吾等の根本的性格の方面から手を着けて、其の變轉によつて新しき生命を與へんとしたものである。ポールが智慧の教を排斥して、信仰の道を說いたのはこれが爲である。併しながらキリストの福音が悟智慧の方面を缺いて居るといふのは大なる誤である。キリストは、吾等の心が小兒の如くならざるべからざるを教へて、心の貧しきものは即ち天國に入り得ると教へたが、此の如く我が心を空虛にし、小兒の如くになるのは、即

ち大なる神の智慧の光が吾等の心を照し、小我執の迷霧を追拂ふためである。神は力と光榮との神である、而して吾等に神の子の福音を傳ふるキリストは、自ら宣言して、吾は光なり、眞理なり、道なりといつた。即ち吾等が人慾の執着罪惡を棄て、愛と信とに依つて天父に合一し得る、其の道を照すものは、矢張智慧である。神の知は愛の力と離れず、信は光を與へ、愛は即ち智慧を活かして來る力である。

此の如く見れば、佛教とキリスト教とは、人性の中に同じ二つの方面を認め、同じ理想によりて、此の二つの背反を融合しようとしたのである。

其の融合の方法に至つては、佛教では、佛陀は即ち無明を拂ひ盡し、死魔の縛を脫して、大我に合一した人格であることを承認し、信仰し、此の依信歸依によつて、吾等も亦同じく佛陀となるべきである、佛陀の人格は、即ち吾等も亦同じ境涯に至り得るとの保證を與へ、これと同時に又これが導きを與へる人天師である、世尊である。此の佛陀の人格は、一方からいへば、普通の人物である。肉體を有し、我慾無明の生活をして居た人が、内外の因縁によつて發心得道して、佛陀覺者となつたのである。併しながら此の如く一の人格が、人間から佛となり得るといふことは、其の人の根本的性格に、一切の迷を離れて、眞理の本源、智慧の本體である本性を具有して居らなければ、あり得ない。即ち此の點から云へば、佛陀の人格は久遠實成の佛である、無始無終の大我法身である。

一人の人格が、一方では人間、一方では神の二方面を同時に具へ得るのは、固より神秘であるが、併し此の二面は凡ての人の本性に具つて居る性質であつて、佛陀の人格が神秘であるならば、吾等の性格も亦神秘である。「佛も元は凡夫なり」は、人間の側から見た此の神秘である。「凡夫も終には佛なり」は此の同じ神秘を佛の方から見たものである。佛陀の人格は、此の二面を具へた神秘的人格で、吾等が此の人格によつて成佛得道の保證を與へられ、模範を示され、而して此の佛陀の人格を如來として絶對に信仰するならば、其の吾等の信仰の中には、直ちに佛其ものが現はれて來るのである。佛は即ち吾等の中に存する本來原有の如來である。所謂「正信二於如來一、決定不二傾動一……於二佛心一淸淨、成二就於正見一……不空而自活」である。此の最後の句(パーリでいへば amogham tassa jivitam)で見れば、日本の佛教者が小乘として貶して居る原始佛教徒でも、如何に佛を如來として信仰して、此の人格的依信の神秘的合一に依つて大なる知見に達して居たかを見るに足る。

佛の人格が、此の二面の神秘を具へて居ることを信じ得るならば、其の信は、亦キリストの神人二面の人格に對しても、同じく發表し得なければならぬ。ヤソに現はれたるキリストが神であるとか、ないとかいふ議論によつて、キリスト教の中に異論を生ずるのは、殆んど無意義の論爭である。段々明かにし來つた神秘の信仰が、宗教の生命、精神の實力であるならば、而して吾等の中にも神人二面のあることを明かにし得たならば、吾等は佛陀の人格に於て此の二面を認めたが如く、キリストの人格の中に何故に此の二面を發見し得ないか。

キリストは自ら呼んで「人の子」と稱した。ユダヤ國民の豫言的希望を身に現はし、神の使として世を救ふといふ自信を有し、これが爲には喜んで死に就いたキリストが、時には「神の子」と自ら稱すると同時に、好んで「人の子」を以て自ら任じたのは、何の故であるか。「人の子」とは、彼の人の子、此の人の子といふが如く、即ち人といふ意味である。先きにナポレオンが「人」

といふ名を受けたことを述べたが、キリストは自ら任じて「人」と稱し、人の模表として世に現はれた。人の本性は、ユダヤの宗教によれば、罪人である、又當時の東方の哲學思想によれば、靈に對して肉が人の本體である。是故に人は、此の肉の束縛から又罪の呪詛から救はれなければならぬ運命を有つて居る。既に救はれるといふならば、罪と肉との人は、又罪を離れて愛に入り、肉を脱して靈に化する本性を具有して居なければならぬ。罪と肉との人間は現在の我である、愛と靈との人は理想の我である。此の理想が現實になり、救が事實として現はれ得るや否や、此の問題の爲に、幾千年の人心は苦悶した。或はユダヤの豫言者となり、或はギリシャの哲學者となり、此の問題の解釋を與へようとした人は續出したが、又其の解釋は中々の熱情と非常の智慧とを以て試みられたが、未だ曾て一人の我は「人」なりといふ自信を貫いて、「人」の標本を生命で現はし、救の福音を身讀した人は一人もなかつた。然るにキリストは、即ち人の子の體現によつて、人は亦神の子たり得るといふ事實を示した。ゲトサメネに於ける彼の最後の祈禱は、即ち人の子が、今までの罪と肉との生命の終を告げた祈禱である。而して彼が生死を貫いて教へた、汝等我が愛に居れ、凡て父の有ち給ふ所の物は即ち我が物なりといへば、神の子として彼が凡て彼を信ずるものに傳へた、父子一體、愛の融合の福音である。神の子として彼が人間に傳へた、最も近く、又最も大なる救は、即ち彼の生死に現はれた愛の合一である。

彼は誠に深く人の本性を自覺した、それ故に彼は神の子となつたのである。彼は par excellence に「人」であつたが故に、又 par excellence に「神の子」であつた。一體、人は多くは、罪と肉との生活の内に鬱々として、醉生夢死の間に自らを知らない。若し人にして深く自らに就て自覺を喚起するならば、第一には罪と肉との生命に對する不滿足を感じ、此の不滿足の感を深くするならば、己れの我は今の肉體の我のみでない、其の肉は即ち「靈の宮」で、其の靈の中には、凡ての精神が合一する愛の生活が現はれ得ることを自覺する。前にいつた如く、道德なるものは、つまり此の愛の發表であるが、其の萬人の精神の根柢に立入つて、其の愛が一つの人格的生活を有つといふことを見たならば、此の根柢は即ち吾等の愛の源泉である。吾等精神の父である。

世間の哲學者には、此の根柢を形而上的主義として、而も其の人格性を容れない人が多いやうであるが、此の形而上的主義と吾等との間には、如何にして如何なる精神交通が成り立ち得ようか。吾等も固より此の形而上的主義が吾等と同じやうな感情や思想を抱いて居る人格であるとは主張しない。併しながら、吾等は人の子である、人は人と人との間に行はれる愛、即ち人格の合一から出發して、其の根柢の源泉を仰ぎ求め、其の存在を設定し、而して此と交通しようと勉むるのである。吾等の此の最上實在に對する關係は愛である、即ち吾等の人格を捧げて之に歸入するのである。されば其の實在が、それ自らにしては如何なる屬性を有つて居るかは、吾等の關せざる所である。吾等が愛を以て之に對し、彼れ亦愛を以て之に答ふる限りは、其の關係は人格的である。

是は餘論として、兎に角キリストは、人の子の自覺によつて、神の子たる實を現はした。彼は人であつたが故に、即ち其の生死によつて救はるゝ人を實現したから、之に依つて亦救ふ神の力を現はした。眞に救はるゝものの標本は、即ち同時に救の力である。キリストは是故に眞の「人」で、同時に眞の神である。神人同性は單に宗義でなくして、活きた力である。

煩悩即菩提の教説は、佛教に於いては随分宗論のために斥ぱれた。それと同じくキリストの生死に現はれた神人同性の福音は、キリスト教徒と稱する人々の中でも排斥せらるゝ不幸に陥つて居る。人が苟くも人生の道徳に就いて其の根柢の神秘を考へ、人性の中に現はれて居る神秘を自覺するならば、「一人即神」の宗教に到達することは容易であらう。

## 六、宗教と人生

Πατηρ ἡμων ὁ ἐν τοις οὐρανοις.....
ὁτι σου ἐστιν ἡ βασιλεια και ἡ δυναμις και ἡ
δοξα εἰς τους αἰωνας.
Matt. VI. 9—12.

「一人即神」の福音が、明かに一人の人間の生命に現はれて、吾等に神を父として此に合一することの出來る保證を與へた、一人の子は、天國を吾等の間に持ち來らし、如來は寂光の土を此の土に現はした。吾等人間を罪人として叱責したキリストが、「天國は汝等の間にあり」と教へ、此の土は穢土である、吾等は凡夫である事を痛嘆した佛陀が、其の如實の正覺身を現はして常に我等の心に住すといふ事、是皆矛盾の如く見ゆる神秘である。此の如き矛盾を人々に知らしむるばかりでなく、人々の生命に體得せしむるのが宗教の天職である。此の矛盾が自己人格の中に矛盾でなく、此の神秘が其の人の生命となつた人が即ち宗教の人である。

自分の精神に此の神秘的合一を體得した状態を、吾等は信と名ける。即ち尤も廣い又尤も深い意味での信頼である。凡そ信といふは、自分と交通し得る他の精神の中に、己れと同情同感するものがあるを感じて、其の交感呼應の中に、無限の喜と安心とを感ずる状態である。商業の取引などに稱する信用といふのも、矢張此の信が局部的に發表したもので、即ち契約の對手兩方が、其の約束を守るといふ點に於て精神交通し、それに依つて契約履行に關する信頼を對手に置くことが出來る状態である。此の理を推めていへば、朋友間の交情、夫婦の間の愛、此等は各々其の動機を異にしても、而も互に對手の人格精神に己れと同じものの存在するのを感じ、此の感じの呼應に依つて、或は浮世の浪にゆられざる交友となり、或は生死を共にして悔いない戀人となる。此等の愛情は、人格の融合、調和、交感、其の信である。

是に此等世間的の愛情に於ては、己れの中に發見し得る對手の人格は人間的人格で、尚彼我の區別を存して居る。若し此等の愛情に、全く彼我の別を容れないやうになつたならば、其の愛は絶對と稱し得るが、此の如き絶對の愛は人間の間には十分に發表することが出來ぬ。只此等の愛の尤も廣く深く、又尤も己れに直接なるものが即ち宗教の信である。何となれば、宗教の心髄は、先きに云つた如く、神人の合一である。又其の神は、或る宗教では我以外の外物の如く教へられて居るけれども、佛教やキリスト教に於ては、其の神は即ち吾等精神の純清なる本體である。即ち此等の宗教では、若し理想通りに吾等の神に對する信即ち愛を現實にするならば、其の愛は既に彼我の別を絶して居る、其の信は吾等の精神が本源の故郷に歸るのである。併しながら是は理想の状態で、吾等が尚人間である以上は、神に對して尚多少對手といふ關係を保つ外ない。「一人即神」「煩悩即菩提」の理想を完全に實現した神人或は佛陀に在つては、其の精神が即ち神と同體である、既に本源の故郷に住居して居る精神である。彼は即ち直ちに永遠のロゴスである、此の土は即ち本有

の淨土である。併し此の狀態に至らない吾等は、御光に背けるロゴスである、彼方に本有の淨土を故鄕として望まなければならぬ狀態に居る。それ故に吾等の信は、矢張神を父として愛し、其の神の國を故鄕として戀ひ慕ふ信であるより外に仕方がない。

　此の信が出來るだけ遠大に、理想に近づける方法を敎へ、之に從つて精神を修練せしむるのが宗敎の職務である。或は禪定の床の上に等流三昧に入つて、佛智に合一せんとする人もあり、或は彌陀の名號を唱へて、之に依つて攝取の光明に入らしめようとする敎もあり、或は天地山川の壯麗なる自然の顏容に、神の智慧と愛とを望み見る人もあれば、或は又敎會の儀式に依つて神聖にせられたるパンや酒に依つて、救主の救に與り得るとする敎もある。夫等のいづれが眞であるか、いづれが正しいか、今論ずる必要はない、又一人の意見に依つて定め得るものでない。人各々其の性格の赴く所、精神の需用する所に從つて、已れに適したものを取るべきである。併しながら、茲に一つ、吾等有限なる精神が信に進むに最も必要なる、又恐らくは萬人共有なる條件がある。それは、佛陀なりキリストなり、若しくは其の他の聖人なり、其の人の人格が神人であると信ぜらるゝものに、絕待の信を注ぐことである。

　今茲には、いづれの聖人が果して吾等の信を捧ぐべき神人であるといふことを研究することを避けて置く、是も恐らくは人々の需要に從つて異なるから。兎に角、佛陀やキリストの如き神人は、其の人たる生命の中に神たる實を現はした。彼等の一生は、人としては吾等人間と同じ肉體を有し、同じ煩悶と健闘とを遂げた、それ故に吾等は此の人に同情し、此の人を尊敬することに依つて、人たる吾等の生命に大なる力を與へられる。所行讃に描かれた如き佛陀の出家は、世間の五慾と闘ひ、小我の執着を斷ずべき吾等の精神的修養の好模範である。福音傳に現はれて居るキリストの、受洗より死に至る間の勇奮意氣、特に其の死に先だつ數日間の決心と煩悶とは、吾等人間が肉體の罪から逃れ出でて、天父の慈愛に投ずべき天命と其の間に起る生活執着に對する勇奮苦悶の激烈なる標本である。佛陀が城を出る時に、最愛の妻と子との眠り姿を眺めて後髪引かるゝ其の情を斷じた一場の悲劇、キリストが全身に滴る汗を流しつゝ、此の肉體の明日は殺さるゝことを悲しみつゝ、而も凡て父の御心の如く吾身の終りを遂げんと祈つた、其の一夜の惱みの歴史、此等は純粹に人間的に吾等の心情の奧を叩き、吾等の肺腑に徹する人間の歴史である。然るに此の「人」は其の「人」たることに依つて即ち神たる實を現はして靈の復活を示した。佛陀は、吾れ無上道を得たりといふ自覺によつて、今後復生死に漂流しない歸滅の敎を傳へ、弟子等の心內に不動の信、不滅の法身如來を殘して肉體の生を去つた。彼の遺弟が「如來滅すと雖も法身永へに存す」といつたのが迷でなくば、佛陀が五十年の敎化は、即ち彼の人格の神的發表であつた。キリストに在つては、彼が人の子、即ち神の子の自覺を貫いて、生命を棄てたのみならず、彼の靈は明かに弟子等の眼前に、又彼等の心靈の中に復活して、彼は即ち無始以來神と倶に在るロゴスなることを示した。彼は肉に依ればダビデの裔で、靈に依れば即ち神である。

　此の二人の神人たる實を示した歴史には、各々其の特徴はあるが、彼等の人格が人たることに於て、吾等の尤も同情すべき人であるのみならず、其の人と同じく、吾等も亦人であつて同時に即ち神である（若しくは神となり得る、若しくはならなければならぬ）ことを眼前に示した點から云へば、吾等の敎主である、救主である。

吾等がまだ人間である以上は、彼我を絶した愛に依つて神に合一することは至難である。それ故に、此の如き愛を現實にした神人があれば、其の人格に對して至誠至信の歸敬を捧げて、其の人に同情交感し、己れを其の人の人格の中に沒することに依つて、神に似んことを勉めなければならぬ。キリストは嘗て天を仰いで祈つた。「父よ爾は吾が中にあり、吾れ亦爾の中に住す、此の如く凡ての人も吾等の中にて一にならしめよ」。佛陀は將に其の悟得の眞理を說いて、幽冥の中に迷へる衆生の迷を解かんとするに方つて、自ら誓つた。「我が成ずる所の妙法は一切の暗を除き、我が法門は寂靜にして世間の惡を離る。一切衆生をして此の法界に入つて、無苦無漏、佛の普淨眼を得しめん」。即ち此等の神人は、それと精神を一にする衆生が、凡て彼等自身と合一し、凡ての罪と迷とを脫し得ると確信した。彼等の說いた教理がどうであるの、からであるのといふ批評もあるが、吾等は口舌の眞理よりも、彼等の神人たる人格に歸敬するのである。是が即ち信である。直ちに神と合一する代りに、神人に信頼して、彼と同化せんとするのである。此の信は吾等をして此の世の生活を完くせしめ、彼岸の光明に入らしむる所以の力である。

先きにいつた道德の根柢なる愛も、又美術の本體である神祕も、此の信に依つて淨められ、完くせられたる精神を有つにあらずんば、永遠の活動を爲し得ない。絕待の愛の狀態に入つて、吾等が如何になるべきかは、未だ此の世界の吾等には現はれない。併しながら吾等は神人に對する人間的の同情、又神としての信仰に依つて、吾等も亦彼の神人の如く、神に似んことを知る。是れが即ち人生をして天國たらしむる愛と信と望との源泉である。

信と愛と是れ二つの物ではない。精神の交感道交から出た人格の融合が愛であるならば、神人に對する愛が即ち信で、此の信に依つて吾等は遂に神に似、父と一になれるといふ確かな見込がつけば、即ちこれが望である。神を父とすることに依つて一切の人類を同胞とし、同一佛性海の内に一切衆生を同一波瀾と見る大仁慈が、愛の最大なるものであるならば、此の愛は即ち、吾等が神の子たり得、又一佛性海の中に無漏の佛果を達し得るといふ確かな望に依つて養成せらるゝものでなければならぬ。而して此の望は、即ち佛なり、キリストなりの神人を信ずる、其の信に依つて保證せられ、又實現せられる。それ故に信と愛と望とはつまり三にして一である。宗教が人生に與ふる最大の又唯一の賜は、此の三一の德である。

人の生活、社會の組織、文明の發達、いづれも此の三一の基礎なしには圓滿の發達を遂げ得ない。人は宗教的の信なしにも生活し得る、併しながら信なければ大なる望もない、大なる愛も大なる憎も發し得ない。此の如き人は一日一日の幸福を逐うて奔り、一時々々の利害を打算して、利巧なる世渡りをなし得て、功利的道德の善人たり得るとも、其の小なる望は多くの場合に於て失望に終り、其の小なる愛は、變轉常操なき愛憎に迷はされ、遂に世間の波瀾の中に葬り去られる運命を有つて居る。

一個人の上のみならず、社會國家の運命は、今までの人間の歷史が示す如く、皆此の如き運命に葬り去られた。領内に日輪沒することなき大帝國も、世界の永遠なる工場といはるゝ國も、そが依つて立つ所の理想にして、單に威武を張るが爲、又商利を攫取するがためのみならば、此の如き國は矢張歷史の上にロマ帝國やチャールス五世の帝國と同一の刻印を押されるべきものである。今の帝國主義の人々は、植民と商業との利益線を擴張する事のみを以て、

凡ての國家の存在の理想目的と信じて居るが、彼等は中世紀の諸侯單位の國家が、終に彼等の間の利益競爭のために滅され、近くはドイツやフランスが其の過大の植民政策の弊に苦み、內部の破綻を顧慮せざるを得ない狀態に居る事實を、何と觀察するか。人は米國が其の勢力範圍を太平洋の四邊に廣げるのを見て、其の國勢の盛なるを稱するが、其の偉大なる國勢は、抑々如何なる宗教的平民主義のニューイングランド移住民の祖先に依つて養はれたるを知るか。或は又スヰスの小國が國際場裡に雄飛しないのを見て、彼の國民の氣力に乏しいことを推量した、驚くべき賢明なる日本の國家主義論者は、彼の小國民が如何に犯すべからざる威嚴を以て四邊に臨みつゝあるか、又それのみならず、彼の國の二十一のカントンが各々其の自治獨立の太平に浴しつゝ、中には技藝學術の文明を開發しつゝあるかを看過したものである。國家は畢竟個人と同じく、それ自身存在の權利を有つて居る、併しながら其の存在の權利は、理想の根據なしには到底持續し得るものでない。其の市民の各々が其の德を完うし、能く同胞と愛の結合を爲し、而して此の結合に依つて、理想ある國家の天職を遂げようとする自覺と勇氣とを有するにあらずんば、國家の存在は不可能である、空夢である。

十九世紀、二十世紀の文明は、科學の文明である。科學思想が一方では國家の萬能を擁護し、一方では利用厚生の道を與へて、其の結果、商工競爭の世となした。吾輩は敢て直ちに此の文明を呪詛しない。只此の如き文明の子は、今や人生精神上の基礎を忘れ、國家の爲にを名として、個人を迫害して顧みず、商工利益の爲には修養練達を妨害し、其極今や文明の子等自らが其の文明の弊に苦しめられつゝあるのを見ては、默視する事が出來ない。併し文明の弊、科學萬能の迷夢については、前までに論議した事もあり、今一々之を數へ立てるに及ばぬ。吾等は弊を論じて、迷の中にさ迷へる者を覺ますを勉むるよりも、先づ此を渦流の中から救ふ繩を與へなければならぬ。「繩みじかくしては深泉にいたり難く、翅よわくしては大虛にかけることなし。」而して此の長い繩、此の強い翅は實に宗教の信である。一貫の理想に立ち、人心の神祕に基いた信と愛と望とである。

宗教は、神人を信ずる事に依つて、父なる神に歸入せしむる。神が父ならば、神人は吾等の兄である。而して此の父の愛を吾等に體得せしめ、又父の[illegible]に依つて[illegible]して信と愛と望との路に歩ましむるものは、共同の母なる教會である。父の靈を吾等に傳へ、兄なる神人の「人の子」神の子」の深刻なる一生を吾等の前に現前せしめ、此に依つて教會の世間に實效を與ふるものは、即ち吾等の姉なる美術である。

此の理會には必ずしも固着する要はない。が超世の威嚴ある父が直ちに我等の信と愛との對手となり難いのを、兄なる神人が其の間に立つて救の保證を與へてくれる如く、此の信と愛との擁護者となり監督となるものが地上に存在しなければ、宗教は人生に實效を呈し得ない。而して此之を吾等の母といふは不當ではない。而して此の如き母は、萬邦萬民の上に立つて、吾等の精神の監導者、又救の實行者たるべき教會でなければならぬ。今の世に、國教だとか公認教だとか云つて、教會を國家の奴婢となし、天國の鍵、濟度の法輪を地上の國家、利害競爭の國家に託しようとする者があるが、彼等は宗教家の天分を自らで棄てた吾が身知らずの不埒者、否宗教の大敵である。之はさて措き、今の世に吾等の理想の教會を建設し得るか、若しくは又何れの現在教會に此の理想を託すべきか、此等の論議は之を他日に讓らう。兎に角、宗教の神

祕を人生に實現する司管者は萬邦の上に立てる、國家民族を超えたる教會、神聖なる教會でなければならぬ。

此の教會の助けをなして人生に神祕の甘露を雨らすべきものは、即ち美術である。美術が如何に吾等の精神をして神祕の交通に入らしむるの易行道であるかは、已に之を論究した。特に吾等の宗教は神人の信仰を本とするが故に、神人の一生に現はれた「人の子」「人天師」の願ひ、惱み、戰ひ、勇氣等の深刻なる題目は、最もよく藝術によつて吾等に傳へられ、吾等を感動する力をもつてゐる。佛教に於ける所行讃の如き、西北印度の佛教彫刻の如き、キリスト教に於ける十四世紀の信仰畫の如き、ブラームスやバッハの音樂の如き、皆是れ神人の精靈を吾等に與ふる藝術で、此等の藝術を除いたなら、佛陀やキリストの人格が吾等に與ふる感化は到底其の半を減ぜざるを得なかつたであらう。假令又直接に神人の精神を表はし、教會の教化を助くるのでなくとも、藝術は人をして身は塵寰に居りながら、靈界の呼吸に接せしむる超世的魔力を有する利器であるから、其によりて人心を刷新し清洗する力の偉大なる事は云ふまでもない。ノヴァリスが歌つた、

吾等の生命は安立を得て永久の生に進み行く、内面の熱によりて擴められて吾等の心は清まる。星の光は流れて生命の金色なる酒となる、吾等は之を嘗めて輝く星となる。

愛は蒔かれたり、離るゝ事はない、生命は無限の海の如くに到る所に浪だつ、妙樂の夜のみ、永久の詩のみ（吾等の生命である）。吾等總てが仰ぎ見る太陽は、即ち神の顏容である。

詩、音樂、造形美術は即ち此の如き生命の酒である。此の酒は吾等に愛を與へる、光を與へ又破られぬ夜の樂みの中に吾等を融合する。吾等の宗教は此の如き父と兄とに力を得、此の力に依つて世と戰ひ得る。吾等の宗教は此の如き母と姉との慈みに浴してゐる、此の慈光に依つて世を攝せなければならぬ。根本の信にして確立したならば、根柢の活動機關を作り得たならば、餘事は破竹の勢である。慈善事業とか、宗教と教育との關係とか、教會と國家との關係とか、問題も困難も自らにして解決する。歸する所は、吾等は自ら吾等精神の神祕を洞觀して、其に依つて大なる精神の根柢に入るにある。

Getrost, das Leben schreitet
Zum ew'gen Leben hin
Von innrer Gluth geweitet
Verklärt sich unser Sinn.
Die Sternwelt wird zerfliessen
Zum goldnen Lebenswein,
Wir werden sie geniessen
Und lichte Sterne sein.

Die Lieb' ist freigegeben
Und keine Trennung mehr
Es wogt das volle Leben
Wie ein unendlich Meer.
Nur eine Nacht der Wanne,
Ein ewiges Gedicht!
Und unser Aller Sonne
Ist Gottes Angesicht.

— Novalis —

# ゴットハルトの雪

## 四十一　三四日五日

[illegible]の山上の

[illegible]

[illegible]、雪の[illegible]です[illegible]す。

ツェーリヒを立つたのは朝の十時、[illegible]に曇つて居たが、ツェーリヒ湖畔の山々は遙に[illegible]上に遠ざかつて見える。[illegible]日見たこ[illegible][illegible]の[illegible]に[illegible]て[illegible]へに上る。[illegible]る、ここにも[illegible]草に[illegible]した[illegible]その[illegible]に緑色の[illegible]の家。ツェーリヒの湖畔は[illegible]を一つぬけて[illegible]トンネルを[illegible]ながら、下の方にも[illegible]に[illegible]を[illegible]に上る時に[illegible]土地、天気がよければ、右にはリギの峰、その[illegible]、[illegible]にも[illegible]を隔ててミーテンの尖つた岩山が見えるのであるが、今日は曇つて、[illegible]つの湖水の水面が[illegible]ここに[illegible]岸に出る。湖水の水は底の知れない様に深碧の色をなして、聳つた様な山々の間に死んだ様に湛へてゐる。此の湖水を見ればテルの[illegible]話を思ひ出す。此の湖水のぐるりに住んだ強い[illegible]人民の[illegible]で[illegible]、この[illegible]たのである。[illegible]の[illegible]につきる處はフルエーレンの町、[illegible]にこの湖水を離れ、この[illegible]でテルの[illegible]であつたといふアルトドルフに[illegible]つた[illegible]される。それから十一月に[illegible]の方に行つて見たアルトドルフの[illegible]も見える。汽車は[illegible]川に[illegible]を行く。その間々の間の野原には草が霜枯もせずに青々として、その中に黄色の[illegible]が咲き亂れてゐる。両側の山々の少し上には雪が残つてゐるばかりでなく、[illegible]と見える[illegible]、[illegible]は[illegible]

[illegible]には[illegible]、
[illegible]、
冬と春との行きかひに
[illegible]

進むに[illegible]の山は[illegible]、[illegible]に[illegible]重つて突き出てゐる山角の頂は雲にかくれ、雲の中から山を傳うて落ちる瀧の處々である のが、[illegible]、天上から落ちる様に見える。[illegible]の[illegible]の中にも[illegible]、[illegible]水がとけ初めたのであらう。

[illegible]、アルプスの白雪とけそめて、
[illegible]にいくすじも[illegible]たき。

山を上るに從つて雲に近く、雲と見たのは皆降る雪で、大曲りのトンネルを出た八百メートルの處より上は四方銀世界。その雲のはれ間には又[illegible]の[illegible]に[illegible]つた[illegible]や、なだれ落ちた雪が見える。[illegible]いで見て人をつくかと思ふ峰の上にも亦雲霧の間から峰が重る。

仰ぎ見て、空ゆおりしと見し峰の
上になほ峰、雲の間に見ゆ。

仰いでは雲間の白雪の峰、俯しては雪なだれの落ちこんだ谷水。少し前に通つた處は忽ちに

下に見、千百メートルのゲシネン(Göschnen)の村に着いた。こゝで皆が食堂に入つて中食をする。今日はルガノまで行くつもりであつたが、食堂からこの村の四方の雪を見、先年この村に留りかけてよした遺憾を思ひ出し、一晩こゝに泊るにきめて、食事を終つて、荷物を運ばせ、このゲシネンホテルに着いた。先年汽車の待ち合はせに中食した覺えのある家、覺えはこちらにあるのみと思ひの外、此のホテルの番頭で太つたぢいさんが來て、「あなたは前に一度此處へお出でになつた事がありませう」といふ。よく覺えてゐるに驚いたが、それもその筈、日本人のめつたに來た事のない處故、日本人が前に來て、山上りを勸めたにしたかつたとでも覺えて居たのであらう。今日は山を上るかと問ふから、「勿論だ、一つそりを命じてくれ」といつて部屋を定めて一先づ荷物を解く。スイス人の特徴のやさしい眼(同じくドイツ語の人民でも、まるで目つきがドイツ人と違ふ)のボイが來て、直ぐにストーヴに火を焚いてくれる。室の内には火のパチ〳〵燃える音、外には雪の中に何の音もない。暫くして橇の馬の首につけた鈴の音がきこえる。下に降りると橇が待つてゐる。三時に宿を出て橇で山を上る。少しの事で雪は一層深く、兩方の山は高く削つた樣に聳つ。大分雲も上にあがつて、頂上は見えぬが、山の崖が雲間に見え隱れして、山は晴天で見たよりも高く大きく又險しく見える。雪が集つておちかかつた處には岩が全く削られて雪の谷になり、その間々には雪に壞されない岩山が立つ。その岩の面に氷柱が劍の如く下がる。

　雨や雪凌ぎて千年、危くも
　　つらゝかゝれる岩のそばたつ。

上るに從つてこの景色は愈嶮岨になり、雪は深くなるばかり、追風ではあるが雪風の寒いのに吹かれて、外套を頸に纏うて行く。馭者は平氣に外套もなく、一枚の上衣だけでゐる。寒くはないかといふと、雪の中で育つたから雪は寒くないといふ。夏の山路の面白い事、それからなだれの落ちかゝつた處に來てはなだれの話をする。自分も一度なだれに埋つたが、死にはしなかつたといつて平氣なもの。「然し今日は大丈夫、なだれはありません、これで朝日でも照ると隨分このあたりはあぶない處です」といふ。如何にも路の眞上は千丈の谷、それから二三日前に落ちて來たといふなだれが、山の上から谷の底まで一直線に進んで、谷の向ひ側からも同じくなだれが落ち、谷川の上は兩方のなだれで埋り、路の處だけその雪をかきのけて通れる樣になつてゐる。谷向うの山を見て、馭者は「十年ばかり前にはわたしは毎日あの山の岨に羊を追うて上つたのです。五月から十月まで羊を世話して、山をつれてあるくと一疋に三フランづつ貰へます」といふ。子供の時から夏は羊を追うて山の岨に朝から晩まで、冬は雪の中でくらす。身體が丈夫になるのも無理でなく、又この人民が自由の精神に富んでゐるのも自然であると思はれる。

　惡魔の橋(Teufelsbrücke)といふ處に來る。深い谷の上に石の橋がわたしてある。馭者が語る、この地の昔話で惡魔がこの橋を作つたのだといふ。ウリ州の人民がこの谷に橋を架けようとして見たが、どうしてもかゝらぬ。そこへ惡魔が來て、金を澤山出せば架けてやらうといふ。金をやる約束で橋は出來たが、金をやらなかつた。そこで惡魔は怒つて、誰でもこの橋を初めて渡るやつを取つてつかんで川に投げ込むといつた。智慧のある老人が一疋羊をつれて、それを追うて橋を渡らせた。惡魔はその羊をつかんで河に投げたので、老人は安全に橋を渡り、それから渡る人も皆安全だといふ。馭者はこの話をして、「何どうせ話ですよ、事實ぢやないの

でせうと附け加へる。この橋の側の岩には黑く惡魔が火焰を吐いてゐる畫が書いてある、又その岩に穴を掘つて、その中にはハドアの聖アントニオの像が祭つてある。橋の上から見れば、谷川は一面の瀧であるが、今は雪の蔽うた下や、雪のとけた間に早瀨をなしてゐるのみ。雪なだれをよけるためのトンネルを二つ過ぎる。その角に城堡があつて、岩山に據つて砲臺を造つたらしい、その入口には雪の中に番兵が立つてゐる。唐代の湖北の詩にありさうな景である。

此の砲臺の前を過ぎると、山の間に開けた一面の廣原で、日光の戰場原と同じ樣に元は山間の湖底であつたらしい。その廣野原は一面の白雪。先の方、山の麓に一群の人家が見える外は、處々に木立の頭が雪の間に出、野原の四方は悉く山。その山も麓のみ見えて、上は雲に蔽はれてゐる。天氣がよければ、この野の四方、山々の雪が中々よいと馭者はいふ。程なくその村に着く。家の雪に埋れてゐるのを見ればいかにも雪の深さが分かる。夏だけ開くといふホテルの鐵柵は僅にそのさきだけを出してゐる。夏は兵營に兵隊が來る、その砲車の倉は軒まで雪。村に入ると日曜で遊んで居る兵卒や村の娘が、スキーといふ長い木の靴で雪の上をすべつて遊んでゐる。子供等は高みに集つて雪投げをしてゐる。クローネといふ宿に下りて家の中に入る。此處にも村の者や兵卒が集つてゐる。茶を飲んで諸方にはがきを出す、四月の空に雪の中から雪のはがきを出す。

三十分ばかり休んで外に出る。今先きには少しはれかゝつたと思つた空が、全く雪空になつて、北風が強く吹雪になつてゐる。その吹雪を切つて北に向ふ。顏も何も向けられたものでない。時々手袋を額にあてて指の間から先を見ると、自分等の先に二つ橇が行く。一つはフランシスカンの修道僧をのせ、一つは郵便をのせて行く。そのフランシスカンの僧はカプシンといつて先の尖つたあたま被りを被つてゐる。尖つた茶色のカプシンが白雪の中にいちじるしく見える外、四方は全く雪の世界。馬は下り坂を勢よく雪を蹴つて進む。風は横に吹雪を吹きつける。路の曲り手や、岩角には風が一層強く、地に積つた雪を吹き上げる。まるで雪の嵐にまかれた樣な心地がする。

雪の波けりて破りて行く橇の
　行く手の空に吹雪さかまく。

城堡もトンネルもいつの間にか過ぎ、惡魔橋の上をかけぬけて、路の曲りに來た。下り坂を馬が餘り勢込んだので橇はすこし横に倒れる。馭者もろとも雪の中にころげ込んで、馬だけは勢に乘じて空の橇を引いて先に行く。雪の中だけに少しも怪我はなく、馭者は驅けて馬をつかまへ、こちらは膝かけを持つて橇に追ひつき、又坂を下りる。馭者は先の橇に追附かうとして一鞭あてると、馬は一層の勢で走る。然しころびもせず、先の橇に追附いて、大分山を下つたので、吹雪もゆるやかに、雲を少し上に見上げる樣になつた。間もなくゲシネンの鐵道が見え、村が見え、五時すぎに宿に歸つた。宿の前で橇を下りて自分のからだを見ると、外套は固より、顏はひげも眉毛も、雪の花をつけて白熊の樣になつてゐる。それを拂つて部屋に歸るとストーヴの火であたゝかくなつて、先づ活き返つた樣に思はれた。行きの上り路は一時間半もかゝつたのが、歸りは半時間ばかりで歸つた。

積雪の中の靜けさ、子供が遊んでゐる聲と、時々通る橇の鈴の外、近い鐵道の音もきこえぬ。窓から外を見ると、吹きおろす山風に時々雪がちら〱飛ぶ。日本では櫻の頃に雪見をする。

峰吹きおろす山風に
ちる白雪を見るにつけ

思ひぞ忍ぶ故郷に
いまぞ盛りの櫻ばな。

その雪の中でロスミニの哲學を讀んで日もくれた。

山里の雪も靜けくふる中に
鳥の音もせず日はくれにけり。

食事後この手紙をかく。時々寺の鐘がきこえる外、宿のものも寢てしまつて、天地は全く寂靜。このペンの走る音の外は、祈念をこらすべき自分の心の中の聲のみである。

## 四月六日

### 山陰の別れ

今朝はゆつくり寢て、おきて見ると窓の外は雪の空。昨日に勝つて降つてはゐるが、靜かに飛ぶ様にふる。窓をあけて見ても少しも寒くない。朝の茶の後にボイが篝火を焚いてくれた。外は雪、中は暖い部屋の靜かな中にロスミニを讀む。正午前に少し散歩に出て來たが、昨日は少しとけかけて穢かつた路も皆綿の様な雪に蔽はれて、あるく〱一歩毎にグイ〱と音がする。靜かに降る雪につれて、吹く風は和らかに額にあたり、空氣に一種の爽かな氣が滿ち、まるで眞綿につゝまれた様な心地がする。一いき一いき天地の大氣を吸ふ様である。村をはづれて少しづつ山の間を上る。脚下は只白雪の白いのがぎら〱して眼が眩い。上を仰げば雪の散つて來る先の雲が山々にかゝつて、どこまで仰いで見ても雲の間には雪のかゝつた岩と木立が見えるばかり。行く先は南方から山が下りて白雪の間に木の小屋が少し見える。その方にたどつて行つてふり返ると、ゲシネンの村は下の方に見え、先は同じ様な山つゞき、天が晴れてゐればこの邊からも谷の奥のダンマ氷河が見えるのであるが、いくら立つてゐても仕様がない。

雪のまばゆさに眼を蔽うて、時々路ばたの雪をつかんでは口に入れて宿に歸つた。今丁度一時が鳴る。少し日は照り出したから尚一日此の地に居りたいが、イタリアの日數を少くするのも惜しく、今日の二時に汽車で南に向ふ。こゝの四里のトンネルを一つ出れば、イタリアの空で雪もなかろう。冬の眞中から一時に春にあふのである。

## うたかたの跡

——蘆葉の「うたかたの跡」より——

一夜をゆつくり寐た。朝の空は曇つたながらに、四つの窓の部屋は心地よくあかるい。湖水に少し波が立つて、しめつぽい空合に、向ひの森がかすんで見える。朝飯の後少し讀書して、ベルヒ離宮の庭に行く。ゆふべの雨に濕うた木々の枝が垂れて、洗つた木の葉の緑が清い。この國の先王ルードキヒ二世がこの離宮に病を養つて居て、湖水に溺れて死んだ跡を記念するため一つの堂が建ち、湖水の中には十字の形のわくに水草を植ゑたのが浮かしてある。ルードキヒ王の溺死を種にして鷗外さんが「うたかたの記」を書いたが、そのうたかたの跡を雨後の靜かな朝に訪ひ、水の中の十字を見て哀れは一層深い。その邊の蘆の葉もうたかたの哀れを告げる様に思へる。

うたかたの結びてきゆる岸の邊に
哀れをつげてそよぐ蘆の葉。

（明治四十一年六月九日）

# 湖上の春

## 四月六日

### 山陽の花、イタリアの空

今朝の手紙を出して後、一時にゲシネンを出て、四里のトンネルを通りぬけた。そこへ來れば春になる様に考へて居たが、そこにもまだ雪があり、雪が降つてゐる。然しゲシネン程には深くない。汽車は山と山との間を下り、北側の様に山は迫らず、谷が幾分か開けてはゐるが、その山々が兩方に突つ立つて、雪の雲が峰から峰にさ迷ふ様は壯大で幽玄、雪舟の筆をかりて寫したい。その中に汽車は段々山路を下つて谷も開ける、果樹の花も少しづつ見える。七百メートルのファイダに來て、日光が見え初めた。行く手の山には白雪の上に日が照つて、雲のかかつてゐる峰もあるが、又雪の山が青空に聳えても見える。愈イタリアに來た。汽車の留る度に車の外で人の話してゐるのは皆イタリア語。車の中でも車掌が停車や乗りかへを知らせるに先づイタリア語で云つて、それからドイツ語でいふ。山の上には庵室や寺が見え、家の屋根は石でふいてある。日の光が段々強くなる。雪の峰は高く上の方に隔る。ベリンツォナに來た頃は全く春になつて、窓から横にうける夕日も暑い位である。その邊の野は青草で、その草原に桃の花が盛り。峰には白雪のその眞下の麓に桃の花。

とけて流るゝ峰のゆき
土のふところ潜み來て
日なたに生ふる桃の木に
薄くれなゐの花さかす。

ロカルノの湖水に夕日のあたるのを見て、汽車はベリンツォナからルガノの方に上り道になる。今まで過ぎて來た北の方の山々には雲が迷うて、雲の下の谷はうす黑い。こちらは碧空に入日の紅がさして、草原の綠と桃の紅とに映ずる。まるで別世界。きのふは吹雪の中を馬を飛ばし、今朝まで雪の世界に居て、爽快の一日一夜をくらしたが、今この春景色の處から、元來た山を見ると、あの中に尙一度入つて見ようかとは思へぬ。雪の面白さも決して春の日には劣らぬが、今山を出てこゝに來ては、復山に歸る氣はせぬ。千丈の山、雪の嵐には力がある、氣を強くする。然し春の空は優しい、心をとろかす。丁度ユダヤの豫言者の信仰の峻嚴なのに、キリストの溫和。ゾロアスターの熱誠に、佛陀の寂靜。日蓮の烈烈に、法然の溫厚。二つは互に相容れぬ様ではあるが、反對でなしに互に相補ふべきものである。今日一日の雪から花にの變化を見て尙深くこの事を思ふ。

ルガノ(Lugano)に着いたのは五時半。ステーションを出ると直ぐ下に湖水、そのぐるりの山々の圍んだ間に深碧の水を湛へて、その湖岸に赤瓦の屋根があちこちにかたまつてゐる。今のこの宿に着いたが、眺めは高みであつても、前に鐵道があるから、あすは外に變らうかと思つてゐる。

宿を出て、ビニャミ氏(Signor Bignami)を尋ねた、大體の方角をつけて行つたが、どこか分からぬ。路で二三度人に問うて、解かりかぬるイタリア語でやつと尋ね出して、その家を音づれた。五十に近い半白の紳士が出て來て、よく

來た、待つて居ましたといつて、夫人も出て來る、子供も出て來る。暫く話をし、手紙を受取つて、あすの再會を約束して歸つた。來て居た手紙の中に内からのもあつた。

宿に歸つて座敷で手紙をかく。日は西に沈みかけて、湖水のあちらの山々が夕日に照らされて、黒ずんだ赤い紅をなしてゐる。北の方には嵐の様な雲が出て、高い雪の峰はかくれた。

夕食の間には、イタリア人が音樂を奏して歌を歌ふ。食堂には大分人も多い、その中に看護婦と食事をしてゐる夫人が二人居る。いづれ夫が肺病か何かで來てゐるのであらう。その中の一人はこちらを見てはこはい顔で睨む様に見る、初めは失敬な奴だと思うたが、夫の病氣のために顔つきも自然に嶮になつたのであらうと思へば、氣の毒である。

夕食の後に外に出て見ると、空氣は冷かであるが、少しも風はなく、新月が西の空にかゝつて、星の光はきら〳〵とし、山のみは黒い影になり、湖水の上にボートか何かの燈がちらちらする、今夜からこの靜かな、イタリアの湖畔で寢る。

## 四月七日

### 遠方の友

今日は宿を變つた。昨日泊つた宿はドイツ宿で、食堂に入つてもドイツ人がギロ〳〵こちらを見るので不愉快であつたが、今日來た宿は客はイギリス人ばかり、宿のものはスイス人で居心地がよい。山の高みにあつて、前には庭の木立を隔てて湖水、その上に湖岸の高い山が見える。部屋には廣い緣側があつて、そこに出ると木立を隔てて湖水の眺めが我が庭の如くである。

中飯はビニャミの家に招かれて、愉快な家族の中に食事をした。ビニャミ夫婦の外に、十位を頭に三人の女の子と一人の小さな男の子と、外に細君の妹とが一家族である。食事はイタリア風の米料理。食事中に日本の事を話すと、子供等も面白さうに聞いてゐる(子供等も皆フランス語が分かる)。時々小さな男の子にイタリア語で少し話すと喜んで、Contento(嬉しい)といつてゐる。國は隔り、言葉は違つても人情は同じで、手紙の往復で、年來の交際の感がある。「君の來るといふしらせがあつてから、子供等も君の寫眞を出して、日本のをぢさんが來るといつて、毎日待つて居た、友人等も集つて來るであらう」など、實にうちとけて食事をした。あすは卯月八日だから宿に來てくれろといふと、他の友人で君に會ひたいものも居る、それが遠方に居るのもあるから、日曜の方がよいといふ事で、あすは招待をよして、散歩をする事にした。

ビニャミの家から歸つて後、日の暮には雨中ながら山を下りて市中に出、湖岸の景色を眺めた。山々には雲が迷ひ、湖水の水は雨中にしめやかに黒い色をして、日もくれかゝる。廊下の様に屋根下をあるける様になつた町をあるいて宿に歸つた。

## 四月八日

### 湖邊の花摘み

今日は卯月八日の佛誕會、朝おきて見ると少し日光がさし、鳥が鳴いてゐる。朝飯の後には、椅子を緣側に出して、そこでゆつくり聖フランシスの傳を讀む。十時すぎに宿を出て、高みで湖水を見はらす路を散歩し、それから湖水の岸におりた。昨日に引きかへて日光があるので、湖岸には散歩の人も中々多い。ずらと湖岸

をあるいて後、天使の聖母(Santa Maria degli Angioli)といふ寺に行つた。外側は簡單な建物、中にも大した飾りもないが、その正面にキリストの死ぬ時の光景を畫いた壁畫がある。一つ一つの人物は中々よいが、全體としては餘りにごた／＼してゐる。この壁畫と同じ畫師、ルイニ(Luini)の畫いた聖母は小さな御堂の中にある。此の畫の寫しは内にも額にかけてある。内にある寫しは、色が少しけば／＼しすぎて居るが、本物は壁畫の常として色もおちついて、聖母が二人の子供(洗禮のヨハネとキリストと)を愛撫してゐる樣といひ、子供のあどけなさといひ、ラファエル以後の名工の作として恥しくなく、此もフランシスカン派の信仰の現はれとして、特にゆかしく見た。佛誕會の日にフランシスカンの寺で、キリストや聖母の畫を讃嘆するのは、偶然でない。歸りには又丘の路を上つて、花をつみつゝ、宿に歸つて中食した。

午後はビニャミとの約束で、飯後直ぐにその家に行つた。子供等も庭に出て待つて居て、それから内で暫く話をして、その間に妹がタンホイゼルのエリザベトの祈禱をピアノで彈いてくれ、カフエを飲んで後、ビニャミ夫婦と女の子二人と一緒に山をおりて、汽船で湖水に出た。ルガノの町はづれ、丘の上にカスタニオラの寺のある邊には、湖岸に別莊風の家があり、桃の花が澤山咲いてゐる。舟が湖水の眞中に出るに從つて、四方の山は高く見え、眺めは湖水の南北に互つて廣くなる。三十分ばかりでオリオ(Oria)といふ村で舟を出る。此處はもうイタリアで(ルガノはスイス)舟の上り場にイタリアの稅關吏が劍をつけて番をしてゐる。上つて直ぐにフォガッツァロ(Fogazzaro)の別莊がある。その人の書いた小說にこゝの景色や、此の邊の村を題にしたのがある。別莊は小さな家ではあるが、壁に色の塗つたイタリア風で、庭にはシプレスの木が淋しさうに空に向つて立つ。此の邊の村は皆山のがけに重り重つて家を建てたのであるから、路は家と家との間や、壁と壁との間の狹い處や、又は家の下のトンネルの樣な處に敷石があつて、奇態の町である。それでも皆町の名があつて、此の村の本町(Via Principale)といふのは、幅が三四尺の坂路で、それも人の家の中をくゞつて通る路である。オリアの村はづれ、湖岸の高臺の上に寺がある。寺の壁にはやはり外側に色々の畫がある、これもイタリアの特色の一つである。それから岸を傳うた崖の道を通る。崖の草原に色々の花が咲いてゐる。今日は卯月八日の花摘みである事を話したのを子供等がきいてゐて、色々の花を摘んでくれた。すみれもあれば櫻草もあり、蒲公英だの野菊の一種もある。その乾かしたのを卯月八日の今日の遠足の記念に子供等にも遣しておく。それから始終崖の道を同じ樣に畫で見た樣な湖岸の村、サン、マンメッテ(San Mammette)の入口に、支那の山水畫にある樣な橋がソルダ(Val Solda)といふ小河の上に架つてゐる。その上からこのソルダの水上、奧深い岩山の眺めはどうしても支那の山水畫で、岩が黑で雲が湧く。フォガッツァロの小說の聖者はその幼時をこのソルダの谷で送つたのである。マンメッテの村で、茶を飲んで、はがきを諸方に出す。村の者の風はまるで中世の畫で、青い色の衣物の婦人が赤色の着物の子供を抱いてゐる。子供等のはいてゐる木の履はまるで日本の下駄である、そこらには殆んど何も近世のものはない。はがきを買ひに入つた家の主人は何か畫を畫いてゐる。その邊に村の者が集つて見てゐる。家の外側には色々の畫がかけてある。家のぐるりのシプレスの木、壁と壁との間の石階、寺の臺や茶店の緣側からの湖水の眺め、總て畫と詩との中の景色で、イタリアの畫師や詩人が畫い

たり詠じたりした人生と天然とは、この中にあると思はれた。汽船が來てマンメッテを出てルガノに向ふ。ソルダの谷の岩山、湖岸の赤煉瓦の別莊、シプレスの木立、村人の山に出て働く風俗、いくら眺めてもあかぬ。舟の中ではビニヤミと佛教の信仰やイタリアの政治の話をして、舟はルガノに着いた。妹と子供とが迎ひに來て居て、皆で一緒に山を上つて家に歸つた。ビニヤミ一家と別れて、宿に歸りがけに、同宿のイギリス人と一緒に花を摘んで歸つた。

夕食の後には同宿のイギリス人等と話をして、部屋に歸つて此の手紙をかく。今日の卯月八日の茶の代りに、湖岸の散歩に出、花をつみ、イタリアの家族の中に入つて、子供等と一緒に半日をくらした。實に愉快な卯月八日であつた。

## 四月九日

### コモの湖上

今日は朝から日光があり、春らしい天氣。朝から緣側に出て本を見、十時になつて宿を出、船で湖水に出た。船はきのふと同じ道。然し、岸によつて重ね建てた村、湖岸にシプレスの木立の間に見える赭壁の別莊、岸に咲く桃花の紅に菜種の黄色、岩山の姿、谷の奥の白雪、見るに從つて新しい面白さがある。舟はあちらの岸こちらの村を經て、湖水の東のはてのポルレッツァ(Porlezza)に着く。それから小さな汽車で山と山との間、小さな湖水や、桃畑の間を通つて、も一つ東にあるコモ(Como)の湖畔に出る。湖畔の高みを下る間に、コモの湖水の全景が見え、向ひの岸に聳えるムッジオの雪の峰、湖水の岐れて二つになつてゐる間につき出たベラッジヨ(Bellagio)の小山の半島、宿にはチマの岩山、一時に眺めが開ける。山を下りる鐵道の側にはやはりシプレスの木立に桃の花。程なく汽車はメナッジヨ(Menaggio)の村、湖水の岸に下りた。船を待つ間にはがきや、此の邊の村人のはく木の履を買つた。澤山の買物でもないが、店の娘が椿の花を出して、買物のお禮にといつてくれた。この邊には今は椿が中々多くなつて居るが、元は日本から來たので、何れこの花も日本の椿の子孫である。椿の花をボタンにさして舟に乘る。舟はベラッジヨに向つて出る。この湖水のぐるりの山々は中々高くて、峰には皆雪をいたゞいて居るが、ルガノの山々の樣に峻しくなく、雪の峰から、ゆたかに麓が湖水に垂れて、湖岸の村々が赤瓦や白壁で相連つて見える。東の方のムッジヨ、北の方のアルプの高峰は、碧色の空に眞白の輪廓を畫いて、日光に輝いて居る。そよ吹く風が南から吹いて、湖水には漣が立つ。のどかな優しい景色。

舟はベラッジヨに着く。岸の上、宿屋の庭には木立の下湖水の岸に卓が並んで、そこで新聞を見たり、中飯後のカフェを飲んでゐる旅客が多く、岸を往きかひする村の女は、頭に赤い布を着て、木の履をはいてゐる。それに加へて家々の白壁には綠色の木の戶、それ等の色合が實に面白い。村の後の小山の上には名高い別莊がシプレスの木立の間に見える。その高みから湖水の眺めは、この湖上第一とは聞いてゐるが、時間の都合で上陸が出來ない。村の男がイースターの節にするオリヴの枝を澤山舟に運び込んで後、舟は又對岸に行く。對岸の村のトレメッツオにも、湖岸に宿屋や別莊が建て連つて、その後の山にはオリヴ畑に色々の花、その上はチマの岩山。トレメッツオから舟は南に向ふ。山の麓が延びた、アヴェドの岬にも別莊がある。湖水の岸にロマ風のアーチの石垣を築いて、見はらしの台の石の欄干には石像が立ち、

庭にはやはりシプレスの木立、その先の尖つた淋しさうな木の姿が著しく、岬の端につき出て、湖水に映じてゐる。この樣な別莊の前に舟を停めて、月夜に笛を吹くものでもあれば全く小說中の人物である。それから聖ジオヴァニの島、コロモの村など何れに行つても詩と畫との景色。北の方の雪の山々が前の山にかくれかける眺めを惜んで見てゐると、先にベラッジョから乘つたイギリス人が後から來て、「富士の山とどちらがよろしい」といふ。「富士は富士、アルプはアルプ、各々違つた趣があるから、眺めても倦かぬ」と答へると、笑つて、それから暫く話をする。その中に舟は山の崖に立つた古い壁の連つた村に近く。イギリス人は此がネッソ(Nesso)の村で、ロマ時代からある。シーザーも此處に來た事がある。自分等はベラッジョに滯在して、湖水のぐるりを時々遠足する。今日はこのネッソを見に行く」といつて、同行四人で舟を出に行つた。岸の上の山道を上つて行く四人にハンカチーフをふつて別れを告げ、舟は岬を廻つて南に進む。湖水は左に曲り右に曲る。その岬毎にやはりどこにも同じ樣な別莊がある。風に吹かれて甲板で少し眠つた間に、舟は三時半コモの町に着いた。上陸して直ぐにこの町の大寺堂母(大寺をフランスではカテドラール、イタリアではドオモといふ)に行つて見る。變なゴシックと少しルネサンスの交つた建物で、白大理石の正面や、角々の柱には一々細かな彫刻がある。中に入ると、中は全くのルネサンスで、寺といふよりも宮殿の樣な作り、柱の間にはゴブラン、小御堂にはルイニなどの畫があり、ゴシックの寺に入つて何か深い莊嚴の中に入つたといふ心地のするのとは全く違つて、はでやかで整つた調和の中に入つた心地がする。この宮殿の樣な寺の中にも參詣の人はやはり祈念をこらしてゐる。懺悔室には懺悔の人が多い。婦人もあれば男もある。懺悔の聲が柱の影、壁の影に微かにきこえる。然しこの聲はやはりゴシックの薄くらがりの高い柱の邊できく方が適してゐる。寺を出てそのぐるりにある入口の上部や柱の彫刻を見る。此等もルネサンスの宮殿裝飾の樣であるが、亦一種の面白味はある。寺の前のカフェで茶を飮んで、尙寺の正面を眺める。日光は西に傾いて白大理石を照らし、その輝いた壁や柱が碧空に聳える樣は去り難い心地がする。

それから道幅の狹い町を通る。全く古風に外側には窓も少くて、中庭には彫刻などの立つて居る屋敷がこの狹い道を挾んで、殆んど空のトンネルを作つてゐる。それを通りすぎると、元の城壁の殘りのある木立の道に出る。道に沿うていくつも寺がある。皆古風のロマネスクの建物を正面だけ變なバロッコ風に變へたものである。寺の傍に僧院があり、その向ひは兵營の側をすぎて、少し山手の停車場に行く。そこからは市街を見下す。赤瓦の屋根のごた〴〵かたまつた中に、堂母の圓塔が莊嚴に聳え、町のあちらは又高い山で、その頂上の家が日に照らされてゐる。この山に上ると、北はアルプの山と、南はロンバルドの平原を眺めるといふ事であるが、時間がないから行かなかつた。

汽車は五時にコモを出て、間もなくキアッソに着く。こゝはスイスとイタリアとの境で稅關の檢査がある。車を出て稅關に行けといふから、何も荷物はないといふと、荷物はなくとも行けといふ。それなら稅關のお役人にこの椿の花でも見せようといつて、車を出て稅關を通り、汽車の時間の間に少し市中を見物した。移民會社の事務所がいくつもある。皆この邊のイタリア人がアメリカに行く移住の世話をするのである。この樣な樂地のイタリアやスイスにさへ落ちつかずに、金を目當にアメリカの石炭

の烟の中へ行く人間が多いのかと思へば、憐れは一しほ増す。

キアッソを出て汽車は北に走り、ルガノの湖畔に出る。夕日がジェネロソの岩山、高峰の雪を照らし、湖水の面には夕暮の黒い色が蔽ひかかる頃、ルガノに歸つた。

食事の後、尙薄くらがりの山水を眺める。月は大空に碧白い光を放つてゐる。家の前を行く馬車の馭者が、のどかさうに何かイタリア語の歌を歌つて行く。

ガルニエから手紙が來た。卯月八日とキリストの復活祭との似た事や、それから子供エヴリヌの事など書いて來た。

## 四月十日

山上の眺め、學校、音樂、家庭

今日も晴天、いかにも春めいた暖い天氣。八時起きて、暫く鐵欄で春の日光に浴びて後、九時から電車で町の南端に行つて、そこから齒車でサンサルヴァトレ(San Salvatore)の山に上つた。山は湖水から六百メートル、さう高くはないが、一方は小山や野と、一方は湖水の岸に直立してゐるので、上るに從つて四方の眺めは開ける。頂北西の方にアルプの連山が段々に見える。頂上に聳えた岩角に出て見ると、湖水は脚の下、通る船は全く木の葉の樣で、四方の山々は高さを増して見える。東の方のソルダの岩山、昨日行つたコモ湖上の雪の山、それからルガノの四方を圍む山、北から西に當つてはアルプの最高峰ユングフラウから、その西につゞく雪と岩との山が天半に聳えてづらりと並ぶ。その雪の峰も段々西に遠くかすかになつて、先は氷が水に浮いた樣に、碧空の中に消え失せる。暖い日光を浴び、そよ吹く春風に吹かれて、この眺めに對し恍惚と自分を忘れて、身は大空に解ける樣に思はれる。遠の山々は雪、近い野には花、湖水は深碧、その間に直立した岩山の頂に、村人は堂を建ててキリストを祭り、それで此の山をサルヴァトレ(救主)の山といふ。堂の日なたに小さな花の咲いたのを記念に摘んで、山を元の齒車で下り、宿に歸ると晝食。

食事の後にはビニャミ氏と一緒に、市で立てた女子職業學校を見に行つた。校長はレンシ(Rensi)(此も雜誌の上で朋友の夫人で、學校の設備や教室を見せてくれた。職業には意匠や裁縫が主であるが、意匠はアメリカの樣に直に天然から取らずに、模樣の線を教へ、歷史の順序で古代から今までの裝飾や彫刻を寫させ、それから進んで天然から取つた自分の意匠をやらせる。此はイタリアのやり方であるとの事。アメリカの樣な歷史のない國には初めから天然寫生で始めるが、イタリアの樣な歷史の國には、やはり歷史に據る必要がある。語學の教室ではイタリア語の時間に行つて見たが、讀本の中にイタリア人の旅行記で横濱の事を書いたのを讀んでくれた。美しいイタリア語で、日本の事を美しく、子供の着物の色合や、市場の模樣を面白く書いたのを遠い外國できけば、何か遠い昔に見た事を夢で思ひ出す樣な感がある。それから英語の時間を見たが、十四五の女の子が一年足らずの間やつたにしてはよく進歩してゐる。少し英語で別れの言葉を云つて、尙その外の教場を見、校長に別れを告げて學校を出た。

三時半からシャブリッツ夫人(Frau Schub-litz)の娘がピアノをやるからきゝに來てくれといつて約束したので、ビニャミの夫人と妹と子供が一人と、學校の前に來て待つて居た。それで皆で一緒にシャブリッツの家に行つた。此の夫人は北の方のスイスの人でドイツ語の國に

から來たので、ドイツ語でも話し、それから音樂の先生も來て、令嬢はピアノ、先生はヰオリネでイタリアの音樂者テリンデリ(Tirindelli)の作をいくつもきかせてくれた。その中で面白かつたのは「悲哀」といふのと「神祕」といふのとで、イタリア作家の風として何れも音色に富んで居る。悲哀は悲哀でも、悲しさに熱情があり、色合があり、悲みを喜ぶ、悲みに狂するといふ風がある。神祕も、深いといふよりは不思議の配合といふ方で、いかにもイタリア氣風の情熱がある。最後にベートーエンの「月光」をひいてくれたが、色のない月光の中に空に亙る深い音がひゞく。色もなく情もないが、奥があり力がある。僅の音樂合奏ではあつたが、實にイタリアとドイツとの對照をきかせて貰つた心地がした。尚色々話をして、辭してその家を出たのは日のくれ近くて、夕日がいつもの様に山々に紅をそめて居る。

夕食はビニャミの内に招かれて、レンシ夫人も來、イタリアうどんの御馳走で、食事の間にも色々の話が出る。ビニャミ夫人は佛教の禪定が面白いといふ、レンシ夫人は反對で、禪定は好んで心を空にし、自らを痲醉する様なものだといふ。そこで自身はかういつた。「自分で賢くなるのはやさしいが、自ら求めて愚になるのはむづかしい。特に人は常に周圍に心をひかれて、自ら賢らなるよりも、賢く見せようとするから、禪定で自ら愚になるのもその癖を直すだけにでも役にたつ」。それから色々の例を出して議論に花が咲いたが、子供等はねむさうにしてゐるし、十時もすぎたから、辭して、ビニャミ氏と一緒にレンシ夫人を山の下り口まで送つて歸つた。月が曇りのない空に碧くてらして、四方はうす黒く碧い。その間に山々の雪が空に浮いた様に見え、山下の湖水は眠つた如く黒く湛へてゐる。月光を仰いで、晝にきいたベートーエンの「月光」を思ひ出して宿に歸つた。

今宵でこの手紙を書く時、下の方に笛の音がきこえる。尚一度縁側に出て月を仰ぎ、山々の雪が影の様なのを見て、これからねる。

## 四月十一日

ロカルノ、聖母堂、代議士

朝早く起きて窓を開く。日の出前の白いあかりが黒い山の影の上にほのめいて居る。鳥ははや歌ひ囀つて春の朝を告げる。今日は東京ではボートの日、今年の結果はどうであらう、八時過ぎに朝飯をすまして湖水を眺めながら、丁度今頃は隅田の河では文科の勝敗を決する時だと思ふと、何となく、千里を隔てても、皆が旗を振り、聲を上げて居る様が目に見える。

春の暖い日光をうけて縁側で聖フランシスを讀み、十時に汽車で北の方のロカルノ(Locarno)に向つて出た。ビニャミの子供等はその見はらしの庭に出て、ハンカチーフをふつて汽車の出て行くのを送つてくれた。ジュビアスコまでは來がけに通つた路ではあるが、崖の高みから見た、テチノ(Ticino)の谷、ロカルノの湖水、山の麓の桃畑、春の朝日影に尚愉快に見える。ジュビアスコからはテチノの河の側、平原を西に過ぎて、ロカルノの湖岸に沿ひ、右には花咲く山村、左には湖水を隔てて白雪の峰。十一時半にロカルノに着いた。それから直ぐに歯車で山に上る、宿屋や別莊の青草の庭、木立の茂つた間を通つて段々高く山に上る。岩上聖母(Madonna del Sasso)の堂が行く手に聳え、その堂に上る岩の坂道に小さな御堂が並んでゐる。堂の傍で車を出、その上の、此も岩の上に建つた宿に行つて、その縁側から湖水を眺める。聖母の御堂が岩角に突き出て、湖水の碧水

の中に赤瓦の屋根が著しく見える。程なく、正午の鐘が音樂を奏する。その音が湖上の空に響き渡つて、四方の山に傳はる。その最後が餘音を止めて鳴り止んだ時には、氣が鐘の音と共に大空に浮き出す樣に思はれた。

　霞たつ岩の御堂の鐘の音は
　　水をわたりて鳴りやみにけり。

湖上の景色を眺めながら食事をしてゆつくり休んで後、聖母の寺に行つた。岩角に堂があり、堂に連つてフランシスカン派の僧院が、此も岩の上に築き上げてある。僧院をつたひ、僧院の廊下を出ると堂の前に小さな庭が出來て、二階作りの樣な正面に壁畫が一ぱい畫いてあるのを見上げる。柱とアーチとの多い屋敷づくりの樣な寺の壁に、赤や黄色の多い畫があつて、それが碧空と對する樣は可愛い御堂といふ感がある。中に入ると飾りが多すぎる。紺青色の天井に星が畫いてあり、柱や壁には心願成就の額が澤山かゝつてゐる。五百年前に此の岩の上に聖母が現はれ、病氣平癒の靈驗があつたといふので、此の寺が出來、此の邊の村人の信仰相應に聖母の像は錦の着物を着、王冠をいたゞいて、壁の額には日本のと同じ樣に、この聖母が病室に現はれた畫などがある。村人の婦人が參詣してゐるが、信心深く何か祈願してゐるらしい。それ等は別にして、右の小御堂にチセリ(Ciseri)の畫がある。何れの點から見ても、整つた落ちつきのある作。寫しで始終見て知つては居るが、本物の前に立てば又一段の趣がある。數年の間寫しでのみ見て、夢にして居た畫の前に立つて、目をつぶつては又眺め、眺めては又目をつぶる。一々の色、人物の姿勢の節々、見るに從つて面白味が增す。特に今までは氣のつかなかつた、キリストの、死にはしても、何となしに死なずに眠つてゐる樣な顔つきから、その體が全幅の中心になつて、他の人物もこの中心に集るなど、畫の大きさに關係する點が、實物の前に立つて初めて知り得た。一時間近くも見て居ても飽かぬが、いづれは別れるものと思つて、舊知の友に別れる心地をして堂を出た。

堂の横が岩の上で廊下になつてゐる。その柱の間から日光をうけて湖上の景色を眺める。畫は畫、天然は天然で、何れも眺めは飽かぬ。

元の市中に出て、此の地の名家で、代議士のピオダ(Sig. Pioda)といふ人を訪うた。前に古るい僧院があり、小さな庭の茂みには先代の記念碑の立つてゐる古い家の戸をたゝいて名刺を出す。二階に導かれて應接室に行くと、古代の武器や何かで飾つた古風の室で、主人の姉であるといふ老婦人が出て應接をして、主人は今來客があるから暫く待つてくれといひ、日本の事などきかれる。その中に二階からおりて來たのが主人のピオダ氏で、小作りの六十近い人であるが、「君の論文なども見、此の地に來られるのを待つて居た、書齋へ行つて話さう」といつて、二階の書齋に行く。廊下や段階も何か古城の樣で、書齋には澤山の本があり、その中に一寸見ると佛教に關したものもある。此の人は學者ではないが、歷史や哲學に通じて、特に佛教が好きで、印度や日本の事も中々よく知つてゐる。ローマ教會の現狀、ロスミニの事、スイスの現在などきいて、一時半餘も話をして家を出た。

まだ汽車の時間には一時間もあるので、湖岸の道を散歩して、水に垂れた柳の木影に休み、それから山の手に向つて葡萄畑をすぎて町に歸り、五時半に汽車はロカルノを去つた。西の方の峰に黑雲が起り、夕日の光が雲を通して湖上に長い光を垂れてゐる。七時すぎにルガノに歸つた。汽車の通るのを見てビニャミの子供二人がハンカチーフをふつてゐる。汽車を出ると、ビニャミ自身が他の二人の子供をつれて迎

ひに來てくれ、一緒にその家に行つた。

今晩もイタリア風の米料理でビニャミ一家と共に食事をした。ロカルノ行の話やピオダ氏との會話を話し、それから姉がピアノを彈いてくれた。ノルマの曲で、古のドルイド僧が月夜に行列して神壇の前に出る、物すごい樣で而も跳りの節のある曲。それからシシリアの俗曲などきいて、十時もすぎたので辭して歸つた。家を出て見ると、雨は降つてはゐるが、月の光が雲間からもれて、湖水は山の間に死んだ如く、黒く靜かに見える。

今日のボートレース（東京の）はどうであつたか、心にかゝつても仕樣がない。あすは佛誕會に人を招く。

## 四月十二日

### 佛誕會の茶會

昨夜の雨氣は十分に去らぬが、朝から雲間に日かげが見える。今日は日曜で寺々の鐘が湖水をわたり山に響いて、あちこちにきこえる。午前は手紙かきと讀書とで過ごした。

中食はビニャミの家で、ミラノから來た、此も雜誌の上での友人のフキンチといふ人も來て、一緒に食事をし、米料理を澤山たべた。今日の佛誕會には誕生佛の畫でもほしいと思つたが、ない。ビニャミの夫人は誕生佛の代りにバンビノ（一番下の男の子）をつれて行かうといつて居たに、そのバンビノは昨夕から少し熱が出たのでねてゐるといふ。食事がすんで、バンビノが目をさましたといふので皆で行つて見ると、少しよくなつたか、寢臺にねたまゝにおもちゃを持つて遊んで、皆の來たのを見てにいと笑つて居る。フキンチをさして「此は誰れ」といふと「ミラノのをぢさん」といふ、自分をさして「此は誰れ」といふと「アネ」といつて後はちがへて居る。「よくお休み」といつて手を握つて下におり、宿に歸つて、佛誕會に人を招く用意をした。

一つ座敷を借りて、机にも花、壁にも花、誕生佛がないから、芳崖の觀音を中央に、梵天と無着とを兩方にかけて、そのぐるりを花で飾つた。此で先づ座敷は出來た。それから日本服を着て待つてゐると、間もなくシャブリッツ親子、つゞいて、ビニャミ一家とフキンチと尙一人ルガノにゐるスコットといふイギリス人と一緒に見えた。卯月八日の佛誕會の事や、日本の繪の話など、今日はイギリス人でイタリア語の上手の人が居るから、こちらの言葉の足りない時には、英語でいつてその人に通譯して貰つた。茶を飲み、菓子を食べ、机上で各々思ひ〳〵に話をして、皆も愉快にこちらも愉快に午後をすごして、七時前に皆の人は歸つて行つた。縁側に出て、皆の行くのを見送り、互にハンカチーフをふつて A rivederci をくり返した。

今に佛教の精舍が建つて、鈍色の衣を着た比丘の住むべきルガノの地に來て、小さいながらに知己友人の一團を招き、花を飾つて佛誕會の心だけを盡した。來た人も喜んで花を持つて歸つてくれた。こちらも何となく心地がよく、この一日を喜びの中にすごした。只遺憾であつたのは、レンシ夫婦の差支と、尙一人、ロマ教會の坊さんでビニャミの友人が、此も先約で來られなかつた事である。その外はイギリス、ドイツ、イタリア諸國の人が集つて花の中に、宗派や人種の事を考へずに佛誕會の茶を飲んだ。今度の旅行中での一番の愉快であらうと思ふ。

夕食の後に同宿のイギリス人で昨夜から熱が出てねてゐる人を訪うて、晝の花を一つやつて來た。月は今雲間からかすかに湖上を照らし、山々には尙雲が迷うてゐる。机の上には花が香つてゐる。

## 四月十三日

### イギリス人の家庭

朝から曇り、然し鳥はいつもの様に朝早くから歌ふが如くに鳴いてゐる。朝は手紙をかく、荷物を整へる、曇り勝ちの天で時々雨もふり、外にも出られぬを幸に半日宿でゆつくりくらした。

午後にビニャミの家に行つて雜誌などを見、三時過に夫婦と一緒にスコット氏（Mr. Scott）の家に行つた。スコットはカスタニョラ（Castagnola）といふ村でルガノから半里餘の處に住んでゐるから、舟に乗つてその村に着き、湖水の岸から山の手に上る。山の崖、石垣の上にスイス風の田舍家がある。それがスコットの家で、庭に入ると先づ女の子が迎へに來、それからスコット夫婦、外に二人の男の子も來て、その家の二階に通る。庭には種々の種類のアルプの高山植物もあれば、棕櫚や枇杷もあり、その間に[illegible]色々の種類の薔薇が植ゑてある。二階から湖水の眺めは又一段で、サンサルヴァトレの山が正面に高く聳え、前の方湖水の上に橋が遠くに見え、左にはモンテゼネロソ（Generoso）の高山、近江の石山を大きくした様の景色。スコットの細君はオランダ人で、室内にはオランダの畫や、日本の漆器があり、靜かな湖水の山の上に靜かな生活をしてゐる。茶を飲む。話はイタリア語と英語とで各自由にする。世界の中で茶の好きなは、イギリス人とオランダ人と日本人だといつて、スコットと自分とは頻に茶を飲む。ビニャミ夫婦は、よくそんな強い茶が飲めると云つて驚く。日のくれまで愉快にその家にくらした。夕日が雲間から湖上の山々をてらして、ルガノの町は西の方に影になつてうす暗く、東の方の山々は紅を染める。別れを告げて今度は電車でルガノに歸つた。

宿に歸ると夕食の半、スイスの歌團が來て鳥の鳴く様な歌を歌つてゐる。このスイス歌も暫くはきかれぬ。食後にはイギリス人で十五年印度に居たといふ人と話をし、それから病氣でねてゐるイギリス人を見舞に行つたが、復熱が上つたといつてゐる。慰めて今自分の部屋に下りて來た。

## 四月十四日

### 最後の一日

今日も雨、朝はフランシスを讀んで、中食前に丘の上の村を散歩したばかり。ルガノの眺めも今日が終りと、ぶら／＼そこらをあるいて來た。

午後は佛教に關して批評があつたのに對して佛教の事についてビニャミの雜誌に出すため原稿をかいた。ライプチヒには佛教の會が出來る、ルガノには精舍をおこすなど風聞をきいて、牧師連の間に少しあわて出した氣味があつて、新聞や雜誌に時々佛教の惡評が出る。何れも議論としては取るに足らぬものであるが、捨てておくよりも辯明しておいた方がよいと思つて、一つ書いたのである。夕はレンシ氏がイタリアから歸つて來たので、一緒にビニャミの家に招かれて夕食。食事の間も食後も、日本や佛教に關する話をした。レンシは佛教よりも印度哲學が好きで、東洋と西洋との道德の違や何かについて中々議論も出た。ビニャミ夫人や妹もお何か日本語をかいておいてくれといふから、法然上人の流罪の時の歌「露の身はこゝかしこにて消えぬとも」を書いて記念をつけておいた。會者常離で、數日の間親しく交つた人にも別れて又いつ會ふか分からぬ。例の日和、雨の天に親んだルガノの天然にも別れて又東に出る。此からフヰレンツエ、アッシジなど數年

の閒歩にした池に行つても、又それを去つて他に移る。人生逆旅の如しとはよくいつた言で、人生も此の旅に似てゐる。然し旅でも他國でも人情は同じで、友人も出來る。子供等まで今日は別れの夕食だといつて送別の意を表してくれる。無常の人生卽ち美しい人生であるとつくづく思へる。

宿に歸りがけに雲の間に月光がもれ、山が高く湖水は深く眠つて居る。何れの人もこの天然の樣に寂靜の心で安樂である樣に。今日晝論評を加へた佛敎の批評家も僻見を去つて佛陀を敬する樣にありたい。あすはボロニヤ、あさつては花のフヰレンツェで、十字の御寺にキリストの遭難の金曜をすごし、日曜にはフヰエソレに行つて、神を目の前に見た畫師アンジェリコの跡にキリストの復活祭を送らう。

此がルガノ湖畔の最後の夕、この次はいつここに來るか、正見坊をつれてくる頃には、精舍に比丘と共にハーリの經文を讀む事が出來よう。

## 谷岨の別荘

――「花つみ日記」の「旅ぐさ日記」より――

朝は少しおそくおきて、九時に皆で朝飯をしまふ。今日は皆でブレルゴウリーの川に行かうといふので、十時に汽車で、昨日のブレルゴウリーの村に行き、それから昨日馬車から見た川の上の別荘、クレーグホール（Craig-hall）の森に行く。門を入つてから半里、川に沿うた道の兩側は高い樺やファーの木立で、その木の下にはしだの類や、ロドデンドロンが茂る。その道が盡きて牧場が一方にあり、その先には花壇に圍まれて城郭造りの別荘がある。この領地は或る陸軍大佐のものであるとの事であるが、この道だけでも非常の費用を要したであらうと思へる。その先は川の崖に沿うて山道を上る。二百乃至三百尺の崖が屹立した下には、シーの流れが岩を廻り、淵となり瀬となつて流れ、崖の上兩側は茂つた森の木立が美はしい。この山道を二十町餘も行つて、崖の見はらしに苔の小屋があり、そこからは川の淵瀬、その上の岩角に建つた別荘を一目に見下す。その兩岸の木々が紅葉した時にはどんなかと思はれて、そぞろに高尾の紅葉を思ひ出した。伯父夫婦は苔小屋に止まつて、二人で崎先の山道を四五町行くと、小さな瀧があり、その崖からは物凄いほど深い淵を見下ろす。苔を集めて元の處に歸り、岩角のヒザーの上に坐り、日にあたつて川を眺める。その崖の先に紫鐘 blue bell（イギリスでは hay bell といつて桔梗に似た花が吹いて風にそよぐ。それを摘まうとすると、伯父夫婦はこの崖で花をとらうとして崖から落ちて死んだ人があるといつてやかましく止める。考へて見れば、見た花を總て摘みとるのは此も一つの煩惱。ゲーテの花の詩にもその事をいつて、花は元の處にさかせておけといふのを思ひ出す。

底深き千尺の崖の岩角に、
風にそよぎて桔梗花さく。

元の道をたどつて、ブレルゴウリーから汽車で家に歸つたのは四時。それからは讀書。夕飯の後には村の牧師が來て快談。その中に月は又ゆうべの處に出る。日誌を終つて寢室に入るのは、今十二時。

（明治四十一年八月十一日）

# 聖者の故郷アッシジ

Intra Tupino e l'acqua che discende del colle eletto del beato Ubaldo, fertile costa d'alto monte pende.

Onde Perugia sente freddo e caldo da porta Sole, e di retro le piange per grave giogo Nocera con Gualdo.

Di questa costa, là dov' ella frange più sua rattezza, nacque al mondo un sole, come fa questo talvolta di Gange.

Però chi d'esso loco fa parole non dica Ascesi, che direbbe corto, ma Oriente, se proprio dir vuole.

(Dante, Paradiso,)

トピノの河と、神に惠まれしウバルドが
撰びし丘より流るゝ水と、その間に
高く聳ゆる山の麓、
ペルジアが寒さにも暑さにもその風を受け、
日の門より望み見る山、その後には
ノセラの山とグアルドの山と、重き軛を悲む。
この麓、峻しき山の野に迫る處、
そこに日輪一つ世に生まれ出でぬ、
ガンガーの流れに出づる日のごと。
この地を語る人よ、
單にアッシジと呼ばずして
日の出の里と誠に呼べ。

(ダンテ、天國十一章)

**四月廿四日**

花の里から日の出の里、聖
者の棺前

このアッシジに來て、フランシスの棺から一町と離れない處で、その寺塔を眺めつゝこの手紙をかく。夕日が西の山端にはなやかな色を染め、遠の山々が影の如き間に包まれたオンブリアの野を下に見て、時々ひゞく寺の鐘の外に聲もないアッシジの地は人間世界を離れた處の樣に思はれる。年來の素願を達してこの聖者の故郷、聖者の亡き骸の安置した處に來た喜びは譬へ樣もない。

朝フィレンツェを立つたのは九時半。晴天の春霞に町を後にして、殘り惜しく堂母の塔を眺
跡にするフィオラの里の名殘には
　かすみにしるき大寺の塔。

東の方に馳せ段々にアルノの上流、山々の間を上る。

神さへも見えては消ゆる世の常に
　ベアトの棲家山隱れけり。

空あをみ草は綠の山の邊に
　しるくもしるきけしの一花。

ベアト・アンジェリコの棲家、フィエソレの丘もかくれ、フィレンツェも見えずなり、只野山の間を馳せる。地面は段々に高く、プラトオの山の白雪も近く見える。

野邊はるに燃ゆる綠を裾にして、
　頭は雪のプラトオの山。

麥はたけ、日かげ照りそふ春の野に、
　夏まちがほの葡萄木のつる。

ひろ野にも春の來ぬらんしるしには、
　誇りがほにも咲く梨すもゝ。

アレッツォやコルトナなどいふ町が山の上に見える、山の頂に町を立て城壁をめぐらした山城の樣。此等の町や城は度々の戰爭を經て修羅の街を現はした跡である。

山の岨きづきし壁に生ふる苔、
　幾代のむかし人の血のあと。

その中に山間の湖水のふちに出る。遠くアミアタやエトナの火山が見え、湖水の中島には、フランシスが四十日斷食にこもつた跡がある。谿山を上るとペルジア(Perugia)で、此も山の上に建てた古の町。次の列車までの間に一時間あるから、その間に見物して、今日一夜ペルジアに泊るつもりを、アッシジに急がうと思つて、直ぐに電車で山の上の町にゆく。寺や市廳の建物のみならず町全體が全く何百年かの昔のまゝで、曲つた狹い町、屋根の下をくゞる町など奇妙な處である。古のロマ時代の城門を見、それから一つ高みに上つて東北の山々や、この町の半分を眺める。丘の背に建てた町がうねうねとして、それを圍んだ城壁は山の崖に臨んで立派な要害。この城壁の一角から山の下の谷間や遠の山々を眺めると、この町の守りの固かつた古が思はれる。時間がないから直ぐに引き返して、南の方の高臺から、此も谷間や山々を見る。此處から乘つてステーションに歸らうと思つた電車が來ない。時間も迫るから急いであるいて山を下る。眞下に近く見えるステーションまで二十分と時間を勘定したが大間違で、二十分たつて半分餘りしか來ない。汽車の時間は迫るが、あせつても仕樣がない。乘りおくれたら又その時の事と覺悟して、やつとステーションに着いた。汽車が大分おくれたので、そのお蔭で間にあうて、二時すぎにアッシジに向つて出た。この汽車に間に合うたのが奇妙に感ぜられる。

アッシジにひじりの跡を訪ふ我れを
　待ちてのせ行く汽車こゝろあり。

汽車は東の方に山を下つてテベロの河の平原に出る。行く手に高い山、その麓に一つの町、日にてらされて著しい。よく見ると、豫て畫で見て知つて居たアッシジ(Assisi)の町、後の山はスバシオの山。この時はフキレンツェに入る時とは又別種の喜びを感じて、一つの理想世界を發見した樣の氣がした。

名に戀ひしアッシジの都近づきぬ、
　高根のすそに一むらの家。

見えても中々隔りはある、オンブリアの平野は遠くかすんだ山々に圍まれ、その間にいくつも河が流れる。それ等をすぎて、三時アッシジのステーションに着いた。そこから見ると、町は山の崖、その一方の突き出た角が即ちフランシスの寺。平野から見上げては忉利天の畫などにありさうな景である。ステーションの側にもフランシスに緣の深い寺はあるが、それは後にして、宿の馬車で山路に上る。傍らの麥畑、畔路の花、オリヴの畑、景色は外と異らぬが、フランシスの遊行した跡と思へば、そこらの野も草木も尊く思はれる。草を刈つてゐる村人はその昔の聖者をどう思つてゐるか、

村人よ、心して摘め野邊の草、
　聖者のあとは年をへぬとも。

道は段々上りになつて、城壁の下に沿うて上る。古い城門の前に村のものが集つて酒を飲んでゐる。大きな瓶を柳行李の樣なもので包んで、この邊の酒樽は皆この樣にしてある。その瓶口に赤い紙を貼つたのを二つ三つ小さな車に載せ、耳の長い驢馬に車をひかせて、城門の下に立ちどまつただけでも、一つの畫になる。その上、馭者は赤い襟卷の大きいのを卷き、萌黄のズボンをはき、車の下には黑い着物に樺色の頭かけを着た婦人と、此も樺色の襟卷をした男と、三人で小さな瓶から赤葡萄酒をついで、路ばたで酒もりを始め、面白さうに笑ひ興じてゐる。七百年の前にもこの城門の邊にはかういふ酒もりの光景は同じであつたであらう。次の城門を入れば、狹い石道の町、間もなく宿につく。この宿はフランシスの寺の直ぐ隣りで、崖に沿うた見はらしのよい家であるが、

見はらしの方は皆ふさがつて居るので、町の方に向いた部屋に案内せられた。窓から見ると、前は手のとどきさうに向ひの家があるが、左には寺の前の廣場を隔てて寺の塔が直ぐそこに見える。これから數日の間はこの寺の鐘をきいて朝夕を送り得る。

フランシスが御寺の鐘に朝夕を
おくらん、幾日われ法の民。

ペルジアの急行で喉が渇いた。宿の縁側に出て茶を飲む。平野山々の眺め、直ぐ隣りの僧院の眺め、皆この縁側に集る。

茶を終つて寺に行く。小さな石の門をくぐると、御堂の前の廣場で、兩方はアーチの廊下。石でつき上げたのみで、フランシスが清貧の理想がゆかしく表はれる。本堂も簡單な入口。それを入れば、暗い穴倉の樣で、奥に聖經讀誦の聲がきこえる。案内のつけ纏ふのをふり棄て、拜壇近くに坐つて經文をきく。その讀誦は他の寺と違つて歌の樣な節をつけず、全くの誦經で、殆ど佛教の通りである。瞑目祈念の後、目を開いて見ればジョットーが畢生の技能を盡した壁畫が微々しく暗がりの中に見え、堂の天井は弓形のアーチで四方から支へた所謂ヴォールトで、高くもないアーチが如何にも廣大に見える。西の窓から日光がさして、雲の往來とともに照つたり曇つたりして、壁畫が明に隱顯の變化に、或は神聖に或は幽玄に見える。その間に誦經の聲は堂内に澄み渡つて、抑揚波の如く、高く響いては又微かに、斷えては又つづく。終りに、主の禱を唱へて僧達は默禱する。こちらも亦瞑目して聖者の靈を念じ、佛を念ずる。默禱の後に又少し誦經を終つて、五人の僧が横の御堂で誦經し、最後に中央の拜壇即ちフランシスの棺の前に跪いて祈念して去つた。自分もそれと共に拜壇の前に跪き、僧等の去つた後に拜壇に近づくと、その石段のすきから地中に微かな燈明が見える。此が即ちフランシスの遺骸を納めた棺の前だと思へば、一層七百年の前が慕はれる。高野の奥の院は、處は幽靜であるが、弘法大師の前にはこれだけの歸敬の心は起らぬ。吉水の庵室、法然上人の廟はこれだけの奥ゆかしい場所になつてない。若し法然上人の遺骨が高野の奥の院の樣な處にあつたならば、このアッシジの聖者の棺前に似た心が起らう。日本では比叡山の傳教大師の廟、西洋ではこのフランシスの棺前。傳教大師廟前の水の音に、この御寺の地下の燈明何れに對しても感涙の歸敬を注ぎ、法喜の禮拜をなし得る自分は世界一の仕合はせものと思へる。傳教廟前の泉は千古絶えず、聖者フランシス棺前の燈明は晝夜光を放つが、その遺弟にこの泉を汲む人、この光明を輝かす人、今の世に幾人ある。眞理の泉、信仰の燈、このまゝで涸れたり消えたりはしないが、その水を世に注ぐ人、その光りを人に示す第二の聖者はどこに居る。拜壇に祈念を終つて、去つて行つた褐衣縄帶の僧を見て、自分もその仲間入りがしたくなつた。

ジョットーの畫を見る人々が堂内にうろついてゐるが、自分は今日は畫を見る必要はない。聖者棺前の燈明一つで十分。寺を出、廣場から又その塔をふりかへつて宿に歸つた。

宿でフランシス傳の著者サバチエ氏(M. Sabatier)に會ひ、少し話をして、夕暮に、フランシス寺の前を山に上り、古い城門の石の間に黄色の花の咲いてゐる下をすぎて、この町の墓地に行つた。その墓地やその道からの眺めは宿の崖からのとは別で、後の山々、崖の下の谷、その谷川が山下を出る山角の上のフランシス寺と、その僧院と一目に集つて、その先は遠くアミアタの火山を雲か山かに見る。日は西の山に入つて、平野には暮色が蔽ひかゝつた。

宿に歸つて、寺の禮拜場を眺め下す讀書室で、この手紙をかき始め、食後その室で之を終る。

丁度十時半の鐘が塔の上からひゞいて、窓をのぞけば、寺の入口のかすかな燈明が暗がりの中に淋しく見える。今も御堂の内には、聖者の棺の前に同じ燈明がかゝつてゐるであらう。

夜はふけぬ、聖者の前に光りある
不斷の法燈、てらせ世の暗。

## 四月廿五日

壁畫、棺前、新門の發心、
古跡、古城

寺の鐘の音に眼がさめ、顏を洗ひ着物を着る間に、又鐘が鳴り出す。その音樂と共に朝飯のパンを食べる。部屋には何等の飾りもなく、電氣燈などもなく、昨夜は蠟燭のあかりをふき消して寝入つたが、鐘の音の起き居、殆ど僧院に居るに異ならぬ。

朝飯後直ぐにフランシスの棺前に行つて、その地下の燈明の前に默想し、それから畫を見る。この寺は三重になつて、その中段は棺前の拜壇になるが、上層にはジョットーが畫いたフランシス一代記の壁畫がある。そこの畫は中段のよりも破損がひどくて、昔の面影を微かに忍ぶばかり。處々手入れをした筆は、却つて畫を損じて了つた。然しそれにかゝはらず、ジョットーが澤山の人物を配合し、又色々の光景を列べて畫いて、立派に全體に整つた作を作り上げたのは、その技術と信仰との結果で、法然上人繪傳を大きくした樣な二十八幅が堂の兩壁に列んだ樣は見事である。一々細くは見なかつたが、フヰレンツェの十字の寺にも畫いてある光景の分はどうしてもあちらのに劣る事が明かに見える。その他の分の中には流石はジョットーと思へるものもある。

特に目につくのは、堂の端になつて、右にフランシスが小鳥に説教してゐる景と、左には、渇したものに岩の間から泉を與へてゐる景。鳥の説法は、春の空一面に碧く、茂つた木立の下に集つた小鳥の前に、老體の聖者が説法をしてゐる。之に對して岩間の泉は、岩ばかりの山の崖にフランシスが跪いて祈つてゐる。その下に泉が出、一人の百姓がからだを横にして、如何にも渇したらしく谷の水に口をつけてゐる。二幅が相對して面白い對照。

小鳥に説教の話は傳記フヰオレッテの十六章にある話で、一日フランシスが二人の弟子をつれて野路を行つた時に、小鳥が澤山ゐるのを見て、それに説教し始めた。小鳥は集つて來て、靜かにその説教をきいたといふ。その説教も面白い。

兄弟の小鳥等、お前達は神さまの御恩を澤山うけてゐる。それ故、いつでもどこでも、神さまを讃嘆するがよいぞ。神さまは、どこでも飛んで行ける樣に、お前達に自由を賜はり、又二重にも三重にも着物を下さつた。……お前達は、種もまかず耕しもしないに、神樣はお前達を養ひ、又水の飲める樣に、川の流れや泉をくださつた。お前達が棲み隱れの出來る樣に、山や谷、巣をつくる樣に、高い木、皆神さまの賜であるぞ。お前達は、紡ぎも縫ひもしないに、神樣はお前達や子供等に着せてくださる。神樣がどれだけお前達を可愛がつてくださるか、此で分からう。それ故、小さな兄弟達、お前達はこの御恩を忘れぬ樣にして、常に勉めて神樣を讃嘆しなければならぬぞ。

この説教は獨り鳥ばかりでなく、人間も謹んできくべきものである。佛教で「冥加を喜ぶ」といふのが即ちこの教で、神の讃美即ち念佛なり坐禪である。今の學校の教育には「冥加」と

いふ考が少しもないから、人情が殺伐に、冥加知らずの不平家や、煩悶家が澤山出來る。子供等の教育にもこの點は餘程氣をつける必要がある。神徳の讃嘆や、四徳の報恩は、皆、冥加を知る事一つになる。而して冥加を知るには、先づ天然を愛しなければならぬ。草花一つ踏んでも憐れに思ふ心情、犬の子一つ見ても此もいつかは佛と觀ずる情。又は御飯つぶ一つも、菩薩様として尊んで、その米粒に命をつなぐ有り難さを思ふ情、此の樣に、何事にも何物にも、冥加を知る心があれば、人情にも天然にも美はしさを見て、到る處に光明を見得る。フランシスが小鳥に對しての此の説教は、實によくこの教訓を示してゐるのみならず、又鳥に對しても、狼に對しても、慈悲を垂れたフランシスの人物が、よくその中に現はれてゐる。それを畫いたジョットーの筆も、住吉か土佐派の古畫に似て、誠に奧ゆかしく又あどけなく出來てゐる。

上段の畫をざつと見て、今度は中層から地下の下段におりる。此處はフランシスの棺を中央にして小御堂。棺の前には色々の飾りをして蠟燭が澤山上げてある。その前に跪いて祈念の人も居る。然しこの金色燦爛の飾りよりも、中段の暗がりから一穗の燈明に、聖者の遺骸が此處に納まつてあると思ふ方が、感は遙かに深い。その棺前に禮して中段に歸り、尚少し昔を見て、今度は町を東の方に見物に行つた。昔は富豪貴族の家であつた建物も、多くは貧民の住家になつて、壁ははげ、屋根は傾いて、昔の入口のアーチも石でふさいで物置になつたのもある。然し石垣の築き上げた庭、家の頂上に石の柱の緣側が殘つて、昔の御殿の物見臺の跡を傳へる。下には窓が僅で、上の方に見はらしのあるなど、何となう印度の富豪の家に似て、その上そこらを行く人の顏も、色が黑く、着てゐる着物の赤や緑の派手な色も印度に似てゐる。その町の一つに、石段を上つた家の入口に鸚鵡が三疋鳴いて居たので、愈印度を思ひ出した。

町は段々上つて市場に出る。そのぐるりには寺もあり、昔のローマの殿堂を寺に變へたのもある。そこから先、尚東には一つの城門。その門を通して尚先に城門が見え、その間を往來する婦人の赤緑の飾りと、城門や家々のはけた樣な色との配合が、非常に面白い。その上、此の邊の家や城門は、ジョットーの畫そのまゝで、近世の西洋の建築を見て、ジョットーの畫が實らしくないと思つた誤も一時に去る。ジョットーは此ういふ家や城壁を見たまゝに畫いたのである。この二つの城門の間に聖キアラ(Santa Chiara)の寺がある。フランシスカン派の最初の尼、聖クララの寺で、その遺骸を葬つてある。寺には入らずに先に行く路に、第二の城門を通してその先に第三の城門が見える。地圖と合はすと、此が即ち新門(Porta Nuova)で、フランシスが若い時に此の門の外に出、四方を眺めつゝ一念發起し始めた處である。この聖者の一生にとつて最も大切の關係のある處に近づいたのを喜んで、第二の門も出、新門に近づく。門のアーチの中に先の方の山が畫幅の如く納まつて見える。近く聳え出たのがスバシオ(Subasio)の山で、その先に碧い色の中に白雪を殘してゐるのがセレットー(Serretto)の山。病餘の身の、杖に憑つて城門を出かけた時、フランシスが此の景色を眺めて何と思つたか。

その前の歴史を云はねば分らぬが、このアッシジの町と昨日見て來たペルジアの町と戰爭をした時、フランシスは年が二十歳であつたが、その戰に加はつて敗北して、ペルジアの山の下、聖ジョヴンニの橋で、昨日汽車で初めてアッソ

シジの町の見え初めた邊)捕虜になつて、一年の間ペルジアで牢に入つて居た。一年の後にアッシジとペルジアと和睦して、捕虜はアッシジに歸された。フランシスはその後病氣で一冬は全く病床にくらしたが、春と共に少しづつよくなつて、少しは散歩し得る樣になつた。そこで、一日杖をついて野外の風光を眺めに出たのが、この新門。時は千二百四年で、卽ち日本では法然上人流罪の前三年。時候は丁度今頃の樣な春であつたであらう。十六七の頃から、當時の貴公子の風として、町の若者と一緒に遊んでまはり、酒を飮んでは唄を歌ひ、色々の旗を立て、笛や太鼓で町を練りあるいた。その若者が一年の間、敵の牢屋に捕はれただけでも、餘程心が入れかはる。通常の人間ならばその間にもふさぎ込んで、徒に心を苦めるであらうが、フランシスはこの間にも少しも困つた風はなく、自分は將來世界中に尊ばれる人間になるといつて、牢屋の番人も驚く程快濶であつたといふ。「世界中に尊ばれる」といつたのも、その時には、固より世俗の意味で、富豪貴族としての名譽權勢を夢みて居たのであらう。その血氣の青年が、捕虜の運命を逃れて、うれしや家に歸ると病氣。その病氣の直りがけに長い冬を病床ですごした後、一日春の日光にあたつて此の門を出た。心に非常な變化を來すべき原因は色々集つて居たのである。その變化を一念發起の方に向けたフランシスは、やはり已に聖者であつた。

フランシスの跡をたどつて新門を出る。壁一つで全くの別世界。壁と石垣との町は、夢の如く消えて、此處は全く天然の綠の世界。山は高く木は茂り、草原には一面の花。見上げる城壁の裾に流れる小川の瀧、路傍に湧く清水。特にフランシスの頃には、町は今の樣に貧民窟でなく、壁に畫のある家の並んだ町、貴族富豪の富に榮えた町であつて、その反對に山は木の茂みが多く、野には家や村は少く一面の綠であつたであらう。その場に立つてフランシスの精神が殆ど天然の默示の如くに、今までの樣なうか〳〵した生活が夢の如くになつたに違ひない。

城を出で人をはなれてこゝにひとり、
自然のうちに神見たるらし。
世をてらす法の光の始めをば
こゝに見そめし我が聖の跡。

草原にねて、古を忍びながら、城門を見てゐると、頭に赤や茶の巾をかけた女が、大きなざるをいたゞいて、高聲に話しながら來る。その後から白い牛に車をひかせて酒を運ぶ者に、褐衣のフランシスカン比丘がついてくる。一種の畫である。特に女の頭に物をのせたり、白い牛の車など、一層印度の樣で、畔に草刈る男の歌も印度のに似てゐる。從つてフランシスを思ふと共に佛陀の四門遊觀を思ふ。むかし城の町も、やはり封建割據の昔、このアッシジと同じ樣に城壁で圍んで、中には人家が群集して、外は雪山の麓の天然を見はらしたに違ひない。同じ樣な精神が、同じ樣に城門を出て、發心の端緒を開いたのも、決して偶然でない。四門遊觀の話の樣に、四方の城門で老病死等を一つ〳〵見て感が起つたかどうかは疑問であらうが、城門を出て城内の生活を顧みて、それを棄てたいとの心の起り始めたとは、極めて自然の事である。

城門の遊觀に心さめ、
人をさませし救世の人、
アッシジの聖、我がほとけ、
ひがしも西もあと一つ。

城門を出入りの人も時々あるが、その中に一つ驢馬に牽かせた車が來た。彩色の模樣を畫いて、その中に「今日は再び來らず」(Oggi non si rimette)と書いてある。一聖の事を考へてゐ

る時に、車引きにこの格言を教へられるのは妙な奇遇である、人はいつも今日は再び來らず、と考へて、一つ〳〵の行にも、考にも、一生に一度の今日と思へば、うつかりは出來ないが、この簡單な事が中々出來ない。その中に又町の方から女の子が泉の水を汲みに來た。

ほとばしる泉汲む子よ、法の水
むかしかはらぬ味知るや否。

此は人々が各自分に問ふべき問題である。城門から歸ると中食。三四日間廢した中食がまた始まつた。食卓は又イギリス人で、フランシスの事や畫の事の話が面白い。食事はよい加減にして、ルガノ以來初めて會話らしい話をして面白かつた。

食後にはサバチエ氏が、宿の屋根の上につれて上つて、眺めの中に入る場所でフランシスに關係のある處を一々教へてくれた。先づ東の方の山で、スバシオの峰は古はもつと茂つて居た。フランシスの頃に、アッシジに入る大路は、あの野の中の道で、それに直角に交はつた道のこちらに、順禮の宿泊所があつた。あの二本のシプレスの木のある處が、フランシスの初めて小鳥に說教した處で、それからは始終小鳥に說教した。傳記に出てゐる小鳥の說教は、あの山に見える村と村との間。西の方の丘の上ヘルジアの町の下に見える大きな家が、古の癩病患者收容所で、フランシスが泊つた處。それより遙か西に、かすかに青く見える山が、アルヴェルヌ(Alverni)の山で、フランシスがキリストの示現を受けた處。色々その場を見つつフランシスの話をきく。特に一生をフランシスの研究に委ねて、殆ど此のアッシジの住人になつてゐるサバチエ氏からそれをきいて、身は七百年の昔に生き歸つた樣な心地がした。傳教大師や法然上人、惠心僧都や慈鎭和尚など、一々此の樣に研究する人が出來なければならぬ。日本の佛教の信仰は、その中から湧き出よう。現にサバチエ氏はフランシスの後を追うて、アッシジやその近傍に、色々の慈善事業をおこし、今のフランシスカンの比丘も及ばぬ勢力を作つてゐる。

それから町のあちらこちらを見て廻つた。古の宮殿や寺の跡、順禮の宿など見て、山を上つて城堡の一番上に上つた。山の頂、青草の原の上に、石で築きあげた壁や塔が天をつく。此の町全體も城壁で圍んであるが、特に山の頂に平城を作つたのが此の城堡で、土地の人は大岩(Rocca Maggiore)と呼んでゐる。城門のおとし橋や、櫓など此の城でも同じものを見、それから闇い廊下を百間も過ぎて先には又塔。その頂からの眺めは實にはれやかで、昨日の墓場からの眺めを一層廣大にし、その上四方を一時に見はらす。その景色の大きさを一々述べても仕樣がない。石門に生えてゐる黃色の花の名を問へば、壁のすみれ(violetta di muro)だといふ。その名に背かず、どこにも石壁には咲いてゐる、前にボルドゥで寺の壁に見たのも此であつた。それ等の花を摘んで塔を下り、今度は山の草原にねて、又同じ景色を眺める。風は強いが、草原にねると、日の光りが溫かで、風にゆられる草花が敷物の樣にひろがつた先は城壁、その上に遠の山々。見上ける景色も面白く、下の野には、先に教へられた、一本杉や、僧院から向うの山々、その村々など一目にあつまり、その間にフランシスの寺が著しい。此の城壁にもフランシス、は上つた事があらう、この花もその頃の花の子孫ではないか。又いつもの樣に花を摘んで下りた。

夕飯の後にイギリス人の間に入つて、又大畫に繪の話が出て、それから此の手紙をかき終つた。此から湯に入つてねる、今晩も窓から見ると、寺のあかりがかすかに暗の中に照る。

## 四月二十六日

天使の聖母寺、說法の辻、

日曜の勤行。

今日は下の方の寺に順禮が來るといふので、朝飯後その方に行つた。下の方の寺といふは「天使の聖母」(Santa Maria degli Angeli)といふ寺で、町から半里餘の野中にある。フランシスは新門で發心の端緒を得てから、色々の苦勞をして、父親から勘當を受けても屈せずに、信心の喜捨をあつめて寺々の修復にかゝつた。この聖母の寺の修復を終つた後、こゝで祈念の時に、身を捨て、錢も貯へずに、世界に法を說いて廻れといふ命を、キリストから受けたのは、發心から五年目で、此がフランシスが獨りの修行から轉じて世を教化する元である。その跡に大きな寺が建つて、今は野中に屹立して、此の宿から眞下に見える。

城門を出て山道を下り、野中の大路を行く。今日の日曜には順禮の來るので、町のものがぞろ〳〵見物に出かける。粗末ながらにはれ着を着て、男は紅や樺の襟かざりを派手やかに、女も頭かけも紺に色々の縫などあるのを着て、戯れながら行く。道を行く中には、後の山の上の寺々にも、行く手の聖母の寺にも鐘がひゞいて、春の野に何となく氣がはれ〳〵する。寺の近くに來ると、群集も多くなり、その中に赤や青の旗の様なものゝ行列が見える。そばに行つて見れば、此が即ち順禮の行列で、色の赤やけた百姓が、白の法衣をきて、その下から象の脚の様なズボンを出し、而して手には蠟燭や、杖や、又は旗の様に見えた十字架を持つて、列を整へて堂に入つて行く處。堂の中には此等の順禮の歌もきこえるが、堂のぐるりの廣場は一面に賣物店、吳服類、食物、風船玉、あらゆる店が並んで、村のものが順禮を見たり店を見たり、ぶら〳〵してゐる。又一方には木の下に高い臺をおいて、一人の男がその上に立ち、マンダリンといつて琵琶に似た樣な樂器をもつて、何か物語を語つてゐる。その語り工合は印度のラーマーヤナ語や日本の平家に似てゐる。こゝのは立つて語つてゐるのと、勢込んで聲をはりあげるのとが違ふだけ、先づイタリアの薩摩琵琶といつてよからう。堂の中に入つて見ると、此處も群集、混雜は外と同じ事で、立つてうろついてゐるもの、跪いて禮拜してゐるもの、懺悔室に懺悔をしてゐるもの、それに男の順禮の一行列と女の一行列と、和尚・從僧とを加へて、有難參りや遊散かた〴〵に入り亂れてゐる。

堂は隨分廣大なルネサンスの御殿作りで、眞白の壁の處々に色々の畫などがある。さて山の上のフランシス寺の莊嚴深邃と違ふ。こゝの堂の眞中に小さな小屋の様な堂がある、此が即ちフランシスの大發願の源になつた元來の聖母堂で、そこらの辻にある辻堂に同じく奥行も三四間にすぎない。フランシスは、一生時々此處に來て祈禱をして、その死ぬ時も遂々病軀を、此の堂の側に移させて、その命を終つた。その臨終は、千二百二十六年の十月三日、日は西の山に落ちて、星の光がこのオンブリアの野に輝き始めた頃。山の上の寺々からは七時か八時（この土地の云ひ方では一時か二時）の鐘が野を亙つた時であつた。二十七の年にこの堂で大發願をしてから四十四で死ぬまで、此の聖者が常に來ては祈念をした貴い故跡である。フランシスの頃には、この野邊には木立が茂つてゐたといふから、この小さな辻堂も林の中の靜かな處であつたであらう。せめてはこの堂を元の野中において、その傍にシプレスの木立でも殘して、聖者の昔を偲ぶ樣にすべきに、フ

ランシスの死後三百餘年たつて、今の大きな堂を建て始め、元のゆかしい記念をその屋根の下に閉ぢこめてしまつた。フランシスが入滅した時、天に輝いた星も、再びこの堂の屋根を照らす事が出來ない樣になつた。屋根にも草、壁の石にも草。順禮等はこの堂に入つてそれから大堂の中を練る。聖者自身の淨い精神は、こんな大げさで無趣味の大堂で、かういふ儀式で亂される。堂の中の群集に驚くもあり、又かう考へると悲しい樣な氣がして、急いで堂を外に出た。外からは順禮の一隊がピー〳〵ドン〳〵と樂隊をやつて來た。書物の賣店や何かと一緒に騷がしいばかり。かういふ光景を見て、キリストがエルサレムの殿堂に行つて、殿前の物賣を追ひ拂つた昔を想ふ。キリストは、彼が怒つたといふ。性急であつたとかいふ人もあるが、此の樣な聖者の遺跡に此の樣な光景を見れば、キリストの行に同情を表して、如何にも尤もであつたと思へる。

この寺を去つて元の道を少し歸り、それから野中の路に入つてアッシジに向ふ。山の上の家家、その西の山脇のフランシス寺が、日の光に一面に輝いている。野中に見える白い寺院が、昔の癩病院だと教へられたが、フランシスが病軀を天使の聖母堂に移す時、その前に來て、暫く輿をとめさせて、アッシジの町を見返り、手を擧げて、生れた地に最後の別れをしたといふ處。今見るアッシジの眺めは多少その時とは違つても、此が聖者の一生の中に、故郷に歸る度に度々眺めた同じ山、同じ町と思ふと、單に他鄕とは思へない。

それから野中を東に行つて、サバチエ氏に教へられた二本シプレスの處に來た。昔の本街道といつても今は石高の荒道である。それと他の道が交叉した處が、少し高地になつて、あたりに木立が少しある。その草原にすわり込んで考に沈むと、あたりは靜かに、人も來ず、只小鳥の歌ふ樣な聲のみきこえる。

その昔、ひじりにきゝし法の聲
くりかへしてたゝへ小鳥かな。

フランシスが小鳥等に說教して神の惠みを說いたのを想ひ、

つむがねど刈ねどこころもたれ惠を
父にたゝへて小鳥等の鳴く。
小鳥等も耳かたむけし御教は
法性自備へたる法かも。

そこで杖をついて、昔の道を町に向つて上る。フランシスが幾度此の道を歩いたか。

百千たび聖のすぎし足の跡、
目には見えねど我れ尋ね來し。

道ばたに繫ぎ放しの驢が草を食つて居る。

あはれ驢、背にのせて行け、今にだも
足に血しほのにじみ來まさば。

フランシスはキリストの跡を慕んで、手足に十字架の傷が現はれ、血が出たといふ。その足でこの石道をはだしであるいたかと思へば、指の間に魚の目ができて困る位は何でもない。山を大分上つて城門に近づき、それを見上げては、懷古の情が一層おこる。

ふるさとに歸る城の戸見上げには、
まことに故郷の父をこひけん。

この城戸から町に入つて宿に歸ると、遠く山山が曇つてにはか雨が來た。

中食後暫く休んで、フランシスの寺に行つて壁畫を見る。今日はあかりが薄くてよく見えないが、時々照る日光にはつきり見える。畫の中なかで、大きなアーチの臺合、そのアーチと天井と壁とに畫をかき分けたジョットーの作品は見るに從つて感服する。四時になつて夕べの勤行が始まり、僧侶の讚美の聲がオールガンにひゞき互る。この聲をきいては畫を見、畫を見ては又經をきく。

五時になつて塔の上の鐘が大小律呂を合はせて鳴り出す。その中に役僧が聖體（祭りの本尊）を安置し、香爐や蠟燭を持つた子供等が並ぶ。オルガンとセロとで本式の勤行が始まり、コーラスは四人の聲で、此は町から來たものが歌ふ。香の烟がアーチに滿ち、音樂は天井から天井にひゞき亙り、燈明の火にてらされて、眞中の天井にある壁畫の、天上の聖フランシスが神々しく見える。この堂で音樂（而も四聲合奏の立派な）をきからうとは思はなかつた。建築も畫も音樂も揃つて、その上、それが聖者の棺の上の勤行で、特に興が深い。今日はよい日曜を送つた。宿に歸つた頃には、日は西に傾き、下の天使の寺は野中に屹立し、二本シプレスは黑くしよんぼりと見える。

食事後は又イギリスの人等と畫の話。その中にフランシスの傳をかいたお婆さんのミス、ストッダート（Miss Stoddart）といふ人に紹介されて、法然上人の事を少し話したが、日本にも誰かフランシスに似た人があらうと思つて居たが、一寸書物などで見ても分からなかつたと、大喜び。法然上人繪傳の寫しを見せ、又それから畫の話に歸つて、ラファエル以後の墮落の原因や、ジョットーの畫いたフランシスの顏が必ずしも肖像でないが、當時の人心に映じた跡である事や、面白く有益な話で、互に別をつげて、各部屋に歸つた。イギリス人には實に話の合ふ人が多い。

## 四月廿七日

### カルツェリの庵棲、グビオの狼

今日はきのふに比べて一層の好天氣。朝から日光がまばゆい位に照つて、この山の上にも春はたけたと思へる。朝からフランシスの隱遁の場所であつたカルツェリに向つて出た。町を東に上つて、堂母の後の廣場に出る。此處は、フランシスが町の小兒等に「氣狂よ氣狂よ」といはれ、亂暴にあつても、それを忍んだ場所である。そこから行く手、段々上り路の先に城門があつて、住み荒れた家の屋根の上にスバシオの山が聳え、峰に殘つた雪が半月を浮べた形に白い。上りつめて城門を出ると、こゝは新門の外と違つて、如何にも山の中のやうな感があり、山の岨に一面のオリヴ畑、山には一面の青草。眺めは先のスバシオの峰を見上げるばかり。山路を段々に上つて、眺めはオリヴ畑の上から下の平野を見晴らす。上るに從つて、草の緑も少くなり、オリヴの畑はなくなつて、山一面に灰色の石原。道ばたの岩に腰をかけてゆつくり休みながら眺めを貪る。黑ずんだオリヴの畑が麓に延びて、その盡きる先は平野の麥畑。その萌ゆる綠の處々に雲の影が黑のまだらを作つて、綠の海に薄墨の浮島を浮べたやうに見える。あたりには木立もなければ、鳥の聲もせず、背後の山の岨に岩をつたうて群がる羊の鈴や、そのめい〳〵と鳴く聲が時々きこえる。休んでは上り、上つては休む。路は段々石高になり、灰色の岩にあたる日光がまばゆく、比叡山の雲母坂を上る樣な氣がする。

　故郷の日枝の御山ぞ忍ばるゝ
　　ひじりの跡をたどる山路に。

雲母坂と同じやうに、道が處々分かれてゐて、どれかと迷ふ。先に十字架のある方をたどつて行く。

　これやかれ迷ふ心の道しるべ、
　　行く手のさきに十字架の立つ。

山の鼻一つまがつて谷の奧、山の間に木立が茂つて、聖者の跡を傳へるカルツェリ（Carceri）即ち牢屋精舍の古域と見える。谷に沿うて路の盡きる處に庵室の入口が穴の如き處にあ

る。戸をたゝくと、中から木の履の音をかちりかちりとさせ、僧が戸をあけて庭へ入れてくれた。家の中から出て來た他の老僧が笑顔で案內してくれる。先づ第一は古い僧院の一部を堂に作つた一室。その正面の聖母はフランシスの時からのだといふ。その上にある僧房は、一方は岩石の崖を壁にしたもので、小さな僧房の窓からは谷を見下ろす。小さな狐の穴の樣な戸口をくゞつて下におりる。三疊に足らぬ全くの岩窟、その岩の床の少しくぼんだ處に、木の枕がある。即ちフランシスが此處に來ては寢た處だといふ。山にいね岩を枕に―といふのは日本の山伏修行できく事であるが、フランシスはそれを修行とも苦行とも思はず、あたり前の事として行つたのである。その岩屋に寢起きをして、水とパンとの外に飲食もなく、ひたすら神に祈念したフランシスは、吉水の禪房に世を離れて唱名念佛に餘念のなかつた法然上人とよく似てゐる。近世の人は山中の隱遁といへば、直ぐに嘲つて、小乘の修行だとか、厭世の泣き根性だとかいふ。が、それはかういふ隱遁の聖者の心根を知らないものである。

法然上人は小乘の修行、聖道の難行に勞つて淨土を欣求したのでなく、聖道自力の修行の中に他力本願の有難みを知り、小乘のやうな禪房隱棲の念佛三昧の中に、衆生濟度の力を得られたのである。それと同じくフランシスも、この谷間の岩屋に引きこんでは神に祈り、その祈念三昧の中に得た勇猛心を貯へて、世間に出て衆生の救ひに從事したのである。この谷間の水に洗はれた淨い心を持つて、世に出ては癩病者の傷を拂うてやり、この岩窟の中で神から受けた示現に基いて、キリストの行を世の人にも勸めて廻つた。その勇猛征鬪の一生の力は實にこの石の床、木の枕に眠る間に養はれたものである。

　岩の根にたえぬ祈りぞ、神の名を
　　世に獅子吼する力なりける。

その岩窟の上の岩室には、フランシスが始終身を離さなかつた十字架が安置してある。木彫のキリストの像は、剝げた樣にあはれに見えるが、此が即ちこの聖者の念々歸敬の本尊であつたと思へば、その姿は、黃金珠玉の像も爲に光りを失ふ。十字架の室を穴をくゞつて出ると、谷の淵にのぞんで深い底を見下ろす。今の僧は之を惡魔の淵と名けてゐる。聖者も念々常に惡魔の淵に落ちない樣に十字架に祈つたであらう。

　人の世は目にこそ見えね、底深き
　　ふちに惡魔の充ち滿ちにけり。
　ひじりさへ惡魔のふちを目のあたり
　　谷のかげにもいましめにけり。

そこから一つ橋をこえて、木立の茂つた山岨の道に出る。老僧は、この先の門をあけて園に出る樣にと教へて、別れて行つた。獨りで木の藻をたどり、門一つあけると、此も同じ山の岨ながら草青々とした園の道。兩側にシプレスの木立の並んだ奥には聖母堂があり、草原にはマルゲリテの白菊の花、岩蔭にはすみれの香り、僧院の岩屋とは又別の世界を作る。聖母堂に行つて、日あたりのよい草の上にねて、谷間の靜けさに日光を浴びる。花は枕元に咲き亂れて、その間に飛ぶ小さな蟲が花に戯れる。

　岩にいねしひじりの床にくらべては、
　　草のしとねは錦なりけり。

木立の間には鶯の樣な鳥の歌ふ聲が常にきこえ、その間に時々閑古鳥の聲、向ひの山の羊の鈴。寂靜のこの谷に祈念三昧の場所を選んだ人の心を忍ぶ。

　世をはなれ心すみゆく谷の間に、
　　禮讚回向、もろ鳥のなく。

長い間この草の上にねてから、元の僧院に歸

り、倚・度・聖者の岩の床に敬禮をして中庭に出る。その眞中に井戸がある、それはフランシスの力で奇蹟に湧いたと云ひ傳へる井戸。フランシス以來幾多の修道僧がこの井戸の水にパンを味つて、その祈念に味の日を送つたか。その水を飲み、摘んだ花に水をかけ、

その上ゆ絶えせぬ泉汲みあげて、
甘露のあぢに喉うるほしつ。

僧に禮をして院を出で、倚・度その門を顧みた。スバシオの山が二つに割れた様になつた、この谷間、世間を離れて全くの山奥。土地は高くても、四方の眺めは山のみのこゝに、この岩窟の精舍を營んで修行した聖者の心根は、印度の岩窟に自淨其意の佛勅を實行しようとした比丘の心である。僧院の屋根に出るかすかな烟は、僧が貧しい糧を煮る烟であらう。石垣の下に犂鐵の音は、野菜畑に神の惠みを得る僧の仕事であらう。今の佛教もキリスト教も、精舍生活の貴さを忘れ始めたのが、その墮落の大原因でないか。實踐の修行で初めて色讀信仰の力は出よう。今の僧はどうであるにしても、自分等の如き精舍生活の門外漢は、倚古の聖者達の眞の心根の萬分一にも達しないであらう。

谷に沿うた路を元に下る。僧院の屋根は早くに見えずになり、谷間の木立もかくれる。山角を一つ廻つて、路は廣く平野を見下ろす高い崖に出、そこからアッシジの城郭、寺塔、家々が脚下に手に取る如く見える。フランシスがあのカルツェリの谷間に退いて祈念を凝らした後、町に説教に出ようとする時、この山角にきてあの町の壁や家を眺めて、何の感があつたか。

谷間を出でゝ山の上、
一むら家の人の世を
見こし聖者の眼には、
救世の光りの輝きにけん。

段々下りると、又元のオリヴの畑、花の草原。城門を入つて、昔フランシスの亂暴に會つた廣場には人の影もなく、堂母の塔から六時(即ち正午の十二時)と十五分を打つた。堂母の前のフランシスの銅像は日が照つて白く光つた敷石の間に一人無言で立つてゐる。

宿に歸ると人々は食事。カルツェリの僧院から取つて來た花を分けて、一つは自分の机の上、一つはミス、ストッダートに送つた。机を同じうする人等も、カルツェリの花ときいて、手に取つて一々嗅ぐ。ミス、ストッダートは、干ぼしにして殘すといつて喜んでくれた。此等のイギリス人は皆フランシスを敬愛して、カルツェリの花をかく大切にしてくれる。國は東西に距つても、同情は人と人とを心から結びつける。

午後は休んで宿の讀書室ですごした。フランシスの寺や、下の平野を眺めては本を讀む。その中にフランシスが狼に說教してそれを馴らしたのは、話でなくて、事實であつたことを書いたのがあつた。このアッシジから十里ばかり北に、グビオ (Gubbio) といふ町があるが、その城外に狼が出て人が多く殺される。それをフランシスが憐んで、狼の處に行つて說教をした處が、狼はフランシスになついて、終におとなしい犬の樣になり、町のものはそれを穴倉に飼つておいたといふ。此の話は古い傳記にあるが、グビオにその狼の墓と傳へるものがあつて、その頃に彫りつけた碑文が殘つてゐた。話の樣な話であると思つて居たが、此の頃その邊を掘つて狼の髑髏を發見したといふ。その狼の活きてゐた時から飼つて、死んでその墓を作つた。その證據が碑文と骨とで出て來たとすれば、その話が事實で、狼は犬の樣に飼はれて居たに違ひない。

夕食の机で色々の話から、菩提囘向の話

をしたら、イギリス人の婦人等は、その様な高尚なことが日本に昔からある事を知らなかつたといつて、特にその中でロマ教會に屬する婦人達は大に得意がつた。

## 四月二十八日

聖者の生家、聖者の石像、神の鳥、ダミアノの庵室、太陽の頌、聖クララ、女子教育

一天はれ渡つて空は眞青の深綠。フランシス寺の塔や壁が日光に白く照り、碧空に鮮かな輪郭を畫いて、ジョットーの畫そのまゝ。堂の中は、外の日光にくらべて暗がりの中に燈明がかすかに、晨朝の勤行の聲がきこえる。拜壇の前に跪き、瞑目祈念して眼をひらけば、天井の壁畫が輝々しく、その中にフランシスの姿がはつきり現はれる。

堂を出て、本通りを東に中央の廣場に出る。坂を上れば、堂母の圓塔と鐘樓との間に、スバシオの山が見え、眞青の空に半月形の殘りの雪が一層白く見える。廣場の横路に入つて、フランシスの生れた家の跡に建つた寺に行く。寺は新しいが、此處が其の聖者の呱々の聲をあげた處。母親の親切には涙を流し、父親の譴責には屈せず、出家修行の決心をした家の跡。町の中央に近い富豪の家屋、その富豪の財産も何も顧みず、却て貧を自分の理想に、キリストを主人として事へた人も、一時はこゝを住家にしたのである。

又坂を上つて堂母に行く。その正面が古いビザンチンのゆかしい作りにひきかへて、中はバロッコの俗な作り。然しその中にデュフレの刻んだフランシスの大理石像がある。堂の前にある銅像はこの石像の寫しで、瘠せた頰の肉には衆生濟度の熱心を現はし、傾いた首には信心服從の德を示す。等身の石像は活きたその人の姿を忍ばしめる。

フランシスが子供に狂人と呼ばれた處を、尚一度すぎてスバシオの雪を見上げ、それから此の頃皇太后の盡力で出來た公園に、暫く四方を眺めて、下の新門を出た。このゆかしい跡の草原にねて、はれた空に一點の雲もない深い碧色の天を見れば、その中には光りのない寂光が滿ちてゐる。その空をかける燕が、高く上つては姿を碧空中に失ひ、飛んで來ては又眼の前をすぎる。ジョットーの畫にある碧空の天使も、此から來たかと思はれる。ダンテが天使を「神の鳥」と呼んだ事も思ひ出る。此等の燕は、フランシスが此處で發心の端を開いた時にも飛んで居たであらう。

君が上を神の御使守りけん、
あを空およぐ燕にも似て。

そこから坂路をおりる。オリヴ畑の茂つた間に麥があをく、けしの花が處々に深紅に綠を破る。大分に下りて聖ダミアノ(San Damiano)の庵室に着く。戸をたゝいて僧に案內して貰つて、その中を見た。

このダミアノ僧院は、フランシスの一生には關係の深い處で、新門の發心の後には、時々貧民の世話をしたり、癩病者の集つた所に行く。父親はそれを好まないで叱る。或る日フランシスはこの堂に來て、十字架上のキリストを拜んでゐる時、キリストが、此の堂を修覆せよと命じたと聞いて、一人僧が留守をして居るだけで荒れはてたこの堂を修覆し、人にも助けを乞ひ、自分で山から石を切り出して修覆を終つた。それから後も始終この堂に來て祈念をしたが、父親の命で絹を賣りに行つた時、絹も馬も賣つてしまつて、此の堂に歸つて來て、その金を番僧にやらうとしたが、番僧はフランシスの父親を恐れてそれをうけない。そこで、フランシ

スはその金を窓の外にほふり出して、この堂内に住み込んでしまつた。父親はそれをつかまへに來たが、その時は壁が不思議にフランシスを隱したといふ。その後父親から勘當をうけて、全く自由の身となつてから、他の寺の修覆をしたり、癩病者の世話をするに、暫くは此處に住んで、この堂の寺男の樣になつて居た。その後修道の仲間が殖えたので、フランシスは別の寺即ち天使の聖母の側に庵室を作つた。千二百十二年にクララ (Clara, Chiara) といふ貴族の娘が出家して弟子になつてから、フランシスはこのダミアノの庵室を尼寺にして、クララやその外の尼を住まはせた。それから十數年經て、フランシスは病身になり、且つ眼も見えない樣になつたので、死期も近づいたのを覺悟し、旅に出る前にクララやその他の尼達に別れをするため、一度この庵室に來た。直ぐに出發のつもりが、發熱のために延びて、終に二週間この庵室に泊つて、尼達に介抱をうけた。然し尼寺に男の僧は泊る事は出來ないから、茅や竹で小屋を作つてそこで寢て居た。名高い「太陽の頌」(Cantico del sole) といふ讃美歌を作つたのは、この庵室の外の小屋であつた。その年の秋に、下の方の天使の寺で死んで、その死體をアッシジに歸す時に、フランシスは死體で尙一度此のダミアノに來て、尼達に永遠の別れをした。それ故この僧院はフランシスの一生にも、又その最初の女弟子のクララにとつても大切の關係のある處。

案内せられて先づ堂に入る。小さな堂の中に、色々の佛像があつて、田舍めいた飾りはあるが、低い壁に丸天井の素質な堂。左にはクララの念持像や、その聖晩餐のパンだとか、色々遺物がおいてある。その中に鈴の樣な小さな鐘があつて、それを打つてクララが尼達に勤行の時間をしらせたといふ。たゝいて見ると小さいながらに實に清い音がして、餘響が永くつゞく。

音すみてきよらにひゞく鐘の音は
　ひじりクララが心なりけり。

右の壁には古い窓の跡がある。卽ちフランシスが金を投げだした窓だといふ。

窓の外黃金を投げし心にて
　つきぬ寶を世に頒ちけり。

その正面の拜壇をすぎて、堂の後の方は、僧等の集る所になつてゐる。フランシスの時には、そこに堂の拜壇があつて、彼が堂塔修覆の告けをうけた十字架は、そこに立ててあつたといふ跡に穴がある。然し今はその十字架は市中のクララの寺にある。クララの死後、この寺の尼達が市中に新しい寺を得て、それに移る時、十字架をも一緒に持つて行つたのである。

本堂の横に小さな堂がある。そこに元はクララの棺を納めてあつて、その棺から始終香氣が香つて、室全體に妙香が薰じたといふ。

なきからの香りし跡は年經ても
　殘んのかをり心にぞしむ。

その隣りの室は、今は寺僧の室にしてゐるが、そこがフランシスの茅小屋のあつた處で、「いと高き主にほまれあれ」、尊き我が兄、輝く日、神の姿のいと高き日」と、日月水火の讃美を歌つたのはこゝである。今の室は窓一つだから、その窓を通して碧空も見え、日の光りも今日は特に暖かくさしこむ。然しフランシスの茅小屋は、云ふまでもなく汚いいぶせき小屋であつたに違ひない。そこへ鼠が始終來てあばれても、フランシスはそれを苦にせず、特に目が段々惡しくなつて、殆ど盲目になつた後には、愈神の光りを讃美して、始終樂しい報恩謝德の心を抱き、この「太陽の頌」を歌つた。その心根は尋常一樣の勇氣や信仰で出來る事でない。フランシスは肉眼は見えないでも、心の眼には神

の光明、慈悲の光りが滿ちてゐたのである。その事を思ふ、法然上人の「月影のてらさぬくまはなけれども、ながむる人の心にぞすむ」の歌を思ひ出す。

　目しひて、猶も日の德たゝへにし
　　そのところこそ、日の光りなれ。

それから、クララの祈禱堂、食堂、寢室、その他尼達の室で、今は僧院の僧が住んでゐる處など、隅なく見て、一々古を偲ぶ。特にその僧寺の壁と壁との間の、屋根の上が小さな花園になつて居て、それがクララの花園であつたといふ。屋根の上に土を盛つて、黄や紫の香る花を植ゑ、壁に沿うて石の腰掛がある。案内の僧に案内を辭し、その腰掛にかけて、日あたりの光りに浴して靜坐する。僅かな壁の間、欄干の上の草花を透して、さきにシプレスが近く二三本青黒く聳え、綠の野、谷向うの山が遠く見える。紺青色の空はあくまで深碧く、遠くになるに從つて、稍かすんで、山の端に朗かな碧瑠璃を浮べる。花の色々に山の色、シプレスの青に空の瑠璃、世は光りばかりに充ちて、あたりには蟲の聲すらない。

　香りみち光りしづけきこの園に
　　ひじりの尼の姿しのばる。

見てゐる間に、時々小さな雲が山の端にあらはれ、日光に照らされて白くひかり、暫くして消え、又現はれる。

　その上の清き姿を偲べとや、
　　ま青のそらに光る白雲。

日のあたゝかさに、ぼんやりそこに坐つて時を經た。歸りがけに園の花を摘んで手帳に收め、

　つむ花の香りを袖にをさめこそ、
　　クララひじりのかたみにぞせん。

猶一度、餘香の室、フランシスの小屋の跡に靜坐して後、庵室を出た。

庵室の前の草原にね込んで、又日光に浴してあたりの景色に見とれる。オリヴの茂りの中に古びた壁の庵室。フランシスの古も、眺めはこの樣にあつたであらう。左に高く見える山から石を切り出して、この堂を修覆した、貴公子のあはれの姿がそこに見える樣に覺える。

　この壁の年へし石の一つだに、
　　ゆかし、聖者の御手ふれし跡。

岡を上つて城門に向ふ。正午の日光が石道を照らして、砂も光る。茂つたオリヴの下に、けしの花の深紅が、風にそよいでゐる。世は俄に夏になつた樣である。空の青さに石の白さ、木の葉の茂りに一輪々々淋しげなけし。かういふ著しいはつきりした深い對照が、イタリアの畫や詩に表はれるのも偶然でない。日本の歌には春霞、イタリアの詩には碧空。日本の畫には櫻の雲、イタリアの畫にはシプレスの木立。「花の雲、鐘は上野か淺草か」と沈思した芭蕉は、どうしても、日本の佛教詩人。「常春の日にたゝへし香る久遠の薔薇」に聖母を見たダンテはイタリアのキリスト教詩人。此の樣に、兩方に特色はあつても、聖フランシスには法然上人の面影を見る事が出來る。

新門を入つて町を行く時、聖クララの寺に正午の鐘がひゞく。

　碧空にひゞきも渡る鐘の音は、
　　クララが清きこゑとこそきけ。

午後はこの聖クララ(今のイタリア語ではキアラ)の寺に行つた。この寺もフランシスにもクララにも關係の深い地に建つて、今は寺と共に尼僧院がある。クララといふ婦人の聖者は、このアッシジに威儀を振つた大名でファヴリノ(Favorino)伯といふ人の長女であつた。この大名はスバシオの山の一角に城を持つて居たが、冬はアッシジの屋敷に住つた。今のクララ尼僧院の下の石垣はその屋敷の殘りだといふ。

クララはこの伯の長女で名高い美人でもあり、妹が二人あるのみで、男兄弟はないから、伯爵の財産を譲らるべき身であつた。それに子供の時から慈善の心が深く、貧民の世話などしてあるいたが、十八の年に縁談が持ち上つて、父親の考へた婿は、どうしてもクララの氣に合はぬ、當時普通の放蕩の貴公子であつた。そこにフランシスが、アッシジの寺々で清貧の教、キリストの愛を說いて人を感化するのを耳にし、一日その說教をきいて、クララは同じ様な出家修行をしたいといふ考を起した。クララの屋敷の直ぐそばで、今のクララ寺のある處に、元は聖ジョルジョ(San Giorgio)といふ寺があつて、フランシスは、初めにそこで說教をしたのであるが、後にも屢說教をした。クララがフランシスの說教に感化せられたのもその寺で、即ち今のクララ寺の地である。クララは出家の考を起し、母親にも話さず、只伯母にのみ相談して、フランシスに剃髮出家を賴んだ。丁度佛陀と同じ様に、フランシスは初めは婦人を出家の團體に入れる事を躊躇もし、且つクララにその難行を諭したが、クララの決心は動かない。そこで遂に出家入道を許して、復活祭の夜を期して、山の下の天使の寺に來させる様に手筈を整へた。その日、即ち千二百十二年三月十八日(即ち法然上人の滅後半月ばかり)にクララは、伯母と他に一人の婦人を伴つて、夜家を出、此間通つたマヨナの門を出、畑の間を過ぎて天使の寺に來た。そこで入道の式を行ひ、フランシス教團の最初の尼になつた。その後クララの妹のアグネス(Agnese)も伯母と共に尼になり、その他の同行も出來、フランシスは元自分の居たダミアノの庵を尼寺にして、クララをその長にした。クララの死んだ後に、ダミアノは城外にあつて危險の多いため、別に尼寺を作つたのがこのクララ寺で、クララの遺骸も、フランシスの發心の十字架も、この寺に移した。

堂の中は簡單で殆ど何もない。天井に畫はあるが、修繕の足場で見えない、地下にはクララの棺を安置した大理石の立派な堂がある。燈火をつけて見れば、クララの遺骸が見える様になつてゐるといふ事であるが、それよりも薄暗かりの堂内の方がよいから、燈火を辭つて暫くその中に靜坐した。

それを出て、本堂の横の戸をあけて貰ふと、そこに小さな堂があつて、裝飾も中々よく、フランシスカンの聖者の繪が(ロレンツォなどの筆で)列んで、クララも妹のアグネスもその中にある。その堂から鈴をならすと、壁の窓を開いて中から尼さんが出て來て、元ダミアノにあつた十字架を見せてくれる。窓には鐵の柵があつて、思ふ様には見えないが、蠟燭のあかりに戸帳の中にある十字架を見上げる、作は意外によい。ビザンテン風ではあるが、キリストの顏つきには活きた表情が見える。十二世紀の信仰に養はれ、その上、心に苦悶のあつたフランシスが野外の靜かな庵室の中で、此の十字架のキリストに祈念し、その示現をうけたのも無理でない。野中の庵室によくこれだけの作が安置してあつたと思へる。然し畫として作のよしあしは別問題で、この畫がフランシスを導いたといふよりは、フランシスの心の中のキリストが、この畫の中にのり移つたのである。

君ならでたれかこの畫に言きかん、
　こゝろに神のたまやどさでは。

朝はダミアノ、午後はクララを見て、フランシスとクララとの大切な跡を一日に見た。外の寺に行くよりも今日は野原の見はらしでくらさうと思つて、岩の上の城堡に上り、その草原にねころんで、いつもの様にぼんやり四方を眺める。同じ野、同じ山ながら、今日は又はれた空

の淨い空氣に、野も山もすき透つた様に見える。全くねこし空のみを見ると、その青さの高い深みに無量の光りを見る。下の寺々の鐘が何か遠い下界の聲の様にきこえる。

和かな草原をあるいて山を下り、新しい細道を辿つて町を見下ろしつゝオリヴ畑に下りる。町に出た處に僧院があり、その向ひに貧民の女の子の學校といふ札の家がある。その前に立つて居ると、同宿のイギリス人でゴード（Mr. Goud）といふ人が來た。きいて見れば、此が即ちその人の盡力で出來た貧民學校で、女の子に讀み書きの教育と手仕事を習はせてゐるといふ。それなら見せて貰はうといつて、二人が家の戸をたゝく。中から尼さんが來て、二階の仕事場につれて行つてくれた。その室には他の尼も居り、女の子が二十人ばかり色々の仕事をしてゐる。皆はゴード氏の來たのを見てうれしさうに立つて今日はと挨拶する。縫ひやレースや眞田の様な紐など、各〻仕事をしてゐる。子供等は一見して、殆どこのアッシジの子供と思へないほど清潔で、顔つきまで温和に高尚になつてゐる、又それを世話してゐる尼達も、如何にも自分の子供等を可愛がる様にして、その仕事を見せてくれた。ゴード氏も亦自分の子供や妹等の間に來た様に、子供等と話をしてゐる。それからその他の室や、食堂、臺所、庭の畑など見廻つた。イタリアにもこんな清潔な處があるかと思ふ位で、子供等の食卓は大理石で出來、その上に皿やコップがうつくしく並べてある。寢泊りはせぬが、食物も着物も皆學校からしてやつて教育するのであるから、子供等もきたない自分の家よりも學校の方を内の様に思つてゐる。元の室に行つて子供等に別れを告げて、ゴード氏と一緒に學校を出た。そこへ又二人イギリス人の婦人が通りかゝつたので、ゴード氏はその人等を案内して學校に戻り、自分は、フランシスの寺に向つた。ふり返れば、夕日が學校の窓を照らして、如何にも淨い幸福な生活の家と見える。

寺に行つて壁畫を見る。日光が丁度西の窓から照り込んで、ジョットーの十字架の畫を正面から照らしてゐる。その背景の空の青さは、まるで今日の碧空そのまゝで大空に飛ぶ天使の褥は雲の如くになつて、クララの園から見た雲に似てゐる。十字架の下には、キリストの死を悲しむ聖母始め弟子たちを左にして、右にはフランシスがその弟子を率ゐて十字架を哭し、その右にはユダヤ人等が、天使の飛んで來たのを見て驚いてにげだしかけてゐる。如何にも活動があり表情があつて、而かも落ちついたジョットーの特色が十分に見える。但堂内のあちこちに畫を見ては考へ、時を經て夕食の時間に宿に歸つた。

食後にはストッダートとゴードと三人で色々の話が出、互に今日の畫見て來た事や、學校の事、それから話は法然上人に移つた。勅修御傳の畫の寫しを見せて、上人の一生や信仰の話をしたが、二人は喜んできいてくれ、又上人とフランシスと相似てゐる事も十分に贊成してくれた。そこへ今日ペルジアに遠足した三人の婦人が歸つて來て、おみやげの菓子で、六人がおそくまで愉快に話をして、別れたのは十時半であつた。

今日は二つ寺を見、學校に行き、晩は話で實に愉快な日であつた。殆ど一ケ月近く日本語は話さぬが、英語で氣兼なく話せば、殆ど故郷に歸つて自由に人に話をする様な氣がする。此等のイギリス人と此處で逢つて話をするのも、フランシスの徳、此等の人が耳を傾けて法然上人の事をきいてくれるのもフランシスのお蔭である。東洋と西洋と人情の根本が違ふなどいふのは、人情を知らぬ人のいふ事で、キリ

スト教と佛教と別のものの如く見るのは、自分で狹い垣根を作つてその中に立てこもるに同じと思ふ。

### 四月廿九日

天使の寺、聖者の最期、刺なしの薔薇

朝はきのふに引きかへて曇り。讀書して十時からフランシス寺に行つた。中段はいかにも暗いから、上段に行つてフランシスの一代記を見て、中食の時まですごした。フランシスが片手でロマ教會の建築の倒れを支へてゐる力強さ、ダミアノの寺の前にフランシスの遺骸を留めて、クララ始め尼達が告別の接吻をしてゐるやさしさなど、ジョットーの筆には立派な戯曲がある。

中食後は野の下の天使の寺に行つた。朝の曇りは全く去つて、一天はれ亙つた空に、日光は野にまばゆく照らす。フランシスが最後にアッシジを眺めた處の石に腰かけて、山の上の町を見上げる。碧空に聳えた塔や城壁、日にあたつた家々の壁、すきとほつた樣に朗かに見える。フランシスが故郷に別れを告げたのは十月で、秋の澄み亙つた空に、この山の眺めは、今日の樣であつたであらうが、その殆ど盲目になつた目で、おぼろに故郷を見上げた時の心持はどうであつたか。恐らくこの故郷に別れを惜み、おぼろにその眺めを見ると共に、天上の眞の故郷を思ひ、心にははつきりその光景を見て喜んだであらう。

日の照つた大道をたどる。如何にも暑くて、頭からかぶる塵が堪へ難いが、野には麥の葉に日がうらゝかにあたつて、時々風にそよぐ。

　日にひかる麥の葉末に風そよぎ、
　　オンブリアの野に夏は來にけり。

天使の寺に着いて、その迸る清泉に手を洗ひ、口をすゝいだ時は、ほつと一息の感があつた。堂に入ると、案内の男は、その中にある元來の聖母堂をあけて、そこで待つてゐてくれといふ。この寺にフランシスカンの教父で英語でもフランス語でも出來る人が居て、同宿のイギリス人が先にその教父に自分の事を話しておいてくれたので、その教父から寺男に特に「日本人が來たら」と云ひつけておいたと後に知つた。前に來た時は外からのみ見た聖母堂の中に坐つて見ると、ダミアノ堂よりも小さい、元は只の辻堂であつたらしい。それがフランシスの最初の住寺になつたのみならず、その石はフランシスが運んで修覆をした跡で、曾て巡禮が來てその石を撫でたり接吻したりするので、手や首の屆く處は皆脂で光つてゐる。内部は飾りも何もなく、只眞中に拜壇があるのみで、それも古い面影が殘つた簡單なものである。この拜壇の前で、フランシスが聖書を開いて行いて萬國の民に福音を傳へよの條を讀み、それから發起して清貧の教、愛の福音を說き始めた處。又この拜壇の前でクララがその頭髮を切つて尼入道になつた處。それ等の事を繰り返して默想してゐると、教父がやつて來て手を握つて迎へてくれた。この教父は名をベルナルデノといつて元來はドイツ人である。初めは英語で話をして居た處へドイツ人が來て、それからはドイツ語で色々堂の話をしてくれた。この堂の後の方に倘小さな堂が、此も今は大きな本堂の中になつてしまつてある。それが卽ちフランシスの死んだ處で、中央にはフランシスの死顏を取つた立像、壁のぐるりにはその弟子達の肖像がある。フランシスの立像を見ると、いかにも瘦せた肺病であつたらしい顏に、云ひ難い慈愛と威嚴とが見える。病身の人の僅に十六七年の間に實に大きな運動を起した、その力は信仰一つであ

つた。

　やみはてし病の身にも信じつゝ、
　　世をも人をも動かしにけり。

特にその病勢が重つて、どうしても恢復の望みはなく、死期の近づいたのを知つてからも、自分の「太陽の頌」を弟子のレオに歌はせて、それに次いで「死の頌」一句を附けた。「死は何人も免れ得ない、只罪を犯したまゝに死ぬ人は憐むべきかな、神の御意に從ふものは死も之を犯し得ぬ」といふ意味で、佛教の諸行無常の偈を神の御意と翻譯した感がある。法然上人が、念佛の聲斷かに、眠るが如く滅に入つたと同じで、聖者の最期は東西同一である。今その跡に來てその死顏を見、薄暗い堂内に默想すれば、その昔に歸つた心地がする。

　その魂は父に歸りて、亡き骸を
　　留めしすがた今に淸しも。

堂の壁に穴が穿つてゐる。そこにフランシスが癩病者に與へる藥を貯へておいた處で、今はその身に纏うて居た繩の帶を安置してある。その帶に胸の傷キリストの傷がフランシスの身に現はれたの血がついて殘つてゐる。胸の傷から出た血か、口から吐いた血かは知らぬが、此も一生の犠牲を注いだ身から出た最後の血であらう。

　身をば主にさゝげし君が繩の帶、
　　ときてや聖衆、魂迎へけん。
　血しほ吐く口にも神をたゝへにし
　　一期の名殘りこゝに留めつ。

本堂を出、役僧の室を通つて、廊下つゞきに花園と會堂とがある。園には薔薇がまだ花は咲かぬが、青葉美しう茂つてゐる。此はフランシスが棘を取つておいた薔薇で、今も棘がないといふ。その先の堂は薔薇の御堂といつて、フランシスが弟子四人を得て後に、天使の聖母堂の側に同行の住居を作つた處で、その拜壇の下の穴倉はその時のフランシスの寢室であつたといふ。カルツェリの岩窟ほどにはないが、小さな石の床に木の枕で寢た跡が其のまゝにある。さういふ修行を難行とも何とも思はず、キリストの苦みに比べては、その弟子の當り前にすべき事とした勇氣は驚くべきものである。錦繡のしとねにねるこそフランシスには却て心の苦みであつたに違ひない。フランシスは聖道難行の形に他力信心の易行道を修したのである。法然上人も難行を棄て智慧才覺を離れて、唱名往生の中に淨土を欣求せられたが、その心はなまくら坊主が聖道の修行に堪へないで、名を他力に借りて安逸を貪るのとは全で違ふ。上人が唱名念佛の安心易行の中には、聖道修行の眞精神がこもつて居た。自力を頼み、智慧や功德で自分の天國を買ふのでなく、ひたすら慈光の攝取を仰ぎ、他力の救に身を委ねるのがこの二人の聖者の心であつた。至信回向の念佛も、眞心喜悅の獻身もこの心の現はれである。その回向の心は一切衆生に念佛を勸める易行の教へとなり、その獻身は自身の身の艱苦や疾病を顧みる遑なしに、人のため、キリストの爲めに盡す慈善となり布教となつた。形は違ふ樣でも、二人の聖者の信は一つである。

　薔薇の堂を出てロビンソン(P. Robinson)といふ教父に會つた。教父は自分の來て居るのをきいて、今旅行に立ちがけ前に會ひに來てくれた。薔薇の園に立つて手短かにフランシス研究の事を話して別れた。元に歸つて見るとベルナルデノ教父は今度はフランス人の一行を案內してゐる。それと一緒に簡・度廻つて見て、別れをつけて後、入滅の堂と聖母堂とに別れを惜んで大堂を出た。

　歸り路には、西に傾きかけた日がアッシジの町を照らしてゐる。夕暮に入日が色々の雲を染

ゐて、深紅、濃紫の空を現はす。宿の屋根に上つて野山に最後の光りのさすのを見、入る日の光りを惜んで下に下りる。

惜まるゝ入日の名殘色染めて、
光り留めしひじりをぞ思ふ。

食後はイギリスの人等と讀書室で賑はしうすごした。特にその中のダヴといふ婦人は、ロマに、他の二人は國に向つて明朝立つて行くので、別れに長い閑話をし、再會を約束して、十時半に皆は部屋に歸り、跡に一人殘つてこの日記をかき終る。

## 四月三十日

初夏の天然、聖者の追懷

つゞいての好天氣に、空の紺青は愈深い心地がする。朝早くに宿の屋根に上ると、日はスバシオの山の上に上つて、フランシスの寺を正面から照らす。カルツエリの谷間の庵室にも日の光りは已に充ちてゐるであらう。讀書して後山の崖に沿うた城壁の外の野道をたどる。どこも草花の世界、その中にもけしの深紅がその邊には一層多い。青黑いオリヴの木影に日光をうけた深紅がいかにもはでやかに見える。

オリヴの茂み影もこき
草間に匂ふけしの花、
緑しなくばくれなゐの
色もあだよと知るや否。

城壁に近い處には、特に野菊に似たマルゲリテの花が多い。

そら青み、草は綠の野に白く、
星にも似たるマルゲリテの花。

マヨナの城門をすぎて、道は谷間に入る。谷の流れに沿うて並ぶ樺の若葉に日が照つて、その燃える樣な色がオリヴと相對する。

オリヴの木々の深みどり、
あたりに匂ふ樺萌黃、
あやはかはれど、同じ日の
光りに生ふる兄おとゝ。

その先はクララの寺の下道で、尼僧院の石垣が高く聳え、その上に寺の塔が見える。草の上にねて谷間の景を見ながら、その古を考へる。この石垣も元はファヴリノ伯の屋敷で、その高臺の庭に出た姫君クララの姿はどんなにあつたか。その姫君が一朝出家して尼入道。城主の屋敷は尼寺になつて、今日まで傳はる。クララを不孝ものと怒つた父親が今こゝに來たならば、どういふ感じを持つであらう。考へて、ふとクララの一生を歌にして見たい氣が出て、一句一句。終に初めの二段だけ出來た。

花より清きたをやめを、
岡邊のうてなに仰ぎ見て、
派手の姿の公達が
送りし戀文數いくつ。
クララが眼に見る文は
神の言葉に主の教へ、
口に歌ふは戀ならで、
天つ御國のたゝへ歌。
貧しきものは幸ひの
ひじりの教へきゝしより、
玉の家居も火の廓、
錦のころもに針ぞ充つ。
すてがたき父の心に背きても、
天つ御親に身をぞ委ねん。
心さだめしあかつきは、
聖道の修行かたからず
家居をすてて世を救ふ
ためしを示すフランシス。
忍びぞ出でし城戸跡に、
オリヴの木蔭夜も暗き
道たどり行く白絹の
姿にあめの光りそふ。

朝なほくらき寺の内、
迎ふる聖者にみちびかれ、
髪をおろせし聖境に
今日ぞ出で立つ法の旅。
光り充つ主が復活の朝ぼらけ、
　すがのいのちの始めいそしも。

先づ發心と出家とは出來たから、次いで、父の怒り、ダミアノの庵室、師の君フランシス、臨終を作つて一つクララの傳にしたいとは思ふが、その場を去つて後、跡が容易に出て來ない。あす復寺の下に行つてつゞきを試みたい。

クララ寺の下をたどつて新門の下に出、門から寺の前を通つて宿に歸つたのは又中食の時。

午後は先づフランシスの寺に行つて畫を見る。複雜な畫の數多い壁であるからいくら見ても新しいものが出て來る。今日は主として眞中の天井の四つの畫を見た。天使に圍まれた天上のフランシス、服從の德の前に天使や聖者の禮拜、淸貧の女王とフランシスとの婚禮、貞潔の德に天使が水と花とを捧げる下に、武士が淨行の僧を守る畫。寓意と畫の配置が何れもフランシスカンの理想は表はすと共に、ジョットーの技倆を示す。

寺からジャコモの門を出て、坂を谷間に下る。下るに従つて山の崖に聳えるフランシスの寺を見上げ、谷向ひのオリヴ山が近く、草の綠が美はしい。風につれて谷間に草を刈る子供等の歌が、節面白うきこえる。殆ど下り盡すあたりの岩角からの眺め、テッシオ(Tescio)の谷の流れる先に、片方は寺の崖に茂る林、片方はゆるやかな山の裾のオリヴ園、その先に近い山は濃く、遠くの山々が段々その上に重つて遠くアミアト(Amiata)の火山が尖つて空に聳える。如何にも人界を離れた天然のまゝの山野の風光、詩人が牧歌を歌ふべき眺めである。道を下り盡して古い石橋を渡る。その傍に池水の碧を湛へた岸に榛の並木が日にひかり風にそよぐ。その先に一軒の百姓家。子供が小さな竿の先にオリヴの葉で十字架を作つて畑に立ててゐる。あすは五月の朔日、夏の初めのしるしに田畑の祝福をするものと見える。

さつき來と、オリヴの十字立てし野に
　幸あれかしとわれも祝はん。

河に沿うて石高の路、オリヴの畑を通る。羊を飼つてゐる女の子の歌が、羊の鳴聲に和してきこえる。

山の邊に羊かふ子の歌きけば、
　世にうきといふ事ありとしも覺えず。

寺の崖を周つて街道に出る。この邊も榛の木が多く、その木立の間に開けた野の眺めは、谷の間と違つてのどかにやさしい。西日をうけた坂を上り、宿に歸つて一杯の茶に喉を濡し、茶にも甘露の味を覺える。日のくれになるに従つて、西の山々がはつきり夕日の空に輪郭を畫いて重り〳〵、それも段々黑影になる。此處に來た初めには、夕食の時間には少し暗くなつたが、一週間の間に日の長さが增して、いつまでも野の綠が夕やけに映つてうるはしい。

夕食の後はいつもの様に話。ゆうべまでは七八人の仲間が、今日は三人になつて淋しい様であるが、話は却て本當によく出來る。今夜はおもに聖クララの話をミス、ストッダートからきいた。然し教會はクララに關する記錄を人に見せる事を好まないので、十分の事は分からない。只師のフランシスよりも二十年以上生き延びて、その間にダミアノの尼僧院を支配し、色々の干渉を拒絶してよくその弟子を導いた上から見ると、餘程しつかりした男勝りの婦人であつたらしいといふ。ダンテは「圓滿の一生、天の上にも高きいさを」(Perfetta vita ed alto merto in ciel)の婦人といつたが、その委曲を知り得ないのは遺憾である。

## 五月一日

オリヴ畑、古書室、光耀裏の壁畫、入日の光

今年も五月になつた。朝未明に寺の鐘が高くひゞいて、五月一日の祭が來たのを知らせる。餘り早いので、又一度寢入つて目がさめると、日が已に窓にさしてゐる。おきて直ぐに寺に行く。今日も空の色が美しく、深い紺青の中に石の本堂が日にあたつた様は、いつもながら飽くまで爽かなはつきりした眺めである。堂の中はまだ暗い。横の堂にミサで經文誦讀の聲がかすかにきこえる。聖マルチノ堂の聖者の畫の前に立つて、歸つて朝の茶を飲んだ。

今日の祭が始まるかと思つて、十時に寺に行つて見たが、何もないので、又城外に出て、オリヴ畑の間を昨日の様にぶらついた。今日は少し空がかすんで春霞の思ひがあるが、麥畑にけしの深紅が著しく殖え、雪傘の花が白く野邊を敷ふ。一日の間に野の様もずんと變る。山のふちから鳥の說教の辻に下り、例の如く野にねては行き、あるいてはね、聖ダミアノ庵室の外に長い間ねながら、聖クララの事を考へ、きのふのつゞきを少し作つた。

きのふは城主の姫君も、
今日は捨行の尼姿、
庵の庭には薬植ゑ、
縫ふは貧者の麻衣。
いほりの窓ゆ、人の世を
眺めて神に祈る人、
耳に聲あり、「野は黄ばみ
刈り入れは今ぞ」と。
徳にはかをる風四方に、
薫じを傳へて法の妹、
數に加はる伯母と母、
今は修むる道の友。
たそがれぬ、夕べの鐘に妹あつめ、
今日の惠みを神にたゝへん。

此で「ダミアノの庵室」はざつと出來たが、次は出て來ない。臨終の最後の歌だけ少し考へついた。

六十年の惠みのいのち今日つきて、
あすは聖衆と共に見ん父。

此は聖者の尼の、最後の句としてあまりにまづいから倚考へなければならぬ。ダミアノから坂を上つて、いつもの路を日にてらされて宿に歸る。きけば今朝にもやはり勤行があつて、行列を作つて寺を廻つたとの事。

午後は讀書室で日の光りをうけて本を見たり考へたり。其の中に、窓から天使の聖母寺の方を眺めながらクララ傳記の一節が出來た。

あはれ聖の君住まひます
御寺に夕日の當ります、
神の光りにクララ尼が
歸敬の涙玉ぞなす。
うれし師の君許します、
共に夕げの神のかて、
尊きすがた仰ぎては、
涙にたぶるパンのはし。
病みつゝ倚もたゝへ歌
神にさゝぐる師の聲を、
きゝては祈る父の前、
この身を君に代へませと。
天つ國、またも會ひなん祈までの
別れにいだく、君なきから。

一度フランシスの寺に行つて、墓道を散歩し、それからフランシス研究室に行くと、ロビンソン教父が廣い室に獨り勉強してゐる。そこで本や地圖を見てゐる中に、教父は歸りかけに他の圖書館につれて行つてくれた。此は元はフランシス寺の僧院にあつたのを、今はアッシジの町

で保管して、アレッサンドリといふ老儒が管理してゐる。老人は二人の助手をつれて、丁寧に案内して見せてくれた、四五室の本棚は、一面に白皮綴りの古書、六百餘年の間フランシス寺の僧等が書いたのを集めたもの。此の圖書室は實にフランシスカン派の智慧を語るものである。見せて貰つた珍本の中には、フランシス當時の聖書の大册、羊の皮に丁寧な字で立派な寫本、法王廳からフランシス寺に送つた許狀や、その他の記錄類。此も固より羊皮に模樣の樣な字で書いて、多くは餘程古びてゐる　フランシスの歌や書簡を一册に集めた立派な金や紅入りの本はよく保存が出來て、七百年前の字も昨日書いたに異ならぬ、「太陽の頌」の處だけは人々が必ずあけて見るので垢づいてゐる。フキオレッテの十五世紀の寫本や、ボテンデストの集めた古い傳記の古板本なども各面白い。それから樂譜を集めた別室には、本堂で使つた樂譜の外に、代々の僧たちの樂譜草稿などが一杯。ペトラルカの歌の譜などもあり、古い樂器も少しはある。僧院の人達が音樂を重じた事は、その譜が二室に一杯あるのでも分かる。

六時になつて寺の鐘が鳴り出す、今日の祭の夕の勤行が始まるので、寺に入ると、神壇に林の如く立てた蠟燭が、星雲の如くヷォールト天井の下に輝いて、天井の畫が燭光に明かに見える。横の堂から拜壇の側に近づくと、ゴード氏も來て居て、二人とも無言の感嘆に天井の畫を見る。その中に勤行の經文が始まり、オルガンに伴つて歌、歌と共に祈願文、音聲は天井に響いて、香の煙が堂内をこめ、音樂と煙との間に、天井の畫は金色を放つて見える。フランシスを圍む天使、貞潔を守る老武者、清貧の手をフランシスに結びつけるキリストなど、神々しく、いかにも天上の聖衆の姿と見上げられる。祈願文が濟んで、僧は立つて聖體佛敎の舍利塔の如きもの―を捧げて、參詣にベネデクション（神の惠みを與へる）をする。その間にはオルガンのみで、天上からの鳩の鳴く樣な譜を奏する。敎會の音樂で、このベネデクションの譜は特別の調子で、ワグネルもハーシファルの中にそれをとつて居るが、何となく心が空中に浮き上がる樣の感を與へる。この音樂をきゝなれた修道僧等が、臨終に、聖衆來迎の音樂を天上にきいたのは自然である。特にフランシスの棺を蓋ふ、この不思議な神々しい天井の堂内に、この樂をきけば人間世界と離れた思ひを與へる。

ベネデクションで勤行は濟んで、僧も去る、參詣も出て行く。ゴード氏と二人だけ殘つて畫を仰ぐ間に、役僧が一つ〳〵蠟燭の光りを消す。金色の光りのフランシス、白衣の天使も段々かすかに見える。横の方の壁畫も薄暗くなり、聖者の金光輪のみが尚見える。殘り少なの燭光の中にも、尚神々しい畫の姿は影の如く見えたが、最後の一つの光りも終に消えた。天井も壁も黑くなつて跡には蠟燭の煙が雲の如くたなびく。

堂を出ると、夕日の光りが茜色して、空は一面にその光りに輝いてゐる。ゴード氏と二人で宿の屋根の臺に上る。丁度日は最後の光りを放つて西の山に沒した。跡には金線の樣な雲が異樣の光りを放つて殘る。その中に、金光に段々紅色がかゝり、四方の空の種々の雲は各、その形に應じて、深紅、緋紅、褐色あらゆる色に濃淡の光りを放つ。その光りが少しつゝ薄らぐと共に、雲の色は濃くなつて、遠の山々は、夕暮の翠色の濃淡まち〳〵に、近くの野の樣も灰色の蔽ひをかけた樣になり、河原の石原は妙な灰色に見える。ゴード氏はこの色を三三三たといつたが、いかにも灰色の中に一種の暗の光りがある。空の光り、雲の色々、野の暮色、こ

の様な立派な夕暮はイタリアでも滅多に見られない。二人は時々吐息を漏らしていつまでも臺の上で眺めて、互に言葉も盡きて感服してしまつた。顧るとスバシオの山の頂にのみ尚少しあかるみが殘つて、吹きおろす風は寒くなつた。遠の山々は影の如くかすかに、下の野原には處々窓から漏れる光りがきらめく。

下におりて食堂に行つて見ると、人々は食事最中。今日の晝食から、片方の隣りにはロシヤ人の老婦人、片方はデネマルクの婦人で、ゴード氏は此等の人にも親切にアッシジで見るべき處など敎へる。それで食卓は今までの様に、賑かに、皆で話しつゝ愉快に食事をする事が出來る。

食後は又讀書室で談話。婦人達の去つた後に、ゴード氏と哲學の議論が出て、さあ寢ようといつて時計を見ると十一時半。

## 五月二日

聖者の像、摘み花、茶會、田舍の古寺。

今日はアッシジを立つてローマに行くつもりであつたが、ミス、ストッダートが今日午後に客を招いて茶を飲むから、留まつてその席に出、他の友人にも會つてくれといふから、尚一日はアッシジでゆつくりくらす事にした。天氣は相變らずの晴天に、今日は少しかすんで、アミアトの雪がかすみの間に浮いて見える。寺の方は、朝から巡禮の參詣で大賑ひ。その參詣の濟んだ頃に、寺に行つて見ると、蠟燭のあかりはまだ殘り、横の堂の勤行に合はせてオルガンが響いてゐる。燭光に照る天井の畫から、横の堂の聖者の像を見る。その中で多分ロレンツェテの筆の聖クララは尚他のクララ（マルテニの筆）の様に温和なばかりでなく、柔の中に剛毅の徳が見えて、特に尊く見える。

ジャコモの門を出、菜場の道を散歩して、こかしこ綠草の上にねる。その間にクララの一生を考へ、今堂で見た像の姿と思ひ合はせて、その最後の段を作つて見た。クララが見た聖衆の來迎は光明遍照の天人の群であつたといふが、それを十分に述べ得ない。

師の君逝きて二十年、
跡を忍びてきのふ今日、
すごしゝ庵に日はすぎて、
一期の終り近づきぬ。
五障の雲のくもりはれ、
きよらの道を歩み得て、
我れをも世をも救ひしは
神の御惠み師の敎へ。
いざさらば天つ御國の父に行く、
わがあとつゞけ、法のいもたち、
十方世界に光りみつ
御空の國を望み見て、
人にさゝけし六十とせの
幸のいのちを神に謝す。
天降る光りの雲に魂迎へ
聖衆來ませり、今われ行かん。

歸りに寫眞屋に行つて、先きに見たクララの像を求めたが、ない。日なたの路を宿に歸つて又中食。

午後は今までに集めた摘み花の整理をした。色は稍あせたのもあれば、葉の枯れたのはあつても、一々樂しい遊びの記念。立派なみやげを持つて歸らずとも、此の花で自分は滿足する。故郷のみやげは實利の品や寶玉ばかりでないと思ふ。

玉ならで、摘みにし花を家づとに
すぎにし野邊の語り草にせん。

それからミス、ストッダートの茶で、サバチエ夫人始め、アッシジの人やイギリス人が十人ば

かり、宿の大きな欄干に出て野原の眺めを賞しつゝ、色々の話の中に茶を飲む。日は暖かに風のそよ吹く間に寺の鐘をきゝつゝ、人々の間で親しく話をすれば、他郷にある様にもない。

茶の後に三四人と同道で、城外の野原に散歩に出た。いつもの野道は夕日にてらされて、草も木も金色を帯び、特に赤の馬ごやしが日に照つて、けしと共に草原に燃える様に見える。

一軒の百姓家に行つて、その家の内にある十二世紀の御堂を見る。ロマネスクの古い柱、うぶな彫物、八百年前の昔が百姓家になつて、而も聖母の像は堂中に祭つてある。その次の家に行けば、やはり七八百年の古い塔の片われを倉庫に使つて居る。此等の家の前を過ぎた事は一二度はあるが、氣が附かずに居た。案内せられて見ると、そこらの野にもかういふ古物が残つて居る。古い國には一寸しては氣のつかない面白いものがある。それ等の見物をして父野の道から山に上る。夕やけは徐々薄さして緑の草も、灰色の石も皆紅に見える。オリヴの木の葉を通して入る日の、最後の光りも消えた。城壁の下に待まで見れば、天は薄紅に澄んで、細い新月が已に輝いて居る。

夕食の後は又集まって話、今晩はおばけ話が出て、他の婦人達も加はつて、段々おばけばなしに身が入る。今日はアッシジの最後の晩。人々に別れを告げ、窓から寺の廊下の燈火を見て、此も別れと思つて部屋に歸つた。

## 外國で見た新緑の追懷

五十日の間熱帯の航海に暑い／＼といつた汗を拂ふ暇もなく、五月の末のハリの暑さを後にして、初めてライン河上の新緑に接した時の爽かさ。ガスの光りに青い緑葉の下、夕風そよ／＼と吹く間に、盃を擧げて友と共に飲んだライン白酒の清素な味と共に、今に思ひ出の種。

それから北ドイツの平原を横り、日指すキールに着いた日はペンテコステの日曜。野も森も鮮かな若緑の萌え立つばかりの世界に、白衣の乙女等が、日傘かざして至る所に今日の祭を樂む姿、新緑に白衣の配合のよさ。

イギリスに初めて入つたのは四月の初め。冬景色の残りも段々なくなり、霧の日も少くなると共に世は春めいて、公園や辻々の廣場に匂ひ出た若葉。その間に紫の色ゆかしう、香ひ高く香るライラクの花。日毎にキュやリチモンドなど、テームス河畔の新緑を訪うたのも、今は一昔。

印度の新緑は、冬の寒さを過ぎての春ではないが、冬の一期雨のないために草木も萎ばんで、野は枯野の様であるのが、五月頃に南風が吹き初めて、水氣の來ると共に、一時に萌え出る新緑。その中でも特に美はしいのは菩提樹（Pippala）の若葉がしなやかにひら／＼と風に翻る様。ヨーロッパの楡（Elm）の若葉に似て、彼の淋しさには似ず、枝をひろげて繁る眺めには、如何にも生々の氣が充ちて心地よい。

北歐の冬の空からアルプ一重を越えてイタリアの春。春の先驅には桃の花に菫の花。それについでは若緑の下に野けしの咲く頃。ウンブリアの緑の野に碧い空。そら青み、草は緑の野に白く、星にも似たるマルゲリテの花。匂ふ邊りにダンテを讀み得る時は何時來べきか。追懷は樂しい事で悲しいものである。

明治四十三年四月。

# イタリアの別れ、ヹネチアの一日

## 五月二十一日夕

### ヹネチアの到着

長い間夢の世界の様に想像して居たヹネチアに來て、夢が實になつた。現實にはなつたが、やはり夢に似た世界で、この世ながら、龍宮城に入つた心地がする。

ハドアを出てから、西に傾く夕日が窓からさし込んで暑いこと、呼吸も苦しい様に覺える。今夜はヹネチアに行けると思つて忍耐する。メストレ(Mestre)で汽車は暫く止る。こゝから少し行くと海で、ヹネチアはその海向ひ。海の中の町、宮殿の建て連つた水路、ゴンドラ船頭の歌のきける處。詩で讀み、畫で見て色々に想像して居たヹネチアも、もう十分か二十分の間に近づいた。こゝ待ち設けの五分十分の長さ。

汽車は動き出した。畑が水田になる。行く手に海岸の堤らしいものが見え出す。海に出ては水の上に浮ぶ町が遙に見え、その水の面にはターナーの畫で見なれた樺色の帆が澤山に浮ぶ。水ぎはの家々の窓が見え出す。汽車はステーションに着く。荷物を持たせたホテルの番頭にいひつけ、直ぐ前の大河端に待つて居るゴンドラに乘る。汽車を出てヹネチアの地を踏むのでなくて、水に浮ぶ。

眞黒に塗つて、黒い房を垂れたゴンドラの、先に突き出た尖端だけは磨いた鐵の色白く、きらりきらりと水にうつる。馬車ががたがた敷石道を走るのでなく、只櫂の音のみして、舟は水を切つて靜かに進む。河風は涼しく、夕日の名殘りに水上の宮殿が、紅色水色、さまざまに水に映る。一瞬の間に汽車から舟の別世界になつてしまつた。大河から横に入ると、舟がやつとすれ違へる位の水路で、その兩側には、門口の石段で直ちに水に下りる家々が聳える。その間をたどつて、船頭は曲り手毎に牛の唸る様な聲の合圖をして櫂を押す。貴族の家らしい所には、門口に家の定紋をつけた色塗りの柱が水中に並んでその間に舟をつけ、それから石段を上る様になつてゐる。家の前、塀の間、狹い川を出て又暫くは大河。その兩側の家々は皆名ある古い貴族の家、白い着物に淺黄の帶の様なものをだらりと下げた船頭に漕がせて行く船がある。それを指して、船頭は、あれは家々の持船で、乘つてゐるのは何々伯爵夫人だと教へる。少し先には大川を渡して屋根のあるリアルト(Rialto)の石橋が見える。宮殿の窓には色々の窓かけの色が、壁の色と一緒に水に映じて、各々配合に面白味がある。大川から又小川に入る。又大川に出ると、目ざす宿はその川ぶちで、船頭の妙な聲に應じて、ボイが赤緞子をきせた踏板を石段から舟に渡す。それを上つて、水から直ぐに宿の座敷に入る。

どうしても陸に上つたと思へない、水中の龍宮の御殿に入つた心持である。

部屋を定めて、直ぐに湯を命じ、風呂場に行く。白色の燒物ばかりで張りつめた湯殿で、ロマ以來の垢と塵とを洗ひおとした心持は何ともいへぬ。

湯から上つて食事に行く。食堂には客は皆黑の正裝をしてゐる。外面は大分暗くなつて往

來の舟のあかりがきら／＼動く。食後石でしきつめた緣側に出て見る。その下は床すれ／＼に水がちやぶり／＼して、時々ゴンドラがその石段に着いたり出たりする。ゴンドラの形は又妙で、前後共に上つて、その尖頭には鳥の頭の樣でもあれば、鋤にも似、鋸にも似た鐵の金器がつゝ立つて、その尖つた鐵が暗にも白く光り、ふはり／＼と上り下りして水の上を行く。水面には一面にあかりが往來し、遙か先は、紅綠の提燈をつけた遊船に歌ふ聲がきこえる。涼しいソプラノと强いテノレとの合唱の節々が水を互つて、遙かさきの世界の音樂をきく心地がする。總てが此の世界のものゝ樣でない。川端の宮、ゴンドラの姿、水上の歌、芝居や畫で見て想像して居た光景が、今目の前に實になつて、而もそれが實世界のものと思へない。夢でない夢、現でない現だ。こんな處がどうしてこの世界にあるかと思へる。

見とれて茫然と水の上を眺めて居たが、一つヴエネチアの地を踏んで、その中心のサンマルコの廣場の夜景を見ようと、宿の後の戸を出る。此處には寶石商の町がある。狹い町に色々の飾やガラス細工や珊瑚の店が並ぶ間を通りぬけると、サンマルコの廣場（Piazza San Marco）。大きな廣場の三面は白石の宮殿風の廻廊が夜目にもしるく見渡す限り連つて、その先にはサンマルコの寺がガス燈の光りに金色に見える。此處も亦別の世界。敷石の上には砂も塵もなく、そこらをあるいたり、立ち止つたりしてゐる人には、いそいであるく人もなく、用事のありさうな風もなく、又どこの町にもある馬車の影もない。不思議な所といふ外ない。

寺の前から海岸に出る。古のドージェ（昔この町の大統領）の御殿が、ガスあかりに青白く、づらりと並んだ柱の行列が層々重つた上には、城の樣な重い建物が夜目にもいちじるしい。海岸に音樂隊の演奏があり、椅子にかけてゐる人、ぶら／＼する人が敷石の上に一杯。通りには處々に弓形に高く上つた橋で川を渡る。その橋の白大理石の欄干に凭つて、涼みながらに音樂をきく人も多い。芝居で龍宮の公園といふ場をしたら、からいふ風の書割をする外はないと思ふ。

歸り路には又サンマルコの寺の横を通る。その高い壁のくぼみにかすかな燈明がある。聖母の畫像でもあるのであらう。同じく海に近い龍宮城の樣な處ではあるが、嚴島の拜殿にかすかな燈明を見れば、その奥の奥に何か不思議の底のある樣に思へる。こゝの聖母の燈明は、かすかでも周圍と共に現在の喜びを表はす樣に見える。

宿に歸つて再び緣側に立つ。水上の景、船の歌、夜はふけても同じ事。どうしてもヴエネチアの人民は逸樂の民、場所は逸樂の地。五六百年前にこの町が一つの貴族共和政治の有力な國を造つて、地中海の四方に商業、兵略の手を擴げ、植民地征服地の富をこゝに集めて造り上げたのが、この水中の龍宮町。征服した人民を奴隸に使つて、貴族の宮殿を建て、寺や塔を造り、又遊散にも用事にも贅澤な船を奴隸に漕がせた。只現世の快樂を追ひ、その日その日の奢りを極め、一日でもその日の與へる快樂を十分に樂まなければならぬといふ樣にして暮らしたのが、この地の貴族平民の生活であつた。その風が今に殘つて、古の貴族には零落したのもあり、その宮殿の柱は傾いても、ゴンドラには古のまゝ黑い柩に金色の飾りをつけて、陸にも水にも歌の聲、夕方になれば全市が海岸や船の上で遊ぶ。この夢の樣な、芝居か畫にでも見るやうな龍宮城も、元はやはり人間の利欲爭鬪の結果で出來、今日も逸樂偸安の種になつて居る。同じく僞りの結果ではあるが、清淨の作り上、

げた厳島には、全く別の趣がある。山の麓、水のきはに百八間の廻廊を連ねて、低い屋根の拜壇、本宮。見れば宮殿全體が水に浮いた樣た經營には、寂靜の趣がある。海中に石の宮を建て、階段も床も石で敷きつめ、高い甍を並べ、飾りの多い窓から水を見下ろす、このヱネチアの趣味には、執着倨慢の跡が見える。ここは、人間現世の快樂をどうしたら思ふ存分出來るかとあせつた跡。厳島は、浮世の權勢を飽くまで得た人が、少しでも現世以上の理想に近づからとした結果。

## 五月二十二日

ヱネチア派の繪畫、テチアノ、聖マルコの寺、リドの海岸、海上の夕暮

朝飯後、舟に乘つて大川をアカデミアに行つた。その畫廊はヱネチアに出た一派の畫を集めて十七世紀初の美術の粹を示す。

先づこのヱネチア派の最大の畫師テチアノ(Tiziano)の聖母昇天を見る。上には緑袍紅衣の聖母が飄然雲に乘つて天に上り、天使がその邊を圍繞する。下にはこの奇蹟を見て驚く人人。天空と地上との對照、美しい色々の配合、雲の和らかさ、衣類のひだの見事さ。いかにもヱネチア派の最大の作家の筆の跡。テチアノが多くの人に好かれるのも無理でない。然しよく見ると、不滿足の點が段々出て來る。第一天に昇つて行く聖母は、腰を曲げ、からだに嬌態を作つて、どうしても天空に上る神人でなく、地上に舞ふ人である。その兩腕を胸にあてて、信敬感謝の風はしてゐるが、その顏は只驚いたばかり。アンジェリコの聖母の神々しさは固より微塵もなく、ムリロの受胎聖母の信順の情も見えない。十七世紀にしても、今にしてもこのヱネチアで名高い美人があつて、その人が突然ふはりと雲に乘せられ天に上り始めた時には、丁度この顏この姿をするかと思はれる。天に上るのは結構だが、地上の快樂にまだ未練があつて、驚きもすれば疑ひもする。テチアノは聖母を畫いたのでなく、只聖母昇天の話にヱネチアの美人をあてはめて、美しい色と可愛い天使や彩雲にその美人畫を作りあげたのである。

次にはパオロ、ヹロネーゼ(Paolo Veronese)の、此も最大の作、キリストの晩餐。大理石の柱の間、宮殿の廊下に机を並べて、光輪のあるキリストがその最中に坐つては居るが、その周圍は總て當時のヱネチアの貴族、婦の衣のカートアルや、肥つた貴族の服裝、やせた軍人、その間には黑奴のボイも居れば、犬も御馳走にあづかる。柱の間の見はらしは全くヱネチアの風光で、キリストの背後の空には夕日がはなやかな光を空に發す。當時のヱネチア貴族の晩餐會の光景その儘で、宮殿の作りから、來客の服裝、背景の空合や建物から、机上の御馳走、杯盤まで、色は美しく、配合は巧みである。大きな壁一面のこの畫を、次の室から戶口を通じて見れば、殆んどパノラマである。眞中にキリストは居るが、それは只中心をとるための一つの姿で、そこに誰が居ても差支ない。つまり一つの風俗畫に、當時の貴族等の肖像を加へたものと見ればよい。こゝに招待をうけて奢つた御馳走にあづかるキリストは、如何にも迷惑したであらうと思へる。

その外テチアノの門人や、同時代の人の畫が澤山ある。その中にはキリストの死ぬ所や、聖母の告示や、聖母の戴冠など、宗教の話を題目にしたのが澤山ある。然しそれ等は、何れも信仰を畫くために畫いたのでなく、只美しい畫、貴族の趣味に適ふ樣の畫を畫くために宗教の話を借りたのである。而も全く宗教を離れて純粹に

風俗畫や山水畫をも畫き得ない。キリストを十字架から下ろして、人々が泣いてゐる後には、山や野に、牛や豚がぶら〳〵遊んで、百姓がぼんやりそれを見てゐる。聖フランシスが示現を受けて、からだに十字架の傷を得て居る後には、山道に犬や騎馬の武士がぶらついてゐる。總て只畫づらを美しく愉快げに見せて、色の配合を作るためには、何でもおかまひなしに畫く。パオロ、ヹロネーゼの作で名高い聖母の受胎告示なども、上には神様が雲の中から飛び出、天使ガブリエルは雲に乘つて天から躍つて降りて來た。それに對してマリヤは妙に腰を曲げてそれを待ちかまへる樣な風をして、一體が輕わざ見た樣である。十七世紀ヹネチアで貴族の令孃と貴公子との輕わざが、聖母といふ名と形で畫になつたに過ぎない。畫でヹネチア派は一つの間の子である。色合や配案ではボテセリ、ラフアエルなどの名工の案配を折衷し配合して、而してそれを當時の貴族の趣味にあてはめた、此が一轉して宗教を離れると、オランダ派の風俗畫や山水畫が出るのであるが、ヹネチア派は純粹に風俗や山水にまでは行き得ずに、半分は古の宗教畫にくつついた。此も當時ヹネチアの貴族が内實は利欲權勢の外に何物はなしに、外はやはり寺や坊主に媚びた根性の反映である。

それにしても、ヹネチア派がオランダ派の豫備を作つて、山水や風俗に特別の畫風を作り出した功績は沒すべからざる事で、テチアノが、聖母の幼時寺に行つた景を畫いた壁の畫などは、下は立派な風俗畫、人物畫で、背景の山岳はそれだけ別にしても、立派な山水畫である。技倆は此だけ進んだが、まだ清新の理想に進んで、自由に人間や天然を畫くには至らなかつた。ラファエルやピントリキオと同じ樣な顔つきもあり、色にも配案にも似たものがありながら、總てが重くるしい、又いや味がある。寺や坊主には飽いて居ながら、尚十分にその束縛を脱せず、古に歸つて信仰の畫を畫くだけの清淨な心もなければ、進んで自由の空氣を吸ふ勇氣もない。而して色々の名工の模本に依つて貴族の趣味に媚びようとした結果、この樣な間の子が出來た。人はその色合に迷はされてテチアノを賞めるが、どうしても間の子は間の子である。ラスキンまで、テチアノだけは賞めて居るのが、自分には分からぬ。

只一つテチアノの作で面白いものがこの畫廊にある。夕暮のうすくらがりの空に、二三人の人物がかたまつて、一人の死人を抱いて悲む。キリストの死んだ後といふつもりであつたに違ひないが、何人でもかまはぬ。死の悲み、生き殘つた人の情が、物すごい景に表はれてゐる。

百歳の老年まで生きのびて、一生の間美しい畫ばかり畫いたテチアノも、その臨終近くになつて、この凄い畫を最後の名殘に殘した。この一幅は、彼が一代の懺悔錄といつてよからう。テチアノに色々の畫をかゝせて、或は自分の容貌に誇り、或は自分の建立した寺を飾り、又は家の庫藏に御自慢の種にしたヹネチアの貴族達は、この名工の最後の大懺悔を見て何と思つたか。又今日でも、テチアノの畫の美しい色に氣をとられる多くの人々は、この畫を見ても諸行無常、生者必滅の考を起さないか。ヨーロッパの文明にはまだ現世に執着し醉うた人々の勢力が多い。

正午すぎになつて館を出、今度は陸の路を歸つた。狹い所、高い橋、曲つたり渡つたりして宿に歸つて一休み。それからサンマルコの寺を見に行つた。東洋風とゴシクと混合した派手やかな、飾りの多い正面に、寄木の畫が金色燦爛として、寺といふよりも新式の寄席とでもいひたい。中は柱と丸天井とアーチとの複雜に交叉した構造で、仰ぎ見る所は、悉く金地の

寄石細工に畫がある。うす暗い中に金地が光つて、天井もアーチも、石に畫ばかりの眺めは、日本の極彩色の堂でも、とても想像し得ない。此もヱネチアの盛時にその貴族等が集る場所として、あらゆる奢りを極めた殘りである。拜壇の入口は石の柱に石の屛風、その入口の石段は層々半月形に重つて、拜壇の奧が暗く奧ゆかしい。誰かの畫でこの堂內の婚禮式を見たが、盛裝の新夫婦がこの石段をおりかけると、下には澤山な貴族賓客がそれを待ちうけ、拜壇の奧には錦繡の着物の人々がつゞく。今は芝居でのみ見られる樣な光景であるがさういふ盛典が何度この堂內で行はれたか。つまり此の寺は信仰のために出來たのでなく、貴族がさういふ儀式を盛に行ふため、儀式を飾るために、金碧で造り上げたのである。

寄石の畫には、後代のまづい作もあるが、又ビザンテン風の面白い作もある。ヱネチアは、その通商植民の關係から、多く地中海の東の方の文明を容れた。その東洋風がルネサンス後期の美術と混合して出來上つたのが、このサンマルコの寺で、それと共にガラス製造、寄石（此も材料はガラス）製造が今日まで此の地の特色になつてゐる。

堂を出ると、案內がガラス製造を見せようといふ。行つて見ると、工場はほんの人に見せるだけのもので、つまり製造品を見せて賣りつけるためである。

再び堂の前を通り、その隣のドージェの宮殿の面白い建築を仰いで、海岸に出る。ゴンドラに乘つて對岸のリド（Rid）に出かけた。行き路は海濱に沿うて、それから直ぐに對岸に着いた。細い洲が長くつゞく。それを橫斷して並木道があり、散步遊散の客がぶら〳〵してゐる。並木の樺の花が風に散つて、綿の如くに飛ぶ。その道を四五町行くと海岸。濱の松林にはホテルが建て連つて、その庭には音樂があり、机を澤山並べて遊びの人がそこに一杯。濱の砂原には夏の用意に海水浴の小屋を建てかけて、濱は小屋ばかり。その小屋の先の渚には、大分水浴してゐる人がある。靑海原を見ては一つ飛込みたくなるが、時間もないから元に引き返した。

ゴンドラで今度は眞直に灣の眞中をヱネチアに向ふ。北にはかすかにアルプスの山々を望み、海の中から町の家々が湧いた樣に、その間に處々すく〳〵と塔が見え、夕暮の鐘が水を亙つてきこえる。以前はその中央に姿のよいサンマルコの塔があつたのであるが、數年前に瓦解した。それはなくとも面白い眺め、西の空には灰色の雲が出て、夕日は雲の端に入りかけて灰色の球をなし、その光が紅や紫になつて、靜かな水にうつる。ワグネルの手紙にも、毎日日暮にはリドに行つたとあるが、この夕暮は、古から畫家詩人の喜んだ景、どうしても畫中の眺めである。

夕食の後に東の空に時々電光が見え出した。暫くして雨がぽつ〳〵と降り初め、雷が鳴る。今までゴンドラの行きかひのあかりや、歌船の提燈で賑つた海面が俄に全く暗くなつて、時々の電光には宮殿や寺の白石の姿が見えては又忽ちに消える。雨は加はり、雷も激しくなる。電光に見える寺々の姿も、雨の中に幽靈の如く見える。この間の變化は、全く熱帶の風光で、夢の中に夢を見る樣である。

雷も少くなつたので、眺めもなくなり、室に歸ると、雨は尚降つて、向ひの家に音樂を奏してゐる。

## 五月二十三日

### 大河、古宮殿、雨中の別れ

昨夜以來の雨ははれたが、空は曇つて蒸暑い。

小蒸汽で大川を行く。兩側はゴシク、ルネサンス色々の古宮殿。川を行くゴンドラの眺めは昔と變らないであらうが、宮殿には石の壁の傾いたものもある、住みあらしたのも多い。昔のまゝに貴族の住家で、その定紋の船柱が立つて居るのは、二三軒しかない。その他は役所か學校か又は商店か、製造所になつて、古の傲奢の零落を語る。ステーション近くで船を出て、狹い河岸や、小路や、橋を通つてオルト（〇三二）といふ寺に行く。こゝにも多少の畫がある。テントレットの作などもあるが、何となく、それ等を十分に見るのがいやになつた。同じ樣な川の間の町を曲り曲つて、北の海岸に出ると、そこの對岸の島が墓地で、シプレスの木立が見える。棺を黑いゴンドラに載せて、送りの人も船で、あの島に行く、此の地の葬式には特別の趣があらうと思へる。ベクリンの「死の島」なども或はかういふ所から得たのではないか。

その邊は零落の跡が貧民窟になつて、立派な御殿作りの家に、窓から汚い洗濯物がぶらさがり、川から家に入る石段の石の取れた所もあれば、立派な浮彫の石で出來た戸口に鐵の戸の曲つたのもある。貧と不潔がこゝに集つたかと見える、それでもその間を行くゴンドラは色々の花を載せて、ゆるやかに水上を往來する。あたりの家の汚さに對して、さつきの紅や、デージーの白い花が一層美しく見える。

雨がふり出した。大川に出て、汽船で元の路を、宮殿を眺めつゝ宿に歸つた。雨はしよぼしよぼふつて、宿の縁側から寺々や港の眺めは泣いた樣に見える。まだ見物すべきものは澤山ある。ドージェの宮殿もまだ見る時間は十分にあるが、どこに行つても貴族趣味の建物や畫や寄石に飽いた。夢の樣な所ではあるが、暑くるしい夢で、長く居れば居るほど、その暑くるしい苦みの樣な感が增す。ロマで既に飽いた。この地にも長く留るのは全くいやになつた。僅二日の滯在ではあるが、今日北の地を去ると決心した。中食の後に荷物を整へて、午後は宿の座敷で、海面を眺めながら手紙かき。

嗚呼イタリアの二ケ月も今日が終り。ルガノの春の花に始まつて、ヱネチアの夏の雨に終る。アンジェリコの畫には心の糧を得、フランシスの古跡には敬慕の涙を注いだ。それと共にロマの複雜な生活、ヱネチアの暑くるしい貴族趣味、色々の變化の中に色々の敎訓を得た。ロマ帝國の統一といひ、ヱネチアの地中海征服といひ、このイタリアは、地中海だけが世界である間は、世界の女王であらうが、今日より以後にはその望みのある筈がない。それでも、イタリア人は尙往時の隆盛を追懷して、多少それを將來に夢みて居るらしい。その夢を宗教に現はさうとするものは、ロマ敎會、政治に現はさうとするものは、今のイタリアの愛國者。而してその夢が、イタリアの內部でも、ワチカノとクヰリナレと相對して爭つてゐる。その夢は將來どうなるか。イタリアの美術も面白いが、このイタリアの夢の將來も面白い。

＊　　＊　　＊　　＊

雨の中をゴンドラでステーションに向ふ。蔽ひを垂れた下から、家々の臺石、石段のみが見え、水がその石をかんでぶり〱と音がする。雨のしめやかな水中の町の趣は、泥によどれる他の町と全く違ふ。

七時に汽車は出て、雨の中に水中の町を見返す。陸地に歸れば雨にぬれた木々の綠が眞に美しい。水中の宮殿よりは、天然の綠の方が淸新で、暑くるしい夢から醒めた心地がする。ヱネチアの町には零落の跡が多いが、おつぴらいた野の、雨に濡うた綠には生々の氣象が充滿する。

# ワグネルの書簡

（ヹネチアからツューリヒの親友に送つた）

## 一八五八年九月三日

　午後ヹネチア着。大河の流れをピアツェッタまで行く間、物悲しい思ひと莊嚴の調と、到る處皆壯大、優麗、零落の跡。然し此處には近世の花がなく、從つて又實業などいふ面倒がないと思へば心うれし。マルコの廣場では魅せられた樣の思ひ。遠い遠い過去の世界の樣で、孤獨の人には至極適當、實世界として觸れて來るものは一つもなく、何もかも藝術の作の如く我れを忘れしめる。

　夜の河の麗はしさ。星は輝き、下弦の月天にかゝり、ゴンドラは來ては又行く。遠くからゴンドラ船頭が歌つて來る歌の麗はしさ、又神々しさ。タツソーのスタンザを誦する者もないが、その調の古雅な事、ヹネチアと共に古く聞こえる。蓋しタツソーのスタンザは、これよりも新しいもので、誰れかが之にあてはめたのであらう。この調には全く變らぬ粹がある。スタンザは、一時出來てこの調には用ひたが、後に又埋沒されたのである。深い物悲しい調を響き亙るしつかりした聲で歌つて、その聲が水を隔てて遠くから來り、餘音は尚遠くに響いてゐる、之を聞いて自分の感動は何といはうか。あゝ、いゝ。――土地は夢の樣な場所、その感化は常に自分を物悲しい而も樂しい夢幻に遊ばしめる。夕方に、ゴンドラに乘つてリドの方に行けば、自分自らが柔かいキオリネの音の餘音盡きざる樣な心地がする。この音、自分の好きなこの音、又いつであつたか君をこの音に比べたが、その中に月光を浴びて、海上に浮んで僕がどの樣な感を持つか、君は容易に想像してくれよう。

　缺けた月が今漸く出た。其の圓やかであつた間は、愉快な感を與へて僕に麗はしい安慰を與へてくれた、自分はそれを要求した。日沒の後には、いつもゴンドラに乘つて、リドの方へ行つた。その時、晝と夜との戰ひは、實に澄んだ天空の面白い活劇であつた。右の方、眞黒い雲中に、宵の明星が親しさうにきら／＼と輝き、月は煌々として、その火花の網を自分の方に放射した。それから月を背にして家路に向うた。君が居る處、又君がその方から同じ月を眺めて居る方向を眺めて見れば、北斗七星に密接して、末は段々大きい光りの尾を引いて彗星が嚴かに輝いてゐる。それを見て、自分は恐ろしいとも何とも思はぬ。將來といふものもなければ、望みといふものもない自分には、恐れといふ事もない。されば、人が此の如き星が現はれるのを忌むのは、自分から見れば誠に笑ふべき事で、嘲る樣な傲る樣な心持で、彗星を自分の守り星としたい。異常で、輝いて、妙なものは彗星である。自分はその樣な彗星でもあるか。自分は世に災をした事があるか。又それは自分の罪であつたか。――此く思つてその星を見守つて、默つて靜かに、ピアツェッタに來た。そこにはいつもの如く、花やかに燈火が輝いて、人の往來も愉快さうである。それから森として物悲しい河を下れば、左も右も立派な宮殿、萬物聲なく、只ゴンドラの進む軟かな音と、櫂のさゝやきとのみ聞こえる。聲もなき殿前で舟を捨て、入つて行けば、廣い廊下にも座敷にも、人は自分

一人、燈火は燃えて居る、手に書物を執つて、讀む事は僅かで、物思ひは多い。何もかも靜か。——その時、河の方に音樂が聞こえる。色々の燈火をつけたゴンドラに歌手と樂人と、之を聞く人を乘せた舟は、段々多くその周圍に集り、河幅はまるで小舟の群集、その群は動くとなしに自然に流れて行く。美しい聲と好い樂器とで歌を奏する。四圍は耳のみである。——それも段々に角に近く、終にどこかに見えなくなる。夜の靜けさに心澄み氣高く、自分は偏その樂に耳を欹てゝゐる。藝としてはそれほどでないが、此處ではそれが天然そのものとなつてゐる。終に樂も聞こえず、その響は月光の中に溶け去つて、音の世界が光りとなつて殘つた樣に、月のみ軟かに照らす。

## 五八年九月三日

君、かの尊ぶべき佛陀が、嚴かに藝術を排斥したのは、蓋し正當であつたらう。常に自分をこの世の苦みの中、人生の矛盾の中に投ずるのは、この不幸な藝術である。この事を深く感ずる事、僕の如き人が他にあらうか。空想を實にしよう、實にしようといふこの不思議な天性が、自分になかつたら、澄んだ智慧に從ひ、心の思ふ儘にして、聖人にもなれたであらう。而して聖人として君に語り得たであらう。「さ、來い、總ての執着を棄て、自然の束縛を斷つてしまへ、その代りに離脫の公道を示してやらう」と。さうであれば吾等二人は解脫を得て、阿難陀とサギトリとの如くなるであらう。——然しどうもさうは行かぬ。知あるが爲め、思ひあるが爲めに、どうしても自分は詩人、藝術家とならざるを得ない。何か一つ考ふれば、直ぐにそれが形になつて眼前に現はれ、活きた樣に見えて、自分を動かす。さうなれば益々進んで深くそれを觀察して、明かにそれを捕へ、造り出だし、自分の創作として活かさうとする。それが爲めに、それに應ずる調子、心持が必要となり、その中に耽り沈んで、一般世事を棄てて優遊しなければならぬ。氣を散らさせ、角があり棘があり、何處でも自分を妨げる人生に打ち勝たなければならぬが、この世は中々自分に自由を與へず、煩悶の力で世の誤解（此も自分の作り出だした）や、又苦みや怒りや困難と鬪はなければならぬ。此れ皆自分が見て而も實行しにくいものを發表しようとする爲めである。その時には、この煩悶に倒れない爲めに君を思ふ、而して「助けてくれ、近くに居てくれ」と叫ぶに從つて、君は遠ざかつて行く樣に思へ、君の聲はかう聞こえる。「君が自らその苦みを招き、見たものをこの世に實にしようとしてゐるが、この世は君の物でない。君を罵り、君を苦め、又永久に君を誤解するものがこの世を蔽ひ、この世はそのものの領分である、さればこの世が君の藝術を歡ぶ事があり得ようか。藝術といふも、やはりこの世の物である」と。

つい此間、街を通つた時、ふと鳥屋の店を眺めて、何とも思はずに、只美しく切つて如何にも美味と思はせる樣に並べあるのを見たが、その時、その傍で鳥の毛をむしつて居るものがある、又一人は籠に手をかけ、生きてゐる雞をつかんで、その首をしめてゐた。つかまれた鳥の叫びのいやな事、苦みの可哀さうな事、それが實に胸にこたへて恐ろしく思つた。——こんな事は前にも見はしたのであるが、それからどうも忘れる事が出來ない。——思つて見れば、人間が快樂を求めて生きてゐるその生活の底には、暗い深い恐ろしい殘忍な悲痛の洞があるのである。この事は、前から明かに感じてゐたのであるが、感じが増すに從つて、益々明かに強くなつて、自分の憐みも、つまりてはこの人

生と努力とを斷然棄てる事が出來ないから生ずるのであると分かつて來た。その結果は色々に現はれて、この衝突の爲めに、氣分が自分にも分からぬ樣に變り、最愛の人に對しても、機嫌を惡くするのである。さういふ風に氣が向きさうになつて來れば、それを避けようとして、中に苦みを感ずる。人生に惱みなく、又惱みに心の遠かる工夫をしてある樣に見えて來れば、自分は直ぐにその考へを追ひ拂はうとする、此の如き人生は味氣なきもので、又人生の眞の解釋ではないのである。それ故に富者に對しては、少しも嫉妬の情を交へずに、根本から彼等を惡む情を生ずる。固より富者も、如何に富んでも決して幸福ではないが、彼等は幸福ならん事を目的として動いてゐる。それが自分を富者から離れしむるのである。彼等は情を矯め心を殺して、勉めて總ての悲痛を感じない樣にし、それによつて心を慰めようとする。この一事の爲めに、自分と彼等とは別世界の人となるのである。自分はどうしてもその反對に、同感、即ち惱みを同じくすべき同情を要する方面のみに引かれて、自らも制し得ない。この同情は即ち自分の德性の最も強い點で、又恐らくは自分の藝術の源泉であるのであらう。

## 五九年一月一日

なあに、悔むに及ばぬ、吾等の戀を。この戀。愛によつて、君はこの吾れの淋しい生活を飾つてくれたのである。この妙な喜びの花、貴い愛の淨い地に咲くこの花を、自分は知らずに居た。自分が詩人として夢みたものが、不思議にも、かく事實となる運命を持つて居たので、この世の生活の瘠せた土壤にも、妙樂の甘露が降つて、自分を活かして自分を發奮させるべきであつた。自分は曾て之を望み得ようと思はなかつたに、今は何となしに前からこの運を知つて居た樣にも思はれる。自分は已に貴い血を受け、眞に士にせられたのである。君が胸に憑り、君が眼の中で、又君が脣からして、――自分はこの世を離脫した。自分の身心の隅々まで、今は自由で尊嚴である。君が此く滿幅の誠を以て、此く甘くやさしく、而も又潔く自分を愛してくれると思へば、その思ひ一つで自分の威嚴を感じ、その神聖な威嚴の前に全身戰慄する思ひがある。――嗚呼、自分は現に呼吸して居る、君が君の情で與へてくれるこの花の香りを、心を魔する如き香りを呼吸して居る。君の情は生の種でなく、天上の死の不思議の花の香である。天上の死、是れ實に永遠の生命である。この花は曾て彼の勇者（ジイグフリード）の屍骸が天上の灰になる前に、之を飾つた花で、又自分の灰を戀人のと一つにする爲めに、その妙香と火焔の薫に、その戀人、プリュンヒルデが飛び込んだその花である。かくてかれ等二人は、一つになつた。二人別に生きて居る人間でなく、永遠なる天上の原質に復歸融合した。なあに、悔むに及ばぬ。この火焔。この火焔は、淨く輝いて燃えた。何等の黑焔も、何等の煙も何等の翳りも、之を不淨には得しなかつた、この純淨な貞潔な焔を。此の焔は、吾等二人の外に、何人をもかく淨くしかく灼燿して照らさず、何人も吾等二人の愛を知り得なかつた。君の戀――實に是れ自分の一生の寶冠である、妙樂の薔薇花である、荊冠――自分のこの世の生活の困苦煩悶の荊冠の中に咲き、自分の頭を飾る花の冠である。自分は此によつて多幸であり、又自ら高しとする。樂み、最も高い自覺、如何なる世の波濤に處しても、何事をも成さしむる力である。何に、悔むに及ばぬ、悔むに及ばぬ。

## 五九年二月廿二日

最勝最上なる佛陀の律では、罪の重荷に苦しめられた者は明かにその罪を集會で懺悔をして、それで滅罪を得たのである。君も知らるゝ通り、わたしは、何とはなしについ佛の信者となつたが、又佛教の乞食の教へをも知らずに守つて居たのである。その教へといふのは、中々、寳嚴なもので、修行者は、人の多く居る町に行き、欲を斷ち世を棄てた姿を見せて、それで信者に布施をさせては、善根を積む機會を與へる。それ故、布施を取る事は、修行者が特に信者布施者に與へる法徳、恵みで、それによつて彼等を教化するのである。そして食つするのは、物が欲しい爲めでなく、(一世棄人には欲はないから、)只布施を取つてそれで人の精神に力を與へる爲めである。

自分は、自分の運命に關して細密に知りたいと思ふ、運命を廻轉しよう爲めではなく、只何かなしに、それに對して用心せずに居たい爲めである。自分の未來に關しては、何等の要求もない。自分の欲しい一番高い要求——君も知らるゝその將來——は思慮でなくてはならぬ。この自分に、どうしても、自分の運命を外に向けようなどといふ考へがあらう。自分の願ふ所は、他の人の爲めで、此れが出來ないなら、總て棄ててしまはなければならぬ。人各々の福は、その自らの内から出なければならぬ、外からの樂は皆僞りである。

云ふ事が澁く沈んだ樣であるが、君を慰める爲めに、之を言ふのである。君がわたしの事について安心せられる樣に、君を慰めるのである。吾等二人は互に慰めたい、慰めと慰めとの樂しい交換を要するのである。……

## 五九年三月二日

今自分の特に好んで見るのはシルレルで、この人の非常に愛らしい人物に比べると、ゲーテは何となく疎遠の心持がする。彼れは知識を得ようといふ熱心から、只精神の光りと熱とをのみ求めてゐた樣で、人間としてシルレルといふ人が居たのかと疑はれる。健康の惡かつた事も、少しも彼れには差支とならなかつた樣で、その成熟の頃には、全く道徳上の惱みもなかつたらしい。彼れには、辛抱の出來ないといふ事はなく、その上に、その時代はなかなか大切な事をまだ十分に明かにしておかなかつた時で、概念の上で明瞭を要求した詩人にとつては、特に多く採るべき事があつたのである。只一つ此等の人に缺けて居たのは音樂である。然し、彼等は暗にこの要求を抱いてゐた。叙事的と抒情的と相對する代りに、彼等が時に一變形的とも音樂的と、詩の性質を對立してゐるが、此の事は大切な事で、彼等の要求のあつた所もこれで知れる。彼等の時代は探求の時代、發達分力の時代であつたが、その時は彼等は音樂に對して輪郭を寫しとつたので、その音樂は、それからして一つの大なる力となつたのである。それ故彼等は自分と心相接して居る、自分は彼等の心の一部分を傳へてゐる。あゝ、彼等は音樂なしでも多幸であつた、吾音樂のない爲めに自分よりも幸であつた。概念だけでは惱みも生じないが、音樂では總て概念が感じとなり、この感じが焦けて燃え立つて炎々たる焰にもなる。こゝに即ち驚くべき新しい光りも輝くのである。

トリスタンが出來上がる前に、自分は抓れの出來ない強壓を感ずる、それでも、それが爲めに早くそれを終つて了はうとは思はない。否、自分の生の目的、何も他の事はしまいと思ふ程に作曲に身を入れる。それで總て前になつたよりも立派に出來、一つの調子も自分から見れは、

今日の意義が籠もつてゐる。その様にして今それを作つて居るのである。

病氣といふ程でもないが、氣が勝れない故、とう／＼大陸に遠足する様になつた。初めヴヰツェンザの方に行くつもりであつたが、列車が丁度他の方に出るので、終にトレヴヰソに行つた。一夜を不安に過ごして、翌朝晴天に乘じて五里餘も歩いた。町の門を出て、立派に莊嚴な屏風をなして前途に横はつてゐるアルペンに向つて、途中色々の考へも浮んだ。夕暮にラグナのこの町に歸つて、大陸遠足の感如何と自分に問うて見た。暫く見なかつた庭や、追ひ使はれた情ない馬を見た事を思つて、何となく氣も沈み、而して音もない河を見て物悲しく感じた。庭や、追ひ使はれた憐れな情ない馬や、此等はこゝにはない、が然し世界にはそんなものがある。思ひに沈んで、燈火を消し、自分を守る天使に祈りを捧げた、――而してその中に自分の光りも消え、庭も苦みもなくなつて行つた。

次の日復仕事を始めた。

それから手紙をかいたが、それは既に述べた通りである。明日も復仕事をしようが、その前にこの手紙をしまはう。この手紙を書いて、夜の眠りに入らう。夜には光りも消え、庭も苦みもなくなつて行くのである。

## 一八六〇年一月一日

友よ、わたしはまだ生きて居る。新年にこの事を知らせるといふは、甚だ奇妙な様であるが。

今日頃には、君から何か音信があらうと空頼みしてゐた、どうしてその賴みを持ち得たか、神のみぞ知るであらう。此頃の二人の間の文通はまばらで不規則である。先きの手紙の日附で見れば、わたしのは十二月二十三日には、まだ着かなかつたらしい。それ故その返事が今日頃に來ようとも思はれない。

然し君と君の一家とがロマに安着で、總て好都合と知つて喜ばしい。君の手紙に見れば、今頃は十分落着いて居らるゝ事と信ずる。君は眼を開いて――見物して居らるゝであらう。又恐らくはそれに餘念もなからう。わたしの代りによく見てください。わたしは、誰れかが自分の代りによく見てくれる事を求める、而してあなたより外には、代りに見てもらひたい人はないのである。いつも云ふ如く、見るといふ事は自分には特別の關係がある、この關係は特にイタリヤで能く分かつた。眼に對する刺激は、一時餘程感じを與へるが、永くは續かない。これは自分の眼が飽くを知らない爲めではなくて、それだけでは、世界を見分けるに十分でない爲めと思はれる。眼の肥えた彼のゲーテですら、「ファウスト」の中で「何とした見物だ、然し一片の見物に過ぎない」といつた、と同じであらう。

恐らくは、此れも自分が全く耳の人間であるからであらう、然し其れも永い間聽く方の養ひを少しも得ない爲め、終には耳も自分の爲めによく働いてくれない仕儀である。蓋しそこに一つ何か名狀し得ない内からの感覺があつて、外に向つて働く感覺が夢見た様にある時ばかり、それが明かになつて働くに違ひない。それ故、よく見も聽きもしない時のみ、この感覺が最もよく活動して、「作る力のある落ち着き」として現はれる、「作る力のある落ち着き」、どうも外に名の附けやうがない。この落ち着きが、即ち君の所謂「形に現はれる落ち着き」と同じであるか、どうか。只この落ち着きは、内から外に向つて働くので、その狀態では、自分は世界の中心に居るのである。然るに所謂「形に現は

れる落ち着きは、どうも內からでは落ち着きがないに、外から動かされて、形の上では活動のある沈默の樣に見えるのであらう。この內からの動搖で落ち着きがなくば、如何なる形像も美術も自分には働きを及ぼさない、總て體のないいたづら事の樣に見える。これを過ぎ超えて見ると、そこで始めて一つ安んじ得る處を得る。又他の人に同情し得る點を發見し得るのも、唯この眺め、卽ち現世を過ぎ超えての眺めの賜で、自分にとつては、これのみが世界の眞相を示してくれる。カルデロンの觀たのも此れであらう、世界の生命や美や花を、彼れほどよく寫した者が、他にあらうか。

ロマに居た間のゲーテは、實に欣すべく重んずべき境地の人であつて、かれがそこで得たものは、總ての人に益を與へ、又それによつてシルレルに內觀の料を與へたのである。ゲーテは段々眼の樂みにつられ、シルレルは之れを利用して貴い作をも作り出だしたのも、此れが爲めで、ゲーテは餘りに趣味を追うて、終に古貨を集めるまでの習癖に罹つた。かれは全く勝れた眼の人であつたのである。

ゲーテについて行けば、見物には慥に益を得る。君もロマではゲーテを案內になさい、さすればかれの美はしい心、ゆかしい落ち着きが、君の眼に映ずる思ひがあるでせう。わたしの代りに見て、初めての見物で注意すべき事があれば、必ず知らせてください。

こちらには別段の事はなし。適當な音樂堂を得る爲めに、あちらの家に行き、こちらの門を叩く人間の事は、ロマに居る人には知らせる要もなし、そんなにして、どうして勇氣も出るかと、語る事も出來ないのである。

今の自分の仕事といふのは、トリスタンを興行する事の出來る樣にといふ一事で、一度出來れば又續いて出來ようし、他に考へる事は一つもない。此の目的の爲めに必要なものは、先づ十分貯へあり。あゝ、若し自分がゲーテであつたなら、今直ぐロマに向つて君等の方に行くに違ひない。それに違ひないと思つてください。

終りに、美はしい、はれ〴〵した新年を祝す。君をイタリヤの天に想ひやれば、自分も甚だうれしく感ずる。オットーにも子供達にもよろしく、よろしく。

(明治三十八年一月)

## フォロの廢墟

——「花つみ日記」の「永遠の都、法王の玉座」より

晴天ながらに風は強い。色々紹介狀を貰つた人々に宛てて手紙を出して後、今日の午前はフォロの廢墟でくらす事にして、その方に馬車を驅つた。日光は廢墟の石の柱や敷石の上にまばゆいばかりに照つて、その間に色々の花が咲き、特に菖蒲の花が目立つて美しい。

今日は五月五日で、端午の節。七年前の今日、印度洋でこの節句一日を面白くすごした事、その時の乙羽君の芝居なども思ひ出し、その人も今は亡き人と考へると變な心地がする。坊や二人の節句はどうしてゐるかと思ひ、又自分の子供の時の大將人形なども思ひ出す。二千年のロマの古蹟で、端午の節句をするとは妙な廻り合せである。

故鄕のさつきの空を忍ぶとや、
宮居のあとにあやめ花さく。

(明治四十一年五月五日)

# 清見潟の一夏

**卅六年六月十五日**　西の京を去りて東の京に向ふ。名古屋より醒雪偶然に同車。二人にて食堂に一酌する時、汽車江尻、興津の濱邊を過ぐ。夕日影雲間より漏れて、斜に有渡の山々を照らせり。觀音堂が丘の上松の木の間に見ゆる彼方、龍華寺畔の友よ、汝の待ちし友が海外より歸り來りて、今汝が永への安眠を託せる山河に對し、無限の恨みを載せて、汝が久戀の清見潟を過ぎつゝあるを知るや。山川語らず、輪車情なく。一杯の酒未だ盡きざるに、有渡も三保も過ぎて見えず。來るや電光、去るや石火、人生の遭逢亦此の如きか。

夜遲くして京に入る。整はざる街衢、亂雜なる都市、二年の昔に異ならず。

**十六日**　昔なじみの西片町に芥舟の居を訪ふ。是れ樗牛が曾棲の舊居。音づれて出で來るは同じく友なれど、人は異なり。相對して憮然として暫く語なし。

芥舟と共に竹風の寓を訪ふ。余の歸來は樗牛の追懷を新にすとて、亡友の書簡數通を取り出だして見る。濃かなる友情、思ひ切りたる痛罵、身の上、人の上、笑ふべき者怒るべき者相交る。二人共に之を讀みて、追想と悵惘とを新にす。

**廿三日**　芥舟の家にて樗牛遺稿編纂の協議をなす。亡友の弟齋藤信策を始めとし、登張、桑木、藤井諸友相會す。彼れが幾多の文字を草せし彼れが舊居の其の同じ室にて、僅か數年後の今日、友人が相集りて彼れの遺稿を結集せんとは、人生の運命何ぞ不測なるや。

**廿四日**　京を去り、汽車鎌倉に着す。はれかねたる五月雨の空鬱たうしく、灰色の雲に映じたる新綠の山野憂をふくむ。此の地に入りて吾が心は總て斷腸の種に充つ。今日二年餘を隔てて舊知の山野に對する時、天地泣かんと欲するも皆吾が爲ならずや。車を驅つて長谷に到り、路を求めて樗牛の舊居に殘されたる彼れの家族を訪ふ。門口の街燈に殘れる高山の二字、吾が爲には亡き跡を訪ふ道のしるべぞ。家に入れば彼れが穿ちし木履、革履に先づ面を背く。はきちらしたる小さき赤鼻緒の草履、二年見ぬ間に一人は生まれ、一人を失ひし彼れの家よ。取り次ぎの婢の出で來るまでの瞬時に、吾が眼底已に涙にて充つ。嗚呼吾れ如何にして彼れの亡き跡に、彼れの忘れ形見をや見ん。

導かれて室に入る。床の間に取り亂したる書籍、其の昔より舊知のもの、吾が遠く彼れに送りしもの相交る其の間に、しるく高祖遺文錄の大冊五六。是れぞ彼れが一生の最後の一年を語る好記念。此の人此の文に力を得て、新なる生命に入りし彼れは、進んで尙新しき生命に入らん爲、歸路を東にいそぎつゝある友を殘して此の世を去りつるよ。見れば小さき龕に新しき位牌、文亮院靈岱謙光日瞻居士の數字、傍に辻說法の古地に立てる亡友の小照と、吾が印度より送りし菩提樹葉一つ。「ア、君を横濱の埠頭に迎へて、互に手を握りたらむ時の、吾が歡びは如何なるべき」と、最後の手紙に書き殘したる彼れは、此の如き新しき形と新しき名とにて、冷かに吾れを迎へんとは。吾れは今更の如くに吾れの涙もろきを覺ゆ。涙を流しつゝ彼れの家人に見えん事心苦し、吾れは何故にかく女々しきや。

庭の外より歸り來りし幼兒の足音と共に、彼

の兒の母も戸外より歸り來ぬ。相見て言なく囀をなす。幼兒は無心に何れのをぢちやんが來しかと訝りげ也。かくて病中の事、余の歸期を待ちわびし事、晩翠がロンドンより送りし草花の事、談は總て暗涙の中に語らる。時に面をそむけて庭面を見れば、彼れが遺愛の草花の殘りたるあはれに、此も悵恨の種のみ。永く留りても彼れが跡に殘りし妻の愁を新にするのみなれば、辭して去る。彼の兒初子のみ乳母に負はれて長谷寺の門まで送り來。彼の兒も半時間前に見し時よりは親しげに、余が行く背後より小さき手を擧げて別をなす。嗚呼、初子よ、汝の父が、汝と汝の母とを殘して世を去りし其の日より、宛も半年を經たる今月二十四日、汝の父の兄弟にもすぐれたる友が初めて汝を見、長き思を跡に殘しつゝ、汝に送られて汝の家を辭し行きしを記せよ。歸期六ケ月の差の爲に、終に孤兒として初めて汝を見たる今日の恨み、汝の「をぢちやん」は終生忘れざるべし。觀音堂に上る。長谷の家々、由比が濱の白砂、材木座の岬より、遠くは名越の里の邊、三浦の山々皆是れ曾遊の地。三年相見ず、而して今萬斛の愁を抱いて、此の天地に對す。彼方光明寺畔の松林に、最後一夕の「鎌倉」を草せし日など採〱山の姿今いづこ。樗牛と相携へて、名越の里より山を越え、共に此の觀音堂に詣でし七年の昔、茫として隔世の夢に似、而して病を養ひつゝ日夕此の邊を逍遙して、思ひに耽りし彼の友の跡、今如何に。嗚呼鎌倉の山水、汝は吾れにとりて愁の友なり。吾れは汝に接して盡無の悲痛を覺ゆ、悲痛盡き難きが故に吾れ汝を愛す。

午餐を旗亭に喫し、汽車鎌倉を去る。暮烟漁村を蔽ひ、淸見寺の鐘夕べを告ぐる時、興津に到り、海樓に投ず。

「君還り來まさば、願はくは一夕淸見潟の海樓に痛飮し、其の夜滿腔の血一斗を吐いて死なむ。」

「此の秋には淸見潟に」を唯一の望として、音信毎に此の語を反復せし吾が友は、彼れが友の還り來るをも待たで、又滿腔の塊磊を吐き盡すにも及ばで、今は永へに淸見潟の邊富嶽を望みて眠る身となりぬ。夕暮海樓の欄に倚れば、暮潮しめやかに天に連なり、影の如き有渡の山々しづかに横はる。彼の山々の上に平和あれ、吾が友の墓の邊に休みあれ。「吾れは淸見寺のふもとにさすらへる身ぞ」を口吟みて寢に入る。

**廿五日**　空くもれるまゝに、日の光やゝ強し。車にて江尻を經て村松に到る。海長寺の貫主守本文靜師は、樗牛が未見の知己、死後の友、彼れが埋骨の地は師が管理の下にあり。師が新築の座敷三保富士の眺めよきに導かれ、亡友の身の上、埋骨當時の事、墓碑の事、二人の語る所は恰も舊知に異ならず。海長寺を出でて共に龍華寺に向ふ。新綠の木立の間、崖の上なる新墓標、僧正は路より之を指す。吾れはうなづいて心悸の已に高きを覺ゆ。寺に入りて本堂の緣側に憩ふ。八年の前曾遊の地、今は心友が墓畔の景として之を見る。人生の遇會何ぞ奇變多く、傷心の種何ぞ一に歲月と共に繁きや。僧正は余を導いて、堂後の崖を上り、墓標の前に到る。友よ汝の友が三年を隔てて千里の外より歸り來り、而して今汝に齎らし得るものは、此の一枝の花、一掬の水の外只涙あるのみ。吾が手を握らんといひし其の手は、今既に地中の骨。手を握つて、言葉もなく泣きくづれん、といひし其の言葉はきこえず。汝の涙今また何處にふるや。僧正は墓前に自我偈を誦し、吾れは瞑目欷歔足地にあるを忘れんとす。久しく此處に留るに堪へず、辭して歸路に就く。

車上天然の風光斷片の如く僅に眼に入る。瞑目して心に誦する所はアドネイを哭するの

詩、

Alas! that all we loved of him should
  be.
But for our grief, as if it had not been,
And grief itself be mortal! Woe is
  me!
Whence are we, and why are we? of
  what scene,
The actors or spectators? Great and
  mean
Meet massed in death, who lends what
  life must borrow.
As long as skies are blue, and fields
  are green,
Evening must usher night, night
  urge the morrow,
Month follow month with woe, and
  year wake year to sorrow.

夜、空暗く、星影だに見えず、晦日の暮潮黒く、磯邊の岩根を包む。

**廿六日** 日闌けておき出づ。海に飛び込む、水尙冷なり。背後の山、磯邊を散歩す。今夏二ケ月を過さん借り家を定む。三保の崎、有渡の山見つゝ今日の一日は暮れぬ。

**廿七日** 清見潟を辭して西の京に歸る。

**七月二日** 汽車大阪に着る。雨中車を四ツ橋に驅る。市中の装飾、廣告、看板のみならず、町行く人の態、店に坐する人の風、總て滑稽、利慾の府、物質主義の首府。痛ましきかな、此の如き市府を國の中央に有する國。

四ツ橋の立正閣は、亡友の師友田中智學氏が、今春以來日蓮門下眞信の徒を養成せん爲、學會を開きて、今方に其の學を講じつゝある所。到れば恰も式日講義の時間にて、暫くにして誦經の聲起り、其の聲終ると共に氏は出で來りぬ。導かれて閣の最上樓に上る。氏を初め會の學衆皆一見舊の如し。語る所は一に樗牛と日蓮との上、快談淸話、時の過ぐるを忘る。

午後、學衆に對して、樗牛記念事業の計畫を語る。後式日の講義を聽き、會の法式を見る。

夜闇の最上樓に寢ぬ。

**三日** 空漸く白く眠覺む。思へば一夜を大阪人士の頭上に明かしゝなり。屋外脚下の萬家は尙眠の中に横はれり。物質主義の首府よ、汝の眠は安かりしか。今日汝が眠よりさめて、再び營々の生に歸る時、汝の天が煤烟に蔽はれ、汝の地が罪惡の足に踏みにじらるゝ時にも、此の閣上擇ばれたる大音聲が野の聲を叫びつゝあるをきかざるか。

學衆の山川智應氏と、樗牛を共にす。嗚呼是れ皆亡友の爲に泣き、彼れの爲に祈りし人。余が樗牛を忘れざる間は、此の閣上の際會を忘れざるべし。

閣を辭したる後、博覽會を一見す、嘔吐の種のみ。只高塔に上つて城郭の邊住樓の地、朝夕の眺めに入りし生駒、志貴の山々、玉造、天王寺の野邊、河内の平野、春の野遊びせし十數年の昔を思へば、塔上の眺め亦背き難きを覺ゆ。京に歸る。

**五日** 西の京を去つて薄暮興津に入り、千歳家に投ず。机淨く掃はれて吾れを待てり。空は曇りがちながら、上弦の今夜明るし。磯邊を歩みつゝ遙に龍華寺畔の友と語る。

**六日** 濱邊に出でて先づ眺むるは有渡の山、龍華の寺。荷物を出して部屋を整ふ。小さき書棚には、常離さぬウパニシャド、ショペンハウエルを始めとし、大小の書册二三十。其の上には巻物にしたる樗牛の最後の手紙、小さき繪本類を幷ぶ。床の間にはホフマンが筆の「ゲトセマネに於けるキリスト」常に天を仰いで「人の子」の祈りを捧げ、壁間には康有爲の詩二首、以て山高き金剛寶土にての二人の淸談を記すべし。而も

して柱にかけたるニーチェが小照の一眄は以て馬骨俗輩の闖入を喝止するの咒たるに足らん。かくて四明環翠の此の室を天地として、此の一夏思ふが儘にいね、思ふが儘に思ひに沈み、思ふが儘に獨り嘯かん。

**七日** 雨來る、三保の岬は淡くして影に似、水はしめりて死せる如く、模糊として天に連なる。こぎ行く舟のあはれさ、時々に打ちよする汀の波さへ力なけなり。夜、樗牛の弟に一書を送る。

「濤聲ひとり夜のしづけさを破る時は、彼れが舊手簡をとり出だし、一度は彼れと相對して語る思ひをなし、一度は又悵として彼れが已に地上の人にあらざるを痛む。三十三年十二月四日、即ち彼れが將に興津を辭して平塚に向はんとする前のはがきに、三保の松原、淸見寺、是の興津の景色に別れるのは、しみ〴〵悲しい。今日妻と龍華寺の方に遠足に出かけるところ、云々の文字あり。嗚呼人生の離別遭逢、一に何ぞ銷魂の種多きや。今夜淫雨しきりに降り注ぎて海上濛々たり。臨濟寺[illegible]骨の地、彼れが眠れる魂魄は後に殘れる友が淚の雨にさまされて、淸見寺の鐘に其の昔を忍びつゝ、友の枕頭に現はれ來るなきを保せんや。「四十に近き亡友の書簡は、此の雨にも似たる僕が胸中の暗淚の種なり。「僕は未だ日蓮に依りて彼れが得しほどの慰藉を得べしとは望み得ず、僕は寧ろキリストに依りて大なる光明を得べしと信ず。亡友を思ひて幽明の神祕に心驚く時は、即ちヨハネ傳を執つて、特に其の十七章を讀む。是れ皆一にならん爲の福音を讀み來つては、大なる力を吹き込まるゝを覺ゆ。此般の消息言詮に絕す。此の福音胸に銘じ得らるゝも畢竟誰れの賜ぞや。」思ひは夜と共に沈み、筆は雨滴に從つて淚の跡をたどる。

**八日** 夜半に目さむれば、戶の窓明るし。起き出でて見れば、雨の晴れ間の月淡く、山と水と寂寞の光に包まれて、天地の間さめたる者は月と吾れとのみ。亡友が夜半のねざめの鐘の音に、宇宙の律呂を呼吸して、わづらひの身一つの上ならぬをいたみしも、此の如き夜半なりけらし。かなたに眠りて橫はれる山の邊に、吾が友は眠さめて、共に此の月光を浴びつゝありや否や。

朝おきて後、今宵も月明なるべければ早く來よと、芥舟に電報す。寂光の國なる友にも、此く同じく吾が意を通ずるの道ありやなしや。

シェリーがプロミシアス中の一句、特に今日の感を惹く、

生と死との二つの世界あり。一は汝が見る處、他は墳墓の下にあり。考へ又活くる總ての形の影此處に住み、死の總てを合し又分れざらしむるまで、夢も、人の短き想ひも、又總て信仰が造り出だし或は愛が冀ふもの、恐しき、奇しき、崇き、又美しき形、皆此處に住む。

待ち設けたる今宵の月、雲に蔽はれて雨さへ蕭々。此のしめやかなる月の光おぼろなる夜、龍華寺の墓畔如何に淋しからんと思ひやり、書簡一つ樗牛が弟に送る。

**九日** 今日も雨、風さへ加はり白波怒り岸打つ音さわがし。タウレルが「吾等はキリストの人たる性を崇拜するに、必ず其の神たる性に關聯せざるべからず」の語に至つて沈思す。キリストの一生に人性を認めざれば、吾等は其の人の信仰に感應し、其の人の福音に應じて天父の膝に身を投ずるを得ず。されども今のユニテリ

アン其の他新派と稱せらるゝ人々が、キリストの人としての宗教的意識にのみ重きを置く結果、その神性を否定せんとするは角を矯めて牛を殺すものなり。所謂創世の始、否無始のロゴスをキリストの人物の中に認めざらんには、キリスト自身が神を父とせし自覺も、空中樓閣となり、其の福音も、人間の歴史中に偶然に現はれたる一片の訓言乃至方便となり了らん。キリストを神の子にあらずといふ人は、自ら自らの狹き人格、自らの私意私慾の性情を以てキリストの人性を律し、此の如き人性は神性と兩立せずとするにあらざるか。されど久遠實成のロゴスは獨りキリストのみにあらざるなり。

「此のロゴスに依りて萬物造らる。之に由らざるもの一もあるなし」。さればタウレルの所謂キリスト神性は、又吾等の身の上ならずや、吾等の人性をして光榮あらしむるは、之を其の神たる性に關聯するを要す。而して斯く此の人性に神性を發揮するは、キリストを神の子として愛するに存せずや。佛を信じ、佛智に隨順したる者は、即ち法と一如たる理も亦此に同じからずや。

**十日** 早起海岸に出でて、濤の音、此も人心煩悶の反響にやなど思ふ。歸りて「現代青年の苦悶」の筆を起す中に、齋藤君より、樗牛と余との往復且は樗牛が最後の手帳を送り越す。彼れが走り書きの跡、ニーチェ、日親、德行記、ボンベイ領事宛、さては「佛陀の眞の敎へ」、「皆人をして妙道に入らしむ」「生命を存ふる價何れにありや」など、或は日本文、或は英文、或はロマ字の日本文、書き始めたる文字は一頁を黒くするまで同じ事を繰り返せるなど、彼の面目を表せり。大學の寄宿舍にて机を對して雜談の折り〳〵に、彼れが筆と紙とに同じ樣なる戯をなせし樣、目の前に見る如し。彼れが日蓮の人物を慕ふより其の敎理にも入らんとせし事は、此等の戯の端にも見ゆれども、特に或る頁に左の文字あるは注意すべき事なり。

事に拘れば惑多く、理に泥めば爭多し。事理の兩觀を究めて萬古の道を定むは、古聖賢尙ほ遙に及ばずとするところ、今の學者の倖々を以てして豈千中無一のみならむや、危い哉是の道。

一身の正○に住して己れの行するところを守る、世に處するの道唯是れあるのみ。

**十一日** 樗牛と余との間に往復したる書簡を見る。今盡く此を公にせば、罵られたる人、怒る人、如何に多からんなど思ひて獨り笑む。

**十二日** 藤村操の死が失戀の爲なりしとて、彼れの死を讒誣せんとする者新聞に見ゆ。世は失戀の人を憐れまぬまでに酷薄となりけるよ。失戀は煩悶感を生む能はずと推量するほどまでも、青年の心事を解せずなりしよ。

臨風よりの手紙に、同人興津に集りて樗牛の死の魂を招いて飲み明かしたしといひ來る。

大阪なる立正閣より妙宗數册送らる。智學師が師子王瑣言、誠に師子吼の趣あり、堂々の言、壯烈の文、天下の快文字なり、樗牛の感應讚歎も理なり。昏々の文壇、此の快文字を看過すること痛嘆々々。

夜濱邊を歩む、脚下波靜に海平砥の如し。暫くにして黒雲の中に微光見え、須臾にして水平の一點銀光を放ち、光漸く明に水益々輝きて、終には頭上の雲も風に追はれて星光現はれ、月光大空より水面を光破す。嗚呼此の海、此の月、思へば斷腸の種、かすかにハムレットの獨語を反復しつゝ家に歸りて寢に入る。

**十三日** 立正閣の山川氏に手紙にて、久遠實成の佛陀と無始のロゴスとにつきて所見を書き送る。此の道友も樗牛の結緣にて得し人なり。

「妙宗」の中に法華信者の一婦人が、嫁して後、

信仰の爲に離縁の脅しにも屈せず、終には其の家庭の中に信仰の自由を貫きしといふ記事を讀む。「地に平和を出ださん爲に我れ來れりと思ふ勿れ」、世の倫理學者にして一分此の消息を味ひしならんには、など思ふ。煩ひなく戰ひなくして來りし平和は、眞に平和にあらざるなり。

午後雨再び來る。晴天數日の後、雨中の三保の松原の眺め一入なり。

**十四日** 風吹きつゞきて、海は濁り波荒る、黑雲は時に龍華の山の上を掠めて微雨を齎す。今朝京より送られし樗牛の「時代管見」を手にして濱邊に出づ。今日の空に渚には人影もなく、漁舟は高く砂の上に引きあげられて、濁浪獨り汀を嚙む。脊ばたに身をかけて、亡友の遺文を彼れが久戀の地に讀む。壯烈の言、婉曲の文讀み去つて、首を擧ぐれば、彼れが埋骨の青山は水煙のあなたに夢の如くかすむ。

午後天少しく晴む。波高く波音たてば天はるといへる甲八の言、今日も驗あり。鬪ひなしに平和を望み、煩ひなしに安慰を求むるは、天地の公道にあらざるよ。

師子王瑣言の中に、日蓮が安房の故國の刃迫を後にして罪惡の鎌倉に刀劍を迎ふる條、一章鞋孤杖飄然として名越の里に到つて止る、路傍の日蓮水、今猶滾々として竭きず、誰か其の第二を掬して不惜身命の渇を醫するものぞ」の句あり。キリストがサマリアの池邊婦人に語りし教を聞け。「我が與ふる水を飲む者は永く渇することなし、我が與ふる水は活ける水なり。」

**十五日** 今日は十五日なればとて、宿の庭に立てたる大威德猿田彦大神の木標に神酒を供ふ。大威德の神力何事かときけば、父子の不和を和解せん事を祈願せしなりといふ。好笑好笑。

パーリ雜藏中の大莊嚴經（Mahāmangala）が漢譯法句の第三十九品と同じ異傳なる事を發見す。去年の此頃ロンドンの寓居にて、雜阿含の異傳を比照せし當時を思ひ出だす。タフネル・パークの田舍なる生活、恍として夢の如し。

**十六日** 晴れ間に背後の山なる不動堂に上る。此の不動の尊像が波によせられて濱に上りし時、波が二つに分れし故、波切り不動と稱し、村の漁家が海上安全の賴みとする所なり。夜山上に太鼓の音するは、漁家留守の老婆が、不動尊の前に、法華の題目を唱へて祈願するなりと。

午後風なぎ海靜かなり。元の清水樓の縁側に倚り、松の木の間に碧海を眺めて獨り思ひに耽る。八年の前、此の樓に宿りて源氏五十四帖を讀破せし當時、或は海荒れし一夜、明石の卷を讀みて、流人たる源氏の身の上を思ひ、或は雨そぼふる日、宇治の姫君の上の憐れ身にしみし事など思ひ出だす。さるに、其と同じ時此の家に讀みし法華經につきては、今何等の印象をも止めず。同じく讀むと雖も、殘る所此の如く異なり。所謂色讀體達にあらざれば、讀書は寸毫の益なきを知る。

**十七日** 「現在を沒して過去に還るのが遠本の旨である、過去を追尋しての極度が未來の末來に洞徹したのが、常住の旨である、極めて古いほど極めて新しくなる」といへる師子王瑣言の一節特に痛切。無始のロゴス、生々の光明、是れ卽ちヨハネ傳のキリストにあらずや。所謂法華の妙法とロゴスの生命と如何にして異なり得るや。

**十八日** 朝來、天はれて日光烈しく海碧し、幾多の漁船は東風に白帆を揚げて漁より歸り來り、碧海の白帆輕き胡蝶の飛ぶに似たり。潔癖ありといふ日本の帆の白さ、されど其の輕さを見よ。海上の白帆も國性の一代表といふべきか。

夕暮、濱の砂の上に横臥して、日沒の空を眺む。無限の水は脚下に湧き、無涯の光は天にあり。天地大なるか、將た又其の大を觀取する人間の大なるか。

**十九日**　手紙多く書く。天然との無言の會話に倦きては、遠きにある友と紙上に談話す。手紙にて友人との會話は、天眞率直なるを要す。今の書簡文體は僞善の文なり。親子の間、朋友の人にも、候や彼下などいふ語を用ふること甚だ面白からず。余は數年前より友人や家族には決して候文を用ひず。此日の新聞に、故藤村操の心友に宛てたる書簡數通を載す。其の文體語氣が、余の樗牛との往復に酷似せるを見て、思はず胸迫る。

**廿日**　フェヌロンの神論を讀む。最後の祈禱特に感深し。

**廿一日**　曇る、山に上る。午後靜岡に行く、村上氏等が佛敎演說の揭示處々に見ゆ。年々月々諸處に繰返しつゝある佛敎の講習會、或は演說會は幾何か佛敎の信仰に益する所ありや。余輩は村上氏の如き鴻學が、多くは他動的に此等の會に招かれて、俗衆の喝采の中に、常套の談義を繰返すことの多きを嘆ぜずんばあらず。ます西より來るを迎へ、次の列車にて興津に歸る。西の京の話に夜をふかす。

**廿二日**　雨、二人にて諸方に多く手紙をかく。

**廿三日**　今日も曇りて雨時に至る。法王レオ十三世崩去の報を見、默禱す。ヨハネ第一書を讀む。「後如何なるべきかは未だ現はれず、其の現はれん時には必ず神に肖んことを知る、我等神の眞の狀を見るべければなり」の句、特に胸に銘す。談理の宗敎が徒に野狐の悟道を誇りて、其の敎却つて人に痛切ならざるは、一に未だ現はれざる我等の神性を已に現前せりとし、終に吾等が肖んことを勉めて已まざるべき、神の眞の狀を逸するが爲ならずや。此の別は、卽ち大乘佛敎とキリスト敎との依つて別るゝ所なり。「神に肖んことを知る」、此の信は宗敎の命、神祕の力なり。

**廿四日**　少しく霽る。今日は樗牛が忌日なれば龍華寺に行かんと思ひ、午後を期す。午後復雨ふる。水のあなたに墓邊を思ひやるのみにて、半日を讀書に消す。

**廿五日**　雨しめやかなり、今日は吾が第三十の誕辰に當る。去年の今日はハムステッドの野原深く分け入り、芝草の上に半日を消して聖アウグスチノを讀みきと覺ゆ。彼の聖の告白第十一に、神の創世は時間を絕し、神の時は一瞬と永劫との一致なるを說けるに感深かりしこと、昨日の如く思はる。年はたち、月は廻りて、今年も亦今日に遭ひ、釋尊の成道の年、孔子が而立の齡を得ながら、吾が色心の煩惱は舊に異ならず。轉々息む事なき「時」の輪に牽かれ牽かれて、きのふと暮らし今日とあかし、過ぎしをいたみ、來らんを思ひわづらひて、徒に人の世の憂を抱くのみ。「過去たく未來たく只永遠の今ある人、萬世に呼吸する人」にあこがれし吾が友は、寂靜の邦を望んで去りぬ。嗚呼吾れは如何にして彼れの跟を追はんか。思へば三十年の命、是れ大なる一の迷ならざりしか。吾れの生まれしは三十年前にあらずして、念々刹那は卽ち吾が誕辰ならずや。エックハルトの胸に宿りしキリストは、時と處とを外にして不斷に生まれ、法華法座の佛陀は、釋氏の宮に生まれずして、「我常住於此」と宣す。キリストと現はるゝロゴスよ、佛身を現する妙法よ、吾が念々生々の中に久遠の壽量を實現せしめよ。汝の太古の光をして日に新に我が中に生まれしめよ。過ぎし三十年と、來ん幾年かの吾が肉身の生をして、永く永遠の現在に融僻せしめよ。吾れは此が爲には、如何なる惱みをも驚きをも、

又戰ひをも辭せざるべし。

**廿六日** 今日も雨、むし暑し。キールにて親しみなれしハイニといふ兒より自分の寫眞に手紙をつけて送り來。互に親しくドウを以て呼ぶ子供との交りの趣きある事を思へば、日本にて、猥に敬稱を以て兒童を呼ぶ風の、早く熄めよかしと思ふ。

**廿七日** 一天雲なくはれ度りぬ、海碧く山明なり。龍華寺に遊びて、再び樗牛の墓を訪ふ。前面の青田に風吹きては緑の波涼しげに、海原遠くかすみわたりて、富士の峯は夏雲の間に出沒す。無影情として墓前に立てば、後山の木立が中に高く蟬の聲喧かなり。連日の淋雨はれて、夏は山にも海にも洽し。夏を人生の壯年に比べて、鬱勃の氣象を貯へし友は、其の一生の盛夏にもあはで、遺骨と心友とを今此處に殘して去りぬ。墓邊の雜草を拂ひ、別れを墓標に告げて山を下る。午後ジェームス氏「宗教經驗」の結論を讀む。樗牛が最後の手紙に一面幽冥に對する一種の憧憬ありて云々の言を思ひ獨り笑む。夕べ、天明かに星光美はしく、纖月かゝる、此の夏に入りてより、かほどの空を見しは今夕初めてなり。

**廿八日** 未明におき出で、舟に櫓をたてて海に浮ぶ。伊豆の山々を蔽へる濃雲の間より朝日の光漏れそめて、なぎ亙りたる海面きらめき、暫くにして日光暑く舟をも身をも浴びす。舟を捨てては水に入り、水より出でては櫓をとり、行く〳〵三穗の砂嘴に着く。田の面の畦路に砂やけて、蟬の鳴く音も汗となる。神社の森をすぎ、南の方松原の濱邊に出づ。磯高く海濶く、大洋より吹き來る風は、波を蹴り沙を揚げ松が枝に嘯き、空は一面水烟と雲とにくもる。雲烟の立ちのぼる末、其の昔天女が羽衣に身を託して、舞ひのぼりけん彼方の空には、劒が峯の峨聳えて不動の姿を見す。羽衣松の木影に日光を避けて嵐吹く磯に暫しまどろむ。吾が亡き友が、人には知れぬ物思ひに沈みつゝ、月しめやかなる夕ぐれ、同じき此の松原に泣き明かして、愁を天地に寄せし其の跡に、我が夢は、今日の空にも似たる熱烈健鬪の彼れが過ぎにし一生をたどりぬ。見れば、羽衣の碑と思ひしは樗牛が墓標なりき。其れもおぼろなる人影となりて、痩せ衰へたる顏ばせは紛らるべくもあらぬ彼れ。君はまだ此の世に病めるかと云はんと欲すれば、姿は吹き捲く熱砂に包まれて消え失せぬ。驚きさむれば、あはれ夢、日影移りて、全身日光に浴し、風にて吹きつけられし熱砂身邊に堆く、松も碑も元の姿。思へば夢みし友は、已に病苦肉身の人にあらざりけり。悵としてあたりを見守る孤影に、風強くあたる。富士も隱れぬ、今は歸らん、松よ碑よ、吾が恨みと共に永く此に止れ。帆を揚げて舟は清見の沖を走る。夕日影、龍華の山よりさして、西の空紅に、清見寺の鐘の聲、今日の別れを告ぐ。今宵の空に光あれ、我が友の墓の邊に平和あれ。

**廿九日** 水天一碧、日は暑く風は冷かなり。清暑の今日環翠の廬に書を讀む。ルナンが「永久とか理想とか、其れが全く蜃氣樓であつたとしても、其れと知りつゝ、又進んで之を仰ぎ之に依つて生きん爲めに、我等は此の永久を要求するのである」の言こそ、今日の客觀的眞理を求むると稱して、空論に馳する人に對する好き誡めなれ。トルストイが四十歳の時の懷疑煩悶の述懷を讀む。ルナンの意氣と此の人の眞摯と、相對して特に興味あり。

**卅日** 今日も快晴、天地萬象皆碧。夏の快味は、暑くとも日光が灼く如く、碧空も翠松も、一つの光の中に包まるゝ、力のある美はしさにあり。人の壯年期も亦此の如し。世との鬪ひ、自らの煩悶、此等の苦さは苦くとも、其の暑さは盡く意力の太陽より出でて、深遠

雄大、夏日の天の如き行動を貫かしむ。されど現時の少壯者、此の意氣あるか。夏日の天地を樂み得ずして、壯年已に秋風の清味を貪らんとする者、多からずば幸なり。此の日聖アウグステノ告白書第八卷を讀む。彼れが求道の煩悶、改宗の意氣、懦夫をして起たしむ。思へば吾が齡亦此の大聖が改宗の歳に近づかんとす。吾が一生の夏に烈日の光あらしめよ、吾が心境をして今日の如く一碧の天地たらしめよ。

**卅一日** 夏の海のうねり高し、一見すれば靜なる事鏡の如く、而も其の中に大なる波動を蓄へ、岸に近づけば巖を嚙み砂を捲き來つて、勢ひ迎ひ近づくべからず。夏の海、汝何ぞ偉人の心に似たるや。

**八月一日** 故國に歸りてよりはや第三の朔日を迎ふ。彼の國にても、今日ぞ夏休みの初め、海岸に向ふ人々の行李を整ふる樣、この Exe-dus の停車場の景、思ひ出ださる。磯うつ波侗高くさわがし。

**二日** 曇る、背後の山深く分け入る。谷間の林の氣イルメナウに似たり。一生の暮れ方に、我れ再び此のイルメナウの森に遊ばん時、ゲーテと同じく天地と共にの平和を望み得べきや否や。林を出づれば微雨濛々、三保の松原、久能の山、夢の如く淡し。ぬれたる路草かき分けて家に歸る。午後雨。齋藤君樗牛の遺文を携へて京より來る。晩年の文にして今まで知らざりしものも此の中にあり、此等も、彼れの遺孤と共に相見ざりし間の彼の形見なり。晩餐の後、雨中談盡きず、悵恨の事、思慕の情、憤るべき事、笑ふべき物、故友の上、今の世の樣、吾が友は水のあなたより、我等の談を聞くや否や。

**三日** 樗牛の遺文を校合し、編輯の方針を定む。書簡類は面白きもの多きも、今盡く公にする事は如何と思はる。午後齋藤君、事を以て京に歸る、思ひ出しては猶豫せざる風、阿兄に似たるも興あり。夜濱邊に出づ、十日あまりの月影、雲間より漏れておぼろに、波立ちし後の海面、靜にとろけたらん如し。清見寺の鐘に、吾が友が隱として痛める天地の呼吸を感じ、寂寞永遠の胸に觸れしは、此かる夜なりけらし。獨り磯の砂に伏して、無心の境に入れば、天には水の如く淡き光充てり。光にとけたる水は、見わたす限りおぼろにて、渚による波のみかすかにさゞめく。時は移り人は更るも、永劫の脈搏には、いつも更らぬ「今」の律呂あり。光よ、我れを包むか、波は、我れを招くか。身よ、水に溶けよかし、心よ、光と共に融け去れ、かくて我れ已に我れならぬ時、我が胸のひゞき如何に甘かるべき。寂光の裏に入りし友よ、汝の胸は、今の我が胸と共にひゞくや否や。恍惚の界を出でゝ我れに返れば、身は尙ほ此の世の身なり。月も黑雲に蔽はれぬ、波も砂を嚙みて脚下にさわがし。かくて我れは復浮世の床に歸る。

**四日** 樗牛の遺文讀みつゞく。筆を棄てては水、水を出でては筆、夏の永日もかくてくれぬ。夜、月影昨にまして明るし、渚の邊に風を入るゝ人多し。我がきかんとする天地の聲は、人の聲に妨げられぬ。

**五日** 曇りて暑し、樗牛の遺文日蓮上人の文に參照しつゝ校合す。齋藤君京より歸り來る。

**六日** 樗牛の遺文校合例の如し。黑岩氏の天人論を讀む。物質現象の外觀より入りて、心靈生活の内觀に進みし見地が、今の日本人、特には此の種の觀念に乏しき實務家の中に思ひ浮ばれたるは、實に多とすべし。序論の物質論にては、此く直接に現象以上の實體を内觀せんとせし思想が、人生、道德を論ずるに及びては、甚だしく外觀に傾き、終に宗教を論ずるに及びては「我等が先聖を尊敬するは其の

人格の爲に非ずして、其が說ける眞理の爲なり、而して其の眞理の判斷は今日の科學に訴へざるべからず」と斷ず。先に「宇宙を外觀するは科學、內觀するは哲學」と斷ぜしと別人の觀あり。此に於て、氏の宗教論は、全然今日の科學宗の所說と異なるなきに至り、其の靈魂、天啓、祈禱の考察は空名に終れり。是れ天人論著者の爲に最も惜むべき點、吾人の小我と大宇宙の心靈との關係を、人格的關係以外に求めんとする宇宙觀は、皆この缺陷に陷る。

**八日** 曇りて暑し、海に入り巖上に休み、うねりにゆられて二度まで倒され、身に數痏を負ふ。

黑雲空に漲りて、今日望日の出づる月も見えず、只西の空、雲の絕間に殘る夕日影紅に、有渡の山影巨人の如く黑く橫はる。プロミシアスを思ひて、かすかにシェリーが Monarch of gods and demons を吟ず。

**九日** 暑し、高き波にゆられて泳ぎ廻る事の樂しさ。巨鱗巨鬣の恐ろしき形したる魚磯によりて來る。水中にて此魚に嚙みつかれたらんにはなど、皆集り來ていふ。然り、水中に如何の怪物が生活し、うねりに寄せられて此の沖に来り、[illegible]が泳ぐ巖の下に大なる口を開きつゝある事、誰か豫知し得ん。されど人生も亦海中の游泳に似たらずや、死魔の口已に頭上に脅すも、尙執着煩惱、一日の世樂を延べんとする者、人多く然らずや。

午後天愈々はれ渡りて、山々に限られたる北の空は、深碧すき透る如く、遠く水に接する南の空は、かすみ渡りて、軟風徐ろに南より吹く。身を綠の波に浮べ、天地一碧の中に包まる。仰げば我が浮ぶ波を越えて松林黑く、林を越えて山高く、山の上、碧空の中に富岳浮び出で、南より來る風は雲を起し、北の風山頂を吹いては、雲飛散す。峨々の翠岱、簇々の白雲、合して離れ、離れては復合ふ。天地の奇觀、水中の涼味に、我れ亦水と天とに同化して、歸るを忘る。

**十日** 今日も空はれ、日光强し。碧き海原に眞白の帆影淸し。かけ始めたる月の光凄く、豆山の雲を破りて出づ。月光白く中天に懸かるまで磯邊に坐して、友と文を語る。

**十一日** 暑さ增す。ショペンハウエルを讀む。

**十二日** 夢にドイセン先生夫妻を見る。處はいつもの大學の前のリンデン樹の下なりしが、日光は夏の如く快濶ならざりき。先づ手を握り、久しぶりのドイツ語にて先生の眼は近頃いかにといへば、夫人其のよからざるを答へて、面に愁色ありき、朝起き出でて後も印象尙眼前に髣髴たり。思へば眼を病める先生と手を携へて、朝に彼のリンデンの並木路を散策せし三年の昔、今僅に夢に通ひて遊子の心を驚かす。時と空とに隔てられて思慕悵恨の種のみ多き人生の悲しさよ。

晴天烈日。水天の碧色に圍まれずば、いかにして此の暑さを遣り得ん。村童濱邊に遊び戲れて喧し。波寄せくれば波に戲れ、水靜なれば小舟を浮べて喧擾を極む。海邊の天然兒はセレネーデの如く遊ぶを知れり。山中の天然兒はウーランドの「牧童」の如く多く孤獨なり。波に乘りつゝ共に歌へる彼等と、林中に踞して吹笛に耽る此等と、共に天然兒たるを失はず。

**十三日** 齋藤君、沼津より數人の友を携へ來る。午後小舟を艤して龍華寺に至る。墓畔多くの友を得ても、亡友の靈や語るに口なし。我等は靜に墓を掃ひ、水を灌ぎ花を新にし、肅然四邊の天地勝景を眺めし後、丘を下る。寺を出づれば、夕日影萬頃の靑田に燃ゆる綠をなし、涼風波をなして野に行人の裾翻る。海長寺にてきけば、田中智學、竹內久一の二氏、昨よ

り彼の寺にあり、今日守本師と共に海路興津に向へりと。歸帆あわたゞしく、清見寺の夕べ知らする鐘の音を海上にきゝ、歸り着けば三氏已に去れり。此の行余を誘うて岳麓の一寺に、樗牛が見えんと欲して、生前に志を遂げざりし日蓮上人の像（日法師作か）を見んと欲したるも、前途を急げば余を棄てて行くとの意を殘せり。樗牛の靈何故に此の事を告げざりしやなど思ふ。

人々沼津に去りて後、半弦の月徐ろに豆山より出でぬ。三人と亡友の遺志とを、岳麓の村寺、凄怨の月光の中に思ひやりて寢に入る。

**十四日** 日蓮上人の報恩抄上下を讀み了る。法華妙法の傳統を敍する前半の文に於ては、他の平凡なる佛者經典拘泥の佛學者と多く異なるを發見する能はず。されど此の傳統の敍述は實に法華の行者の多難を明にせんが爲にして、而して此の多難多怨は、卽ち上人自身が本化上行の自覺を證明する爲なるを思へば、亡友が見たる日蓮の面影稍見ゆる心地す、神國王書亦同樣の感を以て讀まれぬ。

濱に出でて偶然東圃君に遇ふ、夕には、友枝君京より來る。登岳の話などに夜を深かす。

**十五日** 昨夜村上專精師より、其の新著大乘佛說論批判を送り來る。今日之を一讀す。小乘を現象界、大乘を實在界の說法とし、小乘は色身の所說、大乘は法身佛の所說、此の故に大乘は歷史としては佛說にあらざるも、敎理より云へば靈山常住の佛說なりといふに歸す。若し此の說明を以て大乘非佛說論といひ得べくんば、師の說は慥に兩頭のヤヌス神像なり。特に普寂と同じく、大小二乘の併說と大乘の傍系內祕傳來とを許して、尙歷史上の大乘非說論なりと稱するは、甚しき矛盾否自欺なり。歷史と敎理（寧ろ信仰といふべきか）とを分別したる村上師にして、猶敎說の眞理其物と經典其物との區別をなし能はざるは、特に惜むべし。

**十六日** 朝餐を終りて、緣側に淸風を入る。昨夜庭の枝折戶を排して山川智應氏入り來る。其の師と共に北山より歸り來り、ホテルに投宿せりと。共に樗牛の舊藁をとり出して、彼れが生前を語る。已にして、田中、守本、竹內三氏も來れり。三氏交も快辯を振つて、本門寺地境の雄大と今の住僧の蒙昧との對照を語る。活きたる法滅盡經の物語の面白さに一座笑ひ哄めく。富士の裾野ゆるやかに西に向つて走る邊、朝には靈岱の影が甲駿身延の山々を蔽ひ、朝霧の靄として山より出でて居にかゝるを眺め、夕には入日の光、劒が峰千仞の崖に紅に染めて、空に寂靜の光充つるを仰ぐ處に、濶大なる原野と鬱蒼の林とを包みたる萬坊が原あり。卽ち是れ日蓮上人が妙宗弘通の大戒壇を經營するの意を以て、弟子日興に旨を與へ、忠實なる弟子は、十三年の忍耐にて、土地の領主石河孫三郎を說得して獲取したる土地。日本の宗旨たる天台の本山三千坊に對して、閻浮統一の根本戒壇一萬坊の敷地として經營せられし故地なり。土地の雄大、畫策の意氣、仰ぎ見る峻峯の高きと共に、古聖理想の森大を想はしむ。されど此の天地に圍まれ、此の故地に棲める日蓮法孫の狀今如何に。層々の石階ゆるやかに、老杉亭立の間を登れる半里の大道今尙存すれども、此の道の極まる所寺門を入れば、一院の僧房、形もなく哀れに傾きて、間を補ふ板のペンキ塗りなる事の情けなさ。更に房內に音づるれば五六の僧、形は圓顱緇衣の舊を守れど、昏々の狀、蠢々の態、既に容貌動作に明なり。高祖自筆の貞觀政要、開祖の日記、御書、至重の寶物は、庫中に累々たるも、撿し來れば幾世か棄てて顧みられざりけん、腐蝕の跡々を接す。更に進んで、山中に五重の佛塔を見んと

欲せば、色相僧に休暇の一路をすゝむ一人を導く、伽藍既に落ちて鈎画はやぶれ、此寺の古寺只乞食児一枚となりて、敗壊に委するのみ、法滅盡の象眼前に歴々たり。身は法華の徒ならざる者も、此の境に處して古今を思へば、誰か此の山河の爲に、又開祖古蹟の爲に、一掬の涙なきを得んや。まして同行の四人境遇は同じからざるも、共に日蓮の遺法興隆に心血を濺ける者、涙も枯れて只天を仰いで長嘆するのみ。されど末法の姿は此に盡きず、塔の歸路、案内の翁が問はず語りに告ぐるをきけば、住僧曾て猫を捕へて晩餐の膳に上ぼし、飼主に訴へられて、警吏の前に叩頭謝罪せし事ありきと、慘も此に至りては寧ろ滑稽なり。岳麓の雄大なる山河や、開祖の威烈ある感化や、思へば末法の鈍僧には餘りに大に過ぐるなり、餘りに偉大なる感化は彼等の神に入り得ず、貪々の獣寧ろ憫笑すべきにあらずや。人境一如、永く閻浮妙教の大戒壇たるべかりし地を、法滅盡の喰猫僧に委するは誰が罪ぞや。

語り出せる法滅盡喰猫編の一部、守本上人の快辯、竹内氏の諧謔に半日の時も知らずに過ぎぬ。

夕、ホテルにて夕食を共にし、食後法華迫害の歴史談に夜の深くるを忘る、特に興味深く覺えしは、平左衛門が家來に豊田の矢一つ毎に念佛を迫られ、終に信を貫きて、七字唱題の聲を絶たず死に盡きし、富士下の熱原村の住人神四郎兄弟三人の殉教が、聖セバスチアンの最後と同じき事、其他早川物語の遊戯史、難は盡きず、後日の再會を期し、辭して歸る。

**十七日** 藻閣、友枝諸氏と、舟にて村松に渡る。守本師は未だ歸寺せず。吾等は、海長寺より青田の間をたどりて龍華寺に至り、四方打ち開きたる本堂に涼を入れつゝ中食し、樗牛の墓前を掃ひ、花を捧げて歸る。今日は富嶽も雲間に見えて海の碧さ深し。歸路三保の村に舟をつく、他の人々が松原に遊べる間、吾は水に入りて優遊す。

夕方集まりて、三保より持ち歸りし西瓜を食ふ。此も四年の間嘗めざりし風味なり。

**十八日** 例の日影常の如くうらゝかなれど、東吹く風の涼さに、はや秋の思ひし、山近く水明なり。

樗牛の遺稿中、日蓮上人に關する研究の計畫的條書を發見す。今まで公にしたる文は項目のみにても其の半のみ、若し彼れをして、人物としての日蓮上人の此の研究を完くし、而して更に進んで事觀一念三千の教理研究に入らしむるを得たらんには、との思ひに堪へず。されど彼れは最後の書簡に、「兎角は色心共に相應せず、見思の惑未だ斷たず、煩悶懊惱の狀悟脱徹察を給はるべく候。」唯君がスピリチュアリズムに於けるが如く、一面幽冥に對する一種の憧憬ありて、やがては何物にか發展し來らんとするものの如し」とありしもの、果して色身と共に散滅したるか。吾が友よ、心安かれ、吾れ亦期する所あり。「何物かにの發展」を一度は汝の墓前に展せん。汝のいひし如く、一强大なる意志のある所は、即ち永久の生命のある所なればなり。」

**十九日** 暑し、日課常の如く、水中の生活興は盡きず。

**二十日** 樗牛が近松研究、特に興味あり。未刊の總論中に、後年の美的生活論と歸趣を同じうする論あり。彼れが文學の初想は、終に一生の美的生活を貫きて渝らざりしを覺ゆ。英文學と英語學書と、巣林子と愛情の戰ひと、道徳の理想問題と日本主義と、天眞の聲とホヰトマンと、ニーチェと個人主義と、靈の顯開と日蓮と、見來れば、彼れは多感にして而も我執一貫の人なりしなり。

夕、齋藤、石倉二氏の外に深田氏も來り、且つ飲み且つ談ず。談樗牛が「理想的凡俗」に及び「時には豚肉を煮て晩酌三杯、興到れば則ち公徳唱歌を歌ふ」の句を唱して一座哄笑す。「理想的凡俗」色讀の行者世に充つ、公徳萬歲を唱へんか。

**廿一日**　昨夜雨あり、風強し、秋の野分過ぎし後の思ひす。野州なる臨風、昨二兒の小照を送りこす。野州の野、二荒の秋を思へば今より心動く。金風に柿子樹頭に熟する頃には、孤枝秋を載せて、をぢちやんは必ず未見の二姪を見んといひやる。

スプーナー、カシミルの山地より書を送り來る。他鄕にありて夢は故山をめぐる身の彼れは、第二の故鄕なる日本の山水を思ひ出で、而して年を經て鄕に歸りし彼れの友を羨しとや思ひけん、懷鄕の情紙面に溢る。

**廿二日**　天候やゝ變り始めたりと覺ぼし。京の空も涼氣催したれば、早く來よなど人よりいひ來る。塵の都、名利の衢、吾れは永く京に背き得ざるか。

**廿三日**　海水著しく冷なり。永く游泳し難し、曇りて雨さへ加はる。

西の京なる谷本君の「レオ十三」深き興味を以て讀み、直ちに一書を氏の許に送る。ロマ教會が日本にて誤解せられ居るが如く、レオ十三世の人物も我邦には不當にも知られざりき。一片の私心を挾まず、毅然として聖教會の爲に、人類の平和福祉の爲に盡せし者、法王の如き人物一人にても、我邦の宗教界にありしならんには、時事今日の如く非ならざりしなるべきに。

**廿四日**　海水は稍暖になりしも、胞子樣の塵水に充ちて不快なり。

夜潮水光を放ちて燐光波間に普し、波を被れる岩根、磯の砂皆銀砂を着く。藤井宣正君と共に九日を印度洋の波の上に送り、夜な〳〵燐光の海面に躍りて大空の爛たる星光と相對するを眺めつゝ、往を語り來るを思ひし當時を想起す。人命時と共に去つて還らず、彼の人亦已に他界の人なり。逝きし友の數々を思へば、吾が身も老いつるものかな。

**廿五日**　朝より暑く、海面大氣總て復盛夏の如し。海水の胞子昨日の如く、加ふるに何魚かの卵子水面を蔽うて流れ來る。朱色にして膠質を帶び、觸るれば溫血の如し、永く水中に留り難し。日蓮の下山御消息を讀む。彌陀釋迦の優劣を論じて他信の徒を痛罵する點、殆ど頑童の一徹我意を主張するに似たり。「然るに文永十一年云々の條、恐らくは後人の竄入か、全篇小兒の心を以て貫く中に、數行大人の口吻を交ふ、小兒の心を以て書かれたるものは、又小兒の心を以て讀むを要す。

此夜も海上の燐光美し。星月夜の空も美しく、木星の月二つ數日來見えざりしも明に見え、熱帶地方にて南極十字星の上方に見し十字架の形したる星宿も地平線近くに見ゆ。晴夜海上に星斗を見る美はしさは、都會にて想像にも及び難き事の一なるべし。

**廿六日**　今日も盛夏の天、淸き青空にかすめる海の面、松の深綠に百日紅の深紅、靜によする波に聲を限りの蟬蜩、あはれ此夏永久に夏なれと思はる。ハルトマンが「近世物理學の世界觀」を讀み了る。エネルギーといひ、ポテンチャルといひ、或は渦動環、或は原形子など諸種の考察學說も歸する所は「動かす者」の何なるやの問題にあり。而して此の究竟問題は、ショペンハウエルの痛快に闡明せし如く、終に直接內面の認識に依るの外なきを思へば、物理の科學も終に外物の學たらず。「萬物吾に具はる」の明言は、決して新文明の新科學の爲に亡ぼされず。

夜、東圃君の宿に行きて、齋藤君と三人鼎坐、

夜更くるまで語る。奈良朝に天部、平安朝に文殊、前者の彫刻、後者の佛畫、而して此等が總て禪の文學美術に壓倒せられし事、何故に淨土や法華は特有の美術を開發せざりしやなど。

**廿七日** きのふの暑さに引きかへて、今日は空も風も著しく秋めく、烈熱の後の秋氣清く、きのふまでは天も地も一つの光一つの熱の中にとけたらん樣なりしに、今日は秋風に天は澄み海は波だちて、天地剖判の旦もかくやと思はる。四年目にて故國の秋にあふ心地よさ。歐洲生活の三年間、思へば我國にて見る如き、秋はなかりき。熱も光も強からざる夏の鑠金の暑さもなくて、いつしかライムの木の葉黄ばみ、軒の蘿紅を染め出だせば、世は既に冬めさ、寒き風に雨さへ加はり、時雨窓を打てば内にははや暖爐に炭火をいそぐ。爽なる秋の涼味は、烈熱の夏と相待ちて深き趣あり。人生亦苦闘なしに平和あるなく、煩悩なしに菩提あるべきにあらず。

齋藤君け[illegible]はんとて行く、余は家に留まりて標牛[illegible]を立て、又多く書信を處理す。

夜東[illegible]君來り語る、天は晴く湖上波高く、波濤の白馬[illegible]く螢光を放つて走り、湖水一面白炎に似て、空の黑雲と相映ず。

**廿八日** 夜雨あり、風歇む。晨起秋氣清く、秋風に粟や稲そよぐ。清見潟を去る前に諸方に書信す。齋藤君も沼津に向つて去り、己れの歸期も迫る。一明日を念ふ勿れ一の訓言、中々に體達し難きを覺ゆ。

あすは七夕といふ今宵の月澄みて風涼し。東圃君と海岸に坐して語る。

**廿九日** 秋の空心地よくはれて、伊豆の山々より函根、愛鷹、富士皆翠玲瓏として碧海と相對す、行李を整へつゝ倘此の地の去り難きを覺ゆ。水は稍冷なれど、海中の優遊も今日を終りと思ひて、あちらこちら泳ぎあるき、一我が袖岩一と命名したる沖の隱れ岩に立ちて、暫しの別れを朝夕晴雨の友なりし此の海に告ぐ。

今宵七夕なりといふ。弦月明にして、銀河は見えざるも、牽牛の光は涼風に閃く。

**三十日** 晨起、濱に出で一龍華寺の彼方に別れを告ぐ、汽車の客多く、日光強くさし入りて暑し。蒲原のあたり村童の磯邊に戯るゝも羨し。靈居の裾野半空より延び延びて碧空を劃せるを見て、萬坊が原も彼の邊かと忍ばる。到る處、空は澄み山は青く、夏は稲穂と共に闌け、秋は女郎花の黄色に見え初む。

平塚にて標牛終焉の跡を思ふ。此時讀めるギーターは恰も六章三十の「何れの處にも余を見、一切を余の中に見る者は余を失はず、余又彼れを失はず一の句なり。友よ、「一にならん爲」の福音をして永く吾等の力たらしめよ。京に入りて砂塵面を打つ。

* * * * * *

Yo mām sarvatra paśyati,
Sarvam ca mayi paśyati,
Tasyâham na praṇaśyāmi,
Sa ca me na praṇaśyati

——Gītā, VI. 30.

# 清見潟の除夜

燈の香りぞたきん。されどこの香いつまでつづくべしや。歳は逝き、歳は歸り、われは依舊に老いゆきて、黒髪に白髮の増しみ、歳と共に多きぞ、かなしくもうれしき。

思へばや、われかの友の後に生き殘りて、聲のみだに、かれが面影を思ひやり、こゝ清見潟にひとりかれが遺文を誦しつゝ、この夜こゝに歳を守らんとは。

幾とせか相隔たりての後の再會に、この友と相擁して、喜びに泣かんと期せしこの年、われ五天のあなたより歸り來ぬれば、友は已にあだし世の人なり。埠頭手を握りて語なからむといひしかの友は、まこと語なく、幽明境を異にして、その手また握るべくもあらず。

友よ、われ今こゝにあり。龍華寺畔、夜半の風寒からむ。寒水石の墓碑に憑りて、夢の如き山水に、恍惚の樂みを今宵はすてゝ、こゝに來よ。

香の煙あたりを罩む。わが心その香りの中に浮び立てゝ、氣うとく、思ひ遠し。

見れば、煙の中にうすき影。

＊　＊　＊　＊　＊

友よ。松風に乘じて汝は海を渡りて來つるよ。汝がこの身に贈りし數々の手紙もこゝにあり、心をこめてわが汝に書き送りし筆の跡もこゝにあり。清見寺の鐘も、今宵は年の終りと始めとを告げん。いでや香を薫じ、燈をかゝげて、汝と共にこの一夜語り明さん。

奇しくも糾はれたる運命の、汝もわれも、兒なりき。遠き空に隔てられて、汝が跡われは追ひ得ず、病に冒されてわれは汝の歸るを待たで、人の世を辭しぬ。かくて、わが精靈は靜かに永へに眠りに入りて、わが魂はまた人界に下らじとこそ思ひしに、いつしかありし世の、わが頰に落つる熱き涙に、寂靜の夢破れし時、汝は歸り來りて墓邊にありき。天竺恒河の砂を渡り來し汝が涙の、如何に熱かりしよ。

さなり、人の心は熱きもの、涙はこの熱き泉より迸る甘露ぞ。つれなくもわれに先ちて逝きし汝が後に、ひとり濁世の濤瀾にゆらるゝ身の、心いかで熱せざるべき、涙いかで盡きせん。

涙は人の物。われ等精靈には光りあるのみ。熱もなければ寒もなきわれ等の世に、喜びもなければ悲みもなく、迷ひも怒りもなき寂靜の國に、いかで涙あるべき。友よ、あはれむべき人界の涙にくれで、早くこの光りの國に來よ。

寂靜の國、光明の界、名こそうるはしけれ、涙なき國にいかで愛あるべき、愛なきところに、われ等いかで住まひ得ん。友よ、汝はこの世にある間、涙にもろき人ならざりしか。戀に泣き、美にあこがれ、愛を歌ひ、執着を崇めしにあらずや。肉をすてたりとて、などかく早く冷灰の心をやどし、鐵石の人とはなりつるよ。

さかしくもいひつるものよ。われも曾ては人の戀ひに泣きぬ。されど思へば、わが戀ひは、まこと人界の戀ひにはあらざりき。われ曾て美と愛との樂園を地上に求めぬ。されどわが樂園は地上に得られざりき。汝がなほその人界、その地上にさまよへることの哀れさよ。

さらば、友よ、われは如何にわが戀ひの願ひ

を充たし、誰が爲めに何の涙を注がんか。愛とや、涙とや、汝は曾て肉ならぬ愛を味ひ、空を隔てたる涙を最愛の人に注がざりしか。さなり、かくいふわれ、汝の友と曾て神相通ぜざりしか。

云はずも。この机上の書簡、筆の跡、汝とわれと東西三千里相隔てゝも、神相通ぜししるしならずや。

あらず、汝の云ふ神は、紙と筆とにたよる神なり、字の形、墨の跡のみ。

否、汝よ、汝とわれと無二の友、筆の跡、墨の跡、互に思ひを交はせしその思ひこそ、互に愛を胸に味ひしその愛こそ、われ等の神相通ぜしならずや。

さなり。その神、その愛は筆にあらず紙にあらず、またわれ等の國語にてはあらざりしぞ。人の子の言葉にてはあらざりしぞ。その超世の神、その天上の愛、これわれ等二人の心を結ぶ光りの鎖ならざりしか。一々の形を離れ、一々の時の外に超然として、光りを變へぬその神、物と物との組みあはせ、肉と肉との觸れあひに强ひられず、又さまたげられず、生と死と、成と敗とに動かぬその愛。われ等の交りはこの神、この愛の交りならざりしか。汝若しそをさならずといはゞ、深く汝が胸に問へ。われ等の交りが紙によらず、筆を借らず、時を捨て處を超えて、直にこの光りの鎖にて結びつけられし事なかりしか。よく深く汝が胸に問へ。

さなり。まことにさなり。一とせあまりの前、ロンドンなるハムステッドの野に、われアウグステノを讀みて、過去と今、今と未來、何れも一つの「今」なるを感得せし時、汝は相模灘の岸にして、同じく、日蓮が、上は多寶塔中の釋尊に面接し、自ら地涌の上首上行たるを自覺せし、その大覺醒に感應道交したりき。まことにさなり。われ等の心は奇しくも妙にも世の人に多く思ひ至らぬ線なき電信なりき。

それも一つ。されどそれのみにはあらじ。

まて、しばし、わが記憶を喚び起さん。

記憶といはず、直に汝の心に問へ。

記憶。われは尙ほ時の束縛に、過去と今とを分ちて、過去を記憶の中に收め記憶の中より喚び起す人間なり。

げにこれも理なり。

まてしばし。……さなり。われ等二人が同じくニーチェの靈に接せしは……。

さなり。されどそれ等の事、今一々くり返すまでもなし。それよりも明にわれ等の感應に心動きし事なきか。

汝が問ひあまりに急なり。わが心に問はん。

……まことに。これも今思ひかへせば涙の種、一年前の十二月二十四日の夕つ方、夕日の影西のガートの峯々に鮮なりし時。……プーナにわれは在りて、宿の人々がクリスマスの飾りにいそがはしき時、われは屋上の涼み場を歩みつゝ、おのづからにして汝が好んで誦せしハムレットが獨白の……。

その「存へんか、存へざらんか」の疑問を斷じ去つて、われはこの世を辭しぬ。汝がかの時の思ひわれよく知りぬ。汝が夕方の涼風に花香薫ずるヴェランダをあちらこちらに歩み、ハムレットの思ひをくり返しつゝ、沈吟多時なりしその姿を、われは寂光の國より見き。

思へば、かくおのづと口に出でしかの獨白は、まこと汝が靈の口よりわが靈の耳に入りしなりき。

友よ、これも一つ。されど瓢子は幾たび美酒を納めてもその味を識らず、舌は一たび美酒に接して、忽にその味を識るの譬に漏れず。人の子、地上の人なる汝は、今現にわれがこゝ汝の前に、淸見潟、歲を守るの机に相對するを何とは見るぞ。

戀しの友。汝がもてる光りの身、汝が住める寂光の國、盡くわが前に現前す。さなり、人界を超えし愛、地上ならぬ樂土今こゝにあり。人界の涙ならぬ涙、うつし世の愛ならぬ愛、今われは味識し、感得す。思へばわれ等の生は、まこと超世の生の片われにぞある。そこには過去もなく未來もなし、只永への「今」あるのみ。生こゝにあり、「今」こゝにあり。光りの生なり、愛の「今」なり。友よ、除夜も元旦も、過ぎし歳も來ん歳も、皆是れ一つ「今」の面の波なり。西歐の遊子、湘南の病客、皆一つ光りに包まるるなりき。友よ、汝が墓邊に灑ぎしわが涙は、これまた汝が樂土の甘泉より湧き出づる玉なりき。

* * * * *

思ひは迫る、聲をあげ眼をはりて見れば、香の煙いつしか絶えぬ。滅せんとして明かなる燈火に照らされて、われは獨り机によりて元の環堵の室にあり。外には松籟濤聲に和して、晨朝の鐘の音、清見寺よりきこゆ。清見潟の海の面には、初日の光り白みそめたるらし。

（明治三十六年末日）

# ロマの別れ、ナポリの夕

——『花つみ日記』の「我れやいづこの記」より——

永遠の都も今日は別れ。

Therefore farewell ye hills, and ye, ye envineyarded ruins!

「いざさらば、丘よ、蔓生ふる廢墟よ
いざさらば、壁よ、宮居よ、石の柱よ、……
いざさらば、野よ山よ、いざさらば永遠の都よ。」

汽車は永遠の都を後にして荒野を馳せ、アルバニの麓より見亙すかなた、遙に聖ピエトロの大堂母が天に沖するを見る。山角一轉、その莊嚴の姿も消え失せ、夕日影薄く山巓の城壁を射て、多感の遊子獨り思ひに沈む。あはれ、永遠の都、此もこの世の人なる我れには暫しの夢なりき。法王の寶座、神の都、此も有爲轉變の世の數には漏れで、古を弔ふ征客の胸に一點の愁となりて殘る。高山も崩れ、大海も涸れぬ、永遠の都いつまでか神の都ならん。過ぎしロマの光榮も、悵恨の種。我が幾日かの帝都の遊びも、今將た追懷の雲霧に入り去らんとす。されど悵恨、追懷、此れ亦永劫の呼吸の一息にあらずや。轉變の中にも久遠の流あり、有爲の人生に即ち神の力あり。

汽車は夢を載せて身はナポリに入る。海に沿へるホテルの食堂に赤酒を傾く。欄下にイタリア樂手がチタラに合はせて歌ふ「アデオ、アデオ」の聲悲しげに、陶然の恍惚を破り、缺け初めたる月は破雲の間より漏れて、海の一方にこの世ならぬ白光を漂はす。我が身かの光に乘じて天に上れよかし。

（明治三十五年十一月十七日）

# 嗚呼野の人

## 彼れが追懐と彼れの遺志

嗚呼、我が友野の人逝けり。彼れ名は齋藤信策、然れども彼れの人物、一生事業は野の人なる名、最もよく之を表せり。我等は永く此の名を以て彼れを呼び、野の人としての彼れの理想によりて彼れを忍ばん。

野の人は、我が心友高山樗牛の實弟なりき。郷里より出でて、一時兄が西片町の家に寄寓せし時に當りては、彼れは眞に野人なりき。容貌愚なるが如く、寡言ながらに言を發すれば北音濫々、應對節度に當らず、人をしてその兄の弟なるを聞きて、不肖の弟との感を起さしめたり。樗牛も亦その頃最愛の弟良太を失ひし失望と相合して、この野人の弟を目するに殆ど愚物を以てしたり。當年の野人が、後に野の人として文才を煥發し、文壇に天才主義を獅子吼するの人となり、終にギリシャ文明の研究者として蘊蓄を披瀝するに至らず、世に背きたらん如き野の人として長逝せし事、今より思へば、奇しきは人の一生なりけり。彼れが兄を哭して後僅に六年、今又この可憐なるが如くにして而も遠大の志を立て、堅忍の道を歩みしこの人を失ふ。下界の光明益々滅じて、天上の靈界が人を回收するに急なるを恨まざるを得ず。

野の人は、樗牛の如く才氣横溢の態なく、言論明晰ならず、行動不斷なるに似たりしも、思想一たび熟し熱情一たび湧きては、筆を執つて縦横無盡にその想を演べ、その論を主張し、一夜にして長篇をなせし事屢なり。その原稿を見れば、飛躍極まりなき筆の跡に、その志氣の如何に熱せしかを想はしむるものあり。此を以て親戚友人に對しても、音信を絶する事年を踰えても、意至らざれば一切形式的の文字を併べたる書信を書かず、語らんと欲する所熱しては、滔々思想心情を臚列して、殆ど書簡紙の長さを盡さずんば止まず。その文亦流麗自在にして、その人に接すると全く異なる印象を與へたり。兄樗牛の沒せし頃、親友小山、島地の諸氏に寄て書簡、印度にありし余に送りしものの如き、皆心情の奥を吐露し、感激の誠を盡したるものなりき。彼れが文藝を論じ、時勢を論ずるも皆想充ち情激して、云はざらんと欲するも默する能はざるに至りて、初めて筆を執りぬ。此を以て世好に投じ、時流と共に波を揚ぐるは、彼れの最も排斥せし所なり。かゝれば彼れは一時評壇を風靡せんとする勢を示して後、一時に鋒を收めたるものの如くにその修養に勉め、或は殆ど世に顧みられざらんとしても、少しも意に介せざりき。彼れは又少しも博く交はるを求めずして、只意氣投合の友には肝膽を披き、眞情を盡して交り、島地、小山等の諸友と共に居ては凞々として一切の世事を忘れたる仙人の如く、松井夫人、藤井瑞枝女史等に對しては無邪氣なる腕白兒の如くなりき。かゝれば彼れが一たびその縦横の才筆を收めてより、世間は益々彼れを忘れ、彼れ亦世間を忘れたるものの如く、西大久保の寓居に、草花の中に圍まれ、書籍とピアノを友にして數年を過ごしたり。彼れは、その性格の根本よりして、社會の人にあらずして野の人なりき。

西大久保に於ける彼れの生活は、實に野の人の理想を見るべきものなりき。明治三十八年、

彼れがその地に一家を構ふるや、邊は野原の中に環堵の一廬静かに、友人の訪ひ來る時の外は殆ど無言の生活を送り、その間には大學に出でてケーベル先生の業を受け、圖書館に出入する外、殆ど世に觸るゝ事なかりき。生計の道に於ても曾て一定の收入を求むる事なく、起稿に對する報酬を送り來るものあるも、全く之を老婢なほに委し、身に一錢の貯へなく、飯米乏しきを告ぐるも少しも意とせず、天才は斷食する事ありとの思想を實行せんと欲するものの如くなりき。若し忠婢なほが忠實親切に彼れの爲めに生計の出入を案排し、又近傍に住する伯父夫婦が時にその切迫を救ふ事なくば、彼れは餓死しても尚平然として書を讀みしなるべし。此の如くにして、彼れは四五年の郊外生活、野の人の貧生活の間に、ギリシャ語に熟し、歌を詠じ、ピアノを練習し、水彩畫の修養を深め、病身の苦につきては勉めて之を忍ぶといふよりは、寧ろ之を忘れんと勉めしなり。

然れども野の人は、退隱の閑人、恬淡の仙人にはあらざりき。彼れには熱情の中に燃ゆるあると共に、又意志の鞏固なることに於ては驚くべきものありき。彼れの兄は、その情の熱きと意志の強きとに著しかりしも、鞏固の一點に於ては恐らくはその弟に讓らざるを得ざりき。樗牛は、その情と意志とを內に潛め得ざる性質を有せしも、野の人はその熱火の情をも包むの忍力あると共に、その旺盛なる意志をも容易に外に發表せざりき。此を以て、樗牛は前後を通じて觀察すれば、その間に一貫の性格を貫きしも、その發表の方向方法には幾變轉を經たり。然るに野の人は、外部の事情の變化を外にしては、愚物野人の少年時代より、天才崇拜の主義を野に叫ぶ豫言者の文筆時代を經、閑居修養の野の人としての最期に至るまで、特に明白に一貫の理想志氣を貫きたり。蓋し彼れが英雄崇拜の端緒は、その兄に對する讃仰に始まり、その早世を悼むの情に激せられ、又近くは小泉八雲氏やケーベル先生に對する尊崇の念に養はれ、而して研究讀書は、東西古今の天才に對する渴仰を益々鞏固にし、旺盛にせしものの如し、彼れは、天才の力が詩歌に於ても、宗教に於ても、道德に於ても、眞に新しきものを創造し、人の世に新しき光明を齎すを見て、世の平等主義、形式主義に反抗して、人格の尊嚴を主張し、天才の眞精神を發揮するを以て己が任となしたり。彼れは、此の主義を以て野に叫ぶ人となり、時には現代を破壞する方面に向ひし事もあり。此が爲に彼れは或は世に誤解せられ、先輩に非難せらるゝも、少しも驚かず、「野の人の叫びは終に天國を來らすべし」と信じたるものの如く、平然として此等の誤解非難の間に處したり。彼れが天才崇拜の情は、一時は感情的に熱して、爲に天才なき現代、大藝術なき日本に對する反抗的精神を昂めしも、彼れの心は天才の誠の姿を求めずば已まず、主觀偏固の英雄崇拜より早くも客觀永遠の靈光を天才の中に求むるに轉じたり。「天才は新なる法則なり。彼れの作れる世界は必ずや一箇の自然として法則を與へ、萬世の典型となる」。野の人がこの萬世の典型をプラトーンに見初めしは、實に彼れの一生の大事なりき。三十八九年の頃、一日余と相會し、談ギリシャ語の學習に及びし時、彼れはプラトーン研究の志望を語り出で、余は又今までの彼れの天才觀の缺點を論じ、切にプラトーン研究を勸めたり。彼れはこの志を抱持して變らず、プラトーンよりも一層根本的にホメーロに及ばんとして、その研鑽稍緒に就かんとするに及びて世を去れり。此の點に於て、彼れは天才渴仰の初一心を貫き、その事は成らざりしも、その志に於ては實に一世の教訓たるべきものを殘し、眞文明の光輝、

天才の靈光のために野に叫ぶ人として、一生の終りを告げたり。

彼れの死後、その藏書を検するに、ホメーロ、プラトーン初めギリシャ文學の傑作に關しては、原文の種々の版本、註釋類、辭書、評論等を蒐集して、その研究心の如何に强盛なりしかを示せり。嗚呼、哀れの友よ。彼れは赤貧に處し米菜の資を缺く間にありても、尚その研究のためには財を惜まずして此くまで多くの書册を購入せしなり。余は實に彼れの爲に泣くと共に、彼れの志操が鞏固に一貫せし事に對して感歎の情を禁ずる能はず。世の彼れを非難し或は誤解せし人々よ、願くは彼れの一生と彼れの遺志とを見て、彼れが輕薄なる英雄崇拜家、又は片々たる外國心醉者と伍を同じうせざるだけは、之を諒せよ。

野の人の意志鞏固なりし事は、彼れの私生活の上にも現はれたり。窮乏に安んぜし事その一、結婚せざりし事その二、病苦に堪へし事その三なり。彼れは一時某學校にドイツ語の教授をせし外一定の收入を得し事なく、その他と雖も、假に筆を執つて文を賣らざりしかば、草廬の生計窮乏を告ぐる事その常なりしも曾て自ら收利を計らず、又親戚が故郷にて生活するを勸めしも應ぜざりき。而してこの窮乏は、單に恬淡無欲より出でしものにあらずして、實にその研究心の結果自己に忠實なる結果なりき。彼れは又一姉二兄を失ひて、自らも或は肺患に斃れんと豫想して、その覺悟を定めしは一日の事にあらず。此を以て之を口にこそせざれ、心には夙に獨身生活の決心を固めし事は蔽ふべからず。父兄親戚の結婚を迫るも峻拒し、先輩友人の之を勸むるも笑つて答へず、而して交遊の間には妙齡婦人の友も少なからず、彼れの心には恐らくは戀愛の熱情を蓄へし事あるべきも、獨身一生の事に至りては少しもその決心を弱めざりき。かくて彼れの死するや、母と伯父とに末期の水を灑がせ、彼れの棺を送るものは伯父と友と忠婢との三人。身に一毫の係累なくして獨り逝けり。此の點にも彼れは實に家庭の人にあらずして野の人なりき。彼れが病身を以て、發熱病患の中にも研究に從事し、平然として文筆を執りし事の外、病漸く重く、衰弱日に甚しく、呼吸の苦み見る目にも憐れなる時に當りても、彼れは一言病苦を訴へざりしなり。是れ一は慈母をして徒に憂へしめざらん用意にも出でしなるべけれど、又實に靈光の世に憧がれて、物質肉體の生に重きをおかざりし修養覺悟の結果なり。彼れの一生を見れば、不幸薄命に似たり、世の人は彼れを孤獨の野の人とも見ん。されど彼れ自らにとりて、その一生は他の見る如く不幸ならず、欲する所を貫き、而して病苦も却つて彼れの精神を清朗透徹ならしめ、安んじて肉體の生を終りしなり。ホメーロ研究の事終らざりしは憾とすべきも、彼れの靈の國は必しも此の世にはあらざりしなり。

彼れは小泉八雲氏の死を悼みて云ひし事あり、『氏や誠に詩と夢と美術によりてのみ現はるべき世界の人、氏にありては、夢こそは眞の現、詩こそは眞の思ひ、藝術こそは眞の世なれ。氏今や逝く、氏は逝けるか、あらず〳〵、逝けるにあらず、還れるなり。嗚呼、平和、さらば平和。彼れは逝けるにあらず、眠れるにあらず、彼れは世の夢より目覺めたるなり。』此の言、亦余が野の人の逝きしを慕ふ心なり。

野の人よ、此の世の野は今や荊棘茂り、汚穢充てり、汝の野は、天の原遠く廣く、星の砂輝き、光の花咲く靈の野なり。汝の兄は汝を迎へてそこに還り來る事の遲かりしを問はん。近くは八雲氏もその弟子を迎へて微笑せん。ホメーロも、プラトーンも、ダンテも將ゲーテも、北齋やワッツもその未見の知己を彼等の伍に入れ

て、汝に靈界の光を示し、ギルジリオのダンテを導きし如くならん。若し又汝が戀ひし女性あらば、その人の靈は、或はベアトリセの如く汝の前に現はれて、靈の野に逍遙する伴侶たらん。嗚呼、汝の兄の友、汝の友は何時汝等の跡を追ひ得べきやを知らず。此土の生盡きなん時まで、我れは尙此處に健鬪せん。野の人よ、心安かれ。

＊　＊　＊　＊　＊

野の人逝きしは實に八月六日の夜なりき。此より先七月下旬、事ありて片瀨なる龍口寺にいたりしに、柴田一能君は「齋藤信策君は今片瀨なる伊達家別莊の傍に寓せりとて、一度來訪せり」と告げられぬ。六月頃に病勢薄らぎしときゝし後、暫く消息に接せざりし彼れが、益々快方に向ひて、片瀨に來りしものと信じ、その邊を尋ねしも如何にしても見當らず。例の仙人、その寓居の家名をも告げざりし事よと思ひ、終にその儘にして歸京したり。八月三日夜太田伯父より電話にて、信策危篤と報じ來りしも、余は尙その片瀨にあるを信ぜしに、談話中その依然として西大久保の草廬に横臥せるを知り得て、訝疑の念に堪へざりき。されど翌日直に訪ひ見れば、數日前よりの發熱、脈搏等甚だ險惡にして一見重體なるを見るべく、床邊に至れば、余を見て「もう駄目になりましたよ」といつて微笑するのみ。その日は幸に熱度も三十八度の下にあり、多少談話するを得、彼れは遺志を一册に書きし事など語りて後事を託するの意を表したり。「大丈夫だから安心せよ」と彼れを慰め、又龍華寺墓地の事、樗牛の遺子初子の事なども十分に語りぬ。それより彼れのために法華經を誦讀せんと思ひしも、その本を缺きしため、何かドイツの詩を朗讀せんとし、何れの詩人を讀むべきかと問ひしに、彼れはハイネの詩を求めたり。ハイネの「最後の詩」是れ余が彼れのために讀みし臨終の勸行に均しかりき、又彼れが肉耳に詩人の言を聞く終りなりき。ハイネを讀みて後も、彼れは尙談話をつゞけ、ザイトシックの「ルネサンス」や、フランツェスカの運命と道德の判斷や、徂徠の刑名論など微音ながらに明晰に語りぬ。嗚呼是れ彼れが肉體の一生に自己の思想を述ぶる最後の演說なりき。翌五日は容體稍惡しきのみにて甚だ切迫にもあらずときゝ、終に往き訪はざりき。翌六日已み難き事ありて千葉地方に行きしが、その夜十一時電報は彼れの最期を報じ來ぬ。半日の淸談彼れの病床を慰めはしたれど、その臨終には終に復會ひ得ざりき。彼れの兄の訃は、一ヶ月の後に三千里外の印度に接手し、彼れの最期にも亦京を去りて會する能はず。思へば此の悵恨の事も、亦思慕追懷を深くするため特に命ぜられし運命とや見ん。

七日京に歸り、午後その草廬に至れば、彼れの遺骸は已に棺中にあり。田中智學氏亦來り訪はれ、龍華寺埋骨の事など粗ぼ決するを得たり。今夜は遺骸を荼毘せんとて、太田氏はその準備に忙はしく、葬送の人足は已に門前に待てり。僧の讀經あるにあらず、法名未だ定まらず、而も師は棺前に出棺の回向を賜はり、かくて野の人の身體は、この世には永くその形を止めざるべく、その四年の住居を出でぬ。母と他の親戚は之を門前に送れり、田中氏は合掌唱題して彼れの門出を送れり。棺に隨ふものは伯父と忠婢と余と三人。夕陽斜めに野に照りて、林野の綠金色に輝き、青葉美はしき田の面の稻は夕の微風に靡く。淸朗の天に寂靜の野邊をたどりて三人は棺を送る。路傍の法華供養塔に「一切諸如來所有三身亦在是中」の十三字も特に意義の深きを覺えしめ、野中流るゝ河水も流轉の教へを傳ふ。落合なる火葬場に着きしは薄暮、棺を爐の中に入れて鐵の扉は閉されぬ。

「毎自作是念」の佛偈を誦し、合掌して別れを告げて歸りぬ。嗚呼思へば、世にかくも簡單なる野邊送り幾何あるべきや。世の人は不幸の人の葬とも見ん。されど葬に會する人、萬人ありても千人ありても、誠に死を悼み、眞心に來り會する人の數は、その中に幾何あるべしや。ゴルゴタの野の夕日影に、人の子の尸を送りし人は、僅に五六にてはあらざりしか。我れはこの日の野邊送りに、誠に葬送の深き味を覺えぬ。落合の野邊、三人の孤影は、野の人の最後の路づれとして、却て似合はしからずや。

かくて數日後、野の人は清見潟、富士が嶺に對して、彼れの兄と共に骨を埋めん。東海此より永へに波靜に、三保の浦邊に月永く明かなれ。彼れが親友小山鼎浦は、彼れがために遺文を蒐集して、短き野の人の一生を傳へん。余も亦鼎浦と共にその業を助けん。若し其れ、ギリシヤ研究に至りては、日本小なりと雖も、終には野の人の志を繼ぐ人を得ずして止むべきや。十九世紀文明史の事業は鼎浦若しくは余敢て之に當り、樗牛以來累代の志を果すべきのみ。野の人はその藏書全部を舉げて樗牛會に寄附も、その保管を余に託したり。整理分類の後願くは一分にても世の公益に供せん。

この追懐は匆々の間に筆を執りしものなり（八月十日稿）。されば他日尙よく野の人の面目を世に傳へん事を期す。彼れの遺志は他の遺言と共に「予が意志」と題し、七月二十九日彼れが病床に記せしものなり。彼れの絶筆として之を公にせざるを得ざるは悲痛の至りなるも、今は徒に悲むべき時にあらず。この遺志を見て、野の人の最後數年の研究的精神を領會する人を得ば、喜び之に過ぎず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

この一篇を草し終つて、篋底を探れば故人の書簡三四。その中樗牛長逝の翌年七月余が清見潟にありしに宛てしもの、字々皆涙なり。その一節に曰く。

「然れども人生のこと、かの沖を飛ぶ白雲の行方といづれぞや。最愛の友、最愛の人の思ひも涙も、逝く人をいかんともすること能はじ。亡兄は永遠に逝けり、花は歳々に匂はむ、人は年々涙灑がむ。されど彼の弟の永しへに冷かなるをいかにせむ。二つなきこの短き人生の間に於て、小生は實にこの大なる愛の對象の速に逝けるを悲むなり。よし小生は、二つなき生命に於て大なる悲みを敎へたるを感謝す、されどこれがために少しも小生が失ひたる愛を償ふべしとも思ほえじ。げに小生が悲みは、潮の寄せくるそれの如く、なつかしき思ひ候ごとに、愁はいよ／＼切なるもの有之候。よし神は夢を人に惠み給ひぬ。いにしむかしをまたくり返すべき夢を惠み給ひぬ。されど知らずや、夢こそはたゞ心清く穏かにほゝゑみに醉へる人のみ味ふべきものなるをや。』

『あゝ亡兄の靈は今いづこにあるや。ああ何故にしかく眠れる。彼は今彼の最愛の友の、彼の墓畔に泣きつゝあるを知るや知らずや。」

嗚呼、この文字の主、今は又この文字その書に手向けらるべき人となりぬ。樗牛は一葉女史の死を悼み、彼れを彗星に比して、來る事の遲く、去る事の早かりしを嘆きぬ。思へば彼等兄弟も、亦共に何ぞ去る事の早かりしや。されど、願くば彼等をして、彗星の如く去つて跡なき光たらしめず、美はしき雲漢に永く光を留むる恒星たらしめよ。

（明治四十二年八月）

# ベクリンが「浪の音づれ」

Arnold Böcklin, "Meeresbrandung."

ベルリンなる國民畫廊東方の一室に小幅の肖像畫あり。頭髮亂れ、顏靑ざめたる若き畫師が、何やらん畫幀の前に立ち、其の後に一個の髑髏何れよりか來りけん、畫師の耳の邊に囁く如く、畫師は刷毛の運びを止めて、此の囁きに耳を傾くるともなく、眼光に怪しき光を帶びて、何物をともなき凝視の面。人は此世の人、畫幀も刷毛も此世の物なれど、彼れの神は超世の彼岸に遊べる神祕一面の畫幅に充ちて、神氣人を慄せしむ。これぞアーノルド・ベクリンが二十九歳の時の自畫の像、此の畫廊に二つとなき畫寶として知らる。

此の小照を視て得も云はれぬ祕奥に打たれたる人は、面を他方に向けて、此と相對する壁面に長さ六尺に餘れる大幅に、波打ちよする斷崖が隙きたる間に、長身の婦人の立琴を携へて立ち、其の眼は打ち寄する波濤の洶湧に輕く注ぐを畫けるを見ん。是れぞ同じ畫師が「波濤洶湧」と題して畫きし此の「浪の音づれ」なり。刷毛の運びしとやかに、畫面滑かなる黒褐の色合に、巖や波や人を忠實に、一筆もおろそかならず畫き上げたる此の一幅は、あはれ寫實の粋ともいふべからん。されど人は此の幅を凝視するに從つて、此世ならぬ響をきゝ、彼岸の光に接するの思ひせん。つつ立ちて削られたる崖、是れ創世の始めより以來人間の手にも眼にも觸れざりし巖ならずや。寄せては返す洶湧の波の花、是れあらゆる世の煩ひを絶ちたる千古自爾の聲をなさずや。湧く海の音に和して岩間に起るハープの絃の音、あはれ何の天籟ぞ。而して其の指は絃に觸れながら、面を海の面に向けて、眼は深き神祕の光を放てる半裸の婦人、是れ如何にして濁世肉體の人たり得べきや。

貝の中に立てる海の靈アンフヰトリーテ、琵琶を彈じて海面に浮ぶ辨才天女、畫作の數々はあれど、相は此世のもの其の儘にして、神は高く彼岸の光に接するもの、此の「浪の音づれ」の如きもの、世に幾何ありや。人界の形にして人界の物にあらず、神靈にして神怪ならざる、實を寫して而も現實を超えたる、此の作に及ぶもの、古今何れの畫師か之れをよくせし。

あはれ世は人心の紛々のみ多く聞こえ、天籟は機械の音に追はれ、藝術の士亦徒に寫實を名として、世に阿り俗を逐へて、自家の天職をも知らず、小成直ちに大家の名をなす。此時、此の十九世紀文明の世に、藝術の眞人ベクリンの如き者を得たるは、天の靈光が未だ人心を去らざるを示さずや。此の「浪の音づれ」が人の精神に音づれ得る限りは、美の神未だ死せざるを證せん。高山樗牛が云ひけん、「人生は短く、藝術は永きこと、今も尚ほ昔の如き也。畢竟美を求むるの心は無窮を追ふの心也。古の人は、是の心に惱まされて、而かも是の惱みの中に幸ひを見出せり。彼等にとりては、蒼天は虚空に非ざりき、そこに輝ける星は土塊には非ざりき。あはれ天の靈光、神の呼吸として美を讃美する能はざる世に生れたる吾等の不幸は、寧ろ海を踏んでトリトンの笛の音を聽かむとかこちたる詩人の恨にもや較ぶべけむ。』

さなり、吾等は海を踏むに及ばず、彼のベルリン畫廊に神祕の眼光を放てる畫師と神相融けなば、此の一幅の中にトリトンが超世の笛の音を聞きて天の靈光に接するを得ん。

# 年譜

明治六年七月二十五日京都に生まる。

同地小學校から第三高等中學校（大阪から京都）に入る。その間明治二十二年頃、美妙齋の言文一致にかぶれて、言文一致論を雜誌「文」に投じ、自分の書き物が初めて活字で現はる。又同窓會雜誌「壬辰會雜誌」の編輯に與る。

二十六年、東京帝國大學の哲學科に入り、二十九年卒業。

『ファウストに於ける少女マーガレットの運命』といふ文が「國民之友」に出て、喜ぶ。「哲學雜誌」の編輯を管し、又「帝國文學」の發刊にも參加し、二三の文を發表す。

それから大學院で研究。『印度宗教史』、『印度宗教史考』、『宗教學概論』、ハルトマンの『宗教哲學』、『上世印度宗教史』の著作は、その間の發行で、又雜誌「太陽」にも關係す。

三十一年から二年間、母校で講師として宗教學を講ず。

三十三年から三十四年、ドイツのキール大學等で研學。

三十五年から三十六年、ロンドンで研學。印度旅行をして歸朝。

三十五年九月、ハンブルヒ開會の東洋學會で、Der Sagatha-vagga des Samyutta-nikaya 報告、西洋學界での初めての發表。

三十七年、母校で教授、翌年宗教學講座創設。

三十七年、『復活の曙光』及『現身佛と法身佛』（學位論文）發行。同じ頃、二年ばかり、雜誌「時代思潮」を發行し、又「樗牛全集」を編輯發行す。

三十八年、Hibbert Journal に How Christianity Appeals to a Japanese Buddhist を發表。西洋での論文發表の初めで、それから以後、Revue du Mois, La Vie des Peuples, Coenobium, Movist 等に時々論文發表。

四十年から四十一年にかけて、カーン資金を受けて世界週遊。The Religious History of Japan, an Outline は、そのみやげの爲の刊行。

又その結果は、『花つみ日記』、『停雲集』の外、Le sentiment religieux chez les Japonais, The Modern Civilization of Europe 等にて發表。

四十一年、ロンドンでの東洋學會には、Honen, the Pietist Saint of Japanese Buddhism 等報告發表。

四十二年、The Four Buddhist Agama (Asiatic Society of Japan) 發行、その一部分は、先きにロンドンの Asiatic Society や雜誌 Muséon で發表。

四十三年、『根本佛教』發表。

四十四年から四十五年にかけ、ショペンハウエルの翻譯『意志と現識としての世界』發行。

大正二年、『高山樗牛と日蓮上人』發表。同年歸一協會の設立に參與、その報告類を發行。

大正二年から四年まで、ハーヴァド大學で、日本文明講座擔任。講義科目は日本宗教史、宗教と詩、佛教論理、佛教各派の思想等。この二年間ボストン博物館で日本美術の研究に大きな便宜を得。

此間、シカゴ大學で、日本佛教、エール大學で、日本美術等數回講義の外、數個の大學を巡回。

大正五年から七年まで、畔柳芥舟、笹川臨風と共に雜誌「人文」發行。

大正四年、Buddhist Art in Its Relation to Buddhist Ideals (Boston, Houghton Mifflin) 著作發表。

大正五年、Nichiren, the Buddhist Prophet (Harvard University Press) 著作發表。

同年、『法華經の行者日蓮』(廣本及要本)著作發表。

大正七年、カリフォーニャ大學五十年式參列幷に講義。

大正八年、パリのフランス學士院大學で講義。大戰の古戰場巡回。歸路諸邦を巡る。

大正九年、『社會の動搖と精神的覺醒』著作發行。

大正十年、パリでの講義を Quelques pages de L'histoire religieuse du Japon (Paris Musée Guimet) として發行。

同年、ハワイ汎太平洋會議參列、幷にカリフォーニャ大學にて講義。

大正十二年、The Religious and Social Problems of the Orient (New York, Macmillan) 著作發表。

大地震には、鎌倉でやつと一家一命を全うし、壞れ屋の下じきとなつた人數人を掘り出し、それから燒けた大學に歸り、到頭その圖書館復興の事に當る樣になり、今、昭和三年末、建築設備を終るまで漕ぎつく。

大正十四年、圖書館研究幷に建築寄附者ロックフェラー氏面會の爲に海を渡る。

同年、『切支丹宗門の迫害と潛伏』著作發表。

大正十五年、先に會員となつた帝國學士院の幹事に選擧せられ、俗務を加へて今日に及ぶ。

同年、『切支丹禁制の終末』著作發表。爾後十五編の研究論文を帝國學士院記事で公刊、その纏まりは一二年の中にするつもり、多分和文二冊と英文二冊になると思はる。

昭和三年、Japanese Mythology (Mythology of All Races, Vol. VIII) 著作發行。實に十三年前の原稿漸く刊行、別れた兒に逢ふ感あり。

同年、十一月、History of Japanese Religion の稿、火災後の回復修正を經て漸く出來上り、ロンドンの出版者に送る。圖書館の落慶と共に、年來の重荷をやつと少しおろした感あり。著作原稿の火難、實に此で三度目なり。

生まれて九歳、主家なる宮樣の薨去につゞいて、父を喪ひ、二十一歳、祖母に、四十五歳、母に別れ、二十五歳結婚、五人の子供皆健全、生まれた時の一家四人が、今は七人。失つた師の中では、二十八歳の時、外山先生、四十七歳の時、ドイセン先生、友の中では、二十八歳の時大西祝、三十歳の時、高山林次郎、何れも一生を通しての感化を得て追懷無限。今から五年後に定年退職したなら、此を研究しよう、彼を纏めようと、考へはあるが、出來るや否や、今から保證は出來ぬ。

# 篠川臨風集

春雨の絲よりも細く降りにけぶる日に、古寺を訪ねても見たい。薬師寺東塔の水煙は見え分たず、法隆寺は雨靄の中に隠されてゐる。其の古への銘華の名殘りであつた一木一石も盡く雨に濡されて春愁の情は無言の裡に深い。大御殿は寂寞として、八角鑄造の金銅燈の龍は悩しく立つてゐる。名工が鍛鍊鍛へた腕に彫りあげた南大門の二王像は、春雨が降りしきり、秋風が吹かうと、一切人界を超脱して、永久に藝術の美を語つて居るのである。

於「奈良の旅抄」一節

臨風

# 舞殿

一

「あゝまた例の話か。それならばお斷り下されませ。此日頃頭が痛うて、不快にござりまする。舞はうとて舞はれませぬ。」

と靜は、つんとして、灯影に身を背けての挨拶。使者となつて推參した千葉平次常秀は手持無沙汰の體であつたが、やゝあつて膝を進め、

「不快でござらしては、如何さま舞ふ氣にもなれますまい。ぢやが靜殿、鎌倉殿からの仰せでござる。殊に御臺所が是非に舞にかけては天下に名ある御身の舞振が見たいとの御所望。言はば晴の場所でござれば、ちとばかりの不快は、推して申すも異なやうぢやが、此所は大負に負けて、不承ではござらうなれど、一つ舞うては給はるまいか。さうならば、此平次の顏も立つと申すもの。平次は判官殿の懇なる情をも受けたる身でござれば、御身も此某の心を酌んで、鎌倉殿の首尾善いやう致しては下さらぬか。」

と掻き口說くを、靜はじろりと流眄に見て、口のあたりには冷かなる笑。

「鎌倉殿の仰せとな、又御臺所の御懇望とな。それが此妾に辱ないと思ひやるか。」

弾き絞つた嘲の矢は、弦を離れて、眞一文字に弦音高く、ぐさりと、千葉平次の胸を突き通すやうに覺えて、平次は思はずたじ〳〵。

「何と仰せられる。」

「鎌倉殿や御臺所は、お身などには辱なうござらうなれど、妾に取りては仇も同然。」

と、靜は少しも惡びれぬ。

「えゝ、仇とな。」

と、平次は愈々狼狽へる。

「まことぢや。」

「靜殿、お控へ召され。」

と、平次は、やつと氣を取直して、威丈高になる。

「ほゝゝゝゝ、何で控へることがござらう。」

「過言でござるぞ。」

「鎌倉殿の御家人衆と、此靜と一つには往かぬぞや。」

泰然として、靜は動かざること大盤石のやうである。

梶原平三景時が自ら使者となつて、見ん事靜を舞はせませうずと申したるを、千葉平次、横合から靜の宿主安達新三郎とは近い間柄であれば、某直に參り、新三郎と諜し合はせて是が非でも靜に舞はせて御覽に入れ申さうと、鎌倉殿に誓つた其言葉其舌の根に對しても、平次、此儘では罷り歸ることが出來ぬ。

平次が鎌倉殿の御前にて受け合ひたる折、老猾なる景時はせゝら笑つた。

「千葉殿、いかい執心なう。とかく世は若い女子のことぢや。あの靜は、都でも一と云つて二とは下らぬ女子。ことに舞にかけては日本一。神泉苑で雨の祈の舞仕つた時は九十九人の白拍子、いづれも丹精を凝らしは凝らしたものの、龍神の示現は、ふつとござらさつた。靜は百番目にあらはれて、しんむしやうの曲を半ばかり舞ひたるに、愛宕の峰のあたりから、一朶の黒雲湧くと見るまに、一天俄に搔き曇り、空には電の光閃き、八大龍王の示現納受は目の前に見えて、大雨車の軸を流すが如く、三日三夜降りつゞいたと申すことぢや。院も之を

御感なされて、容顔も麗しいが舞に奇特の功あり、まことや日本一と申すべけれとの宣旨があつたとか申す。はゝゝゝゝ、ちとばかりおまけはござらうなれど、世にも名高い白拍子、東國にて見られうとて見られぬ女子ぢや。其神泉苑の舞の折、判官殿が見初めたりとの取沙汰。如何さま好色者の判官殿でなうても、男の魂を溶かすあの眼ざし、なよやかな姿、鶯の啼く音のやうなあの聲、こりや若い男どもはてんとたまらぬでござらう。梶原平三、年は老つたれ、若い人達に引を取らぬつもりにはござれど、そのやうに若い千葉殿などが懇望なされる使者を此景時が致すには及びませぬ。」

と、景時の嘲るやうな眼は千葉の面を射て、

「景時が自ら使者を申請けようといたいたは、殿が妊な静を其胎内の兒諸共に失はうかと仰せられたを、景時、母御は助け給へと申した、恩義がござる。其恩義にほだされて、静も某の申すこと諾ふであらうと此御使を願うたでござれど戦場でもあらぬことに一番乗でもござるまい。千葉殿にしかとお譲り申す。見事説き落して、殿の御威光を汚さるゝな。」

と、底意地の悪い景時に、釘をさゝれた。千葉平次あながちに好色心ばかりから此使者懇望致したのでもない。景時は静の助命を恩に被せてはゐるものの、判官殿と、此老爺の仲の善うないことは、天下に隠れもない事實、静が此老爺を仇敵のやうに思ふは知れたこと。此老爺が静の助命を願ふと云ふのがてんから不思議なことと、一同に眉を顰めたのであつた。其當時御前にあつた人々は袖引き膝つゝき、これは唯事にてはあらず、石が流れて木の葉が沈む、天變地異でも起らねばよいがと、蔭口利いたほどであつた。如何さま之には何か魂膽のあることであらう。其御産所は倅源太めの宿所とお定め下されいと申し居つた。これが老爺めの腹に一目論見立てた證據であらう。すると流石は静、うつかり其手に乗らぬ。工藤左衛門に頼うで、あはれ同じくは安達殿の宿所にてと申した。如何さま安達新三郎は静を伴うて、都から還つたもの、静の申すことも尤至極なれば、鎌倉殿にはそれよからうとの仰せ。梶原めまんまと狂言かき損ひ居つた。其梶原がちとばかりの恩義を笠に舞へと申したとて、何で静が舞はう。それよりは女子を口説くにかけては千葉平次、自慢ではないがちとばかりは技倆がある。梶原が静を説き伏せること叶はで、殿の御威光を輕しめるよりは此平次が使者となる方が殿にも忠義、平次も亦時の面目を施すと云ふもの。まつた此平次、日本一の舞の上手で、都にて又とない美しい白拍子と面あたり言葉をかはせて、其弱い便りない身に同情の思を寄せてほろりと美人一掬の涙を濺がせるも東國男兒の身の譽と、平次柄にもなく思ひ立つて、梶原の使者の役目を横合から奪はうとしたのである。

千葉平次が達ての懇望には並居る鎌倉武士ども、異様に感じた。益にも立たぬ忠義立と心に嘲るものもあれば、此使命見事仕るであらうかと懸念するものもある。はゝア柄にもない好色心と可笑しさをこらへ兼ねたのもあつた。鎌倉殿も莞爾と笑つて、

「汝が懇望ならば、其使者は汝に仰せ付けう。」

と仰せられる。

平次勇みに勇んで、狩衣姿を今日は一段と見榮あるやうに着飾り、安達新三郎の宿所に罷り越して新三郎まで此旨を申し入れる。すると新三郎は首を傾けて、

「こりや難い。何で其やうな使者を引受けやつたか。殿からの仰せならば、火の中水の中、蝗の飛ぶやうな矢の中、大地を蹴かす馬の蹄の間にもわつて入るべきではあるが、静殿への使者はお身にはふさはしくござらぬ。工藤左衛門

か、畠山庄司ならばいざ知らず、千葉平次のつとめる役目ではござるまい。」

と、てんから相手にせぬ。親しい仲とて、平次は遠慮もなく、

「新三郎、そりや慮外な言條でござらう。あの甘縄の後家殿は平次見事に手に入れた、又化粧坂の田鶴も平次には靡き居る。女子を說き伏せるは此平次の得手とは知らぬか。」

と言はせも果てず、新三郎はから／＼と大口開いての高笑ひ。

「甘縄の齒つかけ後家殿や、化粧坂の横太りの遊女と、日本一の靜殿とは一つにならぬわ。」

あとは腹を抱へて、止度もなく笑ひこける。平次躍起となり、

「新三郎無禮致すな。何も其靜殿を口說き落さうと云ふにてはない、殿よりの仰せを傳へて舞を承知致させるばかり。それを何ぢや、日本一の女子と、甘縄の後家や、化粧坂の遊女とは一つにならぬとは。しかも某とは懇なる女子を齒つかけぢやの、横太りぢやのと讒口致すとは、友達甲斐のない似而非者。よいわ／＼もうお身には賴まぬ。辱なくも此千葉平次は殿の使者ぢや。鎌倉殿の使者が參つたと、靜殿に取次賴まう。」

「あつ心得た。」

と、心中に可笑しがつて、安達新三郎は此旨を靜に通ずる。すると、

「不快でござる。お目もじは容赦なされて。」

と、一言の下に擊退される。斯う云ふ筈ではなかつたがと、千葉平次しきりに思案に暮れたが、ぴたりと眞正面に斷られては取り付く島がない。此うなると僅に安達新三郎のみが唯一の賴みの綱である。其新三郎は、それ見たかと云はぬばかり、相手にしてくれさうもない。

「鎌倉殿よりの使者を斷るとは、無禮でござらう。」

と繰返して云つて見たが、催馬樂とか云ふ京から靜の召連れた端女が、

「お目もじは出來ませねば、宜しうお傳へ下されませ。」

と、木で鼻くゝつたやうな挨拶。平次困じ果てて、

「これ、新三郎、安達殿。」

「何ぢや、用ばしござつてか。」

「賴む、何とか致いて逢はせてくりやれ。」

「益ないことぢや。某にも及ばぬ。其旨還つて殿に申上げたらばよからう。」

と、新三郎は取り合はぬ。

「殿への還言はとにかく、梶原めに笑はれる、若殿原には囃されるでござらう。靜殿に逢はせてくれねば、平次一寸も此屋を去らぬ。」

と平次は捨鉢の其儘居据らうとする體に、新三郎ももて餘して、

「さらば靜殿の母御磯禪師に逢うて、賴うで見やれ。」

と、云ふに、平次は一方の血路を開いた思で、磯禪師に逢うて、是が非でも逢はせてくれと、だだをこねた擧句、やう／＼靜に逢へば鎌倉殿の館で遠くで見たよりは一段と美しい艶かな姿。判官殿に別れてから憂に沈んだ美女の恨めしげに、つんとすねた風情は、平次膽の緒切つて初めての美人御見に先づ度膽を脫かれて、斯うも語らう、あゝも云はうと思案した其十分の一も口へは出でず。其上けんもほろゝに取り合うてくれぬばかりか、擧句の果は鎌倉殿を仇同然呼はりに、流石は千葉平次も鎌倉武士、つい相手は絕世の美女などと云ふ氣も忘れて、威丈高になり、たうとう纏りがつかず、あつたら使命も有耶無耶の裡に葬られて、腹立紛れに新三郎にろく／＼の挨拶もせず飛び出して見れば、文治二年四月三日の月は、どんよりした空に薄い光を放つて、外の方には生暖い風が頬を

撫でる。
「えゝ、面白うもないこつちや。」
と、思はず呟いた。

## 二

「殿、お側に參りてもよろしうござりまするか。」
白髮頭の、赤ら顏の、肥え太つた梶原平三景時、太けれども小聲に、次の間からそと申上げる。
「平三か、近う、苦しうない。」
「臺樣には。」
「今日は相模（北條時政）の館に罷り越した。」
「それは重疊。ちと密談が申上げたうて。」
「自も望む所である。ずいと近う寄つて。」
「はつ。千葉平次は未だ歸館な仕りませぬか。」
「まだぢや。」
「どうせ首尾善うは參りますまい。ぢやが殿には某が源太の家に靜殿を匿さうと申上げたるを、なぜに工藤の計ひで安達新三郎の家にお置きなされましたか。」
「さう汝に云はれては、ちと返答に困ずるなう。自が靜を胎内の兒諸共に切つて棄てよと申す、それを汝が靜の助命をと請ふ。此までは汝の計略が見事に參つた。ぢやが汝が助命の願を諸侍は異な面色して一齊に見居つた。伊豫（義經）と汝とは犬と猿、犬のそりが合はぬ。其汝が助命をと云ふぢや、一同が異樣に感ずるは、こりや當然である。其上押して汝の倅の處へ靜を宿さうとならば、諸侍の不審は固より、靜が一層嚴しう用心致すは定。あの女子、高が白拍子ではあり、高が伊豫の妾ではあれど、心惡いほど伊豫を慕うて居れば、挺でも動きはせぬ。靜が源太の家を拒まねば、重疊でござつたが、自が思ふ如く工藤もて、否ぢやと申す。それを違ことは沙汰されぬ。安達新三郎の家ならば、又どのやうにも工夫が出來る。先づ云はば自が明を立てるためぢや。」
と鎌倉殿は苦しげに辯解する。
「殿も餘りに正直に渡られまする。安達の家にては此景時の骨折心勞は一方でござりませぬ。」
「さうかなう。」
と、鎌倉殿は、途方に暮れた樣子。しばらく兩人の間に話が途切れて、四方は森閑とする。行春の名殘は風なきに庭前の花が散つて、其跡を追ふ小鳥がついと飛んだ。
「ぢやが汝は靜への使者を何故にあの平次には讓りやつたかなう。」
梶原が鎌倉殿に怨じた筆法を、逆に鎌倉殿は梶原に用ひようとするのである。梶原は片頰に笑を含んで、
「云はゞ瀨踏みでござりまする。何であの千葉風情が靜殿に承知云はせませうぞ。今に此梶原の前に面伏く參るは必定にござりまする。其折は御憤あつて、其やうな女子は目に物見せくれんずと御意なされませ。そこを某又巧に取做して申しませうず。すれば軈て新三郎にも此事が聞えて、靜殿の耳にも入りませう。靜殿は頑に依怙地を張るでござらうなれど、母御の磯禪師はいたう心惱ませて何かと靜殿にも申すでござりませう。其折を見て、平三使者に參らば、舞ふことは必定、受合ひまする。」
「むう。」
と、鎌倉殿は老爺の思慮長けたるに感じ入つたやうであつたが、
「ぢやがなう。」
と、何やら不安の樣子。梶原は殿の面を仰ぎながら夙くに其心を讀んではゐるものの、素知らぬ顏で、
「如何な御意で。」

と云ふ。
「身は舞を所望な致さぬ。」
「これは如何なこと。」
「舞の所望は臺の建ての沙汰ぢや。身は舞などを見たうあらぬ。」
「如何さまなあ。」
「義經の在家が糺したうて。」
「御尤にござりまする。」
「それも身が靜を近づけて糺したい。人手な假らずに、賴朝自らが彼の口から聞きたうある。」
「仰せの通りで。」
「それを汝に談合致したのぢや。」
「景時固より、確と心得て居りますればこそ此間から樣々と計畫致して居りまする。倅源太の宿をと申したのも、其折の便宜のためにてござりまする。」
「それや善う分り居る。けれども隨分器量の家では結句自には面倒うて、心が置かれる。安達新三郎の家にてもよいが汝に其使ひ言ひ參らさうかな。」
と、賴朝には打解けた顔で笑んでゐられる。平景時は悄然として、
「景時心して仕るでござりまするが、先づ聞はせましても彼に靜頭を御掛けなされまして、御臺所の鑑賞に參上致させまする。某もそれを機會にしげしげと靜殿に近づきまして、殿の仰せを否應申さず、兒も助け得させうと恩を賣りまする。さて其後に殿はお忍びにてゆる〳〵判官殿の在家を直にお尋ねなされませ。」
と、云ひ畢つて、にやりと笑ふ。鎌倉殿も思はず貰ひ笑。
「汝のことぢや、首尾善う仕るであらうが、相手が並一通りならぬ手硬い女子ぢや。ちとばかり不安である。」
「何の。」
と、景時は一言に云ひ消して、
「殿の御威光、まつた某の計略、何で不安がござりませう。」
「ぢやがなう。」
と又してもぢやがなうが出る。
「まだ御不安で。」
と、好色者では千葉平次などから見ると遙に優れてませ給ふ殿が、いたくも心を惱ませ給ふもをかしく、景時は心に可笑しさを耐へて、眞面目な顔。
「それよりも不安は臺ぢや。」
と、御臺所への顧念。如何さま之は一大心痛事、尤も至極と景時も同感を表せざるを得ない。
「全くで。」
「此事が耳に入りたらば最後、どのやうに暴びやるかも知れぬわ。」
「ではござりまするが、殿は其御臺のお目を忍ばせられて時折。」
「叱つ、高う云ふな。」
「はつ。」
「其忍びが、又善う露顯致すぢやて。」
「殿にも似合はせ給はぬ御不覺のことで。」
「所が、臺はあのやうな才はじけた女子。父には相模が居る、弟には小四郎（義時）が居る。臺の眼となり、耳となり、手となり、足となるものは、いかい多い。驚いたことが、いつの間にやら耳に入り、眼に入る。平三、ちと察してくりやれ。」
之は、又甚んでもない同情の要求ではあるが、女丈夫ではあり、權門の出であるだけに、天下に號令して、海内を其掌の裡に自由にする英雄も、流石に一目も二目も御臺所の前には置かねばならぬので、其やうに怖い御臺所であるならば、鎌倉殿も溫しく、御臺所を專一に守つて波風なく家事に平和に暮しておはさば宜いのに、持つて生れた好色心は、景時の云ふが如く時

折、電光石火と閃いて、御臺所の神暴びに暴びさせ給ふ原因を作る。

殿の御病氣が又發したさうな。」

と、苦笑するものあれば、

「御臺所も御臺所ぢや、大目に見ておいでなされば善いのに、見苦しいことでござる。」

と、殿中で蔭口がちらり／＼と聞える。此殿が現在弟の判官殿の寵愛者靜を一目見ると之は東國に類のない極彩色、御臺所の前をも憚らず恍然として、嗚呼艷なるかなと、暫く見惚れ給うたのである。慧眼なる、しかも悋氣の強い御臺所は早くも之を觀破した。觀破すると同時に防禦の陣立を講ぜられたのである。

とは鎌倉殿固より之を知ろし召さぬ。お氣に入りの梶原平三景時にそれとなく内意を含ませる。景時は委細畏まつて候と、領承したが、景時は老猾第一の曲者、殿に忠義立した結果、御臺所に睨まれたらばそれこそ一大事である。北條氏を背後に控へる御臺所の權力は大したもの。いゝ年して、景時が道ならぬ情事の媒介したこと露顯とならば、景時の一身は固より、梶原氏の浮沈である。景時は其間に巧に處置せねばならぬ、と云うて殿の仰せを蔑にしたらば、今までの忠義振、心盡しはうたかたの水の泡。之亦景時の興廢である。景時に取りては板挾の境遇ではあつたが、そこは景時、呉と越との間に立つて、見事難關を切り拔けようとするのである。して見ると、鎌倉殿が賴みに思ふほど、景時は案外に賴み甲斐がないかも知れぬ。

御臺所は達て靜の舞を所望される。なぜ其やうに所望はされるか、其のどん底は不明である。日本一の舞の上手が東國に參つたものを、舞はさで還しては心惜しい、神泉苑での舞振を鎌倉でも見ようとせがまるゝのである。由ないことと鎌倉殿は思召したが、無下にも退け難いと、さてこそ舞の所望となつたのである。

「平三、伊豫は果報者なう。」

と、鎌倉殿はしみ／＼と感じ入つたやうな口振。

「いや、さやうにてはござりますまい。判官殿も御心違ひより其寵愛者と別れねばならぬ御身の上、御果報とは此平三思ひよりませぬ。」

「ではあるが、賴朝が心を惱ませる女子を、苦もなう自らの物に致して居る。彼が果報者でなうて何であらう。」

「これからは殿が果報の御身の上とならせ給ふことでござりませう。」

「如何であらうかなう。」

と、鎌倉殿は流石に猜疑心が深い。否猜疑心が深くなうても、全く鎌倉殿が思はせらるゝがやう、不安は依然として不安である

「其御懸念は無益。」

と、景時は唯一言に打消すが、景時には表裏がある。彼が心の裏を探ると、或は鎌倉殿以上に不安かも知れぬ。

「さてどうであらうかなう。」

と、殿は容易に合點せぬ。しばしあつて吐息をつき、

「伊豫には臺が居らぬわ。」

と、又しても屈託顏。之には景時も返答のしやうがない。

「千葉平次は如何致しましたか。いたら還りが遲うござりまする。」

と、あらぬ方に言を紛せる。すると、

「さいなう。」

と、氣のない返事。

「どうせ平次は殿の仰せを仕遂げは仕りませぬ。唯どのやうな斷方か、景時に取りて、善い手引でござりまする。」

折しも御臺所還御の知らせがある。

「殿、おさらばでござりまする。」

と、景時はふいと退り立つ。

## 三

「こりや平三、まあ待ちやれ。」
と、偖のあなたに聲がする。言はずと知れた御臺所政子の方。梶原平三景時ぎよつとしたが、此も海山千年の功經たる古狸、何で其樣なことで辟易しやうぞ。
「はつ、御用ばし御座りまするか。」
と、そこに蹲踞ふ。
するりと襖が開いて、立ち現れた御臺所。色は淺黑いが、品があつて威が備はつて、才氣が眉宇の間に迸つた美しい女の、天晴れ右大將賴朝卿の御奥方とは誰にても見える。
「唯今御歸館にてござりまするか。」
と、平三は恭しく額つく。
「平三、靜は舞に參ると申したるか。」
と、御臺所の眼は異様に輝いて、平三の面を射た。
「如何やうにてござりましたるか。平三御使を仕りませず、千葉平次が仕つたれば、其返事は存じ承知仕りませぬ。」
「おう汝は參らずとか。なぜに汝はお行きやらぬ。」
「平次が切の所望でござりますれば、其意に任せました。」
「ふう。」
と、御臺所は嘲るやうに、
「殿は汝の參るが御所望であらうに。」
と、にやりとする。此にやりが、平三に取りては無氣味千萬である。ちと答へかねて默然。
「平次が首尾善う仕らねば、其折には汝が參らりやるか。」
「如何にも其折には平三が參ることにござりませう。」
「殿は嘸汝の吉左右をお待ち兼ねであらう。」
平三は何喰はぬ顔で、
「舞の御所望は殿よりか、臺樣が切にとのやうに承はりましたるが。」
と、探を入れる。
「然うぢや。ぢやが殿は汝に舞以外の所望を御命じなされたのでありつらう。」
勢は急轉直下した。まさかと思つた平三の賴みは空賴みであつた。流石に御臺所は殿の御擧動を御觀破なされてゐる。此平三を一つ穴の貉と御覽なされてゐるは必定。平三も此懸念があつたればこそ、夙くに一方の路を開いてゐたのである。
「臺樣、ちと内密の御談が仕りたうて。」
と、之は平三が常用の慣手段である。
「内密の談でなうても善い。汝が使者の旨は妾善う知り居るわ。」
と、御臺所はうつかり其手に乘らぬ。失敗つたりと見たが、平三は慌てず、騷がず、
「はゝゝゝ、臺樣は此梶原を何と思召す。」
「梶原平三景時に違ひはあるまい。」
と、御臺所は平氣なもの。鎌倉殿よりは餘程手剛いと、流石の平三もちとうんざりする。けれども逃けようにも逃げることはならず、胡麻化さうにも胡麻化し切れず、一層まことの心事を白狀しようかとも思つたが、いや〳〵待て、平三を見透かされる恐がある。
「平三にはちと考がござりまする。臺樣がお疑ひ遊ばすのは、ちと手厳しいことと恐れながら存じまする。平三何で、怪しいことを仕りませう。」
「ほう、問ふに落ちいで、語るに落ちるなう。」
と、てんで御臺所は平三の言ふことを承け引かぬ。老猾も此に至つて少からず面喰はざるを得ない。
「平三、其御使は無駄ぢや。休めにしやれ。」
と、御臺所はいよ〳〵高壓手段に出る。

「其儀は平三夙くに存じて居りまする。」

と、平三はくやし紛れに其上に出ようともがく。

「ならばなぜ其やうな使命を仰せつかるぞ。出来ぬとならば、なぜに殿をお諫め申さぬ。殿の非を諫めも申さで、善い氣になりて、いゝ加減の返事を致さうなどゝ、汝にも似合はぬことでおざるなう。あの靜が汝の口車に乗らうか。汝もちと年が老けたなう。」

馬鹿めと云はぬばかりの權幕。しかも急かず促らず、悠揚として、老猾を取つちめる手際は、鎌倉武士を自由自在に操縦したる後年の尼將軍だけに鮮かなものである。

「はつ恐れ入りまする。」

と、平三景時是に到りて、全く兜を脱いだ。

「まこと此梶原は殿の仰せの成らぬを善う存じて居ります。されど殿が切に此梶原に仰付けられまするを、そりや成りませぬとは申難う、心得ましたとは申したるものの、あの靜、何で一筋縄に參りませう、言うても甲斐ないことは知れ切つたことにござりまする。」

と、平三の言ふ所は少ししどろもどろである。

「さらば汝の本心はどうぢや。」

「靜に殿の仰せのほどをほのめかいて、否ぢや、ならぬと申す其返事を殿に申聞え、きつぱり御斷念を願ぎまつらん本意にござりまする。」

すると、御臺所の容はぴたりと改まつて、

「そりやまことを言ひやるか。」

と、俄に秋霜の氣を帶びる。

平三思はず愕然としたが、何氣なき樣で、

「何で虚言申しませう。」

「虚言ひやるな。」

と、唯一言の下に打消される。平三慌てて、

「御臺様そりやあんまりでござりまする。」

「何があんまりぢやぞえ。」

「平三誓つて虚言申しませぬ。」

「弓矢八幡の祟も恐ろしうはないか。」

と、御臺所は信じて疑はぬ風情。平三は進退窮つて、もう言の出づる所を知らぬ。

御臺所の言は殆ど命令的である。威があつて、權があつて、叱咤するやうである。

「平三、汝は靜を亡いものに致さうと企てゐやるなう。」

一語は、趙夫人の短劍の如く、ぐさりと平三の胸を刺した。血縁の如く濡るゝも、人忽に死せざるもののない趣がある。

「えつ。」

と、思はず老猾な平三が飛び上つた。

「汝が靜の助命を願ひやつたは、殿への狂言。其助命の恩義を餌に、殿の非を遂げさせまさうと、殿には申上げる。汝の惡い腹が何で靜の心を知らぬことがあらう。出來ぬ、遂げられぬと知つて、自ら靜への使者となつて、殿の仰せを唯ほのめかす、唯ほのめかすばかりであるから、靜もぴたりと斷りは致すまい。殿の煩惱は愈ましに加はるばかりぢや。切に／＼と汝にお頼みなされるは定。じらしてじらしぬいた擧句に、靜は怒つて、ならぬと云ふ、汝は其旨を殿に申上げる。殿はむきになつて惡い靜め、どうしてくれうと、いきまき給ふ、それにつけ入つて靜を切つて棄てうと云ふ斷末魔に來るは、鏡にかけて見るがやうぢや。平三、何とさうではおざらぬかなう。」

肺腑を抉られて、平三はもう絶體絶命、冷汗は背に瀧津瀬となつて、思はず戰いた。平三は六十餘年の生涯に此やうな目に逢うたことはない。御臺所は其父としては北條相模守時政、弟としては江間小四郎義時をもつてゐるが、父や弟やよりは一層勝つた思慮に長けたる婦人とは知つてゐたものの、かほどまでに平三の心中を觀破らうとは今の今まで夢更に思はなかつた。餘りのことに平三は茫然として答ふるす

べを知らぬ。」

やう〳〵我に還つた平三、はつと手をつかへて、

「御賢察恐れ入りました。」

斯うなると、智慧梶原も一文の價値がない。

御臺所は顏を和らげ、

「平三、そりやあまりに酷い。」

「はつ。」

「よしない殺生ぢや。汝が殺さうとて、妾は活す。かよわい女子一人殺したとて何にならう。」

「平三、思慮の足らぬ所、お許し下されませ。」

「許す許さぬなどと、其やうなむつかしいことでもおざらぬ。汝が靜を殺さうと云やるも、云はゞ殿への御奉公。お家に仇なす判官殿の寵愛なれば、云はゞ靜も仇の片割と思ひやつたであろ。ぢやが窮鳥懐に入れば獵師も之を殺さずとやら聞く。判官殿に別れて此世に便ない女子ぢや。女子は女子同士、いつそ思ひやりがおざるわ。其やうな殺生は平三慎む、ふつとやめてくりやれ。可愛い女子ぢや、助けて遣はせ。」

と、打つてかはつた、優しい調子に、靜よりは平三の方が生き返つた思ひ、やれ嬉しやと、氣が緩む。

「まことでござりまするなら。」

「さう思ひやつたら、殿にも御懸念のおすゝめ申してくりやれ。斯う申すも異なことぢやが、殿は好色心がおはす。汝などが側にゐて、其好色心を諫めてくれねば、此妾がいかい心勞ぢや。ちと妾の身にもなつてくりやれ。汝が殿の味方致いて、煩惱の炎を煽ぎ立ててくれるやうでは、妾は遣り切れぬ。察してくりやれ。」

「如何さまなう。先いつほども其事を申上げたことにござりまする。」

「妾は汝を此上ない味方に思ふわ。出頭第一で、殿にはお氣に入りの汝ぢやに。其汝が殿の爲に鎌倉の爲に殿の身の上を善う見守つてくれねば誰が見守らう。」

「勿體ない御意で。心得ました。」

と、もう平三はいゝ氣になる。

「妾他には思ひませぬ。よしなに頼むぞや。」

「平三誓つて承合ひまする。」

御臺所は言を繼いで、

「ぢやがなう、靜には見ぬ世でも舞はせねばならぬ。千葉平次などには懸念ない。汝は其使者善う果しやるか。」

「果しまするつもりで。」

「汝にても妾は懸念な致す。」

「如何してでござりまする。」

「汝が判官殿の仇なることはあの女子善う知り居る。まして汝には靜を殺さうと致す殺氣がおざる。何で靜が承け引かう。」

「もう其殺氣はござりませぬ。」

「ほゝゝゝ、ぢやが汝には難い。」

「いや平三誓つて致しまする。」

「又汝の誓ひか、危いなう。」

「これは恐れ入りまする。」

「ぢやが靜に舞はせねば、鎌倉の威光にかゝる。靜が達て否と申せば、殿の仰せを無に致すと云ふもの。」

「如何にも仰せの通りにござりまする。」

「汝が行かうより、まだ他に然るべきものがあらう。」

「殿の仰せにてござりまする。平三是非參つて、説き伏せまするでござりませう。」

「其殿の仰せは異な仰せぢやわい。」

「はゝゝゝ、もう其やうな仰せは畏りませぬ。」

「さいなう。汝は妾の味方であつたるわ。」

「第一の御味方にござりまする。」

「其味方が時折敵になりやるから心配なう。」

流石鎌倉第一の老狸も、御臺所に翻弄されて、もうたわいもない。

## 四

靜はうつとりとして過去の美しい夢を追想してゐる。今の靜に取りては、是が唯一の慰みである。否今のみではない、今後の生涯に於ても、靜に取りてこれほどの善い慰みはあるまい。十八年の靜が過去は決して長いものではなかつた。が、其長からぬ過去は波瀾萬重千變萬化の生涯であつた。振り向いて回想すると、其過去が走馬燈のやうに往來する。悲しいつらい、情ない影もあつたが、美しい、幻は雪を消す熱湯のやうに、其黑い影を取り去つて、あとには美しい光のみが閃く。靜は其光の裡に樂しく生きてゐるのである。

神泉苑の雨の祈の折に、源九郎判官に見染められたは、靜が十五の時であつた。まだ戀を知らぬ未通女の彼が初めて戀の手ほどきをされたのは判官であつた。數多の妻妾のうちに、判官も最も靜を愛しいものと見た。嫡妻河越氏よりも、判官は靜を又なきものと愛でたのである。靜に取りて判官は唯一の夫であつた。世に時めいた鎌倉殿の實の弟御、清和源氏の嫡流を汲める御曹司、驕る平家を西海に追撃し、御大將たる九郎判官の寵者としての靜は、當代婦人羨望の的であつた。白拍子としては華やかであつた。靜は影の形に於けるが如く判官に連れ添うた。判官は戈を枕に片しく夜半の憂をも靜に依りて慰められたのである。よし其嫡妻はあつたにしろ、侍女は多かつたにしろ、判官の戀は唯此一人に向つて注がれたのである。二人の戀は甘く蜜のやうであつた。

文治元年十月十七日のことであつた。晝の程、武藏坊辨慶に引き立てられて、六條堀川第の判官の前に罷り出でたるは、土佐房昌俊、まことは鎌倉殿から判官討てとの命を蒙りて上洛したるものであつたが、判官の嚴しい糺問に對してもさあらぬ顏で、

「何の此法師が判官殿を討たうなどと大それたことを仕りませう。よしや此法師が判官殿討たらと致しにも、龍車に向ふ蟷螂の斧、飛んで灯に入る夏の蟲の、所詮身を殺すより外はござりませぬ。此法師如何に愚かでござりますとも、其やうなことは善う知り居りまする。世の讒口、人の蔭口決してお取り上げなされますな。」

と、空嘯く。

「さらば何用あつて上洛な致した。」

と、判官は居丈高になる。

「それは斯やうにてござりまする。此法師年來の祈願あつて、洛中洛外の諸社諸寺に物詣仕らんと存じて、上洛仕りたるにてござりまする。」

「虚言申すな。」

「いや全く虚言などは申しませぬ。」

「さらば起請文書き申せ。」

「畏つて候。」

と、昌俊は判官の言ふがまに〳〵起請文を書きも書きたり、七通認めて、一通は火に燒いて、其灰を唯一息に呑む。

「上は梵天帝釋四天王を始め奉り、總じて日本國中の大小諸神、殊に別けては伊勢、春日、賀茂、別の氏神、八幡大菩薩の神罰冥罰を罷り蒙るべきものなり。依りて起請件の如し。」

判官讀み畢つて、から〳〵と高笑ひ、

「土佐房、善うも書きをつたが、神罰は兼ねて覺悟の起請ではござらぬか。」

「弓矢八幡神以て。」

「ハヽヽヽ、善う吐かいた。さらば退り居らう。」

出で行く土佐房の後姿を見送つて、
「油斷のならぬ法師ではあるわ。」
奧の一間に此樣を隙見したる靜は、何やらん獨り點頭いて、ちよこ〳〵走り、土佐房の跡を慕うて其大門まで出で行くを、と見かう見して、
「あの起請法師がうろ〳〵致す風情わいな。ぎろり〳〵と館の左右を見廻す眼つきはまこと唯ならぬ、容子ありげぢや。あな心元なや。」
と、靜は窃に其胸を躍らせた。
「あゝ、そこな禿童二人はかり、ちやつと急いで五條の坊門油小路の土佐房の宿所まで參り、内の樣子を覗うて來や。」
と命ずる。
判官は何事も知らぬ顏。夕になりて、
「酒の用意せよや。今宵は月冴える霜夜の寒さ、早う一獻飲べたや。」
「あい。」
と、靜はそれ〳〵用意をいひつける。
「武藏坊殿を始め御内人は如何致しました。」
「おゝ、淸水寺へ參詣に參つた。」
「ほゝ、何故あつて、今宵に限りお出しなされましたか。」
「何で其やうなことをお聞きやるか。」
「其の起請法師が心懸りにござりまする。」
「はゝゝゝ、其の起請法師が心懸りとな。あの土佐房が何仕出かさう。今の世に此義經に刃向ふものは日本廣しと云へ一人もないわ。構へて懸念致すな。」
「それでもあの法師奴は出で行きしなに、廐を覗いたり、館の内外を見廻して參りました。」
「よしやあの法師が夜討致したとて、此義經は蹴散らし、踏み破つて、法師の首をねぢ切つて棄ててくれるばかり。たわいもない、懸念には及ばぬ。」
と、泰然自若。靜は、
「えゝ心懸りな、禿童が歸り來ぬわ。はした女を見に遣はさう。」
と、内意を含めて、はした女を外の方に出しやる。
判官は快く數盞の盃を重ねて、顏は薄紅。傍に侍る靜を見返り、
「あゝ醉うた。今宵は此日頃には似ず早う醉うた。」
「まだそれほど召しませぬに。」
「おう此日頃は義經酒を飲うでも快う醉うたことはない。酒が沈んで、深く飲めば飲むほど、苦しいばかり。面白う飲うだことは更にござらぬ。」
「如何さまそれもさうでござりませう。御心のうちは妾善う察して居りまする。」
「利發な和御前ぢや、察して居らう。義經は汝に對しても氣の毒な心地が致し、不便でならぬわ。世が世であらば、義經は其功に依りて數多の土地を領し、高位高官に昇つて、榮耀榮華に時めく筈であるに、衆口は金を鑠す習、讒者の訴へに依りて、親身の鎌倉殿は此身を疎ぜられて、功ある義經を用ひさせ給はず、腰越から追ひ返して、鎌倉にさへ入ることも叶はぬ。云はゞ義經は日陰者同樣と相成つた。義經が日陰者とならば、それに連れ添ふ和御前もまた日陰者ぢや。あゝ此浮雲はいつ霽れる時があろ、一生霽れず、明い月を見で過ぎるやらも知れぬわ。」
と、判官は數度嗟嘆し、
「兄と呼び弟と呼ぶ、骨肉の親しみも更に甲斐ない便ないものぢや。鎌倉殿が旗擧げすと聞いて、此義經、奧州平泉から夜を日に繼いで馳上り黄瀬川にて初めて鎌倉殿に見參に入つた。其折鎌倉殿は義經の手を執つて嬉し淚をはら〳〵と零され、おう善うも來て給うた、昔八幡殿の御陣に新羅三郎殿が馳せ參られたと同樣であるとの喜。あゝ思へばそれも一時のことであつた。

兄が何で頼りにならう、骨肉同胞亦何で親しみであらう。

判官の感慨は泉の如く滾々として盡きぬ。靜の方にはたと向き直つて、

「此世の中にまことの頼りと思ふは靜、和御前より外にない。義經に取りて和御前は唯一つの頼り、唯一つの寶である。面白うない世の中に、はかない此世に、義經が慰めともなり、樂ともなるはたゞ和御前ばかり。和御前あつての世の中、和御前あつての義經。暗い此世に和御前は唯一つの燈ぢや。冷い寒い浮世に、和御前は唯一つの火ぢや。盲のやうにさまよひ歩く義經の爲に和御前は唯一つの杖ぢや。」

「あれ勿體なうござりまする。」

「まことぢや。天も落ちよ、地も碎けよ、世の中も微塵になれよ。義經の愛は渝ることはない。和御前の心も渝りやるな。」

――仰せまでもござりませぬ。靜の心は大磐石、動きませぬ、碎けませぬ。盡未來渝ることはござりませぬ。緣喜ではござりませねど、例ひ、殿が野に伏し山に伏して、人目を忍び落ちさせ給ふとも、靜は殿の御身に影の如く、附き添ひまする。其時伴にはいやぢやなどと仰せられまするな。」

「頼もしい〳〵、何で厭なとと申さう。」

「あれ嬉しうござりまする。」

と、靜は思はず判官の側に身を寄り添うた。

## 五

判官は浪々と轡となつて、行方定めぬ旅路に迷ひ出でた。攝州尼ケ崎大物の浦を船出して西國へとこそは落ちんとする。

風おとろ〳〵吹き出でて、空には雲飛び、水には波が立騷ぐ。曉の空に葦屋の浦、生田の森を見て淡路の瀨戸にかゝる。左手は繪島、右手は須磨明石、亂雲の間に武庫山、ゆずりはが嶽、鐵拐、鵯越、書寫山隱見して、風は陣一陣と吹き荒んで、雨さへに亂れ打つ。潮は吹雪の如く、大波小波は躍り狂つて、船は一上一下と定まらぬ。虛空に舞ひ上るかと思ふ間もあらせず、奈落の底にはつたとばかり擲げ出される。日一日、播磨灘の波風に揉まれ〳〵て、船中にては、弓矢執つて、刀執つての剛のもの、勇士の面々も生きたる氣はひがない。

夜とともに船は狂瀾怒濤の裡に漂ひ〳〵、半ば碎けて、翌る朝、攝州住吉の浦に流れ着いたのである。判官の西國落は水の泡と消え去つた。船中に附き隨ひたる女どもは、半ば死した[illegible]るが如く、[illegible]に、[illegible]れ果てたるを判官は見て、各々勇士を添へ、[illegible]故郷[illegible]歸した[illegible]判官の側を寸時も離れずあつた。

判官の落行く先は何處ぞ、さして行く方は、みよしのの吉野の山、其吉野の山へ尋ねて來よと、此にて勇士一同に申渡す。

一、伊豆右衛門尉有綱、堀彌太郎景光、武藏坊辨慶の三人は、靜とは從いて來よ。

聞く辨慶、景光、有綱は互に顏と顏、眼と眼を見合せた。辨慶たまらずにじり寄り、

「心得ました、さりながら靜殿は女性の御身。これより先きは野なり山なり、落人の行く手には數多の妨もござるに、女性の御身として、御同行は思ひもよらず、これは他の女性同樣、故里へ御歸しあるが然るべく存じまする。」

と、憚りもなく諫言する。

一妾は何處までも御供申す。よし行く手に妨あらば、其折には棄てさせ給へ、女ながらも一念は凝つて唯一人なりとも御跡を慕ひ參らせう。」

と、靜は辨慶の言を遮る。

「そりや聞き分けのない御言條。殿も殿なら、靜殿も靜殿。落人の身に女性は足手纏ひ。

殿、靜殿は故里へ御歸しなされませ。」
「いや、それは叶はぬ。」
と判官はきつぱりいふ。
「そりや如何やうな御事で。」
「靜は何處までも伴れて行かうと、常日頃よりの約束がある。弓矢八幡、見棄てることは叶はぬ。」
「殿にも似合せ給はぬ御心懸。御運の開かせ給はぬ今日、さやうの契が何の益に立ちませう。やがて御運の開かせ給ふ曉に、御迎あらば、何の違約となりませうぞ。唯の暫しの御別れ。これが殿の御爲、まつた靜殿の御爲にてござりまする。」
「あゝこれ武藏殿。汝も忠義ならば、此奴も忠義。男子と女子に忠義のかけ隔てはござらぬ。もう云うてたもるな。野の末山の中にて伏し死すとも、妾は殿の御側を離れぬぞえ。」
「其御心懸には健氣、辨慶も感じ入りまする、たやかなる靜殿、お前様が故里へお歸りは結局殿への忠義。なまじ、御附き申さうとの忠義立は殿の御爲に爲らない、忠が不忠にもならうほどに、此は分別して、暫し故里へ御歸りなされませ。」
「武藏殿、其諫言は無用。今殿が何と仰せられた、伊豆、堀、武藏殿と靜とは從いて來よと御意なされた。それを臣下の汝が遮ることはござらぬ。妾は殿が仰せなくとも是非に御伴申さうとの氣の、まして殿より仰せがある。武藏殿が身勝手の言條は、妾聞く耳は持たぬ。」
と、靜は柳眉を逆立て、星眼をきツと見開いた。
「殿の仰せは理に背くと云ふもの、それ故此辨慶が諫言申すのにてござる。女子は聞き分けがない。殿、靜殿を故里へ御歸しなされませ。」
と辨慶の辭氣はいよ〱激しい。默然として首を低れてゐた判官はやをら口を開き、
「辨慶の申すこと其理なきにあらねど、靜なうては、此義經三界に身を置く所もない。靜と汝どもは義經の身に添ふ影ぢや。例へ世を擧げて敵となるとも、靜と汝とは義經が唯一の味方である。辨慶此は聞き分けてくれ。義經を憐と思はば、汝どもと同じく靜を身に伴はせてくれ。」
と、手を合はさぬばかりの頼み。斯うなつては辨慶もう手のつけやうがない。いづれにしてもお主のお爲。此上とかう申しては、餘りに情知らず無禮知らずと思はれるであらうと、辨慶は潔くも分別し、
「其儀に仰せあらば、辨慶もふつと申しませぬ。よろしうござりまする。靜殿は何處までも御伴はさせ給へ。某ども身に替へて、お勞はり申しませう。」
「おゝ聞き分けて給うたか。」
「武藏坊、忝ない。」
と、判官と靜とに禮を言はれて、辨慶少しく周章狼狽、
「辨慶も戀や情は存じて居りまする。」
と、あとはから〱と高笑ひ。一座は時ならず笑壺に入つた。
住吉天王寺から路を河内に取つて、當麻越し、一夜を當麻寺に宿る。此寺はその昔藤原豐成の娘中將姫が蓮の絲を以て一丈有餘の大曼陀羅を織り成したと傳へられる處で、今に眞如の月が明らかである。
「御佛に仕へまつつた、姫の心はまことに雄々しいが、それも信仰の心が堅いからで、人里離れた山中に繊弱い女子が恐れず怖れず日を暮し月を過しなされたも、御佛を便りになされたからぢや。義經が三界に身を置く處ない今日此頃でさへ、心に餘裕があるは和御前がゐるからぢや。世は冬であつても、猶春心地が致すは和御前あるからぢや。野の末山の中でも和御前

あらば、義經苦にもならぬ、厭やせぬ。」

と、しんみりとしたこの物語には、今更ながら靜は其頬に熱い嬉し涙の零れるのを禁じ得なんだ。

綾羅錦繍を纏うて、花の晨月の夕には歡樂の宴に侍る身の、今は薄尾花の戰ぐにも心を置く落人となつた。さてこれから先きに我身の運が開くことが又とあらうか。世に時めいた鎌倉殿と仲違ひになつた判官殿の御身の上に再び華が開かうとは殆ど思はれない。其判官殿に連れ添ふ我身の運がどうして開かうぞ。齡はと問へば、まだやう／＼に蕾が開きかゝつた十七である。花も實もこれから先きの其望多い身でありながら、我から好んで此儘に朽ち果てう散り失せうとするは抑も何たる仕業であらうか。

けれども靜には限りない滿足があつた。よしや虎臥す野邊、雲卷く山中に仆れ死すとも、いとしの判官殿と一所ならば、彼には此上ない樂であつた。錦の衣よりも蔦の衣の方が幸福である、金殿玉樓よりは月漏れ時雨音づれるいぶせき小屋の方が遙に滿足である。判官殿と離れ離れに京洛に暖い夢を結ばうよりか、當麻寺の隙漏る風に吹かれる方が嬉しいのであつた。

「苦しい運ぢやなう。」

と、判官は我知らず驚きの聲にて呟く。

「ではござりまするが、御側に侍りますれば、何んの苦しいことも悲しいこともござりませぬ。」

と靜の聲は世にも嬉し氣である。

「ぢやが磯禪師が嘸かし心勞致して居るであらうなう。」

「御側にありと聞きますれば、母も本懷でござりませう。どうせ妾の身は殿に差上げてござります。」

「和御前にさ云はるれば言はれるほど、義經の肩身が狹うて恥かしい。これも皆義經の腑甲斐ないより起りしこと。和御前は固より磯禪師に對しても心苦しいわ。」

「何のいの。これも皆天道樣の御仕業、人の力では叶ひませぬ。やがて目出たう御運の開ける折もござりませう。」

「さあ其運が開けるやら開けぬやら。なすこと致すことは悉く鶍の嘴と喰ひ違ふことばかり。吉野に隱れたとて、又探し出される折もあろ。」

「其やうな氣の弱いことを仰せられまするな。人は七顚び八起きとか申しまするほどに、やがて御運の開ける折をお待ちなされませ。霜や雪の降る冬も過ぐれば一陽來復の春も參りまする。大物浦の船出、當麻寺の一夜を語り合うて笑ふ世もござりませう。」

と、靜に慰められて、判官も思はず微笑み、

「さいなう。驕る平家も亡んだ。鎌倉山の松も一夜の風に折れることもあらうか。義經の世に出る時があらうも知れぬ。」

「さやうにござりまする。其時は嘸嬉しいことでござりませう。」

「其折には和御前に澤山禮を致すぞ。」

「何の御禮に及びませう。御心の渝らせ給はぬが何より。」

「義經の心は、榮枯盛衰に依つて微塵も渝りは致さぬ。」

冬の夜の山寺も此やうな話で、慰めつ慰められつして樂しく過ぎて行く。其折の判官殿の音容は今に靜の心に刻まれて忘れられぬ。

## 六

此もまたつひの住家でなくて、判官主從は吉野の吉水院を落ちた。一夜更闌けて後、辨慶にゆかりある僧の恐る／＼言上するを聞けば、大和の國衙より一山の衆徒に判官の行方を探し出

せとの令が下つた。引捕へるか、手に餘らば首を討ち取つて持參すべし、鎌倉殿よりの恩賞は莫大なりとの沙汰である。とすれば所詮此山には隱れ難い。斯る邊土の山法師原に攻められて、思はぬ恥辱を取るな、見渡す限り山々は雪に閉ざされたるが、行き得るところまでは行き、落ち得るところまでは落ち延びんと、主從は夙みに決心の臍を固めた

さるにも判官が竊に吐胸を衝いたるは靜の一身である。今まで波の上、野の上、山とは云へどさしたる險阻ではなかつたが、之よりは連山波濤の如く、男子にても越ゆるに難い。まして折からの大雪、如何に靜が可愛いとは云へ、連立つことは所詮出來得べくもない。さりとて靜を諭せばとて靜は聞き得べくもあらぬ。如何はせんと、とつおいつ、心緒は亂れて絲のやうであつた。

明くる朝までに判官は遂に決心し得なんだ。雪の山路を辿り〳〵、一二の峠間を過ぎ、三四の峰を超えてやう〳〵一字の御堂の下に出た。靜のかよわい足はとかくに後れ勝である。今は一步も進むことは難いと見て取つたる判官は斷然として心を定めた。

「辨慶々々。」

「はつ。御前に候。」

「此より紀の路まではさま〳〵の難所ありて、容易に超え難いと聞く。ましてや山法師等武士なんぞが行く手を塞ぐこともあらう。此までは靜を伴ひ來たるものの、これより先き、憂目を見するは如何にも不便にてあれば、思ひ切つて、靜を京に送り還さんと思ふが如何であらう。」

「殿の御賢慮はいみじう存じまする。辨慶の諫言を御用ひなく、此まで靜殿を伴ひ給うた御志に對しても、某どもがとやかく申すべきことはござらぬと控へて居りましたるが、唯今殿の御言を承り某どもは祝着に存じます。此山路の難所を、あの女性が如何で越えさせ給ふことが出來ませう。寸時も早う御歸しあらば、靜殿のためにも、又我等一行のためにも便善うござりませう。」

判官は數度打頷いたが、さて靜に京に還れとは中々に言ひ出し難うあつた。

鵯越を馬にて驅け下り、敵の兵船の間に漂へる弓を拾ひ取る勇氣はあつても、靜に別離の申渡をする勇氣はない。

「靜、近う。」

と、聲をかけては見たものの、梨花一枝雨に惱む風情の靜を見ては、判官の胸は塞がる思。

やゝあつて、

「和御前の志、和御前の情は何で忘れよう。いつまでも離れず、付き添ふとの契は義經寸時も忘れは致さぬ。やがて見らるゝ通りの此大雪に、之より行く先きは猪鹿の僅に通ふばかりの小路。宿るべき家もなく、憩ふべき小屋もなき山路を、和御前の足にて行かんことは覺束なうある。殊に此山はその昔、役の行者の開きたる靈所なれば、精進潔齋を旨とし、女人を召具することは叶はぬ掟、若し竊に女人を召具するものあらば、一山荒れに荒れて、寸前暗黑の境になるとか聞く。されば、」

と、云ひかけて、判官の辭は途切れた。

聞く靜ははつたと胸を躍らせた。

つれなくされて別れとならば、別れることもならう。情濃かに言を分けて、暫しの間離れよとの仰せには、魂が塞つて、答ふる辭もない。春の里にて來ん春まで待てよとの判官の辭には、靜は泣くより外はなかつた。

「殿にはまだ御存じはござりませねど、妾は君の御胤を宿しまゐらせて唯ならぬ身になりました。」

と、初めて語る心の秘密には判官もやゝとばかり驚きやら、喜びやら、悲しみやらで、唯靜

の顔を見詰めるのみであつた。
「東には情を知らぬ人鬼も多うござりまする、此身の唯ならぬを知らば、どのやうな憂き目を見するやらも知れませぬ。同じくは東の鬼の手にかゝつて、恥を受くるより、殿の御手にかゝり死にたうござりまする。」
と、静は身を投げ出しての悶え泣き。聞く御伴の人々いづれも袖をぬらさぬものもなく、歔欷泣きに鼻をつまらせる。
斯くてあるべきにあらねば、判官は形見にとて鬢の鏡と初音の鼓とを取り出し、猶黄金数多とらせ、泣く〳〵別れを峯の吉野に告ける。見送り見送り、名残はいつまでも盡きずあつたが、雑色二人に諫められて、茫然たる静はやうやうに足を運んだ。あゝ思へばこれが今生の別れであつたるか。
其雑色に欺かれて、静は唯一人にて吉野の雪の中を彼方にさ迷ひ此方にさ迷ひ、やう〳〵にたどりついたるは藏王堂。
權現の御前に寄り集へる大衆のうちにさるものありて、「是非一法樂の舞一つ興行せられい」と云ふ。憂き我に舞へとは情なやと、静は之を否んだが、そが中に老僧ありて、
「靈驗のいやちこなる神のお前ぢやほどに、丹精凝らして身に知れる藝能致さば、受くる利益は計り難うあるぞ。」
と嚴に云ふ。静心に思ふやう、我は舞の上手、唄の上手なれば、藝能なしと云ふことは得ならぬ。人は欺くべきも、神を欺くこと、神以てならぬ。舞はなさずとも唄歌うて神の御前に心中の苦みを訴へ申さうと、漸くも心に決した。
「拙けれども一節謳ひませうず。」
と、聲揚げて歌うたるはありのすさびの一曲。
「あな美い聲ぢや。女子も美しいが、聲は又なく美い。斯ほど巧みな歌はまだ聞いたことがござらぬ。」
「如何にも美い聲ぢやが、そりや當然でござるわ。」
「何で。」
「ありや都で名高い白拍子、今は源九郎判官伊豫守義經の寵人静であるわ。」
と、見知れる法師が説明する。
「さては音に聞く静であつたるか、さらば其判官も此吉野に隠れてであらう。」
と、衆徒ともは右左より、
「これ汝が静と云ふ判官殿の寵人でござるか。」
「何のいなう、妾は此處に程近い里のもの。其静とやらにてはないわいな。」
「其言お吐きやるか。此處に程近い里のものと。そりや何處の里ぢや。」
「えゝそれは。」
「何處と申さるゝ。」
「あゝ何とやら申した。おうそれ〳〵壺坂のものぢや。」
「壺坂とな。壺坂の何の何某の娘でござる。」
「父は浪々の身の上、申すはちと憚りがござる。」
「はゝゝゝ。それよりは夫は源九郎判官となぜ云はつしやらぬ。」
「其やうなお方は妾は知らぬ。」
「知らぬとはそら〳〵しい。此法師原のうちには、京にて汝を見知れるものがありと申す。お隠しあらば汝の身に一大事があるぞ。」
「世には他人の空似と云ふことがござる。其静とやらに妾が似たとはきつい迷惑。」
「まだ其やうなことを申さるゝか。」
と、一人の法師はつか〳〵と進み寄つて静が襟に手をかけんとする。
「あゝこれ〳〵其やうな手荒なことしやるな。」
と、老僧は之を押止め、

「若しや判官殿が、此吉野に隠れてゐやるならば、吉野のものどもは如何に致してもお隠し申す。此國の國衙から、沙汰があつて、判官殿を探し出せとのことなるが、それは以ての外ぢや。窮鳥懐に入れば獵師も之を殺さず、まして世に武勇の高い判官殿を匿まひこそすれ、探し出して討ち奉るやうなことは吉野の法師ども誓つて致さぬ。某どもは汝がまこと靜でござれば、人をつけて京に事なう送り還しませう。虚言云うて後悔致さるゝな。」

と、事を分けての物語に、靜も、

「許して下され、まこと妾は其靜であるわ。」

「おう、さすれば其判官殿は。」

「あかぬ別れを致して、右左、妾は都へ、殿は山路へ。」

「とすれば十津川の方へか。」

「それは知らぬ。」

「其判官殿の行方を探し出せ。」

「あゝこれ、殿を何と仕る。」

「鎌倉殿からの恩賞があるわ。探し出して引捕へるか、手に餘らば討ち取つて首にするのぢや。」

「さては妾を欺つてか。」

「汝は無事に京に送り還すわ。心配しやんな。」

「あゝこれは情ない。法師の身として、そのやうな惨たらしいことを。」

と、靜は立ち上らんとするを、

「これ危い。靜にしてゐやれ。」

「あゝもし權現樣、夫の君の御身の上を守らせ給へ。」

と、靜は泣きながら合掌禮拜して、そこに倒れた。

＊　＊　＊　＊

過去の夢に耽つた靜は、はつと母なる磯の禪師に驚かされた。

「鎌倉殿の御使者として、あの憎たらしい梶原平三めが參りよつた。どうしようなう。」

## 七

「異なことぢや。病ぢやほどにどうでも逢はぬと云はしやるか。」

體よく拒絶されて、梶原平三景時は氣もむしやむしやと急き込んで、はつたとばかり磯の禪師を睨みつける。

「まこと、今も今とて申す通り、此ほどは風邪の心地で伏し居りまする。ぶしつけではござれど、今日は御戻り下されませ。」

と、禪師の挨拶も木で鼻くゝつたやう。此奴梶原奴と判官殿とは大の仲惡との氣がひしと胸に讀み込んでゐるから、從つて、顏容言葉の上にも、それとなく現はれる。

「それに致せ、千葉平次には逢うたとやら。千葉に逢つたもの、此梶原に逢はぬといふことはござるまい、さらば安達に逢はれまい。」

と、梶原は執念くつきまとふ。

「安達殿は不在ぢやほどに、逢ふよすがもござるまい。」

梶原來れりと聞いて、事難かしと見たる安達は夙うに身を避けて、館にはゐぬ。

「何、新三は不在とな、さらばよし〳〵案内に及ばぬ。某直に推參な致さう。」

と、梶原は立ちかゝらうとする。

「あゝこれ〳〵慮外めさるな。小やかなれど、靜に取りては余が嫁御、許しなうて踏み入ることは叶ひませぬ。」

と、禪師は優しい中にも風霜の氣を帶びる。

「何の小癪な。とめるな、そこ退いた。」

「いやなりませぬ。」

と、禪師は手を廣げて行手を遮る。

「鎌倉殿の御使に參つた某、其某に無禮を致さば容赦はならぬ。」

「これは梶原殿にも不似合の働き。」

と、禪師は容を改める。

「何が不似合と申す。「噂に聞き申せば、梶原殿は鎌倉殿の御内で智慧第一とのお人。其お人が鎌倉殿を笠に着て理不盡にも女子の居間へ案内もなう踏み入らうとは、どうやら智慧の鏡が曇つたげにござりまするなう。」

「何ぢや、此梶原の智慧の鏡が曇つたとな、そりやどうしてぢや。」

と、梶原又そこへどつかと坐る。

「情も理も善う知りぬいてござる梶原殿、其梶原殿としては、あまりに無遠慮な。女子でござれ、靜も日本一と名を取つた白拍子。病みほうけ顔は此方に見せたうはござりませぬ。又鎌倉殿の御使とあらば、其使命をお果しなさるが、専一ではござりませぬか。否ぢやと申すにお入りなさらば鎌倉殿の御使命を失敗るは定。此やうなことは氣が永うなうてはなりませぬ。梶原殿とも云はるゝお人がお氣がつかれぬとは笑止でござりまするの。」

と、云はれて、

「むう。」

とばかり行き詰つたが、そこは海山千年の古狸、其手に乘つて、あいと引き退る梶原にはあらず、

「此梶原は鎌倉殿の命を受けた使人、[illegible]人と[illegible]恩人には逢うて[illegible]ぐらる云ふのが當然ではござらぬか。」

「病みほうけた靜がお逢ひ申すは御無禮にござりまする。」

「何のそのやうな容赦が入らう。母御、とにかく此由を通じて下され。」

「娘とは申せ、氣隨氣儘の靜、何で此妾の言を聞きませう。いやとならば梃でも棒でも動きませぬ。無理にと申さば、冠が曲るばかり。」

「そりや身勝手と申すもの。天が下のものは鎌倉殿の仰せに背くこと叶はぬ。まして鎌倉に參つたる身の、身勝手はならぬとお傳へ下され。」

「そりや無理ぢや、理不盡ぢや。磯禪師は其やうなこと傳へ申すこと出來ませぬ。」

「えゝ、剛情な。よし／＼さらば梶原は逢はうとは云はぬ。此由還つて殿に申すであらう。後悔めさるな。」

と、梶原は捨臺詞とともに立ち上らんとする。流石に禪師も女子である。梶原怒らせて、鎌倉殿に讒訴されては一大事であると、氣も心も轉動して、

「梶原殿ちとお待ちなされませ。」

「何ぢや、歸らうとする某を引止めて何となされる。」

「今日はお逢ひ申すこと叶ひませねど、追つつけ病も直りませうほどに其折はゆるりと逢うて下されませ。」

「何の、病にもあらぬ身が、いつ來ようとて逢はぬは定ぢや。逢はぬと云ふものに逢ひはせぬ。今に辛い目見せてくれるわ。」

と、梶原は憎々しげに云ひ放つ。一期の浮沈と磯禪師は胸轟かし、

「ちとお待ちなされませ、靜に此由申通ずるでござりませう。」

「何ぢや、此由一應申通ずるとな。それならばそのやうになぜ初めからは申さぬ。剛情な嫗ぢや。さあ早うさつさと此由申通じて逢へとお傳へなされ。」

「あい。」

と、禪師は心ならずも奧に入つて、此由靜に通じたが、いやぢや／＼と靜は頭を振つて、さうなくは聽き入れぬ。

「降つて湧いたる難儀、逢ふだけ逢うて一先づ此場を切り拔けて。」

「其梶原と云ふ奴は見るもいや、口利くもいや。」

其いやは妾も同様なれど、彼奴を怒らせては、どのやうなこと仕出來さうも知れぬ。體よく言うて歸して給はれ。」

と、禪師は泣かぬばかり。老いたる母に心配さするも氣の毒と、靜はやうやくに不承不承、

「そんなら唯逢ふとだけ云うて下され。」

「おうお逢ひやるとな。善う云うて給うた。」

と、禪師はあたふたと表に罷り出る。やゝあつて、大殿に入り來つたは梶原平三、

「靜殿病氣とな。どうぢや、ちと快うござるか。」

と、問へど、靜は返事もない。

「留守か。いやゐやる〳〵。どうなされた。」

靜は一寸會釋したまゝで無言の行。

「どのやうな病ぢや。」

こゝとばかり、靜は白魚のやうな指で咽喉のあたりを指す。

「はゝあ、咽喉が痛みやるか。解せた、それで物を仰せられぬな。」

と、云へば、靜は一つ二つ合點する。

「どうぢや、靜殿、鎌倉殿の仰せでござる。和御前の舞が見たいとの御所望ぢやほどに、病氣の癒り次第、殿の御前で一つ舞うて給はれ。氣色如何にと伺へば、靜は首を左右に掉つて、應じようともせぬ。

「枉げてぢや。此梶原に面じて、頼みぢやほどに聽いて給はれ。

いやぢやとばかり又首を掉る。

「なぜいやぢや。」

答はなくて、又首が左右に動く。

「はゝゝゝ、まるで人形の坊ぢや。此梶原は和御前のために命乞した恩人。其恩人がこれほど達ての頼みを聽き入れぬとな。鎌倉殿の仰せに背き、又恩人を蔑にする。其やうな氣ならばよし〳〵、梶原は又とから申さぬ。勝手にしやれ。啞の眞似しようとて、欺かれはせぬわ。」

と、いきまいたが、靜は唯にやりと一笑をくれたばかり、何等の辯解をも試みぬ。

斯うなつては梶原も手持無沙汰である。辯舌にかけては、鎌倉殿の御内にすぐれた彼も相手が面壁九年の女達磨を氣取つては手のつけやうもない。勝手に喋舌つて、勝手に嚇して見たり、撫でて見たり、上げたり下げたりして見ても張合のないこと夥しい。

靜は又端然として身動き一つだにせぬ。唯口元に嘲りの笑を浮べ、冷かに梶原の面を見つめて、此老狢がと云はんばかり。

散々にほざいた擧句、根氣負けして、梶原はえいやらやつと腰を上げた。

「人形の坊殿、もうおさらばぢや。善う喋舌らせて、善う默つてござつた。手剛い女子ぢや。こりや一筋繩には往かぬわ。」

と、梶原は、忌々しげに其座敷をすべり出た。

あとに靜は淋しい笑。

「善う喋舌くる爺ぢや。どうせ仇敵の善う云はぬは知れたこと。鎌倉殿が何で恐かろ、梶原が何で恐ろしかろ。」

## 八

「御臺樣、殿の御召にてござりまする。」

と、恭しく手をついて侍女が申上げる。

「殿の御召とな。」

と、御臺所は冷かな笑を其頰に浮べられた。此笑はまことに冷かであつた。此冷かなるは千言萬語にもまさつてゐる、極めて意味深長である。御臺所の性格と意志とを善く表明してゐる。

此笑はそれ見たかと云ふ笑である。御臺所は當然此結果を豫期したのである。苦しい時の神頼み、鎌倉殿が賴む神は山の神であつた。

表の方では、
「臺々。」
と呼ぶ聲が頻である。落着き拂つた、思慮の長けてゐる鎌倉殿が思慮に餘ると、いつでも此「臺々」が連發される。御臺所は之に馴れてはゐるものの、多く其相談するものは其折初めて耳に入る事柄であつた。然るに唯今の「臺々」は御臺所が善う知りぬいたことで、いづれ此やうな相談にならうとは知れてゐたのである。まして御臺所から言ふと、之は鎌倉殿が自ら招いた難儀と云はねばならぬ。此やうな破目に陷つたのも、殿の好色心がなせる業。今更御臺所の智慧貸してとは云はれぬ義理なれど、其好色心の光を潜つて、舞の所望を御臺所が致したのである。よしや舞の所望は御臺所が致したにしろ、其使者に人もあらうに、千葉平次、梶原平三とは何事ぞ。使命を辱めて、鎌倉殿の威光を損ふは、火を睹るよりも明かである。今の「臺々」は云はずと知れた其善後策であらう。御臺所は可笑しいやら腹立しいやらで、それ見たことかと冷かな笑を浮べたのであつた。

此であいと素直に返事をして夫の君の許へ出かけるならば、まことに無事太平であるが、後世の尼將軍平政子はさう安くは往かぬ。鎌倉殿の活殺擒縱を自由自在にする御臺所であるから、固より胸に一物がある。此一物のために、おいそれと御輿は急に上らぬ。

「六浦。」
と、侍女の名を呼んで、
「唯今髮を掻いてから參りまするど、とう殿に申上げや。」
「はい、畏まりました。」
と、侍女は殿の許へ急ぎ足。やゝあつて、六浦は立戻つて、
「殿の仰せには火急の用ぢや、髮などはあとに致されよとのことにござりまする。」
「いたう火急の御用なら。」
と、莞爾ともせず、
「六浦、髮をすきや。」
「はい。」
と、六浦は御背に廻つたが、どうやら濟まぬ顏。
「これ早うせや、殿の火急の御用ぢやほどに。」
「それでも御髮なすきまするうちには時も經ちませう。殿がお待ち兼ねでござりませう。」
「其御用は知れてゐる。直でなうてもよいわ。」
と、御臺所は泰然として動かざること山の如しである。

「臺々。」
の聲が又遠くで聞える。
「あれあのやうに召しまする。」
と、六浦の櫛持つ手が留守になる。
「心配しやんな。それより早う掻きや。」
鎌倉殿はたまり兼ねてか、御臺所の御部屋に自らの出向。
「これ臺、如何致し居る、髮なんど後に致せばよいに。」
「おう殿にはわざ／＼のお出で。無禮致して居りまする、御容赦。」
「ちと汝に内談があつて、火急に汝を召したのぢや。」
と、侍女が据ゑる席にどつかと腰を下す。御臺所は平然として髮を掻いてゐる。
「唯今梶原が戻りよつた。」
「便善う參りましたか。」
「何の、頑な女子ぢや。予が命を蔑に致した。」
「さやうな儀で。」
「不埒な女子なう。」
「でも殿は其不埒な女子がいたう戀しうて。」
鎌倉殿はたじろいだ。それでもよもやと、高を括つて、

「何の、そのやうなことがある。舞の所望は汝ぢや。」
「いかにも舞の所望は妾にてござります。ぢやが戀をなされたは殿で。」
「何であのやうな女子を戀はう。彼は義經の寵者ぢや。」
「其の現在の弟御の寵者を殿が戀しがらせらるゝので。」
「戲言云やるな。」
「何の戲言でござりませう。梶原には何をお賴みなされましたなう。」
　射向きの矢はぐさと鎌倉殿の實善き鎧を裏へ通れとばかり射通した。鎌倉殿はもう一言半句もない。
　征夷大將軍右大將　源　賴朝も、御臺所にかけては、時より赤子同然の取扱を受けることがある。鎌倉殿に取りて、御臺所は暗劍殺である。手證を取られて、殿が眼を白黑なされたことは二度ならず、三度ならず。此度こそ固より氣取られまいと思つたるは空賴みで、苦もなく其腕を捻ぢ上げられた。何を白癡め、うそつくな、と一言に壓伏したらよささうなものだが、鎌倉殿にはそれが叶はぬ。言ひ消さうなどとつとめたならば、それこそ最後、足を捻ぢられる、首を捻ぢられる。二進も三進も動けなくなつて、ぎうの音も出ぬやうに取つちめられるは、鏡を懸けて見るが如きものである。遺憾ながら鎌倉殿は此苦い經驗を度々してゐる。
　それでも此苦境から如何にして助からうかと、鎌倉殿は煩悶した。此やうな苦境に陷るならば、何も御臺所を火急に呼ぶではなかつた。ましてわざ／＼此屋へ來るではなかつたと、今更殿は後悔頻である。如何にすれば、女ごことし云へば、斯ういつもいつも御臺所に挫かれるのであらうかと、我ながら運命の甲斐なきに愛想をつかす。
　鎌倉殿が茫然として無言の間に、御臺所の御鬮は掻き調へられた。きまりの惡きを感じた六浦はそとすべり退る。あとは殿と御臺所との對座。殿は殊に面羞さを感ずる。
「いたう無禮仕りました。」
と、御臺所は[illegible]への會釋。さて正面に殿の御鬮を見上げる。鎌倉殿も何とか言はねばならぬ。
「はゝゝゝゝ。」
と、時ならぬ高笑ひ。自分ながら自分の耳に異樣に響いた。
「やくたいもない。」
　いつもの傳で打消さうとするのである。其揚句が常に動きのつかぬ斷末魔になることは百も千も承知はしてゐるものの、今の際では之より外に血路がない。
「靜が御使命に從はぬも尤もにござります。」
と、御臺所の寸法はさつさと進む。言ひわけだの、打消しだのは、御臺所寸毫も取り上げぬ。
「予の使命と申すは、舞の所望ぢや。その使命が何と致して。」
「殿の御心が汚れて居りまする。靜は夙ら知りぬいて居りませう。されば舞までもいやと申すは定にてござりまする。」
「予の心は青天白日ぢや。」
と、殿はまだ打消さうとつとめる。
「およし遊ばせ。男らしうもござりませぬ。」
鎌倉殿は是に至りて、御臺所の鎧袖一觸にも價せぬ。
「誰かのさかしら言であろ。」
「まだそのやうなこと仰せられまするか。梶原の白狀致したのに何の間違ひがござりませう。」
　嗚呼々々、腹心の梶原は既に御臺所藥籠中の

ものであつたるかと、鎌倉殿は、殆ど氣死せんばかりである。

いゝ氣味と、思ふ心を色にも現はさずに、御臺所は、

「其梶原や、千葉を御使者と致して、何で靜が畏つて候と申しませう。殿にも不似合な。」

と、莞爾笑ふ。殿はほつと一息ついて、

「さらば汝よしなに思案仕つて給もれ。鎌倉の武威に關はるわ。」

「女子は女子同士。靜の心は此妾善う存じて居りまする。善い手段がござりまする。」

「おゝ善い手段があるとな、そりや耳寄りな。よしなに賴うだぞ。」

と、善い潮に、殿は立ちかゝらうとする。

「まだ御歸りなさらぬとても、善うはござりませぬか。」

「ちと火急の用ばしござる。」

と、殿は掻き消す如くすべり出た。

## 九

女子は女子同士、剛克く柔を制せずんば、柔を以て柔を制しようと、御臺所の胸中には既に成竹があつた。

情の剛い靜が、何で千葉平次や梶原平三の言ふことを聽き入れよう。鎌倉殿の御內にて此使者に立つものありとすれば、工藤左衛門祐經もある、畠山次郎重忠もあるが、あゝすねさせた興何では祐經も重忠も何で其功を收めよう。此處はどうしても、然るべき賢い女子に旨を含せて、其同情に訴へるより外にないと、御臺所はことくも心に點頭いた。

あれやこれやと物色して、御臺所の選に入つたのは、工藤左衛門祐經の妻女。曾ては都にも住居したことありて、靜の話相手にはまことに恰好な女子、利發で、愛嬌あつて、人をそらさぬ所がある。これならばと、御臺所は見事仕れと、此使命を授けた。

「高が白拍子風情、引き出いて、舞はせることも難うはあるまいが、威光沙汰にては面白うもない、此處は善うとつくりと、合點の往くやう話して、舞はせて給もれ。」

「重い御使命。善う參るか、參りませぬかは存じませねど、是非に說きつけるやう致しませうず。」

「梶原なども失敗つたことぢや、汝が仕つたならば、御內人なんどより遙にすぐれた功者であるわ。」

「ほゝゝゝゝ、辱なうござりまする。」

と、工藤の妻女は其儘に退出した。

「何と、奧様、今の仰せとな。事容易きに似て、容易うはあるまいに。汝に善い分別がござるか。」

と、工藤は妻女の顏をのぞき込む。

「まだ善い分別もつきませぬ。」

「白拍子あがりとは申せ、判官殿第一の寵者、顏に似合はぬ膽力がある、度胸がある。殊に鎌倉殿を仇敵に思ふて居る。判官殿戀しく慕しく、命をも參らせんずる女子であれば、たやすう聞き入れぬは定ぢや。」

「さやうにござりませう。」

「よい智惠貸そか。」

「お貸し下されませ。」

「欺るのぢや。」

「何として。」

「どうせ云ふこと聽き入れぬ女子。欺つて、八幡宮の參詣と託け、否應云はせず舞殿まで連れ出すのぢや。其折、殿にも御臺所にも御參向あつて、舞へとの御下命あらば、如何に靜でも否むことはあるまい。」

「心得ました。」

「して其欺るに、汝はどのやうな話をしやるぞ。」

「判官殿の御運開かせ給はんため、切に神に御

祈念あれかしと申しまする。」
「出來した。それよからう。梶原と云ひ、千葉と云ひ、鎌倉殿の仰せに背くことならぬなぞと申したるが、てんで誤りと申すもの。戀しい判官殿のためとならば、靜も喜うで參詣もする、舞もする。智慧梶原などにも案外智慧のない骨頂ぢや。」
「流石に、お前樣は苦勞人、善う御存じで入らせられまする。」
「はゝゝゝゝ、汝のやうな賢い女子を妻に致し居るから、某も何かと承知致して居るわ。」
「それは妾から申すことでござりませう。」
「ぢやが靜と申すは流石に判官殿がお目をかけさせられた女子ぢや。操正しい天晴れの貞女、末代までの龜鑑であるなう。」
「鎌倉に女子は多うはござりまするが、あのやうな情の深い女子はござりますまい。」
「さいなう、否鎌倉ばかりぢやない、此日の本に又と二人はあるまい。」
「判官殿もお仕合せや。」
「如何にも判官殿は天に跼まり地に蹐する御境遇なれど、そのやうな女子が戀ひ慕うてゐるは、男の冥利と申すもの。靜は判官殿に取りて此上ない寶ぢや。高位高官、又は數多の領地にも替へられぬ寶である。男冥利と致しては、誰しも及ぶものはござるまい。」
「して見ると、お前樣などはお氣の毒でござりまする。」
と、妻女はちと氣を惡うした樣子。
「何の〳〵、祐經も果報者ぢや。汝と云ふ發明な女子を妻と致し居る。鎌倉にも女子は多けれど、此度のやうな使命は誰も仰せつけられぬ。汝を人選なされた臺樣は流石に見上げた者。此間も御內人が雨夜の徒然話にさう申した、工藤殿は男冥利の隨一ぢやと。すると某が愚で、汝が賢いやうに聞えるが、內心は某大滿足でござつた。某に取りて、汝を靜に替へることとはならぬ。靜は判官殿の寶、汝は祐經の寶と申すもの。」
と、祐經の脂下ることは夥しい。斯うなれば、天下太平、家內安全で、鎌倉殿と御臺所との關係に比べると、其樂しみ蓋し融々たるものがある。
ほめられると、口にはさうでもござりますまいと云ふものの、決して惡い心持にはあらず。妻女も俄に往く張合が一層つく。
「さらば往て參じませうか。」
「苦勞なう。ぢやが見事仕らでは臺樣の御目鏡に違ふぞ。あの臺樣は知つての通り古今の才女ぢや。人の腹の中をも見事御見拔きなされる。うつかり事を仕損じては、汝ばかりか、此祐經まで後日の憂があるぞ。」
「まことになう。易い樣で難うござりまする。男の智慧者と云はれる梶原殿さへ善う致さなんだ使命を仕る妾は中々に大事の役目にござりまする。」
「ぢやがなう、梶原の失敗つたはありや當然ぢや。」
「判官殿と大の仲惡の梶原を又どうしてお使となされたのでござりませう。」
「ありや臺樣の知らぬこと。殿から特に仰せつけられたのぢや。どうやらそれには魂膽があつたげぢやが、そのやうな詮索は入らぬこと。」
祐經はしばし打案じてゐたが、
「某もとも〴〵汝と安達の館へ罷り越さう。」
「そりや如何してでござりまする。」
「汝は先づ先へ罷り越し、某はしばし程經て參り、汝の吉左右を其隣の間にて待たうず。事首尾善う參れば結構、事絕しと見れば、某は利害を說いて靜を說き伏せうぞ。」
「そりや辱なうござりまする。お前樣がお出で下されば、百萬の味方を得たよりも心強う

ございまする。」
と、工藤左衞門は手筈を定めて、安達の館におのおの向つた。
　渺たる靜の舞は、鎌倉の浮沈と云ふと大袈裟ではあるが、鎌倉殿の威嚴に關する問題であつた。鎌倉殿は今更に斯やうな所望を致したのを後悔される。
「舞など見て何にならう。それよりは靜を近づけて、身が義經の在處を糺問致したい。臺も臺ぢや、舞が見たいと所望致した。其ために使者をやれば二人とも見事失敗つて戻つた。斯うなつては是が非でも舞はさねば身の權威を蔑に致すと云ふもの。臺が云ふに任せたものの懸念な。平三は居らぬか。」
と、殿は梶原を召させらる。
「舞はさせることさへ得せぬに、身が近づけて糺問な思ひよらぬ。平三、汝は如何思やるか。」
　殿の好色心は依然として已まぬ。さん〴〵に御臺所に油を絞られた擧句、使命を失敗つた梶原はもう此上に油を注ぎ薪を添ふる勇氣がない。人の肺腑までも觀破する御臺所に睨まれては、梶原の浮沈である。流石の平三もちとうんざりの氣味である。
「臺様が工藤の妻女に旨をお申含めなされたとやら申しまする。女子なれども工藤の妻女、利發者でござれば、屹と首尾善う仕るでござりませう。」
「そりや舞のことぢや、頼朝の思ふ所ではない。」
「舞うての上にござりまする。」
「舞うての上は汝善う仕るか。」
「それは平三の手には叶ひませぬ。殿が直々に。」
「身一人ではちと懸念な。」
「ではござりまするが、殿は其やうなことにかけての御達人と承はりまする。」
「白癡め、何を申す、相手が違ふぞ。」
「天下の征夷大將軍には草も木も靡きまする。御威光に從はぬものはござりますまい。」
「所が此度は其威光が薄うある。」
「いたう御氣弱で。」
「冷かし申すな。」
「汝の智慧もちと行き窮りの氣味なう。」
「臺様に逢うては平三の智慧も熱湯の雪でござりまする。」
　臺様の一句が出ると、鎌倉殿も言下に低首れる。
「ふう。」と、太息して、「汝もいたうさいなまれたとやら。身も口がさゝれたわい。」
「其のことは御懸念なされますな。」
「えゝ、何と申す。」
「臺様に見抜かれましては、もう手も足も出るところがござりませぬ。」
「氣弱な平三なう。」
「お許し下されませ。」
「汝迄に見放されては、頼朝施すべき手術がない。」
「全くにござりまする。」
「惡い臺、いや靜ぢや、どうしてくれよう。」
お殺しなされませと云ひたかつたが、御臺所に戒められた言葉がある。「汝は殺さうとするが、妾は活す。」の一句は警鐘の如く、梶原の胸に鳴り響いた。
　鎌倉殿も斷念せねばならず、梶原平三景時も斷念せねばならぬ。唯一つ殘る問題は舞の所望である。
　折から工藤左衞門尉の妻女は其使命を果して、いそ〳〵と參殿した。
「舞の御所望叶ひました。」

＋

朧に霞む春の夜の、月にも顔を見せまじと、

忍び來に、由井ヶ濱邊の、とある柳の門をそと音なふものがあつた。よしある人とは見えたが、伴人とては二人ばかり、音なふ聲も忍びやかに、

「案内賴む。」

紙燭片手に出で迎へたる侍女は恭しく、

「お待ち兼ねにござりまする。さあお上り遊ばせ。」

其紙燭の光に照らされた面は擬ふ方もない鎌倉殿であつた。

「忍ぶ戀路ぢや。いたうはかないものではある。」

と、微笑みながら、するりと、廊下のあなたに消えた。

前栽を超えた彼方には波がざざんざの聲を揚げる。爐には沸々たる湯のたぎる音がする。靜にするりと襖が開いて、そこに女のけはひがした。

「善う御越しなされました。」

と、尋常に手をつかへる。

「お若君は如何致いた。して汝の日立ちはようおた。」

「早う御覽なされて下されまし。」

女のあとに續き從ひたる侍女が幼兒を女に手渡しすると、女は燈の下にゐざり寄りて、すやすやと眠る幼兒を鎌倉殿の御前に披露に及ぶ。

「善う肥り居る。」

「殿にいたう似參らせて。」

「さやうにあらうか。」

「瓜二つにてござりまする。」

「はゝゝゝ、ぢやが可愛ものなう。」

と、鎌倉殿は悦喜斜ならず。

此女子は常陸介藤時長の女であるが、鎌倉殿の御殿に祗候してゐた間に、好色心の殿が早くも情をおかけなされた。隱すより早う懷胎となつて、長門江七景遠が濱邊の宅を産所として、此にて安々と産んだのが此若君である。殿は内聞にとあらゆる手段を盡されたが、早耳張目の御臺所に何で隱し果されよう。

「あゝ又しても殿の好色心、好む心休む折とてはあらぬ。又あの女子の人でなしめ、如何に主の命なればとて、此妾を出し拔いて、密事たれど拔けとは謀られた。其兒諸共鎌倉を追拂へて、憂目を見せて遣はせ。」

と、嚴重な命令が下つた、

「恐れながら申上げまする。其女子はともかく、和子は正しく殿の御胤にござりますれば、手痛く取扱ふことは叶ひませぬ。再應の御賢慮を、」

と、申上げたものがある。殿の御胤との一言には流石に御臺所も追放とは云ひ兼ねる。

「さらば追つつけ沙汰致さう。」

と、其儘沙汰止みとなつたが、御臺所の憤怒の火の手は中々以て燼えぬ。否燼えぬばかりか、今に見よと、凄じく閃いた。

女にも逢ひたく、和子をも見たく、鎌倉殿は、とつおいつ其首尾を考へてゐたが、そのうちに靜の一件が起つて、戀の炎は此方に向いて常陸介の女のことは暫し途絶いた。

けれども折角の靜の一件も御臺所に觀破されて、どうやら、これは烟になりさうな。すると忘れてゐた常陸介の女のことが心に浮ぶ。今宵は御臺所が南御堂に參籠のありたるを幸ひ、そと御殿を脱け出して長門景遠の濱邊の宅を音なうたのである。

一足先に心利きたる郎黨に案内して置いたから、常陸介の女は産後の窶れ姿に薄化粧して、好色心の殿には常よりも艶と見えた。若宮を臥床に歸してからは、殿と女との差向ひ、殿も久し振での打寛ぎで御臺所の傍とは違つて、居心地が頗る善い。

持運ばれた銚子の酒を女の手から酌いで二つ三つ過す。一體に餘り呑けぬ方の殿とて、はや醉心地の、心も顔も春風春水一時に來たやらである。
「一つ過しては。」
と、殿は盃を女にすゝめる。
「呑けませぬ身の、まして産後の。」
「おうさうであつたなう。」
「御臺樣には何か御意はございませぬか。」
と、女は愁眉を顰めた。
「夙うに氣取り居るわ。若の誕生までも善う知り居る。」
「定めて御怒で。」
「ほう、氣に致すな。」
「ではございますれど、龜の前樣の御事もございますれば。」
と、女の懸念はいよ／＼加はる。
「悋氣は臺の持前ぢや。おやがそれを氣に致しては此身が保てぬわ。」
と、醉が云はする氣焔ではあるが、生醉本性違はず全く以て鎌倉殿が其悋氣に懲りずまの性惡は一度や二度のことではない。
「龜の前樣の御事を思ひ浮べまするると、私などは針の席にございまする。」
「其やうな懸念致すなと申すに。」
「ではございますれど、龜の前樣がお出でなされた伏見冠者殿の館は無殘にも破壞されまする、冠者殿は遠江國に配流になりまする。御臺樣の御怒は思うても恐うございまする。」
「言ふなと申すに。將軍と臺とがどちらがえらいと思ひやるか。」
「そりや將軍樣は將軍樣。御臺樣は其お配偶にございまする。」
「將軍の予が申すのぢや。臺を恐るゝには及ばぬ。」
「ぢやと申して。」
「それが如何致した。」
「ではございまするが女子の腑甲斐なう。」
「遠慮に過ぎる。氣を大きう持ちや。」
「唯御袖におすがり申しまする。」
と、女は身を灯影に背けて、流盻に殿を見た。
此女子はさしたる眉目美しい者ではなかつた。もし御臺所と較べたならば、どうしても御臺所と侍女だけの相違はある。第一に氣品が乏しい。それで婀娜つぽいところ色つぽいところがあるかと云ふと、さしたる風情もない。云はば野花一枝。生のところが賞玩すべき取得であらう。
鎌倉殿は此野花一枝を珍しと見たのである。しかし浩々たる春の夜に小酒盛して目隈すると、[illegible]ことが念頭に浮ばずには居られぬ。[illegible]は[illegible]を垣間見たには過ぎないが、此女と比較すると、[illegible]公卿ぐらゐの相違である。殿の情人として、常陸介の女は[illegible]に劣らせられるに過ぎぬ。東夷と蔑まされる鎌倉にも此様な女子は掃くほどある。鎌倉殿の御内人の妻女女子には、此女子より美しいのが幾ら知れぬほどある。此女子を寵者とした鎌倉殿は、寧ろ物数寄との世評を甘受せねばなるまい。
それに引換へて靜は東夷の鎌倉初め關八州には固より、鴨川の水で洗つて東山の霞を衣にかけた京女にも其比類がない。天下一品との評は決して懸値ではない。其天下一品の女子と春の夜秋の夕に小酒盛して、譬諭や口說に夜を更した判官義經は、思へば／＼果報者である。常陸介の女を憎からずは思ふものの、靜を見た眼には月前の螢、鎌倉殿は嗟嘆せざるを得ない。
「汝が其やうに懸念を致すがため、予も心が浮き立たぬわ。」

「お許し下されませ。ではござりまするが、始終中これぱかりが氣になりて、夜々も落々寢つかれませぬ。」

「もう其話はよせ〳〵。何か面白い話でも致せ。」

「其面白いお話は殿の方にござりませう。」

「臺に窮命される予に何で面白いことがあらう。」

「そりやそのやうにお言の下から御臺様を御恐がり遊ばしまする。將軍家の殿様さへお恐がり遊ばす御臺様を私が恐がりまするは尤にてござりませぬか。」

「あゝ又臺の話か。其やうな話を聞かうとて、予は此へわざ〳〵忍び參りは致さぬ。」

と、殿は思はず憤然とする。常陸介の女は悄然として、

「御免下されませ、もう申しませぬ。御機嫌直しに酒を今一つ。」

と、銚子を取る。

「もう欲しうはない。」

「あれどうしてでござりまする。」

「あゝ、九郎は日本一の果報者ぢや。」

「えつ、何と仰せられまする。」

「何、此方のことぢや。」

言葉はふつりと切れて、暫し默然として對座する。

前栽の垣根の所に悄然として佇むものがあつた。一つの黒い影の確に人とは見えたが、丈拔群の、痩せよろぼひたる、俗にはあらで、老法師らしい姿であつた。

## 十一

「あれ。」

と、廊下にけたゝましい女の聲。

其聲におびえて、銚子を手にした常陸介の女は思はず身慄ひして、鎌倉殿の御側にすり寄つた。

「あゝ恐しや。」

「何ぢや、あの氣疎い聲は。」

「何でござりませうず。侍女の聲と覺えまするが。」

「さては變事出來致したるか。」

と、鎌倉殿はすつくと立つた。左の手には太刀提げて、

「紙燭持て、案内致せ。」

とばかり、ひらりと殿は廊下に出た。

紙燭が廊下に光を投げる。其光の裡に黒い影が二つ見える。

「あれは。」

と、殿は訝る。

「やあ、侍女どもにござりまする。」

「まことぢや。紙燭投げ出いて、銚子を棄てて、打わなゝいて居るわ。」

「これ如何しやつた。」

と、主なる常陸介の女に聲かけられて、

「あゝこれは。お助け下されまし。」

「如何致してぢや。」

「黒法師が出よりました。」

「えつ。」

と、常陸介の女は腰拔かさんばかりの驚き。

「何ぢや。其黒法師は。」

と、訝る鎌倉殿に耳をも假さず、

「あゝこれは如何致さうず。黒法師が音づれしとな。前おさ、卒ないことぢや。」

と、常陸介の女は狂はんばかりに打嘆く。

「そ、その黒法師とは如何な化生のものぢや。語れ。」

と、殿は廊下の眞中に太刀突いて、突ッ立つ。

雲の往來激しく、月は光を隱して、外の方は漠々として黒い。

「殿様此に物語は致しけにござりまする。」

あれにお戻り下されまし、其化生のものゝ御物語を仕りませうず。」

「何此にては語られぬとな。さらば彼方に參れ、聞かう。」

と、殿は先に立つて、もとの居間へと戻る。廊下に腰打拔かした侍女を從へて、常陸介の女はこれについていた。

「其黑法師を汝達は見たと申すか。」

と、殿は侍女を顧る。

「御意に御座ります。あの御廊下の中程まで參りまするよ、暗の中から黑い影がすうと廊下の眞中へ立ちました。痩せよろぼひたる法師の、えゝ思ひ出いても恐しや。その法師が、にやりと笑ひましたで、つい紙燭も何も投け出いて、思はず聲を出しました。」

「何、何と申す、怪體の法師が汝達を嚇したとな。奇怪至極な。まだ此館のいづかたにか潛むであらう。探し出して引捕へ糺問致せ。やあ誰かある。」

と、供人を呼び立てんとするを、常陸介の女は遮りて、

「其法師は館の裡には居りませぬでござりませう。」

「館の中に潛み居らぬと申すか。それを如何にして汝が知るぞ。」

「殿樣には、此頃鎌倉に取沙汰の喧しい法師のことをまだ御存じではござりませぬか。」

異んだ殿を女は異んで尋ねる。聞く殿は又異まずには居られぬ。

「其法師の沙汰が喧しいとな。予はつゆ知らぬ。語れ、聞かう。」

聞かれて、常陸介の女の語るところは斯うであつた。

去年十二月の末つ頃であつた、甘繩邊の土民で所司二郎と云ふものが、一夜外の方より己が名を呼ばれて、戸を開けると、其儘一語もない。はて面妖と家人が紙燭つけて之を見れば、二郎は息絶えて、早此世の者でない。又若宮別當坊のさる僧が夜行したるに、路次にて大法師と出會ひ頭にしつかと抱き留められたと思ふ間もあらせず、其處に往生したが、姑くあつて又蘇生したと云ふことである。其怪しの法師は夜な夜な鎌倉のあなた此方に出沒して、影の如く幻の如く人を惱めると云ふことである。侍女の見たと云ふ法師も恐らくは其法師であらう。さるにても無事であつたは神佛の御加護であらうと云ふのが其結論であつた。

「むう、魔物であらうがな。魔物とあらば、引捕へることは難いが、棄て置いては予の威光を輕めるにも當る。早々に沙汰致して、其風說の根を絶たくれう。」

奥の方にて、若君が物に魘はれてか、わッとばかり、異樣な泣聲を揚ける。

「あれ若君か。」

と、常陸介の女は躍り上る。

「おうおびえるよな。」

と、殿も立ち上る。

「若しやあの法師が。」

と、侍女は身を縮めた。

「予が在る、鎌倉殿がおはす。恐れな、氣配すな。」

と、殿は泰然として、あたりを睥睨した。若君の泣聲がぴたりと已むと、一陣の生ぬるい風がさッと吹き入つた。燈がぱッと消える。暗中にから〳〵と笑ふものがある。

「誰かある、燈、燈々。」

と、殿は叫ぶ。

「あれッ。」

と、女どもは聲を揚げる。

「恐れな。魔物ならば切つて棄てう。」

と、鎌倉殿は太刀に手をかけた。

廊下にはツと紙燭の光がして、伴人が伺候する。

「殿召しましてか。」

「館のうちに異常はなきか。」

と、殿の息もせはしい。

「はツ。館の内外を篤と見改めるでござりませう。」

「急いで仕れ。」

黒い影が廊下の隅からひらりと前栽へすべつた。

「己れ曲者。」

伴人二人は飛鳥の如く前栽へ躍り出る。

鎌倉殿もつゞいて起ち出でんとするを、常陸介の女はひしと御衣にすがり、

「暫し御待ち遊ばしませ。どのやうな疎相があらうも知れませぬ。」

「むう。おそれ化生のものを其儘に致し置いては、」

「いづれ追つつけ吉左右は分りませうず。今暫し」

外の方では黒い影がひらりと生垣を躍り越えた。

「それ、そつちでは。」

「すはや、待てツ。」

と、伴人両人左右より引捕へんとしたが、影は流星の如くひらりと消えた。

「あと追ひかけよ。」

「遠くは行くまい。」

と、両人もやをら生垣を越えんとして、越えそこなひて悶きに悶く。

黒い影は長谷のあたりへ飛ぶが如くに流れ往いた。

極楽寺の切通しの暗から現はれたは、丈の低い丸い影。

「待ちおれ、本然坊ぢやござらぬか。」

呼ばれて彼の法師は足をとゞめる。

「覚性坊か。」

「どうぢや、首尾善う参つたか。」

「はゝゝ、鎌倉中で不思議の取沙汰あるを種として、常陸介の女を驚かしてくれた。ぢやが驚いたは鎌倉殿が今宵あの館に御出でござつた。」

「ほう、それや首尾が善うござつたなう。」

「何で首尾が善からう。」

「いやさうではない。御坊は江島小四郎（義時）殿の頼みを受けてでござらうが、まことは御台所の御頼みからの働きであらう。鎌倉殿の御出では又ないとの折から、常陸介の女が驚いたばかりではない、鎌倉殿もいかい仰天でがなあらう。御台所の仇討は御坊首尾善うつとめてぢや。」

「はゝゝゝ、我身も女子の嫉妬の用にされては、ちと迷惑ぢや。」

折しも雲間を漏れた朧の月が、大地に二人の影を落した。

## 十二

「どうぢや、小四郎、汝があの性悪な常陸介の女許通したと申す法師は戻つたかなう。」

と、御台所政子は弟江島小四郎義時を膝下近く、呼んで、ひそ／＼と打語る。

「只今やつと戻りました。」

「おう、さうか、如何致した。」

「殿があの館にお出でなされたと申しまする。」

「えゝ、何ぢや。」

と、政子は急に気色ばむ。

「我が此南御堂に詣でたる、其の留守を善いしほに致して、えゝ腹立しや。」

「まづお待ちなされて下されませ。某が平生手なづけて居りまするあの法師は善う走りまする、善う存じまする。常陸介の女を驚かすには屈竟のものにござりまする。其法師が女の館の

生垣を飛び越えて前栽に忍び入つたとのことにございまする。何の、館とは申せ、長門江七景遊ぶ海邊にしつくらうた些細の隱家にござりまする。すると廊下を紙燭とぼして銚子捧げて、侍女と覺しきものが通ると見るより、法師は逸早く廊下に飛び上り、暗い陰からぬッと顏出して、にッと笑つたと申しまする。」

「おゝそれは嘸驚いたであらうな。」

「甘繩なんどの化生の話が沙汰致される今日でござりまする。侍女はあつと云ひさま紙燭を投げ出す、銚子を棄てる、其儘其處に平伏したと申しまする。ぢやが法師が目指すはあの常陸介の女めにござりまする。其女めを腰拔かすほど嚇いてくれんと、奥の間指さうと致したるに。」

と、云ひかけて、江馬小四郎は御臺所の面を仰いだ。鎌倉殿出御の話はせねばならず、すれば父御顏の色が變つて、聲が荒々しくなるは知れたこと。すると云ひ淀んだを引き受けて、御臺所は、

「其時殿が太刀提げて出やつたと申しやるか。」

と先を越す。小四郎慌てて、

「如何にも其樣なげにござりまする。」

「お身の上が危いわ。若し其法師が殿に仇なす徒であつたらば何とする。殿はお忍びぢや、お側に善い侍も居らぬ。苦もなう袋の鼠であるぞ。」

流石に男優りの智慧分別勝れた御臺所である。鎌倉殿百歳の後には獨りで鎌倉を背負つて立たうと云ふ女丈夫である。嫉妬のうちにも殿を思ひ鎌倉を思ふ眞心がある。姉ながらも流石に見上げたものと、小四郎は少からず心中に感嘆する。

「全く御意の通りぢや。御微行は益ないこと。」

「してそれから何と致いた。」

「殿が出で立ち給ふ氣合に法師は仰天して我知らず前栽に飛び下りたと申しまする。すると殿が呼び立て給ふ御聲に伴人がはら〳〵と駈け寄るに、捕へられては叶はじと、法師は生垣躍り越え一逃げたと申しまする。」

「ほう、そりやいかい苦勞であつたなう。」

「ぢやが常陸介の女はいたう嚇されたでござりませう。又明夜も一つ嚇いてくれると申し居りまする。」

「そりや無用ぢや。」

「如何して。」

「殿から警固の侍をつけるは定。辻々にも忍びの者置いて法師を捕へんとするは定ぢや。」

「如何にもなう。」

「其は何でそれを化生のものと見られよう。きつと引捕へて糾問せねば殿の御威光にかゝはるとの御思召があるは知れたこと。構へて再度法師を御出しやるな。」

「流石は姉君ぢや、義時の及ばぬこと。」

「さうでもござるまい。汝は北條家切つての智慧者ぢや。女子の妾は汝が智慧を假らねばならぬわ。」

「何で某が智慧者でござりませう。」

「常陸介の女については、妾又善い智慧を案じよう。靜のことが殿の御心を離れたら、又常陸へ逆戻りぢや。殿の好色者にも困るなう。」

「靜が如何致しましたか。」

「殿がきつい御執心ぢや。」

と、御臺所は苦笑ひ。

「如何さま之は日本一の美女とか聞きまする。」

「けれども殿には高根の花ぢや。」

「でも鎌倉殿の御威光ならば。」

「判官殿の寵者ぢや。」

「其判官殿は罪人にござりまする。」

「女子がきつい慕ひ樣ぢや。」

「從はぬとならば靜もどのやうな目に逢はうも知れませぬ。」

「さいな、殺されよう。」

「そりやちと殺生にござりまする。」

「妾が活す、助けて遣はす。其助けに遣はす手段に將た其報に舞を見ようと存ずるのぢや。」

靜は否み居つたが、今日やうやうに承知な致いた。」

「それは一段と興あることにござりませう。」

「殿は舞を見て、御自身に逢うて、鎌倉殿の威光を笠に着て口説からうとなされるのぢや。妾は殿の威光が落ちるを助け申した。殿は不本意な。其腹癒せに常陸許お忍びであらう。惡性は殿の持前ぢや。」

小四郎は返事につまつた。全く以て惡性は鎌倉殿の持前である。けれど小四郎としては同感とも不同意とも云ひ兼ねる。で默然として居ると、御臺所は、

「さうであらうがな。」

と念を押される。

「はつ。」

と、それともつかぬ返事をする。

「汝も惡性のお伴致いたことがあらうかな。」

と、吟火がした。

「いや其様な儀を何で此義時が致しませう。」

「ほゝ、さもらしう云ひするなう。」

と、御臺所は唯一言に打消す。成ほど若いときにはさる女へ殿の通はれた其伴人を仰せつかつたこともないではない。けれどもそれは古いことで、今更御臺所がそれを云ひ出すを大人氣ないと、小四郎は心に輕蔑んだ。

「汝ばかりぢやない。あの梶原平三などの、善い老人さへ惡所通ひのお伴、伹し女の媒介など致す。ぢやが彼奴は胸に一物あれば、唯のお伴、唯の媒介ではないわ。」

「如何さまさやうにござりませう。」

御臺所は暫し短檠の光を見つめて居たが、

「常陸介の女には稚子が生れたなら。」

「さやうに承はります。」

「其稚子諸共鎌倉を追拂ひてくれよう。」

「ぢやと申して、稚子は正しく殿の御胤。」

「不淨の胤ぢや。なまじ後日の禍であるわ。」

と、御臺所の決心は固い。

「あゝ小四郎夜も更けた。いかい大儀であつた。館へ戻りやれ。妾は今宵一夜此に參籠致して明日夙く歸館な致さう。」

「はつ。さらば御免を蒙りませうず。」

一禮して退出なさんとする小四郎を暫しと止め、

「小四郎、ちと汝に頼むことがござる。」

「改まつて何の御用にござりまする。」

「汝でなうて、他に頼まうと存じたが、親身の汝ぢやほどに、却つて心易う改めて頼むわ。」

「はつ。心得ました。」

「きつと心得たるか。」

「確と。」

「承知致すなう。」

「違背仕りませぬ。して如何やうな儀で。」

「これより直に常陸介の女の許へ參れ。」

「して如何致しまする。」

「其館に火をつけて焼き拂へ。」

「えつ。それは。」

「嫌と申すか。」

「義時致し兼ねまする。」

「何で違背仕らぬと申した、何で確と受け合うた。」

「其やうな手荒なことは。」

「何で手荒であらう。女の母子の命を取らうとは申さぬ。」

「ではござりますれど、牧三郎宗親の例もござれば。」

「御前の住居致した伏見冠者廣綱の館を、宗親に仰せて破却させたを、殿御逆鱗あつて、宗親の髻を切つたそのことを怖しいと思ひやる

か。」

「御意で。」

「けちな男なら。」

「牧三郎の折には、父相模守殿鬱念に存じて豆州に進發致しました、其折、某は下國仕らずござつたを、殿いたく御賞美あらせられ、定めて子孫の護たるべきかと御意なされました。今某が宗親の故智に倣ひをすれば、又殿と北條家との確執にござりまする。此儀ばかりは。」

と、義時は斷じて聽かぬ所存。

「であるから汝自らに手を下せとは申さぬ。汝の手には、あのやうな法師の二人三人は居らう。怪し火つけて燒き拂ふは何でもないこと。明日の夜よりは警固も附かう。今宵殿が御歸館の後は人氣の少い館ぢや。なまじ邪魔の入らぬうちに早う仕れ、其手段は汝が善う知らう。」

「ちと之は迷惑な。」

「汝の手で成らぬとならば、妾は他し人に云ひつけるばかり。」

「まづお待ちなされませ。」

と、小四郎義時沈吟の體。やゝあつて、はたと膝を打ち、

「其やうなことには善いものがござりまする。」

「如何なものぢや。」

「あの法師の仲間に覺性坊と云ふのが、はまり役にござりまする。」

## 十三

御臺所の嫉妬の炎は由井ケ濱邊に紅焔々と燃える。

江馬小四郎義時が御臺所の內意を受けて、覺性坊に指圖すると、「心得て候。」と答へて、馳せ出でたる覺性坊は、其夜の丑三つ過に、忍び寄つたる長門景遠の納屋に火を投けた。折からの濱松風に、ぱつと火の手が揚がると、波は紅に映えて、あたりは一面に炎の海。

「わツ。」と魂消る女の聲、伏しつ轉びつ、しどけない姿で走り出でたる侍女、端女、三人四人。常陸介の女は若君引つ抱へて、徒歩跣足で、濱邊の方へと落ちる。

「宵に黑法師の化生があつたと思ふ間もなう此の禍、御怪我もござりませぬか。」

と、侍女どもは主の側に寄り集ふ。いづれもたゞぶる〳〵と、うち戰いて、物の用に立ちさうもない。

「殿の御歸館後、一寢入り致いたと思ふ間もなう此仕儀ぢや。今宵は善うない晩であつたわ。」

と、常陸介の女も、唯途方に暮れる。

火を消さうと右往左往に走り廻る下郎の姿、あちこちより驅けつける里人の騷ぎ罵るのを見ながら、片頰に物凄い嘲笑を見せて、覺性坊は悠々としてそこを立ち去らんとする。

「曲者待つた。」

と、木蔭から猿臂を伸ばして其衿髮をむずと捉へたものがある。

「人違ひめさるな。」

と、覺性坊は身をあせつたが、捉へた男の手はちつとも離れぬ。

「己れ逃げうとて、逃がすものか。」

「えゝ、此うして離すわ。」

と、覺性坊は身を振りかへりざまに其手をつかむ。覺性坊も金剛力なれば、捉へし男も金剛力、曳や〳〵と捻ぢ合つて、しばしは勝負も見えぬ。

捻ぢ合つた手が解けると見る間に、男はやつと一聲懸けると、見ん事覺性坊はづでんどうと大地もめげよとばかり打倒される。

「小癪な曲者。某を何とか見た、河越次郎に手向ふとは大それた奴。」

と、のしかゝつて、胸倉をしつかと捉へる。

「河越殿か、お許しめされ。」

と、苦しい息。
「許せなどと、何のよまひ言吐かす。」
と、刀の下緒を解いて、後手にくゝしつける。
「さあ立て。」
「腰が痛うて起きませぬ。」
「さらば斯うして起こす。」
と、右足を飛ばして、はつたと腰のあたりを蹴れば、
「あゝ痛。」
と、躍り上る。
「歩め。」
「はつ。」
「歩かぬと申すか。」
「いや歩きまする。おまへが河越殿、某は曲者にてはござりませぬ。」
「まだそのやうなこと吐かし居るか。」
「まことでござりまする。」
「何のまことであらう。憎しの奴ぢや。今夜の放火も汝がなせる業でがなあらう。」
「何でそのやうなことが。」
「黙れ。おゝ秩父殿が参られた。」
汗馬に鞭打つて来かゝるは、秩父庄司畠山次郎重忠。河越次郎も見るより、
「おゝ河越氏か。」
「仰せに従つて逸早く駈けつけて、あれなる火事場に徘徊致せる曲者を捕へてござりまする。」
「それはいかう大儀でござつた。」
天に焦れる火の焰光にすかし見て、
「己れは覚性坊よな。」
「はつ。恐れ入りました。」
秩父庄司はひらりと馬を下り、
「まさしく汝が放火人であらうがな。」
「何でそのやうなことがござりませう。秩父殿は四相を悟らせ給ふ賢人とか承はりましたに、これは異な仰せにござりまするなう。」
「餘人は知らず、此重忠は、汝のやうなものに欺されるものではない。放火は汝に極まつたるぞ。」
「これは迷惑な。」
「盗人猛々しい。おのれが誰に頼まれた人がござらう。火は長門が邸の隣家と聞いた。あの隠家には鎌倉殿の寵ある常陸介の女が忍うでござる。あのやうな隠家に火を放けるは由ありげぢや。云はぬとならば云はせて見せる。どうぢや、此重忠の言葉に誤りあるか。」
「如何にも秩父殿の仰せの通り、此火には何等か由緒がなうては叶はぬ。坊主白状致さぬか。」
と、河越次郎は腕を捻ぢ上げる。
「おう痛たゝゝ。」
「まだ白状致さぬか。」
「放火は致しませぬ、まして頼まれたお方が何でござらう。」
「これ河越氏、しばし〳〵。手荒いことを致さるゝな。某がとくと語つて見ませうず。」
と、重忠は覚性坊に近寄り、
「汝の性悪は夙うより知れたこと。汝ならば、放火などは譯ないこと。ぢやが唯の盗人であらぬ汝、故なうて、放火は致すまい。しかるに選りに選つて、長門の隠家に火放けたのは唯の盗人とも思へぬ。汝ならば長門の隠家に火も放けう。どうぢや、頼まれたはさる時めいた人からであらう。大地を打つ槌はよし外れるとも、重忠が睨んだ此目には誤りがあるまい。」
と、星をさゝれて、覚性坊は黙然として頭を垂れたまゝ、とからの返事もない。
「女々しい奴だ。男らしう白状致せ。」
と、秩父庄司の聲はやゝ峻しい。
「流石は秩父殿だ。善う見られた。」
と、覚性坊は覚悟を極めたらしい。

「今宵の放火は此覺性坊が致せしこと。」
「さもあらう。」
と、河越次郎は得意らしい。
「して誰に頼まれた。」
と、庄司は覺性坊の面を見る。覺性坊は默然とする。
「もう隱いたとて隱し果されぬ。きつぱりと申せ。」
「江馬殿からでござる。」
「ふう、さもあらう。」
と、庄司は合點する。
「江馬殿から異な頼みぢや。」
と、河越次郎の不審は霽れぬ。
「御臺所から江馬殿への仰せつけであらう。あまり詮議を致さば、いろ〳〵と善うないことも出るわ。」
と、庄司は莞爾する。
「はゝア、如何さまなう。龜前と同じ行き方でござるなう。」
「放火ぢや。ちと嚴しいわ。」
「さいなう、嫉妬も斯う黒焔では。」
「河越氏、其覺性坊は放火の犯人、引つ立てられよ。」
「心得た。」
秩父庄司の伴人、河越次郎の下人も、主のあと慕うて三人四人、七人十人と集つて來たので、庄司は次郎と目くばせして右と左とに別れた。

## 十四

「由ない頼みを引受けて、いたい目に逢うた。此覺性坊もちと下坂になつたと見える。覺性坊に引換へてうま〳〵とやり果せたは本然坊ぢや。黒法師に化けて巧みに手段な致いた。」
と、覺性坊は秩父庄司畠山次郎重忠の館の庭先に縄取られたまゝ獨語きながら坐つてゐる。
「逃げうとて、逃げられはせず、捉へられた相手が惡い。何にしても四相を曉る秩父庄司ぢや。」
と、いかにも悔しさう。
「昨夜はへいまな晩でござつた。江馬殿の頼みだけはやり果せたが、梶原殿からの頼みは仕事にかゝらぬうちに縄目の悲運ぢや。」
と、述懷するうちに、
「其罪人を彼方へ。」
との聲がかゝる。引立てられて、奧まりたる一間の縁側近くへ參る。すると縁先に現はれたは、秩父庄司、
「其縄解いて進ぜい。」
「はつ。」
と、下郎は縄を解く。
「覺性坊、此方へ參れ。」
「と申しまして、此やうな汚ろしい風情では。」
「何、介意致すな、近う。」
とばかり、庄司は覺性坊と對座した。
そこに坐する覺性坊をじろりと見て、庄司、
「昨夜汝が江馬殿に頼まれた一條、人家に火を放けるなどとは、神以て大罪ではあれど、詮議致さば血で血を洗ふやうな事柄。殿の御威光にもかゝはる、御臺所の御徳にも瑕がつく。洗ひ立を致さぬが結句兩爲と申すもの。許す、いづかたへなりとも去り居らう。」
「はつ、辱なうござりまする。」
一禮して立ち去らんとする覺性坊をしばしと留め、
「待て、まだ、語ることがある。」
と、云はれて、覺性坊は又そこに蹲踞まる。
「汝は頼まれて、善うないことを行ふものぢや。眞人間になれ、必ず向後不善なこと致すな。」
「有難い仰せ、永く感佩仕りまする。」

「汝の相を見るに、險惡なさまがあり〳〵見える。悔悟など致いた風はさら〳〵見えぬ。」
「何で其やうなことが。」
「いや隱すな、僞るな。餘人は知らず此重忠を欺き果せることはかなはぬぞ。」
覺性坊も是に至つて少からず面喰つた。
「仰せではござりまするが、覺性坊も、代父殿から、しみ〴〵との御意見でつく〴〵昨日までの非をさとり申しました。昨日までは昨日、今日よりは眞人間に立ち返りて御覽に入れまする。」
「其言ふことは如何にも健氣である、尤もらしう聞えるが、人の悔悟と申すものは表面ばかりでは何の益にも立たぬ、心からの悔悟でなうては叶はぬ。汝は心からと申すか。」
「全く。」
「神以て僞りなしと申すか。」
「仰せまでもござりませぬ。」
「默れ、虚言を申すな。」
と、重忠の目はきらりと閃いた。
まことや餘人は知らず、此秩父庄司を欺くことは叶はぬと、覺性坊は心から畏縮した。
「お許し下されませ。」
「また許せとな。」
「包まず隱さず申上げませう。」
「語れ、聞かう。」
「昨夜常陸介の女とやらの居りまする隱家を燒いて、それから又一仕事致す所にてござりました。」
「どのやうな仕事だ。」
「安達新三郎殿の館へ忍び込まうと存じました。」
「ふう、そりや如何してぢや。」
「靜殿を刺し殺さうため。」
「何と申す、判官殿の寵者靜殿を刺し殺さうとな。」
と、庄司も事の意外に驚く。
「全くさやうな儀で。」
「そりや誰からの賴みぢや。」
「梶原殿からの賴みにござりまする。」
「あの梶原平三が汝に靜殿を刺し殺せと申したか。」
「さやうにござりまする。」
「あの纖弱い女子をな。」
「なか〳〵。」
「汝のやうな鬼をも拉がんずる大の男が、一人の女子を殺さうと致したるか。」
「お恥かしうござりまする。」
「全く以て恥かしい至りぢや。汝はともかく、梶原平三景時ともいはれる智慧者が、汝に賴うであの纖弱い女子を殺さうなどとは、いやはや以て呆れ返る。」
「鎌倉殿が靜殿に御執心あらせられましたが、靜殿は殿の御意に從ふこと難いと見て取つて、梶原殿は鎌倉殿の御手にて靜殿を成敗しようと存じたるに、御臺所が靜殿を庇うて居られまするのでそれも叶はぬ。御臺所が舞の御所望を靜殿がすげなく斷り申した。梶原殿は自ら望んで其使者に立たれたが、靜殿は膠ない斷り。それで梶原殿は尾鰭をつけて鎌倉殿に讒訴致し、靜殿を成敗しようと試みたが、工藤殿の使者に舞をせうとのことで、これも見事に的を外れた。此上は梶原殿、刺し殺して其恨を霽らさうとの目論見で、此覺性坊が其役目。いや思うても恥かしうございまする。」
「まことに由ない殺生ぢや。御臺所がお庇ひなされるとはいふもののあの梶原又何仕出かさうも知れぬ。不便なことぢや。」
と、庄司は腕拱いて、しばらくは瞑想。ややあつて、
「汝は惡にも強いが、善にも強くあらう。まこと悔悟な致さば、某の申すことに從ひ、靜

殿を助くる工夫な致せ。」
「秩父殿の仰せ何で違背な仕りませうぞ。」
「さらば汝は是より梶原の館に罷り越せ。」
「梶原殿の館へとな。梶原殿の頼みをも仕果てぬにそりやちと迷惑にござりまする。」
「其懸念な無益。善い智慧授けてくれよう。斯やうに申せ。静殿を殺すことは思ひもよりませぬと申せ。」
「そりや何故あつて。」
「御臺所から附人があつて手出しもなりませぬと申せ。」
「如何にもなう。」
「其附人は秩父庄司畠山次郎重忠であると申せ。梶原殿は指をもさすこと相叶はぬと申せ。」
「畏まりました。」
「のみならず、秩父庄司に見顯されて、危く捕へられようと致したと申せ。此役目は某の手にては叶はぬ。もう思ひ切つたがよからうと申せ。」
「委細承知仕りました。」
「又某は御臺所許へ罷り出し、今宵の首尾を申さうと存ずる。其仔細は、常陸介の女の許に火を放けた法師は又静殿を殺さうと致して居つたと申すわ。之には御臺所もいたく仰天でがなあらう。某の手にて其法師捕へられたとお知りあらば、御臺所もちと面目がござるまい。事の内聞をお望みなされるは、定ぢや。某は御臺所にちと諫言な申し、さて其代りに静殿の生命安泰のことを語らはうと存ずる。固より御臺所は静殿の身の上を不便とみそなはすれば、某の申すことをお取り上げになるには、相違ござらぬ。さすれば某承はつて、静殿の身の上を護るでござらう。扨へても見やれ、判官殿が世に時めき給はゞ、静殿へは鎌倉諸侍も頭は上らぬ。其判官殿と別れた静殿は不便な身の上ぢや。武士たるものが之を助けでは叶はぬ。又鎌倉に呼び寄せたる間に其の身の上に異變な起らば、鎌倉殿の御威光にもかゝはる。重忠は此儀よりして、不便な女子を助けるのぢや。」
「今に始めぬ秩父殿の遠謀深略、又其上に慈仁に富み給ふ御志、感心仕る。それに引き換へ梶原殿はまこと讒奸の小人でござる。某いま少しにて其術中に陷るところでござつた。いやはや面目次第もござりませぬ。」
「汝は暴虎馮河の勇氣はあれど、智略が足らぬ。梶原殿も私の憤りを霽らすに心が急いて、武士のまことの道を忘れてござる。此後とても心せよ。」
「肝に銘じて忘れませぬ。」
「よい、さらば行け。」

## 十五

「えい、益にも立たぬ法師だ。彼奴は今少し間に合ふ奴ぢやと思ふたに、唯のいゝ法師ぢや、秩父庄司に見顯されて、手も足も出ぬとは、さてさて見損うた。」
と、梶原平三景時は獨りで歯嚙みをなして口惜しがる。
「鎌倉殿にたきつけて、あの女子を殺さうと致いたも駄目、法師も仕損じた。ことに御臺が秩父庄司に云ひつけて、警固致すとあらば、纖弱い女子とてもう手出しも出來ぬ。惡い判官殿の寵者なれば、云はゞ敵の片割れ、殺いてちと腹癒せ致さうと存じたるに、それも見事に失敗つた。思へば景時もちと老い朽ちたなら。」
と、あとは默然として、あたりはひつそりとする。
「父御ござりまするか。」
と、襖の外から音なふものがある。
「誰ぢや、源太か。」
「さやうにござりまする。」

と、簾を開いて、姿をそこへ現したのは、景時の一子同苗源太景季、一禮して、

「何か御思案なう。」

「用ばしござつてか。」

「ちとござりまする。」

「何ぢや。」

「父御の智慧が假りたうて。」

「ふう、聞かう、語りね。」

「餘りに可笑し氣で、きまりが惡うて。」

「汝がはにかむ、そりや怪しいなう。どのやうなことであるか。」

と、景時は不審の眉を顰める。

「ぢやが云ひませうず。某のことではござらぬが、餘りに可笑しうござりまする。」

「汝のことではないとな。さすりや誰のことぢや。」

「三郎景茂のことで。」

「あの聟の三郎、如何致いた。」

「景茂め、ちと不快にござりまする。」

「あの達者な景茂が不快とな、如何致しをつた。風邪にても罹りをつたか。」

「いやそのやうな病にてはござりませぬ。」

「熱でもあると申すか。」

「大熱で、」

「そりや善うない。醫師に見せたがよいわ。」

「醫師でも治ることは叶ひますまい。」

「何と、醫師でも治すことは叶はぬとな。そりや一大事ぢや。某往て見舞つてくれよう。」

と、起ち上らんとする父景時を暫しと制し、

「まあお待ち下され。そのことで父御のよい智慧が欲しうて。」

「醫師でも叶はぬことを何で某の智慧で治らう。熱氣のあるものは囈言を申すとか聞いた。定めし、景茂め囈言でも申すか。」

「大囈言を申し居りまする。」

「何を申す、平生武道の嗜みある彼奴だ。何かそのやうなことでも申すか。」

「靜々と申して居りまする。」

「何ぢや、靜々と申すとな。其靜とはあの罪人の寵者のことか。」

「さやうにござりまする。」

「えつ汚はしい、其靜に如何致いた。」

と、いま〳〵しさうに景時ははつたと景季を睨んだ。

「父御、某ではござりませぬ。源太景季ではなうて、三郎景茂にござりまする。」

「無論ぢや。三郎め、靜に懸想して、囈言申すにてあるか。」

「そのやうにござりまする。」

「それで大熱を發して居るのぢやなう。」

「大熱とは申せ、まことの熱氣にはござりませぬ。傍から見れば、熱氣ある人のやうに見受けまする。」

「むう、さらばまことの病人ぢやないなう。とツと棄て置け、そのやうなものにかまふことはあらぬ。」

「ではござりまするが、あの儘に棄て置きますれば、如何やうな異變が出來致すやらも計り難うござりまする。」

「白癡な奴ぢや。彼奴何處にて其靜を垣間見居つたか。」

「此間の夜、由井ケ濱邊に失火の折、靜殿が火を避けようと外出するを垣間見たとの事にござりまする。」

「ふう、彼奴、法師のことは申し居らなかつたか。」

「法師とは。」

「何、よい〳〵。秩父めにも見顯されてござつたか。」

「其やうなことは聞きませぬ。」

「その垣間見から囈言か。」

「なか〳〵。」

「ふゝう、困つた奴なう。」
と、景時も思はず微笑む。やゝあつて、
「ぢやが無理もないわ。殿さへ御懸想なされた靜ぢや、景茂の懸想も强ちに怪しうもあらぬ。」
と獨語く。
「えつ殿が御懸想とございまするか。」
「よい／＼、聞くな。して、汝は某にどのやうな智慧を貸せと申すぞ。」
「景茂の戀慕は可笑しうございますれど、又不便にもございまする。ぢやが相手は判官殿の寵者、此戀の成立たぬは必定。此處が父御の智慧を拝借致したいところにございまする。」
「如何にも難いなう。」
と、景時は空嘯く。
けれども、咄嗟の間に根が惡智慧の達人とて分別がつく。其分別は景茂のためでなくて、自己のためである。景茂の熱を煽り立て、自己のあらぬ望を達さうと云ふのである。
御臺所の嫉妬がなくても、鎌倉殿の戀が不首尾に畢るは知れ切つた事實である。それと同様に景茂の戀が失敗に畢ることも明白である。されば此戀を煽り立て／＼其失戀に畢つたとき、彼を唆さば可愛さ餘つて憎さが百倍と來るは必然のことである。景時は善い運が向いたと獨り北叟笑む。
「景季呼べ、某が直に語らはう。」
「はつ。ではございますれど、父御から直にては、彼も恥かしうございませう。」
「其やうな懸念には及ばぬ。呼べ、直にと申せ。」
斯う父に命ぜられては、否とは申されぬ。景季は其旨を景茂に沙汰する。景茂は面目なげに景時の前に出た。
「おう三郎か、久しう懸け違うて逢はなんだなう。」
と、景時は頗る機嫌が好い。常人は固より、傍に居る景季も之は意外と胸を撫で下す。
「三郎、汝はちと機嫌が善うないやうな、如何致した。」
「はつ、別の儀にもございませぬ。」
「ふゝ、隠すな。ちと艶な話があると申す、眞か。」
と、景時の機嫌はます／＼好い。
「恐縮にございまする。」
「何の恐縮に及ばう。若い時は二度とあらぬ。某も汝の年配ならば、今一度好き心を出したいと思ふわ。羨しうあるなう。」
「叔父御、戯言な仰せらるゝな。」
「何の戯談であらう。まことぢや。」
「まことでございまするか。」
「何の、偽云はう。」
「すりや辱なうございまする。」
「ぢやが、汝は誰に戀した。」
「ちと面目なございませぬ。」
「何の面目ないことがあらう。包まず語れ。」
「叔父御に笑はれまする。」
「いや笑はぬ／＼。」
「源太、汝はまた戀の相手を叔父御に物語らずにござつたか。」
と、三郎はてれかくしに源太景季を顧みる。
「さいなう、語つたやうでもあり、語らぬやうでもある。」
と、源太はちと困却の體。
「異なことぢや。なぜお語りやらずござつたか。今某の口から申すはちと變でござるわ。」
と、景茂は途方に暮れる。
「戀する男が、そのやうな心弱いことでどうせうぞ。」
と、景時は空嘯く。
「叔父御、御嘲り下さるな。」
「むう、嘲らぬ。」
「さらば物語り仕りませう。あの、それ、近

頃鎌倉に參り居りまする。」
と、景茂は云ひ淀む。
「ふゝ、琴かきならす瞽女かなう。」
と、景時は冷かす。
「これは怪しからぬ。三郎景茂の戀の相手にてござりまするぞ。」
「丁度似合ふではあらぬか。」
「おなぶりめさるな。さあさらば叔父御、驚きめさるな」
「何で驚かう。瞽女でなくば、大磯あたりの遊女か。さもなくばどこかの長者の娘か。」
「そのやうな賤女ではござりませぬ。」
「ほいなう、さらばどこの後家か、但しはさる館の娘か。」
「そのやうなものでもござりませぬ。」
「それは何ぢや、其近頃鎌倉に參り居る者とは。」
「都には日本一の白拍子と名を謳はれた判官殿の寵者靜殿にござりまする。」
と、景茂は思ひ切つて云ふ。
「はゝゝゝゝ。」
と、景時は高笑ひ、
「其戀の成就すると思ひてゐるか。」
「それを苦しんで居りまする。」
「已みね／＼、益でもないことぢや。」
と、景時は取り合はぬ。叔父に見離されて、景茂は躍起となり、
「一念凝れば巖でも通しまする。ぢやが景茂には思ひのたけを口說く折がござりませぬ。そこは叔父御ぢや。景茂に其好い折をお作り下さらぬか。景茂は叔父御に取り持は願ひませぬ。逢ふ折を作つて下されっ。」
と、一生懸命、熱心面に現はれて、聲は武者振ひに振うてゐる。
「成らぬ戀の途を案內することは思ひもよらぬ。汝は今少し怜悧と思うたが、自惚れた男ぢやなう。」
「まことに自惚にござりまする。戀には盲目となる習とお聞きまする。景茂は戀に囚はれた自惚めにござりまする。」
と、云ふ顏を穴の明かん許りにつく／＼眺めて、景時、
「いやもうたわいもない執心ぢや。此叔父に善うそのやうなことが言へるなう。さらば聞かう。其戀叶はずとならば如何致す。」
「景茂は一命を棄てまする。」
「口惜しさに自害致するか。」
「叶はぬとならば世に生き甲斐のない某、世を棄つるより外はござりませぬ。」
「自ばかり死んで世の物笑ひとなるのであるか。」
「はつ。」
「戀の相手を如何致す。」
「さればでござる。」
「憎い女を切つて棄てるのが男子の本望、いや其れほどの執心がなうて、何で戀が叶はう。」
と、戀の炎に恐しい薪を添へた。

## 十六

文治二年四月八日、日は麗かに、一天は澄み渡つて、垣根には卯の花咲き、山吹咲き、池のほとりには紫の藤浪ゆら／＼とゆれる。朱の玉垣嚴しい鶴ヶ岡八幡宮の廻廊には、鎌倉殿の勇士の面々綺羅星の如く着飾つて居流れてゐたが、咳一つだにない、水を打つた如く、あたりは森閑として、工藤左衞門祐經の鼓の音、畠山二郞重忠の銅拍子なんどの[illegible]を舞はすが如くに響く。
靜は後の[illegible]に透を通るは、蒼白くなつた顏、男裝したが、[illegible]其顏を染めてゐる。鎌倉殿を始めとして、數多の衆人環の前に立つた彼女は、女ながらも[illegible]

な勇者であつた。權威も武力も彼に取つては塵芥のやうなものである。鎌倉殿が何で恐からう、御内の勇士が何恐ろしかろ。靜は竝居る大衆を木偶人と見た。

いよ〳〵舞ひますると答へたので、磯禪師はやつと安心したやうなものの、さて又心配がないではない。勝氣のある、負け嫌ひの靜が、敵人と云ひ罵る鎌倉殿の面前で何仕出かさうも知れぬ。

「これ、靜、此處は、鎌倉ぢや。都とは違ふぞえ。汝も善う氣をつけて、舞をしやれ。汝の舞を御覽なされたなら鎌倉殿のお氣も解けよう。さすれば判官殿のお身にもよいことがあらうも知れぬ。汝の舞で、御兄弟の間に立ち迷うた雲霧が霽れるやうなことがあつたならば、此上ない上首尾ぢや。舞も祝言の目出たいものをしや。」

と、切なる老婆心を聞いた靜は、

「妾の舞で、何で、鎌倉殿の御氣が解けませう、御兄弟の仲違ひが直りませう。妾も靜でござんす。人に笑はるゝやうな舞は舞ひませぬ。」

と、答へた。

人に笑はるゝやうな舞は舞はぬとは、夙くより、舞はうと返事してから、靜の心にしかと決めたことであつた。磯禪師は固より、其意を解し兼ねた。否之を善意に解釋して多少其心を安んじたのである。靜の心のうちに、其面の上に一點の雲がかゝつてゐるとは、心づかなかつた。其雲が風を呼び雨を起して、若宮八幡の舞殿を騷がさうとは、夢更思はなかつた。

決然とした心を以て、靜は舞殿に立つた。

其眞正面の簾の中には鎌倉殿が眸を凝らして御座ある。其側に端然と坐つたるは御臺所、目じろぎもせず靜を見たものの、折にはそつと鎌倉殿の御顏を盜み見る。引き下つて、梶原平三景時、これも一心に靜の動靜を窺つて居る。竝み居る大衆はいづれも息を凝らして此稀代の舞の上手を見ようとつとめる。

東夷の關東武士にさす手引く手の鮮かな舞の呼吸が分るものではない。けれど其舞の上手と云ふ名聲には憧憬れてゐる。まして東國には見たこともないほどの美女、それも鎌倉殿の御舍弟として世に時めいた判官殿の寵愛者とあつては、そゞろに好奇心を唆らずには居られなかつた。

靜が舞の鮮かさ、靜が歌の清しさは萬人をとろりと醉はせた。緊張した靜の心は思ふさまに舞ひ、思ふさまに歌つたのである。靜が其扇、其袂、其裾を收めたときは勝ち誇つた如く、心に無上の快味を感じた。鎌倉殿の千秋萬歲を壽がずして、吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし、其情人に對する、戀々慕々の切なる情を心のまゝに訴へたのである。

異樣に感じたのは、秩父庄司畠山重忠と、工藤左衞門尉祐經、拍子と鼓とを打鳴らし畢るとともに互に目と目とを見合せた。其腋の下にはしとゞ汗を垂らした。强ち役目の重いためのみではない、靜が傍若無人の歌に恐れをののいたのであつた。

舞と歌とが畢ると、大衆はほつと息をついた。急に大氣のうちに、其震動が漲つた。さゞめきの漣は次第に感嘆の潮となつて、大衆はどよめいたのである。

「見事な舞振でござる。」

「美い聲ぢや。」

「流石は都第一の白拍子。」

「姿も比のない當今第一の美女。」

「判官殿の御寵愛あつたも無理ならぬことでござる。」

「いや善い見物を致して、末代までの語草が出來申した。」

「實に人間とも思はれぬ。天女の舞も斯くやご

ざらうか。」

なげきに日々に感嘆の聲を漏らした。其聲は一つとなつて、今までは夜のやうに靜かな舞殿の空氣も日中の市の喧囂と事かはつた。

大衆の感嘆に引き換へて、さつと其面に不興の色を浮べたのは、鎌倉殿。けれども根が沈着いた質であるから、怒り罵り狂ひ騷ぐと云ふやうなことはない。それだけ又其不興が根強い。

「奇怪な女子や。」

と、唯一句。梶原平三は御側ににじり寄る。

「まことでござりまする。」

鎌倉殿は、口惜しげに靜がしづ〳〵と、しかも意氣揚々と、其後姿を見せながら退座するを見送つて、

「鎌倉を何と心得る。身の面前をも憚らで、あの歌うた歌はありや何ぢや。」

「罪人判官殿を戀ひ慕ふて、つらあてに惚氣て居りまする。無禮な女子にござりまする。」

「善うも身に恥與へた。」

斯うなると、鎌倉殿の鼻息はもう絶頂に達してゐるのである。平三はしたり顏。

「引つ捕へて其罪を糺さでは、殿の御威光にかゝはりまする。あゝやうな滿座の中で、殿に恥辱を加へた女子、屹と成敗致さでは叶ひませぬ。」

殿が首肯かば、すぐさまにも走り出でん風情。

「あゝもし殿。」

と、御臺所は殿の方へ向き直られた。平三には目もくれで、

「まことに、情の厚い女子にござりまする。末代までの女の鑑。」

と、猶も云はんとする其言を遮つて、

「臺様、そりやちと御目鏡違ではござりませぬか。」

と、云ふ平三を流眄にじろりと見て、

「平三、汝なぞの知つたことではない、控へてゐや。」

斯うぴしやりと云はれては、平三、二の句がつけぬ。眼をぱちくりとして、怨めしげに、御臺所のお顏を見ながら後退る。

「八幡宮の寶前に於て、舞を致すのであれば、關東の萬歲を祝ぐべきに、身が聞き居ることも憚らで、逆臣九郎義經を慕ふとは奇怪至極ではないか。汝の取りなしはちと當らぬこと。」

と、殿は氣色ばむを、

「女子は女子同士。靜の心根は妾が察しまする。御忘にもござりますまい。殿が伊豆に流人となつて御座ある砌、妾と奇しい緣の契り。けれども父なる北條は世を憚りて、とかく其逢ふ瀬を妨げまする。では御座りましたが、妾も戀慕の暗に迷うて雨降る夜も、風吹く日も、果敢ない逢ふ瀬を樂みました。石橋山の合戰の折には、妾は獨り伊豆山に留りて、殿の御生死さへ知らず、あけくれ、御便りを待ち申して、日夜苦勞を致した其時の心地は、今の靜と露異りはござりませぬ。靜が判官殿がありし夜の睦語を忘れかねて、戀慕の心已みがたいはまこと貞女にござりまする。其心の奧底を打明けての今の歌、聞く妾は思はず、ほろりと致しました。世の女子は皆斯うならではならぬ筈。うい女子にござりまする。殿、御不興どころではござりませぬ。さあ賞めておやり遊ばせ、纏頭をおやり遊ばせ。」

「むう。」

と、ばかり鎌倉殿は行き詰つた。

御臺所は平三の方を見て、

「平三は唯の勇士ばかりではない、善う人情を心得てゐる筈。さあ殿に御取なし申し、靜に纏頭をもて參れ。」

「はゝつ。」

と、答へたものの、平三、面白からぬこと夥

[illegible]
「[illegible]殿、早う御遣はしなされませ。其使者の
役は平三に御命じなされませ。」
「よい、さらば遣はさう。」
と、鎌倉殿もやう／＼に決心する。
「して何を遣はさう。」
「さればでござりまする。卯の花重の衣裳が
ようござりませう。」
「さらばそれ遣はさう。」
と、命じて取り出したる卯の花重。
「平三、これもて參れ。」
「畏りました。」
と、平三は立ち上る。
「畠山、工藤其他の面々には酒を遣はせて、勞
へよ。」
とばかり、鎌倉殿は還御を仰せ出される。

## 十七

大風のないだ朝のやう、張り切つた胸が弛む
と、靜はがつかりして、安達新三郎の館に戻つた。其眼は嬉しいやら悲しいやらで、涙の露を宿してゐる。
靜が戻つた一足先に腕組みしながら、氣配の眼をしばたゝいて歸つて來たは、安達新三郎、
「禪師お在でやるか。」
と、[illegible]禪師の居間に入る。
「おう、安達殿、今日の舞は如何でござりました。妾もしも、[illegible]參りたうござつたが、お召ないに推參するも如何。又一つには、見るが氣配なで、殘つてゐましたものの、から胸がわくわく、氣がいら／＼、居ても立つても居られませんでした。先ほどより首尾如何やと案じて居りましたが、首尾はどのやうでござりました。」
と、禪師は席をのり出して尋ねる。
「いや舞と云ひ、歌と云ひ、流石は名人、一座の面々、唯感に入つてござる。」
「おうさうでござりましたか、それで胸がやつと安堵しました。」
「ところがなう。」
「えツ。」
「其歌が善うない。」
「はてどのやうな歌で。」
「斯うぢや。初めが、
〽吉野山峰の白雪踏み分けて
　入りにし人のあとぞ戀しき。
次に別物の曲を歌はれて後、
〽賤や賤、しづのをだまきくり返し
　昔を今になすよしもがな。
何とお聞きやる。」
[illegible]判官殿を慕ひ、且つは、[illegible]思ひを述べたものでござる。まこと靜が胸の中を察しますれば、そのやうにもござらうなれど、鎌倉殿の御前では、そりや大禁にござりまする。定めて鎌倉殿はお怒りでござりませう。」
「さん／＼であつたと申傳へる。いやもう額に似合はぬ大膽不敵のことでござつた。このやうなことでは、如何な難儀が降つて湧いて來るやも知れぬ。新三郎ほと／＼弱りまする。」
「母子が厚いおもてなしを受けてゐる其矢先に、又難儀をかけ申してはまこと濟みませぬ。あれほど妾が云ひ聞かし置いたに、あの女としたことが、善うまあそのやうな歌を唄ひましたなう。」
と、禪師も途方に暮れる。
其途端に靜は戻つて來たのである。
「母樣今戻りました。」
「おうお戻りやつたか。おや靜、今も安達殿から承りますれば、大事を仕出かしやつたなう。」
聞く靜は急に笑顏、
「母さま、喜んでくだされ。此日頃の氣鬱がさらりと霽れました。これで病氣も全快。今日

ほど快い日はまたとござりませぬ。」
「お云ひやることわいなア。」
と、禪師は答へる詞もない。
「ぢやが靜殿、ありや大膽過ぎてござりましたなう。」
「鎌倉殿の御家人にはさう聞えましたでござりませう。ぢやが判官殿に御恩を受けた我身と致しては、ありや當然でござりまする。」
と、靜は思はずほろりとする。
ところへ慌しう郎黨の注進。
「唯今梶原平三殿が鎌倉殿の御使者として見えられました。」
「何と梶原殿が」
「えッ、あの梶原が。」
と、安達と禪師は面色を變へる。泰然たるは靜、
「安達殿、其梶原平三に逢うて下されませ。」
「心得ました。ぢやが選りに選つて、梶原殿が御使者とは。」
と、新三郎は浮かぬ顏。
新三郎が出で行く後姿を見送りて、禪師はにじりより、
「どうやら又難儀が降りかゝるさうな。こりや靜、汝はどうするつもりぢや。」
「何の、母さま、難儀があらば靜一人が身に引き受けまする。滿座の前で見事仇討致しましたれば、もう靜の身は亡うなつても、心殘りはござりませぬ。」
「汝はさうでもござらうなれど、母は一人子一人、汝の憂い目は此母が見て居られぬぞや。」
「お許し下されませ。」
と、靜は母に取りすがる。母も靜に取りすがつて、ともに暫しは忍び泣。
いそ〳〵と立歸つた安達新三郎は見る目も鮮かな卯の花重の小袖を廣蓋の上に載せて差出し、
「母子の方々、お喜びなされ。殿よりの纏頭にござりまする。心善うはござるまいが、殿の御使者でござれば、梶原殿に逢うて、禮述べて下されませ。」
「おう御纏頭とござりまするか、お咎めもなうて。流石は鎌倉殿でござりまするなう。さあ靜、ぢやつと其梶原殿に逢うて、禮を述べたがよいぞ。」
冷かに小袖を見たる靜は嬉しさうな顏もせぬ。
「禮云へと仰せあるか。何の禮云ふことがござりませう。靜はもう白拍子にてはござりませぬ、判官殿の寵愛者。其やうな纏頭は平にお許し下されませ。禮は鎌倉殿から仰せらるべき筈。ぢやがあのやうな歌唄うては禮を仰せらるるにも及びませぬ。」
「これは又何としたことだ。これ靜殿、善く聞かしやれ、よし、お身が判官殿の寵愛者でござつても、殿から見れば家人も同樣、纏頭を下さるゝは、當然である。殊に、鎌倉の鎭守と聞えた八幡宮の御寶前にて、殿の御前をも憚らで、あのやうな歌歌はれたは御咎もあるべき筈であるに、却つて纏頭を賜はりたるは、莫大の御恩、それに禮申されぬは、判官殿に對しても濟まぬではござらぬか。殊に唯今、梶原殿の物語に依れば殿がいかい御逆鱗あつたるを、梶原殿がさまざまに取りなしたと申す。梶原殿に逢うて其禮述べるも、至當ではござらぬか。」
「おほゝゝ。」
と、靜は高笑ひ、
「安達殿ともあらう方が異なことを仰せられまする。妾は鎌倉殿の家人同樣にてはござりませぬ。鎌倉殿が罪人と御沙汰のあつた判官殿の家のものでござれば、鎌倉殿とは緣もゆかりもないもの。家人同樣とは鎌倉殿に對しても濟みませぬ。まつた、梶原が取り成したなどとは、

こりやあの口達者な讒人の虚言なるは定でござりまする。安達殿がそこにお氣のつかぬことはござりますまい。鎌倉殿が怒られたは必定でござりますれど、其お取り成しはきつと臺様でござりませう。何であの意地惡な梶原が取り成しませう。」

斯う云はれて見ると、安達も否定することは難い。

「さもあらうも知れねど、とにかく梶原殿に逢うて一言二言禮述べてもらひませう。御臺様の御取り成しならば、こりやどうしてもお身から禮云はねば叶ひませぬ。」

と、云つたが靜は合點のゆかぬさま。

「安達殿、此小袖は、鶴ケ岡の八幡様に御納め下されませ。鎌倉の鎭守、又弓矢の守神であらせますれば、判官殿の御武運長久の祈りの爲に、どうか八幡様にお納め致したうござりまする。禮言ふことはどうかお前からよしなに賴みまする。其梶原に逢ふことはお許し下されませ。」

挺でも棒でも動きさうもなき氣色に困じ果てたる安達を氣の毒と見て、

「これ靜、そのやうに剛情張るものではござらぬ。安達殿が困じられる。それでは玄母子が相すまぬ。又梶原殿を機嫌惡うさせては、どのやうな後難が出來するやらも知れぬ一寸の間でよい、梶原殿に逢うて、頭一つ下げて來れば、それで事が濟むと云ふもの。さあ早く往てござれ。」

惡い〳〵あの梶原に、何で此頭が下がらう。

「氣分が惡うて。」

「又しても氣分が惡うてか。」

と、安達は苦笑ひ、

「それでもお身は今の先、氣分が冴々しくなつた、日頃の鬱さが霽れたと云うてではなかつたか。」

「其冴えた氣分も、梶原が來たと聞いて、又惡うなりました。」

「あはゝゝ。之は得手勝手のことをお云ひやる。禪師殿、何とか致さねば、此場の仕儀が叶ひませぬ。」

「ほんにさうでござりまする。靜や枉げて其梶原に逢うて給もれ。」

と、安達と母とに切に乞はれて、靜もやつと我を折つたか、

「それでは遇ひませうず。」

と、云ふ。

「おうお逢ひやるか。それでなうては叶はぬ。」

「殿よりの拜領についても善う禮をお云ひなされ。お身達親子の後日の爲でござる。」

靜は其儘つか〳〵と梶原が遲しと待ち居る居間へと罷り通した。

## 十八

舞殿から立ち戻られた鎌倉殿の御機嫌は惡い。此殿の持前として、其形相に憤怒の氣色は顯はれないが、一文字に口をしつかと結んで、眉は八文字をよせ、折々、拳で膝の上を叩かれる。斯う云ふ風情が見えると、低氣壓の發生と同様、餘程警戒せねばならぬ。それでも御臺所と御一所の折は、つとめて、其癇癪を抑へて居られるが、御臺所が御側を離れると、急に拳をこしらへて、我と我が膝を擲られる。若しおそばに誰も居ないとなると、突と起ち上つて、御居間の中を彼方、此方へと行きつ戻りつなされる。此うなると、逆鱗はもう絶頂に達してゐるので、破裂が間近に切迫してゐるを示すのである。

「唯今、秩父庄司殿が參上仕りましてござりまする。」

形勢穩かならず、風雲急に起れりと見て取つたる近侍は恐る〳〵、遙かかけ隔つて、このことを申上げる。すると殿にはお答へがない。今一度申上げてよいか、惡いかは、問題である。

なまじひに再度云ひ出して、不機嫌の上塗をしたらば最後、どのやうな厭な思ひをせねばならぬも知れずと、近侍は其儘口を噤んだが、さて退出することも出來で、そこに居縮まる。

やゝあつて、殿は、靜かな調子で、

「重忠に之れへと申せ。」

と、仰せられる。空谷の跫音で、近侍は、

「はつ。」

とばかり、急ぎ足で退出する。入り替つて、秩父庄司畠山次郎重忠は悠然としてそこへ伺候した。

「今日はいかいお疲れにござりませうず。唯今は酒を下し置かれて、有難き仕合せ。一同のものに代りて御禮申上げるにてござりまする。」

「おう、汝達はいかい苦勞であつたなう。」

と、いつに變らぬ仰せ。

「殿の御前にてはござりますれど、何に致せ、都一の舞の上手に相手にござりますれば、いかい汗かきまいてござりまする。」

「おう、さうか、予も汗かいた。」

「どのやうな御儀で。」

「予の面前をも憚らで、あのやうな歌唄うた。聞く予が何で汗かゝずに居られう。」

「尤もな御儀で。」

と、庄司は逆はぬ。

「成敗も致したけれど、それが取り成いたで、許し遣はした。おやが、小面の憎い女子ぢやなう。」

と、はや穗にあらはれる。

「さやうな御儀で。」

と、庄司はとかうの異議を挾まぬ。やゝあつて、

「あのやうな女子の出まするも尤もにござりまする。此頃は處々にくさ〴〵の異なことがござりまする。」

と、殿の顏を仰いだ。

「どのやうな異なことがござるなう。」

「怪しい法師が徘徊致しまする。」

「おうそのことは予も聞いた。」

「由井ケ濱の長門景遠の家も其法師が燒いたと申しまする。」

「まことさやうか。」

と、殿は聞く耳を立てる。

「然るに其怪しい法師は斯く申す重忠捕へてござりまする。」

「何と常陸介の娘いでさ長門景遠の隱家を燒いた法師を汝捕へたと申すか。」

と、殿は思はず席より膝を進められる。

「まことに捕へましてござりまする。まさしく常陸介の娘御の館を燒いたのは其法師にござりまする。」

と、庄司は何事もない體にて常陸介の娘のことを云ひ出す。聞く鎌倉殿は背に冷水を浴びたやうな感じをする。

「其曲者を如何致いた。」

「取逃がしてござりまする。」

「何と、取逃がしたとな。そりや過怠なことぢや。」

「但し其ものは十分に糺問してござれば、委細殘る所なく重忠存じて居りまする。」

「むう、如何やうに白狀致いた。」

「其法師は、長門の家を覗ひて女どもを奪いたものとは別人にござりまする。」

「おう火をつけたる法師と、影の如く覗うたる法師とは別人と申すか。」

「さやうにござりまする。けれど同じ穴の貉にござりまする。」

「如何にもなう、さやうであらう。して見れば其法師どもを使うたものがあらう。」

「それは餘り御詮議過にされますな。」

「むう。」

と、ばかり鎌倉殿もとかうの辭がない。

「然るに殿、其法師めは靜殿をつけねらうて居りまする。」
「如何致さうと存じ居るか。」
と、鎌倉殿の御眼は輝いた。
「靜殿を刺し殺さう所存にござりまする。」
「それは如何してぢや。」
と、殿は案外と云ふ面色。
「若し鎌倉にさやうなことがあつては殿の御威光にもかゝはりまする。高がよるべ渚の捨小舟同樣の不便な女子。何故あつて殺害しようと致すやら、まことの理由は分りませぬ。願くば、重忠、殿の仰せを蒙りまして、其法師を初め、ねらふものどもを引つ捕へ、事なら都に歸したうござりまする。」
「よい分別ぢや。汝善う取計らへ。」
「畏まつてござりまする。」
鎌倉殿も、惡い女子とは知つたが、其窮鳥を捕へんとする無慈悲な獵師があると聞くと、流石に一點の憐愍な情を動かさずには居られぬ。折角の憤怒はめちや〳〵となつて、心の雲が霽れたやうな氣がする。常陸介の娘の住家を燒かせたのは、御臺所の指金であらうとは、言はず語らずのうちに推測されるのであるから、之を憶ひ出すと不興ではあるものの踏み込んで取糺す勇氣もない。靜を殺害させようとは誰の仕業か、若しや殿の懸想を根に持ちて、陽には靜を助けようとするものの、陰に殺害して嫉妬の鬱晴しをするのではあるまいか、と、殿はあらぬ想像を逞しうした。假に之を眞とすれば、殿は飽くまでも靜を保護せねばならぬと、妙なところに力瘤が入つた。
殿が此空想に耽つて居らるゝときに、使者の梶原平三景時は歸參致した。秩父庄司は平三と顏と顏とを合せた。庄司は平三の秘密を握つて居る。平三はうんざりせざるを得ない。庄司は靜が平三に逢うたと云ふ報告を異樣に聞いた。
「梶原殿、靜殿にお逢ひやつたか。」
「おう逢うた。快う逢うて殿からの拜領を辱なう禮云うた。」
「それは重疊でござつた。實は其お身が御使者と承はりて、ちと懸念致したのでござる。」
「ふう、何の懸念ぢや。」
と、平三は空嘯く體。
「判官殿とお身とは仲が善うない。又此頃鎌倉にていろ〳〵の取沙汰もある。靜殿はお身を快うは思ひ居らぬ。」
「そのやうなことがござるかなう。ぢやが今日は某、殿の御使者でござる。」
「如何にも、靜殿は殿の御威光を畏んで快らないお身に逢うたと見える。」
「快らない某とは、秩父殿もいかい口惡ぢや。」
と、そこは老猾な梶原、笑ひに紛せる。
「梶原殿、某は唯今殿から仰せを蒙りまいた。」
「どのやうな仰せと云やる。」
「靜殿の館を固める役目ぢや。」
「おう事々しいことぢや。そりやどのやうな故あつて。」
「お聞きやらぬか、何者とも知れず靜殿をつけねらうて殺害しようと致すものがあるげにござる。不便なことぢやござらぬか。」
「根も葉もない風說でござらう。」
「何の、某が引つ捕へた怪しの法師がしかとそのことを白狀致してござる。」
「其やうな法師の言は取るにも足らぬ。お身にも似合ぬことではござらぬか。」
「ぢやが、烟のあるところには火もござる。若し都女の身に大事があつては我々光にもかゝはると、殿も仰せられた。まことではござらぬか。」

「それもさうおぢやなら、
に其怪しの法師は由井ヶ濱の長門の隠家にも
火をつけたと申す。殿はいかい御怒にてござ
る。」

と、庄司が調声に、平三は思はず顔の色を變へた。解らことは善いとして同じ法師が常陸介の娘の住家を燒いたとあつて、其敎唆も此景時と讒訴されては一大事である。庄司がこのやうな謎のやうにいふところを見ると、或は殿が案外にそのやうな邪推をなされてゐるやらも知れぬ。

平三は慌てて、

「いつそも此景時には心がかりのないことばかりぢや。秩父殿、聞違うては濟まない。あらぬものの讒言であらう。」

と、辯解につとめる。

此兩人が御前の會話は少からず鎌倉殿を斤惑ひさせた。よい潮時と秩父庄司は、

「お暇仕ることでござりまする」

と、立ちかける。景時は恐れと平三も腰を浮かして、

「御免を蒙りまする。」

「これ平三、ちと汝に尋ねる仔細がある。」

と、鎌倉殿は聲をかける。

# 十九

いつも暮れ行く秋の薫やかな雨の降る晩のやうに淋しい靜の宿所が、今日は人澤に、賑々しくあつた。打ち興ずる聲、笑ふ聲、はては鼓の音、笛の音、歌ふ聲、とても／＼珍らしい様であつた。これは八幡宮の舞殿で、靜の囃子方をつとめた面々を先立てて、志あるものどもが靜の旅情を慰めんために酒宴を催したのである。其人々には工藤左衛門祐經、千葉平次常秀、八田太郎朝重、藤判官代邦通、梶原三郎景茂を始めとして、總勢七八人。靜を餘所ながら護る畠山次郎重忠はわざと加はらなかつた。此大勢の見舞には、靜も少からず面喰つたが、鎌倉の若殿原を無下に斷るも、餘りにすげない仕儀と、磯禪師の注意で、靜は心ならずも其宴の席に坐つた。

靜は物さびしくあつたが、一座ははしやいた、磯禪師に其座に斡旋して、我から進んで興に乘つた

「方々には、くさ／＼の藝にお長けなされる。隠さずに、ちと御出しなされては如何でござる。」

と、云ひながら、酒を工藤左衛門にすゝめる。

「我等の藝は云はゞ場違ひの野と同様、善い味はござらぬ。高が東夷の荒くれた、坂東者が見やう見眞似の猿樂、一向に恥かしうござる。それよりは禪師殿、昔取つた太刀の柄、其の手堅い手練の一ふしをお聞かさせなさらぬか。」

と、工藤は、流石に如才がない。

「おう工藤殿の云はれる通りぢや。姥櫻の艶な舞ぶりが所望でござる。此う申せば異なやうでござるが、年は少し老けたれ、流石靜殿の母刀自おや。定めし年若な折は嘸美しうござつたであらう。」

と、相槌打つは、八田太郎朝重。

「何のいなう。」

と、禪師は打消して、

「ほゝゝゝ、これでも若い時は、紅顔の花の艶に鶯を宿らせたこともござつたが、寄る年波には敵ひませぬ。額は大波小波の如く打寄せまする。髪の毛は谷の雪の斑まだらになりまする。歯の根は、地震に逢つた樹のやうに搖れまする。また腰に梓の弓をこそ張りませぬがそれも追つて遠からぬうちでござりませう。此婦が歌うたとて、舞舞うたとて、興のあるはいかり。何事も年若のうちが身上。靜は若殿原のみな藝を見役聞役にござりまする。」

と、禪師は相手にせぬ。
「いやさうではござらぬ。下世話にも、龜の甲より年の功と申す。老年の藝は、若ものどもの及びもつかぬ味がござるもの。唄には錆がある、舞には澁味がある。後學のためでござる。是非にお聞かせなされ、お見せなされ。」
と、左衞門尉は熱心である。
「さらば此う致さう。」
と、藤判官代が頓狂な聲を出す。
「先づ禪師殿が、口切り、封切り、其次が靜殿。それから我等が各々に致さうず。」
「ほゝゝ、各々方が先になされませ。女子が先に致すは禮ない仕方。」
眉に皺寄せて聞き居た梶原三郎景茂、氣逸の性とて、堪り兼ねて、
「えゝ、盆にも立たぬ讓り合ひ。女子が先でも、男が先でも善いではござらぬか。禪師殿が否とならば、靜殿おやりなされ。」
と、じろりと靜を見た。靜は莞爾として、
「妾は舞殿で舞ひました。今日は各々方が鮮かな藝をとつくと見聞仕りませう。工藤殿さあお前からお始めなされ。」
白拍子の前が立つては、工藤も否むことが出來ぬ。
「さらば某が御免を蒙らうず。」
と、扇子おつ取り、拍子を取りながら、聲鮮かに朗詠の一ふしを歌ふ。
「やんやノヽ。」
と、一同は賞めそやす。つゞいて千葉平次、八田太郎、藤判官代が各々節面白けに歌へば、梶原三郎は衣紋かいつくろひ、
「ほう、某が出る番になつた。」
靜の前で藝をするは、彼に取りて一生の晴れである。一期の浮沈と、彼は竊に其胸を躍らせた。工藤は鼓の名人、聲も澁味があつて、どこやらに垢拔けがしてゐる。千葉平次は聲自慢、八田太郎は身振手つきに妙を得て、人の頤を解かすの手練がある。藤判官代は流行唄歌ふことが巧みで、舞の一手も仕る。然るに梶原は生來の濁聲、當人歌にかけては鼻蠢かして、鎌倉を一人で背負つて立つやうな顏して居るものの、のべつに調子を外して、聞くものの眉を顰めさせることは珍らしくもない。
やをら咳二つ三つ。
「竹の夜中は、あはれぬる、ふしも定めず、起きゐつゝ、人に知られぬ戀をして、鳥の啼くまで寢も入らず。」
今日こそはと、あらん限りに聲張り上げて歌つたから、さあたまらない。或時は月闇き夜に虎の吼えるがやう、又或時は大鯨の鬪ふがやうで、空氣を壓迫して、人を奈落底へでも引つ張り込むかと思はれた。
其歌が濟むと、天地が開朗した如く、人々はほつと息をついた。靜も流石に笑顏である。其笑顏を垣間見た梶原三郎は、頗る得意である。
「此頃風邪引いて、聲が善う出ぬ。」
と、辯解がましいことを獨り語ちたが、其反面にはどうだ旨からうとの謎が籠つてゐる。並居る人々は苦笑を禁じ得ぬ。
梶原三郎は根が正直者、血氣に逸る若者とて、氣短で、一途に思ひこむと、矢も楯もたまらぬ。煽てると、水火のうちへも飛び込むを辭せぬ。靜を垣間見て柄にもない戀風がぞつと身に浸みて寢ても覺めても忘れぬ。何とかして此思ひを霽らさうとは思ふものの此戀容易ならずと、彼も不安の念に驅られてゐた。しかし今日は如何なる黄道吉日ぞ、其戀人の面前で彼が得意と自信する咽を聞かせたのである。彼に取りては千載一遇の好機、これを緣に、之を賴りに、之を道知るべとして、彼が心中を打明かし、思ひのたけを口說かうと、彼は心を躍らしてゐる。

とは一座の面々も知る由はなかつた。唯々梶原が調子外れの濁聲高き歌にやゝ興を醒ました。であるから靜と禪師との美妙な音樂で此白けた一座の興を挽囘しようとする。
「さあ禪師殿、此度はお身の番ぢや。」
と、工藤左衞門尉は禪師を促す。
「ほう、嫗の出る順でござりまするか。若殿原のあとで、此嫗の皺枯れた聲も亦一興でがなござらう。」
と、禪師はやをら容を改めた。やがて節面白く唄ひ出したるは、蓬萊山の一曲。
「蓬萊山にはや、千とせふるや、萬歳千秋かさなれり、松の枝には鶴すくひ、巖のそばにや龜遊ぶ。」
悠揚として促らず、流石に聲も美しく、調子も微妙であつた。
「あゝ出來しやつた〳〵。昔の美しい面影が目の前に浮ぶわ。」
と、一座は驚嘆の聲を放つ。
「いよ〳〵靜殿、お身が此座の殿でござる。」
「さらば拙い一節を唄ひませうず。
信濃にあるなる木曾路川、君に思ひの深ければ水泡に袖をもぬらしつゝ、あらぬ世をこそすぐしけれ。」
梁の塵を舞はする聲に、もう一座は恍惚として、讃嘆の聲だにない。取り分け醉ふが如く靜の顏を瞬きもせずに見つめたのは、梶原三郎、唯、
「うゝ。」
と、ばかりうめいてゐる。
「いざ各々方今一獻お過しなされませ。」
と、禪師が銚子を取り上げたので、一座は目醒めたが如く、
「まこと面白うござつた。」
と、各々は盃を取り上げる。
興に唆されて、盃は廻る。春風春水一時に到來して、一座は賑かであつた。酒が云はせる高調子に宴は半ば亂れる。
「一臈殿の歸洛ももう遠うはあるまい。此やうな面白い酒宴は又と致し難い。」
「如何にもなう、春宵一刻價千金とやら申す。好い機は再び得難うあれば、此一刻を惜まねばならぬ。」
「如何にもさうぢや。」
と、梶原三郎は心に點頭いた。酒に煽られた情火は燃え上つてもう堪へずなつた。つと進み出て、靜の前にぴたりと坐る。盃をむずとつかんで差出し、
「思ひをこめた盃ぢや。一つ受けて下されませ。」
彼が心臟の鼓動は響けとばかり其胸の中で打つ。
「辱ないが、善う飮みませぬ。」
「そりや情なうござる。某が胸の中をお察し下され。」
「どう察しまするぢや。」
と、靜は面を背けた。

## 二十

此機を外して、またと善い折があらうか。梶原三郎景茂は、酒に渾身の勇氣を鼓して、靜に肉薄するのである。
「此胸の中が分らぬとな。如何にもぢや。さらば申さう。此梶原は此の日頃夜頃、あらぬ幻、あらぬ夢に襲はれて惱み居るのでござる。ある時は氣が狂はんまでに悶え、或時は我身を殺さうかとも思ふ折もある。お身の心一つで梶原は生きもする、悶えから助かりもする。此まで申せば梶原三郎景茂の胸の中は察してもくりやるでござらう。」
と、眞正面から思ひの丈をかきくどいた。靜に取りては、晴天の霹靂で、はつと思つたが、

暫く間に驚きは怒と代る。
「聞きたうもない、何を申さるゝ、えい、汚らはしい。」
「何、汚らはしい。」
と、梶原は目に稜を立てる。
「無禮でござらう。」
と、靜はきつとなつた。

醉と、歡樂とで陶然となつた一座は、此不意の出來事に愕然として我と我に立返る。けれども誰あつて一語を發し得ない。
「妾を何と思ひやる。不束なれども判官殿の寵愛者、其判官殿は鎌倉殿の御連枝ぢや。汝は鎌倉殿の家人の分際として、何のたは言を申す。世が世であらば汝などは對面も叶はぬに、無禮も事によるぞ。」
と、靜はたしなめ畢つて、はら／＼と悲憤の涙を濺いだ。斯くまでに罵倒されては、梶原も二言と返す言葉がない。
「むう。」
とばかり、拳を固めたが、靜の美しさと威嚴とに打たれて、其拳の持行くところもない。
「これ靜、此御方は醉うてぢや。酒の上が善うないまゝ人と見える。かまへて眞事とお取りやるな。さあこれ梶原殿、もう善いわ。今一獻快う飲うて御歸館めされ。」
と、禪師は其間を取りなさうとする。工藤以下の面々も取りなさゞるを得ない。
「これ／＼梶原三郎、何云うて居る。今宵の快い酒宴を妨げすな。お身はちと醉ひ過ぎたでござらう。」
「何ぢや醉ひ過ぎたとな、此某を酒狂人と見做し居るか。」
と、梶原の憤懣はあらぬ方に飛ばんとする。
「善い／＼分つた。もう言ふな。」
「何が分つた。分らぬではないか。」
「靜殿、酒の上の戲言を意にお留めやるな。」
「戲言ではない。此梶原が神以て僞りなしの言、何で誣がござらう。」
「はゝゝ、さあ今一つ飲うだ／＼。」
と、一同になだめられて、梶原はいま／＼しさうに座に戻る。其間に靜の影は座中から消えた。

光を失つた一座は、急に闇を感ずる。長居は無用と、面々は、
「いざ歸館々々。」
と、禪師に挨拶して、大風の凪いだやうに引揚げる。
「これ梶原、今夜は如何致した。」
と、藤判官代は門を出る時に、馬上で梶原を振り返ると、梶原は、
「あゝ。」
と、一つ太い息を漏らしたばかり、やゝあつて、
「善うも滿座の中で、恥かゝしよつたな。」
「ふう、お身には荷が勝ち過ぎる。」
「戀には上下の區別がない理ぢや。」
「これ三郎、あの女子はお身どころではない、殿さへ指がさせぬわ。」
「何ぢや、殿が如何なされたとな。」
「殿も大の執心ござつたが、靜は情なうもてなした。八幡宮の舞殿で、滿座の前で、判官殿の惚話云うて、殿に恥かゝせ居つた。」
「ふう、殿の戀さへ叶はぬか、殿をも恥しめたとな。」
「如何にもぢや、お身はあの舞殿の歌を何とお聞きやつた。」
「そりや判官殿を慕うての歌ぢや。」
「鎌倉の鎭守八幡宮の寶前で、しかも鎌倉殿の御前での歌ならば、舞ならば、鎌倉殿の千秋萬歳を壽ぐのが當然ぢやに、罪人なる判官殿を戀ひ慕うての傍若無人さ。お身が恥かゝるゝは、それに比べると、月の前の螢火でござる。」

「ふう。」
「女子としては天晴れ末代の鑑ぢや。」
「ふう。」
「根にお持ちやるな。」
「殘念ぢやが是非に及ばぬ。」
と、梶原は拍子拔けのしたやうで、唯無我夢中に馬とぼ／＼と、路を辿る。
藤判官代とも別れ、同じく別れた梶原は、まだ胸の鬱憤が全く消えやらぬ。
「さあ何だか、五里霧中に相成つた。」
と、思はず獨語する。ぽつたり途中で逢つたは、騎馬武者の一列、
「おう、そこへ行きやるは梶原三郎殿ではござらぬか。」
と、馬上の聲は凜々しい。
「誰かと思へば秩父殿か。此夜陰に何處へ。」
「某は殿より仰せ承つて、靜殿の宿所を警護に參る。」
「ほう、靜を警護とな。」
「されはさ、靜殿をつけねらふ曲者ありと聞し召し、殿御自身には、某に固めを命ぜられたのにてござる。」
「そりや異なことなう。」
と、口には云つたが、三郎はや、雲踏む足の感がないではない。
「してお身は何處へ。」
「野暮な致す。」
「おう今宵は、靜殿の館にて酒宴があつたと申す。某にも案内があつたれど、ちと用ばしござつて參らずあつた。お身は其戻り道でがなござらう。定めし面白うござつたらう。」
「何の面白いことがござらう。」
と、梶原は不興氣である。
「ものども、あなた方へ罷り越せ、某はあとより參る。」
と、家人を先へやつて兩騎は馬首を竝べて、そこに佇んだ。
「面白うないとは如何してぢや。」
「あの靜が高言吐き居るので。」
「鎌倉は皆敵と思ひ居る女子ぢや。其高言を眞に受けては堪らない。」
「さらば裏と表とがござらうかなう。」
と、梶原の聲はやゝ勢が好い。
「何の裏と表とがあらう。唯當らず障らず、歸落させるが、坂東武者の情ぢや。殿さへに手こずりなされる女子の、我々家人等が何と致されよう。あの女子を事なら歸さでは坂東武者の意地はすたれるわ。」
「殿が懸想されたとか聞いた。まことかなう。」
「そりや某は知らぬこと。殿ばかりではござるまい、容色好しの女子ぢやもの、懸想する男子も多からうが、何であの女子が承け引かう。」
「そりや懸想する男子の誤りと申すもの。ありやそつとして置く飾物ぢや。」
「むう、秩父殿は流石に智慧者ぢや。面白いことお云やる。そつとして置く飾物とは、こりや妙ぢや。」
「手に障らなどゝは、皆間違ぢや、構へて手出しめさるな。」
と、畠山はから／＼と打笑ふ。
「まことなう。」
と、梶原はやゝ感に入つたらしい。
藤判官代に諭され、畠山次郎に説かれて見ると、梶原三郎も其迷夢から、次第に覺めて來た。馬鹿々々しかつたと云ふ氣が出る、同時に復讐の愚なるを覺つた。
もう此うなると、叔父平三景時の館へ行く元氣もない。まして秩父庄司畠山次郎が警護する靜の館へ踏み入る勇氣はない。酒も醒める、夢も覺める。
「はつくしよ。」
と、一つ大きな嚔をして、

「えゝ、可惜風雪を引いたさうな。」
と、惘然として已む無く還つた。
還つて見ると、先刻から待ち受けてゐたは覺性坊、
「おゝ御歸館でござりましたか。」
「覺性坊か、汝は囚の身となつたとか聞いた。如何致した。」
「飛んだ繩目の憂い目に逢ひましてござりまする。」
「どのやうな罪犯してな。」
「常陸介の娘の館燒きましたで。」
「ふう、ありや汝が仕業か。」
「また舅殿を刺し殺さうと頼まれまして。」
「何汝が。そりや誰から頼まれてぢや。」
と、梶原三郎はいよ〳〵驚く、
「頼うだお方は申しますまい。」
「して如何致した。」
「所詮事が難うござりまする。又刺し殺さうなどとは頼うだお方も、まつた某も誤り。ふつともう止めましてござりまする。」
「むう、して如何して赦されて參つた。」
「常陸介の娘の館燒けとは江間殿からの指圖、洗ひ立て致すと鎌倉殿の御威光にもかゝはりまする。で、叔父殿の情で赦されました。」
「さらば今宵は何用あつて某の許に來居つた。」
「平三殿からの使者にて參りました。」
「何ぢや、叔父御の使者とな。」
「鎌倉殿から平三殿へ嚴しい沙汰あつて、貴殿の身の上の安否計れぬとのこと。でござりまするから、お身さまも善う心得て、過ちすなとの御言傳にてござりまする。」
「叔父御も斷念めたと見えるなう。」
「某に頼うだお方は其叔父御にござりまする。」
「あつ、左樣か。刺し殺さうなどとの心は某も夙うに斷念致した。おやが念までも斷念めねばならぬとは神以て情なうあるわ。覺性坊察してくれ。」
と、云はれて覺性坊は少からず面喰つた。

## 二十一

「伊豫守（義經）の所在は未だ分らぬかなう。」
と、鎌倉殿は思案の眉を顰められた。
「左馬頭よりの早脚に依りますると、京都にて伊豫守殿の小舍人五郎丸と申すものを引つ捕へたとのことにござりまする。」
と、對座して答ふるは梶原平三であつた。
「ふむ、其小舍人は何と白状申した。」
「叡山に隱れ居られたと申しまする。」
「叡山へとな。然らば山門は伊豫と同心であるよな。」
「先づ其やうなことで」
「そりや一大事ぢや。さては吉野から遁れて、叡山の山法師どもに加勢を賴うだと見える。叡山は王城の鎭守、山法師は賀茂河の水、雙六の采とともに、帝の御意にも從はぬ不敵なものであるわ。山法師が伊豫の加擔致さば容易に引つ捕へることは難い。」
と、殿は物案じ顏。
「山法師が儘たらぬは、王法の末の時のことでござりまする。今天が下、殿の御威風に從はぬものなき世になじか御意に背くことがござりませう。急ぎ朝廷に御奏聞なあつて、山門並に横川の末寺莊園に御觸なさるれば、などか引つ捕へ召具せぬことがござりませう。」
「如何にもぢや。さらば左馬頭に沙汰あつて、伊豫追捕の宣旨を下し置かるゝやう仰せつけよ。」
と、殿の愁眉はやゝ開けたらしい。
「畏まりまする。」
「伊豫の行方が分らでは予も安うあらぬ。」

「如何さまなう。ぢやが殿の御威光で伊豫守殿の隠れ伏す處もござりますまい。」

「むう。」

と、一つ嘆息せられたが、鎌倉殿は如何にも感慨に堪へぬ面色。

「其伊豫の肉身は引つ捕へて、處置な致すことは叶ふが、其心を捉へることは予の力に及ばぬ。」

「はつ。」

と、云つたが、平三も一寸言句につまる。ややあつて、

「如何やうな儀で。」

と、殿の顔を伺ふ。

「靜の心の中に潛む伊豫の影は如何致すこともならぬ。予が威風も靜を靡かすことは所詮難うある。のみならで、あの靜を處置致すことも、もう予が力に叶はぬ。臺が保護致す、重忠が護り居る。儘ならぬ女子ぢや。」

　此の聞くと、平三も同感を表せざるわけにはゆかぬ。日頃の平三ならば智慧も出よう、計略も奉らう。けれども靜に對してはもう手も足も出ることの叶はぬ平三である。鎌倉殿の嗟嘆するところは、平三もまた同様に嗟嘆するところである。平三は唯點頭くばかり。

「せめては其憂さを伊豫の身で霽してくれたいわ。」

　これは江戸の敵を長崎で討つ筆法である。景時はこれまた至極同感である。

「まことになう、殿の仰せられる通りにござりまする。早う伊豫殿を引つ捕へ、靜の目の前にて御處分あらば、殿の御憂さもからりと消ゆると申すもの。」

「まことさうぢや。思うても憎い女子であるわ。」

　あとは森閑として、しばし無言の對座であつた。

　鎌倉殿が靜を憎むと一つ念は、又御臺所の上にあつた。

　御臺所は江馬小四郎を膝近く招いて、折々に柳の眉をきりゝとお上げなされる。

「常陸介の娘の館燒いたが、あの女子の行方は分らぬかなう。早う探し出いて、鎌倉から外へ放逐な致したい。まつたあれを匿まうた長門の髮切らせて遠島致いてくれよう。」

　江馬小四郎も、これにはうんざりせざるを得ない、嫉妬の相談は同じ兄弟ながら、まことに以て迷惑千萬。けれども其相談に乘らぬと、御臺所の機嫌が惡い。機嫌が惡いとなると、萬事に故障が起つて吹擧もむづかしい。

「どうも其行方が分らぬに困りまするて。」

「汝も迂濶なう。其やうなことで、父君の跡引き受けて、北條の世を起すことが出來ようかなう。」

　と、愈々以て手嚴しい。

「女子は男子と違つて、蹤跡が知れ惡いもので。」

　と、窮してとりとめない返事をすると、御臺所の追窮は益々激しい。

「これは異なこと申すなう。男子は遠走りを致す、ぢやが女子はそれが叶はぬ。鎌倉か、鎌倉を離れても遠く行かぬは定。そも常陸介の娘は雲に乘り霞を吸ふ女子か、魔法でも使ふ女子かなう。」

「男子は遠走り致すだけに、却つて分りまする。女子はつゝましやかにあらぬ人を賴りまする。でちと急には分りませぬ。ぢやがやがては引つ捕へることが叶ひませう。今暫し御猶豫を。」

「ぢやがなう、汝は善う尻尾を出す男ぢや。あの火をつけた法師も秩父庄司に捕へられたと申すぢやないか。手ぬかりであるなう。秩父は善う人の肺腑を見貫く。妾の指圖に出たことは夙うに知り居らう。汝はなぜ其裏を搔くことが

出來ぬ。」

と、一瞥を冷かに小四郎の額にくれる。小四郎は愈々以て恐縮せざるを得ない。けれども江馬小四郎は親優りの智慧者、上べに謙譲の態度を取つて其腹のうちは底知れずの海のやうな氣味の惡い男。話に懸引があつて、活殺自在の妙所を有してゐる。鎌倉中の若殿原と應對して誰にもひけは取らぬ。が、殿と御臺所とに對しては、彼の奸智も折々に折けて、鋒鋩はやゝもすると鈍る。

御臺所にやりこめられて小四郎は思はず頭を搔く。

「早う致いてくりやれ。殿への見せしめだ。妾の威光ばかりぢやない、殿の御威光にもかゝはるわ。」

斯う聞くと、小四郎は死地から復活する思ひがある。心中に苦笑冷嘲して、少々相手を見縊る。

「殿の御威光にかゝはりまするか。」

聞く御臺所はくわつとして、

「勿論ぢや。」

と、冷かな調子であつたが、顏には風霜の氣を帶びる。

「汝はさう思はぬか。」

「ちと解し兼ねまするので。」

「愚なう。あのやうな不所行のことをなされては、下々の見せしめにならぬ。一度ならず、二度ならず、再々あつては、家人どもも殿を蔑ろに致す。御威光にかゝらはぬので何であらう。」

小四郎は反駁したかつたが、怜悧な彼は口をふつと緘んだ。若し御臺所が其嫉妬を愼んだならば、何で御威光にかゝらはう。けれども御臺所が騷ぎ立て、發き立てるから、內面の醜事が外に露れる。家人どもの苦々しく思ふは殿の好色心よりか、寧ろ御臺所の妬氣の仕方であつた。であるが、賢明な御臺所はそこへお氣がつかぬ。否氣のつくほどの餘裕がなかつた。

舞殿で溜飮を下げた靜も心の憂さは日に增すばかりである。臨月は次第に間近く迫る。出產の曉に其兒の運命はどうあらう。判官殿の行方も心配ではあるが、此新しい愁の解決はどうつくであらうか。時は容赦なく進む。日は暮れ、夜は明け、時と日と月とが次第々々に進むほどに、此問題の解決は近くなる。其近くなるほどに苦痛は增すばかりである。

「あゝまた今日も暮れた。」

靜は悵然として暮れ行く空を眺めた。

## おぼろ夜（河東節十一世家元山彥秀翁追善）

「紫の一本生ひし武藏野に、遠近誘ふ入合の、鐘は上野か淺草か、今日も暮れぬと告げ渡る、夕の雲に華ありて、寂滅爲樂とひゞくなり。合「鐘ばかりかは、行く水も、空も名殘りと見上ぐれば、月も笠めす雨もよひ、夕越えて行く庵崎や、待乳おろしの吹くにつれ、盛りほこりし江戶櫻、ちり〳〵ぱつと、散れば梢に水馴棹、とめてかひなき老木の春を、のせて行くなる弘誓の舟、岩に流れたる宮戶川、三下り合「大悲擁護の法なれや、思へば夢の世と知らで、せきとめかねし關の、三下り「あとに殘りし淚の露の、果る思ひはナホル「十寸鏡、せめて其香を移して袖に、袖に移して後の世に、かたみとゞめん花の朧夜。

# 女水滸傳

## 一

更けて靜かなしつとりとした春の夜、築地の間よりちら〳〵と見えた内侍所の御燈も消えて、月のみ朧に影を落した所に櫻の花がほんのりと白い。

どこともなく淡い甘味のある香が搖曳して居るが、聲と云ふ聲、響と云ふ響は聞えぬ。顧ると東山は黑く花洛の夜を壓するやうに聳えて居る。此へは鴨川のせゝらぎも響かぬ。寂寞として夜はうつとりとして居る。

此夜の靜けさを破つて、急に高い欠伸の聲が空氣を震はせた。それは築地に近い木の下蔭からである。

「あー。」

聲の主は男である。しかも優しい雅やかなつつましやかな、此夜にふさはしい欠伸の聲ではなくて、秋闌なる頃、山中に焚く榾火の緣にふさはしいやうな、胴間聲の欠伸であつた。

つゞいてちよッと舌打した。

「いたう遲いわ。何してけつかる。」

如何にもいま〳〵しいと云ふ風情である。

聲が絕えて、夜は又もとの靜けさに返る。するとどこともなく人の足音が聞えた。それも一人でなくて二人三人、緩かなのびた步調でなくて、急に大地を踏み轟かして來るのである。

「あゝ來よつた。」

と又木蔭から聲がした。同時に初めてぬつと其姿を現はす。聲に相應しい大男の、それも覆面した黑裝束の、腰には太刀たばさんだる、恐しげな姿である。

豫ての合圖か、口笛を一聲高く吹きすさむと、一挺の乘物をそこへ投げるがやうに置いて、二人の頑丈な男が吐く息も忙しく立つた。

「旨くやり居つたな。いかい大儀であつた。」

と覆面はにやりと微笑んだか、優しい聲で犒ふ。

「いやもう骨の折れたことは一通りぢやござらなんだ。」

と二人は汗をふき〳〵異口同音に答へる。

「然うであつたらう。祝儀の今宵を目蒐けて、横合から引つ攫はうとするのぢや。して他の奴どもは。」

「各々斬つたり、擲つたりして、逃げやした。」

「所在を晦ませよとの豫ての言ひつけぢや。善うやつた。」

「して、すぐさま、之より岩倉の住家に此儘參りませうか。それともあの館へ。」

と言はせも果てず、

「待てよ、其姫の顏など某も一度拜まうか。」

「はゝア、大將も好色者でござるなう。」

と云ひながら、一人は乘物の戸に手をかける。内や定めし海棠の雨に濡れた、今宵の新嫁の打崩れた姿が現はれようと、思ひの外、戸の開くると同時に、ひらりと、大地に躍り出でたるは、女は女なれども、女にしては丈抜群の、しかも肥肉の大女、白い被衣をはらりと脱ぎ棄てる途端に、右の拳は傍の曲者の脾腹をゑぐれとばかりに突いた。

「あいたゝゝゝ。」

と悶絶するを見向きもやらず、左足は輕く颺つて今一人を頭顚倒と大地に轉ばす。驚く覆面の襟首取つて、其儘捻ぢ伏せ、どつかと腰をかける。

「これ弱蟲ども。名もない奴原ならんが、名を名乘れ。名乘らずとならば一ひねりだぞえ。」
耳元に鋭く響いて、腰の下では蟲の息。
「お許しめされ、白狀致す。しばしそこ退いて。」
「ほゝゝゝゝ。阿呆が何申す。白狀致さば退いてもやらう。」
「苦しい、息が出で申さぬ。語らうにも語られませぬ。」
「さらば退いて遣はす。」
と女は腰を上げる。
「これはどなたかは存じませねど、きつい強い女子のお方ぢや。して鶴姫殿には。」
「何と申す。鶴姫殿には恙はあらせられぬ。汝共の謀計にかゝるやうな者ではおざらぬ。」
曲者は唯呆氣に取られて、女の顏をしげ〴〵と見る。
「其覆面外さずや。」
「はつ。」
と曲者は恐る〳〵手早う覆面を外した。月下に髭黑の鈍栗眼が現はれる。
「ほゝゝゝ、其顏で、鶴姫殿を。大それたことわいな。」
と女は嫣然一笑する。

## 二

「いや申し、強い女子のお方、此某が鶴姫殿に懸想致して横奪申したのではござりませぬ。」
と曲者は慌てて言を遮つた。
「何と。さらば誰かに頼まれてか。」
「如何にもさやうにござりまする。」
「さらば語れ。聞かうず。」
と女は眼下に曲者を見た。
「まこと某は岩倉に山寨を營みまする野武士の頭、熊野の平太と申すもの。櫻町殿の御息女鶴姫殿が、今宵大炊殿に嫁入なされるとのことを聞き傳へて、日頃懸想なされるさる御方から途中で奪ひ取れとの頼で一働き致したばかり。」
「其頼うだ方とは誰ぢや。」
「それはちと。」
「何と申す。云はぬとならば。」
と女は腕を捲る。又取つて捻ぢ伏せんとする氣色に曲者は慌てて押止め、
「まあ〳〵待つて。云ひまする〳〵。」
「疾く語らずや。」
「其頼うだお方は誰あらう、岩成殿。」
「何ぢや、あの岩成主税助とな。」
と女は事の意外にしばし茫然とする。
「汝どもは褒美の目腐れ金にくらんでか。」
「面羞うござりまする。」
「何が面羞い。不覺な。」
と女は一喝する。
「してお前樣は如何やうな御方で、又如何して今宵の企計を知らせられまいた。」
ふゝんと女は鼻の先で冷笑つて、
「汝の氣の濟むやう語つて遣はさう。妾は石山の奧にお住居なされる紫姫殿の御内人にさるものありと知られた堅田の澪標と云ふ女子ぢや。」
と言のまだ畢らぬうちに、曲者ははつたとばかり大地に額づく。
「さては世の噂に聞きまする紫姫殿の御内人でござつたか。流石に某どもが敵ひ申す所ではござりませぬ。」
「妾、此間、四條の大橋の袂で、醉ひしれた、多分汝の手下のものであらうが、酒が云はする高聲で、今宵の企計を語るを聞いた。此は一大事と、櫻町殿の館に參りて細に物語致し、今宵は妾が身代りとなつて、柄にもない大炊殿への輿入、まんまと汝の手下のものを欺いて、其儘此まで擔がれたのぢや。どうぢや汝どもには

出來ぬ業であらうがな。」

「いや全く降參々々。紫姬殿の御內人では其位のことはなされませう。そこで姐御、ちとお願ひがござりまする。」

と、曲者は急に改まる。

「ほゝゝゝ、急に姐御になつたなう。」

「姐御、お前樣のお手並には某ほと〳〵感服仕りました。今夜から改めて、手下のものを引連れて、紫姬殿へ歸參致したいと存じまする。此儀枉げて御取做しは下されませぬか。」

「何と申す。岩成へ還す言葉がないので、急に思ひ立つた歸參の願ひ、ならぬ〳〵。」

「いや其やうな一時遁れのことではござりませぬ。神以て願ひまする。」

「御館では男はきつい禁物。男の手下どもは粟津、鹿背、田上のあたりに住居する掟ぢや。まこと歸參致したいとならば粟津の小夜嵐の方まで參れ。其紹介は妾が致いて遣はさう。して汝には如何ほどの手下がおざる。」

「參凡五六十ばかりござりまする。」

「あとばかりぢやなう。ぢやが善いわ。其二人の手下に活入れて活かして遣はせ。」

「畏りました。」

と、縛れた二人に活を入れる。うんと息を吹きかへした二人は、けろりとして怪訝な顏。

「大將、之は何としたことだ。」

「まことは斯やうな譯ぢや。」

と、熊野の平太は事落もなく物語る。

「ふゝん。」

と兩人は感心して、

「こりや敵はぬ筈ぢや。」

と、頭を掻く。

「これ平太とやら、其岩成主稅を取挫いで、彼の惡計の報を致いて遣はさう。歸參のしるしに汝に命ずることがある。これ耳を假しね。」

と、澪標は平太に耳語く。

「如何さまそれは妙計でござりまする。」

と、今の平太は又昨の平太にあらず。

## 三

「眠い〳〵、いやもういたい目に逢はせ居つた。昨夜は一夜まんじりともせず、熊野の平太の吉左右を待ち焦れて夜を明いたが、其平太は梨の礫、何の便も今にない。彼奴どうしをつたか、鶴姬淺うて逐電致いたか、乃至はまんまと仕損じて、某に合す顏がないか、えゝ面白うもない。」

高欄に凭りて、春の行方を見ながら、岩成主稅助は茫然として佇んだのであつた。小鳥がばつと枝を蹴つて起つと、風なきに、欄前の櫻の花がひらり〳〵と二片三片散る。

「殿、熊野の平太が唯今參上仕りました。」

と、うしろに額づきながら近侍が言上する。

「何、平太が參つたとな、彼奴善うおめ〳〵と今頃參つたな。直に之へと申せ。予が直々に逢はう。」

と、我に返つた主稅助の調子はやゝ激昂して居る。昨夜のいま〳〵しさは急に頭へこみ上げる。

「其しやつ面を剝いでくれよう。」

と、獨語きながら座に戾る。

案內に伴れて、伺候した平太は恐る〳〵次の間に手をつく。

「殿歸參致いてござりまする。」

其顏を見ると同時に主稅助の額には青筋が二筋三筋ぴり〳〵と動く。

「近う。聞かう。」

聲は無理に抑へつけては居るものゝ、忌々しげに聞える。平太もさるもの、固より風急にして雲飛來する狀を察しないのでもない。

「いたう遲うなりました。」

と、言譯しながら膝行り寄つた。

「どの面下げて。」
果然迅雷が鳴つた。
「いや、面目次第もござりませぬ。」
「語れ。返答如何に依つては唯では置かぬぞ。」
「平太一期の不覺でござりまする。」
と、平太はありし夜の不首尾を事落もなく、尾鰭をつけて語る。聞く主税助は、はつたと怒り、
「何ぢや、高が一人の女郎に其鬚面が惱まされたと申すか。下れ、もう聞かぬ。予が直に其女郎を成敗致いてくれるわ。」
と、語るも待たず、平太はにやりと冷かな笑を漏した。
「其石山の紫と申すは、女子なれども、手剛い奴にてござりまする。手下も多く、佐々木六角なども氣脈を通じて居りまする。若し殿が仕損じなされますると、御威光にもかゝはりまする。」
「何、高の知れた女子ぢや。二三百人も遣はしたらば、皆捕虜ぢや。もう汝のやうな腑甲斐ないものには頼まぬ。諫言無益。」
と、主税助は座を立たうとする。
「あいや暫く、其澪標と申す女子は、殿が公卿衆の娘を奪らうとなされたを洽く公に致いて、罪を問はうと申しまする。」
「何、何と申す。其女郎の鬢面切つて、往生させてくれるわ。」
「ぢやと申して、此ことを禁裡、公方にも申上げると言ひまする。」
「それが、何で畏からう。」
「また彼は多勢の前で殿に赤恥搔かせると申しまする。」
「能うぬかす女郎ぢや。」
「殿を害し奉りて、積惡の報を見せてくれると申しまする。」
「おう善う云うた。予の左右には侍がたんと居る。又予は武勇にかけては人に後を取らぬ、其やうなことに脅かされる予ではない。」
「害し奉るには、忍びか毒を以てすると申しまする。」
「予は用心致す。彼が手にかゝるやうな主税助ではない。」
「夜に入つて忍びのものを遣はすか、臣下と僞つて、殿の御身に近づくか、朝夕の御膳の中に毒を投げ入れるか、手をかへ品を換へて、いつか其志を果すと申しまする。」
「其やうに執念いことを申すか。」
是に至つて、主税助は氣味の惡さを感じた。彼には少しく心配の思が芽を吹き出した。主税助は思はず腕手を組む。
「それは眞實か。」
「何で僞はり申さう。誠かけて眞實でござりまする。」
主税助は薄氣味惡く、言も暫し途切れて、とつおいつ思案に餘る。
「此平太善い思案がござりまする。」
「汝のことぢや、餘り善い思案もあるまい。」
「まことは昨夜此平太が苦しまぎれに、其澪標に降人となりまいた。すると流石は女子、其言を眞實と致いて、某に殿を討果す計略を授けまいた。殿が思召しあらば、其計略の裏を搔いて見んごと敵を打ちませう。さすれば殿の御身が安いばかりか、鶴姫も手に入りまする。」
「何ぢやと。善い報知であるなら。」
と、主税助は、やゝ其相好を崩す。
「某に殿を欺いて、明後日鶴姫が清水の花見に參るを忍んで垣間見るやう勸めよと申せといふことでござりまする。其折は澪標も參れば殿の威光で捕へられいと斯う申せとのことでござりまする。して、其忍びの殿を却つて脅かさうとの計略にござりまする。此平太何で女子風情の味方につきませう。殿への忠勤の印に其計

を覆さうと存じまする。」

四

黑い木綿の衣に、白い脚絆、紅の襷をかけて、淺黄色の手拭を頭にかけたる大原女二人、淸水堂の上り口に粗朶下して、彼是ひそ〳〵と打語る。

「矢橋の浮舟さん、お前には善う其姿が似合うて居るぞえ。」

「どうせ、妾は鄙生れ、鄙育ち、大原女はもてこいでござんす。」

と、つんとする。此方は慌てて、

「これ怒りやしやんすな。惡う言うたのではない。賞めたのだぞや。」

と、云ひわけする。

「おほゝゝ。」

と、浮舟は打笑つて、さて、可愛らしい目つきで、きつと睨み、

「辛崎の朧月夜さんは口が惡いから、ちよつと怒つた眞似したばかり、今日は大役引き受けて居る妾が何で怒らうぞ。どうやら澪標さんの言はしやる通り、其熊野の平太とやらは降人と見せかけて、岩成奴に內通したと見える。岩成奴それを眞に受けて、樣々に風をかへて、多數の侍を此淸水堂のあたりに入り込ませ、鶴姫殿とやらを奪ひ取り、澪標さんをも捕へようとの計略らしい。愚な人達ぢや。何で鶴姫殿とやらが花見をしやらう、澪標さんが此ほとりを徘徊きしやんせう。今に其岩成奴を嚇かいてくれよう。」

「これ靜に、あれ見よ、岩成主稅助が參つた。妾は善う其面ざしを知つて居る。あの鬚面の伴人は熊野の平太とやらであらう。やがて泣面致すでおざらう。」

熊野の平太は澪標の計略の裏を搔かんとしたが、澪標はさるもの、固より平太風情の手段に乘るやうな女でない。見事其計略の裏を搔いて、淸水堂にはそれらしい姿も影もない。唯、都の士女が、花見んとて地主權現のほとり、音羽の瀧のあたりに群れ集うて、大悲擁護の薄霞を賞づるばかりである。

岩成主稅助は平太の言を眞實として、さまざまの姿に身を窶して侍を入り込ませ、爭に事よせて、鶴姫と澪標とを生捕りにせんとの企である。彼も忍びの姿で、平太と他に二人ばかりの伴人を引率れて、我知らず、飛んで火に入る夏の蟲を學んだのである。

「あゝ、善う咲いた。爛漫として、まこと、雲か雪かと擬ふわ。」

と、石段を上りながら、岩成主稅助は櫻を仰いだ。しかし心は櫻に非ず、行き通ふ群集に眼をそらして居る。

「いかさま善う咲きまいたが、花より美しい人はさてどこにござるやら。」

と、平太は眼をきよろつかせる。

「觀音堂に參らう。あすこからは一目に見える。定めて姫の姿は群集に立ちすぐれた風情であらう。譬へば星の前の月、石の中の玉、花の中の櫻であらう。されど其の近江の女賊とやらんに近づいては危い。旋風のやうに足下から起つて來るやらも知れぬ、其折は唯一刀に斬つて棄てる。觀音堂の御前なれども、吾が大事の命には易へられぬ。血潮に染めてくれるわ。」

と、主稅助は刀に手をかけて見せる。

「御伴に熊野の平太あり、殿の御手を煩はすにも及びませぬ。」

「高言申すな、平太は其女子の腕に掴まへられて、助けを乞うたのではないか。」

「又、あの折は不意で。」

と、平太は頭を掻く。

「さあ觀音の舞臺に參つた。群集が一目に見える。平太、其女子は居らぬか、[illegible]は居らぬ

か。女子は數多徘徊なせど、いづれも雲と泥、鶴姫には似ても似つかぬものばかり。」
と主税助はきよろ〳〵する。平太も其聞かな目をあなたへぎよろり、こなたへぎよろり。
「一時刻が早いのでござりませう。どうも見えませぬ。地主のあたり、菅羽の下に往て見て參じませう。」
と、氣が氣であらぬ樣子。
「殿お出でなされましたか。」
「おう横川か、異樣な出立ぢや。姫と其澪標とやらに似たる女子でも見たるか。」
「參候。某どもはもう彼是二時ばかり此ほとりに居りますれど、其やうな美しい姫も、其やうな恐しい女子も見受けませぬ。五十人の味方のものども、いづれも其やうなものを見掛けませぬと申しまする。」
「おう大儀であるなう。これ平太、汝は僞申せしよな。」
と、主税助は平太の方に向き直る。
「何で〳〵、某が虛僞を申しませう。」
「どぢめ、汝は又其澪標に計られたな。」
と、主税助ははつたと平太を睨んだ。平太是に至つて、三斗の冷水を背に打濺がれたやうにひたすら恐縮する。
「もう往なう。此儘此處で待ちぼけをすれば、またどのやうな變事があらうも知れぬ。これ横川、汝どもは皆引き拂へ。益にもないこと致いて、あたら時を過した。平太には屹と糺すことがある。」
と、主税助は滿面朱を注いで、怒氣紛々當るべからず。花も實もあつたものではない。
「これ、殿さま、旦那さま、賴うだお方、大原の奥に咲いたる花一枝買うてたもへ。」
と、大原女一人飄然と其前に現はれた。是れ別人ならず彼の浮舟と呼ばれた怪しげな女子である。
「花と申すか。入らぬ〳〵。退れ、退り居らう。」
と、主税助の怒はあらぬ方に飛沫をかける。
「おう怖や、時は春ぢや、其やうな恐しい顏はせぬものぞ。」
此時一人の大原女は平太に近づいて、
「これ鬢黑の大將、汝にも買うてもらふものがある。」

## 五

「何、此某にもと申すか。」
と、熊野の平太は眼を瞠る。
「もう女子には懲々ぢや、花などは此某にも不用なもの。えゝ近づくなと申すに、の、の、退いた〳〵。」
と、平太の氣味惡がることは一方ならず。
「さうお云やるな、お前に買うて貰はうと云ふのは、花ではない。花ならば此方のお方が好きさうなよつて、買うて貰ふのぢやが、お前には、是れ〳〵是れぢや。」
と、懐から何やらちらりと見せる。
「そ、そ、それは何ぢや。やあ、覆面ぢや。おうさうぢや。先いつ夜、築地のほとりで失せたと思うた其覆面ぢや。さては汝等は同類だな。」
と、平太は、腰の刀に手をかけたが、同時に冷汗がだく〳〵と背に湧く。
「おほゝゝゝ、でも仰山な。これは妾が拾うて來たのぢやか、お前の物とは知つた。知つたからは返すが當然ぢやが、これには曰くがある。唯では返されぬ、其代貰はう。」
「あゝひよんなことになりよつた。代渡さう、何ぼぢや。」
「これはお前が脊の高い女子に降參の印。それをお前がまた欺いて岩成とやらに同心致さば、この印は宙宇に迷ふぞえ。其迷つた印ぢや。安うは賣らぬ。」

平太は青くなり、赤くなり、返へもならず、唯おど／＼。

岩成憤然として、詰め寄らんとするを、浮舟進つて、

「これ殿、いや、殿と云ふほどの人でもない。お主は高根の花を折らうとする性惡なお人ぢや。其やうな心懸はふつりと已めて、お主の園生にある花を俺かで眺めたら、どうでござりまする。それがいやなら大原女の花など進ぜよう。」

「何吐く、無禮者奴、斬られて血潮滴らいて、見苦しい死樣すな。」

「ほゝ、お主に斬られるやうな大原女ではござんせぬぞえ。」

「まだ吐かすか。」

と、刀に手をかけんとする、其手をしつかと後から捉へたものがある。

「これ誰ぢや。無禮すな。」

と、振り返らんとする、頭上に聲あり、

「石山の崇嚴の御內にさるものありと知られた澪標ぢや。[illegible]う覺えて置きや。」

「わッ。」

と、一聲、魂消るとともに、頭をかゝへて、震へ上つたのは熊野の平太である。彼に取りて澪標の名は大空に鳴神の轟くやうである。

岩成も流石に氣味が惡い。

「放せ／＼、之れ放せと申すに。」

「ならぬ／＼、ならぬと申すわ。」

と、女は空嘯く。

「えゝ、橫川、其他のものどもは如何致いた。」

「夙うに歸り居つた。」

浮舟はにつこり笑ふ。

「これ平太、其覆面を何とする。」

と、澪標はきッとなりて、平太を睨む。

岩成主稅助は武勇侍力のすぐれし猛者。澪標が大力に一たび其腕を捕しがれたれども、えいと一聲、氣合をかけるとともに、捉へられた腕を振りほどき、一步退つて、ひらりと拔いた。刀は流電、光を放つて、秋水は春の日にふさはしからず。

「己れ、女賊め、覺悟致せ。」

澪標は平太の襟髮つかんで楯にする。

「おゝ拔いた、其刀が何で恐からう。三好三人衆にも似氣ないお人ぢや。斬れるなら斬つてござらうじませ、岩成殿も遊ぶぞや。」

「一たび拔いた劍は其儘室には收められぬ。まして戀の妨げなしたる憎い憎い女。固より王法も佛法も無視したる岩成主稅助、唯一刀兩斷とじりじり詰め寄する。されど目ざす敵の前には、鷲に捉へられた小鳥のやうな熊野の平太が、顏色土氣となりて、ぶる／＼と震へ上りて居るし、左右には怪しい大原女、スハと云へば飛んでかゝらん風情で控へる。女でこそあれ、腕も力も冴えたるもの共、若し仕くじつたらば、一期の浮沈。あゝ殘念なは味方がない。猛りに猛りきつた岩成も流石に鋒先の鈍るを感じた。

花はちら／＼と散つて、清水寺の奧まりたる御堂には勸行の音が眠げに聞える。刃の光に恐れて、花の下に徘徊した士女ははッと遠のいて、四方は寂然する。

「はゝゝゝゝ。」

と、心にもあらぬ哄笑一番、何思つたか、岩成は拔いたる刀を其室に收めて、

「汝等を某の手にかけるは刀の汚れぢや。今日は許して遣はす。向後此あたりを徘徊致すな。平太おじや。」

と、ばかり、云ひ棄ててつか／＼と去らんとする。

「これ待て、岩成、主稅助、此方が許さぬぞ。」

と、云ひも果らぬうちに、澪標の手を離れた熊野の平太は人礫となつて、岩成の背にどッかと中り、顚倒と大地に地響する。

あはや再び修羅場とならんとする一刹那、
「これ御佛のお前ぞ。愼さつしやれ。」
と、嚴かな聲がする。端然とそこに立たせるは、三十二相圓滿の姿を具せる尼僧。
「おう之は法壽さまで居らせられまするか。」
と、女二人、恭しく額づく其間に岩成の姿も見えず、平太もまた何處ともなく消え失せた。

## 六

永祿八年五月十九日、五月雨の降りみ降らずみ、打濕りたる曉、將軍義輝の二條御所に推參致したるは松永彈正、三好三人衆なる三好日向守、同下野守、岩成主稅助、松山安藝守、同新太郎等一味同心の族、淸水寺參詣と云ひ觸らして、勢を集め、公方樣に御訴訟ありと申す。進士美作守晴舍之を取次いで訴狀の條々に將軍家の御點を申請けんとする。斯く間取るうちに御所の中へ人數を入れんとするのが、此もの共の企であつた。將軍家の母儀慶壽院は、將軍家の御座近くに、參られ、
「門前がいと騷しい。宜うない人ばかりが參つたとやら申す。彼もの共が訴訟は總て叶へさせられよ。さすれば御身にも恙はおざるまい。」
と、涙ながらに仰せられる。

奧と表との再往の使が往來するうちに、はや三好の人數はひし／＼と、土居の四方に充ち滿ちて、時分や好しと、一度にどッと鬨の聲を揚げる。つゞいて銃砲の音、人馬入り亂れて、はや殿中に闖入する。
「上樣、彼等に欺らるゝとは露知らず、御使仕つたる某、まこと口惜しう、申樣もない儀にござりまする。」
と、進士美作守はがッぱと許り將軍家の御前に平伏した。
「汝の不覺ではない、身の不運ぢや。」
美作守は、
「上樣、一足御先に、死出の旅路を瀨踏み仕りまする。」
と、云ひも敢へず、持つたる太刀取直して、ぐさと腹に刺す。
「やがて予も參らうぞ。さらば最期の酒宴を張つて面々に盃取らせう。」
と、將軍の仰せは少しも惡びれ給はぬ。
「はッ是へ。」
と、近侍が差出す盃に浪々と酒を注かせ、一息に飲み乾して、皆々一同へ順次に盃を廻す。
「上樣、御肴仕りませう。」
と、女房の小袖を被りて舞ひたるは、細川宮内少輔、
「最後の舞は一しほの出來榮であるわ。」
と、將軍の御感は悲しく、斜なしと、宮内少輔は身の面目を施して、引き下る。
「さらば切つて出でう。」
と、將軍にはおめず臆せず、太刀拔き持ちて出で給ふ。御供の人々には治部三郎左衞門藤道、舍弟福阿彌、輪阿彌、武田左衞門佐信景、谷田民部丞、西川新右衞門尉、西田彌四郎、松井新三郎、西面左馬允、金阿彌、心嚴主、荒川治部少輔、二宮彌三郎、寺司與三、細川宮内少輔、進士主馬允、飯田左吉、木村小四郎、松原小三郎、栗津甚三郎、同仙千代、臺阿彌、松阿彌、竹阿彌、大貳なんど、いづれも今日を最期と面も振らず、切つて出づる。
「あれ、あれに公方がましますぞ。我と思はんものは御首級を頂戴仕れ。」
と、岩成主稅助は、手勢を激ませる。引き添うたる熊野の平太も恩賞にあづからんと、一同にをめき叫んで攻め入り、躍りかゝれるも、決死の人々、物ともせず切り捨て薙ぎ立つれば寄手のものどもまたゝく間に屍の山を築いて、其

数二百餘人と註せられた。しかし寄手の勢は新手を入れ替へ入れ替へ、攻め寄すれば、御伴の人々も彼方に討たれ、此方に斃れる。将軍は御前に利劔数口を立て、取り換へ引き替へて寄手を悩ます。其様阿修羅王の荒びたる如くなれば、御威勢に恐れて近づくものもない。将軍、四方を睨んで、

「無益の殺生致すも罪の業。此太刀取らせう。」

と、ばかり持つたる太刀を拋け棄てれば、我がちに其太刀取らんと駈け寄る敵を側の太刀にてはツたと切れば、手に應じて倒るゝもの此にも三四人。

三好三人衆方なる池田丹後守の一子、小賢しい性とて、じり／＼と、忍び寄つたる戸の脇より、聲をもかけず、将軍の御足を薙ぎ奉れば、将軍我にもあらず前に轉ぶところを障子を押し倒し、上よりぐさと槍もて突く。

一團の猛火は逆巻く黒煙とともに奥より燃え出せば寄手は之にひるんで、遂に御首級を上げ奉り得ぬ。母儀慶壽院は、はふり落つる老の涙を拭ひも敢へず、火の中に飛び入りて、一片の荼毘と消える。

血に饑ゑ不義にくらめる松永三好の黨は凱歌を揚げたが、大鬼小鬼は猶之にて物足れりとせず、公方の御弟北山の鹿苑院を欺いて之を害し、同じ御弟南都の門跡一乗院覺慶へは番兵二十人を附けて囚の身とした。

人馬東西に馳せ違ひ、鯨波の聲洛中洛外に聞ゆれば帝を始め奉り、公卿殿上人より下庶民に至るまで、安い心はない。中にも最も安からぬは櫻町中納言。三好三人衆の随一岩成主税助が公方を弑した餘勢に乗じては、如何なることを仕出かさうも知れぬ。懸想された鶴姫は一たび澪標に助けられたが、危険は刻一刻に逼る。

「大恩ある澪標さんが申しましたには、危いことありとならば、いつにても石山の奥へ御出でなされとのこと。洛中は物騒がしうござりまする。其石山の奥へしばし身を隠まいては如何でござりませう。」

「おう善う云うた。まこと、姫の云やる通り、三好のものどもが何としようも知れぬ。暫し身を隠すが屈竟であらう。石山の奥ならば心安うあらう。」

と、父子の相談は一決して、姫は二人三人の伴人を従へて江州へと志した。

輿にゆられ／＼て逢坂の山越えた處へ、

「これ其輿待つた。」

と、ばら／＼立ち現はれて、行手を遮るものがあつた。風は騒ぎ、雲は湧く。

## 七

「あゝこれ卒爾なことを致されな。」

と、庇ふ伴の一人を突きのけて、

「えゝ邪魔ひろぐな。」

と、怪しの曲者は眼に稜。

「公方の御身内が諸方に退轉致すとの取沙汰。定めし此乗物の主も其方であらうがな。」

「之はいかい迷惑。公方の御身内にてはござりませぬ。さる御方様、しかも女性の。」

「つべこべ申すな。」

立ち塞がり、さはさせじと爭ふ伴人を突き退け、刎ね退け、蹴倒し、打叩き、踏み倒して乗物擔いで足を空、小關越の方へ雲霞と逃げ去つた。

「これ何方かの家人と見えるが、砂埃にまみれ、塵芥を浴びて、如何致いて、それそのやうな處に轉びておざるぞ」

と、幾時の後、問ふは旅裝した女性。

「恥しうて悔しうてお物語も致されませぬ。腑甲斐ない身の生きては居られぬ仕儀。」

「ほゝ、何で其やうな弱音を吐きやる。年はちと老つておざれど、大の男の、しかも此騷がしい世の中に其樣なけちな、いゝ、さもしい憫れなことを申すことがおざらう。いづかたの家人ぢや。」

「櫻町中納言の。」

「おう、あの鶴姫殿の館の。」

「其鶴姫樣を江州石山にお伴致いたる途中を、云ひ甲斐なう、曲者に乘物ぐるみ奪られました。」

「何と、鶴姫殿を奪られたと云ひやるか。腑甲斐ないお人や。主人の姫を他人に奪られて、ようもようもおめ／＼生きては居られるぞ。お前はどのやうな面を致すぞ。見れば見るほど、どこやらに拔けた處が見える。えゝ腰拔武士、男の中の屑、刀は汚れぢや。舌でも嚙んで死に失せろ。」

淀みなく休みなく言ひ罵られて、驚いたのは彼の伴人頭、味方の伴人は言ひ甲斐なく何處へ去つたか薄情にも我のみ置き去りとなり、踏みつけられた腰骨の痛さに起きも上がらぬ處へ、現はれた女人、定めし優しい言葉をかけて同情を寄せて吳れると思ひきや、顏に似氣なく遠慮會釋もない、眞ッ向からの大罵倒。うつかりすれば、打もかゝらん風情に、重ね／＼の敗亡。えいやらやつと腰をさすりながら、半身を起して、

「あゝ痛。ぢやがこれ、御婦人、其やうに口汚く言ふものではござるまい。何處のお人か、見ず知らず緣も由緣もないに、仇のやうに云ひやるものでもござるまい。」

「緣も由緣も大ありであるわ。汝のやうな弱蟲に伴云ひつけた中納言も中納言ぢや。」

「ほう、緣も由緣もあるとお云ひやるか。」

「固よりぢや。石山の浮舟と云ふのは妾ぢや。」

と、云はれて又驚く伴人頭。

「さては石山の紫姫の館の姐御にてござらしたか。」

「姐御も何もあつたものではない。其曲者はどのやうな奴ぢや。岩成の仲間か、それとも追剝野武士でおざつたか。」

「公方の身内と譌りて、其乘物引擔ぎまいた。」

「すりや岩成ではおざるまい。追剝野武士ならば路用奪るか、衣剝ぐか、但しは女を勾引かすか。」

「其やうな樣子にてもおざりませなんだ。」

「そこで姫の行方が皆目知れぬか。どぢめ、白癡奴、愚者奴。汝のやうな益立たずを相手にしては鶴姫殿の生死のほどが心許ない。汝はそこにくたばり居らう。妾は之から一走りぢや。」

ひらりと裳を蹴れば、絲遊の燃えるが如く、蝶の舞ふが如く、忽ちのうちに姿を隱した。

姑くあつて、石場の水涯に其姿を現はしたる浮舟は、名詮自稱の小舟に乘つた。

「おう、先いつほど三井寺の下から美しい女人のさめ／＼と泣くのを中に三人四人の怪しのものが舟にて乘り出いたとな。耳寄りな。其舟の行方を追うて見事突きとめや。褒美は澤山遣はすに。」

と、云はれて、六挺艪に各々手をかけたる舟子ども、

「もう時間は懸け隔つたが、先方は二挺艪、味方は六挺艪、追ひつけぬこともござるまい。」

「いづれも手練の舟子衆や。見んごと仕つて、紫姫の恩賞にあづかれや。」

「おつと來た。急いだ／＼。」

と、舟子は艪を押す。岸に細波寄する太湖の水を切つて舟は弦を離れた箭のやうに一直線に今切を指して駛る。五月雨晴れの空に比叡比良の峯が拭はれたやうに、浴みしたやうに立つ。日は寒からず暑からず、初夏の爽涼な風が

心地よく其鬢の毛を弄る。

山々の青葉若葉は雨後の色いよ／＼鮮かに、唐崎の一つ松も一しほに翠濃くあつた。華やかな夕日が水の上に映ると、波に金色の光を碎く。堅田の浮見堂が夢のやうに見え初めた頃には、夕暮の色が遠くから近くに逼つて來た。三上山のあたりには雨後の月が大空に影られたやうに上つて居る。

「おり添へて、花も櫻川、水上清き、流れに浮む花すくはん、流るゝ花をすくはん。昔を戀慕の琵琶、幾世明石の浦漕ぐ舟もうかれ、こがれ／＼て見るたびに、色まさり行く秋の夜の月。」

と、清らかな、のんびりした、悠揚な調子で、唄ひながら、葦間をすつと漕ぎ離れた小舟がある。

「おう堅田の眞木柱さんではおざらぬか。」

と、浮舟は小手翳しながら聲をかける。

「これは浮舟さん、どこへぢやぞえ。」

眞木柱は小柄の、色白の、くつきりとした艶女であつた。

## 八

「何とおぢやる、女子を乘せた舟の行方とな。妾は其舟を見ずおざつたが、そりや大概日當がつくわ。此方さんが其やうに跡追うても益ないこと。まあ其行方を探すことは後にして、妾の隱家で、ゆるりと湯なと飲うで休みやれ。」

と、眞木柱は泰然として相談に乘つてもくれぬ樣子、

「其やうな呑氣なことは云うて居られぬ。ぢやが大概日當がつくと云やる其日當は、どこぢやぞえ。」

浮舟は氣が氣でならぬ。六挺艪が暫し其手を緩めらるのも何うやら惜しいやう。

「何の、そのやうに急くことがある。其姫は無事に居やる、心配には及ばぬわ。」

と、泰然自若は愈々加はるばかりである。

「えゝ辛氣な。急がしい時にお前のやうな落着き樣はきつい嫌ひ。さあ漕いだ。おさらばでおざる。」

と浮舟は焦氣味に別れようとする。

「ほゝゝゝ、此方さんはどこへ往きやるつもり。」

「其姫の行方を探しに。」

「當がおざるか。」

「さあそれは。探さば探されぬこともおざるまい。」

「ちと難うあろ。」

「さらばお前の日當を教へてたもれ。」

「さうお云やるならば教へても進ぜよう。觀音寺であろ。」

「何、觀音寺ぢやとえ。あの佐々木六角の」

「さうや。佐々木六角ならば其姫を惨うは致すまい。」

「如何さま、ぢやが、どうして佐々木六角があの姫を勾引かしたのであろ。」

「公方の弟御一乘院覺慶が南都から御身を脱け出し、使やつて、觀音寺へ賴まれたとか聞いた。ぢやが觀音寺はいつまでも公方のお味方ではおざらぬ。よしや其弟御に賴みを引受けても心からではない。けれど弟御の御内人には餘多の忠義の人がおさる。其人々が公方の御一族を助けん所存で、花洛からの落人を探いてくれと六角に賴みたる樣子、其姫御とやらも御一族と見違へられて、觀音寺へ御連れ出し申したのであろ。勾引ではおざるまい。」

「おう、お前の云やることは掌の上を指すやうではおざるが、それはまことかえ。」

「此眞木柱の云ふことに何の見當違履違があろ。」

「ぢやが、姫が觀音寺へお出でやつて、間違ひとあらば、其曉にどう致す。棄てられるか、慘い目に逢ふか、そりや分らぬではおざらぬか。」
「櫻町中納言の姫とあらば其やうな心配はおざるまい。岩成と六角とは相手が違ふぞえ。」
「それでも佐々木六角は義のある人でおざらぬ。利益にはつくが、義にはつき申さぬとの噂だ。」
「云やる通りぢや。ぢやが姫に差當つて危いことはない。其うちに、手段を致いて救はねばならぬが、さう此方さんのやうに急くには及ばぬぞえ。」
と、眞木柱の獨り呑み込んだ悠然たる態度に、浮舟もちと氣を挫かれたやう。
「まことさうでおざらうか。」
「何の、心配さんすな。妾によい手段がある。まづあれなる御堂の下へ船を着けや。」
と、眞木柱は先に艪を押して、浮見堂の下に其纜を繋いだ。
御堂の御灯は風に搖られてちらり〳〵。月は清光千里、大空を照らして、湖上一面に隈なく映える。波のうねる處、盡く銀を散らして、夜は靜かであつた。

「姫を助け出す工夫はおざらうか。」
と浮舟は又しても思案顏。
「高が佐々木六角、承禎入道が何で恐からう。六角の船が見えたらば、途にて脅かいて、苦もなう人質と致さば、鶴姫との取換はわけないこと。さあ此にて一休み致いたらば、妾が隱家へ立寄りて今宵はゆる〳〵休んだがよいわ。舟子は還しやれ、酒手は取らせう。」
と、懷かい探つて幾ひらの黃金、額づく舟子を跡に見て、眞木柱は、さつさと御堂を外へ出る。
「おう氣早な。眞木柱さんの性急は名うてでおざるが、さりとは餘り早速でおざりますたら。」
呆氣に取られた浮舟を振り向きもせず、
「早うおざれ、暖い飯も出來てある、お汁も煮えてある、鯉の膾も鮒の鮓もよい味である。今宵は奇しい客人で、隱家も賑ふわ。月を負うて家路に歸るも、いかい雅なことであるわいな。」
と、眞木柱は獨り上機嫌。浮舟は何が何やらさつぱり分らず、狐にでもつまゝれた體たらくである。
此時息せきあへず、駈け來つた一人の若人、
「姐御此にござつたか。」
「誰ぢや、源五か。」
と眞木柱は不審の眉をよせる。
「大事の注進にござりまする。」
「何ぢや、業々しい、靜にしやれ。石山の浮舟さんもお見やるに、人聞惡いた。」
と、たしなめられて、源五、頭を搔き、
「それはいかい失策りまいた。唯今坂本からの知らせには、明日三好三人衆が觀音寺に公方の弟御の御身を賴まれたと聞いて、軍兵を出いて、坂本から舟出せんとのことにござります。」
「おう、して其大將は。」
「岩成主税助とか聞きまいた。」
「えツ、岩成とな。いから面白うなつたわ。」
と、眞木柱よりは浮舟がまづ笑顏。眞木柱は却つて柳の眉を顰めて、
「ちと思案が入用でおざらう。」

## 九

江州矢島に忍びて、暫し世の動亂を避けたる故將軍義輝の御弟一乘院覺慶は、觀音寺の城主佐々木六角義賢入道承禎が嘗て管領代に補せられたる由緒もありたればとて、大館治部大輔宗貞を使として、偏に賴み思召す由仰せ

下されたが、承禎は辭を左右にして、さうなくは諸ひ奉らぬ。嫡子右衞門佐義弼はきつと案ずるところあつて、父承禎に打向ひ、

「公方が御生害あらせられては都の方もいかい動亂でおざらう。一乘院殿を迎へ奉るは、世の物議を釀し、思はぬ難儀を受くる恐もおざれば、暫くは御控へ然るべく存ずる。さりながら、都を落ちる人々のうちには、由緒家柄ある人々も多うおざれば、あるは隱まひ置いて、當家後日の計となすもよからうと存ずる。」

と、申せば、承禎も異議なき由を答へる。義弼は人を逢坂山小關越に遣つて物色させたるに、都よりさるやんごとなき上臈の落ちさせられると見て、ともかくもそれ連れ行かんと、斯くて鶴姫は計らずも囚の身となつたのである。

一乘院覺慶の御行方は三好三人衆が草を分け、探し出さんと尋ね求めたるに、近頃江州に在りて、佐々木六角を頼み給はんとの由傳へ聞いて、さらば、虛勢を張りて、佐々木六角を驚かしくれんと、岩成主稅助は坂本に滯陣して、東近江に渡るべく、云ひ觸らしたのである。

驚いたのは佐々木六角、早々に使を坂本に遣つて、其の他意なき由を陳ずると、岩成からは、さらば覺慶を欺いて、迎へ奉り、謀を廻らして討ち候へ、莫大の忠節たるべしとのことを申送る。利に敏く義に疎い佐々木親子は早くも思案を定めて、其儀承諾の旨を答へた。さらば其手筈してくれようと、主稅助は腹心の勇士數名と忍びやかに湖水を渡つて、觀音寺へと向つた。

觀音寺城では、當時威權飛ぶ鳥も落さんずる三好三人衆中での剛膽者岩成主稅助が自身來訪とのことで、上を下への騷動、義賢入道承禎は慌てふためいて、城門まで出迎へ、湖水を渡る涼風の吹き通す大廣間に請じて下へも置かぬもてなし。湖水の鮮魚を膾に汁にさまざまの饗應に、岩成主稅助も頗る滿足の體であつた。

衣笠山の東につゞいた清水鼻に立てる觀音寺城は、渺茫たる太湖一萬頃の水を望み、長風、老蘇の杜を吹いて颯々の聲を絕たず、麓に千手觀音を祀れる觀音寺ありて、香火常に市をなし、香烟縷々と立上る。佐々木氏は宇多源氏であつて、源三秀義に至り、中興の主と稱せられて、近江一國は其威風の靡く所であつた。愛知川を境として、南を江南、北を江北と稱したが、佐々木信綱の長子泰綱に至りて江南の六郡、滋賀、栗太、甲賀、野洲、蒲生、神崎を領し、京都大番邸の地名に依りて六角と名のり、觀音寺城に據りて守護職を襲いだ。泰綱の弟氏信は江北の六郡、愛知、犬上、坂田、淺井、伊香、高島を領し、同じく京都大番邸の地名に依りて京極と號し、伊吹上平城を居城とした。

今の觀音寺の城主義賢入道承禎は卽ち泰綱の八世の孫に當るのである。

「まことよい眺めでおざるなう。」

と、岩成主稅助は盃を銜みながら、靑々として涼風にそよぐ稻田を見下し、湖上に遠き眞帆片帆を望み、往き交ふ豆人寸馬を眼下に見ながらに、快げな面色。承禎扇子をぱちりぱちりと、

「いやもう御覽のとほりな片田舍、わざわざの御光來に何の御もてなしもござりませぬ。」

と、謙る。

「佐々木氏は代々の系圖正しい家柄なれば、さまざまの奇しいものもお傳へでござらうな。」

「ところが、代々武骨ものにおはり、とんと奇しい茶器賞玩のものもござりませぬ。岩成殿には書畫骨董などは御好物でござりまするか。」

「いや某とてもたゞの武骨者、古い骨董などおくるよりは、新しい美しいものがようござ

る。」
　と、あとは意味ありげな高笑ひ。老練なる承禎は早々もそれと推して、
「新しい美しいものは都の名物、江州あたりは田夫野人ばかりの里で、御覽に入れるほどなものもござりませぬ。ぢやが岩成殿、近頃奇しい美しいものが手に入りまいた。」
「ほう、それは一段と興ある話。一體そりや何でおざる。」
　と、好色者の岩成は耳を立てる。座に侍る嫡子義弼は目でそれ云ふなと父承禎に知らせうとしたが、承禎は一向氣のつかぬ樣。
「都よりの落人にてござれば、それは〱美しいものでござりまする。」
「何とな、都よりの落人と申さるゝか。如何なものでござる。」
　と、岩成は膝の進むを覺えぬ。
「さる公卿衆の息女にござりまする。」
「あいや父上。」
　と、義弼は、たまらず聲をかけた。
「何と申す。」
「ありや明日あたり都より迎が來ると申しまする。」
「迎がとな。そりや誰より申傳へたのでござる。」
　岩成は父子の問答を耳に入れず、
「其公卿衆は誰と申す。」
「櫻町中納言とやら聞きまいた。」

＋

　思はぬ楚囚の身となつて、觀音寺に憂き月日を送る鶴姫には又もや災難が降つて湧いた。櫻町中納言の息女と聞いた岩成主稅助の喜は云ふも愚である。
「何、櫻町中納言の息女とな。鶴姫でござらう。奇しい緣ぢや。」
　と、云ひかけたが、彼もさるもの、忽ちに胸に一計を案じ、
「其鶴姫の行方定かならで父中納言の心配は一方でござらぬ。某に其姫の行方を探し出いてくれとの賴み。某も遠くは四國九州より、近くは畿內のあたりを探いたが皆目知れぬ。とつおいつ思案に餘つてござつたが、こりや善いこと聞いた。明日は其鶴姫伴うて都へ還るでござらう。」
　と、さて改めて、
「入道殿、御身の手柄は莫大ぢや。いづれは中納言が折あらば朝廷に執奏申し、お身の官位も昇進致すでござらう。又某よりも禮を致いて、然るべき報を致すでおざらう。」
　聞く承禎はほく〱もの、
「辱なうござる。よしなに賴みまする。」
　と、式代して、さて義弼を顧み、
「倅出來しをつた。汝が當家後日の計のため落人のさるべき人を匿まひ申せと云ひ居つたは、まこと先見の明がござる。岩成殿には此やうに賞めちぎられ、櫻町中納言からは官位昇進の執奏もあらうと云ふことぢや。佐々木六角の家運到來。これも汝が發明からの致す所ぢや。若年ものは老人より見ると、莫、腑甲斐なうござるが、此やうなことになると、老人の此入道より、若年の汝の方が遙かまさつてござる。」
　と、入道承禎は滿面に笑を含んでの喜び。猶も足らでか、向き返つて岩成に打ち向ひ、
「岩成殿の前で此やうなこと申すは、ちと口幅つたい儀にはござれど、倅義弼は幼年より利發な性でござり申した。弓矢の道も暗からずござるが、取り別け善う物の行末を見まする。其鶴姫殿を當家に隱まひたるは、倅が智慧分別からにてござりまする。某の面目、まつた家の面目を致しくれたは、皆此奴がなせる業にておざ

りまする。岩成殿賞めて下されませ。」

　苦々しいほどの息子自慢ではあつたが、さうして見ると、岩成に取りて、義弼は結ぶの神、大恩人と、岩成も心から之を辱なう思ひ、

「おう然やうでござつたか、右衛門佐義弼殿の智略は實に敬服の外はおざらぬ。江南も善い若大將を得て、目出たうござる。右衛門佐殿にも某より厚く御禮致すでござらう。」

と、扇子で煽ぎ立てんばかりの賞讚も、右衛門佐心中には大の不平。

「何の、某が智略でござらう。」

と、返事もよそ〳〵しい。

と、云ふのは右衛門佐義弼は夙うより鶴姫に懸想して居る。城主の嫡子の勢ひ、口說きつ賺しつ脅しつしたが鶴姫は柳に風、あまり手嚴しう刎ねつけては、後難も計り難いから、よいやうに一日一日を送る其苦しさ、折あらば此苦患を遁れよう、事成らずば湖水の藻屑とならうと心に決めて、隙をば折をば覗つたが、義弼は些とも油斷せず、鶴姫は客人取扱とは名ばかり、まことは監禁の有樣であつた。

　戀に囚はれた義弼は、今目前に此戀を打破られようとするのである。父承禎はそれと推する由はなかつた。蛇の道は蛇で、義弼は岩成を怪しの大敵と敏くも睨んだ。若しまこと櫻町中納言の頼みを受けて鶴姫の行方を岩成が探して居るとすれば、岩成に頼うで月下氷人となつても貰はう。けれども岩成は名うての好色者、京に居れば鶴姫の美貌の噂も聞いて居らう。之を手柄に自らが無理無體にも横奪するのではあるまいか。大地を打ち外づすことはあるとも此想像は間違あらずと、嫉妬の炎はぱつと火の手を揚げた。

　けれども足下に急に湧いたる熱泉同樣、義弼の思案は急に浮ばぬ。

「父上、明日京よりの迎を如何仕らう。」

　京よりの迎とは前にも一度云ひ放つたが、もとより咄嗟の作事である。しかし何等か方便を設けて、岩成を妨げねばならぬと、又此に繰返した。しかし、此作事は見事失敗して、何等の功を奏さずあつた。しかし其の奏さないのは當然である。岩成は明日連れ行かうと云ふのである。

「其迎の人々と諸共に某は姫を伴れ申さう。」

　岩成も此う云ふものゝ多少の不安な感がある。まことの迎ならば、姫を岩成諸共連れ申すことは否むであらう。けれども、高の知れた公卿付を追ひ拂ふは苦もないこと。但恐しいは其迎が石山の勇婦どもであつたならば一大事である。しかし恐らくさうではあるまい。

「其迎のものと申すは中納言の家の子どもでござらうな。」

と、やゝ不安の岩成は試にかまをかけた。

「いや、さにはござりませぬ。中納言殿より姫の行方を頼うだ、さる武家とか聞きまいた。」

と、義弼は絶體絶命、思ひ切つて虛事を云ふ。

聞く承禎は不審の顏。

「其やうなことをいつ誰が申參つた。某は更に聞かぬ。またよしや其やうなことがあらうとも、怪しのものに姫を渡すことは叶はぬ。岩成殿が御伴ひあらば、之に上増すことはござらぬ。」

「入道殿の申さるゝ通りぢや、何より祝着な儀でおざる。今一つお注ぎやれ、祝ひの酒酌まうずに。」

と、岩成は大の機嫌。義弼の心中は千波萬波、海嘯が押し來るやうである。

# 十一

「姫樣、御膳を召し上がりませぬか。」

　五十ばかりの老女の、髮の薄い、齒齦の現はれた、相の惡い、憎々しいのが斯う云つた。

「否ぢや、食べたうはない。」
と、辛氣なく云ふは、鶴姫。年は十七八の、匂ひも深い艶女。涙に褪せてか、艶々しい花の顔も凄いまでに蒼白い。
「そのやうな駄々をこねさせられては、お身體に善うおざりませぬ。いづれは此城の主の御嫡子右衛門佐様の御臺にならせ給ふ姫様がお勝れなされぬやうでは案じられまする。さあ機嫌直いて一口召し上がりませ。」
「何のいなう、無禮言はしやんすな。何で妾が右衛門佐とやらの配偶にならう。妾は食絶ちて、死なうが望みぢや、構はしやんすな。」
と、柳の眉はぴりゝと動いて、星の眦は眞正面に老女の顔を射た。
「おう恐やなう。さらばお氣に入りの紅梅でも呼びませうず。」
と、意地悪な老女は立上り、廊下に出で、
「紅梅殿々々。」
と、太い聲にて高らかに呼ぶ。
「あい、瀧川様、呼ばしやんしたか。」
「呼うだとも。用があるから呼うだのぢやぞえ。お前はあの、天の邪鬼のやうな、姫様にお氣に入りぢや。御膳を參らせて、たんと食べさせてくりやれ。輿入前の女子が食べでは、はて心許な。」
と、云ひさま行き過ぎる。紅梅と云ふは二十ばかりのふつくりした愛嬌もの、しとやかに姫の居間に打通り、
「お城へやんごとないお客が見えさせられ、御酒宴でちと忙しうおざりまいて、今日はゆるりと姫様にお目通りも致しませなんだ。お許し下されませ。」
紅梅と見て、鶴姫も莞爾、
「そのやうなことあつてか。汝が見えぬで、妾もいかい賴なうおざつた。」
と、紅梅は聲を潜め、
「姫様、今日のお客が姫様のこと噂致して居りましたとかでおざりまする。」
「そのお客とはどのやうなお人ぢや。」
「岩成主税助殿とやら申しまするげな。」
「えツ、何、岩成。」
と驚きの聲を放つた鶴姫の面色は、さつとかはりて氣でも失はんばかり。紅梅あなやと驚き、
「姫様如何なされました。」
「紅梅殿、湯一つ。」
と紅梅が注いで差出す白湯一息に飲み乾し、
「妾をつけ覘ふ仇ぢや。其岩成の爲に此やうな憂目に逢うて居るのであるわ。」
と、手短に事の始終を語れば、紅梅、
「其お心配には及びませぬ。右衛門佐様が姫様に懸想致いて居られまする。何で姫様を其岩成風情にお渡しなされませう。」
と云ひながら小首を傾け、
「今宵のうちに屹度變事がおざりませう。妾の推察では、右衛門佐様が姫様を何處へかお連れ出いて隱まふことゝ存じまする。」
「おう嫌やなう。身に降りかゝる難儀があらば、妾はもう自害するばかり。覺悟は夙うから極めて居るぞや。」
「さうお早まりなされまするな。右衛門佐様がお連れ出し致さうとならば紅梅を伴にと仰せ下されませ。此紅梅が身に替へてもお助け申しませうず。」
「忝ない。敵のうちにも思はぬ味方がある。賴のない妾は汝を唯一人の賴と致いとるぞえ。聞けば汝はもと此處の佐々木に亡ぼされた、志那の家人の子とやら。」
「あれ姫様、どうして貴方様は其様なこと御存じで。」
「あの瀧川とやら云ふ意地悪な老女が汝を讒訴

して申したわ。」

「ほう、あの嫗は右衞門佐樣に、悪智慧つける古狐におざりまする。」

折から廊下に人の氣配がするので、兩女は話をばつたり止める。

夜に入つて、灯がとぼる。表の大廣間の酒宴は管絃の合奏、女の舞などあつて、一段と興を添へる。岩成主税助の機嫌は斜ならず、明日は其鶴姫連れ立ちて歸洛との下心があるから、はしやぐことは一方でない。其の岩成のはしやぐにつけて、物案じ顏なるは佐々木右衞門佐。酒宴半ばにつと立ち上つて、

「古賀六々々。」

とつゞけざまに呼ぶ。腹心の田上古賀六に耳打すれば古賀六合點して、

「さらば乘物一梃、よろしうござりまする。其附き添うて、仁保川の邊まで、心得まいた。あれから舟にて長命寺へ。御心配には及びませぬ。合點々々。」

と、古賀六が會釋して入らんとするを、廊下で、

と、呼び止めたるは、舞姿の紅梅。

「これ古賀六殿、」

「古賀六殿は鶴姫樣を御連れ立い申さうとするのであらう。其お伴にはお前の外に、妾をもと若殿よりの御意ぢや。」

「そりや聞かなんだが、まことか。」

「何の僞言はう。」

「如何にも姫には女子の伴が入る。さらば一所にござれ。」

## 十二

今宵は月の出が遲い。其暗の夜を便りに、表の御殿にちらつく歡樂の灯、歌ひ舞ひ笑ひさざめく酒宴の聲をあとにして、裏の城戸押開けて女の乘物一挺、靜に紛れ出た。乘物の主は鶴姫、あとべにつき從へるは、田上の古賀六と舞姿の侍女紅梅。

「其やうな身裝で歩行けるかなう。」

と、古賀六は紅梅を顧つて心配顏。

「歩行や水游ぎならば、何で男に負けようぞ。」

と、紅梅は唯一言の下に打消す。さして行く方は仁保川の水が溯水に流れて、星影を其急瀨の面に映す處、前栽の離殿には男女二人がひそ聲。

「これ瀧川、岩成殿があの鶴姫を懇望ぢや。明日の朝は京洛へ伴れて往なうと言はれる。絶體絶命ぢや。古賀六に沙汰致いて、今宵仁保川の邊から長命寺まで舟にて姫を伴れ行けと申した。ぢやが古賀六も男ぢや、姫の身が心許ない。もう今頃は裏の城戸を出よう。汝も直に乘物に打乘り、跡慕うて伴れだちくれや。」

と云ふは右衞門佐義弼。

「其やうなことなら早う此瀧川に仰せつけて下さらばよいもの。」

「なか〳〵に岩成殿が目を皿に致し、其暇が無うて。」

「さらば急いで參りませうず。」

「褒美は望次第ぢや。急げ。」

「心得まいた。」

と、瀧川は其離殿を出た。

此時植込みの蔭からすつくと現はれたのは岩成主税助に伴して來た熊野の平太。

「酒宴の席で、岩成殿がひそ〳〵の仰せには、此處の右衞門佐が、鶴姫を伴れ立たうと申すに、とかう故障を申す、必定曲事があらう、汝右衞門佐のあとつけて過怠致すなとのことでござつた。櫻町の鶴姫が此觀音寺に居ると云ふも怪體なことでござるが、其玉を無うしては一大事ござると、その右衞門佐が立つのを跡つけると、まさしく姫を遁さうとの手段ぢや。平太がおさる、右衞門佐狀面かくな。」

と獨語ちて、裏の城戸へと迪つた。

鶴姫の乗物のあとに從ひたる紅梅はさま〴〵の物案じ。

「古賀六は一筋縄ではゆかぬ奴。右衛門佐に善うないことを勸めるのは、表に古賀六と奥に瀧川とが居る。其古賀六が姫の御伴申さば、姫は遁るゝ途とてはあらぬ。さりとて力は飽くまで強く、惡智慧ありて、疑が深い。欺らにも、振り棄てうにも所詮其手段はあらぬ。あゝこれは何としたことであらう。」

古賀六は古賀六で、胸に一物を蓄いて居る。

「これは又好い運が向うた。若殿は根が餘り利發であらぬ。好色者であるが、智慧は足らぬ。岩成殿が鶴姫の在らぬに怒つたらば、さて何とする。觀音寺の沒落にならうとも知れぬ。古賀六に降つて湧いて來たのは、あの美しい鶴姫が手に入つたことぢや。まだ若殿の手に入らずを古賀六が手に入れる。はゝゝゝ、何とよい色男ではおざらぬか。若し鶴姫が此古賀六の言條を聞かねば、紅梅を我物として、鶴姫は岩成殿の許に差し上げて、莫大な褒美にありつかい。いづれに轉ぶとしても、よい運は缺かさぬうわ。」

乗物の中では鶴姫は悲みやら心配やらで、小さな胸を痛める。

「岩成の難を遁れたは疑ないが、さて此先はどうなる。右衛門佐の毒手を遁れうことは難うおざらう。紅梅が附き添うてくれるが、せめてもであれど、あれも女子ぢや。見るからに怖しげな古賀六の相手として所詮何事も仕出かすことはあるまい。えゝ儘よ、其場にならば身を棄てるばかりであるわ。」

あと慕ひ來る瀧川は瀧川で、乗物に搖られながら、さま〴〵の思案が浮み且つ消える。

「若殿も若殿ぢや。あの一癖も二癖も五癖十癖もある古賀六風情に何で姫を頼うだのでおざらう。うつかり致さば、古賀六の食物になるは必定。此瀧川があらうほどは、古賀六風情に獨りで旨い汁を啜らせることはないが、相手としては古賀六、ちと瀧川に荷が重い。慾深で、其上淫りがはしい奴。尤も此瀧川も古賀六には引けを取らぬ慾もあり、淫でもあるが、あいつは惡黨、此瀧川はさほどでもおざらぬ。何とか致いて古賀六を手馴づけるか、さもなくば捲いてくれずばならぬ。」

其乗物の跡追ひかくる熊野の平太はほく〳〵もの。

「はてさて面白いことになりよつた。あの瀧川とか云ふ、惡々しい老女は平太の一蹴りにも當らぬ。まつた古賀六とやらいふ伴人、どのやうな奴か、妨げ致さば切つて棄てるばかり。それからあとは、鶴姫奪つて岩成殿へ進上し、平太の立身出世は疑ひなしぢや。よい時に伴して參つた。昨夜の夢見が別に善うもなかつたが、よいはめになつたぞ。」

行く路は、辿る路は、一筋であるが、五人は五つの思ひをして、ひたすらに急ぐ。

觀音寺城内酒宴の場では、右衛門佐義弼、急難を遁れたは遁れたが、あとにどのやうな難儀が到來するやも知れぬと、不安の思ひで、起居もそは〳〵する。岩成もちと不安の心配がないでもないが、人物が人物だけに太平樂のありたけを盡して至極機嫌が好い。承禎入道は一切無我夢中、唯後日の恩賞昇進を夢みて、追從百出、ひたすらに岩成に酒をすゝめて、自分も一さし立つて舞ふ目出たさ加減。

## 十三

瀧川が舟を探してゐたうちに、鶴姫一行の舟は既に遠く渚を離れた。熊野の平太が不知案内の戸惑したうちに二つの舟は遥か川を下つた。逃げるものと、跡慕ふものと、追ひかけるものとは、陸から水に、駕籠から舟に、乗り移つて、

追ひつ、追はれつして、一筋の川路を湖水へと流れた。

空には雲の起居唯ならずして、漸うに指し上つた月も隠見定かならぬ、唯朧に四邊は白うあつた。

「おいなう、其舟待つて。」

と瀧川は呼ばはる。

「瀧川さうな。」

と、古賀六は知らぬ顔。彼奴め跡追うたと見える、邪魔ものめと、心中に獨語く。

「瀧川殿の聲に能う似て居る。」

と、紅梅は苦笑ひ。なまじ邪魔ものゝ來ぬ先に遁け出さうとの胸の中。

鶴姫一行の舟は無言で、答へもなく、唯棹が水を打つばかり。

「古賀六殿やれやれ。」

呼ばはる聲が、頓に夜の寂しさを破る。

後ればせの熊野の平太は舟の中で地團太。舟夫もなくて、自分で水馴棹を操るが、ともすれば後れ勝。けれども舟夫とも四人乗せた舟と、二人乗せたのと、一人乗せたのとは、舟の重量に差別がある。平太の舟は一番小さい。從つて舟脚は早くあつたが、水路不案内の悲しさ、時々折々には洲に乗りかけることもある。鶴姫の舟まではでは瀧川の跡追ひかけたを知つたが、平太の舟があらうとは知らぬ。瀧川の舟とても固より先ばかりあせつて、後の舟には氣がつかない。

仁保川の淺い流が湖水に落ち込むほとりで、瀧川の舟は鶴姫の舟に追ひついた。

「古賀六殿、知らず顔とは胴慾なう。」

其聲もはや間近である。

「此古賀六はお主の命受けたもの、私の用には構ひ申されぬ。」

と、古賀六は空嘯く。

「汝がお主の命ならば、此瀧川もお主の命ぢや。其舟に乗せや。」

と、瀧川は舳に突つ立ち上る。

「いや成りませぬ。お主の沙汰が無うて、何で人を乗せることが出來よう。」

と、古賀六は、けんもほろゝ。

瀧川すかし見て、

「其舟には姫の外に誰やら女子が居るげぢや。紅梅であろ、何で物云はぬ。紅梅か居るのであろ。」

「居りまする〳〵。」

と、紅梅は小さな聲。

「何で紅梅が其舟に乗り居る。右衛門佐様は紅梅に伴せよとは仰せられぬ、此瀧川をとの御意ぢや。紅梅下いて、此妾を乗せや。」

「瀧川殿を乗せよとの御意はござらぬ。紅梅殿ならば姫の御伴に似つかはしい。お前のやうな老女は用ないこと。」

と、古賀六は取合はぬ。

瀧川の舟の舳が鶴姫の舟の艫に突き當らうとしたとき瀧川は、ひらりと身を躍らせうとしたが、古賀六、さうはさせじと、舟夫の棹ひつたくりて、瀧川の舟をえいやと突く。突かれて瀧川の舟は、ぐる〳〵〳〵。

「やあ、舟突いたな。」

と、瀧川の血相は變つたらしい。

「乗つて見よ、唯では置かぬ。」

と、古賀六は仁王立。斯うなつては事がむつかしい。老猾い瀧川ははや思案を固めた。

「ともかくもあの舟の跡ついて行きやれ。」

と、舟夫に命ずる。

此いさくさの間に平太の舟は近づいた。

「岩成殿からの仰せぢや。其舟遣らぬ。」

と、大音聲。あつと驚いたは、古賀六、瀧川、紅梅ばかりではない。鶴姫は蒼青になりて、舟の中に打俯した。

「何ぢや、怪しの曲者か、岩成殿の名を騙るのでござらう。」

と、古賀六は素知らぬ體。
「其舟返さぬとならば、觀音寺城の沒落と覺悟致せ。」
萬事休す、已むなし、高が敵は一人、其一人を切つて捨てるか、水の藻屑となして、遁れる所まで遁れようと、古賀六は度胸を据ゑる。
どしんと瀧川の舟に躍り入つたものがある。
「あれツ。」
と、金切聲上げる瀧川の襟首捉へて、舟の板間に押倒し、片足にてしつかと踏んで立つたる熊野の平太。已が舟をば手早く、此舟に繫いで、
「これ舟子、あの舟まで漕げ、褒美は望み次第。否と吐かせば、目に物見せて吳れるぞ。」
ぴかりと虛空に閃いたは、太刀拔いたと見える。
「心得まいた。刃物は眞平御免でござる。」
「はゝゝゝ、弱い奴ぢや。」
と、平太は高笑ひ。
見て取つたる古賀六も身支度しつかり。
「さあ來い。湖水の水を血潮に染めてくれよう。」
姫は半ば死したる風情。紅梅はしつかりもの。懷に呑んだる守り刀の目釘を濕し、すはとあらば、平太も古賀六も突かんとの所存。

## 十四

舟は流れ／＼て湖水に出た。蒼茫たる湖水は折からの風に波が高い。舟は一上一下、搖られ搖られて、ざんぶと波の飛沫がかゝる。
古賀六、定かならぬ足踏みしめて、
「早うござらぬか。待ちくたびれるぞ。觀音寺城の沒落などと大きなこと吐かすな。岩成殿の名を騙る曲者が何で恐かろ。」
と、飽くまでも曲者取扱ひ。
「騙りなどと、とぼけたこと吐くな。岩成殿の御内にさる者ありと知られた熊野の平太。其許の鶴姫殿には名も聞きつらう。」
半ば死したる鶴姫の耳に熊野の平太の名は百雷の頭上に落ちるやうに聞える。
「あれ熊野の平太と申すか。此妾をつけつねらひつする、恐しい奴であるわ。」
と、思はず聲を揚げる。
古賀六も斯う聞いては絕體絕命。
「熊野の平太でも、虎野の平太でも、此古賀六に逢うては長蛇に蛙、猫に鼠ぢや、取つちめて其皮など剝いでくれよう。」
と、虛勢の大音聲。
「これ熊野の平太殿、苦しい／＼、其足除けてたもれ。」
と、瀧川は息のつまるやうな悲痛な聲で、
「老婆、死損ひめ、どうせ右衞門佐に言ふない智慧つける古狐、古狸でもあらう。もうちつとの間ぢや。あの舟に己が乘り移るまでは辛抱しろ。ならぬとならば湖水の中へどんぶりこぢや。どちらが善いか。」
「あゝ切ない、苦しいけれど、土左衞門よりは、土足に踏まれて居る方がまだようおざる。」
「あはゝゝ。さうぢやろ／＼。まあちつとぢや。あの姫の舟で威張りくさる白癡者切つて捨てたらば、お前は姫の介添役にしてくれるわ。」
「そりや辱ない。さうなれば姫のお伴で京洛へ參りまする。」
「もう右衞門佐は見限りか。」
「見限りまするとも。沒落する觀音寺に何の用がある。岩成殿の奥につとめまする。其折には、これ熊野の平太殿とやら、よしなに取りなしてたもへ。」
「はゝゝゝ、これは現金ぢや。お前のやうな奴が獅子身中の蟲とやら申すものぢや。けれども毒も藥になることがある。よいわ、其折には此平太取りなしてやろ。」
「平太殿、ちと其足緩めてたもれ。苦しいわ、

死にさうな、死んでは岩成殿に仕へ申すことが叶ひませぬ。」

「はゝア、ちと踏み過ぎた。緩めてやろ。ぢやがこれ瀧川とやら。」

と、聲を潛め、

「あの姫はまことに手剛い。お前が岩成殿の許に參つたら、見事姫を殿の思ふ儘にさせるかなう。」

「そりや何でもないこと。あゝ又苦しい。平太殿、話すことがある。踏まへることやめにしてはたまはぬか。」

と、瀧川は中々に拔目がない。

「さらば許いて遣はす。さて何のやうな手段がある。」

「譯ないこと。あのやうな世間知らず、初めは厭ぢや〳〵と云ふは知れたこと。ちと骨は折れまするが、一度は手込に致いて、あとは又それゆるゆると殿の老練で參れば何でもないこと。」

「そりや知れたこと。お前に聞くまでもない。又右衛門佐が何で今まで姫を手に入れぬ。お前がついて居て、不手際千萬ぢやござらぬか。」

と、云はれて、瀧川はやゝ口籠り、

「あゝそれは。」

「それは何と申す。」

「右衛門佐様は年が若うて、氣ばかりいらいら、手練も腕もおざりませぬ。岩成殿は遙かに優つた手練もの。そりや一つには申されませぬ。」

「旨いこと吐かすな。」

「お見やれ、あの舟の田上の古賀六と、お前様とは雲と泥。岩成殿と右衛門佐様との相違も其やうにおざりまする。」

「追從申すな。ぢやが瀧川、岩成殿に仕へたらば、姫を程善う手馴づけさつしやれ。やあ、舟が遠うなつた。急いで漕げや。」

舟夫は嚇さるゝのが恐しさに、力限り根限りに鶴姫の舟へと近づける。

「田上の古賀六、我が手並のほどを知れや。」

と、熊野の平太は鶴姫の舟に躍り入らんとする。させじと、古賀六、舷にて、しつかと組みとめる。

「えゝ。」

とばかり、平太は古賀六を投げつけんとする拍子に、ひよろ〳〵、危くも舷踏み外さうとして、組んだ儘にどつかと鶴姫の舟に倒れる。

「あれツ。」

と、一聲、鶴姫は我知らず身を躍らして、飛び込んだるは、平太が乘り棄てた小舟、舟は一搖れゆれると、繫いだ繩がふツつり切れる。

「姫様、お待ち遊ばせ。」

と、狂氣の如く突つ立ちたる紅梅、つゞいて其小舟に飛び乘らんとして、瀧川の舟に躍り入る。

「紅梅待ちや。」

「何の、待たうかい。」

と、袂にすがる瀧川を邪慳に振り飛ばす。

舟は三艘、己も〳〵。鶴姫を載せた小舟は舟夫なしに湖水の眞中に漂ひ出づる。

## 十五

堅田の浮見堂のほとりに、波に搖られ〳〵て一艘の小舟が漂ひついた。其中には年若な女が息あるともなく横たはる。

「ひやあ、女子の死骸だ。善い女子が善え衣服着てゐるわ。蒼白う、齒を喰ひしばつて、もう息もない。」

と渚のほとりで、浦の大人小人がわい〳〵との取沙汰。其群集を押分けて、

「何、女子の死骸とな。」

と、小舟に近づいたるは、眞木村。

「まだ息がありけぢや。生きかへるやらも知れぬ。」

と、其女子の胸を押へて、えいやつと氣合をかけると、うんと一聲、女子は微に眼を見開いた。

「姫様なう。」

「何、姫様、誰も此にそのやうな人はあらぬ。」

「あゝさては姫様は浪に攫はれなされたか、それとも悪者どもの刃にかゝつて。こりや此處には斯うして居られぬ。」

と、立ち上らうとしたが、またばつたり後に倒れる。

「あゝ痛たゝ、ても口惜しい。」

「まあ氣を靜めや。一體汝はどなたぢや。どこからござつた。」

「觀音寺から參りました。紅梅と申す、はしたない女子、お助け下されて辱なう。」

「おう觀音寺の佐々木六角の館に奉公しやるか。」

「さやうにおざりまする。」

「其姫様と云ふは、どのやうなお人ぢや。」

「鶴姫様と申しまする、さる公卿衆のお姫様。」

「おう櫻町中納言の娘御か。」

「善うお知りなされまするなう。」

「知らいで何とせう。其鶴姫殿がどうなされて。」

「さればお聞きなされませ。」

と、手短に事の筋道を話して、

「其瀧川と申すいやな奴が取りすがるを突き飛ばしますると、又武者振りつく。組んづほぐれつ、えいと力任せに投げつけまするど、瀧川はもんどり打つて波の中へ眞ツ逆さま。其拍子に妾も舷で脾腹を打つたとまでは覺えて居りまするが、あとは無我夢中。」

「おうさうでおざつたか。其瀧川と云ふのは善い氣味なう。」

「心許ないは姫様の御行方。お前様は、どのやうなお方かは存じませねど、此浦の舟夫雇うて、妾の船をま一度、姫様探しにおやりなされて下さりませ。」

「まあ待ちや。其やうに急いでも、無益。妾も其姫のことにはちとかゝり合ひがおざれば、探いても見よう。汝まだ本腹致いて居らぬ。妾の庵でゆつくり休みや。」

と、眞木柱は、突つ立ち上り、陸に向つて、

「こや喃、乘物一挺持て來や。」

と云ふ。女ながらも石山娘子軍の別働隊として堅田の關門を守る一方の大將。大膽不敵で、決斷の早い眞木柱は此邊切つての勢力家。其一號令には堅田の漁師船子は水火の中にも飛び込まうと云ふのである。

「おつと合點ぢや。」

と、云ふ間もあらせず、渚に寄せたる女乘物一挺。

「さあ紅梅さんとやら、あれに乘りやれ。汝も氣遣であらうなれば、妾の名を語らう。石山の紫姫の配下に眞木柱と申すもの。其鶴姫殿は石山に迎へる筈であつたを手違うて、觀音寺へ參つたのぢや。妾が其行方は善う探さうほどに、ゆるりと養生しやれ。」

「あれ噂に聞きまする石山の御内のお人か、姫様からも其ことは聞きよりまいた。頼もしやなう。」

「さらば、あの駕で妾のむさくるしい庵室まで行きやれ。」

「有難うおざりまする。」

紅梅の乘物見送つて眞木柱は舟夫どもを集めての評定。

「棚なし小舟に獨り乘つた鶴姫。水に落ちたらば助からぬが、いづれは浪の上をそこはかとなく漂ふのであらう。敵人の手に落ちようよりは早う此方に引取りて、石山まで送り屆けるがよいぞ。」

と、それ〴〵に手分して行方を探させる。

「なう、それよりも面白いは岩成と右衞門佐との確執ぢや。手に入れた寶を失うたとならばあの岩成め、どのやうな難儀を觀音寺に持ち出さうも知れぬ。親入道は慾深の分らずや、倅の右衞門佐は色好みの智慧足らず、それに狐のやうな岩成、面白い取組なう。」

と、眞木柱は獨り興に入る。

「こりや此うして居られぬ。觀音寺の樣子が聞きたい。場合に依つては、右衞門佐唆いて岩成を攻めるか、岩成煽てて觀音寺を滅すか、鶴姫なんどのことは云はゞ大事の前の小事、浮舟さんやら澪標さんなどがいかい肩入れてでぢやが、高が公卿衆の娘、どうならうと大した事はない。それよりは岩成や觀音寺が相手に取つては面白い。取りわけあの公方の弟御は今に彼方此方放浪つておざる。奇い貨ぢや。一骨折つて、此方のものと致さば、石山の女子も天下の女子ぢや。おうそれよ、妾が直に參つて觀音寺を思ふが儘に致いてくれよう。」

と、眞木柱の姐御は甲斐々々しく、褄引つかけて、

「源五々々、支度しや。觀音寺まで早舟一艘、舟夫は汝と六人もありや澤山ぢや。」

と、姐御威勢がいゝ。

## 十六

「源五見や、あすこに一艘小舟がゐる。遠目ぢやが鬚黑の相の惡いのが一人で漕ぎ居る。昨夜の爭の片割ではおざらぬかなう。」

と、眞木柱はそなたを見つめる。

「仰せぢや。其お話の熊野の平太とやらではござりませぬか。」

と、源五と云ふ若人も舟漕ぐ手をやすめて、そなたを見る。

「さうならば何より善い餌ぢや。近づいて驚いてくれよう。」

六挺艪の舟は箭よりも早う、其小舟の影を追ふ。

「熊野の平太、待て。」

と、源五が呼ばはる。

「誰ぢや、此身を熊野の平太と呼ぶのは。やあ早舟が近づいた、女子が居る、怪體ぢや。」

と、小舟の主は此方を見守つて一心不亂。

「これ平太、古賀六をどう致いた。」

と、眞木柱は正面からの眞ツ向打ち。

「おう古賀六とな。湖の藻屑ぢや。してお前は。」

「そりや手柄であつたなう。」

と、早舟は、平太の小舟の横へぴたり。

「して鶴姫殿は。」

「皆目知れぬ。」

「瀧川と紅梅とは。」

「それも知れぬ。さう云ふお前は何ものぢや。」

「觀音寺まで使に參るもの。」

「何ぢや觀音寺への使者とな。どこからござつた。」

「此あたりからぢや。」

「何ぢや此あたりからとな。其使者の用は。」

「鶴姫殿助けたから、ちよと注進に參るのや。」

「えつ、鶴姫殿を助けたとか。そりや耳寄りな。どこにござる。」

と、平太は舷から首を出す。

「船の疲れやら心配で、半ば病人ぢやほどに我家へ匿まうてある。」

「お前の家にとな。そりやどこぢや。」

「さる處ぢや。」

「さる處とな。それでお前が其由を觀音寺へ知らせに參るのぢやな。」

「あゝさうぢや。」

「どうだ、物は相談。其鶴姫、此方へ渡いてはおくれぬか。」

「そりやならぬ。妾に取りて善い利得のある獲

物。お前などには渡されぬ。」
「善し、己が善い價で買うてやろ。」
「おほゝゝゝ、お前に何で鶴姫殿の身代ほどのお金があろ、お前には瀧川ぐらゐが丁度相當。」
「何吐かす。お前は鶴姫から聞いたか、善う昨夜のこと知り居る。さすれば觀音寺の味方ぢやな。」
「觀音寺でも岩成殿でもどちらでも、よい身代出す方へ賣らうと云ふ目算。何と善い商賣であらうがな。觀音寺と岩成殿と、どちらが善う買ふと思やる。」
「さうなう。そりや岩成殿ぢや。」
「當にならぬ。餘り金離れのよい岩成殿でもおざるまい。」
「さうなう。そりや此己にも受合はれぬ。ぢやが代物が代物、鶴姫と來てゐる。好色者のお主ぢや。ちとはずまうに。」
「其折にはこれ平太殿口添へしてたもれ。ちとはかすりを取らせうに。」
「白癡云ふな。此平太は命懸で、鶴姫の跡追うたのぢや。お前の手に入つたも、みんな此平太のお蔭。犬骨折つて鷹に取らせたと云ふもの。かすりだけでは平太承知が出來ぬ。半分づつ山分けにせい。」
慾に目のない平太は蟲のいゝことをほざく。
「山分けにするくらゐなら、右衛門佐に賣るわ。」
「そりやいかぬ。己が相談相手、其やうなことは金輪際させぬ。」
「何のいの。何でお前に善いことさせよう。」
平太は胸中に一物を蓄く。舟子は六人ありとも、高が身に寸鐵を帶びぬ徒。又相手は女子、尤も女子には大分懲りてゐるが、此女子は頰まで柔かさうな、見るからに愛嬌の滴るやうな美女、好色者の殿が見遁すまじい代物。口は達者だが、手は達者でござるまい。太刀拔いて驚しくれて、彼が鶴姫隱まふ處へ參り、鶴姫生捕にして、己一人が連れて戻らば、褒美は獨占、こりや又運が向いたわえと、心中ではほく／＼もの。
「どうぢや、女子。お前の方は六挺、此方は一挺、とても追ひつくことは叶はぬ。此平太も其舟へ乘せてはおくれぬか。さすれば、岩成殿への取なしは、平太善うせう。」
「いやぢや。お前よりさきへ、觀音寺に往き着かねば、妾の利得が薄い。賣る相手の定まらぬうちに、取引きは御免ぢやぞえ。」
「えゝ顏に似げない慾の深い女子ぢやぞ。」
と、云ふより早く平太は、ひらりと身を躍して眞木柱の舟へ飛び込んでどつかと尻持つく。
「こりや理不盡しろぐな。」
と、眞木柱がきつと睨むを、平太は平氣の平左。
「さあ、此舟をもとの處へ返して、尋常に鶴姫手渡しろ。」
と、すらりと拔いたる太刀を眞木柱の胸元に當てる。
「惡戯しやんすな。」
と、其太刀先拂ふより早く、纖手空にうなりを生じて、平太の鳩尾目蒐けて、當身の早業。悶絶せる平太を、冷かに見て、
「見掛によらぬ弱い奴なう。」
女子にかゝると、平太はどこまでも弱い奴。

## 十七

「尾張の織田彈正忠が新公方(義昭)をかくまひて、上洛致すと申すか。」
と、岩成主税助は觀音寺城の高樓にて血相變へた。之と相手する承禎入道も不安の面色。
「唯今織田からの牒狀が到着仕りまいた。御味方申せとのことにござる。」

「何と味方申せとな。して入道殿には何と所存さるゝ。」

「以ての外ぢや。織田は海道一の弓取今川治部大輔を桶狹間に攻め滅し、美濃の齋藤氏をも平げて、旭日の上る勢、彼が新公方を奉じて上洛致さば一大事でござる。」

「すりや敵は必と見て、加擔致さうとな。」

と、岩成は急き込むを、

「お待ちなされませ。」

と、承禎入道は悠々たる樣。すぐに言をつづけて、

「おやに依つて、其上洛を喰ひ止めようと存ずる。」

「おう、出來いた。流石は六角入道、見上げた。」

と、岩成は手にした扇子を開いて、打煽ぎながら賞めそやす。

「さらば官位昇進の事は……」

と、入道どこまでも慾に拔目がない。

「そりや、心得た。」

「鶴姫殿逐電にていたう難儀なこと仰せられたが、それで如何致いて。」

「もう分つた。入道殿云ひやるな、父ある娘の出て來る時があらば出て來よう。唯今は某は其やうなことにかゝはることは出來ぬわ。」

と、岩成も織田來の飛報に氣も動顚してゐるらしい。襖のあなたに立聞きしたる右衞門佐は獨り語。

「古賀六からの消息も、紅梅の音づれも聞えぬは、こりやどう致いたことぢや。さりながら昨夜から戀の敵の岩成殿がいかい怒ぢや。鶴姫手渡さぬとならば此城をも攻め滅さんとの意氣込であつたが、織田の上洛と聞いて、あれあのやうに周章てくさる。笑止なことや。も一つ驚かいてくれようか。」

と、早速の思案、襖をきりゝと開いて、

「父上、唯今北近江の小谷から使者が參りました。」

「何、淺井殿からとな。何と申し參つた。」

と、承禎入道はじろりと右衞門佐の方を見る。

「織田彈正の先陣が岐阜を出發致いたけにござりまする。」

「ふう、はや出發と申すか。」

「なかなか。京都に入つて三好三人衆を殲にせんとの所存、近江の北も南も早う新公方の下知に從へと申居るけにござりまする。」

默然と聞きゐたる岩成は、はや、たまらず立上り、

「京都が心許ない。さらば某は直に出發仕らう。入道殿、まつた右衞門佐殿も年來の芳志を忘れず、某どもに味方をも忘れ給ふな。」

「心得申した。さりながら、御所望の鶴姫は何と致しませうぞ。」

と、右衞門佐は冷かに岩成を見る。

「お身の心任せだ。此期に臨んで、某の心試か。味をやり居るな。」

と、岩成は憎々しげに云ひ放つ。

岩成主税助は這々の體にて、觀音寺城を立ち去らんとする、其門出の門前へ、

「岩成樣に申上げまする、唯今何方のものとも知れずこれ獻上してとのことにござりまする。」

と、恭しく、觀音寺の郎黨が箱を捧げる。

岩成はつき從ふ家人に、

「此地の名物か、家土産にか。誰からぢや。開いて見よ。」

と、沙汰すれば、

「心得ました。」

と、家人は箱の蓋に手をかけ、やをら開いて取り出したものは、これはしたり、熊野の平太

の首級。
「あつ。」
驚いたものは家人ばかりではない、岩成はためつすかしつ、
「やあ、熊野の平太の首級ぢやないか。さては、謀られたな。うゝ。」
と、ばかり其儘そこを動きもせやらぬ。
「馬ぢや、陸路ぢや。舟路にては又どのやうなことが出來ようも知れぬ。」
と云ひながら、見送れる右衞門佐の面をくわつと睨む。「覺えて居れよ」と云ひかねまじい風情。入道も右衞門佐も唯あつとばかりに呆氣に取られる。
出で行く岩成のあと見送りて承禎入道、
「どうぢや、倅。汝が了簡違ひから途方もない危い目に逢はうと致いた。また織田からの使者は來ぬが、いづれは其樣なことと思ひ定めて岩成奴を驚かいて、立たせてくれた。阿呆奴、公卿なんどの娘に執心致すな。」
「はつ、某も其樣な儀と存じまして、淺井殿の使者を作事致しました。」
「はゝア軍師ぢやなう。鶴姫で得られる官位の昇進を汝が水泡に致いた。さりながら織田の上洛で、又約束致いた。さりながらあの公卿衆の[illegible]は如何致いた。」
「それが皆目消息が知れかねまする。」
「何汝が隱したのであらう。」
「何の、そのやうなことがござりませう。」

## 十八

蘆間に小舟繫いで吉左右を待ち、其注進によりては觀音寺城へ乘り込まんとする眞木柱。
「熊野の平太とやらの首級斬つて送り屆けた上は、岩成と左京大夫との破裂は必定。其虛につけ入つて、岩成討つか、觀音寺を滅すか、二つに一つ間違ふことはあるまい。」
と、北叟笑んだるところへ慌しく駈けつけ來た舟子に出立ちたる壯者一人。
「姐御、見ん事目論見が外れやした。」
「そりや、どうして。」
と、眞木柱は思はず半身を乘り出す。
「織田彈正が新公方を奉じて上洛を聞いたる岩成は觀音寺と急に仲直り致いて、陸路を京へと駈け向ひたる儀にござる。」
「何ぢや、觀音寺と仲直り致いたとか。平太の首級も役立たずか。」
「其やうな儀にござる。」
「えつ、失つたか。俄に降つて湧いたる織田の上洛、はてとて是非に及ばぬ。さらば又[illegible]田へ戻らうか。」
流石の眞木柱も悄然として舟引き返す彼方に二艘三艘の舟に嚴しく物具つけたる兵乘せたるは、云はでもしるき觀音寺の兵船。
「何ぢやありや。」
と云ふ間もあらせず、眞木柱の舟を指して飛ぶが如くに漕ぎ寄せる。
「其舟に乘つたる女人は何ものぢや。」
と聲をかけるものがある。
「これはさる姫君に奉公致すものでおざる。」
と、眞木柱は早速の機轉。
「さる姫君とはいづくの誰ぢや。」
「鶴姫殿と申す都の御方。」
「ほう我等は其鶴姫殿を探すものぢや。其處はいづくにござる。」
「ほゝゝ、容易うは云はれぬ。」
「何容易うは云はれぬとな。」
「大事の姫ぢや。うつかり隱家を名乘ることは出來ませぬ。」
「よいわ、うんと褒美くれよう。」
「口ばかりの褒美が何にならう。」
「まことぢや、まことぢや、神以て、弓矢八幡、虛事はつかぬ。」

「さらば、案内致さう。」

と、眞木柱の舟は先に立つた。

大うねり小うねりする湖水の波を、六挺艫は勇ましく堅田に向ふ。其驍さには觀音寺の兵船は後れ勝である。眞木柱の心中には堅田に近く誘き寄せて、其兵船を生捕りにせんとするのである。今切も間近い、眞木柱の計略は今方に火蓋を切らうとするのである。

「やあ、石山の船ぢや。」

と、六挺艫の若者が齊しく聲を揚げる。眞木柱も思はず突つ立ち上がる。

渚に近い處に五艘ばかりの舟が環を作る、其眞中に美々しく裝ひたる御座舟一艘。

「おう澪標さんも、浮舟さんも、篝火さんも、あれ幻さんも、横笛さんも、若菜さんも、明石さんも、之はお揃ひぢや。あの御座舟の中には紅梅と云ふ女子も見える。其側に笑顏作つてゐるは、どうやら鶴姫殿らしい。さては鶴姫殿の行方が分つて、石山から迎へに參つたと見える。」

後れ走せの觀音寺の兵船も此綺のやうな光景を見て、一切を會得した。

「一船引き返せ。あすこにゐるは石山の魔女どもぢや。手ぬかり致いた。案内と見せたるも彼等が仲間であつたよな。」

「我等も今さつと案じ出した。あの案内の舟に乘つたる女人は此邊切つての女猛者眞木柱であつたるわ。」

「何、堅田の眞木柱とな。恐しや、急いで漕ぎ戻せ。」

と、二艘の兵船は、ぐるりと舳を回したが、既にもう遲かつた。目敏く見たる眞木柱は、

「それ追つ驅けよ。」

と令する。石山の兵船も眞木柱と見るより、澪標、浮舟、篝火の面々は、

「堅田の舟に加勢致せ。」

と沙汰する。

石山堅田の舟子は湖上にては向ふもののない手練の漕手。曳々々の懸聲に水を切り波を切り、舟は一文字にすべる。觀音寺の兵船は見る見る圓陣の眞中に孤城のやうに浮いた。

「降參致せ、兜を脱げ。ならぬとならば、其舟の胴に穴明けて沈めてくれるわ。」

と、呼ばはり／＼環は次第に小さく迫る。天晴れ武者の觀音寺の勇士も水の上では、もうどうすることも得ならぬ。

「降參致す。」

と、兵船二艘の兵二十餘人一同、おめ／＼と娘子軍の捕虜となる。

「眞木柱さん、よいお手柄ぢや。」

「何の、皆お前さんたちの力であるわ。」

「鶴姫殿の棚なし小舟を救うた浮舟さんからの知らせで、妾達が石山から參つて、堅田に立寄ると、眞木柱さんは留守、觀音寺へ往かれたと聞いて、紅梅と云ふ女子を連れ、一同お前を迎へかた／＼此まで來て、お前の手助致いたは勿怪の幸であつた。」

と、澪標は晴々しく云ふ。

「さらば皆さん、凱歌揚げて堅田へ寄らんせ。」

華やかに照る湖上の光の裡に、美女艷女の一群の舟は、鮮に彩られながらに流れた。

# 柳屋お藤

一

空に木枯がさつと吹くと、黄ばんだ銀杏の落葉がさら／＼と疵を打つて、ひらり／＼と舞ふ。けれども其樹の下は往き交ふ人、佇む人で、冬をも知らぬ風情である。

「もしちよいと、私には源氏匂ひ五倍子を下さんせ。」

「あい／＼。」

「私には其楊枝を。」

「あい／＼。」

「私には酒中花を。」

「あい／＼。」

「はゝアお藤さんが目の廻るやうだ。」

「目が廻つたらば、一段と人だかりがするであらう。」

「違ひねい。其時には己が介抱役か。」

「何の、この菜が仕らう。」

「女の美いのにはなりていものだね。」

「源水の獨樂や、小六の球よりか、柳屋の方が賑ふなんて、全く女の美い徳さ。」

と、素見の下馬評も聞える。

其店先をうろ／＼と往きつ戻りつするのは三十路に餘る、色白なお武家。黒羽二重の羽織、黒龍門の小袖に小紋の下着、御納戸の緞子の帯に細身の落しざし。

「もしえ武左樣。」

と呼ばれて、はつと氣がつき、

「おう半公か。久しいなう。」

「きついお見限りでござえやす。」

「上の御用向が忙しいので、つい無沙汰を致し居る。皆々達者かなう。」

「有難うござえやす。して武左樣には今日は御參詣でござえやすか。」

「さればさ、橋場のさる所まで參つた歸り、觀音へ一寸參詣致して。」

「それは御信心のことで。ではござえやせうが。」

と、半公はいやな笑ひをする。此半公と云ふのはさる茶屋の息子株。棧留關東縞の綿入に、花色繻子の帯をしめて、草履をつつかけてゐる。

「武左樣、御信心が違ひ致しませんか。」

「何とな。」

「おゝ耳寄りな話をさる所から聞きました。待つて戴きたいもので。」

「これ、人中でそのやうなことを申すな。あれへ參らう。」

「ではお供致しませう。」

やがて、並木のさる茶屋の奧まりたる處へ武左と半公とは陣取りて、差向ひ。

「半公も聞いたか。やはり順風耳だなう。」

「へゝゝゝ、淺草の地廻りでござえやす。憚りながら仲店地内奥山のことで此半公の耳に入らぬことはござえやせぬ。武左樣、あの評判な柳屋のお藤に御懸想とは流石に色師であらせられまするな。」

と云はれて、武左は腕を拱きて悄然たる體。

「半公苦しい、切ない胸のうちだ、察してくれ。笠森お仙と今樣の二美人、文調や春信の一枚繪に名を取つた評判娘。とても及ばぬ鯉の瀧登り、と云うて諦めは出來ず、ほと／＼思案が盡きて、此見やれこのやうに痩せほうけたわ。」

と二の腕を捲つて見せる。

「如何さまちとお痩せのやうだ。全く相手が相手、此容易ならずと見えまするが、袖入息子ではない大通の武左樣、思ひつかなはぬことはござえやすめえ。」

「ところがちと障がなささうで、落膽致して居るのだ。どうだ半公よい智慧はなからうかな。」

「さやうさ。」

と云つたぎり半公はしばらく無言。やゝあつて、

「ちとお當りなせえましたか。」

「當りも當り大當りと來たわ。」

「どうでござえやした。」

「所が聞いてくれ。ちと願ひのある身、當分男は禁物と申すわ。」

「成程な。」

「半公、手前までが其やうな便ないことを申しては、某の一命にかゝはる大事。」

「流石は名代の看板娘、えらい、全くえらい、いよ感服々々。」

「これ白癡め、其やうに感心する奴があるか。」

と武左は血相變へて怒つて見たが、しばらくしてほろり〳〵と涙を落す。半公慌てて、

「あれ、どうなせえました。」

「あゝつまらぬ憂世だ。聞いてくれ、此頃は何事も、ちつとも精が出ず、手につかず、うはの空だ。御用もとかく怠り勝、日がな夜つぴて、春信の似顔繪と睨めつくらを致す。間があれば淺草へ參つて、柳屋の前を往きつ戻りつ致す。せめて彼女の笑顏でも見たいと思ふが、どう致したものか、某の顏をちらりと見ると、彼女が横を向く。月のやうに照り渡つた顏が急に曇る、暈を被る。うつかり聲でもかけようものなら、雨でも降り出しさうな景色。此間も、聞いてくれ、楊枝を買はうと存じたるに、あいと返事をしたばかりで、ついと奥へ立つて其儘雲隱れであつた。半公察してくれ。」

「そら御尤でござえやす。だが、武左樣それはほん昔かえ。私をお擔ぎでは恐れ入谷でござえやすぜ。あんまりきつい御執心で、私は何うやら煙に卷かれるやうでござえやす。」

「何でそのやうなことを虚言吐かう。正眞僞りなしだ。あ、思うても切ない。はてどのやうにしようぞ。」

「武左樣、さあお燗が參りやした。一つ注ぎやせう。憂を拂ふ玉箒の酒なりと飲んで氣をお霽らしなされませ。」

「もう飲みたくない。」

「まあそのやうなことを言はずにお乾しなせえまし。ゆるりと分別も致しやせう。」

「半公善い分別があるかなら。」

「どうも相手が地女だけにちと面倒でごせえやす。」

「知れたことさ。手前にも似合はぬ言草だなう。」

「いつそ之は此うなせえまし。」

「どのやうにと申す。」

「思ひ切つておやめなせえまし。」

「えつ、思ひ切れとな。此奴め〳〵、能うも其やうなこと吐かし居るな、さあ了簡がならぬ、切つて棄てう、手は見せぬぞ。」

「御免〳〵。ほんの戯談を。」

「此場に臨んで戯談など申す奴があるか。不埒な獸物め。」

「これは手厳しい。よろしうござえやす、どうせ私は獸物、御相談相手にもなりますめえ。御免なせえまし、もう歸りやす。御ゆるりなせえまし。」

と半公はお辭儀一つして、ぴよいと立つ。

「これ〳〵待つて、手前もいやに氣が早いなう。」

「憚りながら江戸ッ子です。仕事も早いが、氣

も早うござえやす。」
「まあ〳〵坐つた〳〵。相談相手と頼む手前に見離されては某の取附く島がない。これさ機嫌直して一口乘つてくれろ。」
「そりや乘るなと仰しやつても乘りますがね。」
と、半公は立ちかけた腰をやをら下し、下しながらに手早く自分の前にある猪口をぐいと呑む。
「ところで半公、どう云ふ善い智慧がある。安心のためにちよつぴり聞かしてはくれぬかなう。」
「さやうさ、當人にぶつつかるより外にはござりやすめえ。」
「其當人にさう容易くぶつつかれるかなう。」
「それには武左樣、善い手段がござえやす、私がぶつかりやせう。」
「それは耳よりな。なんなら其席上に某を伴れて往つてはくれぬかなう。戀ひ焦れたお藤どのに面と向き合つて、あの花のやうな脣から鶯の初音のやうな聲をしんみりと聞かしてもらひたい。恥かしがつて、俯向き勝ちで、折々ちよい〳〵と愛嬌の滴る眼で見てもらひたいね。あゝ思つても何やらむず〳〵致す。」
「武左樣、其やうに彼女が恥かしがつたり、しなを作りませうか。あなたを見たら逃げると仰しやつたではごぜえませんか。」
「ほんにさうだつたなう。そんなら同席は叶はぬか。」
「お前樣が御一所なら飛んだ打壞でごぜえやすぜ。」
「あゝ〳〵。」
と、武左は溜息つく。
「よろしい。とにかく私がお藤さんに逢ひやせう。」
「そりや辱ない、流石は半公、手前だ。見事仕つてくれ。善い吉左右を待たうぜ。」
「呑込みやした。親船に乘つたと思つて御安心なせえまし。」
「ほんに安心が出來るかなう。」
「出來ますとも〳〵、大出來由良之助。」
「半公、ひどく安受合ひで何だかちと心配だなう。」
「何の、楠木孔明も跣足で逃げる妙策が此胸にごぜえやす。細工は流々、仕上げを御覽じろ。」
と、胸を一つとんと叩いて見せる。
「ほんにかえ。有難い、手前は某に取つて命の親だ。禮を云ふぞ。」
と、ひよつくり頭を下げて、やがて懷中から小粒を取出し二つ三つ紙に包み、
「ほんの前祝ひ、印に取つて置きやれ。」
と、半公の膝の前に投げ出す。
「武左樣、お禮ならば後でうんと頂きやす。まあこれは收めて置いて下つし。」
「何の、云はば手金だ。受取つて置いてくれ。」
「そいつはお氣の毒な。さあ武左樣、肴も參りやした。景氣をつけてお飲みなせえ。」
「其事々々。手前が受合つてくれたので、久し振で酒が旨い、某もよい男を懇意に持つたものさ。」
と、武左無上に嬉しがりて、頻りに盃の數を重ねる。
「斯う見えても半二は男でごぜえやす。色戀の取持、男達の懸引、喧嘩の出入、無盡の取入、何でも一切合切引受けまする。あちらでも半公と仰しやる、こちらでも半公と仰しやる。半公々々で身體は印だらけ、隙間もごぜえやせん。」
と、半公も大分お神酒が廻つていゝ氣なもの。
「ほんとに重寶な男だなう。」
「それに武左樣、お前樣の前だが、父女の子がわいわい申します。兄さん〳〵で忙しいくらゐ。ちとお福分が致したうごぜえやす。」

「はゝゝ、手前の自慢話か。それでも松葉屋の梅ケ枝が手前のことを利いた風と申し居つたぞ。」

「梅ケ枝風情の申すことが、何になりませう。」

と、口には云へど兄さん少からず、悄氣氣味。無言で酒を自暴にあふる。

「武左樣、お歸りに手前どもにお立寄り下せえませんか。」

「まあそれよりは吉左右を早う聞かしてくれ。氣が氣でならぬ今日此頃だ。茶屋小屋などへ入る氣は毛頭ないわ。」

「其やうにお氣が弱くつて、何で思ひごとが叶ひやせう。半二がついてゐやす。しつかりして下せえまし。」

「頼もしいやうで、頼もしくないな。」

「まだ其やうなことを宣ひなせえやすか。」

外では風の音がひゆう／＼聞える。

## 二

「其話ならもうよして下さんせ、聞きたうないぞえ。」

と、お藤は身體を斜に構へて、流眄に半二の顏を見る。

「ほい、之は失策つたか。だが姉さん、お藤さん、あの武左さんは、歴としたお武家、遊びはするが、根が堅人、無意氣なやうで意氣、半可通のやうなところもあるが、不通なところもある。町へもお出かけなさるが、別段之と云ふ深間もなし。御酒も猪口に三つか四つ。まあ譯のわかつた堅氣者。そのお人がお前へ首つ丈どころか、挺身打ち込んでのはまりやう。しかも目かけ手かけにしようと云ふのではなし。ほんとに内に直らせて、奥方と云はせようと云ふ、まあ結構な話。あんまり素氣なく斷らずに、何とか色好い返事をしては下さらぬか。」

と、半二は煙管の雁首を手焙のふちで一寸つゝつはたく。半二も一生懸命、見事此使命を果さうとの意氣込は凄じい。

「其思召は重々有難いが、こればつかりは堪忍して下さんせ。」

「と云ふのは、何を嫌つて。」

「私ア蟲が好かないの。」

「はてな、男ぶりだつて満更捨てたものでもなし、年もまだ三十三四の男盛り、お金もあり、身分もよし、まあ何から何まで揃つたお人、それを一概に蟲が好かねえとはお藤さん、些に之でもあるのかえ。」

と、親指を見せて、半二にやりとする。

「すかねえこと。私ア、半さん、斯う見えても堅造との評判はお前も聞いてであらう。其やうな違いのがありア、何も好き好んで看板娘にはなつてゐぬぞえ。けれども女子でござんす、一生獨身でゐるとか、男は持たぬとか、そんな大きな口幅つたいことは云ひますまい。どのやうな好きな男が出來るかも知れないが、どうか浮名は流したくない。又流さうと思つても、そりや私には出來ぬ業。まあお藤はいつまでも梅屋のお藤で置いて下さんせ。武左さんとやらのとこへ嫁いたら、世間ではお藤も出世した、いゝ的を射落したと云ふ噂も立たうが、私アそんな出世はきつい嫌ひ。また武左さんは見てさへ蟲唾が走る。おゝいや、すかんなう。」

「これは又きつい嫌ひやう。武左さんのどこが嫌ひだぞえ。」

「頭の先から足の爪先までみんな嫌ひさ。」

「はてさて、これはよい御挨拶だ。」

「武左さんの深切も能う知つとるわい。あゝ濟まないことゝも思ふぞえ。けれども私ア顏を見るもいや、話をするもいや、側にゐるもいや、思うてもいやでござんす。

「お藤さん、武左さんはお前のことを云ふと泣かぬばかりだ。心から焦れぬいて、これ半公、

拜む〳〵と手を合はさぬばかり。己も見るに見兼ねて、よろしい、一つ私が當つて見やせう、と受合つたんだ。どうだお藤さん、何とか己の顔も立ててはくれめえか。」

「半さん、そりやお前餘計なお世話だ。私が厭なら、挺でも鐵棒でも動きやせぬ。三百六十五日、朝から晩までお前が武左さんのために、私を口說いたつて、落ちつこはなしさ、そりや駄目さ。」

「そんなら一體どこが嫌ひ。」

「胡蠅いねえ。蟲が好かないと云ふのに。」

「どうして蟲が好かねえなう。」

「蟲に聞かなきや分らないさ。」

「其蟲はお前の蟲だ。お前が蟲に聞いて話してくれてもよささうなものだ。」

「お武家はお武家らしいがいゝ、あのお人のやうにいやににや〳〵したり、鬱いで見たり、店先をうろ〳〵して見たり、愚痴つぽかつたり、ちつともぴんとしたところがない。私アあゝ云ふのは大嫌ひさ。」

「お藤さん、そりやお前が無理と云ふもの、惚れりやみんなあゝなるのが當り前さ。惚れてゐてぴんとしてゐてどうらうじろ、女の子はみんな逃げてしまはア。お前はまた戀知らず、情知らず、分知らずだ。ちつとは勿體ねいと思ひや。」

「半さん、そりや私だつて女でさあ。戀とやらも情とやらも分とやらも知つてはゐます。又あのお人の思召を勿體ないとは思つてゐます。若し私が白規帳面の家の娘ならあのお人に義理立して一生寡婦で暮します。けれども楊枝店とは云へ、私を看板にしたり囮にしてお客を呼ぶ稼業の、どうせ雨風は末始終はいゝ旦那でも目つけて、左團扇で暮したいのでせう。萬年新造だつて、さういつまで看板にさらされるものぢやなし。どうせ其うちには鼻の下の長い、裕福な旦那でも持つが落ち、一生寡婦は思つたつて、通れるものでもなし。義理立しようつたつてそりや出來ません。此頃は一層つくづく思ふのよ、あのお人に一思ひに突き殺されでもしたら、戀の意地でお武家に殺されたと云つて、私の譽になるかも知れないつて。時々いやな夢を見て自分でうなされることもよくあります。あのお人だけは、どうしたものか、よくよくいやでいやでたまりません。勿體ないけれどいや、お氣の毒千萬だがいや、半さん察しておくれ。」

「ほんとによつぽど厭と見えるね。不思議なわけさ。」

「前世に仇か何かであつたんだらうさ。」

「違ひねえや。」

と、流石の半次も、もう此上に云ひ出す元氣も餘裕もない。暫くして、

「お藤さん、ほんとにお前は好いたとか岡惚れしたとか云ふことはねえのかえ。先き聞きや、戀も知つてる、情も知つてる、分も知つてると云ひなすつたが、戀や情を知るならば、お惚筋もある筈だが。」

「それがさ、戀と云ふもの、情と云ふもの、分と云ふものは、此んなものだらう、全くさうに違ひないと知つてはゐます。まあ云はゞ其理窟だけ知つてるのさ。所が理窟だけで實地はからつきしだめ。講釋は出來るが、自分では其經驗は皆目なし。又やつて見ようと云ふ氣もないのさ。親からあてがはれた旦那がそれほど嫌でなければ我慢もするが、自分で好いた好かれたと云ふ人を探さうと云ふ氣は微塵もないのさ。」

「成程なあ。堅い〳〵と云ふ評判は聞いてはゐたが、さうまで男嫌ひとは知らなかつた。」

「何、男が嫌ひではないが、まだ男で苦勞しようと云ふ氣がないのさ。」

「其口の下から、今にやいの〳〵と自分から入

り揚げるやうな騒ぎを仕出来すかも知れやしねえ。」

「そりや私だつて自分で受合ひはしないさ。今日のお藤と明日のお藤とは丸で人間が違ふやうになるかも知れず、堅い〳〵のお藤が柔かになるかも知れやしないさ。」

「そんなら食はず嫌ひだなう。」

「まあさうかも知れない。」

「安心は出来ねい方だね。」

「お説の通りさ。」

「アハヽヽ、笠森お仙のやうに男と手に手を取つての駈落も下さらねいが、お前のやうな食はず嫌ひも、食はすまでが骨が折れやすなう。」

「私アお仙さんが結句羨しいと、つく〳〵思ふのよ。」

と、お藤はしんみりする。

「はてな、あの浮氣なお仙が羨しいつて。」

「お仙さんは浮氣ぢやないのさ。ありや全く眞剣に違ひない、あれがほんとの戀だと思ひますあ。」

「成程そりやさうかも知れねいが、まあ云はば若気の至り、あの流行つ子が何も親兄弟を棄てゝ、可愛い男と駈落するにも當るめえ。飛んだ茶番が悲劇に化けた。あとに残つた業腹の親爺こそいゝ災難と云ふものさね。」

「そりやさうぢやありますまい。」

と、お藤の聲は低いが底力がある。断じて疑はざる自信がある。堅氣で名の通つたお藤、浮氣な噂は薬にしたくもないお藤、今の今まで色氣の有無をさへ疑はせたお藤としては、其言ふ所が異様に響く。半二は少し戸惑ひの體たらく、

「どうも可笑しい、どうも不思議だ。けれどもやつぱりお藤さん、そりや理窟ぢやねいかえ。」

「理窟は理窟、私アしみ〴〵お仙さんが幸だと思ひますよ。お仙さんの世界は其男と二人の世界です。其男あつてのお仙さん、お仙さんあつての男。二人の他に世界はない。何と云ふ、まあ仕合せでせう。世の中に外に望みもなければ慾も得もないのです。人の機嫌を取るにも及ばなけりや、お世辞を云ふにも當らず、二人で其世界のうちに、寝起をしてゐるのです。かうなりや苦しみも楽、難儀をしても其難儀。それで若しあの二人が毒でも飲んで心中するとか、刃物で刺し合つて相對死でもしたなら、これほど綺麗な一生涯はありますまい、ほんに極楽往生でせう。入黒子をしあつたり、しみ〴〵と語り合つたりする夜半を考へても、貰へつきたいほどいゝ境遇ね。」

お藤は斯う語りながら如何にも感に堪へ入つた風情で、恍惚してゐる。まるで自己催眠にでもかゝつたやうだ。半ば閉ぢた眼はさも嬉しさうに、弱々な姿はくの字なりに、觸らば散らん有様である。聞く半二は眼をぱちくりとして、お藤の意を捕捉し兼ねてゐる。

「笠森お仙とはいづれが菖蒲やら杜若やら差別のつかねお藤さんだ、思ふ男をこしらへようとすれば譯なしだ。何もお仙を羨むにも當りやすめえ。」

お藤の様子は俄然として異る。今が今まで恍惚して他人事ながら嬉しさうであつたのが、急に風雲起つて、黯然として楽まぬ。

「私にアそりや無理さ。思ふ男の出来るやうなお藤ぢやないの。理窟は知つてゐても、からつきし意氣地のない私、何で其やうな意氣事が出来ませう。お仙さんは戀に生きてますが、お藤は戀に死んでゐます。お仙さんは淺間が岳のやうなもの、火も噴きます、煙も吐きます。活氣が熾です。お藤は富士の山、寂然として、雪を背負つてゐます。胸の中に燃ゆる情がありません、火の氣がありません。」

黄蘭子は如何にも悲しく、淋しく、情なく、

濕氣つぽく、淋しく、陰氣に響いた。半二は、
「如何にもなあ。」
と、氣拔けのしたやうな返事をする。此調子ぢや此先き何を云ひ出されるかも知れぬ。武左さんの取次は到底脈がない。長居して、又々お藤の說法に中てられては一大事と、此時はツと氣がつくと同時に、急に寒さが身に沁みて、思はずぶる〳〵と身震ひする。
「美人と差向ひも寒いものだ。」
と、思はず口の中で獨語。
「どりやお暇としやせう。どうも御邪魔しました、お休みなせえ。」
と、ひよつくりお辭儀して、立ち上らんとすると、
「まあ久し振ですわ。半さんゆつくりなさいな。まだ色々とお話もあります。」
と、云はれて、
「いえどうしまして。此上又あてられては。」
「え、どうしたの。」
「何、こつちのことでごぜえやす。さよなら。」
と、半二は跡をも見ずに、さつさと出て行く。あとにはお藤の溜息。
「あゝあゝ、ほんとにくさ〳〵するよ。私アよつぽどどうかしてゐるよ。」
と、頸を半分襟の中に埋めながら、じつくりと思ひ入れ。
折から金龍山淺草寺の鐘がボーン。指折り數へて、
「おやもう四つだよ。」

三

「滅法界寒い晩だ。どんよりと曇つた空はどうせ時雨だらうと思つたが、たうとう雪になりやがつた。今年の初雪だが時も時にしちや早過ぎらあ。あゝ大きな綿みたやうな奴が無遠慮にも首つ玉へ入り込みやアがる。寢酒でも呑んでぐつすり暖けい蒲團の中へもぐり込みてえが、生憎今日は時化と來てゐらあ。三ちやんの懷はからつきし輕いや。いゝ鴨でもかゝりやいいに。」
懷で矢藏をこしらへた風體の惡い奴が、駒形の通りを藏前の方へと向ふ。其向うから來るのは、
〽淡雪と、消ゆる此身の、思ひ寢に、浮名を厭ふ戀の中、亂れしまゝの髮つきや、義理と云ふ字は是非もなく、夢か、うつゝか、朝烏。
と、中音に歌ひながら、微醉機嫌の寒さ知らず。二足三足やり過して、矢藏は振り返りざまに、
「おい、源太の大哥ぢやねえか。」
端唄は足を踏み止めて、
「誰だ、三公か。」
「大分御機嫌ですな。」
「はゝゝ、御馳走酒だ。」
「これからどけへ。」
「聞くだけ野暮さ。」
「どうかお伴を。」
「惡い所で惡い奴につかまつたなう。」
「惡い奴とはこりや近頃手嚴しい。さあお歩きなせえ。あとからそろり〳〵と參りやせう。」
「どうだ三公、不相變かな。」
「仰せの通り、今夜は寒いが、私のお腹も冷えてゐまさあ。」
「冷え切つてゐるのはお互樣だ。」
「それでも大哥などは御馳走酒かは知らねえが、端唄でも歌つて、此雪を寒いとも思はないやうな上機嫌。其落ちつく先は町と來りや、こりや餘つ程[illegible]けえね。其暁かみを、可哀さうだと思や、此三太にもちつとは分けて下せえ。」
「心得たと云ひてえが、冷つこいのはお前にひ

けは東るめえ、聞くだけ野暮だ、なんて大きなことを云つたが、全くの所當なしさ。どうだ一公、丁度いゝ相棒が出來た。町から早歸りのお店ものでもいすぶつて、何とか暖まらうぢやねえか。」

「大哥そりやほんとかえ。當にしようと思つたお前さんが當にならなきや、何しろしやうがねえ。それに此寒さ、此雪と來りや、おどかすやうな店ものも通りやアすめえ。歸らうと思ふ奴も又蒲團へもぐりこんで、まあ朝までお神輿が据らあ。大哥、頼みげえがねえなア。」

「あはゝゝゝ、さう愚癡をこぼさずに、まあ己のあとをついて來や。縞の財布の五十兩ぐれえころがつてるかも知れねえや。」

「又蹴戻りか。あゝ寒いや。」

と、愚癡たら／＼不平たら／＼であとにつく。

其雪の降る中をひそ／＼語らつて來る男女がある。聲音のやうすは確に若いもの同士、しめた、駈落ものらしい。

「おい源の大哥、鴨だぜ。」

「叱つ、聲が高え。」

と、雪明りに、前方を窺ふ氣色。

とは知らず、

「どうも本降りねえ。こんなことなら出て來るんぢやなかつた。」

「ほんとにさうだつた。」

「それに躓く拍子に、提灯の火を消しちやつて、始末が惡い。だけれど駈落にはまあ持つて來いの晩さ。芝居がかりで何だか嬉しいわねえ。」

「違えねえ、だがこつちは惡い役廻りさ。」

「けれどお前の顔を立ててやつて、此寒い晩に。」

「濟まねえが、もうそれは云ひつこなしさ。」

蛇の目と、番傘とが行き過ぎんとすると、路傍の天水桶の影からひよつくり出た源と三太。

「おい若えの、待ちねえ。」

「あら吃驚するわねえ。」

と、女は男に寄添ふ。

「此雪の降る寒い晩に若え同士がちゝくり合つての道行は云はずと知れた、こりやてつきり駈落者。己らの眼に入つた上は其儘無事にはやらねえ。」

「あら嬉しいわね、いよ／＼駈落者だよ。」

「まあお待ちなせえ。」

と、男は女を制して、

「手前達は何だ。」

「何だなどと聞くだけ野暮さ。男は大川へ拋り込んで、女は引攫ふばかり、覺悟しや。」

「こりや飛んでもねい目に逢ふの。」

「じたばたするな。」

女は蛇の目を斜に、

「お前たちは追剝か人攫ひか、御場所柄をもわきまへず、お惡戯でないよ。」

「へん生意氣な口の利きやうをするな。おい相棒、やつつけよう。」

と、二人は男の左右に寄る。男は少し身を引いて、

「あゝいけねえ。お前達は何だか知らねいか、駈落者ぢやねえんだ。間違つちやいけねいや。」

「いやに往生際の惡い野郎だ。疊んでしまへ。」

「あゝこれ疎相しちやいけねえ。」

と、男は岸へ上つて、逃腰になる。

「何だねえ見つともないわね。」

と、女は蛇の目を疊んで男の側にぴたりと寄り、

「からつきし意氣地がないのねえ。そんなことで駈落が出來るものかえ。」

「姉さん困るね、駈落でもねえのに。」

「惡者どもに駈落者と見られたなんどは、ほん

とにおつだよ、お前お怒りよ。」
と、女は一向に恐るゝ風情もない。
「命だけは助けてやらあ、其代り親の金か主人の金か、くすね取つたのは洗ひ浚ひ、こゝに置いていけ。」
「そんなお金なんかはお生憎さま。」
「何と云ふ太え女だ、三公手を假しや。」
「心得た、源の大哥、女から片付けようか。」
と、兩人は女の袖を把へんとするを、蛇の目でぴしやり、傘の雪がぱつと散る。
「あゝ痛え。」
「冷てえ。」
「誰かと思や、太郎稲荷の源と田町の三公かえ。」
「あれ名を知つてるぜ、へえ、お前は誰だえ。」
「柳屋のお藤だよ。」
と、女の聲は凛然と夜陰に響く。
「何、お藤さんだと。こいつあ驚いた。」
と、二人ともに呆れ顔。
「ほんとに惡戯けた野郎どもだ。」
と、男もやう／＼我に返つて、ぬつとそこへ出る。
「お前さんは。」
「己を誰だと思ふ、つがもねえ。憚りながら山谷の半二さ。」
「おう半ちやんか。こいつは妙な所で逢つたものだ。それでも畜生、羨しい、お藤さんと出來てるとは、こりや己達アちつとも知らなかつた。半ちやん何か奢つてもらひてえ。」
「笑はせやがるな。駈落でもなけりや出來てもしねえ。今日は己が案内人やらお伴やらだ。」
「成程そりやさうだらう。さうなくつてはならぬ筈だ。」
「へん下らねい事にいやに感服しやアがる。面白くもねえ。」
「けれども此夜更に淺草第一の看板娘と道行とは、こりや全くいゝ役さ。ちとあやかりてえものだ。」
「まだあんなことを云やアがる。」
「そんなに眞面目くさつて辯解しなくつてもいいよ。誰がお前と駈落するなんと思ふものか。それよりか半さん、お前も餘つ程度胸のない男ね。先きはどうだえ、歯の根も合はずに、うつかりすりや私を棄てて逃げようとしたぢやないかえ。頼もしくない人ねえ。」
と、たしなめられて、半二、頭を掻き、
「いや全く嚇かされつちまつた。此奴らと知つたら一つづつも横つ面を張つてやるんだつたが。」
と、半二今になつてくやしがる。
「およしよ。喧嘩過ぎての棒ちぎりだ。まあそれでもいゝ學問をしたよ。男は口ほどにもないもんだと云ふことをしみ／＼さとつたよ。半さん有難う。」
「お藤さん、そいつア困るね。」
「雪の中でさういがみあつたつて始まらねえ。一體姉さんはこれからどけへ。」
と、二人は寒さうな樣子。酒手にありつきさうもないので、急に寒さが身に沁みる。
「そんなら話さう、まあお聞きよ。此半さんの懇意な人に武左さんと云ふさるお武家があつて、不束な此私に死ぬほど懸想したとやらだが、私ア大嫌ひ蟲が好かないのさ。所が其武左さんとやらが大時代の戀煩ひだか何だか知らないが此頃中大病で、藏前のさる家の寮にどつと床に就いてゐると云ふ話。どうか一目私の顔を見て死にたいと半さんに手を合はせての頼みに、どうか一度逢つてやつてくれとのこと。嫌で嫌でたまらぬ男だが、その儘若しひよんなことでもあつては第一私も寢覺が惡い。晝間は店の方が忙しいから、そんなら夜ちよつぴり逢つて上げようと斯う云つたのさ。」

「そりや善く云つてやりなすつた。いゝ功徳だ。」
「まあ默つてお聞きよ。そこで之が私の醉興さ。其醉興からお前たちに嚇かされたのさ。私はまだ惚れたとか晴れたとか云ふことは皆目知らないの。」
「如何さま、お前さんの浮氣な話は、つひぞ聞いたことがねえや。」
「さうだらう。けれど他所のお人の粹事は自分ながら羨しいと思ふね。」
「はてな。」
「あの笠森お仙さんが駈落したなんかは、つくづく羨しいと思ふわね。そこで今夜は嫌な嫌な武左さんとこへお見舞の序に、半さんにどうだえ、せめて駈落者の眞似でもしようと斯う云つたのさ。わざ／＼夜更を選んで、いゝ氣なものさね、駈落の狂言さ。ほんとに醉興だわね。其狂言がまんまと當つて、お前たちに嚇されるなんか、餘程甘く往つてお誂向きさ。御禮を云ふよ。」
「何だ、馬鹿々々しい。さうと知つたら嚇文句なんか竝べるんぢやなかつた。」
「それでも何だかお前たちの嚇文句はへまね。」
「お藤さんの方が餘ぽど度胸がいゝや。おかけで蛇の目でひどく擲られた。」
「雪が襟首へ入つたときなんか、ひやりとしたね。」
「お前たちと知つてりやあんな手荒いことをするんぢやなかつた。御免よ、其駄賃を上げよう。」
と、お藤はいくらか兩人の手に渡す。
「姉さん、こりや濟まねえが、有難うござえやす。」

四

「さあお藤さん、遠慮せずにずつとお入んなせえ。」
と、半二に導かれる儘、通つたは、川添ひの一間。表では閉め切つた戸をさら／＼と打つ雪の音と、忍び音に流れる大川の音。内では爐にかゝつた釜の湯がたぎつて、沸々と音を立ててゐる。
半二の姿は消えて、取り殘されたのはお藤一人、薄ら寒い風が襟元から吹き込むと、思はずぞつと總毛立つ。厭で厭でたまらぬ男の家へ來たかと思ふと、お藤は今更に急に怖氣がついて、さあ此先がどうなるものかと、ぢつと胸に手を中てた。
暫くは動悸が靜まらなかつたが、勝氣のお藤は度胸を定めた。どうせ殺されるならば殺されよう。無理往生に手込にしようとならば潔く一身を擲ちて操を守るばかり。かうなりや何の武左が恐からう。だが憎いは半二。欺されて、此まで連れ出された自分も馬鹿ではあるが、欺して此まで誘き出した半二の人でなしめと、お藤はきりゝと齒切する。
すうと襖が開いたので、お藤は流盻に之を見た。武左か、半二か、と思ひの外、これは如何に、色白な、優男の、誰かと思へば、女たらしで評判の高い藏前の札差の息子の清さん。
「藤ちやん、善く來て下すつた。」
と、爐の前へぴたりと坐る。
お藤だつて、女である。清さんが時折り店へ寄つて、二言三言お世辭を云ふ其言葉にはほだされて、其姿には見とれて、憎からず思つたこともないではない。けれども此清さんは名代の女たらし、うつかり其口車に乘せられて、玩弄にされては、柳屋お藤の名折れと、お藤はいつも警戒してゐた。いつそ一思ひにと思つたこともないではない。清さんからは呼出しも來る、手紙も來る、屆物もある。けれどもお藤は克己心が強い、自若の餘裕がある。若し清さんが初戀の

情をかけたならば、お藤も倶に戀に落ちたであらう。ただお藤は清さんをいかもの食ひと知つてゐる。憎くはないが、うつかり其手には乘らぬ。

武左のために骨折つて骨折りぬいてゐたと思つた半二は、いつの間にか清さんの味方であつた。之にはお藤も戸惑ひするほど驚いたのである。

「どうも此雪でさぞ困つたでせう。さあこちらへ、火へおあたんなさい。」

お藤は何とも返事をせぬ。

「藤ちやん、此に私がゐようとは定めし思ひがけなかつたでせうが、まあそれにはいろ／＼わけもありますさあ。ゆつくり聞いて戴きませう。」

と、清さんはいゝ氣なものである。

又すうと襖が開くと、十三四の女の子が膳を運ぶ、銚子を運ぶ、料理を運ぶ、小鴨の鍋を運ぶ。

「藤ちやん、何もないが、此雪の夜の折角の御入來。まあ一つ呑んで暖まつて下さい。」

と、云はれて、お藤は容を改め、

「清さん、妙な所でお目にかゝりますね。私は今夜半さんから懇々の頼みで、武左さんと云ふお人の病氣見舞に參つたのです。こゝはその武左さんがお寢みの寮ではござんせぬかえ。」

「其事も萬々承知、武左さんにも逢はせませう。なれどまあ寒さ凌ぎに。」

と、清さんは銚子を取る。

「私は不調法です。早う其武左さんに逢はせて下さいまし。」

「何も其樣に武左さんに焦れずとも。」

「何の焦れませう。厭な／＼武左さん、逢はずに、歸つてもようございます。」

と、お藤はやゝ血相を變へる。

「それも萬々承知。だが折角男がお酌をしようと云ふのです。一つ受けて下さいな。」

「御免下さいまし。」

と、云ひながら、お藤は起たんとする。清さん慌てて、

「何も藤ちやん、さう嫌はずともいゝぢやないかえ。初めてお目にかゝる清三郎でもござらぬ。人の胸の中をちつとは汲んで下さいな。」

「清さんは色師ねえ。」

と、お藤の目は眞正面に清さんの面を射た。清さん少からず面喰つたが、そこは清さん、アハヽヽと哄笑一番、

「戲談云つちやいけません。」

お藤は無言。

「藤ちやん、ほんとに眞劍ですぜ。此戀叶はずとならば、もう私は命も何も入りません。どうか藤ちやん、可哀想だと思つて下さいな。」

と、清さんは一生懸命。

まんざら厭でもないが、此うぺてんにかけられて、釣られたと思ふと、お藤もちと癪の種。

「どうも其思召は有難うございます。數ならぬ私をそれほどまでに思つて下さるのは嬉しうござんすけれど、唯今直に御即答は出來かねます。親もあります、兄弟もあります、一應相談もして見ねば、徒ら事と、人の口も五月蠅うございます。それに此頃は胸の中が色々とむしやくしやしてゐます。まあ相談やら、思案やらで、暫く其御返事はお待ち下さいまし。」

「藤ちやん、いやだよ、そんな一時逃れの返事は。色戀に何の相談がいらう、何の思案がいらう。そのやうな水臭いことは云ひつこなしさ。」

「云ひつこなしとは、そりやお前さんだけの獨り極。私の方には相談も入ります、思案も入ります。」

「いやに野暮臭いことを云ひなさるね。藤ちやんにも不似合な。まあ考へてもごらん。此まで

お前さんを誘き出すまでには、どのやうな苦勞や工夫をしたであらう。これほどまでの男の苦心をちと汲んでは下さらぬか。」

淸三さんしきりに口說き立てたが、お藤はいよいよ堅くなるばかり。淸三さんは、じれつたくて堪らない。

「藤ちやん、どうしてもいやかね。」

と、男の聲はちと峻しくなる。

「いやとは云ひません。いやか、いやでないかは、相談して思案してからの上でござんす。もう御用はそれだけですか。それなら、これで御免なさいまし。」

と、ひらりと身を交して、歸らうとする。

「あゝこれ待つて。」

「もう御用はございますまい。」

「大ありさ。」

「其やうな用を聽く耳は持ちませぬ。」

「これ藤ちやん、待ちなせえと云つたら、まあ素直に待つたら善からう。私も男だ、云ひだしたことは跡へは引かぬ。今まで口說いて刎ねつけられたのは憚りながらお前さん一人だ。此うなりや男の顏にかゝる、一分がすたれる。返事のしやうに依つては、此方にも覺悟がある。」

歸らうとすれば、飛びもかゝるべき勢。流石のお藤も少からず持て餘し氣味。

「淸さん、おどかしは御免なさいね。」

「何おどかしなものか。一生懸命さ。」

「男の一分がすたれるなら、女の一分をどうして下さんす。」

と、お藤も膽を据ゑて、喧嘩腰。

雲飛び、風急に、落花狼藉となるべきか。形勢は甚だ穩かでない。

隣の襖ががらりと開くと、半二がぬつと姿を現はす。目敏く見たお藤。

「この人でなしめ、よくもよくも欺しやんしたな。」

半二は莞爾笑つて、

「相變らず手剛いお藤坊だなあ。」

「何がお藤坊だらう。この野狐め。」

「まあ〳〵怒らずに。」

と、なだめて、淸さんを振返り、

「色男も形なしだな。」

「全くさ。」

と、淸さん、先の氣色もどこへやらで、頭を搔く。

「これなら武左さんも大滿足だらう。」

「如何さま、此己が斯うだもの。」

「武左さん、お聞きでしたか。」

と、半二振向くと、

「聞いてゐた〳〵。見ん事淸三も振りつけられたなう。」

と、襖の蔭から現はれ出たは武左、病氣の樣子もなく、至極丈夫さうな風體。煙に捲かれたのはお藤。

「こりや何と云ふことでござんす。」

「ちと擔いだ奴さ。」

と、半二はにこ〳〵顏。淸さんはつまらなさうに爐のへりへ意氣地なくぐたりと坐る。

「武左さんの思を切らさうと云ふ狂言さ。」

「其狂言に此己が使はれ、折角の色事を臺なしにしたなぞはいゝ役廻りさ。」

「それも平生御恩のある武左さんへのつとめさ。」

「お勤めも此まで來りや此上なしさ。」

と、淸さんはいよ〳〵つまらなさう。

「武左さん、もう此女はおあきらめなせえ。」

と、半二は武左を顧る。

「ほんになう。色師氣取りの淸三でさへあのやうだ。こりやもう諦めるより外はあるまい。だが、惜しいなう。」

と、如何にも殘念さう。

「半さん、こりや一體どうしたことかえ。」

「お藤さん、武左さんのお身代りに見事口説いて落してごらうじませうと受合つたのは、此清さん。落ちるか落ちぬかためして見ようとそれでお前さんを此處までおびきよせたのだ。お前さんが刎ねつけたら、武左さんはお氣の毒だが、まあ寝醒めがちと善いと云ふもの、清さんに口説き落されたら、武左さんの器量は惡い。だが清さんも男は立つと云ふでう、武左さんの手前、どうすることも出來ぬと云ふもの。清さんの役廻りは全く損な奴さ。」

「それと云ふのも、お前が平生色師を氣取るからさ。」

と、武左さんはちと自棄氣味に嗜める。

「ほんにお前さんは堅いなう。」

と、半二はつく〴〵とお藤を見る。

「狂言に口説かれるなんか、全く白癡にされたのね。」

と、お藤の怨じたのは、悲んだのか喜んだのか、甚だ明瞭を缺いてゐる。

「何、こちらは眞劍だつたが、見事刎ねられたのさ。」

と、清さんはいよ〳〵以て面白からぬ體。半二は、

「武左さん、これで全く御斷念かね。」

と、武左の顔を見ると、

「さうさな。全く以て據なしか。あゝ嫌だ嫌だ。夢だ〳〵。」

「ほんにさうでござゐます。お察し申しやす。」

「あゝお藤さん。」

と、武左はお藤のそばに立寄る。

「えゝ無氣味な。」

と、お藤は二足三足引退る。

「それでも大病と聞いて、此雪の夜に善うまあ見舞つて下すつた。お前の其志は一生忘れぬ、辱ない。某はこれをせめてもの記念と存じ、これでお前のことは無念だが、ふつつり一生思ひ断ちませう。」

と、はら〳〵と涙をこぼす。お藤も思はずほろりとした。

## 江戸紫（清元、新曲 [illegible]）

大調子「我が庵は松原つゞき海近く、軒端に仰ぐ富士が根の、そら渺々とはてしなき、「武藏野原の末遠く、淺草寺の鐘霞む、その霞より流れ出し、色の綾瀬の隅田川、いつか穂に出て戀草の、若紫や濃紫、ありやなしやと言問はん、都の名をば庵崎の、縁も深き鐘が淵、三下り「君と逢ふ夜はナア猪牙でゆかうか、歩行で參ろか、ア、コレナント歩行より舟よ、待乳沈んで筑波をのせて、花の梢に棹さす小舟、ナホル「見渡せば夕暮の雲の旗手は紫に、駒形かけて朧染、月の出汐に今宵の春を首尾の松、待つに甲斐ある辻占や、松葉かんざし疊算、戀に焦れて焦れて燃ゆる、二上り音頭「わしが思ひは佃のかゞり、もせばもすほどあつくなる、カヘシ「わしが思ひは大川の水よ、ませばますほど深くなる、戀の水上はる〴〵と、ナホル、江戸紫の清元の、香に酔ふ春の一とふしは、その新橋の新しく、幾代つきせじ。

# 傳奇日女若

## 一

どんよりと花曇りに曇つた空の、春ももう闌に、殘んの八重櫻の色は褪せて、萬木若葉にならうとする行春の一日、筑波の山が薄霞に霞んで、雲雀の聲がそこゝに聞える晝少し過ぐるほどであつた。沼の水はそよ／＼の風につれて汀に漣を寄せてゐるが、あたりには小舟も渡守の影らしいものもない。此へ來かゝつた、まだ年若い旅姿した一人の武士は、あたりをと見かう見して、

「こりやどうだ。遲々たる春の日の、暮れるにはまだ早いが、船も人も見えぬ長閑さ。渡らうにも舟はない。はてどうしたものであらうかな。」

と、しよざいなさに、どつかとばかり堤の草の上に腰を下した。

手賀沼は、もと下總國相馬郡に屬した大きな沼で、葛飾、相馬の原野に流れる水を一つに聚めて、木下に到り一條の細流となり、利根川に流れ込むのであつた。沼の長さ東西三里半、幅は廣きも十町乃至六町、更に東の岸から南西へ折れ、一脈の支灣を作つてゐる。沼とはいひでう、水は澄んで、あたりの景色は如何にもくつきりと明るい。ふはりと浮んでゐる側の雲は、水の面に其影を宿して、兩岸の高きも低きも森も田圃も姿を湖心に浸してゐる。

うつとりと眠くなつたやうな氣で、見入るともなく茫然として夢路を辿つてゐた其耳元へ水を切る舟音が柔く響いたので、愕然として我に返つた旅姿の若侍は四方を見廻した。葦間を分けて漕ぎ出た船には、鮮かな衣着けた美しい女性が唯一人、手際よく、櫓を行つてゐるのであつた。若侍は女子と見て、しばし云ひ淀んでゐた體であつたが、やゝあつて決心の眼を擧げ、

「もし／＼。」

と、聲をかけた。

隣に人ありと見た船の女は、此方を見て、婉然と、

『何か御用があつて』

と、櫓を止めながら尋ねる。

『申し兼ねましたが、鷲野谷まで行かうとする旅のものです。御覽の通り此淺間渡に渡舟もありませず、渡守も居りませぬ。見れば貴女は舟をお持ちですが、一つ向うまで渡しては下さいませんか。』

『お氣の毒ですが、そりやなりませぬ。これは女子の舟、男を乘せることは、きつい法度でございます。』

『これは異なことを承りますことですな。御婦人と申すものは、慈悲柔和を專とし、衆生濟度をなさる筈です。して見れば、其舟は弘誓の舟。』

『おう厭。貴郎のやうにおつしやると、私どもはまるで佛様か、御上人見たいなものですね。此舟はそんな佛心のある舟ではございません。迷ひの舟なんです、煩惱の舟なんです。』

『迷ひ、結構ですな、煩惱最も妙です。迷はされませう、煩惱に囚はれませう。』

貴郎はいやに氣が早いのね。それに今抹香臭いことを云ひなすつたかと思ふと、何ですね、すぐに今度は凡夫の淺ましさが出ましたね。どれが一體本音なんですか。』

「どちらでも善うございます。つまり簡單明瞭に云つてしまへば、貴女のその舟へ乘つて、貴女が操る其棹で、沼の上を乘り廻したいのです。」

「何ですつて、貴郎は向岸へ渡つて、鷲野谷へ行くのが目的ではありませんか。それに又どうして沼の上を乘り廻りたいなんて云ふんですか。」

「急に目的が一變したんです。」

「そんなら乘せることが出來ません。」

「そりや變ですよ。して見ると乘せる御了簡でしたのが、乘り廻す一件で、頓挫したんですか。」

「まアそんなものなんです。」

「そんならもう一ぺん初めの了簡に逆戻りをして下さい。とにかく私は其舟に乘りたいのです。」

女も女なら、男も男である。春の日長に、十年の知己のやうに、此初對面の男女は、わけもないことで云ひ爭つてゐる。堤の上には陽炎がちら／＼燃えて、水の面を燕がついと掠めて飛ぶ。日はまことに長閑であつた。

わけもないことを云ひ合つてゐるやうだが、此若侍に取りて、舟に乘らないと云ふのは一場の戲談でなかつた、彼はとにかく對岸に渡るべき必要があつた、鷲野谷へ行かうと行くまいと、それは問題でない、問題は唯沼を横ぎるにあるのだ。よし此舟に乘つて、水の上を乘り廻しても、彼には結構であつた。否寧ろ彼の目的に取つては、此方が好都合であつたかも知れぬ、彼は舟上の美人の何ものであるかを夙くに承知してゐたからだ。

此時恰も舟は音もなく水上を滑つて、若侍の脚下近くの汀に着いたのである。女は唯笑つて乘れとも乘るなとも云はない。男も默つて、ひらりと其舟に乘つた。女は水馴棹を取つて、ぐいと一本陸地を突く、舟はする／＼と湖心に向つて流出たのであつた。

「どうも御手數をかけました。」

と、男はぴよこんと一つ頭を下げた。

『此舟がどこへ行かうと、漂はうと、着かうと、私の意志通りですよ。貴郎は一切命令をしてはいけません。命令したつて、私ア聽かなくつてよ。』

女は服從を强ひてゐる。男は唯默つて笑ひながら之を聞いてゐる。春風がそよ／＼と吹いて、春の水が淀んでゐる。舟は棹のまに／＼ゆつたりとその上を流れて行くのである。

半島を形づくつてゐる對岸を回ると、小さな灣がある。例年に比してはすぐれて早く、そこには澤瀉の白、蓴菜の紅、鬼蓮の紫、菱、河骨の花が水一面に咲いて、其間に早咲の睡蓮が品好く交つて、美しい、蕾を泛べてゐる。其花の綠暈たる裡に、一艘の小舟が泛んで、此方の舟の女に劣らぬ美しい衣着けた女性が二人、雙の玉手を水に浸して、水藻の花を採つてゐるのであつた。

近寄る舟に男のゐて凝と此方に瞳を注いでゐると見て、一人の女は首延べてゐた美しい襟足を縮め、

『花若さん、其御武家をどこへお連れなさるの。』

『當なしの舟遊山よ。』

『御城主様に見つかつたら大變ではないの。』

と、花若と呼ばれた此方の船頭殿は平氣である。

と、今一人のが心配さう。

『ほゝゝ。』

と、花若は打笑つて、

『雪若さん、御城主様に見參に入れようとするのだわ。さうすりや御城主様のお慰みにもなり、又此人の本望にもなりますわ。』

と、謎のやうなことを云ふ。

『其のお人はどこのお方なの。』

と、雪若は不思議がるを、

『私聞きもしなけりや、知りもしない、然し大體は分つてゐるわ。』

と、花若はじろりと眼下に若侍を見た。若侍は、ぶしつけに欠伸一つして、

『若しえ、美しいお新造さん。私の素性や人物がお分りですか。』

『知つてゐますとも。』

『一つ當てて見て下さい。』

『當てると貴下が氣を惡くかららよしませう。私の胸にちやんと收つて置いた方がいゝわ。』

『さあ、そんなことを云はずと、當るも八卦、當らぬも八卦、代は見てのお戻り、思ひ切つて一つ話して見て下さい。それにおいでなさる美しいお二人へのお慰みに。當つたらお二人の代りにうんと當の花でも取つて進ぜませう。』

『などと云つて、當つた時は平氣、そつくり、しやつくりが止まる樣に。』

と、花若は輕蔑して、てんで相手にしない風情。

花若の舟は[illegible]に近づいた。若侍は二人に向つて會釋して、

『そちらのお方が雪若さん、此方のお方は。』

『月若さん。』

と、雪若は代つて返辭した。

『月雪花がお揃ひでお目出度う存じます。』

『若はお城の女衆の通り名。それ御城主様お日女若様。それで女衆はいづれも若の字を頂戴してゐます。私共三人の外にも松若、竹若、梅若、菊若、藤若、清若、澄若、友若、常若、あゝ忘れたの八人、合せて十二人の若がゐるのよ。いづれも若い美しい、賢い女ばかりですわ。おほゝゝ。』

と、雪若の笑顔は艶であつた。

『お城主様の美しいのは誰知らぬものもございませぬが、其下においでなさる十二人の腰元衆も天女のやうだと人の噂、世間の取沙汰です。さては貴女方でおいでなさいましたか。』

『私共は天女のやうに見えなくつて。』

と、花若は冷かに笑つた。

『どうして〳〵、天女のやうどころぢやない、全くの天女、天つ乙女、羽衣を置き忘れた天人、竹の中から生れた赫夜姫。』

『もうよくつてよ。いゝ加減になさい。』

と、花若は手をあげて打つ眞似をする。

『之は御免なさいまし。』

と、若侍は素直である。

花若は棹を持つたまゝ、艫の方に立つてゐる。そよ〳〵の、微風が紅や紫の袂をなぶつて吹く。月若と雪若とは藻の花を採るに忙しい。燃え立つばかりの緋の襷をかけて、惜氣もなく、雪のやうに白い腕を舟から水へと差延べてゐる。若侍はうつとりと此光景に見惚れて、夢の國へ引き入れられてゐるのではないかと自らを疑つた。

如何にもそれは春の日の水郷にふさはしくあつた。あたりは靜かに眠つてゐるやうである。遠くの方では雲雀が歌ふ、日の前を燕が慌しく過ぎて行く。清水は遲日に伴ひ、野花は晩春を留む。畫と云へば畫である。現し世とは思はれぬほどの長閑さと美しさとが展開してゐる。

うつとりとしてゐる耳元へ、肉聲の音曲が旋律をなして聞えて來た。妙なる女の歌ふ聲であつた。それも一人でなく、二人三人でなく、五六人が聲を合せて歌ふのであつた。遠くから近く〳〵聞えて、あたりの大氣を震はせた。

葛飾の、手賀の乙女ら、
眞間なる國の邊に立ちて、
人待ち顔に、夕顔の花白きまで、
人は來ず、人は訪ひ來ず、
鳥は啼に、山寺の鐘さみしく音づれる。

其聲は華やかでなくして、どことなく、陰氣な、悲しい、寂しい、やるせない、便りない、切ない思ひを歌に寄せるやうであつた。春の光を禮讃して、幸ある其惠みを詠嘆するが如きものではなくして、行春の名殘を惜んで、感傷する樣であつた。

『あゝ又人待歌が聞える。なんてあの人達は煩悶好きなんでせう。』

と、其方を眺めた花若は、

『貴郎は雪若さんや、月若さんと藻を取つてゐて下さい。私はあの人待舟を迎ひにいつて來ますから。』

と、云はれるまに〳〵若侍は藻採舟に乘り移る。

『御迷惑でも、御一所に。』

『さあ〳〵、どうか御遠慮なく。』

若侍もいゝ氣なもの、雪若と月若との間に坐つて、藻の花摘みの手傳ひ。花若の舟は見る見るうちに遠く彼方へと流れ行く。花若が小聲で歌ふ美音が春光に溶けて、悠揚として餘韻を水上に傳へる。

## 二

沼の南、小高き丘の、一叢茂き森の中に石垣築き上げて、儼かしき館構へたるは、箕輪の城であつた。城主は箕輪右京進信茂と云つて、若年なれども勇戰の聞え高く、古河公方成氏に味方して、千葉氏と鬩ぐこと二三年、手賀沼を城の塹壕と見立てて、左は長善寺より子の神、高野山、右は布佐、竹袋までを要害しッかと固め、水も漏さぬ警戒振りには、一族一類數少からぬ千葉氏も攻めあぐんでぞ見えた。然るに右京進信茂はふとした風の心地と病の床に臥したのが、基となり、生年二十六歳を一期として、文明十一年九月七日、秋風に散る桐一葉とともに脆くも身まかつた。子も弟もあらぬ身の、其家を繼ぐべきものとてはなかつたので、さしも東方の雄を以て聞えた箕輪城も明滅定まらぬ燈火のやうであつた。一族老臣どもが亡き城主の柩を前に、前途に就いて額を鳩めてひたすら思案投首、吐息をついてゐる時に、

『故殿の跡は私が引受けませう。』

と、凜然たる答へをして、一座を驚かせたのは、右京進の奥方、日女若大人であつた。今年二十三の若後家、亡き右京進とは二つ違ひ、武州石神井の城主豊島氏の家臣何某とかの娘と噂するが、其素性は確かでない、武藏下總切つて、これほどの標致よしはあるまいとの評判で、右京進からやいの〳〵と達ての所望にて十八の春箕輪城に輿入れしたが、其夜から手賀沼一帶は光り輝いたとか、とり沙汰、足掛け六年連れ添つたが、夭死した時一人の外に子種とてはなかつた。

血腥い風が關東の野を吹いて、汗馬が東西に馳せ違ふ世の中には、荒武者が時を得顔に横行する。見渡す限り亭々たる松杉ばかり蘢立する中に、之は又優にやさしい白百合の花一本、何で、其の荒れ狂ふ風に耐へられようか、と人人は恐しい不安の眼を以て、之を眺めた。然し日女若大人は一千の兵士を自由自在に、指揮して、綽々餘裕があつた。自ら馬をも乘り廻し、薙刀をも縱横無盡に振り廻す。劍道柔術さへも心得てゐた。顔に似合はぬ力はあり、身の輕いこと飛鳥の如くであつた。辯舌も優れて、裁決は水の流るゝが如く、手を書くことも文を作るさへも得意であつた。不安に思ひ、輕蔑の目で見た老臣家來も心から其脚下に跪かざるを得なかつた。勝氣があつて、負けじ魂は強くあつたが、然し色に加ふるに勇武も勝れてゐるところから、人を人とも思はず、亡夫の後を襲いでから二年榮華もする、榮耀に日を送る。箕輪城又は箕輪御殿であつた。

我こそ愛の征矢を其泡雪なす栲衾、白き胸に射止めようと競ひ爭ふ城主豪族は多かつたが、其矢は皆空し矢となつて、飛び返つて來た。諸方よりすぐつて集めた十二人の美女に、いづれも我と同じやうな、男のすなる若の字を授けて、左右に侍らし、男を混ぜず、女世帯に賑々しく日を送り夜を送つたのであつた。

此十二人の美女は或は辯舌に或は才能に武勇に文藝に各々優れてゐて、いづれも男優りとの評判高く、箕輪城は女護ケ島として、遠國近在の驚異の的であつたのである。

日女若夫人を掌中の珠と愛でうか、箕輪城を爼上の肉と切りさいなまうか、關東の大名小名で、その爲に焦慮苦心しなかつたものはなかつた。日女若夫人は冷かに之を見て、巧みに此等を操つてゐたのであるが、然し箕輪城は平和の樂天地でなく、實は累卵の危い瀨戸際に立つてゐたのであつた。

花若に人待船と渾號せられた船は龍頭鷁首の美々しい飾船であつた。六人の美女が各々棹取つて歌唄ひながら船を行つてゐたのである。若侍花若の船は先頭して此方へと近づいた。若侍は唯異様に眺めてゐる。

『旅の衆、此船へお乘んなさい。船には食物も飲料もあつてよ。』

と、花若は若侍を麾いた。

『御馳走になつては濟みません。』

『これも話の種ですよ。綺麗な連中にお酌でもして貰つたらいゝでせう。』

『さあさうなつたらもう動くことが厭になりませう。』

『其時は箕輪の人におなんなさい。』

『有難うございます。さうなら大願成就でございます。』

と若侍はさも嬉しさうにお辭儀をした。

藻採船は人待船に其舷を寄せて、若侍は、又大勢の美女の眞中に坐つた。

『これは皆さん、初めてお目にかゝります。』

『善うおいでなさいました。』

と、一同は笑顏で迎へた。若侍はもう有頂天である。花若で微醉になり、藻採舟で酩酊した若侍は、人待船でもうぐでん〳〵と云ふ體たらく。其上、此度は眞物の酒が酒筒から、大盃へ浪々と注がれた。肴までが取揃へられた。棹持つ手を止めて、一同は環を作つて酒を進めた。若侍は面喰つて、辭みもならず、其盃を手にした。手にするとたまつたものではない。

『さあお酌。』

『お乾しなさい。』

『注いでよ。』

と、疊みかけての惡强ひ。餘りに酒量もない若侍は瞬く間に滿面紅を潮しての醉ひつ振。

『もう〳〵いけません。』

『何の、そんな卑怯なことが。』

『多勢に無勢、とても敵ひません。』

『そんならお相手を致しませうか。』

と、覺えある强さうなのが、對手にならうとする。若侍は舌の呂律も廻らなくなり、もう居住居さへ崩勝ちである。

隣りの舟で此樣をじろり〳〵と眺めてゐた花若は、

『もしえ、千葉家の御家來さん。』

と、聲をかけた。醉つても、正氣を失はぬ若侍は、愕然として急に四邊を見廻したが、やがて、あはゝゝゝと哄笑して、

『ち、千葉家の御家來さんですつて。そ、それが私の素性ですかえ。』

『貴郎は隱密ですかえ、それとも何かお使ひですか。』

『さ、さやうさ、先づみ、密使とでも云ふ所で、

『譃仰しやい、雨天袴をかけてゐるんでせう。』
『そ、そりやどうともご推量に任せます。』
『お使ひの用向きは一體何なんです。』
『はゝゝゝ、は花若さんともあらう、ち、智慧者が、それお聞きなさすつたら、はツは、お話し致すと思つて。』
と、若侍は逆襲した。表面は醉つたやうでも、內實は確かりしてゐる。
『ようござんす。そんなら當てて見ませう。吃驚しちやいやよ。ほゝゝ、貴郎は柄にないお使ひだわね――』
と、莞爾船中の醉客を見た。
『が、柄にないとな。はゝゝ、柄とも〳〵大柄の使者。』
『あてて見ませうか。』
『お當て下さい。』
『戀の使よ。』
あちらの舟でも、こちらの舟でも、どツと笑聲が揚つた。若侍は一時面喰つたが、醉に紛らして、
『はゝゝ、よ、善うお當てなされた。こ、此戀は成就致しませうか、そ、それとも。』
『そりや駄目よ。無益よ。やめた方がいゝわ。貴郎の人品に關するわ。』
と、花若の批評は手嚴しい。
柄にないと云はれた通り、全く此使は柄になかつた。又駄目だの無益よと云はれた通り、此使の無效に終ることは知れてゐる。いやさ知れ切つてゐるのであつた。千葉介が日ごろ若夫人に對して使を寄せたことは一度二度ならずあつた。而も其返事の常に情無く、あつたことは云ふまでもない。千葉介は性も懲もなく、又もや此、に戀の使を寄せたのであるが、此度の使は戀以外に他の使命を帶びてゐた。城中の巨細を探つて來い、失戀の腹いせには、やがて箕輪城を陷落さうとする底意もあつた。此使に選び出されたのは、年少ではあつたが、才幹のある、勇氣のすぐれた市川新之丞、今船中に醉つてゐる、卽ち此人であつた。
花若は夙くもそれと推して、體のよい船中の囚人としたのである。醉はせた擧句、城内の一室に監禁して、一切城中のことを知らしめないやうにと、胸中に其工夫を凝らしてゐるのである。最後の止めを刺して、見事其鼻を明かしてやらう、と花若は驀直。
『戀の使よりか、隱密の方が適任だわ。貴方の本當もそこなんでせう。』
いしくも申した、隱密の一語は、靜かに澱んだ水の中に投げ込んだ大きな礫、急に混亂が人々の心の裡に起つた。
戀の使、其對手がどうあらうとも、何となく優しく、床しく、美しく聞える。然し隱密、間諜、何と醜い名でせう、何と汚らはしい使命でせう。これほど此場にふさはしくない言葉が他にあらうか。

三

盛りつぶされて、醉つて、ぐつすり船の中で寢込んだ新之丞は搖り起された。
『千葉家のお使ひ、さあお起きなさいな。』
『まア善く寢てゐなさること。こんなことではお役目がつとまりますまい。』
女は右左から起してゐる。新之丞は細目を明けて見ると、藻採舟の月若と雪若とである。
『ばア。』
と、云つて飛起きる。
『あらいやな人。』
『いけすかないわね。』
と。左右でたしなめるやうに云ふ。
『やあ御免なさいまし。どうもつい寢込んでし

まつて相すみません。一體此はどこなんです。」

「御城内です。」

「へー、先程は沼の上で船中御馳走になつたのですが。」

「こゝは沼から御城内へ引いてある堀割なのです。」

夕暮の色が淡く四方を籠めてゐるが、如何さま曲水は沼につゞいて其幅も廣くはない。兩岸の叢の裡に紅く白く見えてゐるのは躑躅花で、一帶に小高く築山のやうになつてゐる。

「さあ、お上んなさい。」

と、云はれて、新之丞はぴよいと陸へ飛んだ。振返つて見ると此舟はどうやら花若が乘つてゐたものらしい。

龍頭鷁首の船で寢込んだのが、醉中いつの間にか小舟に移されて、此堀割へ運ばれたらしい。どうも醉つて眠つたのは一代の不覺であつた。

月若、雪若、兩美女のあとについて築山の小路を辿つた。

「お迎ひに來ましたわ。」

と、途中に笑顏で迎へた又一人の美女があつた。

「あら清若さんなの、それは御苦勞さま、」

と、雪若が會釋する。新之丞もぴよこりと頭を下げた。

「御城主樣からの仰せがございます。唯今丁度他所からのお使者三人にお目通りを許さるるところですから。千葉家のお使者をもすぐさま澪標の間に御案内致せとのことにございます。」

「それはよい折ですね。そんならちつとも早く。」

と、月若、雪若、兩人は急ぎ足になつた。新之丞もやゝ速度を早めた。

築山の彼方には池水を湛へてゐる。泉石をよいほどにあしらつて、汀に枝さし延べた偃松、其あたりには杜若の莟の紫も青きが中に見えてゐる。池中には一島を構へて、橋は斜に架かる。築山の右には茶亭、對ふ岸には藤棚、飛石傳ひに館へも通じてゐる。

新之丞は館の一間へと案内せられた。接待役は月若と雪若とであつた。やがて清若より御城主へのお目通りを通じて來た。千葉家の使者市川新之丞は旅裝束を脱ぎ棄てて、着換へをした。

請ぜられたのは、銀燭を數多ともした、澪標の一間と云へる廣間であつた。我より先きに三人の男が居並んでゐる。骨組頑丈なガツシリした、色黑の、强さうな侍が、肩怒らせて第一番に坐つてゐる。次なるは僧形の痩ぎすな男、第三番は年老つた分別顏してゐる侍であつた。

新之丞が着席すると强さうなのはさも輕蔑むやうにじろり〳〵と見た。僧形は素知らぬ顏、分別なのは、心中で讀むやうに新來の客を流眄に見るのであつた。

いづれも無言、一座は靜まり返つて、人の吐く息さへ微に聞えるほどであつた。やゝあつて、强さうなのは、聞えよがしの大欠伸一つ。

「善う待たせくさるな。」

と、獨語すると、分別らしいのが、

「女子の御城主ですから、お化粧に念が入ると見えますな。」

と、之は又知つたか振りの云ひやう。

「いかさまさうもござらうかな。」

と、强さうなのはすぐさま之を承認しようとする。僧形は首を掉つて、

「この城主は、餘り化粧せぬが得意とか聞いて居りまする。化粧で閑取るのではござるまい。」

「はゝア、とにかく長く待たせるわい。」

と、强さうなのは、足に[illegible]してゐる

暫くすると、美女が一人蓐を持ち出でて上座に、敷き、さて四人に向つて、
『どうも御待たせ申しました。御城主樣が唯今之へ。』
と挨拶する。すると襖が左右に開くと、日女若夫人は左右に多くの美女を從へて、蓮歩ゆるやかに設けの褥についた。白綸子に金絲で牡丹花を縫つて、ところ〴〵に絞鹿子をあしらつた打掛けは、燭光に映えて燦として光り輝いた。着たる主は丈なす黑髮後に垂らした、華やかな、水も滴るやうな女性、如何さま關東切つての美貌と噂されて、眞間の手兒奈以來との名は高く、大名小名の焦れ戀ふものは夏の夜の火に寫る蟲の數多くあるも、さら〳〵無理ならぬことと、我にもあらで頭を下げて、四人一樣に茫然としてゐる。
左右に居流れた美女は、四季不斷の花、海棠の艶かしきも、黃菊白菊の清きも、肥えたるは牡丹、細りしたるは水仙花、いづれをいづれと引きぞわづらふ菖蒲杜若、羅浮夢に斷えたる氷肌玉骨、翡翠相憐れむ越女の花鈿、嬌紅瓊蕊は桃花の美で、淡粉清香は梨花の姫である。
『うゝ。あでやか〳〵。』
と、小聲で、強さうなのは、意氣地もなく、唸つてゐる。分別顏は相好を崩して、僧形は唯目をぱちくりさせてゐる。取別け市川新之丞は魂がふら〳〵五體から脫け出してしまつた。
『いづれも使者の役目大儀なう。』
玉を轉がし、鈴を振るとは此う云ふ聲だらう、と僧形は獨りで合點したほどに、涼しい聲が四人をはつと夢から覺まさせた。玉の聲は又つゞく。
『返事は追つて取らせまする。別室で何は無くともゆる〳〵寛いで。』
と、侍女の誰彼に顎でしやくつて彼方へと命ずる。輕く會釋して、日女若夫人は起ち上る。途端に襖は左右に開いて、輝いた目覺めるやうな姿はぱつと消えた。三つの殘紅をあとにして、花も枝に還つて、あとは寂しくなつた。
『さあ皆さん、あちらへ。御案内致しませう。』
と、淸若外二人の美女が四人を促しながら先へ立つた。つままれた恰好で四人も起ち上る。
此室を出て長い〳〵廊下を直に、横に行くこと二三十間、閑庭を前に控へた一室に案内された。案内した淸若等の姿は消えて、あとには銀燭の前で四人が鼻をつき合はす。
『どうも美しいものですな。』
たまりかねて分別顏が感嘆の聲を放つと、
『[illegible]』
と、[illegible]
『大あ[illegible]』
と、強さうなのが[illegible]打つ。
『[illegible]』
と、分別顏[illegible]
『如何にも、[illegible]熱心[illegible]ない[illegible]い。』
と、云ふ強さうなのの聲は突拍子もなく高くなつた。
『おう、お身樣の殿が此處の城主に熱心でござりますかえ。』
云ふは分別顏、強さうなのは首肯いて、
『いや熱心とも〳〵、それは〳〵きつい熱心。まア云はゞ戀煩ひとでも云ふやうな、いやはや大變な戀慕でござる。』
『私の殿も亦同樣、私此度の役目は身分の不相應な戀の使者と云ふやつで、いやはや困つて居るやうな儀にござります。』
分別顏は斯う云ひながら頭を搔く。
『身共も全く其通り。』
強さうなのは苦笑ひ、僧形までが、
『御同樣々々。』
三人は面白くもなささうな笑方をする。僧

『□は、新之丞も□□で、
もしや、□□□□一向無言でおいてなされ
るが、そこもとの□者の□□目は我々どもとは
違つて居りまするかな。』
新之丞ははツと思つて、
『何多分には洩れませぬが、殿たちの戀慕はこ
りや尤もでございます。』
『しておかは。』
俯影はいぶかしげに見詰める。
『これの御城主は此世の人とも思へませぬ。
これ人界のものならで、まては天上の。』
『そりや同感でございますな。』
と、分別顔は賛同する。
『しかし各々方。』
と、強さうなのは一座を見渡した。
『此両人の仕へる殿の中で、此君叶ふものがあ
るでござらうかな。』
『無論ござんすまい。』
と、新之丞は無□に力を籠めて云つた。
『不幸にして的中でせう。』
と、之に□書したのは、分別顔であつた。
『□□□□御□にございます。』
と、□□は□□□□。
そこ、□□□□□□、□□□□に□する。月に

若、雪若、露若は□□に□□□□、□□さうなの
は□に入つて□□に盃を重ねる。
『美人よりはこれのこと〳〵。まして美人のお
酌ときては。』
と、□の□子も□い、分別顔は美女を相手に
打興じて、ひたすら享楽気分を□らうとし
てゐる。俯影は口も出さんばかりのはしやぎ
方。唯其中に新之丞だけがぐつたりと何やら淋
しい。
『千葉家のお使者、いかがなすつて。』
と、雪若は案じ顔。
『先程から中での□□□□□ましたので、もう欲し
うもございませんに』
『□な□とやら申すことがあるさうですが、少
しお飲りなすつてはどうです。』
『どうも□□て、ちつとも甘くはないですか
ら、□めませう。あゝ今夜は月が□うございま
すな。』
と、□□つて□□の□を□ぐと、遥か彼方の
森の上に春□の月が朧に圓い。如何さま今夜
は□□□□□夜であつた。
何思つたか、新之丞はツと起つて縁側に出た。
沓石の上にある草履を足に穿つて、□然として
庭□になつた。するりと身を□けると、□折戸

を□けて□内□し□、先□来た奥庭へとまぎれ
込んだ。月は隈なくその影を地に印した。花の
香がどこともなく聞えて来る。
はた□ましく犬が吠える。夜を警むる番人が
□人□人ばら〳〵と駆け寄る。手には棒押つ取
つて、
『誰だ〳〵、此奥庭に推参して来たのは。』
新之丞が□口を利かんとするより早く、後の
方から、
『これはお客様だよ。心配しなさんな。』
と、艶めかしい声が聞えた。見ればいつの
間にか雪若が見え隠れについて来たのであつ
た。
『これはどうも、雪若さんでしたな。御足労を
かけて恐縮千萬です。』
『何、□□さん□の尾行ですわ。』
新之丞は投げるやうに、
『□□なんかは私の柄ではありませんなア』
『それでどうして。』
『□□の人になりませんか□□。』
□□の□□□の□から女の□しい声で、
『なれないにも限りません。』
新之丞は渾身の血が一齊に逆上するやうに
□□た。□声には□□□□□。

四

月下に立った夫人は嫦娥のやうであった。朧の光は斜に皓白の顔を照らしてゐる。夫人の後邊には小さな女童が二人作りつけのやうに侍立してゐる。新之丞は思はず頭を下げた。

雫若はツと駈け寄って、

「御城主様にはおひろひでゐらせられますか。」

『つい月に浮かれて。』

新之丞は恐る〳〵近づいて、

「御免下されませ。思ひがけない處でお目通り仕りまして。」

「はい、お前さんもお月様に浮かれなさつてかえ。」

「月ですか、花ですか。月ならば光、花ならば色香。いや私めは幻に誘はれましてな。」

「そりゃ風流なことで。」

「何が風流でござりませう。苦みでございます。其苦みも自ら求めた苦み。他人が聞いたならば、善い笑草でございませう。おゝそれはさうと、唯今貴女様は、えゝと、一なれないにも限りません一と仰せられましたやうでございましたが、それはまことでございませうか。」

「さやうさ、お前さんの心がけ次第で。」

「どのやうな心がけを致しましたら。」

「それは私には分りません。求めるのはお前さんで、採決するのは私。私の目に心がけが足らないと見えたら、許しません。あゝ是れならばと思つたら、すぐにも許します。」

「はい、[illegible]ならございます。」

月下の夫人はさて改まつて、

「一體お前さんはどうしてさう云ふ了簡を出したのです。」

「美に憧憬れまして。」

「あゝさうですか。箕輪城は女護ヶ島、美しいのが澤山ゐます。それがいづれも獨身なのです。其色香に慕ひよる蝶も虻も少くありません、お前さんも、其蝶か虻なんですね。」

「虻は恐れ入りますが、私はもっとずつと〳〵贅澤なのです。所詮及ばぬと知りながら、始終其光に打たれたいのです、其香をかぎたいのです。全く善い笑草です。笑草と知りながら笑草たるを甘んずるのです。私はそれで非常な滿足です。」

新之丞の聲は熱する。月下の夫人はそれを冷かに聞いてゐる。

「それは私に對してのお話なんですか。」

と、夫人の聲は[illegible]。

「勿[illegible]にございます。」

と、新之丞は[illegible]に、兩手をつかへた。

『まアお起きなさい。』

と、夫人は新之丞に命じた。

「私、手紙や人を以て戀しい、戀しい、妻になつてくれ、夫になりたいとの申込を受けたことは勘定が仕切れないほど多いのです。然し面と向つてとやかく云はれるのは今が初めてです。立つてゐては疲勞れますから、あの茶室までおいでなさい、もつと面白いお話を聞きませう。雫若も來たがよい。童どもも、茶室に灯を點けや。」

夫人は眉一つだに動かさない。月光を浴びた容色は神々しいまでに﨟たけに見えた。新之丞は汗びつしよりになつて夢に夢見る心地である。

茶室の障子を開かせて、正面に夫人は端然と坐つた。あとべに雫若と二人の女童がかしこまる。新之丞は縁側に蹲踞つてゐる。

「御城主にお目通り致すのは、今度で三回でございます。尤も前二回とも御城主の方では毛頭御承知がございません。初は小金ヶ原御出陣の砌、次は布施辨天御參詣の折でござい

ます。其揷から箕輪城の家臣となつて、御城主の御前に討死したい決心を致しました。すると此度主人千葉介から御城主へ贈書の使。其使者をあれかこれかとの詮議に我から進んで其使者を申請けとしたのは、之を機に箕輪城へ歸參致したい念願にございます。此使成らずば、城内の巨細を探らうが爲めの隱密であらうと、花若殿などは申されまするが、それは新之丞の心中を察せぬあらぬ邪推にございます。唯お側に末長く御奉公致さば、新之丞はそれにて滿足仕ります。』

淀みながら語るを、熱心に聞いてゐたが、夫人の面には感動の色が微塵も現はれない。

『志は辱ないが、心懸が惡い。許されません。お前さんは千葉家譜代の家臣でせう。其家臣が女の色香に迷ひ、重代の主君を棄てて他家に奉公しようなどとは、武士の風上にも置けぬ腑甲斐なさ。それや若氣の迷ひ、一時の出來心で永久の信念ではございませぬ。まして此度は主君千葉介殿の使命を帶びたお人が、其使命をも果さずに、敵地の城へ留らうなどとは、怪しからぬ了簡でございます。ふつつり其了簡を改めて明日は早々歸國なさい。』

其聲は嚴格で、叱咤するやうに響いた。新之丞は絶體絶命、千仭の崖から落ちさうになつてゐる。夢中に木の根岩角につかまつて、體を支へようとする。

『私は迷ひの舟に乘りました。煩惱の舟に乘りました。助けてくれる弘誓の舟と思ひましたが、それはやはり迷ひ煩惱の舟でした。迷ひの舟、結構、煩惱の舟、嫌ない。其舟でお城へ參りました。之からは同じ朋輩と喜んで花若殿などと菱を採りました。嬉しまぎれに勸められる儘に盃を取りました。私の住む御城下ですもの、飲んで醉つて寢たからとて、何の遠慮がいりませう。私は夙うに千葉介の使者ではございません。私の使命がすげなく拒絶に遭ふのは善く存じて居ります。然し今までの主人ですから、まさか御城主へあてた手紙を溜の中へも棄てませんでした。其手紙だけは差上げましたが、固より御返事は戴かない考へです。お目見えの時に、席に連つた田舍侍と坊主と老茗とはあれは何ものです。近國近在の城持の家來ださうですが、皆、もまア煩惱の犬の使などに參られたものですな。然し新之丞は自身に煩惱の犬なんです。外の犬の使は致しません。そな故御返事は、承るに及ばないのです。』

悲壯の覺悟は眉宇に漂つて、青々血を引くの思ひがあつた。

『往きは迷ひの舟、煩惱の舟に乘つて來たでせうが、歸りは悟りの舟、覺醒の舟に乘せませう。』

と、夫人は嫣然笑つた。

『いゝえ、嬉うございます。そんな生はんじやくの舟なんかに乘らなくつても宜いのです。新之丞は迷ひたいのです。煩惱の犬になりたいのです。御城主、失禮ですが、お爲めごかしの忠義論や御訓誡は聞きたくないのです。』

『まア、まるで駄々ッ子のやうなのね。』

『えゝ駄々ッ子です。お叱り下さい。喜んでお叱りを受けます。打擲して下さい。嬉しがつて笞を頂戴します。私は貴女様の忠實なる僕です。絶對に其御命令に服從します。』

『さうなんなら云ふことを聞いて歸國なさい。これが私の命令です。』

『その御命令は箕輪の人となつてから受けませう。千葉介の家來としては受けません。』

『どうしてお前さんはさう云ふやうな考になつたのです。』

『私の情がさうさせます。』

『理性は』

『情が主で、理性は從です。』

『それはいけません、理性に醒めて情を征服なさいまし。』
『そんなことは、あの坊主の使などが云ひさうな言葉です。尊き高き御城主の言葉とも思へません。』
『どうしても心懸が直りませんか、反省は出來ませんか、目が覺めませんか。』
『はい、そんな生意氣なことを思つたこともありません。』
『それでは據ありません。』
と、夫人の星のやうな眼はぢつと新之丞の面に注いだ。馴かしい、親しい、優しい目つきではあつたが、筋肉一つぴりゝとも動かなかつた。寧ろ一片憐愍の情が微かに搖曳してゐるのではなからうか。
『困りますねー、私は御城主を困らせようなどとは決して致しもせず、又思ひも致しません。そんなだいそれた失禮なことはすべき筈がないのです。然し萬々一私の申すことが貴女樣を困らせるやうなことでしたら、それは私の禮儀に嫺はないからなんです、幾重にもお詫び致します。』
『思ひ返して下さい。』
『どうかお許し下さい。』
其聲は悲しく、心の底から湧き出る泉の咽ぶがやうであつた。
『どうしても。』
『はい。』
夫人の眉宇に決心の閃きが逆つた。
『許します。』
『えゝ何と。』
新之丞の聲は急に活氣づいた。生が蘇り、血が動き、機關が働き出し、天地が明るくなつた。
『市川新之丞は箕輪城の家來です。城主日女若の寵臣です。』
『誓ひます。私は箕輪城無二の忠僕です。』
新之丞は恭しく頭を下げた。
『然し新之丞、千葉介殿の使者たる以上は其使命を果して後、箕輪へ歸參するが順道でありますぞ。明日返事を致す。其返事を千葉介殿に致して後、直に當城へ參るがよい。』
夫人の聲が凜然と響くと、裳を拂つて靜に起ち上つた。新之丞は、
『はゝッ。』
と、云つたはかり、二の句をつかぬ前に、もう夫人は庭に下り立つてゐた。雪枝は、
『千葉殿の御家臣市川新之丞さん、もうあちらの間へお歸りなさいまし。』
と、促した。新之丞は無言で點頭いた。
沈々たる、行春の夜は斯くして更け行かうとするのであつた。朧に霞んだ月は水の上を、森を、館を、木の間を淡い光で照らしてゐる。若葉の匂は茶室の外に、風なきに流れる。

## 五

樹立物古りたる竹袋の城跡は、傳へて、平親王將門に由緒深いものだと云はれてゐる。木の間隱れに神寂びた一つの小さな祠は祭神を詳にせぬが、時代は相應に古いらしい。固より祠守る人もなければ、參詣するものも極めて稀れであつた。暮れ行く春の、暖い小雨そぼ降る一夜、此祠のあたりから閃々たる火の光の、飽きか、ふはり／＼と中天に舞ひ上つて、次第に手賀沼の方へと飛んで、箕輪城あたりでぱつと消えたと云ふ噂、つゞいて白衣つけたる髮蓬々の亡靈如きが城址に現はれて夜な／＼手賀沼の方へ手を差延べ、箕輪城を指して、からからと笑つたと云ふ取沙汰が尾鰭をつけて云ひ囃されて、こりや唯事ならずと人々を戰慄させたのであつた。
箕輪城に凶事到來する、かとの疑念は、いよ

いよ〳〵戦となつて、久しからぬうちに現はれた。箕輪城は今や平和の樂園でなくなして、薄氷を踏む危道に瀕することとなつた。千葉介はすぐりにすぐつた手だれの兵、二千騎は、汗馬に泡吹かせて、手賀沼を前に、白帆、浦安、船成、和戸、愛作の間に陣を張つた。

打撒は疾風の如く、諜報は頻りに箕輪城に到來した。

「月若さん、雪若さん、それ御覧なさい。あの千葉家の家臣とやら云つた戀の使者は怪しもので、隠密でしたわね――」

と、花若は口惜しげに云つた。

「ほんにさうと知つたら、唯は歸す人ぢやなかつたのにね。」

と、月若は遺恨の涙ぐましくあつた。獨り雪若は首を振つて、

「さあ、さうでせうか。御城主様にあのやうな忠義立てを誓つたあの人が。」

「まあ、それが手なんだわ。大それた、御城主様に見せかけたけなんか打明けて、斯なれ」

と、花若は一寸舌打ちをする。

「合戰に彼奴を見たら、一思ひに討つてくれませう。ほんに忌々しい。」

と、月若も雪若もしけにお、我に

「いつかあの男が手引でせうから、ね 月若さん、驅け寄つて二人で右左から討つてやりませう。」

雪若は黙然として、ありし夜の茶室のことを思ひ偲んでゐる。

「御城主様が御出陣との御觸にございます。」

と、奥からの知らせがある。城中の大將株は各々手勢を引具して先陣、後詰をする。旗本は城主日女若夫人、前後左右に花のやうな十二人の女武者を並べて、勇士の面々之を打護り、迂回して今井、名内、平塚へと進み出た。

浦風と呼ばれた白馬に銀覆輪の鞍置いて、卯の花威の鎧に身を固め、冑は被らず、白絹で後鉢卷をしつかとしめて、長刀小脇に抱へ、馬の足搔きを早めた箕輪城主日女若夫人は、勇々しくも、また美しく、之れ竹外一枝の花でなくば、定めし淺紅傍染の体であつたらう。進む駒をば乗り鎭めながら、敵陣きつと見渡して、嘗衛あゆやと足掻を花かしく動かしてゐるのは花若であつた。之に引きつゞいて月若が手ぐすね引いて待つてゐる。

間の手は南軍からどツと起つた。千葉介は箕輪の先陣に目もくれず、

「唯、主日女若を生きながら引捕へよ、恩賞は莫大にであるぞ。日女若の侍女十二人も殺さず虜にせよ、それ〳〵恩賞を取らせるぞ。」

と、一軍に令した。打つてかゝるは敵の旗本、先陣後詰は唯蹴散らして通れ。目指す所は敵軍との一ことで、一同は唯勇みに勇んで、いづれも進撃ならぬはなかつた。

旋風のやうに一軍は中堅の旗本近くへ切つて入つた。さはさせじと喰ひ止めんとする先陣へは一團となつて、さツと入ると、さツと引き、其儘つけ入りて麾下へ鐵丸の如く撃ち込んだ。箕輪の勇士は楯となつて之を防いで、血戰十餘合、追ひつ追はれつしたが、新手を入れ替へ〳〵て隙もあらせず攻め寄す千葉介の勢は雪崩の如く洪水の如くであつた。

日女若夫人は此とも遅疑せず、娘子軍を左右に從へて、長刀を水車の如くに、馬を縱横に乗り廻して、近寄らんとする敵に渡り合せた。淡く白絹を結つた花の顔はやゝ紅を潮して、平生の美しさは猶一しほに美しく映えた。美に打たれた雑兵は流石に寄りつくことを敢てしなかつた。

千葉介は顔を赤くして怒り、馬上に大音聲、

「もろども何を躊躇して後悔するな、箕輪の城主は間近にあるぞ、手を逃さば汝に報れようぞ。」つ

き従ふ手弱女どもも一列に屠るぞ。片ッぱしから引捕へて、恩賞にあづかれや人々。』

采配振つてかゝれ〳〵と下知する。其命令は凄じく厳しく、猶豫を許さぬものであつた。

之に激まされて、決死の勇士猛卒は荒びに荒びれて、譬へば牡丹花に狂ふ獅子の如く、勇める駒の花下に競ふに似て、日女若夫人を中に追ッ取り卷き、あはよくば組み敷いて莫大の恩賞にあづからんと爭つた。

『あゝら物々しや。』

と、馬上に破顔微笑した日女若夫人の面は延命寺の森の若葉を漏るゝ日の光で、華やかに輝いた。青嵐がサッと吹くと、綠なす黒髪は大波小波を打ちて、光を受くるところ、皆五彩を噴いた。鎧の袖はから〳〵と鳴る。虚實を切つて長刀はうなりを生じた。主の馬前には、敵兵斬つて血汐を浴びた花若、此人、太刀取つては箕輪城の將士いづれも敵し難いとの評ある劍道極意の免許、我身を楯として、敵兵を近よらせず、左には月若、礬石を手玉に取る膂力すぐれた勇婦、右には雪若、長刀取つては目にも止まらぬ早業、箕輪城娘子軍の三幅對、日女若夫人秘藏の雪月花三名婦であつた。

此三人に切り立てられ薙ぎ立てられて、流石逼りに逼つた千葉介の手兵も寄せては返し、返しては寄せて、もてあぐんでぞ見えたが、千葉介がぢだんだ踏みての下知は刻一刻にはげしく、此に多年の渇望を癒し、一朝にして本願を遂げんとあせりにあせつた。箕輪城を滅して我が領土となし、美人日女若を己が朝夕の慰めとせんとは其本願でその渇望であつた。色と慾との二筋道をかけての合戰に、勝利の月桂冠を獲ようとあせるのであつた。

箕輪勢の先陣後詰は各所に敵と渡り合せてゐたが、攻め寄する千葉勢は多數で、箕輪は寡兵であつた。箕輪勢はあちらに破れ、こちらに傷ついて亂軍となつてゐる。千葉介の本陣は脇目も觸らずに箕輪勢の旗本に逼り、一擧にして、日女若夫人を捕へようとする。箕輪勢の旗本も此を先途と防ぎ戰つたが、攻撃軍の勢は猛く、防禦の箕輪勢は防ぎかねてぞ見えた。

追ひすがり、簇り寄る敵勢は雲霞の如くである。千葉介の引ッ切りなしの下知、眼前に徘徊する恩賞、それに相手は美女なりとの好奇心、此等に激まされて、千葉勢の勇氣は日頃に十倍してゐる。引き色見えた箕輪勢は立て直し、盛り返さうと、無念なれども日女若夫人は馬首を回らして、娘子軍一齊に、平塚に程近き手賀沼の盡くる處、水に臨んだ小高き岡に引揚げようとする。

『追撃、もう一息。』

と、千葉介は馬上に踊り上つた。

黒一團となつて濛々たる砂塵を揚げた千葉勢は日女若夫人の乘馬近くに殺到した、流石の娘子軍もたまりかねて、さッと左右へ靡く。敵將のさるもの、手綱より投げた繩は空中に環を畫いて、あはや日女若夫人の身邊近く〳〵落下しようとする。

敵勢の中より現はれた武者一騎、馬上のぬしは面を深く白布で包んでゐたが、ツと駈け入ると見る間もなく、敵將をえいやッとばかり摑んで投げ棄てる。驚く敵勢に渡り合ひて、目覺しく獅子奮迅、此を最後と斬つて回つた。つき從ふ手兵十餘人は一塊となつて千葉勢を蹴散らして、花々しく合戰する。

敵か、味方か、箕輪勢は驚異の眼を見張る。千葉勢は憤怒の聲を揚げる。內應ありと知つて千葉勢はどよめき渡り、勝誇つた軍勢もさんざんに混亂した。千葉介の威令もう行はれない。此間に日女若夫人を中心に、箕輪勢は小高き岡に馬首を立てた。娘子軍の中で、花若唯一人のみは、亂軍の間に旗本と遠く離れて、行方

を失つた。

白布の武者も搦手の奮戰は物凄くあつたが、從ふ手兵は亂軍の中に討たれて、唯一騎となり、馬は倒れ、鎧は破れ、眉深き白布は唐紅に染まつて、あはやこれも討死と見えた。

日女若夫人は遙に之を見て、

「あれは何ものぞ。救の者よ。はやう助けにとらせ。」

と、身を悶える。月若と雪若とは、鎗を篦つて、疾風の如く飛んで行く。

此時亂軍の間に、またすさまじいどよめきが起つた。貝さまは谷と海嘯の起つたやうであつた。叫びの聲、喚きの聲、失望の音、憤怒の聲。亂軍を蹴散らして一騎、此方の陣を指して驅け來るものがあつた。砂煙の中に日の光を帶びて閃く太刀の鋒には首を貫いてゐる。其太刀を高く捧げて、血に塗れて映えた馬上の武者に敵ふ方なき花若であつた。

「千葉介を討ち取つた、首級を見よ。」

と、叫ぶ花若の聲は、高く澄み渡つて聞えた。

城兵は崩れを打つて、遠見となる。味方は勝鬨を揚げる。敗色見えて、寄手の數はなかつた。眞崎家の見附を一つになつて、退く敵勢を追撃した。陣の上の興本では、大將の與へた歡喜と湖上を渡る初夏の風になぶらせて、人々歡喜の聲をどツと放つた。城中軍は感極りて、嬉し泣きに泣くものも多かつた。

殊勳第一の花若が敵將の首級を城主日女若夫人の御前に致して、同軍から限りなき賞讃の聲を浴びせかけられてゐた時に、月若と雪若とは傷ついて顔み少くなつた白布の勇士を馬に扶けて乗せて歸つて來た。此武者は別人ならず、市川新之丞其人であつた。

日女若夫人は馬から飛下りて、手づから其傷口を結はへた。

「しつかりなさい。どう、氣分は。」

と、其體に勇士を抱いた。勇士はぽつかり眼を開いて、夫人の顔を仰いだ。驚きと感謝との念が其眼中に光つた。

「おう、御城主、貴女、嬉しうございます。」

「いや、御禮はこちらから云はねばなりません。有難う、お前さんのお蔭で、私は助かりました。助かつたばかりでなく、戰も大勝利になりました。」

「えッ、戰が大勝利ですつて。」

花若は進み出て、

「市川さん、新之丞さん、許して下さい、貴方は遅しものでも臆病でもなかつたわね。其お蔭で私は千葉介殿の御首級を頂戴してよ。」

傷ついた勇士は愕然として喜びから恐れに變つた。喘ぎ／＼、

「何ですつて。主君が、殿が。あゝ私は不忠者です。すみません、すみません。然し私自身は滿足です。永久に安らかに死なれます。殿が討死なされて、私が助かつたら、私の心には恢復の出來ぬ痛みを負ひます。殿も死なれた、私も死にます。もう恩も怨みもありません。其私は御城主の身代りとなつて、御城主の感謝を受けて、御城主の手に抱かれて。あゝ、私は本望です、幸福です、滿足です、愉快です。奥方、私はもう眞實の人となりましたのですよ。奥方、どうか貴女様のお愛をお受けさせて下さい。」

夫人は死に臨んだ勇士をしつかと抱きしめた。熱い涙が、はら／＼其面にこぼれた。

# 櫻花記

## 一

京都の春は長閑にして美し。祇園の花は夜景を以て勝り、清水の花は大悲擁護の薄霞と見ゆ。三十六峰、松翠に、寺觀樓閣參差たる間に、花色依稀たる處こよなく可し。西には平野の花、俗味七分、御室の稚兒櫻は名を聞くだに可憐なり。大澤の池のほとり、落花雪の如く、嵐峽の暮春、晴に雨に飽かぬ眺めあり。

## 二

東京の春は賑かにしてあわたゞし。上野飛鳥山より九段、三宅坂、辨慶橋、江戸川兩岸の花、近郊にては小金井、荒川、柴又、熊谷、いづくに行くとして花ならざるはなく、山の手一帶の地、花ならぬ處もなし。東京の地は最も善く櫻に適したりと思はる。京都は自然美と配合して花の妙あり。東京は花自らに花の趣あり、花は賑かに咲き、人はあわたゞしく觀て、九十の春光は過ぎ行くなり。

## 三

奈良は春の古都なり。秋は淋しくしてあはれに、鹿の聲など聞えて、咲く花の匂ふが如き面影を偲ぶに由なし。霞たなびく法隆寺の古塔、陽炎燃ゆる藥師寺の舊址、淋しきなかに春色滿てり。二月堂三月堂のほとりに立ちて沈々たる舊都を望めば、花遠近に咲きこぼれて、一千年の春の名殘を留む。長谷の花は高雅にらふたげに、花の中宿の夢は花神に通ふ。吉野は歌書よりも軍書に悲しく、六田の渡頭、朧にかすむ月は花影を映じ、一目千本の曉、行人花の雲を踏んで林間を過ぐと雖も、塔尾御陵の花は悲風今に至りて吹けり。

## 四

櫻は多きがよし。淋しきは其特色にあらず、賑かなるは其本性なり。此點に於ては東京の花を推すべく、京都奈良の花は僅に自然美歷史美の點綴に止まれり。盛者必衰の理を示すよりは、三日見ぬ間の櫻なるも此花の本色とすべし。更に實世の用あり、櫻に逍遙の興あり。櫻は樂天的にして、又現世の趣を現す。

## 五

櫻は景氣よきものなり。向上の精神あり。野花の小さく憐れ深きものとは異る。櫻正宗と云ふは、芳醇の氣人に逼る思あり。曾て菫の流行につれて菫正宗と云ふもあり。高が野に咲く一本の菫草の細り種は素朴なれども、可憐にして、いぢらしゝ。此んな酒に醉って太平樂を歌ひ、虹の如き氣を吐くべしとは思はれず。めそ〳〵として陰氣になり相な心地あり。菫牛乳、菫寫眞館など愈々出て愈々雅し。若し其ましなるものを擇ばゝ菫インキ位なるべきか。女々しき艶書を書くには持ってこいなり。

## 六

日本の花は仰いで觀るべし。多くは樹木の花なり。櫻は最も著く之を代表す。西洋の花は俯して愛するを多しとす。大抵は草花なり。仰ぐものは大空高闊の意氣あり。俯すものは沈思冥想のよすがあり。一は積極的にして、一は消

察的。

## 七

櫻の色は淡泊にして紅ならず、白ならず。西洋草花の濃紅濃紺なるものと同じからず。彼は極彩色なれども、此は淡彩なり。東西嗜好の差、火を睹るよりも明なり。

## 八

櫻は簇々的なり、團結的なり、國家的なり。雲の如く、霞の如し。他の個人的の花と異る。日本國民的なり。其開落の速かにして、些の未練気をとゞめざるは何くまでも武士的なり。

## 九

梅の時候は寒く、藤牡丹は暑し。櫻と菊とは最も時ノ可なるもの。然れども菊の後に霜あり、雪あり、冬枯あり。金氣粛殺として絶えて希望なく、青春の快活なし。故に陽氣ならず、隱逸遁詩の風あり。櫻の最もよき時候にぱつと開きたるに若かず。

## 十

櫻の[illegible]は面白からず、落花してこそ妙なり。櫻は既に室内のものにあらず。是を觀るは天朗に氣霽れたる戸外にあり。其本色は依然として快活なり、依然として陽春なり。

## 十一

上海にて櫻を植うるものあり。樹幹は僅に一間を出でず、花萎靡して甚だ觀を殺ぐと云へり。温暖體に適し澄空晴天なる我が日本のみ、獨り此花を賞するに足るか。菊朝顔の類は西國首く之を温室に於て作り得べし。櫻に至りては或は不可ならん。

## 句 三十

初鶏や黎明近き雲の色
伊豆の海や御神火もけさ初霞
手に掬ふ御手洗の水や初烏
曉の背戸や梅が香ほんのりと
白桃や緋桃や灯影濃く淡く
宵の灯の雨ともならで雛祭
雨に烟る櫻三里や黄昏れて
ほの〴〵と讀書の窓や花明り
絵日傘の茶畑を行くそれも京
酒の香の祇園にしみて五月雨るゝ
明け易き夜を蘭丸が殿居かな
富士筑波關八州や青嵐
蚊帳越しの鳥海山や朝涼し
遠篝鵜破や鵜舟の闘すなり
日盛りや長者が門の百日紅
大船の舳解き艫解き風薫る
湯の宿に絃歌更けたり明け易き
雲の峰崩れんとして山奇なる
江に臨む臺高うして崖若葉
梅雨晴れや湯の香浸み入る日の光
新道や菖蒲提げたる途未履
覆盆子畑若葉の路ノ幾曲り
灯の町を往さ來るさの暑さかな
南山に雲流れけり背戸ノ秋
曲水に流るゝ如し赤蜻蛉
黒潮や時雨降る夜の船宿
雁の聲ちぎれ〳〵の雲に入る
傘さして向河岸へと時雨れけり
南縁に衣摺れの音や水仙花
餅搗やほの〴〵白き人ノ[illegible]

明治三年八月廿日の曉、東京神田末廣町三十番地に生る。父は舊幕臣笹川義潔、母はこい。戸籍面では次男とあるが、上に四人の男女あり、いづれも夭折、今度は成育するやうにと、種郎と名づけられた。

下谷和泉橋通りの松前小學校に通ふ。御褒美に半紙十帖貰つたことを覺えてゐる。近頃話し合つて見ると、內田魯庵君も、三田村鳶魚君も此學校へ通學してゐたとのこと。大概同じ頃であつたらうと、不思議な因緣に驚く。

父が內務省土木局の役人であつたので、大阪に轉じ、同處の玉水小學校に通學。名古屋へ轉じてから附屬小學校に入り、それより愛知縣中學校に入學する。敎科書は學校から貸してくれるが、皆舶來の洋書ばかり。代數でも幾何でも、地理でも、歷史でも何でも外國もの。フォーセットの小經濟書まで讀ませられた。マコーレーのミルトンをやらせられたのは、今考へて見ると、隨分無謀だと思ふ。漢學は家で四書五經の素讀を祖母や母から教へて貰つて、それから漢學の私塾へ通つたので、中學へ入つた頃は、相當に讀めたと記憶する。文章は多く漢文を作る。鷹洲奇觀だの、子供の時に見た芝居の光景だのを漢文で綴つて、喜んでゐたものだ。此頃古本屋で、會澤憩齋の新論、藤田東湖の回天詩史、『弘道館述義』や、高山操志の類を買つて來て盛んに耽讀し、日本歷史を漢文で書いて、尊王論で氣を吐いた。然し佛蘭西思想の盛んであつた時代のこととて、佛國思想にもかぶれ、ルウソウの『民約論』の飜譯(中江篤介氏の譯書)や『佛國革命史』を愛讀する。中學で熱心會と云ふ會を作つて、生意氣に自由民權論の演說などをやらかす。又、貸本屋の御得意となり、里見八犬傳、弓張月、娘節用を初め、江戶時代の讀本草双紙等を盛んに耽讀し、十冊づつ借りて來ては、二三日で讀み畢り、夜になると、祖母や母に其の梗概を話す。其の話し振が旨いと云つて、近所のお婆さんに賞められる。中學卒業の前年(當時の中學は四年八級制度)には佛國思想かぶれのお蔭で司法省の法律學校(八年制)へ入らうと志した。入學の入學科目は『資治通鑑』と『孟子』とであつたので、[illegible]の『資治通鑑』を買つて貰つて大に讀んだ。父に、中學は卒業しなければならないと叱られたので、法律學校入學の志願はやめたが、『資治通鑑』は、今でも愛讀書の一つである。

家が美濃の大垣に移轉したので、寄宿舍に入る。青年室と幼年室とがあつたが、十五歲未滿の幼年生で中學を卒業する。此學校初めてのことだと、舍監の先生に大に賞められて、將來の訓戒をされる。尤も其頃の中學は虛言をついて十一歲ぐらゐから入れたものだ。十八年七月のこと。

父が跡をついで土木學をやれと云ふので、工部大學校へ入學するために、其の歲の暮、美濃の大垣から東京へ出る。工學士の佐伯敦崇氏と、理學士の清水渡氏(後に工學博士)に連れて行つて貰ふ。四日市から汽船で橫濱へ上陸して入京。父と同役の山崎潔水氏の麴町區四番町なる留守宅に世話になる。同氏の子息直方氏(理學博士)と机を並べて勉強する。直方氏は翌年春、東京府中學校を卒業する。同期の卒業生には島文次郎氏(文學博士)橫山大觀氏(其頃は酒井秀麿氏)などがあつた。私も直方氏も東

京英語學校の高等科に入學し、此等の人々も同校へ入學したので、大概懇意になる。志田鉀太郎（法學博士）、下坂藻太郎、脇水鐵五郎（理學博士）熊谷直太氏など同級生であつた。工部大學校は豫備門と合併したので、入學募集をやめたために、土木學志願だつた予はおじやんになる。今度は一橋際にあつた第一高等中學校の英語專修科（中學卒業生に限り受驗が出來る。これに入ると一年徳になる）の最終の入學試驗に應募して失敗する。此頃は東京英語學校へ晝も夜も通ふ。夜はスペンサー、ミル、ベンザムの著書の講義で、中々に面白い。

翌年第一高等中學の三級の入學試驗に應募する。筆記試驗に合格したが、口頭で見事不合格。二十一年の夏大阪へ往つて、第三高等中學の三級の入學試驗に合格。東京落武者の先驅。同じく入學して机を並べたものに伊澤多喜男氏がある。其の秋の補缺に東京の落伍者續々來る。山崎直方氏も其の一人で、相變らず予と同宿。第三高等中學が京都へ移轉したので、大阪から京都へ移る。

もう此頃は史科志望者となつてゐた。大阪へ來てから、奈良や大和廻りをして、古美術好きになつた。文科では初め哲學をと思つたが、其の後漢文をやらうか、國史をやらうかと思案してゐるうちに土地の環境の力で、國史をやることになり、又美術を專門にしようと決心した。

二十六年七月、第三高等中學文科卒業。同級生に姉崎、桑原（隲藏）、宮田（貞吉）、金澤（庄三郎）、佐々（政一）等の諸氏がある。帝國大學文科大學國史科に入學する。同期生は内田（銀藏）、黑板（勝美）、中野（禮四郎）、伊東（尾四郎）、喜田等の諸友合せて十人ばかりであつた。

在學中、藤井紫影、藤田劍峯等第三の先輩と往來してゐたので、自然藤岡東圃、田岡嶺雲、小柳司氣太諸氏と懇意になり、此等の連中が東亞學院を設け、「東亞說林」、「東亞學院講義錄」を發刊した其の仲間入りをして、此等の雜誌に執筆する。後年、「江湖文學」を發行するに至つた因緣は此にある。

二十七年かと覺えるが、「帝國文學」發行の相談會が大學の中堂で開かれたので參加したが、參加しただけで、「東亞說林」黨であつたので、別段執筆もしなければ、深くは與らなかつた。其の編輯に關係したのは、ずつと後の事。

駿河臺南甲賀町にあつた政教社に若く遊びに往つて、時々原稿を書かされる。然し初めて原稿料なるものを頂戴したのは、「六合雜誌」へ神代史の研究に就いて一論文を出したのであつた。署名は八島國彥としたやうに記憶する。其の後には「太陽」の二號か三號かに、南洋の日本人と題した一文を寄せて、原稿料の有難味を覺えた。

下宿は本鄉六丁目であつたが、後に大學の寄宿舍に入る。高山樗牛、姉崎嘲風、畔柳芥舟の三人同室であつたが、樗牛はすぐ裏の彌生町の下宿に徙り、其あとに予が入る。其の後、本鄉東片町の下宿に轉ずる。此下宿は三高連の下岡忠治・姉崎、金澤、阿部（守太郎）及予の弟などのゐた所であつたが、弟は寄宿舍に入り、其のあとに予が從つたのである。明治二十九年七月、帝大卒業。偶々三高仲間の幣原喜重郎氏の下宿、京橋區木挽町紀國橋側の扶桑館を訪ひ、幣原氏の隣室が明いてゐたので、急に此に引越しをする。文學社の「日本歷史教科書」などを編纂する。翌年春、兩親東京に歸り、本鄉西片町に家を構ふ。兩親の命に依りて、妻いとよを迎へる。三十年六月、「支那小說戲曲小史」を東華堂より出版、處女作である。三十一年三月、富山房より「日本畫家傳」、同年七月博文館より「支那文學史」（日本百科全書第九篇）を出す。泉鏡花氏と知り、往來する。[illegible]緣

雨氏等、遊びに來る。田岡嶺雲、大野酒竹、佐々醒雪、國府犀東等と筑波會を起し、俳句を作る。後年沼波瓊音、中内蝶二、唐澤濱郎(光德)、宮島五丈原等又之に加はる。此頃「江湖文學」發行。藤田劍峯、田岡嶺雲、小柳司氣太氏等と其の編輯に從事する。是歳(三十一年)白河鯉洋の世話にて、公爵毛利家編輯所に入り、「防長回天史」の編纂に與る。總裁は末松謙澄男、後に子爵)、同じ編輯員仲間は、山路愛山、齋藤清太郎、堺利彦、黑田甲子郎、中原邦平等の諸氏。藤田、田岡、小柳、大町(桂月)諸氏と大日本圖書株式會社より「支那文學史綱」を發行する。「孟子」、「曹子建」、「杜甫」、「元遺山」、「湯臨川」、「李笠翁」等は予の執筆。「帝國文學」の編輯をする。三十四年四月、「元祿時勢粧」、同年九月「奈良朝」、「遊俠傳」、「南總風月」の著を出す。

　明治三十四年四月、長女俊文子を設く。其の年六月、栃木縣宇都宮中學校長として赴任する。翌年十一月七日、父殁す。翌月、高山樗牛逝く。東京から西洋美術に關する洋書を盛に仕入れて、閑に任せて耽讀する。西洋美術史を書きかけて遂に文藝復興期に至りて物に成らず。其うちに二篇ばかりを、「中央公論」に寄稿する。三十六年二月、次女華子を設く。

　四十年の春頃から、三省堂の「日本百科大辭典」編輯に從事するやう交渉を受く。上田敏氏より明治大學文科出講の話がある。九月宇都宮中學校長の辭職を申出たが、中々に許可してくれず、其の歳十二月やつと辭令が下りて、宇都宮を引拂ふ。

　三省堂の編輯所勤務の傍ら、明治大學、法政大學、專修大學の講師をつとめる。四十三年十一月、「日本帝國史」を内田老鶴圃より出す。中内蝶二氏より「萬朝報」に歷史物語を執筆するやうすゝめられて、數年に渉り、「九郎判官」、「日蓮上人」、「新田左中將」、「織田右府」、「山中鹿之助」、「淀君」を起草する。後にそれぐ\單行本とする。其後「中央公論」の依賴にて、しばしば美術批評をする。

　四十三年南北朝正閏論起るや、南朝正統を唱へ、新聞雜誌に五篇寄草し三回講演する。「南朝正統論」及「南朝五十七年史」(四十四年六月、新潮社より出版)を出す。大正二年四月、長男義郎、四年九月次男俊夫をまうく。夏目漱石氏と懇意になる。

　文展から分離した國畫玉成會の招待會に出席し、來賓總代の挨拶をしたのに始まり、日本美術院の再興するに及びて、齋藤隆三氏とゝもに同院の經理を引受けることとの交渉あり、予固辭したるも、下村觀山氏の切なる依賴に動かされて遂に受諾、其の後數年間同院の爲に働けるも、或る事故の爲に同院と絶縁する。之より又美術界に遠かることにする。頗る厭氣がさしたためなり。

　明治大學が昇格するとともに、法政、專修の出講をやめて、同校の專任教授となり、高等豫科長兼商學部教授として勤務する。三省堂の方は、同堂が一時經濟上頓挫したのでやめる。偶々同大學に騷動勃發し、其の飛沫で、同校と縁切りをする。大正二年九月、中央書院より「畫趣と詩味」、三年七月、同書院より「伊達模様」、四年三月、大日本雄辯會より「八幡船」、六年三月東亞堂より「古人を學べ」、七年三月實業之日本社より「江戸紫」、十年一月芸艸堂より「渡邊華山」、翌年一月、博文館より「自然と文化との諧調」、同年十月玄黃社より「日本繪畫史」上卷を出す。姉崎、畔柳とともに樗牛會の機關雜誌「人文」を編輯發行する。

　大正十二年震火災の翌月十四日の夕暮、友人塚本内務次官(清治氏)より急使あり、即刻櫻田町内務大臣官邸なる臨時震災救護事務局へ出頭してくれとの手紙が來る。小雨そぼ降

る晩の夜、長官の幕下で、次官と池田社會局長官とに面會する。「震災志」編纂の依囑である。直に承諾し、翌々日から、明治大學で教をへた藤澤衛彦氏を伴つて出勤し、囑託の辭令を受く。翌年春、内務省社會局へ移る。此ところ珍らしくも役人生活となる。其の後、神奈川縣よりも「震災志」編纂の依囑ありて、同縣の囑託を命ぜらる。「大正震災志」「神奈川震災志」爲成り、出版。

駒澤大學、ついで東洋大學から出講の請ありて兩校の講師となる。千葉縣成田山新勝寺の經營にかゝる中學・高等女學兩校の校長を續まれて、一週に一回、一泊にて出かけることとする。但し一年にして辭職し、女學校だけの顧問となる。

大正十三年九月、東山時代の論文にて學位を授けらる。十四年の春、京北中學、實業、同女學校、夜學、幼稚園の管理を依囑せられて、就任、明治大學教授の職とともに廢業と決心した學校先生父子を復活。

昭和三年八月二十八日、行年八十三歳にて身まかる。

著書には、「男子と貞操」[illegible]「古典あて」[illegible]「江戸と上方」[illegible]講話」「現代美術」「江戸情調」「近代日本文學大系解題」等がある。

序に一家の私事を添へて置く。弟 潔、法學士、妹 春、工學博士佐野利次郎の妻。長女信子は法學士東田[illegible]に嫁し、次女[illegible]子は醫學博士木間純に嫁し、長男次男ともに、今は中學生。

人は私を稱して、江戸趣味と云ふが、當人は決して、江戸趣味なるものを好かない。そんならお前の趣味はと云ふと、曰く東山趣味。其の恬淡にして、清澗の氣あるを喜ぶのです。

## 海上風靜（小唄）

[illegible]一次方の、光のどけき朝日影、光のどけき旭日影、八十島かけて漕ぎ出づる、舟路は遠く霞立ち、渚に集ふ水鳥の、滑く玉藻の花かざし、雲のたくてふ藻汐草、すぐなる煙立ち添ひて、大海原はうら〱と、波も立たず、風もなぎ、水や空なる空と水一つ、かはらぬ色のためしこそ、げに大御代の姿なれ、げに大御代の姿なれ。

## 待宵（歌澤元祖笹丸退善）

待宵は、じれつたいもの、松葉かんざし疊算、灰に書く字も三巴、あれほど〱と、忍び音の、そつと明けたる闇の戸に、風をしらして、月影と、しつぽり濡れし、雁の聲。

## とめては見たが（小唄）

とめては見たが、まかぬ種の、歸りたいなら、歸らんせ、雪は朧の滿更り、春や昔の春ならぬ、月の無いのに、花の影、色は見えねど、香は移る、移るその香に、ついうつとりと、まア朧かな逢たこと。

## 有明（小唄）

有明の月か、啼いたか、明烏、いつしか白む短夜に、[illegible]下り舟、[illegible]、淀の川瀬の水車、八幡橋本大山崎、[illegible]、枚方上りのお寄さんは無いかよー。

昭和三年十一月二十五日印刷
昭和三年十二月一日發行

現代日本文學全集 第十三篇

著者 高山樗牛
姉崎嘲風
笹川臨風

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

精大書社 秀英舍印刷

牧野

改造社

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 3850